

# 綿貫原北遺跡

国道354号高崎玉村バイパス地域活力基盤創造事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2013

群馬県高崎土木事務所  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

# 序

東毛広域幹線道路は、群馬県域の東毛と県央とを直結する新たな動脈として期待され、その整備は「はばたけ群馬・県土整備プラン」の主要な事業として、推進されてきました。国道354号のバイパス建設は、この東毛広域幹線道路の中核と位置づけられています。

本書で報告いたします綿貫原北遺跡は、高崎駅東口に直結する計画路線域の高崎市綿貫町に所在し、この国道354号高崎玉村バイパス地域活力基盤創造事業に伴い発掘調査された遺跡です。

調査は、群馬県高崎土木事務所から委託を受け、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が平成19・20・21年度に実施しました。その結果、古墳時代前期から江戸時代にいたる様々な遺構と遺物が発見されました。この地域では、史跡観音山古墳が築造され、平安時代には綿貫廃寺が、鎌倉時代からは中世武士の綿貫氏の活躍が知られていました。このたびの14世紀から16世紀にわたる屋敷の発見は、今後の中世史研究に寄与するものと考えられます。

最後に、発掘調査の実施から本書の刊行にいたるまで、群馬県高崎土木事務所、群馬県教育委員会、高崎市教育委員会、並びに地元関係者の皆様には終始ご協力を賜りました。上梓にあたり、皆様方に心から感謝申し上げまして序といたします。

平成25年2月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
理 事 長 須 田 榮 一



# 例 言

1. 本書は国道354号高崎玉村バイパス地域活力基盤創造事業に伴い発掘調査し、社会資本総合整備(活力創出基盤整備)事業として整理作業を行った「綿貫原北遺跡」の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 遺跡は高崎市綿貫町1690・1691・1692-1・1692-5・1693-1・1694-1・1702・1711-2・1715-2番地(以上1区)、1707・1708・1709-2番地(以上2区)、1676-4・1676-5・1677-3・1677-4・1682-1番地(以上3区)に所在する。
3. 事業主体は群馬県西部県民局高崎土木事務所である。
4. 発掘調査の主体は公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(平成24年4月に公益財団法人に組織改正)である。
5. 調査履行期間は平成19年12月1日～平成20年3月31日、平成20年3月31日～6月30日、平成20年5月15日～平成21年3月31日、平成21年11月16日～平成22年2月28日である。(調査期間は平成20年1月4日～3月31日、同年4月1日～9月30日、平成21年12月1日～12月31日である。)
6. 発掘調査体制は次のとおりである(職名は当時)。

平成19年度 綿貫原北遺跡1区  
発掘調査担当 飯森康広(専門員(主幹))・真下裕章(主任調査研究員)  
遺跡掘削請負工事 技研測量設計株式会社  
委託 地上測量：技研測量設計株式会社 空中写真撮影：技研測量設計株式会社

平成20年度 綿貫原北遺跡1・2・3区  
発掘調査担当 菊池 実(主席専門員)・真下裕章(主任調査研究員)  
遺跡掘削請負工事 技研測量設計株式会社  
委託 地上測量：株式会社横田調査設計 空中写真撮影：株式会社シン技術コンサル

平成21年度 綿貫原北遺跡1区  
発掘調査担当 巾 隆之(専門員(主任))  
遺跡掘削請負工事 技研測量設計株式会社  
委託 地上測量と空中写真撮影：株式会社シン技術コンサル
7. 整理事業の期間と体制は次のとおりである(職名は当時)。

整理履行期間 平成22年4月1日～平成25年3月31日(整理期間 平成22年4月1日～平成25年3月31日)  
整理担当 菊池 実(上席専門員)・飯森康広(専門員(総括))  
遺物写真撮影：佐藤元彦(補佐(総括)) 保存処理：関 邦一(補佐(総括))
8. 本書作成の担当者は次のとおりである。

編集 菊池 実・飯森康広、デジタル編集 齊田智彦(主任調査研究員)  
本文執筆 菊池 実(第1～3章、第4章第4節第1・2項、同第6節第1・2項)、飯森康広(第3章第2節6・7、第4章第1～第3節、同第4節第3～5項、同第6節第3・4項)。なお、第4章第5節は鑑定分析報告書(1：榑崎修一郎(生物考古学研究所)、2：株式会社パレオ・ラボ)を再編集した。  
遺物観察 石器・石造物：岩崎泰一(上席専門員) 縄文土器：谷藤保彦(上席専門員) 土師器・須恵器：神谷佳明(上席専門員) 中近世陶磁器・土器：大西雅広(上席専門員) 瀬戸美濃系陶磁器：藤澤良祐(愛知学院大学) 石材同定：飯島静男(群馬地質研究会) 出土人骨鑑定：榑崎修一郎(生物考古学研究所)
9. 発掘調査および報告書作成に際しては、群馬県教育委員会・高崎市教育委員会をはじめ、関係機関ならびに多くの方々のご協力、ご指導をいただきました。記して感謝いたします。
10. 綿貫原北遺跡の出土遺物と調査・整理の諸資料(遺構図・遺物実測図・写真類・各種台帳類)は一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管している。

# 凡 例

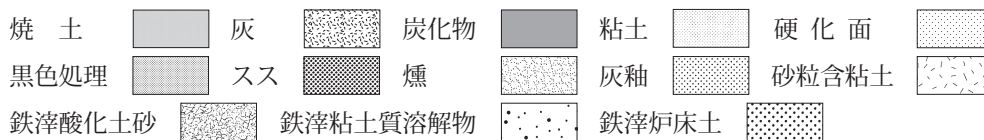
1. 遺構平面は世界測地系(測量法改正2002年4月1日)を用いて測量した。本文中に使用した方位は全ての北を使用している。真北との偏差は、調査区中央付近で、東偏0度26分48秒である。
2. 遺構断面実測図、等高線に記した数値は標高を表し、単位はmを使用した。
3. 遺構名称は1区・2区・3区の各区で遺構種類ごとに通し番号をつけ、番号・遺構種類名で呼称した。また本文中では1区・2区・3区に分けて報告する。

4. 遺構・遺物実測図の縮尺は原則として以下のとおりである。

遺構 住居・竪穴状遺構－1：60、カマド－1：30、掘立柱建物－1：80、土坑－1：30、1：60、ピット－1：60、溝－1：40、1：60、1：80、1：100、1：200

遺物 土器－1：3、1：4、石器・石製品－1：1、1：3、鉄製品－1：1、1：2

5. 本書の図版に使用したスクリーントーンは次のことを表示している。



6. 住居の床面積は、デジタルプランメーターにより住居の壁の内側を3回計測し、その平均値である。住居の方位は竈を持つ壁に直交する壁を主軸線とした。遺構の計測値で全体を計測できないものについては、現存の値を記載し( )に、推定で全体がわかるものについては〔 〕に表示した。
7. 掘立柱建物の柱穴は、平面測量時の底面標高測点を原則として中心とし、その心々距離を計測した。各辺の長さの計測も同様とし、その平均を乗じて面積を算出した。なお、下屋及び庇を持つ場合も、同様に算出し加えた。下屋と庇の分類は、民家建築への移行を意識し、1mを境に狭い方を下屋、広い方を庇と表現した。また、調査区域外に延びるなど、建物が収束しない場合、m以上、m<sup>2</sup>以上と記載した。主軸方位は棟方向を示し、桁側二辺の方位を数値幅として、～によって示した。桁側長(桁行)を平均し、これを柱間で除して、桁行平均柱間を算出し、柱穴の偏りを判断する基準とした。規格は梁間・桁行の順で、○×○間と記載した。なお、柱穴は新たにP1から順に時計回りで付番し、調査時に呼称されたピット番号はそのまま残し計測表に付記し、非掲載遺物との照合に配慮した。
8. 遺構名称は原則調査段階のものを踏襲し、欠番もそのままとした。また、やむを得ず整理段階で付番し直した場合も元番号を欠番とし、改称後の遺構本文中に旧名称を明記した。欠番は以下のとおりである。

1区 土坑12・19・20・84・86・135・156・177・183・196・198 /ピット29・30・123・126・136・148・149 /溝9・21・32・34・36・37・64

2区 土坑1・21 /ピット470

3区 土坑69 /ピット1・29・83・277・282・401・415・444・456 /溝15・16 /道3

9. 遺物観察表の記載方法は以下のとおりである。

- ・土器の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に基づいている。

- ・胎土表記中の細砂・粗砂・礫については、径2mm以上を礫、径2～0.2mmを粗砂、径0.2mm以下を細砂とした。

- ・計測値の口：口径、胴：胴径、底：底径、高：器高、台：高台径を示す。単位はcmである。

- ・金属器観察表の計測値に( )がついているものは残存部分での値である。

・石斧刃部側の摩耗痕については縦位定規線で、着柄部と想定される部分の摩耗痕については横位定規線で図示した。

・磨石等礫石器類に用いた縦位・横位定規線は摩耗範囲を示す。その他の斜位定規線は線条痕の走行を示す。

10. 陶磁器の分類は以下に拠った。

・中世在地系土器胎土は、以下により A・B 2 種類に分類した。

A：透明鈇物、黒色鈇物、片岩細片含む。透明鈇物と片岩由来の雲母など多くを含む。

B：透明鈇物と黒色鈇物含む。片岩含まない。

・中世在地系の片口鉢と内耳鍋は、星野守弘「軟質陶器」『新編高崎市史 資料編 3 中世 I』高崎市 平成 8 年による。

内耳鍋 I 期：14 世紀後半頃 II 期：14 世紀末～15 世紀前半 III 期：15 世紀中頃 IV 期：15 世紀後半頃 V 期：16 世紀前半

片口鉢 I 期：14 世紀前半頃 II 期：14 世紀中頃 III 期：14 世紀後半頃 IV 期：15 世紀前半頃 V 期：15 世紀後半頃 VI 期：15 世紀後半から 16 世紀

・中世在地系の皿は、木津博明「検出された遺構と遺物について」『上野国分僧寺・尼寺中間地域 1』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986 による。

・肥前陶磁器は『九州陶磁の編年-九州近世陶磁学会 10 周年記念-』九州近世陶磁学会 2000 による。

・12 から 13 世紀の中国磁器は、横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集 4』九州歴史資料館 1978 による。

11. 土器に関する分類上の大小は以下による。

・灰釉陶器：大型品(壺類)、小型品(椀・杯・皿類)

・須恵器：大型品(壺甕類・羽釜・瓶類)、中型品(高杯・盤類・ハソウ)、小型品(椀・杯・皿類)

・土師器：大型品(壺・甕類・土釜)、中型品(高杯類・古式土師小型丸底壺など)、小型品(椀・杯類・手捏ね)

12. 本書で使用した浅間山及び榛名山噴火による降下火砕物等の呼称については以下のような表記をともに使用する。

浅間 A 軽石：As-A (1783 年) 浅間 B テフラ：As-B (1108 年) 榛名山ニッ岳軽石：Hr-FP (6 世紀中葉) 榛名山ニッ岳火山灰：Hr-FA (6 世紀初頭) 浅間 C 軽石：As-C (3 世紀終末～4 世紀初頭) 浅間板鼻黄色軽石：As-YP 浅間板鼻褐色軽石：As-BP

13. 本書に掲載した地図は下記のものを使用した。

国土地理院 地形図 1:25,000 「高崎」(平成 14 年 5 月 1 日発行)

国土地理院 地勢図 1:200,000 「宇都宮」(平成 18 年 4 月 1 日発行) 「長野」(平成 10 年 2 月 1 日発行)

高崎市 1:2,500 全図(昭和 54 年測量)

第一軍管地方迅速測図『倉賀野駅』(明治 18 年測図)

# 目次

序	(1) 竪穴状遺構	116
例言	(2) 土坑	118
凡例	(3) 井戸	128
挿図目次	(4) 火葬跡	129
表目次	(5) 集石遺構	129
写真図版目次	(6) ピット群	130
	(7) 溝	131
	(8) 道路	141
第1章 発掘調査に至る経緯	1	
第2章 調査の方法と経過		
第1節 発掘調査の方法		
1 グリッドの設定	4	
2 調査区の設定	4	
第2節 調査の経過	4	
第3節 整理作業の方法	8	
第3章 遺跡の立地と周辺の遺跡		
第1節 遺跡の立地	9	
第2節 周辺の遺跡	12	
第4章 発掘調査の記録		
第1節 遺跡の概要		
1 概要	23	
2 基本土層	27	
第2節 1区の遺構と遺物		
第1項 飛鳥～平安時代		
1 竪穴住居	29	
2 竪穴状遺構	63	
3 土坑	63	
4 落ち込み状遺構	67	
5 井戸	68	
6 溝	75	
第2項 中世		
1 1号屋敷	84	
(1) 土坑	86	
(2) 井戸	88	
(3) 橋脚跡	91	
(4) ピット群	93	
(5) 溝	99	
2 屋敷周辺の遺構		
	第3項 近世	
	1 掘立柱建物・礎石列・柱穴列	142
	2 竪穴状遺構	146
	3 土坑	146
	4 井戸	168
	5 墓	170
	6 火葬跡	187
	7 集石遺構	187
	8 礫充填遺構	189
	9 ピット群・ピット	194
	10 溝	198
	11 復旧溝群・灰搔き穴	236
	12 道路・溝	238
	第4項 近代以前	
	1 ピット	248
	第5項 遺構外出土遺物	248
	第3節 2区の遺構と遺物	
	第1項 中世	265
	1 掘立柱建物・柱穴列	268
	2 竪穴状遺構	291
	3 土坑	292
	4 井戸	300
	5 ピット	306
	6 溝	316
	第2項 近世	
	1 土坑	330
	2 ピット	330
	3 溝	331
	第3項 遺構外出土遺物	335

#### 第4節 3区の遺構と遺物

##### 第1項 古墳時代

- 1 竪穴住居……………337
- 2 土坑・井戸……………363

##### 第2項 飛鳥～平安時代

- 1 竪穴住居……………364
- 2 溝……………366

##### 第3項 中世

###### 1 1号屋敷

- (1) 掘立柱建物……………367
- (2) 土坑……………378
- (3) 井戸……………383
- (4) ピット・柱穴列……………384
- (5) 溝……………393

###### 2 2号屋敷

- (1) 掘立柱建物……………397
- (2) 柱穴列……………400
- (3) 土坑……………402
- (4) ピット群・個別ピット……………403
- (5) 溝・道路……………406

###### 3 屋敷外の遺構

- (1) 土坑……………414
- (2) 井戸……………415
- (3) 溝……………416

##### 第4項 近世

- 1 溝……………417

##### 第5項 近代以前

- 1 掘立柱建物……………418
- 2 竪穴状遺構……………420
- 3 土坑……………421
- 4 ピット群・ピット……………427
- 5 溝……………432
- 6 集石遺構……………434
- 7 道路……………435

##### 第6項 遺構外出土遺物……………435

#### 第5節 鑑定分析

- 第1項 出土人骨鑑定……………438

#### 第6節 まとめと考察

- 第1項 縄文時代……………444
- 第2項 古墳時代……………444
- 第3項 飛鳥～平安時代……………460
- 第4項 中世……………461
- 第5項 近世……………475

#### 報告書抄録



# 挿図目次

第1図	国道354号高崎玉村バイパス路線図(1:60,000)……………1
第2図	遺跡位置図(国土地理院地勢図1:200,000「宇都宮」 (平成18年4月1日)「長野」(平成10年2月1日発行)使用)……3
第3図	調査区および隣接遺跡位置図(高崎市全図No.41 昭和54年測量1:2,500)……………5
第4図	グリッド設定図……………6
第5図	明治時代前半の周辺地形図(第一軍管地方迅速測図 『倉賀野駅』(明治18年測量)を使用)……………10
第6図	遺跡周辺地形分類図(群馬県『土地分類基本調査 高崎』 (1993年)による)……………11
第7図	井野川低地帯の地下断面図(『新編高崎市史通史編1』 p.90の図30を一部改変)……………12
第8図	周辺遺跡の分布図……………13
第9図	綿貫牛道遺跡1区1号屋敷全体図(1:250)……………20
第10図	全体図……………25・26
第11図	基本土層……………28
第12図	1区1号住居と出土遺物……………29
第13図	1区全体図(飛鳥～平安時代)……………30
第14図	1区2・3号住居……………32
第15図	1区2・3号住居出土遺物出土状態・カマド……………33
第16図	1区2・3号住居掘り方……………34
第17図	1区2号住居出土遺物(1)……………35
第18図	1区2号住居出土遺物(2)……………36
第19図	1区3号住居出土遺物……………38
第20図	1区4号住居と出土遺物……………40
第21図	1区5号住居と出土遺物……………41
第22図	1区6号住居……………42
第23図	1区6号住居カマドと出土遺物(1)……………43
第24図	1区6号住居出土遺物(2)……………44
第25図	1区7号住居……………46
第26図	1区7号住居出土遺物(1)……………47
第27図	1区7号住居出土遺物(2)……………48
第28図	1区8・14号住居と出土遺物……………50
第29図	1区9号住居……………51
第30図	1区9号住居出土遺物……………52
第31図	1区10号住居……………53
第32図	1区10号住居出土遺物……………54
第33図	1区11号住居……………55
第34図	1区11号住居出土遺物(1)……………56
第35図	1区11号住居出土遺物(2)……………57
第36図	1区12号住居……………59
第37図	1区12号住居カマドと出土遺物……………60
第38図	1区13号住居……………61
第39図	1区13号住居出土遺物……………62
第40図	1区4号竪穴状遺構……………63
第41図	1区土坑(1)……………65
第42図	1区土坑(2)と出土遺物……………66
第43図	1区1号落ち込み状遺構と出土遺物……………67
第44図	1区2号落ち込み状遺構と周辺ピット群(1)……………69
第45図	1区2号落ち込み状遺構出土遺物(1)……………70
第46図	1区2号落ち込み状遺構出土遺物(2)……………71
第47図	1区2号落ち込み状遺構周辺ピット群(2)……………72
第48図	1区2号落ち込み状遺構周辺ピット群(3)……………73
第49図	1区9号井戸と出土遺物(1)……………74
第50図	1区9号井戸出土遺物(2)……………75
第51図	1区8・12・14・15・17・18・65・72・77号溝と12号溝 出土遺物……………77
第52図	1区78・85・88号溝と85号溝出土遺物……………78
第53図	1区84・86・87号溝と84号溝出土遺物(1)……………79
第54図	1区84号溝出土遺物(2)……………80
第55図	1区84号溝出土遺物(3)……………81
第56図	1区86号溝出土遺物……………83

第57図	1区1号屋敷……………84
第58図	1区全体図(中世)……………85
第59図	1区43～45・62・166・208・210～212・217号土坑と45号 土坑出土遺物……………87
第60図	1区44・210・212号土坑出土遺物……………88
第61図	1区4号井戸と出土遺物……………89
第62図	1区8号井戸と出土遺物(1)……………89
第63図	1区8号井戸出土遺物(2)……………90
第64図	1区1・2号橋脚跡……………92
第65図	1区1号屋敷内ピット群1と58号ピット出土遺物……………93
第66図	1区1号屋敷内ピット群1 断面図……………94
第67図	1区1号屋敷内ピット群2と39号ピット出土遺物……………95
第68図	1区1号屋敷内ピット群3と230号ピット出土遺物……………96
第69図	1区1号屋敷内ピット群4……………97
第70図	1区1号屋敷内ピット群5……………97
第71図	1区23・24・29・33・62・66・107号溝と23・24号溝 出土遺物……………101
第72図	1区25～27・62号溝と25号溝出土遺物(1)……………102
第73図	1区25～27・61A・61B・62号溝断面図と25号溝出土 遺物(2)……………103
第74図	1区25号溝出土遺物(3)……………104
第75図	1区25号溝出土遺物(4)……………105
第76図	1区25号溝出土遺物(5)、26・27号溝出土遺物……………106
第77図	1区63号溝と出土遺物(1)……………109
第78図	1区63号溝出土遺物(2)……………110
第79図	1区69A・69B・70・75・79・82号溝と69・70号溝出土遺物……………111
第80図	1区91号溝と出土遺物(1)……………113
第81図	1区91号溝出土遺物(2)……………114
第82図	1区104～106号溝……………115
第83図	1区2・3・5号竪穴状遺構と2・3号竪穴状遺構 出土遺物……………117
第84図	1区土坑(1)……………120
第85図	1区土坑(2)……………122
第86図	1区土坑(3)……………125
第87図	1区土坑(4)と出土遺物……………126
第88図	1区3・5～7号井戸と6号井戸出土遺物……………128
第89図	1区3号火葬跡……………129
第90図	1区2・6号集石遺構と6号集石遺構出土遺物……………130
第91図	1区屋敷周辺ピット群……………131
第92図	1区2・60・73号溝と2号溝出土遺物(1)……………132
第93図	1区2号溝出土遺物(2)……………133
第94図	1区4・11・68・83号溝……………135
第95図	1区6号溝……………136
第96図	1区6号溝出土遺物……………137
第97図	1区11号溝出土遺物(1)……………138
第98図	1区11号溝出土遺物(2)……………139
第99図	1区71・74・80・81号溝と81号溝出土遺物……………140
第100図	1区2号道路と出土遺物……………141
第101図	1区全体図(近世・近代以前)……………143
第102図	1区1号掘立柱建物と出土遺物、7・9～13・17・111号 ピット、1号礎石列……………144
第103図	1区1・2号柱穴列……………145
第104図	1区1号竪穴状遺構……………146
第105図	1区土坑(1)……………148
第106図	1区土坑(2)……………150
第107図	1区土坑(3)……………152
第108図	1区土坑(4)……………154
第109図	1区土坑(5)……………157
第110図	1区土坑(6)……………159
第111図	1区土坑(7)……………162
第112図	1区土坑(8)……………164
第113図	1区土坑(9)……………165
第114図	1区土坑出土遺物(1)……………166
第115図	1区土坑出土遺物(2)……………167
第116図	1区1・2号井戸と出土遺物……………169
第117図	1区1号墓と出土遺物(1)……………171

第118図	1区1号墓出土遺物(2)……………	172	第184図	2区2号掘立柱建物と出土遺物……………	271
第119図	1区2号墓と出土遺物……………	173	第185図	2区3号掘立柱建物……………	272
第120図	1区3号墓と出土遺物……………	174	第186図	2区4号掘立柱建物……………	272
第121図	1区4・11号墓、67～69号土坑と4号墓出土遺物(1)……………	176	第187図	2区5号掘立柱建物……………	273
第122図	1区4号墓出土遺物(2)……………	177	第188図	2区6号掘立柱建物……………	274
第123図	1区68・69号土坑出土遺物……………	178	第189図	2区7号掘立柱建物……………	276
第124図	1区5号墓と出土遺物(1)……………	179	第190図	2区8号掘立柱建物……………	276
第125図	1区5号墓出土遺物(2)……………	180	第191図	2区9号掘立柱建物……………	277
第126図	1区6・7号墓と6号墓出土遺物(1)……………	181	第192図	2区10号掘立柱建物……………	278
第127図	1区6・7号墓出土遺物(2)……………	182	第193図	2区11号掘立柱建物……………	279
第128図	1区8・9号墓・46号土坑と出土遺物……………	183	第194図	2区12号掘立柱建物……………	280
第129図	1区10号墓と出土遺物……………	185	第195図	2区13号掘立柱建物と出土遺物……………	281
第130図	1区12・13号墓、204・205号土坑と出土遺物……………	186	第196図	2区14号掘立柱建物……………	281
第131図	1区1号火葬跡と出土遺物……………	188	第197図	2区15号掘立柱建物……………	283
第132図	1区2号火葬跡と出土遺物……………	188	第198図	2区16号掘立柱建物……………	284
第133図	1区1・4・5号集石遺構と1号集石遺構出土遺物……………	190	第199図	2区17号掘立柱建物と出土遺物(1)……………	284
第134図	1区4号集石遺構出土遺物……………	191	第200図	2区17号掘立柱建物出土遺物(2)……………	285
第135図	1区5号集石遺構出土遺物……………	192	第201図	2区18号掘立柱建物……………	286
第136図	1区1～11号礫充填遺構……………	194	第202図	2区19号掘立柱建物……………	287
第137図	1区ピット群……………	195	第203図	2区20号掘立柱建物……………	288
第138図	1区ピット群断面と73・102号ピット出土遺物……………	196	第204図	2区21号掘立柱建物……………	288
第139図	1区ピット……………	197	第205図	2区22号掘立柱建物……………	289
第140図	1区1号溝と出土遺物(1)……………	199・200	第206図	2区23号掘立柱建物……………	290
第141図	1区1号溝出土遺物(2)……………	201	第207図	2区1号柱穴……………	291
第142図	1区1号溝出土遺物(3)……………	202	第208図	2区1・2・3号竪穴状遺構、17・39号土坑……………	291
第143図	1区1号溝出土遺物(4)……………	203	第209図	2区土坑(1)、18号土坑出土遺物……………	295
第144図	1区1号溝出土遺物(5)……………	204	第210図	2区土坑(2)……………	297
第145図	1区1号溝出土遺物(6)……………	205	第211図	2区土坑(3)、45・46号土坑出土遺物(1)……………	299
第146図	1区3・5・10・22号溝と10号溝出土遺物……………	210	第212図	2区46号土坑出土遺物(2)……………	300
第147図	1区22号溝出土遺物……………	211	第213図	2区1～6号井戸……………	302
第148図	1区13・16・19・20・28号溝と13・20・28号溝出土遺物……………	213	第214図	2区3号井戸出土遺物(1)……………	303
第149図	1区31・38～42号溝と31・41号溝出土遺物……………	214	第215図	2区3号井戸出土遺物(2)……………	304
第150図	1区43号溝と出土遺物(1)……………	216	第216図	2区4号井戸出土遺物……………	305
第151図	1区43号溝出土遺物(2)……………	217	第217図	2区6号井戸出土遺物……………	306
第152図	1区45・49号溝出土遺物……………	217	第218図	2区1号屋敷内ピット群1平面図……………	309
第153図	1区44～47・49・50・53～57号溝……………	222	第219図	2区1号屋敷内ピット群1断面図……………	310
第154図	1区51・52・94号溝と94号溝出土遺物……………	223	第220図	2区1号屋敷内ピット群2平面図……………	311
第155図	1区48・51・52・58・59号溝と59号溝出土遺物(1)……………	225・226	第221図	2区1号屋敷内ピット群2断面図……………	312
第156図	1区59号溝出土遺物(2)……………	227	第222図	2区1号屋敷内ピット群3……………	313
第157図	1区48号溝出土遺物(1)……………	228	第223図	2区ピット群1と164・165・431号ピット出土遺物……………	314
第158図	1区48号溝出土遺物(2)……………	229	第224図	2区ピット群2～4、個別ピットと406号ピット出土遺物……………	315
第159図	1区51号溝出土遺物……………	232	第225図	2区1・3～7号溝と6号溝出土遺物(1)……………	318
第160図	1区58号溝出土遺物……………	232	第226図	2区6号溝出土遺物(2)……………	319
第161図	1区52号溝出土遺物……………	233	第227図	2区3・7号溝出土遺物……………	321
第162図	1区67・76・95号溝と67号溝出土遺物……………	234	第228図	2区2号溝・周辺ピット群、8号溝……………	322
第163図	1区96～103号溝……………	235	第229図	2区2号溝出土遺物……………	323
第164図	1区1・3・4号復旧溝群……………	237	第230図	2区8号溝出土遺物……………	324
第165図	1区5号復旧溝群……………	238	第231図	2区10～12・15～17号溝と11号溝出土遺物……………	327
第166図	1区1・2・3号灰掻き穴……………	238	第232図	2区10・12号溝出土遺物……………	328
第167図	1区1号道路と出土遺物(1)……………	239・240	第233図	2区13号溝・周辺ピット群と13号溝出土遺物……………	329
第168図	1区1号道路出土遺物(2)……………	241	第234図	2区2・15・44号土坑……………	331
第169図	1区1号道路出土遺物(3)……………	242	第235図	2区429号ピットと出土遺物……………	331
第170図	1区35溝出土遺物……………	246	第236図	2区9号溝と出土遺物……………	332
第171図	1区近代以前ピット(1)……………	249	第237図	2区14号溝……………	333
第172図	1区近代以前ピット(2)、6号ピット出土遺物……………	250	第238図	2区14号溝出土遺物……………	334
第173図	1区遺構外出土遺物(1)……………	251	第239図	2区遺構外出土遺物……………	336
第174図	1区遺構外出土遺物(2)……………	252	第240図	3区1号住居……………	337
第175図	1区遺構外出土遺物(3)……………	253	第241図	3区1号住居遺物分布図……………	338
第176図	1区遺構外出土遺物(4)……………	254	第242図	3区1号住居遺物分布拡大図……………	339
第177図	1区遺構外出土遺物(5)……………	255	第243図	3区1号住居出土遺物(1)……………	340
第178図	1区遺構外出土遺物(6)……………	256	第244図	3区1号住居出土遺物(2)……………	341
第179図	1区遺構外出土遺物(7)……………	257	第245図	3区1号住居出土遺物(3)……………	342
第180図	1区遺構外出土遺物(8)……………	258	第246図	3区2号住居出土遺物(1)……………	343
第181図	2区全体図……………	266	第247図	3区2号住居掘り方図、ピット断面図……………	344
第182図	2区掘立柱建物分布図……………	267	第248図	3区2号住居、9～11・13号溝……………	345・346
第183図	2区1号掘立柱建物……………	269	第249図	3区2号住居・11号溝遺物分布図……………	347・348

第250図	3区2号住居出土遺物(2) .....	349
第251図	3区11号溝出土遺物 .....	350
第252図	3区3号住居出土遺物(1) .....	352
第253図	3区3号住居、5号溝a～c .....	353・354
第254図	3区3号住居・5号溝b遺物分布図 .....	355・356
第255図	3区3号住居掘り方図 .....	357
第256図	3区3号住居出土遺物(2) .....	358
第257図	3区3号住居出土遺物(3) .....	359
第258図	3区3号住居出土遺物(4) .....	360
第259図	3区5号溝b出土遺物(1) .....	361
第260図	3区5号溝b出土遺物(2) .....	362
第261図	3区1号井戸・34号土坑と出土遺物 .....	363
第262図	3区4号住居と出土遺物 .....	364
第263図	3区5号住居出土遺物 .....	365
第264図	3区5号住居 .....	366
第265図	3区32・33号溝 .....	366
第266図	3区全体図 .....	368
第267図	3区1号屋敷跡全体図 .....	369
第268図	3区4号掘立柱建物 .....	371
第269図	3区5号掘立柱建物 .....	371
第270図	3区6号掘立柱建物 .....	372
第271図	3区7号掘立柱建物 .....	373
第272図	3区8号掘立柱建物 .....	373
第273図	3区9号掘立柱建物 .....	374
第274図	3区10号掘立柱建物 .....	375
第275図	3区11号掘立柱建物 .....	376
第276図	3区12号掘立柱建物 .....	376
第277図	3区13号掘立柱建物 .....	377
第278図	3区1号屋敷内土坑(1)と46号土坑出土遺物 .....	380
第279図	3区1号屋敷内土坑(2) .....	382
第280図	3区1号屋敷内土坑(3) .....	383
第281図	3区5・6号井戸と出土遺物 .....	383
第282図	3区1号屋敷内ピット群1 .....	386
第283図	3区1号屋敷内ピット群2、2～5・8・9号柱穴列 .....	387
第284図	3区1号屋敷内ピット群2断面図 .....	388
第285図	3区1号屋敷内ピット群3、6・7号柱穴列 .....	390
第286図	3区1号屋敷内個別ピット .....	391
第287図	3区1号屋敷内ピット・柱穴列出土遺物 .....	392
第288図	3区18・20号溝と18号溝出土遺物 .....	394
第289図	3区22・26～30号溝と22号溝出土遺物 .....	396
第290図	3区28号溝出土遺物 .....	397
第291図	3区2号屋敷跡全体図 .....	398
第292図	3区2号掘立柱建物 .....	399
第293図	3区3号掘立柱建物 .....	399
第294図	3区15号掘立柱建物 .....	401
第295図	3区16号掘立柱建物 .....	401
第296図	3区1号柱穴列 .....	401
第297図	3区2号屋敷内土坑、76号土坑出土遺物 .....	403
第298図	3区2号屋敷内ピット群 .....	404
第299図	3区2号屋敷内ピット .....	405
第300図	3区6～8号溝と7号溝出土遺物 .....	407
第301図	3区12号溝、1号道路 .....	409
第302図	3区12号溝出土遺物 .....	410
第303図	3区19・23号溝と19号溝出土遺物(1) .....	412
第304図	3区19号溝出土遺物(2) .....	413
第305図	3区23号溝出土遺物 .....	413
第306図	3区15・30号土坑と15号土坑出土遺物 .....	414
第307図	3区2～4号井戸と3号井戸出土遺物 .....	415
第308図	3区4号溝 .....	416
第309図	3区3・25号溝と25号溝出土遺物 .....	417
第310図	3区1号掘立柱建物 .....	419
第311図	3区14号掘立柱建物 .....	419
第312図	3区1・2号竪穴状遺構 .....	420
第313図	3区近代以前土坑(1) .....	423
第314図	3区近代以前土坑(2) .....	425
第315図	3区近代以前土坑(3) .....	426

第316図	3区近代以前ピット群と34号ピット出土遺物 .....	428
第317図	3区近代以前ピット(1) .....	429
第318図	3区近代以前ピット(2) .....	430
第319図	3区近代以前ピット(3) .....	431
第320図	3区1・2・14・17・21・24・31号溝と31号溝出土遺物 .....	433
第321図	3区1・2号集石遺構と出土遺物 .....	434
第322図	3区2号道路 .....	435
第323図	3区遺構外出土遺物(1) .....	436
第324図	3区遺構外出土遺物(2) .....	437
第325図	周辺遺跡の住居等分布 .....	445
第326図	井野川流域におけるS字襷編年(深澤・小林2006から転載) .....	446
第327図	住居外周に溝を伴う住居(1) .....	449
第328図	住居外周に溝を伴う住居(2) .....	450
第329図	住居外周に溝を伴う住居(3) .....	451
第330図	住居外周に溝を伴う住居(4) .....	452
第331図	上之手八王子遺跡例(1/1500) .....	456
第332図	綿貫原北・牛道遺跡例 .....	456
第333図	横手南川端・横手湯田(A・B区)・横手早稲田遺跡例 (1/1500) .....	457
第334図	住居規模の比較 .....	458
第335図	外周溝の比較 .....	458
第336図	8・9世紀の土地利用推定図(大江2006 掲載812図より一部) 転載 .....	460
第337図	中世屋敷分布図 .....	461
第338図	屋敷別出土遺物年代図 .....	462
第339図	2区1号屋敷内建物分類別分布図 .....	464
第340図	3区1号屋敷建物変遷案 .....	466
第341図	遺跡周辺旧地割復元図(下図:昭和期の航空写真) .....	470
第342図	在地系土器変遷図 .....	471・472
第343図	1区近世居住域詳細図 .....	476
第344図	近世居住域年代一覧 .....	477
第345図	井出村東遺跡1・2号火葬土坑と出土遺物(同報告書1983 より転載) .....	478

## 表目次

第1表	周辺遺跡一覧表 .....	16・17
第2表	調査区・時期別遺構数一覧 .....	23
第3表	1区1号住居出土遺物 .....	31
第4表	1区2号住居出土遺物 .....	37
第5表	1区3号住居出土遺物 .....	38
第6表	1区4号住居出土遺物 .....	41
第7表	1区5号住居出土遺物 .....	41
第8表	1区6号住居出土遺物 .....	45
第9表	1区7号住居出土遺物 .....	48
第10表	1区8・14号住居出土遺物 .....	50
第11表	1区9号住居出土遺物 .....	52
第12表	1区10号住居出土遺物 .....	54
第13表	1区11号住居出土遺物 .....	57
第14表	1区12号住居出土遺物 .....	58
第15表	1区13号住居出土遺物 .....	62
第16表	1区土坑出土遺物 .....	66
第17表	1区1号落ち込み状遺構出土遺物 .....	68
第18表	1区2号落ち込み状遺構周辺ピット群計測表 .....	68
第19表	1区2号落ち込み状遺構出土遺物 .....	71
第20表	1区9号井戸出土遺物 .....	75
第21表	1区12号溝出土遺物 .....	77
第22表	1区85号溝出土遺物 .....	78
第23表	1区84号溝出土遺物 .....	81・82
第24表	1区86号溝出土遺物 .....	82
第25表	1区45号土坑出土遺物 .....	88
第26表	1区44・210・212号土坑出土遺物 .....	88
第27表	1区4号井戸出土遺物 .....	91
第28表	1区8号井戸出土遺物 .....	91
第29表	1区1号橋脚跡計測表 .....	92

第30表	1区2号橋脚跡計測表	92	第95表	2区1号掘立柱建物計測表	269
第31表	1区58号ピット出土遺物	94	第96表	2区2号掘立柱建物計測表	271
第32表	1区39号ピット出土遺物	95	第97表	2区2号掘立柱建物出土遺物	272
第33表	1区230号ピット出土遺物	96	第98表	2区3号掘立柱建物計測表	273
第34表	1区中世屋敷内ピット計測表	97	第99表	2区4号掘立柱建物計測表	273
第35表	1区23・24号溝出土遺物	101	第100表	2区5号掘立柱建物計測表	274
第36表	1区25・26・27号溝出土遺物	106-108	第101表	2区6号掘立柱建物計測表	275
第37表	1区63号溝出土遺物	110	第102表	2区7号掘立柱建物計測表	277
第38表	1区69・70号溝出土遺物	112	第103表	2区8号掘立柱建物計測表	277
第39表	1区91号溝出土遺物	114・115	第104表	2区9号掘立柱建物計測表	277
第40表	1区2・3号竪穴状遺構出土遺物	116	第105表	2区10号掘立柱建物計測表	278
第41表	1区4・7～9・39・52・65・71・131・165号土坑 出土遺物	127	第106表	2区11号掘立柱建物計測表	279
第42表	1区6号井戸出土遺物	129	第107表	2区12号掘立柱建物計測表	280
第43表	1区6号集石遺構出土遺物	130	第108表	2区13号掘立柱建物出土遺物	281
第44表	1区屋敷周辺ピット群計測表	130	第109表	2区13号掘立柱建物計測表	282
第45表	1区2号溝出土遺物	133	第110表	2区14号掘立柱建物計測表	282
第46表	1区6号溝出土遺物	137	第111表	2区15号掘立柱建物計測表	283
第47表	1区11号溝出土遺物	139	第112表	2区17号掘立柱建物出土遺物	285
第48表	1区81号溝出土遺物	141	第113表	2区16号掘立柱建物計測表	285
第49表	1区2号道路出土遺物	141	第114表	2区17号掘立柱建物計測表	285
第50表	1区1号掘立柱建物出土遺物	145	第115表	2区18号掘立柱建物計測表	286
第51表	1区1号掘立柱建物計測値表	145	第116表	2区19号掘立柱建物計測表	287
第52表	1区1号掘立柱建物関連ピット計測表	145	第117表	2区20号掘立柱建物計測表	289
第53表	1区1号柱穴列計測表	146	第118表	2区21号掘立柱建物計測表	289
第54表	1区2号柱穴列計測表	146	第119表	2区22号掘立柱建物計測表	290
第55表	1区1号土坑出土遺物	167・168	第120表	2区23号掘立柱建物計測表	290
第56表	1区1・2号井戸出土遺物	170	第121表	2区1号柱穴列計測表	290
第57表	1区1号墓出土遺物	172	第122表	2区18・45・46号土坑出土遺物	300
第58表	1区2号墓出土遺物	175	第123表	2区3号井戸出土遺物	304・305
第59表	1区3号墓出土遺物	175	第124表	2区4号井戸出土遺物	305
第60表	1区4号墓出土遺物	177	第125表	2区6号井戸出土遺物	306
第61表	1区68・69号土坑出土遺物	178	第126表	2区ピット計測表	307・308
第62表	1区5号墓出土遺物	180	第127表	2区164・165・431号ピット出土遺物	316
第63表	1区6・7号墓出土遺物	182	第128表	2区406号ピット出土遺物	316
第64表	1区9号墓・46号土坑出土遺物	184	第129表	2区6号溝出土遺物	320
第65表	1区10号墓出土遺物	186	第130表	2区3・7号溝出土遺物	321
第66表	1区204・205号土坑出土遺物	187	第131表	2区2号溝周辺ピット群計測表	321
第67表	1区1号火葬跡出土遺物	189	第132表	2区2号溝出土遺物	323
第68表	1区2号火葬跡出土遺物	189	第133表	2区8号溝出土遺物	325
第69表	1区1号集石遺構出土遺物	192	第134表	2区11号溝出土遺物	326
第70表	1区4号集石遺構出土遺物	192・193	第135表	2区10・12号溝出土遺物	326
第71表	1区5号集石遺構出土遺物	193	第136表	2区13号溝周辺ピット群計測表	328
第72表	1区73・102号ピット出土遺物	194	第137表	2区13号溝出土遺物	330
第73表	1区近世ピット計測表	197	第138表	2区429号ピット出土遺物	331
第74表	1区1号溝出土遺物	205-208	第139表	2区9号溝出土遺物	332
第75表	1区10号溝出土遺物	211	第140表	2区14号溝出土遺物	335
第76表	1区10号溝出土鉄滓	211	第141表	2区遺構外出土遺物	336
第77表	1区22号溝出土遺物	212	第142表	3区1号住居出土遺物	342
第78表	1区13・20・28号溝出土遺物	215	第143表	3区2号住居出土遺物	350・351
第79表	1区31・41号溝出土遺物	215	第144表	3区11号住居出土遺物	351
第80表	1区43号溝出土遺物	218・219	第145表	3区3号住居出土遺物	360・361
第81表	1区45・49号溝出土遺物	219	第146表	3区5号溝b出土遺物	362
第82表	1区94号溝出土遺物	224	第147表	3区1号井戸・34号土坑出土遺物	363
第83表	1区59号溝出土遺物	224	第148表	3区4号住居出土遺物	365
第84表	1区48号溝出土遺物	230・231	第149表	3区5号住居出土遺物	365
第85表	1区51号溝出土遺物	231	第150表	3区掘立柱建物計測値一覧	367
第86表	1区58号溝出土遺物	231	第151表	3区4号掘立柱建物計測表	372
第87表	1区52号溝出土遺物	233	第152表	3区5号掘立柱建物計測表	372
第88表	1区67号溝出土遺物	233	第153表	3区6号掘立柱建物計測表	372
第89表	1区1号道路出土遺物	243-245	第154表	3区7号掘立柱建物計測表	373
第90表	1区35号溝出土遺物	247	第155表	3区8号掘立柱建物計測表	374
第91表	1区近代以前ピット群計測表	248	第156表	3区9号掘立柱建物計測表	374
第92表	1区6・22号ピット出土遺物	250	第157表	3区10号掘立柱建物計測表	375
第93表	1区遺構外出土遺物	259-264	第158表	3区11号掘立柱建物計測表	376
第94表	2区掘立柱建物計測値一覧	265	第159表	3区12号掘立柱建物計測表	377
			第160表	3区13号掘立柱建物計測表	378

第161表	3区46号土坑出土遺物	381
第162表	3区5・6号井戸出土遺物	384
第163表	3区1号屋敷内ピット計測表	385
第164表	3区2号柱穴計測表	389
第165表	3区3号柱穴計測表	389
第166表	3区4号柱穴計測表	389
第167表	3区5号柱穴計測表	389
第168表	3区8号柱穴計測表	389
第169表	3区9号柱穴計測表	389
第170表	3区6号柱穴計測表	390
第171表	3区7号柱穴計測表	390
第172表	3区1号屋敷内ピット・柱穴列出土遺物	392
第173表	3区18号溝出土遺物	395
第174表	3区22号溝出土遺物	395
第175表	3区28号溝出土遺物	395
第176表	3区2号掘立柱建物計測表	400
第177表	3区3号掘立柱建物計測表	400
第178表	3区15号掘立柱建物計測表	402
第179表	3区16号掘立柱建物計測表	402
第180表	3区1号柱穴計測表	402
第181表	3区76号土坑出土遺物	403
第182表	3区2号屋敷内ピット計測表	406
第183表	3区7号溝出土遺物	408
第184表	3区12号溝出土遺物	408
第185表	3区19号溝出土遺物	411
第186表	3区23号溝出土遺物	414
第187表	3区15号土坑出土遺物	414
第188表	3区3号井戸出土遺物	415
第189表	3区25号溝出土遺物	417
第190表	3区1号掘立柱建物計測表	418
第191表	3区14号掘立柱建物計測表	418
第192表	3区近代以前ピット群計測表	427
第193表	3区34号ピット出土遺物	428
第194表	3区近代以前個別ピット計測表	431
第195表	3区31号溝出土遺物	432
第196表	3区1・2号集石遺構出土遺物	435
第197表	3区遺構外出土遺物	437
第198表	綿貫原北遺跡出土人骨まとめ	443
第199表	綿貫原北遺跡出土人骨歯冠計測値及び比較表	443
第200表	住居外周に溝を伴う住居一覧	455
第201表	2区建物総括表	463
第202表	3区建物総括表	465
第203表	古瀬戸・中国陶磁器屋敷別出土数量	473
第204表	古瀬戸陶器 器種構成表	473
第205表	土坑墓一覧	477
第206表	1区瀬戸美濃系掲載陶磁器 時期別組成表	480
第207表	1区遺構別瀬戸美濃系掲載陶磁器出土状況	480
第208表	肥前・その他掲載陶磁器遺構別出土数	480

P L . 4	1区3号住居全景(西から)
	1区3号住居床下土坑全景(北から)
	1区3号住居セクション(北西から)
	1区3号住居床下土坑セクション(北から)
	1区4号住居全景(西から)
P L . 5	1区4号住居掘り方全景(西から)
	1区4号住居カマド掘り方遺物出土状態(西から)
	1区4号住居セクション(南から)
	1区4号住居セクション(西から)
	1区5号住居全景(東から)
P L . 6	1区5号住居・12号溝セクション(西から)
	1区5号住居P2遺物出土状態(西から)
	1区6号住居遺物出土状態(西から)
	1区6号住居掘り方全景(西から)
	1区6号住居カマド全景(西から)
P L . 7	1区7号住居遺物出土状態(東から)
	1区7号住居全景(北から)
	1区7号住居掘り方全景(北から)
	1区8号住居全景(西から)
	1区8号住居貯蔵穴遺物出土状態(南から)
P L . 8	1区14号住居掘り方全景(西から)
	1区9号住居全景(西から)
	1区9号住居掘り方全景(西から)
	1区9号住居カマド掘り方全景(西から)
	1区9号住居カマド掘り方セクション(北西から)
P L . 9	1区9号住居貯蔵穴遺物出土状態(西から)
	1区9号住居貯蔵穴セクション(北西から)
	1区10号住居全景(西から)
	1区10号住居掘り方全景(西から)
	1区10号住居セクション(北から)
P L . 10	1区10号住居カマド全景(西から)
	1区10号住居カマド掘り方セクション(西から)
	1区11号住居遺物出土状態(西から)
	1区11号住居掘り方全景(西から)
	1区11号住居カマド遺物出土状態(西から)
P L . 11	1区12号住居全景(西から)
	1区12号住居掘り方全景(西から)
	1区12号住居遺物出土状態(南から)
	1区12号住居カマド全景(西から)
	1区13号住居掘り方全景(北西から)
P L . 12	1区13号住居遺物出土状態(南東から)
	1区4号竪穴状遺構全景(南から)
	1区4号竪穴状遺構セクション(南から)
	1区2・3号土坑全景(東から)
	1区2号土坑セクション(南から)
	1区36B土坑全景(北から)
P L . 13	1区36B土坑セクション(南西から)
	1区161号土坑・65号溝全景(東から)
	1区162号土坑全景(南から)
	1区168号土坑全景(東から)
	1区161号土坑セクション(南から)
	1区162号土坑セクション(南東から)
	1区169・171・172号土坑全景(北から)
	1区171・172号土坑全景(北から)
	1区170号土坑全景(西から)
	1区169号土坑セクション(南から)
	1区171・172号土坑セクション(東から)
	1区185号土坑全景(北から)
	1区173号土坑セクション(南西から)
	1区174号土坑セクション(南西から)
	1区185号土坑セクション(北から)
P L . 14	1区185号土坑遺物出土状態(西から)
	1区186・187号土坑セクション(東から)
	1区191号土坑セクション(南から)
	1区194号土坑全景(南から)
	1区197号土坑全景(東から)

## 写真図版目次

P L . 1 1区調査区全景航空写真(東上空から)

P L . 2 1区1号住居全景(北から)  
1区1号住居床下土坑(北から)  
1区1号住居掘り方全景(西から)  
1区1号住居掘り方セクション(北から)  
1区2・3号住居全景(西から)

P L . 3 1区2・3号住居遺物出土状態(南から)  
1区2号住居掘り方全景(西から)  
1区2号住居カマド全景(西から)  
1区2・3号住居掘り方セクション(西から)  
1区2号住居カマド掘り方セクション(西から)  
1区2号住居貯蔵穴遺物出土状態(西から)  
1区2号住居P3セクション(南から)  
1区2号住居貯蔵穴セクション(南から)

	1区199号土坑全景(北から)		1区23号溝セクション(東から)
	1区194号土坑セクション(北から)		1区24号溝セクション(西から)
	1区197号土坑セクション(南東から)	P L. 23	1区23号溝全景(西から)
	1区200号土坑全景(南から)		1区25号溝遺物・礫出土状態(東から)
	1区201号土坑全景(東から)		1区23号溝遺物出土状態(西から)
	1区201号土坑セクション(東から)		1区25号溝遺物・礫出土状態(南から)
	1区202号土坑全景(北から)		1区25号溝遺物・礫出土状態(南西から)
	1区218号土坑セクション(西から)		1区25・26号溝セクション(南から)
	1区2号落ち込み状遺構全景(南から)	P L. 24	1区25～27号溝西半部全景(南から)
	1区2号落ち込み状遺構断面(南から)		1区25～27号溝セクション(南から)
P L. 15	1区9号井戸全景(西から)		1区26号溝セクション(南から)
	1区9号井戸石組出土状態(北東から)		1区25号溝東壁セクション(西から)
	1区9号井戸Bセクション(西から)	P L. 25	1区25号溝Cセクション(西から)
	1区9号井戸北壁セクション(南から)		1区29号溝セクション(西から)
	1区9号井戸Bセクション南側(西から)		1区33号溝セクション(西から)
P L. 16	1区8号溝セクション(南から)		1区62号溝セクション(南から)
	1区12号溝全景(南から)		1区63号溝全景(南から)
	1区15号溝セクション(西から)		1区63号溝セクション(南から)
	1区17号溝セクション(西から)		1区66号溝遺物出土状態(北から)
	1区18号溝セクション(西から)		1区69・70・75号溝全景(南から)
	1区65号溝セクション(北から)		1区66号溝セクション(西から)
	1区72号溝セクション(東から)		1区69・82号溝セクション(南から)
	1区74号溝全景(南から)	P L. 26	1区69・70・71号溝セクション(南から)
	1区77号溝セクション(南から)		1区70・75号溝セクション(南から)
	1区74号溝セクション(南から)		1区91号溝遺物出土状態(南西から)
	1区78号溝全景(北東から)		1区91号溝全景(南西から)
	1区84・86・87号溝セクション(北から)		1区91号溝セクション(南から)
	1区84・86・87号溝セクション(北から)		1区2号竪穴状遺構全景(西から)
	1区78号溝セクション(北東から)		1区2号竪穴状遺構遺物出土状態(西から)
P L. 17	1区84・86・87号溝全景(北西から)		1区2号竪穴状遺構セクション(北から)
	1区84・86号溝全景(北から)		1区3号竪穴状遺構セクション(南から)
P L. 18	1区84・86・87号溝セクション(北から)	P L. 27	1区3号竪穴状遺構全景(西から)
	1区84号溝セクション(北から)		1区1号土坑全景(北から)
	1区85号溝全景(北から)		1区1号土坑掘り方セクション(南から)
	1区88号溝全景(東から)		1区4号土坑全景(南から)
P L. 19	1区中世面全景(上空から)		1区7号土坑全景(西から)
P L. 20	1区1号屋敷西側(上空から)		1区7号土坑遺物出土状態(西から)
	1区1号屋敷東側(上空から)		1区4号土坑セクション(西から)
P L. 21	1区43号土坑全景(東から)		1区7号土坑セクション(南から)
	1区44号土坑全景(南から)		1区8～11号土坑全景(東から)
	1区45号土坑全景(北から)		1区13号土坑全景(北から)
	1区43号土坑セクション(南から)		1区14号土坑全景(東から)
	1区44号土坑セクション(西から)		1区8～11号土坑セクション(北から)
	1区45号土坑セクション(南から)	P L. 28	1区15・16号土坑全景(南から)
	1区62号土坑セクション(西から)		1区14号土坑セクション(東から)
	1区166号土坑全景(北から)		1区17号土坑全景(北から)
	1区208号土坑全景(北から)		1区15号土坑セクション(南から)
	1区209号土坑全景(西から)		1区16号土坑全景(南から)
	1区166号土坑セクション(南から)		1区17号土坑セクション(南から)
	1区208号土坑セクション(南から)		1区18号土坑全景(東から)
	1区209号土坑セクション(南から)		1区21・23・24・52号土坑全景(東から)
	1区210号土坑全景(西から)		1区28・27号土坑全景(西から)
	1区211号土坑セクション(西から)		1区18号土坑セクション(北西から)
P L. 22	1区212号土坑全景(東から)		1区23・24号土坑セクション(東から)
	1区4号井戸全景(西から)		1区28号土坑セクション(北から)
	1区8号井戸遺物出土状態(南から)		1区38・13号土坑全景(南から)
	1区212号土坑セクション(西から)		1区36A土坑セクション(南から)
	1区4号井戸遺物出土状態(西から)		1区29・30号溝セクション(西から)
	1区8号井戸遺物出土状態(南から)	P L. 29	1区38号土坑セクション(南から)
	1区1・2号橋脚状遺構全景(南から)		1区13・38～40・63～65・159号土坑全景(南から)
	1区4号井戸セクション(西から)		1区38・39号土坑セクション(北から)
	1区8号井戸セクション(南から)		1区39・40号土坑セクション(東から)
	1区1・2号橋脚状遺構全景(東から)		1区53・54号土坑セクション(西から)
	1区133～135号ピット(西から)		1区65号土坑セクション(西から)
	1区24号溝全景(西から)		1区159号土坑・107号ピットセクション(西から)
	1区230号ピット遺物出土状態(東から)		1区39・40号土坑全景(東から)

- 1区49号土坑全景(南から)  
1区51号土坑セクション(東から)  
1区52号土坑全景(北から)  
1区56号土坑全景(東から)  
1区52号土坑銭出土状態(南から)  
1区55号土坑全景(西から)  
P L. 30 1区60号土坑全景(北から)  
1区60号土坑遺物出土状態(北から)  
1区63・65号土坑全景(西から)  
1区60号土坑セクション(南から)  
1区64号土坑全景(東から)  
1区63号土坑セクション(西から)  
1区64号土坑セクション(東から)  
1区108号土坑全景(東から)  
1区109号土坑全景(東から)  
1区129号土坑全景(北から)  
1区131号土坑全景(北東から)  
1区109号土坑セクション(東から)  
1区129号土坑セクション(南東から)  
1区131号土坑セクション(北西から)  
1区165号土坑全景(西から)  
P L. 31 1区165号土坑羽口出土状態(南西から)  
1区175号土坑全景(北から)  
1区178号土坑全景(南から)  
1区179・190号土坑全景(北から)  
1区175号土坑セクション(南西から)  
1区178号土坑セクション(北から)  
1区181号土坑全景(南から)  
1区182号土坑全景(南から)  
1区184号土坑全景(東から)  
1区181号土坑セクション(東から)  
1区182号土坑セクション(北から)  
1区193号土坑全景(西から)  
1区192号土坑全景(東から)  
1区192号土坑セクション(南から)  
1区193号土坑セクション(西から)  
P L. 32 1区3号井戸全景(北から)  
1区5号井戸全景(東から)  
1区6号井戸全景(東から)  
1区5号井戸セクション(北から)  
1区6号井戸遺物出土状態(東から)  
1区7号井戸全景(東から)  
1区2号火葬跡全景(東から)  
1区2号火葬跡セクション(南西から)  
1区2号火葬跡遺物出土状態(西から)  
P L. 33 1区3号火葬跡遺物出土状態(北から)  
1区3号火葬跡セクション(西から)  
1区2号集石遺構全景(南から)  
1区2号集石遺構セクション(北から)  
1区6号集石遺構全景(北から)  
1区2号溝セクション(西から)  
1区2号溝全景(西から)  
1区2号溝セクション(西から)  
1区2号溝東壁セクション(西から)  
1区2号溝遺物出土状態(西から)  
1区4号溝セクション(東から)  
1区6号溝遺物出土状態(北から)  
P L. 34 1区6号溝北半部全景(南から)  
1区6号溝南半部全景(北から)  
1区6号溝・168号土坑セクション(北から)  
1区6号溝Cセクション(南から)  
1区81号溝全景(東から)  
P L. 35 1区11号溝全景(南から)  
1区11号溝遺物出土状態(南から)  
1区10・11号溝セクション(北西から)  
1区60号溝全景(南から)
- 1区60号溝セクション(南から)  
1区71号溝セクション(南から)  
1区2号道路全景(西から)  
1区2号溝セクション(西から)  
P L. 36 1区近世面全景(上空から)  
P L. 37 1区1号掘立柱建物全景(南から)  
1区1号掘立柱建物P1全景(南から)  
1区1号掘立柱建物P1セクション(南から)  
1区1号掘立柱建物P2石出土状態(南から)  
1区1号掘立柱建物P3全景(南から)  
1区1号掘立柱建物P4全景(南から)  
1区1号掘立柱建物P5全景(南から)  
1区1号掘立柱建物P3セクション(南から)  
1区1号掘立柱建物P4セクション(南から)  
1区1号掘立柱建物P5セクション(南から)  
1区1号掘立柱建物P7全景(南から)  
1区1号掘立柱建物P7セクション(南東から)  
P L. 38 1区1号掘立柱建物P8全景(北西から)  
1区1号掘立柱建物P8セクション(北から)  
1区1号礎石列全景(東から)  
1区1号柱穴列P1全景(東から)  
1区1号柱穴列P1セクション(東から)  
1区1号柱穴列P2全景(東から)  
1区1号柱穴列P3全景(西から)  
1区1号柱穴列P4全景(北から)  
1区1号柱穴列P4セクション(南から)  
1区1号柱穴列P5全景(南から)  
P L. 39 1区1号柱穴列P5セクション(南から)  
1区2号柱穴列全景(北から)  
1区2号柱穴列P1全景(南から)  
1区2号柱穴列P1セクション(南から)  
1区2号柱穴列P2・3・4全景(南から)  
1区2号柱穴列P5全景(北から)  
1区2号柱穴列P5セクション(東から)  
1区2号柱穴列P6全景(南から)  
1区2号柱穴列P6セクション(西から)  
1区1号竪穴状遺構全景(東から)  
P L. 40 1区1号竪穴状遺構・22号溝遺物出土状態(東から)  
1区1号竪穴状遺構セクション(北から)  
1区5号土坑全景(南から)  
1区6号土坑セクション(東から)  
1区37・22号土坑全景(西から)  
1区25号土坑全景(東から)  
1区37号土坑セクション(西から)  
1区22号土坑セクション(東から)  
1区25号土坑掘り方セクション(西から)  
1区31号土坑全景(西から)  
1区31号土坑遺物出土状態(北から)  
1区25・26号土坑セクション(南から)  
P L. 41 1区31号土坑セクション(西から)  
1区32・59号土坑全景(北から)  
1区33号土坑全景(南から)  
1区34号土坑全景(北から)  
1区59号土坑セクション(南から)  
1区33号土坑セクション(南から)  
1区34号土坑セクション(南から)  
1区35号土坑全景(北から)  
1区41・42号土坑全景(北から)  
1区47号土坑全景(西から)  
1区35号土坑セクション(南から)  
1区41号土坑掘り方セクション(西から)  
1区47号土坑セクション(西から)  
1区48号土坑遺物出土状態(北から)  
1区41号土坑セクション(東から)  
P L. 42 1区57号土坑全景(西から)

	1区48号土坑セクション(北から)		1区120号土坑全景(南から)
	1区58号土坑全景(東から)		1区121号土坑全景(東から)
	1区57号土坑セクション(北から)		1区119号土坑セクション(南から)
	1区66号土坑全景(北から)		1区120号土坑セクション(南から)
	1区58号土坑セクション(西から)		1区121号土坑セクション(南から)
	1区61号土坑全景(西から)		1区122号土坑全景(北東から)
	1区70号土坑全景(東から)		1区123号土坑全景(東から)
	1区71号土坑全景(北から)		1区124号土坑全景(北から)
	1区61号土坑セクション(北東から)	P L. 47	1区125・145～149・151～153・158号土坑全景(北から)
	1区70号土坑セクション(南から)		1区123号土坑セクション(西から)
	1区71号土坑セクション(北から)		1区124号土坑セクション(南から)
	1区73号土坑セクション(南から)		1区125・151・153・158号土坑セクション(南から)
	1区74号土坑全景(東から)		1区125・145～149・151～153・158号土坑全景(南から)
P L. 43	1区74・101号土坑全景(北から)		1区126号土坑全景(北から)
	1区75号土坑遺物出土状態(南から)		1区126号土坑セクション(北から)
	1区74号土坑掘り方セクション(西から)		1区127・128号土坑全景(北から)
	1区101号土坑掘り方セクション(西から)		1区130号土坑全景(南から)
	1区75号土坑セクション(西から)		1区132号土坑全景(北西から)
	1区75号土坑掘り方セクション(西から)		1区127・128号土坑セクション(南から)
	1区76号土坑全景(南から)		1区130号土坑セクション(北から)
	1区76号土坑掘り方セクション(南から)		1区132号土坑セクション(北西から)
	1区77号土坑全景(東から)		1区133号土坑全景(南から)
	1区78号土坑セクション(南から)	P L. 48	1区134号土坑全景(南から)
	1区76号土坑セクション(南から)		1区133号土坑セクション(南から)
	1区77号土坑セクション(西から)		1区134号土坑セクション(北から)
	1区79号土坑全景(北から)		1区136号土坑セクション(北から)
	1区80号土坑全景(北から)		1区137・160号土坑全景(北から)
	1区81・82・110号土坑全景(北から)		1区137号土坑セクション(北西から)
	1区83号土坑セクション(北から)		1区160号土坑セクション(北西から)
P L. 44	1区80号土坑セクション(南から)		1区138号土坑全景(北から)
	1区110号土坑セクション(北から)		1区139号土坑全景(東から)
	1区85号土坑全景(西から)		1区140号土坑全景(北から)
	1区87号土坑全景(北から)		1区141・155号土坑全景(東から)
	1区85号土坑セクション(西から)		1区139号土坑セクション(北西から)
	1区85・87・112号土坑全景(西から)		1区140号土坑セクション(西から)
	1区112号土坑全景(南から)		1区141・155号土坑セクション(西から)
	1区88号土坑全景(北から)		1区142号土坑全景(北から)
	1区89・90・105号土坑全景(北から)	P L. 49	1区144号土坑全景(西から)
	1区31・92・93・94・97・111号土坑全景(北から)		1区143号土坑全景(北から)
	1区88号土坑セクション(北から)		1区142・143号土坑セクション(北から)
	1区89・90号土坑セクション(南から)		1区144号土坑セクション(西から)
	1区91・100号土坑全景(北から)		1区150号土坑全景(南から)
	1区92号土坑全景(南から)		1区150号土坑セクション(南から)
	1区93号土坑全景(西から)		1区154号土坑全景(西から)
P L. 45	1区99・102号土坑全景(北から)		1区157号土坑全景(西から)
	1区95・96・106号土坑セクション(北から)		1区163号土坑全景(北から)
	1区93・31号土坑セクション(北から)		1区154号土坑セクション(西から)
	1区99・100号土坑セクション(北から)		1区164・167号土坑全景(南から)
	1区102号土坑セクション(北から)		1区163号土坑セクション(北から)
	1区103号土坑セクション(南から)		1区176号土坑全景(東から)
	1区104号土坑全景(北から)		1区164・167号土坑セクション(南から)
	1区107号土坑全景(東から)		1区180号土坑・129号ピット全景(南から)
	1区111号土坑全景(北から)	P L. 50	1区176号土坑セクション(東から)
	1区104号土坑セクション(北から)		1区188号土坑セクション(南から)
	1区107号土坑掘り方セクション(西から)		1区180号土坑・129号ピットセクション(北から)
	1区111号土坑掘り方セクション(北から)		1区205号土坑全景(北から)
	1区113・114号土坑全景(南から)		1区206号土坑全景(北から)
	1区115号土坑全景(西から)		1区207号土坑全景(西から)
	1区116・138号土坑全景(北から)		1区205号土坑セクション(南から)
P L. 46	1区113・114号土坑セクション(西から)		1区206号土坑セクション(南から)
	1区117号土坑全景(東から)		1区215号土坑石出土状態(南から)
	1区116号土坑セクション(南から)		1区215号土坑全景(西から)
	1区117号土坑セクション(北から)		1区1号井戸遺物出土状態(東から)
	1区118号土坑全景(北東から)	P L. 51	1区1号井戸セクション(南から)
	1区118号土坑セクション(南から)		1区2号井戸セクション(西から)
	1区119号土坑全景(南から)		



	1区2号井戸全景(南東から)		1区95号ピット全景(東から)
	1区1号墓上層集石面(東から)	P L. 56	1区95号ピットセクション(西から)
	1区1号墓セクション(南から)		1区1号溝全景(南から)
	1区1号墓桶出土状態(北から)		1区3号溝全景(西から)
	1区1号墓全景(南から)		1区1号溝セクション(南から)
	1区2号墓桶出土状態(北から)		1区1号溝遺物出土状態(南東から)
	1区2号墓掘り方全景(北から)		1区10号溝遺物出土状態(北から)
	1区3号墓遺物出土状態(南から)		1区3号溝セクション(東から)
	1区3号墓掘り方全景(南から)		1区5・76号溝セクション(南から)
	1区2号墓セクション(南から)		1区10号溝遺物出土状態(東から)
P L. 52	1区3号墓セクション(南から)		1区10号溝セクション(北から)
	1区4号墓全景(南から)	P L. 57	1区22号溝遺物出土状態(東から)
	1区4号墓遺物出土状態(南東から)		1区22号溝セクション(南から)
	1区11号墓全景(南から)		1区13号溝セクション(南から)
	1区11号墓セクション(南から)		1区16号溝セクション(北から)
	1区67号土坑骨出土状態(南から)		1区19号溝セクション(北から)
	1区67号土坑掘り方全景(南から)		1区20号溝遺物出土状態(北から)
	1区68号土坑遺物出土状態(東から)		1区20号溝セクション(南から)
	1区68号土坑掘り方全景(南から)		1区28・20号溝セクション(南から)
	1区69号土坑全景(北西から)		1区31号溝全景(東から)
	1区69号土坑セクション(北西から)		1区31号溝セクション(南から)
	1区5号墓掘り方全景(南から)		1区38号溝セクション(西から)
	1区6号墓全景(南から)		1区38号溝全景(東から)
	1区5号墓鍋かぶり状態(南から)	P L. 58	1区39号溝全景(北から)
P L. 53	1区6号墓セクション(南から)		1区40号溝全景(東から)
	1区7号墓掘り方全景(南から)		1区41・42号溝全景(東から)
	1区7号墓遺物出土状態(南から)		1区39号溝セクション(南から)
	1区5号墓セクション(南から)		1区40号溝セクション(南東から)
	1区8号墓遺物出土状態(西から)		1区41・42号溝セクション(南東から)
	1区8号墓セクション(南から)		1区43号溝全景(南から)
	1区9号墓・46号土坑掘り方全景(南から)		1区43号溝遺物出土状態(北から)
	1区9号墓セクション(南から)		1区43・48号溝セクション(西から)
	1区9号墓遺物出土状態(東から)		1区44号溝全景(東から)
	1区46号土坑全景(南から)		1区44号溝セクション(西から)
	1区10号墓全景(南から)	P L. 59	1区45・46号溝全景(東から)
	1区12号墓掘り方全景(東から)		1区47号溝全景(東から)
	1区46号土坑セクション(南から)		1区48・58号溝遺物出土状態(東から)
	1区10号墓セクション(南から)		1区45・46号溝セクション(西から)
	1区12号墓全景(北から)		1区47号溝セクション(西から)
P L. 54	1区203号土坑全景(西から)		1区48号溝遺物出土状態(西から)
	1区204号土坑全景(北から)		1区48・58号溝遺物出土状態(北から)
	1区1号火葬跡全景(南から)		1区48・51号溝遺物出土状態(西から)
	1区203号土坑セクション(南から)		1区48号溝セクション(東から)
	1区204号土坑セクション(南から)		1区48・51号溝セクション(西から)
	1区1号火葬跡セクション(北東から)		1区35・48・58号溝セクション(東から)
	1区1号集石遺構1面全景(北から)		1区59号溝セクション(西から)
	1区5号集石遺構全景(東から)	P L. 60	1区59号溝遺物出土状態(東から)
	1区4号集石遺構全景(南から)		1区51・52号溝遺物出土状態(東から)
	1区4号集石遺構セクション(南から)		1区51・94号溝全景(東から)
	1区1号集石遺構2面全景(北から)		1区51号溝セクション(西から)
	1区5号集石遺構上面全景(東から)		1区51号溝東壁セクション(西から)
	1区5号集石遺構掘り方全景(東から)		1区52号溝セクション(東から)
P L. 55	1区1～5号礫充填遺構全景(東から)		1区49号溝全景(東から)
	1区6号礫充填遺構全景(南から)		1区50号溝全景(北から)
	1区7号礫充填遺構全景(南から)		1区53号溝全景(北から)
	1区8号礫充填遺構全景(南から)		1区49号溝セクション(西から)
	1区9号礫充填遺構全景(南から)		1区50号溝セクション(南から)
	1区10・11号礫充填遺構全景(南から)		1区53号溝セクション(南から)
	1区67号ピット全景(東から)	P L. 61	1区54号溝全景(北から)
	1区71号ピット全景(東から)		1区55号溝全景(北から)
	1区73号ピット全景(東から)		1区56号溝全景(北から)
	1区67号ピットセクション(西から)		1区54号溝セクション(南から)
	1区71号ピットセクション(東から)		1区55号溝セクション(南から)
	1区73号ピットセクション(北西から)		1区56号溝セクション(北から)
	1区81号ピット全景(南から)		1区57号溝セクション(西から)
	1区81号ピットセクション(南から)		1区67号溝セクション(西から)

	1区67・76・78号溝セクション(西から)		2区3号土坑全景(北東から)
	1区95号溝セクション(南から)		2区4号土坑全景(東から)
	1区97号溝セクション(南から)		2区5・6号土坑全景(北から)
	1区98号溝セクション(南から)		2区7号土坑全景(西から)
	1区99号溝セクション(南から)	P L. 73	2区8号土坑全景(南西から)
	1区100号溝セクション(南から)		2区9号土坑全景(北西から)
	1区101号溝全景(北から)		2区10号土坑全景(北から)
P L. 62	1区1号復旧溝群全景(東から)		2区11号土坑全景(北から)
	1区1号復旧溝群セクション(南から)		2区12号土坑全景(西から)
	1区3号復旧溝群全景(北から)		2区13号土坑全景(西から)
	1区4号復旧溝群全景(東から)		2区14号土坑全景(北東から)
	1区5号復旧溝群全景(東から)		2区15・16号土坑全景(西から)
	1区4号復旧溝群セクション(西から)	P L. 74	2区18号土坑全景(南東から)
	1区1号灰掻き穴全景(南から)		2区19号土坑全景(北から)
	1区1号灰掻き穴セクション(南から)		2区20号土坑全景(北から)
	1区2号灰掻き穴セクション(南から)		2区22号土坑全景(南西から)
	1区1号道路全景(東から)		2区23号土坑全景(北西から)
	1区35号溝セクション(東から)		2区24号土坑全景(南東から)
P L. 63	2区調査区全景(上空から)		2区25号土坑全景(南東から)
P L. 64	2区1号屋敷全景(上空から)		2区26・27号土坑全景(南東から)
P L. 65	2区3号掘立柱建物全景(南東から)	P L. 75	2区28・36・37号土坑全景(北から)
	2区4・5号掘立柱建物全景(南から)		2区29号土坑全景(西から)
P L. 66	2区1・6・13・16号掘立柱建物全景(南から)		2区30号土坑全景(東から)
	2区8号掘立柱建物全景(東から)		2区31号土坑全景(北から)
P L. 67	2区掘立ピット全景(北から)		2区32号土坑全景(南から)
	2区9・10・11号掘立柱建物全景(東から)		2区33号土坑全景(南西から)
P L. 68	2区20・21号掘立柱建物、1号柱穴列全景(東から)		2区34号土坑全景(東から)
	2区22号掘立柱建物全景(北西から)		2区35号土坑全景(北から)
P L. 69	2区23号掘立柱建物全景(北東から)	P L. 76	2区38号土坑全景(東から)
	2区1・13号掘立ピット全景(西から)		2区40号土坑全景(北から)
	2区1・13号掘立ピット全景(南西から)		2区41号土坑全景(東から)
	2区1・6・13・15号掘立ピット全景(西から)		2区42号土坑全景(北から)
	2区1・16・18号掘立ピット全景(南西から)		2区43号土坑全景(北から)
	2区2・6・9～11・14号掘立ピット全景(北から)		2区44号土坑全景(北から)
	2区2・9・10号掘立ピット全景(東から)		2区45号土坑全景(西から)
P L. 70	2区2・14号掘立ピット全景(北東から)		2区46号土坑全景(北東から)
	2区2・17号掘立ピット全景(東から)	P L. 77	2区47号土坑全景(東から)
	2区2号掘立ピット8全景(北から)		2区48号土坑全景(北東から)
	2区2号掘立ピット12全景(北から)		2区1号井戸全景(東から)
	2区3号掘立ピット1全景(南東から)		2区2号井戸全景(東から)
	2区3号掘立ピット2全景(北西から)		2区3号井戸全景(東から)
	2区3号掘立ピット3全景(東から)		2区4号井戸全景(東から)
	2区3号掘立ピット5全景(北から)		2区5号井戸全景(南東から)
	2区3号掘立ピット6全景(西から)		2区6号井戸全景(北東から)
	2区4・5・12号掘立ピット全景(北から)	P L. 78	2区33・34・136号ピット全景(東から)
	2区5・12号掘立ピット全景(北東から)		2区65・325号ピット全景(西から)
	2区6・10号掘立ピット全景(西から)		2区69・70・84～86号ピット全景(北西から)
	2区6・13・19号掘立ピット全景(東から)		2区88・89号ピット全景(南西から)
	2区7・21号掘立ピット全景(東から)		2区90・91・126～129号ピット全景(北から)
	2区7号掘立ピット5全景(南東から)		2区99・131号ピット全景(東から)
P L. 71	2区8・17号掘立ピット全景(西から)		2区116～118号ピット全景(東から)
	2区10号掘立ピット5全景(北から)		2区119～122号ピット全景(南から)
	2区11号掘立ピット2全景(北から)		2区124号ピット全景(東から)
	2区12号掘立ピット7全景(東から)		2区139・174号ピット全景(北から)
	2区14・17・19号掘立ピット全景(東から)		2区144～146号ピット全景(南から)
	2区15号掘立ピット5・9全景(南から)		2区ピット全景(南東から)
	2区16号掘立ピット6全景(南西から)		2区163～165・173号ピット全景(北から)
	2区17号掘立ピット1全景(北から)		2区165・172・208～210号ピット全景(北から)
	2区19号掘立ピット2全景(南から)		2区180号ピット全景(南から)
	2区20号掘立ピット3・4全景(東から)	P L. 79	2区ピット全景(南から)
	2区20号掘立ピット5全景(北から)		2区211号ピット全景(南西から)
	2区21号掘立・1号柱列ピット全景(南から)		2区230号ピット全景(南西から)
P L. 72	2区1号竪穴状遺構全景(北から)		2区388・477・478号ピット全景(南東から)
	2区2号竪穴状遺構全景(東から)		2区389・464・465・467号ピット全景(北東から)
	2区3号竪穴状遺構全景(西から)		2区390・391号ピット全景(北から)
	2区2号土坑全景(北から)		2区405～409・425号ピット全景(北東から)

- 2区479～481号ピット全景(南東から)
- P L. 80 2区北中央部ピット群(南から)  
2区南東部ピット群(北西から)  
2区南東部ピット群(北西から)  
2区南東部ピット群(北西から)  
2区1号溝全景(南から)  
2区2号溝全景(北東から)
- P L. 81 2区3号溝遺物出土状況(南から)  
2区4号溝全景(南西から)  
2区5号溝全景(東から)  
2区6号溝全景(北西から)  
2区7号溝全景(東から)
- P L. 82 2区8号溝遺物出土状況(北東から)  
2区8号溝遺物集中部(東から)  
2区9号溝全景(北東から)  
2区10号溝全景(北東から)
- P L. 83 2区10・12号溝全景(北西から)  
2区9・10・13号溝全景(北東から)  
2区11号溝全景(北東から)  
2区15～17号溝全景(北から)  
2区14号溝全景(北西から)
- P L. 84 3区空中写真(北西から)
- P L. 85 3区1号住居全景(北から)  
3区1号住居掘り方全景(北から)  
3区1号住居遺物出土状況(北から)  
3区1号住居遺物出土状況(東から)  
3区1号住居遺物出土状況(北から)
- P L. 86 3区2号住居全景(東から)  
3区2号住居掘り方全景(北西から)
- P L. 87 3区2号住居遺物出土状況(北から)  
3区2号住居2号ピット遺物出土状況(東から)  
3区2号住居遺物出土状況(北から)  
3区2号住居遺物出土状況(東から)  
3区2号住居遺物出土状況(東から)
- P L. 88 3区2号住居(9・10号溝)全景(東から)  
3区2号住居(13号溝)全景(北から)  
3区1～3号住居空中写真(北から)
- P L. 89 3区3号住居全景(北から)  
3区3号住居遺物出土状況(東から)
- P L. 90 3区3号住居遺物出土状況(北から)  
3区3号住居掘り方全景(北から)
- P L. 91 3区3号住居遺物出土状況(東から)  
3区3号住居遺物出土状況(西から)  
3区3号住居遺物出土状況(東から)  
3区3号住居遺物出土状況(東から)  
3区3号住居(5号溝b)遺物出土状況(北から)  
3区3号住居(5号溝b)遺物出土状況(北から)  
3区4号住居全景(南から)  
3区4号住居掘り方全景(南から)
- P L. 92 3区5号住居遺物出土状況(西から)  
3区5号住居掘り方全景(西から)  
3区1号竪穴状遺構全景(西から)  
3区2号竪穴状遺構全景(北から)
- P L. 93 3区1号屋敷全景(上空から)
- P L. 94 3区2号屋敷全景(上空から)  
3区2・3・15号掘立柱建物全景(南西から)
- P L. 95 3区1号掘立ピット1全景(東から)  
3区1号掘立ピット5・6全景(北から)  
3区1号掘立ピット7全景(南東から)  
3区1号掘立ピット8全景(南から)  
3区2・3号掘立ピット全景(南東から)  
3区2・3号掘立ピット全景(東から)  
3区2号掘立ピット4全景(北東から)  
3区2号掘立ピット5全景(北東から)  
3区2号掘立ピット6全景(西から)  
3区3号掘立ピット3全景(北西から)
- 3区3号掘立ピット4全景(南から)  
3区3号掘立ピット5全景(南から)  
3区15号掘立ピット1全景(南から)  
3区15号掘立ピット2全景(南東から)  
3区15号掘立ピット3・6全景(南から)  
P L. 96 3区15号掘立ピット5・7全景(北東から)  
3区15号掘立ピット4全景(南から)  
3区4～13号掘立柱建物全景(南から)  
3区4号掘立ピット3全景(南東から)  
3区4号掘立ピット6全景(南から)  
3区4・6・12号掘立ピット全景(南東から)  
P L. 97 3区4・9・11号掘立ピット全景(南から)  
3区5・9・11号掘立ピット全景(東から)  
3区8・9号掘立ピット全景(南西から)  
3区11号掘立ピット3全景(北東から)  
3区12号掘立ピット1全景(南西から)  
3区12号掘立ピット6全景(北東から)  
3区12号掘立ピット7全景(北から)  
3区13号掘立ピット2全景(北西から)  
3区13号掘立ピット4全景(北東から)  
3区14号掘立ピット1全景(北東から)  
3区14号掘立ピット2・3全景(北から)  
3区14号掘立ピット4全景(北東から)  
3区16号掘立ピット1全景(東から)  
3区16号掘立ピット4全景(南東から)
- P L. 98 3区2～5・9号柱穴列(南から)  
3区1号柱穴列ピット1全景(北から)  
3区1号柱穴列ピット4全景(北から)  
3区2・3・5号柱穴列ピット全景(西から)  
3区2・3号柱穴列ピット全景(南西から)  
3区2～4号柱穴列ピット全景(東から)  
3区3号柱穴列ピット1礫出土状況(東から)  
3区3・5号柱穴列ピット全景(北東から)  
3区3・5号柱穴列ピット全景(南から)  
3区3～5号柱穴列ピット全景(東から)
- P L. 99 3区4・5号柱穴列ピット全景(南東から)  
3区6号柱穴列ピット1全景(東から)  
3区6号柱穴列ピット2全景(東から)  
3区6号柱穴列ピット3全景(北西から)  
3区6号柱穴列ピット4全景(西から)  
3区7号柱穴列ピット2・3全景(西から)  
3区7号柱穴列ピット5全景(北東から)  
3区8号柱穴列ピット1全景(北東から)  
3区8号柱穴列ピット2全景(北から)  
3区8号柱穴列ピット5全景(南から)  
3区9号柱穴列ピット1全景(北西から)  
3区9号柱穴列ピット2全景(南西から)  
3区9号柱穴列ピット3全景(南東から)  
3区9号柱穴列ピット5・6全景(北西から)
- P L. 100 3区1号土坑全景(東から)  
3区2号土坑全景(東から)  
3区3号土坑全景(北から)  
3区4号土坑全景(南から)  
3区5号土坑全景(西から)  
3区6号土坑全景(西から)  
3区7号土坑全景(東から)  
3区8号土坑全景(東から)
- P L. 101 3区9号土坑全景(南から)  
3区10号土坑全景(南から)  
3区12号土坑全景(北から)  
3区13号土坑全景(北から)  
3区15号土坑全景(東から)  
3区17号土坑全景(東から)  
3区21号土坑全景(西から)  
3区22号土坑全景(西から)
- P L. 102 3区23号土坑全景(西から)

- 3区24号土坑全景(東から)  
 3区11・14・18～20・25～27号土坑全景(東から)  
 3区28号土坑全景(北から)  
 3区29号土坑全景(東から)  
 3区30号土坑全景(南から)  
 3区31号土坑全景(東から)  
 3区32号土坑全景(南から)
- P L. 103 3区33号土坑全景(北から)  
 3区34号土坑全景(北から)  
 3区35・38号土坑全景(南から)  
 3区36号土坑全景(南東から)  
 3区37号土坑全景(北東から)  
 3区39号土坑全景(東から)  
 3区40号土坑全景(南から)  
 3区41号土坑全景(北から)
- P L. 104 3区42号土坑全景(南から)  
 3区43号土坑全景(北から)  
 3区44号土坑全景(北から)  
 3区45号土坑全景(西から)  
 3区46号土坑全景(北から)  
 3区47号土坑全景(東から)  
 3区48号土坑全景(東から)  
 3区49号土坑全景(北東から)
- P L. 105 3区48・50・51・55・57号土坑全景(北から)  
 3区52・54・56号土坑全景(南から)  
 3区59号土坑全景(北から)  
 3区60号土坑全景(南から)  
 3区61号土坑全景(北から)  
 3区63号土坑全景(北西から)  
 3区64・67号土坑全景(北東から)  
 3区65号土坑全景(南東から)
- P L. 106 3区66号土坑全景(北から)  
 3区69号土坑全景(北から)  
 3区71号土坑全景(東から)  
 3区74号土坑全景(北東から)  
 3区75号土坑全景(南東から)  
 3区76号土坑全景(西から)  
 3区73・77号土坑全景(南から)  
 3区78号土坑全景(南から)  
 3区82号土坑鉄滓類出土状況(東から)
- P L. 107 3区79号土坑全景(南から)  
 3区80号土坑全景(南から)  
 3区1号井戸全景(南から)  
 3区2号井戸全景(南東から)  
 3区3号井戸全景(北から)  
 3区4号井戸全景(北から)  
 3区5号井戸全景(北から)  
 3区6号井戸全景(南から)
- P L. 108 3区2号ピット全景(南から)  
 3区3・4・7～9・22・23・25号ピット全景(北東から)  
 3区5・10・48・49号ピット全景(東から)  
 3区5・10・14・20・21号ピット全景(北東から)  
 3区11・12号ピット全景(南西から)  
 3区13号ピット全景(西から)  
 3区15～17号ピット全景(北から)  
 3区18・19号ピット全景(東から)  
 3区24号ピット全景(北から)  
 3区34号ピット全景(北から)  
 3区35・41号ピット全景(東から)  
 3区37号ピット全景(南から)  
 3区37・70～73・75号ピット全景(南東から)  
 3区38・39・47号ピット全景(南東から)  
 3区50・51号ピット全景(東から)
- P L. 109 3区52号ピット全景(南から)  
 3区54・55・63・64・131号ピット全景(北西から)  
 3区57～62号ピット全景(北東から)
- 3区65号ピット全景(東から)  
 3区66・67号ピット全景(北西から)  
 3区68号ピット全景(南から)  
 3区69号ピット全景(南から)  
 3区75・128・129号ピット全景(南から)  
 3区76・77号ピット全景(東から)  
 3区80・81号ピット全景(北東から)  
 3区82・85・86号ピット全景(南西から)  
 3区95号ピット全景(北から)  
 3区109・110・470号ピット全景(南西から)  
 3区117・280号ピット全景(西から)  
 3区118号ピット全景(北西から)
- P L. 110 3区120号ピット全景(東から)  
 3区121・122・277号ピット全景(南西から)  
 3区123号ピット全景(北から)  
 3区124号ピット全景(南から)  
 3区132・343号ピット全景(南西から)  
 3区133・134号ピット全景(北西から)  
 3区135・136号ピット全景(北東から)  
 3区137号ピット全景(北東から)  
 3区138号ピット全景(北から)  
 3区140号ピット全景(東から)  
 3区141号ピット全景(北から)  
 3区142号ピット全景(東から)  
 3区143号ピット全景(東から)  
 3区144号ピット全景(北から)  
 3区155号ピット全景(南東から)
- P L. 111 3区155・376号ピット全景(南東から)  
 3区156号ピット全景(北西から)  
 3区157・159号ピット全景(南西から)  
 3区158・160号ピット全景(北から)  
 3区161号ピット全景(南から)  
 3区162号ピット全景(南から)  
 3区163号ピット全景(北東から)  
 3区164号ピット全景(北から)  
 3区165号ピット全景(北東から)  
 3区166号ピット全景(東から)  
 3区167号ピット全景(東から)  
 3区174・190・191号ピット全景(南東から)  
 3区176号ピット全景(北東から)  
 3区176・381号ピット全景(西から)  
 3区177号ピット全景(南西から)
- P L. 112 3区178号ピット全景(南から)  
 3区189・390号ピット全景(西から)  
 3区204・205号ピット全景(東から)  
 3区211・223号ピット全景(北西から)  
 3区212・231・232号ピット全景(北西から)  
 3区214号ピット全景(南西から)  
 3区217・218号ピット全景(東から)  
 3区237号ピット全景(北から)  
 3区241号ピット遺物出土状況(東から)  
 3区246・247号ピット全景(南西から)  
 3区248号ピット全景(南東から)  
 3区249・269号ピット全景(北西から)  
 3区268号ピット全景(北西から)  
 3区270号ピット全景(西から)  
 3区314号ピット全景(南東から)
- P L. 113 3区325号ピット全景(北から)  
 3区332・333号ピット全景(南西から)  
 3区360号ピット全景(南から)  
 3区365号ピット全景(北西から)  
 3区370号ピット全景(西から)  
 3区371号ピット全景(北東から)  
 3区373・374号ピット全景(北西から)  
 3区382号ピット全景(東から)  
 3区405～407号ピット全景(北東から)

- 3区408～413号ピット全景(南西から)  
 3区410号ピット石出土状況(南から)  
 3区420号ピット全景(西から)  
 P L. 114 3区421号ピット全景(北から)  
 3区422号ピット全景(南から)  
 3区430号ピット全景(北西から)  
 3区431～433号ピット全景(南西から)  
 3区434号ピット全景(北西から)  
 3区435号ピット全景(北西から)  
 3区436号ピット遺物出土状況(南から)  
 3区440号ピット全景(北から)  
 3区442号ピット全景(南西から)  
 3区453・454号ピット全景(北東から)  
 3区455号ピット全景(北東から)  
 3区459号ピット全景(北東から)  
 3区463号ピット全景(南西から)  
 P L. 115 3区6～8号溝全景(南西から)  
 3区12号溝礫出土状況(南西から)  
 3区11号溝全景(北西から)  
 P L. 116 3区14号溝全景(北東から)  
 3区16号溝石集中部分(南東から)  
 3区16号溝全景(南西から)  
 3区17号溝全景(南から)  
 3区18号溝全景(北から)  
 P L. 117 3区19号溝遺物出土状況(西から)  
 3区20号溝全景(北東から)  
 3区21号溝全景(北東から)  
 3区22号溝全景(北東から)  
 3区22号溝全景(南西から)  
 P L. 118 3区23号溝遺物出土状況(東から)  
 3区24号溝全景(北西から)  
 3区26号溝全景(南から)  
 P L. 119 3区27号溝全景(南西から)  
 3区28号溝遺物出土状況(南東から)  
 3区28号溝全景(南東から)  
 3区31号溝全景(北から)  
 3区32・33号溝全景(東から)  
 P L. 120 1区1・2号住居出土遺物  
 P L. 121 1区2・3号住居出土遺物  
 P L. 122 1区4～6号住居出土遺物  
 P L. 123 1区6号住居出土遺物  
 P L. 124 1区7号住居出土遺物  
 P L. 125 1区8・14・9・10号住居出土遺物  
 P L. 126 1区11号住居出土遺物  
 P L. 127 1区12・13号住居出土遺物  
 P L. 128 1区185・197号土坑、1・2号落ち込み状遺構出土遺物  
 P L. 129 1区2号落ち込み状遺構、9号井戸、12・85・84号溝出土遺物  
 P L. 130 1区84号溝出土遺物  
 P L. 131 1区86号溝、212号土坑、4・8号井戸出土遺物  
 P L. 132 1区58・230号ピット、23・25号溝出土遺物  
 P L. 133 1区26・27・63・69・70・91号溝、2号竪穴状遺構出土遺物  
 P L. 134 1区7・8・39・52・65・71号土坑、6号集石遺構、2・6・11号溝出土遺物  
 P L. 135 1区11・81号溝、1号掘立柱建物、31・75・98・116～118・207号土坑出土遺物  
 P L. 136 1区1・2号井戸、1・2号墓出土遺物  
 P L. 137 1区2～4号墓出土遺物  
 P L. 138 1区4号墓、68・69号土坑、5号墓出土遺物  
 P L. 139 1区5～7号墓出土遺物  
 P L. 140 1区9号墓、46号土坑、10号墓出土遺物  
 P L. 141 1区10号墓、204号土坑、1・2号火葬跡、1・4号集石遺構出土遺物  
 P L. 142 1区5号集石遺構、102号ピット、1号溝出土遺物  
 P L. 143 1区1・10・13・20・22号溝出土遺物  
 P L. 144 1区31・43・45・94・59号溝出土遺物  
 P L. 145 1区48・51・52・58号溝、1号道路出土遺物  
 P L. 146 1区1号道路、35号溝、6号ピット、遺構外出土遺物  
 P L. 147 1区遺構外出土遺物  
 P L. 148 1区遺構外出土遺物  
 P L. 149 2区13・17号掘立柱建物、45・46号土坑、3・4・6号井戸出土遺物  
 P L. 150 2区6・2・8・10・12号溝出土遺物  
 P L. 151 2区13・14号溝、遺構外出土遺物  
 P L. 152 3区1号住居出土遺物  
 P L. 153 3区1号住居出土遺物  
 P L. 154 3区1・2号住居出土遺物  
 P L. 155 3区2号住居出土遺物  
 P L. 156 3区11号溝、3号住居出土遺物  
 P L. 157 3区3号住居出土遺物  
 P L. 158 3区3号住居出土遺物  
 P L. 159 3区3号住居、5号溝b出土遺物  
 P L. 160 3区5号溝b、34号土坑、1号井戸出土遺物  
 P L. 161 3区4・5号住居、5号井戸、261・200・418号ピット、7・12・18・19・28号溝、76号土坑出土遺物  
 P L. 162 3区23号溝・15号土坑、34号ピット、2号集石遺構、遺構外出土遺物

## 第1章 発掘調査に至る経緯

綿貫原北遺跡は高崎市綿貫町地内に所在する。高崎駅の東南約5.4km、関越自動車道高崎インターチェンジ出口から南南東約3.8kmの位置にある。当遺跡は国道354号高崎玉村バイパス道路改築事業に伴って、平成19年度と20年度にわたって発掘調査された。

国道354号高崎玉村バイパスは、高崎駅と県東部の諸都市を結ぶ東毛広域幹線道路(高崎市一邑楽郡板倉町まで総延長58.6km)の一部を形成する全長5.3kmのバイパスである。起点は高崎市綿貫町の国道354号(綿貫町北交差点)から終点は佐波郡玉村町大字福島(群馬県道40号藤岡大胡線(バイパス)までの区間である(第1図)。起点から佐波郡玉村町与六分までは平成23年6月12日に開通し、玉村町与六分(玉村町道を介して群馬県道24号高崎伊勢崎線と接続する)から終点まではそれ以前に開通している。また関越自動車道との交差点ではスマートインターチェンジが建設中であり、平成25年度の完成を目指している。

この高崎玉村バイパスの整備は、平成5年度から着手されている。玉村町内の計画路線内における埋蔵文化財発掘調査は、県教育委員会、県土木部、中部県民局伊勢

崎土木事務所による協議を経て、平成8年度から当事業団への委託が開始された。

高崎工区は西部県民局高崎土木事務所の所管事業で、前橋長湊線から玉村町境まで、井野川右岸の高崎市綿貫町と同左岸の高崎市下滝町・下斎田町の約2kmの区間である。平成16年度と19年度の県教育委員会の試掘調査によって、当該地区には古墳時代から平安時代を主とする集落跡が濃密に存在することが明らかになっていた。

### 平成19年度

高崎市綿貫町原北地内の調査については、平成19年11月16日付で高崎土木事務所から県教育委員会文化課に発掘調査の依頼が出された。これをうけて、平成19年11月20日付で県教育委員会から財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に発掘調査の依頼があった。平成19年11月30日には高崎土木事務所と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の間に発掘調査の受委託契約が締結された。

発掘調査の調査期間は平成20年1月4日から3月31日までの契約で、「綿貫原北遺跡」1区が調査された。調査の進展に伴い平成20年2月29日付で一部変更契約が締結



第1図 国道354号高崎玉村バイパス路線図(1:60,000)

## 第1章 発掘調査に至る経緯

された。3月からは来年度事務所用地の確保のために「綿貫伊勢遺跡」2区の東端部も調査を行っている。あわせて表面積2,268m<sup>2</sup>（延べ4,854m<sup>2</sup>）が調査された。

### 平成20年度

平成20年3月25日付で県教育委員会から、3月26日付で高崎土木事務所から「平成19年度国道354号高崎玉村バイパス道路改築事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査(分割2号)」の依頼があった。平成19年度繰越予算により発掘調査を実施するもので、調査は平成20年4月のみの1ヶ月間である。平成20年3月31日付で高崎土木事務所と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の間に発掘調査の受委託契約が締結された。4月8日には調査期間を5月31日までとする変更委託契約が締結された。原北遺跡1区468m<sup>2</sup>、伊勢遺跡2区200m<sup>2</sup>の668m<sup>2</sup>が調査された。さらに平成20年5月7日付で県教育委員会から、5月9日付で高崎土木事務所から「平成20年度国道354号高崎玉村バイパス道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査」の依頼があった。そして平成20年5月15日付で高崎土木事務所と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の間に発掘調査の受委託契約が締結された。調査期間は平成20年5月16日～平成21年1月31日である。「綿貫原北遺跡1区～3区、綿貫牛道遺跡1・2区、綿貫伊勢遺跡1区～3区」の3遺跡の発掘調査が実施されることになった。この間、6月18日から7月4日まで下澁地区・綿貫地区をあわせて、県教育委員会文化財保護課による試掘調査が行われた。

平成20年9月10日には「平成20年度国道354号高崎玉村バイパス道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査(分割2号)」と「平成20年度国道354号高崎玉村バイパス地域自立活性化交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査」の受委託契約が高崎土木事務所と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の間に締結された。前者の調査対象地は高崎市下澁町(下澁高井前遺跡)、下澁田町(下澁田重土薬師遺跡)、綿貫地内であり、調査期間は平成20年10月1日～平成21年1月31日である。後者は高崎市下澁町(下澁高井前遺跡)、下澁田町地内(下澁田重土薬師遺跡)で、調査期間は平成21年2月1日～3月31日である。その後、5月15日付と9月10日付(分割2号)で高崎土木事務所と受委託契約を交わした事業について、いずれも調査期間

を2ヶ月延長して平成21年3月31日までとする変更契約が締結された。

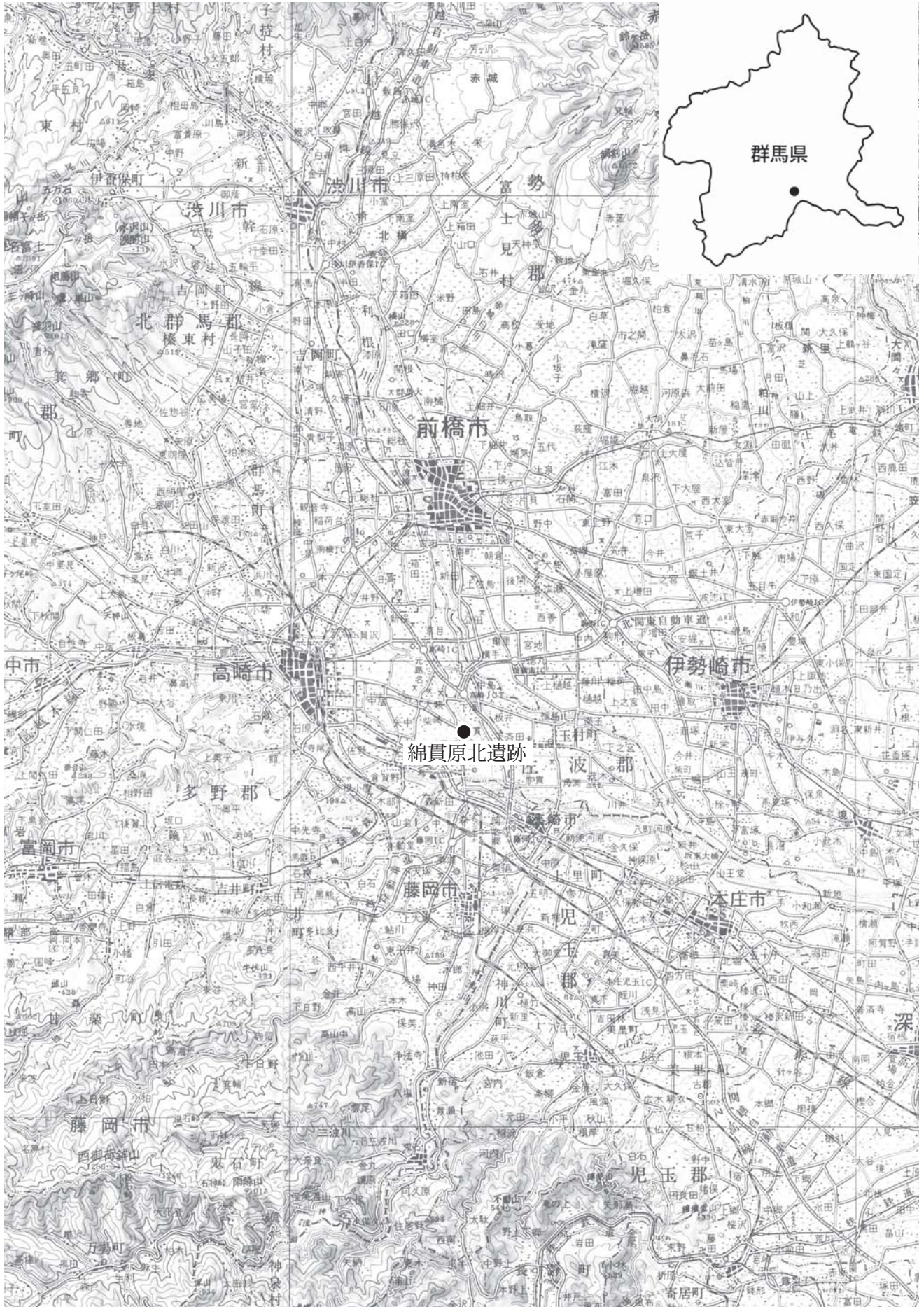
綿貫地区においては、原北遺跡5,624m<sup>2</sup>、牛道遺跡6,427m<sup>2</sup>、伊勢遺跡5,735m<sup>2</sup>の総計17,786m<sup>2</sup>が調査されている。

### 平成21年度

「平成21年度国道354号高崎玉村バイパス地域活力基盤創造事業に伴う埋蔵文化財発掘調査」が、調査期間平成21年12月1日～同年12月31日まで「綿貫原北遺跡」1区607m<sup>2</sup>で実施された。

このように、平成19年度に綿貫原北遺跡と綿貫伊勢遺跡の調査を開始、平成20年度は綿貫原北遺跡、綿貫牛道遺跡、綿貫伊勢遺跡、そして井野川左岸の下澁高井前遺跡、下澁田重土薬師遺跡の調査、平成21年度も引き続いて綿貫牛道遺跡、綿貫伊勢遺跡、綿貫原北遺跡の調査と下澁高井前遺跡、下澁田重土薬師遺跡がそれぞれ実施された。

本報告の綿貫原北遺跡は、字境によって東に隣接する綿貫牛道遺跡と接している。調査区は北西から南東に約135～170m、幅約65～70m、面積8,807m<sup>2</sup>である。



第2図 遺跡位置図(国土地理院地勢図1:200,000「宇都宮」(平成18年4月1日発行)「長野」(平成10年2月1日発行)使用)



## 第2章 調査の方法と経過

### 第1節 発掘調査の方法

#### 1 グリッドの設定

国道354号高崎玉村バイパスに伴う埋蔵文化財の発掘調査においては、平成8年度の調査開始以来採用しているグリッドの設定方法を当遺跡でも踏襲している。

グリッドの設定は国家座標にもとづき玉村町全域および高崎市内の該当地域を網羅するように、南東隅の座標  $X=30,000 \cdot Y=-60,000$  を起点とする10km四方の区画を設定し、これを「地区」と呼称した。

次にこの「地区」を1km四方に分割して、南東隅から北方向に1～100の番号を付け「区」（大グリッド）とした。さらに、この「区」を100m四方に分割し、同様に1～100の番号を付け「中グリッド」とした。綿貫原北遺跡は「7区」「17区」「18区」「27区」「28区」（中グリッド）に該当している（第4図）。

この「中グリッド」を、さらに5m四方に分割して「小グリッド」を設定した。一つのグリッドの大きさは5m×5mとなる。「小グリッド」には南東隅を起点として、西方向にアラビア数字を「1～20」、北方向にアルファベット「A～T」を付した。発掘調査の実施にあたっては、この「小グリッド」を基本としている。

本報告書で記載するグリッドは、地区・区の表記は省略して基本的に「中グリッド」と「小グリッド」を組み合わせて表記する。たとえば3区1号住居の場合は2つのグリッドにまたがるため、その記載方法は「27M-4・5」となる。

#### 2 調査区の設定

発掘調査にあたっては、基準とする区画やグリッドとは別に、任意の調査区に区分している。

綿貫原北遺跡は、字境によって東に隣接する綿貫牛道遺跡、また西には綿貫小林前遺跡が接している。調査区は北西から南東に約135～170m、幅約65～70mある。このために遺跡中央を東西に走る高崎市道を境界として

北側を1区と2区、南側を3区として調査区を設定した（第3・4図）。1区の調査対象面積は3,183m<sup>2</sup>、2区の調査対象面積は2,486m<sup>2</sup>、3区の調査対象面積は3,138m<sup>2</sup>の総計8,807m<sup>2</sup>である。

#### 3 遺構の調査

表土については重機によって掘削した。その後、人力による遺構確認作業を行い、遺構平面の確認後、埋没土層の確認用ベルトを任意に設定して移植ゴテなどで掘り下げた。遺構の掘削も人力によった。

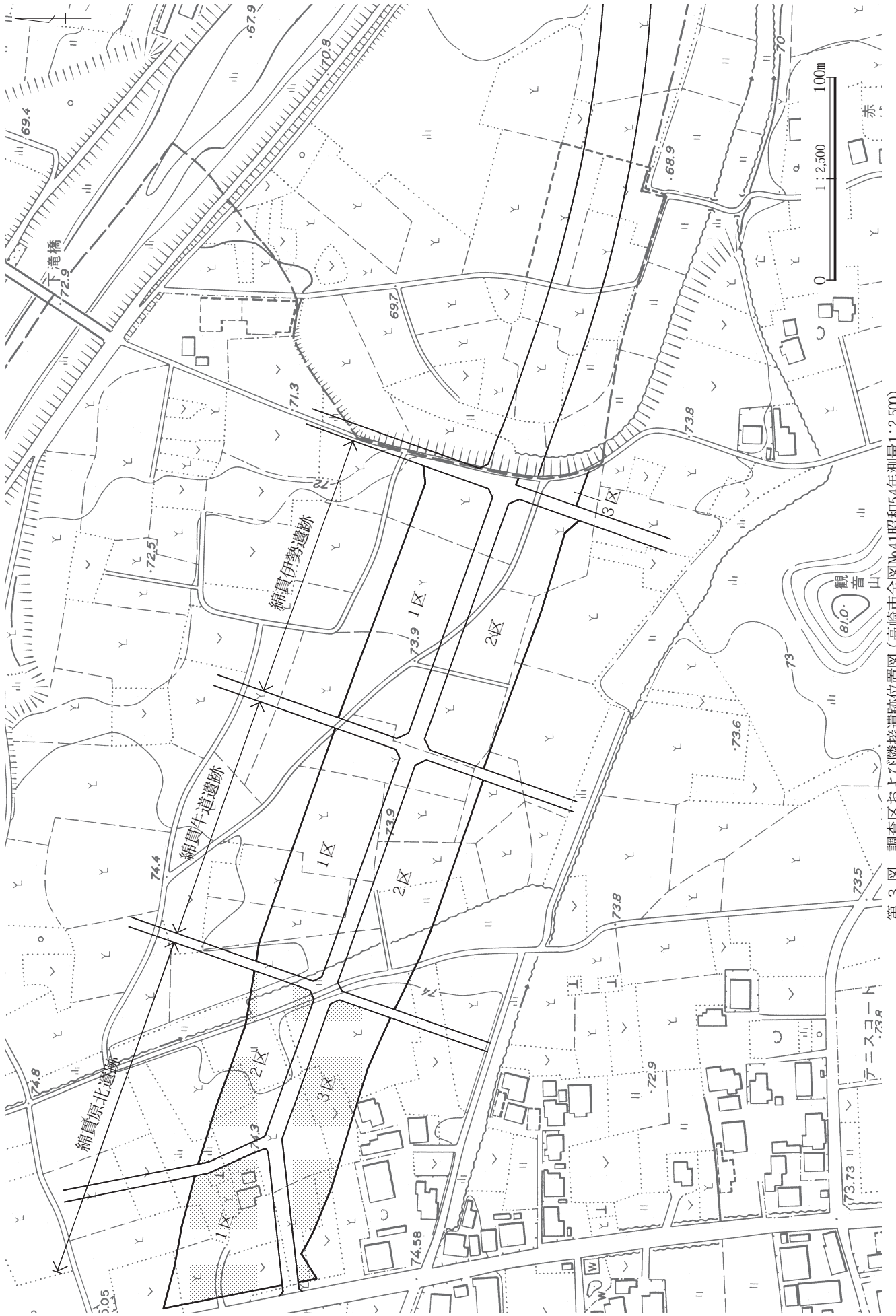
遺構番号は調査年や調査担当者の変更があることから、遺跡全体の通し番号ではなくて、調査区ごとに1から通し番号を付けた。

遺構測量は、平面図については電子平板によるデジタル測量を、断面図については手実測で行っている。住居・掘立柱建物、土坑などの平面図は1:20を基本とし、溝や畠については1:40とし、土層断面図は1:20で作成した。

遺構写真の撮影には、6×7cm判モノクロフィルムを使用、カラー写真はデジタルカメラを使用してハードディスク及びDVDによるデータの記録保存をはかった。調査区の全景写真については、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。

### 第2節 調査の経過

綿貫原北遺跡1区～3区の調査については、綿貫牛道遺跡・綿貫伊勢遺跡の調査と併行しながら実施している。1区の調査は2名の担当で平成20（2008）年1月4日から3月31日（この間、3月から3名）、引き続いて4月から2名で1区から3区の調査を担当して、9月12日まで実施した。その後、綿貫牛道遺跡の調査を継続している。なお、1区の残地については平成21（2009）年12月1日から1名で実施、同年12月25日をもって綿貫原北遺跡1区の調査を全て終了した。

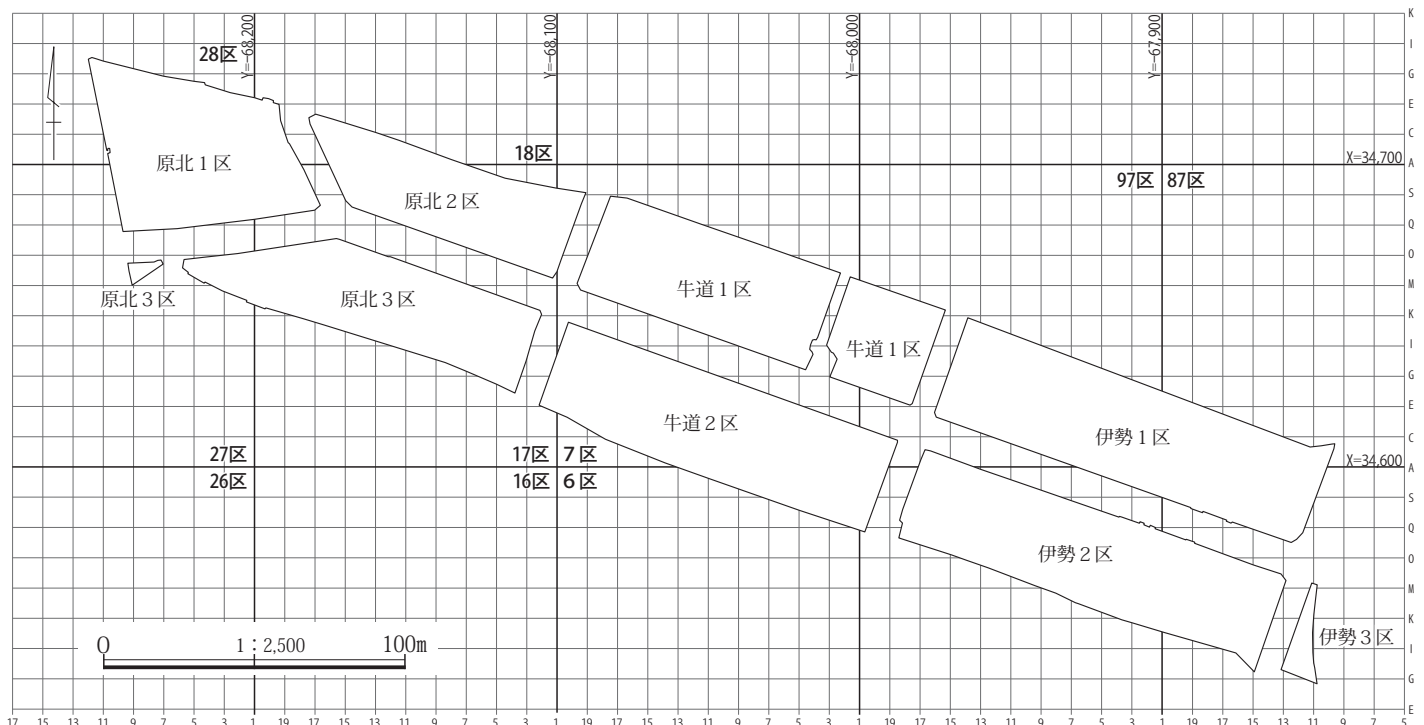


第3図 調査区および隣接遺跡位置図（高崎市全区No41昭和54年測量1:2,500）

平成20(2008)年

- 1月4日 現場視察。
- 7日 綿貫現場周辺への挨拶まわり。
- 8日 プレハブ設置。高崎土木事務所と打合せ。
- 9日 重機による1区の表土掘削を開始する。
- 10日 表土掘削と併行して遺構確認作業に入る。
- 11日 土坑・集石・溝の掘削と図面の作成、写真撮影を行う。
- 16日 1区の表土掘削を終了、住居などを検出する。
- 25日 1～13号土坑、1～12号ピット、5～9号溝の調査を継続する。
- 28日 4号住居、14～24号土坑、13～24号ピット、6・11・12号溝の調査を行う。
- 30日 4・5号住居と6号溝の遺物取り上げ、土坑・ピット・集石の調査を継続する。
- 2月1日 土坑・溝・集石の調査を継続する。
- 6日 土坑・ピット・溝、墓と火葬跡の図面作成と写真撮影を行う。火葬跡から骨の取り上げを実施。
- 14日 6号住居遺物写真撮影、土坑・井戸・溝の調査を継続。5号墓は鍋被り葬、1～3号墓は子どもの埋葬との鑑定をうける。
- 19日 墓・火葬跡、43・17・48号溝の遺物取り上げを行う。

- 26日 土坑・井戸・ピット・溝の全景写真撮影と7号墓の遺物取り上げを行う。
- 28日 空撮を実施する。43・50号溝の全景写真を撮影。
- 3月3日 4・5号住居のカマド調査を行う。
- 6日 4・5号住居の写真撮影、25号溝と4号井戸の全掘、墓と溝の遺物出土状況の写真を撮影する。
- 11日 1～3号住居の調査、4号住居の掘り方全景写真、土坑と溝の掘削を行う。伊勢遺跡2区の表土掘削を開始する(以後、伊勢遺跡の記述は除外する)。
- 13日 1～3号住居の図面作成、8～10号住居、2・6・25～27号溝の調査を行う。
- 21日 1区1～3号住居の遺物取り上げ、土坑と溝の調査を継続する。
- 24日 1区住居・溝の調査継続をする。
- 25日 1区空撮を実施する。2・9号住居のカマド写真撮影を行う。
- 27日 1区1～3号住居の調査、9・10号住居掘り方全景写真、中世屋敷2号溝を高所作業車による撮影を実施する。
- 28日 1区1～3号住居の掘り方全景写真の撮影。本日をもって平成19年度調査を終了する。



第4図 グリッド設定図

※ ※ ※

平成20年度

- 4月14日 1区の継続調査から実施する。  
 15日 1区6・7・11～13号住居の調査、84号溝の調査を行う。  
 21日 県教委文化財保護課2名来跡。今後の調査、綿貫工業団地と下斎田地区の試掘について協議する。  
 22日 7・11・12号住居の調査継続、新たに住居を確認する。  
 25日 6・7・11～13号住居の掘り方調査を行う。  
 30日 引き続き住居の掘り方調査と遺物取り上げを実施する。  
 5月7日 高崎市教委7名来跡する。  
 9日 6・84・85～88号溝の遺物取り上げを行う。  
 12日 1区調査区の片付け、2区の表土掘削を開始する。  
 13日 1区の埋め戻し作業を行う。  
 15日 1区の埋め戻し作業継続、高崎市立高南中学校の職場体験打合せ。

- 19日 高崎市立並榎中学校生徒の職場体験。  
 21日 2区の表土掘削と遺構確認作業を行う。  
 22日 2区の表土掘削と遺構確認作業の継続。  
 23日 本日で並榎中学校生徒の職場体験が終了する。  
 26日 2区表土掘削と遺構確認作業の継続。本日から高南中学校生徒の職場体験が始まる。  
 27日 2区の表土掘削終了。  
 30日 本日で高南中学校生徒の職場体験が終了する。  
 6月4日 2区の土坑・ピット・溝の調査を実施する。  
 6日 2区の土坑・ピット・溝の調査を継続する。  
 10日 高崎市立新町中学校の職場体験打合せ。  
 16日 2区土坑・ピットの全景写真を撮影する。  
 18日 県教委文化財保護課、綿貫工業団地内で試掘調査を実施する。  
 20日 2区の空撮を準備する。9～13号溝、5号井戸の調査を行う。  
 23日 本日から新町中学校生徒7名による職場体験が始まる。  
 27日 本日で新町中学校生徒の職場体験が終了する。



井戸の調査



住居の調査



溝の調査



ピットの調査

## 第2章 調査の方法と経過

- 7月1日 3区の表土掘削を開始する。下斎田地区の試掘調査。
- 8日 3区の表土掘削の継続と遺構確認を実施する。
- 10日 3区1～3号住居を検出する。
- 11日 3区1号住居の遺物取り上げ、2・3号住居の掘り下げを行う。国交省職員の現場視察。
- 16日 3区3号住居の外周に溝が巡ること判明する。
- 17日 3区1・2号住居遺物取り上げ、3号住居の溝を調査する。
- 18日 3区2・3号住居の全景、土坑群の全景写真撮影を行う。
- 22日 3区4・5号住居の調査を行う。
- 23日 3区1・2号住居の掘り方調査、3号住居の遺物取り上げを行う。
- 24日 3区1・2号住居の掘り方調査継続、3号住居の遺物取り上げ、5号住居の全景写真を撮影する。
- 29日 3区3号住居の掘り方調査継続、土坑・ピット・溝の調査。
- 30日 3区3号住居の掘り方全景写真撮影を実施する。
- 8月1日 3区土坑・ピットの調査を継続する。
- 18日 3区土坑・井戸・ピットの調査継続。
- 19日 3区6～8・12号溝の全景写真撮影を実施する。
- 9月2日 3区の空撮を実施する。
- 4日 2区未調査箇所を調査を開始する。
- 5日 2区14号溝の調査を行う。
- 11日 3区の埋め戻し作業が終了する。
- 12日 2区の埋め戻し作業が終了する。引き続き牛道1区の調査を行う。

※ ※ ※

### 平成21(2009)年

- 12月1日 1区未調査箇所の重機による表土掘削を開始する。
- 3日 1区表土掘削の継続と溝の調査を行う。
- 8日 1区52・91・92号溝の調査を行う。
- 9日 1区52・91・92・94号溝の調査、竪穴状遺構・土坑・溝の調査を行う。

- 10日 1区4号竪穴状遺構、8・9号井戸の調査。91号溝の遺物取り上げ作業を行う。
- 14日 1区4号竪穴状遺構、9号井戸、202・205号土坑、52・94～101号溝の調査を行う。
- 15日 1区215号土坑の遺物取り上げ、102・103・105・106号溝の調査を行う。
- 16日 1区208～210号土坑、68号溝の調査を行う。9号井戸の遺物取り上げを実施する。
- 18日 1区4号竪穴状遺構の遺物取り上げ、91・101号溝、205～244号ピットの調査を行う。
- 21日 1区8号井戸の調査と遺物取り上げ、212～214号土坑、245～263号ピットの調査を行う。
- 24日 1区9号井戸の全景写真を撮影する。
- 25日 本日をもって1区調査を全て終了する。

## 第3節 整理作業の方法

報告書作成のための整理作業は、平成22(2010)年4月1日から平成25(2013)年3月31日まで、綿貫牛道遺跡・綿貫伊勢遺跡とともに実施した。

出土遺物については調査終了時まで、洗浄され遺跡略号、調査区、調査面、遺構名・グリッド名、遺物No.が注記されている。

整理作業においては、遺物を種別・器種別に分類した。そして縄文土器、土師器・須恵器、陶磁器、石器・石製品等のそれぞれについて、接合・復元・写真撮影・実測・トレース作業を実施した。遺物の実測は手作業で実施したが、その一部については長焦点デジタルカメラと三次元計測システムで測定して素図を作成、最終確認は手作業で行い図化した。これらのトレースも手作業で行い、作成したものをスキャニングしてデジタルデータ化して報告書掲載図とした。古銭、金属製品については当事業団保存処理室で錆落としの作業を実施後、実測等を行った。

遺構図については平面図と断面図の照合・修正とレイアウト作業を行い、デジタルトレースを行い報告書掲載図とした。

遺構写真については報告書に掲載する写真の選定とレイアウトを行い、調査時に撮影したネガフィルムのスキャニングと版下作成作業を実施した。遺物写真撮影は

当事業団写真室でデジタルカメラを用いて行い、レイアウトをもとに加工・編集し、図版作成を実施した。

併行して本文・表・土層注記等の原稿執筆を行った。報告書の出稿にあたっては原稿、挿図、写真のいずれもデジタルデータ化を行った。

その後、校正作業を経て、平成25（2013）年2月に『綿貫原北遺跡』として発掘調査報告書（本報告）の刊行を行った。

報告書に掲載資料については、管理台帳作成後、収納作業を行ったが、掲載されなかった遺物については出土地区・遺構ごとに分類して収納した。

## 第3章 遺跡の立地と周辺の遺跡

### 第1節 遺跡の立地

綿貫原北遺跡の所在する高崎市は関東平野の北西縁にあり、平成の大合併によって市域西端は長野県北佐久郡軽井沢町、東端は埼玉県児玉郡上里町に接している。市街地から赤城山・榛名山・妙義山の上毛三山を望むことができる、群馬県西部のいわゆる西毛地区に位置している。市内には、利根川・烏川・碓氷川など、大きな一級河川が流れ、遺跡地のすぐ東側を井野川が南東流して烏川に合流している（第2・5図）。

高崎市域（平成の大合併前）の地形は、市域西部にひろがる高さがほぼそろい浸食が進んで急傾斜の斜面とやせ尾根の連なる岩野谷（観音山）丘陵、榛名山南面の裾野にひろがる相馬ヶ原扇状地と丘陵縁辺部の扇状地、東縁を広瀬川そして西縁を烏川までの連続した比較的平坦な高崎・前橋台地、段丘と谷底平野からなる井野川低地帯、烏川・碓氷川流域の氾濫原に区分される。

以下、『新編 高崎市史 通史編1 原始古代』（平成15（2003）年）と群馬県『土地分類基本調査 高崎』（平成4（1993）年）の内容を参考として記述する。

前橋台地の中央付近を流れる井野川流域には、井野川低地帯がひろがっている。この低地帯を境にして、前橋台地の西域を特に高崎台地と呼ぶ場合もある。高崎・前橋台地は、およそ2.1万年前、浅間山の噴火に伴う大規模な山体崩落によって流れ下った前橋泥流と呼ばれる堆積物によってその土台が形成されている。

高崎市域で前橋台地に属する地域は、市域の東縁にあたる八幡原町から新保田中町に至る地域、すなわち、井

野川の流域にひろがる低地帯の東側から利根川の流路までの地域である。台地の土台を形成する前橋泥流の上位にはローム層や小河川・湿地の堆積物が重なっている（第6図）。

一方、高崎台地では前橋泥流の上に高崎泥流が堆積している。この泥流の下に浅間板鼻黄色軽石（As-YP）が認められることから、およそ1.1万年前の堆積と考えられている。その発生原因は榛名山南西麓から秋間丘陵付近で起きた大きな地震が関係している可能性が指摘されている。台地の上は比較的平坦で洪水などの災害に遭いづらいことから、古墳時代にはすでに水田の開発が行われている。

高崎台地と前橋台地を区切る井野川低地帯は、両台地より一段低く幅600～700mで帯状に分布する。段丘崖は、岩鼻～栗崎付近で比高10m前後、柴崎付近で5～3mと北西へ比高を減少し、南大類付近で不鮮明になる。この低地帯は前橋泥流堆積後の比較的早い時期に、昔の「利根川」によって形成された地形である。この旧利根川の流路に、およそ1.7万年前の「陣場岩なだれ」による堆積物が流れ込み、榛名山の裾野からやや遠い井野川下流域を除いてその姿を消してしまった。その後、埋め立てを免れた現在の井野川低地帯の中は、砂層やシルト層を堆積させる小河川と湿地が広くひろがる環境がつくられた。そして1.1万年前に、高崎泥流がこの低地帯にも流れ込み、埋め立てが進んだのである。この低地帯の地形をさらに詳細にみると、何段かの段丘面に区分することができる。これらの段丘のうち、当遺跡や綿貫観音山古墳がのる段丘は、最も高位にあり広く連続している。この井野川の高位段丘には、高崎台地の面と同じく高崎泥

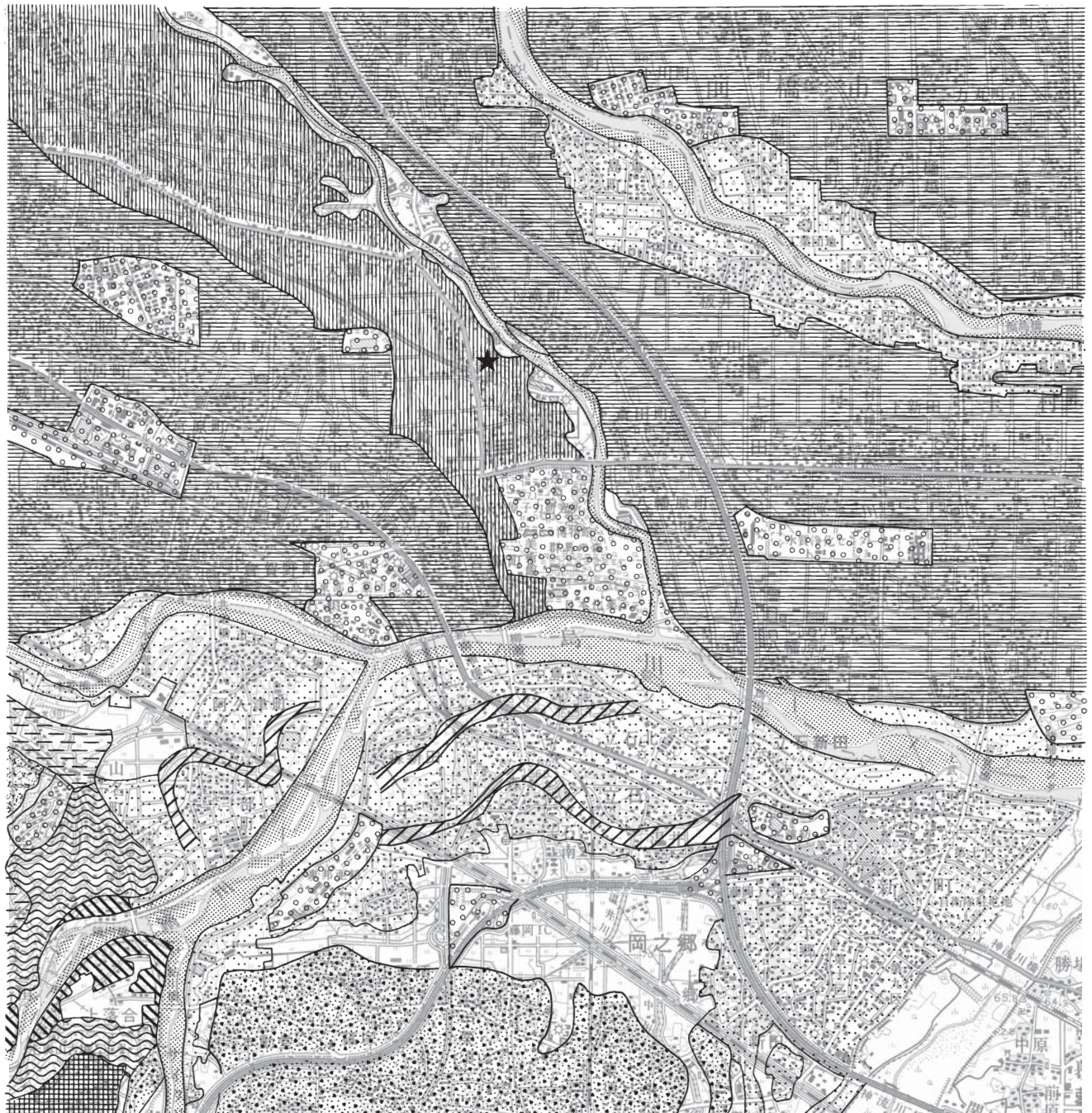
















第5図 明治時代前半の周辺地形図(第一軍管地方迅速測図『倉賀野駅』(明治18年測量)を使用)

流が堆積している(第7図)。

当遺跡は井野川低地帯の標高約74mに立地している。  
第6図の分類に従うと前橋高崎台地Ⅱ面に該当する。調

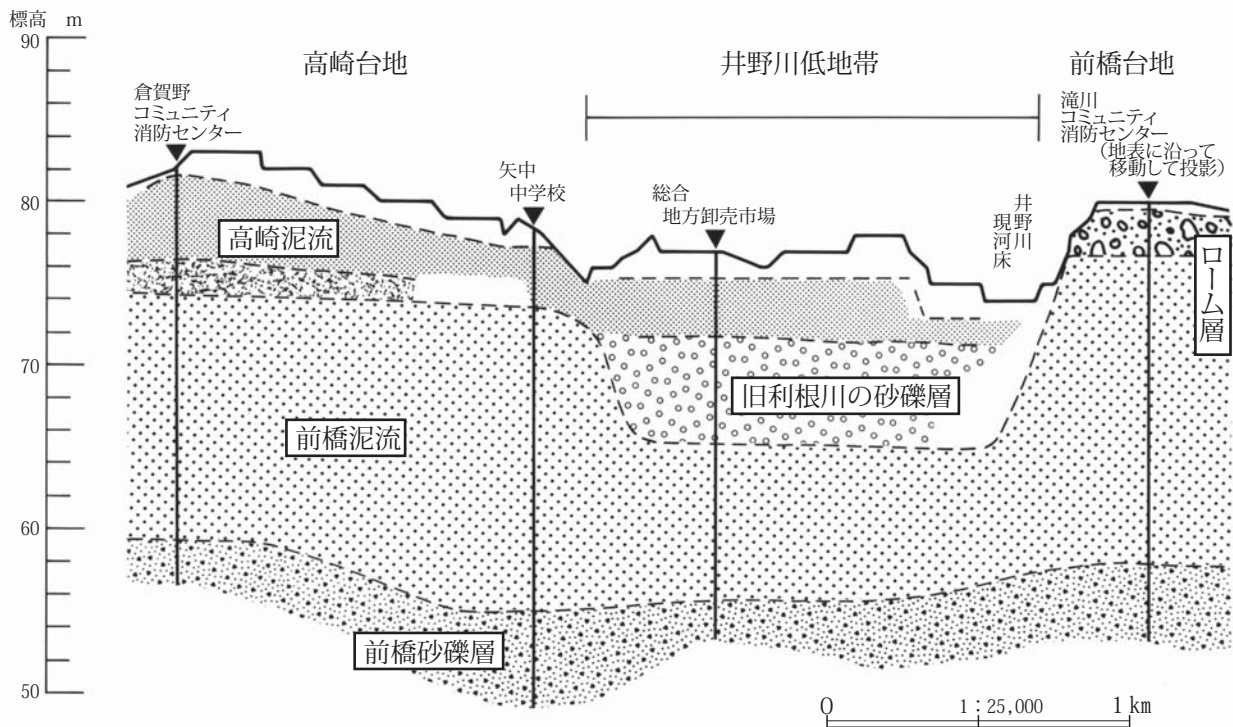
査時に行った土層の観察から得られた基本土層は第11図  
に示し、第4章第1節2で詳述してある。



- |   |  |   |
|---|--|---|
|  丘陵    |  最下位段丘    |  旧流路跡(旧河道) |
|  上位段丘  |  前橋高崎台地Ⅰ面 |  人工改変地     |
|  下位段丘  |  前橋高崎台地Ⅱ面 |  谷底平野      |
|  藤岡扇状地 |  自然堤防     |  綿貫原北遺跡    |
|  小扇状地  |  河原       |   |

第6図 遺跡周辺地形分類図(群馬県『土地分類基本調査 高崎』(1993年)による)





第7図 井野川低地帯の地下断面図(『新編高崎市史通史編1』p.90の図30を一部改変)

## 第2節 周辺の遺跡

現在の高崎市は、平成18(2006)年に高崎市と群馬県下の群馬町・箕郷町・榛名町・倉渕村、多野郡新町との合併、さらに平成21(2009)年に多野郡吉井町との合併で誕生した新市である。

遺跡の所在する高崎市綿貫町は、市東部の「岩鼻地区」にある。井野川下流右岸に位置し、対岸は高崎市の「滝川地区」になる。

明治22(1889)年の町村制施行により、周辺6村(岩鼻町、綿貫村、台新田村、栗崎村、東中里村、矢中村)が合併し西群馬郡岩鼻村が成立する(第5図)。明治29(1896)年に西群馬郡と片岡郡の統合により群馬郡に属した岩鼻村は、戦後の昭和32(1957)年、高崎市と群南村へ分割編入される。この時に綿貫と栗崎は群南村に編入された。そして昭和40(1965)年、群南村は高崎市へ編入され現在に至っている。

第8図は高崎市の「岩鼻地区」と「滝川地区」を主体に「大類地区」と「京ヶ島地区」の一部、関越自動車の東に位置する玉村町西端にかけて形成された遺跡の分布図である。遺跡番号の1が当遺跡であり、8までが国道354号

高崎玉村バイパス建設に伴って調査された遺跡である。また9～15は県道前橋長瀬線と北関東自動車道建設関連の高崎市所在遺跡になる。16～23は関越自動車道関連の遺跡、96～99は北関東自動車道建設関連の前橋市所在の遺跡、100～102は県道前橋長瀬線建設関連の前橋市所在の遺跡になる。このように遺跡地周辺は大規模な発掘調査が継続的に行われている。

以下、当遺跡周辺の歴史的環境を時代を追って記述する。なお、文中の遺跡名の後ろに付く〔 〕番号は第8図の遺跡番号に対応している。

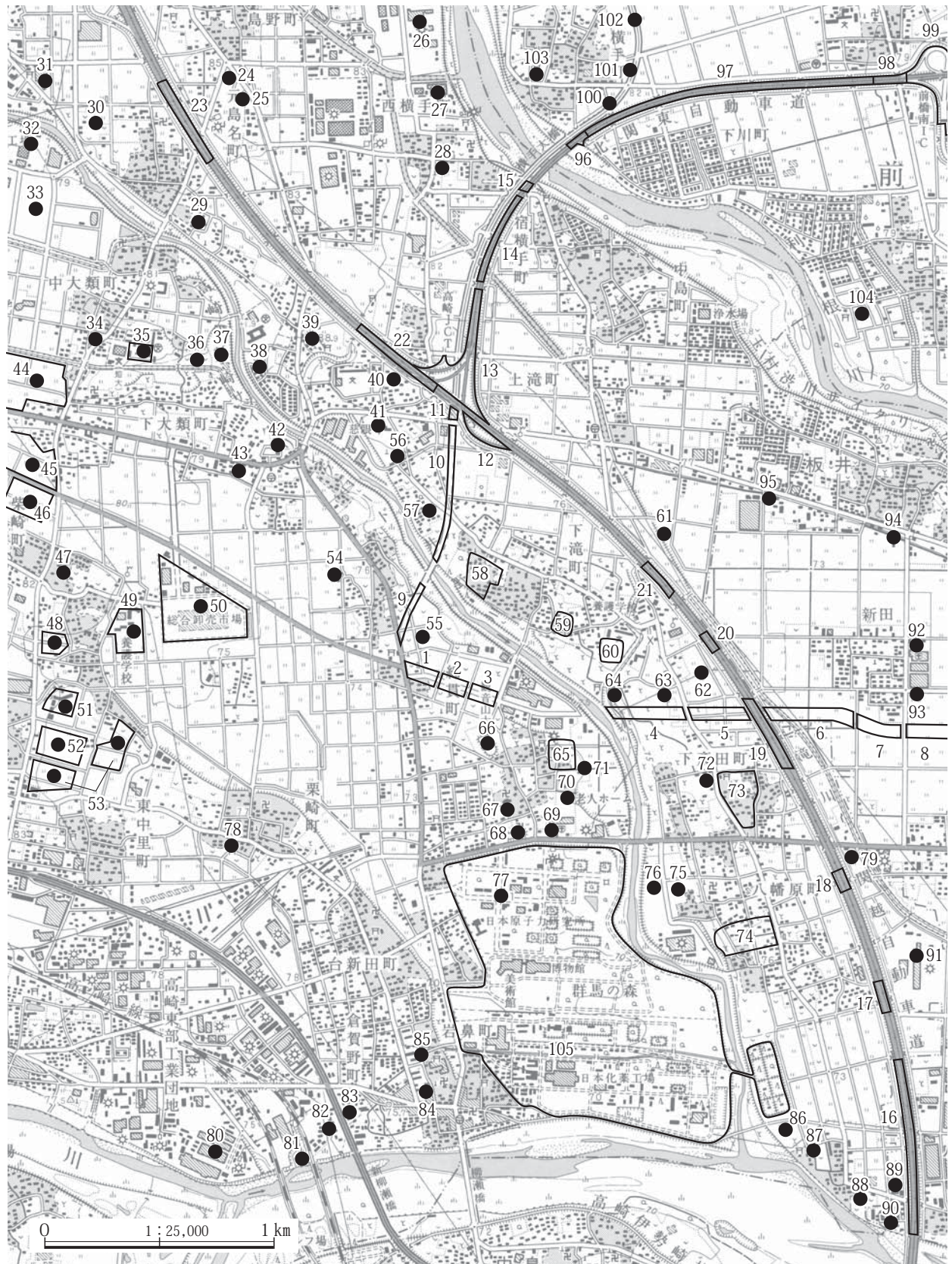
### 1 旧石器時代

当遺跡では旧石器時代の遺物は検出されていないが、遺跡から南1.8kmの烏川左岸段丘上に立地している岩鼻坂上北遺跡〔84〕から槍先形尖頭器1点が出土している。

### 2 縄文時代

当遺跡では1～3区において前期と中期の土器片、石鏃・打製石斧などが出土しているが、遺構は検出されていない。

遺跡周辺の井野川右岸段丘上にあつては、隣接する綿貫牛道遺跡〔2〕や同伊勢遺跡〔3〕から前期と中期の土器



第8図 周辺遺跡の分布図

片、打製石斧などの石器、南東約800mに位置する綿貫堀米前Ⅱ遺跡〔70〕からも中期後半の土器片、綿貫小林前遺跡〔9〕では打製石斧が出土している。北西約1.1kmの下大類蟹沢遺跡〔42〕からは石鏃やスクレイパーが出土している。いずれも遺構外からの出土である。

一方、井野川左岸段丘上では、遺跡対岸の下滝高井前遺跡〔4・63〕から前期諸磯b式期の住居1軒と土器片、続く下斎田重土薬師遺跡〔5〕からも同時期の土器片が出土している。当遺跡から南東2.4kmに位置する八幡原A遺跡〔17〕からも諸磯b式期と思われる住居1軒が検出されている。八幡原稲荷遺跡〔91〕からは前期後半と中期の土器片、下滝梅崎遺跡〔60〕からは縄文時代の可能性のある土坑1基と剥片が出土している。下斎田・滝川A遺跡〔19〕では中期後半加曾利E式の土器片が出土した土坑1基と前期黒浜式、諸磯式の土器片が出土している。滝川C遺跡〔21〕では前期黒浜式の土器が一括出土している。下滝天水遺跡〔10〕からは陥穴と考えられる土坑と早期から中期にかけての土器片、上滝遺跡〔22〕では前期から後期に至る土器片と石鏃が出土している。元島名B遺跡〔23〕は遺構外から中期後半の摩耗した土器片1点のみであった。玉村町域の上新田新田西遺跡〔6〕でも前期と中期の土器片と石鏃など、上新田中道東遺跡〔8〕からは中期後半から後期前半の土器片と石鏃28点、有舌尖頭器4点などが出土している。利根川右岸の前橋台地上では宿横手三波川遺跡〔14〕から石鏃など9点が出土している。

このように当遺跡周辺の遺跡分布を見てくると、井野川下流域左岸段丘上に縄文時代の住居が構築されるのは前期の諸磯b式期からと判断される。そして当遺跡の周辺では中期になって縄文人の活動の痕跡が認められるものの集落が営まれるほどではなかったようだ。

### 3 弥生時代

当遺跡からは弥生時代の遺構と遺物は検出されていない。

井野川下流域の当遺跡周辺における弥生時代遺跡の分布は縄文時代と同様に希薄で、綿貫伊勢遺跡〔3〕に後期の土器片が認められるだけである。

しかし遺跡地の北西約3kmの井野川中流右岸では、万相寺遺跡〔32〕や高崎情報団地遺跡〔33〕から後期樽式土器を伴う住居や方形周溝墓、左岸でも元島名遺跡〔30〕や鈴

ノ宮遺跡〔31〕のように後期の集落や方形周溝墓が検出され、さらに当遺跡の北約2.4kmの利根川右岸の西横手遺跡群Ⅰ〔27〕からも樽式土器片が検出されている。このように弥生時代後期になって井野川中流域には集落や墓域が形成されていることがわかる。

なお、井野川と烏川との合流点に近く、両河川の左岸台地上の縁辺部にある八幡原若宮遺跡〔88〕からは、弥生時代中期後半から末に属する土器片が採集されている。

### 4 古墳時代

当遺跡からは、古墳時代前期と後期の住居が検出されている。

前期の遺跡は弥生時代の遺跡が希薄であった井野川下流域で急激に増加する。古式土師器を伴う、この時期の集落を井野川右岸と左岸で見よう。

当遺跡の所在する井野川右岸にあつては、綿貫牛道遺跡〔2〕で住居5軒、それと同一集落を構成する綿貫伊勢遺跡〔3〕、綿貫小林前遺跡〔9〕では住居44軒と方形周溝墓1基、井戸と溝が検出されている。このうちの1軒からは銅鏃が出土した。綿貫遺跡〔55〕では住居6軒と方形周溝墓2基・溝数条、綿貫堀米前Ⅱ遺跡〔70〕では住居3軒と土坑1基、不動山東遺跡〔69〕では住居2軒が検出されている。また、当遺跡の西北西約1kmの下大類遺跡〔50〕からは住居、隣接する西の柴崎熊野前遺跡〔49〕では河川跡(埋没土の中位にAs-Cが堆積)から大量の土器とともに石製勾玉・管玉、ガラス製小玉などが出土している。さらにその南西約500mの高崎台地上に位置する矢中村東(A・B・C)遺跡〔51～53〕では14基の周溝墓が検出されている。あわせて一つの墓域として考えることができる。

一方、井野川左岸では当遺跡から北600m、綿貫小林前遺跡の対岸に位置する下滝天水遺跡〔10〕から住居25軒(その可能性を含めて)が検出されている。下滝高井前遺跡〔4〕では住居・土坑・溝、下滝梅崎遺跡〔60〕からは住居2軒と方形周溝墓1基、下斎田・滝川A遺跡〔19〕で住居3軒・方形周溝墓1基・土坑4基である。滝川C遺跡〔21〕では住居の検出はなくて土坑と溝、同じく上滝社宮司東遺跡〔61〕も土坑だけの検出であった。上滝遺跡〔22〕では住居3軒・土坑7基・溝1条、元島名下河原遺跡〔38〕からは大溝1条が検出されている。井野川中流域の左右両岸では元島名遺跡〔30〕から住居3軒・円形周溝墓7基

と方形周溝墓、鈴ノ宮遺跡〔31〕は住居55軒・方形周溝墓4基・土坑1基、高崎情報団地遺跡〔33〕は住居と方形周溝墓、そして大量の遺物が出土した溝が検出されている。

当遺跡の南東約2.8kmに位置する玉村町下郷遺跡〔16〕からは、住居3軒・土坑10基・溝1条・方形周溝墓27基・円形周溝墓2基などが検出されている。なお、外周に溝をもつ竪穴住居(周溝をもつ建物)は、前橋市の横手早稲田遺跡〔100〕5軒、横手湯田遺跡〔97〕7軒、玉村町の上新田中道東遺跡〔8〕2軒、上之手八王子遺跡5軒、上之手石塚遺跡で1軒検出されている。

当遺跡の北北西1.5km、井野川左岸に位置する4世紀前半築造の元島名将軍塚古墳〔39〕は、墳丘長91～96mの前方後円墳である。埋葬施設は粘土槨で小型仿製鏡や石釧が出土、墳丘裾部からは底部穿孔の二重口縁壺が出土した。井野川右岸の古墳としては、当遺跡の北西方向1.6kmの位置に4世紀後半の築造と考えられている柴崎蟹沢古墳〔47〕がある。この古墳には正始元年銘のある三角縁神獣鏡など4面の銅鏡が副葬されていた。

4世紀初頭の浅間山C軽石(As-C)が降下する前後の時期に、当遺跡周辺一帯を含む高崎市東部から前橋市南部や玉村町にかけての低湿地であった地域では大規模な開発が進められ、水田が広げられていった。As-C混土上・下面で水田が検出されているのは、下滝天水遺跡〔10〕・上滝榎町北遺跡〔13〕・宿横手三波川遺跡〔14〕である。

前期の遺跡に比べて中期の遺跡は数少ない。右岸の不動山東遺跡〔69〕では格子目叩目文をもつ韓式系土器の甕が出土した5世紀代の住居1軒が検出されている。岩鼻二子山古墳〔77〕や不動山古墳〔68〕の築造の背景に渡来人、渡来系文物との関わりが考えられる。左岸の下滝天水遺跡〔10〕からは一辺約35mの方形区画になる溝が検出されたが、この溝は5世紀の豪族居館に伴う溝と推定されている。元島名下河原遺跡〔38〕では住居5軒が検出された。

井野川下流域の右岸段丘上には綿貫古墳群が形成されている。『上毛古墳綜覧』作成時に4基の前方後円墳(南から岩鼻二子山古墳、不動山古墳、普賢寺裏古墳、綿貫観音山古墳)と17基の円墳の合計21基が確認された。しかし、現在の「群馬の森」一帯にあった、陸軍岩鼻火薬製造所の建設(明治13年)やその後の敷地拡張に伴い、多くの古墳が壊されていったものと思われる。実際はさら

に多くの古墳が段丘上一帯に築造されていたものである。

当遺跡の南東約650mに位置する普賢寺裏古墳〔67〕は、墳丘長約80mの前方後円墳である。埋葬施設は竪穴系と考えられること、また墳丘形状から5世紀前半の築造が推定されている。現在の日本原子力研究開発機構高崎量子応用研究所敷地内には、5世紀前半から中頃の築造と考えられている、墳丘長約115mの前方後円墳・岩鼻二子山古墳〔77〕が南方向に前方部を向けて築造されていた。後円部から2基の舟形石棺が出土した。副葬品は五神四獣鏡、鉄製武器・農耕具、石製模造品などが出土している。この古墳は岩鼻火薬製造所の敷地拡張にともなって大正から昭和初期には壊されてしまった。5世紀中葉築造の不動山古墳〔68〕は墳丘長94mで、太田天神山古墳と相似形の築造企画を有する前方後円墳である。主体部には舟形石棺が用いられている。烏川との合流地点付近の河岸段丘上には若宮八幡北古墳〔86〕が築造されている。墳丘長46.3mの帆立貝式古墳で造り出し部を有する。埋葬主体部は舟形石棺で5世紀後半の築造と考えられている。この古墳の南側、烏川段丘上には若宮・八幡原古墳群が形成されている。

後期の遺跡は、右岸で綿貫牛道遺跡〔2〕や綿貫伊勢遺跡〔3〕、綿貫小林前遺跡〔9〕では住居10軒弱、不動山東遺跡〔69〕から住居1軒、綿貫堀米前Ⅱ遺跡〔70〕では34軒の住居が検出されている。下大類蟹沢遺跡〔42〕からは住居28軒・溝6条・古墳1基が検出されている。左岸では下滝高井前遺跡〔4〕で集落、下滝赤城遺跡〔64〕から住居5軒、元島名下河原遺跡〔38〕では住居13軒と末期の住居6軒、上滝遺跡〔22〕では住居3軒・土坑4基・溝2条が検出された。八幡原稻荷遺跡〔91〕からは6世紀後半から7世紀後半に属する住居23軒が検出されている。

当遺跡の南東約400mに位置する綿貫観音山古墳〔66〕は、6世紀後半の築造で綿貫古墳群最後の前方後円墳と考えられている。墳丘長97.5mで二段築成、二重の周堀が巡る。榛名山二ツ岳噴出の角閃石安山岩を積み上げた大型横穴式石室が構築されている。墳丘には円筒埴輪や形象埴輪が樹立され、副葬品には鏡、装身具、武器・武具、馬具、銅製水瓶、須恵器などがある。

左岸では慈眼寺〔41〕裏境内付近から南東800mにわたり古墳の分布が見られる。6世紀後半の築造で墳丘長47

第3章 遺跡の立地と周辺の遺跡

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	○集落・溝等 ●墳墓 城館凸 □水田・畠 △遺物のみ							参考文献
			縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世	近現代	
1	綿貫原北遺跡	高崎市綿貫町			○	○	○	○●		本報告書
2	綿貫牛道遺跡	高崎市綿貫町	△		○		○●		団：『年報28』2009 『年報29』2010	
3	綿貫伊勢遺跡	高崎市綿貫町	△	△	○	○	○●		団：『年報27』2008 『年報28』2009 『年報29』2010	
4	下滝高井前	高崎市下滝町	○		○	○	○		団：『年報27』2008 『年報28』2009	
5	下斎田重土薬師遺跡	高崎市下斎田町	△		○	○□	○	○	団：『下斎田重土薬師遺跡』2010	
6	上新田新田西遺跡	玉村町上新田	△		○	○□	○□	□	団：『上新田新田西遺跡・上新田赤塚遺跡』2009	
7	上新田赤塚遺跡	玉村町上新田				○□	○			
8	上新田中道東遺跡	玉村町上新田	△		○●	□		○	団：『年報24』2005	
9	綿貫小林前遺跡	高崎市綿貫町			○	○	○	○	団：『綿貫小林前遺跡』2006	
10	下滝天水遺跡	高崎市下滝町	△		○□	○□	○	□	団：『下滝天水遺跡』2004	
11	上滝榎町北Ⅲ遺跡	高崎市上滝町			□			○		
12	上滝五反畑遺跡	高崎市上滝町			○□	○□	○	○□	団：『上滝五反畑遺跡』1997	
13	上滝榎町北遺跡	高崎市上滝町			□	□	○	□	団：『上滝榎町北遺跡』2002	
14	宿横手三波川遺跡	高崎市宿横手町		○	○□	○□	○□	○□	団：『宿横手三波川遺跡』2001	
15	西横手遺跡群	高崎市宿横手町			○□	□			団：『西横手遺跡群』2001	
16	下郷遺跡	玉村町八幡原			○●		○		群馬県教育委員会『下郷』1980	
17	八幡原A遺跡	高崎市八幡原町	○			○	○	○		
18	八幡原B遺跡	高崎市八幡原町			△	△	○□	○□	団：『八幡原A・B遺跡 上滝 元島名A遺跡』1981	
19	下斎田・滝川A遺跡	高崎市斎田町	○		○●	○		○		
20	滝川B遺跡	高崎市上滝町							団：『下斎田・滝川A遺跡 滝川B・C遺跡』1987	
21	滝川C遺跡	高崎市上滝町			○					
22	上滝遺跡	高崎市上滝町	△		○	○	○	○	団：『八幡原A・B遺跡 上滝 元島名A遺跡』1981	
23	元島名B遺跡	高崎市元島名町	△		△	△	○	○	団：『元島名B遺跡・吹屋遺跡』1982	
24	島野環濠遺構群	高崎市島野町					○		『新編高崎市史 資料編3中世』1996	
25	元島名諏訪北遺跡	高崎市元島名町				□			高崎市教育委員会『高崎市内遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』1992	
26	西横手遺跡群(Ⅱ)	高崎市秋原町・西横手町			□	□	□		高崎市教育委員会『西横手遺跡群(Ⅱ)』1990	
27	西横手遺跡群(Ⅰ)	高崎市西横手町		△	●□	□	□		高崎市教育委員会『西横手遺跡群(Ⅰ)』1989	
28	明德元年在銘宝篋印塔	高崎市西横手町					●		高崎市教育委員会『高崎市遺跡分布図』1998	
29	元島名内出	高崎市元島名町					○	○	『新編高崎市史 資料編3中世』1996	
30	元島名遺跡	高崎市元島名町	△	○●	○●		○	○	高崎市教育委員会『元島名遺跡』1979	
31	鈴ノ宮遺跡	高崎市矢島町		○●	○●	○			高崎市教育委員会『鈴ノ宮遺跡』1978	
32	万相寺遺跡	高崎市宿大類町	○	○	○●	○□	○		高崎市教育委員会『万相寺遺跡』1985	
33	高崎情報団地	高崎市中大類町・宿大類町	△	○●	○●	○●□	○□		高崎市遺跡調査会『高崎情報団地遺跡』1997	
34	中大類金井遺跡	高崎市中大類町	△		○	○			住居・土坑。市教委：1989	
35	中大類金井分遺跡	高崎市中大類町			○	○			住居。市教委：1992	
36	降照屋敷	高崎市中大類町					○		『新編高崎市史 資料編3中世』1996	
37	中大類輪具遺跡	高崎市中大類町	△		○	○		○	高崎市教育委員会『高崎市内遺跡緊急埋蔵文化財発掘調査報告書』1989	
38	元島名下河原遺跡	高崎市元島名町			○				『新編高崎市史 資料編2』2000	
39	元島名將軍塚古墳	高崎市元島名町			●				高崎市教育委員会『高崎市遺跡分布図』1998	
40	上滝Ⅱ遺跡	高崎市上滝町			○□			○	団：『上滝榎町北遺跡・上滝Ⅱ遺跡』2002	
41	慈恩寺	高崎市下滝町					○		『新編高崎市史 資料編3中世』1996	
42	下大類蟹沢遺跡	高崎市下大類町			○●	○			高崎市教育委員会『下大類蟹沢遺跡』1993	
43	下大類・中道下遺跡	高崎市下大類町			○	○			高崎市教育委員会『下大類・中道下遺跡』2010	
44	殿谷戸・旭・富士塚C・隼人・吹手・峯岸	高崎市柴崎町	△		●	○□	△	○	高崎市教育委員会『柴崎遺跡群V』1989	
45	東原・富士塚・富士塚前B	高崎市柴崎町				□			高崎市教育委員会『柴崎遺跡群Ⅱ』1985	
46	村間・富士塚前A遺跡	高崎市柴崎町				□			高崎市教育委員会『柴崎遺跡群Ⅰ』1984	
47	柴崎蟹沢古墳	高崎市柴崎町			●				『新編高崎市史 資料編1』1999	
48	砂内	高崎市柴崎町			●				高崎市教育委員会『矢中遺跡群Ⅸ』1986	
49	柴崎熊野前遺跡	高崎市柴崎町			○	○□	○	○□	○	団：『柴崎熊野前遺跡』1998
50	下大類遺跡	高崎市下大類町			○	○			高崎市教育委員会『高崎市遺跡分布図』1998	
51	矢中村東A遺跡	高崎市矢中町			●	□			高崎市教育委員会『矢中遺跡群Ⅶ』1984	
52	矢中村東B遺跡	高崎市矢中町			●	□			高崎市教育委員会『矢中遺跡群Ⅷ』1985	
53	矢中村東C遺跡	高崎市矢中町			●		○		高崎市教育委員会『矢中遺跡群Ⅹ』1988	
54	稲荷山古墳	高崎市綿貫町			●				高崎市教育委員会『高崎市遺跡分布図』1998	
55	綿貫遺跡	高崎市綿貫町			○●	○	○		高崎市教育委員会『綿貫遺跡』1985	
56	前山古墳	高崎市下滝町			●				高崎市教育委員会『高崎市遺跡分布図』1998	
57	御伊勢山古墳	高崎市下滝町			●				高崎市教育委員会『高崎市遺跡分布図』1998	
58	下滝館	高崎市下滝町					凸		『新編高崎市史 資料編3中世』1996	
59	下滝屋敷	高崎市下滝町					凸		群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』1988	
60	下滝梅崎遺跡	高崎市下滝町	○		○●	○	○		高崎市教育委員会『高崎市内小規模埋蔵文化財緊急発掘調査概要』1995	

第2節 周辺の遺跡

番号	遺跡名	所在地	○集落・溝等 ●墳墓 城館凸 □水田・畠 △遺物のみ							参考文献
			縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世	近現代	
61	上滝社宮司東遺跡	高崎市上滝町			○	○				高崎市遺跡調査会『上滝社宮司東・斎田北遺跡下滝高井前・赤城遺跡』1990
62	上滝斎田北遺跡	高崎市上滝町			□	□				
63	下滝高井前遺跡	高崎市下滝町	△	△	△	△				
64	下滝赤城遺跡	高崎市下滝町			○		○			
65	堀米屋敷	高崎市綿貫町					凸		『新編高崎市史 資料編3中世』1996	
66	綿貫観音山古墳	高崎市綿貫町			●				高崎市教育委員会『高崎市遺跡分布図』1998	
67	普賢寺裏古墳	高崎市綿貫町			●				高崎市教育委員会『高崎市遺跡分布図』1998	
68	不動山古墳	高崎市綿貫町			●				高崎市教育委員会『高崎市遺跡分布図』1998	
69	不動山東遺跡	高崎市綿貫町			○	○			不動山東遺跡調査会『不動山東遺跡』1986	
70	綿貫堀米前Ⅱ遺跡	高崎市綿貫町	△		○	○	●		高崎市遺跡調査会『綿貫堀米前Ⅱ遺跡』2000	
71	文安の宝塔	高崎市綿貫町					●		『新編高崎市史資料編3中世』1996	
72	天神山古墳	高崎市下斎田町			●				高崎市教育委員会『高崎市遺跡分布図』1998	
73	下斎田城	高崎市下斎田町					凸		『新編高崎市史 資料編3中世』1996	
74	八幡原館	高崎市八幡原町					凸		『新編高崎市史 資料編3中世』1996	
75	灰塚屋敷	高崎市八幡原町					凸		『新編高崎市史 資料編3中世』1996	
76	八幡原灰塚Ⅱ遺跡	高崎市八幡原町			○●	○	○		高崎市教育委員会『岩鼻坂上北遺跡 八幡原灰塚Ⅱ遺跡 飯塚新田西・雁田遺跡 高崎市内水田遺跡一覧』1994	
77	岩鼻二子山古墳	高崎市綿貫町			●				高崎市教育委員会『高崎市遺跡分布図』1998	
78	飯玉山古墳	高崎市栗崎町			●				高崎市教育委員会『高崎市遺跡分布図』1998	
79	八幡原大鼻遺跡	高崎市八幡原町				□			高崎市遺跡調査会『八幡原大鼻遺跡・稲荷遺跡』1984	
80	倉賀野東古墳群大道南群	高崎市倉賀野町			●				高崎市教育委員会『高崎市遺跡分布図』1998	
81	むじな山古墳	高崎市倉賀野町			●				高崎市教育委員会『高崎市遺跡分布図』1998	
82	弁天山古墳	高崎市倉賀野町			●				高崎市教育委員会『高崎市遺跡分布図』1998	
83	乙大応寺遺跡	高崎市倉賀野町			●				高崎市教育委員会『高崎市内遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』1991	
84	岩鼻坂上北遺跡	高崎市岩鼻町	△		●			○	高崎市教育委員会『岩鼻坂上北遺跡 八幡原灰塚Ⅱ遺跡 飯塚新田西・雁田遺跡 高崎市内水田遺跡一覧』1994	
85	岩鼻の砦	高崎市岩鼻町					凸		『新編高崎市史 資料編3中世』1996	
86	若宮八幡北古墳	高崎市八幡原町			●				高崎市教育委員会『高崎市遺跡分布図』1998	
87	若宮館	高崎市八幡原町					凸		『新編高崎市史 資料編3中世』1996	
88	八幡原若宮遺跡	高崎市八幡原町			○●		○	○	高崎市教育委員会『高崎市内遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書17』2003	
89	天神塚古墳	玉村町八幡原			●				玉村町教育委員会『玉村町の遺跡』1992	
90	天神塚Ⅱ遺跡	玉村町八幡原			●				玉村町教育委員会『角淵伊勢山遺跡・角淵伊勢山Ⅳ遺跡・下郷Ⅱ遺跡・天神塚Ⅱ遺跡・八幡原赤塚遺跡・薬師遺跡』2002	
91	八幡原稲荷遺跡	高崎市八幡町	△		○		○	□	『新編高崎市史 資料編2』2000	
92	中道西遺跡	玉村町上新田				□			玉村町教育委員会『中道西遺跡(第1次・第2次調査)』1996	
93	中道西Ⅱ遺跡	玉村町上新田			○	○□		○	玉村町教育委員会『中道東遺跡 中道西Ⅱ遺跡 蛭堀東遺跡(第2次調査)・中道東Ⅱ遺跡・中道東Ⅱ遺跡(第2次調査)』2008	
94	八反田遺跡	玉村町板井				□			玉村町教育委員会『玉村町の遺跡』1992	
95	天神前遺跡	玉村町板井				○□			玉村町教育委員会『天神前遺跡・大明神遺跡・北小路遺跡』2002	
96	横手南川端遺跡	前橋市横手町			○□	○□	○□	○□	団：『横手南川端遺跡 横手湯田遺跡』2002	
97	横手湯田遺跡	前橋市横手町	△	△	○□	○□	○□	○□		
98	中村遺跡	前橋市鶴光路町	△		○□	○□	○	○●	団：『中村遺跡 西田遺跡』2002	
99	西田遺跡	前橋市鶴光路町		○	○□	○□	○	○●		
100	横手早稲田遺跡	前橋市横手町	○		○□	○□	○□	○□	団：『亀里平塚遺跡・横手宮田遺跡・横手早稲田遺跡・横手川端遺跡』2001	
101	横手宮田遺跡	前橋市横手町			□	○□	□	○		
102	亀里平塚遺跡	前橋市亀里町			□	□	□	○●		
103	浅間神社古墳	前橋市横手町			●				群馬県遺跡台帳	
104	新堀城	前橋市新堀町					○		群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』1988	
105	陸軍岩鼻火薬製造所	高崎市綿貫町・岩鼻町						☆	『陸軍岩鼻火薬製造所の歴史』2007	
106	八街北圃・八街北区遺跡	玉村町下新田			○	□		○	玉村町教育委員会『原屋敷Ⅲ遺跡・八街北圃・八街北区遺跡』2010	
107	福島曲戸遺跡					○□	○□	○□	団：『福島曲戸遺跡、上福島遺跡』2002	
108	上福島中町遺跡	玉村町上福島			○	○	○□	○□	団：『上福島中町遺跡』2003	
109	羅漢町遺跡	高崎市羅漢町						○●	団：『羅漢町遺跡』2011	

m、複室構造の横穴式石室を有する下滝2号墳(前山古墳)〔56〕や直径40mの御伊勢山古墳〔57〕などがある。

6世紀初頭の榛名山二ツ岳降下火山灰層(Hr-FA)下水田は多くの遺跡で確認されている。下滝天水遺跡〔10〕・上滝榎町北Ⅲ遺跡〔11〕・上滝五反畑遺跡〔12〕・上滝榎町北遺跡〔13〕・宿横手三波川遺跡〔14〕・西横手遺跡群〔15〕・西横手遺跡群Ⅰ・Ⅱ〔27・26〕・上滝齋田北遺跡〔62〕、利根川左岸では横手南川端遺跡〔96〕・横手早稲田遺跡〔100〕・横手湯田遺跡〔97〕・横手宮田遺跡〔101〕・亀里平塚遺跡〔102〕などである。さらには6世紀中葉の榛名山二ツ岳降下軽石層(Hr-FP)下水田が利根川流域で確認されている。右岸側で宿横手三波川遺跡〔14〕・西横手遺跡群〔15〕、左岸側で横手早稲田遺跡〔100〕・横手湯田遺跡〔97〕である。

## 5 奈良・平安時代

当遺跡からは9世紀代の住居が検出されている。

平安時代に編さんされた『和名類聚抄』によると、上野国には碓氷・片岡・甘楽・多胡・緑野・那波・群馬・吾妻・利根・勢多・佐位・新田・山田・邑楽の14郡があった。この中で、高崎市域と考えられる郷名には、片岡郡の若田・高渠・佐没・長野、群馬郡の長野・井出・小野・上郊・島名、多胡郡の山宗、那波郡の鞆田などがある。若田郷は高崎市若田町から八幡町、長野郷は高崎市上、中、下豊岡町一帯、島名郷は4世紀代の元島名将軍塚古墳のある高崎市元島名町、島野町、京目町一帯、山宗郷は高崎市山名町一帯である。また鞆田郷については、佐波郡玉村町齋田から高崎市上滝町、下滝町、下齋田町、岩鼻町、八幡原町を含む地域が考えられている。

奈良・平安時代の遺跡は古墳時代後期と同様の分布を示す。当遺跡周辺で見よう。井野川右岸では綿貫遺跡〔55〕から住居多数と土壇状遺構、溝が検出されている。土壇状遺構は9世紀後半から10世紀前半代までに築造されたと考えられる瓦葺建物である。綿貫小林前遺跡〔9〕では大集落、不動山東遺跡〔69〕は住居2軒、下大類蟹沢遺跡〔42〕は住居72軒・溝17条である。左岸では下滝天水遺跡〔10〕や下滝高井前遺跡〔4〕で大集落、元島名下河原遺跡〔38〕で住居20軒、上滝遺跡〔22〕は住居2軒、下齋田・滝川A遺跡〔19〕は住居9軒と土坑、八幡原灰塚Ⅱ遺跡〔76〕は住居1軒である。

天仁元(1108)年に降下した浅間B軽石層(As-B)下の水田が検出されている。下齋田重土薬師遺跡〔5〕・上滝齋田北遺跡〔62〕・下滝天水遺跡〔10〕・上滝榎町北Ⅲ遺跡〔11〕・上滝五反畑遺跡〔12〕・上滝榎町北遺跡〔13〕・宿横手三波川遺跡〔14〕・西横手遺跡群・西横手遺跡群Ⅰ〔15・27〕・高崎情報団地Ⅰ遺跡〔33〕・柴崎遺跡群の東原・富士塚・富士塚前B遺跡〔45〕と村間・富士塚前A〔46〕・矢中村東A・矢中村東B遺跡〔51・52〕・八幡原大鼻遺跡〔79〕などである。

## 6 中世

当遺跡では14世紀から15世紀にわたる中世屋敷が検出されている。出土遺物に高級品は少ないが、中小領主層に関係する遺跡と考えられる。

当地域では鎌倉御家人として綿貫氏の存在が知られる。また、井野川を挟んだ東岸の高崎市八幡原町周辺は、上野国奉行人安達氏が基盤とした地域と言われ、伝屋敷跡として八幡原館〔74〕がある。安達氏は、弘安8年(1285)霜月騒動により滅亡し、影響下にあった玉村氏も没落したと言われるが、綿貫氏は勢力を保ち、正慶2年(1333)に河内国(大阪府)で楠木正成を討伐した際に作成された「楠木合戦注文」に、「綿貫三郎入道跡」、「綿貫二郎右衛門入道跡」の名が見える。

南北朝時代となり、上野国武士は上州白旗一揆として結束を固め、綿貫氏も構成員となっている。永享12年(1440)に幕府方が茨城県結城城を攻めた結城合戦では、一揆勢として参陣し、「綿貫越後守」、「綿貫多利房丸、同名亀房丸代」が首級を上げている。文安6年(1449)「掃部寮領上野国綿貫庄」の年貢は、10年間納入免除となっていた(『康富記』)。時期が一致するため、一説に綿貫氏の結城合戦での活躍に対する論功行賞であったとも言われる。その際、期限終了に伴う年貢納入の申し立ては、上杉氏被官木部氏が行っており、同荘園の代官であった可能性が高い。峰岸純夫氏によれば、掃部寮は朝廷の設営を取り仕切っており、「掃部寮領はそのための資材供給地で、綿貫庄は何時の頃か(おそらく保の成立する十一～十二世紀に)掃部寮領綿貫保として成立し、自生する藺草いぐさや葎(蘆)などを畳・筵・簾などの原料として貢納し」、「十五世紀の時点では、すでにこのような特産物の貢納はなくなり、一般的な荘園に転化していた」が、「依

然として政府直轄地として宮内省掃部寮が管轄していた」(峰岸2000)としている。なお、当遺跡の南東約800mには、「文安の宝塔」[71]が建立されている。これは文安4年(1447)4月に、2基同時に建立されたもので、高さ90cmと立派である。堀米屋敷[65]に隣接する墓地内にあり、堀籠氏との関連も想定できるが、結城合戦から7年後であることから、綿貫氏との関係も思い起こされる。その後、綿貫氏は史料上確認できなくなり、势力的に衰えたものと推測できる。

綿貫氏の存亡と直接関わったものか不明だが、15世紀後半に当地域周辺で大きな争乱があった。古河公方足利成氏と関東管領上杉氏が争った享徳の乱(1455～1458)である。成氏は、文明9年(1477)に上野国へ侵攻し、数ヶ月にわたり滝・島名(高崎市)に張陣している。その中心は下滝館[58]に比定される。周辺には下野勢ら8000人余の軍勢が陣を張ったという。同年12月、成氏軍は西方の和田(市内)へ進軍したため、当地域を横断したことがわかる。この争乱では、上杉家家宰職を勤めた白井長尾景信の子景春が上杉氏に敵対したため、上州一揆勢力でも動揺が生じている。一揆旗本の長野為業は長尾景春方であった。綿貫氏の去就は明らかでないが、成氏の侵攻に際しては、おそらく与したがったと考えられる。いずれにしろ、この頃から衰退していくことと無関係とは考え難い。

綿貫地域に関係する武士として、ほかに小林氏がいる。小林氏は高山御厨(藤岡市)地頭であったが、観応3年(1352)「上野国綿貫保内 綿貫四郎次郎並同妻跡」を足利尊氏から与えられている。おそらく綿貫氏は、観応の擾乱じょうらんに関係して一時的に没落したものと推測されている。なお、小林氏は綿貫を所領として伝えており、永禄10年(1567)武田信玄に対して、所領として申請したが、中栗須(藤岡市)ほか100貫文を替え地として与えられ、領有は認められていない。また、地名として残る字小林との関係は不明である。武田氏領国時代、南方に隣接する岩鼻町には、「岩鼻之取出」(比定地不明)が置かれ、烏川方面への押さえとするが、破却が検討されている。

当遺跡の南東約600mには堀米屋敷[65]が知られている。ここに居住していた堀籠大学は、武田家臣高坂弾正の三男で堀籠氏の養子となり、以後四代にわたり綿貫村の堀籠に居住と記している(「高崎近郷村々百姓由緒

書」)。武田氏から本庄市内(埼玉県)で15貫文を与えられており、その後綿貫地内に土着したようである。

以上のとおり、当地域は綿貫氏をはじめとする武士勢力が深く関係した地域であったが、堀米屋敷を除けば、関係する城館遺構は知られていない。綿貫小林前遺跡調査の折、地域の情報をもとに編者が周辺を踏査した結果、字曲師の集落に環濠屋敷群が存在し、一部堀跡が残存する状況を確認した。範囲も広いが、やはり綿貫氏に関係する城館と考えるには、証左に欠けている。こうした状況下で、城館・屋敷遺構に関する発掘調査成果への期待度は高いと思われる。

当遺跡の東に隣接する綿貫牛道遺跡[2]では、市道を挟んで1・2区にまたがる中世屋敷が発見されている(第9図)。屋敷の規模は南北約39m、東西約25mで、1/3町規模に相当する。平面形は南北に長い長方形である。区画溝は四周せず、東辺と西辺が大きく開口している。当遺跡も含めて、こうした形態が当該期の特徴として注目される。内部では建物23棟が検出され、主軸方位の違いから5群に分類され、5時期以上の変遷が捉えられている。時期は、14世紀半ばから15世紀半ば頃と考えられ、廃絶に際して人為的な埋め戻しも想定される。出土遺物には中国産陶磁器は少ないが、瀬戸美濃系の古瀬戸陶器がやや多く出土する。なかでも、ほぼ完形の天目茶碗(15世紀前半)の出土は、特筆される。

当遺跡1区の西側に接して、北東方向に広がる綿貫小林前遺跡[9]では、P東区、P北区にかけて二重の溝に囲まれた屋敷跡の一角が調査されている。当遺跡1区1号屋敷から北へ約1.3km離れており、直接的な関連は想定しにくい。調査範囲では南北規模約22m以上であることが判明し、外堀は東方調査区域外へ直線的に延びている。存続時期は出土遺物から14～15世紀代に位置づけられる。建物は1棟のみ復元される。また、当遺跡1区に接するO東区で調査された溝跡3は、当遺跡1区6号溝と同一とみられる。中世前期と推定されているが、遺物は出土していない。当遺跡も含めると、長さ90m以上となり、長大な区画溝と考えられる。

東側の綿貫牛道遺跡[2]を挟んで、更に東方へ約100m離れる綿貫伊勢遺跡[3]でも、1～3区に分割される形で中世屋敷1ヶ所が見つかっている。やや離れており、直接的な関係は見いだせないが、位置的に影響は想定さ





第9図 綿貫牛道遺跡1区1号屋敷全体図

れる。1辺50mを超えて南方に広がり、3郭以上に分かれている。区画溝が四周している。

井野川を挟んだ東岸の下滝高井前遺跡〔4〕でも、3区で中世屋敷1か所と、区画遺構が見つまっている。中世屋敷は一辺50m規模を有している。周辺には下斉田城〔73〕など良好に残る屋敷遺構が点在しており、これらと対比される遺構として重要なものである。足利成氏に関わる滝の陣への配慮も必要となる。

井野川を挟んだ北岸の下滝天水遺跡〔10〕では、下滝館〔58〕の外堀に推定される溝2条が調査された。A1区4・5溝であり、調査前は完全に埋没していたが、わずかな地形変化から堀跡に推定されていた。調査の結果、出土遺物はほとんど近世で、中世の遺物はわずかであった。現存する堀が水堀として機能している状況下では、発掘調査された溝も当然近世まで残存し使用されていたと判断される。遺構としての存続期間の問題は、課題として残されている。

以上の状況により、当地域は中世屋敷が集中して調査されていることがわかり、こうした成果を総括的にとらえる視点も必要となろう。

#### 引用文献

峰岸純夫 2000「掃部寮領綿貫庄について」『新編高崎市史通史編2 中世しおり』

## 7 近世

当遺跡は、近世において綿貫村に属している。当初は高崎藩領であったが、正徳元年(1711)から幕府領となった。南方約1kmには、日光例幣使街道が東西方向に走り、旅人の往来もあった。宿場は倉賀野宿と玉村宿があり、当地域は中間に位置するが、村域の南限を通過するため、影響はあまりないとみられる。

当遺跡1区は、17世紀から19世紀にわたる居住域で、生活に関係する土坑や溝が検出されている。また、東方の墓域では、17世紀末から19世紀にわたる土壇墓19基が調査された。生産域に関しては、居住域内にある屋敷畠に相当する部分で、天地返しを行った復旧溝群が検出され、畠の存在が復元できた。

本県では、天明3年(1783)の浅間山噴火とその泥流によって被災した遺構が各地で調査されている。古くは火砕流によって被災した鎌原(嬬恋村)の集落調査が知られ

ていたが、近年では八ツ場地域で泥流によって埋没した集落や畠の調査事例が急増している。

当地域周辺では、玉村町の上福島中町遺跡〔108〕で、天明の泥流で埋没した集落が発見されている。建物は便所6棟を含む16棟が検出され、8か所程度の屋敷地に復元される。建物はすべて礎石建物となっており、本県における礎石建て構造の普及を示す資料としても貴重である。屋敷の周辺には整然と畠が配置され、道や溝がそれらを区画している。また、下層では寛保2年(1742)の洪水で埋没した建物も発見されている。

宿場町に関係するものとして、玉村宿東端を調査した八街北圃・八街北区遺跡〔106〕がある。ピット59基が検出されたが、建物として復元されたものはない。「玉村宿」と墨書された陶磁器などが出土した溝は、屋敷地における居住地と耕作地を区分する溝と評価されている。

墓域の調査では、羅漢町遺跡〔109〕において高崎城下町に位置する法輪寺境内の墓地が調査されている。17世紀後半～19世紀中葉の木棺墓32基が見つかり、遺構外も含めて33体の人骨が出土している。当遺跡と同時期であり、城下町と郊外村落を比較する有益な資料である。なかでも、遺構外ながら火葬人骨を納めた美濃陶器有耳壺3点の出土は、当該期の骨蔵器を知る資料として注目される。

天明3年の浅間山噴火に関係する田畠調査では、上福島中町遺跡と同じく、直接的に埋没したものが発見される一方で、そうした被害に対する復旧作業を示す遺構も発見されている。当遺跡では屋敷畠を天地返しして、浅間A軽石を埋め込んだ復旧溝群が見つかり、隣接する綿貫牛道遺跡〔2〕でも一部同じ状況が確認できている。また、1区1号溝は浅間A軽石を主体に埋められており、灰掻き溝と位置づけられる。

こうした復旧作業に関わる遺構には、幾つかの違いが報告されている。上滝五反畑遺跡〔12〕では、水田27枚が検出され、田面には天地返しによる農具痕がみられた。農具痕跡の一単位は、幅20cm前後で、長さ60～80cmの長方形をなし、これらが連続して整然と施工されている。報告書においては、「エンガ」と呼ばれる足踏み式の鍬が使用されたと分析している。

また、灰掻き穴や灰掻き溝も一般的に多く選択されている。これは、天地返しで処理できない場合に、選択さ

れたものと想像される。福島曲戸遺跡〔107〕は利根川に近いこともあり、浅間A軽石に加えて泥流被害も受け、被災した水田を復旧した溝群が発見されている。復旧溝群は2種類に分類され、天地返ししたものを「近世1」、浅間A軽石や泥流を充填したものを「近世2」としている。前者は洪水砂を処理したもので、寛保2年(1742)に比定されている。以上から判明するとおり、天地返しと灰掻き溝は同種の作業であり、同じ場所でも廃棄する対象の数量により選別されている。なお、当遺跡で検出された復旧溝群は、形態的に「近世1」に類似している。

## 8 近代

当遺跡の南1.5km、現在の日本化薬株式会社高崎工場の敷地内に、明治13(1880)年陸軍の火薬製造所(当時の正式名称は東京砲兵工廠岩鼻火薬製造所)〔105〕の建設がはじまった。その後、明治38(1905)年、大正7(1918)年、大正末年から昭和初年、昭和13(1938)年から14年、17(1942)年に敷地拡張が行われている。

この製造所の建設から度重なる敷地拡張によって、綿貫古墳群を構成する前方後円墳の岩鼻二子山古墳や円墳多数が壊されていった。出土遺物の一部は東京国立博物館に収蔵されている。

1945年まで存続した製造所は、現在の日本原子力研究開発機構・群馬の森・日本化薬の敷地を含む広大な面積があった。製造所跡は文化庁の近代化遺産総合調査や近代の遺跡調査(詳細調査)の対象となっている。

## 第4章 発掘調査の記録

### 第1節 遺跡の概要

#### 1 概要

##### (1) 1区

飛鳥～平安時代、中世、近世にわたり、遺構が密集して存在する。特に中世以降の重複は激しい。

縄文時代の遺構は検出されておらず、遺構外出土遺物として前期の土器片9点と、石器5点を掲載した。

飛鳥～平安時代は竪穴住居14軒を主体とする集落が検出されたが、分布範囲は調査区西半部と、中央南寄りに偏在する。ただし、北東端には石組みを伴う9号井戸があり、北側に広がる別の集落などを推測させる。竪穴住居の時期は9～10世紀である。西端で検出された84号溝は、埋没土上層にAs-Bが堆積する大型の溝であり、区画溝である可能性が高く、隣接する綿貫小林前遺跡O東区9号溝と合わせて検討が必要である。また、並走する2号落ち込み状遺構は、性格不明ながら84号溝と関連づけられる遺構である。

中世では、屋敷遺構が中心となり、その周辺に墓域などが分布する。北東部の1号屋敷は一辺35mを超える区画された屋敷の南西部に当たる。建物は復元できていないが、西側にピットの集中が見られる。特に溝の配置に特徴があり、西辺は土橋と食い違いによって出入口を

造っている。南辺には橋脚を伴う木橋が想定される。なお、北壁には更に内堀となる91号溝があり、複郭構造であったことが想定できる。

南東部には2号溝によって別の屋敷遺構が区画される。状況から2区中世屋敷の南辺を区画するものと考えられる。2号溝に重複して2号道路が検出され、北へ折れることから、1号屋敷へ向かう可能性が高い。

北西部には長方形・細長方形を主体とする土坑群が激しく重複して検出されている。これらは近世にも継続しており、不分明な状況である。なお、これらと重複する6号溝は、1号屋敷の時期とも一致する長大な溝である。幅や深さは区画溝としては小さいが、北側調査区域外へも直線的に延びており、綿貫小林前遺跡O東区3号溝と同一と考えられる。1号屋敷西辺と並行であり、外郭となる溝の可能性もある。また、土坑群には銭を伴う楕円形のもの4基があり、土坑墓が想定され、点在する火葬跡を含めた墓域となっている。

近世でも調査区全域で遺構が認められる。居住域と考えられる領域は、1号溝の西側で58号溝の北側となる調査区北西部と、43号溝の西側で48号溝の南側に位置する調査区南西部、51号溝の南側で43号溝の東側に位置する調査区南東部の3区画に分かれる。これらの主体となるのは土坑群であり、そこにAs-A復旧溝群が隣接して生産域となっている。

第2表 調査区・時期別遺構数一覧

調査区・時期		住居	掘立柱建物	礎石列	柱穴列	竪穴状遺構	土坑	落ち込み	井戸	橋脚	墓	火葬跡	集石	礫充填	ピット	溝	復旧溝群	灰掻き穴	道	
1区	飛鳥～平安	14				1	24	2	1						36	15				
	中世	1号屋敷					10		2	2					82	23				
		周辺					3	51		4			1	2	15	12			1	
	近世		1	1	2	1	118		2		19	2	3	11	50	45	4	2	1	
	近代以前														36					
2区	中世		23			3	44		6						330	15				
	近世						3								1	2				
3区	古墳	3					1		1											
	飛鳥～平安		2													2				
		1号屋敷		10				32		2						175	8			
	中世	2号屋敷		4		1		7								69	6			1
		屋敷外						2		3							1			
	近世															2				
近代以前		2				36						2		102	7			2		
合計		19	40	1	3	8	328	2	21	2	19	3	7	11	701	138	4	2	5	

#### 第4章 発掘調査の記録

まとまった墓域としては、1号溝東側に集中が見られる。年代は17世紀末以降であり、周辺の居住域の年代と一致する。中でも鍋かぶり葬である5号墓は特筆される。また、葬送関連では、17世紀後半に比定される火葬跡も希少な遺構である。

##### (2) 2区

縄文時代の遺構は検出されておらず、遺構外出土遺物として石器5点を掲載した。なお、土器は非掲載遺物も含めて出土していない。

2区で調査された遺構の大部分は、中世に属する。状況から調査区を大きく4つに分けることができる。屋敷空間2か所と、その周辺部分2か所である。2区1号屋敷は、西半部に位置する。21棟の掘立柱建物ほかで構成される。内部には東西を区分する6号溝があり、その西側延長は1区2号溝である。その結果、1区東南部を含めた空間が屋敷内部に含まれることとなるが、細分はしていない。もう一つの屋敷は調査南東部に位置し、10・12号溝で囲まれた2号屋敷である。ただし、中心部分は3区にあり(3区1号屋敷)、2区部分はその北東隅部と位置づけられる。

周辺部分も2か所に分かれる。一つは14号溝東側の無遺構空間である。もう一つの空間は、2区1号屋敷と2号屋敷に南北を挟まれた部分で、東西幅30mを超える帯状をなし、東限は14号溝となる。この空間にも掘立柱建物2棟など若干の遺構集中部分があり、居住域の性格もうかがえる。

近世の遺構は、土坑3基と溝2条である。14号溝は昭和期のほ場整備以前まで存在した低い溝状の水田の起源となった遺構であり、中世まで遡り屋敷群を規定していた可能性が高い。

##### (3) 3区

縄文時代の遺構は検出されておらず、遺構外出土遺物として中期の土器1点と、石器2点を掲載した。

古墳時代では4世紀代の住居3軒と土坑1基、井戸1基が検出されている。調査区西端にまとまっており、1区側には分布していない。2・3号住居は溝が囲む形態であり、特筆される。

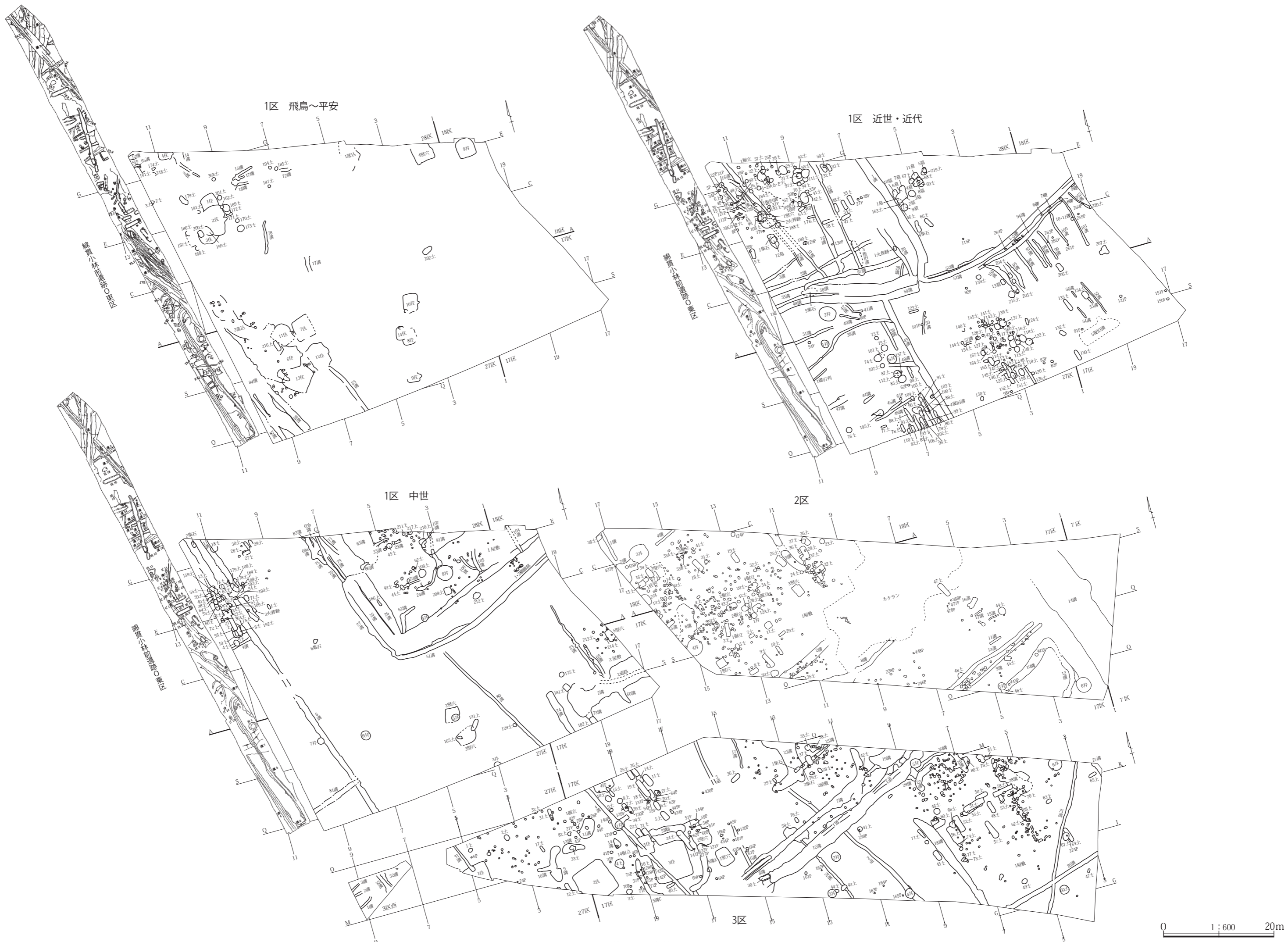
飛鳥～平安時代では、9世紀代の住居2軒と、3区西調査区の溝2条がある。同時期の住居は1区でも検出されており、同一の集落内と見なすことができよう。32号

溝は1区84号溝と同一であり、10～11世紀の区画溝として注目され、更に南側調査区域外へ延びることが確認された。

中世では、小規模ながら中世屋敷が2か所検出された。1号屋敷は、掘立柱建物10棟で構成される。2号屋敷の区画はやや複雑で、中心部分に2棟の掘立柱建物が検出される。また、南に離れて小規模な16号掘立柱建物があり、1号柱穴列など周辺のピット群とあわせて、門と柵列であった可能性が高い。

近世は、近世遺物を伴う溝2条のみである。25号溝は中世段階の区画溝と走向方位が一致しており、地割など何らかの影響がうかがえる。

近代以前は、概ね年代推定ができない遺構である。掘立柱建物2棟のほか、土坑は調査区全体のほぼ半数を占め、形態により分布範囲に偏りがみられる。



第10図 全体図

## 2 基本土層

当遺跡は、綿貫伊勢遺跡、綿貫牛道遺跡、東方を流れる井野川の旧河道上端部を起点に総延長2.2kmを超える連続した遺跡である。これらの遺跡は全体として井野川低地帯に位置するが、井野川沿岸に広がる微高地を横断する状況であり、西端は粕川に向かう低湿な地形への変換点に位置する。したがって、煩雑となるが、3つの遺跡をあわせて、ここで扱う。

当遺跡の基本土層は、1区西端が低地へ向かう変換点の土層堆積であり、1区中央から東側は微高地上となり、2区東端が一部凹む以外は同様である。このため、1区西は81号溝西壁を、同1区東は南壁と同3号井戸断面を使用し、やや細かく基本土層を作成した。2区東端の状況は、綿貫牛道遺跡2区で代用できる。なお、綿貫牛道遺跡は同2区20号溝北壁を、綿貫伊勢遺跡は同2区北壁と中央深掘断面を、同3区は同1号井戸断面を参考に基本土層を作成している。

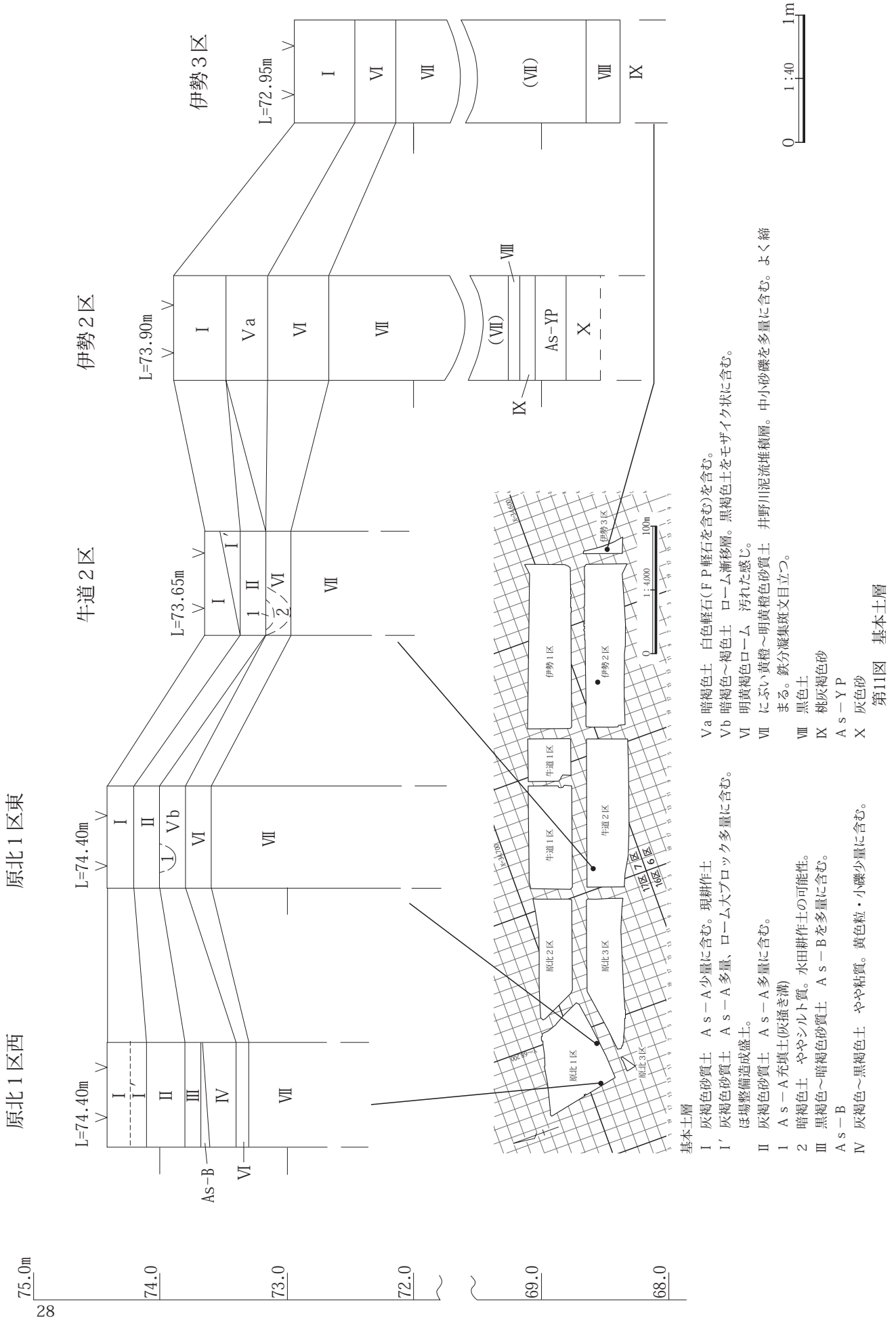
遺跡周辺は全体として南東方向に緩やかに傾斜するため、基本土層中の各層位も南東方向に下降する傾向にある。I層は表土であり、白色軽石(As-A)を少量含んでいる。遺跡全体として、ほ場整備による改変を受ける。I層の厚さのばらつきは、この影響を受けており、I'層である造成盛土を含んだ部分もある。II層は元来遺跡全体に堆積すると思われるが、綿貫牛道遺跡東側から綿貫伊勢遺跡については、ほ場整備により除去されている。

As-Bも遺跡全体に確認され、基本土層中に見られない調査区でも、遺構埋没土中に確認できる。純堆積は当遺跡1区西で面的に確認できるが、厚さは数cm程度である。また、この部分に位置する1区84号溝断面では、赤褐色の火山灰層を確認することもできる。この周辺は粕川へ向かって下降しており、以西ではAs-B直下の水田も想定される。上下に堆積する灰褐色～黒褐色土であるIII・IV層は、低湿な状況に伴うもので、分布範囲もこの周辺に限定される。

当遺跡1区東以東の微高地において、このIII・IV層に相当するのがV層である。漸移的にローム層となるVb層が西側に広がり、綿貫牛道遺跡から綿貫伊勢遺跡1・2区では比較的安定した暗褐色土を呈するVa層があり、FPを含む白色軽石が混じる。

ここで問題となるのが、当遺跡2区東端の同14号溝部分である。綿貫牛道遺跡2区として図示したとおり、造成盛土I'層下位にII層がやや厚くあり、切土は受けていない。ほ場整備施工以前は南北に帯状に続く低地であったらしい。II層下面には天明3年に降下した軽石を天地返ししたと思われるU字形の白色軽石(As-A)集中部分(1層)が確認できる。なお、2区14号溝は幅の広い溝であり、綿貫牛道遺跡1区26号溝及び2区20号溝と同一の溝である。結果としてこの範囲が帯状の低地として、後代まで地形に反映することとなる。II層下位には水平に堆積する暗褐色土(2層)があり、水田耕作土の可能性が想定されている。一見小谷地状を呈するが、VI層以下は平坦である。

VI層は明黄褐色ロームであるが、VII層の影響もあり彩度に乏しい。VII層は砂礫を多く含んだ、にぶい黄橙色～明黄褐色砂質土で、井野川泥流堆積層である。遺跡全体に厚く堆積しており、綿貫伊勢遺跡2・3区の調査により、厚さ約3.5mが確認される。VIII層は黒色土で低湿な状況が復元され、IX層砂層を挟んで、浅間板鼻黄色軽石が下位に堆積する。





## 第2節 1区の遺構と遺物

### 第1項 飛鳥～平安時代

竪穴住居14軒、竪穴状遺構1基、土坑24基、落ち込み状遺構2基、井戸1基、ピット36基、溝15条が検出された。住居は9世紀第三四半期が3軒、同第4四半期が9軒、10世紀第1四半期が2軒である。概ね3か所程度に集中する。土坑は住居周辺が主体で、やや少ない。落ち込み状遺構2基のうち、2号落ち込み状遺構は9世紀後半の遺物を伴う特殊遺構であり、84号溝や周辺のピットとの関連が考慮される。9号井戸は中世の1号屋敷内に所在するが、9世紀後半を下限とし、方形に石組みを巡らす点で注目される。溝については、南西部に広域に及ぶ溝が集中する。住居に関しては、一般的な集落の範疇にあるが、7号井戸や84号溝などは、それを越えた位置づけを持つと思われる。

#### 1 竪穴住居

1区では竪穴住居が14軒検出され、すべて平安時代に

属する。分布は3か所程度に分散する。それぞれに重複が激しい。1～5号住居は北西部から北西端に分布する。6・7・11～13号住居は南西部に集中する。8～10・14号住居は南部中央に位置する。

1号住居(第12図、P.L. 2・120、第3表)

位置 28E-9グリッド。重複 2号住居より前出。

形態 2号住居と重複した結果、南半分は明確でないが、ほぼ隅丸方形と思われる。

主軸方位 N-75°-E

規模 面積6.36㎡ 長軸3.56m、短軸2.66m 残存壁高 東辺19cm・西辺14cm・北辺12cm

埋没土 残存深度が浅く、埋没状況は判断できない。

カマド 未検出 柱穴 未検出

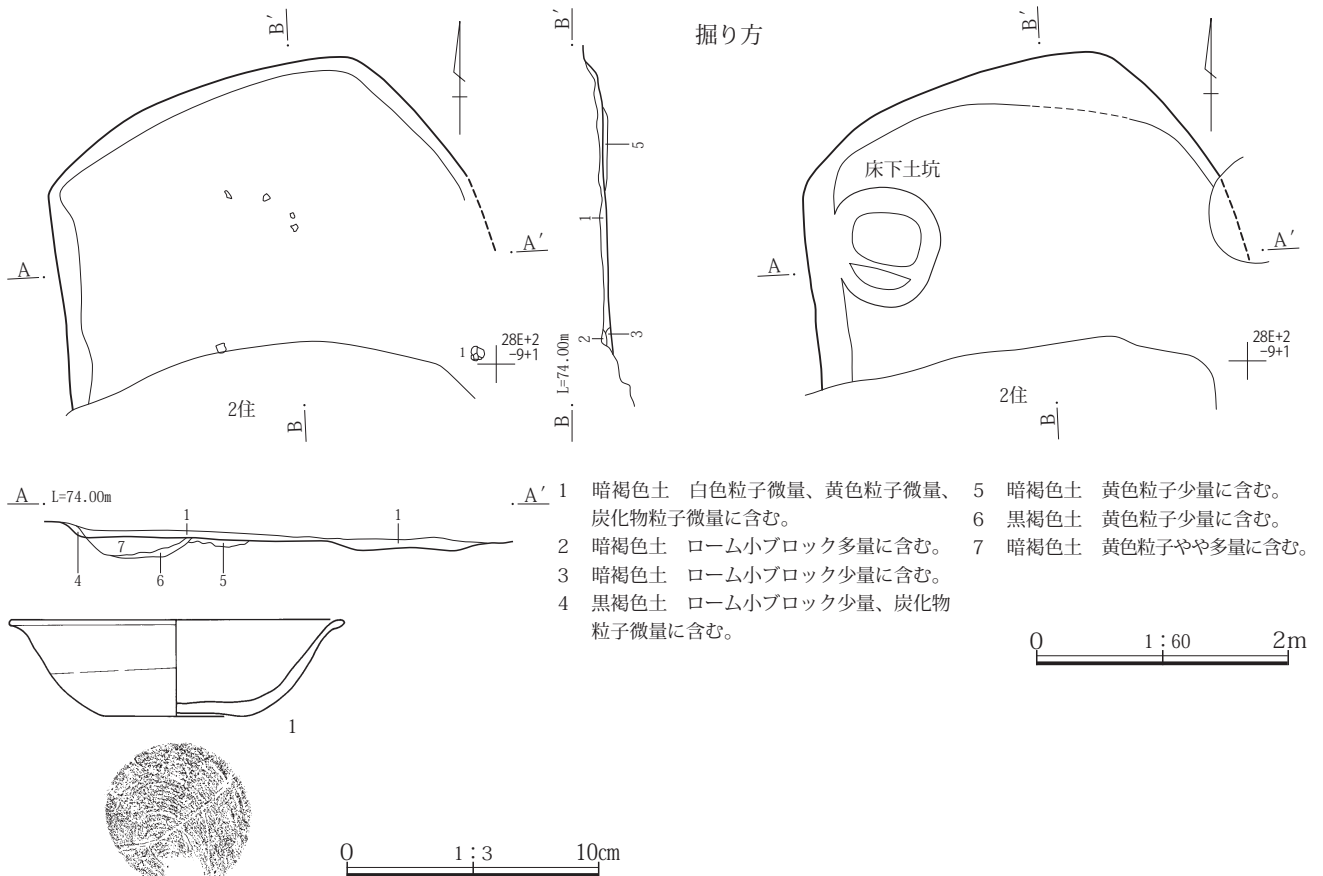
床 明確な硬化面等はなく、不明瞭。

床下土坑 北西部壁際に位置する。平面形は楕円形。底面はほぼ平坦。壁は斜めに立ち上がる。規模は長径94cm 短径86cm深さ18cmである。

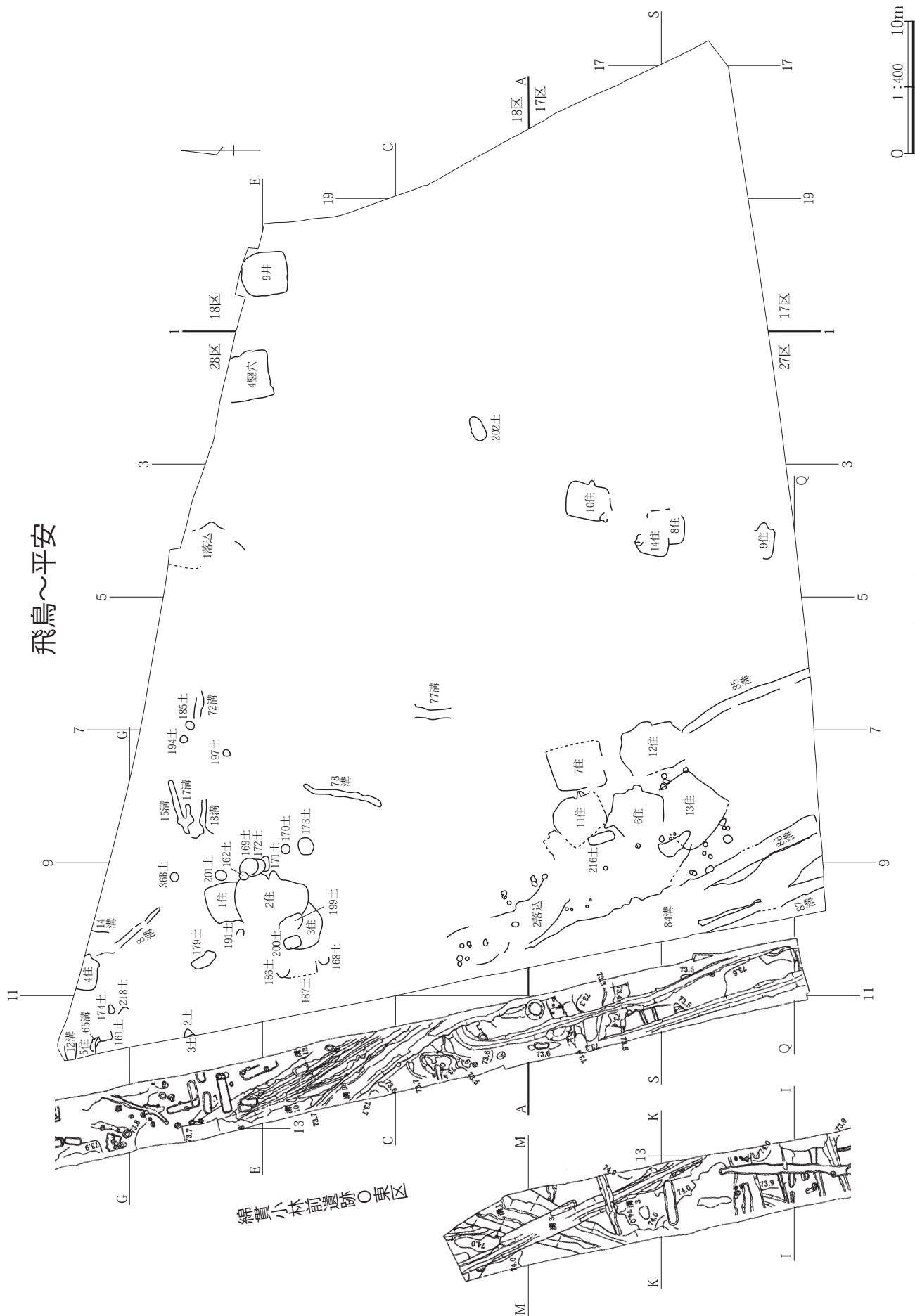
掘り方 全体に浅く、床下土坑を除き明瞭でない。

遺物 東壁寄りで1の須恵器碗が出土するほか、出土量は非常に少なく、中央北寄りにわずかに点在する。掲載

掘り方



第12図 1区1号住居と出土遺物



第13図 1区全体図(飛鳥~平安時代)

第3表 1区1号住居出土遺物

挿 図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘 要
第12図 PL.120	1	須恵器 椀	+2cm 口縁部3/5欠損	口 13.0 高 3.8 底 5.6	細砂粒・粗砂粒・ 長石/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	

遺物のほか、土師器杯椀類40片・壺甕類158片、須恵器杯椀類32片・壺甕類4片、近世在地系土器1片が出土する。

**時期** 出土遺物から9世紀第4四半期に比定される。

2号住居(第14～18図、P L. 2・3・120・121、第4表)

**位置** 28D・E-9グリッド。 **重複** 1・3号住居、162号土坑より後出。1号土坑、3号火葬跡、11号溝より前出。169・191・199号土坑と新旧関係不明。

**形態** 他遺構との重複が激しく、平面形はとらえにくい。概ね長方形に近い。

**主軸方位** N-85°-W

**規模** 面積(20.38)m<sup>2</sup> 長軸5.80m、短軸4.20m 残存壁高 東辺19～30cm・南辺32cm・北辺14cm

**埋没土** 自然埋没と考えられる。

**カマド** 東辺ほぼ中央に位置する。燃焼部の残存状態は良くない。規模は焚口～煙道が1.06m、袖焚口幅が46cmである。燃焼部奥では被熱した長細い礫が壁面として焼け、立位で残るが、散漫な状態で、奥壁に石はみられない。焚き口付近に崩落した大角礫があり、構築材であったとみられる。奥壁の立ち上がりはやや急である。

**貯蔵穴** カマド右脇で、東辺の中央南寄りに位置する。ほぼ円形で、壁は垂直ぎみに立ち上がる。規模は長軸65cm短軸60cm深さ25cmである。埋没土から整形痕のあるカマド石(18図31)が出土する。

**柱穴** 13基確認されるが、主柱穴はP 3、P 10～12で、P 10・11は南壁に近く設置される。柱穴の規模(長径・短径・深さcm) P 1 : 32・27・28、P 2 : 32・31・12、P 3 : 48・35・51、P 4 : 60・56・23、P 5 : 21・17・28、P 6 : 37・31・25、P 7 : 欠、P 8 : 30・22・31、P 9 : 45・37・11、P 10 : 30・27・29、P 11 : 33・26・32、P 12 : 33・27・37、P 13 : 32・28・47cmである。

**床** カマド前面から西壁にかけて、床面の中央部の1/3程度が硬化する。黒色土を主体とする貼り床あり。

**掘り方** カマド、貯蔵穴付近、および中央部、南壁寄り付近が、周囲より10cm程度低く掘り込まれる。

**遺物** カマドの右、貯蔵穴上面で壁際から土師器杯(17図3・5)、須恵器椀(17・18図16・21)が流れ込む形で重なって出土する。遺物の出土量は比較的多く、カマド周辺や中央部にやや集中し、カマドは土師器甕片が散在する。18図31は磚に似た石製品であり、カマドの掘り方から出土する。掲載遺物のほか、土師器杯椀類196片・壺甕類1,639片、須恵器杯椀類409片、灰釉陶器2片が出土する。また、近世国産陶磁器4片・同在地系土器3片、近現代その他土器類3片が混入していた。

**時期** 出土遺物から9世紀第4四半期に比定される。

3号住居(第14～16・19図、P L. 2～4・121、第5表)

**位置** 28D-9・10グリッド。 **重複** 2号住居、6・11号溝より前出。200号土坑、12号墓と新旧関係不明。

**形態** 重複により残存状態悪く不明。

**主軸方位** N-84°-W

**規模** 面積(7.38)m<sup>2</sup> 長軸5.75m、短軸4.30m 残存壁高 南辺20cm

**埋没土** 残存部分少なく、特徴を捉えられない。

**カマド** 未検出

**柱穴** 2号住居内に混在することも推測されるが、選別できないため、ほとんどは2号住居で扱う。柱穴の規模(長径・短径・深さcm) P 1 : 55・46・18cmである。

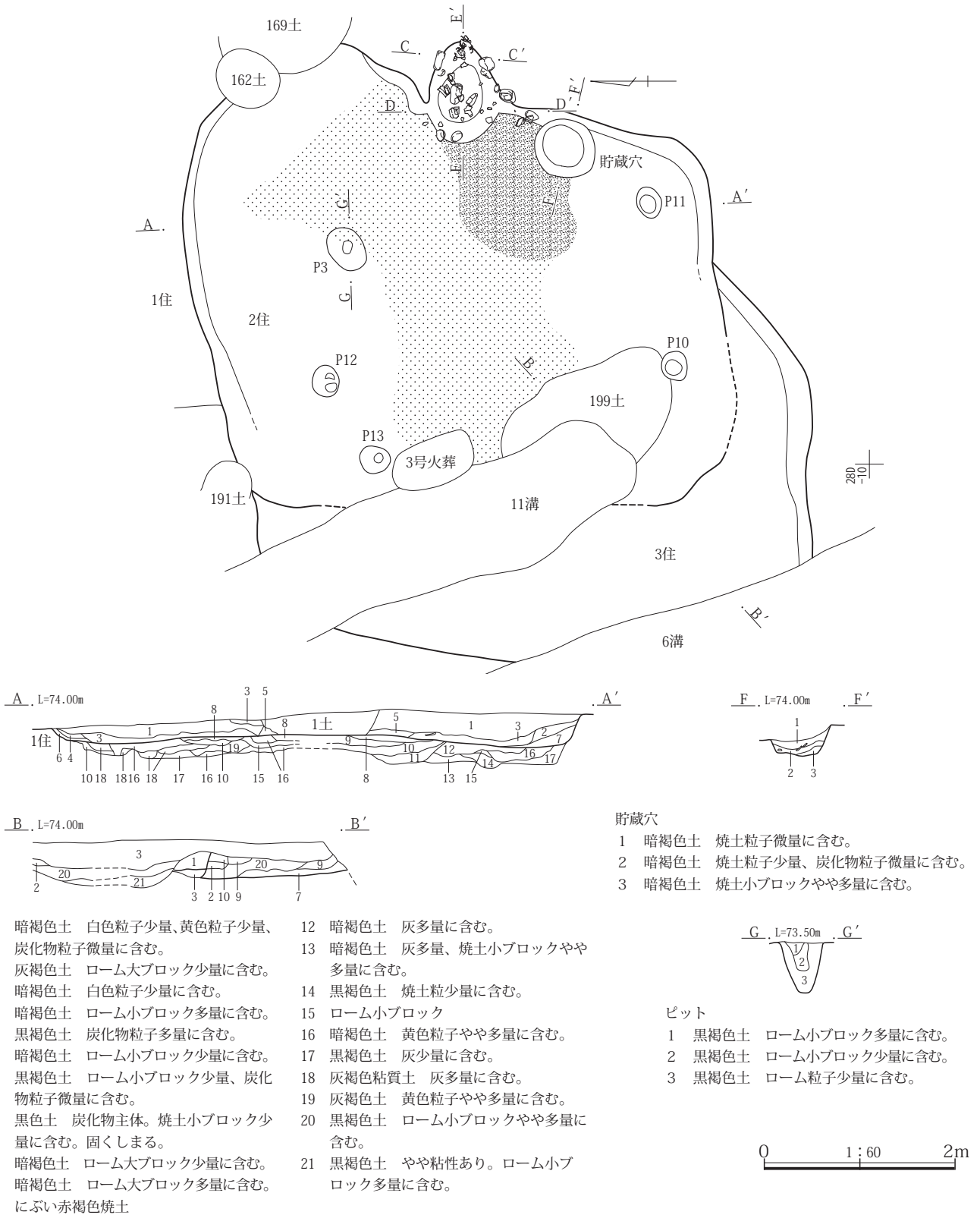
**床** 明確な硬化面等は見られず不明瞭。

**床下土坑** 南壁近くにあり、ほぼ円形を呈する。規模は長軸71cm短軸65cm深さ22cmである。

**掘り方** 全体に浅く不明瞭。

**遺物** 残存面積に比して、やや多く出土する。掲載遺物のほか、土師器杯椀類138片・壺甕類617片、須恵器杯椀類75片・壺甕類4片が出土する。

**時期** 出土遺物から9世紀第3四半期に比定される。

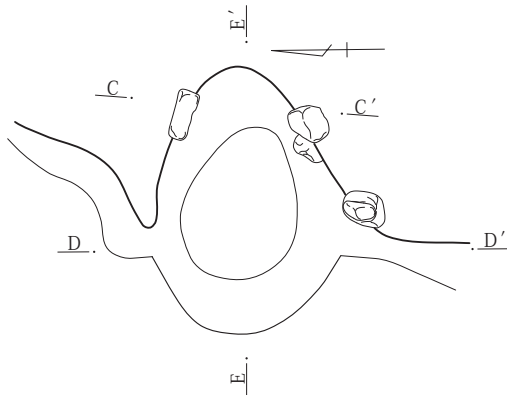


第14図 1区2・3号住居

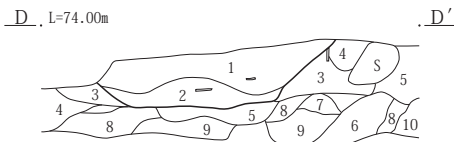
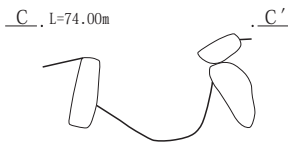
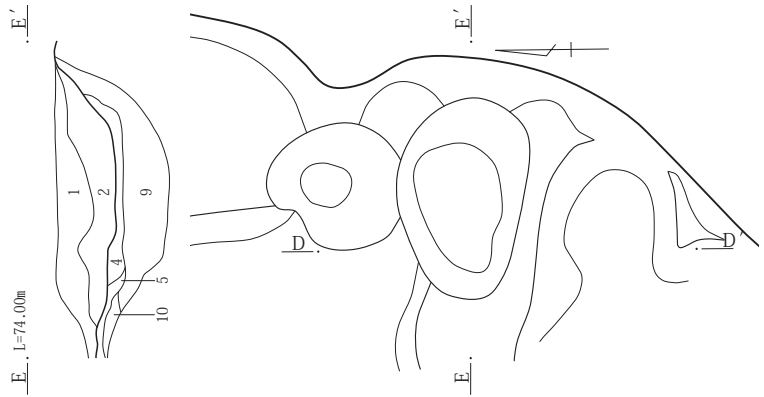
遺物出土状態



カマド

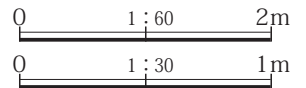


カマド掘り方

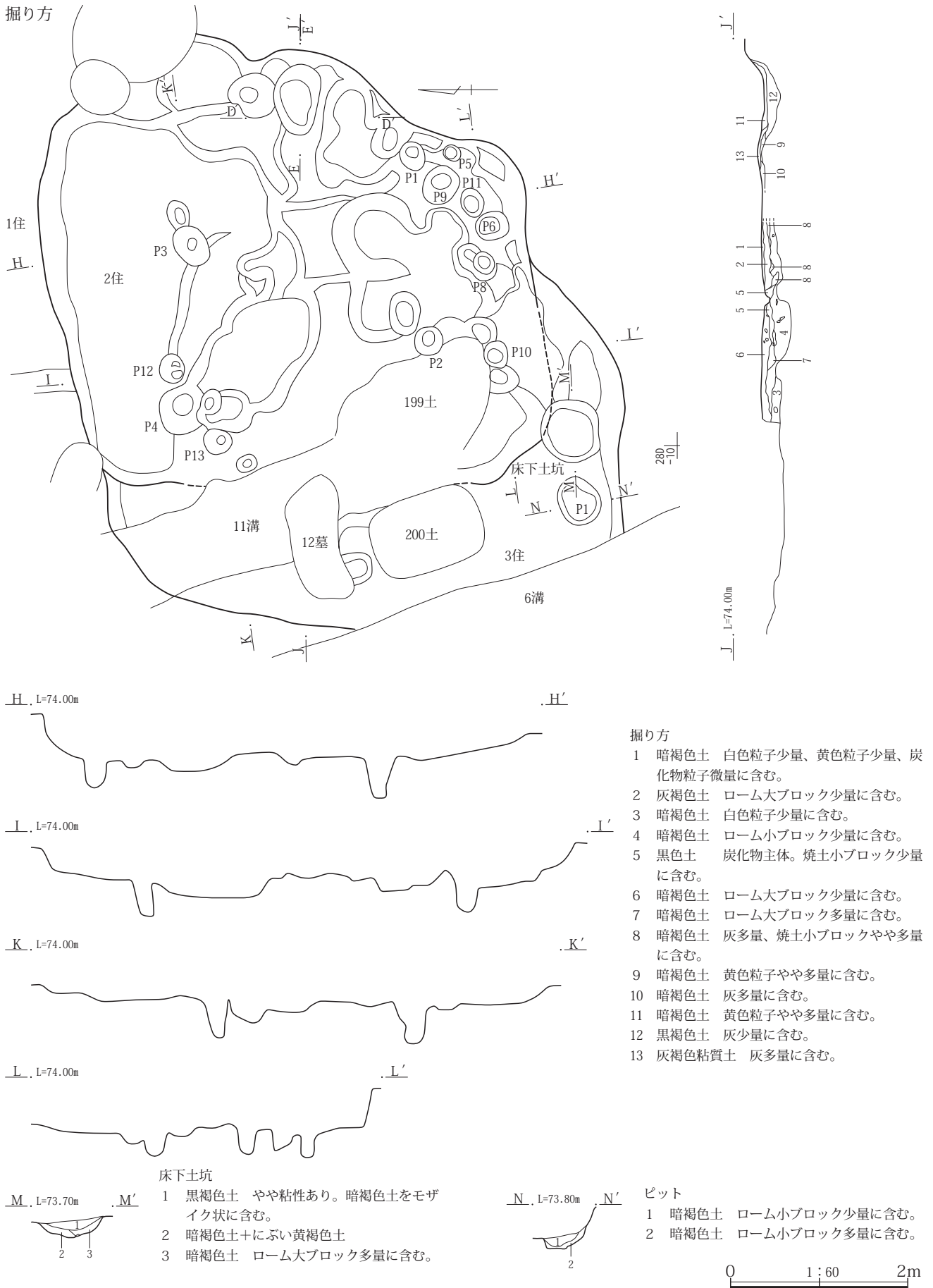


カマド

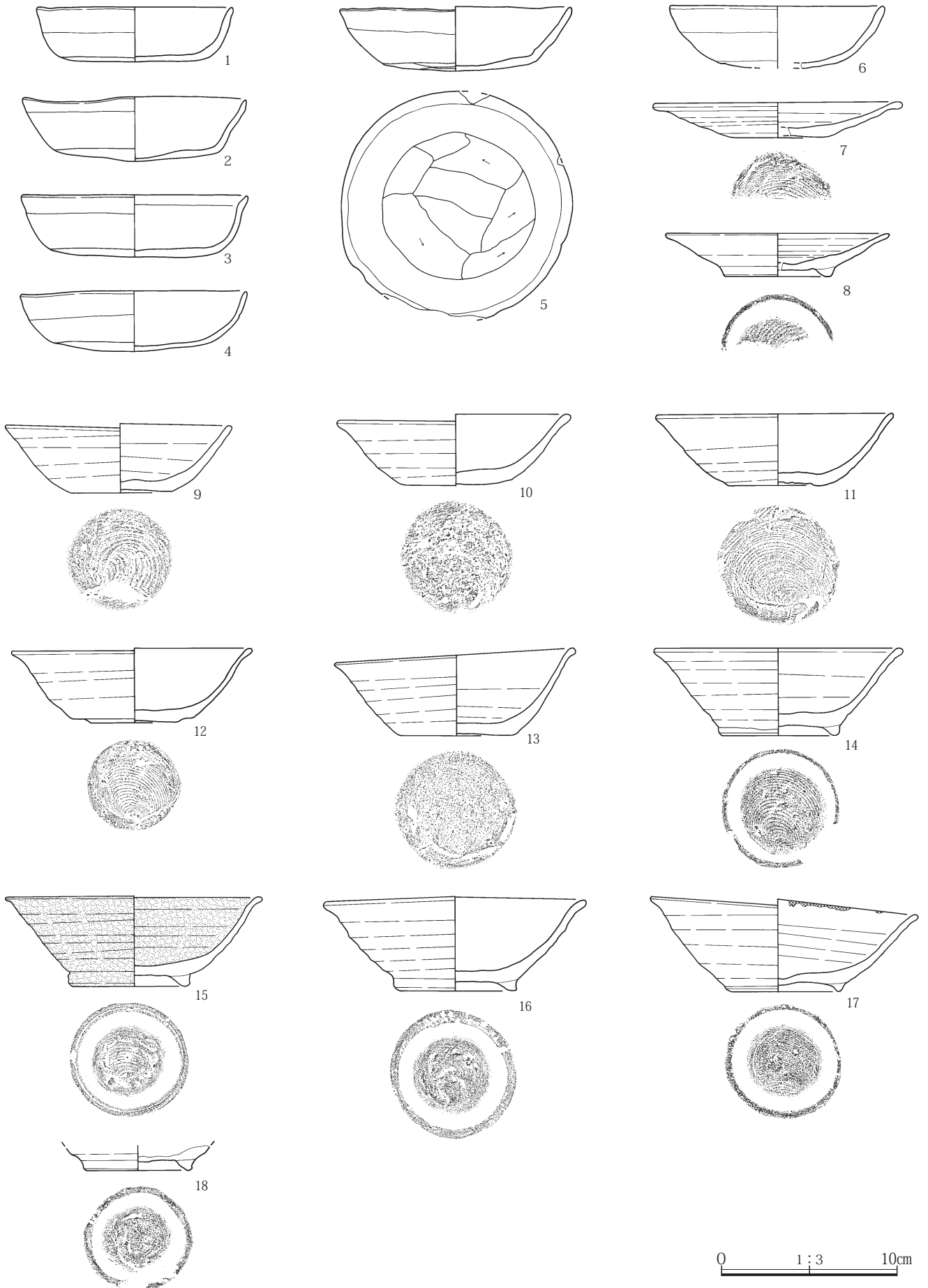
- 1 暗褐色土 白色粒子少量に含む。
- 2 暗褐色土 焼土粒子少量、炭化物粒子少量に含む。
- 3 暗褐色土 灰やや多量に含む。
- 4 暗褐色土 黄色粒子やや多量に含む。
- 5 灰褐色土 灰多量に含む。
- 6 暗褐色土 灰やや多量、焼土粒少量に含む。
- 7 灰褐色土 灰多量に含む。
- 8 暗褐色シルト質土
- 9 黒褐色土 灰少量に含む。
- 10 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。



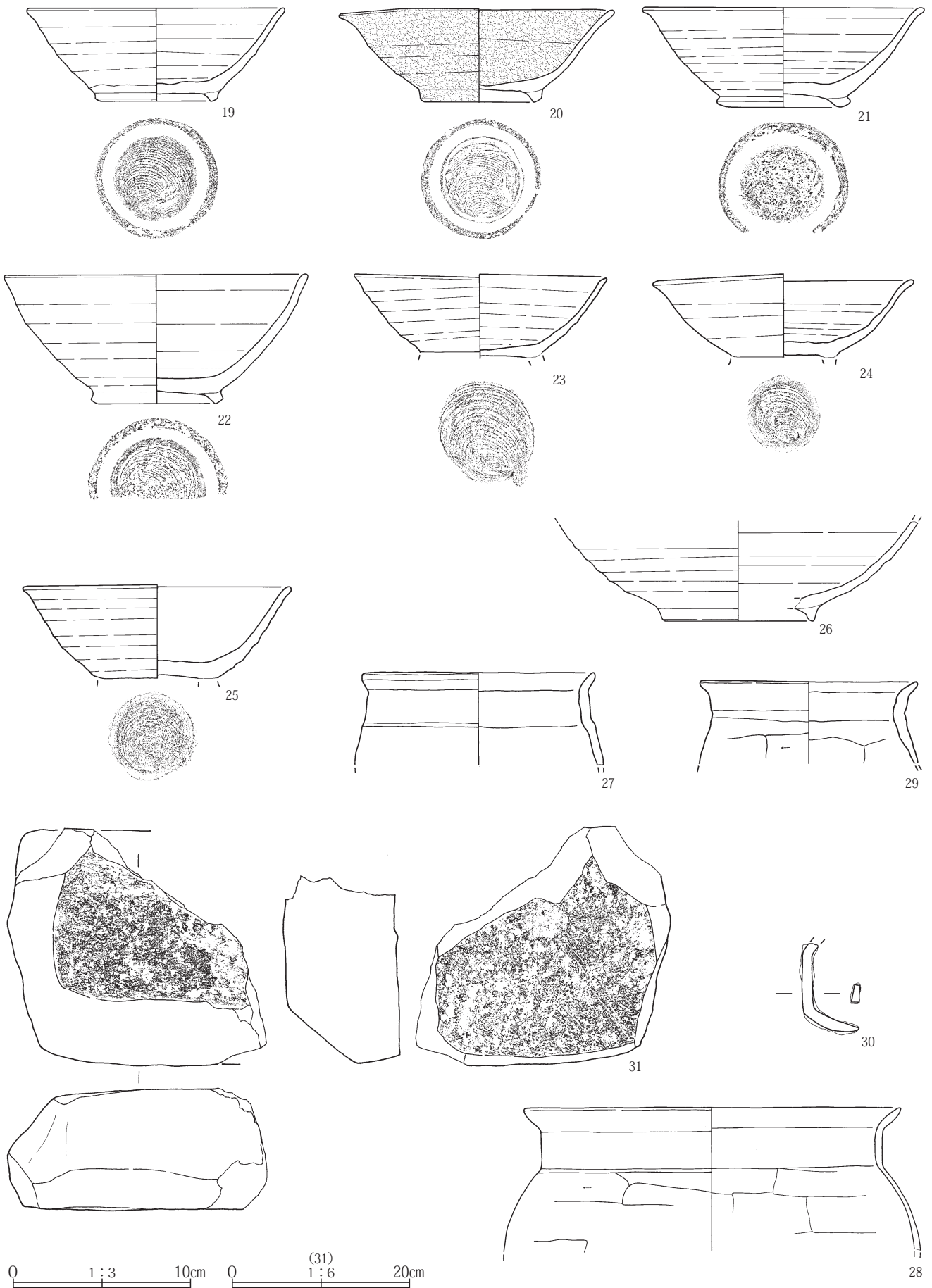
第15図 1区2・3号住居遺物出土状態・カマド



第16図 1区2・3号住居掘り方



第17図 1区2号住居出土遺物(1)



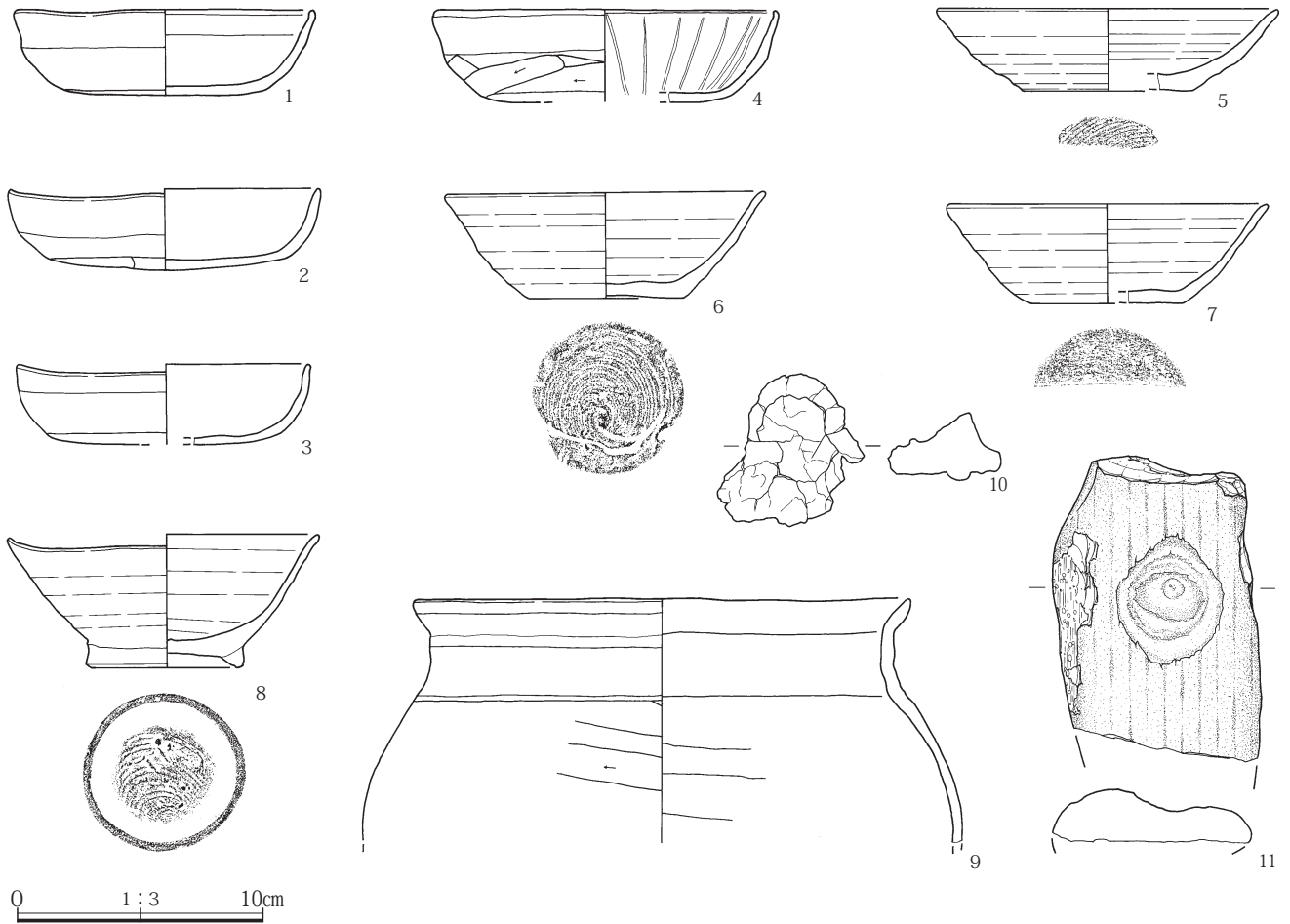
第18図 1区2号住居出土遺物(2)



第4表 1区2号住居出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴			摘要
第17図 PL.120	1	土師器 杯	床直上 1/3	口 10.8 底 8.4	高 3.0	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。			
第17図 PL.120	2	土師器 杯	床直上 2/3	口 12.5 底 8.4	高 3.6	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。			
第17図 PL.120	3	土師器 杯	貯蔵穴 3/4	口 12.6 底 9.6	高 3.5	細砂粒・褐色粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。			
第17図 PL.120	4	土師器 杯	+8cm 2/3	口 12.6 底 9.4	高 3.4	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。			
第17図 PL.120	5	土師器 杯	貯蔵穴 ほぼ完形	口 12.9 底 8.6	高 3.6	細砂粒・軽石/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。			
第17図 PL.120	6	土師器 杯	+1cm 1/4	口 12.0 底 7.0		細砂粒・褐色粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。			
第17図 PL.120	7	須恵器 皿	+10cm 1/3	口 13.6 底 5.0	高 1.9	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。			
第17図 PL.120	8	須恵器 皿	+10cm 1/4	口 12.4 底 5.9	高 2.4 台 5.9	細砂粒・角閃石/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。			
第17図 PL.120	9	須恵器 椀	床直上 口縁部1/3欠損	口 12.5 底 5.6	高 3.8	細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。			
第17図 PL.120	10	須恵器 椀	+12cm 口唇部を僅かに欠損	口 12.8 底 6.4	高 4.0	細砂粒・粗砂粒・褐色粒/還元焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整か。			
第17図 PL.120	11	須恵器 椀	+1cm 口縁部1/4欠損	口 13.1 底 5.4	高 4.0	細砂粒・粗砂粒・角閃石/還元焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。			
第17図 PL.120	12	須恵器 椀	+2cm 口縁部2/5欠損	口 13.3 底 5.0	高 4.2	細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。			底部は疑似高台状を呈す。
第17図 PL.120	13	須恵器 椀	+2cm 口縁部1/2欠損	口 13.3 底 6.8	高 4.9	細砂粒・粗砂粒・チャート/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整か。			
第17図 PL.120	14	須恵器 椀	床直上 1/3	口 13.6 底 6.4	高 4.9 台 6.4	細砂粒・粗砂粒・長石/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。			
第17図 PL.120	15	須恵器 椀	床直上 2/3	口 14.1 底 6.4	高 5.1 台 6.4	細砂粒・粗砂粒/還元焰・燻/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。			
第17図 PL.120	16	須恵器 椀	貯蔵穴 口唇部1/4欠損	口 14.5 底 6.7	高 5.3 台 6.7	細砂粒/酸化焰/にぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。			
第17図 PL.120	17	須恵器 椀	床直上 口唇部1/4欠損	口 14.8 底 7.0	高 5.3 台 7.0	細砂粒・粗砂粒・片岩/酸化焰/にぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。			
第17図 PL.120	18	須恵器 椀	+1cm 底部	口 14.0 底 5.8		細砂粒・粗砂粒・長石/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。			
第18図 PL.120	19	須恵器 椀	床直上 1/2	口 14.2 底 6.2	高 5.2 台 6.2	細砂粒/酸化焰きみ/にぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。			
第18図 PL.120	20	須恵器 椀	+2cm 3/4	口 15.0 底 6.0	高 5.2 台 6.0	細砂粒・粗砂粒・片岩/還元焰・燻/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。			
第18図 PL.120	21	須恵器 椀	床直上 1/2	口 15.4 底 6.4	高 5.6 台 6.4	細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切りか。			
第18図 PL.120	22	須恵器 椀	1/5	口 16.7 底 6.6	高 7.2 台 6.6	細砂粒・粗砂粒・長石/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。			
第18図 PL.120	23	須恵器 椀	+1cm 高台欠損	口 14.0 底 6.8		細砂粒・粗砂粒/還元焰・燻/黒褐	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付が剥落、底部は回転糸切り。			
第18図 PL.120	24	須恵器 椀	+15cm 口縁部一部と高台欠	口 14.3 底 5.9		細砂粒/還元焰・燻/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付が剥落、底部は回転糸切り。			高台の剥落カ所を擦り磨いて再利用か。
第18図 PL.120	25	須恵器 椀	+13cm 口縁部1/3と高台欠	口 14.3 底 5.10		細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付が剥落、底部は回転糸切り。			
第18図 PL.120	26	須恵器 椀	+24cm 高台～体部片	口 8.4 底 8.0		細砂粒・片岩・長石/酸化焰/にぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回りか。高台は貼付。			
第18図 PL.121	27	土師器 小型甕	床直上 口縁部～胴部上位片	口 12.8		細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。			
第18図 PL.121	28	土師器 甕	+5cm 口縁部～胴部上位片	口 21.0		細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。			
第18図 PL.121	29	土師器 小型甕	床直上 口縁部～胴部上位片	口 12.0		細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。			
第18図 PL.121	30	鉄製品 釘か	先端部片	長 4.0 幅 0.4			断面は方形で、基部が欠損しており、L字形に曲がっている。			
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況	備考
第18図 PL.121	31	不明石製品			角閃石安山岩	26.7	(28.8)	6750.0	火輪状の外観を呈しているが、軒稜部が直線的でなく、また、隅棟は丸味を帯びる。裏面側に径5cm程度の浅い凹み部がある。上面は整形後の磨滅が著しい。左辺側側縁は礫面が残り、整形されていない。性格不明。	

第4章 発掘調査の記録



第19図 1区3号住居出土遺物

第5表 1区3号住居出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要			
第19図 PL.121	1	土師器 杯	+7cm 4/5	口 12.0 高 3.4 底 8.0	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。				
第19図 PL.121	2	土師器 杯	+6cm 3/4	口 12.4 高 3.2 底 9.6	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。				
第19図 PL.121	3	土師器 杯	+3cm 5/6	口 11.6 高 3.2 底 9.6	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。				
第19図 PL.121	4	土師器 杯	+5cm 1/4	口 13.7 底 9.6	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。内面は 底部から口縁部に放射状暗文。				
第19図 PL.121	5	須恵器 杯	床直上 1/5	口 13.6 高 3.3 底 6.8	細砂粒・小礫・角 閃石/やや酸化焰 ぎみ/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。				
第19図 PL.121	6	須恵器 椀	床直上 口縁部一部欠損	口 12.8 高 4.3 底 6.2	細砂粒・粗砂粒・ 角閃石/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。				
第19図 PL.121	7	須恵器 椀	床直上 3/4	口 12.8 高 4.0 底 6.2	細砂粒・白色粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整か。				
第19図 PL.121	8	須恵器 椀	+4cm 3/4	口 12.4 高 5.4 台 5.6	細砂粒・小礫・片 岩・長石/還元焰/ 灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。				
第19図 PL.121	9	土師器 甕	床直上 口縁部-胴部上 位片	口 19.9 胴 24.1	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。				
第19図 PL.121	10	鉄製品 不明	不明	長 4.1 幅 3.3 厚 1.6		不整形でひび割れが顕著。形状は不明瞭。鋳造品の可能性 が高い。				
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況	備考
第19図 PL.121	11	石製品	+3cm	扁平礫	雲母石英片 岩	(12.3)	8.4	356.9	背面側に径5cm前後の浅い孔を穿つ。左側縁・上 面に著しい敲打痕。	

4号住居(第20図、P L. 4・5・122、第6表)

位置 28G-10グリッド。重複 18号土坑、24号ピットより前出。7号ピットも状況から後出か。

形態 北側半分が調査区域外となるが、方形。

主軸方位 N-79°-W

規模 面積(2.54) m<sup>2</sup> 長軸2.42m、短軸1.33m 残存壁高 西辺18cm・南辺23cm

埋没土 自然埋没と考えられる。

カマド 東辺中央付近と推定される。7号ピットが重複した関係で、遺構把握に影響あり。規模は焚口～煙道が73cm、袖焚口幅が34cmである。奥壁は垂直ぎみに立ち上がる。構築材となる石などはない。

貯蔵穴 南東隅部に位置する。東西に細長い楕円形で、東端はやや四角ぎみ。規模は長軸66cm短軸31cm深さ32cmである。柱穴 なし 床 ローム面を床とする。硬化面特段なし。

掘り方 ほとんど認められない。

遺物 カマドで土師器甕(3)、須恵器羽釜(4)が出土するが、全体として出土量は少ない。掲載遺物のほか、土師器杯椀類31片・壺甕類58片、須恵器杯椀類29片・壺甕類9片が出土する。

時期 出土遺物から10世紀第1四半期に比定される。

5号住居(第21図、P L. 5・6・122、第7表)

位置 28G-11グリッド。重複 6・12・65号溝より前出。

形態 残存部分が少なく不明。

主軸方位 N-88°-E

規模 面積(6.32) m<sup>2</sup> 長軸2.80m、短軸2.75m 残存壁高 南辺12cm

埋没土 観察部分も短い、自然埋没と考えられる。

カマド 当初南辺に想定したが、未検出。

貯蔵穴 南西隅近くに位置する。東西に長い楕円形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模は長軸61cm短軸49cm深さ20cmである。

柱穴 2基確認できた。柱穴の規模(長径・短径・深さcm) P 1 : 25・24・14、P 2 : 49・(30)・41cm

床 明確な硬化面等は認められない。

掘り方 貯蔵穴付近で、周辺より深さ10cm程度掘り込む。

遺物 貯蔵穴内で須恵器羽釜(4)、P 2で須恵器椀(1・

2)が出土するが、重複も関係して出土量は少ない。掲載遺物のほか、土師器杯椀類12片・壺甕類39片、須恵器杯椀類8片・壺甕類6片が出土する。また、近世在地系土器1片が混入していた。

時期 出土遺物から10世紀第1四半期に比定される。

6号住居(第22～24図、P L. 6・122・123、第8表)

位置 27R・S-7・8グリッド。重複 2号落ち込み状遺構、6号溝より前出。カマド南側に近時の攪乱があり、遺物まで攪拌された状況がある(土師器甕など)(12・13)。このため、その周辺の遺物出土状況に乱れがある。

形態 ほぼ正方形に近い。

主軸方位 N-89°-E

規模 面積(9.78) m<sup>2</sup> 長軸3.90m、短軸3.24m 残存壁高 東辺28cm・南辺30cm・北辺13cm

埋没土 同様な土で埋まり、人為埋没の可能性も残し、自然埋没と判別つかない。

カマド 東辺中央に位置する。両袖とも全く残存しない。規模は焚口～煙道が1.04m、袖焚口幅が59cmである。奥壁は急に立ち上がる。掘り方は整った方形をなす。

貯蔵穴 南東隅部に位置する。乱れた楕円形で、浅く断面は丸みを持つ。規模は長軸54cm短軸42cm深さ16cmである。

内土坑 南西に位置する。やや整った方形をなす。規模は長軸(85)cm短軸63cm深さ13cmである。

柱穴 5基が確認されるが、P 1・2・5は外郭線と重なり、伴うものか不明。柱穴の規模(長径・短径・深さcm) P 1 : 36・28・30、P 2 : 42・30・12、P 3 : 27・13・29、P 4 : 30・28・26、P 5 : 26・25・29cm

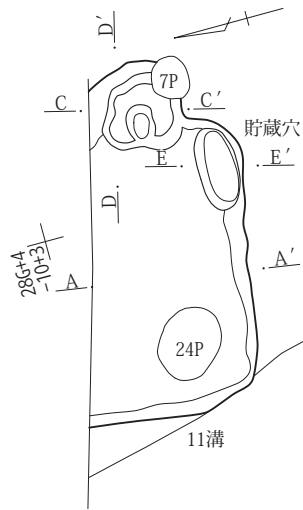
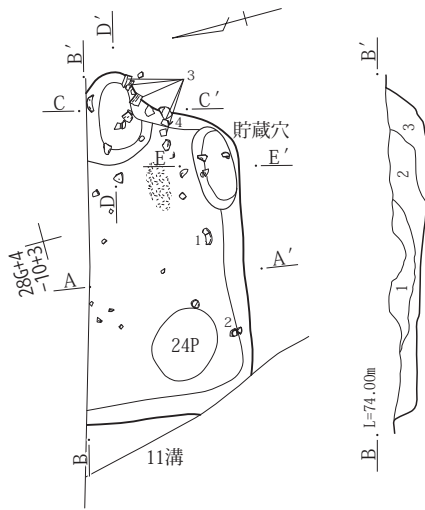
床 全体にしまるが、硬化面ではない。

掘り方 貯蔵穴や内土坑周辺、および中央部、西側中央部が、周辺より20cm程度低く掘り込まれる。

遺物 カマド内部・周辺と、中央部にやや集中する。土師器甕が比較的多い特徴を持つが、全体として破片が散乱する。掲載遺物のほか、土師器杯椀類164片・壺甕類617片、須恵器杯椀類105片・壺甕類17片が出土する。また、近現代土器類1片が混入していた。

時期 出土遺物から9世紀第4四半期に比定される。

掘り方



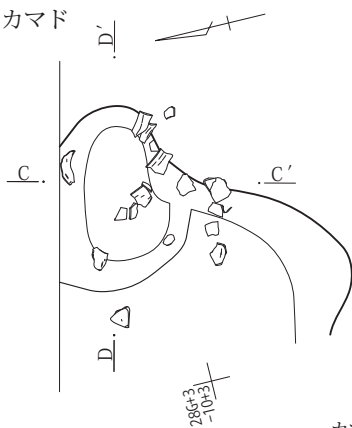
- 1 暗褐色土 白色粒子微量に含む。  
 2 暗褐色土 黄色粒子少量に含む。  
 3 暗褐色土 ローム大ブロックやや多量に含む。

- 貯蔵穴  
 1 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。  
 2 褐灰色土 ローム小ブロックやや多量に含む。

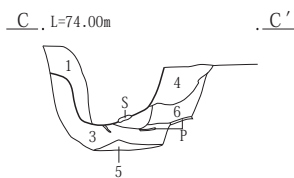
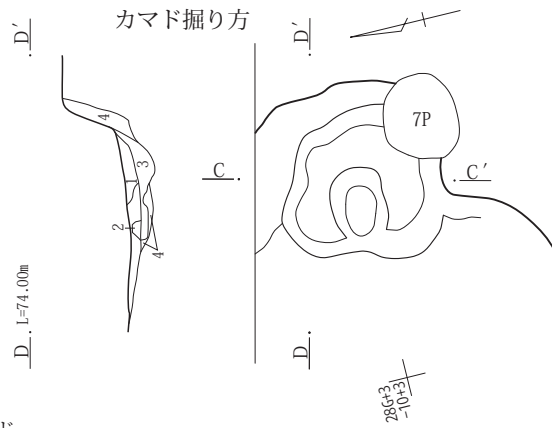
掘り方

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。

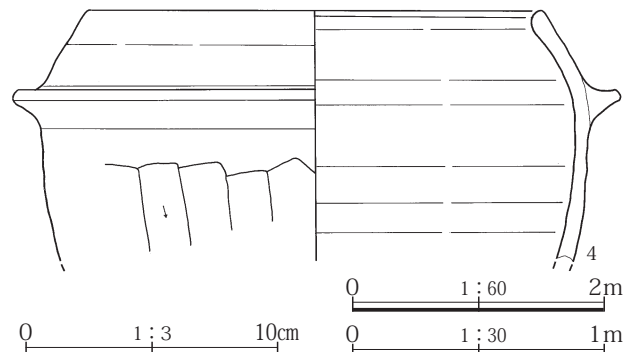
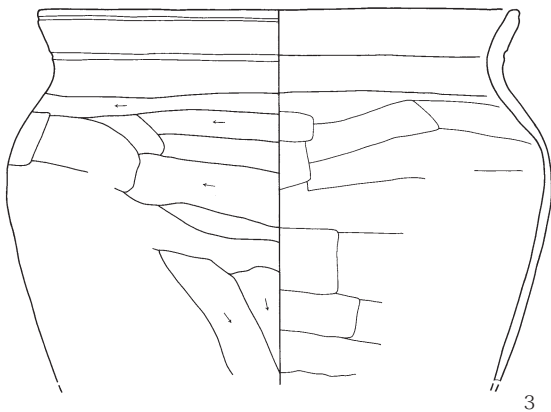
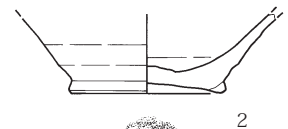
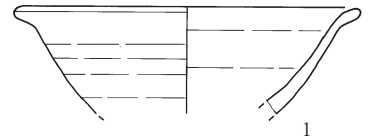
カマド



カマド掘り方



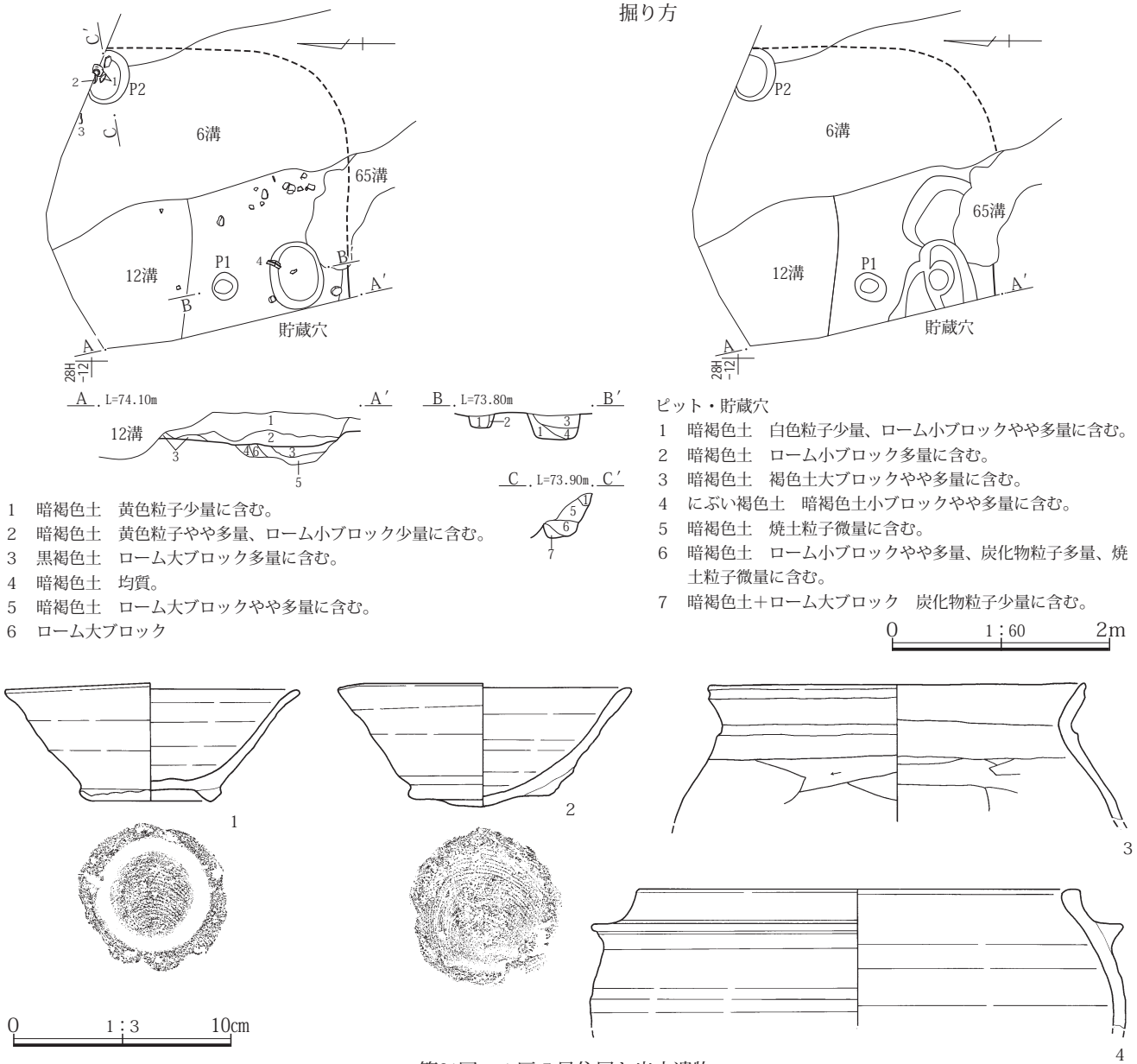
- カマド  
 1 暗褐色土 灰少量に含む。  
 2 ローム大ブロック  
 3 暗褐色土 灰多量、焼土小ブロック多量に含む。  
 4 暗褐色土 黄色粒子やや多量に含む。  
 5 暗褐色土 焼土小ブロック多量、ローム小ブロック多量に含む。  
 6 暗褐色土 灰多量に含む。



第20図 1区4号住居と出土遺物

第6表 1区4号住居出土遺物

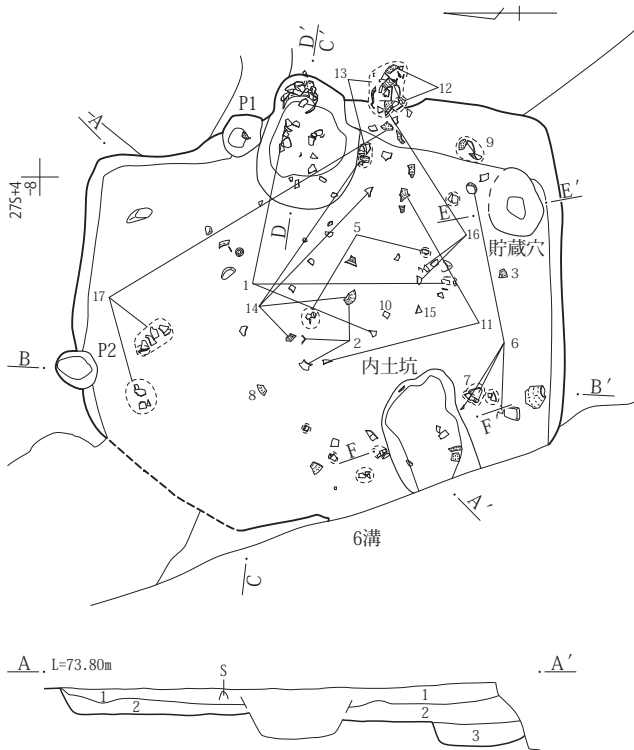
挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第20図 PL.122	1	須恵器 椀	+2cm 口縁部～体部片	口 13.2	細砂粒・粗砂粒・ 片岩/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。	
第20図 PL.122	2	須恵器 椀	+6cm 底部～体部片	底 6.0 台 5.8	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
第20図 PL.122	3	土師器 甗	カマド 口縁部～胴部中位	口 18.6 胴 21.4	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。	
第20図 PL.122	4	須恵器 羽釜	+7cm 口縁部～胴部上 位片	口 17.9 鏑 24.0	細砂粒・粗砂粒・ 長石/酸化焰/明黄 褐	ロクロ整形、回転右回りか。鏑は貼付、胴部は縦位のヘラ 削り。	



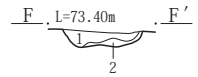
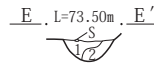
第21図 1区5号住居と出土遺物

第7表 1区5号住居出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第21図 PL.122	1	須恵器 椀	P 2 5/6	口 13.2 高 5.3 台 5.4	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。古代は貼付、底部は回転糸切り。	
第21図 PL.122	2	須恵器 椀	P 2 口縁部4/5欠損	口 13.1 高 5.6 台 6.8	細砂粒・粗砂粒・ 長石/酸化焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	高台は雑な整形。
第21図 PL.122	3	土師器 甗	+3cm 口縁部～胴部上 位片	口 17.0	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。	
第21図 PL.122	4	須恵器 羽釜	貯蔵穴 口縁部～胴部上 位片	口 20.0 鏑 24.2	細砂粒・長石/酸 化焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回りか。高台は貼付。	

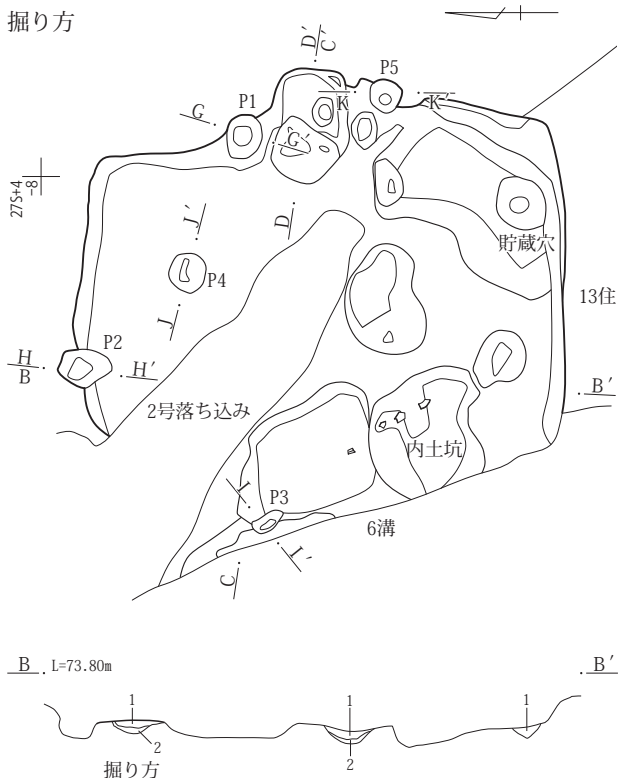


- 1 灰褐色土 やや堅くしまる。粘性あり。白色粒子・ローム粒子を含む。
- 2 灰褐色土 やや堅くしまる。粘性あり。ローム粒子・炭化物粒子・焼土粒子を含む。
- 3 暗褐色土 やや堅くしまる。ローム粒子を含む。

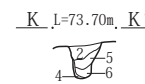
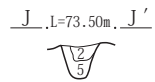
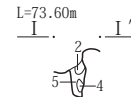
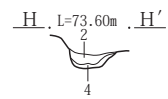
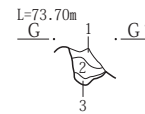


貯蔵穴・内土坑

- 1 暗褐色土 やや堅くしまる。ローム粒子を含む。
- 2 暗褐色土 やや堅くしまる。粘性あり。ローム粒子・炭化物粒子・焼土粒子を含む。

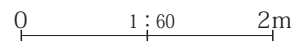


- 掘り方
- 1 灰褐色土 やや堅くしまる。黄白色粒子・ローム粒子を含む。
  - 2 黄白色土 やや堅くしまる。粘性あり。
  - 3 暗褐色土 しまりよい。ローム小ブロック・焼土小ブロック・灰を含む。
  - 4 暗褐色土 やや堅くしまる。粘性あり。ローム粒子・焼土粒子少量を含む。

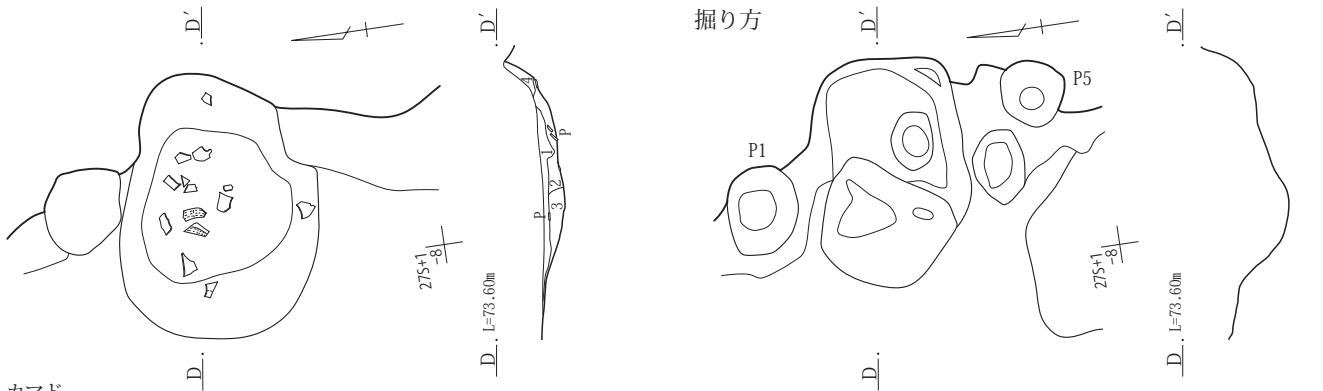


ピット

- 1 暗褐色土 やや堅くしまる。ローム粒子多量、焼土粒子少量を含む。
- 2 灰褐色土 粘性あり。ローム粒子少量を含む。
- 3 灰褐色土 粘性あり。ローム小ブロックを含む。
- 4 黄褐色土 粘性あり。
- 5 暗褐色土 粘性あり。黄白色粒子を含む。
- 6 灰色土 やや堅くしまる。粘性あり。ローム粒子・灰白色粒子少量を含む。

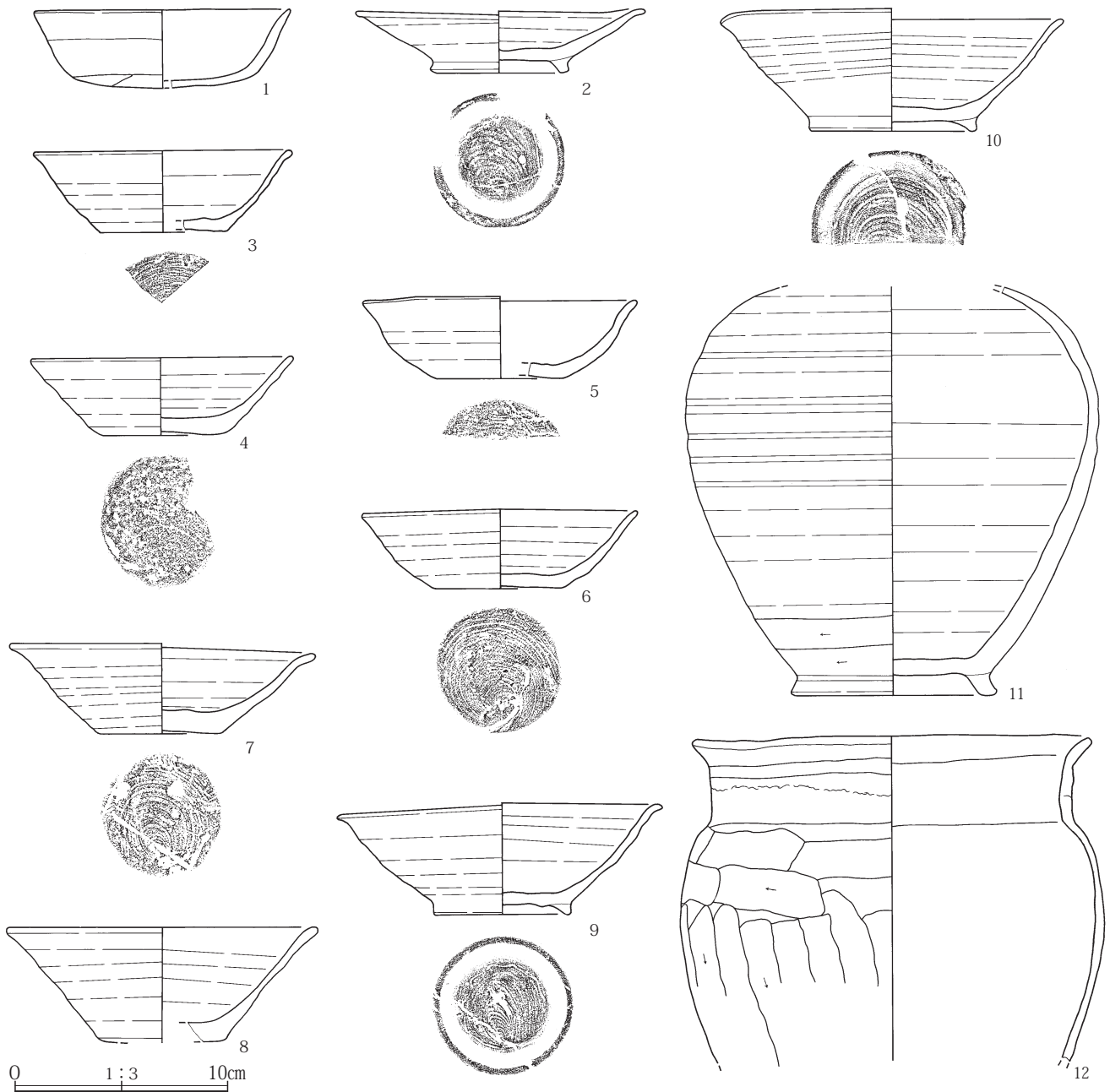
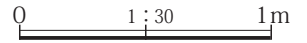


第22図 1区6号住居

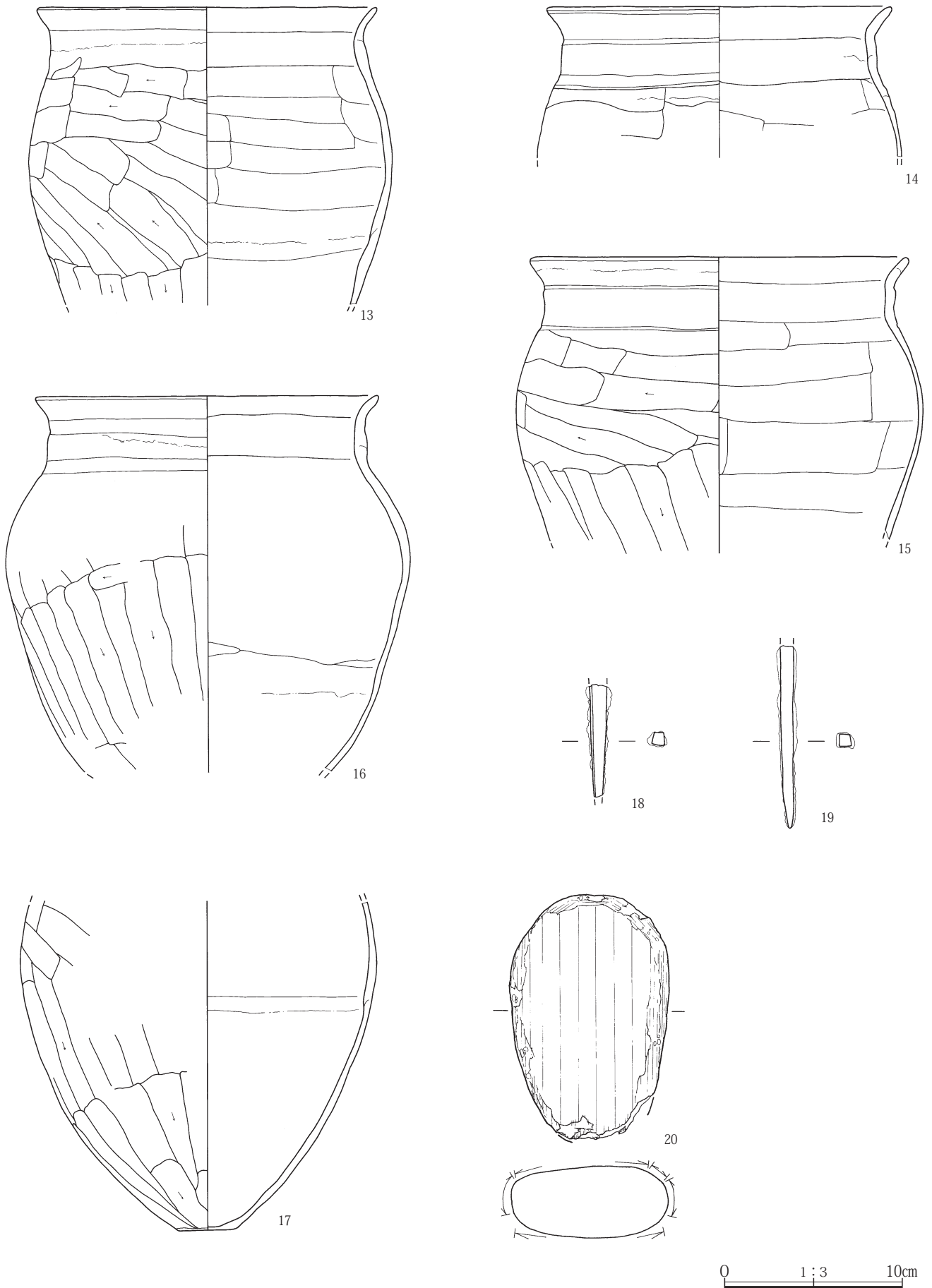


カマド

- 1 灰褐色土 やや堅くしまる。粘性あり。焼土小ブロックを含む。 3 灰褐色土 しまりよい。粘性あり。焼土小ブロック少量を含む。  
 2 灰褐色土 しまりよい。粘性あり。焼土粒子を含む。 4 灰褐色土 堅くしまる。ローム粒子・白色粒子を含む。



第23図 1区6号住居カマドと出土遺物(1)



第24図 1区6号住居出土遺物(2)



第8表 1区6号住居出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調		成形・整形の特徴		摘要
第23図 PL.122	1	土師器 杯	+5cm 1/3	口 底	11.8 8.6	高 台	3.6 5.6	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第23図 PL.122	2	須恵器 皿	+1cm 口縁部1/4欠損	口 底	13.3 6.0	高 台	2.9 5.6	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
第23図 PL.122	3	須恵器 杯	+4cm 口縁部～底部片	口 底	11.8 6.0	高 台	3.7 5.6	細砂粒・長石/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第23図 PL.122	4	須恵器 杯	フク土 1/3	口 底	12.0 6.0	高 台	3.6 5.6	細砂粒/酸化焰/ にぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第23図 PL.122	5	須恵器 杯	床直上 1/3	口 底	12.6 6.0	高 台	3.8 5.6	細砂粒/還元焰/ 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第23図 PL.122	6	須恵器 杯	床直上 口縁部1/4欠損	口 底	12.5 5.9	高 台	3.7 5.6	細砂粒・白色粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第23図 PL.122	7	須恵器 杯	+2cm 3/4	口 底	14.0 5.9	高 台	4.2 5.6	細砂粒・白色粒/ 還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第23図 PL.122	8	須恵器 椀	19cm 1/4	口 底	14.2 6.0	高 台	5.3 5.6	細砂粒・角閃石/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部はナデか。	
第23図 PL.122	9	須恵器 椀	+7cm ほぼ完形	口 底	14.8 5.2	高 台	5.2 5.8	細砂粒/還元焰/ 灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。底部は回転糸切り。	
第23図 PL.122	10	須恵器 椀	+19cm 1/3	口 底	15.8 7.8	高 台	5.7 7.8	細砂粒・黒色粒/ 還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
第23図 PL.123	11	須恵器 長頸壺	+6cm 底部～胴部	底 台	9.0 9.4	胴	19.2	細砂粒・粗砂粒・ 角閃石/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転ヘラナデ、胴部下位に2段の回転ヘラ削り。	
第23図 PL.123	12	土師器 甕	+1cm 口縁部～胴部中位	口 胴	18.2 19.6			細砂粒/良好/橙	外面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第24図 PL.123	13	土師器 甕	+1cm 口縁部～胴部中位	口 胴	18.8 20.2			細砂粒・角閃石/ 良好/橙	外面頸部と内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第24図 PL.123	14	土師器 甕	+13cm 口縁部～胴部上位片	口	19.2			細砂粒/良好/橙	内外面に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第24図 PL.123	15	土師器 甕	+1cm 口縁部～胴部中位	口 胴	20.8 22.5			細砂粒/良好/ にぶい赤褐	外面口縁部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第24図 PL.123	16	土師器 甕	+1cm 口縁部～胴部下位片	口 胴	19.0 22.5			細砂粒/良好/橙	外面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第24図 PL.123	17	土師器 甕	+1cm 底部～胴部中位	底 胴	3.2 19.8			細砂粒・褐色粒/ 良好/ にぶい橙	内面胴部に輪積み痕が残る。底部から胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ、器面磨滅のため単位不明。	底面の平面形状は楕円形を呈す。
第24図 PL.123	18	鉄製品 釘か	カマド一括 先端部片	長	4.1	幅	0.6		断面は方形で、基部側と先端部を欠損している。	
第24図 PL.123	19	鉄製品 釘か	床直上 先端部片	長	6.7	幅	0.6		断面方形で、基部側を欠損している。	
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況	備考
第24図 PL.123	20	磨石	+3cm	楕円偏平礫	粗粒輝石安山岩	13.6	8.8	770.4	側縁の研磨が顕著で、稜形成。小口部・打痕の稜は摩耗が著しい。	

7号住居(第25～27図、P.L.7・124、第9表)

位置 27S・T-7グリッド。重複 73・74号土坑、39号溝より前出。

形態 南北に長い長方形をなす。

主軸方位 N-68°-E

規模 面積(13.56)㎡ 長軸4.35m、短軸3.77m 残存壁高 西辺20cm・南辺20cm

埋没土 自然埋没とみられる。

カマド 39号溝と重複したため、焚き口から燃焼部の底面一部しか残っていない。残存規模は長軸51cm短軸50cmである。

貯蔵穴 カマド右脇で、南東隅部に位置する。乱れた楕円形で、浅く皿状を呈する。規模は長軸106cm短軸95cm 深さ21cmである。

柱穴 5基確認にされるが、すべて北半分に集中しており、不可解さが残る。

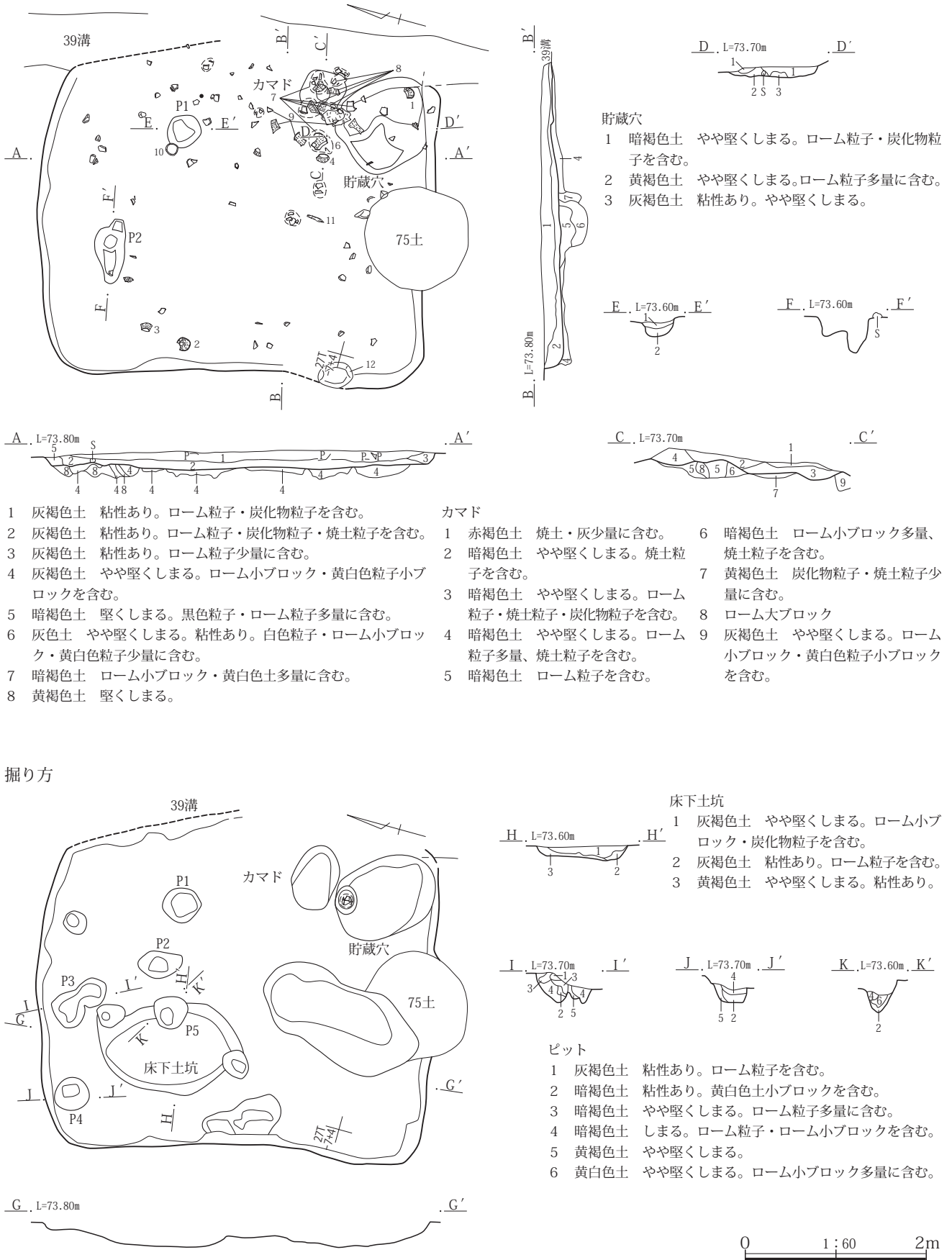
床 北辺近くでやや硬化した部分が観察される。

床下土坑 北側中央部に位置する。不定形で浅い。規模は長軸164cm短軸102cm深さ10cmである。

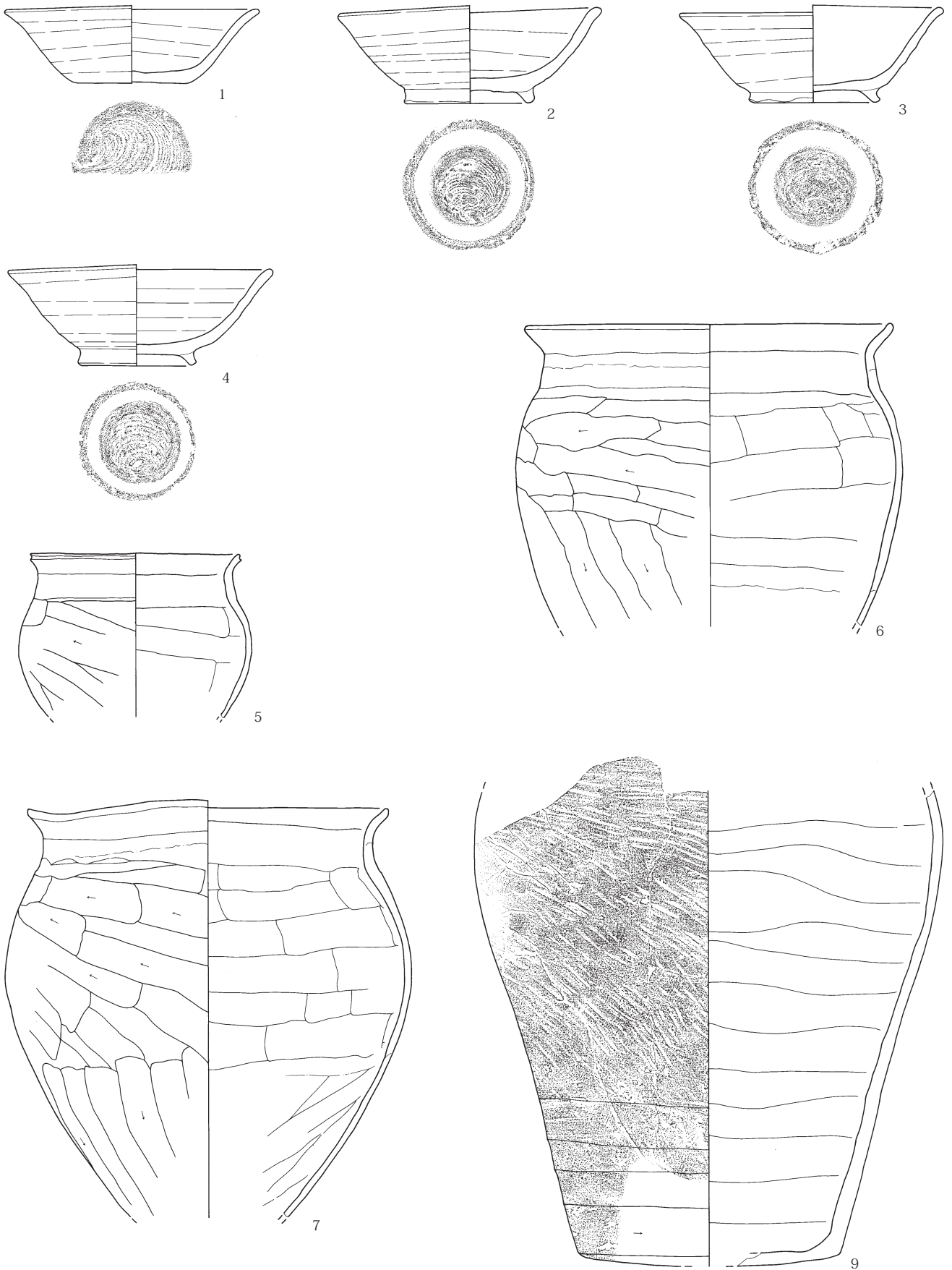
掘り方 南側中央部が周辺より30cm程度掘り込まれ、壁際も全体に10cm程度低く掘り込まれる。

遺物 カマドで土師器甕(7・8)、須恵器甕(9)が出土し、出土量はカマド周辺が多い。P1の西脇で転用硯(10)、中央部で刀子?(11)が出土する。南西隅では台石(12)が出土するが、床面より若干高い。掲載遺物のほか、土師器杯椀類17片・壺甕類314片、須恵器杯椀類83片・壺甕類1片が出土する。

時期 出土遺物から9世紀第4四半期に比定される。

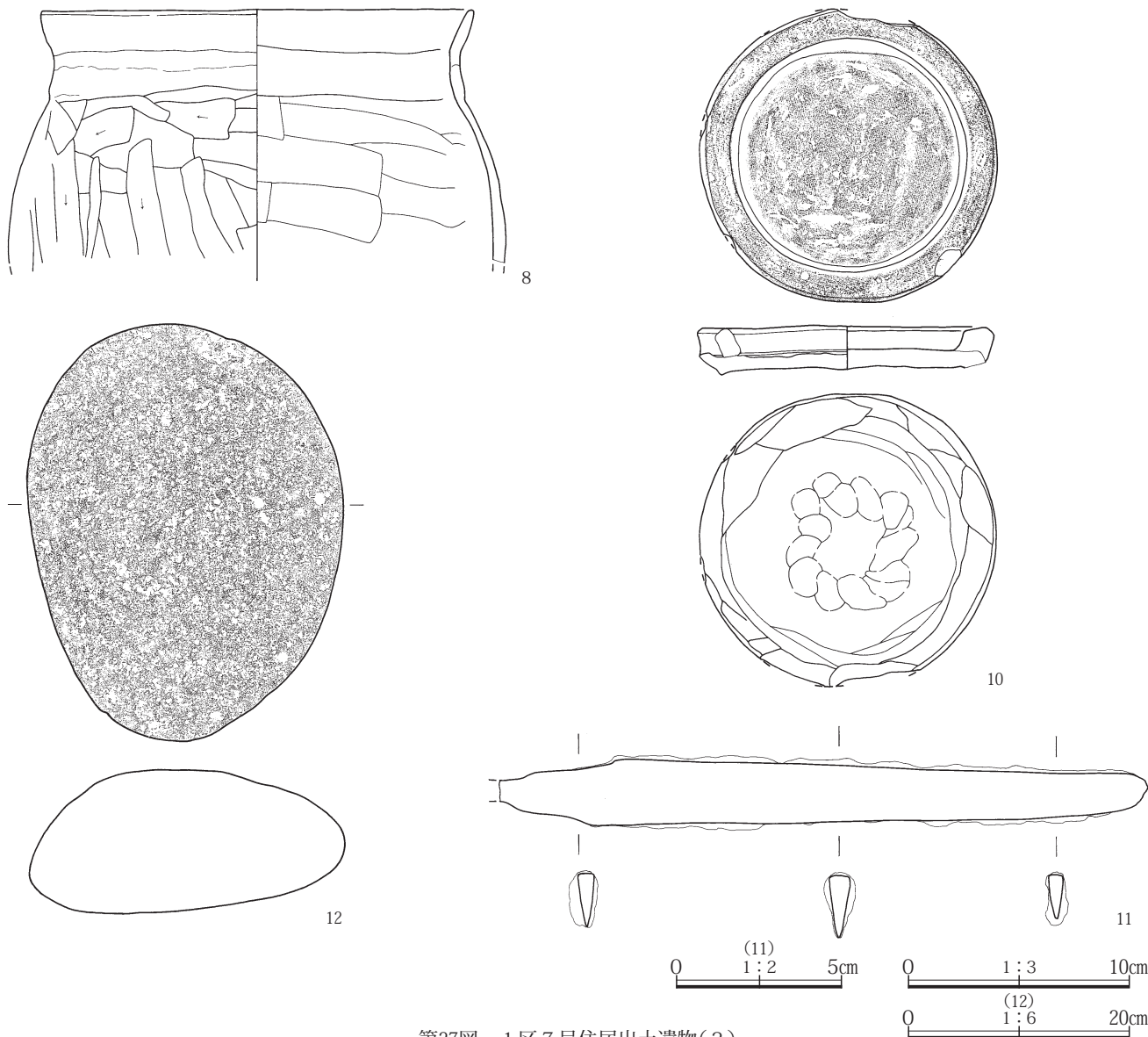


第25図 1区7号住居



0 1:3 10cm

第26図 1区7号住居出土遺物(1)



第27図 1区7号住居出土遺物(2)

第9表 1区7号住居出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要		
第26図 PL.124	1	須恵器 椀	床直上	口 13.6 底 6.2	高 4.2	細砂粒・角閃石/ 還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。			
第26図 PL.124	2	須恵器 椀	+8cm 口縁部1/4欠損	口 14.0 台 6.4	高 5.3	細砂粒・角閃石/ 還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。			
第26図 PL.124	3	須恵器 椀	+2cm ほぼ完形	口 14.0 台 6.6	高 5.3	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。			
第26図 PL.124	4	須恵器 椀	+11cm 口縁部1/3欠損	口 14.0 台 6.0	高 5.5	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。			
第26図 PL.124	5	土師器 小型甕	貯蔵穴 口縁部～胴部下 位片	口 11.2 胴 12.6		細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。			
第26図 PL.124	6	土師器 甕	+5cm 口縁部～胴部 中位片	口 19.8 胴 21.0		細砂粒・褐色粒/ 良好/橙	外面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴 部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。			
第26図 PL.124	7	土師器 甕	+4cm 口縁部～胴部下 位片	口 19.4 胴 22.0		細砂粒・褐色粒/ 良好/橙	外面頸部と内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は 横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。			
第27図 PL.124	8	土師器 甕	+3cm 口縁部～胴部上 位片	口 19.2		細砂粒・褐色粒/ 良好/橙	外面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴 部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。			
第26図 PL.124	9	須恵器 甕	+5cm 底部～胴部上 位	底 14.4 胴 25.4		細砂粒・粗砂粒・ 長石/還元焰/灰	底部は手持ちヘラ削り、胴部は下位がヘラ削りとヘラナデ、 中位から上位は平行叩き痕が残る。内面はヘラナデ。	胴部上位に陥 没状の歪がみ られる。		
第27図 PL.124	10	須恵器 転用硯	+8cm 短頸壺底部	底 13.5 台 13.4		細砂粒・粗砂粒・ 長石・片岩/還元 焰/灰	ロクロ整形、回転方向不明。高台は貼付、内面に指頭痕が 残る。外面を硯に転用、非常によく擦り研がれている。胴 部は打ち欠かされている。			
挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置	径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	残存	形・成調整等	
第27図 PL.124	11	鉄製品 刀子か	+14cm	195.0	21.8	7.8	-	1部欠	土の錆着が強く詳細不明。下部は全体に断面三角形を呈す る。棟区状の段差が認められるが、錆の可能性もあり柄は不明。	
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況	備考
第27図 PL.124	12	台石	床直上	楕円磔	粗粒輝石安 山岩	37.5	28.2	17260.0	表裏面とも摩耗するほか、部分的に打痕がある。	

8・14号住居(第28図、P L . 7・8・125、第10表)

8号住居 位置 27R・S-3・4グリッド。

重複 2号竪穴状遺構、69・72・74・122・124号ピットより前出。14号住居とは新旧関係不明。

形態 残存状況が悪く不明。

主軸方位 N-85°-E

規模 面積(5.28) m<sup>2</sup> 長軸3.10m、短軸2.63m 残存

壁高 西辺10cm・南辺7cm

埋没土 残存深度が浅く、埋没状況は判断できない。

カマド 未検出。P 2が一部の可能性あり。

貯蔵穴 南東隅に位置する。東西に長い楕円形。規模は長軸(60)cm短軸39cm深さ18cmである。

柱穴 1基が確認されるが、壁面より外側にはみ出す。あるいはカマドの一部かもしれない。P 1は貯蔵穴に再評価のため欠番。柱穴の規模(長径・短径・深さcm) P 2 : 56・53・20cm

床 未検出。削平され消滅か。

掘り方 シミ状に平面で確認しており、明確な掘り込みは未検出。

遺物 出土量は少なく、貯蔵穴、P 2にやや集中する。掲載遺物のほか、土師器杯椀類7片・壺甕類11片、須恵器杯椀類7片が出土する。

時期 出土遺物から9世紀第4四半期に比定される。

14号住居 位置 27R・S-4グリッド。重複 2号竪穴状遺構、5号井戸、128号土坑、122・124号ピットより前出。

形態 ほぼ方形。

主軸方位 N-90°

規模 面積(3.27) m<sup>2</sup> 長軸2.51m、短軸(2.02)m 残存

壁高 南辺15cm・西辺17cm

埋没土 残存深度が浅く、埋没状況は判断できない。

カマド 未検出。貯蔵穴 未検出。柱穴 未検出。

床 壁際・中央部を除き全体に広く硬化面が認められる。当初2号竪穴状遺構の一部と認識したため、使用面の個別平面図はない。

掘り方 北側から中央部、および南西隅が周囲より10cm程度低く掘り込まれる。

遺物 非常に少ない。

時期 出土遺物から10世紀第1四半期に比定される。

備考 調査段階では11号住居として調査するも、遺構名重複のため、新たに14号住居とする。出土遺物は重複する2号竪穴状遺構に帰属しており、混乱はない。

9号住居(第29・30図、P L . 8・9・125、第11表)

位置 27Q-3・4グリッド。重複 半分以上攪乱に壊される。遺構との重複なし。

形態 方形と推測される。

主軸方位 N-83°-W

規模 面積(2.36) m<sup>2</sup> 長軸2.27m、短軸(1.61)m 残存壁高 東辺15cm・西辺12cm・南辺19cm

埋没土 残存深度が浅く、埋没状況は判断できない。

カマド 東辺南寄りに位置する。全体に残存状態は良くない。規模は焚口～煙道が72cm、袖焚口幅が84cmである。奥に向かって緩く立ち上がる。燃焼部中央奥寄りに長円礫が立位で検出される。支脚か。袖はローム混入土で構築したと考えられる。

貯蔵穴 南東隅に位置する。楕円形で、断面は丸みを持つ。規模は長軸50cm短軸41cm深さ25cmである。

柱穴 未検出。

床 明確な硬化面等は認められない。

床下土坑 中央部カマド寄りに位置する。不整形。規模は長軸89cm短軸64cm深さ23cmである。

掘り方 中央部から南壁にかけて、20cm程度掘り下げられる。

遺物 カマドで土師器甕(4)、貯蔵穴で須恵器椀(1・3)が出土し、中央壁寄りでも須恵器椀(2)が出土する以外、全体に出土量は少ない。掲載遺物のほか、土師器杯椀類27片・壺甕類23片、須恵器杯椀類20片・壺甕類2片が出土する。

時期 出土遺物から9世紀第4四半期に比定される。

10号住居(第31・32図、P L . 9・10・125、第12表)

位置 27S・T-3グリッド。重複 144・155号土坑、105・125号ピットより前出。

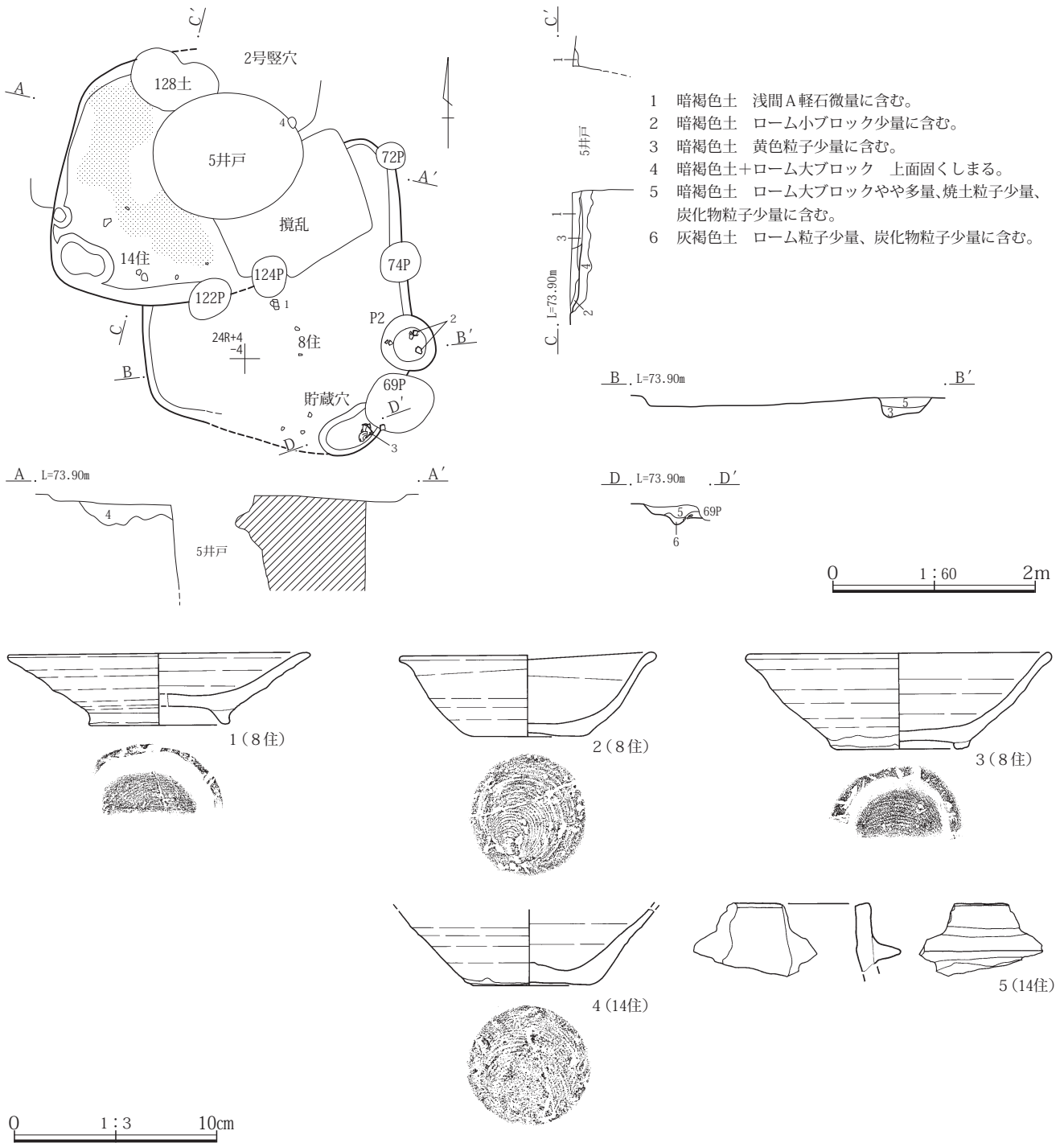
形態 南北に長い長方形。

主軸方位 N-86°-W

規模 面積7.71m<sup>2</sup> 長軸3.50m、短軸2.96m 残存壁高 東辺11cm・西辺12cm・南辺11cm・北辺11cm

埋没土 残存深度が浅く、埋没状況は判断できない。

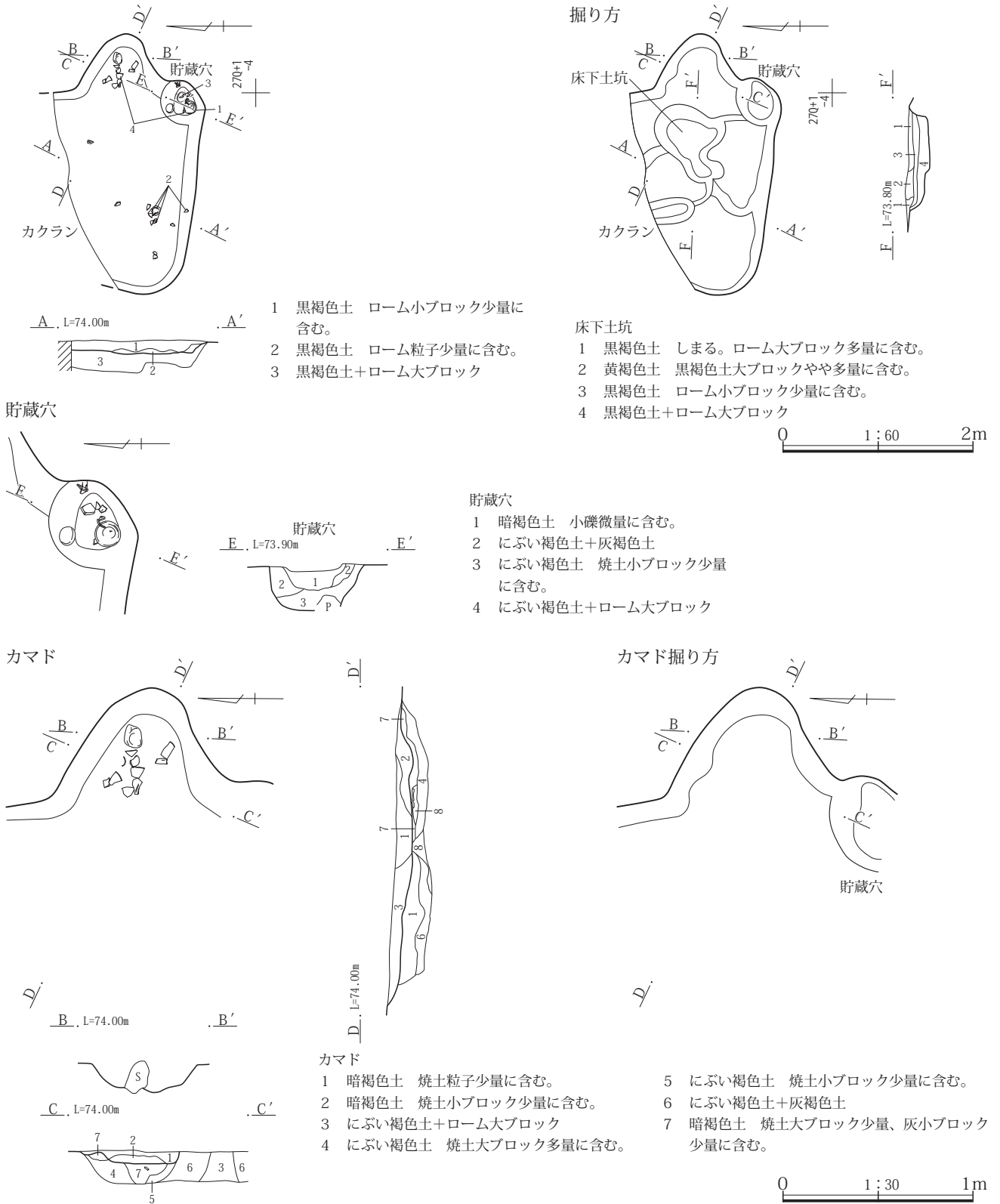
第4章 発掘調査の記録



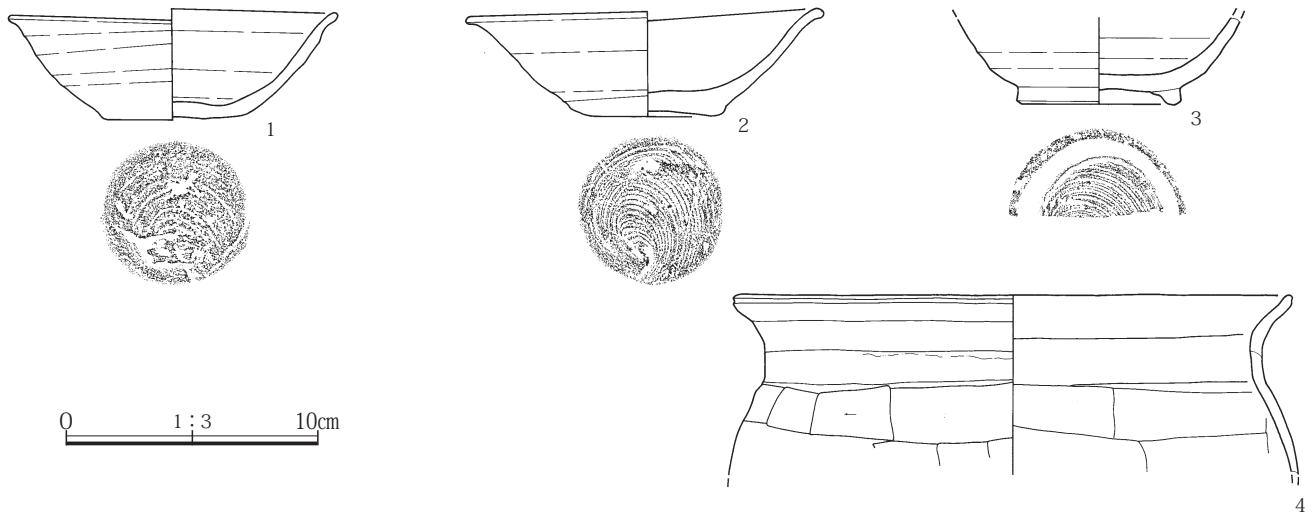
第28図 1区8・14号住居と出土遺物

第10表 1区8・14号住居出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第28図 PL.125	1	須恵器 皿	+5cm 1/4	口 14.5 高 3.5 台 7.0	細砂粒/還元焰・/ 灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	高台端部に棒状の圧痕が残る。
第28図 PL.125	2	須恵器 椀	P 1 内 口縁部一部欠損	口 12.3 高 4.1 底 6.0	細砂粒・粗砂粒・ 片岩/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第28図 PL.125	3	須恵器 椀	貯蔵穴 1/5	口 14.6 高 4.7 台 5.7	細砂粒/酸化焰ぎ み・燻/灰褐	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
第28図 PL.125	4	須恵器 椀	底部~体部	底 6.0	細砂粒・角閃石/ 還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第28図 PL.125	5	須恵器 羽釜	口縁部~鏝小片	計測不能	細砂粒/酸化焰/に ぶい橙	ロクロ整形、回転方向不明。鏝は貼付。	



第29図 1区9号住居



第30図 1区9号住居出土遺物

第11表 1区9号住居出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第30図 PL.125	1	須恵器 椀	貯蔵穴 完形	口 12.6 高 4.3 底 5.9	細砂粒・粗砂粒・ 角閃石/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第30図 PL.125	2	須恵器 椀	+1cm 口縁部一部欠損	口 13.6 高 4.2 底 5.8	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第30図 PL.125	3	須恵器 椀	貯蔵穴 底部～体部片	台 6.0	細砂粒・粗砂粒・ 長石/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
第30図 PL.125	4	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部上 位片	口 21.8	細砂粒・褐色粒/ 良好/にぶい橙	外面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

**カマド** 東辺ほぼ中央に位置する。焚き口から燃焼部の残存状況は良くない。燃焼部からカマド前床面に黒色灰が広範囲に分布する。規模は焚口～煙道が77cm、袖焚口幅が24cmである。奥壁は緩やかに立ち上がる。右袖構築土内に厚く黒色灰が堆積しており、右袖の作り替えが想定される。奥壁の構築材に礫が混入する。

**貯蔵穴** 南東隅に位置する。歪んだ円形で、断面は丸みを持つ。規模は長軸47cm短軸35cm深さ35cmである。

**柱穴** 未検出。

**床** 明確な硬化面等は認められない。

**掘り方** 北壁側および南西部が、周囲より10cm程度低く掘り込まれる。

**遺物** カマドで須恵器椀(2・4)、貯蔵穴左脇で須恵器杯(1)、土師器甕(5)が出土するほか、南壁寄り須恵器椀(3)、土師器甕(6)が出土するが、出土量はやや少ない。掲載遺物のほか、土師器杯椀類13片・壺甕類54片、須恵器杯椀類20片・壺甕類55片、灰釉陶器片1片が出土する。また、近世国産陶磁器4片が混入していた。

**時期** 出土遺物から9世紀第4四半期に比定される。

**11号住居**(第33～35図、P L.10・126、第13表)

**位置** 27S・T-7・8グリッド。重複 2号落ち込み状遺構より後出と推測する。

**形態** 全体形は認識が難しく、ほぼ方形と推定。

**主軸方位** N-48°-E

**規模** 面積10.62㎡ 長軸3.99m、短軸3.37m 残存壁

**高** 南東辺11cm・南西辺6cm・北西辺14cm・北東辺16cm

**埋没土** 同様な土で埋まり、人為埋没の可能性も残るが、自然埋没と判別つかない。

**カマド** 南東隅近くに位置する。左袖側に袖石3基が横位に据えられる。右袖は壊れて不明。規模は焚口～煙道が1.08m、袖焚口幅が53cmである。奥壁は急激に立ち上がる。貯蔵穴 未検出。

**柱穴** 4基が確認されるが、調査段階で付番されていた遺構外のピットは除外した。柱穴の規模(長径・短径・深さcm) P 1 : 35・30・39、P 3 : 34・24・30、P 4 : 35・23・19、P 7 : 60・49・44cm

**床** 明確な硬化面等は認められない。

**掘り方** 中央部から南半分は、2号落ち込み状遺構と重複したため、不明確となり認識できていない。北東部は

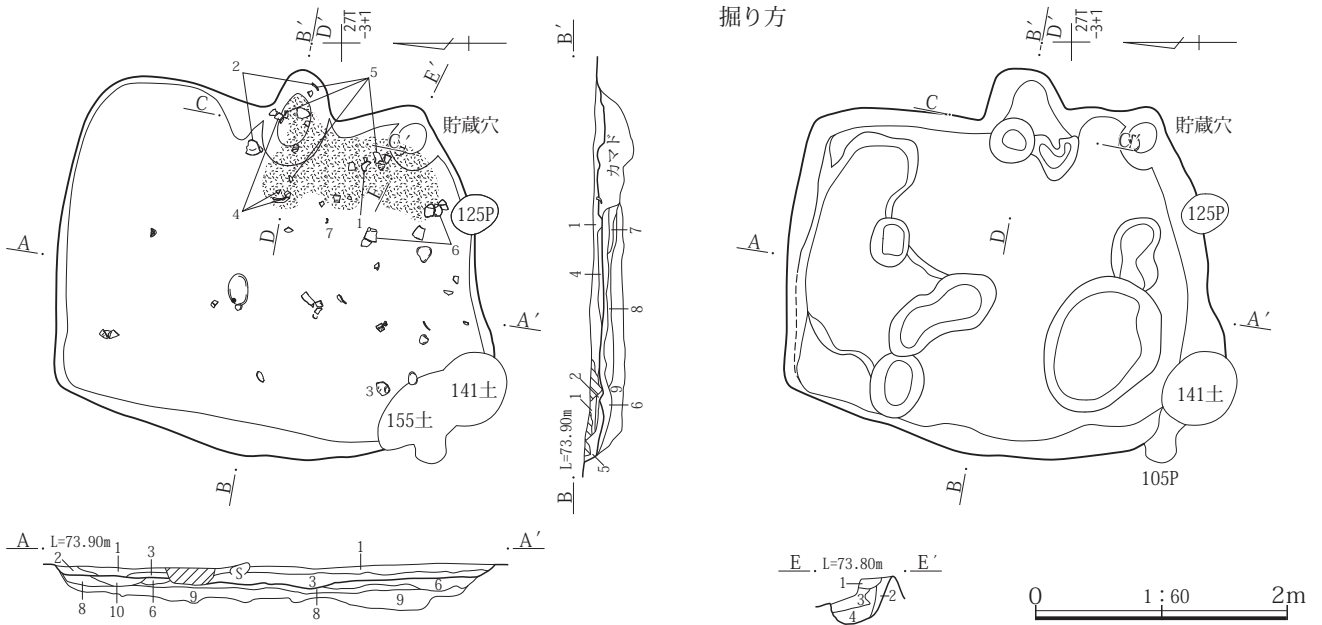


周囲より15cm程度低く掘り込まれる。

遺物 カマドで須恵器椀(2・11)、土師器甕(14・15)が出土する。中央部にも遺物が集中し、土師器甕片(16)などが散在する。掲載遺物のほか、土師器杯椀類64片・壺

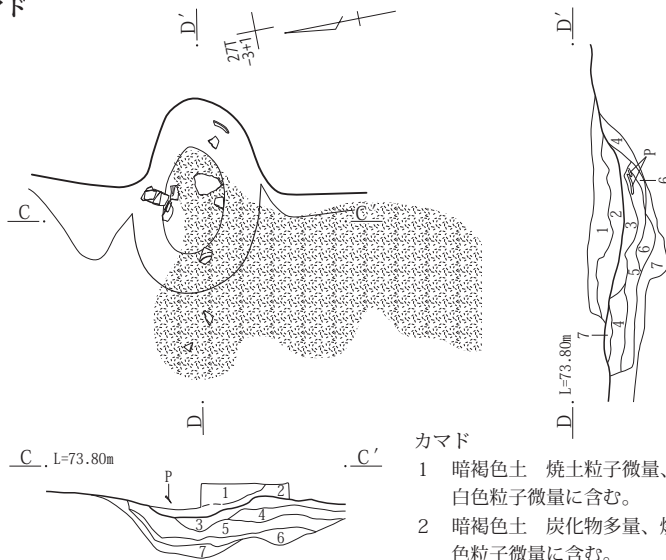
甕類483片、須恵器杯椀類314片・壺甕類8片、磨石1点

が出土する。  
時期 出土遺物から9世紀第4四半期に比定される。



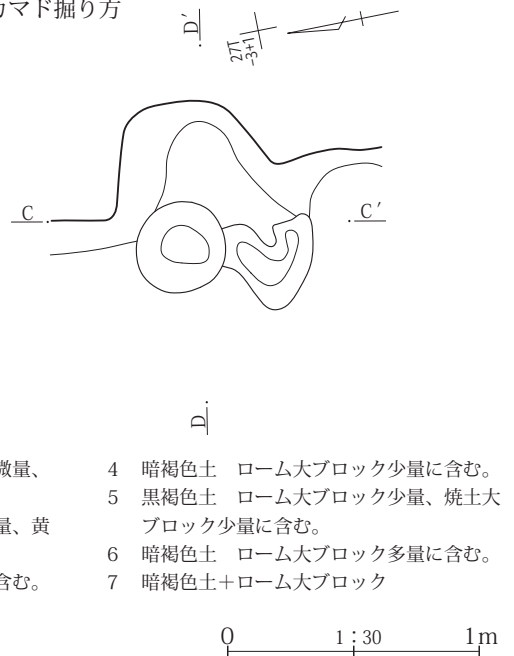
- |        |                            |         |                |                     |
|--------|----------------------------|---------|----------------|---------------------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子やや多量に含む。              | 6 黒褐色土  | ローム小ブロック少量に含む。 | 貯蔵穴                 |
| 2 暗褐色土 | ローム小ブロック多量に含む。             | 7 黒褐色土  | 炭化物多量に含む。      | 1 暗褐色土              |
| 3 暗褐色土 | ローム粒子少量に含む。                | 8 黒褐色土  | ローム小ブロック多量に含む。 | 2 暗褐色土              |
| 4 暗褐色土 | 炭化物大ブロック多量、焼土小ブロックやや多量に含む。 | 9 暗褐色土  | ローム小ブロック多量に含む。 | 3 黒褐色土              |
| 5 暗褐色土 | 炭化物粒子微量に含む。                | 10 黒褐色土 | ローム粒子少量に含む。    | 4 黒褐色土              |
|        |                            |         |                | 炭化物多量、焼土小ブロック少量に含む。 |
|        |                            |         |                | 炭化物多量に含む。           |

カマド

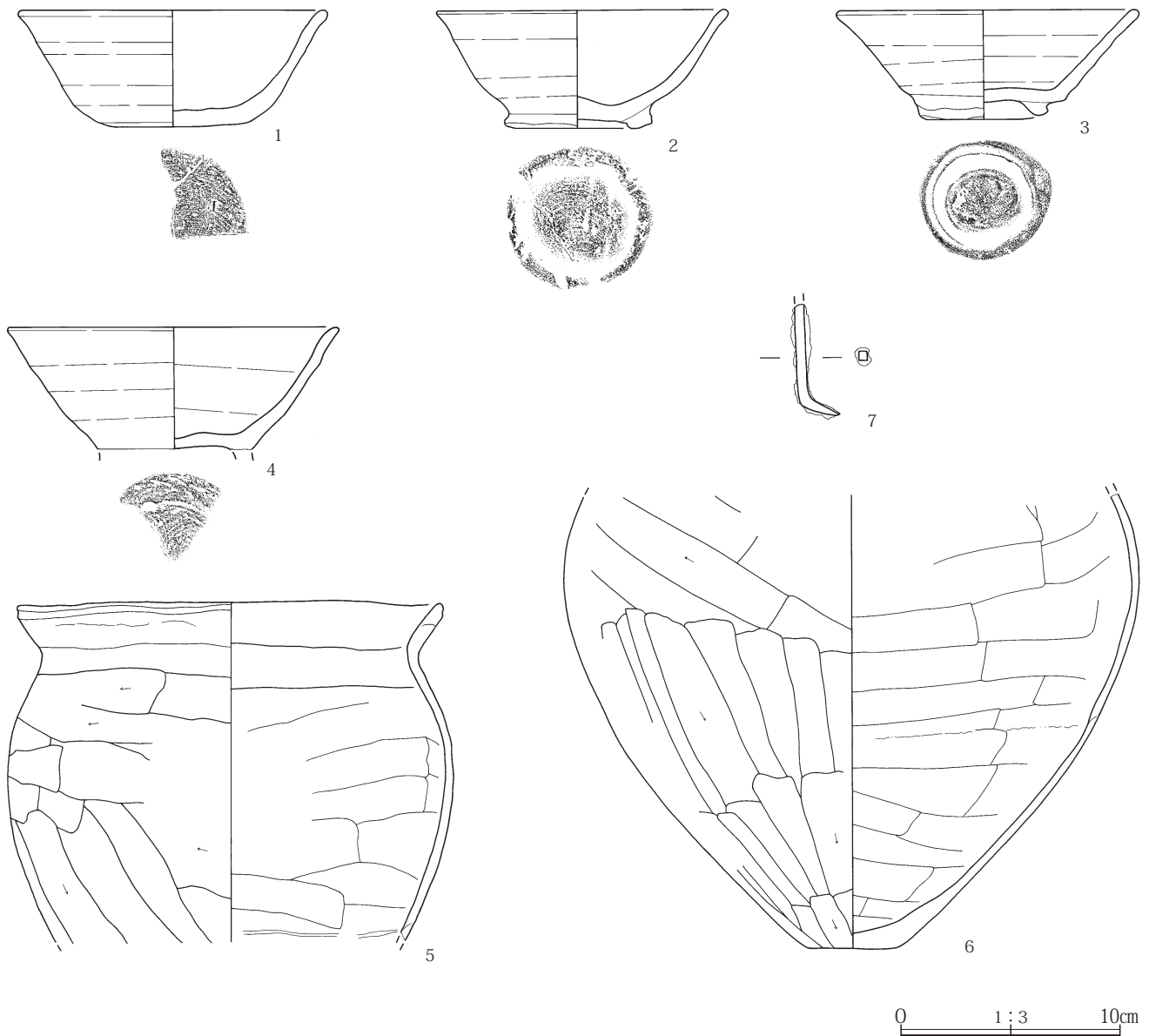


- カマド
- |                 |                          |
|-----------------|--------------------------|
| 1 暗褐色土          | 焼土粒子微量、黄色粒子微量、白色粒子微量に含む。 |
| 2 暗褐色土          | 炭化物多量、焼土粒子微量、黄色粒子微量に含む。  |
| 3 暗褐色土+黒褐色土     | 焼土粒少量に含む。                |
| 4 暗褐色土          | ローム大ブロック少量に含む。           |
| 5 黒褐色土          | ローム大ブロック少量、焼土大ブロック少量に含む。 |
| 6 暗褐色土          | ローム大ブロック多量に含む。           |
| 7 暗褐色土+ローム大ブロック |                          |

カマド掘り方



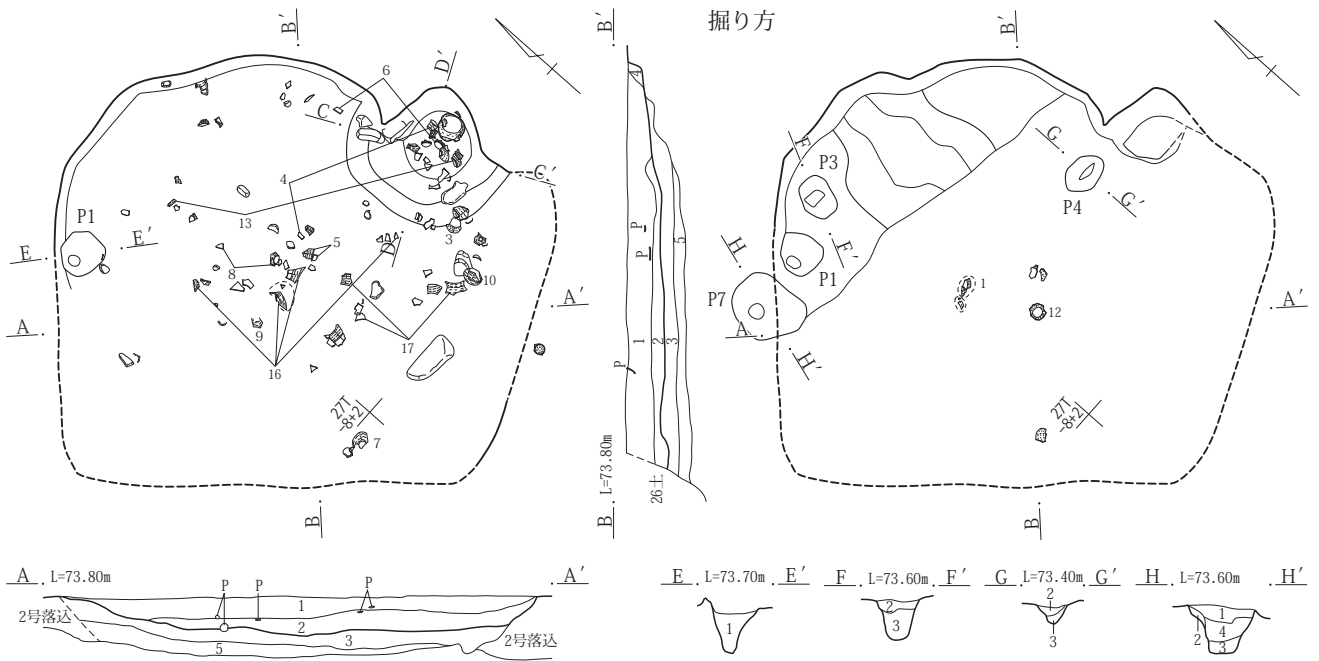
第31図 1区10号住居



第32図 1区10号住居出土遺物

第12表 1区10号住居出土遺物

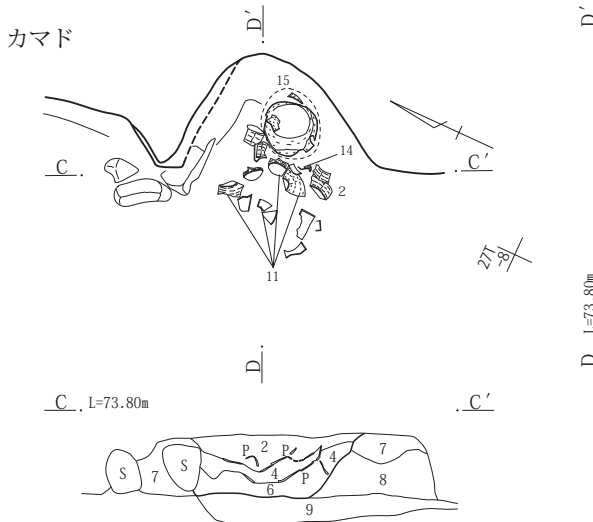
挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第32図 PL.125	1	須恵器 椀	+9cm 1/5	口 13.4 高 5.3 底 6.8	細砂粒・褐色粒/ 還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第32図 PL.125	2	須恵器 椀	+4cm 3/4	口 12.8 高 5.4 高台 4.8	細砂粒/酸化焰・ 内面燻/にぶい黄 橙	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
第32図 PL.125	3	須恵器 椀	+3cm 1/2	口 13.3 高 4.9 高台 6.1	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切りか。	
第32図 PL.125	4	須恵器 椀	床直上 1/4	口 14.7 底 7.0	細砂粒・粗砂粒・ 褐色粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付が剥落、底部は回転糸切り。	
第32図 PL.125	5	土師器 甕	床直上 口縁部～胴部中 位片	口 19.2 胴 20.1	細砂粒・褐色粒/ 良好/明赤褐	外面頸部と内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第32図 PL.125	6	土師器 甕	床直上 底部～胴部中位	底 4.0 胴 26.0	細砂粒/良好/にぶ い黄褐	内面胴部に輪積み痕が残る。底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
第32図 PL.125	7	鉄製品 釘か	床直上 先端部片	長 4.4 幅 0.3		断面は方形と考えられ、基部側を欠損し、先端部がL字状に曲がっている。	



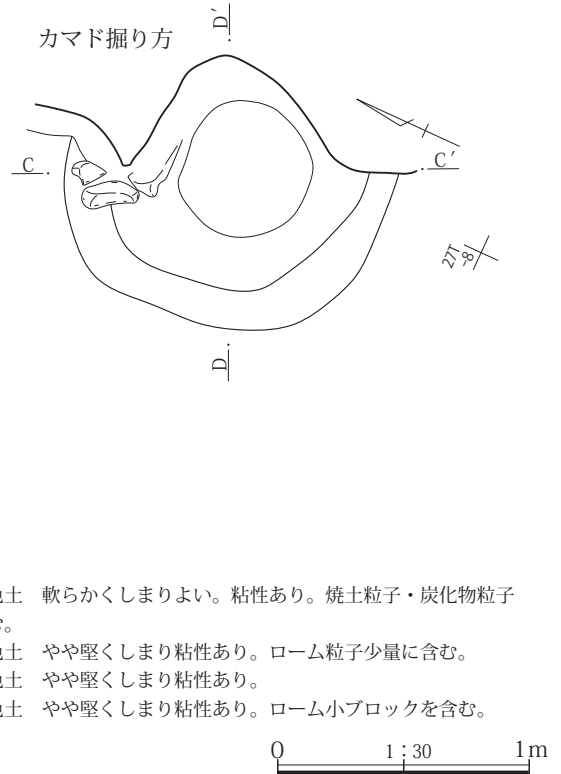
- 1 灰褐色土 軟らかく粘性あり。白色粒子・ローム粒子少量に含む。
- 2 灰褐色土 やや堅くしまり粘性あり。ローム粒子・炭化物粒子を含む。
- 3 灰褐色土 やや堅くしまり粘性あり。ローム粒子を含む。
- 4 黄褐色土 軟らかくしまりよい。粘性あり。ローム多量に含む。
- 5 灰褐色土 やや堅くしまる。ローム粒子・黄白色粒子を含む。

- ピット
- 1 暗褐色土 やや堅くしまる。ローム小ブロックを含む。
  - 2 灰色土 やや堅く粘性あり。ローム小ブロック・黄白色土小ブロックを含む。
  - 3 灰色土 軟らかく粘性あり。ローム小ブロック・黄白色土小ブロック多量に含む。
  - 4 暗褐色土 軟らかくしまりよい。粘性あり。黄白色粒子を含む。

0 1:60 2m



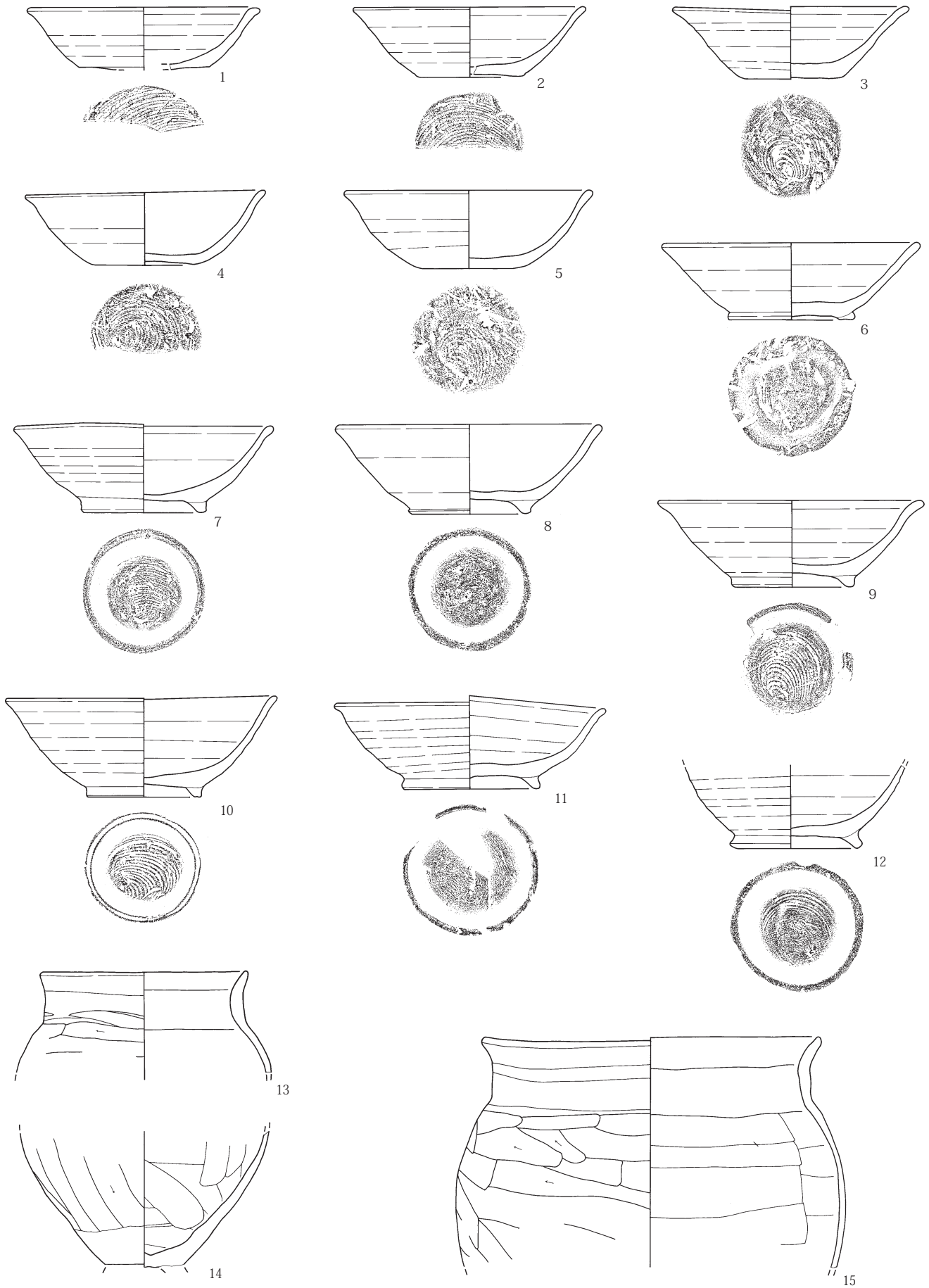
- カマド
- 1 灰褐色土 やや堅くしまり粘性あり。白色粒子・ローム粒子を含む。
  - 2 灰褐色土 軟らかくしまりよい。焼土粒子・ローム粒子少量に含む。
  - 3 赤褐色土 軟らかく粘性あり。焼土粒子多量に含む。
  - 4 赤褐色土焼土
  - 5 暗褐色土 軟らかくしまりよい。焼土粒子・炭化物粒子を含む。



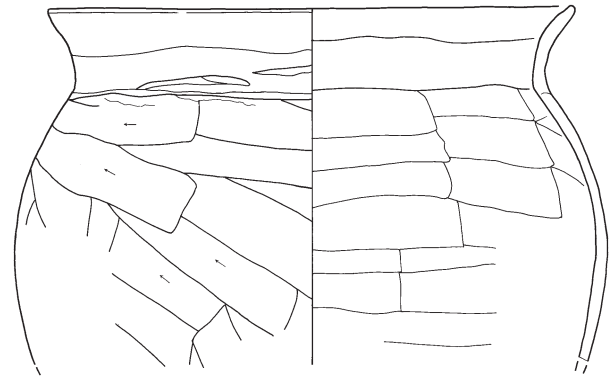
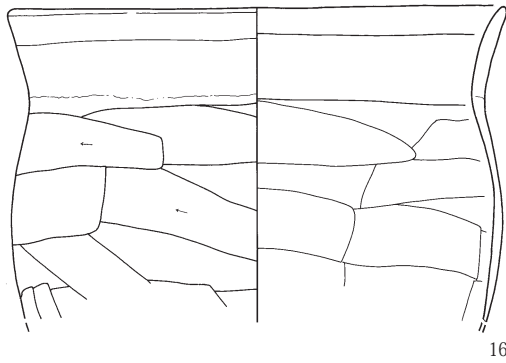
- 6 暗褐色土 軟らかくしまりよい。粘性あり。焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 7 灰褐色土 やや堅くしまり粘性あり。ローム粒子少量に含む。
- 8 灰褐色土 やや堅くしまり粘性あり。
- 9 暗褐色土 やや堅くしまり粘性あり。ローム小ブロックを含む。

0 1:30 1m

第33図 1区11号住居



第34図 1区11号住居出土遺物(1)



0 1:3 10cm

第35図 1区11号住居出土遺物(2)

第13表 1区11号住居出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第34図 PL.126	1	須恵器 杯	掘り方 1/5	口 12.6 底 7.3	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第34図 PL.126	2	須恵器 椀	カマド 1/3	口 12.7 高 3.9 底 6.0	細砂粒・粗砂粒・ 片岩/還元焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第34図 PL.126	3	須恵器 椀	床直上 2/3	口 12.8 高 4.0 底 5.8	細砂粒・褐色粒/ 酸化焰/にぶい橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第34図 PL.126	4	須恵器 椀	+20cm 1/4	口 13.3 高 4.2 底 6.2	細砂粒・粗砂粒・ 褐色粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第34図 PL.126	5	須恵器 椀	+14cm 1/2	口 13.6 高 4.4 底 6.2	細砂粒・粗砂粒・ 角閃石/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第34図 PL.126	6	須恵器 椀	+2cm 1/3	口 14.0 高 4.3 高台 5.4	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	高台端部に棒 状の圧痕が残 る。
第34図 PL.126	7	須恵器 椀	+16cm 2/3	口 14.2 高 5.0 高台 6.3	細砂粒・粗砂粒・ 長石/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
第34図 PL.126	8	須恵器 椀	+13cm 2/3	口 14.5 高 5.0 高台 6.2	細砂粒・粗砂粒・ 片岩/酸化焰/にぶ い黄橙	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
第34図 PL.126	9	須恵器 椀	+19cm 2/3	口 14.6 高 4.9 高台 6.2	細砂粒・粗砂粒・ 角閃石/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
第34図 PL.126	10	須恵器 椀	+4cm 口縁部一部欠損	口 14.8 高 5.6 高台 6.3	細砂粒・粗砂粒・ 角閃石/酸化焰/灰 黄褐	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
第34図 PL.126	11	須恵器 椀	カマド 4/5	口 14.8 高 5.2 高台 7.5	細砂粒・粗砂粒・ 長石・片岩/還元 焰・燻/灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	体部に焼成後 の穿孔が1カ 所ある。
第34図 PL.126	12	須恵器 椀	掘り方 口縁部欠損	台 7.0	細砂粒・粗砂粒・ 角閃石・褐色粒/ 酸化焰/灰黄褐	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
第34図 PL.126	13	土師器 小型甕	+16cm 口縁部～胴部上 位片	口 11.4	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。	
第34図 PL.126	14	土師器 台付甕	カマド 底部～胴部下半 片	底 4.4	細砂粒/良好/にぶ い橙	脚部は貼付、胴部はヘラ削り後底部周囲に横ナデ。内面は 底部から胴部がヘラナデ。	
第34図 PL.126	15	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部上 半	口 18.6 胴 21.6	細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。	
第35図 PL.126	16	土師器 甕	+14cm 口縁部～胴部上 半	口 19.4 胴 19.3	細砂粒/良好/橙	外面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴 部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第35図 PL.126	17	土師器 甕	+14cm 口縁部～胴部上 半片	口 20.6 胴 23.2	細砂粒・角閃石/ 良好/橙	外面頸部下に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、 胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

12号住居(第36・37図、P L .11・127、第14表)

位置 27R・S-6・7グリッド。

重複 85・112・167号土坑、6号井戸より前出。

形態 やや外形に乱れがあるが、南北に長い長方形。

主軸方位 N-74°-E

規模 面積(12.05) m<sup>2</sup> 長軸4.42m、短軸3.54m 残存

壁高 東辺18cm・西辺15cm・南辺13cm・北辺14cm

埋没土 同様な土で埋まり、人為埋没の可能性も残す。  
自然埋没と判別つかない。

カマド 東辺ほぼ中央に位置する。焚き口・燃焼部とも  
残存状態良くない。煙道部は攪乱により消滅。煙道部内  
底面に長方形の垂角礫が横位で出土し、袖石や支脚の可  
能性あり。規模は焚き口～煙道が50cm、袖焚口幅が83cmで  
ある。

貯蔵穴 南東隅に位置する。規模は長軸106cm短軸85cm  
深さ29cmである。

柱穴 2基が確認される。柱穴の規模(長径・短径・深  
さcm) P 1 : 48・39・30、P 2 : 36・32・30cm

床 明確な硬化面等は認められない。

掘り方 中央部および南西部が周辺より15cm程度低く掘  
り込まれる。

遺物 カマド右前面にやや遺物が集中し、土師器甕(37  
図4・5)が出土する。出土量はやや少なく、カマド周  
辺・貯蔵穴に集中し、西側はわずかである。掲載遺物の  
ほか、土師器杯椀類29片・壺類269片、須恵器杯椀類  
76片・壺類4片、支脚1点、カマド石1点が出土する。  
また、近世国産陶器4片、その他土器類1片が混入して  
いた。

時期 出土遺物から9世紀第3四半期に比定される。

13号住居(第38・39図、P L .11・12・127、第15表)

位置 27R-7・8グリッド。

重複 6号溝より前出。6号住居と新旧関係不明。

形態 重複により不正確ながら、ほぼ正方形。

主軸方位 N-37°-E

規模 面積(19.11) m<sup>2</sup> 長軸5.12m、短軸4.80m 残存

壁高 東辺18cm・北辺11cm

埋没土 同様な土で埋まり、人為埋没の可能性も残るが、  
自然埋没と判別つかない。

カマド 未検出。 貯蔵穴 未検出。

柱穴 4基が確認された。柱穴の規模(長径・短径・深  
さcm) P 1 : 40・29・20、P 2 : 48・30・20、P 3 :  
38・35・22、P 4 : 26・23・41cm

床 明確な硬化面等は認められない。

床下土坑 東辺際に2基、中央部1基、その南に1基、  
計4基が確認された。床下土坑1は、不整形円でP 2と  
重複する。規模は長軸74cm短軸64cm深さ22cmである。床  
下土坑2は、南北に長い不整形楕円形。規模は長軸124cm  
短軸74cm深さ19cmである。床下土坑3は、6号溝と重複  
して北半分は消滅し、半円形。規模は長軸(98)cm短軸(50)  
cm深さ16cmである。床下土坑4は、不整形楕円形。規模は  
長軸170cm短軸125cm深さ41cmである。

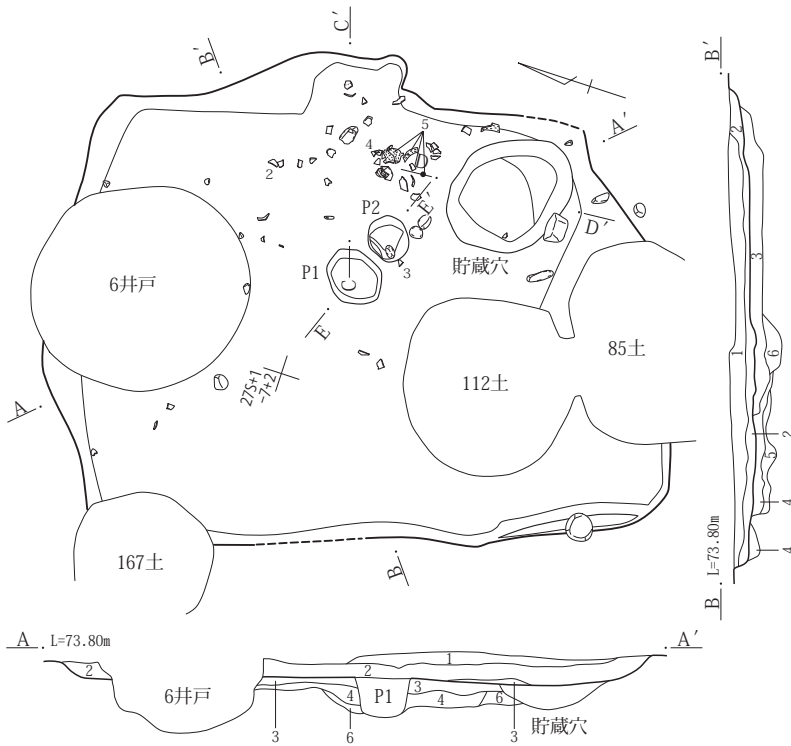
掘り方 床下土坑部分以外は浅い。

遺物 遺物は北側に集中し、中央部で土師器甕(7・8)、  
東壁寄り須恵器皿(2)、同椀(5)が出土する。掲載遺  
物のほか、土師器杯椀類16片・壺類339片、須恵器杯  
椀類69片・壺類2片が出土する。

時期 出土遺物から9世紀第4四半期に比定される。

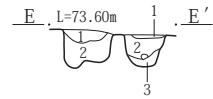
第14表 1区12号住居出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第37図 PL.127	1	土師器 杯	貯蔵穴 2/3	□ 11.8 高 3.4 底 7.7	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第37図 PL.127	2	須恵器 皿	床直上 2/3	□ 13.3 高 3.2 台 6.3	細砂粒・粗砂粒・ 長石/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
第37図 PL.127	3	須恵器 椀	+6cm 1/4	□ 14.8 底 7.4	細砂粒・/還元焰/ 灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台が貼付されていたが剥落、 底部は回転糸切り。	
第37図 PL.127	4	土師器 甕	+2cm 口縁部～胴部 中位片	□ 17.8 胴 21.5	細砂粒・褐色粒/ 良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。	
第37図 PL.127	5	土師器 甕	床直上 口縁部～胴部 下位	□ 19.6 胴 20.8	細砂粒・褐色粒/ 良好/橙	外面頸部と内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は 横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	



貯蔵穴

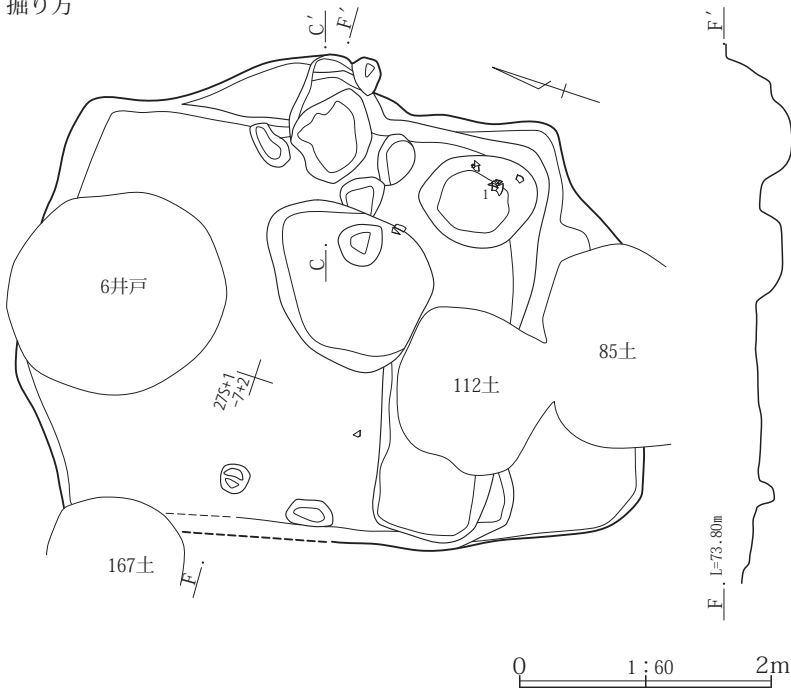
- 1 暗褐色土 やや堅くしまり粘性あり。ローム粒子・焼土粒子を含む。
- 2 灰褐色土 軟らかく粘性あり。焼土粒子・ローム粒子・灰を含む。
- 3 灰褐色土 軟らかくしまりよい。粘性あり。焼土粒子・ローム粒子少量を含む。
- 4 灰褐色土 軟らかく粘性非常にあり。焼土小ブロック・炭化物粒子・黄白色土小ブロックを含む。



ピット

- |  |   |   |
|--|---|---|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1 灰褐色土 やや堅くしまり粘性あり。白色粒子・ローム粒子を含む。</li> <li>2 灰褐色土 やや堅くしまり粘性あり。ローム粒子・焼土粒子を含む。</li> <li>3 暗褐色土 やや堅くしまる。ローム小ブロックを含む。</li> <li>4 灰褐色土 やや堅くしまる。ローム小ブロック・黄白色土小ブロックを含む。</li> </ol> | <ol style="list-style-type: none"> <li>5 暗褐色土 やや堅くしまる。粘性あり。黄白色土小ブロックを含む。</li> <li>6 黄褐色土+暗褐色土 やや堅くしまる。粘性あり。</li> <li>7 黄褐色ローム 貼り床。</li> </ol> | <ol style="list-style-type: none"> <li>1 灰褐色土 やや堅くしまる。白色粒子・ローム粒子を含む。</li> <li>2 暗褐色土 やや堅くしまり粘性あり。ローム小ブロック少量を含む。</li> <li>3 暗褐色土 やや堅くしまり粘性あり。黄白色粘土小ブロックを含む。</li> </ol> |
|--|---|---|

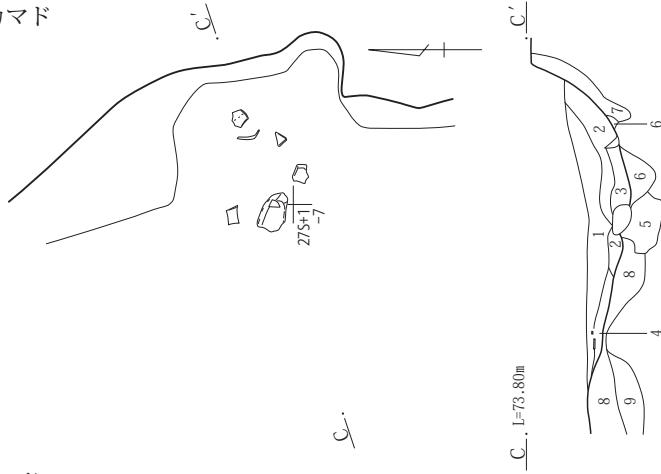
掘り方



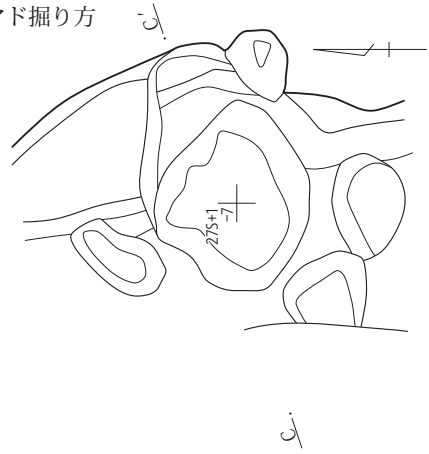
第36図 1区12号住居

第4章 発掘調査の記録

カマド



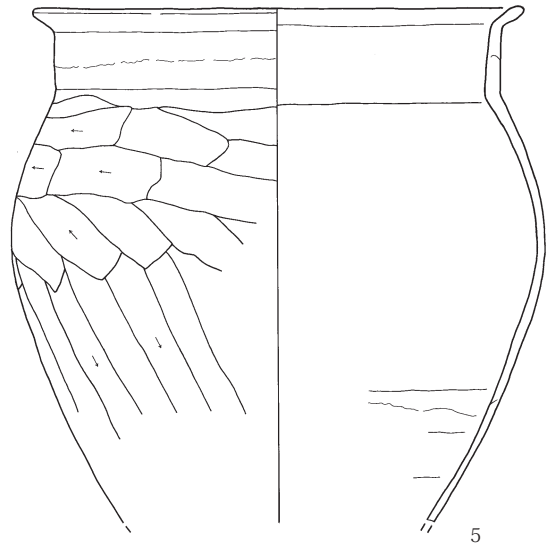
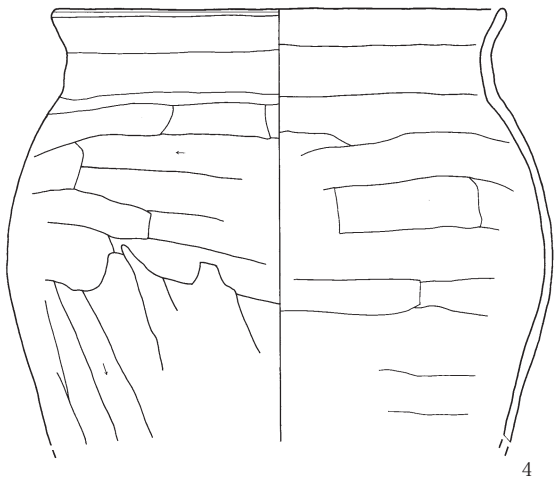
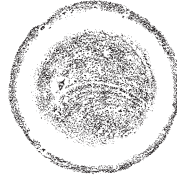
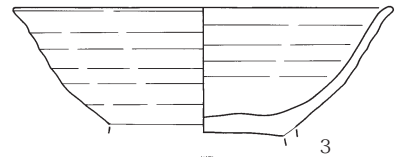
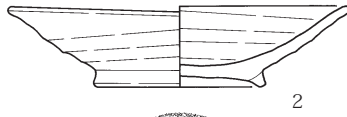
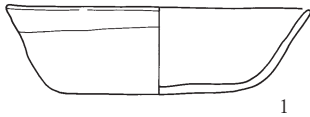
カマド掘り方



カマド

- |   |  |
|---|--|
| <p>1 灰褐色土 やや堅くしまり粘性あり。焼土粒子・ローム粒子を含む。</p> <p>2 灰褐色土 非常に軟らかく粘性あり。焼土小ブロック・炭化物粒子を含む。</p> <p>3 赤褐色土焼土</p> <p>4 灰褐色土 やや堅くしまる。焼土粒子・ローム小ブロックを含む。</p> <p>5 灰褐色土 やや堅くしまる。粘性あり。ローム粒子多量、焼土小ブロックを含む。</p> | <p>6 暗褐色土 やや堅くしまる。焼土小ブロック多量を含む。</p> <p>7 暗褐色土 やや堅くしまる。焼土粒子・ローム粒子を含む。</p> <p>8 暗褐色土 やや堅くしまる。ローム小ブロックを含む。</p> <p>9 灰褐色土 やや堅くしまる。ローム小ブロック・黄白色土小ブロックを含む。</p> |
|---|--|

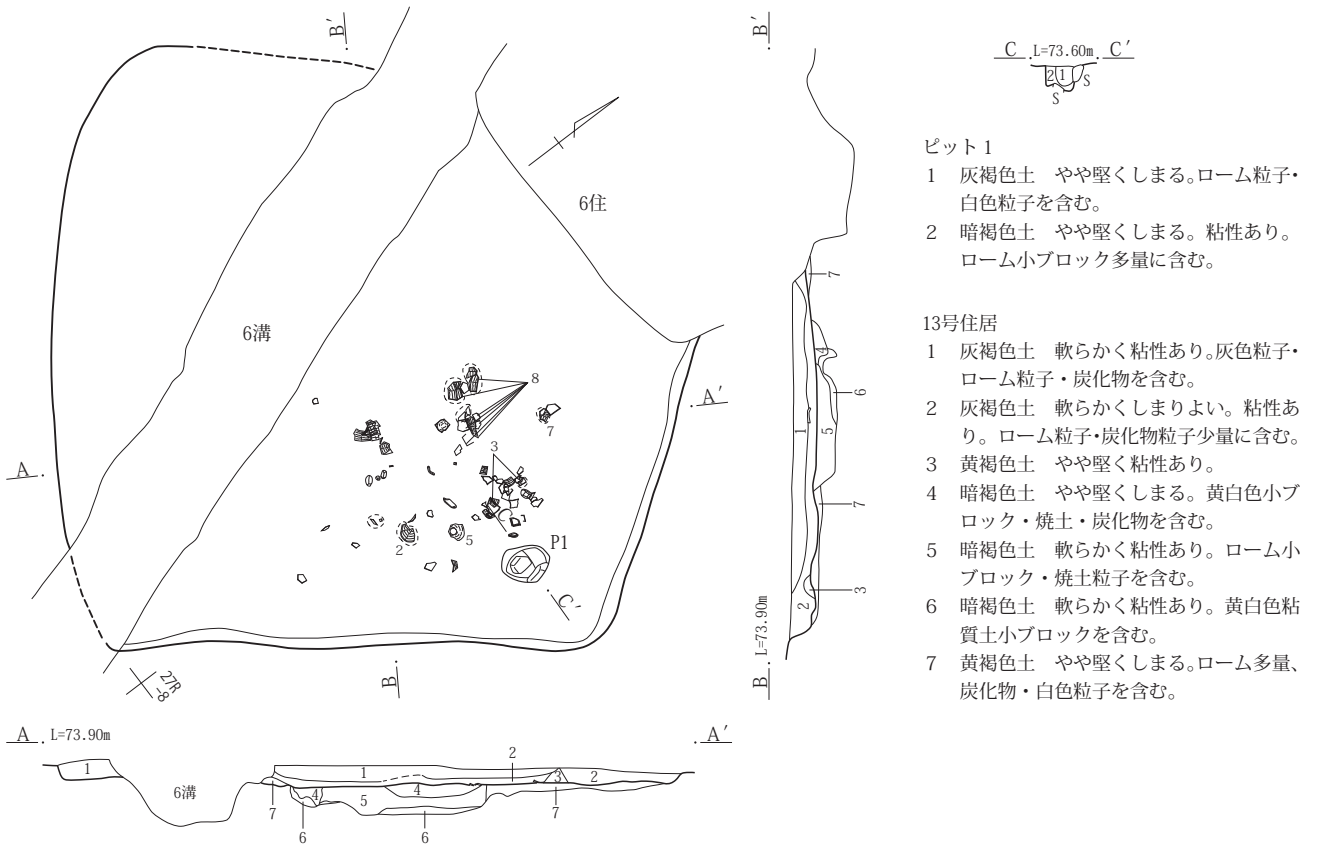
0 1:30 1m



0 1:3 10cm

第37図 1区12号住居カマドと出土遺物





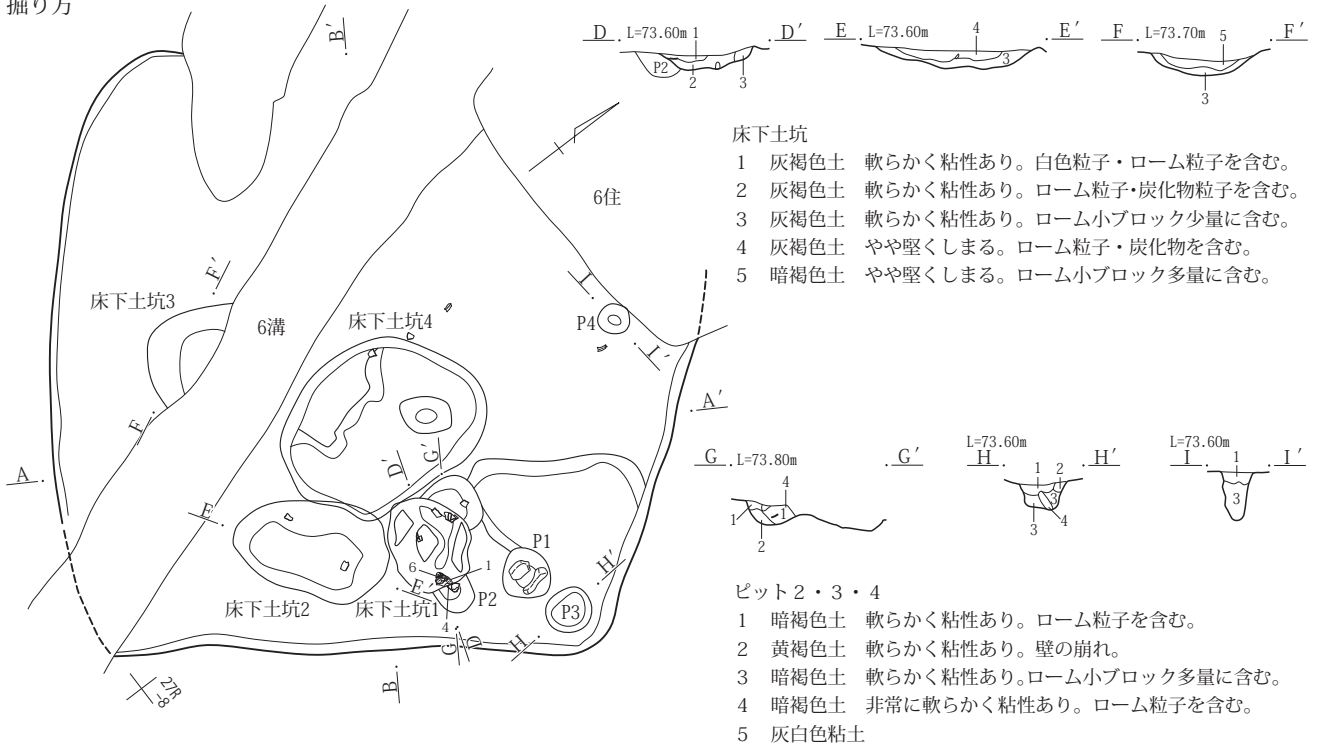
ピット 1

- 1 灰褐色土 やや堅くしまる。ローム粒子・白色粒子を含む。
- 2 暗褐色土 やや堅くしまる。粘性あり。ローム小ブロック多量に含む。

13号住居

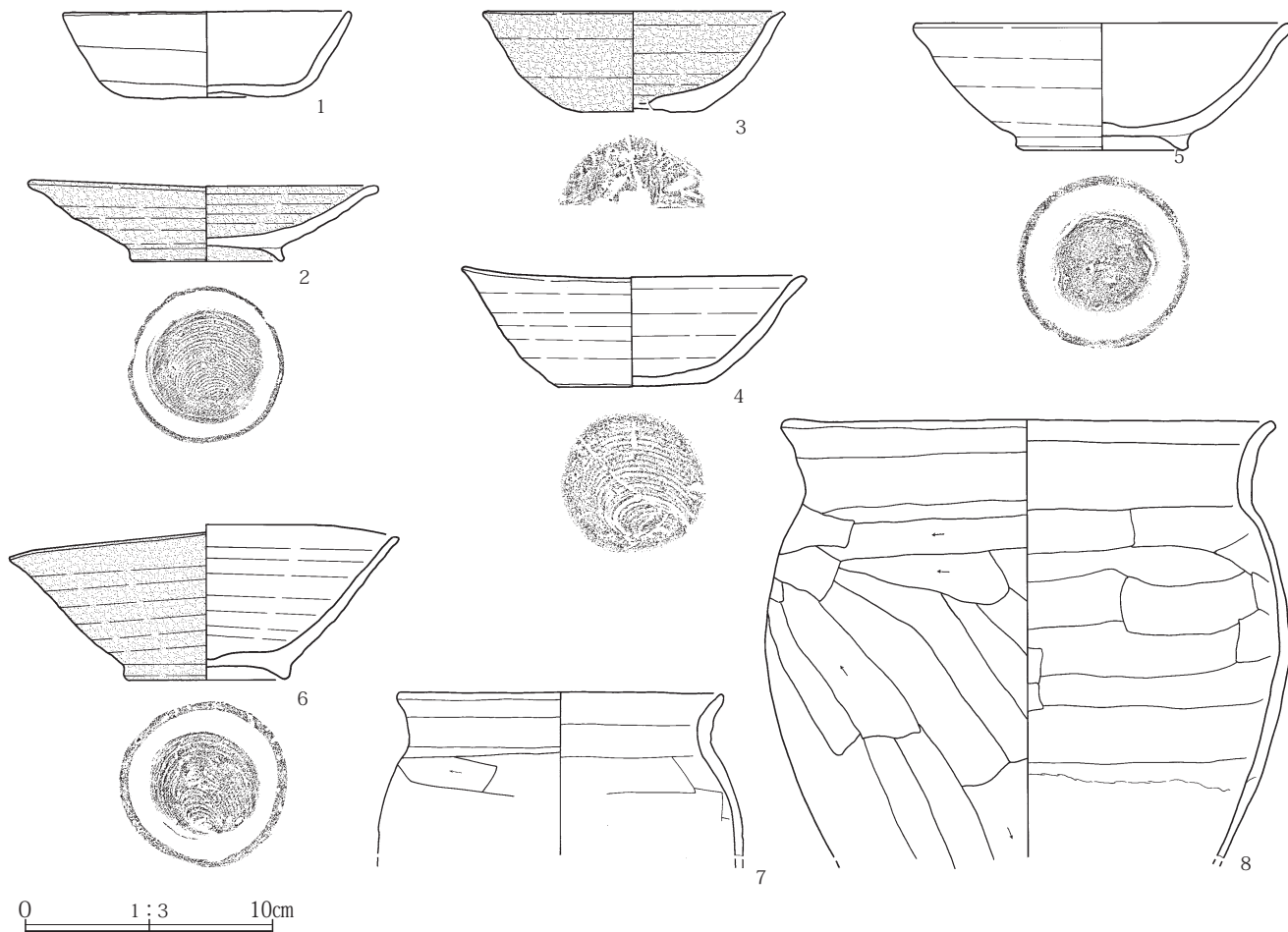
- 1 灰褐色土 軟らかく粘性あり。灰色粒子・ローム粒子・炭化物を含む。
- 2 灰褐色土 軟らかくしまりよい。粘性あり。ローム粒子・炭化物粒子少量に含む。
- 3 黄褐色土 やや堅く粘性あり。
- 4 暗褐色土 やや堅くしまる。黄白色小ブロック・焼土・炭化物を含む。
- 5 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ローム小ブロック・焼土粒子を含む。
- 6 暗褐色土 軟らかく粘性あり。黄白色粘質土小ブロックを含む。
- 7 黄褐色土 やや堅くしまる。ローム多量、炭化物・白色粒子を含む。

掘り方



第38図 1区13号住居

第4章 発掘調査の記録



第39図 1区13号住居出土遺物

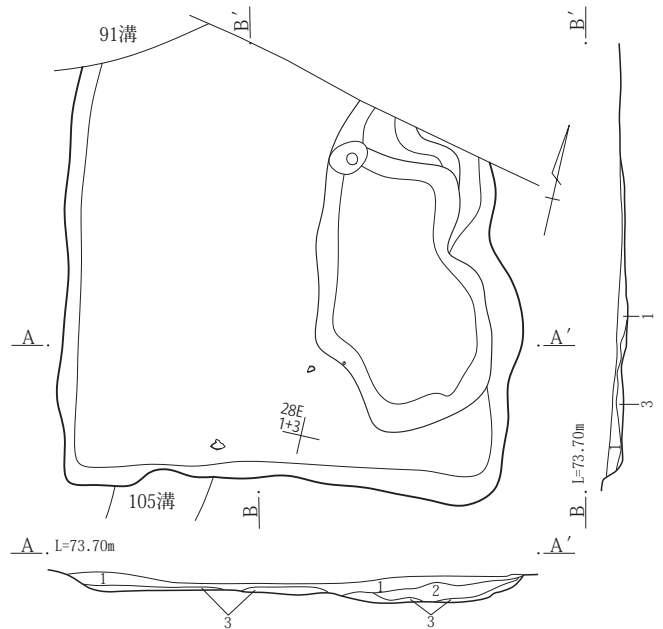
第15表 1区13号住居出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第39図 PL.127	1	土師器 杯	P 2 2/5	口 11.4 高 3.4 底 9.0	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第39図 PL.127	2	須恵器 皿	床下土坑 3/4	口 13.8 高 3.2 台 5.9	細砂粒/還元焰・ 燻/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
第39図 PL.127	3	須恵器 椀	床直上 2/5	口 11.7 高 4.0 底 5.0 孔 1.2	細砂粒/酸化焰・ 燻/灰黄褐	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	底部中央に焼 成後の穿孔あり。
第39図 PL.127	4	須恵器 椀	床下土坑 3/4	口 13.5 高 4.8 底 6.0	細砂粒・粗砂粒・ 片岩/酸化焰/橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第39図 PL.127	5	須恵器 椀	床直上 口縁部3/4欠損	口 15.0 高 5.1 台 6.9	細砂粒・長石/還 元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切りか。	
第39図 PL.127	6	須恵器 椀	床下土坑 口縁部1/4欠損	口 15.2 高 6.2 台 6.2	細砂粒・粗砂粒・ 角閃石/還元焰・ 燻/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
第39図 PL.127	7	土師器 甗	+2cm 口縁部～胴部上 位	口 13.0	細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。	
第39図 PL.127	8	土師器 甗	床直上 口縁部～胴部下 位	口 19.4 胴 21.0	細砂粒・粗砂粒・ 褐色粒/良好/にぶ い橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴 部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

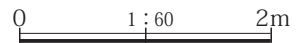
2 竪穴状遺構

4号竪穴状遺構(第40図、P L.12)

位置 28D・E-1・2グリッド。平面形は整った方形。壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦で、東半分は不整形に凹む。硬化面などは見つからない。規模は長軸(3.72)m短軸3.68m深さ3~16cmである。遺物は土師器杯椀類2片・壺甕類5片、須恵器壺甕類5片が出土している。



- 1 黒褐色土 しまり粘性ない。ローム小ブロック少量、軽石粒子微量に含む。
- 2 黒褐色土 しまり粘性ない。ローム小ブロック微量、軽石粒子少量に含む。
- 3 黄褐色土 粘性あり。黒褐色土ブロック含む。



第40図 1区4号竪穴状遺構

3 土坑

土坑は24基検出された。うち13基が1~3号住居周辺に集中するほか、全体に散漫である。2号土坑は比較的大きな柱穴とも考えられる。162号土坑は焼土が多く混入する。185・197号土坑は比較的深度、遺物を伴う点で注目される。

1区2・3号土坑(第41図、P L.12)

位置 28F-11グリッド。3号土坑が2号土坑より後出。2号土坑はピットに似るが大部分調査区域外となり不詳。断面U字状。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面不明。埋没土は暗褐色土で、中央部は柱痕らしく、ロームの混じりが少ない。両側はロームの混じりが顕著で埋填土とみられる。規模は長径(82)cm短径(61)cm深さ29cmである。3号土坑の平面形態は重複により不明。壁は段を持って緩やかに立ち上がり、底面はやや凸凹し、一部ピット状に凹み、別のピットが重複する可能性を残す。規模は長径(68)cm短径(14)cm深さ39cmである。遺物は出土していない。

36B号土坑(第41図、P L.12・13)

位置 28F-9グリッド。平面形はほぼ円形。断面皿状。壁は垂直ぎみに立ち上がる。底面は平坦。規模は長径70cm短径63cm深さ16cmである。遺物は土師器杯椀類2片・壺甕類2片が出土する。出土遺物から古代に比定される。

161号土坑(第41図、P L.13)

位置 28G-11グリッド。6号溝より前出して壊されており、平面形態不詳。壁はほぼ垂直で凹凸がある。底面は凸凹する。埋没土は暗褐色土で、白色粒子が目立って混じる。規模は長径105cm短径57cm深さ30cmである。遺物は出土していない。

162・169・171・172号土坑(第41図、P L.13)

162号土坑 位置 28E-9グリッド。169号土坑より前出で、南半上部は壊される。平面形はほぼ円形。断面U字状。壁はやや斜めに立ち上がる。底面は平坦で一部凸凹する。確認面で半円形に焼土の集中があり、1号住居のカマドも想定して、断ち割りを行った。しかし、使用面となる焼土面は確認できず、焼土は上層に集中するため、土坑と判断した。規模は長径69cm短径59cm深さ33cmである。遺物は土師器杯椀類1片・壺甕類1片が出土する。出土遺物から古代に比定される。

169号土坑 位置 28E-8・9グリッド。2号住・169・172号土坑より後出。平面形はほぼ整った楕円形。断面桶状。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土はローム大ブロックが多く混じり、人為埋没。規模は長径154cm短径(127)cm深さ31cmである。遺物は土師器杯椀類2片・壺甕類49片が出土する。出土遺物から古代に比定される。

171号土坑 位置 28D・E-8・9グリッド。172号土坑より後出。平面形は隅丸長方形。断面皿状。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土はややシルト質。規模は長軸115cm短軸(61)cm深さ15cmである。遺物は土師器壺甕類9片が出土する。出土遺物から古代に比定される。

**172号土坑** 位置 28E-8・9グリッド。169・171号土坑より前出で、北半分・南端は壊される。平面形は楕円形か。壁はやや斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土は上層を中心にローム大ブロックが多く混じり、人為埋没。規模は長径116cm短径(60)cm深さ9cmである。遺物は土師器壺甕類36片、須恵器杯碗類2片出土する。出土遺物から古代に比定される。

**168号土坑**(第41図、P L.13)

**位置** 28D-10グリッド。6号溝と重複し新旧関係不明。平面形は長楕円形。断面皿状。壁は斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。規模は長径78cm短径(64)cm深さ20cmである。遺物は土師器杯碗類2片・壺甕類1片が出土する。出土遺物から古代に比定される。

**170号土坑**(第41図、P L.13)

**位置** 28D-8グリッド。平面形は整った円形。断面U字状。壁は緩やかに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没土は暗褐色土で、白色粒子が目立って混じる。規模は長径72cm短径68cm深さ15cmである。遺物は土師器壺甕類6片が出土する。出土遺物から古代に比定される。

**173号土坑**(第41図、P L.13)

**位置** 28D-8グリッド。平面形はやや歪んだ円形。断面皿状。壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦。埋没土は白色粒子が目立って混じる。規模は長径136cm短径112cm深さ9cmである。遺物は土師器壺甕類24片、須恵器杯碗類2片が出土する。出土遺物から古代に比定される。

**174号土坑**(第41図、P L.13)

**位置** 28G-11グリッド。平面形は不整円形。断面U字状。壁は斜めに立ち上がる。底面は凸凹する。埋没土は白色粒子が目立って混じる。規模は長径68cm短径46cm深さ19cmである。出土遺物から古代に比定される。

**185号土坑**(第41・42図、P L.13・14・128、第16表)

**位置** 28F-6グリッド。70号溝より前出。平面形はほぼ円形。断面桶状。壁はやや斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。規模は長径70cm短径60cm深さ28cmである。埋没土中位に大円礫4点と須恵器碗(42図1)がまとまって出土した。掲載遺物のほか、土師器壺甕類1片が出土する。出土遺物から9世紀後半に比定される。

**186・187号土坑**(第41図、P L.14)

**位置** 28D-10グリッド。187号土坑は186号土坑より前出。両土坑とも6号溝より前出するか。底面形状・断面

観察から土坑を二つに分けたが、遺構境は不明確。残存部分が少なく平面形は不詳。壁は緩やかに立ち上がる。底面は凸凹する。規模は186号土坑は長径94cm短径(58)cm深さ30cm、187号土坑は長径(253)cm短径(70)cm深さ41cmである。遺物は土師器杯碗類7片・壺甕類22片、須恵器杯碗類6片が出土する。出土遺物から古代に比定される。

**191号土坑**(第42図、P L.14)

**位置** 28E-10グリッド。埋没土や形態から、71・188号土坑より前出と推定。残存部分から長楕円形か。壁はやや斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は長径53cm短径47cm深さ35cmである。遺物は須恵器杯碗類1片が出土する。出土遺物から古代に比定される。

**194号土坑**(第42図、P L.14)

**位置** 28F-7グリッド。70号溝より前出。平面形はほぼ円形。断面U字状。壁はやや斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。ロームブロック多く混じるが、自然埋没か。規模は長径60cm短径55cm深さ36cmである。遺物は土師器杯碗類1片・壺甕類4片、須恵器杯碗類1片が出土する。出土遺物から古代に比定される。

**197号土坑**(第42図、P L.14・128、第16表)

**位置** 28E-7グリッド。平面形はほぼ円形。断面U字状。壁はやや斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。自然埋没か。規模は長径57cm短径50cm深さ30cmである。埋没土中位から2の土師器甕が出土する。出土遺物から9世紀第2四半期に比定される。掲載遺物のほか、土師器杯碗類2片・壺甕類24片が出土する。出土遺物から古代に比定される。

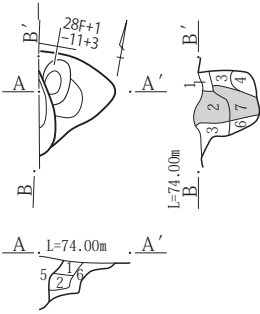
**199号土坑**(第42図、P L.14)

**位置** 28D-9グリッド。2号住居の床面で確認され、11号溝と重なり、前出か。北半部を大きく壊される。平面形は不整楕円形。断面皿状。壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦でやや丸みを持つ。埋没状況不詳。規模は長径198cm短径101cm深さ29cmである。遺物は土師器壺甕類2片が出土する。出土遺物から古代に比定される。

**200号土坑**(第42図、P L.14)

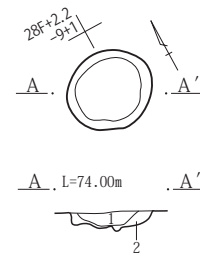
**位置** 28D-10グリッド。3号住居の床面で確認され、11号溝と重なり、前出か。平面形は整った隅丸長方形。断面皿状。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没状況不詳。規模は長軸128cm短軸88cm深さ12cmである。遺

2・3号土坑



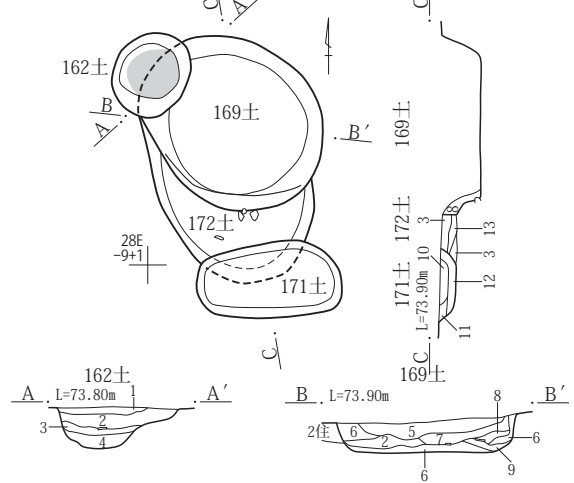
- 2・3号土坑
- 1 暗褐色土 黄色粒1%含む。
  - 2 暗褐色土 ローム小ブロック5%、炭わずか含む。柱痕
  - 3 暗褐色土 ローム小ブロック10%含む。
  - 4 暗褐色土 ローム小ブロック20%含む。
  - 5 暗褐色土 ローム小ブロック40%含む。
  - 6 暗褐色土 ローム大ブロック5%含む。
  - 7 暗褐色土 ローム大ブロック10%含む。柱痕

368号土坑



- 368号土坑
- 1 暗褐色土 ローム小ブロック少量に含む。
  - 2 黒褐色土 ローム大ブロックやや多量に含む。

162・169・171・172号土坑

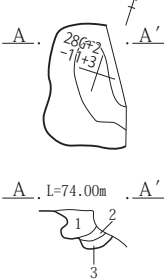


162・169・171・172号土坑

- 1 灰褐色土+焼土大ブロック
- 2 灰褐色土 ローム大ブロックやや多量に含む。
- 3 灰褐色土+ローム大ブロック
- 4 暗褐色土 ローム粒子微量、焼土粒子少量、炭化物粒子微量に含む。
- 5 暗褐色土 灰褐色土大ブロックやや多量、ローム大ブロック多量に含む。
- 6 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量、白色粒子やや多量に含む。

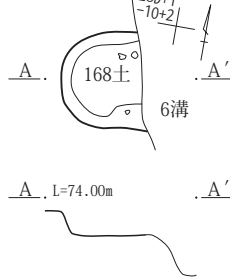
- 7 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
- 8 灰褐色粘質土 ローム大ブロック多量、焼土粒子やや多量に含む。
- 9 黄褐色ブロック土 暗褐色土小ブロック多量に含む。
- 10 暗褐色土 ローム小ブロック少量に含む。
- 11 暗褐色土 ややしilt質。黄色粒子少量に含む。
- 12 灰褐色土 ややしilt質。黄色粒子少量に含む。
- 13 灰褐色土 ややしilt質。黄色粒子少量、焼土粒子微量に含む。

161号土坑



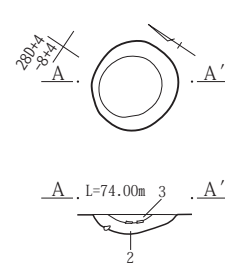
- 161号土坑
- 1 暗褐色土 白色粒子微量に含む。
  - 2 暗褐色土 黄色粒子少量に含む。
  - 3 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。

168号土坑

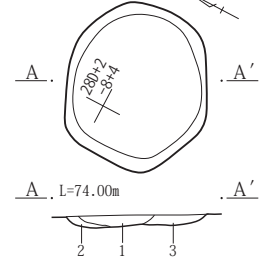


- 170号土坑
- 1 黒褐色土 白色粒子微量、ローム大ブロック少量に含む。
  - 2 黒褐色土 白色粒子微量に含む。
  - 3 暗褐色土 白色粒子微量に含む。

170号土坑

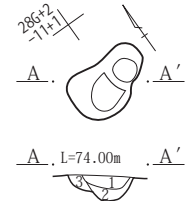


173号土坑



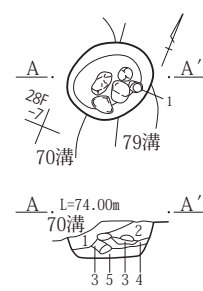
- 173号土坑
- 1 黒褐色土 白色粒子微量、ローム大ブロック少量に含む。
  - 2 黒褐色土 白色粒子微量に含む。
  - 3 暗褐色土 白色粒子微量に含む。

174号土坑



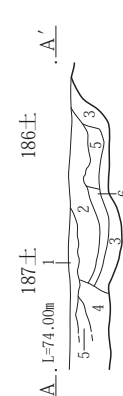
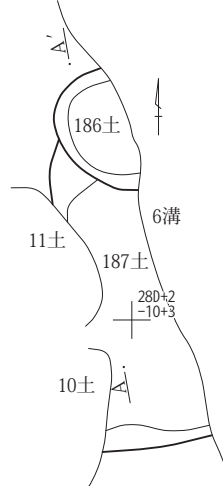
- 174号土坑
- 1 暗褐色土 白色粒子少量に含む。
  - 2 暗褐色土 白色粒子微量、炭化物粒子微量に含む。
  - 3 にぶい褐色土 白色粒子微量に含む。

185号土坑

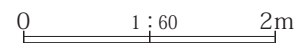


- 185号土坑
- 1 暗褐色土 黄色粒子少量に含む。
  - 2 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
  - 3 灰褐色灰 焼土粒子やや多量に含む。
  - 4 暗褐色土+ローム大ブロック
  - 5 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。

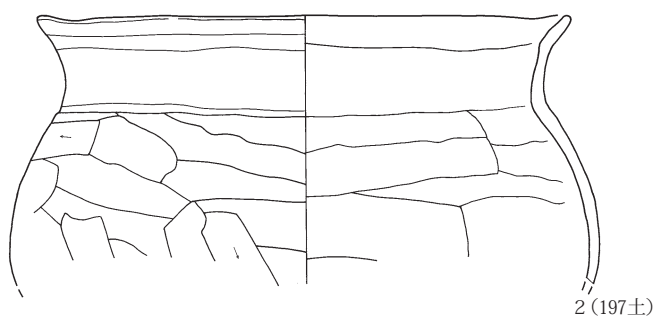
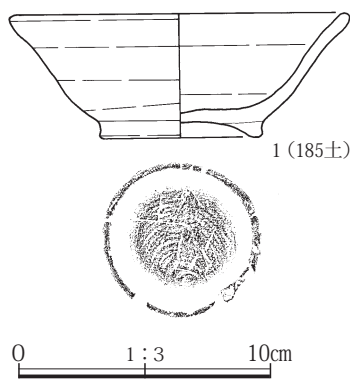
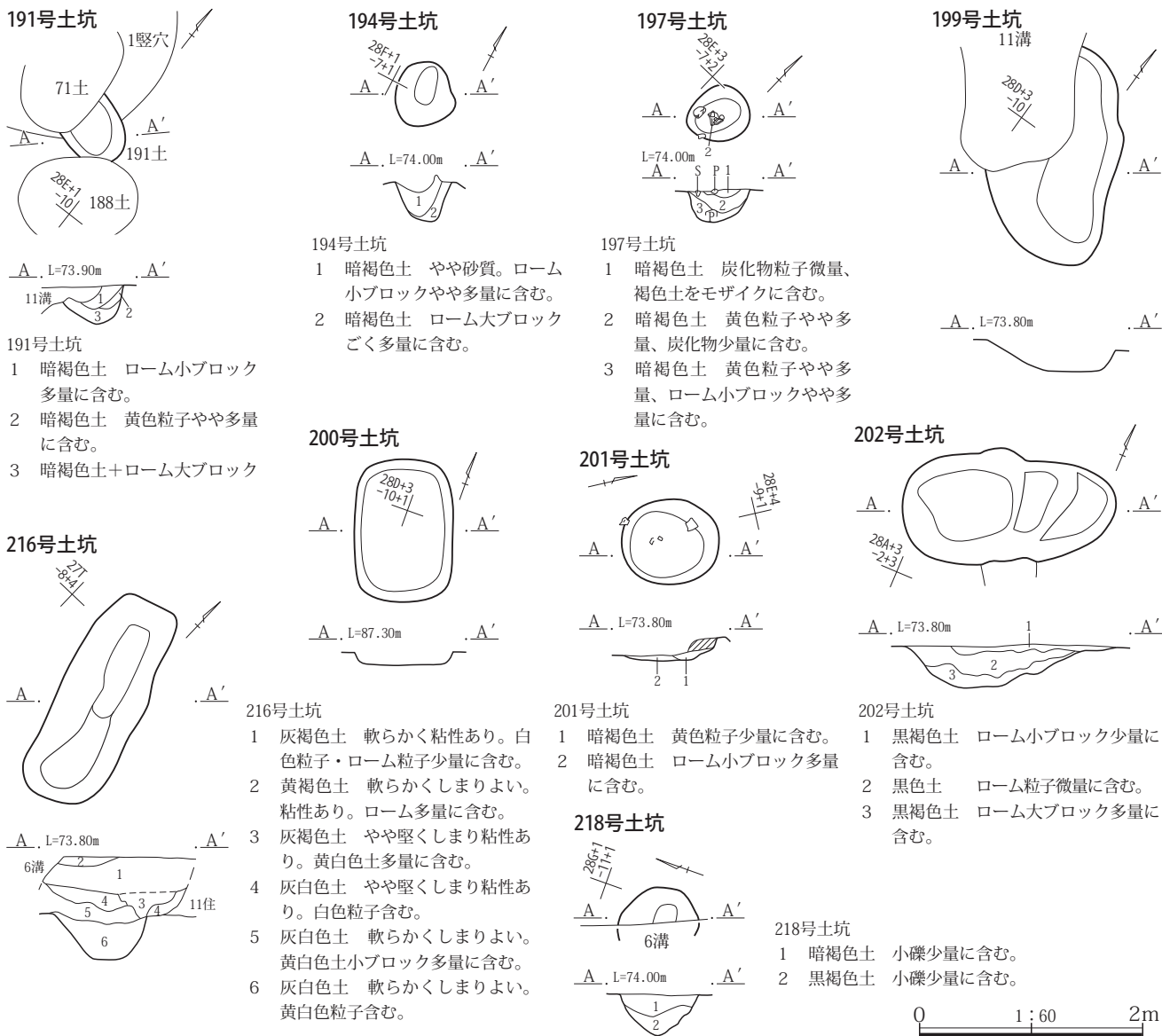
186・187号土坑



- 186・187号土坑
- 1 暗褐色土 浅間A軽石微量に含む。
  - 2 暗褐色土 ローム小ブロック微量に含む。
  - 3 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
  - 4 黒褐色土 ローム小ブロック少量に含む。
  - 5 暗褐色土 ローム小ブロックごく多量に含む。
  - 6 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。



第41図 1区土坑(1)



第42図 1区土坑(2)と出土遺物

第16表 1区土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第42図 PL.128	1	須恵器 椀	185土坑+17cm 1/4	口 13.0 高 4.9 台 5.8	細砂粒/酸化焰/に ぶい黄褐	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。底部は回転糸切り。	
第42図 PL.128	2	土師器 甕	197土坑 口縁部~胴部上 位片	口 21.0 胴 23.1	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

物は土師器杯椀類2片・壺甕類3片、須恵器杯椀類1片が出土する。出土遺物から古代に比定される。

201号土坑(第42図、P L.14)

位置 28E-9グリッド。上層をほ場整備時に攪乱されるが、平面形はやや潰れた円形。断面皿状。壁はやや斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没状況不詳。規模は長径87cm短径76cm深さ21cmである。遺物は土師器杯椀類1片・壺甕類8片、須恵器杯椀類4片・壺甕類1片が出土する。出土遺物から古代に比定される。

202号土坑(第42図、P L.14)

位置 28A-2グリッド。平面形は乱れた長楕円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。自然埋没か。規模は長径190cm短径100cm深さ36cmである。遺物は出土していない。

備考 調査段階3次2号土坑より名称変更。

216号土坑(第42図)

位置 27R・S-8グリッド。11号住居の掘り方面で確認され後出。2号落ち込み状遺構と新旧関係は未確認ながら、掘り上がりでは後出を思わせる。平面形は長方形。断面逆台形。壁は斜めに立ち上がる。底面は鋤・鍬跡状の掘削痕が顕著で凸凹する。埋没土は下位に灰白色土が多くやや堅くしまり、特異な様相である。規模は長軸200cm短軸79cm深さ41cmである。遺物は出土していない。

218号土坑(第42図、P L.14)

位置 28G-11グリッド。6号溝より前出し、東半分は消滅するが、平面形は円形か。断面U字状。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。自然埋没か。規模は長径64cm短径(32)cm深さ38cmである。遺物は出土していない。

備考 調査段階64号溝より名称変更。

4 落ち込み状遺構

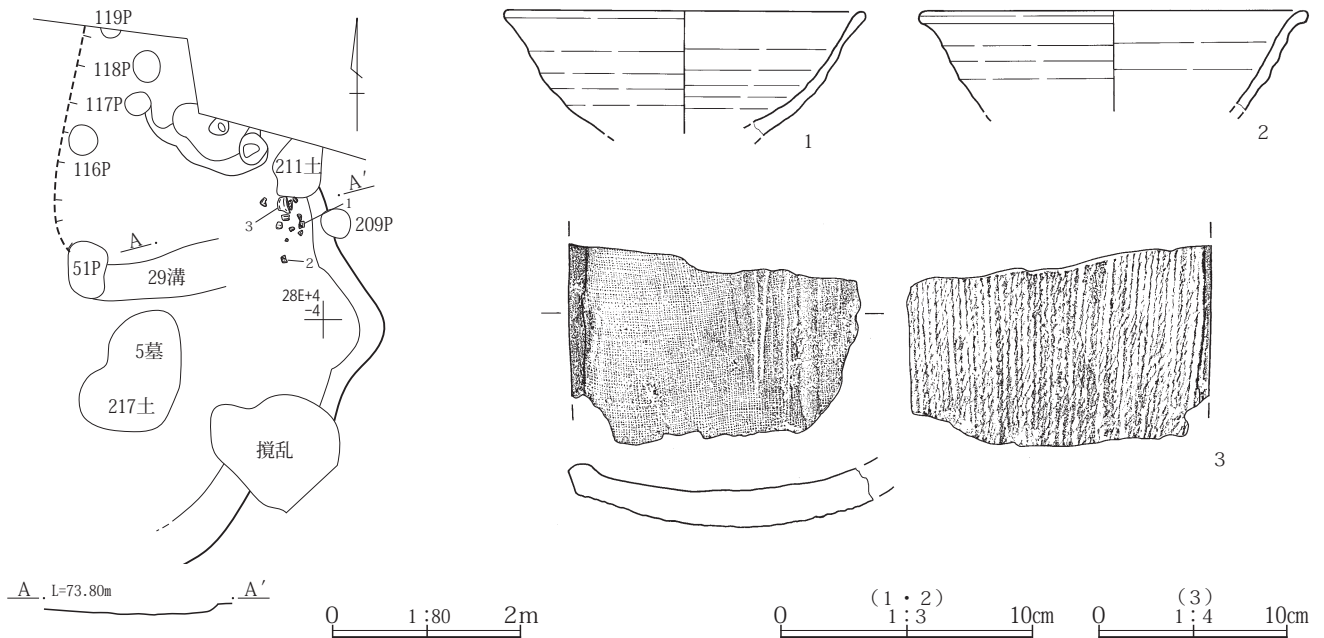
性格が判然としない遺構について、2基を扱う。1号落ち込み状遺構については、竪穴状遺構としても差し支えない。2号落ち込み状遺構は特殊な遺構である。並走する84号溝など、時期的に近い大規模な区画溝もあることから、あわせて考慮すべき遺構であろう。

1号落ち込み状遺構(第43図、P L.128、第17表)

位置 28E・F-3・4グリッド。中世屋敷内部であり、211号土坑や29号溝などと重複し、平面形は不明だが、竪穴状にも見える。壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦。埋没状況不詳。規模は長軸(5.72)m短軸3.23m深さ8~11cmである。東辺確認面で須恵器椀(1・2)、瓦(3)が出土する。出土遺物から9世紀後半から10世紀前半に比定される。

2号落ち込み状遺構・周辺ピット群(第44~48図、P L.14・128・129、第19表)

位置 27R~28B-8~10グリッド。6・84号溝より



第43図 1区1号落ち込み状遺構と出土遺物

第4章 発掘調査の記録

第17表 1区1号落ち込み状遺構出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率		計測値		胎土/焼成/色調		成形・整形の特徴		摘要	
第43図 PL.128	1	須恵器 椀	口縁部～体部片		口 14.0		細砂粒/還元焰/灰 白		口ク口整形、回転右回り。			
第43図 PL.128	2	須恵器 椀	口縁部～体部片		口 15.0		細砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙		口ク口整形、回転右回り。			
挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第43図 PL.128	3	瓦			-	-	1.2～ 2.0	破片		黄灰・ にぶい 黄橙	古代瓦。	

前出であり、大規模ながら平面形などは不明である。北半部は更に溝状に落ち込む。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。規模は長軸20.04m短軸9.08m深さ3～31cmである。底面及び周辺にピットが点在する。152～185・268・269号ピットの36基である。個別の規模は表18のとおり。完形か完形に近い須恵器杯・椀(45図4・6・7・13)の出土が目立つ。掲載遺物のほか、土師器杯椀類240片・壺甕類163片、須恵器杯椀類219片・壺甕類7片が出土する。また、中世在地系土器1片が混入していた。出土遺物から9世紀後半に比定される。出土遺物の性格は判然としない。

第18表 1区2号落ち込み状遺構周辺ピット群計測表(cm)

ピットNo.	グリッド	長径	短径	深さ	非掲載破片数
152	27T-9	45	34	33	
153	27T-9	44	36	32	
154	27R-7	47	45	24	
155	27R-7	51	27	27	須恵器杯椀類1
156	27R-7	37	37	43	
157	27R-7	42	37	28	
158	27R-8	50	42	42	
159	28A-10	32	30	8	
160	28A-10	44	27	18	
161	28A-10	51	35	20	
162	28A-9	54	37	23	
163	28B-10	33	30	14	
164	28B-10	46	43	23	須恵器壺甕類2
165	28A-10	29	28	16	
166	27S-9	30	30	23	土師器杯椀類1・壺甕類1・須恵器壺甕類1
167	27T-9	19	15	13	
168	27T-9	23	21	25	
169	27T-9	23	19	17	
170	27T-9	20	19	23	
171	27R-8	36	33	22	
172	27R-8	30	26	16	
173	27R-9	64	(42)	28	
174	27R-8	23	26	19	
175	27Q-8	70	61	20	土師器壺甕類1
176	27R-8	26	23	15	
177	27Q-8	28	28	10	
178	27R-8	60	40	20	
179	27R-8	28	19	9	
180	27R-8	19	16	11	
181	27R-8	51	38	12	
182	27S-8	35	35	25	
183	28A-9	31	30	35	
184	27R-9	33	30	24	
185	27R-9	(27)	29	4	
268	28A-9	33	(20)	8	
269	28A-9	41	40	33	

5 井戸

9号井戸(第49・50図、P L .15・129、第20表)

位置 18D・E-19・20グリッド。1号屋敷内部にあり、関係も考えられたが、出土遺物から別時期である。

重複 104号溝と重複するが新旧関係不明。

形状と規模 上面の平面形は正方形で北辺は弓状をなす。規模は長軸352cm短軸329cmである。壁面から幅42～55cmまで深さ49cmで平坦な1段目がある。更にこの面から内側に、ほぼ方形に2段目が掘り下げられる。規模は長軸272cm短軸240cm深さ35cmである。2段目の平坦面の幅は40～60cmで、更に内側に円筒型の井筒部分があり、上部は斜めに開くが、四隅はピット状に20cm程度掘り込まれる。2段目の内側から円筒部上端の上部には、4段程度の石積みを確認できる。平面形はほぼ正方形をなす。規模は長軸145cm短軸144cm高さ25cmである。裏込め石はないため、石組み井戸とは見なしがたいが、調査段階でも形状を留めており、崩れやすいものではない。

断面形 深さ1.55m以上。完掘されていないため、全体の深さは不明である。

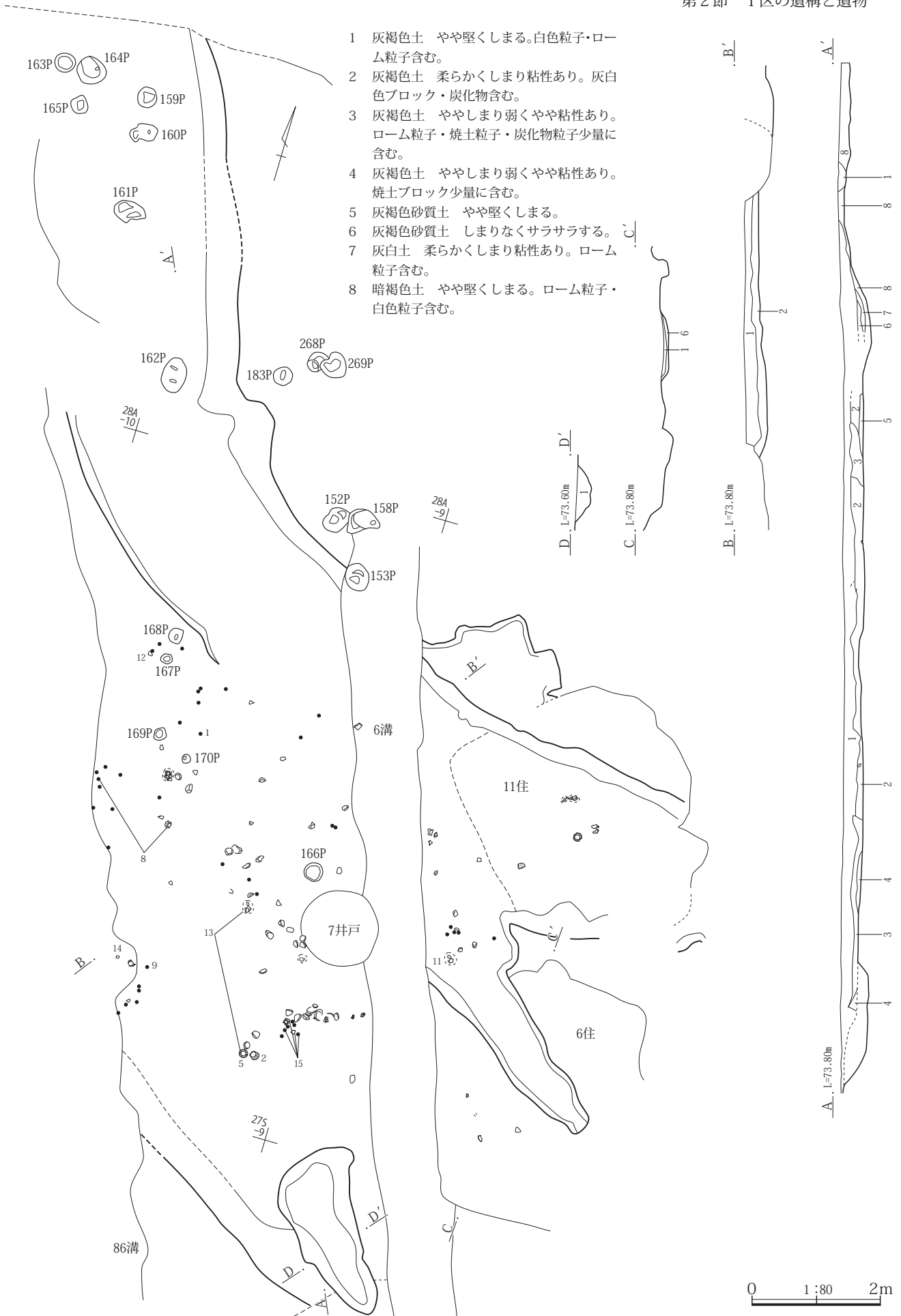
埋没状況 石積みを境にして、埋没土は内外で異なる。内側はロームの混入の少ない黒褐色土でしまりが無い。外側はローム小ブロックが著しく混入してしまっている。このため、石積みは井戸側の一部であり、その外側は掘り方と見なされる。円筒部内部にも多量の石が入ることから、石積みは更に高かったと推測される。

遺物 板材などの出土はないが、石積みの内側に木杵があった可能性もある。石組み内部に崩落した石を除去した下面で、須恵器椀(3)、同甕(7)が出土し、廃棄された早い段階の遺物と考えられる。掲載遺物のほかに、土師器杯椀類68片・壺甕類142片、須恵器杯椀類98片・壺甕類30片が出土する。また、近世国産陶磁器4片が混入していた。

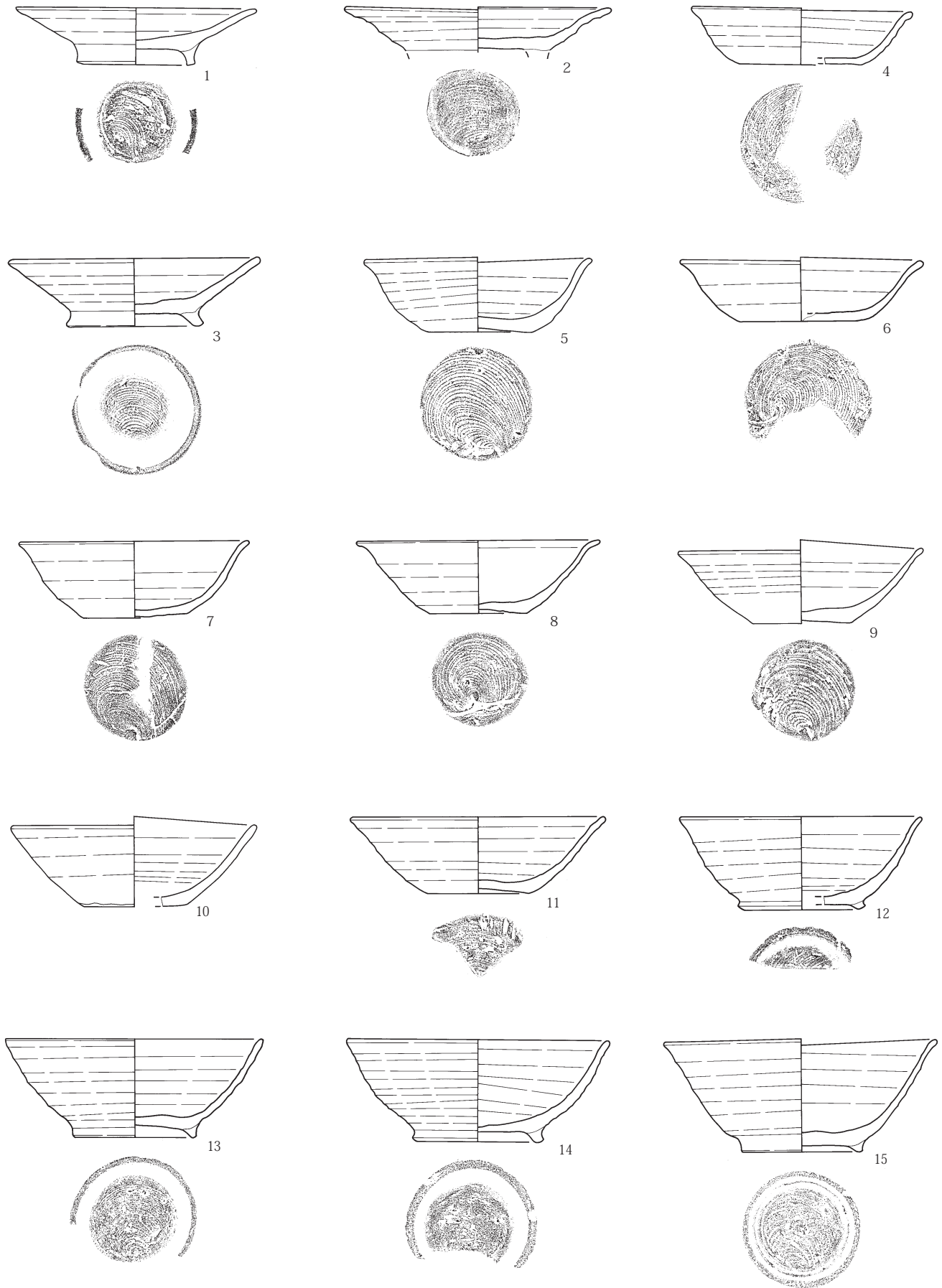
時期 出土遺物から9世紀後半に比定される。

備考 調査段階3次1号竪穴状遺構より名称変更。

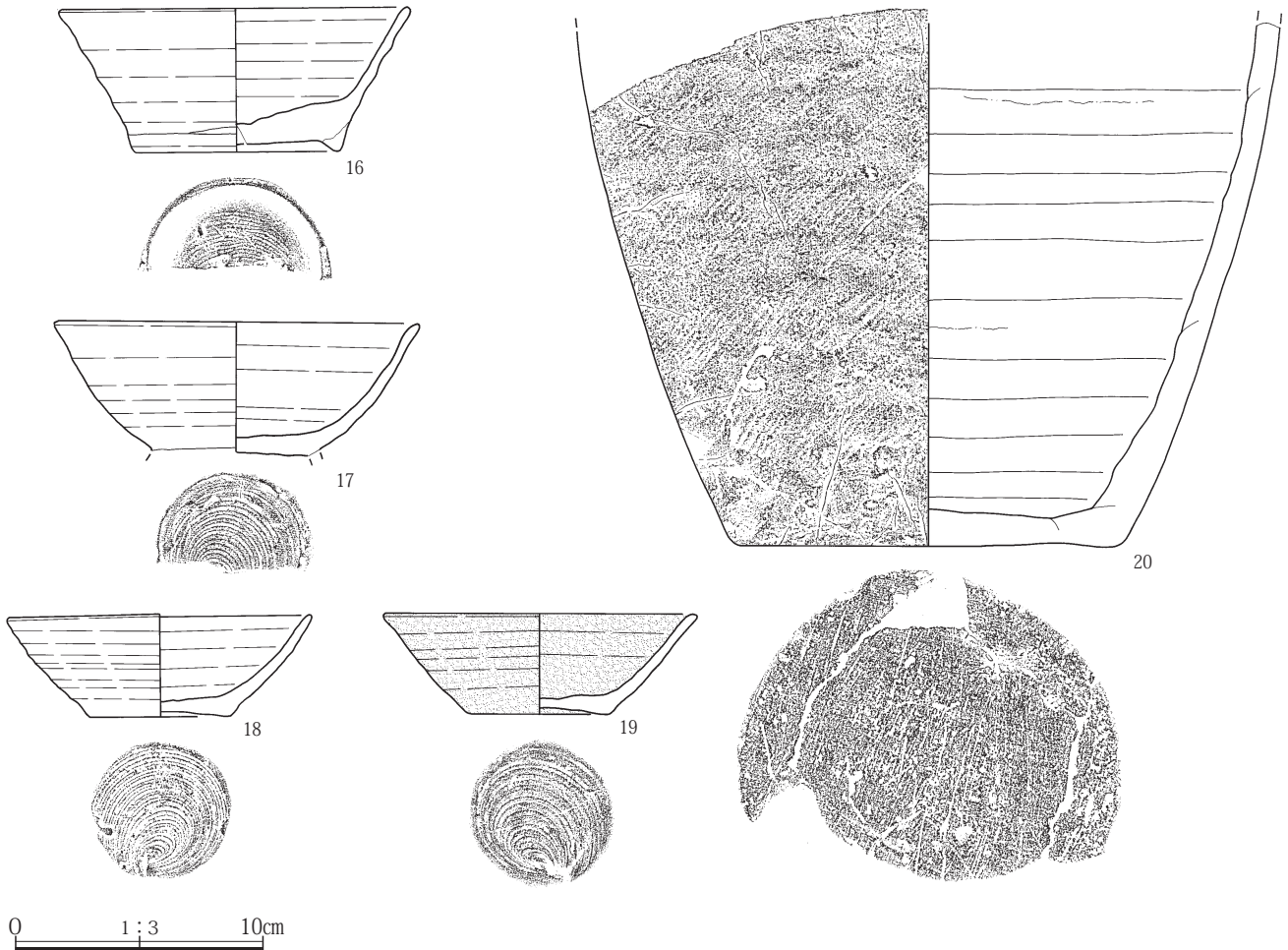




第44図 1区2号落ち込み状遺構と周辺ピット群(1)



第45図 1区2号落ち込み状遺構出土遺物(1)



第46図 1区2号落ち込み状遺構出土遺物(2)

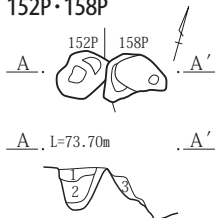
第19表 1区2号落ち込み状遺構出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第45図 PL.128	1	須恵器 皿	1/2	口 13.0 高 3.1 底 6.9 台 5.6	細砂粒・粗砂粒・ 長石/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
第45図 PL.128	2	須恵器 皿	口縁部3/4、高 台欠損	口 14.3 底 8.0	細砂粒・粗砂粒・ 長石/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付が剥落、底部は回転 糸切り。	
第45図 PL.128	3	須恵器 皿	2/3	口 13.6 高 3.7 底 7.0 台 6.7	細砂粒・長石/還 元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。 底部は回転糸切り。	
第45図 PL.128	4	須恵器 杯	1/2	口 11.8 高 3.1 底 6.8	細砂粒・粗砂粒・ 長石/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
第45図 PL.128	5	須恵器 杯	完形	口 12.3 高 4.1 底 6.3	細砂粒・粗砂粒・ 長石/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第45図 PL.128	6	須恵器 杯	1/2	口 12.3 高 4.5 底 6.0	細砂粒・粗砂粒・ 角閃石/還元焰/暗 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第45図 PL.128	7	須恵器 椀	1/2	口 12.4 高 4.2 底 5.7	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第45図 PL.128	8	須恵器 椀	3/5	口 13.0 高 4.0 底 5.4	細砂粒・粗砂粒・ 片岩/還元焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第45図 PL.128	9	須恵器 椀	2/3	口 13.2 高 4.6 底 5.5	細砂粒・粗砂粒・ 角閃石/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第45図 PL.128	10	須恵器 椀	1/3	口 13.3 高 4.7 底 5.6	細砂粒・粗砂粒・ 白色粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は器面磨滅のため整形不明。	
第45図 PL.128	11	須恵器 椀	1/4	口 13.7 高 4.2 底 5.8	細砂粒・粗砂粒・ 長石/酸化焰/にぶ い黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第45図 PL.128	12	須恵器 椀	1/3	口 13.0 高 5.1 底 6.2	細砂粒・粗砂粒・ 角閃石/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
第45図 PL.128	13	須恵器 椀	2/5	口 13.9 高 5.4 底 6.3	細砂粒・粗砂粒・ 長石/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。 底部は回転糸切り。	

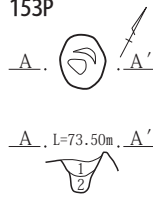
第4章 発掘調査の記録

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第45図 PL.128	14	須恵器 椀	1/3	口 14.1 高 5.6 台 6.4	細砂粒・粗砂粒・ 片岩/還元焰・燻/ 灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。 底部は回転糸切りがかすかに残る。	
第45図 PL.128	15	須恵器 椀	3/4	口 14.8 高 6.2 台 6.3	細砂粒・長石/還 元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。 底部は回転糸切り。	
第46図 PL.129	16	須恵器 椀	2/5	口 13.6 高 5.7 台 7.7	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。 底部は回転糸切り。	
第46図 PL.129	17	須恵器 椀	1/3、高台欠損	口 14.4 底 5.8	細砂粒・粗砂粒・ 角閃石/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付が剥落、底部は回転 糸切り	
第46図 PL.129	18	須恵器 椀	1/2	口 12.0 高 4.1 底 5.6	細砂粒・粗砂粒・ 片岩・長石/還元 焰/灰	ロクロ整形、回転左回り。底部は回転糸切り無調整。	
第46図 PL.129	19	須恵器 椀		口 12.3 高 4.5 底 6.0	細砂粒/還元焰・/ 灰・燻/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第46図 PL.129	20	須恵器 甕	底部~胴部下位	底 15.2	細砂粒・粗砂粒・ 片岩/還元焰/灰	底部は手持ちヘラ削り、胴部は叩き痕が残る。内面は底部 から胴部にヘラナデ。	

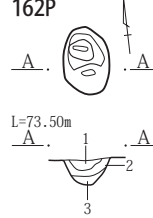
152P・158P



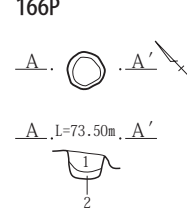
153P



162P



166P



152・153・158号ピット

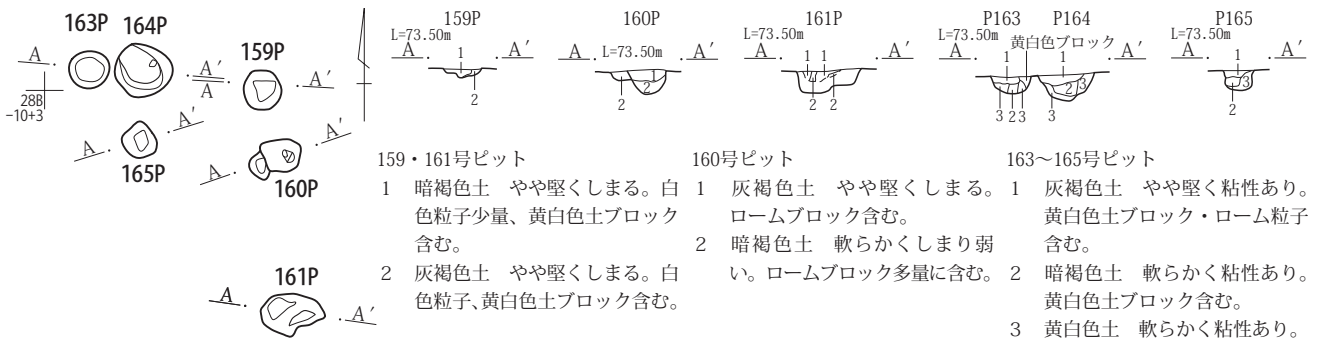
- 1 暗褐色土 黄白色土ブロック含む。
- 2 暗褐色土 黄白色土ブロック多量に含む。
- 3 暗褐色土 ロームブロック多量に含む。

162号ピット

- 1 暗褐色土 白色粒子少量、黄白色土ブロック含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子・黄白色土粒子含む。
- 3 灰褐色土 白色粒子、黄白色土ブロック含む。

166号ピット

- 1 灰褐色土 やや堅くしまる。白色粒子、黄白色土粒子・焼土粒子含む。
- 2 灰褐色砂質土



159・161号ピット

- 1 暗褐色土 やや堅くしまる。白色粒子少量、黄白色土ブロック含む。
- 2 灰褐色土 やや堅くしまる。白色粒子、黄白色土ブロック含む。

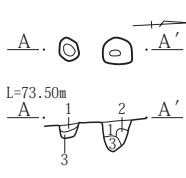
160号ピット

- 1 灰褐色土 やや堅くしまる。ロームブロック含む。
- 2 暗褐色土 軟らかくしまり弱い。ロームブロック多量に含む。

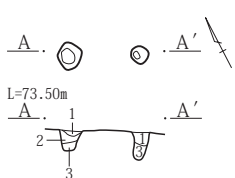
163~165号ピット

- 1 灰褐色土 やや堅く粘性あり。黄白色土ブロック・ローム粒子含む。
- 2 暗褐色土 軟らかく粘性あり。黄白色土ブロック含む。
- 3 黄白色土 軟らかく粘性あり。

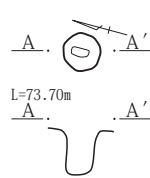
167P・168P



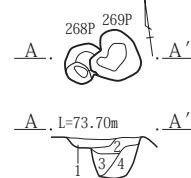
169P・170P



183P



268P・269P

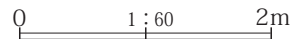


167~170号ピット

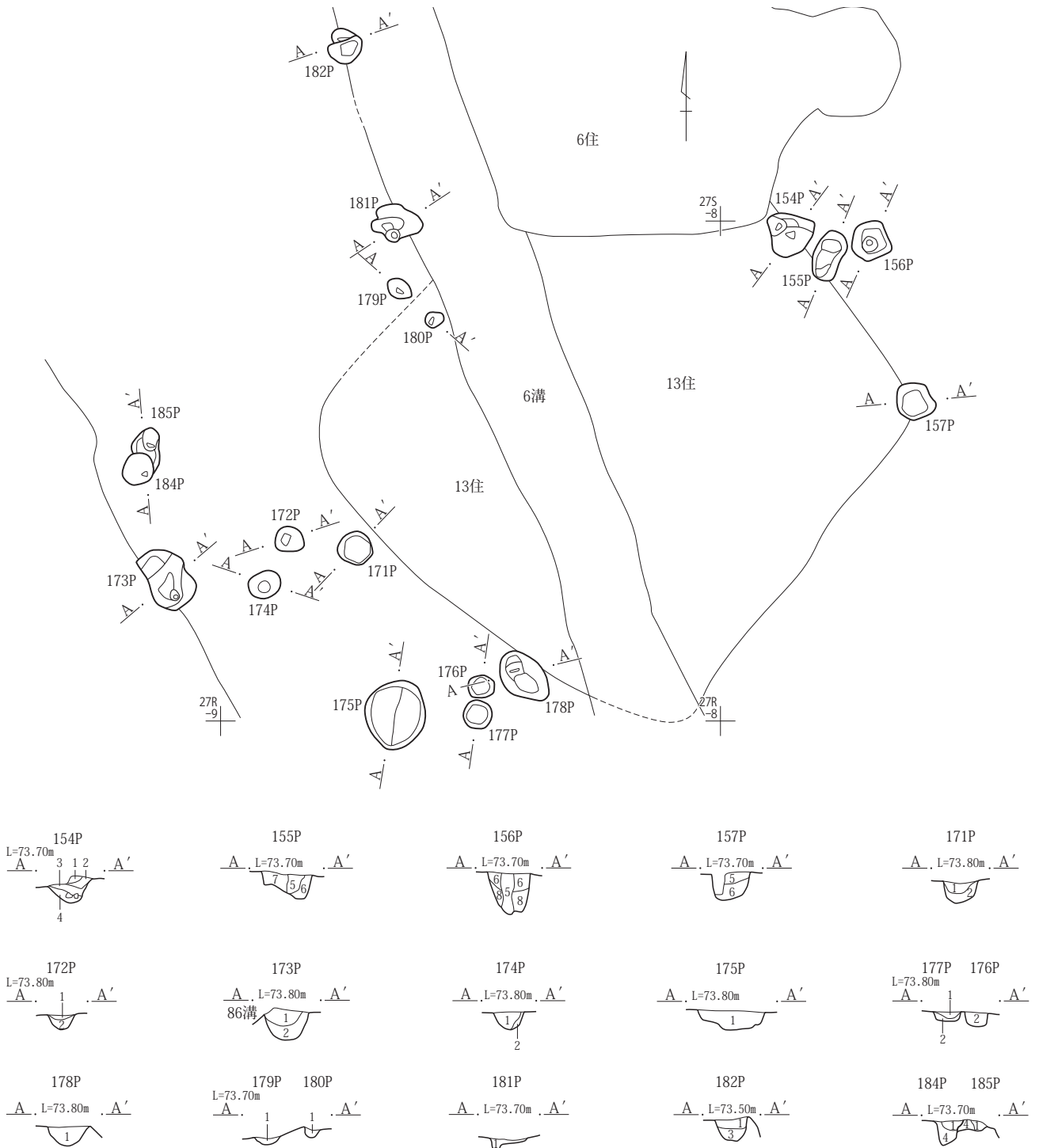
- 1 灰褐色土 やや堅くしまる。黄白色土ブロック含む。
- 2 黄白色土 軟らかくしまり弱い。黄白色土ブロック含む。
- 3 灰色土 やや堅くしまり粘性あり。

268・269号ピット

- 1 灰褐色土 ロームブロック・炭化物含む。
- 2 灰褐色土 ローム粒子含む。
- 3 灰褐色土 黄白色土ブロック含む。
- 4 灰褐色土 ローム粒子少量に含む。



第47図 1区2号落ち込み状遺構周辺ピット群(2)



154～157号ピット

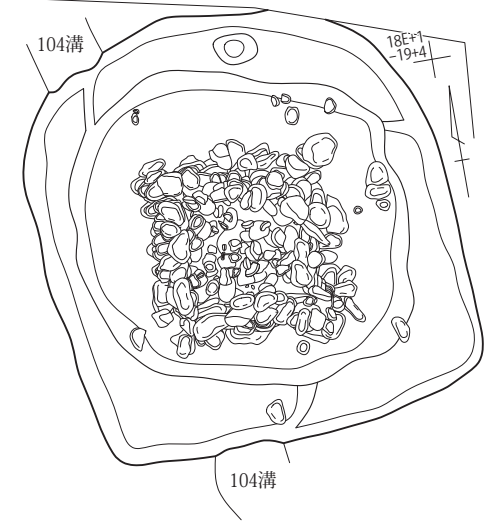
- 1 灰褐色土 やや堅くしまる。ローム粒子・白色粒子含む。
- 2 暗褐色土 やや堅くしまる。ロームブロック含む。
- 3 暗褐色土 やや堅くしまる。ローム粒子含む。
- 4 暗褐色土 やや堅くしまる。ローム粒子多量に含む。
- 5 灰褐色土 やや堅くしまる。ロームブロック含む。
- 6 暗褐色土 軟らかくしまり弱い。ロームブロック多量に含む。
- 7 黄褐色土
- 8 暗褐色土 軟らかくしまりよい。粘性あり。ローム粒子・白色粒子含む。

171～182、184、185号ピット

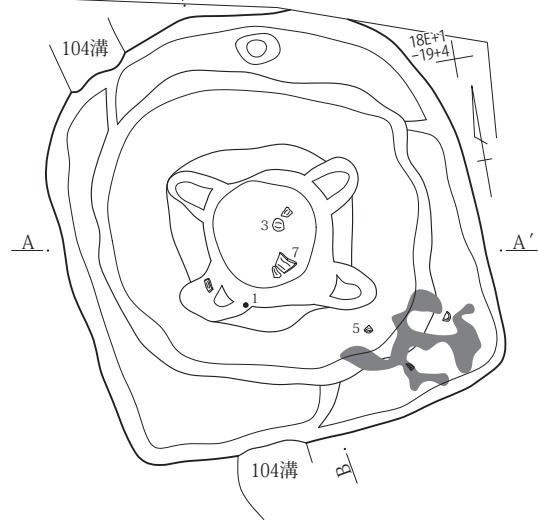
- 1 暗褐色土 やや堅くしまる。ロームブロック・白色粒子含む。
- 2 暗褐色土 やや堅くしまり粘性あり。ロームブロック多量に含む。
- 3 暗褐色土 やや堅くしまり粘性あり。ローム粒子少量に含む。
- 4 暗褐色土 やや堅くしまり粘性あり。黄白色ブロック含む。

第48図 1区2号落ち込み状遺構周辺ピット群(3)

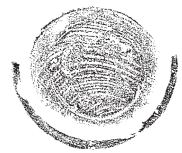
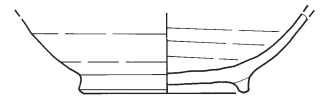
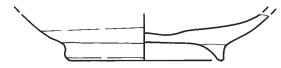
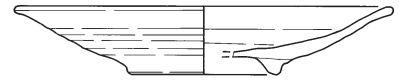
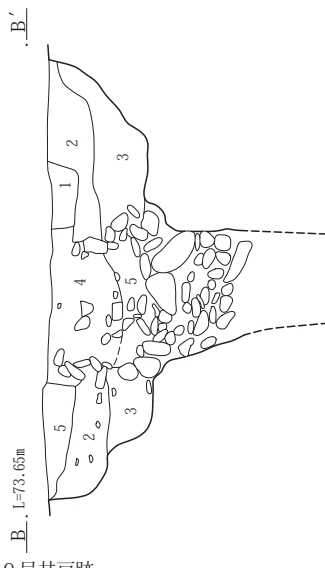
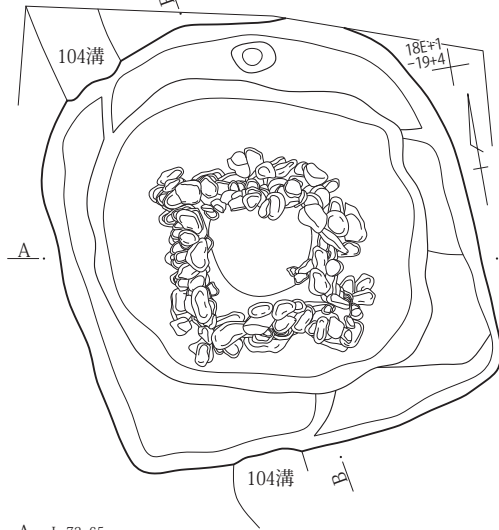
礎出土状況



掘り方



使用面

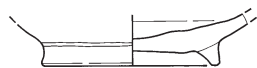


A, L=73.65m

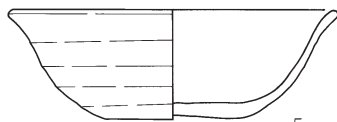
A' 9号井戸跡

- 1 黒褐色土 ローム小ブロック少量に含む。
- 2 黒褐色土 しまり強い。ローム小ブロック多量に含む。
- 3 黒褐色土 ローム小ブロックごく多量に含む。
- 4 黒褐色土 しまり粘性ない。ローム粒子少量に含む。
- 5 黒褐色土 ローム粒子多量に含む。

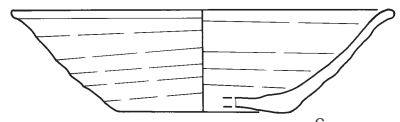
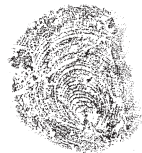
0 1:60 2m



4



5

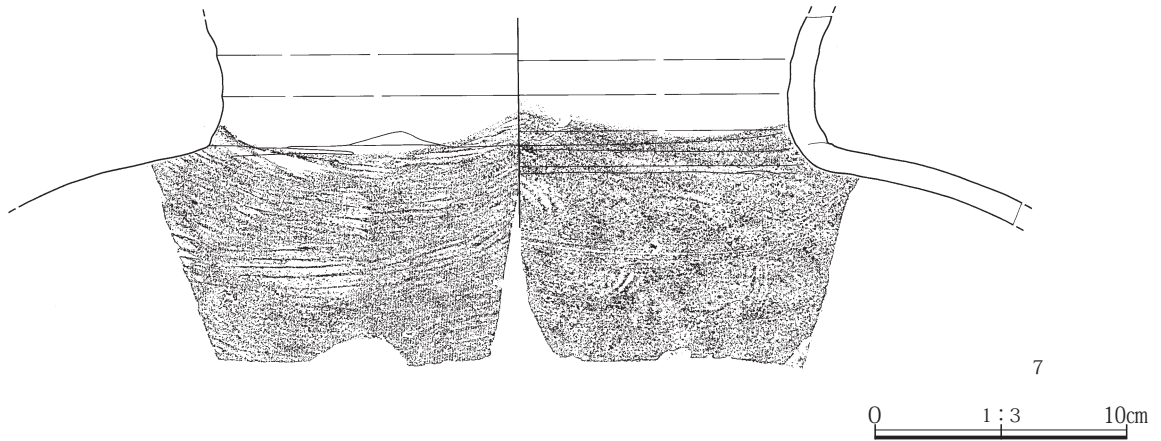


6



0 1:3 10cm

第49図 1区9号井戸と出土遺物(1)



第50図 1区9号井戸出土遺物(2)

第20表 1区9号井戸出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第49図 PL.129	1	須恵器 皿	1/5	口 14.6 高 2.7 台 5.8	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
第49図 PL.129	2	須恵器 椀	底部	台 6.0	細砂粒・粗砂粒・ 角閃石/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
第49図 PL.129	3	須恵器 椀	底部～体部	台 6.0	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
第49図 PL.129	4	須恵器 椀	底部	台 5.8	細砂粒・粗砂粒・ 角閃石/還元焰/灰	ロクロ整形、回転左回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
第49図 PL.129	5	須恵器 椀	1/3	口 12.6 高 4.3 底 5.6	細砂粒・長石/還 元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第49図 PL.129	6	須恵器 椀	1/4	口 14.7 高 4.0 底 7.0	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第50図 PL.129	7	須恵器 甕	口縁部下半～胴部上位片		細砂粒・粗砂粒・ 角閃石・長石/還 元焰/灰	口縁部はロクロ整形。頸部は内外面ともヘラナデ、胴部は外面に平行叩き痕、内面に同心円状アテ具痕がかすかに残る。	

## 6 溝

調査区東半部は、中世・近世屋敷および近世墓地在営まれた関係もあり、当期の溝は確認できない。溝は15条で、南北で様相が異なり、西端中央から南西端にかけて、広域に及ぶ大規模な溝が集中する。これらは北西—南東軸を採って走向する点で一致する。中でも、84号溝は幅が広く埋没土上層にAs-Bが一次堆積する。86・87号溝もその前代の遺構に位置づけられる。やや東に離れる85号溝も、走向方位などで近似する。2号落ち込み状遺構も同様である。

調査区北西部は比較的小規模な溝が点在する。元来南半部よりやや標高が高かったため、ほ場整備による削平も影響する。走向方位はややばらつきがあり、東西軸を採るものもみられる。

### 8号溝(第51図、P L.16)

位置 28F・G-9・10グリッド。浅いため削平され、南端は消滅か。中程から北は東方向に折れ、平面くの字状をなす。走向方位N-13°-W~N-42°-W。断面皿状。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。両端の

比高差13cm、勾配2.18%で北方へ下向する。埋没状況不詳。規模は長さ5.96m上端幅23~65cm最大深20cmである。遺物は土師器杯椀類3片・壺甕類3片、須恵器杯椀類1片が出土する。出土遺物から古代に比定される。

### 12号溝(第51図、P L.16・129、第21表)

位置 28G-11グリッド。5号住居より後出で、6号溝より前出。東西端とも調査区域外に延びる。走向方位N-85°-E。断面U字状。壁は斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。自然埋没か。底面から1の須恵器羽釜が出土するが、前出する5号住居の時期と一致するため、混入と考えられる。掲載遺物のほか、土師器杯椀類8片・壺甕類14片、須恵器杯椀類12片・壺甕類4片が出土する。6号溝より前出であるため、中世以前である。埋没土から馬歯小片が出土している。

### 14号溝(第51図)

位置 28G-10グリッド。北端は調査区域外に延びる。走向方位N-8°-E。断面皿状。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没状況不詳。規模は長さ1.95m上端幅85~104cm最大深18cmである。遺物は土師器杯椀類4

片・壺甕類6片、須恵器杯椀類1片が出土する。また、近世在地系土器1片は混入と考えられる。

15・17号溝(第51図、P L .16)

15号溝 位置 28F-7・8グリッド。13号溝より前出。浅いため削平され、東西端消滅か。走向方位N-72°-E。断面皿状。壁は緩やかに立ち上がる。底面はやや凸凹する。両端の比高差9cm、勾配2.10%で西方へ下向する。埋没土にロームブロックが目立つ。規模は長さ4.28m上端幅35~60cm最大深11cmである。遺物は土師器杯椀類1片・壺甕類3片、須恵器杯椀類1片・壺甕類片が出土している。出土遺物から古代に比定される。

17号溝 位置 28F-8グリッド。13号溝より前出。浅いため削平され、東端消滅か。走向方位N-79°-E。断面U字状。西端は15号溝と合流する。壁は斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。両端の比高差9cm、勾配5.0%で西方へ下向する。埋没土にロームブロックが目立つ。規模は長さ1.80m上端幅32~63cm最大深21cmである。遺物は出土していない。

18号溝(第51図、P L .16)

位置 28E・F-8グリッド。42号土坑より前出。13号溝と重複して新旧関係不明。走向方位N-70°-E~N-90°。断面皿状。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。両端の比高差4cm、勾配1.53%で西方へ下向する。規模は長さ2.60m上端幅20~49cm最大深8cmである。遺物は土師器壺甕類1片が出土する。出土遺物から古代に比定される。

65号溝(第51図、P L .13・16)

位置 28G-11グリッド。5号住居・161号土坑と重複して新旧関係不明。弓状に曲がる。走向方位N-45°-W。断面U字状。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持ち、西半部は土坑状に掘り込まれる。埋没土下位は黒みが強い。規模は長さ1.06m上端幅38~50cm最大深30cmである。遺物は出土していない。

72号溝(第51図、P L .16)

位置 28E・F-6グリッド。埋没土から71号溝より前出。1号溝より前出で、79号溝とは新旧関係不明。走向方位N-88°-W。断面皿状。壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦。両端の比高差5cm、勾配2.38%で東方へ下向する。埋没土は白色粒子が目立つ。規模は長さ2.1m上端幅50~62cm最大深6cmである。遺物は出土していない。

77号溝(第51図、P L .16)

位置 28B-6グリッド。1号道・67号溝より前出。走向方位N-0°。断面U字状。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は平坦。両端の比高差は1cmで勾配はほとんどない。自然埋没か。規模は長さ2.83m上端幅65~102cm最大深15cmである。遺物は出土していない。

78号溝(第52図、P L .16)

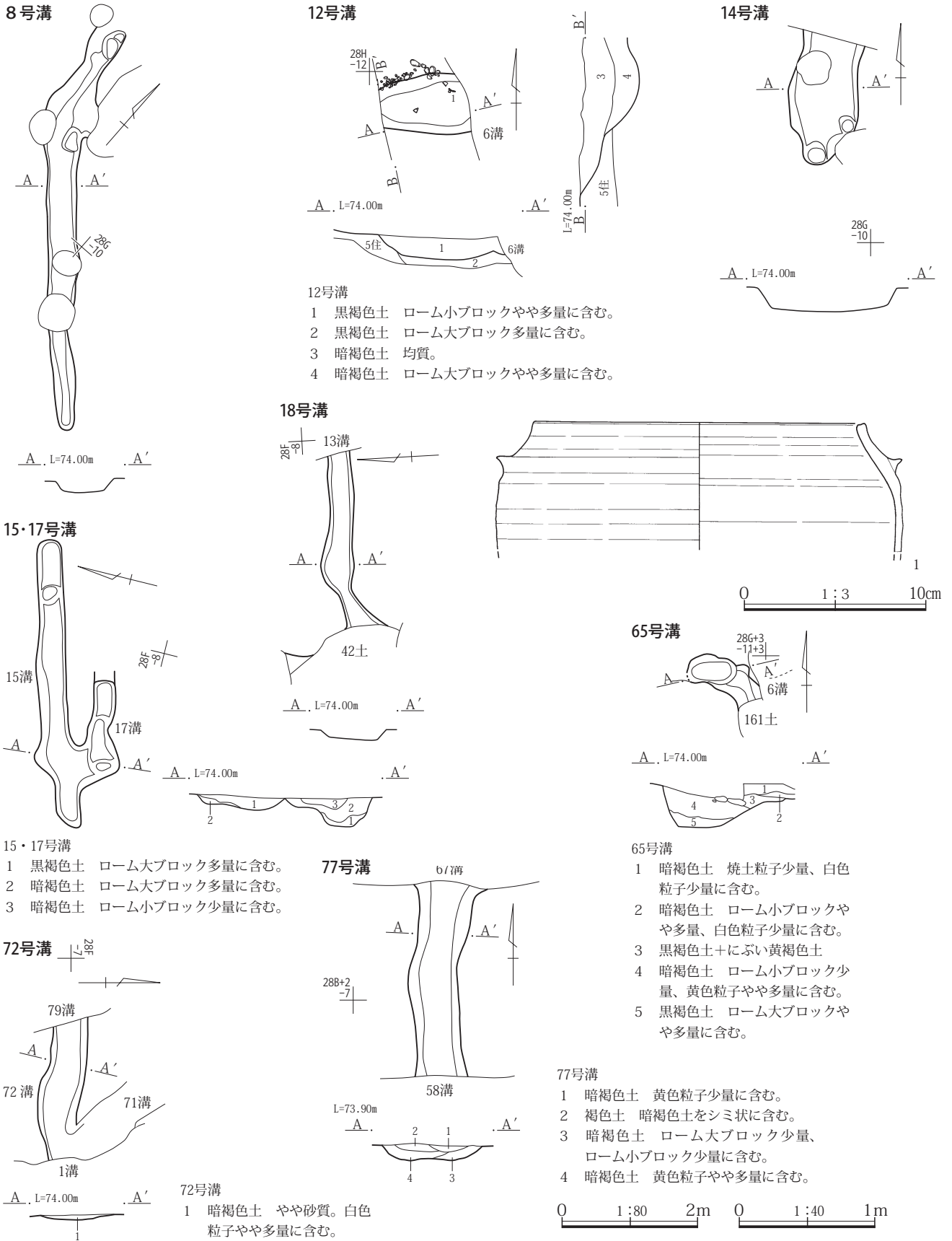
位置 28C・D-7・8グリッド。13号溝と76号溝の間に位置するが、直接の重複関係はない。南端に6号集石遺構が接するが埋没土上位に位置し、関係は不明。別の遺構として扱う。走向方位N-35°-E~N-11°-E。断面U字状。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。両端の比高差11cm、勾配1.82%で南方へ下向する。埋没土下位にロームブロック目立つ。規模は長さ6.04m上端幅31~51cm最大深16cmである。遺物は出土していない。

84・86・87号溝(第53~56図、P L .16~18・129~131、第23表)

84号溝 位置 27P~T-8~10グリッド。76号土坑、81号溝より前出で、86・87号溝より後出。平面形は蛇行する。走向方位N-24°-W。断面逆台形で、壁の上位は斜めに立ち上がり、下位は稜を持って垂直気味となる。北端から南へ約14.67mまで、底面は幅96~138cmと幅広く非常に平坦で、そこで底面が一度立ち上がり、上端の蛇行にあわせて底面も東に折れる。底面は凸凹し、西壁際が浅く一段下がる。また、東壁際に細く断面U字状の溝が同じ屈曲部から始まるが、断面観察から重複する古段階の溝であり、元来84号溝に重複して、86号溝に類似する別の溝があった可能性が高い。両端の比高差10cmで勾配はほとんどない。埋没土は、最上位にAs-Bの純堆積が厚さ20cm程度埋積し、完全に埋まっていない状態で、As-Bが降下したものと理解される。規模は長さ22.08m、上端幅152~269cm、下端幅16~135cm、最大深98cmである。形態・走向方位から綿貫小林前遺跡O東区9号溝と同一の溝である可能性が高い。底面及び埋没土中から須恵器椀などがやや多く出土する。前出する86号溝の比定年代から、10世紀後半以降に掘削され、11世紀代には埋没したのと考えられる。掲載遺物のほか、土師器1片が出土する。また、近世在地系土器2片、その他土器1片が混入していた。

備考 本遺構周辺に基本土層Ⅲが堆積する。





第51図 1区8・12・14・15・17・18・65・72・77号溝と12号溝出土遺物

第21表 1区12号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第51図 PL.129	1	須恵器 羽釜	口縁部～胴部上 片	口 18.0 胴 22.2 鏝 22.1	細砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転方向不明。鏝は貼付。	

**86号溝** 位置 27P～T-8～10、28A-10グリッド。  
81・84号溝より前出。平面形はほぼ直線状で、走向方位N-23°-W。断面形は逆台形で、底面中央部が更にV字形に掘り込まれる。東壁は斜めに立ち上がり、西壁は84溝に壊される。V字部分の埋没土は、礫を多く含んだ砂と暗褐色土の互層であり、水成堆積による流入土砂によって埋まる。流水があった可能性がある。規模は長さ28.32m上端幅96～156cm最大深80cmである。底面及び埋没土中から須恵器椀などがやや多く出土する。出土遺物は9世紀後半から10世紀前半を主体とするため、10世紀前半には埋没したものと考えられる。

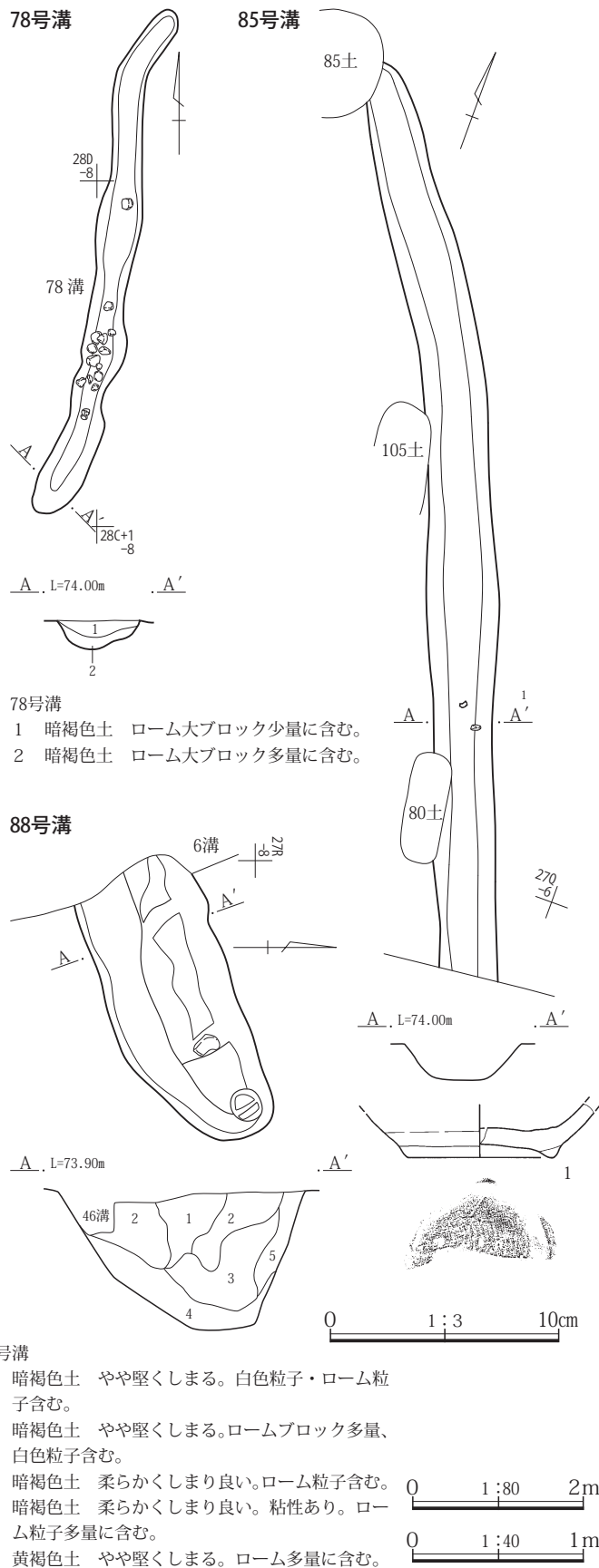
**87号溝** 位置 27P～R-9・10グリッド。76号土坑、81・84号溝より前出。平面形はやや蛇行する。走向方位N-22°-W。断面U字状。壁はやや斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。両端の比高差は1cmで勾配はほとんどない。埋没土は黒褐色土であり、重複する時期の近い84・86号溝と異なる。規模は長さ9.92m上端幅57～113cm最大深57cmである。遺物は出土していない。

**85号溝**(第52図、P L .18・129、第22表)

**位置** 27Q-6グリッド。80・85・105号土坑より前出。中程から北は、若干西に向きを変える。走向方位N-21°-W。断面U字状。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。両端の比高差3cmで勾配はほとんどない。埋没土は断面観察ないが、遺構確認時は黒みがあり、近世の溝とは異なる。規模は長さ10.80m上端幅58～86cm最大深19cmである。底面から1の須恵器椀片が出土する。出土遺物から平安時代と想定される。

**88号溝**(第52図、P L .18)

**位置** 27Q・R-7グリッド。6・46号溝より前出。三日月状をなす。走向方位N-69°-E。断面V字形気味。南壁は斜めに、北壁はやや垂直気味に立ち上がる。底面は幅狭く凸凹する。両端の比高差10cm、勾配2.88%で東方へ下向する。埋没土は白色粒子が目立つ。規模は長さ3.47m上端幅103～150cm最大深80cmである。遺物は出土していない。



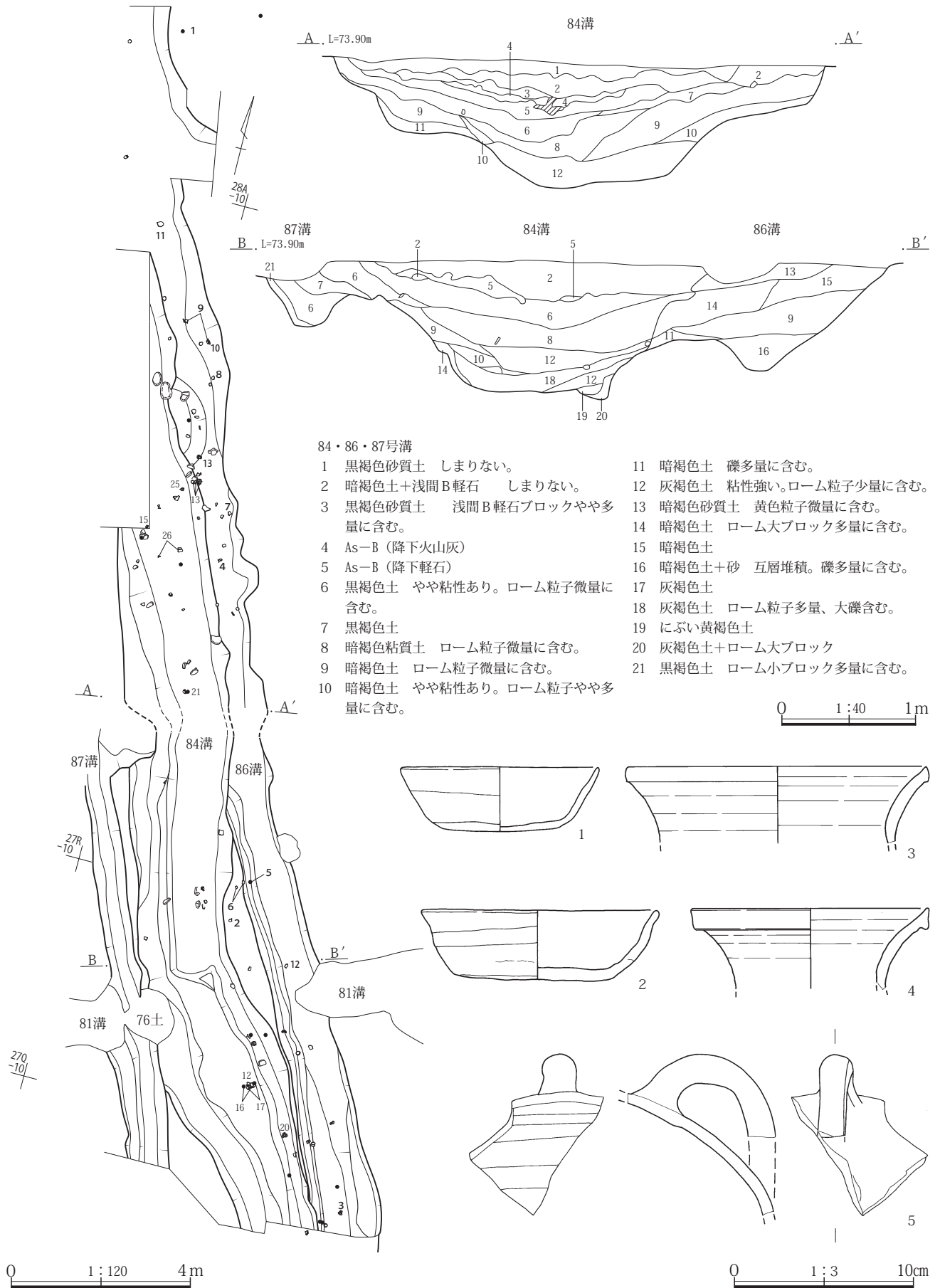
- 78号溝  
1 暗褐色土 ローム大ブロック少量に含む。  
2 暗褐色土 ローム大ブロック多量に含む。

- 88号溝  
1 暗褐色土 やや堅くしまる。白色粒子・ローム粒子含む。  
2 暗褐色土 やや堅くしまる。ロームブロック多量、白色粒子含む。  
3 暗褐色土 柔らかくしまり良い。ローム粒子含む。  
4 暗褐色土 柔らかくしまり良い。粘性あり。ローム粒子多量に含む。  
5 黄褐色土 やや堅くしまる。ローム多量に含む。

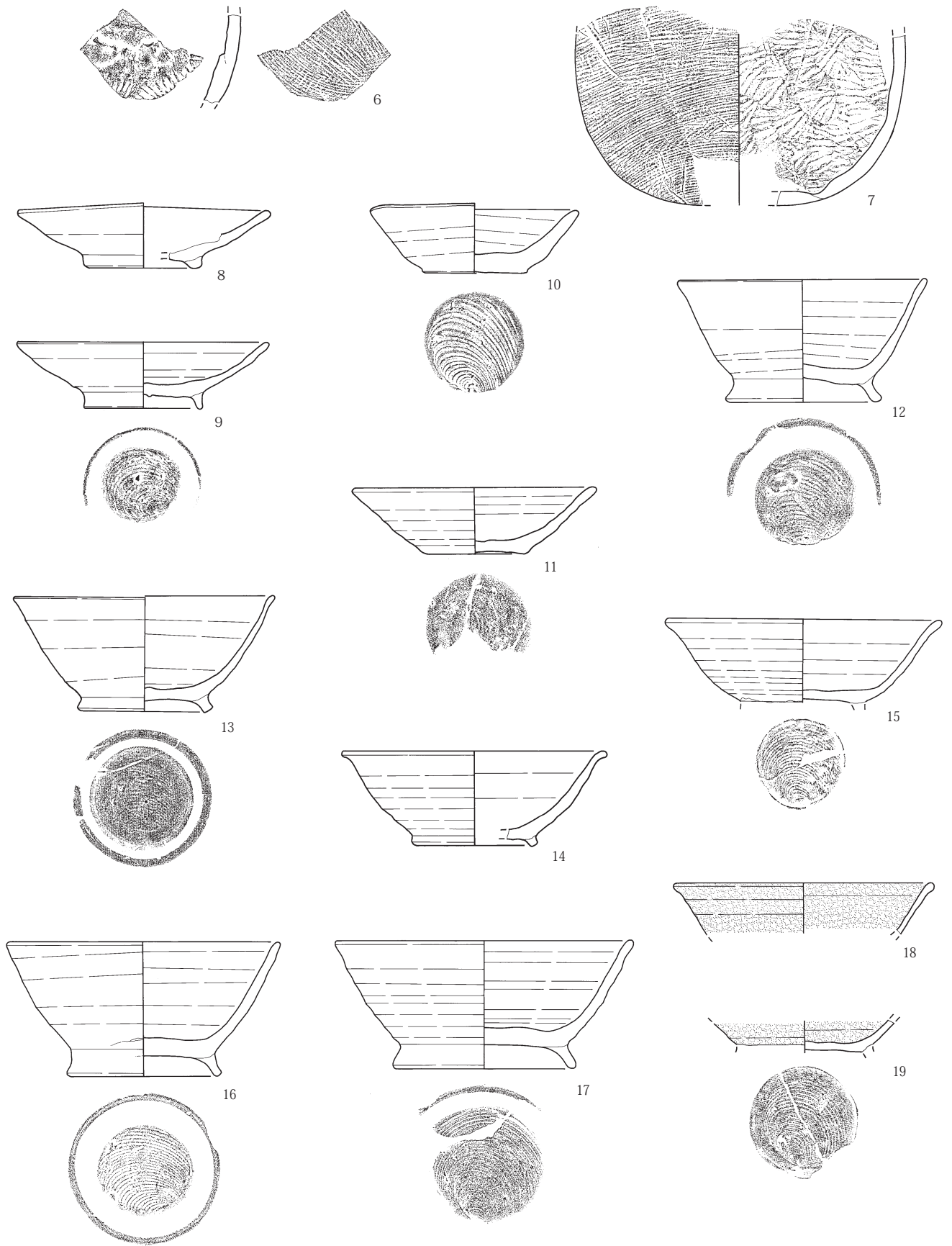
第52図 1区78・85・88号溝と85号溝出土遺物

第22表 1区85号溝出土遺物

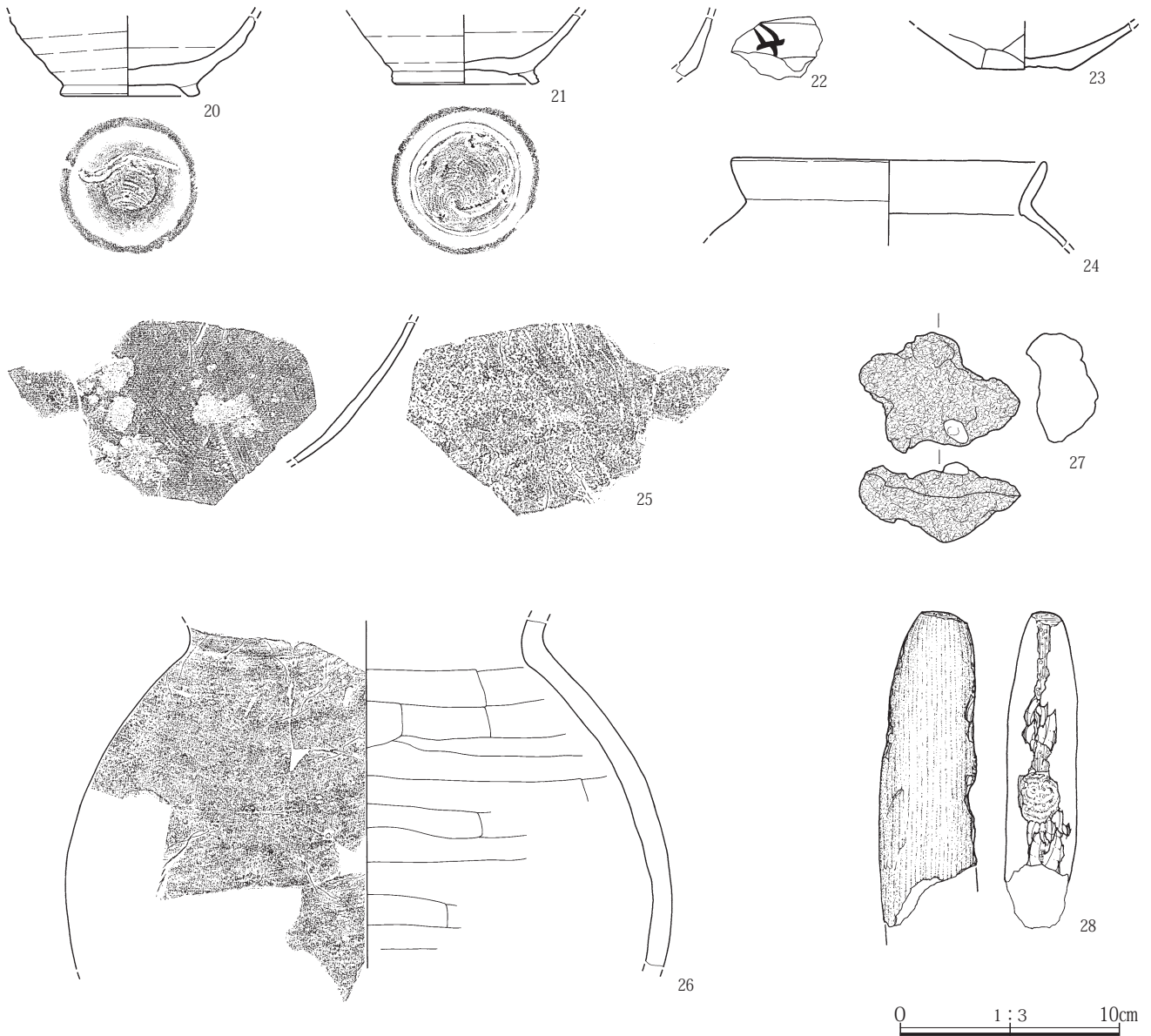
挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第52図 PL.129	1	須恵器 椀	+12cm 底部片	台 6.4	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	



第53図 1区84・86・87号溝と84号溝出土遺物(1)



第54図 1区84号溝出土遺物(2)



第55図 1区84号溝出土遺物(3)

第23表 1区84号溝出土遺物

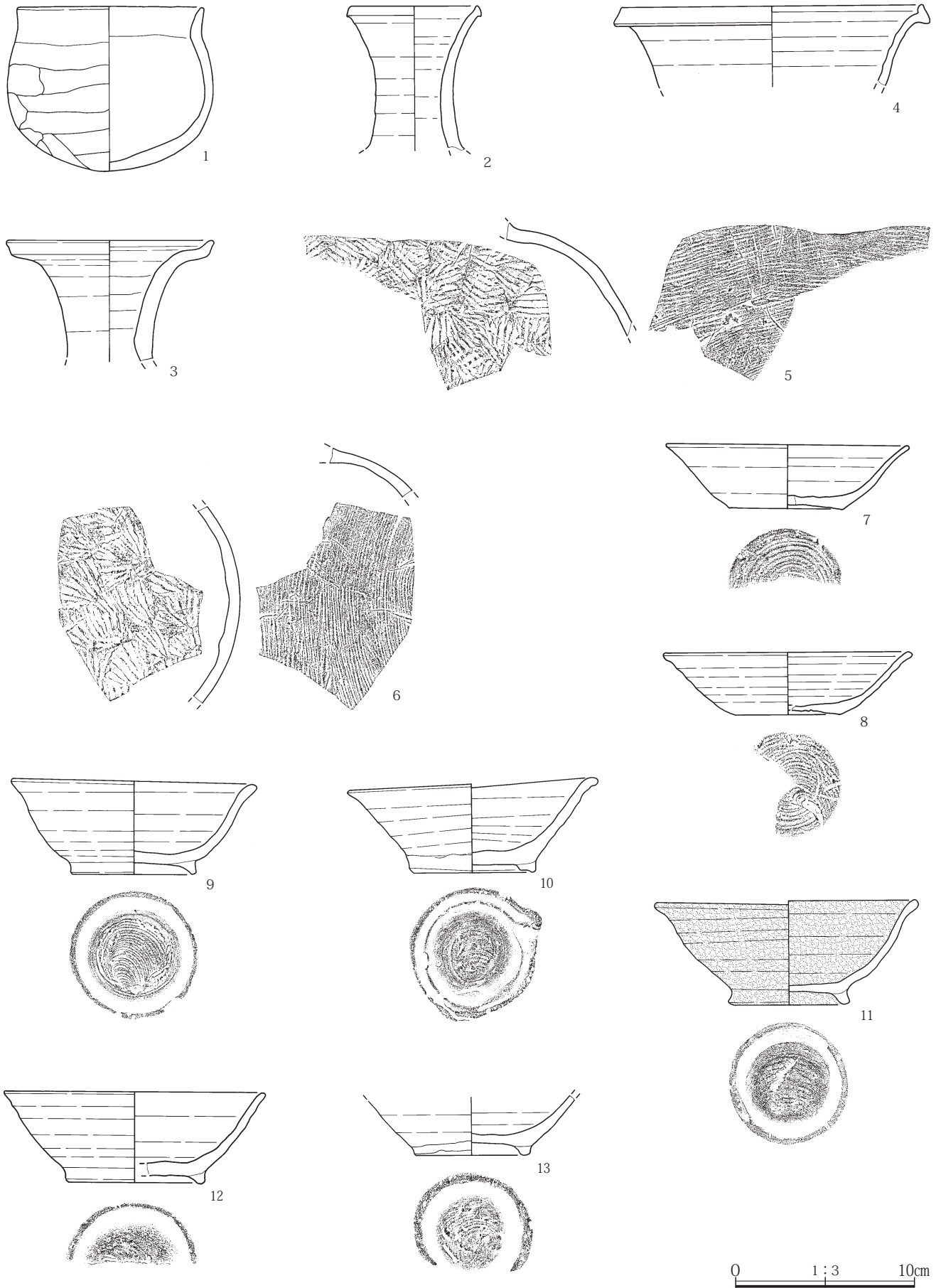
挿 図 PL.No.	No.	種 類 種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第53図 PL.129	1	土師器 杯	1/3	口 10.8 高 3.6 底 7.7	細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第53図 PL.129	2	土師器 杯	4/5	口 12.8 高 3.8 底 9.3	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第53図 PL.129	3	須恵器 甕	口縁部片	口 16.4	細砂粒・長石・黒 色粒/還元焰/暗灰	ロクロ整形、回転右回り。外面に降灰が付着。	
第53図 PL.129	4	須恵器 長頸壺	口縁部片	口 13.0	細砂粒/還元焰/褐 灰	ロクロ整形、回転右回り。	
第53図 PL.129	5	須恵器 把手付瓶	胴部片		細砂粒・粗砂粒・ 片岩/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転方向不明。把手は貼付、外面は降灰が付着。	
第54図 PL.129	6	須恵器 横瓶か	胴部片		細砂粒/還元焰/灰	胴部閉塞部分片。外面は平行叩き後カキ目、内面にはアテ 具痕が残る。	
第54図 PL.129	7	須恵器 横瓶か	胴部片	胴部径 18.0	細砂粒/還元焰・ 黒斑/灰白	ロクロ整形、回転方向不明。内面端部に閉塞痕、外面はカ キ目、内面は同心円状アテ具痕が残る。	
第54図 PL.130	8	須恵器 皿	3/4	口 13.4 高 3.5 台 5.3	細砂粒/還元焰/オ リーブ黒	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部切り離し技法 は不明。	
第54図 PL.130	9	須恵器 皿	3/5	口 13.6 高 3.6 台 6.1	細砂粒・黒色粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
第54図 PL.130	10	須恵器 杯	1/2	口 11.0 高 3.8 底 5.8	細砂粒・角閃石/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第54図 PL.130	11	須恵器 杯	1/4	口 13.2 高 3.6 底 5.8	細砂粒/酸化焰ぎ み/にぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	

第4章 発掘調査の記録

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
第54図 PL.130	12	須恵器 椀	3/5	口 13.4	高 6.7 台 7.8		細砂粒/還元焰/暗灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。		
第54図 PL.130	13	須恵器 椀	口縁部1/4欠損	口 14.0	高 6.4 台 6.4		細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。		
第54図 PL.130	14	須恵器 椀	1/4	口 14.2	高 5.1 台 6.2		細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部切り離し技法は不明。		
第54図 PL.130	15	須恵器 椀	1/4、高台欠損	口 14.6	高 6.7		細砂粒・粗砂粒・角閃石/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付が剥落、底部は回転糸切り。		
第54図 PL.130	16	須恵器 椀	口縁部1/4欠損	口 14.7	高 7.4 台 7.8		細砂粒・粗砂粒・片岩/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。		
第54図 PL.130	17	須恵器 椀	3/4	口 16.0	高 7.0 台 9.6		細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。		
第54図 PL.130	18	須恵器 椀	口縁部片	口 14.0			細砂粒/還元焰・燻/オリーブ黒	ロクロ整形、回転右回りか。		
第54図 PL.130	19	須恵器 椀	底部～体部下位	底 6.2			細砂粒/還元焰・燻/暗灰	ロクロ整形、回転右回り。高台が貼付されていたが剥落、底部は回転糸切り。		
第55図 PL.130	20	須恵器 椀	底部～体部	台 5.9			細砂粒・長石/酸化焰/淡黄	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は中央部に回転糸切り痕がわずかに残る。		
第55図 PL.130	21	須恵器 杯	底部～体部下位	台 6.2			細砂粒/酸化焰/にぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。		
第55図 PL.130	22	須恵器 杯	底部～体部小片	計測不能			細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転糸切りか。	外面体部に墨書、一部のため判読不能。	
第55図 PL.130	23	土師器 甗	底部～胴部下位片	底 4.2			細砂粒/良好/にぶい黄橙	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。		
第55図 PL.130	24	土師器 甗	口縁部～胴部上位片	口 14.0			細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。		
第55図 PL.130	25	土師器 甗	胴部下位片				細砂粒/良好/黄灰	外面はヘラ削りか、器面磨滅のため単位不明。内面はヘラナデ。		
第55図 PL.130	26	須恵器 甗	頸部～胴部上半片	頸 15.8 胴 26.6			細砂粒・粗砂粒・長石/還元焰/灰	ロクロ整形、回転方向不明。胴部外面はナデのため整形不鮮明、内面はヘラナデ。		
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	長	幅	厚	重さ(g)	特徴など	備考	
第55図	27	椀形鍛冶滓		7.3	5.6	3.3	287.4	平面不整形円形。厚さ3.3cmとやや薄手。色調は黒褐色。内面から錆が生じており銃部が内圧する。表面は広く酸化土砂におおわれている。		
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ(g)	製作状況・使用状況	備考
第55図 PL.130	28	敲石		棒状扁平礫	雲母石英片岩	(14.2)	4.5	287.4	上端側両側縁を敲打。左側縁にはノッチ状に抉れる。	

第24表 1区86号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第56図 PL.131	1	土師器 鉢	ほぼ完形	口 10.1	高 9.1 最 11.4		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。内面は底部から体部にヘラナデ。	
第56図 PL.131	2	須恵器 長頸壺	口縁部片	口 7.0			細砂粒・黒色粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。	
第56図 PL.131	3	須恵器 長頸壺	口縁部～頸部	口 11.2			細砂粒・粗砂粒・角閃石/還元焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回りか。内面頸部はヘラナデ。	
第56図 PL.131	4	須恵器 長頸壺	口縁部片	口 16.6			細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰褐	ロクロ整形、回転右回り。	
第56図 PL.131	5	須恵器 横瓶か	胴部上位～頸部片				細砂粒/還元焰/灰	外面には平行叩き痕、内面は同心円状アテ具痕が残る。	
第56図 PL.131	6	須恵器 提瓶	頸部～胴部片				細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転方向不明。頸部周辺はナデ、胴部はカキ目。内面胴部は同心円状アテ具痕が残る。	
第56図 PL.131	7	須恵器 杯	1/3	口 13.2	高 3.5 底 6.2		細砂粒・長石/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第56図 PL.131	8	須恵器 杯	1/4	口 13.4	高 3.5 底 5.8		細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第56図 PL.131	9	須恵器 椀	3/4	口 13.2	高 5.3 台 6.4		細砂粒・粗砂粒・長石/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
第56図 PL.131	10	須恵器 椀	完形	口 13.4	高 5.2 台 6.6		細砂粒・粗砂粒・褐色粒/酸化焰/ぎみ/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
第56図 PL.131	11	須恵器 椀	3/5	口 14.3	高 5.7 台 6.0		細砂粒/還元焰・燻/暗灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
第56図 PL.131	12	須恵器 椀	1/3	口 14.2	高 5.0 台 7.0		細砂粒・粗砂粒・長石/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部切り離し技法は不明。底部は回転糸切りか。	
第56図 PL.131	13	須恵器 椀	底部～体部下半	台 6.1			細砂粒・粗砂粒・長石/酸化焰/灰黄褐	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	



第56図 1区86号溝出土遺物

第2項 中世

調査区北東部に中世に比定される1号屋敷の南西部、おそらく全体の1/4～1/3が検出された。また、南東部にも屋敷を区画する2号溝があり、2区1号屋敷との関連が想定される。土坑については、北西部に集中しており、土壇墓と考えられるものも数基みられる。

1 1号屋敷

区画溝である25・63号溝で囲まれた規模から、溝外で東西35m以上、南北27m以上を測る方形屋敷の南西隅部分である。西辺は25号溝と63号溝が食い違って設けられ、幅1～3mの土橋状の出入口を形成する。ただし、25号溝と重複して26・27号溝、更に白色軽石(As-A)の灰掻き溝として埋め戻される1号溝まで、激しく溝が重複する。溝が徐々に東側(屋敷内側)へ作り替えられる状況は判明するが、屋敷の変遷との関係は判然としない。出入口は他に南辺に、重複する1・2号橋が存在する。また、91号溝は内堀とも考えられ、本屋敷が複数の区画で構成される可能性を示す。この場合、91号溝の南側は細長い

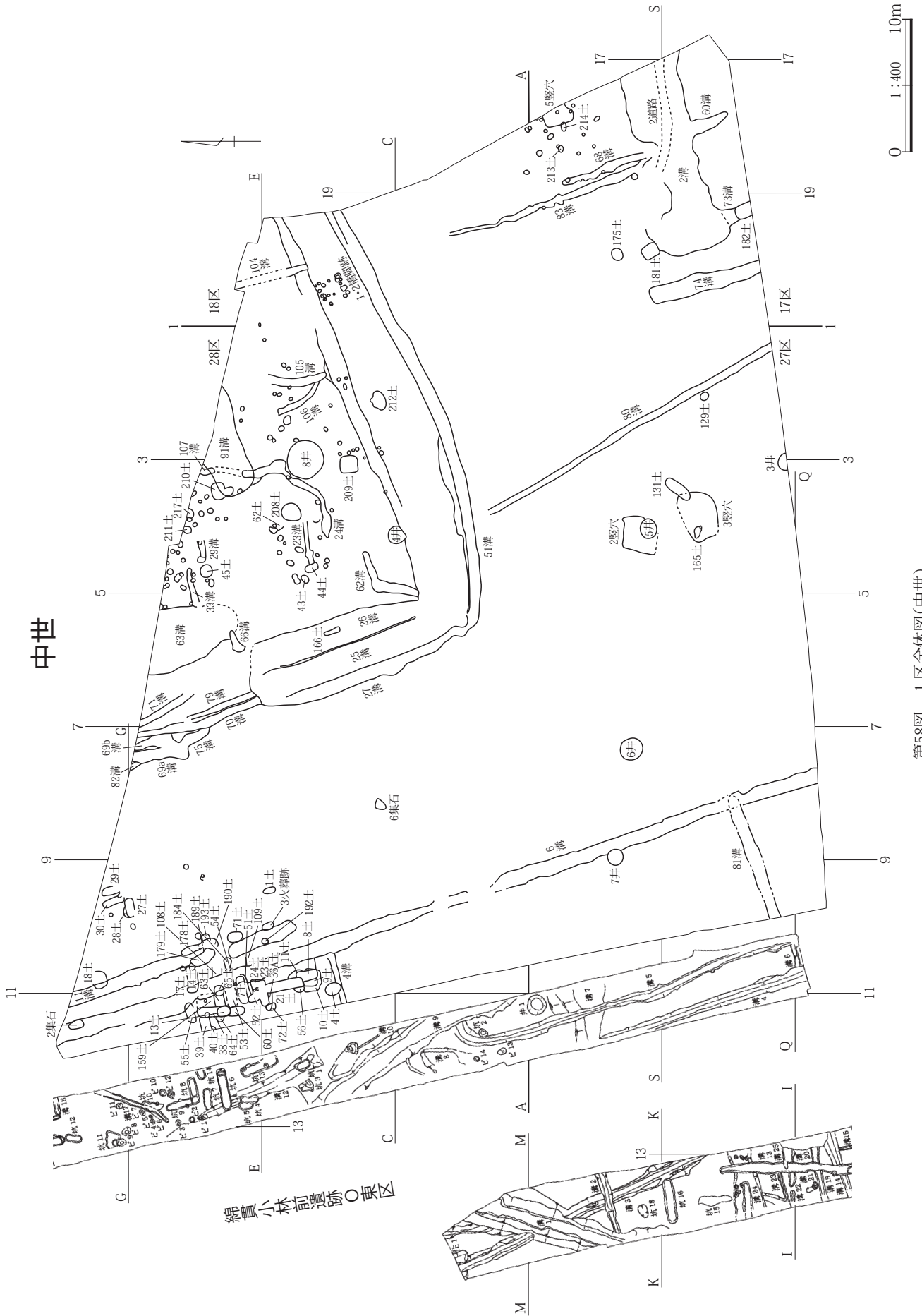
帯状の区画と復元される。

内部ではピット82基が検出された。近世墓と重複して消滅したものもあり、建物として復元できるものはない。ただし、分布状況や溝との関係から、建物の存在は想定できる。土坑では特徴的なものはない。井戸は2基検出され、4号井戸は25号溝の肩部に設けられる。8号井戸は大型の板碑が投げ込まれる点で注目される。



第57図 1区1号屋敷





第58図 1区全体図(中世)

(1)土坑

土坑は10基検出されたが、166・212号土坑は区画溝底部で検出され、厳密には内部ではない。残る8基のうち、210号土坑は方形で209号土坑に近似することから、近世の可能性もある。残る5基は比較的小規模で、周辺のピットと混在する。遺物を伴う44・45号土坑は、小規模な溝に接続あるいは近接する点で共通する。認定できていないが、建物とも関連が想定される。

43号土坑(第59図、P L .21)

**位置** 28D-4グリッド。平面形は乱れた楕円形で、ピット状。断面U字状で、中央部更に凹む。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は凸凹する。埋没土はローム粒子目立つ。規模は長径66cm短径47cm深さ32cmである。遺物は土師器壺甕類2片が出土するが混入とみられる。

44号土坑(第59・60図、P L .21、第26表)

**位置** 28D-4グリッド。23号溝と重複するが新旧関係不明で、位置から共存も想定できる。平面形はほぼ隅丸長方形。断面逆台形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。北・南壁際の埋没土中位に巨円礫が集中し、土坑の用途と関連か。23号溝は西へ下降しており、表流水などは本遺構に流れ込む状況にある。規模は長軸104cm短軸61cm深さ27cmである。埋没土中位から在地系土器皿(60図1)が出土し、16世紀に比定される。

45号土坑(第59図、P L .21、第25表)

**位置** 28E-4グリッド。平面形はほぼ円形。断面皿状で、一部ピット状に凹み、別に重複する可能性もある。底面はほぼ平坦。埋没土にロームブロックが目立つ。規模は長径98cm短径90cm深さ26cm、ピット状部分の規模は長径41cm短径30cm深さ23cmである。埋没土上層から1の在地系土器鍋が出土し、中世に比定される。掲載遺物のほか、須恵器壺甕類1片が出土している。

62号土坑(第59図、P L .21)

**位置** 28D-4グリッド。187号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は調査が二次にわたり不整合となり不明瞭。断面皿状か。壁は緩やかに立ち上がる。底面は凸凹する。埋没土はロームブロックが目立つ。規模は長軸(114)cm短軸56cm深さ11cmである。遺物は土師器壺甕類1片が出土するが混入とみられる。

166号土坑(第59図、P L .21)

**位置** 28C・D-5グリッド。26号溝底面で確認されるが、

新旧関係不明。平面形は細長方形。断面逆台形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、鋤先状の掘削痕跡が数カ所みられる。埋没土は26号溝と近似する。規模は長軸125cm短軸38cm深さ15cmである。遺物は出土していない。

208号土坑(第59図、P L .21)

**位置** 28D-3グリッド。平面形は不整形円形。断面円筒形。壁はやや斜めに立ち上がる。底面は平坦。底面に接して、しまりのある黒褐色土が平面的に堆積しており、開口状態であった期間が想定される。埋没土はローム大ブロックを多量に含み、西側から人為的に埋められる。規模は長径152cm短径137cm深さ66cmである。遺物は出土していない。

**備考** 調査段階3次8号土坑より名称変更。

210号土坑(第59・60図、P L .21、第26表)

**位置** 28E-3グリッド。91号溝と重複し、東側は消滅、新旧関係不明。平面形は乱れた方形か。断面皿状。壁は緩やかに立ち上がる。底面は凸凹し、小穴が多くみられるが、ピットとして分離できるものはない。規模は長軸168cm短軸132cm深さ30cmである。埋没土から在地系土器皿が出土し、中世に比定される。掲載遺物のほか、須恵器壺甕類1片が出土する。

**備考** 調査段階3次9号土坑より名称変更。

211号土坑(第59・60図、P L .21)

**位置** 28F-4グリッド。1号落ち込み状遺構より後出。北側は調査区域外となり、平面形は不明確。断面ピット状。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は長径(60)cm短径(55)cm深さ48cmである。遺物は土師器杯椀類3片・壺甕類3片、須恵器杯椀類8片・壺甕類2片、その他土器類1片が出土するが混入とみられる。

**備考** 調査段階3次11号土坑より名称変更。

212号土坑(第59・60図、P L .22・131、第26表)

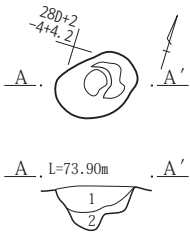
**位置** 28C-2グリッド。26号溝底面で確認され、新旧関係不明。平面形は溝の影響もあり不整形だが、底面はほぼ隅丸長方形。断面深いU字状。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は凸凹し、一部ピット状に凹む。埋没土は中位以下に大礫を多量に含む。大礫に混じって、茶下白(60図3)が出土する。規模は長軸148cm短軸110cm深さ75cmである。遺物は出土していない。

**備考** 調査段階3次12号土坑より名称変更。

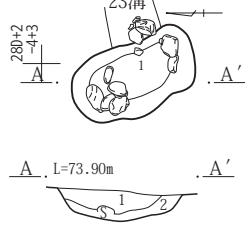
217号土坑(第59図)

**位置** 28F-3グリッド。北半分が調査区域外となるが、

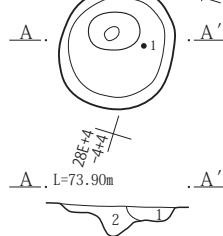
43号土坑



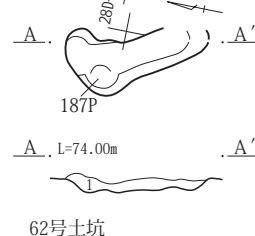
44号土坑



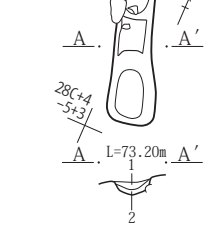
45号土坑



62号土坑



166号土坑



43号土坑

- 1 黒褐色土 ローム小ブロック少量、白色粒子微量を含む。
- 2 暗褐色土+ローム大ブロック

44号土坑

- 1 暗褐色土 ローム粒子微量を含む。
- 2 黒褐色土 にぶい黄褐色土小ブロック多量を含む。

45号土坑

- 1 暗褐色粘質土 YP微量を含む。
- 2 暗褐色粘質土 ローム大ブロック多量を含む。

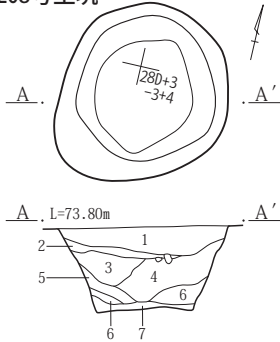
62号土坑

- 1 黒褐色砂質土 黄色粒子多量、炭化物粒子微量を含む。

166号土坑

- 1 暗褐色粘質土 黄色粒子少量を含む。
- 2 暗褐色粘質土 黄色粒子やや多量を含む。

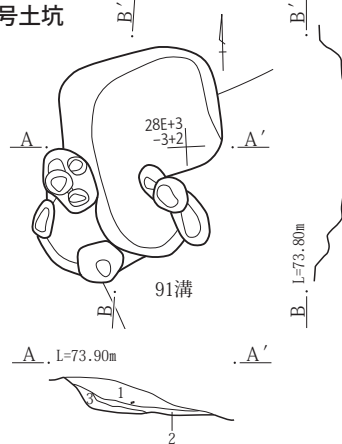
208号土坑



208号土坑

- 1 黒褐色土 しまりなく粘性ない。ローム小ブロック多量を含む。
- 2 黒色土 しまりなく粘性ない。ローム小ブロック少量を含む。
- 3 黒褐色土 ローム小ブロックやや多量を含む。
- 4 黒褐色土 ローム大ブロック多量を含む。
- 5 黒色土 均質。
- 6 黄色ローム大ブロック
- 7 黒褐色土 しまり粘性あり。均質。

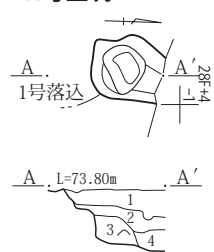
210号土坑



210号土坑

- 1 黒色土 ローム小ブロック多量、炭化物やや多量を含む。
- 2 黒色土 ローム小ブロック少量を含む。
- 3 黒褐色土 ローム小ブロック多量を含む。

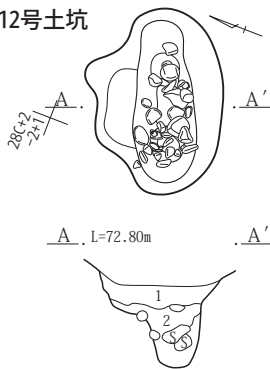
211号土坑



211号土坑

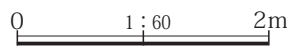
- 1 黒褐色土 しまりなく粘性ない。ローム小ブロックやや多量を含む。
- 2 黒色土 しまりなく粘性ない。ローム粒子微量を含む。
- 3 黒褐色土 ローム大ブロック少量を含む。
- 4 黒褐色土 堅くしまり粘性ない。ローム小ブロック含む。

212号土坑

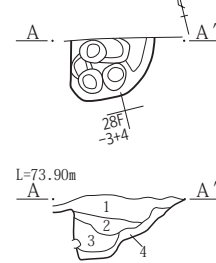


212号土坑

- 1 灰褐色土 しまりなく粘性強い。粘土ブロック・鉄分凝集あり。
- 2 黒褐色土 粘土ブロック・鉄分凝集あり。

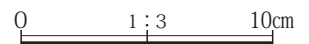
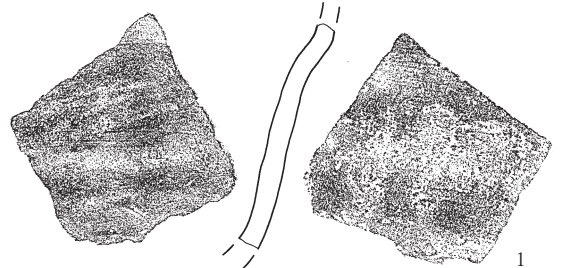


217号土坑



217号土坑

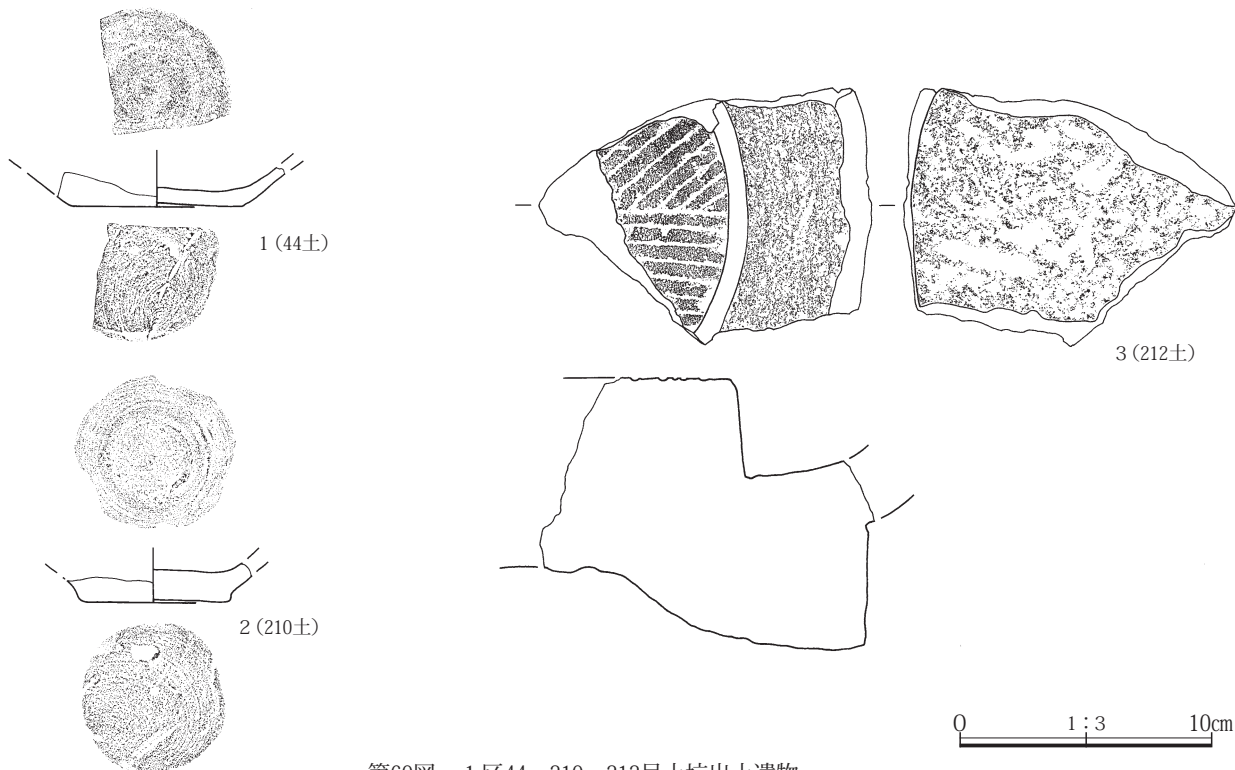
- 1 黒褐色土 ローム粒子やや多量を含む。
- 2 黒褐色土 ローム小ブロックやや多量を含む。
- 3 黒褐色土 ローム粒子多量を含む。
- 4 ロームブロック 黒褐色土ブロック含む。



第59図 1区43～45・62・166・208・210～212・217号土坑と45号土坑出土遺物

第25表 1区45号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第59図	1	在地系 土器	内耳鍋	+24cm	-	-	-	体部片		灰黄・ 黒	還元炎。器壁は厚い。体部は丸みを持つ。口縁部下内面に低い段差。外面に煤付着。	中世。



第60図 1区44・210・212号土坑出土遺物

第26表 1区44・210・212号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第60図	1	在地系 土器	皿	44土 +14cm	-	(6.8)	-	底部片	A	黒褐・ 灰褐	体部は屈曲するように外反。底部左回転糸切無調整。	16世紀か。
第60図	2	在地系 土器	皿	210土	-	5.9	-	底部完	B	浅黄橙	体部下端は括れるように外反。底部左回転糸切無調整。底部内面周縁は丁寧な回転横撫により、ドーナツ状に浅く窪む。	中世か。
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況		備考	
第60図 PL.131	3	茶臼	212土	下白	粗粒輝石安 山岩	不明	高さ 10.5	1123.1	8分割。器面は丁寧な磨き整形。底面中央付近は抉れ、粗い工具痕を残す。			

平面形は不整円形か。西壁はほぼ垂直で、東壁は斜めに立ち上がる。底面は凸凹して小穴が多い。埋没状況不詳。規模は長径64cm短径(50)cm深さ48cmである。遺物は出土していない。

(2)井戸

屋敷内部には井戸2基が検出され、ともに中世に比定される。形態は円筒形と漏斗状で異なる。ともに人為的に埋め戻されており、8号井戸には板碑が投棄され、周辺に所在する墓地との関連も想起される。

4号井戸(第61図、P.L.22・131、第27表)

位置 28B・C-4グリッド。重複 1号屋敷南辺である25号溝の北側上端に接する。新旧関係は押さえられず、

共存も想定される。

**確認面形状と規模** ほぼ円形。長径1.35m短径1.31m。

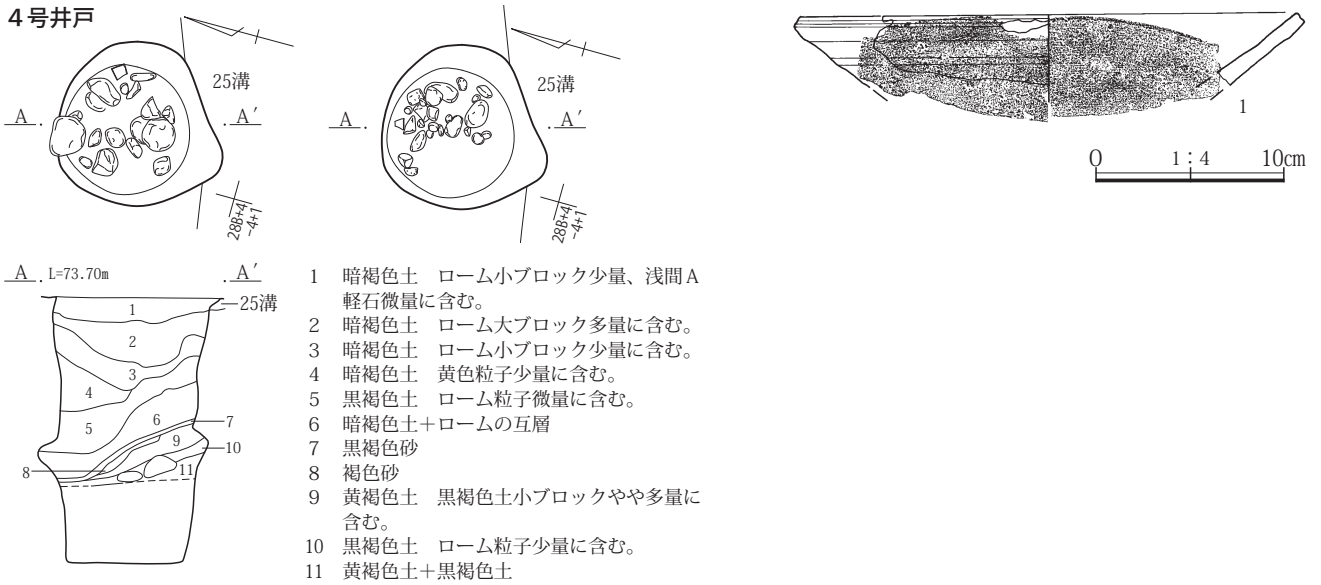
**底面形状と規模** ほぼ円形。長径1.02m短径1.02m。

**断面形** 円筒形の素掘り井戸。深さ2.13m。壁はほぼ垂直に立ち上がり、上端から約1.2~1.3mに明瞭なアゲリがみられる。調査時は冬期でもあり、湧水はなかった。

**埋没状況** 上面から約1.5m以下に巨円礫が集中して埋没する。中位に砂層が入るが、全体に暗褐色土が多い。人為埋没で交互に埋めるが方向は特定できない。最上位に白色軽石(As-A)を含むが、ほ場整備による削平、整地が付近に及んでおり、埋没後に沈み込んだ可能性が高い。

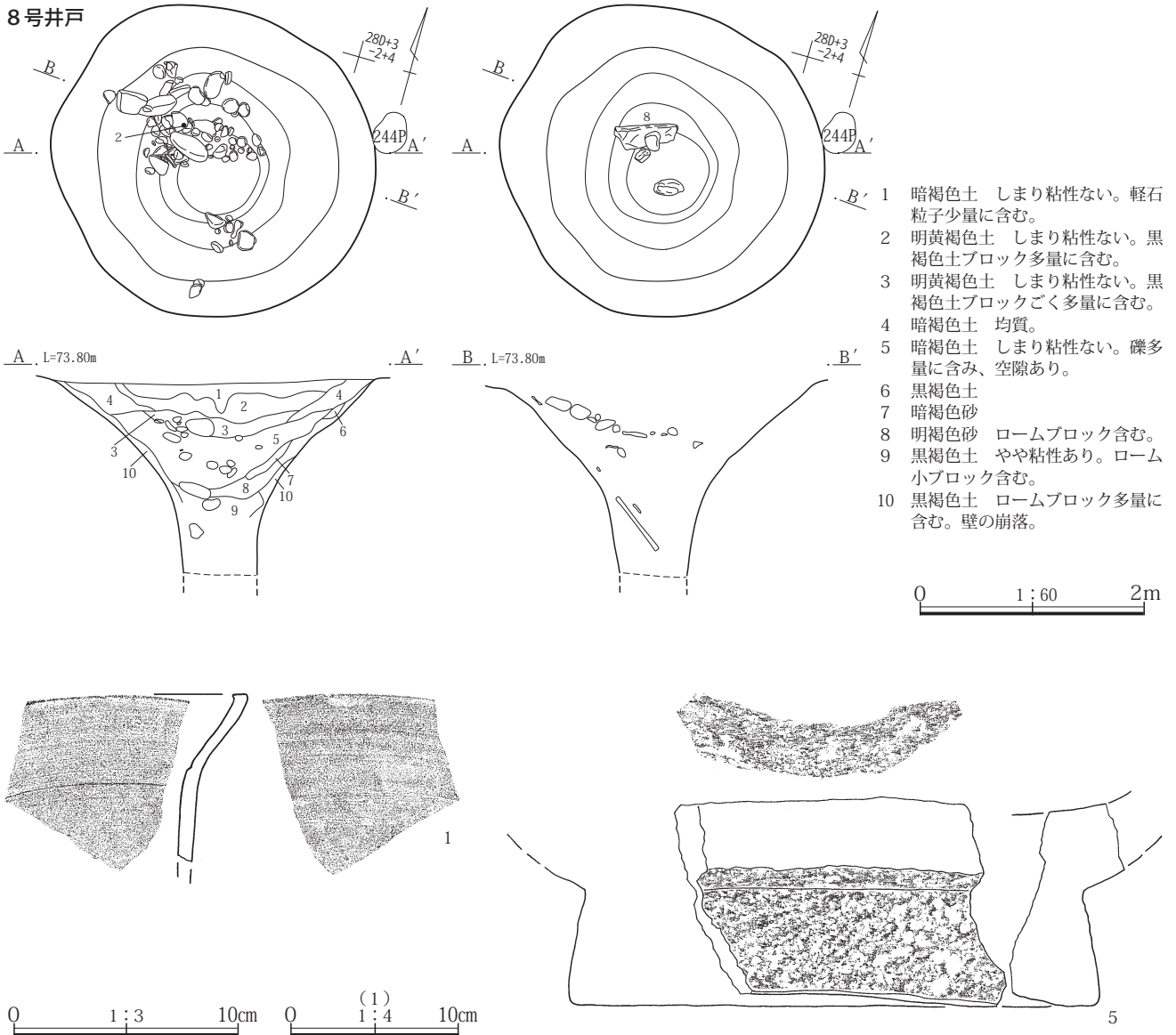
**遺物** 底辺近くから1の常滑陶器片口鉢(13世紀後半)が出土する。掲載遺物のほか、土師器杯椀類2片が出土している。

4号井戸

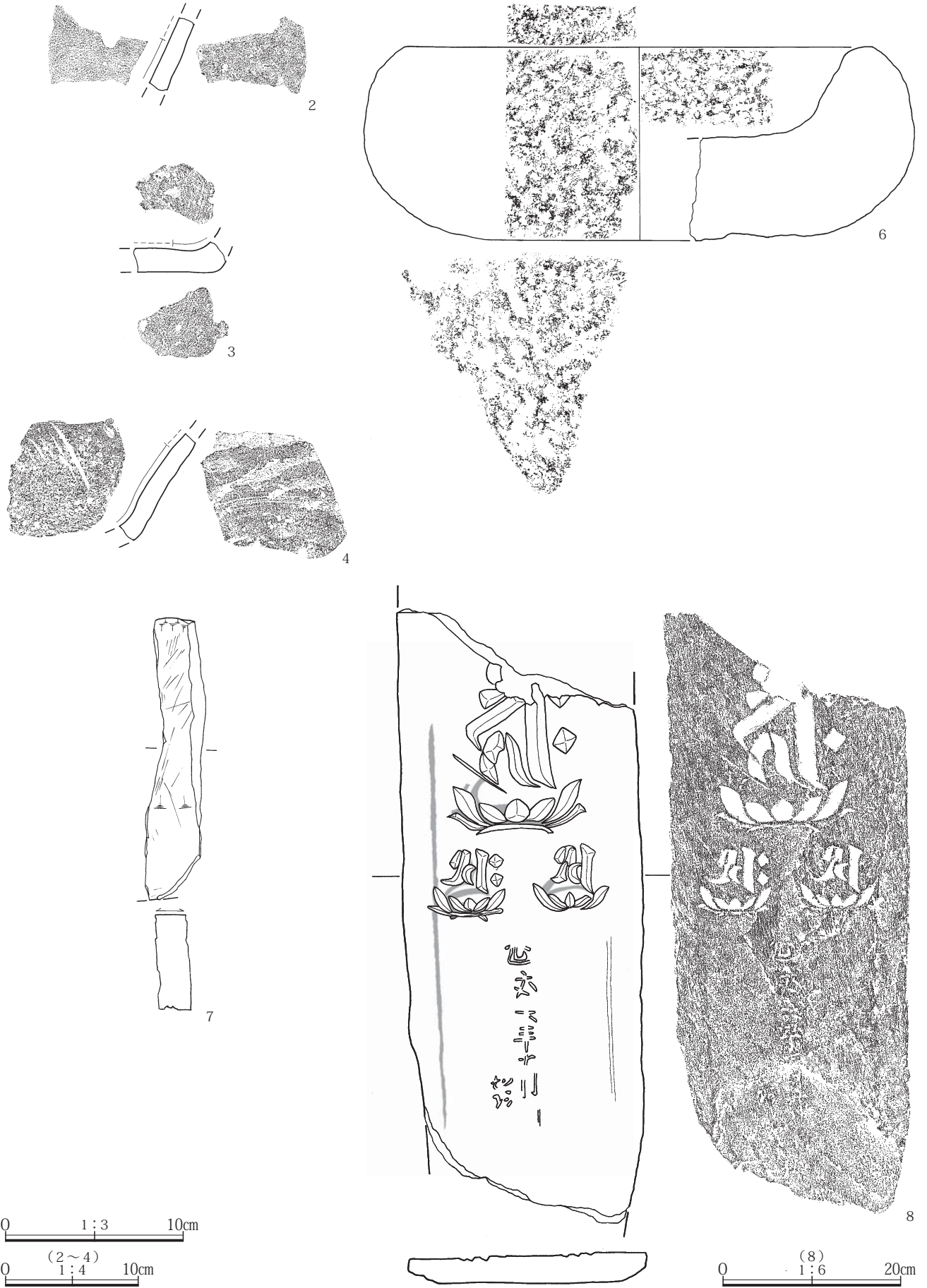


第61図 1区4号井戸と出土遺物

8号井戸



第62図 1区8号井戸と出土遺物(1)



第63図 1区8号井戸出土遺物(2)

時期 出土遺物から中世に比定される。

8号井戸(第62・63図、P L .22・131、第28表)

位置 28D-2・3グリッド。重複 なし。

確認面形状と規模 ほぼ円形。長径2.92m短径2.76m。

底面形状と規模 ほぼ円形。長径0.80m短径0.75m。

断面形 漏斗状。深さは完掘されておらず不明。壁は垂直に立ち上がり、上端から約1.5mで、稜を持って外傾し、斜めに立ち上がる。

埋没状況 上端から約50cm以下から巨礫が多量にあり、中位は砂で埋まり、以下黒褐色土となるが底面は不明。

上位2・3層はしまりのない明黄褐色土で、人為的に平らに埋められた可能性がある。

遺物 井筒部分から板碑(63図8)、上位の礫集中面で茶臼(62図5)が出土するほか、埋没土から在地系土器鍋鉢が出土する。遺物の年代は14世紀前半から15世紀前半に及ぶ。掲載遺物のほか、土師器壺甕類5片、須恵器杯椀類4片、中世在地系土器20片、その他土器類5片が出土している。

時期 板碑の紀年名が延文4年(1359)で、在地系土器鍋(62図1)は15世紀代であり、埋没上の時期差なども考慮される。

第27表 1区4号井戸出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第61図 PL.131	1	常滑陶器	片口鉢		(26.0)	-	-			にぶい 黄褐	口縁部横撫で。体部外面は縦位撫で。口縁端部は小さく窪む。	片口鉢Ⅱ類。 13世紀後半。

第28表 1区8号井戸出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第62図	1	在地系土器	内耳鍋		-	-	-	口縁部片	B	灰	還元炎。体部器壁に比して口縁部器壁は薄い。口縁部下位で湾曲して外反し、端部付近は肥厚。口縁端部上面は平坦で内側に小さく突き出る。湾曲部内面は低く明瞭な稜をなす。	Ⅳ・Ⅴ期。
第63図	2	在地系土器	片口鉢		-	-	-	体部片	B	黄灰	還元炎。残存部にすり目なし。内面下半は使用により器表摩滅し、上半は平滑となる。	中世。
第63図	3	在地系土器	片口鉢		-	-	-	底部片	B	にぶい 橙	外面は砂底状。使用により、底部内面周縁の器表は摩滅し、中央部は平滑となる。	中世。
第63図	4	在地系土器	片口鉢		-	-	-	体部片	B	灰	還元炎。内面に幅広で5本以上一単位のすり目。内面は使用によりすり目の大半が摩滅。底部と体部境内面の摩滅は著しく、ドーナツ状に窪む。	Ⅴ期以降。
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況		備考	
第62図 PL.131	5	茶臼		下白	粗粒輝石安山岩	底部径 23.2	高さ (9.2)	497.3	外面は磨き整形、斜位工具痕を残す。内面・受け部は平滑に研磨整形。			
第63図 PL.131	6	石鉢			粗粒輝石安山岩	径 27.6	高さ 10.8	1335.9	内外面とも粗く敲打整形。			
第63図 PL.131	7	砥石		置き砥石?	ホルンフェルス	15.8	(3.1)	329.9	背面のみ使用。裏面側は平坦に磨き整形。下端小口部は折断したまま未整形。両側面は層理面で破損。しっかりした薬研彫りの阿弥陀三尊板碑。梵字「キリーク」頭部から上方を欠失。右側界線は界部を平滑面に整え、左側界線とも墨書している。中央に「延文カ四年十月日」左列に「妙阿カ」の紀年名がある。裏面に中央付近に幅2.5cmの平ノミ状工具痕が残る。			
第63図 PL.131	8	板碑			緑色片岩	(69.0)	27.0	10500.0				

(3)橋脚跡

屋敷南辺を区画する25号溝の底面で重複する橋脚跡2基を検出した。1号屋敷南西角から約24mに位置する。出土遺物はないが、位置関係から1号屋敷の出入口と考えられる。

1号橋脚跡(第64図、P L .22、第29表)

位置 18C・D-20グリッド。25号溝底面で確認される。

位置関係から25号溝に架けられた橋脚の柱穴と考えられる。2号橋脚跡と重複するが、新旧関係不明。南北に長い1×2間の柱穴6本で構成される。規模は長軸1.65m短軸1.0mである。長軸方位N-21°-W。2・5Pは25号溝底面中央に位置して、規模はやや小さく、断面はやや外傾する。3Pは2基に分かれる。柱穴の個別規模

は第29表のとおり。1Pには柱痕があり、周りを灰色土で埋める。遺物は出土していない。

備考 南方約25mに2号道があり、走向が付合する。

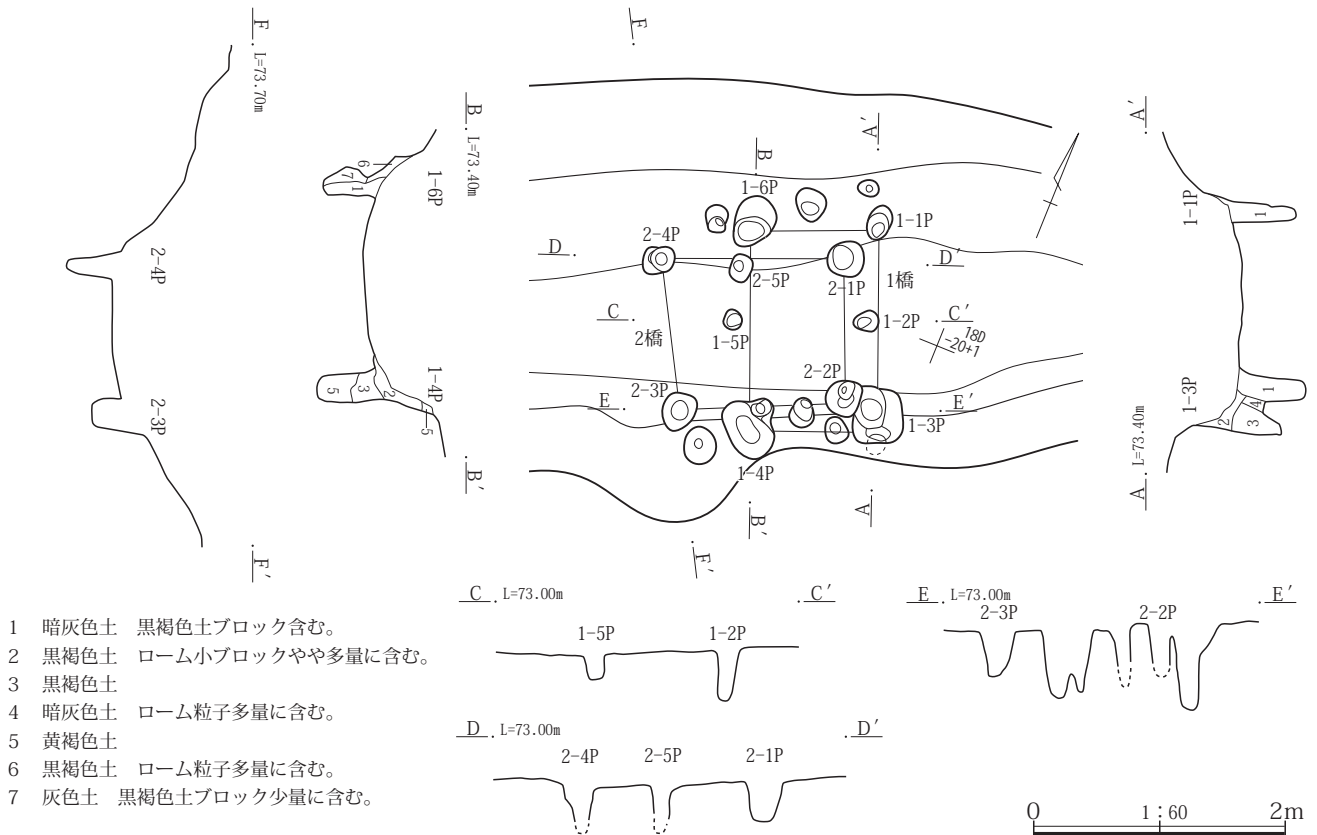
2号橋脚跡(第64図、P L .22、第30表)

位置 18C・D-20グリッド。25号溝底面で確認される。

位置関係から25号溝に架けられた橋脚の柱穴と考えられる。1号橋脚跡と重複するが、新旧関係不明。東西に長い1×2間の柱穴5本で構成される。規模は長軸1.33～1.45m短軸1.15～1.20mである。長軸方位N-70°-E。5Pの規模はやや小さい。個別の規模は第30表のとおり。埋没土は不明。遺物は出土していない。

備考 南方約25mに2号道があり、走向が付合する。

第4章 発掘調査の記録



第64図 1区1・2号橋脚跡

第29表 1区1号橋脚跡計測表

位置 柱穴No.	18C・D-20		主軸方位 深さ(cm)	N-21°-W		旧ピットNo.
	長径(cm)	短径(cm)		形状	次ピットとの間隔(m)	
P 1	28	18	78	楕円形	0.75	203
P 2	21	14	42	不整円形	0.70	
P 3	45	38	92	隅丸方形	1.00	204
P 4	49	40	92	不整形	0.90	202
P 5	16	15	20	不整円形	0.75	
P 6	43	25	79	楕円形	1.00	201

第30表 1区2号橋脚跡計測表

位置 柱穴No.	18C・D-20		主軸方位 深さ(cm)	N-70°-E	
	長径(cm)	短径(cm)		形状	次ピットとの間隔(m)
P 1	30	30	30	円形	1.05
P 2	28	26	47	隅丸方形	1.32
P 3	30	26	45	楕円形	1.20
P 4	25	21	39	不整形	0.63
P 5	22	17	37	隅丸方形	0.84



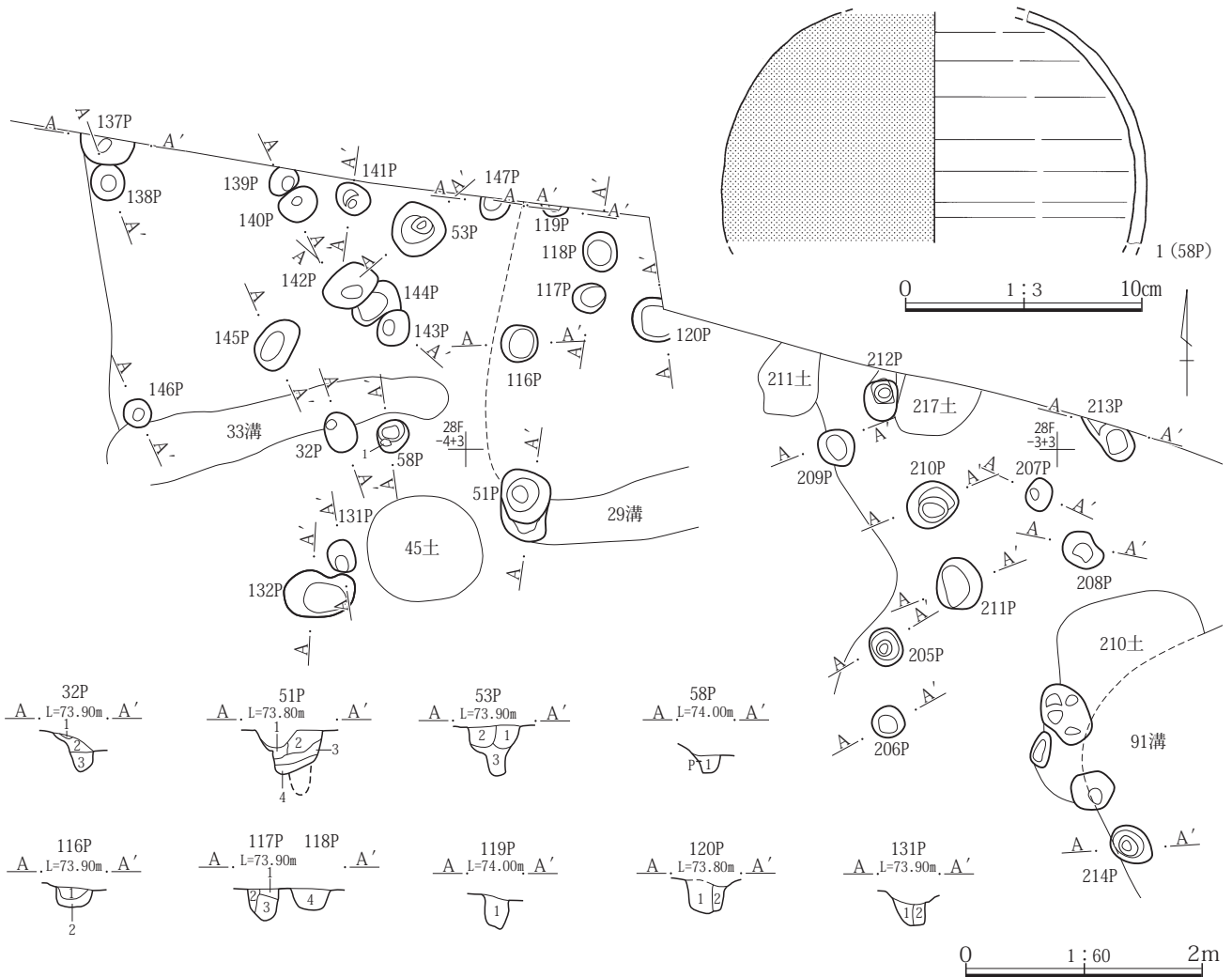
(4)ピット群(第65～70図、P L .22・132、第31～34表)

屋敷内部には82基のピットが分布する。個別の規模は第34表のとおり。埋没土では118・138・142～144号ピットに白色軽石(As-B)、55号ピットに白色軽石(As-A)が含まれる。

ピット群1は比較的ピットが集中し、32基が分布する。複数棟の掘立柱建物の存在が想定されるが、ほとんどが調査区域外となり建物認定できない。58号ピットから須恵器長頸壺(65図1)が出土する。混入とも考えられるが、1号落ち込み状遺構のピットである可能性もある。ピット群1の西端137・138・146号ピットに接して、区画溝である63号溝があり、東側約2m程は平坦な面を持つ。東壁は低いが直線的で、これらのピットを結ぶ線に一致する。直線的なため、建物敷を思わせるが、3基のピットは小規模で、掘立柱建物の柱穴としてはやや貧弱である。この溝と直交する方向に浅い33号溝があり、北側をL字形に囲む状況を作る。また、33号溝が東端で立ち上

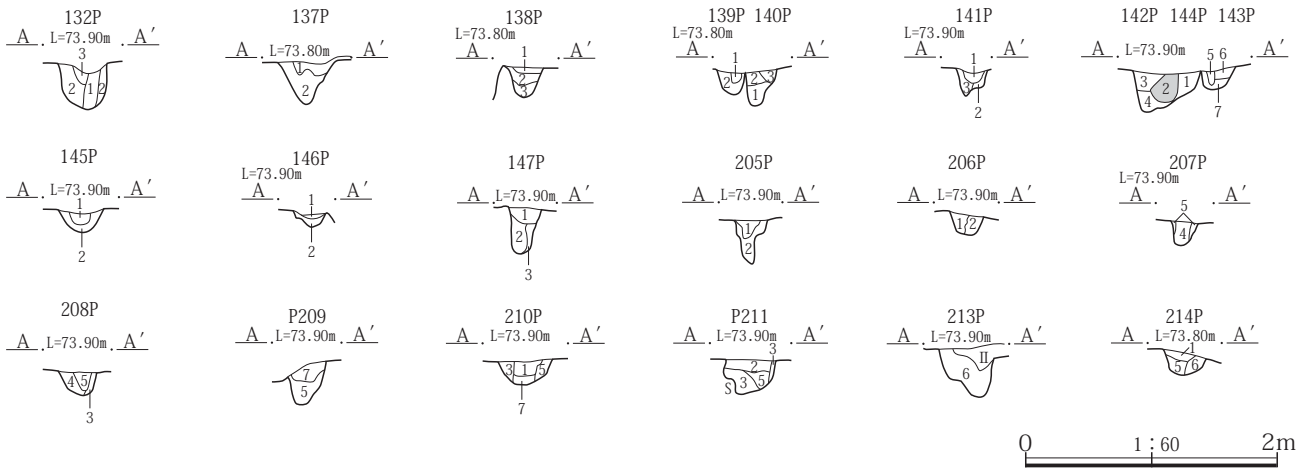
がる付近に接して、51・53号ピットがあり、深さは55・42cmと深い。間隔は2.42mである。両者を結ぶ線の東側直交方向にある212号ピットも、深さ63cmと深く、51号ピットとの間隔は3.18mである。この3基のピットを掘立柱建物と考えた場合、桁行の柱間が2.4m・8尺程度の南北棟となり、51・212号ピット間が梁間となるが、確証に欠ける。この場合、並走する29号溝との関連も想定される。走向方位では西側63号溝との一致も看過できない。更に212号ピットの南側延長線上に91号溝の立ち上がりがあり、ほぼ一致している。この溝は屋敷内の内堀である可能性が高い。したがって、この北側に屋敷の内郭部分が区画されると仮定すると、212号ピットと91号溝を結ぶ間に出入り口が存在することとなる。両者の間には小規模ながら、210・211号ピットが直線的に並び、柵列のような形態で出入り口を規制していたことも考えられよう。

ピット群2はピットが方形に点在する18基である。桁



第65図 1区1号屋敷内ピット群1と58号ピット出土遺物

第4章 発掘調査の記録

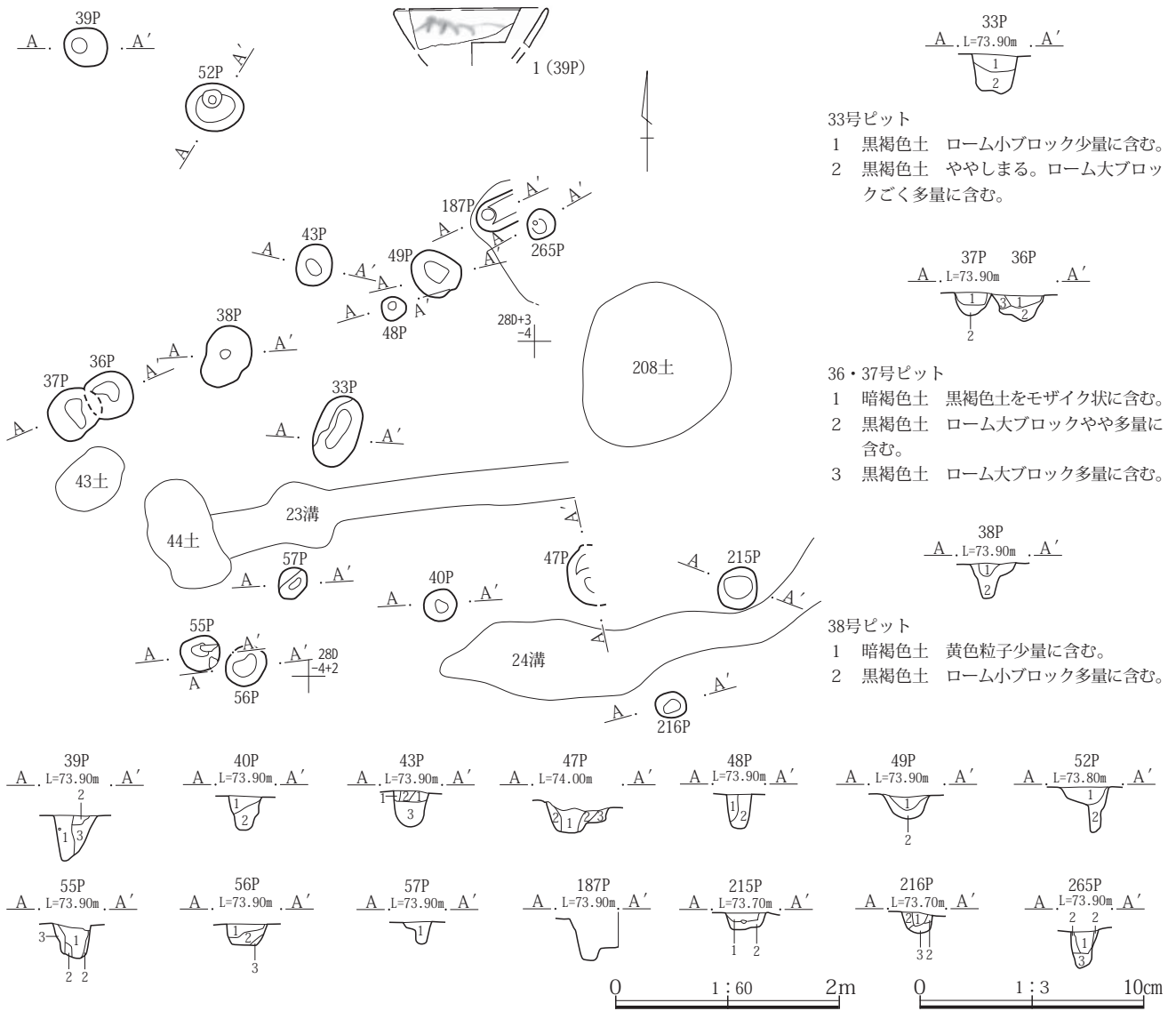


- 32号ピット
  - 1 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
  - 2 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
  - 3 黒褐色土 ローム粒子少量に含む。
- 51号ピット
  - 1 暗褐色土 やや砂質。黄色粒子微量に含む。
  - 2 暗褐色土 やや砂質。黄色粒子やや多量に含む。
  - 3 黒褐色土 やや砂質。黄色粒子少量に含む。
  - 4 黒褐色土 やや砂質。黄色粒子微量に含む。
- 53号ピット
  - 1 黒褐色土 黄色粒子やや多量に含む。
  - 2 黒褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
  - 3 黒褐色土 ローム大ブロック多量に含む。
- 58号ピット
  - 1 黒褐色土 ローム小ブロックごく多量に含む。
- 141号ピット
  - 1 暗褐色土 白色粒子微量に含む。
  - 2 褐色土 Y P 少量に含む。
  - 3 灰褐色土 しまりない。黄色粒子やや多量に含む。
- 142~144号ピット
  - 1 黒褐色土 浅間B軽石やや多量に含む。
  - 2 黒褐色土 ローム大ブロック少量に含む。
  - 3 にぶい褐色土 しまる。黒褐色土多量に含む。
  - 4 黒褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
  - 5 黒褐色土 しまりない。白色粒子微量に含む。
  - 6 暗褐色土 ローム小ブロック少量に含む。
  - 7 暗褐色土 しまる。浅間B軽石やや多量、ローム小ブロック少量に含む。
- 116号ピット
  - 1 暗褐色土 ローム大ブロックやや多量に含む。
  - 2 黒褐色土 ローム大ブロック少量に含む。
- 119号ピット
  - 1 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 117・118号ピット
  - 1 暗褐色土 ローム小ブロック少量に含む。
  - 2 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。
  - 3 黒褐色土 均質で空隙あり。
  - 4 暗褐色土 浅間B軽石?少量に含む。
- 120号ピット
  - 1 灰褐色土 ロームをシミ状に含む。
  - 2 褐色土 均質。
- 131号ピット
  - 1 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
  - 2 暗褐色土+ローム大ブロック
- 145号ピット
  - 1 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
  - 2 暗褐色土+ローム小ブロック
- 146号ピット
  - 1 暗褐色土
  - 2 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
- 147号ピット
  - 1 灰褐色土 白色粒子やや多量、ローム小ブロックやや多量に含む。
  - 2 黒褐色土 黄色粒子やや多量に含む。
  - 3 黒褐色土 ややしまる。ローム小ブロックごく多量に含む。
- 132号ピット
  - 1 黒褐色土 ローム小ブロック少量に含む。
  - 2 黒褐色土 ローム大ブロックごく多量に含む。
  - 3 ローム小ブロック+黒褐色土
- 137号ピット
  - 1 暗褐色土 ローム小ブロック少量に含む。
  - 2 暗褐色土 ローム小ブロック多量、ローム大ブロック少量に含む。
- 138号ピット
  - 1 黒褐色土 やや砂質。
  - 2 黒褐色土 しまる。浅間B軽石やや多量、ローム小ブロック多量に含む。
  - 3 黒褐色土 ややしまる。浅間B軽石やや多量に含む。
- 139・140号ピット
  - 1 暗褐色土 やや砂質。黄色粒子少量に含む。
  - 2 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 205~211、213、214号ピット
  - 1 黒褐色土 ローム粒子含む。
  - 2 黒褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
  - 3 黒褐色土 ローム粒子多量に含む。
  - 4 黒褐色土
  - 5 黒褐色土 ロームブロック少量に含む。
  - 6 褐色土
  - 7 黒褐色土 ロームブロックやや多量、焼土粒子含む。

第66図 1区1号屋敷内ピット群1 断面図

第31表 1区58号ピット出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第65図 PL.132	1	灰釉陶器 長頸壺	+14cm 胴部片	胴 17.7	緻密/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回りか。胴部下半は回転ヘラ削りか。	



33号ピット  
 1 黒褐色土 ローム小ブロック少量に含む。  
 2 黒褐色土 ややしまる。ローム大ブロックごく多量に含む。

36・37号ピット  
 1 暗褐色土 黒褐色土をモザイク状に含む。  
 2 黒褐色土 ローム大ブロックやや多量に含む。  
 3 黒褐色土 ローム大ブロック多量に含む。

38号ピット  
 1 暗褐色土 黄色粒子少量に含む。  
 2 黒褐色土 ローム小ブロック多量に含む。

39号ピット  
 1 暗褐色土 黄色粒子やや多量に含む。  
 2 暗褐色土+ローム大ブロック ややしまる。  
 3 暗褐色土 ローム大ブロック多量に含む。  
 40号ピット  
 1 暗褐色土 ローム大ブロック多量に含む。根攪乱大。  
 2 黒褐色土 黄色粒子少量に含む。  
 43号ピット  
 1 褐色土+黒褐色土  
 2 オリーブ褐色土  
 3 黒褐色土 ローム小ブロック多量、ローム大ブロック少量に含む。  
 47号ピット  
 1 褐色土 やや砂質。黒褐色土をモザイク状に含む。  
 2 褐色土 黒褐色土大ブロック多量に含む。  
 3 黒褐色土

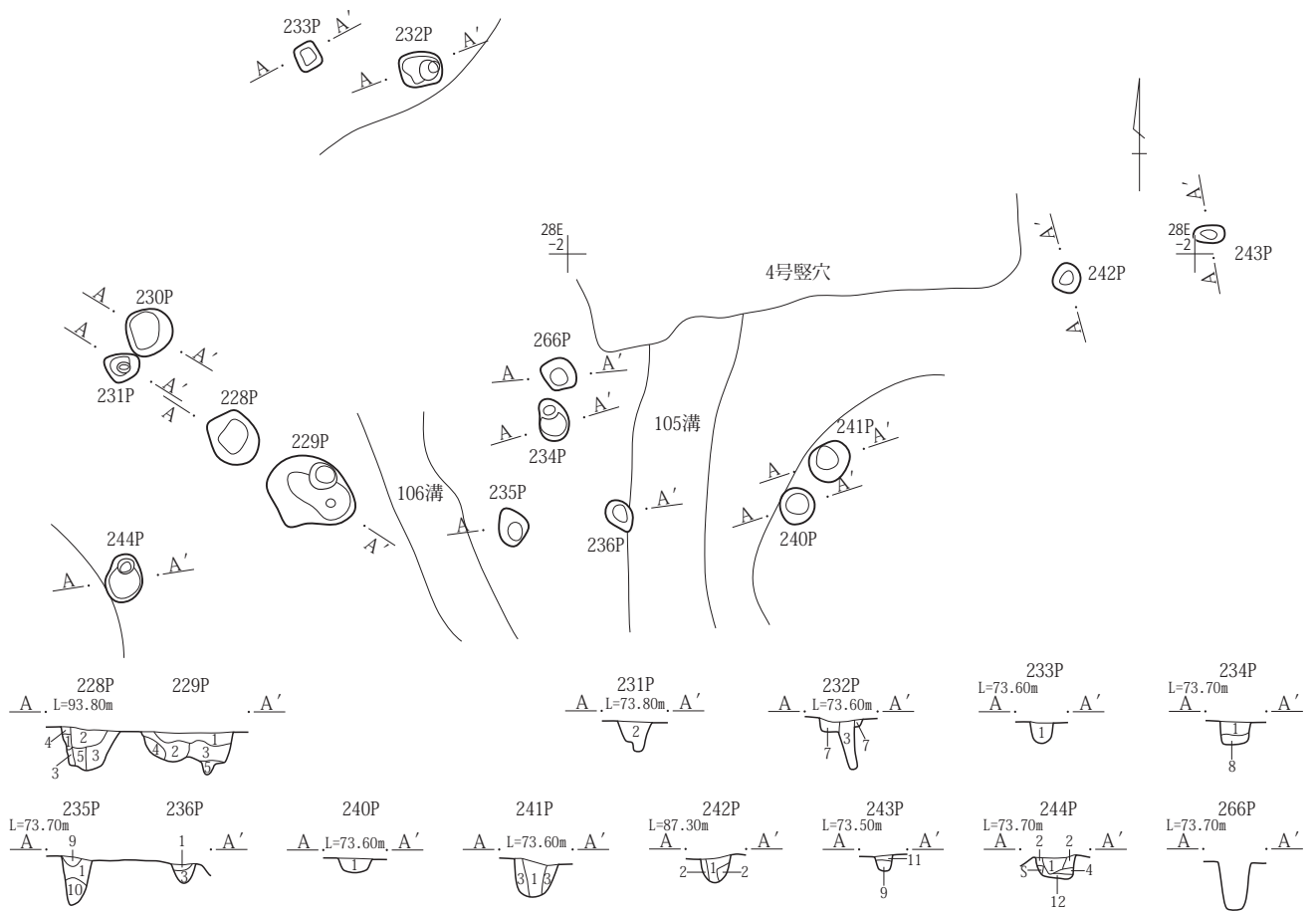
48号ピット  
 1 暗褐色土 黄色粒子微量に含む。  
 2 暗褐色土 黄色粒子やや多量に含む。  
 49号ピット  
 1 暗褐色砂質土 黄色粒子多量に含む。  
 2 暗褐色砂質土 ローム小ブロック多量に含む。  
 52号ピット  
 1 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。  
 2 黒褐色土 ローム粒子少量に含む。  
 55号ピット  
 1 暗褐色土 浅間A軽石微量に含む。  
 2 黒褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。  
 3 黒褐色土 ローム大ブロック少量に含む。  
 56号ピット  
 1 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。  
 2 暗褐色土 ローム大ブロック多量に含む。  
 3 黒褐色土 ローム粒子少量に含む。

57号ピット  
 1 暗褐色土 黄色粒子少量に含む。  
 215号ピット  
 1 黒褐色土 ロームブロック微量に含む。  
 2 黒褐色土 ロームブロック多量に含む。  
 216号ピット  
 1 黒褐色土 均質  
 2 黒褐色土 ロームブロック少量に含む。  
 3 黒褐色土 ロームブロックやや多量に含む。  
 265号ピット  
 1 黒褐色土 ローム粒子含む。  
 2 黒褐色土 ロームブロック含む。  
 3 黒褐色土 ロームブロック多量に含む。

第67図 1区1号屋敷内ピット群2と39号ピット出土遺物

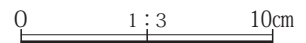
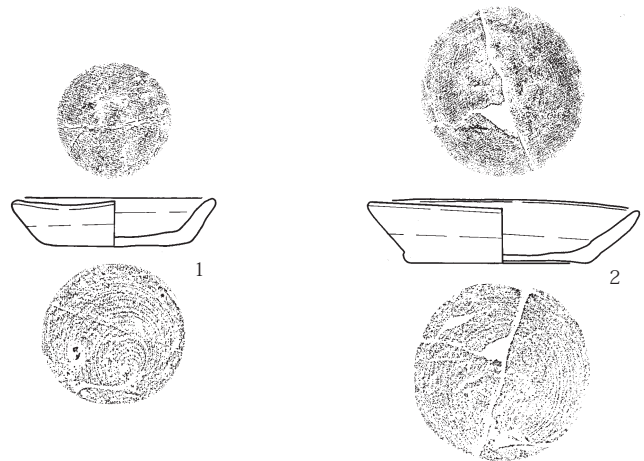
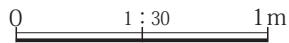
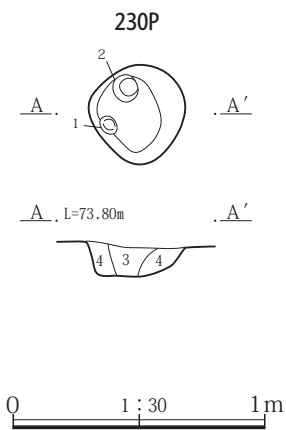
第32表 1区39号ピット出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第67図	1	肥前磁器	小杯		(6.8)	-	-	1/4		灰白	外面に笹文。呉須の色はにぶく濁る。	波佐見系。17世紀末～19世紀前半。



228～236、240～244号ピット

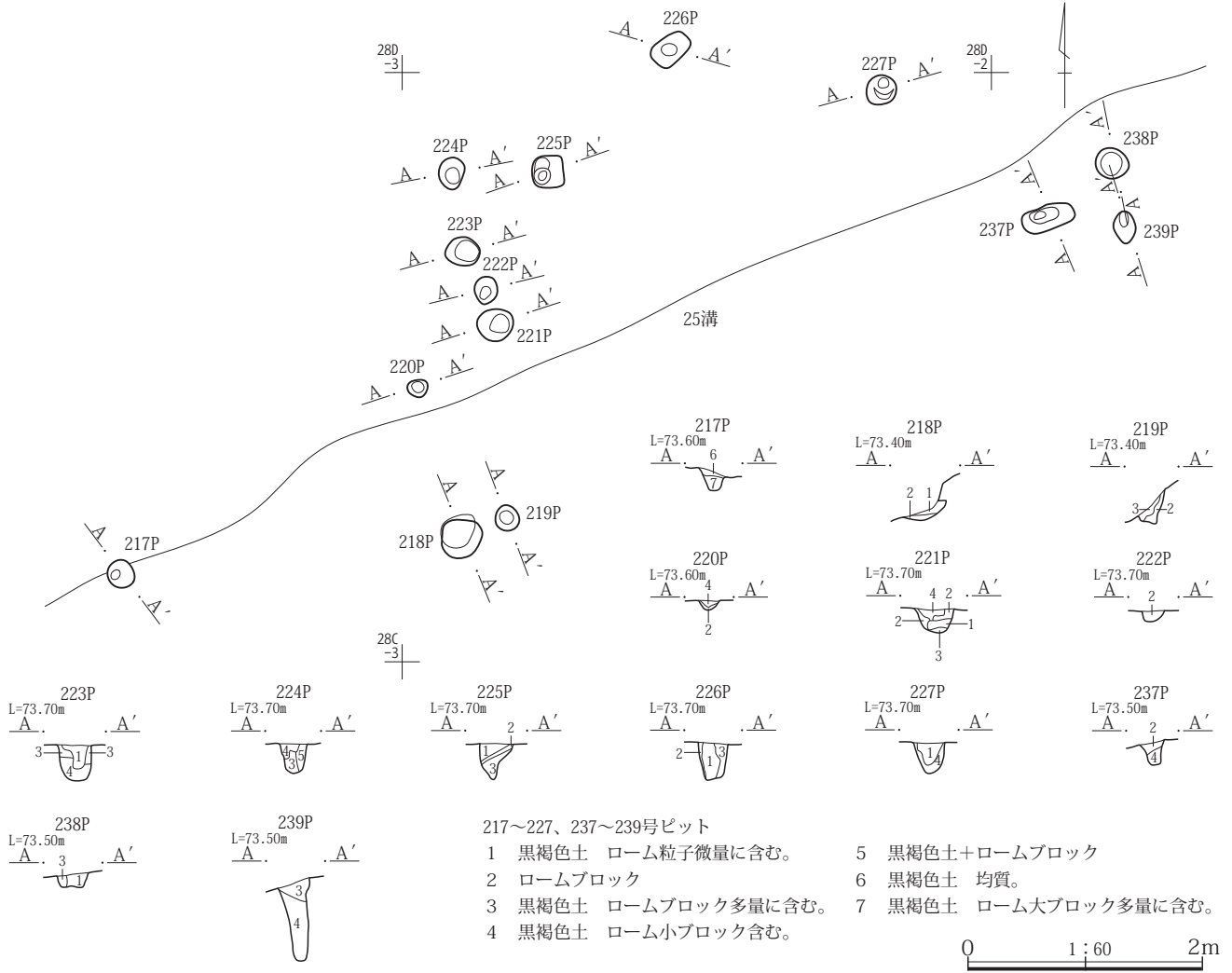
- |                       |                       |                     |
|-----------------------|-----------------------|---------------------|
| 1 黒褐色土 ローム小ブロック含む。    | 5 黒褐色砂質土              | 9 黒褐色土 ローム粒子多量に含む。  |
| 2 黒褐色土 ローム小ブロック少量に含む。 | 6 黒褐色土 ローム小ブロック多量に含む。 | 10 灰白色土 黒褐色土ブロック含む。 |
| 3 黒褐色土 ロームブロック多量に含む。  | 7 黒褐色土+ロームブロック        | 11 黒褐色土 ローム粒子少量に含む。 |
| 4 黄褐色土 黒褐色土ブロック含む。    | 8 黒褐色土 ローム大ブロック含む。    | 12 黒褐色土             |



第68図 1区1号屋敷内ピット群3と230号ピット出土遺物

第33表 1区230号ピット出土遺物

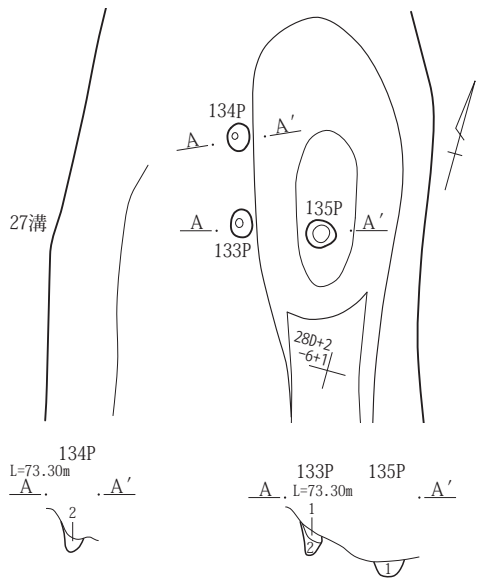
挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第68図 PL.132	1	在地系 土器	Ⅲ	+3cm	7.8	5.6	1.9	完形	B	橙	口縁部は外反。底部左回転糸切無調整。	15世紀中頃～ 後半。
第68図 PL.132	2	在地系 土器	Ⅲ	+1cm	10.6	7.2	2.05 ～2.5	完形	A	にぶい 黄橙	器形歪み、場所により立ち上がり角度が異なる。底部 左回転糸切無調整。	15世紀中頃～ 後半。



217～227、237～239号ピット

- 1 黒褐色土 ローム粒子微量に含む。
- 2 ロームブロック
- 3 黒褐色土 ロームブロック多量に含む。
- 4 黒褐色土 ローム小ブロック含む。
- 5 黒褐色土+ロームブロック
- 6 黒褐色土 均質。
- 7 黒褐色土 ローム大ブロック多量に含む。

第69図 1区1号屋敷内ピット群4



133～135号ピット

- 1 暗褐色土 ローム粒子微量に含む。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。

第70図 1区1号屋敷内ピット群5

第34表 1区中世屋敷内ピット計測表(cm)

ピットNo.	グリッド	長径	短径	深さ	非掲載破片数
32	28 F-4	35	27	28	
33	28 D-4	65	39	36	須恵器壺甕類1
36	28 D-4	42	(41)	24	土師器杯碗類3
37	28 D-4	(49)	44	21	
38	28 D-4	57	42	31	
39	28 E-4	40	37	41	
40	28 D-4	30	29	30	
43	28 D-4	39	32	33	
47	28 D-3	50	(21)	28	
48	28 D-4	22	21	30	
49	28 D-4	46	39	22	土師器壺甕類1
51	28 E-4	61	42	55	土師器壺甕類1、須恵杯器碗類2
52	28 D-4	51	43	41	
53	28 F-4	44	43	42	
55	28 D-4	35	32	31	土師器壺甕類1
56	28 C-4	38	33	19	
57	28 D-4	31	24	20	
58	28 F-4	29	26	15	
116	28 F-4	32	31	17	
117	28 F-4	28	25	27	
118	28 F-4	34	29	18	
119	28 F-4	22	(10)	30	
120	28 F-4	37	(29)	29	
131	28 E-4	28	23	23	土師器杯碗類1・壺甕類1

第4章 発掘調査の記録

ピットNo.	グリッド	長径	短径	深さ	非掲載破片数
132	28E-4	60	40	37	土師器杯碗類1・壺甕類1
133	28D-6	22	17	26	
134	28D-6	23	18	22	
135	28D-6	24	22	14	
137	28F-5	47	(24)	35	
138	28F-5	32	29	24	
139	28F-4	28	(22)	21	
140	28F-4	33	(27)	29	
141	28F-4	30	25	22	
142	28F-4	49	(35)	33	
143	28F-4	33	28	18	
144	28F-4	43	(31)	23	
145	28F-4	47	32	20	土師器壺甕類1
146	28F-5	25	18	14	
147	28F-4	25	(20)	37	
187	28D-4	(38)	28	32	
205	28E-3	33	27	36	
206	28E-3	27	25	20	
207	28E-3	29	22	20	
208	28E-3	36	29	19	
209	28E-3	34	31	35	
210	28E-3	44	39	21	
211	28E-3	43	38	23	
212	28E-3	35	28	63	
213	28E-3	39	16	36	
214	28E-3	39	30	20	
215	28D-3	39	36	15	
216	28C-3	28	23	19	
217	28C-3	24	23	20	
218	28C-2	37	35	27	
219	28C-2	22	21	27	
220	28C-2	17	15	9	
221	28C-2	31	28	21	
222	28C-2	25	20	10	
223	28C-2	30	25	31	
224	28C-2	28	21	25	
225	28C-2	28	27	31	
226	28C-2	34	23	32	
227	28C-2	26	25	28	
228	28D-2	44	37	35	
229	28D-2	74	50	34	
230	28D-2	40	38	15	
231	28D-2	27	23	24	
232	28E-2	34	28	41	
233	28E-2	21	20	18	
234	28D-2	35	24	19	
235	28D-2	32	29	39	
236	28D-1	28	20	16	
237	28C-1	46	11	22	
238	28C-1	29	26	13	
239	28C-1	28	19	72	
240	28D-1	29	28	11	
241	28D-1	35	30	31	
242	28D-1	25	23	23	
243	18E-20	26	15	19	
244	28D-2	39	30	19	
265	28D-3	28	25	35	
266	28D-1	31	26	39	

行2間程度の建物が想定されるが、ピット間の距離や走向方位などの違いにより、建物の認定はできない。調査が二次にわたったことも要因にあげられる。23・24号溝も関係が想定される。39号ピットからは染付磁器盃(67図1)？が出土する。ピット群中では北に偏在し、周辺に近世墓が密集する状況から、それらに関連する遺構と考えられる。他のピットについても、同様な可能性があることを示す。

ピット群3は8号井戸の東側にやや集中する15基である。配置に特徴は見られない。230号ピット底面から完形の在地系土器皿2点が出土した。68図1は西壁に傾く形で、68図2は北壁際に伏せられた状態である。深さは柱穴としては浅い。状況から埋納されたと考えられる。15世紀中～後半に比定される。

ピット群4は8号井戸の南側から25号溝の北壁面に分布する14基である。小規模なものが多いが、239号ピットは深さ71.5cmと極端に深い。25号溝の北壁中位にあり、212号土坑にも近い。性格は不明ながら興味深い。

ピット群5は25号溝の北端底面で確認された3基である。周辺が円形に凹んだ状況であり、25号溝内部に設営された施設の一部とも考えられるが、具体的な構造は不明である。特に遺物が集中して廃棄された部分に一致する。

## (5)溝

溝は23条検出される。このうち、1号屋敷を区画する溝は、25～27号溝、63号溝、91号溝の5条となり、これと関連する浅い溝が、66・70・79号溝である。なお、後2者と重複する69A・69B・75・82号溝は古代となる可能性もある。内部の溝は、概して小規模である。建物は復元できていないが、ピット群と混在する23・24・29・33号溝は遺物も出土し、建物に関連する溝と考えられる。23号溝(第71図、P L.22・132、第35表)

**位置** 28D-3・4グリッド。44号土坑と重複するが新旧関係不明で、並存も想定される。平面形は直線状。走向方位N-81°-E。西端は44号土坑で途切れ、東端は一次調査区境で途切れる。次期調査時の遺構確認面が、前時より約10cm程度低いことも、要因にあげられよう。底面は東方向へ上昇傾向にあり、いずれにしろ途切れた可能性が高い。断面はU字状。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。両端の比高差は6cmで、勾配1.84%で西方へ下向する。埋没土下位はロームブロックが目立つ。上位に白色軽石(As-A)を含むが、根攪乱等による混入にもみえる。規模は長さ3.26m上端幅30～60cm最大深11cmである。西端寄り確認面で、ほぼ完形の在地系土器皿(1)が出土する。出土地点は溝が土坑状に広がる部分に当たる。掲載遺物のほか、土師器壺甕類2片が出土している。出土遺物から15世紀中頃に比定される。

## 24・107号溝(第71図、P L.22、第35表)

**位置** 28C～E-3・4グリッド。91号溝と重複し新旧関係不明だが、24・107号溝は同一溝の可能性が高い。平面形は弓状で上端は乱れる。走向方位N-3°-W～N-32°-E～N-79°-E。西端は削平等により消滅か。断面は作図部分がU字状だが、全体に皿状で、形状は安定しない。壁は緩やかで凸凹する。底面は凸凹し、根攪乱が顕しい。両端の比高差は11cmで、勾配はほとんどない。規模は長さ12.92m上端幅25～100cm最大深19cmである。南端で在地系土器鍋(2)が出土する。出土遺物から中世に比定される。

## 25・26・27・61A・61B号溝(第73～76図、P L.23・24・132・133、第36表)

**25号溝 位置** 28A～E-1～6、18B～D-19・20グリッド。1・20・26・51・52・59・61A・61B号溝に前

出し、27号溝と重複するが新旧関係不明。平面形はL字形で、屋敷南・西面を区画する。走向方位は南北軸N-20°-W、東西軸N-69°-E。断面形は底辺の開く逆台形。壁は外反気味で斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。両端の比高差は23cmで、勾配はほとんどない。底面やや上から埋没土中位まで、円礫・遺物が集中して投棄される。埋没土下位はシルトが多く、機能していた時は低湿な状況で、自然埋没したと想定される。上～中位はロームブロックが目立つ暗褐色土で、人為的に埋まるか。上部は61A・61B号溝など別の溝の可能性あり。規模は南北軸で長さ17.04m上端幅208～232cm、東西軸で長さ33.84m上端幅368～576cm、最大深108cmである。出土遺物は南北軸部分、特に北端に集中し、礫に混じることから、投棄されたものと考えられる。出土遺物は在地系土器鍋鉢類、火鉢、焼締陶器などやや多く出土し、14世紀後半頃から16世紀前半頃まで及ぶ。26号溝との連続性を考慮すれば、16世紀～17世紀前半までが下限年代となるが、この期間には1号屋敷廃絶後も含まれよう。掲載遺物のほか、土師器杯椀類73片・壺甕類304片、須恵器杯椀類80片・壺甕類29片、埴輪片1片、土板1片、中世国産陶器3片・在地系土器51片、火打石1点、茶下臼1点、板碑片9点が出土する。また、近世国産陶磁器38片・在地系土器16片、近現代その他土器類19片が出土するが、1号溝からの混入とみられる。

**26号溝 位置** 28B～E-5・6グリッド。25号溝より後出で、1号溝より前出。平面形は直線状。走向方位はN-19°-W。断面逆台形。断面観察により掘り直しが二度以上判明する。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。両端の比高差は16cmで、勾配1.16%で南方へ下向する。埋没土下位はシルトが多く、機能時は低湿な状況で、自然埋没したと想定される。上～中位はロームブロックが目立つ暗褐色土で、人為的に埋まるか。古段階の溝は、底面からロームブロックが層状に埋めており、人為的に埋め戻されている。規模は南北軸で長さ13.76m上端幅124～240cm最大深80cmである。古段階の底面で瀬戸陶器志野丸皿(76図1)、埋没土から肥前陶器碗(76図2)が出土する。掲載遺物のほか、土師器杯椀類20片・壺甕類108片、須恵器杯椀類16片・壺甕類7片、中世在地系土器2片、近世国産陶磁器43片・在地系土器2片、その他土器類1片が出土している。出土遺物は17世紀後

半から18世紀初頭に及ぶが、古段階も含めて2・3時期あることを考慮すれば、上限は17世紀前半まで遡るものとする。

**27号溝** 位置 28A～D-5・6グリッド。20号溝より前出で、25号溝と重複するが新旧関係不明。平面形は25号溝に沿って直線状。走向方位N-21°-W。南北両端とも不分明。断面皿状で東側不明。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。両端の比高差は6cmで勾配はほとんどない。埋没土は中位に厚さ5cm以上、平面的にロームで埋まっており人為埋没。規模は長さ16.80m上端幅34～128cm最大深33cmである。在地系土器鉢(4)が出土する。掲載遺物のほか、土師器杯椀類3片・壺甕類1片、須恵器壺甕類1片が出土している。25号溝の年代観から、16世紀後半が上限となる。26号溝と並走しており、深さは浅いが一時的に2条が並走していたことも想定される。

**61A・61B号溝** 位置 28B-5グリッド。61A号溝は25号溝に後出し、61B号溝は61A号溝より後出で、52号溝より前出。ともに25号溝の土層観察面で、断面で認識されたのみであり、平面形は不明。断面はともに逆台形。壁は稜を持って外反気味に立ち上がる。底面は不明。埋没土は白色軽石(As-A)・ロームブロックが目立つが、人為埋没か自然埋没か不明。天明3年以降に比定されるが、断面のみの確認のため、ここで扱う。規模不明。遺物は出土していない。状況から51・52号溝へ継続される一連の遺構とみられる。遺物は出土していない。

**29号溝**(第71図、P L .25)

**位置** 28E-4グリッド。51号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は直線状。走向方位N-81°-E。東端は一次調査区境で途切れる。次期調査時の遺構確認面が、前回より約10cm程度低いことも、要因にあげられよう。断面U字状。壁は斜めに立ち上がる。底面は凸凹する。両端の比高差はない。埋没土はロームブロックがやや多いが、人為埋没ではない。規模は長さ1.41m上端幅39～52cm最大深30cmである。遺物は出土していない。

**33号溝**(第71図、P L .25)

**位置** 28E・F-4・5グリッド。32・146号ピットと重複するが新旧関係不明。西端は攪乱で消滅。平面形は直線状。走向方位N-76°-E。断面やや深いU字状。壁はやや斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。両端の比高差は3cm、勾配1.01%で西方へ下向する。規模は長

さ2.96m上端幅29～52cm最大深19cmである。遺物は土師器壺甕類6片が出土するが混入とみられる。

**62号溝**(第71～73図、P L .25)

**位置** 28B・C-4・5グリッド。25号溝と重複するが、同溝の上位は、ほ場整備による盛り土の影響が大きく、断面観察では新旧関係不明。平面形はL字形。走向方位は南北軸N-12°-E、東西軸N-69°-E。断面逆台形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。両端の比高差10cm、勾配1.45%で南方へ下向する。本溝を境に屋敷南側が平坦になっており、埋没土の状況から当初ほ場整備時の削平と考えたが、時期も含めて平坦面も本溝との関係が想定される。規模は南北軸で長さ3.62m、東西軸で長さ3.28m上端幅41～93cm最大深21cmである。遺物は土師器杯椀類1片・壺甕類2片、近世国産陶器1片が出土している。

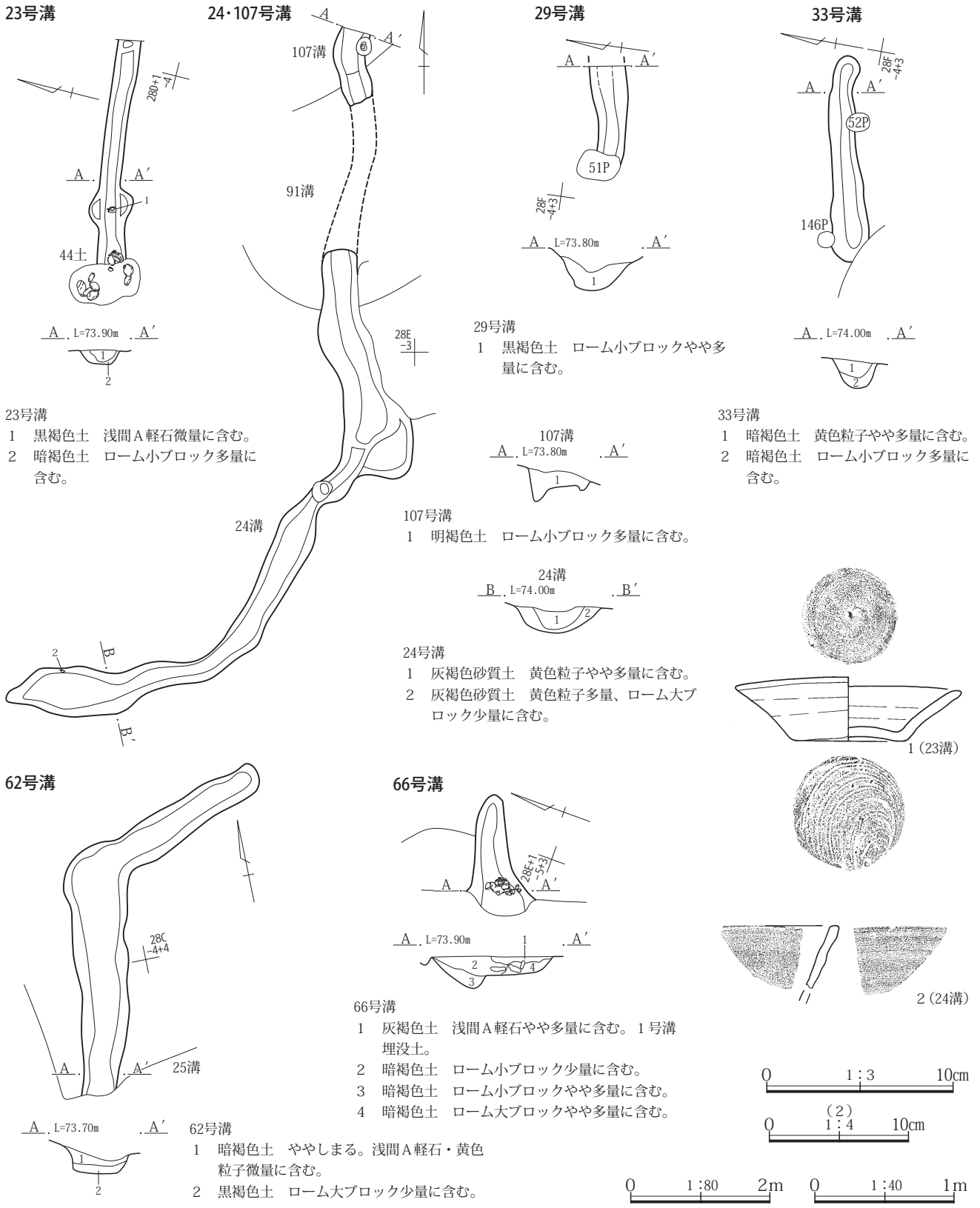
**63号溝**(第77・78図、P L .25・133、第37表)

**位置** 28E・F-5・6グリッド。66号溝と重複するが新旧関係不明。南端部は攪乱で消滅するが、ほぼその付近で立ち上がる。25号溝と対応して、屋敷の西辺を区画する。平面形はやや弓状。走向方位N-18°-W。断面は潰れた逆台形。壁は緩やかに立ち上がる。底面はやや丸みを持つ。両端の比高差は11cm、勾配1.67%で北方へ下向する。埋没土は中位に厚さ5cm以上、平面的に黄褐色土で埋まり人為埋没し、上位は皿状の凹みとして継続か。人為的に埋まる状況は、25・26号溝古段階に通じるものがある。規模は長さ6.60m上端幅363～465cm最大深56cmである。埋没土の黄褐色土層上下で主に在地系土器が出土する。掲載遺物のほか、土師器杯椀類10片・壺甕類289片、須恵器杯椀類58片・壺甕類4片、中世在地系土器35片が出土している。15世紀後半から16世紀前半頃に及ぶ。遺物の年代幅が25号溝に比べて小さく、上限が下る状況から、掘削時期が25号溝よりも新しい可能性が高い。

**66号溝**(第71図、P L .25)

**位置** 28E-5グリッド。1号溝より前出で、63号溝と重複するが新旧関係不明。平面形はやや弓状。走向方位N-70°-E。断面U字状。壁は斜めに立ち上がる。底面は凸凹し、西に向かって下がる。両端の比高差は4cm、勾配2.29%で東方へ下向する。埋没土はロームブロック・地山の垂角礫が目立つ。規模は長さ1.74m上端幅35





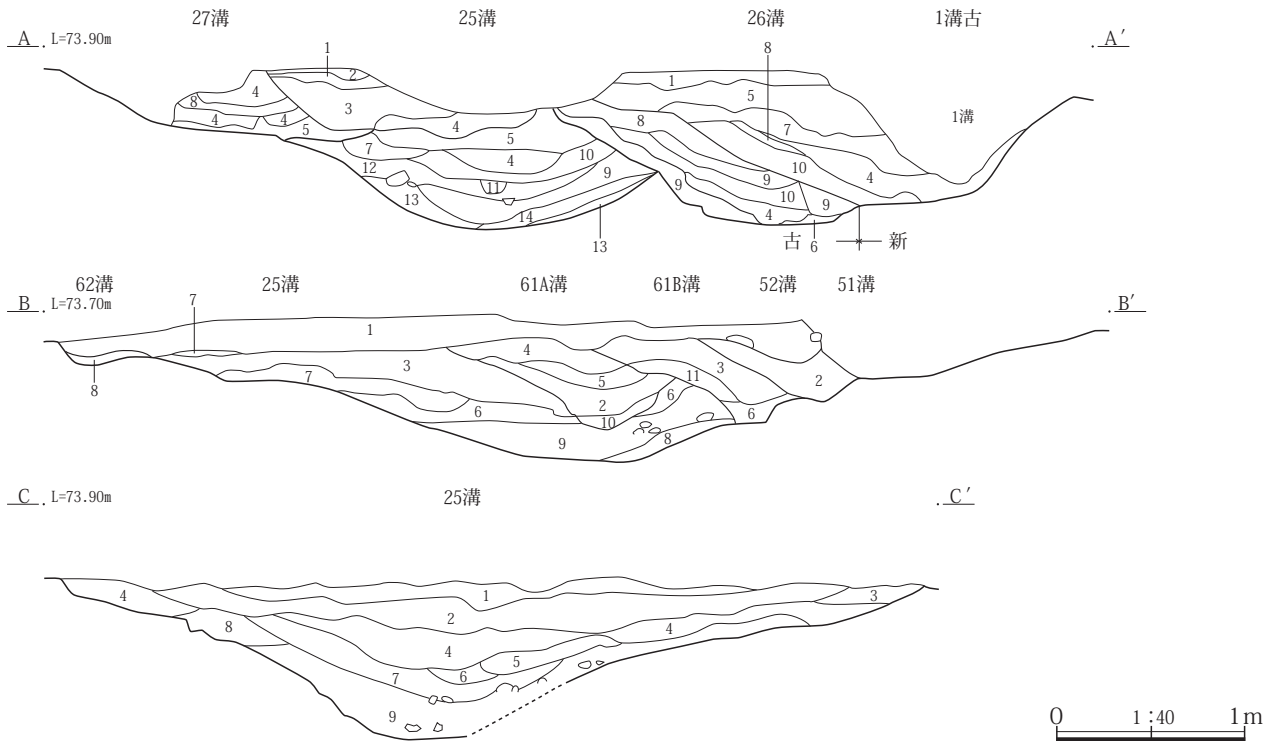
第71図 1区23・24・29・33・62・66・107号溝と23・24号溝出土遺物

第35表 1区23・24号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第71図 PL.132	1	在地系 土器	皿	23溝 +11cm	11.5~ 12.1	6.0	2.7~ 3.4	ほぼ完 形	B	にぶい 黄橙	体部下位で外反。内面の底部と体部境は明瞭。体部から口縁部歪む。底部左回転糸切無調整。	15世紀中頃。
第71図	2	在地系 土器	鍋か	24溝 +6cm	-	-	-	口縁部 片	B	淡黄	内外面横撫で。強い横撫により轆轤目状に器面が窪む。	中世か。



第72図 1区25～27・62号溝と25溝出土遺物(1)



25・26・27号溝(A-A')

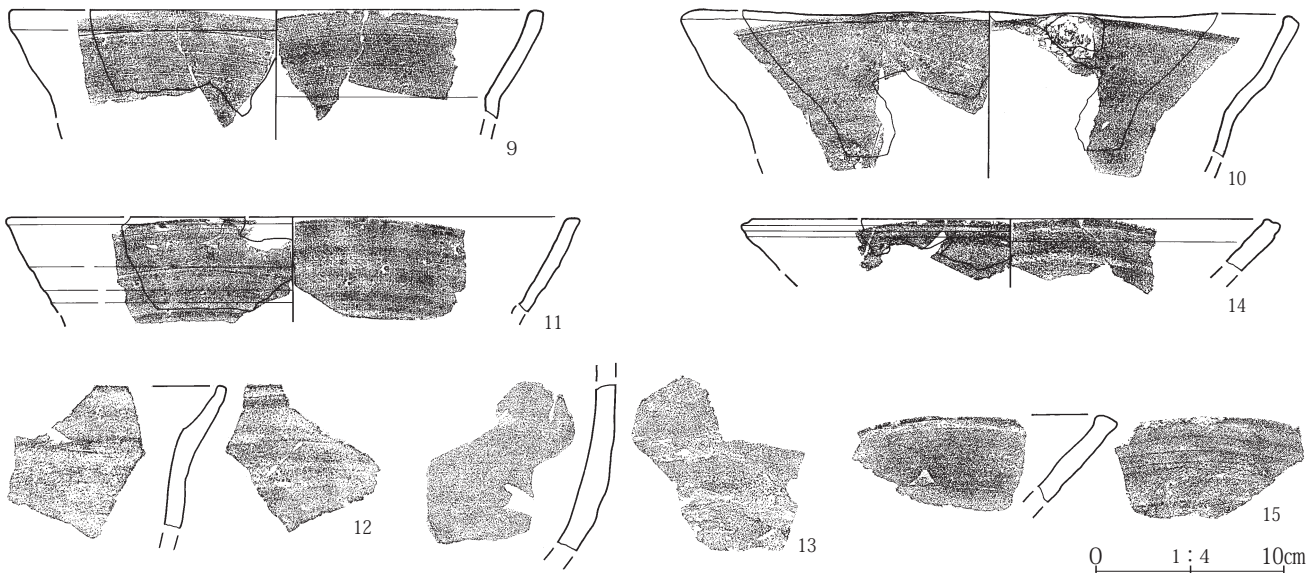
- 1 暗褐色土 浅間A軽石少量に含む。
- 2 暗褐色土 浅間A軽石多量に含む。
- 3 暗褐色土 黄色粒子やや多量、小礫やや多量に含む。
- 4 暗褐色粘質土 ローム大ブロック多量に含む。
- 5 暗褐色土 やや粘性あり。黄色粒子やや多量に含む。
- 6 灰褐色シルト 黄色粒子多量、小礫やや多量に含む。
- 7 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
- 8 にぶい黄褐色粘質土
- 9 灰褐色シルト 黄色粒子多量に含む。
- 10 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 11 灰褐色シルト 灰白粗粒軽石多量に含む。
- 12 灰褐色シルト
- 13 にぶい褐色土 やや砂質。黄色粒子ごく多量に含む。
- 14 黒褐色土 ローム小ブロック少量に含む。

25・52・61A・61B・62号溝(B-B')

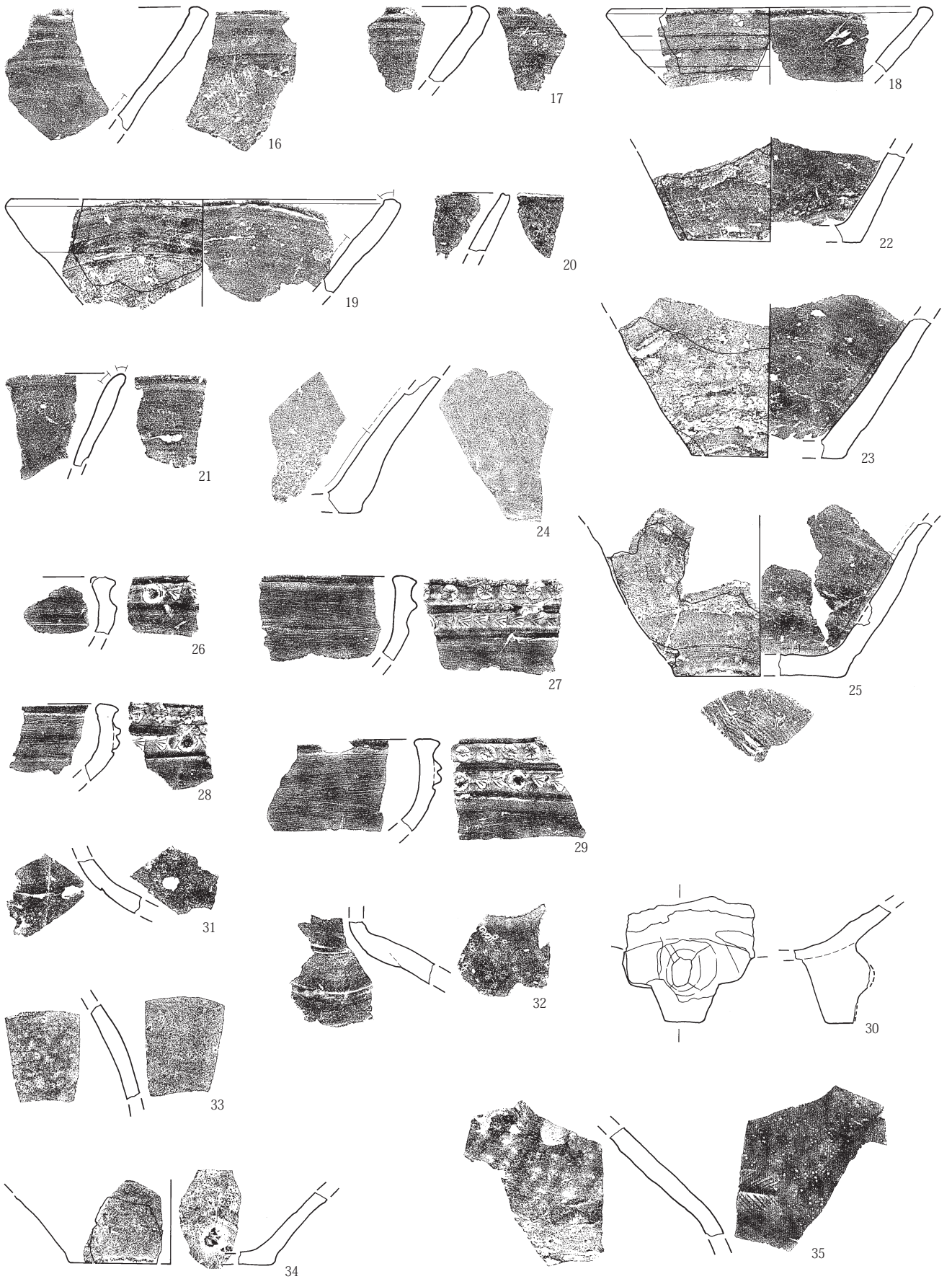
- 1 暗褐色土 ややしまる。浅間A軽石微量、黄色粒子微量に含む。
- 2 暗褐色土 ややシルト質。
- 3 暗褐色土 黄色粒子少量に含む。
- 4 暗褐色土 浅間A軽石やや多量に含む。
- 5 暗褐色土 黄色粒子やや多量に含む。
- 6 暗褐色土 ローム小ブロック少量に含む。
- 7 ローム大ブロック+暗褐色土
- 8 黒褐色土 ローム大ブロック少量に含む。
- 9 灰褐色シルト質土 黄色粒子少量に含む。
- 10 灰褐色シルト質土 均質。
- 11 暗褐色土 ローム大ブロック少量に含む。

25号溝(C-C')

- 1 暗褐色土 黒褐色土をモザイク状に含む。
- 2 暗褐色土 黄色粒子少量、小礫少量に含む。
- 3 暗褐色土 小礫少量、黄色粒子少量、浅間A軽石微量に含む。
- 4 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 5 暗褐色土+ロームブロック
- 6 暗褐色土 ややシルト質。
- 7 灰褐色土 ややシルト質。
- 8 暗褐色土 ローム大ブロック少量に含む。
- 9 灰褐色粘質土 小礫少量に含む。

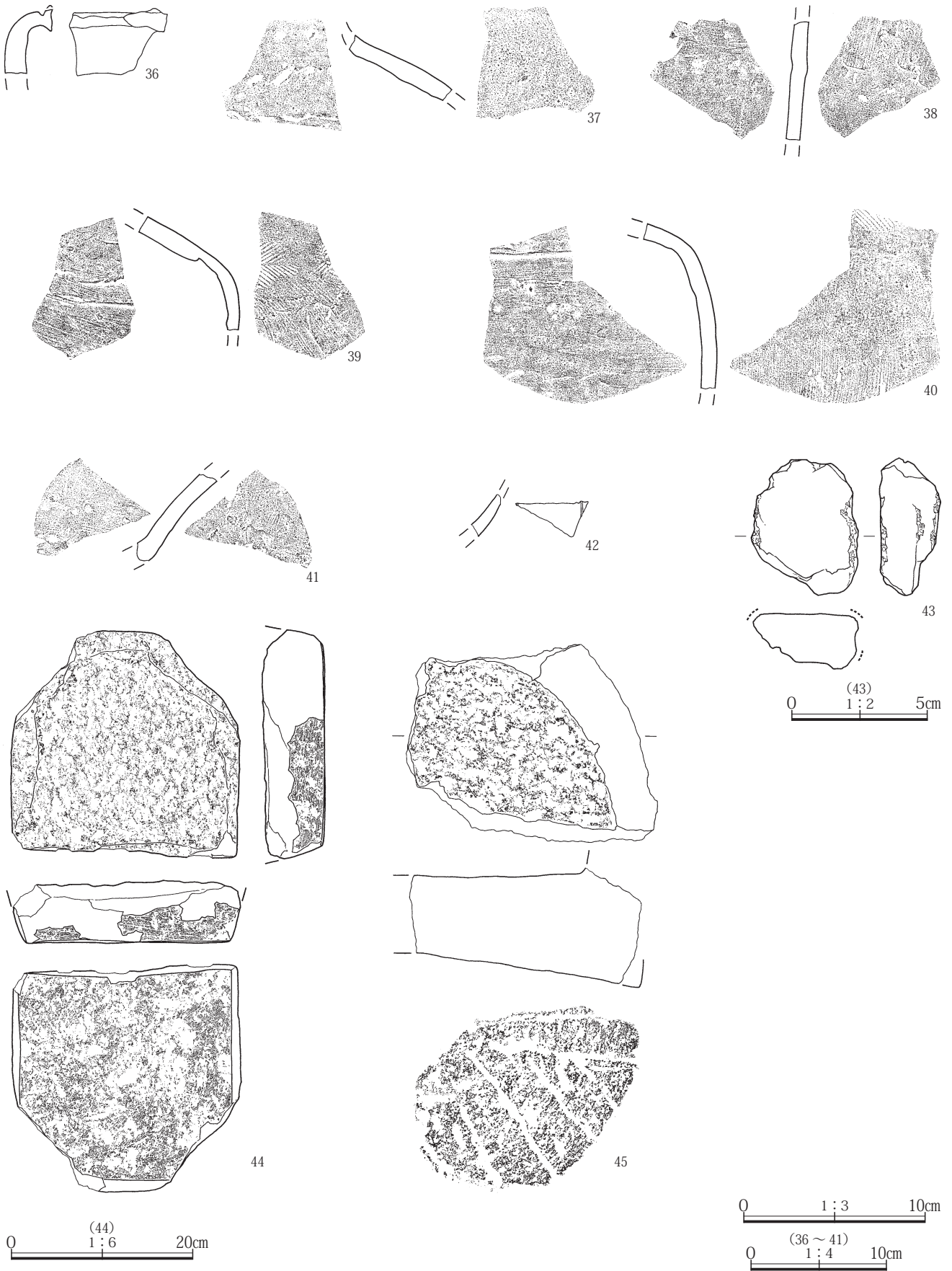


第73図 1区25～27・61A・61B・62号溝断面図と25号溝出土遺物(2)

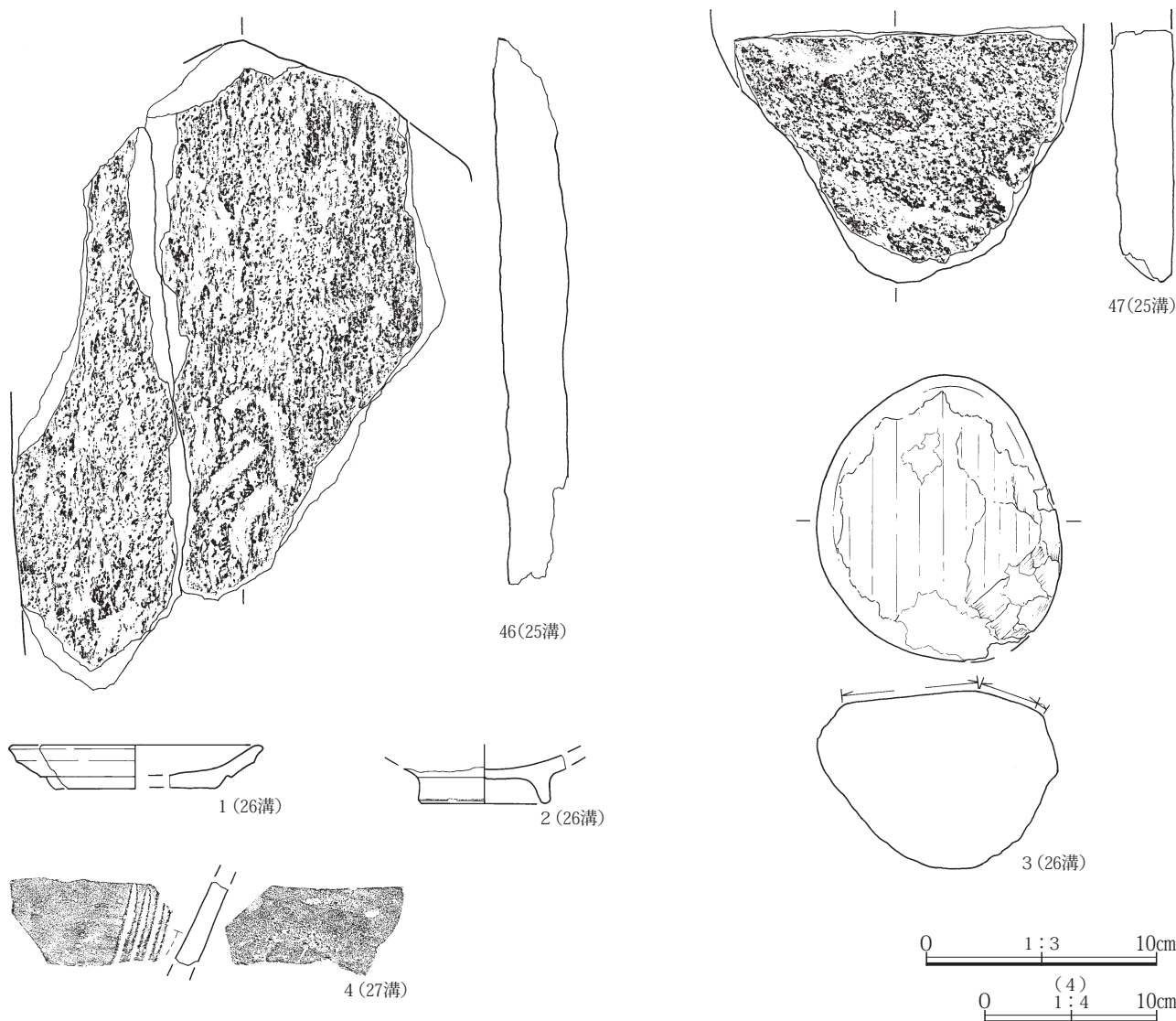


0 1:4 10cm

第74図 1区25号溝出土遺物(3)



第75図 1区25号溝出土遺物(4)



第76図 1区25号溝出土遺物(5)、26・27号溝出土遺物

第36表 1区25・26・27号溝出土遺物

挿 図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第72図 PL.132	1	在地系 土器	皿	25溝	(7.8)	(5.0)	1.7	1/4	B	黒褐	体部外面は丸みを帯びる。底部外面回転糸切無調整だが器表摩滅。左回転轆轤整形。	口縁部油煙付着。江戸時代。
第72図	2	在地系 土器	皿	25溝	-	(5.5)	-	1/2	B	にぶい 黄橙	底部内面撫で。底部左回転糸切無調整。	中世か。
第72図	3	在地系 土器	内耳鍋 か	25溝	-	-	-	口縁部 片	B	黄灰	還元炎。口縁部はゆるく外反し、器壁厚い。外反部内面にゆるく低い段差。	15世紀前半か。
第72図	4	在地系 土器	内耳鍋	25溝	-	-	-	口縁部 片	A	黒	断面はにぶい橙色、器表は黒色。口縁部下で屈曲し口縁部僅かに内湾して開く。屈曲部内面は明瞭な段差。口縁端部上面は平坦で外方に僅かに突き出る。	15世紀末～ 16世紀。
第72図	5	在地系 土器	内耳鍋	25溝 +21cm	-	-	-	口縁部 片	B	にぶい 橙・黒 褐	外面器表のみ黒褐色。外面下位に煤付着。器壁はやや厚い。	15世紀か。
第72図	6	在地系 土器	内耳鍋	25溝	-	-	-	口縁部 片	B	灰	断面はにぶい橙色、器表は灰色。口縁部は僅かに内湾し、端部上面は平坦でやや内傾。口縁端部外面は小さく外方に突き出る。	15世紀末～ 16世紀。
第72図	7	在地系 土器	内耳鍋	25溝 +25cm	-	-	-	口縁部 片	B	灰	還元炎。器壁は薄い。口縁部下でゆるく外反。口縁端部上面はやや丸みを持ち内傾。	IV期か。
第72図 PL.132	8	在地系 土器	内耳鍋	25溝 +15cm	-	-	-	口縁部 片	B	灰	断面中央はにぶい黄褐色、器表付近は灰白色、器表は灰色。器壁はやや厚い。口縁部下で屈曲して外反。口縁部下内面はゆるい段差をなす。口縁端部内面は稜をなす。	IV期か。
第73図	9	在地系 土器	内耳鍋	25溝 +7cm	(28.1)	-	-	口縁部 片	B	灰黄 褐・に ぶい黄 褐	断面はにぶい黄褐色、器表は灰黄褐色。外面器表は黒褐・にぶい黄褐を帯びる。器壁はやや厚い。口縁部下で外反し、口縁部は内湾。口縁部下内面は稜をなす。口縁端部上面は小さい削れが連続したように摩滅。	III期。

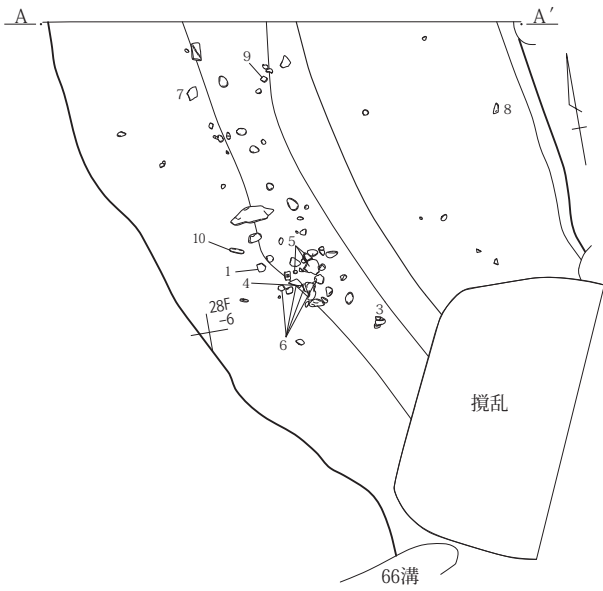
第2節 1区の遺構と遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第73図	10	在地系 土器	内耳鍋	25溝 +28cm	(31.5)	-	-	口縁部 片	B	灰・灰 黄	内面側半分は灰黄色、外面側半分は灰色。口縁部下で 外反、口縁部は内湾。口縁部下内面は湾曲し稜をなさ ない。内耳貼り付け痕残る。	IV期。
第73図	11	在地系 土器	鍋か	25溝	(30.2)	-	-	口縁部 片	A	灰・褐 灰	断面は褐色、器表付近から器表は灰色。口縁部下内面 に段差。口縁端部外面は小さく突出。	IV・V期。
第73図	12	在地系 土器	内耳鍋	25溝 +73cm	-	-	-	口縁部 片		浅黄・ 暗灰黄	断面中央は暗灰色。器壁はやや厚く、口縁部は短め。 口縁部下位で外方に湾曲。口縁端部はやや内湾し、端 部は明瞭な稜をなす。口縁部下内面は丸みを帯び、屈 曲気味に外反。	I・II期。
第73図	13	在地系 土器	内耳鍋	25溝	-	-	-	体下半 片	B	灰	還元炎。器壁が厚く体部は内湾。体部外面下位は窶撫で。	14世紀後半～ 15世紀。
第73図	14	在地系 土器	内耳鍋 か	25溝 +20cm	(27.1)	-	-	口縁部 片	B	灰	還元炎。器壁厚い。口縁端部上面は平坦。	中世。
第73図	15	在地系 土器	片口鉢	25溝 +22cm	-	-	-	口縁部 片	B	黄灰	器壁は薄い。口縁端部内面は低く、断面三角形に突 き出る。	IV・V期。18 と同一個体の 可能性あり。
第74図	16	在地系 土器	片口鉢	25溝 +13cm	-	-	-	口縁部 片	B	にぶい 黄橙	口縁部下で外反し、口縁部は内湾気味。口縁端部内面 は突き出る。突出部上面の器表摩滅。	IV期か。14と 同一個体の可 能性あり。
第74図	17	在地系 土器	片口鉢	口縁部 片	-	-	-	口縁部 片	B	黄灰	口縁部内湾気味。口縁端部内面は断面三角形に突 き出る。	IV期か。16と 同一個体の可 能性あり。
第74図	18	在地系 土器	片口鉢	25溝 +42cm	(23.0)	-	-	口縁部 片	B	灰	器壁は薄い。口縁端部内面は低く丸みを持って突き出 る。	IV・V期。15 と同一個体の 可能性あり。
第74図	19	在地系 土器	片口鉢	25溝 +25cm	(28.1)	-	-	1/8	B	灰	還元炎。器壁は厚い。口縁部下で外反。体部外面は板 状工具による縦位撫で。口縁部内面は突き出るが、上 面の摩滅著しく形状不明。端部外面も器表摩滅。	III期か。
第74図 PL.132	20	在地系 土器	片口鉢	25溝	-	-	-	口縁部 片		にぶい 黄橙	片口鉢II類。口縁部の2.5cmのみ丁寧な横撫で。口縁端 部上面は明瞭に窪ませる。	13世紀後半。 外177図79と 同一個体の可 能性高い。
第74図 PL.132	21	在地系 土器	片口鉢	25溝 +2cm	-	-	-	口縁部 片	B	黒・灰	断面は灰色、器表は黒色から暗灰色。口縁湾曲部内面 は使用により器表摩滅。内面口縁部以下は使用により 平滑。	中世。
第74図	22	在地系 土器	片口鉢	25溝 +13cm	-	(13.2)	-	下半部 片	B	にぶい 黄橙	体部外面下端は回転窶撫で。底部外面は回転糸切無調 整。使用により内面器表は摩滅。	中世。
第74図	23	在地系 土器	片口鉢	25溝 +50cm	-	(11.0)	-	体部片	B	灰	還元炎。体部は内湾気味、口縁部下で外反。体部外面 下端は板状工具による横位撫でで刷毛状痕。底部外面 回転糸切無調整。使用による摩滅著しく、体部から底 部内面の器表摩滅。	中世。25と同 一個体の可能 性高い。
第74図	24	在地系 土器	片口鉢	25溝	-	-	-	体下半 部片	A	灰	体部下位の器壁厚い。体部下位は外反。内面は使用に より器壁摩滅。底部外面周縁は器表摩滅。残存部にすり 目はない。	中世。
第74図 PL.132	25	在地系 土器	片口鉢	25溝 +12cm	-	(12.5)	-	1/4	B	灰	還元炎。体部は内湾気味、口縁部下で外反。体部外面 下端は板状工具による横位撫でで刷毛状痕。底部外面 回転糸切無調整。使用による摩滅著しく、体部から底 部内面の器表摩滅。底部内面中央の摩滅は弱く、器表 の1部のみ摩滅。	中世。23と同 一個体の可能 性高い。
第74図	26	在地系 土器	火鉢	25溝	-	-	-	口縁部 片	B	灰・に ぶい黄	口縁端部欠損。外面上半の窪みに三角形の押印文と 円錐状貼付文を廻らす。	中世。27～ 30と同一個体 の可能性高い。
第74図 PL.132	27	在地系 土器	火鉢	25溝 +34cm	-	-	-	口縁部 片	B	灰・に ぶい黄	内外面は磨き調整。口縁部外面に2段の凹線を廻らし、 上段に菊花状押印文、下段に三角形押印文と円錐状 貼付文。	中世。26・28 ～30と同一 個体の可能性 高い。
第74図	28	在地系 土器	火鉢	25溝 +32cm	-	-	-	口縁部 片	B	黄灰・ にぶい 黄	内外面は磨き調整。口縁部外面に2段の凹線を廻らし、 上段に菊花状押印文、下段に三角形押印文と円錐状 貼付文。	中世。26～ 28・30と同一 個体の可能性 高い。
第74図 PL.132	29	在地系 土器	火鉢	25溝 +4cm	-	-	-	口縁部 片	B	黄灰・ にぶい 黄橙・ 灰	内外面は磨き調整。口縁部外面に2段の凹線を廻らし、 上段に菊花状押印文、下段に三角形押印文と円錐状 貼付文。	中世。26～ 28・30と同一 個体の可能性 高い。
第74図	30	在地系 土器	火鉢	25溝 +21cm	-	-	-	底～脚 部	B	灰・に ぶい黄 橙	体部内外面は磨き調整。脚部貼り付け。脚部外面に突 起貼り付け。底部内面に脚部貼り付け時の撫で。	中世。26～ 29と同一個体 の可能性高い。
第74図	31	常滑陶 器	壺か甕	25溝 +7cm	-	-	-	頸～体 部片		褐色	断面は灰白色、器表は褐色。肩部外面は自然釉かかる。	中世。
第74図 PL.132	32	渥美陶 器	壺	25溝 +22cm	-	-	-	肩部片		灰白	肩部外面に自然釉薄くかかる。器壁は厚い。	12世紀～13 世紀前半。
第74図	33	常滑陶 器	壺か	25溝 +36cm	-	-	-	体部片		黒褐・ 褐灰	内面調整は丁寧。	中世。
第74図	34	常滑陶 器	甕	25溝 +36cm	-	(14.9)	-	底部片		にぶい 黄褐	外面器表は橙色。内面は自然釉斑状にかかる。砂底。	中世。
第74図 PL.132	35	常滑陶 器	甕	25溝 +33cm	-	-	-	肩部片		黒褐	断面は灰色、内面器表は黒褐色、外面に自然釉厚くか かる。外面に矢羽根状の叩き目。	中世。

第4章 発掘調査の記録

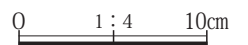
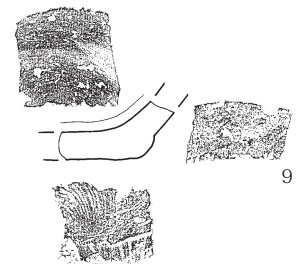
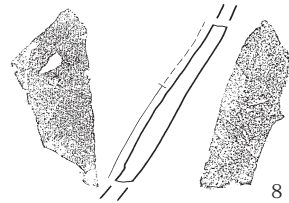
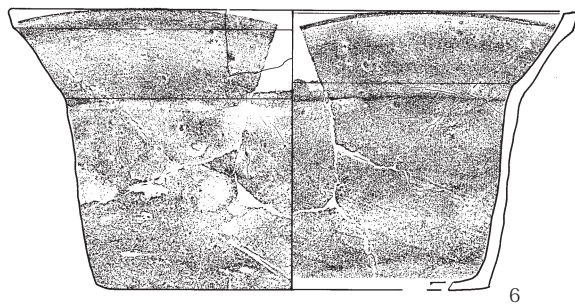
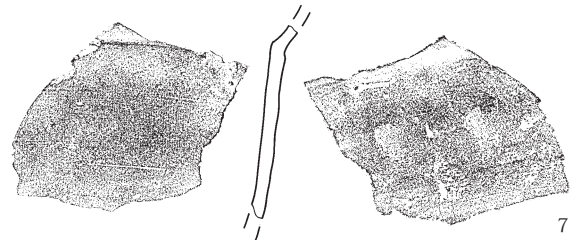
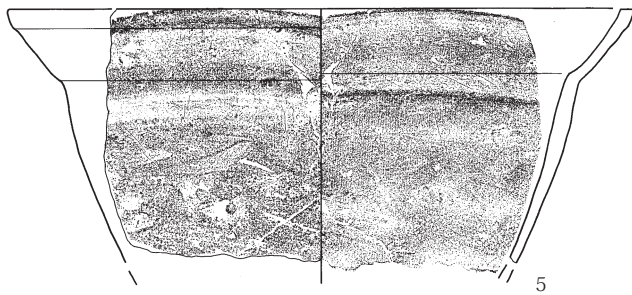
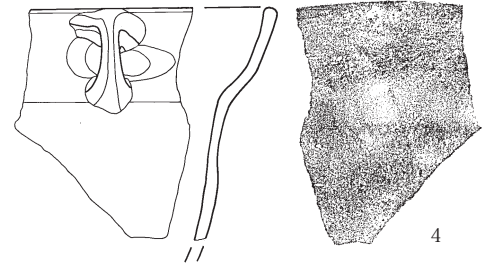
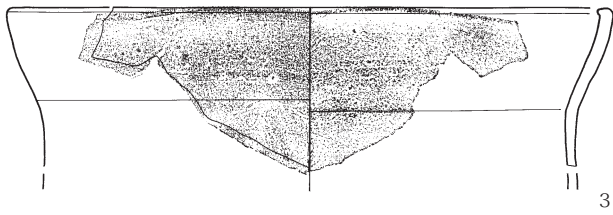
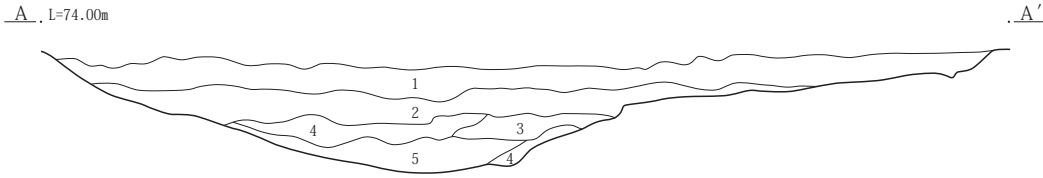
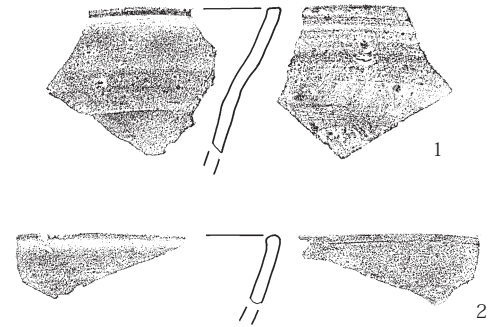
挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第75図 PL.132	36	常滑陶器	甕	25溝 +13cm	-	-	-	口縁部 片		暗赤褐	断面は灰色、内面器表は黒褐色、外面器表は暗赤褐色。口縁部は「N」字状を呈するが、端部上面は欠損。	13世紀第3四半期。
第75図	37	常滑陶器	甕	25溝底直	-	-	-	肩部片		黄灰	肩部外面に自然釉かかる。内面は接合痕残る。	中世。
第75図	38	常滑陶器	甕	25溝フク土	-	-	-	体部片		暗赤褐	断面は灰色、器表は暗赤褐色。外面は縦位板状工具による撫でにより刷毛状痕残る。	中世。
第75図	39	常滑陶器	甕	25溝フク土	-	-	-	肩部片		暗赤褐	断面は灰色、内面器表は黒褐色、外面器表は暗赤褐色。肩部上面に自然釉かかる。体部外面は板状工具による撫で刷毛目状痕残る。肩部外面に矢羽根状の叩き目。	中世。40と同一個体の可能性高い。
第75図 PL.132	40	常滑陶器	甕	25溝 +12cm	-	-	-	肩部片		暗赤褐	断面は灰色、内面器表は黒褐色、外面器表は暗赤褐色。肩部上面に自然釉かかる。体部外面は板状工具による撫で刷毛目状痕残る。肩部外面に叩き目。	中世。39と同一個体の可能性高い。
第75図	41	常滑陶器	甕	25溝フク土	-	-	-	体下位 片		灰	断面は灰色、内面器表は灰赤色、外面器表はにぶい赤褐色。内面に斑状の自然釉。	中世。
第75図 PL.132	42	龍泉窯系青磁	碗か	25溝フク土	-	-	-	体部片		灰白	外面に断面三角形の彫り込みで線描。線描による蓮弁文か。内外面に青磁釉。粗い貫入が入る。	中世。
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況		備考	
第75図 PL.132	43	火打石	25溝+5cm	礫片	石英	(5.0)	3.4	48.2	礫稜部を機能部として敲打。			
第75図 PL.132	44	石製品	25溝 +11cm	五輪塔・火輪?	二ツ岳軽石	24.7	25.0	3350.6	火輪を軒の部分で分断、ベース板状に整形。上端は粗く平坦に整形されているように見える。裏面側・側面には墨痕が部分的に残る。			
第75図 PL.132	45	石臼	25溝 +19cm	上臼	粗粒輝石安山岩	径 11.0	高さ 6.0	1000.2	6分割。刻み目が磨り減り、片減りも著しい。端部に「ものくぼり」の痕跡が残る。			
第76図 PL.132	46	板碑	25溝 +13cm		雲母石英片岩	(27.8)	(18.6)	1960.7	上端部破片。浅い薬研掘りキリーク(阿弥陀如来)種子の一部が残る。			
第76図 PL.132	47	板碑片	25溝底直土	基部破片?	緑色片岩	(11.0)	(14.8)	612.3	厚さ2.7cm。			
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況		備考	
-	48	火打石	25溝	礫片	石英	2.0	2.3	16.0	角稜部が敲打され、潰れる。		非実測	
-	49	茶臼	25溝	下臼	粗粒輝石安山岩	(8.5)	(5.8)	295.1	受け皿の痕跡を残す下臼破片。磨き整形は概して雑。		非実測	
-	50	板碑片?	25溝	体部破片	緑色片岩	(20.2)	(16.2)	928.5	厚さ3.3cm。大型の板碑破片。		非実測	
-	51	板碑片?	25溝	体部破片	緑色片岩	(11.1)	(9.6)	290.8	厚さ1.6cm。		非実測	
-	52	板碑片?	25溝	体部破片	雲母石英片岩	(12.7)	(7.3)	263.9	厚さ2.2cm。		非実測	
-	53	板碑片?	25溝	体部破片	緑色片岩	(14.0)	(5.7)	217.1	厚さ2.2cm。		非実測	
-	54	板碑片?	25溝	体部破片	緑色片岩	(13.4)	(11.8)	359.6	厚さ1.6cm。		非実測	
-	55	板碑片?	25溝	体部破片	緑色片岩	(13.9)	(6.7)	272.5	厚さ2.4cm。表裏面とも薄く剥落。		非実測	
-	56	板碑片?	25溝	体部破片	緑色片岩	(14.3)	(6.1)	403.6	厚さ2.6cm。背面側剥落。側縁は再利用され、摩耗。		非実測	
-	57	板碑片?	25溝	体部破片	緑色片岩	(13.4)	(9.6)	217.2	厚さ2.2cm。風化して剥離が著しい。		非実測	
-	58	板碑片?	25溝	体部破片	緑色片岩	(19.4)	(6.9)	595.9	厚さ2.2cm。		非実測	
挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第76図 PL.133	1	瀬戸陶器	志野丸皿	26溝+ 40cm	(10.7)	(7.0)	1.8	1/5		灰白	器高が低いわりに高台外面は高い。高台脇は削り込む。内面から底部外面周縁に長石釉。	登窯4小期。
第76図	2	肥前陶器	呉器手碗	26溝フク土	-	(5.4)	-			灰黄	高台径は大きいが高台内の扱いは浅い。内外面に透明釉。細かい貫入が入る。	17世紀後半～18世紀初頭。
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況		備考	
第76図 PL.133	3	石製品	26溝底直土	楕円礫	二ツ岳軽石	12.3	10.3	434.1	背面側に弱い研磨面、幅広の整形痕がある。			
挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第76図 PL.133	4	在地系土器	片口鉢	27溝	-	-	-	体部片		灰	還元炎。内面に4本以上一単位の幅広のすり目。内面は使用により平滑。	V期か。



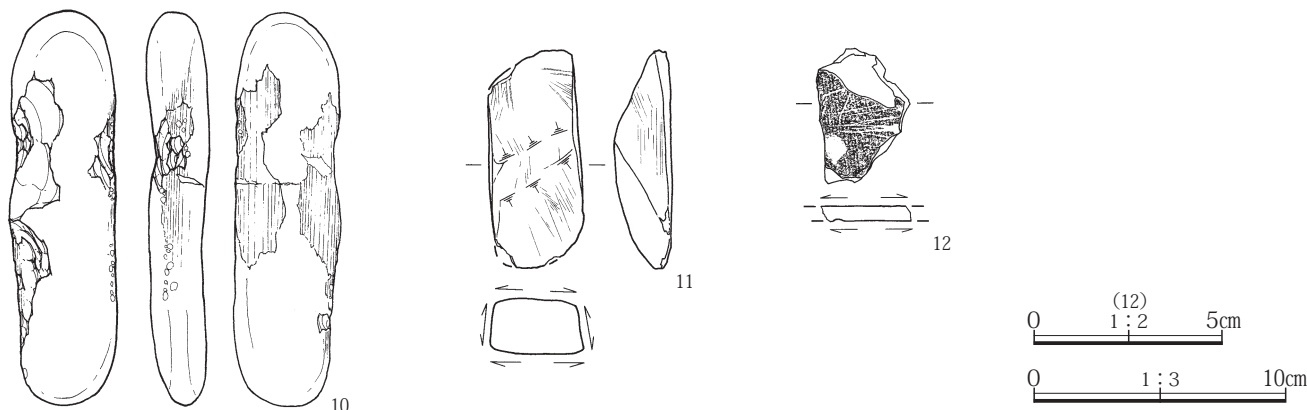


63号溝

- 1 灰褐色土 黄色粒子微量に含む。
- 2 暗褐色土 黄色粒子微量に含む。
- 3 暗褐色土 ローム大ブロックやや多量に含む。
- 4 黄褐色土 暗褐色土大ブロック多量に含む。
- 5 黒褐色土 黄色粒子微量に含む。



第77図 1区63号溝と出土遺物(1)



第78図 1区63号溝出土遺物(2)

第37表 1区63号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第77図	1	在地系土器	内耳鍋	底直	-	-	-	口縁部片	B	灰	還元炎。口縁部下は緩く外反し、口縁部は内湾気味に延びる。口縁端部上面は平坦でやや内傾。口縁端部内面は小さく突き出る。	15世紀末～16世紀初?
第77図	2	在地系土器	内耳鍋		-	-	-	口縁部片	B	灰	口縁部は内湾し、端部内面は丸みを持ち突き出る。	77図3と同一個体か。15世紀後半。
第77図	3	在地系土器	内耳鍋	+8cm	(31.2)	-	-	1/6	B	灰	還元炎。口縁部下で湾曲して外反。口縁部は内湾し、端部内面は丸みを持ち突き出る。	77図2と同一個体か。15世紀後半。
第77図 PL.133	4	在地系土器	内耳鍋	+8cm	-	-	-	口縁～体部片	A	灰黄・灰	還元炎。断面と内面器表は灰色、外面器表は灰黄色。外面は部分的に煤附着。口縁部下位で外反し、口縁部は内湾。口縁端部上面は丸みを帯びる。内耳は器壁に粘土紐を貼り付ける。	15世紀後半。IV期。
第77図	5	在地系土器	内耳鍋	+6cm	(32.0)	-	-	1/6	B	黒褐	断面はにぶい橙色、器表は黒褐色。やや小型の鍋。体部は直線的。口縁部下で屈曲して開く。口縁端部は肥厚し、端部上面は平坦。口縁部下の屈曲部内面は大きな段をなし、ゆるい稜をなす。体部内面下位から底部内面の器表は鉾物粒が目立つ。体部外面下位は鏡撫で。	16世紀。
第77図 PL.133	6	在地系土器	内耳鍋	+5cm	(14.8)	(20.6)	14.7	1/6	B	黒褐	断面はにぶい橙色、器表は黒褐色。やや小型の鍋。平底で体部は直線的。口縁部下で屈曲して開く。口縁端部は肥厚し、端部上面はやや窪む。口縁部下の屈曲部内面は大きな段をなし、明瞭な稜をなす。体部内面下位から底部内面の器表は鉾物粒が目立つ。体部外面下位から底部外面周縁は鏡撫で。底部外面は砂底状。体部外面下位は下端を除き煤附着。	16世紀。
第77図	7	在地系土器	内耳鍋	底直	-	-	-	体部片	A	にぶい黄	断面内面側はにぶい黄色、断面外面側から器表は灰色。還元炎気味。口縁部下は屈曲して外反。屈曲部内面は大きく明瞭な段をなす。	中世。
第77図	8	常滑陶器	片口鉢	+11cm	-	-	-	体部片		灰褐・褐	断面は灰白色、内面器表は灰褐色、外面器表は褐色。内外面の調製はやや丁寧で、内面の器表は平滑となる。	中世。片口鉢II類か。
第77図	9	在地系土器	片口鉢	+29cm	-	-	-	底部片	B	灰	還元炎。底部回転糸切無調整。内面の器表は使用により摩滅。	中世。
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況		備考	
第78図 PL.133	10	砥石		切り砥石	砥沢石	8.5	3.7	75.1	四面使用。上下両端は小口部を逸するほど、激しく使い込まれている。			
第78図 PL.133	11	砥石				(3.5)	(2.5)	4.8				
第78図 PL.133	12	敲石	+22cm	棒状偏平礫	ホルンフェルス	15.6	4.1	278.8	上端側両側縁のノッチ状の抉れ、これに敲打痕が続く。裏面側ノッチ部の周辺は光沢を帯び擦れている。			

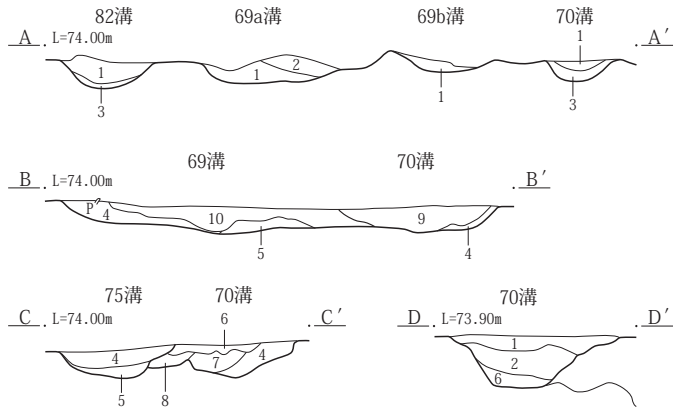
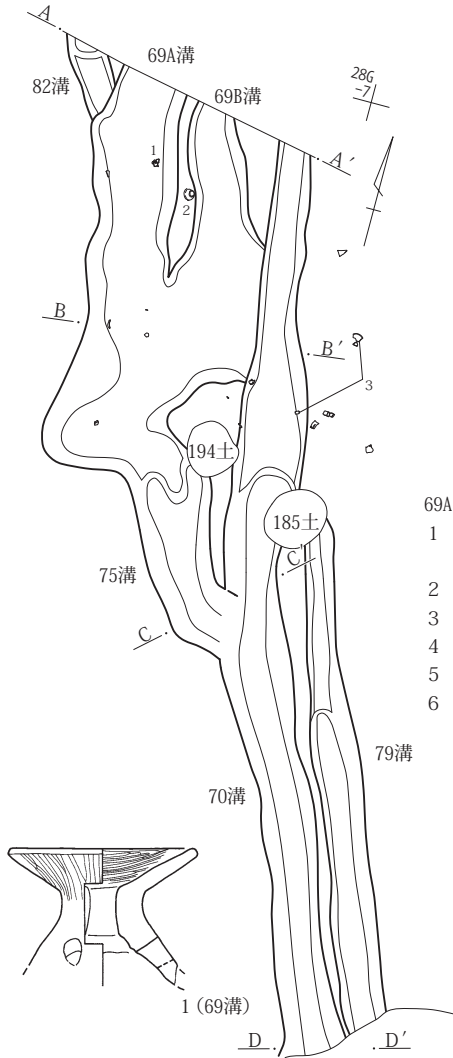
～83cm最大深23cmである。垂角礫は底面から横断方向に積み上がる状況が見られ、軽微な堰にも見える。26号溝北端部と63号溝南端部の間に位置するため、これらと繋がることで、排水溝として機能していた可能性がある。この部分が土橋状の出入口と想定されることから、そうした施設との関連も考慮される。

69A・69B・70・75・79・82号溝(第79図、P.L.25・26・133、第38表)

69A号溝 位置 28F-7グリッド。69B・75・82号溝と重複するが新旧関係不明。平面形はほぼ直線状で乱れる。断面皿状。壁は斜めに立ち上がる。底面は凸凹する。両端の比高差はない。埋没状況不詳。埋没土上層から1の土師器器台(4世紀代)が出土するが混入とみられる。規模は長さ4.40m上端幅74cm以上最大深10cmである。遺物は中世国産陶磁器3片が出土している。出土遺物から中世に比定される。

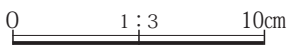
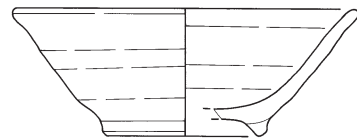
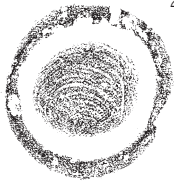
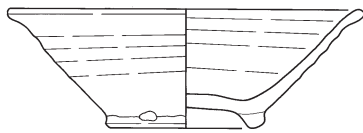
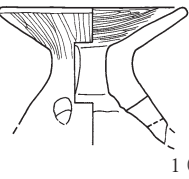
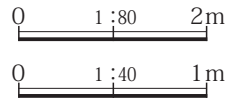
69B号溝 位置 28F-7グリッド。70号溝より前出で、

69A・69B・70・75・79・82号溝



69A・69B・70・75号溝

- |                                |                                       |
|--------------------------------|---------------------------------------|
| 1 暗褐色土 黄色粒子多量、ローム小ブロックやや多量に含む。 | 7 暗褐色土 黄色粒子多量、小礫やや多量に含む。              |
| 2 暗褐色土 黄色粒子ごく多量に含む。            | 8 暗褐色土 ローム大ブロックやや多量に含む。               |
| 3 暗褐色土 黄色粒子多量に含む。              | 9 暗褐色土 白色粒子少量                         |
| 4 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。        | 10 暗褐色土 白色粒子やや多量に含む。                  |
| 5 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。          | 11 暗褐色土 白色軽石微量、ローム小ブロック少量、炭化物粒子微量に含む。 |
| 6 暗褐色土 黄色粒子やや多量に含む。            | 12 暗褐色土 白色軽石微量、黄色粒子少量に含む。             |



69A・75号溝と重複するが新旧関係不明。平面形は直線状で乱れ、69A号溝に合流して不明となる。走向方位N-18°-W。断面皿状。壁は緩やかに立ち上がる。底面は凸凹する。両端の比高差はない。埋没状況不詳。西肩部で2の須恵器碗(10世紀半ば)が出土し、遺構年代を示す可能性が高い。規模は長さ2.85m上端幅46cm以上最大深10cmである。

**70号溝** 位置 28E・F-6・7グリッド。185・194号土坑、25・69B号溝より後出で、79号溝と重複するが新旧関係不明。平面形は直線状で、中央部で南半はくの字に折れる。走向方位N-10°-W~N-23°-W。南端は25号溝と重複して不明となり、確認できない。断面U字状。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。両端の比高差22cm、勾配2.26%で南方へ下向する。自然埋没か。埋没土から3の須恵器碗(10世紀前半)が出土するが、25号溝より後出であるため混入とみられる。規模は長さ9.73m上端幅34~75cm最大深27cmである。

**75号溝** 位置 28E・F-7グリッド。70号溝より後出で、69A号溝と重複するが新旧関係不明。平面形は直線状で乱れる。走向方位N-32°-W。南北端とも他の溝

第79図 1区69A・69B・70・75・79・82号溝と69・70号溝出土遺物

第38表 1区69・70号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第79図 PL.133	1	土師器 器台	69溝+6cm 受部～脚部上半	口 7.0 孔 1.0	細砂粒/良好/橙	受部は放射状ヘラ磨き、脚部はヘラナデ。内面は受部が横位のヘラ磨き、脚部はヘラナデ。	脚部中位に透孔が3カ所。
第79図 PL.133	2	須恵器 椀	69溝 2/3	口 13.7 高 4.7 底 6.2 台 5.3	細砂粒・角閃石/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	高台端部に棒状の圧痕が残る。
第79図 PL.133	3	須恵器 椀	70溝+12cm 1/3	口 13.4 高 5.0 底 6.5 台 5.6	細砂粒・粗砂粒・ 片岩他/酸化焰/に ぶい橙	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部切り離し技法は不明。	

と重複し不分明。断面U字状。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。勾配は計測不能。埋没土はロームブロックが目立つ。規模は長さ2.05m上端幅60～85cm最大深15cmである。遺物は出土していない。

**79号溝 位置** 28E・F-6グリッド。25・70号溝と重複するが新旧関係不明。平面形は直線状。北端は70号溝と合流して、南端は25号溝と重複してともに不明。走向方位N-21°-W。断面U字状。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。両端の比高差14cm、勾配2.55%で南方へ下向する。埋没状況不詳。規模は長さ5.48m上端幅30～50cm最大深10cmである。遺物は出土していない。

**82号溝 位置** 28F-7グリッド。69A号溝と重複するが新旧関係不明。平面形は直線状。走向方位N-33°-W。断面U字状。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。比高差はほとんどない。自然埋没か。規模は長さ1m上端幅35～40cm最大深12cmである。遺物は出土していない。

**91号溝(第80・81図、P L.26・133、第39表)**

**位置** 28E-2・3グリッド。210号土坑、24・107号溝と重複するが新旧関係不明。東側は調査区域外へ延びる。平面形は直線状で、規模・形状からみて、25・63号溝と同じく、屋敷を区画する。内堀か。走向方位N-69°-E。断面逆台形。壁は斜めに立ち上がり、中位からやや外側へ開く。底面は平坦。両端の比高差はない。埋没土下位は灰色気味で上面に遺物・礫が集中する。出土層位は25号溝に似る。その上層は暗褐色土で安定的に埋まり、自然埋没か。規模は長さ7.86m上端幅290～326cm最大深85cmである。礫に混じって在地系土器皿・鍋鉢類がやや多く出土する。遺物の年代は14世紀末から16世紀前半に及ぶ。25号溝と同じ年代に比定される。掲載遺物のほか、土師器壺甕類12片、須恵器杯椀類2片・壺甕類16片、中世在地系土器54片が出土が出土している。

**104号溝(第82図)**

**位置** 18D・E-20グリッド。9号井戸と重複するが新

旧関係未確認。平面形は直線状。走向方位N-15°-W。断面U字状。壁は斜めに立ち上がる。底面は尖り気味。両端の比高差は8cm、勾配1.40%で北方へ下向する。埋没土は詳細不明。規模は長さ5.73m上端幅41～62cm最大深28cmである。遺物は近世国産陶器1片が出土している。

**備考** 調査段階3次14号溝より名称変更。

**105号溝(第82図)**

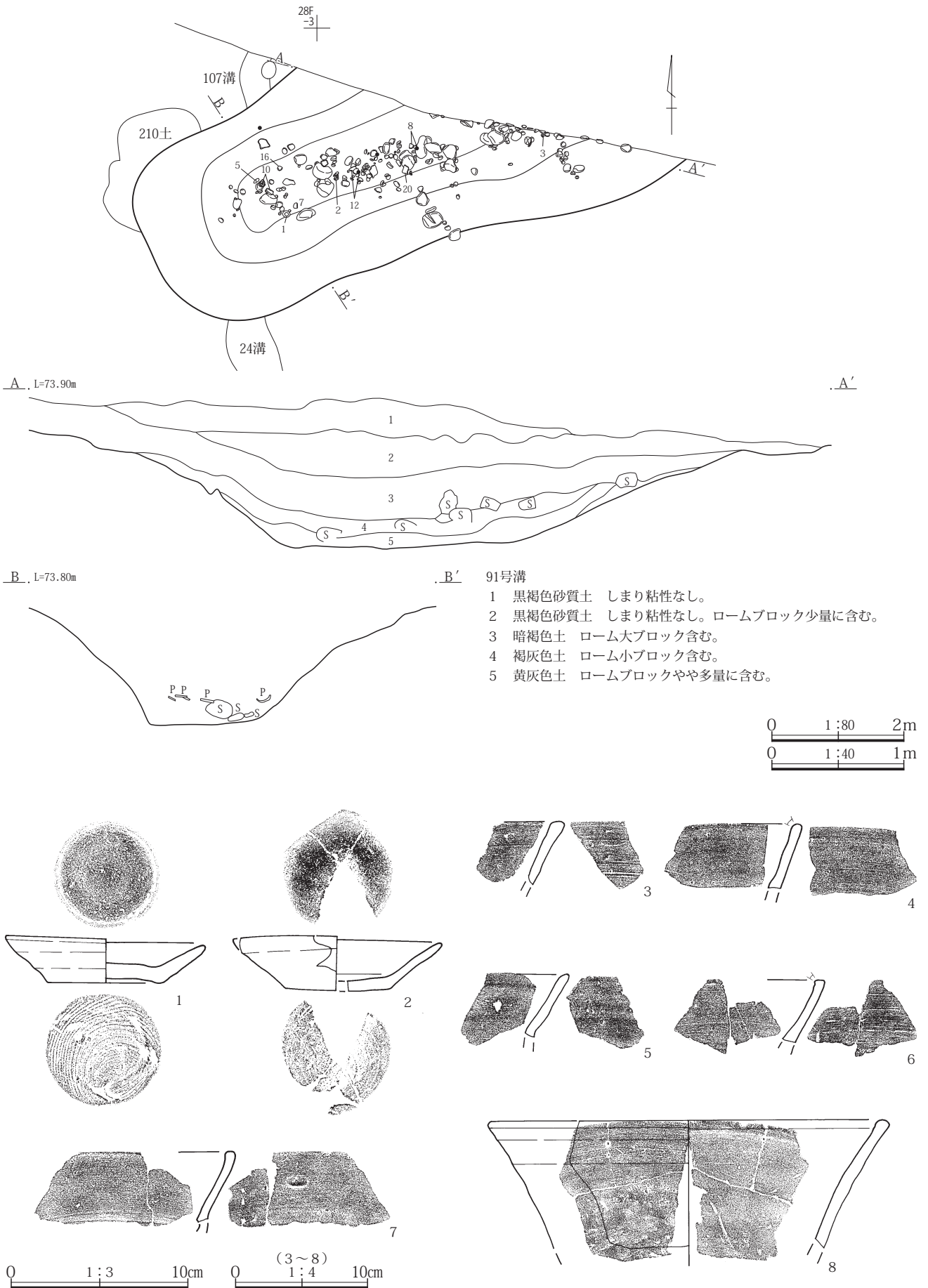
**位置** 28D-1グリッド。4号竪穴状遺構、25・106号溝と重複するが新旧関係不明。平面形はやや弓状。南北両端とも他遺構との重複で不明。走向方位N-6°-E～N-13°-W。断面U字状。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。両端の比高差5cm、勾配1.15%で北方へ下向する。埋没状況不詳。規模は長さ4.34m上端幅42～68cm最大深15cmである。遺物は土師器壺甕類5片が出土するが混入とみられる。

**備考** 調査段階3次15号溝より名称変更。

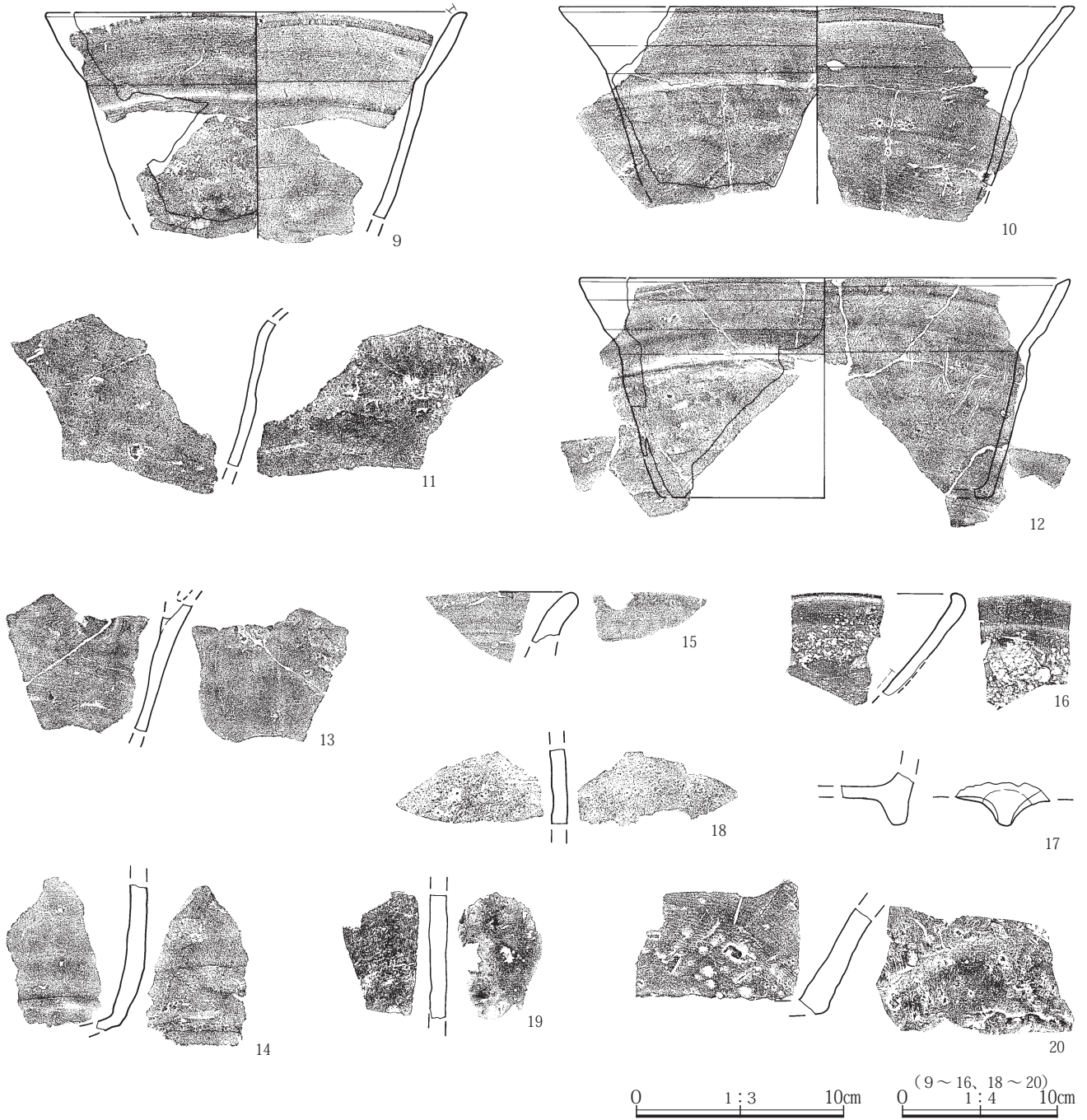
**106号溝(第82図)**

**位置** 28D-1・2グリッド。105号溝と重複するが新旧関係不明。平面形はやや弓状。北端は攪乱で消滅。南端は106号溝と合流後不明。断面皿状。壁は緩やかに立ち上がる。底面は丸みを持つ。両端の比高差は2cmで勾配はほとんどない。埋没状況不詳。規模は長さ4.02m上端幅28～50cm最大深10cmである。

**備考** 調査段階3次16号溝より名称変更。



第80図 1区91号溝と出土遺物(1)



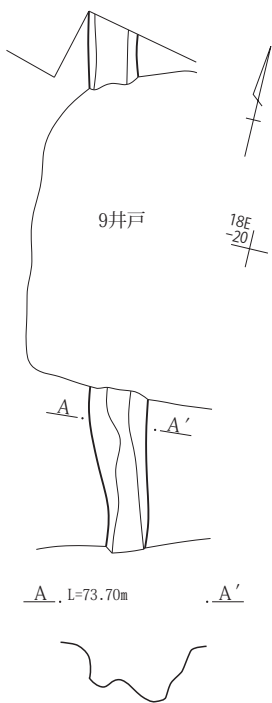
第81図 1区91号溝出土遺物(2)

第39表 1区91号溝出土遺物

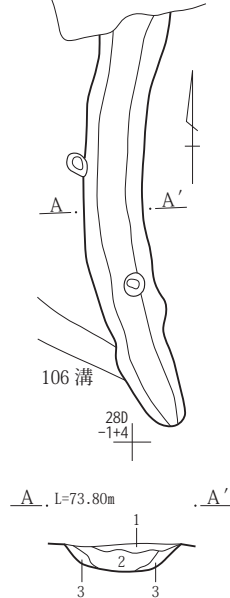
挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第80図 PL.133	1	在地系 土器	皿	+5cm	11.1	6.5	2.1~ 2.6	完形	B	灰黄褐	器壁厚く、体部から口縁部は直線的に開く。内面底部と体部境は回転横撫によりドーナツ状に窪む。底部左回転糸切無調整。	15世紀中～後半。
第80図 PL.133	2	在地系 土器	皿	底直上	(11.7)	(6.0)	2.8~ 3.1	1/2	B	にぶい 黄橙	体部は外反し、口縁部は直線的に開く。底部左回転糸切無調整。	15世紀前半～中。
第80図	3	在地系 土器	鍋	+24cm	-	-	-	口縁部 片	B	灰	還元炎。口縁端部付近は肥厚。口縁端部上面は平坦で内傾か。	IV・V期か。
第80図	4	在地系 土器	内耳鍋		-	-	-	口縁部 片	A	黒・褐 灰	断面はにぶい黄橙色、内面器表は褐灰色、外面器表は黒色。体部に比して口縁部の器壁は薄い。口縁端部は丸みを持って内傾。口縁端部内面は摩滅。	中世。
第80図	5	在地系 土器	鍋	+17cm	-	-	-	口縁部 片	B	黒褐・ 灰白	内面器表は黒色。口縁部下で屈曲して外反。口縁端部は内傾。	IV・V期。12と同一個体の可能性高い。
第80図	6	在地系 土器	内耳鍋		-	-	-	口縁部 片	B	黒褐	断面は黄灰色、器表は黒褐色。体部に比して口縁部の器壁は薄い。口縁部は内湾。口縁端部上面は平坦で内傾か。口縁端部内面は摩滅するが、小さく突出。	中世。13と同一個体

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第80図	7	在地系 土器	内耳鍋	+7cm	-	-	-	口縁部 片	B	灰	還元炎。口縁部上位は非厚して内湾。口縁部内面は小さく突出。	IV期か。
第80図 PL.133	8	在地系 土器	片口鉢 か	+7cm	(29.0)	-	-	1/8	A	褐	器壁は薄く体部から口縁部は外反。口縁部は内側に肥厚。	中世か。
第81図	9	在地系 土器	内耳鍋		(26.8)	-	-	1/4	B	黒	断面はにぶい黄褐色。径がやや小さい。体部に比して口縁部の器壁が厚い。外面に煤付着。口縁部下で屈曲し、口縁部は直線的に開く。口縁部内面は水平で、端部外面は僅かに突出して尖る。屈曲部内面は大きめの段差となり、下部はゆるい稜をなす。体部外面下位は匏撫で。	IV・V期。
第81図 PL.133	10	在地系 土器	内耳鍋	+3cm	(32.8)	-	-	1/7	B	灰	還元炎。断面中央にぶい黄褐色。体部に比して口縁部の器壁が薄い。口縁部下で屈曲し、口縁部は直線的に延びる。口縁部内面は平坦で内面は僅かに突き出る。口縁部下屈曲部内面の段差は低く、ゆるい稜をなす。体部外面下位は匏撫で。	IV・V期。
第81図	11	在地系 土器	鍋		-	-	-	体部片	A	暗オリ ープ褐	断面はにぶい橙色。体部下位の器壁はやや厚い。口縁部下で外反。体部外面下位はやや丁寧な撫で。	中世。
第81図 PL.133	12	在地系 土器	内耳鍋	+14cm	(31.2)	(21.1)	14.0	1/8	B	にぶい 褐	内面器表は黒色。体部外面下位に煤付着。底部外面から体部外面下位は煤付着しない。口縁部下で屈曲して外反。口縁部は内傾。体部は低く平底。体部外面下位は匏撫で。口縁部下屈曲部内面は段や稜をなさず湾曲。	IV・V期。5 と同一個体
第81図	13	在地系 土器	鍋		-	-	-	体部片	B	黒褐	断面は黄灰色、器表は黒褐色。口縁部下で緩く外反。外反部内面は段をなさず湾曲。内耳下部残存。内耳は器壁内面に貼り付ける。	中世。6と同一 個体か。
第81図	14	在地系 土器	鍋		-	-	-	体下半 ~底	B	にぶい 黄橙	体部外面中位黒色。体部外面下位は灰褐色。器壁厚く丸底。体部外面下位は匏撫で。	I・II期か。
第81図	15	在地系 土器	不詳		-	-	-	口縁部 片	B	灰白	還元炎。器壁が厚く口縁部は短い。内面の轆轤目状の凹凸が目立つ。壺か。	中世。
第81図	16	在地系 土器	片口鉢 か	+14cm	-	-	-	口縁部 片	A	灰	断面中央はにぶい橙色、器表付近は灰色。器壁は薄く、口縁部は丸みを帯びて内側に尖り気味に突き出す。口縁部内外面の器表は剥離。	中世。
第81図 PL.133	17	在地系 土器	香炉		-	-	-	底部片	B	にぶい 黄橙	体部轆轤整形。底部外面に脚貼り付け。	中世。
第81図	18	常滑陶 器	壺か		-	-	-	体部片		褐・ にぶい 赤褐	断面中央はにぶい橙色。外面器表はにぶい赤褐色、内面器表はにぶい褐色。体部のカーブはややきつく、壺の可能性が高い。	中世。
第81図	19	常滑陶 器	甕		-	-	-	体部片		オリ ープ灰・ 灰・オリ ープ褐	外面に自然釉厚くかかり、流下する箇所がある。内面に自然釉が斑状に薄くかかる。	中世。
第81図	20	常滑陶 器	甕	+22cm	-	-	-	体下位 ~底		にぶい 褐	断面は暗灰色、内面器表は灰褐色、外面器表はにぶい褐色。体部外面と底部外面の1部に漆状黒色仏付着。	中世。

104号溝

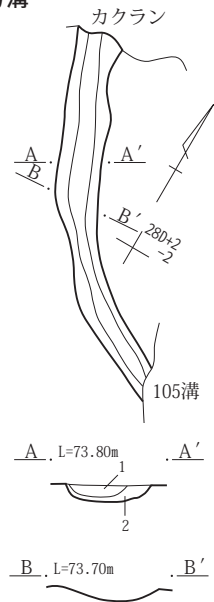


105号溝



- 105号溝
- 1 黒褐色土 均質。
  - 2 黒褐色土 ローム小ブロック少量に含む。
  - 3 黒褐色土 ロームブロック多量に含む。

106号溝



- 106号溝
- 1 黒褐色土 しまり粘性なし。ローム小ブロック少量に含む。
  - 2 黒褐色土+ロームブロック



第82図 1区104～106号溝

2 屋敷周辺の遺構

本調査区では、1号屋敷が中世を特徴づける遺構となるが、周辺にも関連する中世の遺構その他があるため、周辺としてここで扱う。

大きく分けると、別の屋敷空間、居住空間、土坑群と墓域、あるいは広域に及ぶ別の溝などに分かれる。

別の屋敷としては、2区の1号屋敷へとつながる部分として、調査区南東部分があり、2号溝や5号竪穴状遺構、土坑・ピットなどが含まれる。

また、西へ20m弱離れた部分に、2・3号竪穴状遺構を主体とする居住空間があり、1号屋敷や2区中世屋敷とも離れた零細な状況を示している。

調査区北西部は43基の土坑が集中する部分であり、激しく重複している。火葬跡1基とそれに類する土坑・集石遺構が1基ずつあり、銭を伴う土坑も多く、墓域として性格づけられる。ただし、方形系統の土坑も多く、貯蔵用など生活に直結する遺構も多いと言える。近世では屋敷空間となることもあり、どこかの段階で墓域から生活空間へ移行する状況が想定される。また、こうした土坑と重複する6号溝や11号溝の存在は、西側を土坑群の領域として区分するようにも見えるが、単体の屋敷遺構を超越した区画意識も感じることができる。

(1) 竪穴状遺構

調査区中央南端に2基、東端中央寄りに1基が検出された。前2者はほぼ隣接するが、主軸方位が異なり、並存した可能性は低い。2号竪穴状遺構より後出する5号井戸や、南方南壁に位置する3号井戸も中世に比定され、関連が想定される。5号竪穴状遺構は位置から、2区の屋敷内に含まれる可能性がある。

2号竪穴状遺構(第83図、P L.26・133、第40表)

位置 27S-3・4グリッド。11号住居より後出し、5

号井戸、128号土坑、71号ピットより前出。平面形はほぼ正方形。壁は斜めに立ち上がる。床面は堅くしめるが張り床は認められない。掘り方部分は14号住居とほぼ重なり、帰属不分明。規模は長軸2.97m短軸2.71m深さ7~11cmである。西壁近くで1の在地系土器鉢が出土するほかは、同時期の遺物は出土していない。出土遺物から中世に比定される。掲載遺物のほか、近世国産陶磁器3片が出土するが混入とみられる。

3号竪穴状遺構(第83図、P L.26・27、第40表)

位置 27R-3・4グリッド。114・131・165号土坑、69号ピットより前出。平面形は台形に近いが、遺構深度が浅く外形も不明瞭である。壁は緩やかに立ち上がる。床面は未確認。北東隅に内土坑(69号ピット)が設けられる。内土坑の規模は長径70cm短径60cm深さ32cmである。底面にやや丸い輪郭で礫が集中して埋まる。上層に礫はほとんどない。状況から桶などの容器が据えられていた可能性もある。規模は長軸3.77m短軸2.97m深さ1~7cmである。礫に混じって在地系土器鉢(2・3)が出土する。掲載遺物のほか、土師器杯碗類6片・壺甕類51片、須恵器杯碗類22片・壺甕類2片、時期不詳土器類9片が出土している。出土遺物から中世に比定される。

5号竪穴状遺構(第83図)

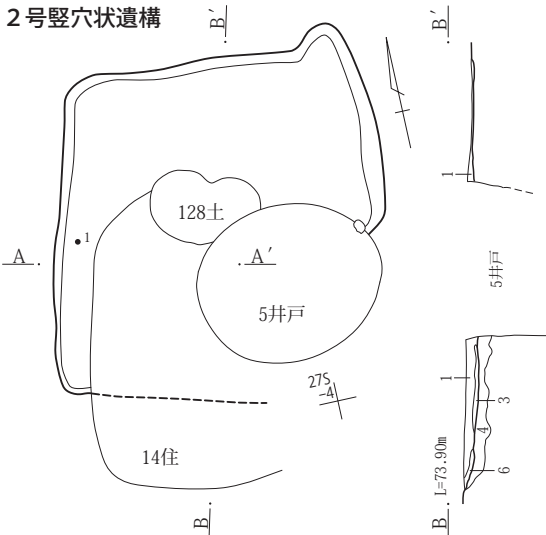
位置 17T-17グリッド。214号土坑、250・251号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形はやや乱れた方形で、遺構深度が浅く不明瞭である。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックが目立つ。規模は長軸2.25m短軸(1.43)m深さ9~14cmである。遺物は出土していない。

第40表 1区2・3号竪穴状遺構出土遺物

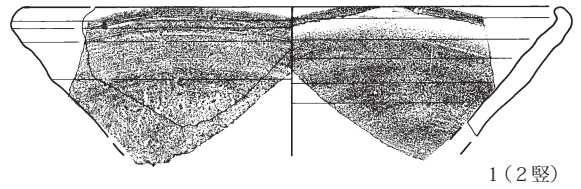
挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第83図 PL.133	1	在地系 土器	片口鉢	2竪穴	(28.4)	-	-	口縁部 片		にぶい 黄褐・ 黒	断面はにぶい黄褐色、器表は黒色。体部は直線的に開き、口縁端部付近は内側に屈曲するように突き出る。	中世。
第83図	2	在地系 土器	片口鉢	3竪穴 +15cm	(30.0)	-	-	1/8	A	灰褐	断面はにぶい橙色。器壁は薄く、体部は外反。口縁端部は内側に折り曲げるように突き出る。使用により体部内面下半の器表は摩滅し、上位は平滑となる。外面の器表はほとんど剥離。残存部にすり目はない。	中世。3と同一個体の可能性高い。
第83図	3	在地系 土器	片口鉢	3竪穴 +24cm	-	-	-	体部片	A	にぶい 褐・灰 黄褐	断面はにぶい橙色。器壁は薄く、体部は外反。使用により体部内面下半の器表は摩滅し、上位は平滑となる。残存部にすり目はない。	中世。2と同一個体の可能性高い。



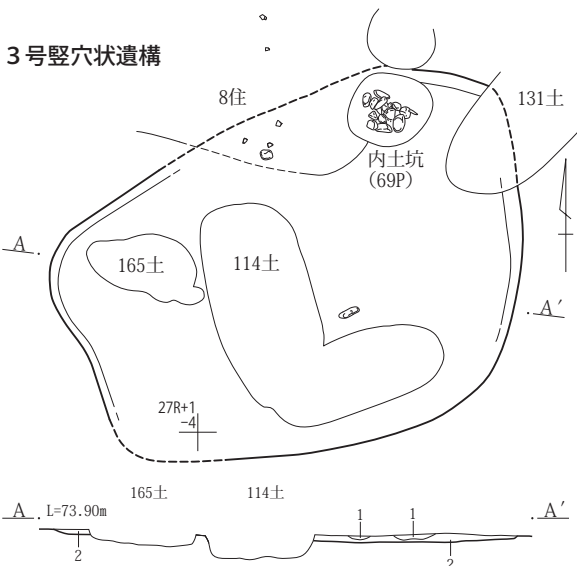
2号竪穴状遺構



- A. L=73.90m
- A' 2号竪穴状遺構
- 1 暗褐色土 浅間A軽石微量に含む。
  - 2 暗褐色土 ローム小ブロック少量に含む。
  - 3 暗褐色土 黄色粒子少量に含む。
  - 4 暗褐色土+ローム大ブロック 上面は固くしまる。貼り床なし。

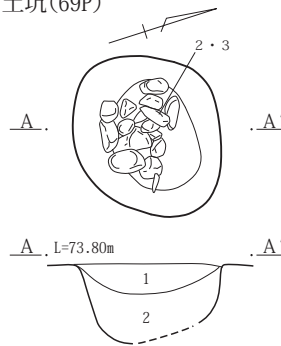


3号竪穴状遺構



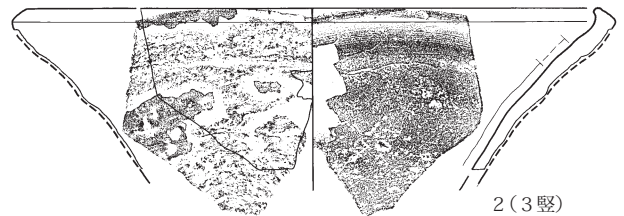
- A. L=73.90m
- A' 3号竪穴状遺構
- 1 黒褐色土 浅間B軽石多量に含む。
  - 2 黒褐色土 ローム大ブロックやや多量に含む。

内土坑(69P)

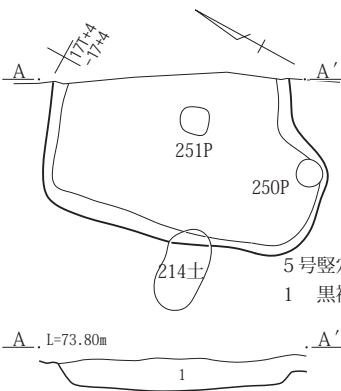


- 69号ピット
- 1 暗褐色土 しまる。
  - 2 暗褐色土 しまる。にぶい黄褐色土小ブロック多量に含む。

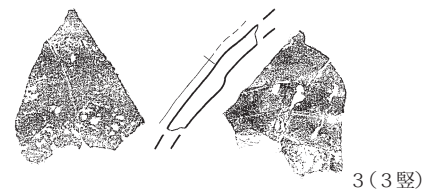
0 1:30 1m



5号竪穴状遺構



- A. L=73.80m
- A' 5号竪穴状遺構
- 1 黒褐色土 ローム小ブロック多量に含む。



0 1:4 10cm

第83図 1区2・3・5号竪穴状遺構と2・3号竪穴状遺構出土遺物

(2)土坑

土坑は51基が検出された。分布範囲は北西部に44基が集中し、残る7基は南東部に散在する。形態別による数量は以下のとおりである。

	全体	うち南東部
方形	3	
長方形	9	2
細長方形	9	
隅丸方形	2	
隅丸長方形	5	
隅丸細長方形	1	1
円形	6	2
楕円形	6	2
溝状	2	
不明・不詳	8	
計	51	7

南東部では2か所に分布が分かれ、それぞれに形態的な偏りがみられる。2号溝周辺は、2区1号屋敷とも関連するため、東壁寄りにやや遺構が集中する。土坑は楕円形の2基が東壁寄りでピットと混在する。2号溝と重複する2基はともに長方形で、区画境を選んで造られた可能性が高い。北に離れた175号土坑は円形である。

南東部から中央南部に位置する3基は、2・3号竪穴状遺構と関連が想定される。円形・楕円形が1基ずつで、隅丸細長方形の131号土坑は、3号竪穴状遺構と重複する。近世の同様な土坑群と混在するが、1基だけ主軸方位が異なり、埋没土などを考慮して中世に含めた。

北西部の44基は、形態的には複雑に混在するが、方形なものに関しては、長さや角が丸いか四角いかに関わらず、ほぼ同じような場所に繰り返し造られている。一方、円形・楕円形に関しては、位置はやや分散し、銭を伴うものが多い。人骨が出土したものはないが、銭5枚を伴う52号土坑は墓と考えた方が妥当であろう。したがって、銭は1枚だが、形態的に似る4・65・71号土坑も、土壌墓の可能性が高くなる。1号土坑は配石と焼人骨を伴う。様相は異なるが、周辺の2・3号火葬跡とあわせて扱うべき遺構であろう。なお、北西部に土坑が集中する状況は近世にも連続しており、一連の遺構群として評価される。

1号土坑(第84図、P L .27)

位置 28D-9グリッド。2号住居より後出。壁面が強

く焼土化する火葬跡とは形態的に異なり、焼土化が全く見られない。このため、土坑のままとする。平面形は長楕円形で、人頭大河原石4基が側壁に沿って並ぶ。石の内側から上面にかけて被熱しススが付着する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。石の輪郭に合わせて掘り方を検出したが不分明である。埋没土中に炭化物を多く含むが、焼土粒子・人骨はわずかである。出土した人骨は、鑑定の結果(第5節第1項)火葬骨であり、年齢・性別などは特定されていない。使用面の規模は長径99cm短径44cm深さ20cmで、掘り方規模は長径122cm短径80cmである。遺物は土師器杯椀類1片・壺甕類85片、須恵器杯椀類4片、近世国産陶器2片、その他土器類1片が出土するが混入とみられる。中世以降に比定される。

4号土坑(第84・87図、P L .27、第41表)

位置 28C-10グリッド。4号溝より後出。平面形の上面は楕円形で、底面は隅丸方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックが目立ち、人為埋没。規模は長径124cm短径92cm深さ35cmである。中央底面で銅銭(紹聖元寶：初鑄1094年)(87図1)が出土する。人骨などは出土していないが、土壌墓か。掲載遺物のほか、土師器壺甕類8片、須恵器杯椀類1片・壺甕類1片が出土している。出土遺物から中世に比定される。

7・23・24・36A・51・52・72号土坑(第84・87図、P L .27～29・134、第41表)

7号土坑 位置 28E-10・11グリッド。51号土坑より後出。平面形は細長方形。主軸方位はN-79°-E。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸210cm短軸73cm深さ25cmである。東端の埋没土上層で在地系土器皿(87図2)が出土する。掲載遺物のほか、土師器杯椀類1片・壺甕類11片、須恵器杯椀類1片・壺甕類2片、近世国産陶器1片、その他土器類1片が出土している。15世紀後半から16世紀前半に比定される。

23号土坑 位置 28D・E-10・11グリッド。21・24号土坑より後出。平面形は細長方形。主軸方位はN-77°-E。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックが目立つ均質な暗褐色土で人為埋没。規模は長軸196cm短軸69cm深さ24cmである。遺物は土師器杯椀類2片・壺甕類13片が出土するが混入とみられる。

24号土坑 位置 28E-10グリッド。23号土坑より前出

で、52号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は長方形。主軸方位はN-77°-E。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土は均質な暗褐色土で人為埋没。規模は長軸(100)cm短軸(56)cm深さ19cmである。遺物は出土していない。

**36A号土坑** 位置 28D-10グリッド。21号土坑より後出で、72号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は不明。壁はやや斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土は均質な暗褐色土で人為埋没か。規模は長径(133)cm短径(32)cm深さ13cmである。遺物は出土していない。

**51号土坑** 位置 28E-10グリッド。7号土坑より前出で、52号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は細長方形か。主軸方位はN-15°-E。壁はやや斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックが目立ち人為埋没。規模は長軸(190)cm短軸33cm深さ15cmである。遺物は土師器壺甕類1片が出土している。

**52号土坑** 位置 28E-11グリッド。24・51号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形はほぼ楕円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は凸凹する。埋没土はローム大ブロックを多量に含み人為埋没。規模は長径(86)cm短径(60)cm深さ21cmである。中央底面から中世の銅銭5点(6~10)が出土する。人骨などは出土していないが、土壌墓の可能性もある。掲載遺物のほか、土師器杯椀類2片・壺甕類2片、その他土器類1片が出土している。

**72号土坑** 位置 28D-11グリッド。36A号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸長方形。主軸方位はN-15°-W。壁はやや斜めに立ち上がる。底面は凸凹する。埋没土は均質な暗褐色土で人為埋没か。規模は長軸75cm短軸53cm深さ43cmである。遺物は出土していない。

**8・9・10・11・56号土坑**(第84・87図、P L.27・29・134、第41表)

**8号土坑** 位置 28D-10グリッド。9・11・21号土坑より後出。整った隅丸長方形。主軸方位はN-10°-W。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。一気に埋まっております人為埋没。規模は長軸160cm短軸79cm深さ34cmである。内面に油煙の付着した、在地系土器皿(87図3)のほか、非実測ながら不明板状鉄器、羽口片?が出土する(第41表)。掲載遺物のほか、土師器杯椀類8片・壺甕類44片、須恵器杯椀類7片(9~11土坑含む)、近世国産陶器1片・在地系土器2片(9~11土坑含む)、が出土

している。15世紀後半に比定される。前出する9号土坑と出土遺物が近似するため、そこからの混入も考えられる。土坑の性格は不明である。

**9号土坑** 位置 28D-10グリッド。8号土坑より前出で、10号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形はほぼ方形で、底面で判明のため不明確。主軸方位はN-90°。壁は斜めに立ち上がる。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸104cm短軸(55)cm深さ29cmである。在地系土器皿(87図4)のほか、非実測ながら不明板状鉄器、羽口片?(第41表)が出土する。掲載遺物のほか、土師器杯椀類3片・壺甕類7片、須恵器杯椀類7片・壺甕類1片が出土している。土坑の性格は不明である。

**10号土坑** 位置 28D-10グリッド。8・9号土坑より前出。平面形はほぼ方形。主軸方位はN-90°。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸176cm短軸(141)cm深さ22cmである。時期不詳土器1片が出土している。

**11号土坑** 位置 28D-10グリッド。8号土坑より前出で、187号土坑と重複するが新旧関係未確認。平面形は丸みを持つが不詳。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没状況不詳。規模は長径(125)cm短径(50)cm深さ19cmである。遺物は土師器壺甕類5片、須恵器杯椀類2片が出土するが混入とみられる。

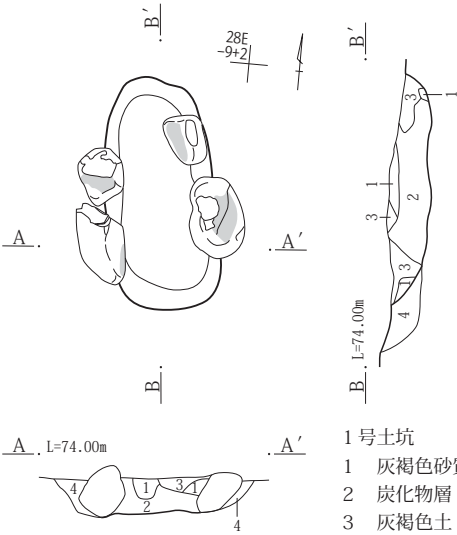
**56号土坑** 位置 28D-10グリッド。21号土坑より前出。東半分が重複により消滅するが、不整形か。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は凸凹する。埋没土はロームブロックが目立ち人為埋没。規模は長径(83)cm短径(52)cm深さ32cmである。遺物は出土していない。

**13・38~40・53・54・60・63~65・159号土坑**(第85・87図、P L.27~30・134、第41表)

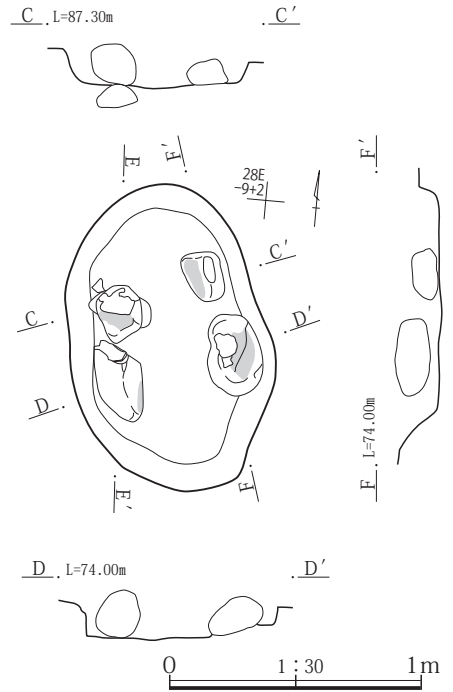
**13号土坑** 位置 28E-11グリッド。38・63号土坑より後出で、60・64号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸方形。主軸方位はN-9°-W。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸101cm短軸78cm深さ37cmである。遺物は土師器杯椀類1片・壺甕類1片、須恵器杯椀類1片、近世国産陶器2片・同在地系土器1片が出土している。出土遺物から近世に比定される。

**38号土坑** 位置 28E-11グリッド。13・39号土坑より前出で、63・64・159号土坑と重複するが新旧関係不明。

1号土坑



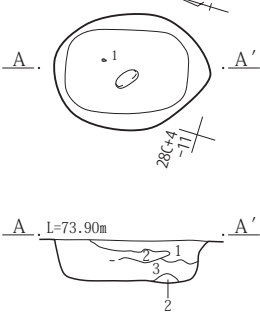
掘り方



1号土坑

- 1 灰褐色砂質土 炭化物粒子微量に含む。
- 2 炭化物層 白色粒子(骨か)・焼土粒子微量に含む。
- 3 灰褐色土 炭化物多量に含む。
- 4 暗褐色土 炭化物粒子少量、白色粒子微量に含む。

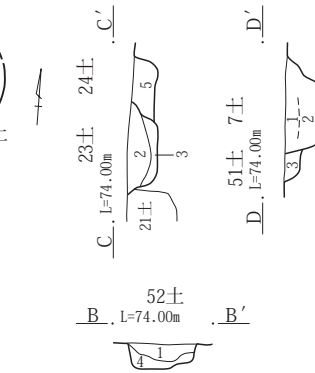
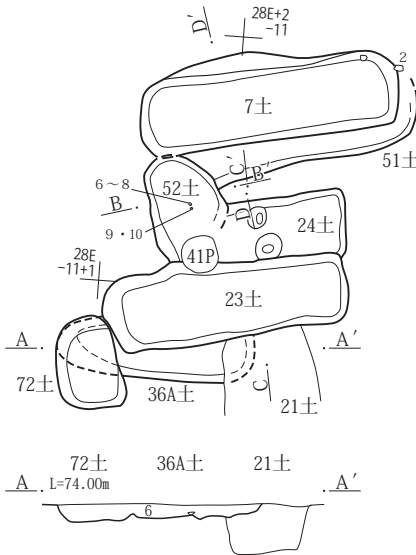
4号土坑



4号土坑

- 1 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 2 にぶい黄褐色土 やや砂質。
- 3 黒褐色土 小礫やや多量に含む。

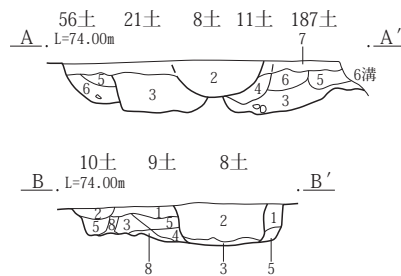
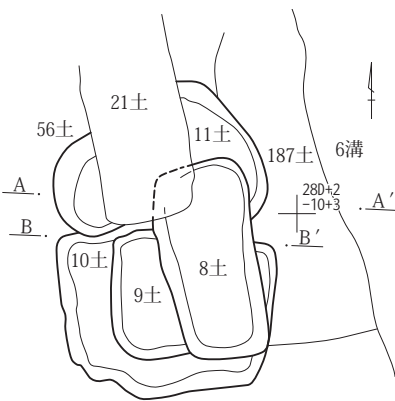
7・23・24・36A・51・52・72号土坑



7・23・24・36A・51・52・72号土坑

- 1 暗褐色土 ややしまらない。ローム小ブロック少量に含む。
- 2 暗褐色土 ややしまらない。ローム大ブロックやや多量に含む。
- 3 暗褐色土 黄色粒子少量に含む。
- 4 黒褐色土 やや粘性あり。ローム大ブロック少量に含む。
- 5 暗褐色土 ローム粒子微量に含む。
- 6 暗褐色土 ローム粒子少量、炭化物粒子微量に含む。

8・9・10・11・56号土坑



8・9・10・11・56号土坑

- 1 暗褐色土 褐色粒子微量に含む。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロック微量に含む。
- 3 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
- 4 黒褐色土 ローム小ブロック少量に含む。
- 5 暗褐色土 ローム小ブロックごく多量に含む。
- 6 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 7 暗褐色土 浅間A軽石微量に含む。
- 8 暗褐色土+ローム大ブロック

第84図 1区土坑(1)

平面形は細長方形。主軸方位はN-4°-W。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸251cm短軸74cm深さ47cmである。遺物は須恵器杯碗類1片、近世国産陶器2片が出土するが混入とみられる。

**39号土坑** 位置 28E-11グリッド。38号土坑より後出で、40号土坑より前出。平面形はほぼ長方形だが、西側半分は調査区域外となる。主軸方位はN-75°-E。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸(114)cm短軸76cm深さ32cmである。(87図5)の須恵器甕が出土するが混入とみられる。出土遺物から近世に比定される。

**40号土坑** 位置 28E-11グリッド。39号土坑より後出。西側半分が調査区域外となり平面形不明。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没状況不詳。規模は長径(28)cm短径(25)cm深さ23cmである。遺物は出土していない。

**53号土坑** 位置 28E-11グリッド。54号土坑、1号柱穴列P4より前出。平面形は細長方形だが、平面図は遺漏のため写真により推定復元。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸(180)cm短軸(76)cm深さ17cmである。遺物は出土していない。

**54号土坑** 位置 28E-11グリッド。53号土坑より後出。平面形は重複により未確認だが細長方形か。平面図は遺漏のため写真により推定復元。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦か。遺構深度は浅いが人為埋没か。規模は長軸(103)cm短軸(15)cm深さ31cmである。遺物は出土していない。

**60号土坑** 位置 28E-11グリッド。13号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸長方形。主軸方位はN-10°-W。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没状況不詳。規模は長軸(115)cm短軸69cm深さ13cmである。遺物は土師器壺甕類7片、近世国産陶器1片・同在地系土器1片が出土している。出土遺物から近世に比定される。

**63号土坑** 位置 28E-11グリッド。13号土坑より前出で、38・65・159号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は長方形。主軸方位はN-76°-E。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックやや目立ち人為埋没か。規模は長軸(80)cm短軸76cm深さ

28cmである。遺物は土師器壺甕類1片が出土するが混入とみられる。

**64号土坑** 位置 28E-11グリッド。13・38号土坑と重複するが新旧関係不明。東側半分が不明ながら楕円形か。壁は斜めに立ち上がる。底面は凸凹する。埋没状況不詳。規模は長径56cm短径(41)cm深さ16cmである。遺物は近世国産陶器1片が出土している。出土遺物から近世に比定される。

**65号土坑** 位置 28E-10グリッド。63号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形はほぼ円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックがやや目立ち人為埋没。規模は長径79cm短径73cm深さ32cmである。北壁際で銅銭(永楽通宝：初铸1408年)(87図11)が出土する。人骨などは出土していないが、土壌墓の可能性もある。出土遺物から中世に比定される。

**159号土坑** 位置 28E-11グリッド。1号柱穴列P3より後出で、38・63号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は整った方形だが、平面図は遺漏のため写真により推定復元。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸(138)cm短軸(103)cm深さ3cmである。遺物は近世国産陶器1片が出土している。出土遺物から近世に比定される。

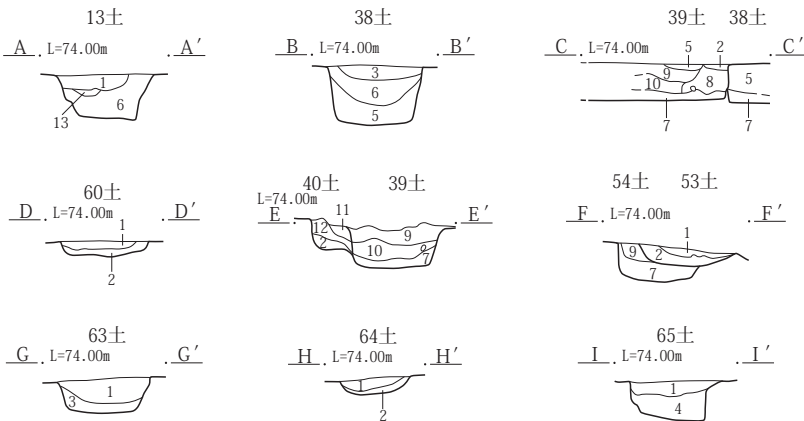
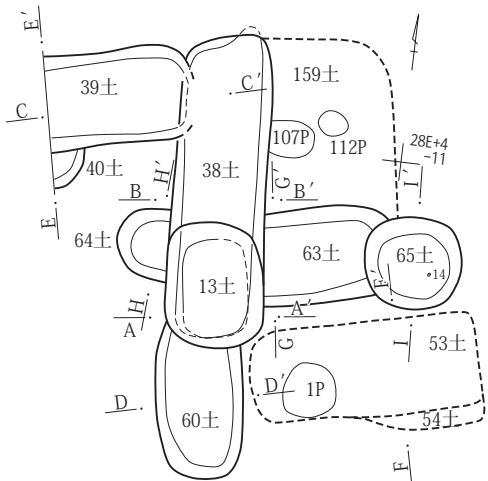
**14号土坑**(第85図、P.L.27)

位置 28E・F-10グリッド。19・22号溝と重複するが新旧関係不明。平面形は長方形。主軸方位はN-87°-E。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸198cm短軸81cm深さ19cmである。遺物は土師器杯碗類5片・壺甕類1片、須恵器壺甕類1片、近世国産陶器1片が出土している。状況や形態から中世に比定されるが、出土遺物から近世の可能性も残る。

**18号土坑**(第85図、P.L.28)

位置 28G-11グリッド。4号住居より後出。平面形はほぼ隅丸方形で、4号住居との重複部分は検出できず。主軸方位はN-82°-E。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸135cm短軸115cm深さ16cmである。遺物は土師器杯碗類7片・壺甕類10片、須恵器杯碗類3片・壺甕類2片が出土するが混入とみられる。

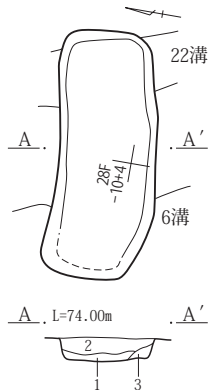
13・38~40・53・54・60・63~65号土坑



13・38~40・53・54・60・63~65号土坑

- 1 暗褐色土 黄色粒子微量に含む。
- 2 暗褐色土 黄色粒子少量に含む。
- 3 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 4 暗褐色土 均質。
- 5 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
- 6 暗褐色土 ローム小ブロック多量、ローム大ブロック少量に含む。
- 7 黒褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
- 8 黒褐色土 ローム大ブロック少量に含む。
- 9 黒褐色土 ローム小ブロック少量に含む。
- 10 黒褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 11 灰褐色土 やや砂質。浅間A軽石少量に含む。
- 12 灰褐色土 やや砂質。浅間A軽石少量、黄色粒子少量に含む。
- 13 灰褐色粘質土 ややしまる。

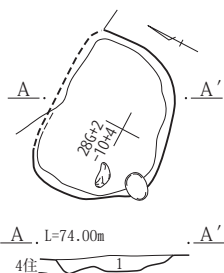
14号土坑



14号土坑

- 1 暗褐色土 褐色粒子多量に含む。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 3 暗褐色土 褐色粒子少量に含む。

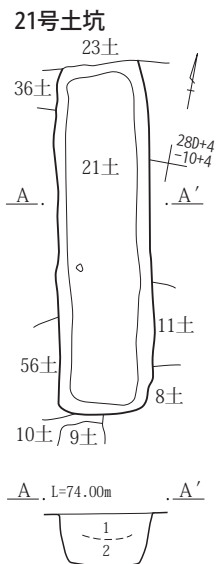
18号土坑



18号土坑

- 1 暗褐色土 ローム粒子微量に含む。

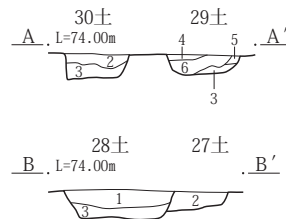
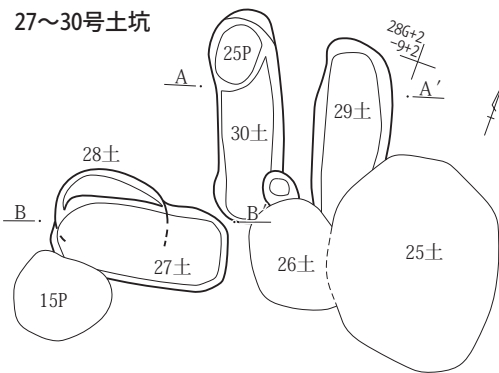
21号土坑



21号土坑

- 1 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
- 2 黒褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。

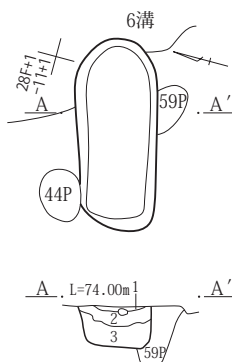
27~30号土坑



27~30号土坑

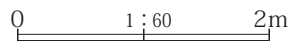
- 1 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロック少量に含む。
- 3 黒褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
- 4 灰褐色土 浅間A軽石微量に含む。
- 5 黒褐色土 ローム小ブロック微量に含む。
- 6 灰褐色土 浅間A軽石少量に含む。

55号土坑



55号土坑

- 1 暗褐色土 黄色粒子少量に含む。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 3 暗褐色土 ローム小ブロック少量に含む。



第85図 1区土坑(2)

**21号土坑(第85図、P L .28)**

**位置** 28D-9・10グリッド。8・23・36号土坑より前出で、56号土坑より後出。11号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は細長方形。主軸方位はN-10°-W。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸(279)cm短軸77cm深さ42cmである。遺物は土師器壺甕類3片、須恵器杯椀類1片・壺甕類1片、中世在地系土器1片が出土している。出土遺物から中世に比定される。

**27～30号土坑(第85図、P L .28)**

**27号土坑 位置** 28F・G-9グリッド。28号土坑より前出。15号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は長方形。主軸方位はN-76°-E。壁はやや斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックをやや多量に含み人為埋没。規模は長軸141cm短軸69cm深さ15cmである。遺物は出土していない。

**28号土坑 位置** 28G-9グリッド。27号土坑より後出。平面形は推定ほぼ円形。壁はやや斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長径93cm短径73cm深さ23cmである。遺物は出土していない。

**29号土坑 位置** 28G-9グリッド。25・26号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形はほぼ細長方形。主軸方位はN-17°-W。壁はやや斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックをやや多量に含み人為埋没で、白色軽石(As-A)含む。規模は長軸150cm短軸61cm深さ16cmである。土師器壺甕類4片、須恵器杯椀類1片が出土するが混入とみられる。

**30号土坑 位置** 28G-9グリッド。26号土坑より前出。平面形はほぼ細長方形。主軸方位はN-12°-W。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没状況不詳。規模は長軸(170)cm短軸52cm深さ20cmである。遺物は土師器杯椀類1片・壺甕類1片、須恵器杯椀類1片が出土するが混入とみられる。

**55号土坑(第85図、P L .29)**

**位置** 28F-11グリッド。59号ピット・6号溝より後出。平面形はほぼ隅丸長方形。主軸方位はN-75°-E。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックをやや多量に含み人為埋没。規模は長軸153cm短軸66cm深さ34cmである。土師器壺甕類4片が出土する

が混入とみられる。

**71号土坑(第86・87図、P L .42・134、第41表)**

**位置** 28E-10グリッド。1号竪穴状遺構より前出。平面形は隅丸長方形。主軸方位はN-9°-W。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸116cm短軸78cm深さ41cmである。埋没土から銅銭(永楽通宝：初铸1408年)(87図12)が出土する。人骨などは出土していないが、土壙墓の可能性はある。

**108号土坑(第86図、P L .30)**

**位置** 28E-10グリッド。1号竪穴状遺構、6号溝より後出。平面形不詳。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没状況不詳。規模は長径(80)cm短径73cm深さ18cmである。遺物は須恵器杯椀類1片・壺甕類1片、近現代陶磁器1片が出土している。

**109号土坑(第86図、P L .30)**

**位置** 28E-10グリッド。1号竪穴状遺構、77号ピット、6号溝、1号集石遺構と重複するが新旧関係不明。平面形不詳。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没状況不詳。規模は長径(108)cm短径52cm深さ21cmである。遺物は出土していない。

**129号土坑(第86図、P L .30)**

**位置** 27R-2グリッド。平面形はほぼ円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没状況不詳。規模は長径67cm短径58cm深さ15cmである。遺物は土師器壺甕類9片、須恵器杯椀類1片が出土するが混入とみられる。

**131号土坑(第86・87図、P L .30、第41表)**

**位置** 27R-3グリッド。102号ピットより前出で、89・90・93・103号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸細長方形。主軸方位はN-39°-E。壁はやや斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。埋没状況不詳。埋没土から在地系土器鉢(87図13)が出土する。掲載遺物のほか、須恵器杯椀類1片、近世国産陶器2片が出土している。規模は長軸227cm短軸82cm深さ7cmである。出土遺物から中世に比定されるが、近世の可能性も残る。

**165号土坑(第86・87図、P L .30・31、第41表)**

**位置** 27R-4グリッド。3号竪穴状遺構と重複して、西北部に位置する。内部土坑の可能性もある。平面形は不整形円形。土坑2基の重複か。壁は斜めに立ち上がる。

底面はやや凸凹する。埋没状況不詳。規模は長径99cm短径50cm深さ13cmである。東壁際から羽口片(87図14)が出土する。埋没土上位に白色軽石(As-A)を含むが、重複部分とも考えられる。

175号土坑(第86図、P L .31)

**位置** 17S-19グリッド。平面形はほぼ円形。壁はやや斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックをやや多量に含み人為埋没で、白色軽石(As-B)をやや多量に含む。規模は長径96cm短径82cm深さ15cmである。遺物は出土していない。

178・179・189・190号土坑(第86図、P L .31)

**178号土坑 位置** 28F-10グリッド。11号溝より前出で、完掘状況から189号土坑と分割した。平面形は溝状。壁はややオーバーハングする。底面は凸凹し、段差を持つ。埋没土はロームブロックを多量に含むが、埋没状況不詳。規模は長径151cm短径57cm深さ54cmである。遺物は出土していない。

**179号土坑 位置** 28E・F-10グリッド。189号土坑、11・22号溝より前出で、128号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は不整長方形。壁はやや斜めに立ち上がる。底面は凸凹する。埋没状況不詳。規模は長軸197cm短軸87cm深さ54cmである。遺物は土師器壺甕類6片、須恵器杯椀類5片・壺甕類1片、灰釉陶器1片が出土するが混入とみられる。

**189号土坑 位置** 28E-10グリッド。179号土坑より後出で、完掘状況から178・190号土坑と分割した。平面形不詳。壁は斜めに立ち上がる。底面は凸凹する。埋没状況不詳。規模は長径(90)cm短径(82)cm深さ48cmである。遺物は土師器壺甕類2片が出土するが混入とみられる。

**190号土坑 位置** 28E-10グリッド。完掘状況から179・189号土坑と分割した。平面形不詳。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は凸凹する。埋没状況不詳。規模は長径(88)cm短径(60)cm深さ不明である。遺物は出土していない。

181号土坑(第86図、P L .31)

**位置** 17S-19グリッド。平面形は長方形。主軸方位はN-33°-W。底面は平坦。埋没土の底面近くは黒色土が断続的に水平に堆積し、開口時期があり、その後埋められたものとみられる。規模は長軸127cm短軸105cm深さ15cmである。遺物は出土していない。

182号土坑(第86図、P L .31)

**位置** 17Q-19グリッド。73号溝と重複するが、残存する深さが浅く、新旧関係不明。平面形は長方形。主軸方位はN-24°-W。壁は緩やかに立ち上がる。底面は凸凹する。埋没土はロームブロックが多く混じり、人為埋没。規模は長軸(126)cm短軸106cm深さ25cmである。遺物は土師器壺甕類2片が出土するが混入とみられる。

184号土坑(第86図、P L .31)

**位置** 28E-10グリッド。1号竪穴状遺構、2号火葬跡より前出で、6号溝と重複するが新旧関係不明。平面形は溝状。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没状況不詳。規模は長軸108cm短軸59cm深さ26cmである。遺物は出土していない。

192号土坑(第86図、P L .31)

**位置** 28D-10グリッド。11号溝と重複するが新旧関係不明。平面形は不整円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没状況不詳。規模は長径49cm短径43cm深さ24cmである。遺物は出土していない。

193号土坑(第87図、P L .31)

**位置** 28D-10グリッド。10号溝と重複するが新旧関係不明。重複により西側は確認できなかったが、平面形は推定長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没か。規模は長軸62cm短軸58cm深さ22cmである。遺物は出土していない。

213号土坑(第87図)

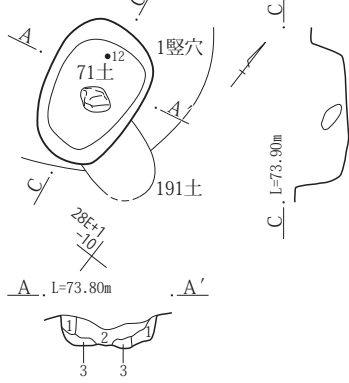
**位置** 17T-18グリッド。267号ピットより前出。平面形は楕円形。断面はピット状で、底面は丸く小さい。埋没状況不詳。規模は長径50cm短径37cm深さ55cmである。遺物は出土していない。

214号土坑(第87図)

**位置** 17T-17グリッド。5号竪穴状遺構と重複するが新旧関係不明。平面形は長楕円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没状況不詳。規模は長径68cm短径36cm深さ56cmである。調査担当は墓と推測する。遺物は出土していない。

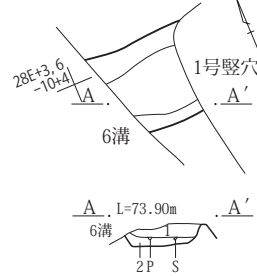


71号土坑



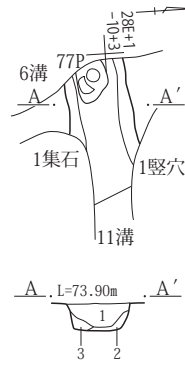
- 71号土坑  
 1 暗褐色土+ローム大ブロック  
 2 暗褐色土 ローム小ブロックごく多量に含む。  
 3 黒褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。

108号土坑



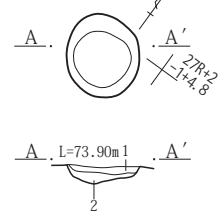
- 108号土坑  
 1 暗褐色土 黄色粒子やや多量、小礫少量に含む。  
 2 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。

109号土坑



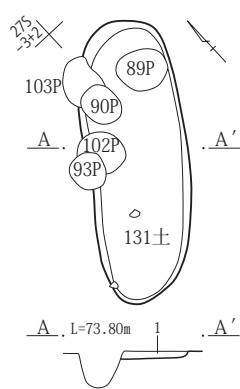
- 109号土坑  
 1 暗褐色土 黄色粒子少量に含む。  
 2 暗褐色土 黄色粒子多量に含む。  
 3 暗褐色土 黄色粒子微量に含む。

129号土坑



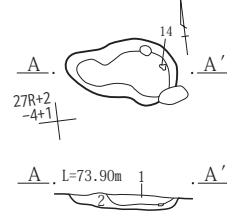
- 129号土坑  
 1 黒褐色土 やや砂質。黄色粒子少量に含む。  
 2 黒褐色土 やや砂質。ローム大ブロック少量に含む。黒色土底面に水平堆積。

131号土坑



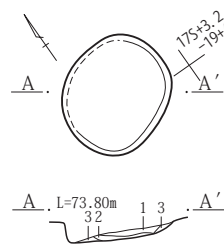
- 131号土坑  
 1 暗褐色土 白色粒子少量に含む。

165号土坑



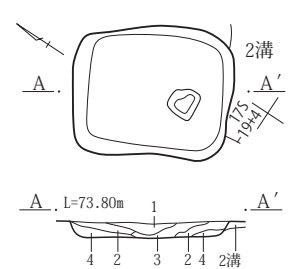
- 165号土坑  
 1 暗褐色土 浅間A軽石少量に含む。  
 2 暗褐色土 ローム大ブロック多量に含む。

175号土坑



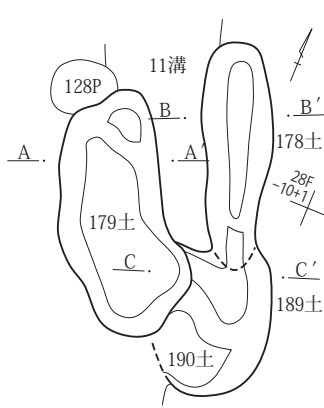
- 175号土坑  
 1 黒褐色砂質土 浅間B軽石やや多量、ローム小ブロック少量に含む。  
 2 黒褐色砂質土 浅間B軽石やや多量に含む。  
 3 黒褐色砂質土 ローム大ブロック多量に含む。

181号土坑

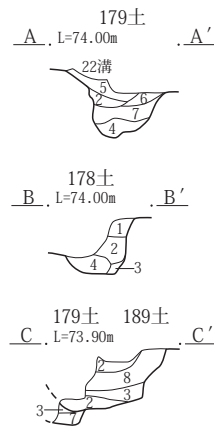


- 181号土坑  
 1 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。  
 2 暗褐色土 黄色粒子少量に含む。  
 3 暗褐色土 黄色粒子多量に含む。  
 4 黒褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。

178・179・189・190号土坑

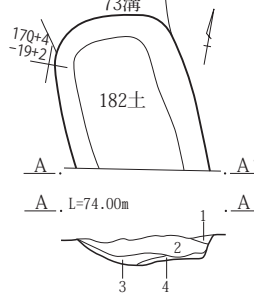


- 178・179・189・190号土坑  
 1 暗褐色土 白色粒子少量に含む。  
 2 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。  
 3 暗褐色土 ローム大ブロック多量に含む。  
 4 黒褐色粘質土 ローム大ブロック多量に含む。  
 5 暗褐色土 浅間B軽石少量に含む。  
 6 黒褐色粘質土 ローム小ブロックごく多量に含む。  
 7 黒褐色粘質土 ローム大ブロック少量に含む。  
 8 灰褐色土 ローム大ブロック少量に含む。

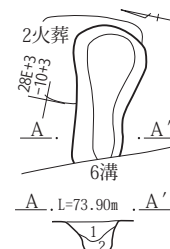


- 179号土坑  
 1 暗褐色土 均質。  
 2 黒褐色土 ローム小ブロック多量、浅間B軽石少量に含む。  
 3 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。  
 4 暗褐色土 ローム大ブロック少量に含む。

182号土坑

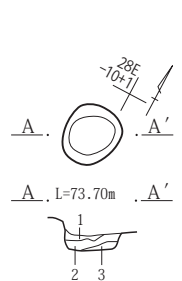


184号土坑

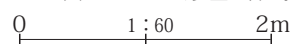


- 184号土坑  
 1 暗褐色土 黄色粒子少量に含む。  
 2 黒褐色土 黄色粒子少量に含む。

192号土坑

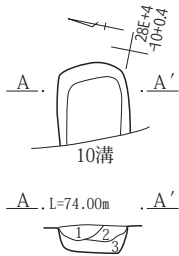


- 192号土坑  
 1 黒褐色土 ローム大ブロック少量に含む。  
 2 黒褐色土 ローム大ブロック多量に含む。  
 3 黒褐色土 ローム大ブロックごく多量に含む。



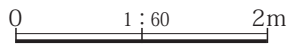
第86図 1区土坑(3)

193号土坑

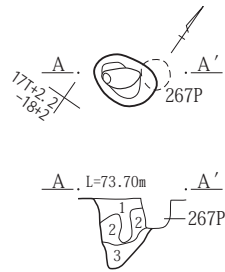


193号土坑

- 1 暗褐色土 黄色粒子少量に含む。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 3 黒褐色土 ローム小ブロックやや多量、ローム大ブロックやや多量に含む。



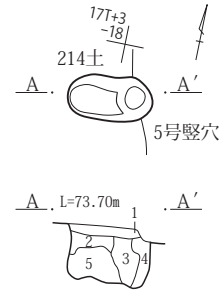
213号土坑



213号土坑

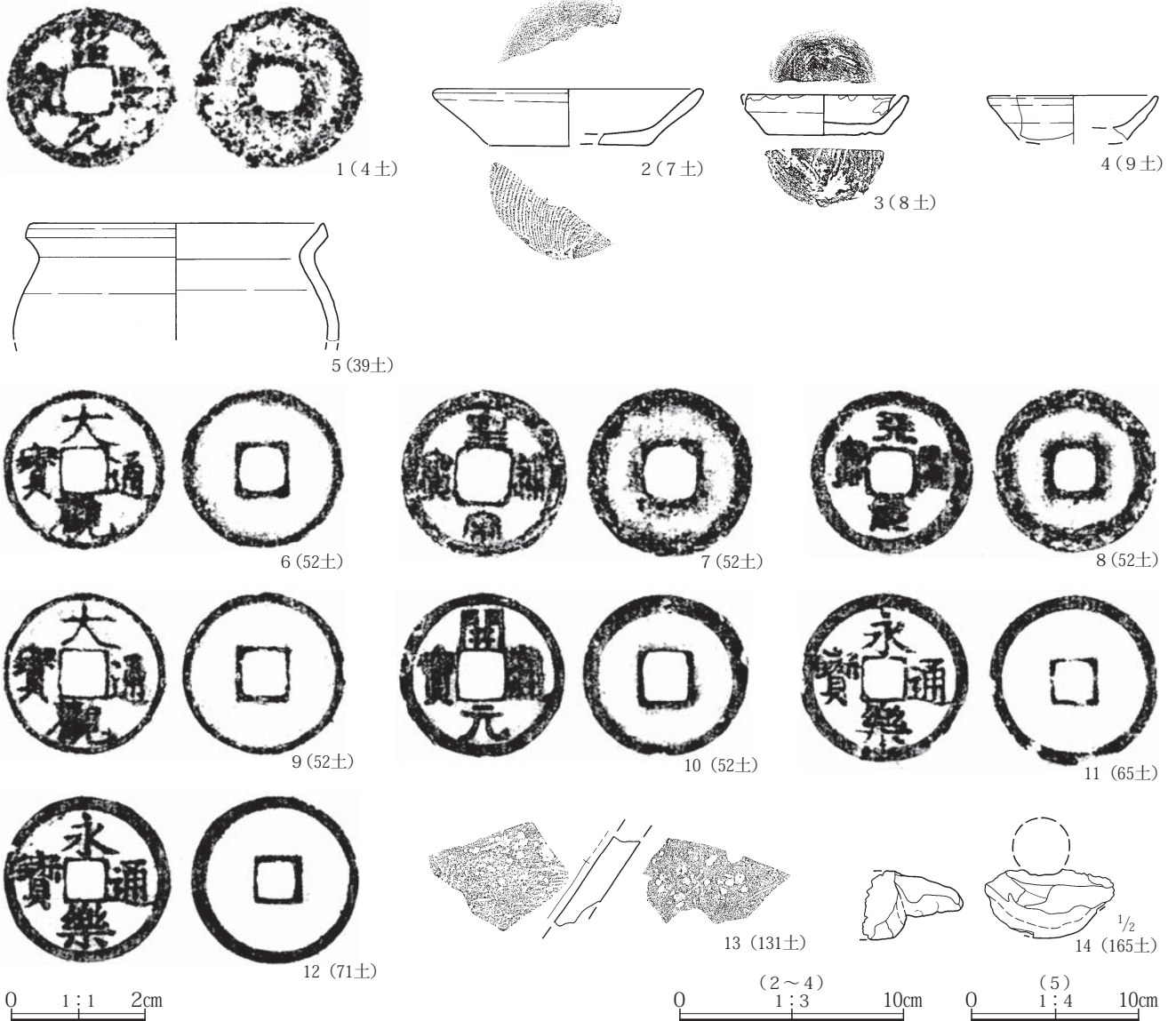
- 1 黒褐色土 しまり粘性ない。ローム小ブロック多量に含む。
- 2 黒色土 しまり粘性あり。ローム小ブロック少量に含む。
- 3 黒褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。

214号土坑



214号土坑

- 1 灰褐色土 しまりなく粘性ない。ローム小ブロック少量に含む。
- 2 灰褐色土
- 3 黒褐色土 ローム小ブロック少量に含む。
- 4 黒褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 5 黄褐色土 しまりない。黒色土大ブロック少量に含む。



第87図 1区土坑(4)と出土遺物

第41表 1区4・7～9・39・52・65・71・131・165号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種 器 類 種	出土位置	径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	残 存	形・成調整等		備 考	
第87図	1	銅銭 紹聖元寶	4土 底直上	-	-	-	-	完形	北宋、1094年初鑄。劣化著しく割れる。裏面に錆多く付着。			
挿図 PL.No.	No.	種 別	器 形	出 土 位 置	口 径 (cm)	底 径 (cm)	器 高 (cm)	残 存	胎 土	色 調	形・成調整等	備 考
第87図 PL.134	2	在地系 土器	皿	7土	(11.7)	(7.0)	2.5	1/3	B	明黄褐	内面の底部と体部境は明瞭。体部は外反。口縁部は肥厚し、外面は内湾状に見える。底部左回転糸切無調整。	15世紀後半から16世紀前半。
第87図 PL.134	3	在地系 土器	小皿	8土上 層	(7.4)	(5.3)	1.8	1/2	B	浅黄	底部内面は撫で。底部左回転糸切無調整。口縁端部付近から内面に油煙付着。	15世紀後半。
第87図	4	在地系 土器	皿	9土	(7.5)	-	-	口縁部 片	A	黒褐	体部から口縁部やや内湾。	中世。
挿図 PL.No.	No.	種 器 類	出 土 位 置	径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	残 存	形・成調整等		備 考	
-	15	鉄製品	9土	2.1	2.5	0.6	6.68		折り返され袋状。表裏に草木類が付着。		非実測	
-	16	鉄類 羽口?	8土	2.1	1.1	0.7	1.12		青銅色で発泡による空隙顕著。		非実測	
-	17	鉄製品 不明板状鉄 器	8土	2.2	0.8	0.2	1.08		3片に分かれる。折り返しあり。表裏に草木類が付着。		非実測	
-	18	鉄類 羽口?	9土	1.7	1.1	0.8	1.42		青銅色、赤褐色で発泡による空隙顕著。		非実測	
挿図 PL.No.	No.	種 器 類	出 土 位 置 残 存 率	計 測 値			胎 土/ 焼 成/ 色 調		成 形 ・ 整 形 の 特 徴		摘 要	
第87図 PL.134	5	須恵器 甕	39土坑 口縁部～胴部上 位片	口 13.0			細砂粒/還元焰/灰		ロクロ整形、回転方向不明。			
挿図 PL.No.	No.	種 器 類	出 土 位 置	径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	残 存	形・成調整等		備 考	
第87図 PL.134	6	銅銭 大観通寶	52土 +1cm	24.20	24.30	1.14～ 1.32	2.72	完形	北宋。1107年初鑄。			
第87図 PL.134	7	銅銭 皇宋通寶	52土 +1cm	24.60	24.84	1.17～ 1.30	2.98	完形	篆書。北宋、1038年初鑄。裏面錆付着。			
第87図 PL.134	8	銅銭 天聖元寶	52土 +1cm	24.54	24.55	1.38～ 1.49	3.60	完形	篆書。北宋、1023年初鑄。裏面錆多く付着。			
第87図 PL.134	9	銅銭 大観通寶	52土 底直上	24.13	24.32	1.14～ 1.27	2.35	完形	北宋。1107年初鑄。劣化やや進む。			
第87図 PL.134	10	銅銭 開元通寶	52土 底直上	24.22	24.51	0.81～ 1.03	2.47	完形	唐、621年初鑄。			
第87図 PL.134	11	銅銭 永樂通寶	65土	25.56	24.91	1.36～ 1.52	2.55	完形	明、1408年初鑄。鑄不足部分からの劣化であろうか、楽字部分に穴があく。			
第87図 PL.134	12	銅銭 永樂通寶	71土 +3cm	24.86	24.73	1.33～ 1.43	2.58	完形	明、1408年初鑄。			
挿図 PL.No.	No.	種 別	器 形	出 土 位 置	口 径 (cm)	底 径 (cm)	器 高 (cm)	残 存	胎 土	色 調	形・成調整等	備 考
第87図	13	在地系 土器	片口鉢	131土	-	-	-	体部片	A	にぶい 橙	下部の断面中央は灰色。断面から器表付近はにぶい橙色。器表は灰色から暗灰色。使用により、内面下半の器表は摩滅す、上部は平滑。	中世。
挿図 PL.No.	No.	器 種	出 土 位 置	長	幅	厚	重さ(g)	特 徴 な ど		備 考		
第87図	14	羽口	165土 +6cm	-	-	-	36.33	先端部の破片で、内部が発泡したガラス質の融解物が付着している。				

(3)井戸

井戸は4基検出され、分布は2か所に分かれる。5号井戸は2号竪穴状遺構と重複し、3号井戸も南方近くに位置する。これらは生活用水として第一に位置づけられる。一方、6・7号井戸は調査区中央南西寄りに隣接し、深さも1m強と近似する。通年での湧水は考えにくく、形態的に井戸に分類されるが、機能上は貯水槽なども考慮される。

3号井戸(第88図、P L.32)

位置 17Q-2・3グリッド。重複 なし。

確認面形態と規模 南半分が調査区域外となるが、ほぼ円形か。長径130cm短径(68)cm。

底面形態と規模 不明 断面形 断面形は上位がやや開く円筒形。深さ182cm以上。大型車通行の多い市道に近接し、崩落の危険から完掘していない。

埋没状況 黒褐色土に黄褐色土が水平に混入し、人為埋没。遺物 調査段階で在地土器鉢の口縁部片1点(口唇部内側が張り出す)が確認面下数十cm付近で出土したが、作業中所在不明となった。その他土師器杯碗類1片・壺甕類5片、須恵器杯碗類3片が出土している。

時期 出土遺物から中世に比定される。

5号井戸(第88図、P L.32)

位置 27S-3・4グリッド。重複 14号住居跡より前出で、2号竪穴状遺構と重複するが新旧関係不明。

確認面形態と規模 楕円形。長径148cm短径125cm。

底面形態と規模 不整円形。長径68cm短径64cm。調査は冬季であり、湧水はなかった。

断面形 上位がやや開く円筒形。深さ224cm。

埋没状況 砂質土を多く含み人為埋没。

遺物 土師器壺甕類24片、須恵器杯碗類3片・壺甕類2片が出土するが混入とみられる。

時期 状況や埋没土から中世以降に比定される。

6号井戸(第88図、P L.32、第42表)

位置 27S-7グリッド。

重複 12号住居より後出。

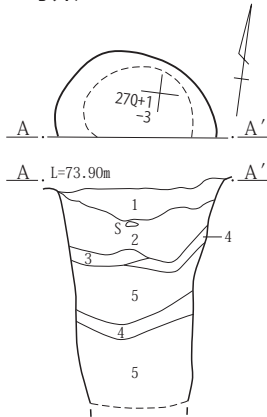
確認面形態と規模 ほぼ円形。長径175cm短径159cm。

底面形態と規模 ほぼ円形。長径122cm短径86cm。

断面形 稜を持って上位が大きく開く円筒形。深さ1.2m。壁面は一部砂層があり、その周辺がオーバーハングして外側へ張り出す。深さから通年での湧水は考えにくい。

埋没状況 不詳。確認面下数cmで大円礫が集中して投棄

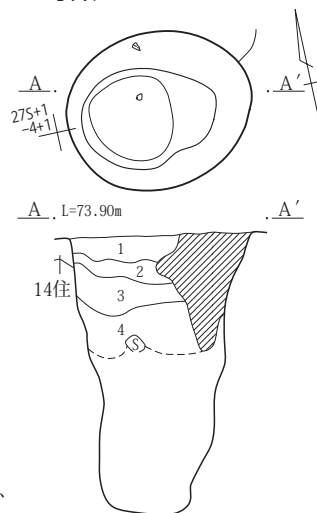
3号井戸



3号井戸

- 1 灰褐色砂質土 小礫やや多量、炭化物粒子微量に含む。
- 2 黒褐色土 やや砂質。黄色粒子少量、白色粒子微量に含む。
- 3 黄褐色土
- 4 黒褐色土+黄褐色土
- 5 黒褐色土 しまりない。黄色粒子微量に含む。

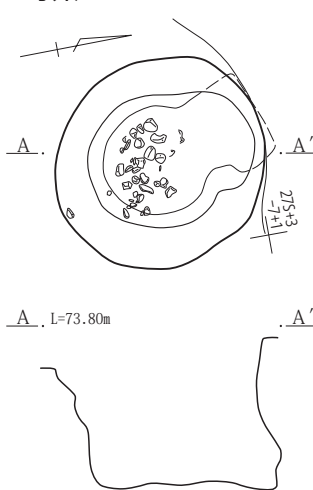
5号井戸



5号井戸

- 1 暗褐色土 浅間B軽石少量に含む。
- 2 黒褐色土 浅間B軽石少量に含む。
- 3 黒褐色砂質土 褐色土大ブロック多量に含む。
- 4 黒褐色砂質土 均質。

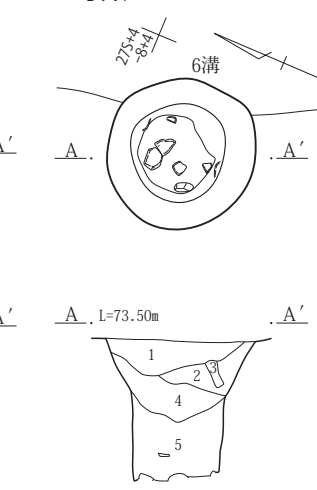
6号井戸



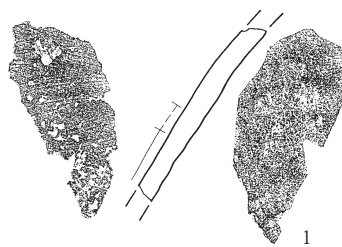
7号井戸

- 1 暗褐色土 軟らかくしまりよい。粘性あり。焼土粒子・炭化物粒子・黄白色粘土ブロック含む。
- 2 暗褐色土 軟らかくしまりよい。粘性あり。黄白色粘土ブロック含む。
- 3 暗褐色土 非常に軟らかく粘性あり。
- 4 暗褐色土 非常に軟らかく粘性あり。黄白色粘土ブロック多量、炭化物含む。
- 5 黒褐色土 非常に軟らかく粘性あり。黄白色粘土ブロック多量に含む。

7号井戸



0 1:60 2m



0 1:4 10cm

第88図 1区3・5~7号井戸と6号井戸出土遺物

第42表 1区6号井戸出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第88図	1	在地系 土器	片口鉢		-	-	-	体部片	B	灰	断面外側半分は褐色で他は灰色。還元気味。器壁は薄い。使用により内面下位の器表は摩滅し中位は平滑となる。	中世。

される。埋没時に井筒が残っていた可能性もある。

**遺物** 埋没土から1の在地系土器鉢が出土する。掲載遺物のほか、土師器杯碗類4片・壺甕類41片、須恵器杯碗類16片・壺甕類1片、灰釉陶器1片が出土している。

**時期** 出土遺物から中世に比定される。

**7号井戸**(第88図、P L .32)

**位置** 27S-8・9グリッド。

**重複** 6号溝と重複するが新旧関係不明。

**確認面形態と規模** 整った円形。長径124cm短径118cm。

**底面形態と規模** 整った円形。長径79cm短径77cm。

**断面形** 稜を持って上位が大きく開く円筒形。深さ115cm以上。深さから通年での湧水は考えにくい。

**埋没状況** ロームブロックを多量に含み人為埋没。

**遺物** 土師器杯碗類12片・壺甕類23片、須恵器杯碗類5片・壺甕類32片が出土するが混入とみられる。

**時期** 状況や埋没土から中世以降に比定される。

(4)火葬跡

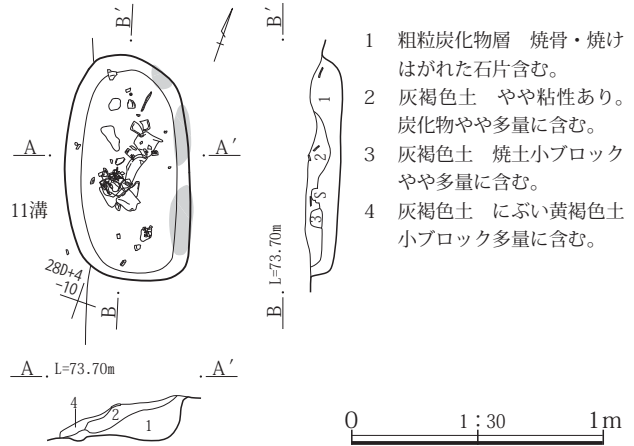
**3号火葬跡**(第89図、P L .33)

**位置** 28D-9グリッド。2号住居より後出で、11号溝と重複するが新旧関係不明。遺構確認面では、東辺が直線的で輪郭が強く焼土化していた。平面形は北辺の丸い隅丸長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土は炭化物・ロームブロックを多量に含み、収骨後埋め戻されたとみられる。被熱し薄く割れた礫も多く混入しており、石が補助的に使用されていた可能性がある。規模は長軸90cm短軸49cm深さ14cmである。火葬人骨がやや多く出土し、鑑定の結果(第5節第1項)成人男性とされている。状況から中世と考えるが、2号火葬跡とも近く、近世となる可能性もある。遺物は土師器壺甕類19片が出土するが混入とみられる。

(5)集石遺構

集石遺構は2基検出されているが、遺構の性格は異なる。2号集石は構築面の焼土化が見られないことから、集石遺構と呼称したが、焼人骨も出土し、石も被熱して

**3号火葬跡**



第89図 1区3号火葬跡

黒色化することから、火葬跡に近いと考えられる。一方、6号集石は溝との重複もあるが、楕円形にこぶし大の石が集められたものであり、性格は不明な遺構である。

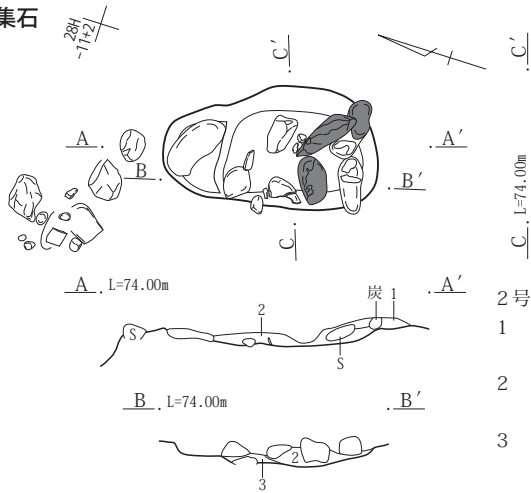
**2号集石遺構**(第90図、P L .33)

**位置** 28G-11グリッド。6号溝より後出。長さ50cm大の大型の棒状礫6点出土し、全体にススが付着した状態であった。石は5~10cm程度の間隔で並ぶ。不明確ながら土坑状に方形の掘り込みを持つ。底面は皿状。炭化物粒子・焼土粒子を含み、埋没土から微量の焼人骨が出土している。礫の上面の高さがほぼ揃っており、ススは上面に顕著である。これらを台石として上面で、おそらく火葬が行われたと推測される。また、ススの付着が上面でないものは、高さも高く原位置にないものと判断できる。掘り込みの規模は長軸112cm短軸64cm深さ12cmである。壁面の焼土化が見られず、人骨の量も非常に少ないため、いわゆる火葬跡とは状況が異なっている。出土した人骨は、鑑定の結果(第5節第1項)火葬骨であり、年齢・性別などは特定されていない。遺物は土師器杯碗類3片・壺甕類16片、須恵器杯碗類4片が出土するが混入とみられる。ほかに不明石製品1点も出土する。

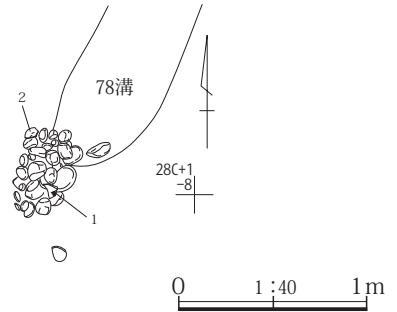
**6号集石遺構**(第90図、P L .33・134、第43表)

**位置** 28C-8グリッド。76・78号溝と重複するが新旧関係不明。両溝の接点に位置する。こぶし大の円礫がほぼ楕円形に集まる。規模は長軸52cm短軸31cmで、掘り込

2号集石



6号集石



- 2号集石
- 1 暗褐色土 ローム粒子少量、焼土微量を含む。
  - 2 暗褐色土 ローム粒子少量、炭化物粒子やや多量を含む。
  - 3 暗褐色土 ローム粒子少量を含む。



第90図 1区2・6号集石遺構と6号集石遺構出土遺物

第43表 1区6号集石遺構出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第90図	1	在地系土器	片口鉢		-	-	-	底部片		灰	還元炎。底部回転糸切無調整。底部内面周縁から体部内面に弧状のすり目。器壁薄い。	V期以降。
第90図 PL.134	2	古瀬戸	梅瓶		-	-	-	体部片		灰黄	外面に灰釉。下位の器壁厚い。下端は接合部から欠損。	古瀬戸中期。
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況		備考	
-	3	不明石製品		河床礫	角閃石安山岩	(15.6)	(26.6)	3240.0	礫の小口部が浅く窪む。工具痕については不明で、磨き整形されているように見える。被熱して煤ける。		非実測	

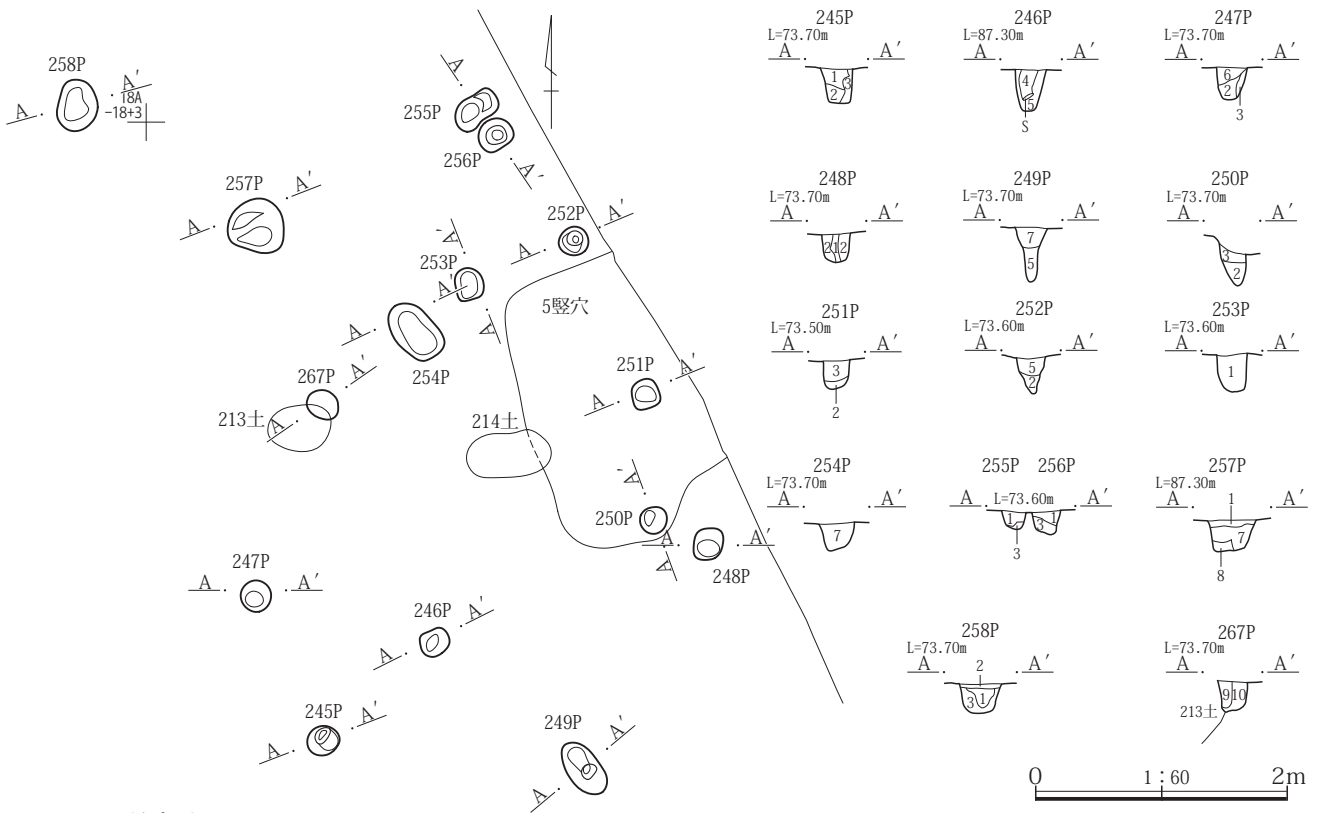
みは確認できない。礫に混じって1の在地系土器鉢(16世紀以降)、2の古瀬戸梅鉢(14世紀)が出土する。廃棄された状態で、直接遺構年代を示すものではないが、概ね中世に比定される。

(6)ピット群(第91図、第44表)

位置 17S・T-17・18、18A-18グリッド。245～258、267号ピットの15基が、約6m四方の範囲に集中する。個別の規模は第44表のとおりである。一部5号竪穴状遺構と重複するが新旧関係不明。直線的に並ぶものもあるが、範囲が狭く建物復元はできない。ピットの分布状況から、むしろ2区中世屋敷の一部である可能性が高い。南側に近接する2号溝はその区画溝とみられる。

第44表 1区屋敷周辺ピット群計測表(cm)

ピットNo.	グリッド	長径	短径	深さ
245	17T-18	26	23	29
246	17T-18	25	22	33
247	17T-18	25	24	27
248	17T-17	28	24	23
249	17S-17	48	26	44
250	17T-17	22	21	39
251	17T-17	26	24	24
252	17T-17	24	23	30
253	17T-18	26	22	30
254	17T-18	51	33	23
255	18A-18	38	23	15
256	17T-18	29	24	19
257	17T-18	46	45	25
258	18A-18	41	31	24
267	17T-18	(25)	(23)	25



245～258・267号ピット

- |                       |                                       |                          |
|-----------------------|---------------------------------------|--------------------------|
| 1 黒褐色土 ローム小ブロック少量に含む。 | 5 黒褐色土 ローム大ブロックやや多量に含む。               | 8 黄褐色土 しまりなく粘性ない。ポソポソする。 |
| 2 黒褐色土                | 6 黒褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。               | 9 黄褐色土ブロック               |
| 3 黒褐色土 ロームブロック多量に含む。  | 7 黒褐色土 しまりなく粘性ない。ポソポソする。ロームブロック多量に含む。 | 10 黒褐色土+黄褐色土             |
| 4 黒褐色土 ローム大ブロック少量に含む。 |                                       |                          |

第91図 1区屋敷周辺ピット群

(7)溝

12条が検出される。比較的広域に及ぶものが多い。特に6号溝は60mを超える直線的な溝であり、隣接する綿貫小林前遺跡部分を加えれば、更に30m以上長くなる。何らかの区画を規定する溝であり、複数の屋敷地を包括する可能性がある。これと直交方向に交わる81号溝は規模も大きく区画溝規模である。また、小規模ながら4号溝も直交する。11号溝は浅いが、6号溝と並走して関連が想定される。

屋敷の区画に関係するのが、調査区南東部の2号溝であり、深さは浅いが2区1号屋敷を分割して区画する溝と考えられる。この部分を2号屋敷とするが、内部遺構が不分明でかえって混乱するため、ここでは周辺溝として扱う。また、73・60号溝は2号溝から分岐するような状況であり、並走する74号溝もあわせて、区画に関係するとみられる。加えて、小規模ながら2号溝から北に延びる68・83号溝は、1号屋敷の1・2号橋に向かっており、2号道路とあわせて関連が想定される。

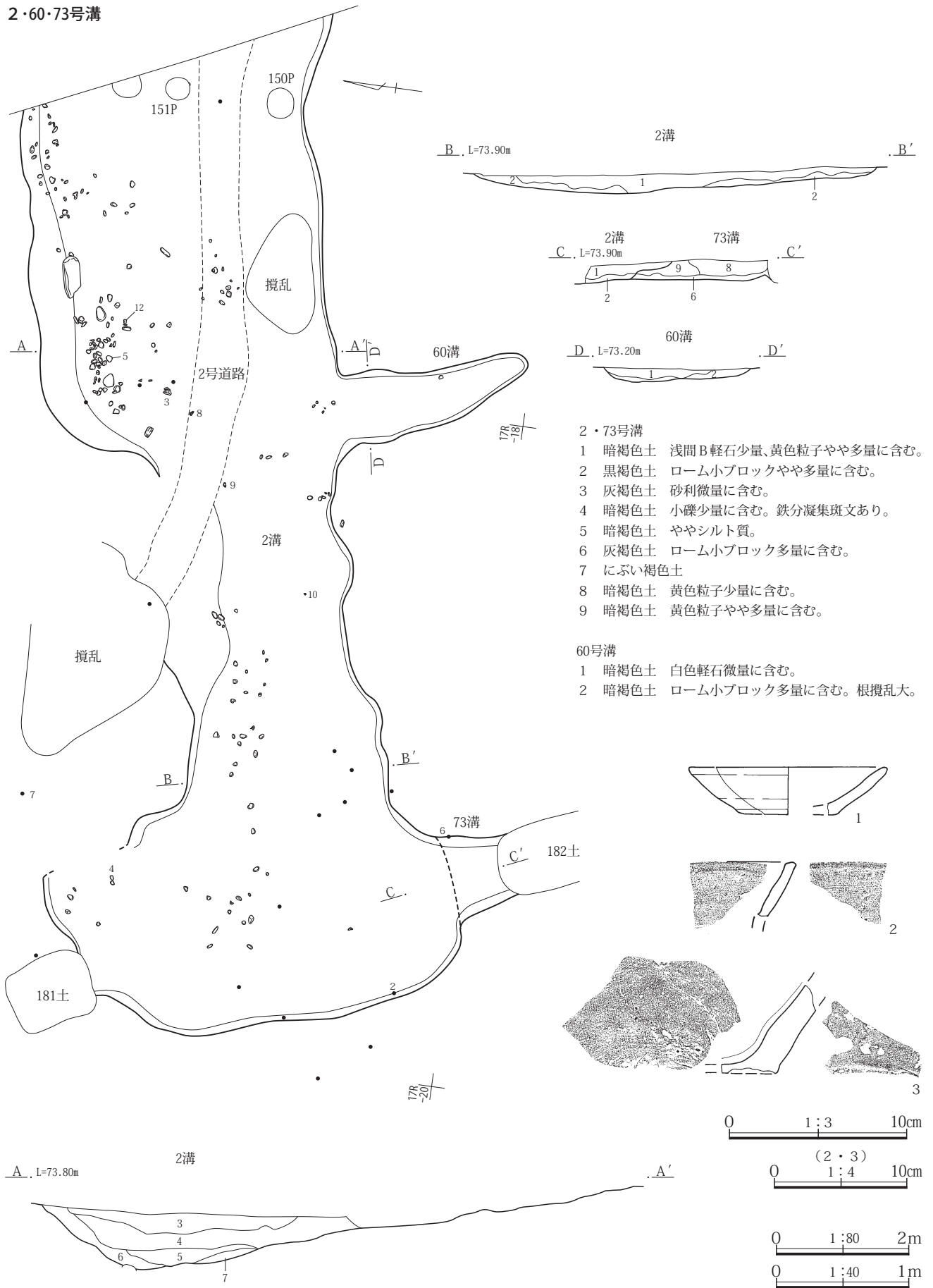
71・80号溝は離れるが、同一の溝である可能性が高い。

他の溝と走向方位も異なり、白色軽石(As-B)を多量に含む、いわゆるB混土を埋没土とする溝である。出土遺物はなく、時期を確定できない。中世屋敷と整合性がないため、その出現以前の区画に関連すると思われる。本調査区では、平安時代の大型の区画溝として84号溝ほかがあり、ここから中世屋敷の区画段階へとつながる移行期を補う遺構となる。

2・60・73号溝(第92・93図、P L .33・35・134、第45表)

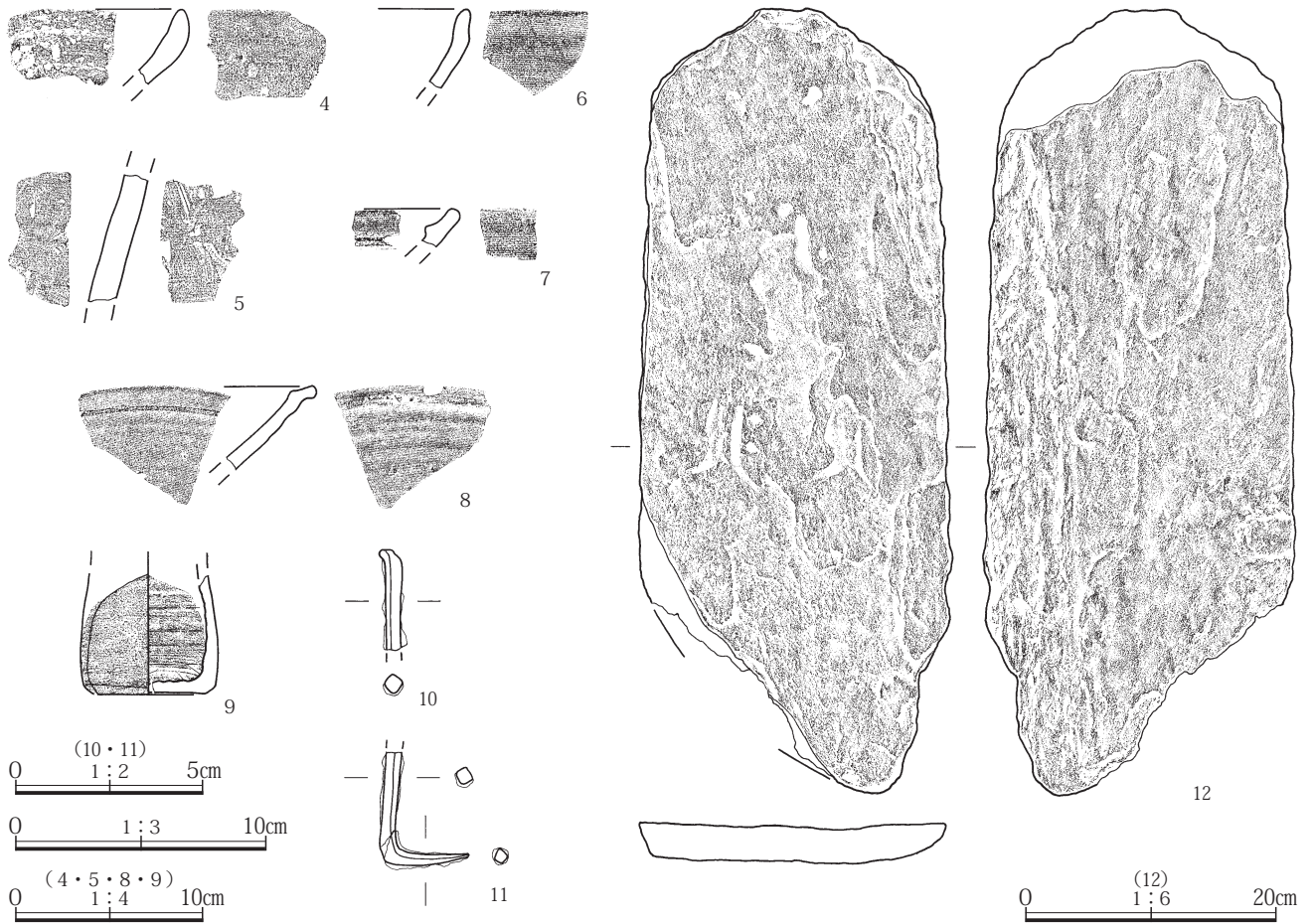
**2号溝** 位置 17R・S-16・19グリッド。73号溝より後出で、2号道より前出。181号土坑、150・151号ピット、60号溝と重複するが新旧関係不明。平面形は軽微なL字形で、東西軸は北方向に湾曲する。西端部はわずかに北へ折れて立ちあがる。走向方位は南北軸N-16°-W、東西軸N-76°-E。断面形は皿状で、壁は緩やかに立ち上がる。東壁から西へ4m付近が最も深く断面V字形に近い。出土遺物も多い。底面はほぼ平坦で、緩く北へ傾斜する。両端の比高差は21cm、勾配1.45%で東方へ下向する。埋没土は白色軽石(As-B)を含め砂礫が目立つ。

2・60・73号溝



第92図 1区2・60・73号溝と2号溝出土遺物(1)





第93図 1区2号溝出土遺物(2)

第45表 1区2号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第92図 PL.134	1	在地系 土器	皿		(11.0)	(5.5)	2.6	口縁部 片	B	にぶい 黄橙	体部から口縁部は内湾気味に立ち上がる。器高やや高 い。	14世紀中から 後半か。
第92図	2	在地系 土器	内耳鍋	+15cm	-	-	-	口縁部 片	B	にぶい 黄橙	器壁はやや薄く、僅かに内湾気味に延びる。口縁端部 はやや内傾する可能性もある。	中世。
第92図	3	在地系 土器	片口鉢	+5cm	-	-	-	底部片	B	灰白	底部に比して体部の器壁が厚い。砂底状。残存部にす り目なし。使用により内面の器表は摩滅し、体部下端 から底部周縁の摩滅は著しい。	中世。
第93図	4	在地系 土器	片口鉢	底直	-	-	-	口縁部 片	B	灰	還元炎。器壁は薄く、口縁部は内湾。口縁端部は尖る。	I・II期。
第93図	5	在地系 土器	片口鉢	+27cm	-	-	-	体部片	B	暗灰	断面は浅黄色、器表は暗灰色。体部下位片。	中世。
第93図 PL.134	6	古瀬戸	天目碗		-	-	-	口縁部 片		灰白	内外面に鉄釉。釉の光沢は少ない。開く体部から、口 縁部は上方に立ち上がり、端部付近で僅かに外反。	後III期。
第93図 PL.134	7	古瀬戸	卸目付 大皿		-	-	-	口縁部 片		灰白	口縁部内面に突帯廻る。内外面に灰釉。	後IV期新。
第93図 PL.134	8	古瀬戸	折縁深 皿	+9cm	-	-	-	口縁部 片		淡黄	口縁部は屈曲して水平に近く開く。口縁部上面はやや 窪み、内面との境に明瞭な稜をなす。体部外面は顕著 な轆轤目。内外面に灰釉。細かい貫入が入る。	後IV期古。
第93図	9	美濃陶 器	徳利	+15cm	-	(6.0)	-	1/5		灰	体部外面下端は篋削りで面取り。内外面に錆釉。	登窯8・9小期。
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	長	幅	厚	重さ(g)	特徴など		備考		
第93図 PL.134	10	鉄製品 釘	+4cm									
第93図 PL.134	11	鉄製品 釘										
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況	備考		
第93図 PL.134	12	板碑	+20cm		雲母石英片 岩	(63.3)	25.3		表裏面とも剥落が激しく、阿弥陀三尊のみ痕跡 が残る。裏面側左辺下部に幅4cmを測るノミ跡が 残る。			
-	13	茶臼	2溝	下臼受け部	粗粒輝石安 山岩	(4.2)	(2.7)	127.6	受け部・上面は丁寧に磨き整形。	非実測		
-	14	板碑片?	2溝	体部破片	緑色片岩	(9.9)	(4.3)	71.5	厚さ1.2cm。	非実測		

埋没状況不詳。出土遺物は在地系土器を主体とするが、古瀬戸陶器3点と板碑大片の出土は特筆される。規模は東西長14.48m南北長5.36m上端幅248～544cm最大深49cmである。在地系土器では14世紀が目立つが、古瀬戸陶器(93図6～8)は15世紀前半～後半であるため、15世紀後半頃を下限と考えられる。美濃陶器徳利(93図9)は、後代の混入であろう。掲載遺物のほか、土師器杯椀類14片・壺甕類44片、須恵器杯椀類23片・壺甕類5片、埴輪2片、中世国産陶器4片・在地系土器17片、近世国産陶磁器2片、その他土器類5片、茶臼片1点、板碑片1点が出土している。

**60号溝** 位置 17R-17・18グリッド。2号溝と重複するが新旧関係不明。平面形はほぼ直線状。走向方位はN-25°-W。断面形は皿状。壁は緩やかに立ち上がる。両端の比高差6cm、勾配2.13%で北方へ下向する。埋没状況不詳。規模は長さ2.81m上端幅35～112cm最大深12cmである。遺物は土師器壺甕類2片、須恵器壺甕類11片が出土するが混入とみられる。

**73号溝** 位置 17Q・R-17グリッド。182号土坑より後出で、2号溝より前出。平面形はほぼ直線状。走向方位はN-25°-W。断面形は皿状。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没状況不詳。規模は長さ1.1m上端幅91～145cm最大深15cmである。遺物は出土していない。

**4号溝**(第94図、P L .33)

**位置** 28C・D-10・11グリッド。4号土坑より前出で、6号溝と重複するが新旧関係不明。西端は調査区域外へ延び、東端は6号溝と重複して不分明となる。平面形はほぼ直線状。走向方位はN-75°-E。断面形はU字形。壁は斜めに立ち上がる。両端の比高差2cmで勾配はほとんどない。自然埋没と思われる。規模は長さ3.9m上端幅38～68cm最大深13cmである。遺物は土師器杯椀類1片が出土するが混入とみられ、ほかに敲石1点が出土する。

**6号溝**(第95・96図、P L .34・134、第46表)

**位置** 27・28P～H-7～11グリッド。108・218号土坑より後出で、7・14・15・24・51・55・65号土坑、2・7号井戸、17・18～21・45号ピット、3・5・81号溝、1号道より前出である。109・161・184・186・187号土坑、4・16・88号溝と重複するが新旧関係不明。平面形は直線状。南北両端とも調査区域外へ延びる。走向方位はN-19°-W。断面形は逆台形。壁は斜めに立ち上が

る。底面はほぼ平坦。両端の比高差22cm、勾配はほとんどない。自然埋没と思われる。規模は長さ60.80m上端幅56～152cm最大深53cmである。北半分では埋没土層中に礫がやや多く混入している。北端で在地系土器鉢(14世紀中頃)(96図2)、埋没土から在地系土器皿(15世紀後半から16世紀前半)(96図1)、銭(96図8～13)が出土する。掲載遺物のほか、土師器杯椀類108片・壺甕類601片、須恵器杯椀類175片・壺甕類35片、埴輪1片、中世在地系土器1片、近世国産陶磁器5片、その他土器類10片、馬歯小片が出土している。遺構年代は16世紀前半を下限とする。形態・走向方位・年代比定から、綿貫小林前遺跡O東区3号溝と同一の溝と考えられる。

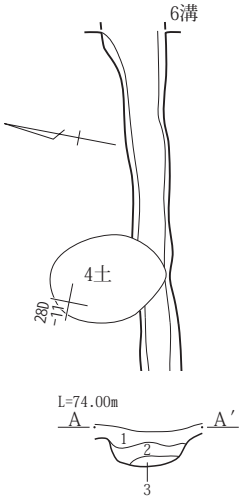
**11号溝**(第97・98図、P L .35・134・135、第47表)

**位置** 28D～G-9～11グリッド。1号竪穴状遺構、6・23号ピットより前出で、2・3号住居より後出。179・189・190・199号土坑、127・128号ピット、2・3号火葬跡、16号溝と重複するが新旧関係不明。平面形はほぼ直線状だが、中程で西にずれる。北端は調査区域外へ延びる。北端は調査区域外へ延びる。走向方位は北半でN-20°-W、南半でN-16°-W。断面形は北半が逆台形で、南半は2・3号住居の底面で平面確認したため、計測した断面は幅広く、潰れたU字形をなす。元来南半は幅広く、東壁は北半から真っ直ぐ延びていた可能性もある。壁は斜めに立ち上がる。底面は北半が平坦で、南半は丸みを持つ。自然埋没と思われる。規模は長さ18.32m上端幅92～134cm最大深50cmである。出土遺物は南端部に集中する。重複する遺構も多いため、そこからの混入も想定される。199号土坑と重複する部分では、97図1の在地系土器皿(14世紀後半～15世紀前半)、2の同(15世紀前半)、5～7の石塔類、9～14の銭が出土する。掲載遺物のほか、土師器杯椀類71片・壺甕類524片、須恵器杯椀類82片・壺甕類22片、中世在地系土器2片、近世在地系土器2片、その他土器類5片が出土している。直接重複する土坑のほか、周辺に銭を伴う楕円形の土坑も点在しており、そうした墓域からの投棄も想定される。概ね中世に比定される。

**68・83号溝**(第94図、P L .)

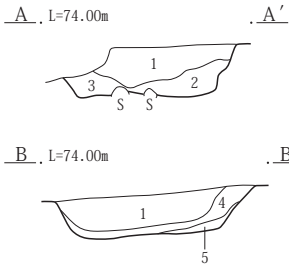
**68号溝** **位置** 17S・T-18グリッド。83号溝と重複するが新旧関係不明。平面形はやや屈曲する。南端は2号溝手前で不明となる。走向方位はN-20°-W。断面形

4号溝



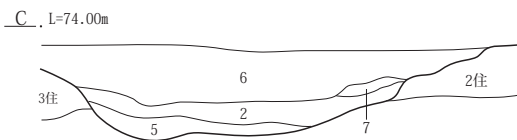
4号溝

- 1 暗褐色土 白色粒子少量に含む。
- 2 黒褐色砂質土 ローム粒子少量に含む。
- 3 暗褐色土

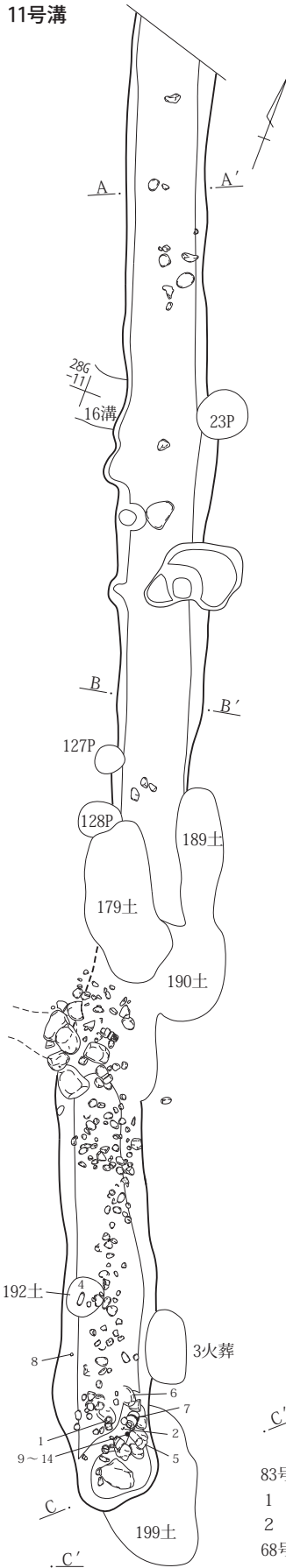


11号溝

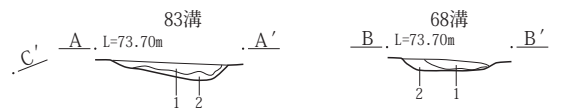
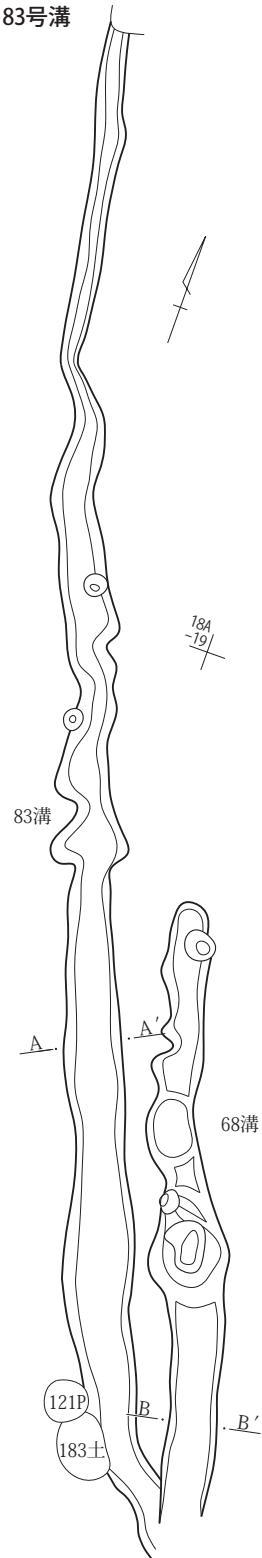
- 1 暗褐色土 ローム小ブロック少量、白色粒子微量に含む。
- 2 黒褐色土 ローム大ブロックやや多量に含む。
- 3 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
- 4 黒褐色土 黄色粒子やや多量に含む。
- 5 黒褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
- 6 暗褐色土 白色粒子微量、黄色粒子微量、炭化物粒子微量に含む。
- 7 灰褐色土 ローム大ブロック少量に含む。



11号溝



68・83号溝



83号溝

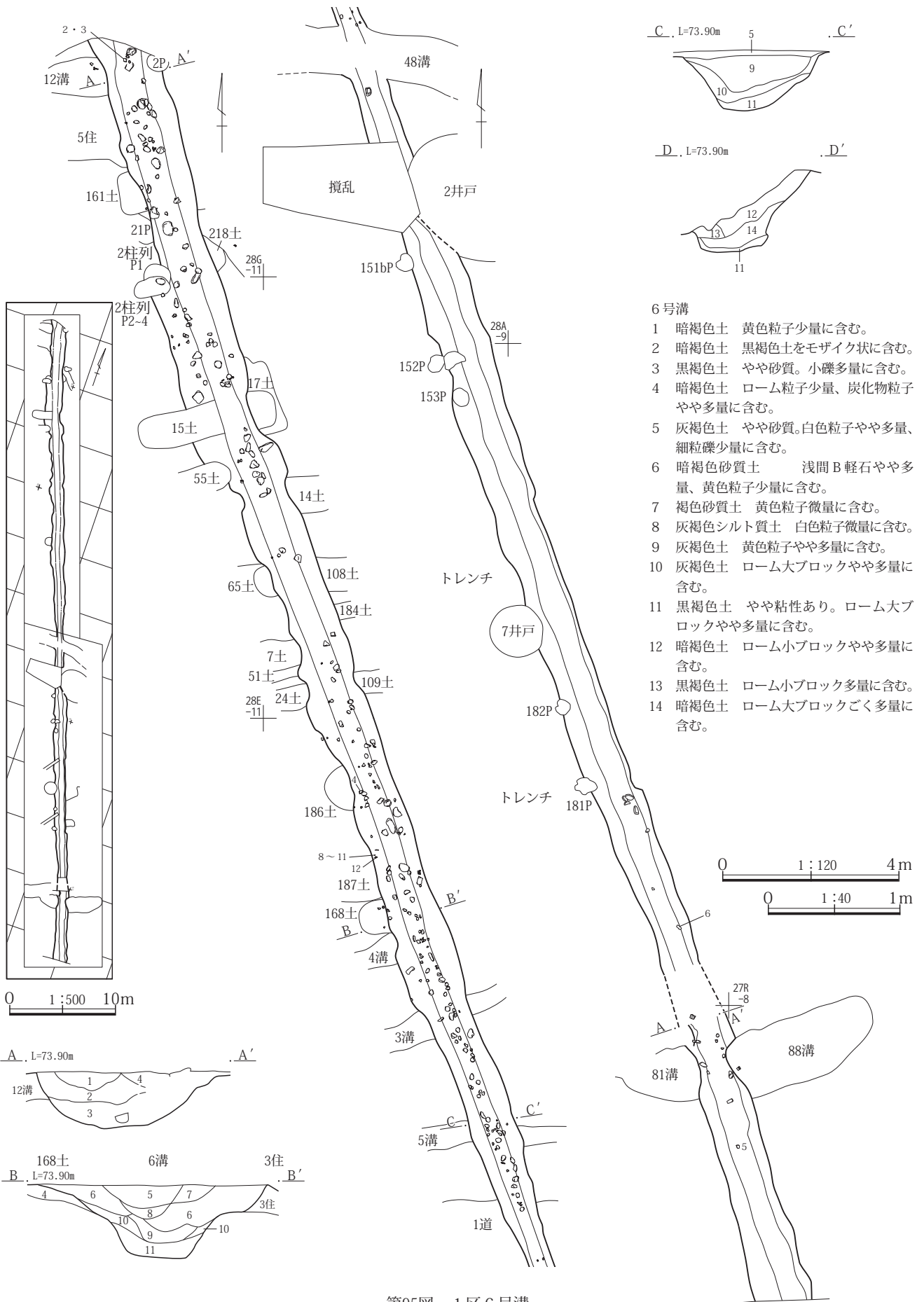
- 1 黒褐色土 しまり粘性あり。ロームブロック少量に含む。
- 2 黒褐色土+ロームブロック

68号溝

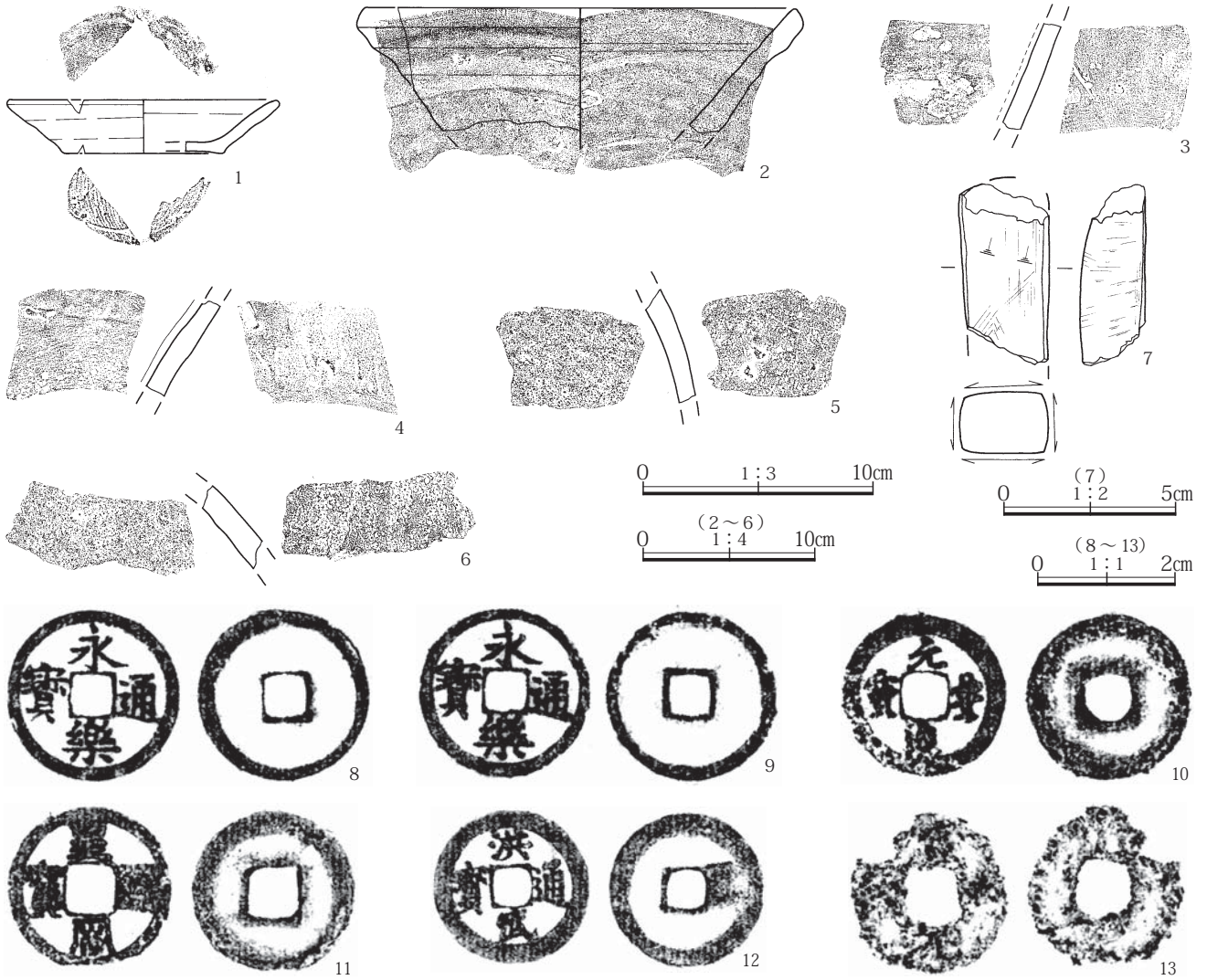
- 1 暗褐色土 白色粒子少量に含む。
- 2 暗褐色土 白色粒子少量、ローム小ブロックやや多量に含む。



第94図 1区4・11・68・83号溝



第95図 1区6号溝



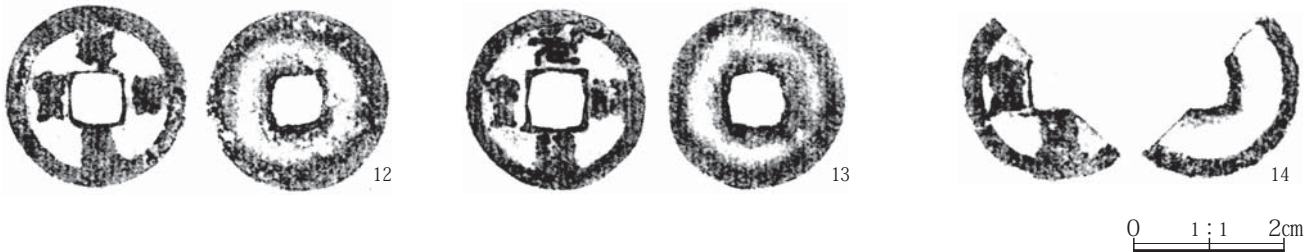
第46表 1区6号溝出土遺物

第96図 1区6号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第96図 PL.134	1	在地系 土器	皿		(12.2)	(7.6)	2.3	1/4	B	橙	内面の底部と体部境は明瞭。体部は外反。口縁部内面は僅かに内湾。	15世紀後半から16世紀前半。
第96図	2	在地系 土器	片口鉢	+17cm	(24.9)	-	-	1/5	B	橙・黄 灰	断面中央は灰色、器表付近は橙色、外面の一部は橙色で主体は黄灰色。口縁部横撫で範囲は端部から4.5cmほどであるが、撫でとの境は浅い凹線状に窪む。口縁端部は丸みを持ち尖り気味となる。	II期。
第96図	3	在地系 土器か	壺か	+17cm	-	-	-	体部片	B	灰白	外面は丁寧な横位撫での後、粗い縦位の撫で。下位には撫で時の条線が入る。内面は横位撫で。内面下位の器表はやや平滑。	中世か。
第96図	4	尾張陶 器	片口鉢	底直上	-	-	-	体下位 片		灰白	外面は工具を使用したと推定される縦位撫での後、軽く横方向に撫でる。内面は使用により器表が摩擦して平滑。尾張型。	中世。
第96図	5	常滑陶 器	甕か	+31cm	-	-	-	体部片		灰	外面に灰釉。	6と同一個体の可能性高い。
第96図	6	常滑陶 器	甕か		-	-	-	体部片		灰	外面に灰釉。	5と同一個体の可能性高い。
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況		備考	
第96図 PL.134	7	砥石				(5.2)	2.6	34.9				
挿図 PL.No.	No.	種別 種類	出土位置	径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	残存	形・成調整等			
第96図 PL.134	8	銅銭 永楽通寶	底直上	24.92	25.07	1.21~ 1.45	3.00	完形	明、1408年初鑄。			
第96図 PL.134	9	銅銭 永楽通寶	底直上	24.53	24.82	1.18~ 1.35	3.36	完形	明、1408年初鑄。			
第96図 PL.134	10	銅銭 元豊通寶	底直上	23.79	23.92	1.16~ 1.25	3.03	完形	行書。北宋、1078年。表面左下部は腐食する。裏面に鑄着痕。			
第96図 PL.134	11	銅銭 皇宋通寶	底直上	-	23.87	1.03~ 1.13	-	周縁一部 欠	真書。北宋、1038年初鑄。裏面に鑄着痕。左上部に鑄不足による孔がある。			
第96図 PL.134	12	銅銭 洪武通寶	底直上	22.91	22.62	1.34~ 1.45	2.88	完形	背右は「一銭」と推定されるが不鮮明。中央が若干裏側に盛り上がるように変形。明、1368年初鑄。			
第96図 PL.134	13	銅銭 □□元寶	-	23.96	-	1.18~ 1.28	-	一部欠	遺存状態が悪く銭文判読不可能。回読の□□元寶であろう。			



第97図 1区11号溝出土遺物(1)



第98図 1区11号溝出土遺物(2)

第47表 1区11号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第97図 PL.134	1	在地系 土器	皿	+9cm	7.8	4.4	2.0	ほぼ完 形	B	にぶい 黄橙	底部と体部の器壁は厚い。底部と体部内面との境は明瞭。底部左回転糸切無調整。口縁部内外面に油煙多く付着。口縁の欠損部にも油煙付着。	14世紀後半～ 15世紀前半。
第97図 PL.134	2	在地系 土器	皿	+19cm	(7.6)	4.3	1.9	3/4	B	黄橙	体部から口縁部は直線的に開く。底部左回転糸切無調整。体部から口縁部はやや歪む。	15世紀前半。
第97図 PL.134	3	在地系 土器	片口鉢	-	-	-	-	底部片		灰白	底部付近の断面中央のみ暗灰色。還元炎。外面の器表は剥離。体部内面から底部内面にかけて弧状のすり目。すり目は7本+α。	中世。
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況		備考	
第97図 PL.134	4	敲石		棒状扁平礫	雲母石英片 岩	16.4	5.9	451.9	上端側両側縁が敲打され、ノッチ状に抉れる。上下両端に打痕が集中、小口部下端の裏面側は衝撃剥離痕。			
第97図 PL.134	5	五輪塔	+21cm	地輪	二ツ岳軽石	高さ (15.3)	23.4	5500.0	上下面は荒加工仕上げ、側面は水磨き仕上げ。正面左下に「月・日」を線刻。			
第97図 PL.134	6	宝塔	+11cm	塔身	粗粒輝石安 山岩	高さ (15.0)	27.9	6000.0	正面に葉研彫りア(胎蔵界宝幢)、正面右にアク(天鼓雷音)の一部が残る。塔身部正面の水磨き整形し、斜位の工具痕が残る。			
第97図 PL.135	7	五輪塔	+19cm	空風輪	粗粒輝石安 山岩	高さ (30.0)	16.8	7200.5	正面に梵字「キャ」「カ」を刻む。整形は丁寧だが、縦位の細い工具痕が残る。			
挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置	径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	残存	形・成調整等		備考	
第97図 PL.135	8	鉄製品	+7cm									
第97図 PL.135	9	銅銭 洪武通寶	+18cm	21.60	21.78	1.29～ 1.35	2.54	完形	背右「一銭」。明、1368年初鑄。			
第97図 PL.135	10	銅銭 洪武通寶	+18cm	22.79	22.68	1.18～ 1.45	2.42	完形	無背。明、1368年初鑄。			
第97図 PL.135	11	銅銭 元祐通寶	+18cm	23.78	24.03	1.45～ 1.55	2.63	完形	篆書。北宋、1086年初鑄。遺存状態はやや悪い。			
第98図 PL.135	12	銅銭 祥符通寶か	+18cm	24.17	24.13	1.08～ 1.09	2.84	完形	北宋、1008年初鑄か。			
第98図 PL.135	13	銅銭 元祐通寶	+18cm	24.12	23.89	1.17～ 1.29	3.24	完形	篆書。北宋、1086年初鑄。			
第98図 PL.135	14	銅銭 □□通寶	+18cm	-	-	-	1.26～ 1.32	1/2	回読の□□通寶。			

は皿状。壁は緩やかに立ち上がる。底面は凸凹する。両端の比高差9cm、勾配1.36%で南方へ下向する。埋没状況不詳。規模は長さ6.60m上端幅32～87cm最大深7cmである。遺物は出土していない。

**83号溝** 位置 18A・B-19、17S・T-18・19グリッド。183号土坑、121号ピット、51・68号溝と重複するが新旧関係不明。平面形はわずかに弓状。北端は51号溝と重複して消滅、南端は2号溝手前で不明となる。走向方位はN-11°-W～N-23°-W。断面形は軽微なV字形。底面は凸凹する。両端の比高差13cm、勾配はほとんどない。埋没状況不詳。規模は長さ16.14m上端幅18～75cm最大深8cmである。2号道路と南端で並走するため、全体として並走し、1号屋敷の1・2号橋へ延びていた可能性がある。遺物は出土していない。

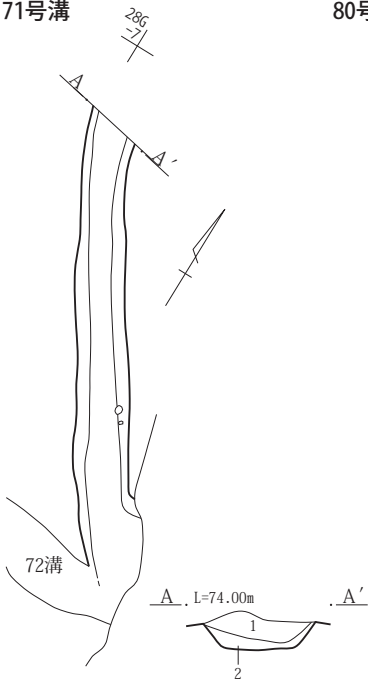
**71号溝(第99図、P L.35)**

**位置** 28F-6グリッド。1号溝より前出で、72号溝と重複するが新旧関係不明。平面形はほぼ直線状。北端は調査区域外に延び、南端は1号溝と重複して消滅。走向方位はN-43°-W。断面形は逆台形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。両端の比高差4cmで勾配はほとんどない。埋没土は白色軽石(As-B)を多量に含む。埋没状況不詳。規模は長さ5.46m上端幅46～59cm最大深16cmである。形態・走向方位から80号溝と同一の溝の可能性はある。遺物は出土していない。埋没土から中世前半に比定される。

**74号溝(第99図、P L.16)**

**位置** 17Q・R-20グリッド。直線状をなす。走向方位N-14°-W。断面幅広い皿状。壁は斜めに立ち上がる。

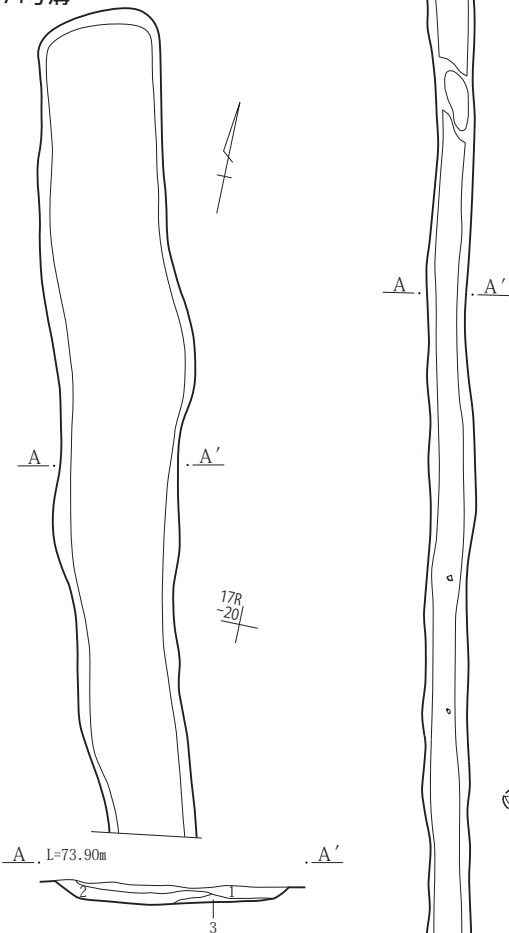
71号溝



71号溝

- 1 暗褐色土 黄色粒子多量に含む。
- 2 暗褐色土 浅間B軽石多量に含む。

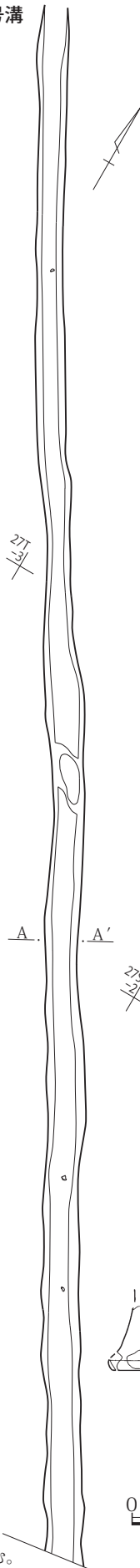
74号溝



71号溝

- 1 褐色土 暗褐色土をモザイク状に含む。
- 2 褐色土+暗褐色土
- 3 褐色土 暗褐色土小ブロック少量に含む。

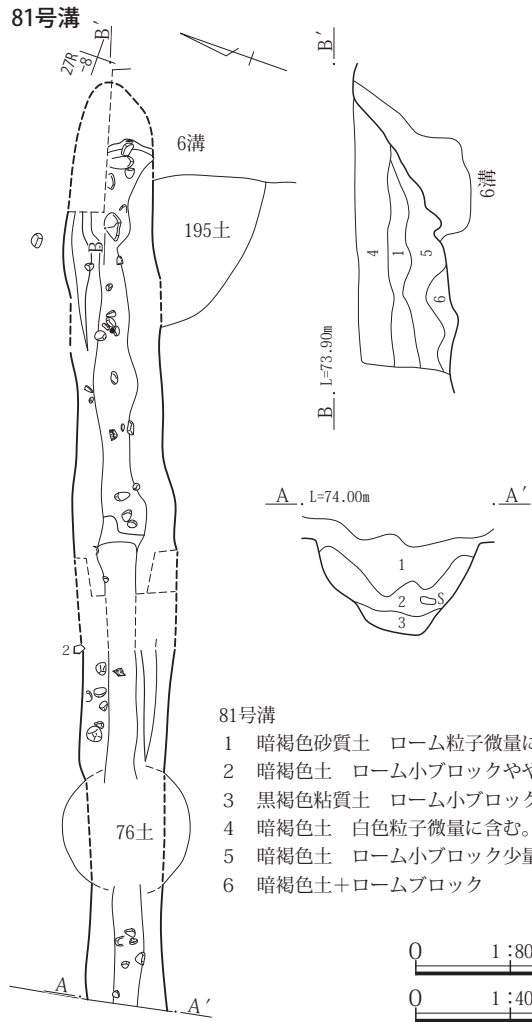
80号溝



80号溝

- 1 黒褐色土 浅間B軽石やや多量に含む。
- 2 黒褐色土 浅間B軽石やや多量、ローム大ブロック少量に含む。

81号溝



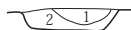
81号溝

- 1 暗褐色砂質土 ローム粒子微量に含む。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 3 黒褐色粘質土 ローム小ブロック多量に含む。
- 4 暗褐色土 白色粒子微量に含む。
- 5 暗褐色土 ローム小ブロック少量に含む。
- 6 暗褐色土+ロームブロック

0 1:80 2m

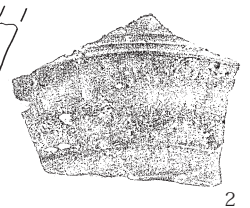
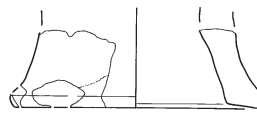
0 1:40 1m

A, L=73.90m A'



80号溝

- 1 黒褐色土 浅間B軽石やや多量に含む。
- 2 黒褐色土 浅間B軽石やや多量、ローム大ブロック少量に含む。



80号溝 0 1:100 2m

(1・2) 0 1:4 10cm

0 1:80 2m

0 1:40 1m

0 1:3 10cm

第99図 1区71・74・80・81号溝と81号溝出土遺物



第48表 1区81号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第99図 PL.135	1	在地系 土器	片口鉢 か		(27.9)	(9.7)	13.2	1/6	B	灰	還元炎。口縁部は内湾気味で端部は丸みを持って尖り 気味。内面中位以下は使用により器表摩滅。底部回転 糸切無調整。体部外面下端鋭削り。	I・II期。
第99図	2	在地系 土器か	片口鉢 か	+14cm	-	-	-	体部片	B	灰	還元炎。残存部上位外面は横撫で。内面は使用により 器表摩滅。	中世。
第99図 PL.135	3	古瀬戸	花瓶		-	(9.0)	-	台部片		淡黄	外面のみ灰釉。脚端部から内面は無釉。	古瀬戸後I・ II期。

底面は平坦。両端の比高差9cm、勾配1.13%で北方へ下向する。規模は長さ8.0m上端幅92～148cm最大深10cmである。遺物は出土していない。

80号溝(第99図)

位置 27Q～T-1～3、28A-3グリッド。平面形は直線状。北端は削平により消滅、南端は調査区域外に延びる。走向方位はN-31°-W。断面形は逆台形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。両端の比高差3cmで勾配はほとんどない。埋没土は白色軽石(As-B)を多量に含む。埋没状況不詳。規模は長さ24.80m上端幅44～64cm最大深14cmである。形態・走向方位から3区4号溝と同一の溝と考えられる。遺物は近世国産陶器1片、近現代土器類1片が出土するが混入とみられる。埋没土から中世前半に比定される。

81号溝(第99図、P.L.34・135、第48表)

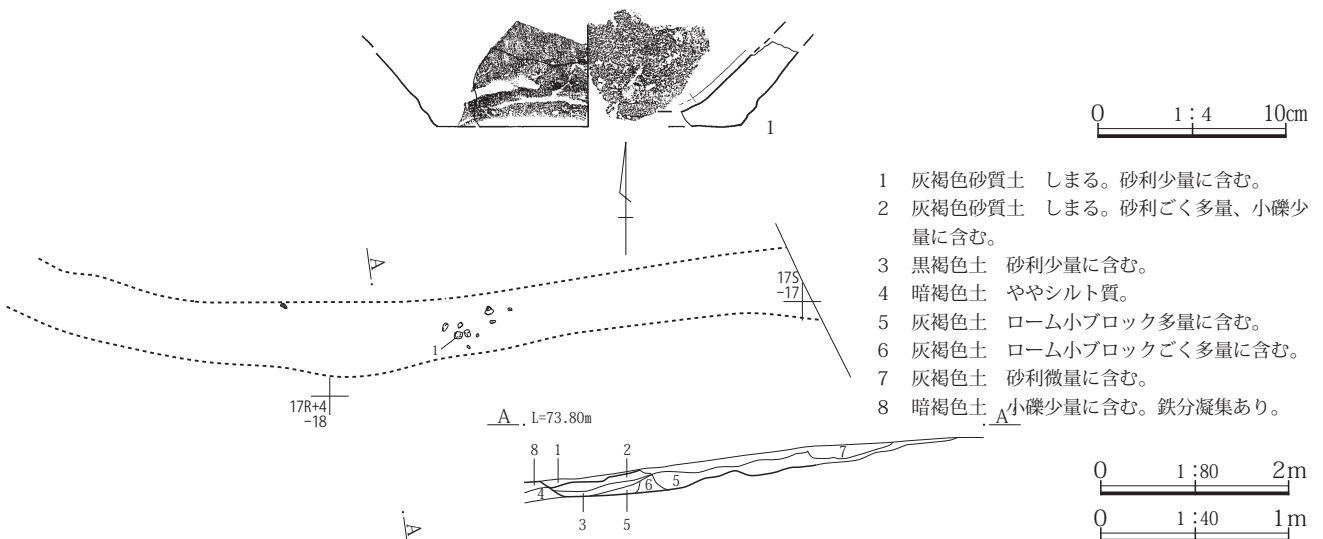
位置 27Q-8・9グリッド。6号溝より後出で、そこで東端は立ちあがる。76号土坑より前出で、195号土坑と重複するが新旧関係不明。西端は調査区域外に延びる。平面形は直線状。走向方位はN-70°-E。断面形はほぼ逆台形。底面はほぼ平坦。両端の比高差2cmで勾配は

ほとんどない。埋没状況不詳。規模は長さ9.82m上端幅75～110cm最大深54cmである。84号溝との重複部分で、在地系土器鉢(14世紀前半～中頃)(1・2)、古瀬戸花瓶(14世紀末～15世紀初)が出土する。掲載遺物のほか、時期不詳土器類1片が出土している。遺構年代は6号溝との重複関係から16世紀まで下がる可能性があるが、6号溝は長いため、一部埋まっていたと考えれば、遺物年代を全く無視することもないと考える。

(8)道路

2号道路(第100図、P.L.35、第49表)

位置 17R・S-16～18グリッド。2号溝より後出。平面形はやや弓状。東端は調査区域外へ延びるが、2区では未確認。西端は攪乱に壊され消滅。硬化した路面は2面存在し、上位路面は砂利を含む砂質土で形成される。下位路面は地山を踏み固める。路面直上から1の在地系土器鉢が出土する。掲載遺物のほか、土師器壺甕類6片、須恵器杯碗類2片が出土している。規模は長さ8.57m幅58～79cmで、構築土の厚さは11cmである。確認状況や出土遺物から中世に比定される。



第100図 1区2号道路と出土遺物

第49表 1区2号道路出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第100図	1	在地系 土器	片口鉢	+2cm	-	(16.0)	-	1/6		灰オリーブ	還元炎。体部下位の器壁は厚い。底部外面は砂底状。 使用により内面の器表は摩滅。	中世。

### 第3項 近世

調査区全体で近世の遺構が見られるが、場所により性格が異なる。大きくは居住域と生産域、墓域となるが、特に区画境となる溝である1・43・48・51・52・58号溝により、分けすることができる。

居住域と考えられるのは、3区画にわたり、1つは1号溝の西側で、58号溝の北側となる調査区北西部である。1号掘立柱建物が存在するが、これは天明3年以降であり、遺構はむしろその前段階から存在する。この場合、遺構の中心は桶を埋設した土坑群となるが、17世紀末から確認することができる。また、これらと重複して1号復旧溝群などがあり、居住域とあわせて畑地が存在したことを示している。なお、1号溝は白色軽石(As-A)の灰掻き溝として転用されており特筆される。

43号溝の西側で、48号溝の南側に位置する調査区南西部は、第2の居住域である。明確な建築遺構はないが、1号礎石列にその可能性がある。遺構の主体はやはり桶を埋設した土坑であり、17世紀後半から確認することができる。ここでは井戸も2基確認できる。また、南端では4号復旧溝群があり、畑作地が分布するが、復旧以前は細長い土坑群が繰り返し作られていた。43号溝は屋敷などの区画溝となっていたとみられ、多量の陶磁器が投棄されている。

51号溝の南側で、43号溝の東側に位置する調査区南東部は、第3の居住域である。ピットも多く建物も存在したとみられるが、掘立柱建物は認定できていない。遺構の主体はやはり桶を埋設した土坑群で、17世紀前半から確認できる。また、東側には5号復旧溝群が分布する。なお、北方には13号墓など3基の土壇墓が隣接する。また、東方に少し離れて別の墓域もある。

まとまった墓域としては、1号溝東側に集中が見られる。年代は17世紀末以降であり、周辺の居住域の年代と一致する。中でも鍋かぶり葬である5号墓は特筆される。また、葬送関連では、17世紀後半に比定される火葬跡も希少な遺構である。

#### 1 掘立柱建物・礎石列・柱穴列

調査区北西部には、近世の土坑や白色軽石(As-A)を除去した復旧溝があり、これらと重なる状況で1号掘立

柱建物がある。直接の重複関係はないが、埋没土に白色軽石(As-A)が入ることから、後出と考えられる。また、その南西には2条の柱穴列があり、土坑や溝との新旧関係から近世となった。走向方位も近いことから、1号掘立柱建物との関連も想定される。

1号礎石列は調査区西端中央寄りに離れて位置する。周辺の遺構との関係や形態から、近世に位置づけることができる。同時期の土坑や井戸が散見される中で、建物の存在を示す希少な遺構である。

**1号掘立柱建物**(第102図、P L.37・38・135、第50・51表)  
**位置** 28F・G-9・10グリッド。**重複** P6は10号溝より後出。直接の重複関係はないが、内部に1・2号灰掻き穴と重複し、後出するものと考えられる。

**形態** 規格は東西4間、南北2間以上の東西棟。調査面積が少なく、構造を含めた全体形は把握できない。ピットはP1～P8まで確認される。桁行柱間を平均すると、約1.86m・約6.1尺であるが、P3・4の柱間は65cmで、その分P5・6の柱間が155cmと狭くなっている。柱間や位置関係からP3・4の間が出入り口と考えられる。詳細な規模は\*表のとおり。調査手順では、白色軽石(As-A)の混入土を掘削した後に確認されているが、幾つかの柱穴の埋没土に白色軽石(As-A)が含まれており、天明3年以降に埋没する。P2はこぶし大の円礫であり、掘り込みは確認できず、束石なども想定される。P6から1の砥石が出土する。埋没土から天明3年以降に比定される。

**1号礎石列**(第102図、P L.38)

**位置** 27S-9・10グリッド。 **重複** なし

**形態** 礎石3基が直線的に並ぶ。間隔はS1-S2間で123cm、S2-S3間で156cmとバラツキがある。表土下で確認面されており、その他の礎石の有無は不明。礎石に掘り方はなく、根石・栗石もなく、据える際の地業なども認められない。礎石の上面標高はほぼ揃っており、上屋構造物の礎石の可能性もある。各礎石の規模: S1: 23×16cm、S2: 15×14cm、S3: 22×21cm

**出土遺物** 共伴する遺物は発見されていない。

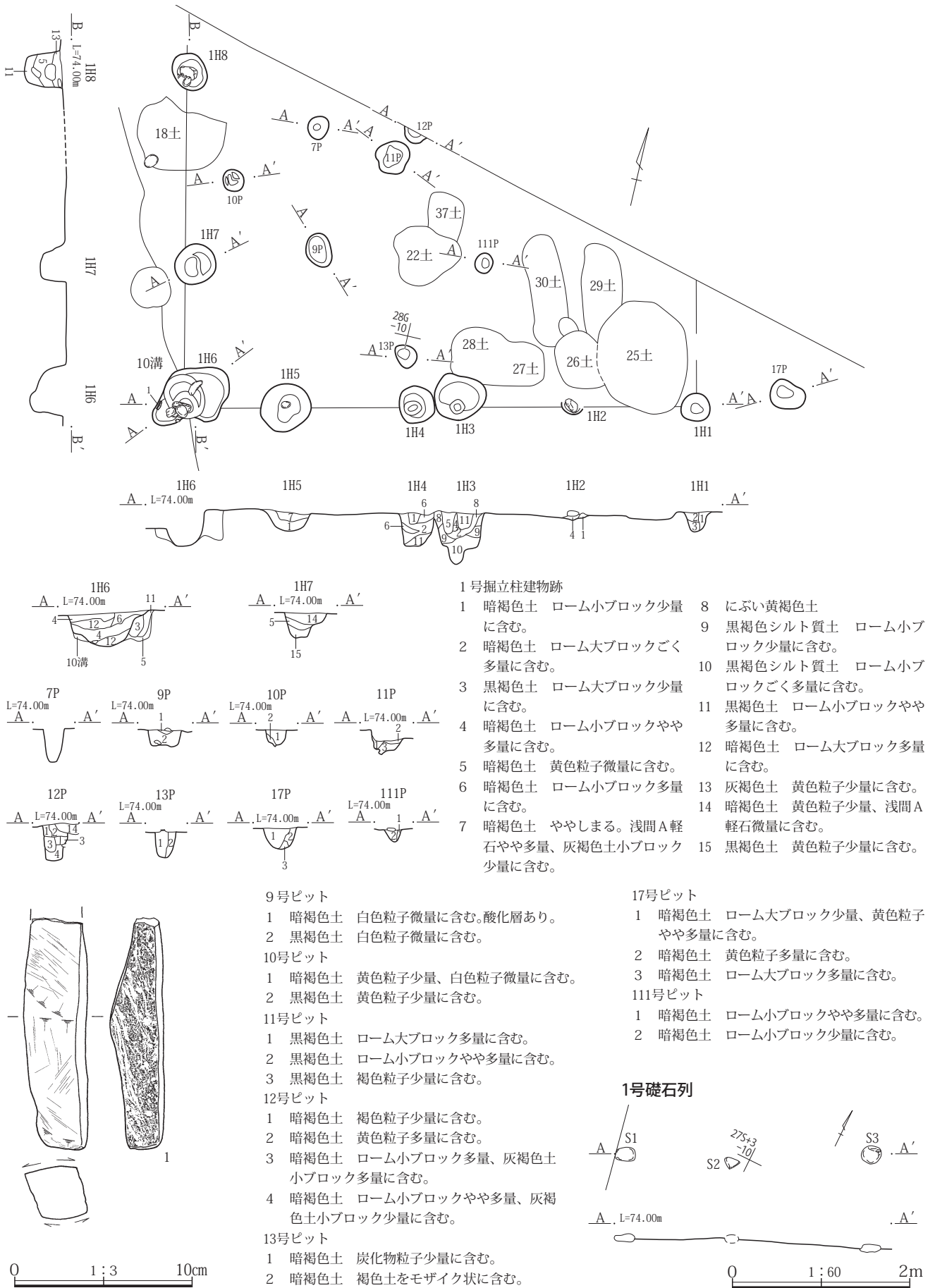
**時期** 近接する近世の1・2号井戸や溝などを考慮して同時期と考える。

**1号柱穴列**(第103図、P L.38・39、第53表)

**位置** 28E・F-11グリッド。P2は55号土坑、P4は53号土坑より後出で、P3は159号土坑より前出。P5は23



第101図 1区全体図(近世・近代以前)



第102図 1区1号掘立柱建物と出土遺物、7・9～13・17・111号ピット、1号礎石列

第50表 1区1号掘立柱建物出土遺物

挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況	備考
第102図 PL.135	1	砥石	P6+4cm	切り砥石	砥沢石	(12.9)	3.6	173.2	側面は折り取り後、磨き整形。右側面には粗い刃ならし傷が縦位に並ぶ。	

第51表 1区1号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		4×2間以上・東西棟			面積	—		旧ピットNo.	非掲載破片数
主軸方位		N-77°-E			位置	28F・G-9・10			
桁・梁の規模 (m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)			
		長径	短径	深さ					
南辺 7.45	P 1	43	42	31	円形	1.88	16		
	P 2	33	—	—	—	1.70	110	土師器杯碗類2	
	P 3	75	68	76	隅丸方形	0.65	15		
	P 4	55	52	58	隅丸方形	1.85	14		
	P 5	76	70	32	楕円形	1.55	19土	土師器杯碗類3	
西辺 5.00	P 6	130	73	52	隅丸方形	2.05	20土	土師器杯碗類3・壺 甕類11 須恵器杯碗類1、 その他2	
	P 7	62	58	39	楕円形	2.90	23		
	P 8	57	48	55	楕円形		24	土師器杯碗類3・壺 甕類2 須恵器杯碗類11	

第52表 1区1号掘立柱建物関連ピット計測表(cm)

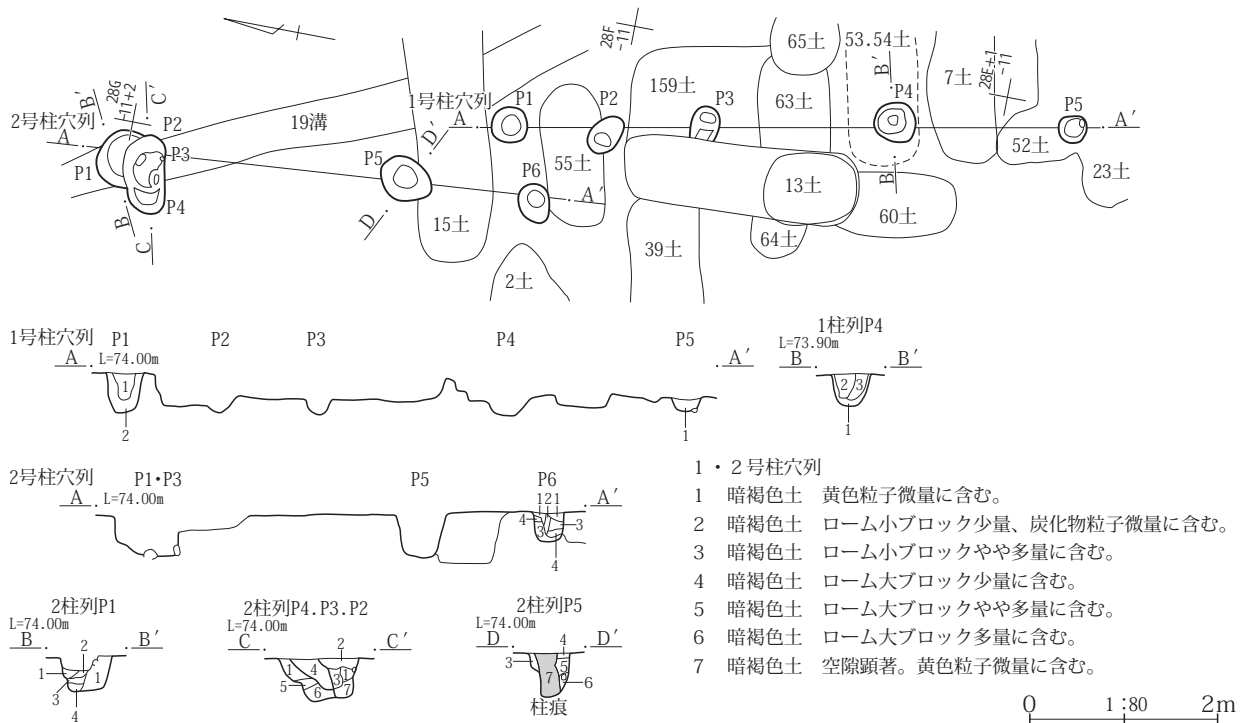
ピットNo.	グリッド	長径	短径	深さ	非掲載破片数
7	28G-10	34	31	50	須恵器壺甕類1
9	28G-10	51	40	26	土師器壺甕類3
10	28G-10	33	32	27	
11	28G-10	53	47	42	土師器杯碗類3
12	28G-10	(38)	(17)	51	土師器杯碗類5
13	28F-9	35	30	37	
17	28G-8	54	42	31	
111	28G-9	30	26	30	

号土坑と重複するが新旧関係不明。ピットはP 1～5まで確認される。詳細は第53表の計測表。掘立柱建物の一部と考えた場合、状況から東辺となる。このとき、東側に隣接

する綿貫小林前遺跡O東区に同様なピット群が存在するが、結びつけられなかった。遺物は出土していない。

2号柱穴列(第103図、P L .39)

位置 28F-11グリッド。P 1～4は19号溝、P 5は15号土坑、P 6は55号土坑より後出。ピットはP 1～6まで確認される。P 5には柱痕がある。詳細は第54表の計測表。掘立柱建物の一部と考えた場合、状況から東辺となる。このとき、東側に隣接する綿貫小林前遺跡O東区に同様なピット群が存在するが、結びつけられなかった。遺物は出土していない。



第103図 1区1・2号柱穴列

第53表 1区1号柱穴列計測表

位置 柱穴No.	28E・F-11		主軸方位 深さ (cm)	N-11°-W		旧ピットNo.	非掲載破片数
	長径 (cm)	短径 (cm)		形状	次ピットとの間隔 (m)		
P 1	37	37	43	円形	0.98	42	
P 2	45	30	49	楕円形	1.06	59	
P 3	(35)	30	18	楕円形	2.00	107	
P 4	45	44	33	円形	1.92	1	土師器杯類1、須恵器椀類1
P 5	29	29	15	円形		41	

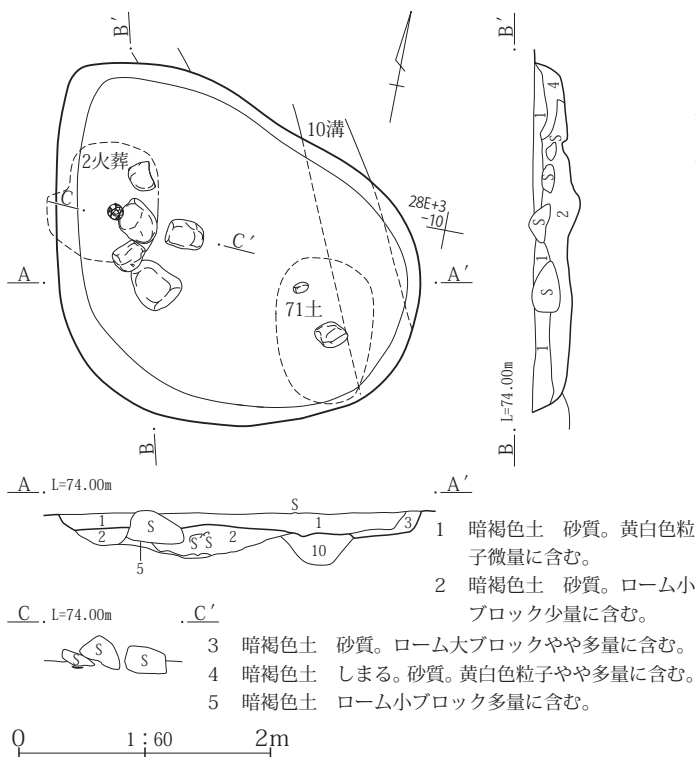
第54表 1区2号柱穴列計測表

位置 柱穴No.	28F-11		主軸方位 深さ (cm)	N-5°-W		旧ピットNo.
	長径 (cm)	短径 (cm)		形状	次ピットとの間隔 (m)	
P 1	61	(27)	33	隅丸方形		45
P 2	60	43	41	楕円形		18
P 3	20	16	32	不明	P 5へ2.7	19
P 4	39	(27)	44	楕円形		20
P 5	59	45	44	楕円形	1.4	2
P 6	42	32	30	楕円形		44

2 竪穴状遺構

1号竪穴状遺構(第104図、P L.40)

位置 28E-10グリッド。10号溝より前出で、2号火葬跡、11号溝より後出。71・184・191号土坑、7号溝と重複するが新旧関係不明。平面形は西辺が長い隅丸台形。壁はやや斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。西半は下層に11号溝があり、埋土中の礫が底面に露呈していた可能性が高い。特に2号火葬跡上位には人頭大の礫が並んでおり、移動はあるにしても、下位の遺構に帰属する礫を残しているとみられる。床面は確認できない。規模は長軸288cm短軸285cm深さ18~25cmである。遺物は中世在地系土器1片、近世国産陶器3片・在地系土器3片が出土している。出土遺物から近世に比定される。



第104図 1区1号竪穴状遺構

3 土坑

土坑は118基検出されており、近世が最も多い。形態別の数量は以下のとおりである。

	全体	北西	南西	南東	北東
正方形	1				1
長方形	10	6	1	3	
細長方形	7	4	3		
隅丸長方形	9	1	2	5	1
隅丸細長方形	17	3	8	5	1
円形(桶埋設)	30	9	9	12	
円形	15	5	1	9	
楕円形	5	3	1	1	
溝状	7		5	2	
ピット状	1			1	
不整形	2	1	1		
不明・不詳	14	1	3	9	1
計	118	33	34	47	4

分布は煩雑となるため、4区画に分けて考える。北西部は1号溝以西で58溝以北、南西部は43号溝以西で48溝以南、南東部は43号溝以東で51号溝以南、北東部は1号溝以東で51号溝以北で分類する。境界とした溝は同時期のもので、区画を構成する要素として使用した。ただし、広範囲に及ぶため、屋敷の区画と同一ではない。また、北東部は近世墓群の領域であり、土坑はその周辺にわずかに混じる程度のため、数量を示すに留める。

北西部は1号掘立柱建物や1号復旧溝が混在する領域である。これらに前後して土坑が営まれて

いるが、基本的には形態(用途)により棲み分けがなされている。桶を付設した円形の土坑は9基であり、激しく重複しながら3か所のまとまりを持つ。特に31号土坑を最終とする一群は6基が重複する。年代は17世紀末から18世紀末に及び、白色軽石(As-A)の降灰を挟んで継続している。こうした状況は他の区画も同様である。

円形の土坑5基も桶関連とほぼ傾向にある。楕円形3基は10号溝周辺に点在し、中世段階の楕円形のものむしろ共通する。10号溝自体、As-A降下以前であるため、周辺の屋敷関連遺構よりも前段と考えられる。長方形のものなど方形の土坑14基は、桶関連の土坑を囲む形で縁辺に分布している。

南西部は北西部とやや様相が異なる。桶を付設した円形の土坑は西方に離れる76号土坑を除く8基が、若干重複しながらもまとまって営まれる。中でも87号土坑を最終とする一群は4基が重複する状況で、桶未確認の円形1基も含まれる。また、87号土坑自体灰掻き穴として利用される特徴を持つ。なお、As-A降下以降も75号土坑などが継続して分布する。

南壁寄りには、溝状の土坑7基を含め、隅丸細長方形など方形の土坑14基が激しく重複している。しかも、その範囲に重なって上層に4号復旧溝が展開し、As-A降下を契機として、土坑群の領域から耕作地へと転換したと考えられる。

南東部も同様な分布状況にある。桶を付設した土坑12基は5か所程度にまとまって営まれる。また、桶以外の円形土坑7基もほぼ同様にみられる。この領域にはピット群が集中しており、建物は復元できていないが、おそらく建物敷地に重なると思われる。そこから南壁に向かっては、隅丸長方形5基ほか集中している。しかも、形態不明となった9基も重複しており、おそらく方形の土坑が激しく重複したものと考えられる。なお、この領域では5号復旧溝が東方に離れており、その周辺にも若干方形の土坑が分布する。ただし、北半分は13号墓を含む近世墓群があり、その影響下にあるとみられる。

以上のとおり、本調査区の土坑は近世の屋敷との関連が強いと言える。したがって、包括的にとらえる必要があり、改めてまとめて後述する。

#### 5号土坑(第105図、P L.40)

位置 28D-11グリッド。26号土坑より後出。平面形は

細長方形で北辺は丸い。壁はやや斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没状況不詳。規模は長軸189cm短軸77cm深さ18cmである。遺物は土師器杯椀類8片・壺甕類11片、須恵器杯椀類1片、近世国産陶器1片が出土している。出土遺物から近世に比定される。

#### 6号土坑(第105図、P L.40)

位置 28F-11グリッド。西半は調査区域外となるが、平面形はほぼ円形か。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。埋没状況不詳。規模は長径(83)cm短径(36)cm深さ22cmである。遺物は出土していない。

#### 15～17・49・50号土坑(第105図、P L.28)

15号土坑 位置 28F-11グリッド。16・17号土坑、2～4号ピットより前出。平面形は細長方形。主軸方位はN-76°-E。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸317cm短軸87cm深さ57cmである。遺物は出土していない。

16号土坑 位置 28F-11グリッド。15号土坑より後出。断面でのみ確認のため平面形は不明。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没土は均質で人為埋没か。大円礫を中位に含む。規模は長径(83)cm深さ36cmである。遺物は土師器壺甕類5片、須恵器杯椀類1片が出土するが混入とみられる。

17号土坑 位置 28F-10・11グリッド。50号土坑より前出で、15号土坑より後出。49号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は長方形。主軸方位はN-19°-W。壁はやや斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックをやや多量に含み人為埋没。規模は長軸317cm短軸87cm深さ57cmである。遺物は土師器杯椀類4片・壺甕類3片、須恵器杯椀類1片・壺甕類1片が出土するが混入とみられ、ほかに板碑片1点出土する。

49号土坑 位置 28F-11グリッド。17号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は楕円形か。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没状況不詳。規模は長径53cm短径(36)cm深さ10cmである。遺物は出土していない。

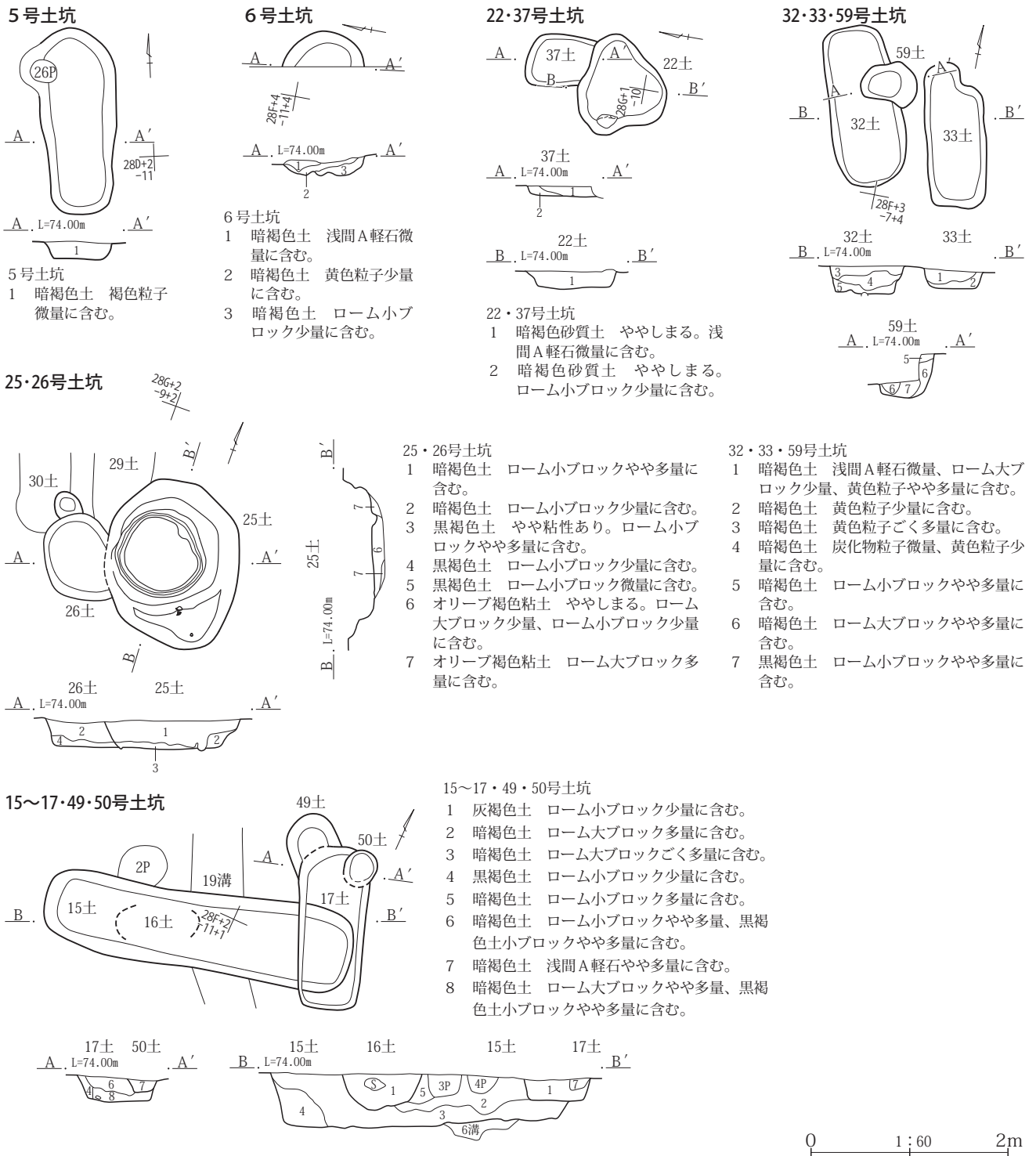
50号土坑 位置 28F-11グリッド。17号土坑より後出。平面形はほぼ円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没状況不詳。規模は長径(39)cm短径32cm深さ11cmである。遺物は出土していない。

22・37号土坑(第105図、P.L.40)

22号土坑 位置 28G-9グリッド。37号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は不整形。壁は斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。埋没土は白色軽石(As-A)を含み、均質で人為埋没か。規模は長径103cm短径90cm深さ18cmである。遺物は土師器杯椀類2片が出土するが

混入とみられる。

37号土坑 位置 28G-11グリッド。22号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形はほぼ長方形で、南側は重複により不明。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土は白色軽石(As-A)を含み、均質で人為埋没か。規模は長軸(65)cm短軸54cm深さ14cmである。遺物は出土し



第105図 1区土坑(1)



ていない。

### 32・33・59号土坑(第105図、P L .41)

**32号土坑 位置** 28F-7グリッド。59号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形はほぼ長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸165cm短軸75cm深さ28cmである。遺物は土師器壺甕類3片、須恵器壺甕類1片、近世国産陶器1片、その他土器類1片が出土している。出土遺物から近世に比定される。

**33号土坑 位置** 28F-7グリッド。平面形は長方形で、北辺は乱れる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸150cm短軸60cm深さ22cmである。遺物は土師器壺甕類5片、須恵器杯碗類1片が出土するが混入とみられる。

**59号土坑 位置** 28F-7グリッド。32号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形はほぼ円形。断面形はU字形。底面は丸みを持つ。埋没状況不詳。規模は長径57cm短径48cm深さ45cmである。遺物は土師器杯碗類1片が出土するが混入とみられる。

### 25・26号土坑(第105・114図、P L .40、第55表)

**25号土坑 位置** 28G-9グリッド。26号土坑より後出。形態から桶を埋設した土坑で、外形は掘り方で乱れた円形。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は西寄りに円形の粘土貼りがあり、幅13～27cmの細い溝が直径約92cmの円形にめぐる。底面に厚さ12cmの粘土貼りが確認できる。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長径90cm短径90cm深さ30cm、掘り方は長径176cm短径(140)cm深さ42cmである。遺物は土師器杯碗類1片・壺甕類11片、須恵器杯碗類2片、近世国産陶器1片、その他土器類3片が出土している。出土遺物から近世に比定される。

**26号土坑 位置** 28G-9グリッド。25号土坑より前出。平面形はほぼ円形か。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長径96cm短径(66)cm深さ29cmである。埋没土から肥前陶器碗(114図1)が出土する。掲載遺物のほか、土師器壺甕類9片、近世国産陶器1片が出土している。出土遺物から近世に比定される。

### 31・92・93・94・97・111号土坑(第106・114図、P L .41・44・45・135、第55表)

**31号土坑 位置** 28F-8グリッド。92～94号土坑よ

り後出。平面形は整った円形で、断面形は円筒形。桶を埋設した土坑で、底面に5枚ほどの板材を並べた底板が残る。板の厚みは数mm程度で、長いもので約58cmを計る。底板の下位には厚さ3cmほどの粘土貼りが認められる。埋没土中には人頭大の円礫が多く投棄され、人為埋没。埋没土上位に覆土から白色軽石(As-A)が混入する。東壁で厚さ30cmの粘土貼りを確認した。規模は長径96cm短径96cm深さ62cmである。埋没土から瀬戸陶器など3点が出土する。中国産青磁碗(114図5)は混入である。掲載遺物のほか、土師器杯碗類6片・壺甕類8片、近世国産陶磁器9片、灰釉陶器1片が出土している。出土遺物は18世紀初頭を下限とするが、重複する土坑の年代から18世紀後半以降となり、As-A降下以後に比定される。

**92号土坑 位置** 28F-8グリッド。31号土坑より前出で、93・97号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形はほぼ円形で、南半は重複により消滅。壁は斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。形態から桶を埋設した土坑とみられる。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長径149cm短径85cm深さ42cmである。底面で肥前磁器小碗(114図21)が出土する。出土遺物から18世紀中頃～後半に比定される。

**93号土坑 位置** 28F-8グリッド。31号土坑より前出で、92・113号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は不整円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。形態から桶を埋設した土坑とみられる。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長径167cm短径148cm深さ50cmである。埋没土から肥前磁器碗(114図22)が出土する。掲載遺物のほか、土師器壺甕類9片、須恵器杯碗類1片・壺甕類1片、近世国産陶器1片が出土している。出土遺物から18世紀前半～中頃に比定される。

**94号土坑 位置** 28F-8グリッド。97・111号土坑より前出。平面形は円形で、北半は重複により消滅。西半が円形に凹む。断面形は皿状。底面はやや凸凹する。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長径(125)cm短径(67)cm深さ10cmである。遺物は土師器杯碗類1片・壺甕類8片、近世国産陶磁器3片が出土している。出土遺物から近世に比定される。

**97号土坑 位置** 28F-8グリッド。31・94・111号土坑より前出で、93号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は不整円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹

する。形態から桶を埋設した土坑とみられる。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長径(189)cm短径165cm深さ67cmである。埋没土から肥前磁器碗(114図23)が出土する。掲載遺物のほか、土師器壺甕類3片、須恵器杯椀類1片、近世国産陶器1片が出土している。出土遺物から17世紀末～18世紀中頃に比定される。

**111号土坑** 位置 28F-8グリッド。94号土坑より後出で、31・93号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は整った円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦で、底面から壁面まで全体に粘土貼りが約13cm確認できる。形態から桶を埋設した土坑とみられる。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長径98cm短径96cm深さ30cm、掘り方は長径128cm深さ43cmである。埋没土から瀬戸陶器輪髡皿(114図26)が出土する。掲載遺物のほか、土師器杯椀類2片・壺甕類13片、近世国産陶器1片が出土している。出土遺物から17世紀末比定される。

**34号土坑(第107図、P L.41)**

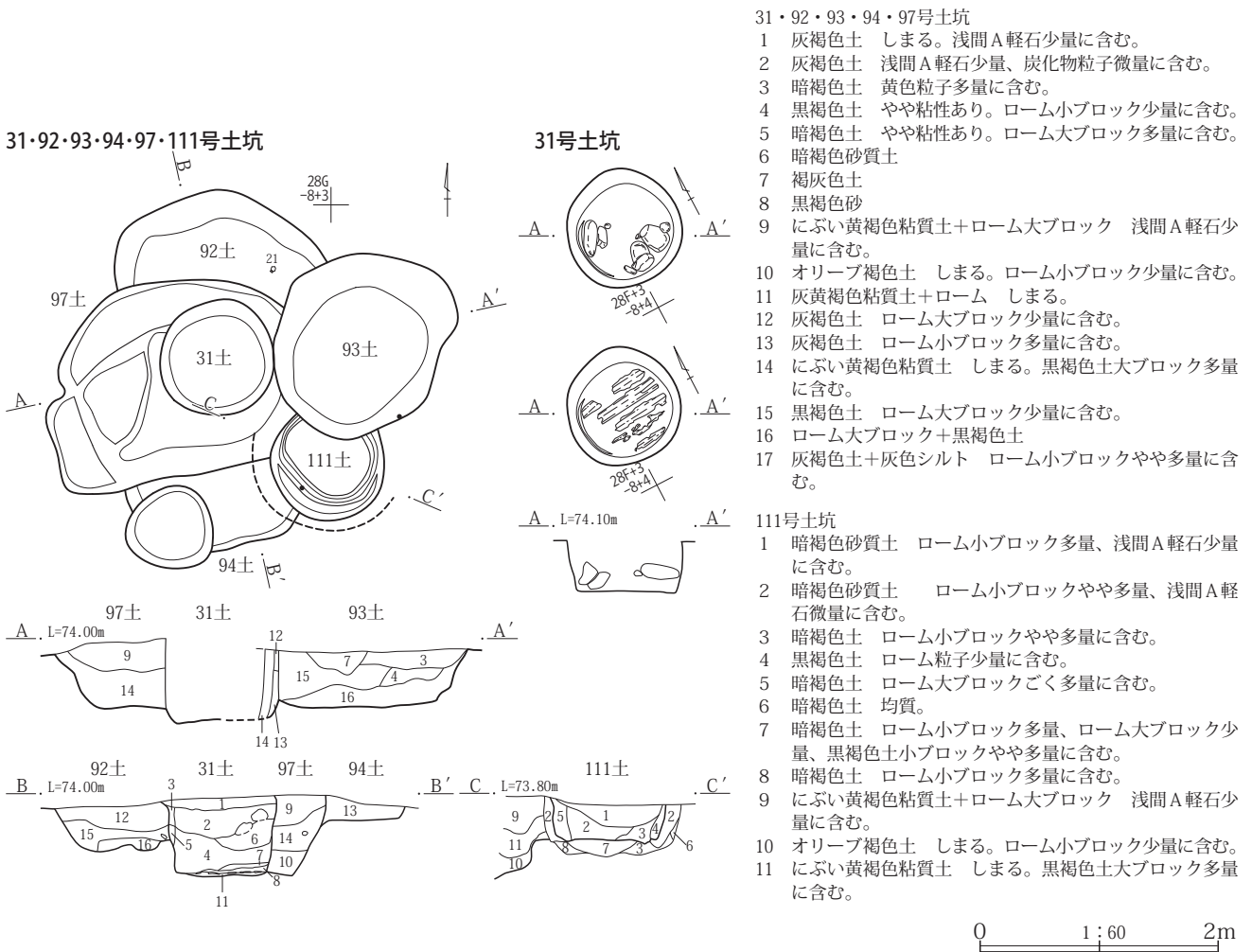
**位置** 28E-7グリッド。平面形は細長方形。ただし、南北辺は丸みあり。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸166cm短軸68cm深さ15cmである。遺物は土師器壺甕類8片が出土するが混入とみられる。

**35号土坑(第107図、P L.41)**

**位置** 28E-7グリッド。平面形は細長方形。ただし、南北辺は丸みあり。壁は斜めに立ち上がる。底面は凸凹する。植物攪乱顕著。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸185cm短軸80cm深さ13cmである。遺物は土師器杯椀類1片・壺甕類3片が出土するが混入とみられる。

**41・42・70号土坑(第107・114図、P L.41・42、第55表)**

**41号土坑** 位置 28E・F-8グリッド。42・70号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は整った円形。壁は斜めに立ち上がる。底面壁際に円形に幅9～15cmの溝



第106図 1区土坑(2)

がめぐる。形態から桶を埋設した土坑とみられる。底面に厚さ10cmの粘土貼りが確認できる。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長径105cm短径102cm深さ33cm、掘り方は長径204cm短径143cm深さ43cmである。遺物は土師器杯椀類1片・壺甕類12片、須恵器杯椀類1片、近世国産陶器1片が出土している。出土遺物から近世に比定される。

**42号土坑** 位置 28E-8グリッド。18号溝より後出で、41号土坑、35号ピットと重複するが新旧関係不明。南半に土地改良時の重機走向による攪乱が及び、大きく壊される。平面形は不明。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没で、白色軽石(As-A)含む。規模は長径(215)cm短径(200)cm深さ15cmである。遺物は須恵器杯椀類1片が出土するが混入とみられる。

**70号土坑** 位置 28E・F-8・9グリッド。41号土坑と重複するが新旧関係不明。平面図はほぼ円形と推定されるが、遺漏のため写真により推定復元。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。形態から桶を埋設した土坑とみられる。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長径(153)cm短径(113)cm深さ38cmである。埋没土から美濃陶器灯明皿(114図9)が出土する。掲載遺物のほか、土師器壺甕類11片、須恵器杯椀類1片・壺甕類3片が出土している。出土遺物から1800年前後に比定される。

**47号土坑**(第107図、P L .41)

**位置** 28D-7グリッド。平面形は隅丸長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸180cm短軸69cm深さ21cmである。遺物は出土していない。

**48号土坑**(第107・114図、P L .41、第55表)

**位置** 28E-7グリッド。平面形は隅丸細長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は凸凹する。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸165cm短軸63cm深さ17cmである。南壁寄り上層で瀬戸陶器天目茶碗(114図8)が出土する。掲載遺物のほか、土師器杯椀類1片・壺甕類8片、須恵器壺甕類1片、近世在地系土器1片、その他土器類1片が出土している。出土遺物から17世紀後半に比定される。

**57号土坑**(第107図、P L .42)

**位置** 28E-9グリッド。平面形は長方形で、北半は円

形に掘り込む。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は南北ともほぼ平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。全体長は90cmで、南半規模は長軸59cm短軸(26)cm深さ14cmで、北半は直径61cm深さ24cmである。遺物は土師器壺甕類3片が出土するが混入とみられる。

**58号土坑**(第107図、P L .42)

**位置** 28D-8グリッド。平面形は隅丸細長方形。東端はほ場整備時の重機攪乱により消滅。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや凸凹する。埋没土はロームブロックを含み均質で人為埋没。規模は長軸(206)cm短軸60cm深さ13cmである。遺物は出土していない。

**61号土坑**(第107図、P L .42)

**位置** 28E-8・9グリッド。平面形は長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はロームブロックを含み均質で人為埋没。規模は長軸118cm短軸56cm深さ14cmである。遺物は土師器壺甕類4片、近世国産陶器1片が出土している。出土遺物から近世に比定される。

**66号土坑**(第107図、P L .42)

**位置** 28C-4グリッド。平面形は隅丸細長方形。壁は斜めに立ち上がる。底面は凸凹する。植物根攪乱大きい。埋没土は詳細不明。規模は長軸196cm短軸72cm深さ15cmである。遺物は出土していない。

**73号土坑**(第107図、P L .42)

**位置** 27T-7グリッド。形態から桶を埋設した土坑で、平面形はほぼ円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土は黒褐色土をブロック状に多量に含み人為埋没か。規模は長径73cm短径66cm深さ17cmである。遺物は土師器壺甕類2片が出土するが混入とみられる。

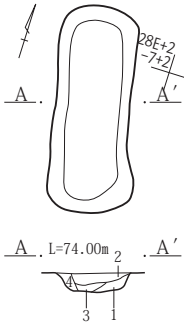
**74・101号土坑**(第108図、P L .42・43)

**74号土坑** **位置** 27S-7グリッド。101号土坑と重複するが新旧関係不明。形態から桶を埋設した土坑で、外形は掘り方でほぼ円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦で、幅4～8cmの細い溝が直径約83cmの円形にめぐる。底面に厚さ5cmの粘土貼りが確認できる。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長径82cm短径79cm深さ18cm、掘り方は長径144cm短径134cm深さ23cmである。遺物は土師器壺甕類21片、須恵器杯椀類3片・壺甕類1片が出土するが混入とみられる。

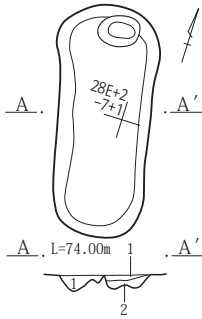
**101号土坑** **位置** 27S-7グリッド。74号土坑と重複するが新旧関係不明。平面図は遺漏のため写真により推

第4章 発掘調査の記録

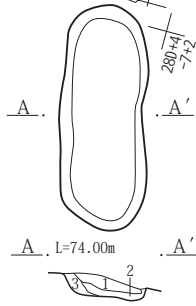
34号土坑



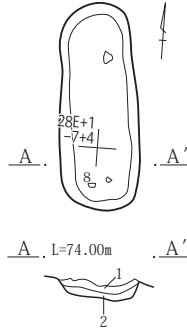
35号土坑



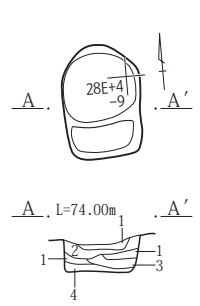
47号土坑



48号土坑



57号土坑



34・35号土坑

- 1 暗褐色土 黄色粒子微量に含む。
- 2 暗褐色土 黄色粒子少量に含む。
- 3 暗褐色土 ローム大ブロック多量に含む。
- 4 暗褐色土 黄色粒子ごく多量に含む。

47号土坑

- 1 暗褐色土 浅間A軽石少量に含む。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 3 暗褐色土 浅間A軽石微量に含む。

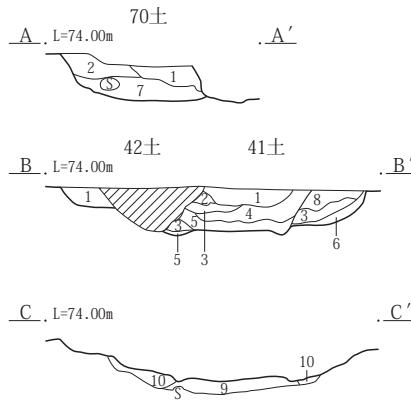
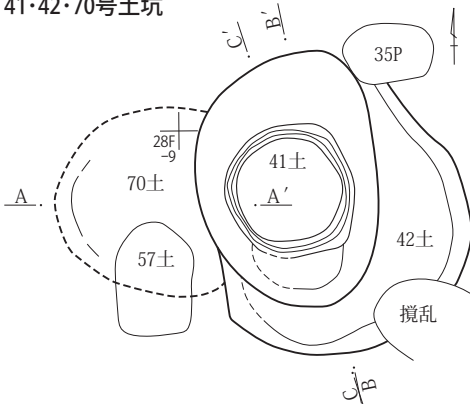
48号土坑

- 1 暗褐色土 浅間A軽石微量、ローム小ブロックやや多量に含む。
- 2 暗褐色土 ローム大ブロック少量に含む。

57号土坑

- 1 暗褐色砂質土 ローム大ブロック多量に含む。
- 2 暗褐色砂質土 ローム小ブロック少量に含む。
- 3 暗褐色砂質土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 4 暗褐色砂質土 ローム小ブロック多量に含む。

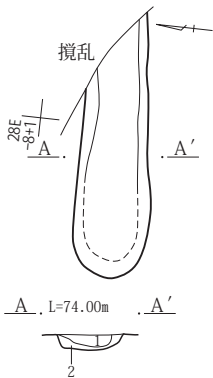
41・42・70号土坑



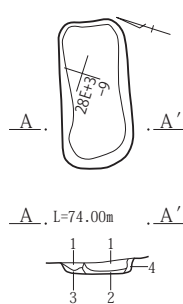
41・42・70号土坑

- 1 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
- 2 暗褐色土 ローム大ブロックごく多量に含む。
- 3 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 4 黒褐色土 ローム大ブロックやや多量に含む。
- 5 黒褐色粘質土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 6 黒褐色土+ローム大ブロック 溝の埋没土か。
- 7 暗褐色土 浅間A軽石微量、黄色粒子少量に含む。
- 8 暗褐色土 黄色粒子少量に含む。

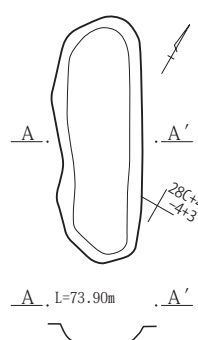
58号土坑



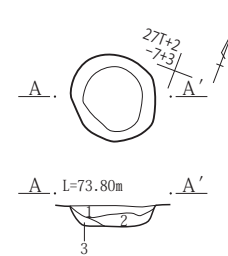
61号土坑



66号土坑



73号土坑



61号土坑

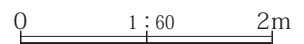
- 1 暗褐色土 やや砂質。黄色粒子少量に含む。
- 2 黒褐色土 やや砂質。黄色粒子少量に含む。
- 3 黒褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
- 4 黒褐色土 均質。

73号土坑

- 1 暗褐色土 黒褐色土をモザイク状に含む。
- 2 暗褐色土 白色粒子微量に含む。
- 3 褐色土 ローム小ブロック少量に含む。

58号土坑

- 1 暗褐色土 白色粒子微量に含む。
- 2 暗褐色土 ローム大ブロック少量に含む。



第107図 1区土坑(3)

定復元。形態から桶を埋設した土坑で、平面形はほぼ円形か。壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長径(107)cm短径(80)cm深さ8cmである。

75号土坑(第108・114図、P L .43・135、第55表)

**位置** 27S-7グリッド。平面形は整った円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦で、幅7~10cmの細い溝が直径約94cmの円形にめぐる。底面から壁面まで全体に粘土貼りが約5cm確認できる。形態から桶を埋設した土坑とみられる。埋没土は均質で人為埋没か。鉄分凝集顕著。規模は長径94cm短径93cm深さ30cm、掘り方規模は長径122cm短径116cm深さ35cmである。底面で肥前磁器、瀬戸・美濃陶器が多く出土する。出土遺物から1800年前後に比定される。掲載遺物のほか、土師器壺甕類18片、1片、近世国産陶磁器7片・在地系土器1片、近現代陶磁器1片が出土している。出土遺物から近世に比定されるが、近現代の可能性も残る。

76号土坑(第108図、P L .43)

**位置** 27Q-9グリッド。平面形は整った円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁面の中位と下位に、タガ跡が顕著に残る。底面は平坦で、幅8~14cmの細い溝が直径約105cmの円形にめぐる。底面から壁面まで全体に粘土を含んだ盛り土が約8cm確認できる。形態から桶を埋設した土坑とみられる。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長径105cm短径103cm深さ49cm、掘り方規模は長径136cm短径(127)cm深さ57cmである。遺物は土師器壺甕類4片、近世国産陶器5片・在地系土器2片が出土が出土している。出土遺物から近世に比定される。

77号土坑(第108図、P L .43)

**位置** 27Q-8グリッド。平面形は隅丸細長方形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸104cm短軸36cm深さ12cmである。遺物は出土していない。

78号土坑(第108図、P L .43)

**位置** 27P・Q-7グリッド。平面形は隅丸細長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土は均質な砂質土で人為埋没か。規模は長軸144cm短軸53cm深さ29cmである。遺物は出土していない。

79号土坑(第108図、P L .43)

**位置** 27P-6グリッド。南半は調査区域外となるが、

平面形は隅丸細長方形と推定される。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土は均質で人為埋没か。上位をAs-A段階の復旧溝が被覆する。規模は長軸(85)cm短軸54cm深さ20cmである。遺物は出土していない。

80号土坑(第108図、P L .43・44)

**位置** 27Q-6グリッド。平面形は隅丸細長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸129cm短軸48cm深さ13cmである。遺物は出土していない。

81・82・110号土坑(第108図、P L .43)

**81号土坑 位置** 27P-7グリッド。82・110号土坑より前出。南半は調査区域外となるが、平面形は溝状と推定される。壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸(169)cm短軸(42)cm深さ20cmである。遺物は出土していない。

**82号土坑 位置** 27P-7グリッド。南半は調査区域外となるが、平面形は隅丸細長方形と推定される。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没で、東方から埋まる。規模は長軸(131)cm短軸55cm深さ36cmである。遺物は土師器杯椀類3片・壺甕類3片、須恵器杯椀類2片が出土するが混入とみられる。

**110号土坑 位置** 27P-7グリッド。南半は調査区域外となるが、平面形は隅丸細長方形と推定される。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸(96)cm短軸55cm深さ21cmである。遺物は出土していない。

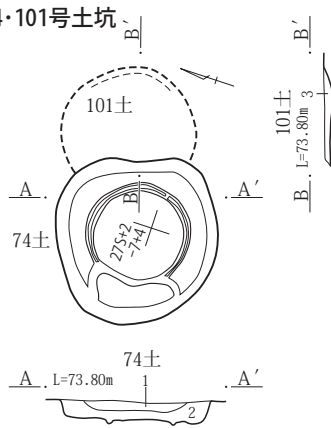
83号土坑(第108図、P L .43)

**位置** 27P・Q-7グリッド。南半は調査区域外となるが、平面形は溝状。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸(301)cm短軸60cm深さ18cmである。遺物は近世国産陶器1片が出土している。出土遺物から近世に比定される。

85・87・112・157号土坑(第108・114図、P L .44・49、第55表)

**85号土坑 位置** 27R-7グリッド。87号土坑より前出。形態から桶を埋設した土坑で、外形は掘り方でほぼ円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦で、幅9~

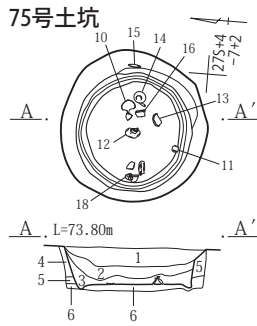
74・101号土坑



74・101号土坑

- 1 褐灰色土 ローム粒子少量に含む。
- 2 褐灰色土 ローム小ブロック少量に含む。
- 3 にぶい黄褐色土 しまる。小礫やや多量、ローム小ブロックやや多量に含む。

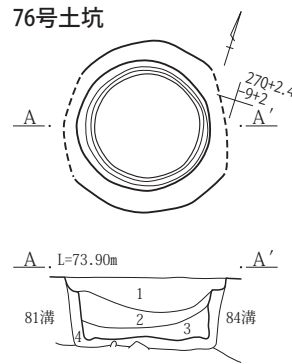
75号土坑



75号土坑

- 1 暗褐色土 やや粘性あり。ローム小ブロック少量に含む。
- 2 暗褐色土 やや粘性あり。鉄分凝集やや顕著。
- 3 黒褐色土 やや粘性あり。鉄分凝集やや顕著。
- 4 暗褐色土 均質。
- 5 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
- 6 暗褐色土 白色粒子やや多量に含む。

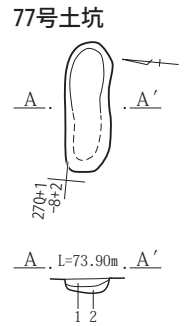
76号土坑



76号土坑

- 1 暗褐色砂質土 浅間A軽石微量に含む。
- 2 暗褐色砂質土 小礫少量に含む。鉄分凝集斑文顕著。
- 3 黒褐色土 小礫少量に含む。鉄分凝集斑文顕著。
- 4 暗褐色土 ローム小ブロック多量、黄色粒子少量に含む。

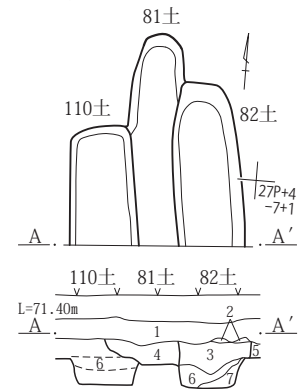
77号土坑



77号土坑

- 1 灰褐色土 やや砂質。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロック少量に含む。

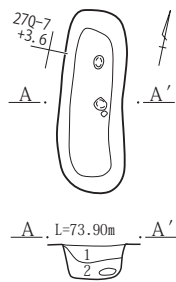
81・82・110号土坑



81・82・110号土坑

- 1 暗褐色土 浅間A軽石少量に含む。
- 2 浅間A軽石 暗褐色土微量に含む。灰掻きによる埋てん層。
- 3 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 4 暗褐色土 均質。
- 5 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。
- 6 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 7 黒褐色土 黄色粒子微量に含む。

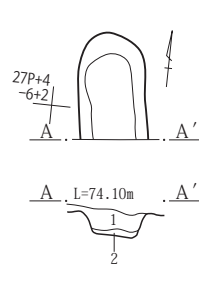
78号土坑



78号土坑

- 1 暗褐色砂質土 黄色粒子少量に含む。
- 2 暗褐色砂質土 黄色粒子微量に含む。

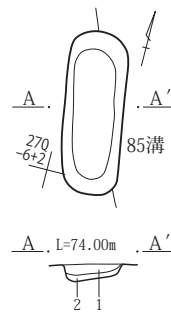
79号土坑



79号土坑

- 1 灰褐色土 やや砂質。浅間A軽石微量に含む。
- 2 暗褐色土 黄色粒子微量に含む。

80号土坑



80号土坑

- 1 暗褐色土 ローム小ブロック少量に含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。

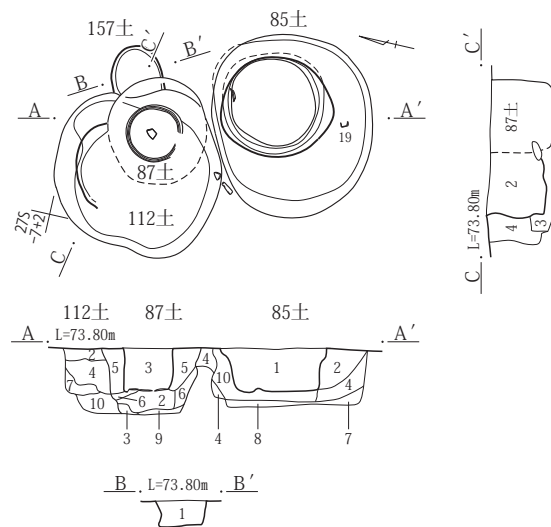
83号土坑



83号土坑

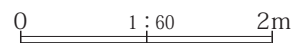
- 1 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。

85・87・112・157号土坑



85・87・112・157号土坑

- 1 暗褐色砂質土 浅間A軽石微量に含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。
- 3 浅間A軽石 暗褐色土微量に含む。灰掻きによる埋てん層。
- 4 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 5 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量、浅間A軽石微量に含む。
- 6 暗褐色土+ローム大ブロック
- 7 黒褐色土 ローム大ブロックやや多量に含む。
- 8 にぶい褐色土 ややしまる。ローム小ブロックやや多量に含む。
- 9 暗褐色土 ややしまる。ローム小ブロックごく多量に含む。
- 10 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 11 黒褐色砂質土 黄色粒子少量に含む。



第108図 1区土坑(4)

15cmの細い溝が直径約89cmの円形にめぐる。底面から厚さ約12cmの粘土貼りが確認できる。南から西側の盛り土は厚く、掘り方では大きすぎる。おそらく、古い段階の桶を埋設した土坑が重複しているよう。埋没土は均質な砂質土で人為埋没か。規模は長径89cm短径80cm深さ35cm、掘り方規模は長径147cm短径130cm深さ47cmである。西側掘り方部分で美濃陶器菊皿(114図19)が出土する。掲載遺物のほか、土師器杯椀類1片・壺甕類10片、須恵器杯椀類1片・壺甕類2片、近世国産陶磁器9片・在地系土器3片、その他土器類1片、火打石1点が出土している。出土遺物から17世紀後半に比定される。

**87号土坑** 位置 27R-7グリッド。85・112・157号土坑より後出。平面形は整った円形で、断面形は円筒形。桶を埋設した土坑で、底面に7枚ほどの薄い板材を並べた底板が残っていた(調査中に急激に劣化したため、写真記録)。底板下位から壁面まで全体に粘土貼りが約20cm確認できる。白色軽石(As-A)で埋没しており、灰掻き穴として埋められる。規模は長径46cm短径45cm深さ33cm、掘り方規模は長径84cm短径77cm深さ53cmである。埋没土から肥前磁器碗(18世紀中頃~後半)(114図20)が出土する。掲載遺物のほか、近世在地系土器1片が出土している。天明3年直後に埋められる。

**112号土坑** 位置 27R-7グリッド。12号住居より後出で、87号土坑より前出。157号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は整った円形と推定、断面形は円筒形。形態から桶を埋設した土坑と見られ、北半のみ使用面調査を行う。底面は平坦で、底面から壁面まで全体に約25cmの粘土を含む盛り土が確認できる。埋没土は均質で人為埋没。掘り方規模は長径142cm短径131cm深さ53cmである。遺物は土師器壺甕類20片、須恵器杯椀類2片・壺甕類1片、近世在地系土器1片が出土している。出土遺物から近世に比定される。

**157号土坑** 位置 27R-7グリッド。12号住居より後出で、87号土坑より前出。西半は重複により消滅するが、平面形はほぼ円形か。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。形態から桶を埋設した土坑とみられる。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長径(41)cm短径40cm深さ21cmである。遺物は土師器壺甕類7片が出土するが混入とみられる。

**88号土坑**(第109図、P L .44)

**位置** 27Q-7グリッド。平面形は溝状。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸292cm短軸62cm深さ21cmである。遺物は土師器壺甕類3片が出土するが混入とみられる。

**89・90・105号土坑**(第109図、P L .44)

**89号土坑** 位置 27P・Q-6グリッド。90号土坑より前出で、105号土坑と重複するが新旧関係不明。重複により大部分消滅し、平面形は不明。壁はやや斜めに立ち上がる。底面不明。埋没状況不詳。規模は長径(245)cm短径(25)cm深さ21cmである。遺物は土師器壺甕類1片、近世国産陶器1片が出土している。出土遺物から近世に比定される。

**90号土坑** 位置 27Q-6グリッド。89号土坑より後出で、105号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は細長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦だが、一部攪乱状に凹む。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸308cm短軸61cm深さ30cmである。遺物は土師器杯椀類1片・壺甕類8片、近世国産陶器2片が出土している。出土遺物から近世に比定される。

**105号土坑** 位置 27Q-6グリッド。89・90号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸細長方形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸(213)cm短軸(66)cm深さ14cmである。遺物は出土していない。

**91号土坑**(第109図、P L .44)

**位置** 27Q-6・7グリッド。100号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は楕円形。壁は緩やかに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長径177cm短径128cm深さ22cmである。遺物は土師器壺甕類1片、須恵器杯椀類1片、その他土器類1片が出土するが混入とみられる。

**95・96・99・100・102・106号土坑**(第109・114図、P L .45、第55表)

**95号土坑** 位置 27P-6グリッド。106号土坑、白色軽石(As-A)の復旧溝より前出。南半は調査区域外となるが、平面形は細長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸(133)cm短軸43cm深さ37cmである。遺物は出土していない。

**96号土坑** 位置 27P-6グリッド。106号土坑より後出で、99号土坑より前出。平面形不詳。106号土坑との

重複調査により不分明となる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦か。埋没土は均質で人為埋没。規模は長径(174)cm短径64cm深さ36cmである。遺物は出土していない。

**99号土坑** 位置 27P・Q-6グリッド。100号土坑、白色軽石(As-A)の復旧溝より前出で、96号土坑より後出。南半は調査区域外となるが、平面形は折れを持つ細長方形で、二基の土坑の重複か。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土は均質で人為埋没。規模は長軸318cm短軸88cm深さ47cmである。遺物は出土していない。

**100号土坑** 位置 27Q-6グリッド。99号土坑より後出で、91号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸長方形。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸115cm短軸67cm深さ30cmである。遺物は出土していない。

**102号土坑** 位置 27P・Q-6グリッド。白色軽石(As-A)の復旧溝より前出で、99号土坑より後出。南半は調査区域外となるが、平面形は溝状か。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸(255)cm短軸(65)cm深さ47cmである。遺物は土師器壺甕類6片、須恵器壺甕類1片が出土するが混入とみられる。

**106号土坑** 位置 27P・Q-6グリッド。95号土坑より後出で、96号土坑より前出。南半は調査区域外となるが、平面形は隅丸細長方形。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸(220)cm短軸63cm深さ41cmである。埋没土から肥前陶器(114図25)が出土する。掲載遺物のほかに土師器壺甕類1片、須恵器杯椀類1片・壺甕類1片が出土している。出土遺物から近世に比定される。

**98号土坑**(第109・114図、P L .135、第55表)

**位置** 27R-6グリッド。上位に白色軽石(As-A)復旧溝が被覆する。平面形は折れを持つ溝状で、二基の土坑の重複か。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸219cm短軸56cm深さ17cmである。埋没土から釘が出土する。掲載遺物のほかに土師器杯椀類2片が出土するが混入とみられる。

**103号土坑**(第109図、P L .45)

**位置** 27Q-6グリッド。43号溝より前出。平面形は長方

形。壁は緩やかに立ち上がる。底面はやや凸凹する。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長径62cm短軸45cm深さ15cmである。遺物は出土していない。

**104号土坑**(第109図、P L .45)

**位置** 27Q-6・7グリッド。46号溝と重複するが新旧関係不明。平面形はほぼ隅丸長方形。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没状況不詳。規模は長軸86cm短軸57cm深さ12cmである。遺物は出土していない。

**107号土坑**(第109図、P L .45)

**位置** 27S-7グリッド。平面形は整った円形で、形態から桶を埋設した土坑とみられる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦で、底面から壁面まで全体に約9cmの粘土を含む盛り土が確認できる。埋没状況不詳。規模は長径82cm短径82cm深さ8cm、掘り方規模は長径116cm短径108cm深さ17cmである。遺物は土師器壺甕類27片、須恵器杯椀類1片、近世国産陶器1片が出土している。出土遺物から近世に比定される。

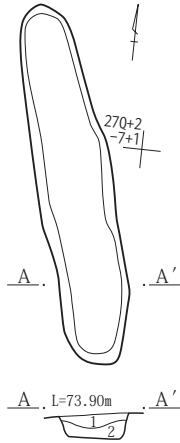
**115・116・117・138号土坑**(第110・114・115図、P L .45・46・48・135、第55表)

**115号土坑** 位置 27R-2グリッド。116号土坑より後出。平面形は整った円形で、形態から桶を埋設した土坑とみられる。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦で、幅7~15cmの細い溝が直径約86cmの円形にめぐる。底面に厚さ10cmの粘土貼りが確認できる。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長径104cm短径96cm深さ16cm、掘り方規模は長径(110)cm短径104cm深さ27cmである。遺物は土師器杯椀類1片・壺甕類1片、須恵器杯椀類1片が出土するが混入とみられる。

**116号土坑** 位置 27R-3グリッド。115・117・138号土坑より前出。平面形は整った円形で、形態から桶を埋設した土坑とみられる。底面は平坦で、下位に粘土貼りが約14cm確認できる。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長径160cm短径130cm深さ39cm、掘り方規模は長径165cm短径158cm深さ53cmである。埋没土から美濃陶器志野皿(114図27)が出土する。出土遺物から17世紀前半に比定される。掲載遺物のほか、土師器壺甕類5片、須恵器杯椀類1片・壺甕類1片、近世国産陶器1片・在地系土器2片が出土している。出土遺物から近世に比定される。



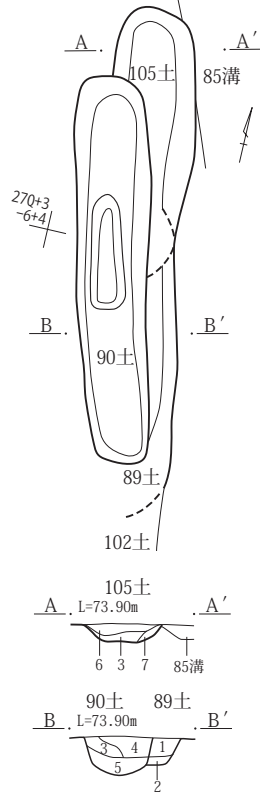
88号土坑



88号土坑

- 1 暗褐色土 やや砂質。ボサボサする。白色粒子微量に含む。
- 2 黒褐色土 やや砂質。ボサボサする。白色粒子微量に含む。

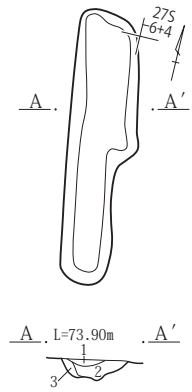
89・90・105号土坑



89・90・105号土坑

- 1 暗褐色土 やや砂質。黄色粒子少量に含む。
- 2 暗褐色シルト質土
- 3 暗褐色土 やや砂質。黄色粒子微量に含む。
- 4 暗褐色土 ローム小ブロックごく多量に含む。
- 5 暗褐色土 ローム小ブロック少量に含む。
- 6 暗褐色土 浅間A軽石微量、ローム小ブロック少量に含む。
- 7 暗褐色土 均質。

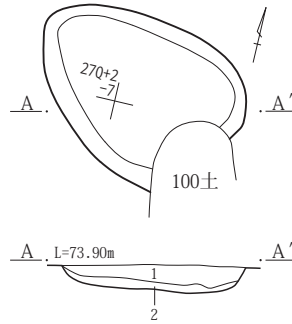
98号土坑



98号土坑

- 1 暗褐色砂質土 浅間A軽石多量に含む。灰掻き溝の埋没土。
- 2 暗褐色砂質土 ローム大ブロック多量、小礫やや多量に含む。
- 3 暗褐色砂質土 ローム小ブロックやや多量に含む。

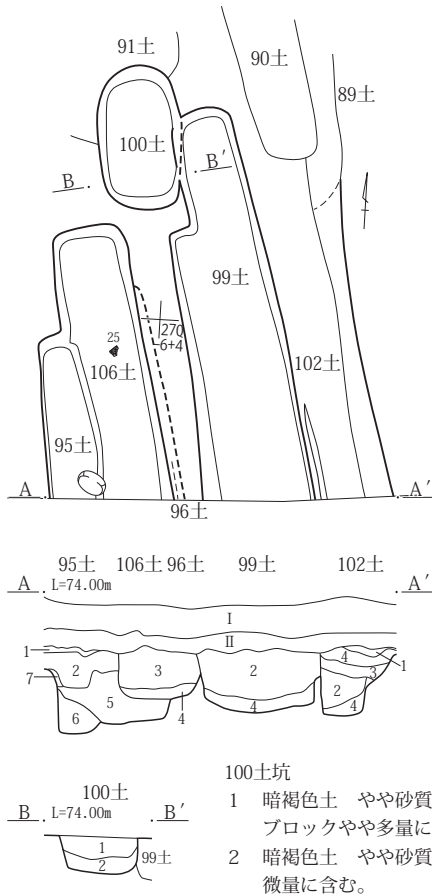
91号土坑



91号土坑

- 1 暗褐色土 やや砂質。黄色粒子少量に含む。
- 2 暗褐色シルト質土
- 3 暗褐色土 やや砂質。黄色粒子微量に含む。

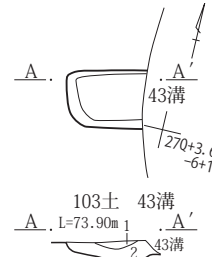
95・96・99・100・102・106号土坑



95・96・99・102・106号土坑

- 1 浅間A軽石 暗褐色土微量に含む。灰掻きによる埋てん層。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子やや多量に含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。
- 5 暗褐色土 ローム大ブロックやや多量、ローム小ブロック多量に含む。
- 6 黒褐色土 粘性あり。ローム粒子少量に含む。
- 7 暗褐色土 褐色土をシミ状に含む。

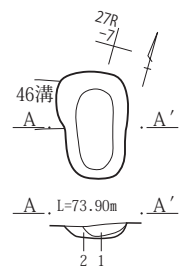
103号土坑



103号土坑

- 1 暗褐色土 褐色土大ブロック多量に含む。
- 2 暗褐色土 黄色粒子微量に含む。

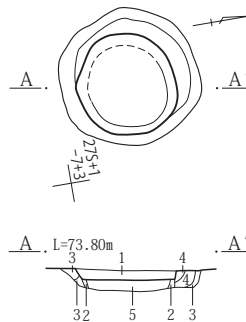
104号土坑



104号土坑

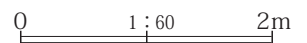
- 1 暗褐色土 やや粘性あり。
- 2 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。

107号土坑



107号土坑

- 1 暗褐色土 ローム小ブロック少量に含む。
- 2 暗褐色土 しまらない。空隙あり。
- 3 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。
- 4 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 5 暗褐色土 しまる。ローム大ブロック少量、ローム小ブロック少量に含む。



第109図 1区土坑(5)

**117号土坑** 位置 27R・S-2・3グリッド。116号土坑より後出。平面形は整った円形で、形態から桶を埋設した土坑とみられる。底面は平坦で、幅12cmの細い溝が直径約70cmで半周する。底面に厚さ8cmの粘土貼りが確認できる。埋没土は均質で人為埋没。規模は長径110cm短径95cm深さ24cm、掘り方規模は長径110cm短径95cm深さ32cmである。埋没土上層から板碑(115図29)が出土するが何らかの転用であろうか。116号土坑より後出のため、17世紀後半以降である。

**138号土坑** 位置 27R-2グリッド。116号土坑より後出。平面形は整った円形で、形態から桶を埋設した土坑とみられる。底面は平坦で、幅7~14cmの細い溝が直径約87cmの円形にめぐる。底面に厚さ8cmの粘土貼りが確認できる。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。底面は一部黒褐色の粘土塊で埋まる。規模は長径87cm短径86cm深さ22cm、掘り方規模は長径130cm短径(50)cm深さ30cmである。遺物は須恵器杯碗類1片、近世国産陶磁器2片が出土している。出土遺物から近世に比定される。

**113・114号土坑**(第110図、P L .45)

**113号土坑** 位置 27R-3グリッド。114号土坑より後出。平面形は隅丸長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸144cm短軸61cm深さ19cmである。遺物は出土していない。

**114号土坑** 位置 27R-3グリッド。113号土坑より前出。平面形は隅丸長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸(164)cm短軸81cm深さ18cmである。遺物は出土していない。

**118・122号土坑**(第110・115図、P L .46・135、第55表)

**118号土坑** 位置 27R・S-2グリッド。122号土坑と近接するが重複しておらず、並存していた可能性がある。平面形はほぼ円形で、形態から桶を埋設した土坑とみられる。壁は緩やかに立ち上がる。底面は凸凹し、幅19~27cmの溝が直径約92cmで半周する。明確な粘土貼り、盛り土は認められない。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長径146cm短径108cm深さ35cmである。北壁際底面近くから銭(寛永通宝)(115図30)が出土する。掲載遺物のほか、土師器壺甕類2片、近世国産

陶器2片・在地系土器2片が出土している。出土遺物から近世に比定される。

**122号土坑** 位置 27R-2グリッド。118号土坑と近接するが重複しておらず、並存していた可能性がある。平面形はほぼ円形で、形態から桶を埋設した土坑とみられる。壁は緩やかに立ち上がる。底面はやや凸凹する。明確な粘土貼り、盛り土は認められない。埋没状況不詳。規模は長径132cm短径125cm深さ9cmである。遺物は出土していない。

**119号土坑**(第110図、P L .46)

**位置** 27Q-2・3グリッド。平面形は隅丸長方形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没状況不詳。規模は長軸137cm短軸88cm深さ6cmである。遺物は近世国産陶器1片が出土している。出土遺物から近世に比定される。

**120・126号土坑**(第111図、P L .46・47)

**120号土坑** 位置 27Q-9グリッド。平面形は不整形円形。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没か。規模は長径57cm短径47cm深さ17cmである。遺物は出土していない。

**126号土坑** 位置 27Q-2グリッド。平面形は溝状。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸354cm短軸50cm深さ23cmである。遺物は土師器壺甕類1片が出土するが混入とみられる。

**121号土坑**(第110図、P L .46)

**位置** 27S-3グリッド。平面形はほぼ円形。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長径62cm短径60cm深さ14cmである。遺物は出土していない。

**123号土坑**(第110図、P L .46・47)

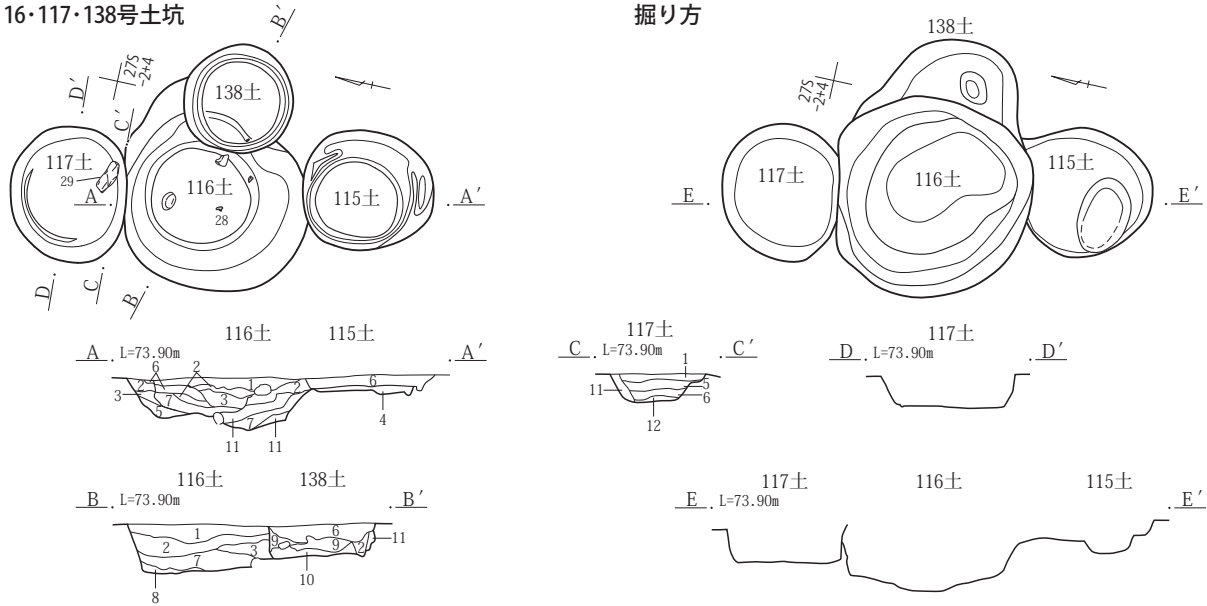
**位置** 27T-6グリッド。平面形は溝状。北壁は斜め、南壁は緩やかに立ち上がる。底面は凸凹する。埋没状況不詳。規模は長軸176cm短軸40cm深さ6cmである。遺物は出土していない。

**124号土坑**(第110図、P L .46・47)

**位置** 27S-2グリッド。平面形は隅丸細長方形。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長

115・116・117・138号土坑

掘り方

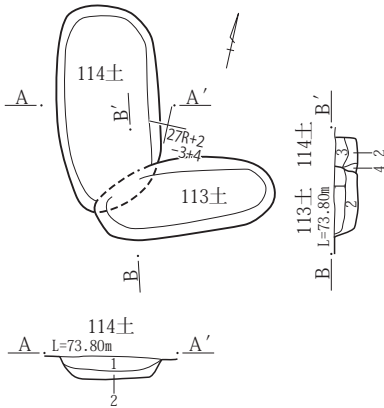


115・116・117・138号土坑

- 1 暗褐色土 黄色粒子少量、ローム粒子少量に含む。
- 2 暗褐色土 黄色粒子微量に含む。
- 3 暗褐色土 ローム小ブロックごく多量に含む。
- 4 にぶい黄褐色土 しまる。ローム小ブロック多量に含む。
- 5 黒褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 6 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量、黄色粒子微量に含む。

- 7 黒褐色土 ローム小ブロックやや多量、黄色粒子微量に含む。
- 8 黒褐色土 均質。
- 9 灰褐色シルト質土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 10 灰褐色土 礫混土(VII)小ブロック多量、黒褐色土小ブロックやや多量に含む。
- 11 灰褐色土+ローム大ブロック
- 12 褐色土 黄色粒子少量に含む。

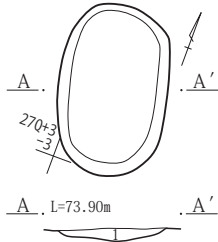
113・114号土坑



113・114号土坑

- 1 暗褐色砂質土 ローム小ブロックごく多量に含む。
- 2 黒褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
- 3 暗褐色土 ローム小ブロック多量、小礫少量に含む。
- 4 ローム大ブロック

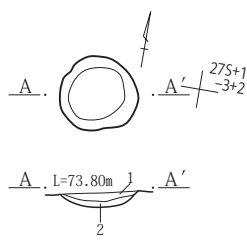
119号土坑



119号土坑

- 1 暗褐色砂質土 浅間A軽石少量に含む。

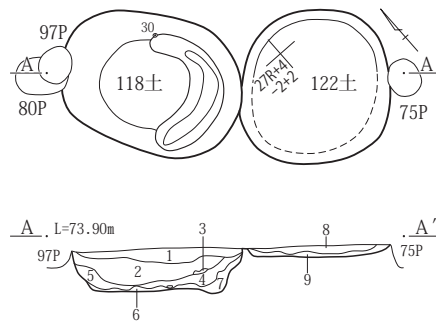
121号土坑



121号土坑

- 1 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 2 暗褐色土+ローム大ブロック

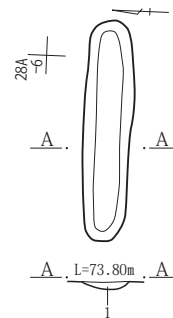
118・122号土坑



118・122号土坑

- 1 暗褐色土 ローム大ブロックやや多量、ローム小ブロックやや多量、黄色粒子微量に含む。
- 2 暗褐色土 灰色土小ブロックやや多量、ローム小ブロックやや多量に含む。
- 3 灰色土
- 4 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
- 5 黒褐色土 Y P少量に含む。
- 6 褐灰色土 ローム粒子少量、黄色粒子少量に含む。
- 7 褐灰色土 ローム粒子やや多量に含む。
- 8 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 9 暗褐色土 ローム大ブロック多量に含む。

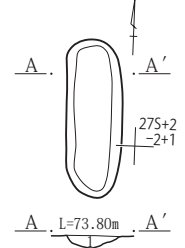
123号土坑



123号土坑

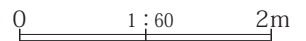
- 1 暗褐色土 浅間A軽石微量、ローム小ブロックやや多量に含む。

124号土坑



124号土坑

- 1 暗褐色土 やや砂質。ローム小ブロックやや多量に含む。



第110図 1区土坑(6)

軸126cm短軸45cm深さ10cmである。遺物は出土していない。  
125・145～149・151～153・158号土坑(第111・115図、  
P L .47、第55表)

**125号土坑 位置** 27Q-3グリッド。146・153号土坑より前出。重複により平面形は不明。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長径(124)cm短径(55)cm深さ23cmである。遺物は出土していない。

**145号土坑 位置** 27Q・R-3グリッド。147号土坑より前出。重複により東半は消滅するが、平面形は隅丸細長方形か。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸(94)cm短軸45cm深さ15cmである。埋没土から肥前磁器仏飯器(115図31)が出土する。出土遺物から近世に比定される。

**146号土坑 位置** 27Q-3グリッド。125・153号土坑より後出。重複により大部分消滅し、平面形は不明。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長径(138)cm短径60cm深さ22cmである。遺物は出土していない。

**147号土坑 位置** 27Q・R-3グリッド。145号土坑より後出で、148・153号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸細長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや丸みを持つ。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸(145)cm短軸82cm深さ24cmである。遺物は出土していない。

**148号土坑 位置** 27Q-3グリッド。149号土坑より後出で、153号土坑より前出。148号土坑と重複するが新旧関係不明。重複により大部分消滅し、平面形は不明。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや凸凹する。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長径(132)cm短径(62)cm深さ23cmである。遺物は出土していない。

**149号土坑 位置** 27Q-3グリッド。148号土坑より前出。重複により大部分消滅し、平面形は不明。壁は緩やかに立ち上がる。底面はやや凸凹する。埋没土はロームブロックをやや多量に含み人為埋没。規模は長径(85)cm短径51cm深さ6cmである。

**151号土坑 位置** 27Q-3グリッド。153号土坑より前出で、158号土坑と重複するが新旧関係不明。重複によ

り大部分消滅し、平面形は不明。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや凸凹する。埋没土はロームブロックをやや多量に含み人為埋没か。規模は長径(115)cm短径(82)cm深さ25cmである。遺物は出土していない。

**152号土坑 位置** 27Q-3グリッド。125・151・153号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや丸みを持つ。埋没土は詳細不明。規模は長軸(132)cm短軸65cm深さ24cmである。遺物は出土していない。

**153号土坑 位置** 27Q-3グリッド。125・148・151号土坑より後出で、146号土坑より前出。14号土坑と重複するが新旧関係不明。重複により平面形は不明で、2基の土坑が重複する可能性あり。東壁はほぼ垂直に立ち上がり、西壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没土は詳細不明。規模は長径(159)cm短径(58)cm深さ30cmである。遺物は出土していない。

**158号土坑 位置** 27Q-2グリッド。149・151号土坑と重複するが新旧関係不明。重複により大部分消滅し、平面形は不明。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はロームブロックをやや多量に含み人為埋没か。規模は長径(150)cm短径(39)cm深さ8cmである。遺物は出土していない。

**127・128号土坑(第111図、P L .47)**

**127号土坑 位置** 27S-4グリッド。128号土坑より後出。平面形はほぼ円形。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没土はロームブロックをやや多量に含み人為埋没か。規模は長径60cm短径(50)cm深さ13cmである。遺物は出土していない。

**128号土坑 位置** 27S-4グリッド。127号土坑より前出。平面形は不整形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦で、東端がピット状に凹む。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長径(62)cm短径(60)cm深さ30cmである。遺物は土師器杯椀類1片・壺甕類1片、須恵器杯椀類1片、中世国産陶器1片、その他土器類1片が出土するが混入とみられる。

**130号土坑(第111図、P L .47)**

**位置** 17Q-20グリッド。平面形は隅丸細長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土は均質で人為埋没。規模は長軸200cm短軸62cm深さ24cmである。遺物は出土していない。

**132号土坑(第111図、P L .47)**

**位置** 27R-1グリッド。平面形は乱れた長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土は均質で人為埋没。規模は長軸125cm短軸70cm深さ17cmである。遺物は土師器杯椀類2片が出土するが混入とみられる。

**133号土坑(第111図、P L .47・48)**

**位置** 17S-20グリッド。平面形は隅丸細長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没状況不詳。規模は長軸241cm短軸69cm深さ6cmである。遺物は出土していない。

**134号土坑(第111図、P L .47・48)**

**位置** 17S-19・20グリッド。53号溝と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸152cm短軸97cm深さ22cmである。遺物は出土していない。

**136・137・160号土坑(第111図、P L .48)**

**136号土坑 位置** 27S-3グリッド。160号土坑より後出。平面形は円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦で、北西部は幅23cmの細い溝が直径約54cmの円形にめぐり、形態から桶を埋設した土坑とみられる。粘土貼りは認められない。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸123cm短軸96cm深さ7cmである。遺物は出土していない。

**137号土坑 位置** 27S-3グリッド。160号土坑より後出。平面形は整った円形で、形態から桶を埋設した土坑とみられる。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面中央部は平坦で、幅8～22cmの細い溝が直径約105cmの円形にめぐり、外側は凸凹する。粘土貼りは認められない。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長径106cm短径104cm深さ22cm、掘り方規模は長径144cm短径117cm深さ22cmである。遺物は須恵器壺甕類1片が出土するが混入とみられる。

**160号土坑 位置** 27S-3グリッド。136・137号土坑より前出。重複により大部分消滅し、平面形は不明。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや凸凹する。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没か。規模は長径96cm短径(86)cm深さ20cmである。遺物は出土していない。

**139号土坑(第112図、P L .48)**

**位置** 28A-1グリッド。平面形は整った円形。壁は緩

やかに立ち上がる。底面は凸凹する。埋没状況不詳。規模は長径93cm短径82cm深さ9cmである。遺物は土師器壺甕類1片、近現代陶磁器1片が出土している。出土遺物から近世に比定されるが、近現代の可能性も残る。

**140号土坑(第112図、P L .48)**

**位置** 27S-4グリッド。攪乱により北半は消滅するが、平面形はほぼ円形か。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長径54cm短径(36)cm深さ22cmである。遺物は出土していない。

**141・155号土坑(第112図、P L .48)**

**141号土坑 位置** 27S-3グリッド。153号土坑より後出。平面形はほぼ円形で、形態から桶を埋設した土坑とみられる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没土は中位にロームブロックを多量に含み、桶の設置面であった可能性あり。北壁に8cmの盛り土がある。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長径65cm短径54cm深さ47cmである。遺物は土師器壺甕類1片、須恵器壺甕類1片が出土するが混入とみられる。

**155号土坑 位置** 27S-3グリッド。141号土坑より前出で、105号ピットと重複するが新旧関係不明。重複により南半を消滅し、平面形は不明。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は凸凹する。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長径(72)cm短径52cm深さ22cmである。遺物は出土していない。

**142・143号土坑(第112図、P L .48・49)**

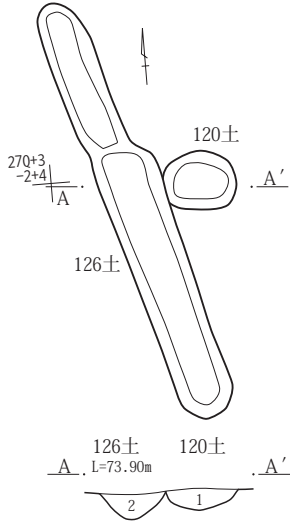
**142号土坑 位置** 27S-3グリッド。平面形はほぼ円形で、形態から桶を埋設した土坑とみられる。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦で、粘土貼りは認められない。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長径62cm短径52cm深さ12cmである。遺物は出土していない。

**143号土坑 位置** 27S-3グリッド。平面形はほぼ円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長径52cm短径46cm深さ15cmである。遺物は出土していない。

**144号土坑(第112図、P L .49)**

**位置** 27S-4グリッド。平面形はほぼ円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は丸みを持ち、南端は凹む。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長径54cm短径50cm深さ39cmである。遺物は出土していない。

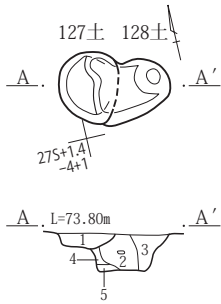
120・126号土坑



120・126号土坑

- 1 灰褐色砂質土 浅間A軽石少量、ローム小ブロック少量を含む。
- 2 黒褐色砂質土 浅間A軽石微量、小礫少量を含む。

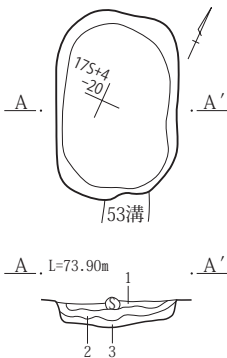
127・128号土坑



127・128号土坑

- 1 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量、浅間A軽石微量を含む。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロック多量を含む。
- 3 暗褐色土 黄色粒子微量、浅間A軽石微量を含む。
- 4 黄褐色土 黒褐色土小ブロックやや多量を含む。
- 5 黒褐色土 ローム小ブロックやや多量を含む。

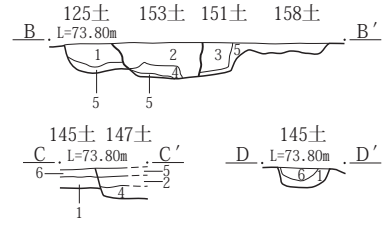
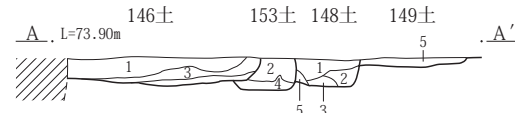
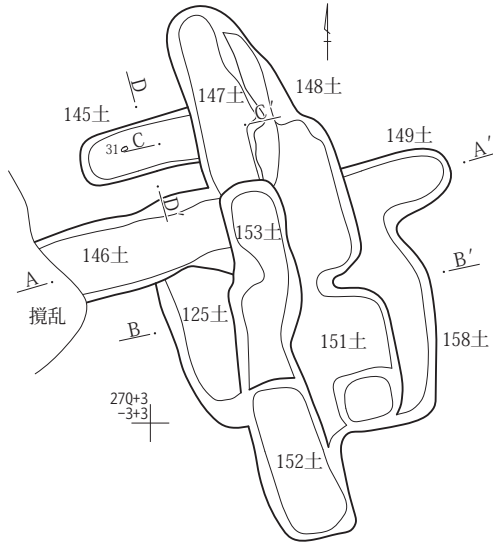
134号土坑



134号土坑

- 1 黒褐色土 ローム大ブロック少量を含む。
- 2 黒褐色土 ローム小ブロックやや多量、ローム大ブロック少量を含む。
- 3 黒褐色土 ローム大ブロック多量を含む。

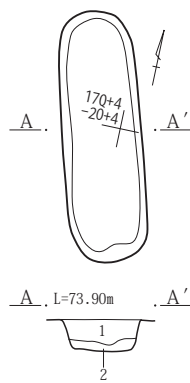
125・145 ~ 149・151 ~ 153・158号土坑



125・145・146・148・149・153号土坑

- 1 暗褐色土 浅間A軽石少量、ローム小ブロックやや多量、ローム大ブロック少量を含む。
- 2 暗褐色土 浅間A軽石少量、ローム大ブロック多量を含む。
- 3 暗褐色土 ローム小ブロック少量を含む。
- 4 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量、ローム大ブロックやや多量を含む。
- 5 暗褐色土 ローム大ブロック少量を含む。
- 6 暗褐色土 浅間A軽石微量、褐色土大ブロック多量を含む。植物攪乱大きい。

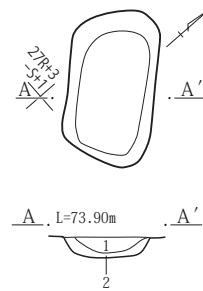
130号土坑



130号土坑

- 1 暗褐色土 ローム小ブロック少量を含む。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量を含む。

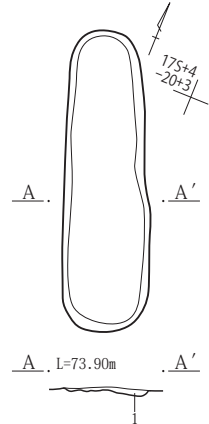
132号土坑



132号土坑

- 1 暗褐色土 浅間A軽石微量、ローム小ブロック多量を含む。
- 2 黒褐色土 ローム小ブロックやや多量、ローム大ブロック少量を含む。

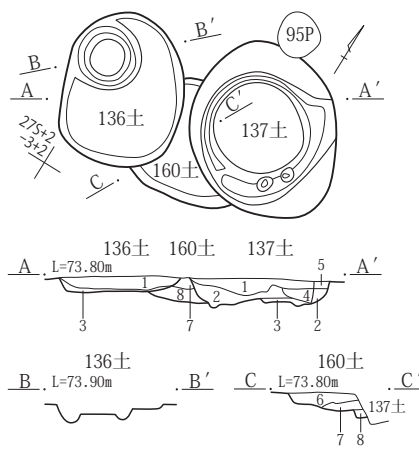
133号土坑



133号土坑

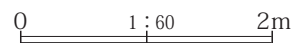
- 1 暗褐色砂質土 しまる。浅間A軽石微量、小礫少量を含む。

136・137・160号土坑



136・137・160号土坑

- 1 暗褐色土 ローム小ブロック多量、浅間A軽石少量を含む。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロック少量を含む。
- 3 暗褐色土 しまる。灰色シルト大ブロックやや多量を含む。
- 4 灰褐色土 ローム小ブロック多量を含む。
- 5 灰褐色土 黄色粒子多量、浅間A軽石少量を含む。
- 6 灰褐色土 ローム小ブロック少量、浅間A軽石少量を含む。
- 7 灰褐色土 浅間A軽石少量を含む。
- 8 暗褐色土 ローム小ブロック多量を含む。



第111図 1区土坑(7)

## 150号土坑(第112図、P L .49)

**位置** 27Q-4グリッド。平面形は楕円形。壁はやや斜めに立ち上がる。底面は凸凹する。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長径81cm短径57cm深さ8cmである。遺物は出土していない。

## 154号土坑(第112図、P L .49)

**位置** 27S-4グリッド。平面形はほぼ円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は凸凹する。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長径48cm短径45cm深さ15cmである。遺物は出土していない。

## 163号土坑(第112図、P L .49)

**位置** 28D-5グリッド。46号土坑、1号墓と重複するが新旧関係不明。重複により大部分消滅するが、平面形は隅丸長方形か。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸(127)cm短軸84cm深さ47cmである。状況から墓の可能性が高い。遺物は出土していない。

## 164・167号土坑(第112図、P L .49)

**164号土坑 位置** 27R-3グリッド。167号土坑と重複するが新旧関係不明。円形の硬化面で確認しており、形態から桶を埋設した土坑とみられる。壁は残っていない。地山が硬化しており、盛り土はない。規模は長径128cm短径115cm深さ不明である。遺物は土師器杯椀類4片・壺甕類6片が出土するが混入とみられる。

**167号土坑 位置** 27R-4グリッド。164号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形はほぼ円形。形態から桶を埋設した土坑とみられる。壁は斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。埋没状況不詳。規模は長径93cm短径82cm深さ9cmである。遺物は出土していない。

## 176号土坑(第112図、P L .49・50)

**位置** 28E-8グリッド。平面形は隅丸細長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没か。規模は長軸144cm短軸40cm深さ8cmである。遺物は出土していない。

## 180号土坑(第112図、P L .49・50)

**位置** 28D-9グリッド。129号ピットより前出。平面形はほぼ楕円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没状況不詳。規模は長径73cm短径57cm深さ7cmである。遺物は出土していない。

## 188号土坑(第112図、P L .50)

**位置** 28E-9・10グリッド。191号土坑より後出か。平面形は楕円形。壁は緩やかに立ち上がる。底面は凸凹する。自然埋没と思われる。規模は長径107cm短径80cm深さ37cmである。遺物は出土していない。

## 195号土坑(第112・115図、第55表)

**位置** 27Q-8グリッド。6・81号溝より後出と推定される。両溝との重複調査により不明となる。壁は緩やかに立ち上がる。底面は北へ傾斜し、やや凸凹する。埋没状況不詳。規模は長径(189)cm短径(95)cm深さ25cmである。埋没土から瓦(115図32)が出土する。出土遺物から近世に比定される。

## 206号土坑(第113図、P L .50)

**位置** 17T~18A-20グリッド。平面形は中央がくびれる長方形。壁は緩やかに立ち上がる。底面は凸凹し、中央で二分される。埋没状況不詳。規模は長軸155cm短軸88cm深さ6cmである。遺物は出土していない。

## 207号土坑(第113・115図、P L .50・135、第55表)

**位置** 18A-18グリッド。平面形はT字形で、長方形の土坑の西辺に浅い落ち込みが付く。土坑2基が重複する可能性あり。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦で、東壁下のピット2基は、攪乱の可能性もある。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没か。規模は長軸160cm短軸79cm深さ34cmである。埋没土から美濃陶器志野丸皿(115図33)が出土する。掲載遺物のほか、須恵器杯椀類2片が出土している。出土遺物から17世紀前半に比定される。

## 209号土坑(第113・115図、第55表)

**位置** 28C-2・3グリッド。平面形は整った正方形で、角は丸い。断面皿状。壁はやや斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土下位はローム大ブロックが平面的にあり、人為的に張られた可能性もあるが、上層は乱れて貼り床状ではない。規模は長軸134cm短軸129cm深さ16cmである。埋没土から瀬戸陶器すり鉢(115図34)が出土する。掲載遺物のほか、土師器壺甕類2片が出土している。出土遺物から18世紀前半に比定される。

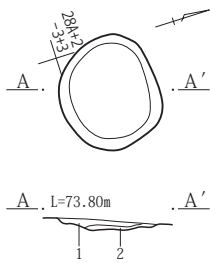
**備考** 調査段階3次9号土坑より名称変更。

## 215号土坑(第113・115図、P L .50、第55表)

**位置** 27T-2グリッド。平面形はほぼ円形。断面形は皿状。底面は丸みを持つ。確認面から底面まで隙間なく円礫で充填される。円礫は玉石が主体で、こぼし大の円

第4章 発掘調査の記録

139号土坑

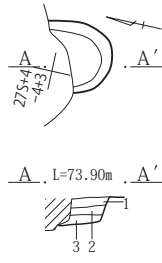


139号土坑

- 1 灰褐色砂質土 浅間A軽石微量、中礫微量に含む。
- 2 灰褐色シルト

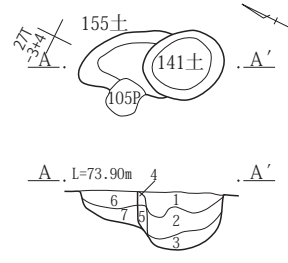
140号土坑

140号土坑



- 1 灰褐色土 浅間A軽石少量、ローム小ブロック少量に含む。
- 2 灰褐色土 浅間A軽石少量、ローム小ブロック微量に含む。
- 3 灰褐色土 浅間A軽石少量、ローム大ブロック少量に含む。

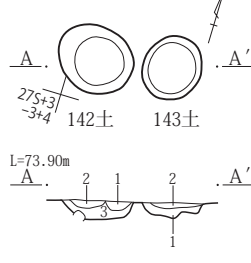
141・155号土坑



141・155号土坑

- 1 灰褐色砂質土 浅間A軽石少量に含む。
- 2 灰褐色砂質土+ローム大ブロック
- 3 黒褐色砂質土 均質。
- 4 灰褐色土+ローム大ブロック
- 5 黒褐色土 ローム大ブロックやや多量に含む。
- 6 暗褐色砂質土 浅間A軽石少量に含む。
- 7 暗褐色土 白色粒子少量に含む。

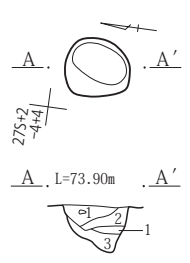
142・143号土坑



142・143号土坑

- 1 暗褐色砂質土 浅間A軽石少量に含む。
- 2 暗褐色砂質土 浅間A軽石少量、灰色シルトやや多量に含む。
- 3 暗褐色土 やや砂質。炭化物粒子微量、ローム粒子微量に含む。

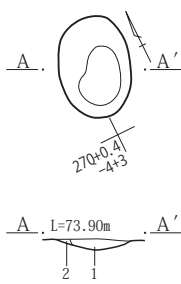
144号土坑



144号土坑

- 1 黄褐色土+黒褐色土
- 2 黒褐色砂質土 ローム小ブロック少量に含む。
- 3 黒褐色砂質土 均質。

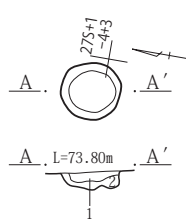
150号土坑



150号土坑

- 1 黒褐色土 暗褐色土をシミ状に含む。
- 2 暗褐色土 均質。

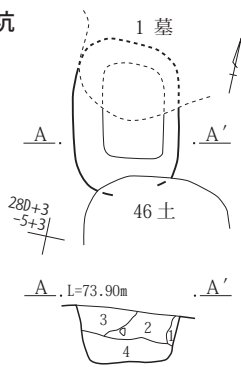
154号土坑



154号土坑

- 1 黄褐色土 浅間A軽石微量、暗褐色土やや多量に含む。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。

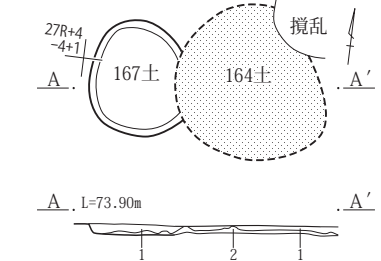
163号土坑



163号土坑

- 1 黄褐色土 黒褐色土大ブロック少量に含む。
- 2 灰褐色土 黒褐色土大ブロックやや少量に含む。
- 3 灰褐色土 黄色粒子多量に含む。
- 4 灰褐色土 ローム大ブロック多量、黒褐色土大ブロックやや多量に含む。

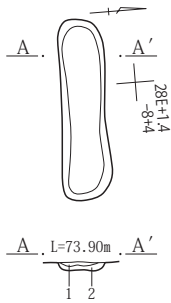
164・167号土坑



164・167号土坑

- 1 暗褐色土 浅間A軽石微量に含む。
- 2 暗褐色土 ローム大ブロック少量に含む。

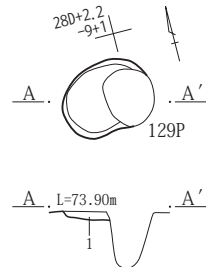
176号土坑



176号土坑

- 1 暗褐色土 ややしまる。ローム大ブロックやや多量に含む。
- 2 暗褐色土 ややしまる。ローム小ブロックやや多量に含む。

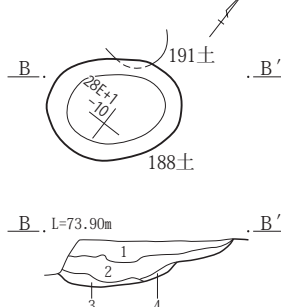
180号土坑



180号土坑

- 1 灰褐色土 浅間A軽石やや多量に含む。

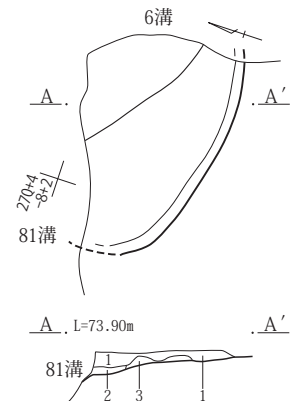
188号土坑



188号土坑

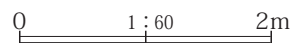
- 1 灰褐色土 小礫やや多量に含む。
- 2 灰褐色土 黄色粒子やや多量に含む。
- 3 暗褐色土 黄色粒子やや多量に含む。
- 4 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。

195号土坑



195号土坑

- 1 暗褐色土 白色粒子微量に含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子微量に含む。
- 3 暗褐色土+ローム大ブロック



第112図 1区土坑(8)



礫も若干含む。規模は長径134cm短径120cm深さ22cmである。礫に混じって瀬戸・美濃陶器が出土する。掲載遺物のほか、須恵器杯椀類2片・壺甕類1片が出土している。出土遺物から18世紀前半に比定される。何らかの構造物の基礎地業か。

219号土坑(第113図)

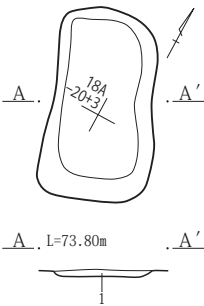
位置 28E-4グリッド。5号墓と重複するが新旧関係不明。平面形は不整形円形。壁は斜めに立ち上がる。底面

は丸みを持つ。埋没状況不詳。調査段階では30号溝として調査を行った。規模は長径108cm短径(82)cm深さ46cmである。遺物は出土していない。

220号土坑(第113図)

位置 18B-8グリッド。平面形はピット状。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没土は詳細不明。規模は長径50cm短径(37)cm深さ38cmである。遺物は出土していない。

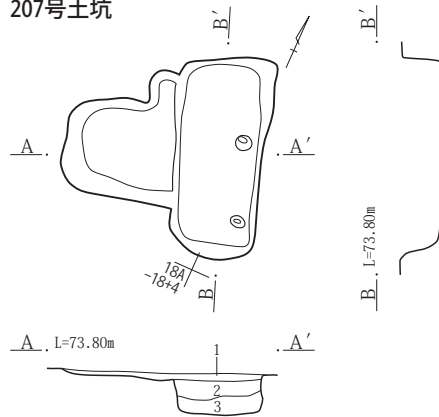
206号土坑



206号土坑

- 1 黒色土 しまりやや粘性あり。ローム小ブロック含む。

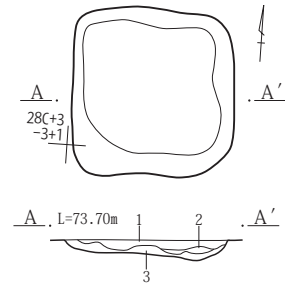
207号土坑



207号土坑

- 1 黒褐色土 しまりなく粘性ない。ローム小ブロック少量に含む。
- 2 黒褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
- 3 黒褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。

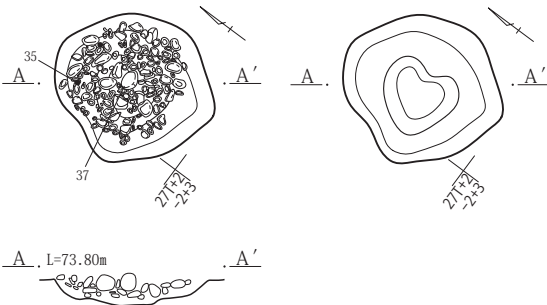
209号土坑



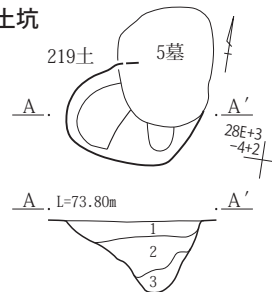
209号土坑

- 1 黒褐色土 浅間A軽石・ローム小ブロック含む。
- 2 黒色砂質土 浅間A軽石含む。
- 3 ローム大ブロック 黒褐色土大ブロック少量に含む。

215号土坑



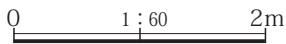
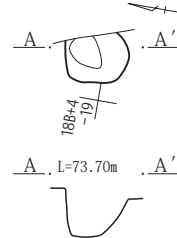
219号土坑



219号土坑

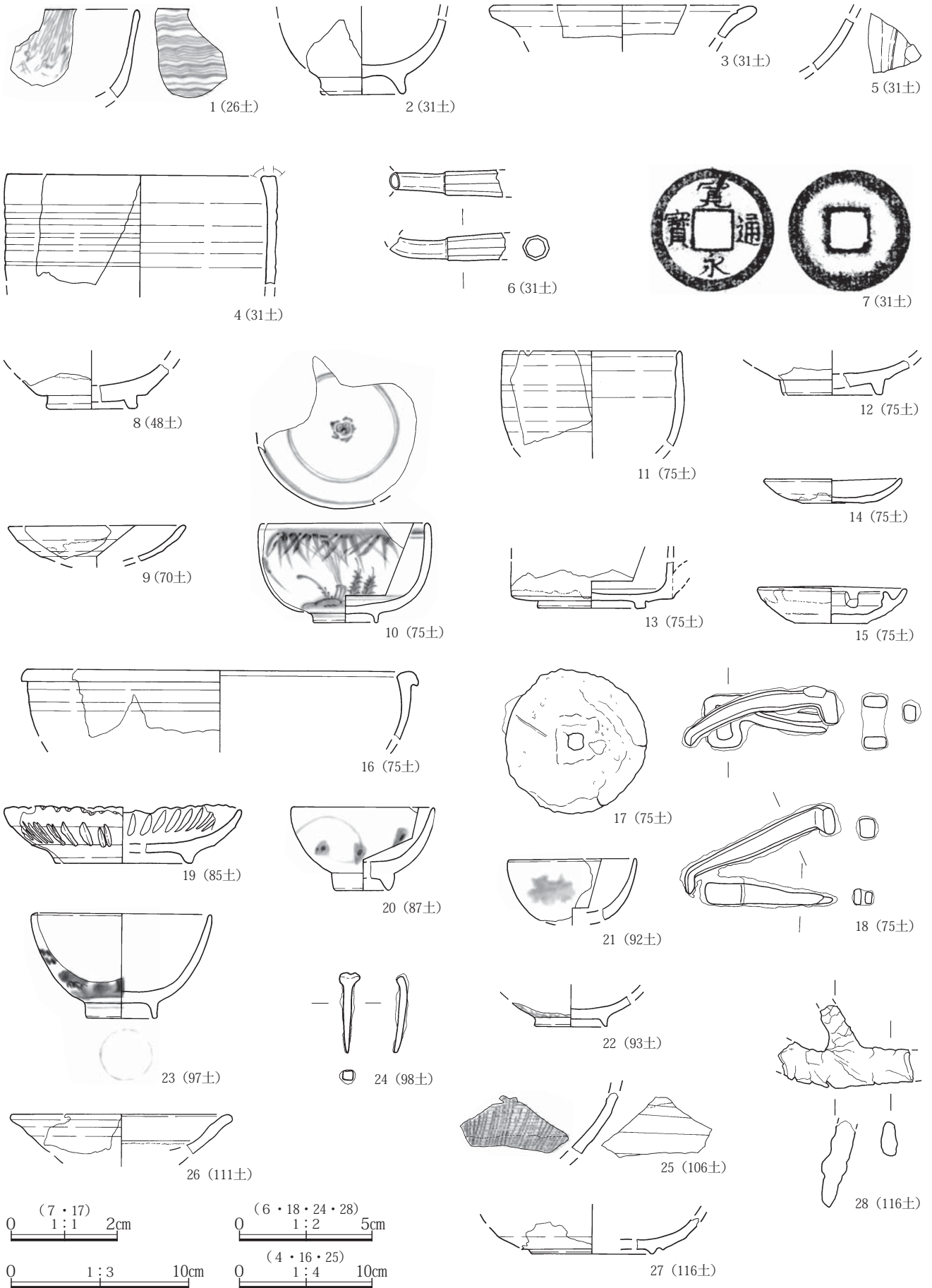
- 1 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
- 2 黒褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
- 3 黒褐色シルト質土 空隙多い。根か木片含む。

220号土坑

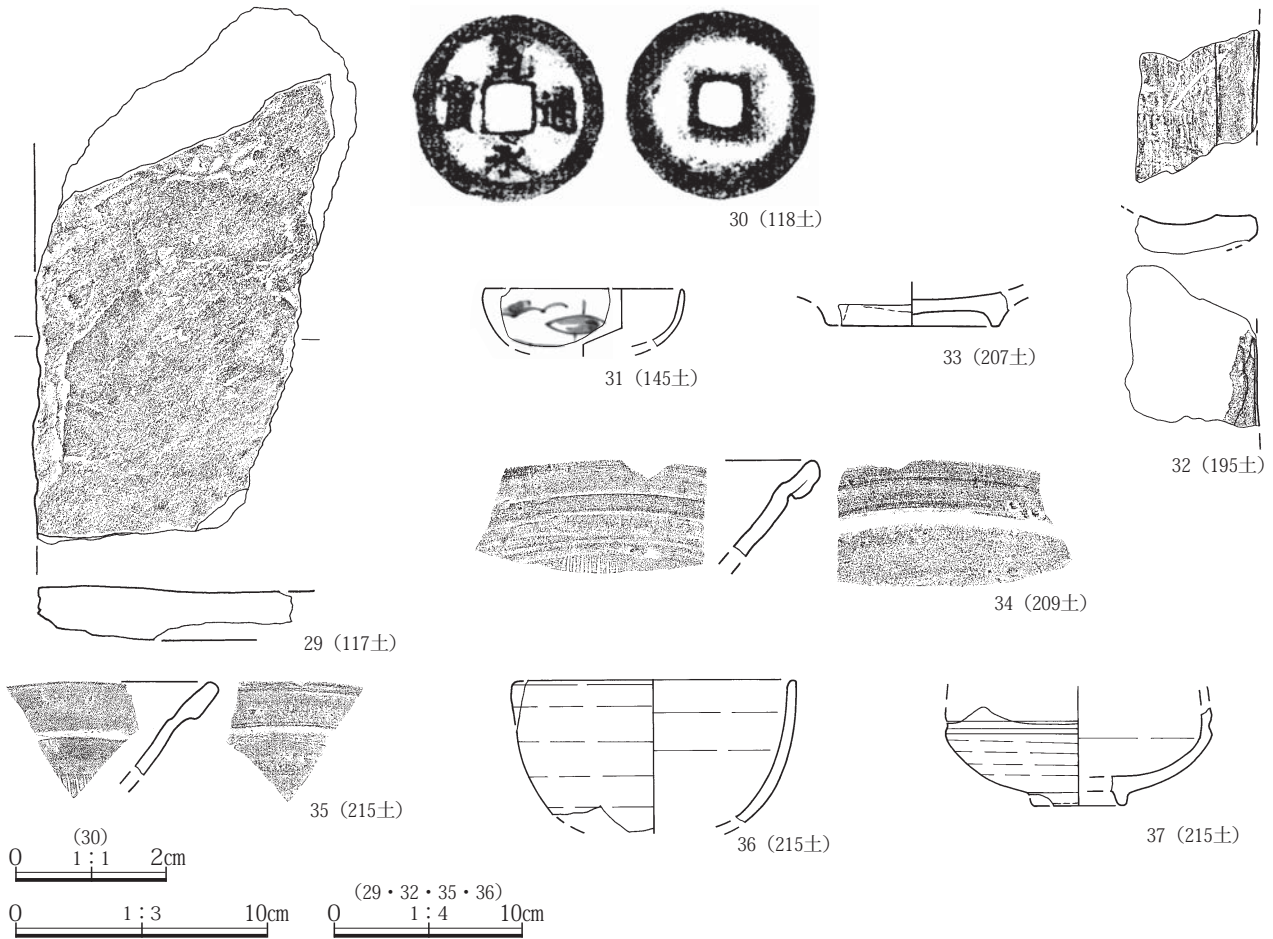


第113図 1区土坑(9)

第4章 発掘調査の記録



第114図 1区土坑出土遺物(1)



第115図 1区土坑出土遺物(2)

第55表 1区1号土坑出土遺物

挿 図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備 考
第114図	1	肥前陶器	碗	26土	-	-	-	口縁～ 体部片		暗灰黄	外面は波状の白土掛け、内面は縦位樹枝状の白土掛け。	江戸時代。
第114図	2	肥前陶器	呉器手 碗	31土	-	(4.7)	-	1/3		淡黄	高台内の挟りは浅い。高台端部を除き透明釉。細かい貫入が入る。	17世紀後半～ 18世紀初頭。
第114図	3	瀬戸陶器		31土	(14.6)	-	-	1/8		灰白	口縁部は外反し、内面に低い段差を有する。口縁部内面から外面に錆釉。	登窯6小期。
第114図	4	瀬戸陶器	半胴甕	31土	(20.0)	-	-			淡黄	口縁部外面下に浅い凹線2条。口縁端部上面は小さく窪む。口縁端部内外面上面の器表は使用による摩滅。	登窯6小期。
第114図 PL.135	5	龍泉窯 系青磁	碗	31土	-	-	-	体部片		オリ ブ灰・ 灰白	外面鑄蓮弁文。	横田・森田分 類の I-5-b 類。
第114図	8	瀬戸陶器	天目碗	48土	-	(4.9)	-	1/2		灰黄	体部外面は回転鑄削り。高台脇は水平に削る。内面から体部外面に鉄釉。	登窯4小期。
第114図	9	美濃陶器	灯火皿	70土	(5.0)	-	-	1/5		灰黄	外面口縁部下は回転鑄削り。内面から口縁部外面に灰釉。	登窯8・9小 期。
第114図 PL.135	10	肥前磁器	丸碗	75土 +1cm	(9.4)	3.4	5.5	1/2		白	外面に雪持ち竹と笄文。孟宗譚か。口縁部と底部内面周縁に圈線。底部内面に簡略化した五弁花。	18世紀後半
第114図	11	美濃陶器	尾呂茶 直	75土底 直	(13.6)	-	-	口縁部 片1/6		黄灰	内外面に鉛釉。外面の口縁部以下は回転鑄削り。	登窯5・6小 期。
第114図	12	美濃陶器	尾呂茶 碗	75土底 直	-	(5.5)	-	底部片		淡黄	内面に鉛釉。外面に鉄化粧。	登窯6小期。
第114図	13	美濃陶器	汁次	75土底 直	-	6.0	-	底部		灰黄	体部外面に褐色の鉄釉。体部外面下位に取っ手基部貼り付け部残る。内面は鉄化粧風に釉が薄くかかる。	登窯8・9小 期。
第114図 PL.135	14	美濃陶器	灯火皿	75土 +9cm	7.6	3.4	1.4	完形		淡黄	全面錆釉施釉後、外面口縁部以下を拭う。底部内外面に重焼痕。	登窯8・9小 期。
第114図 PL.135	15	美濃陶器	灯火受 皿	75土 +15cm	8.2	4.0	2.0	完形		淡黄	全面錆釉施釉後、外面口縁部以下を拭う。体部外面下位に重焼痕。	登窯9小期。
第114図	16	瀬戸陶器	練鉢	75土 +4cm	(28.6)	-	-	口縁部 片		灰黄	口縁部は外方に折り返すように外反。端部外面は尖る。内外面に灰釉。	登窯9小期。
第114図	19	美濃陶器	菊皿	85土 +4cm	(13.2)	(7.6)	3.1	1/4		灰白	内面から高台外面に灰釉。粗い貫入が入る。	登窯4小期。
第114図	20	肥前磁器	碗	87土 +30cm	(8.0)	(3.0)	4.6	1/2		灰白	外面に唐草文。	18世紀中頃～ 後半。
第114図	21	肥前磁器	小碗	92土 +37cm	(7.2)	-	-	1/3		灰白	下半の釉が白濁。外面にコンニャク印判。文様不鮮明。焼成不良。	18世紀中頃～ 後半。
第114図	22	肥前磁器	碗	93土	-	(3.8)	-	1/3		白	外面は氷裂文か。	18世紀前半～ 中頃か。

第4章 発掘調査の記録

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第114図	23	肥前磁器	碗	97土	(10.0)	4.0	5.8	底部完		灰白	外面に雪輪梅樹文か雪輪草花文。高台内に1重圏線。	17世紀末～18世紀中頃。
第114図	25	肥前陶器	鉢か皿	106土 +5cm	-	-	-	体部片		暗褐	内面白土掛け後、櫛状工具により掻き取る。内面下位は銅緑釉、中位以上から外面上位に透明釉。	江戸時代。
第114図	26	瀬戸陶器	輪禿皿	111土	(12.2)	-	-	1/8		灰黄	口縁部は外反。内外面に灰釉。底部内面の釉をドーナツ状に掻き取る。	登窯5小期。
第114図 PL.135	27	瀬戸陶器	志野皿	116土	-	(6.8)	-	1/6		灰黄	高台脇は削り込む。内面から高台内側に長石釉。	登窯2小期。
第115図	31	肥前磁器	仏飯器	145土 +5cm	(7.7)	-	-	1/5		白	外面にやや簡略化した染付。	江戸時代。
第115図	32	瓦	不詳	195土	-	-	-	破片		暗灰	断面は灰白色、器表は暗灰色。凸面の器表は剥離。	江戸時代か。
第115図 PL.135	33	美濃陶器	志野丸皿	207土	-	-	-	底部片		灰白	内面から体部と高台境に長石釉。高台は高い。	登窯1・2小期。
第115図	34	瀬戸陶器	すり鉢	209土	-	-	-	口縁部片		淡黄	口縁部は外方に折り返す。口縁部は内湾し、内面下部に段をなす。	登窯6小期。
第115図	35	瀬戸陶器	すり鉢	215土	-	-	-	口縁部片		黄灰	口縁部は外面に折り返したように肥厚。口縁部下内面に明瞭な段差。	登窯6小期。
第115図	36	美濃陶器	丸碗	215土	(11.1)	-	-	1/4		灰白	外面口縁部下は回転鑿削り。内外面に灰釉。	登窯5～7小期。
第115図	37	美濃陶器	湯飲み	215土	-	3.7	-	底部片		淡黄	内面から高台内に錆釉。高台端部は無釉。口縁部と体部境は屈曲し、口縁部外面に凹線を廻らす。体部外面は回転鑿削り。	登窯7小期。
挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置	径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	残存	形・成調整等			
第114図 PL.135	6	銅製品 雁首	31土	-	-	-	-	雁首欠	肩部は明瞭な段をなし、挿入部は八角形。脂返しは湾曲。			
第114図 PL.135	7	銅銭 寛永通寶	31土	23.12	23.06	1.05～ 1.06	2.16	完形	新寛永。遺存状態は良好。「寛」字部分の鋳型に傷がある。			
第114図 PL.135	17	鉄銭か 寛永通寶か	75土	-	-	-	-	完形	錆化著しく、土が強固に付着。銭文判読不可能。赤錆に被われ、磁性が認められるため鉄銭の可能性が高い。			
第114図 PL.135	18	鉄製品 不明	75土 底直上	-	-	-	-	完形	2点が錆着。強固な土の錆着があり詳細不明。1点は両端が両端が尖った棒状鉄を中央付近で曲げ、曲げた部分を丸めて「9」字状とする。他の1点は、一端が細い棒状鉄の両端を直角に近く曲げる。			
第114図 PL.135	24	鉄製品 釘か	98土	30.3	-	-	-	完形か	先端は尖る。錆により頭部形状不明。			
第114図 PL.135	28	鉄製品 不明	116土 +30cm	-	-	-	-	破片	亀裂状の錆割れが認められる。鋳物の可能性高い。全体形状は不明。			
第115図 PL.135	30	銅銭 寛永通寶	118土 +10cm									
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況			備考
第115図 PL.135	29	板碑	117土 +16cm		雲母石英片 岩	(28.4)	(17.0)	1733.6	上辺に蓮座を残す。左辺側に板碑側縁を部分的に残す。			
-	38	板碑片	17土	体部破片	緑色片岩	(6.2)	(4.2)	48.7	厚さ1.1cm。背面側は丁寧に磨き整形。			非実測
-	39	火打石	85土	礫片	玉髓	(2.6)	1.6	5.1	裏面側にはバルブが残り、剥片に分類されるものがあるが、剥片端部のエッジが潰れており、機能部再生に伴う破片を利用したものということになろう。			非実測

4 井戸

調査区中央西端で2基が並んで検出された。形態は円筒形と漏斗状に分かれる。ほぼ同時期の遺構であり、1号礎石列や周辺の土坑との関連が想定される。

1号井戸(第116図、P L.50・51・136、第56表)

位置 27T-9グリッド。重複 なし。

確認面形状と規模 整った円形。長径1.51m短径1.32m。

底面形状と規模 ほぼ円形。長径1.0m短径0.98m。

断面形 円筒形。深さ2.14m。

埋没状況 砂質土で埋まり、上層は徐々に埋まり、自然埋没か。

遺物 埋没土から肥前磁器、瀬戸・美濃陶器あわせて7点、金属器2点が出土する。掲載遺物のほか、土師器壺甕類14片、須恵器杯椀類5片・壺甕類1片、近世国産陶磁器

2片、近現代陶磁器1片、板碑片5点が出土している。

時期 17世紀末～19世紀前半に比定される。

2号井戸(第116図、P L.51・136、第56表)

位置 28A-8・9グリッド。重複 なし。

確認面形状と規模 楕円形。長径3.10m短径2.56m。

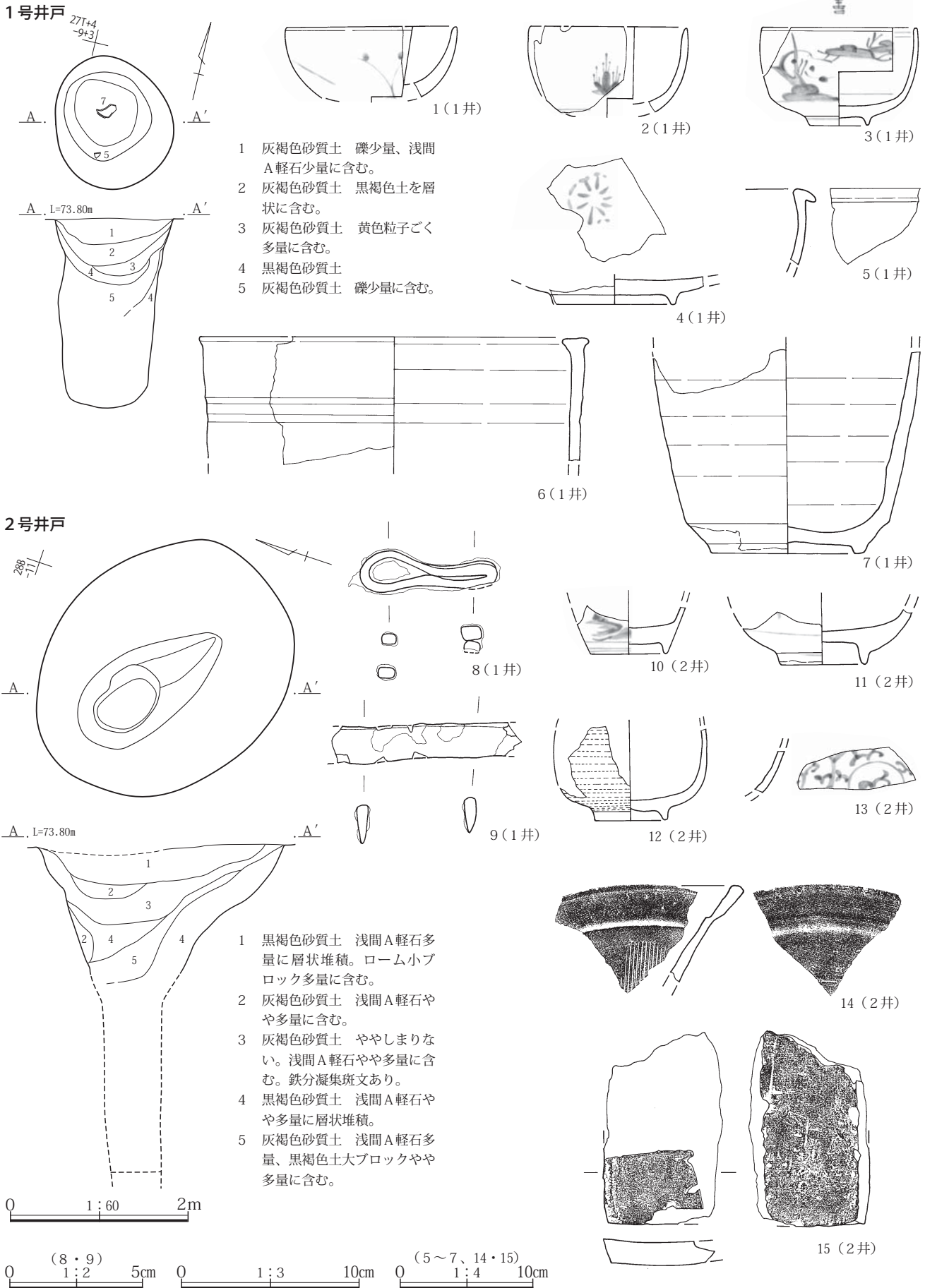
底面形状不明。

断面形 漏斗状。深さ3.66m以上。

埋没状況 上位まで南側から埋められ、上層は徐々に埋まり、自然埋没か。

遺物 埋没土から肥前磁器・瀬戸陶器(10～14)、瓦(15)が出土する。掲載遺物のほか、土師器杯椀類18片・壺甕類27片、須恵器杯椀類17片・壺甕類10片、埴輪2片、近世国産陶磁器18片・在地系土器12片、その他土器類2片が出土している。

時期 17世紀末～19世紀前半に比定される。



第116図 1区1・2号井戸と出土遺物

第4章 発掘調査の記録

第56表 1区1・2号井戸出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第116図	1	肥前磁器	碗	1井	(9.5)	-	-	1/3		灰白	外面は雪輪草花文か。体部下位の器壁は厚い。	18世紀中～後半。
第116図	2	肥前磁器	碗	1井	(8.7)	-	-	1/5		白	外面に若松文。体部下位に1重圏線。圏線下に施文。釉は部分的に白濁し焼成不良。	17世紀末～18世紀中頃。
第116図 PL.136	3	肥前磁器	丸碗	1井	8.6	3.3	5.5	口縁部 1/3欠		白	外面は松文を主文様とし、草文を従文様とする。口縁部内面は2重圏線、底部内面は1重圏線内に「喜」字文。	18世紀中頃～後半。
第116図	4	美濃陶器	摺絵皿	1井	-	(6.7)	-	底部片		灰オリーブ・灰	内面に鉄絵具による型紙摺り。文様は不鮮明。内面に灰釉。	登窯6小期。
第116図	5	瀬戸陶器	練鉢	1井	-	-	-	口縁部 片		灰白	口縁部は外方に折り曲げるように反外。内外面に灰釉。細かい貫入が入る。	登窯10小期。
第116図	6	瀬戸陶器	半胴甕	1井	(29.0)	-	-	1/8		暗褐・褐灰	外面口縁部下に2条の凹線。口縁部は「T」字状。内外面に厚めの錆釉。	登窯8・9小期。
第116図 PL.136	7	瀬戸陶器	半胴甕	1井	-	(11.5)	-	体1/2 底部完		灰白	体部外面下位は面取り。高台脇は小さく削り込む。内面から体部外面下位に厚めの錆釉。底部内面に小さい団子状の目痕3箇所。	登窯6・7小期。
第116図	10	肥前磁器	猪口	2井	-	4.2	-	底部		灰白	体部は直線的に開く。底部器壁は厚い。高台は底部外面を抉り、内傾する。体部外面に染付。	18世紀初頭～後半。
第116図	11	肥前陶器	碗	2井	-	(4.7)	-	1/2		灰	陶胎染付。高台内抉り込む。釉に透明感があるが、染付は不鮮明。高台内は削り込む。	17世紀末～18世紀中頃。
第116図	12	瀬戸陶器	鎧茶碗	2井	-	4.0	-	底部完		灰白	外面に回転施文具による文様。内面から口縁部外面に銅緑釉、体部外面から高台内に灰釉。高台端部は無釉。	登窯9小期。
第116図	13	肥前磁器	瓶類	2井	-	-	-	体部片		灰白	外面に唐草文。内面は無釉。	江戸時代。
第116図	14	瀬戸陶器	すり鉢	2井	-	-	-	口縁部 片		灰白	外面口縁部下は外反し、内面は明瞭な段をなす。内外面に錆釉。	登窯9小期。
第116図 PL.136	15	瓦	平瓦か	2井	-	-	1.7	破片	B	にぶい黄橙	両面共に撫で。	時期不詳。
挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置	径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	残存	形・成調整等			
第116図 PL.136	8	鉄製品 不明	1井	-	-	-	-	完形か	リング状製品が潰れた状態となる。当初形状は不明。			
第116図 PL.136	9	鉄製品 刀子か	1井	-	13.3	4.8	-	破片	棟厚のわりに身幅が狭い。両端欠損。			
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況			備考
-	16	板碑片?	1井	体部破片	緑色片岩	(9.6)	(11.6)	205.2	裏面側に逆台形状の側縁が残る。			非実測
-	17	板碑片?	1井	体部破片	緑色片岩	(7.5)	(9.7)	222.7	厚さ1.8cm。			非実測
-	18	板碑片	1井	基部破片	緑色片岩	(21.0)	(13.3)	640.1	厚さ1.3cm。裏面側に工具痕が残る。			非実測
-	19	板碑片	1井	体部破片	緑色片岩	(13.5)	(10.2)	298.6	厚さ1.2cm。風化して剥離が著しい。			非実測
-	20	板碑片	1井	基部破片	緑色片岩	(24.0)	(19.3)	1443.2	厚さ1.7cm。工具痕は不明瞭。			非実測

5 墓

土壙墓13基と土坑6基、あわせて19基である。土坑としたものは、調査中に墓と判明したものも含めて、出土遺物の混乱を避けるため、名称をそのままとしてある。本来、墓としても問題はない。

墓は2か所に分布するが、1号溝東側が16基とほとんどを占め、103号溝周辺は3基と少ない。前者は17世紀末から19世紀初めに及ぶ近世墓群であり、5号墓は鍋かぶり葬として特筆される。後者についても、ほぼ同時期である。なお、墓域は調査区東端にも存在したが、移転対象であったため、調査対象外となっている。

1号墓(第117・118図、P L .51・136、第57表)

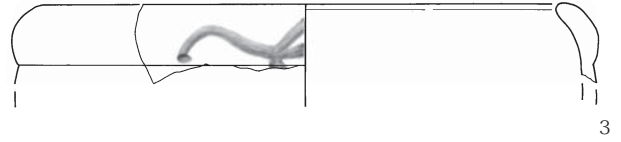
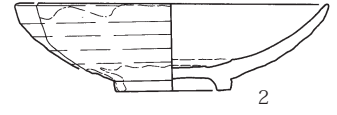
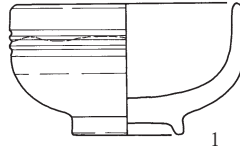
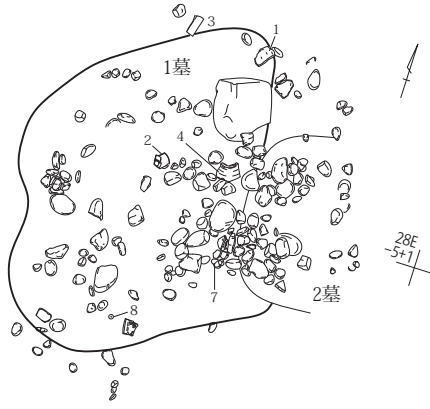
位置 28D-5グリッド。2・6・10号墓と重複するが新旧関係不明。上面の平面形は乱れた方形で、確認面より約20cm以下は長方形。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦で、掘り方中央やや北寄りに木棺の側板が高さ25cm

程度残っていた。上面規模は長径158cm短径152cm、下面規模は長軸87cm短軸64cm、深さ98cmである。木棺は底面に接しており、その規模は長軸49cm短軸37cmで、高さは不明。長軸の方位はN-4°-Wである。確認面に玉石が集中し、当初3号集石遺構として調査を行った。その下位で、方形の台石(117図5・6)2基が並んで出土しており、墓標の一部と考えられる。確認面の集石に混じって瀬戸・肥前陶器(117図1～4)他が出土するが、主体部では銭(新寛永通宝)(118図7)のほか、朱漆の塗膜片が出土しており、漆碗が副葬されていたとみられる。出土した人骨は、鑑定の結果(第5節第1項)約20歳代男性と推定される。出土遺物から近世に比定される。

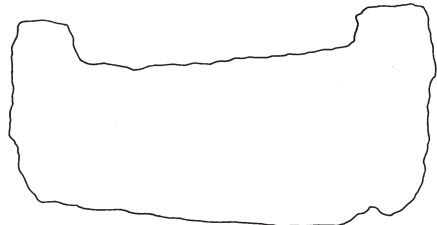
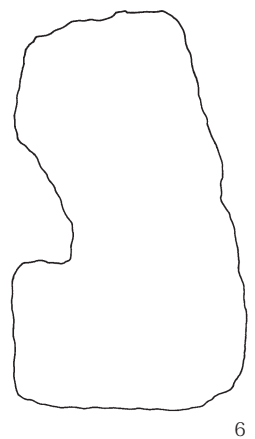
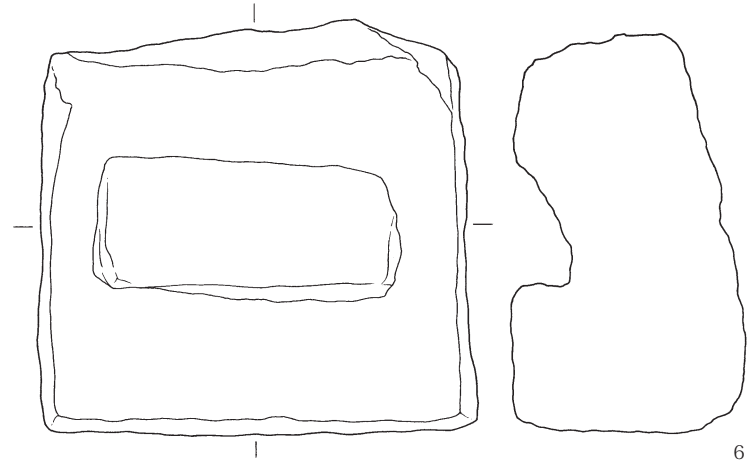
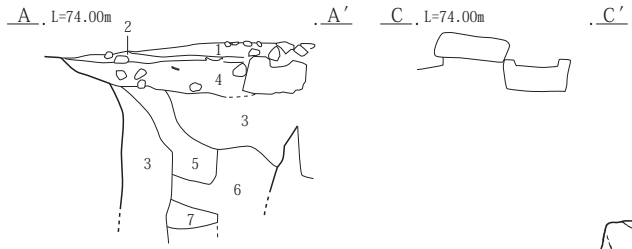
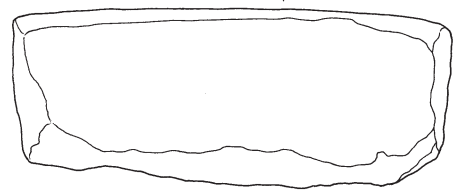
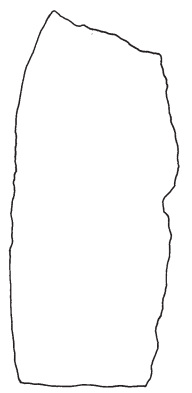
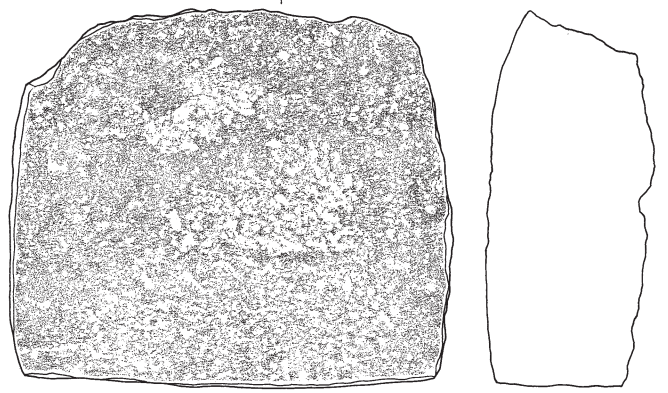
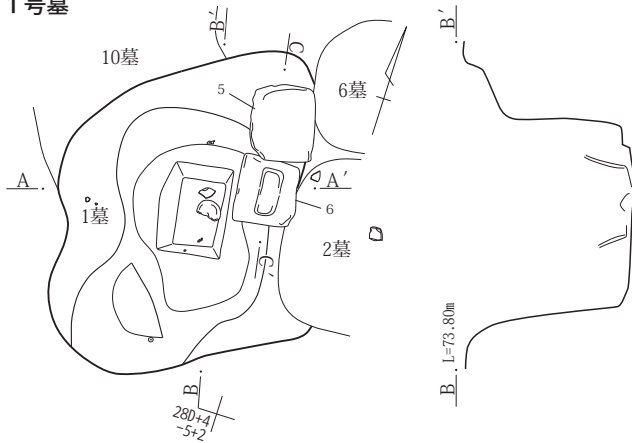
2号墓(第119図、P L .51・136・137、第58表)

位置 28D-5グリッド。1・6号墓と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸方形。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦で、ほぼ中央に木棺の底板と側板が高さ38cm

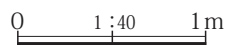
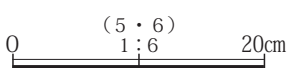
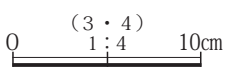
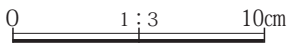
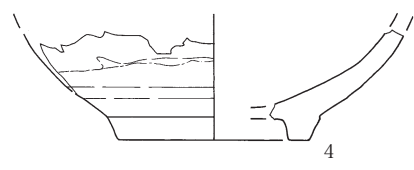
1号墓上層集石面



1号墓



- 1・2号墓
- 1 暗褐色土 しまらない。白色粒子少量に含む。
  - 2 暗褐色土+褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
  - 3 灰褐色粘質土 ローム大ブロック多量に含む。
  - 4 暗褐色粘質土 大礫多量に含む。
  - 5 黒褐色粘質土 ローム小ブロック多量に含む。
  - 6 黒褐色土 ローム大ブロック多量に含む。
  - 7 にぶい褐色粘質土 しまる。
  - 8 黒褐色粘質土 ローム小ブロックごく多量に含む。



第117図 1区1号墓と出土遺物(1)



第118図 1区1号墓出土遺物(2)

0 1:1 2cm

第57表 1区1号墓出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第117図 PL.136	1	瀬戸陶器	腰鍔碗		(9.0)	4.4	5.6	口縁 1/3底 部完		灰白	器高低く、体部下位は張る。内面から口縁部外面に灰釉、口縁部外面以下は鉄釉。高台端部のみ無釉。灰釉には粗い貫入が入る。口縁部外面に螺旋状横線。	登窯9小期。
第117図 PL.136	2	肥前陶器	皿		(12.6)	4.6	4.5	1/2		灰白	内面に青緑釉、外面に透明釉の掛け分け。底部内面は蛇ノ目刺ぎ。高台脇以下は無釉。釉剥ぎ部と高台端部に目痕。	17世紀末～ 18世紀前半。 内野山。
第117図	3	益子・笠間系陶器	練鉢		(27.8)	-	-	口縁部 片		灰黄	口縁部は肥厚して内湾。灰釉で外面に銅緑釉を流す。	近現代。
第117図	4	肥前陶器	鉢		-	(10.0)	-	1/4		にぶい 褐	内面から体部外面中位に透明釉、釉は部分的に白濁。体部外面下位から高台外面に鉄泥。	江戸時代。
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況		備考	
第117図 PL.136	5	墓石		台座	粗粒輝石安山岩	30.3	35.1	27260.0	上面は敲打後、周辺を研磨仕上げ。正面は敲打後、粗い研磨仕上げ。左右側面は敲打整形、下面・裏面側は粗割。裏面側に近い上面・裏面側に礫面が残る。			
第117図 PL.136	6	墓石		台座	粗粒輝石安山岩	32.1	33.0	27660.0	上面に塔身(舟形光背)を差し込む幅24cmの削り込み穴を穿つ。下面・裏面側を除いて鑿状工具により面整形。			
挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置	径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	残存	形・成調整等			
第118図 PL.136	7	銅銭 寛永通寶		25.54	25.34	1.18～ 1.24	2.20	完形	新寛永。背「文」。上部に小さいびびりが認められる。鑄不足によるものか、寛と永の間に貫通する小孔1箇所。			
第118図 PL.136	8	銅製品 寛永通寶		22.46	-	0.93～ 1.00	-	周縁一部 欠	新寛永。背「足」。			

残っていた。板の厚みは数mm程度である。長いもので約37.5cmを計る。掘り方上面規模は長軸95cm短軸88cm、下面規模は長軸65cm短軸60cm、深さ100cmである。木棺は底面に接しており、その規模は長軸53cm短軸38cmで、高さは不明ながら、40cm程度土層断面で確認できる。長軸の方位はN-6°-Wである。底面で銭15枚が出土する。うち2枚は寛永通寶の鉄銭である。掲載遺物のほか、中世在地系土器1片、近世国産陶器10片・在地系土器1片、その他土器類5片が出土している。出土した人骨は、鑑定の結果(第5節第1項)約30歳代男性と推定される。鉄銭の年代から、18世紀半ば以降に比定される。

3号墓(第120図、P L .51・52・137、第59表)

位置 28D-4グリッド。平面形は隅丸方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。中央やや西寄りに木棺の底板と側板が高さ12cm程度残っていた。板の厚みは数mm程度である。掘り方上面規模は長軸123cm短軸113cm、下面規模は長軸75cm短軸61cm、深さ107cmである。木棺は底面に接しており、その規模は長軸42cm短軸39cmで、高さは不明。長軸の方位はN-10°-Wである。角には木枠の一部となる柱材の痕跡がみられる。底面で銭(寛永通寶)16枚が出土し、うち4枚は鉄銭で2枚が鑄着する。出土遺物から18世紀後

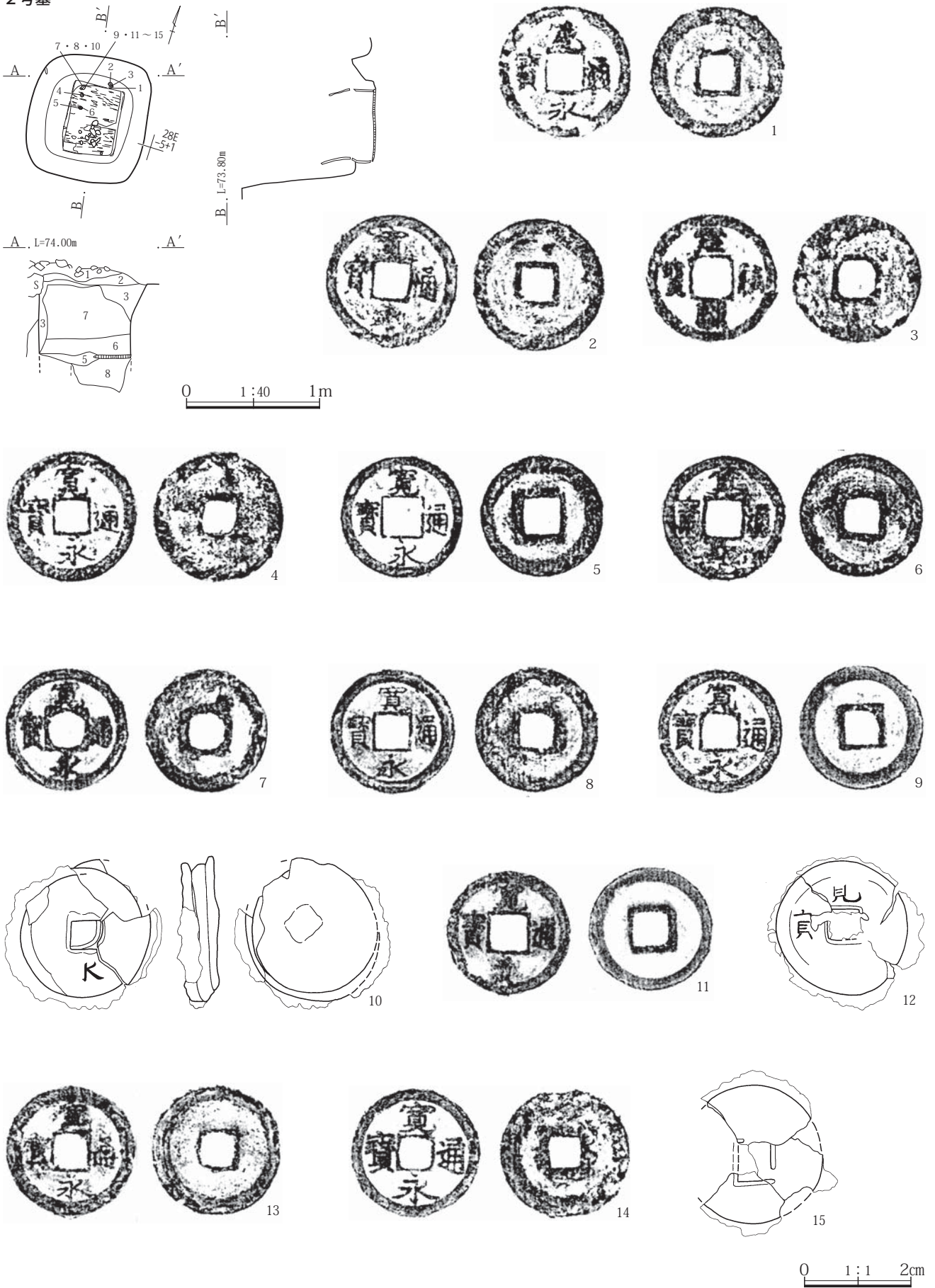
半～19世紀初頭に比定される。掲載遺物のほか、土師器壺甕類10片、須恵器杯碗類4片・壺甕類2片、埴輪2片、中世在地系土器3片、近世国産陶磁器7片が出土している。埋没土から肥前磁器・美濃陶器(1～3)ほか出土する。出土した人骨は、鑑定の結果(第5節第1項)約20歳代男性と推定される。

4・11号墓、67～69号土坑(第121～123図、P L .52・137・138、第60・61表)

4号墓 位置 28E-4グリッド。8号墓より前出で、67号土坑と重複するが新旧関係不明。西上半位は8号墓に壊される。平面形は隅丸方形。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦で、中央斜め方向に木棺の底板と側板が高さ20cm程度残っていた。板の厚みは数mm程度である。長いもので約23cmを計る。掘り方上面規模は長軸97cm短軸86cm、下面規模は長軸67cm短軸60cm、深さ102cmである。木棺は底面に接しており、その規模は長軸45cm短軸35cmで、高さは不明。長軸の方位はN-14°-Eである。底面で銭(寛永通寶)22枚が出土し、鉄銭が多く鑄着するものが目立つ。波佐見系肥前磁器小坏(121図1)は棺桶の外側の埋没土から出土しており、掘削時の混入の可能性もある。掲載遺物のほか、土師器杯碗類1片・壺甕類1片、須恵器杯碗類2片、近世

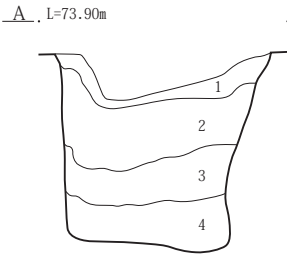
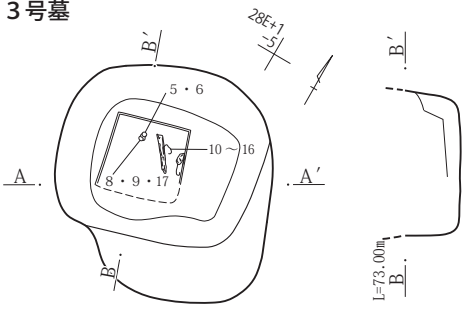


2号墓

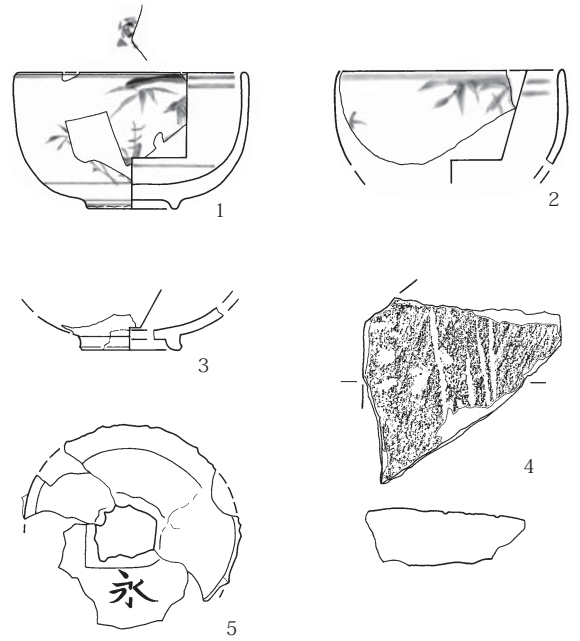


第119図 1区2号墓と出土遺物

3号墓

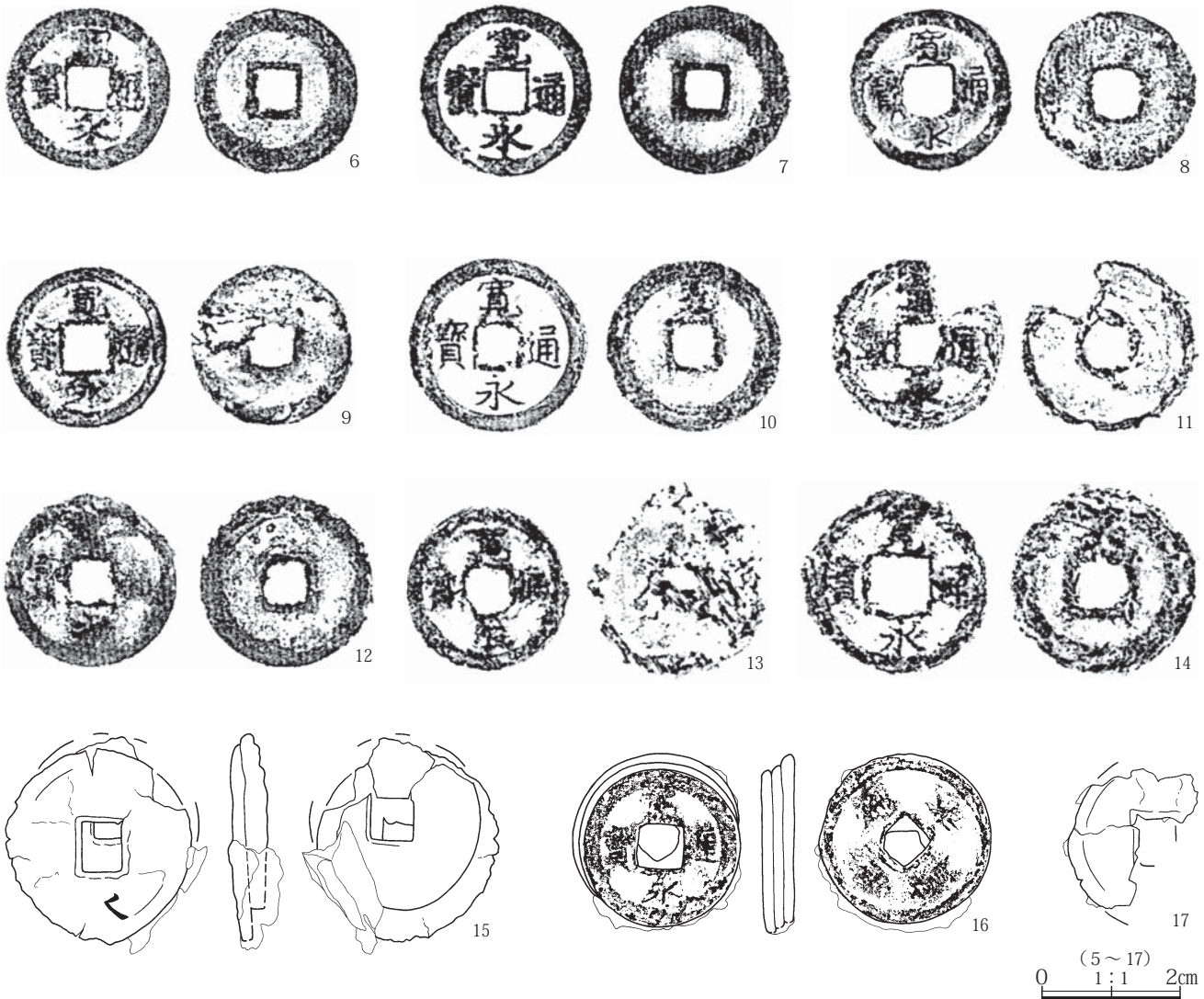


- 1 暗褐色土 ローム小ブロック少量、浅間A軽石微量に含む。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 3 灰褐色土 ローム小ブロック少量に含む。
- 4 褐灰色土 ローム小ブロックやや多量に含む。



0 1:40 1m

0 1:3 10cm



第120図 1区3号墓と出土遺物

第58表 1区2号墓出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置	径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	残存	形・成調整等
第119図 PL.136	1	銅銭 寛永通寶	底直上	24.72	24.60	1.10～ 1.24	2.57	完形	新寛永。文面は劣化が進み錆付着。
第119図 PL.136	2	銅銭 寛永通寶	+3cm	24.64	24.71	1.41～ 1.53	3.34	完形	新寛永。両面に薄く錆付着。
第119図 PL.136	3	銅銭 元祐通寶	+3cm	24.19	24.79	1.29～ 1.44	3.00	完形	篆書。北宋、1086年初鑄。
第119図 PL.136	4	銅銭 寛永通寶	底直上	24.68	24.55	1.40～ 1.50	3.17	完形	新寛永。裏面全体に錆の付着多い。
第119図 PL.136	5	銅銭 寛永通寶	+1cm	22.51	23.04	1.07～ 1.12	1.95	完形	新寛永。
第119図 PL.136	6	銅銭 寛永通寶	+2cm	23.03	22.92	1.11～ 1.15	2.54	完形	新寛永。文面やや錆付着。
第119図 PL.136	7	銅銭 寛永通寶	底直上	22.92	22.97	0.93～ 1.17	2.48	完形	新寛永。方孔丸く削る。裏面に錆付着。
第119図 PL.136	8	銅銭 寛永通寶	底直上	23.39	23.51	1.11～ 1.23	2.72	完形	新寛永。
第119図 PL.136	9	銅銭 寛永通寶	底直上	23.55	23.44	1.15～ 1.25	2.85	完形	新寛永。文面に鉄錆状のものが薄く付着。
第119図 PL.136	10	鉄銭 寛永通寶か	底直上	-	-	-	-	1部欠	2枚錆着。欠損する1枚は鉄銭。錆と土に被われた1枚は銅銭か鉄銭か不明。
第119図 PL.137	11	銅銭 寛永通寶	底直上	23.21	23.58	1.13～ 1.15	2.76	完形	新寛永。文面に鉄錆状のものが薄く付着。
第119図 PL.137	12	鉄銭 寛永通寶	底直上	-	-	-	-	1部欠	寛、永と寶の下部は判読可能。鑄鉄状のヒビが入る。
第119図 PL.137	13	銅銭 寛永通寶	底直上	24.81	24.56	1.25～ 1.33	3.02	完形	新寛永。文面に鉄錆状のものが薄く付着。周縁錆付着。
第119図 PL.137	14	銅銭 寛永通寶	底直上	24.17	24.25	1.24～ 1.53	3.51	完形	古寛永。裏面に錆付着。
第119図 PL.137	15	鉄銭 寛永通寶か	底直上	-	-	-	-	1/2	錆により銭文判読不可能。

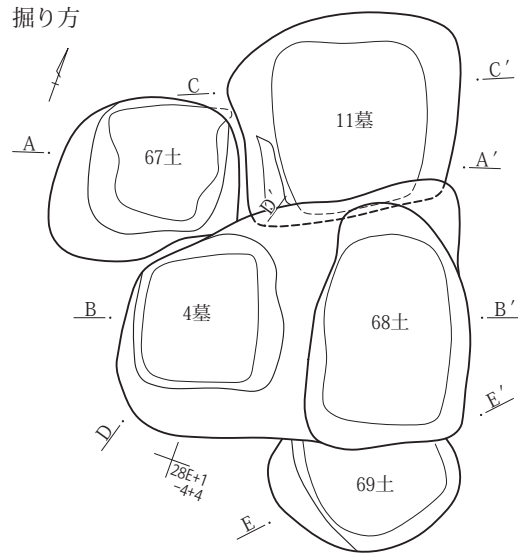
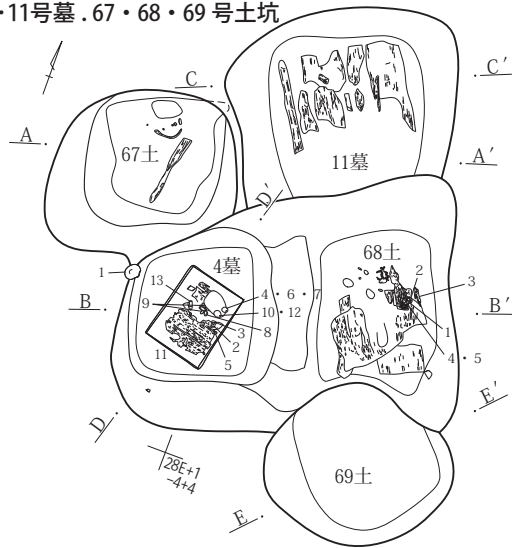
第59表 1区3号墓出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第120図	1	肥前磁器	小丸碗		(9.2)	3.6	5.4	1/2		白	外面は孟宗譚か。口縁部内面は2重圏線。底部内面は1重圏線内に簡略化した五弁花文。	18世紀後半～19世紀初。
第120図	2	肥前磁器	小丸碗		(8.8)	-	-	1/4		白	外面は竹葉か。口縁部内面は2重圏線。	18世紀後半～19世紀初。1と同一個体の可能性高い。
第120図	3	美濃陶器	小碗		-	(3.8)	-	底部片		灰白	内面から高台外面付近に灰釉。	登窯8小期。
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況		備考	
第120図 PL.137	4	砥石?	-		雲母石英片 岩	(7.3)	(7.9)	133.5	背面側に刃ならし傷が縦位に並ぶ。条線間には平滑面があり、砥石として利用されたものか。			
挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置	径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	残存	形・成調整等			
第120図 PL.137	5	鉄銭 寛永通寶	底直上	-	-	-	-	2/3	「永」のみ判読可能。			
第120図 PL.137	6	銅銭 寛永通寶	底直上	23.72	23.84	1.29～ 1.52	3.12	完形	古寛永か。銭文不鮮明。両面にやや錆付着。			
第120図 PL.137	7	銅銭 寛永通寶	底直上	24.60	24.74	1.27～ 1.39	3.72	完形	古寛永。文面に薄く錆付着。			
第120図 PL.137	8	銅銭 寛永通寶	底直上	23.12	23.36	0.97～ 1.15	1.81	完形	新寛永。銭厚薄く裏面の縁と方孔縁は不鮮明。			
第120図 PL.137	9	銅銭 寛永通寶	底直上	23.26	23.09	1.28、 1.34	-	完形	新寛永か。銭文不鮮明。裏面上部に鉄錆状の物厚く付着。			
第120図 PL.137	10	銅銭 寛永通寶	底直上	25.27	25.59	-	-	完形	新寛永。背「文」。裏面に鉄錆状の物薄く付着。			
第120図 PL.137	11	銅銭 寛永通寶	底直上	25.16	25.01	-	-	7/8	鉄錆状のものに被われ銭文不鮮明。			
第120図 PL.137	12	銅銭 寛永通寶	底直上	25.06	24.86	0.97～ 1.27	2.72	完形	「永」と「寶」の1部が判読可能。銅銭であるが鉄錆状の物が付着。			
第120図 PL.137	13	銅銭 寛永通寶	底直上	-	-	-	-	完形	新寛永。布痕と木質付着。			
第120図 PL.137	14	鉄銭 寛永通寶	底直上	-	-	-	-	完形	錆か著しくひび割れる。銭文は判読可能。背「久」か。			
第120図 PL.137	15	鉄銭 寛永通寶など	底直上	-	-	-	-	1部欠	鉄銭2枚が錆着。図表面の「永」のみ判読可能。1枚は銭文判読不可能。			
第120図 PL.137	16	銅銭・鉄銭 寛永通寶など	底直上	-	-	-	-	完形	3枚錆着。図の表側が寛永鉄銭、裏側が寛永銅銭。間の1枚は寛永鉄銭の可能性が高い。			
第120図 PL.137	17	鉄銭 寛永通寶か	底直上	-	-	-	-	1/3	劣化により銭文判読不可能。			

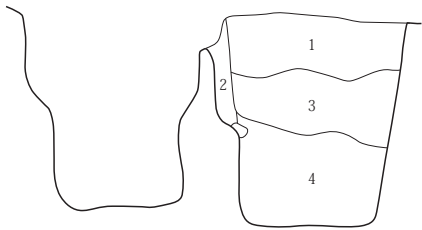
国産陶器1片、その他土器類1片が出土している。出土した人骨は、鑑定の結果(第5節第1項)約40歳代女性と推定

される。肥前磁器の年代は、17世紀末～18世紀中頃となるが、鉄銭の出土も考慮して18世紀半ば以降に比定される。

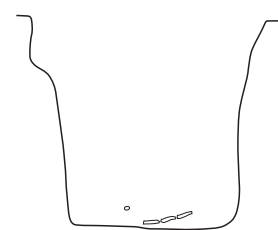
4・11号墓・67・68・69号土坑



67土 11墓 .A'. L=73.90m .A'



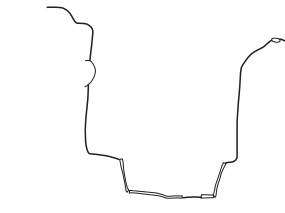
11墓 .C'. L=73.90m .C'



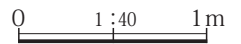
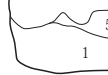
4墓 68土 .B'. L=73.80m .B'



4墓 .D'. L=73.80m .D'

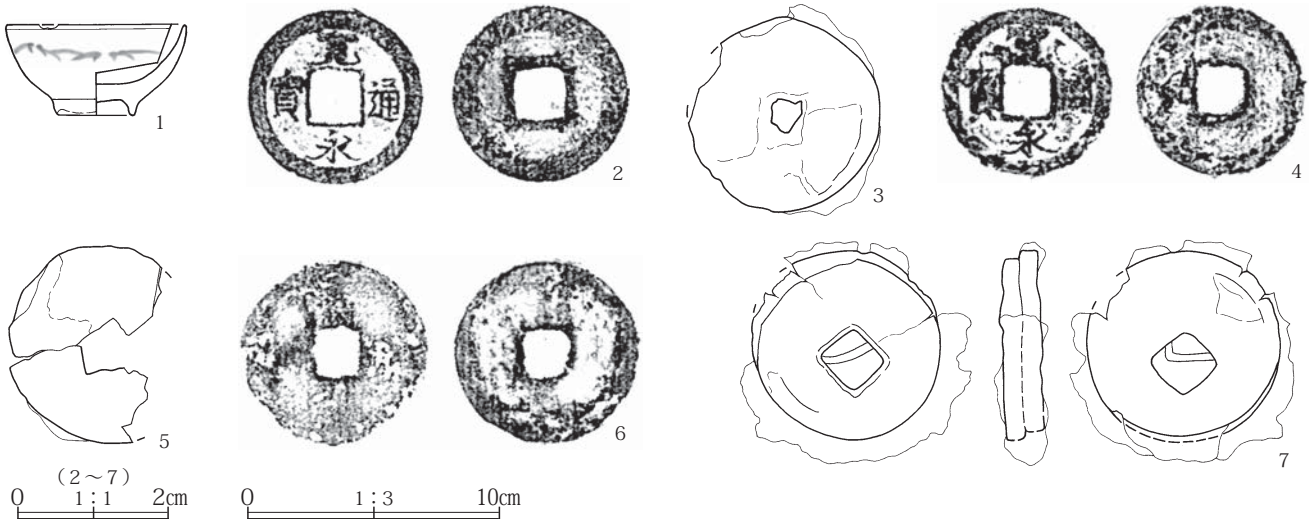


69土 .E'. L=73.80m .E'

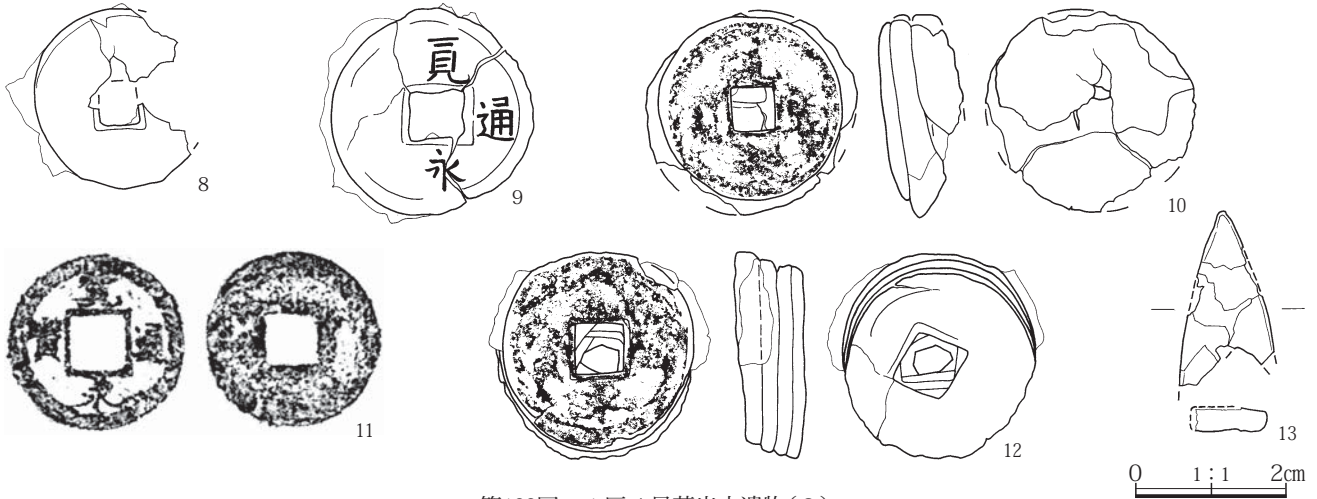


11号墓・69号土坑

- 1 暗褐色土 にぶい黄褐色土大ブロック多量に含む。
- 2 暗褐色土 にぶい黄褐色土大ブロック多量、中礫少量に含む。
- 3 にぶい黄褐色土+黒褐色土
- 4 黒褐色土大ブロック にぶい黄褐色土大ブロック多量に含む。
- 5 黄褐色土 しまる。



第121図 1区4・11号墓、67～69号土坑と4号墓出土遺物(1)



第122図 1区4号墓出土遺物(2)

第60表 1区4号墓出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第121図 PL.137	1	肥前磁器	小杯		7.0	3.0	3.6	ほぼ完形		灰白	器壁は薄めだが呉須の色調は濁る。外面に笹文。主文様の反対側には笹の葉状の線を1本のみ描く。	17世紀末～18世紀中。波佐見。
挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置	径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	残存	形・成調整等			
第121図 PL.137	2	銅銭 寛永通寶	+4cm	23.05	23.31	1.10～ 1.15	2.30	完形	新寛永。			
第121図 PL.137	3	鉄銭 寛永通寶か	+4cm	-	-	-	-	完形	錆化著しく銭文判読不可能。1部新しい欠損。			
第121図 PL.137	4	銅銭 寛永通寶	+2cm	22.40	22.74	1.14～ 1.35	2.23	完形	新寛永。銭文やや不鮮明。裏面に鉄錆状のもの付着。			
第121図 PL.137	5	鉄銭 寛永通寶か	+3cm	-	-	-	-	2/3	錆化著しく銭文判読不可能。錆により土付着。			
第121図 PL.137	6	銅銭 寛永通寶	+2cm	24.43	24.54	1.03～ 1.19	2.55	完形	銭文不鮮明で「永」と「通」がかりうじて判読可能。			
第121図 PL.137	7	鉄銭 寛永通寶	+2cm	-	-	-	-	1部欠	鉄銭2枚錆着。銭文判読不可能。			
第122図 PL.137	8	鉄銭 寛永通寶か	+2cm	-	-	-	-	1/2	錆化著しく銭文判読不可能。			
第122図 PL.137	9	鉄銭 寛永通寶	+4cm	-	-	-	-	完形	錆化著しいが「寛」と「通」が判読可能。			
第122図 PL.138	10	銅銭・鉄銭 寛永通寶など	+3cm	-	-	-	-	完形	1枚の新寛永銅銭と2枚の鉄銭が錆着。鉄銭は錆化著しく銭文判読不可能。			
第122図 PL.137	11	銅銭 寛永通寶	+3cm	23.51	23.69	1.25～ 1.30	2.27	完形	新寛永。裏面錆付着。			
第122図 PL.138	12	鉄銭 寛永通寶など	+3cm	-	-	-	-	完形	鉄銭4枚錆着。1枚は銭文判読可能。			
第122図 PL.138	13	鉄製品 不詳	+5cm	-	-	-	5.6	-	一部欠?	平面形は鉄族状であるが、側縁は厚く刃部状をなさない。		

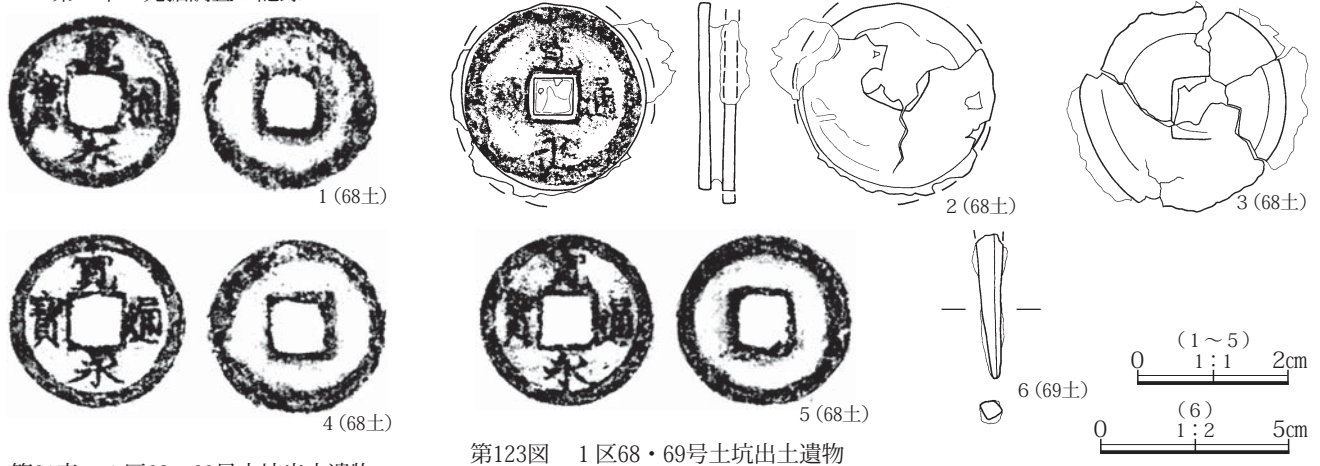
11号墓 位置 28E-4グリッド。68号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸方形。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦で、中央北寄りに木棺の底板のみ残っていた。掘り方上面規模は長軸121cm短軸105cm、下面規模は長軸91cm短軸81cm、深さ108cmである。木棺は底面に接しており、その規模は長軸50cm以上短軸65cmで、長軸の方位はN-29°-Wである。出土した人骨は細片のため、鑑定の結果(第5節第1項)年齢・性別は特定されなかった。遺物は土師器杯碗類1片が出土するが混入とみられる。

67号土坑 位置 28E-4グリッド。4号墓と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸方形。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦で、長方形の木棺の痕跡は見えなかった。掘り方規模は長軸100cm短軸86cm深さ99cmである。出土した人骨は、鑑定の結果(第5

節第1項)約20歳代男性と推定される。遺物は土師器壺類2片、須恵器杯碗類1片が出土するが混入とみられる。

68号土坑 位置 28E-4グリッド。8号墓より前出で、69号土坑も同様か。西半は8号墓により壊される。平面形は北辺のやや狭い隅丸台形。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦で、ほぼ中央に木棺の痕跡が残っていた。掘り方上面規模は長軸130cm短軸86cm、下面規模は長軸101cm短軸66cm、深さ107cmである。底面から5cmほど浮いた位置で、底板が出土する。朱漆の塗膜片が出土しており、漆碗が副葬されていたとみられる。底面で銭(寛永通寶)6枚が出土し、うち2枚は鉄銭で2枚が錆着する。掲載遺物のほか、土師器壺類8片、近世国産陶器1片が出土している。出土した人骨は、鑑定の結果(第5節第1項)約40歳代男性と推定される。鉄銭の年代から、18世

第4章 発掘調査の記録



第61表 1区68・69号土坑出土遺物

第123図 1区68・69号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置	径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	残存	形・成調整等
第123図 PL.138	1	銅銭 寛永通寶	68土 +13cm	22.71	22.64	1.10～ 1.24	2.60	完形	新寛永。錆付着。
第123図 PL.138	2	銅銭・鉄銭 寛永通寶など	68土 +12cm	-	-	-	-	完形・ 2/3	完形の新寛永銅銭1枚と寛永通寶と推定される鉄銭1枚が錆着。鉄銭には他の銭貨との錆着痕がある。
第123図 PL.138	3	鉄銭 寛永通寶か	68土 +11cm	-	-	-	-	一部欠	錆化著しく、銭文判読不可能。他の銭貨との錆着痕あり。
第123図 PL.138	4	銅銭 寛永通寶	68土 +9cm	23.25	23.40	1.25～ 1.34	2.90	完形	新寛永。錆付着。
第123図 PL.138	5	銅銭 寛永通寶	68土 +9cm	23.26	23.16	1.20～ 1.29	2.54	完形	新寛永。
第123図 PL.138	6	鉄製品 釘	69土	-	-	-	-	先端部	

紀半ば以降に比定される。

**69号土坑** 位置 28E-4グリッド。68号土坑より後出か。8号墓と重複するが新旧関係不明。平面形は不詳。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。上面規模は長軸92cm短軸83cm、下面規模は長軸68cm短軸(66)cm、深さ41cmである。形態から墓の可能性が高い。埋没土から鉄釘(123図6)が出土している。掲載遺物のほか、土師器壺甕類6片、須恵器杯碗類3片、近世国産陶器1片が出土している。人骨は出土していない。近世に比定される。

**5号墓**(第124・125図、P.L.52・53・138・139、第62表)

**位置** 28E-4グリッド。219号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。上面規模は長軸94cm短軸76cm、下面規模は長軸65cm短軸48cm、深さ55cmである。北壁に底面から斜めに、頭蓋骨を覆って、鉄鍋(124・125図13～18)が出土する。棺形態は不明。底面で銭(寛永通寶)12枚が出土し、うち5枚は鉄銭である。掲載遺物のほか、土師器壺甕類1片が出土している。出土した人骨は、鑑定の結果(第5節第1項)約20～30歳代女性と推定される。鉄銭の年代から、18世紀半ば以降に比定される。

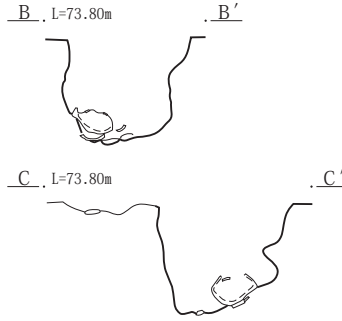
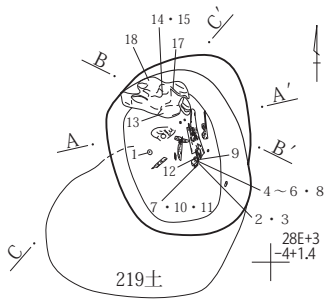
**6・7号墓**(第126・127図、P.L.52・53・139、第63表)

**6号墓** 位置 28E-5グリッド。2・7号墓と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸方形。壁は垂直に立ち上

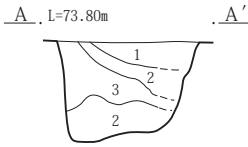
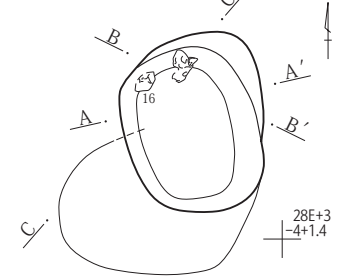
がる。底面は平坦で、ほぼ中央に木棺の痕跡が残っていた。掘り方上面規模は長軸104cm短軸74cm、下面規模は長軸61cm短軸53cm、深さ75cmである。木棺は底面に接しており、その規模は長軸52cm短軸45cmで、高さは不明ながら、60cm程度土層断面で確認できる。板の厚みは数mm程度である。長軸の方位はN-10°-Wである。朱漆の塗膜片が出土しており、漆碗が副葬されていたとみられる。底面で銭(寛永通寶)22枚が出土し、うち3枚は鉄銭である。11枚が錆着していた。また、埋没土から土鈴(126図1・2)が出土している。これは、当初種実類として取り上げたが、鑑定(株式会社 パレオ・ラボ)による顕微鏡観察の結果、土鈴と判明したものである。掲載遺物のほか、土師器壺甕類3片、近世国産陶器1片が出土している。出土した人骨は、調査後の錯誤により所在不明となり、未鑑定となっている。鉄銭の年代から、18世紀半ば以降に比定される。

**7号墓** 位置 28E-5グリッド。6号墓と重複するが新旧関係不明。上面平面形は乱れた方形で、底面近くは長方形。壁はやや斜めに立ち上がる。底面は平坦。掘り方上面規模は長軸113cm短軸(76)cm、下面規模は長軸(62)cm短軸56cm、深さ79cmである。肥前磁器白磁皿(127図26)の内面に朱漆の塗膜があり、漆器と重ねて埋納されていたとみられる。並んで在地系土器皿(127図25)も出土する。人骨は出土していない。出土遺物から17世紀末から18世紀中頃頃定される。

5号墓

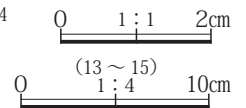
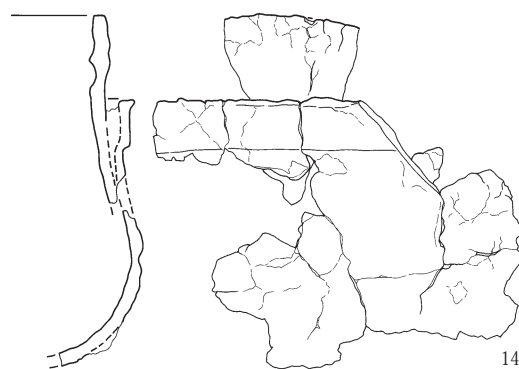
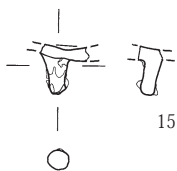
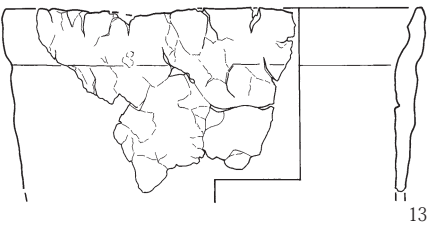
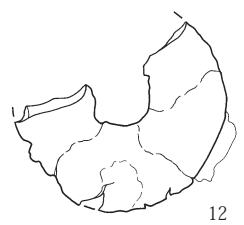
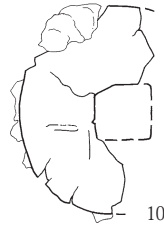
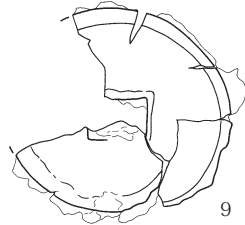
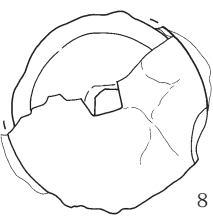
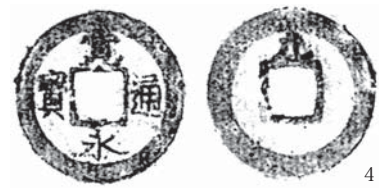
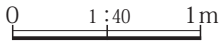
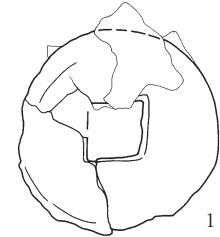


下面

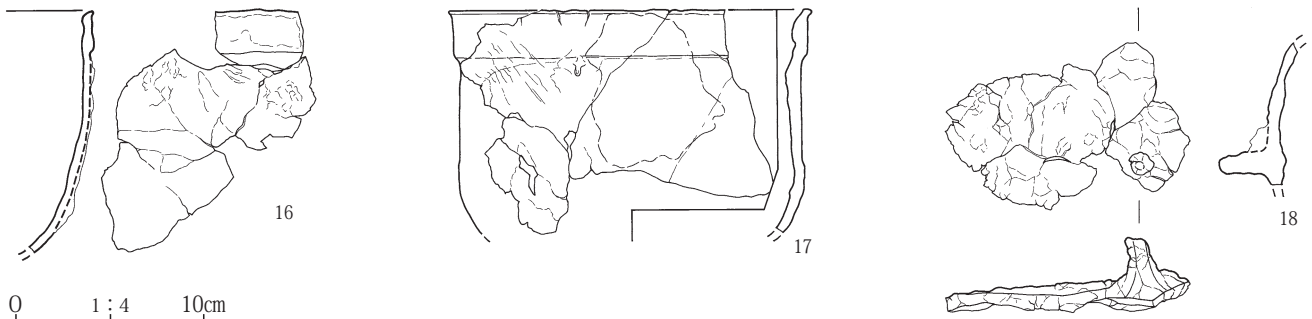


5号墓

- 1 暗褐色粘質土
- 2 暗褐色粘質土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 3 暗褐色粘質土 ローム小ブロックやや多量、黒褐色土小ブロックやや多量に含む。



第124図 1区5号墓と出土遺物(1)



第125図 1区5号墓出土遺物(2)

第62表 1区5号墓出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置	径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	残存	形・成調整等
第124図 PL.138	1	鉄銭 寛永通寶か	+3cm	-	-	-	-	一部欠	銭文判読不可能。鑄鉄様のヒビの入り方をとする。
第124図 PL.138	2	銅銭 寛永通寶	+6cm	22.98	23.05	1.27～ 1.35	2.64	完形	新寛永。背「佐」。磁性かなり強く、やわらかく磁着するが、地金が残っているわりには弱い。
第124図 PL.138	3	銅銭 寛永通寶	+6cm	24.29	24.42	1.05～ 1.08	2.36	完形	新寛永。径のわりに薄い。
第124図 PL.138	4	銅銭 寛永通寶	+5cm	22.47	22.73	0.98～ 1.14	2.11	完形	背「元」。磁性あり。遺存状態は良好。
第124図 PL.138	5	銅銭 寛永通寶	+5cm	23.13	23.55	1.42～ 1.50	3.08	完形	背「元」。磁性あり。文面と周囲に錆付着。
第124図 PL.138	6	銅銭 寛永通寶	+5cm	23.72	23.68	1.16～ 1.31	3.09	完形	新寛永。周縁に錆付着するが、遺存状態は良好。背に意図しないと考えられる点1箇所。
第124図 PL.138	7	銅銭 寛永通寶	+5cm	23.92	23.54	1.28～ 1.33	2.95	完形	新寛永。両面に鉄錆状のもの薄く付着。
第124図 PL.138	8	銅銭・鉄銭 寛永通寶か	+5cm	-	-	-	-	完形・ 1/2	銅銭は完形、鉄銭は1/2。鉄銭は銭文判読不可能で、銅銭は銭文側が鉄銭との付着面のため判読不可能。
第124図 PL.138	9	鉄銭 寛永通寶か	+5cm	-	-	-	-	1/3	他の銭貨との付着痕あり。接合しない破片あり。
第124図 PL.138	10	鉄銭 寛永通寶か	+5cm	-	-	-	-	1/2	錆化著しく銭文判読不可能。11と接合せず、銭径も異なると推定されるため別個体とした。
第124図 PL.138	11	鉄銭 寛永通寶か	+5cm	-	-	-	-	1/3	錆化著しく銭文判読不可能。10と接合せず、銭径も異なると推定されるため別個体とした。
第124図 PL.138	12	鉄銭 寛永通寶か	+6cm	-	-	-	-	1/2	錆化著しく銭文判読不可能。
第124図 PL.138	13	鉄製品 鍋	+9cm	-	-	-	-	-	鑄物鍋。以下18まで同一個体か。
第124図 PL.138	14	鉄製品 鍋	+23cm	-	-	-	-	-	鑄物鍋。2個体か。
第124図	15	鉄製品 鍋	+23cm	-	-	-	-	脚部	鑄物鍋。脚部片。
第125図 PL.139	16	鉄製品 鍋	+9cm	-	-	-	-	-	鑄物鍋。
第125図 PL.139	17	鉄製品 鍋	+23cm	-	-	-	-	-	鑄物鍋。
第125図 PL.139	18	鉄製品 鍋	+25cm	-	-	-	-	底部片	鑄物鍋。脚1箇所残存。

8号墓(第128図、P L .53)

**位置** 28E-4グリッド。4号墓、68・69号土坑より後出。平面形は楕円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦で、東壁側に木棺の丸い底板が残っていた。掘り方上面規模は長径(120)cm、下面規模は長径86cm短径55cm、深さ94cmである。木棺は底面に接しており、その規模は直径45cmで、高さは不明。板の厚みは数mm程度である。朱漆の塗膜片が出土しており、漆器が副葬されていたとみられる。出土した人骨は、鑑定の結果(第5節第1項)約20歳代男性と推定される。年代不詳。遺物は土師器杯椀類1片・壺甕類5片、近世国産陶磁器2片が出土している。出土遺物から近世に比定される。

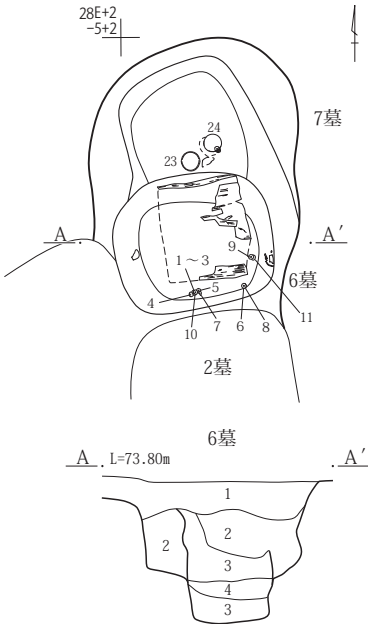
9号墓、46号土坑(第128図、P L .53・140、第64表)

**9号墓 位置** 28D-5グリッド。46号土坑より前出。平面形は隅丸方形か。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。掘り方上面規模は長軸123cm短軸(96)cm、下面規模は長軸95cm短軸(83)cm、深さ79cmである。朱漆の塗膜片が出土しており、漆碗が副葬されていたとみられる。底面で肥前・瀬戸・美濃陶器皿(1~3)が出土している。掲載遺物のほか、土師器杯椀類1片、須恵器1片、近世国産陶磁器2片が出土している。人骨は出土していない。出土遺物から17世紀末~18世紀前半に比定される。

**46号土坑 位置** 28D-5グリッド。9号墓より後出。平面形は隅丸方形か。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦で、北壁寄りに木棺の丸い底板が残っていた。掘り方上面規模は長軸99cm短軸72cm、下面規模は長軸89cm短軸(62)

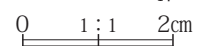
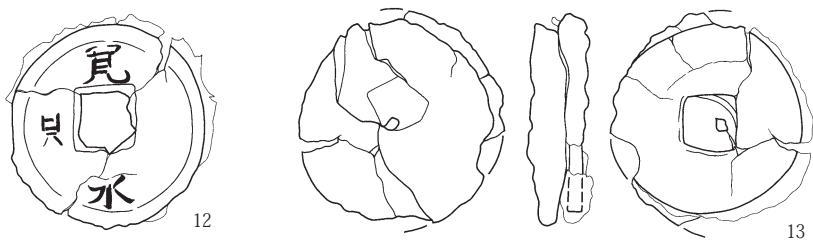
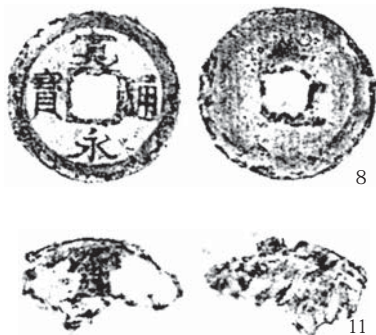
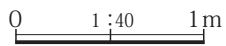


6・7号墓



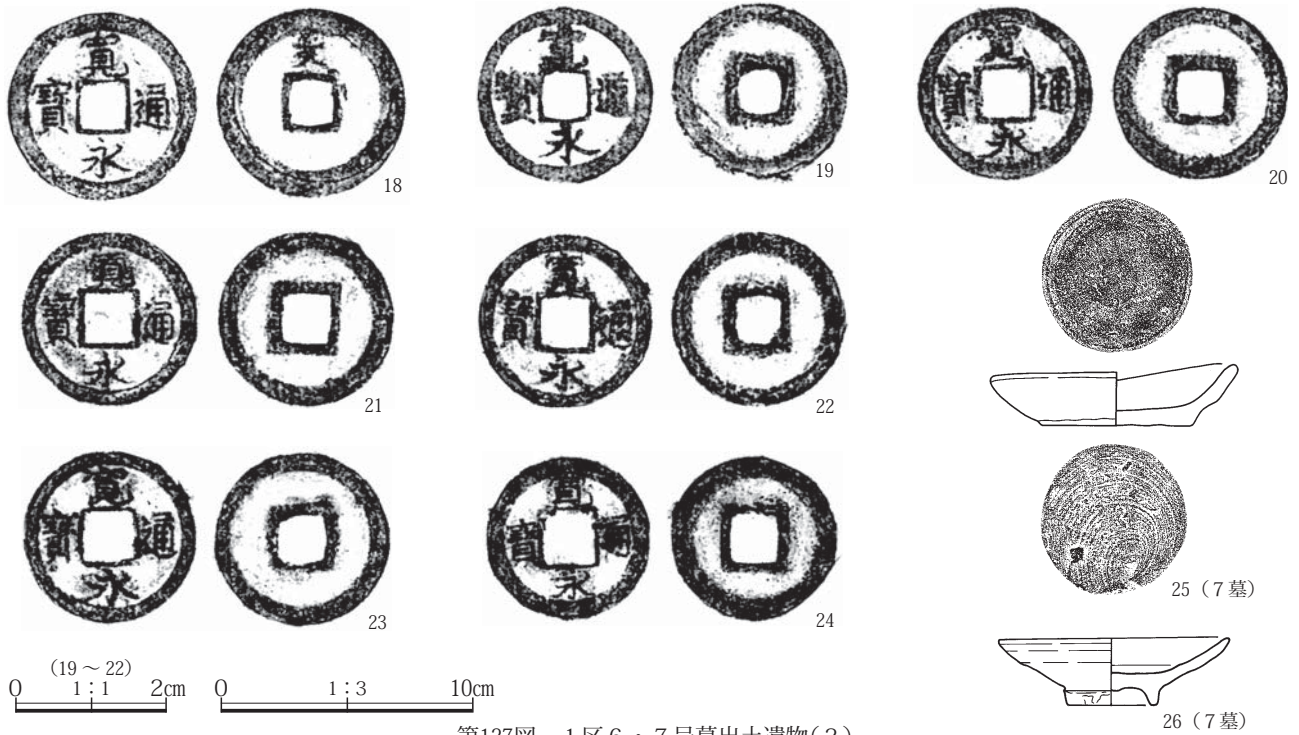
6・7号墓

- 1 暗褐色砂質土 ローム小ブロックやや多量、浅間A軽石やや多量に含む。
- 2 暗褐色砂質土 ローム小ブロック多量に含む。
- 3 灰褐色砂質土 浅間A軽石少量に含む。
- 4 暗褐色土 ローム小ブロックごく多量に層状に含む。



第126図 1区6・7号墓と6号墓出土遺物(1)

第4章 発掘調査の記録

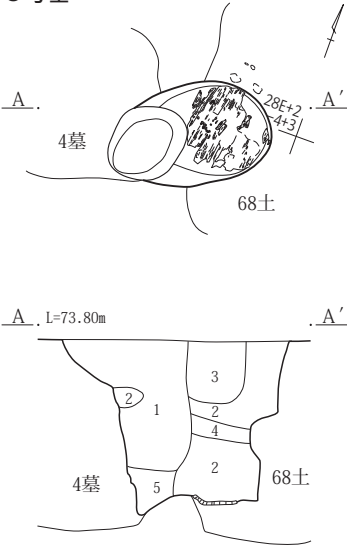


第127図 1区6・7号墓出土遺物(2)

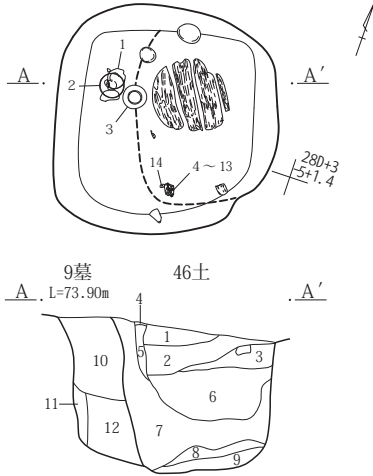
第63表 1区6・7号墓出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (mm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要					
第126図	1	土鈴	6墓	径 14.0 厚 2.0		切り込み幅1.5mm。鋭利に切り込む。						
第126図	2	土鈴の玉	6墓	径 5.0		扁平。1の中に入る。						
挿図No.	PL.No.	No.	種類 器種	出土位置	径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	残存	形・成調整等	備考	
第126図	PL.139	3	銅銭	寛永通寶	6墓+18cm	24.02	24.41	1.47~1.58	3.62	完形	古寛永。周縁と方孔縁に錆付着。	
第126図	PL.139	4	銅銭	寛永通寶	6墓+18cm	23.91	23.84	1.13~1.36	3.04	完形	古寛永か。周縁と銭文部分に錆付着。	
第126図	PL.139	5	銅銭・ 鉄銭	寛永通寶など	6墓+19cm	-	-	-	-	完形	新寛永銅銭1枚と鉄銭1枚が錆着。鉄銭の錆化著しく、銭文判読不可能。	
第126図	PL.139	6	銅銭	寛永通寶	6墓+18cm	23.90	24.03	1.25~1.54	2.88	完形	古寛永。	
第126図	PL.139	7	銅銭	寛永通寶	6墓+24cm	24.34	24.50	1.39~1.57	2.71	完形	新寛永。両面に錆付着し、遺存状態はやや悪い。	
第126図	PL.139	8	銅銭	寛永通寶	6墓+18cm	22.76	23.27	0.97~1.08	1.72	完形	新寛永。1部に錆付着。	
第126図	PL.139	9	銅銭	寛永通寶	6墓+23cm	24.81	24.73	1.32~1.41	3.19	完形	新寛永。両面に薄く錆付着。	
第126図	PL.139	10	銅銭	寛永通寶 か	6墓+13cm	21.98	22.72	1.43~1.55	2.22	完形	銭文不鮮明。表面に鉄錆状のもの付着するが、粉を吹いたように劣化し、磁性がない。	
第126図	PL.139	11	鉄銭	寛永通寶か	6墓+18cm	-	-	-	-	1/4	錆化著しく、「寛」のみかろうじて判読不能。	
第126図	PL.139	12	鉄銭	寛永通寶	6墓+18cm	-	-	-	-	完形	「寛」のみかろうじて判読可能。やや径が大きい裏面の波は確認できない。	
第126図	PL.139	13	鉄銭	寛永通寶 か	6墓+13cm	-	-	-	-	ほぼ完形・1/2	2枚錆着。錆化著しく、銭文判読不可能。他の銭貨との錆着痕あり。	
第126図	PL.139	14	銅銭	寛永通寶	6墓	25.19	25.02	1.22~1.34	3.44	完形	古寛永。両面にやや錆付着。	14~24の11枚錆着。
第126図	PL.139	15	銅銭	寛永通寶	6墓	25.07	25.20	1.22~1.33	2.83	完形	背「文」。	12~24の11枚錆着。
第126図	PL.139	16	銅銭	寛永通寶	6墓	25.17	25.20	1.19~1.30	3.15	完形	背「文」。	12~24の11枚錆着。
第126図	PL.139	17	銅銭	寛永通寶	6墓	25.10	25.15	1.30~1.35	3.45	完形	背「文」。錆多く付着。	12~24の11枚錆着。
第127図	PL.139	18	銅銭	寛永通寶	6墓	25.09	25.15	1.26~1.31	3.32	完形	背「文」。銭貨の遺存状態は良好であるが、背文字は低く不鮮明。	12~24の11枚錆着。
第127図	PL.139	19	銅銭	寛永通寶	6墓	23.00	23.22	1.17~1.24	2.48	完形	新寛永。	12~24の11枚錆着。
第127図	PL.139	20	銅銭	寛永通寶	6墓	23.10	23.01	1.25~1.40	3.36	完形	新寛永。	12~24の11枚錆着。
第127図	PL.139	21	銅銭	寛永通寶	6墓	23.07	23.17	1.19~1.23	2.61	完形	新寛永。	12~24の11枚錆着。
第127図	PL.139	22	銅銭	寛永通寶	6墓	22.99	22.93	1.17~1.23	2.81	完形	新寛永。全体に薄く錆付着。	12~24の11枚錆着。
第127図	PL.139	23	銅銭	寛永通寶	6墓	22.93	22.91	1.15~1.32	3.06	完形	新寛永。裏面に薄く錆付着。	12~24の11枚錆着。
第127図	PL.139	24	銅銭	寛永通寶	6墓	21.70	21.73	1.10~1.16	2.13	完形	新寛永。銭径小さく軽い。	12~24の11枚錆着。
挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第127図 PL.139	25	在地系 土器	皿	7墓 底直	9.5~ 9.8	6.0	1.7~ 2.5	完形		浅黄 橙	器形歪む。体部外面は轆轤目が目立たず、凹凸がない。内面も凹凸が少なく滑らか。底部左回転糸切無調整。	
第127図 PL.139	26	肥前磁 器	白磁 皿	7墓 底直	9.0	3.5	2.6	完形		にぶ い橙	露胎部にはにぶい橙色。内面から高台脇付近に施釉。調査時には内面に赤漆塗膜があり、漆器と重ねて埋納。	17世紀末~18世紀中。調査時には内面に赤漆塗膜があり、漆器と重ねて埋納。

8号墓

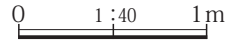


9号墓・46号土坑



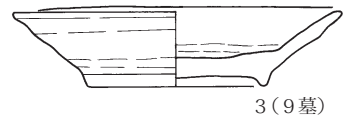
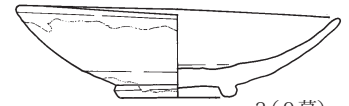
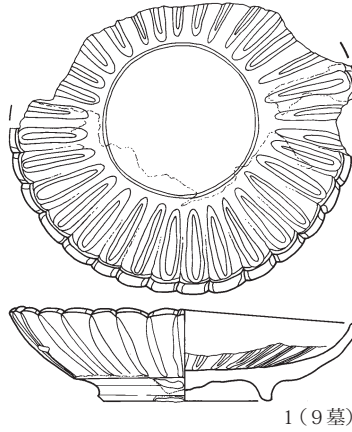
9墓・46号土坑

- 1 黒褐色土 やや砂質。小礫やや多量に含む。
- 2 黒褐色土 礫混土(VII)小ブロックやや多量に含む。
- 3 黒褐色土 礫混土(VII)大ブロック多量に含む。
- 4 にぶい灰白色粘土
- 5 黒褐色土 にぶい灰白色粘土少量に含む。
- 6 にぶい褐色土 礫混土(VII)小ブロックごく多量に含む。
- 7 暗褐色土 小礫やや多量に含む。
- 8 黒褐色土 しまる。ローム大ブロック少量に含む。
- 9 黒褐色土 灰色蠟状物ごく多量に含む。
- 10 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
- 11 暗褐色土 しまらない。ローム小ブロック少量に含む。棺の痕跡か。
- 12 にぶい褐色土 しまる。礫混土(VII)主体。暗褐色土大ブロック多量に含む。



8号墓

- 1 黒褐色砂質土 浅間A軽石微量、黄色粒子少量に含む。
- 2 暗褐色砂質土 ローム小ブロックやや多量、炭化物粒子少量に含む。
- 3 ローム小ブロック
- 4 暗褐色土 にぶい黄褐色土大ブロックやや多量に含む。
- 5 黒褐色土 黄色粒子少量に含む。



4 (46土)



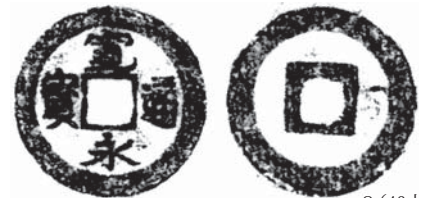
5 (46土)



6 (46土)



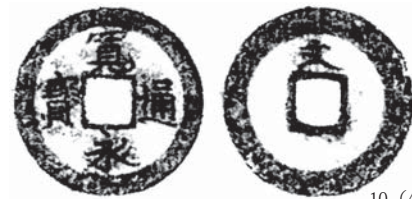
7 (46土)



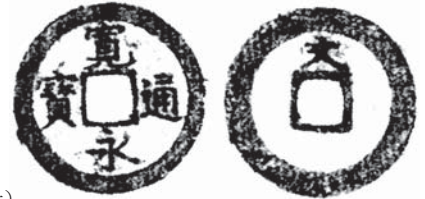
8 (46土)



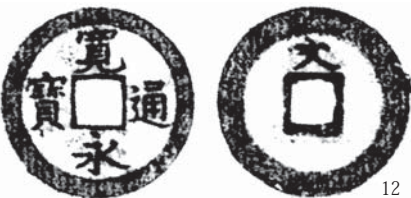
9 (46土)



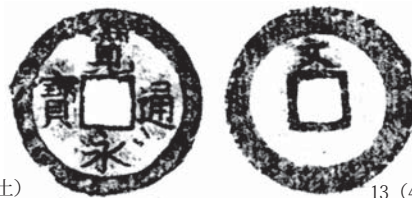
10 (46土)



11 (46土)



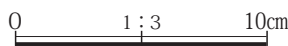
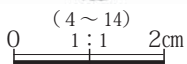
12 (46土)



13 (46土)



14 (46土)



第128図 1区8・9号墓、46号土坑と出土遺物

第4章 発掘調査の記録

第64表 1区9号墓・46号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第128図 PL.140	1	美濃陶器	菊皿	9墓 +69cm	13.5	6.6	3.7	底部完		淡黄	内面から高台脇に黄瀬戸釉、体部内外面に銅緑釉を流す。高台径はやや大きい。貼付高台。	登窯4小期。
第128図 PL.140	2	肥前陶器	青緑釉皿	9墓 底直	12.2	4.5	3.6	完形		灰白	内面に青緑釉、外面に透明釉。内面は蛇ノ目釉剥ぎ。体部外面下位は無釉。高台端部に目痕4箇所。蛇ノ目釉剥ぎ部に目痕3箇所。	17世紀末～18世紀前半。内野山。
第128図 PL.140	3	瀬戸陶器	輪禿皿	9墓 底直	12.9	7.0	3.1	ほぼ完形		灰白	口縁部は外反。体部外面口縁部下は回転篋削り。内面から体部外面下位に灰釉。底部内面の釉を輪状に掻き取る。貼付高台。体部と高台外面の境はやや不明瞭。	登窯5小期。
挿図 PL.No.	No.	種類	器種	出土位置	径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	残存	形・成調整等	備考	
第128図 PL.140	4	銅銭	寛永通寶	46土+5cm	25.46	25.41	1.34～1.44	3.34	完形	背「文」。	4～13の10枚 錆着。	
第128図 PL.140	5	銅銭	寛永通寶	46土+5cm	25.35	25.42	1.37～1.42	4.03	完形	背「文」。文面と裏面に薄く錆着。	4～13の10枚 錆着。	
第128図 PL.140	6	銅銭	寛永通寶	46土+5cm	25.65	25.48	1.48～1.59	4.70	完形	背「文」。文面と裏面に薄く錆着。	4～13の10枚 錆着。	
第128図 PL.140	7	銅銭	寛永通寶	46土+5cm	25.61	25.60	1.42～1.47	4.65	完形	古寛永。遺存状態は良好。	4～13の10枚 錆着。	
第128図 PL.140	8	銅銭	寛永通寶	46土+5cm	25.46	25.37	1.26～1.35	2.93	完形	古寛永。遺存状態は良好。	4～13の10枚 錆着。	
第128図 PL.140	9	銅銭	寛永通寶	46土+5cm	24.73	24.81	1.27～1.34	3.58	完形	古寛永。遺存状態は良好。	4～13の10枚 錆着。	
第128図 PL.140	10	銅銭	寛永通寶	46土+5cm	25.57	25.14	1.44～1.52	4.06	完形	背「文」。文面と裏面部分的に錆着。	4～13の10枚 錆着。	
第128図 PL.140	11	銅銭	寛永通寶	46土+5cm	25.21	25.64	1.26～1.30	3.48	完形	背「文」。文面と裏面に薄く錆着。	4～13の10枚 錆着。	
第128図 PL.140	12	銅銭	寛永通寶	46土+5cm	25.71	25.44	1.13～1.45	4.01	完形	背「文」。側面と裏面にやや錆着。	4～13の10枚 錆着。	
第128図 PL.140	13	銅銭	寛永通寶	46土+5cm	25.44	25.56	1.39～1.49	3.76	完形	背「文」。周縁にやや錆着。	4～13の10枚 錆着。	
第128図 PL.140	14	銅銭	寛永通寶	46土+4cm	24.84	24.94	1.24～1.30	2.86	完形	古寛永。裏面の遺存は良好だが文面はやや腐食。	4～13の10枚 錆着。	

cm、深さ81cmである。木棺は底面に接しており、その規模は直径約40cmで、高さは不明。板の厚みは数mm程度である。底面で銭(寛永通寶) 11枚が出土し、うち4枚は古寛永である。10枚が錆着していた。人骨は蠟化した痕跡のみである。9号墓より後出のため、18世紀前半以降に比定される。10号墓(第129図、P L .53・140・141、第65表)

**位置** 28E-5グリッド。1号墓と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸長方形。壁は垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。上面規模は長軸96cm短軸87cm、下面規模は長軸83cm短軸55cm、深さ93cmである。朱漆の塗膜片が出土しており、漆器が副葬されていたとみられる。北壁底面で1の肥前磁器小碗が出土し、底面中央から南寄り銭(寛永通寶) 16枚が出土し、うち3枚は古寛永である。2枚ずつ計6枚と、8枚が錆着していた。掲載遺物のほか、土師器杯碗類1片、須恵器杯碗類2片が出土している。人骨は出土していない。出土遺物から近世に比定される。

12号墓(第130図、P L .53)

**位置** 28D-10グリッド。11号溝と重複し、底面で確認されるが新旧関係不明。平面形は隅丸方形。壁は緩やかに立ち上がる。底面は凸凹する。上面規模は長軸83cm短軸67cm、下面規模は長軸65cm短軸49cm、深さ35cmである。出土した人骨は細片のため、鑑定の結果(第5節第1項)年齢・性別は特定されなかった。年代不詳。遺物は土師器杯碗類1片・壺甕類1片が出土するが混入とみられる。

13号墓(第130図)

**位置** 27T-28A-2グリッド。平面形は長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。人為埋没。上面規模は長軸98cm短軸68cm、下面規模は長軸82cm短軸50cm、深さ104cmである。状況から土壇墓と認定される。出土した人骨は、鑑定の結果(第5節第1項)約30歳代男性と推定される。年代不詳。遺物は出土していない。

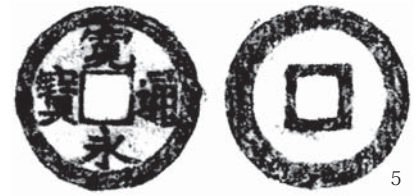
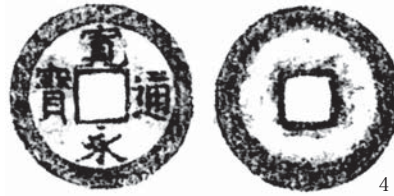
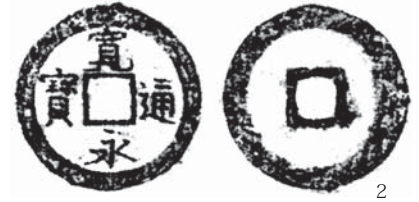
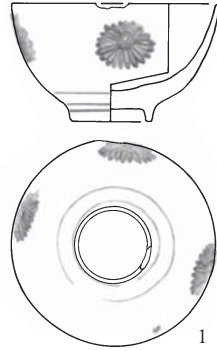
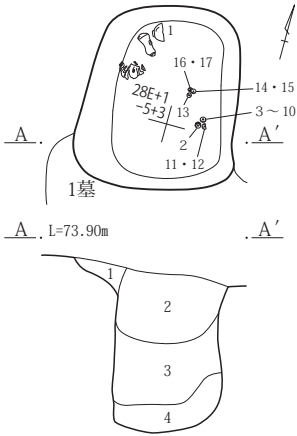
**備考** 調査段階3次3号土坑を名称変更。

204号土坑(第130図、P L .54・141、第66表)

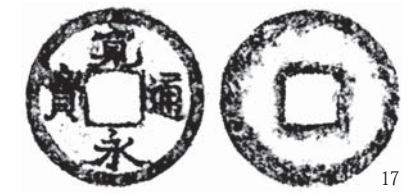
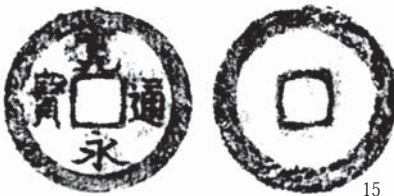
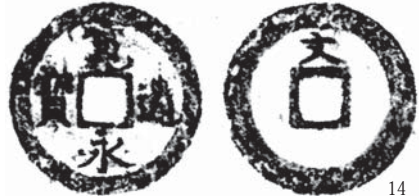
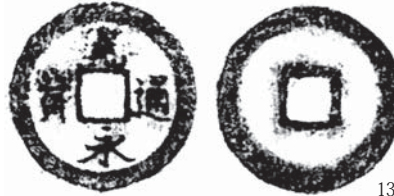
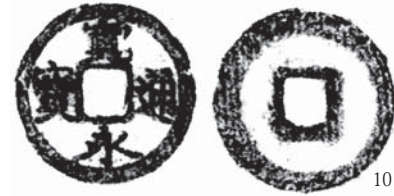
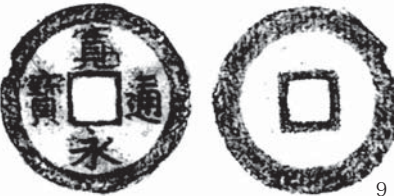
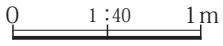
**位置** 28A-2グリッド。平面形は長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。人為埋没で、上位に白色軽石(As-A)が混入する。上面規模は長軸96cm短軸64cm、下面規模は長軸72cm短軸45cm、深さ81cmである。状況から墓の可能性が高い。埋没土から1の肥前磁器小碗が出土している。人骨は出土していない。出土遺物から17世紀末～18世紀中頃に比定される。

205号土坑(第130図、P L .50、第66表)

**位置** 27T-28A-2グリッド。平面形は隅丸方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。人為埋没。上面規模は長軸74cm短軸59cm、下面規模は長軸54cm短軸50cm、深さ100cmである。埋没土から波佐見系肥前磁器小碗(2)、ガラス玉4点(3～6)が出土し、後者は数珠とも考えられる。出土遺物から17世紀末～19世紀中頃に比定される。状況から墓の可能性が高い。



- 1 暗褐色土 黄色粒子少量に含む。
- 2 暗褐色土 礫混土(VII)大ブロック多量に含む。
- 3 礫混土(VII)+黒褐色土
- 4 黒褐色土大ブロック 礫混土(VII)大ブロック多量に含む。

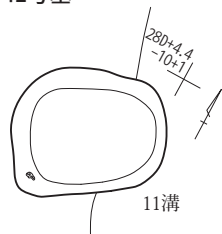


第129図 1区10号墓と出土遺物

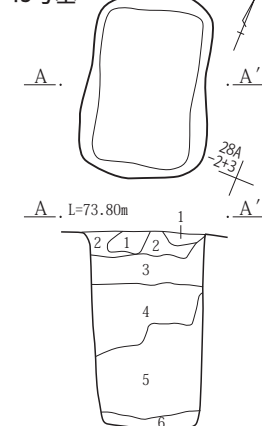
第65表 1区10号墓出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第129図 PL.140	1	肥前磁 器	小碗	底直	8.1	3.1	4.6	ほぼ完 形		白	体部外面下位の素地に黒ずんだ部分があり、焼成不良。外面の3箇所にコンニャク判による菊花状文。配置は外周をほぼ4等分した内の3箇所に施文し、約半分は無文。高台外面と高台脇に圏線。器表は白っぽいが釉はやや濁る。	17世紀末～ 18世紀中。 波佐見か。
挿図 PL.No.	No.	種類	器種	出土位置	径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	残存	形・成調整等	備考	
第129図 PL.140	2	銅銭	寛永通寶	底直上	24.86	24.48	1.34～1.49	3.01	完形	新寛永。全体に錆薄く付着。	2～10の8 枚錆着。	
第129図 PL.140	3	銅銭	寛永通寶	底直上	23.10	23.14	1.21～1.30	2.20	完形	新寛永。文面に比して裏面の錆化が進む。	2～10の8 枚錆着。	
第129図 PL.140	4	銅銭	寛永通寶	底直上	24.91	24.97	1.31～1.36	3.39	完形	新寛永。	2～10の8 枚錆着。	
第129図 PL.140	5	銅銭	寛永通寶	底直上	24.73	24.76	1.33～1.41	3.54	完形	古寛永。側面に鑄不足によると推定される小孔1箇所。	2～10の8 枚錆着。	
第129図 PL.140	6	銅銭	寛永通寶	底直上	24.08	24.36	1.24～1.29	3.21	完形	新寛永。遺存状態は良好。	2～10の8 枚錆着。	
第129図 PL.140	7	銅銭	寛永通寶	底直上	24.97	25.11	1.27～1.38	3.64	完形	新寛永。	2～10の8 枚錆着。	
第129図 PL.140	8	銅銭	寛永通寶	底直上	25.42	25.40	1.42～1.47	3.85	完形	背「文」。方孔下部に切り込み1箇所。	2～10の8 枚錆着。	
第129図 PL.140	9	銅銭	寛永通寶	底直上	25.17	25.33	1.30～1.38	3.42	完形	新寛永。左側縁は調査時の欠損。	2-10の8枚錆 着。	
第129図 PL.140	10	銅銭	寛永通寶	底直上	24.21	24.02	1.43～1.52	3.42	完形	古寛永。	2-10の8枚錆 着。	
第129図 PL.140	11	銅銭	寛永通寶	底直上	25.27	25.31	1.08～1.19	3.12	完形	古寛永。裏面は錆着により遺存が良好。文面はやや上部の文字がやや不鮮明。	12と錆着。	
第129図 PL.141	12	銅銭	寛永通寶	底直上	23.45	23.55	1.11～1.20	2.50	完形	新寛永。裏面は錆着により遺存がよいが、文面は腐食がやや進む。	11と錆着。	
第129図 PL.141	13	銅銭	寛永通寶	底直上	25.13	25.06	1.33～1.38	3.24	完形	新寛永。文面やや錆付着。		
第129図 PL.141	14	銅銭	寛永通寶	底直上	25.51	25.64	1.43～1.50	3.37	完形	背「文」。新寛永。	15と錆着。	
第129図 PL.141	15	銅銭	寛永通寶	底直上	24.75	25.09	1.36～1.40	3.16	完形	新寛永。裏面錆付着。	14と錆着。	
第129図 PL.141	16	銅銭	寛永通寶	底直上	24.17	23.64	1.22～1.33	2.57	完形	新寛永。周縁に少量錆付着。	17と錆着。	
第129図 PL.141	17	銅銭	寛永通寶	底直上	23.71	23.65	1.15～1.24	2.22	完形	新寛永。	16と錆着。	

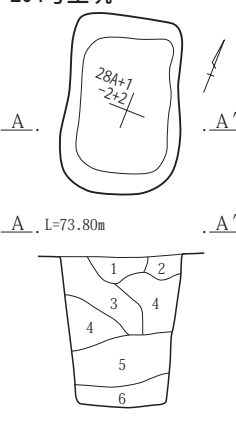
12号墓



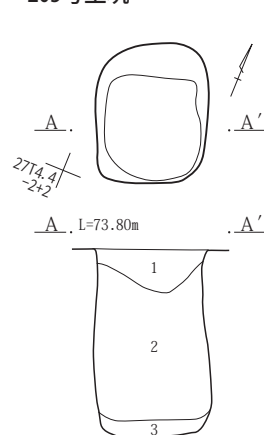
13号墓



204号土坑

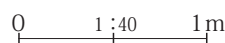


205号土坑



13号墓

- 1 黄色土 しまりなく粘性ない。黒色土大ブロック少量に含む。
- 2 淡黄色土 しまりなく粘性ない。黒色土大ブロックやや多量に含む。
- 3 黒褐色土 しまりなく粘性ない。ローム粒子多量に含む。
- 4 黄褐色土 しまりなく粘性ない。
- 5 黒褐色土 ややしまりやや粘性あり。ローム小ブロック含む。
- 6 灰白色粘土ブロック しまりなく粘性あり。黒色土大ブロック含む。

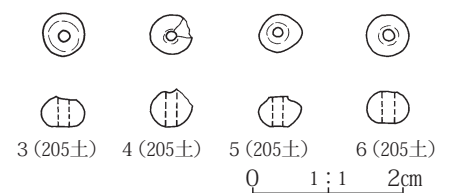
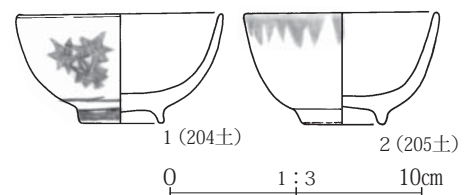


204号土坑

- 1 黒褐色砂質土 浅間A軽石含む。
- 2 黒褐色砂質土 浅間A軽石・ローム小ブロック含む。
- 3 黒褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 4 黒褐色土 しまりなく粘性ない。ローム小ブロック多量に含む。
- 5 黒褐色土 ローム大ブロック多量に含む。
- 6 黒色土 しまり粘性あり。均質。

205号土坑

- 1 黒褐色砂質土 ローム小ブロック少量に含む。
- 2 黒褐色土 ローム大ブロック少量に含む。
- 3 黒褐色土 均質。



第66表 1区204・205号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第130図 PL.141	1	肥前磁器	小碗	204土	8.0	3.3	4.3	ほぼ完形		灰白	外面コンニャク印判による紅葉状文を三方に施す。	17世紀末～ 18世紀中頃。 波佐見系。
第130図	2	肥前磁器	小碗	205土	7.5	3.3	4.4	完形		灰白	口縁部外面型紙摺りによる雨降り文。染付は不鮮明。	17世紀末～ 19世紀中頃。 波佐見系。
挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	径1 (mm)	径2 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	残存	胎土	色調	備考
第130図	3	ガラス	小玉	205土	5.47	5.43	3.94	0.22	完形		緑	不透明。表面は白い粉を吹いた状態で気泡は観察できない。劣化により部分的に凹凸が認められる。
第130図	4	ガラス	小玉	205土	5.47	5.15	4.41	0.19	ほぼ完形		白	白色半透明。白い粉を吹いた状態に劣化し凹凸も多いが、器表に光沢が残る箇所もある。透明部分には気泡が少量認められる。中央の円孔と同方向に、小玉を半裁するように切り込み状の狭い溝が両面に入り、一方が浅く他方が深い。
第130図	5	ガラス	小玉	205土	5.25	5.40	3.63	0.17	完形		透明	1部に劣化による窪みが認められるが、状態は良好。平面形は円形ではなく、1箇所突き出る箇所がある。小さい気泡を少量含む。内部に円孔と同心円状に、製作時に生じたと考えられる筋が2条見える。
第130図	6	ガラス	小玉	205土	5.47	5.47	4.29	0.23	完形		透明	最も遺存状態の良い個体。黄緑色と白色不透明の夾雑物各1個含む。大きめの気泡は球形単体であるが、微細な気泡は円孔を囲むように並ぶ。

## 6 火葬跡

近世の火葬跡は2基検出された。1号火葬跡は1号屋敷の西辺を区画する25号溝に隣接して、20号溝より前出であり、1号溝が設けられて東側に墓域が設定される過渡期にあたる。近世の事例として希少な遺構である。また、2号火葬跡は調査区北西部に位置し、周辺には中世墓と想定される土坑群があり、その系譜に位置づけられる。近接する3号火葬跡と時期的に近いと思われる。

### 1号火葬跡(第131図、P L .54・141、第67表)

**位置** 28C-6グリッド。20号溝より前出。平面形は楕円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没土は炭化物片、火葬人骨を多く含み、形態から火葬跡と考えられる。上面規模は長径82cm短径56cm、下面規模は長径50cm短径32cm、深さ25cmである。壁面及び底面の焼土化は見られない。北壁際と南壁際から美濃陶器皿が1点ずつ出土する。埋没土から銭7枚が出土し、寛永通宝(すべて古寛永)に混じって皇宋通宝1枚が出土する。銭は黒みを帯び、著しく曲がるものがみられるため、火葬時に合わせて焼かれた可能性が高い。一方、陶磁器には被熱した痕跡はないため、火葬後に入れられたこととなるが、この場合副葬された可能性が生じる。掲載遺物のほか、土師器壺甗類9片が出土している。形態からみて、火葬跡と分類されるが、状況から火葬墓とも考えられる。出土した人骨は、鑑定の結果(第5節第1項)成人女性とされている。年代は、出土遺物から17世紀後半に比定される。

### 2号火葬跡(第132図、P L .141、第68表)

**位置** 28E-10グリッド。184号土坑より後出で、1号竪穴状遺構より前出か。11号溝と重複するが新旧関係不明。

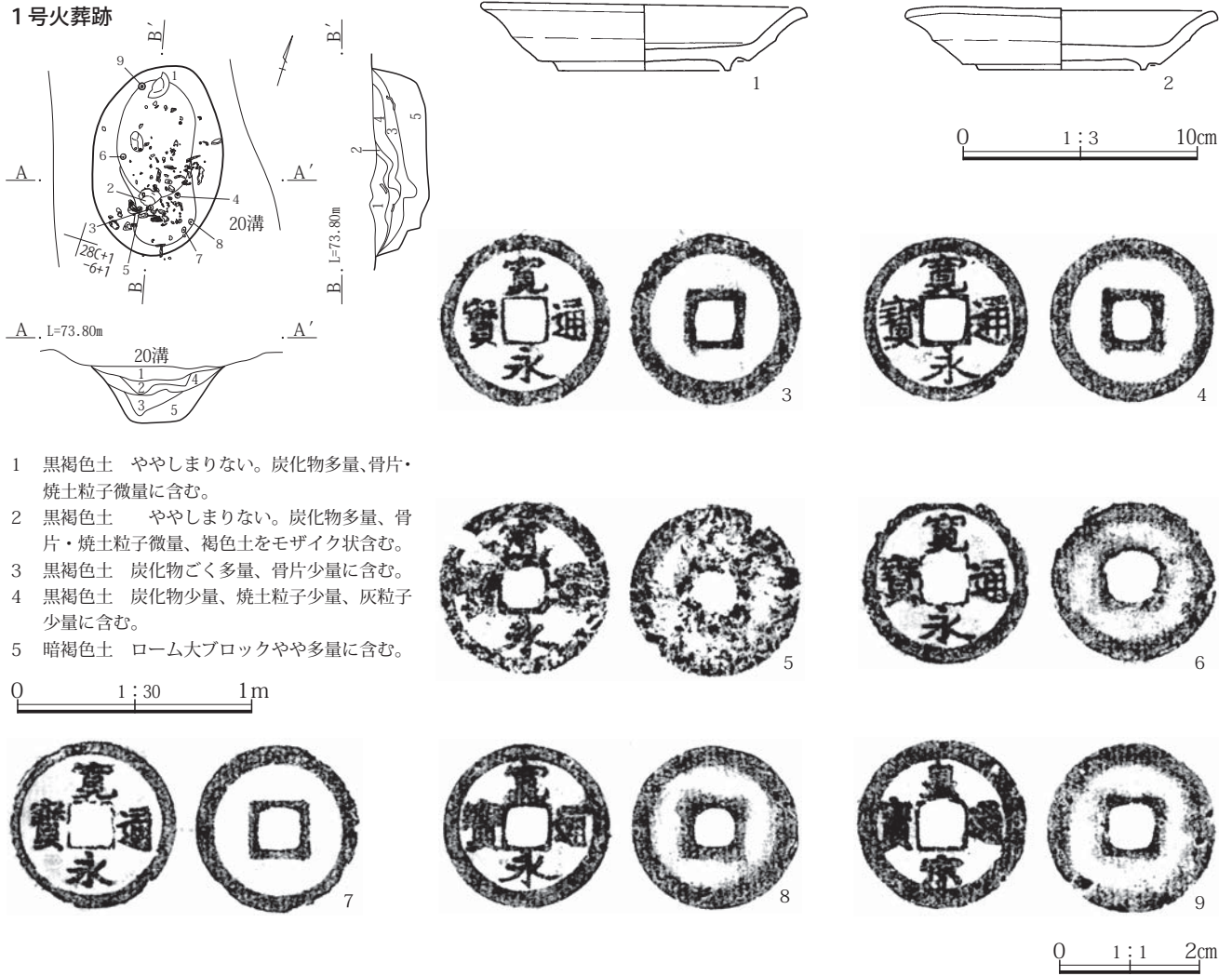
平面形は西壁中央が突出するT字形。主体部は隅丸方形。突出部が184号土坑と重複するため、やや不明瞭で、底面中央部が溝状に凹むのも、その影響かもしれない。壁は斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。突出部を中心に西壁が強く焼土化する。やや大きな炭化物片が混入するが、樹種同定には至っていない。埋没土は炭化物・ロームブロックを多量に含み、収骨後埋め戻されたときみられる。上面規模は長軸90cm短軸71cm、突出部の長さ44cm幅18cm、下面規模は長軸74cm短軸60cm、深さ35cmである。巨礫がまとまって出土するが、その下で完形の在地系土器皿(1)が潰れて出土したことから、巨礫は底面に敷かれたままではない。採取した土壤に混じって、銭(古寛永通宝)1枚が出土する。黒みを帯びており、合わせて焼かれた可能性もある。火葬人骨の細片が出土し、鑑定の結果(第5節第1項)成人とされている。在地系土器皿が、15世紀前半～中頃に比定されるため、ほぼ完形ながら11号溝など周辺からの混入とみなされる。古寛永通宝の年代から、17世紀中頃が下限となる。

## 7 集石遺構

集石遺構は3基検出されたが、礫を廃棄した土坑と、橋台などの配石であったものに分かれる。1・4号集石遺構は前者で、5号集石遺構が後者である。

1号集石遺構は調査区の北西部にあり、周辺に同じく礫を多く含む11号溝もある。ともに墓石を含む傾向があり、周辺に散在する土壙墓や火葬跡との関連が想定される。4号集石遺構は1号溝の東側で、近世墓群の南に隣接する。1・2号墓の上面にも集石があるが、4号集石の場合は礫を廃棄したものと位置づけられる。

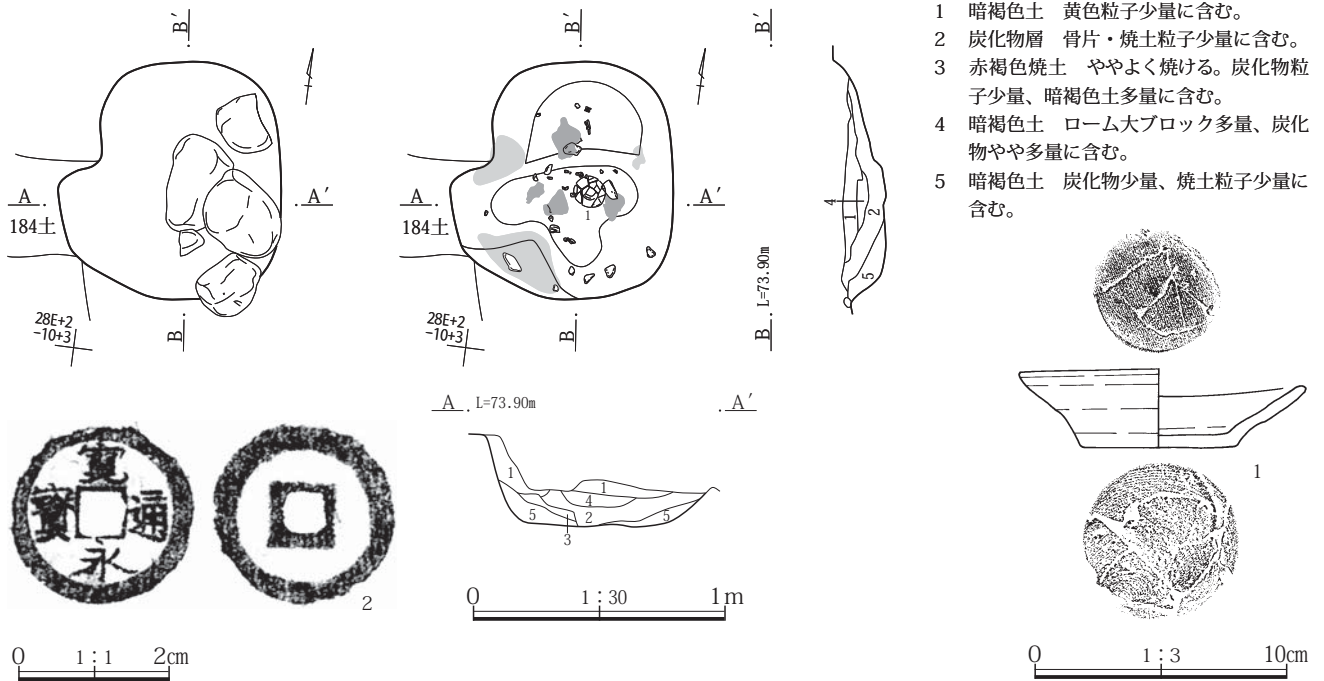
1号火葬跡



- 1 黒褐色土 ややしまりない。炭化物多量、骨片・焼土粒子微量に含む。
- 2 黒褐色土 ややしまりない。炭化物多量、骨片・焼土粒子微量、褐色土をモザイク状含む。
- 3 黒褐色土 炭化物ごく多量、骨片少量に含む。
- 4 黒褐色土 炭化物少量、焼土粒子少量、灰粒子少量に含む。
- 5 暗褐色土 ローム大ブロックやや多量に含む。

第131図 1区1号火葬跡と出土遺物

2号火葬跡



- 1 暗褐色土 黄色粒子少量に含む。
- 2 炭化物層 骨片・焼土粒子少量に含む。
- 3 赤褐色焼土 ややよく焼ける。炭化物粒子少量、暗褐色土多量に含む。
- 4 暗褐色土 ローム大ブロック多量、炭化物やや多量に含む。
- 5 暗褐色土 炭化物少量、焼土粒子少量に含む。

第132図 1区2号火葬跡と出土遺物



第67表 1区1号火葬跡出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第131図 PL.141	1	美濃陶器	反皿	+12cm	13.8	7.2	2.8	2/3		褐灰	外面中位に緩い稜をなして口縁部は外反。高台脇やや削り込む。高台はシャープ。内面から高台内に灰釉で、高台内は蛇ノ目状に無釉部がある。高台内無釉部に目痕5箇所。底部内面に目痕3箇所。	登窯4小期。
第131図 PL.141	2	美濃陶器	反皿	+4cm	(13.2)	7.1	2.7	1/2		褐灰	外面中位に緩い稜をなして口縁部は外反。高台脇やや削り込む。高台はシャープ。内面から高台内に灰釉で、高台内は弧状に無釉部がある。高台内に目痕4箇所。底部内面に目痕3箇所。	登窯4小期。
挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置	径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	残存	形・成調整等			
第131図 PL.141	3	銅銭 寛永通寶	+15cm	-	-	1.17～ 1.25	2.77	完形	古寛永。表面は黒味を帯び、中央付近で曲がる。			
第131図 PL.141	4	銅銭 寛永通寶	+8cm	23.39	23.57	1.14～ 1.20	2.67	完形	古寛永。			
第131図 PL.141	5	銅銭 寛永通寶	+8cm	-	-	-	-	一部欠	古寛永か。表面は黒味を帯びる。錆多く付着。			
第131図 PL.141	6	銅銭 寛永通寶	+9cm	-	-	1.01～ 1.12	-	周縁一部欠	古寛永か。表面はやや黒味を帯び、方孔部が盛り上がるように変形。			
第131図 PL.141	7	銅銭 寛永通寶	+3cm	23.93	-	1.16～ 1.25	-	周縁一部欠	古寛永。表面はやや黒味を帯びる。			
第131図 PL.141	8	銅銭 寛永通寶	+4cm	23.44	23.85	1.15～ 1.26	2.91	完形	古寛永か。表面は黒味を帯びる。			
第131図 PL.141	9	銅銭 皇宋通寶	+11cm	24.27	24.28	1.33～ 1.36	3.43	完形	北宋、1038年初鑄。表面は黒味を帯びる。周縁に鑄不足による小穴が認められる。			

第68表 1区2号火葬跡出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第132図 PL.141	1	在地系土器	皿	+17cm	11.3	6.2	2.2～ 3.7	ほぼ完形		にぶい 橙	歪みが多く、器高差大きい。体部下位は外反。口縁端部付近は内湾気味。内面底部と体部境はドーナツ状に浅く窪む。底部左回転糸切無調整。	15世紀前半～ 中頃。
挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置	径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	残存	形・成調整等			
第132図 PL.141	2	銅銭 寛永通寶		-	-	1.37～ 1.38	-	周縁一部欠	古寛永。表面は部分的に黒味を帯びる。			

5号集石遺構は調査区中央部西端にあり、48号溝と重複して同時並存した可能性がある。橋台として機能し、48号溝を渡していた可能性が高い。

1号集石遺構(第133図、P L .54・141、第69表)

位置 28D-10グリッド。1号竪穴状遺構と重複するが新旧関係不明。確認面から小～巨礫が多量に確認され、土坑状の掘り込みを持つ。平面形は隅丸細長方形。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は長軸292cm短軸129cm深さ38cmである。礫中には空風輪(1)、相輪(2)も含まれる。掲載遺物のほか、土師器杯椀類12片・壺甕類36片、須恵器杯椀類11片・壺甕類5片、近世国産磁器1片、その他土器類4片、砥石1点が出土している。周辺には2・3号火葬跡、12号墓が分布しており、関連も想定されるが、地山に礫が多量に含まれる状況ではないため、礫を廃棄した土坑と位置づけられる。近世に比定される。

4号集石遺構(第133・134図、P L .54・141、第70表)

位置 28C-5グリッド。確認面から小～大礫が多量に確認され、土坑状の掘り込みを持つ。平面形は隅丸細長方形(平面図遺漏)。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は凸凹する。礫の分布する範囲は長軸210cm短軸70cmで、掘り方の深さは18cmである。礫に混じって、陶磁器が多量

に出土している。北側に土坑墓群が隣接し、関連が想定される。出土遺物の下限は近現代であり、周辺の墓からの遺物も混入しながら、礫を廃棄した土坑と位置づけられる。掲載遺物のほか、須恵器杯椀類1片・壺甕類2片、中世在地系土器1片、近世国産陶器8片・在地系土器3片、その他土器類6片、石製品1点が出土している。

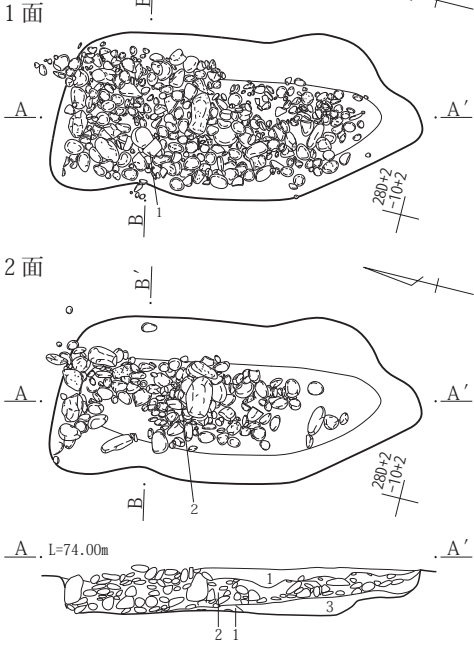
5号集石遺構(第133・135図、P L .54・142、第71表)

位置 28B-9グリッド。1号道路より前出で、58号溝と重複するが新旧関係不明。約50cmの間隔で2条の大礫の列が、東西方向をとって直線的に並ぶ。規模は長軸275cm短軸123cmである。礫は58号溝の南北肩部に並び、橋台として利用されていた可能性がある。礫中から肥前磁器皿(135図1)ほかが出土する。1号道路からの混入もあり、近現代を下限とは見なし難い。掲載遺物のほか、土師器壺甕類2片、須恵器杯椀類1片、近世国産磁器1片、同在地系土器2片、近現代陶磁器4片が出土している。58号溝と同時並行と考えれば、48号溝掘削時には廃絶されたこととなろう。

8 礫充填遺構

調査区の中央部東寄りに位置し、51・94号溝に挟まれた状態で、東西方向に不連続に並ぶ。ともに江戸時代に

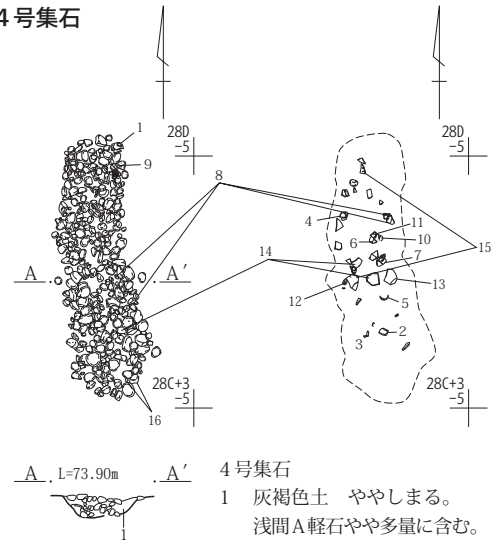
1号集石



1号集石

- 1 暗褐色土 ローム粒子微量に含む。
- 2 小~大円礫 石造物混じる。暗褐色土少量に含む。
- 3 暗褐色土 ローム小ブロック少量、焼土粒子微量に含む。

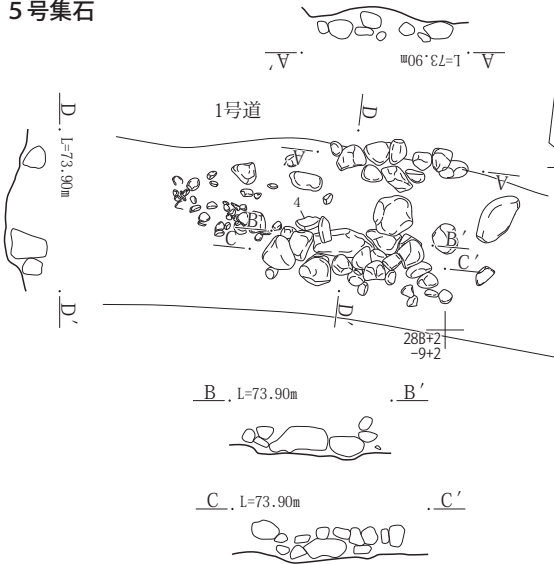
4号集石



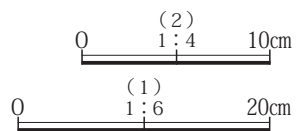
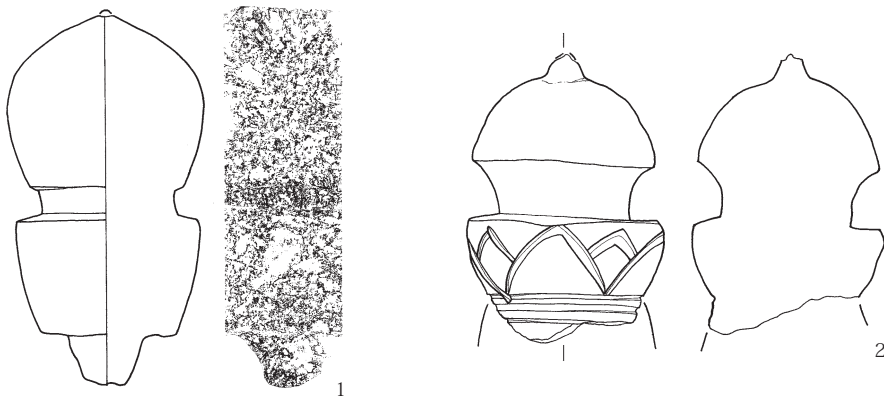
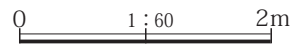
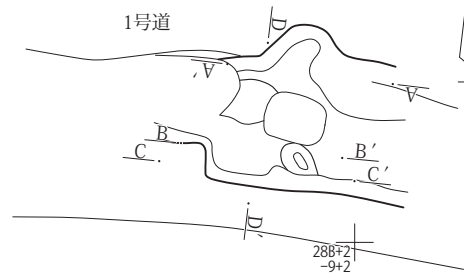
4号集石

- 1 灰褐色土 ややしまる。浅間A軽石やや多量に含む。

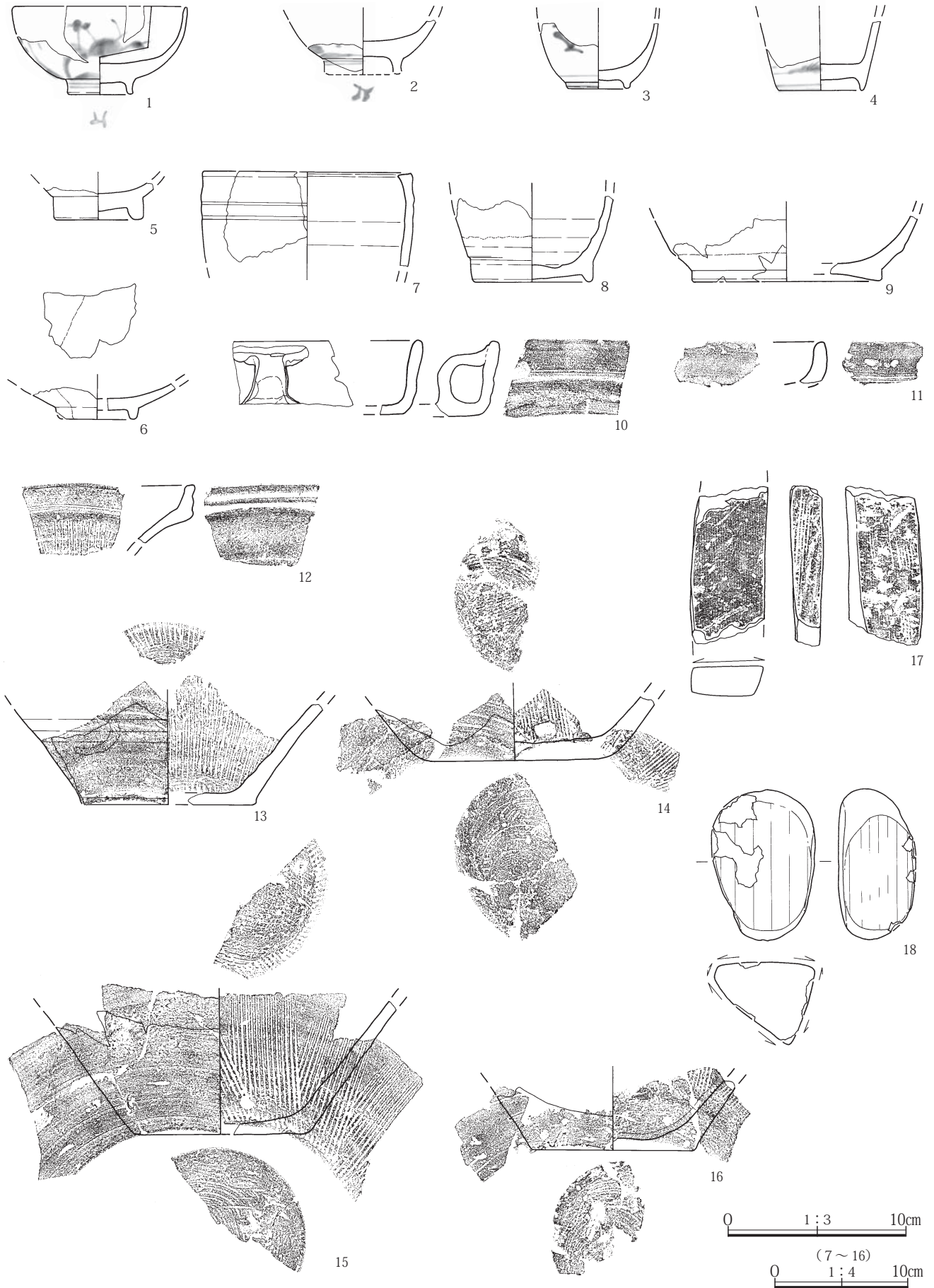
5号集石



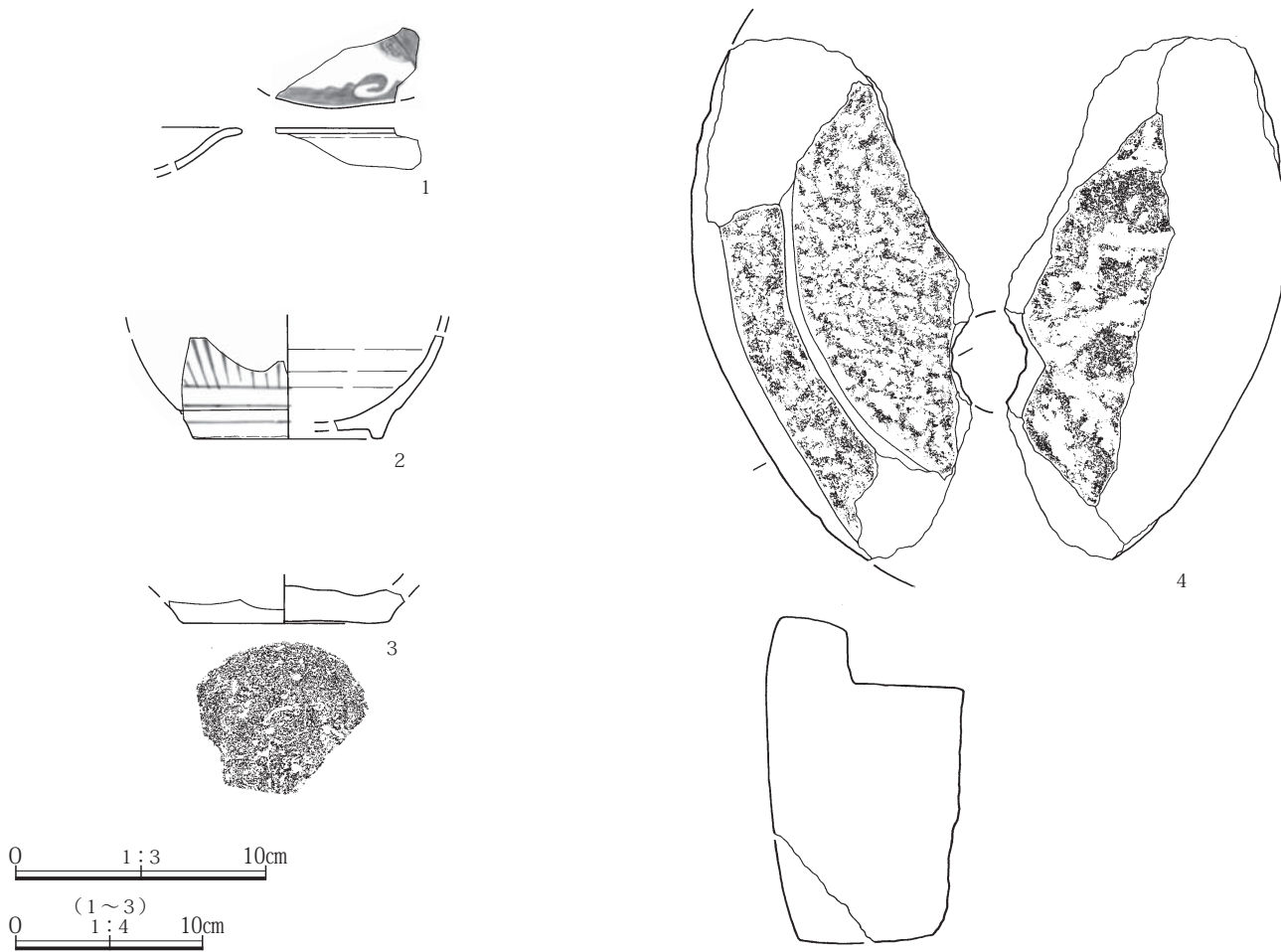
掘り方



第133図 1区1・4・5号集石遺構と1号集石遺構出土遺物



第134図 1区4号集石遺構出土遺物



第135図 1区5号集石遺構出土遺物

第69表 1区1号集石遺構出土遺物

挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況	備考
第133図 PL.141	1	五輪塔		空風輪	角閃石安山岩	高さ 29.1	15.6	4800.0	空輪部・風輪部とも最大径が上端側にあり、下端側に向い徐々に径を狭める。整形痕は荒れて、不明瞭。	
第133図 PL.141	2	宝篋印塔		相輪部	粗粒輝石安山岩	高さ (15.2)	10.4	1284.7	宝珠下に強く外反する括れ部を挟んで請花が付く。宝珠先端は尖り、請花には花卉4葉を片握り気味に刻む。	
-	3	砥石		多面砥石	粗粒輝石安山岩	(15.3)	(12.8)	1335.4	背面側・右辺に近い整形面には平ノミ状の工具痕が残る。各整形面は平滑だが、光沢を帯びるまでにはなく砥石としての使用頻度は低い。	非実測

第70表 1区4号集石遺構出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第134図 PL.141	1	肥前磁器	碗		(9.7)	3.6	5.9	1/2		灰白	外面に雪輪梅樹文。高台内に不明銘。	波佐見諸窯。18世紀後半～19世紀初。
第134図	2	肥前磁器	碗		-	-	-	下半部		灰白	外面は雪輪梅樹文か。高台内に不明銘。	江戸時代。
第134図	3	瀬戸・美濃磁器	杯		-	(3.2)	-	1/3		白	外面に濃い色の呉須による染付。	19世紀中頃～後半。
第134図	4	肥前磁器	猪口		-	(4.7)	-	下半部		白	高台を有し、底部器壁は厚い。	18世紀代。
第134図	5	瀬戸陶器	丸碗		-	5.0	-	底部		淡黄	内面に鉄釉で部分的に斑状に赤褐色を呈する。高台は厚くやや高い。	登窯3小期。
第134図	6	美濃陶器	せんじ碗		-	(4.0)	-	1/2		浅黄	内外面は灰釉と鉄釉の左右掛け分け。高台端部のみ無釉。	登窯7小期。
第134図	7	瀬戸陶器	半胴甕		(15.5)	-	-	口縁部片		にぶい黄橙	内外面に錆釉。外面口縁部下に2条の凹線。	登窯7小期。
第134図 PL.141	8	美濃陶器	有耳壺		-	8.8	-	体下位～底		浅黄	残存部は体部外面下位のみ鉄釉。体部外面下端から高台内は無釉。内面は鉄化粧風に薄く鉄釉かかる。体部外面は回転削り。	登窯5～7小期。
第134図	9	瀬戸陶器	火鉢		-	(14.0)	-	1/10～1/4		淡黄	体部外面に黒色の鉄釉厚めにかける。体部外面下端から底部外面と内面は無釉。	登窯8・9小期。
第134図 PL.141	10	在地系土器	焙烙		-	-	-	耳部片	A	黒	断面中央は暗灰色、断面は灰白色、器表は黒色。底部外面器表は灰褐色。体部外面下端は篋削り。内外面中位の粘土接合痕は明瞭。	江戸時代。
第134図	11	在地系土器	焙烙		-	-	-	口縁部片	A	橙	浅く体部は内湾。	近現代。

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第134図	12	丹波陶 器か	すり鉢		-	-	-	口縁部 片	口縁部 片	浅黄	口縁部縁帯をなし下部は外方に突き出さない。口縁部 鉄泥。	18世紀中～後 半。13と同一個 体の可能性。 長谷川IVB類。
第134図	13	丹波陶 器か	すり鉢		-	(13.0)	-	下半部 片		にぶい 黄橙・ 褐灰	外面に1条上方から鉄泥が流れる。体部外面下端は回 転削り。内面は使用により平滑。	12と同一個 体の可能性高 い。
第134図	14	瀬戸陶 器	すり鉢		-	(13.0)	-	底部片	1/3	浅黄	底部右回転糸切無調整。内外面に錆釉。底部周縁は使用 によりすり目ほとんど摩滅。底部外面周縁の器表も摩滅。	
第134図 PL.141	15	瀬戸陶 器	すり鉢		-	(13.0)	-	下半部 片	1/3	淡黄	内外面に錆釉。内面底部下位から底部内面は使用によ り、すり目の深い部分のみ残存。底部外面周縁も摩滅。 底部回転糸切無調整。	登窯5小期。
第134図	16	瀬戸陶 器	すり鉢		-	(12.0)	-	底部片	1/3	淡黄	底部右回転糸切無調整。内外面に錆釉。体部内面下 端から底部内面は使用による摩滅が著しく、すり目が完 全に摩滅。底部外面の糸切痕も摩滅気味。	
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況		備考	
第134図 PL.141	17	砥石		切り砥石	砥沢石	(6.0)	2.7	31.0	左側面・裏面には櫛歯タガネ状痕が痕跡として残る 程度、右側面にはノコギリ状痕が新鮮な状態で残る。			
第134図 PL.141	18	石製品		不明	二ツ岳軽石	8.4	(4.3)	99.3	表裏面・右側面を研磨して平坦整形。断面は三角 形状。			

第71表 1区5号集石遺構出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第135図	1	肥前磁 器	皿		-	-	-	口縁部 片		灰白	口縁部輪花。内面に染付。	18世紀末～ 19世紀中。
第135図	2	製作地不 詳磁器	徳利		-	(10.0)	-	底部片		灰白	外面に濃い呉須で染付。内面は無釉。	近現代。
第135図	3	在地系 土器	片口鉢		-	(11.0)	-	底部		灰	還元炎。底部内面周縁は使用によりドーナツ状に窪む。 底部外面は砂底状。底部外面周縁は摩滅。	中世。
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況		備考	
第135図 PL.142	4	石臼		上白	粗粒輝石安 山岩	径 33.8	高さ 13.4	2703.6	2区画分が残存。刻み目(副溝)は区画毎に異な り、目立ては便宜的である。上縁際に供給孔を穿つ。 供給孔は両側穿孔で、途中段を有する。6分割か。			

比定され、状況からも一連の遺構と考えられる。南西に隣接して、13号墓などの小規模な墓域と、調査対象外ながら南東端にやや大きな墓域がある。礫を廃棄するには小規模であり、地面の凹みを補修したか、あるいは上部に石造物など何らかの工作物があり、その基礎構造物であった可能性も考えられる。

1～5号礫充填遺構(第136図、P L.55)

**位置** 28B-1・2グリッド。小・中礫が多量に確認され、円形土坑状の掘り込みを持つ。規模は、1号から長軸34cm短軸28cm深さ5cmで4cm離れて、2号は長軸40cm短軸33cm深さ9cmと長軸57cm短軸22cm深さ10cmで5cm離れて、3号は長軸35cm短軸28cm深さ15cm、4cm離れて、4号は長軸45cm短軸30cm深さ15cm、25cm離れて、5号は長軸31cm短軸25cm深さ17cmである。94号溝と並走しており、関連が想定される。遺物は中世国産陶器1片、近世在地系土器6片、その他土器類1片が出土している。出土遺物から近世以降に比定される。

**備考** 調査段階3次1～5号不明遺構を名称変更。

6号礫充填遺構(第136図、P L.55)

**位置** 18B-20グリッド。94号溝と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸方形。断面形は皿状。礫は少ない。

規模は長軸43cm短軸35cm深さ10cmである。遺物は出土していない。

**備考** 調査段階3次6号不明遺構を名称変更。

7号礫充填遺構(第136図、P L.55)

**位置** 18C-20グリッド。51号溝と重複するが新旧関係不明。平面形は不整形円形。断面形は皿状。大礫を含む。規模は長径50cm短径33cm深さ9cmである。遺物は近世在地系土器2片が出土している。出土遺物から近世以降に比定される。

**備考** 調査段階3次7号不明遺構を名称変更。

8号礫充填遺構(第136図、P L.55)

**位置** 18C-19グリッド。101号溝と不分明に重複する。新旧関係不明。平面形は方形。断面形は皿状。大礫を含む。規模は長軸76cm短軸46cm深さ10cmである。遺物は出土していない。

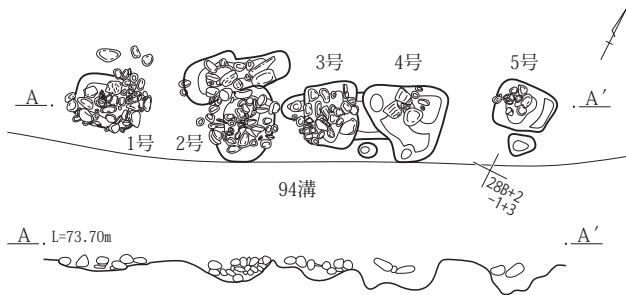
**備考** 調査段階3次8号不明遺構を名称変更。

9号礫充填遺構(第136図、P L.55)

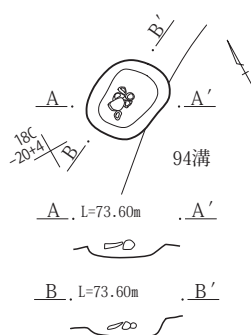
**位置** 18C-19グリッド。平面形は溝状。断面形は逆台形。こぶし大の礫を主体とする。規模は長軸86cm短軸25cm深さ30cmである。遺物は近世国産陶器2片、その他土器類2片が出土している。出土遺物から近世以降に比定される。

**備考** 調査段階3次9号不明遺構を名称変更。

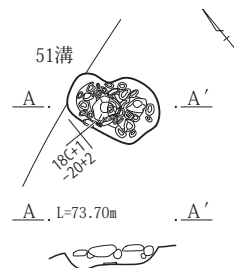
1～5号礫充填遺構



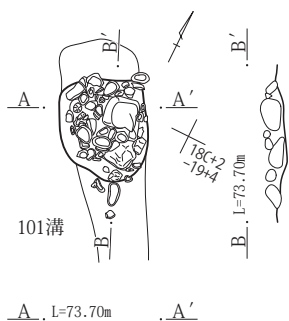
6号礫充填遺構



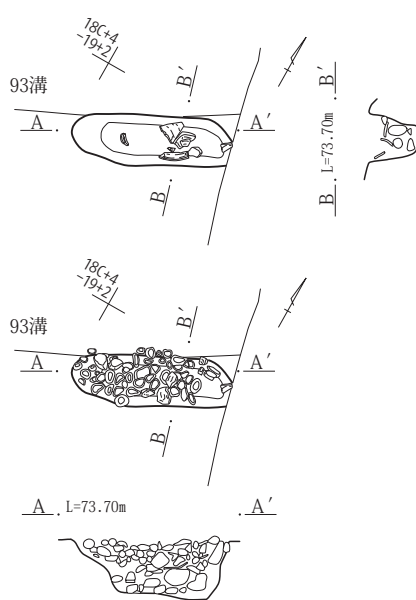
7号礫充填遺構



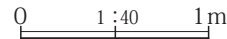
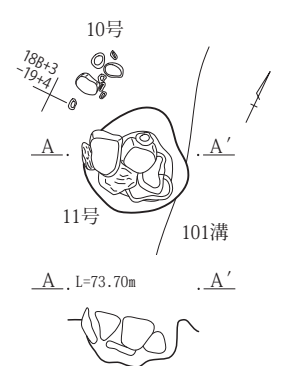
8号礫充填遺構



9号礫充填遺構



10・11号礫充填遺構



第136図 1区1～11号礫充填遺構

10・11号礫充填遺構(第136図、P L.55)

位置 18B-19グリッド。10号は掘り込みを持たない。11号の平面形は方形に近い。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は凸凹する。規模は長軸54cm短軸51cm深さ26cmである。遺物は出土していない。

備考 調査段階3次10・11号不明遺構を名称変更。

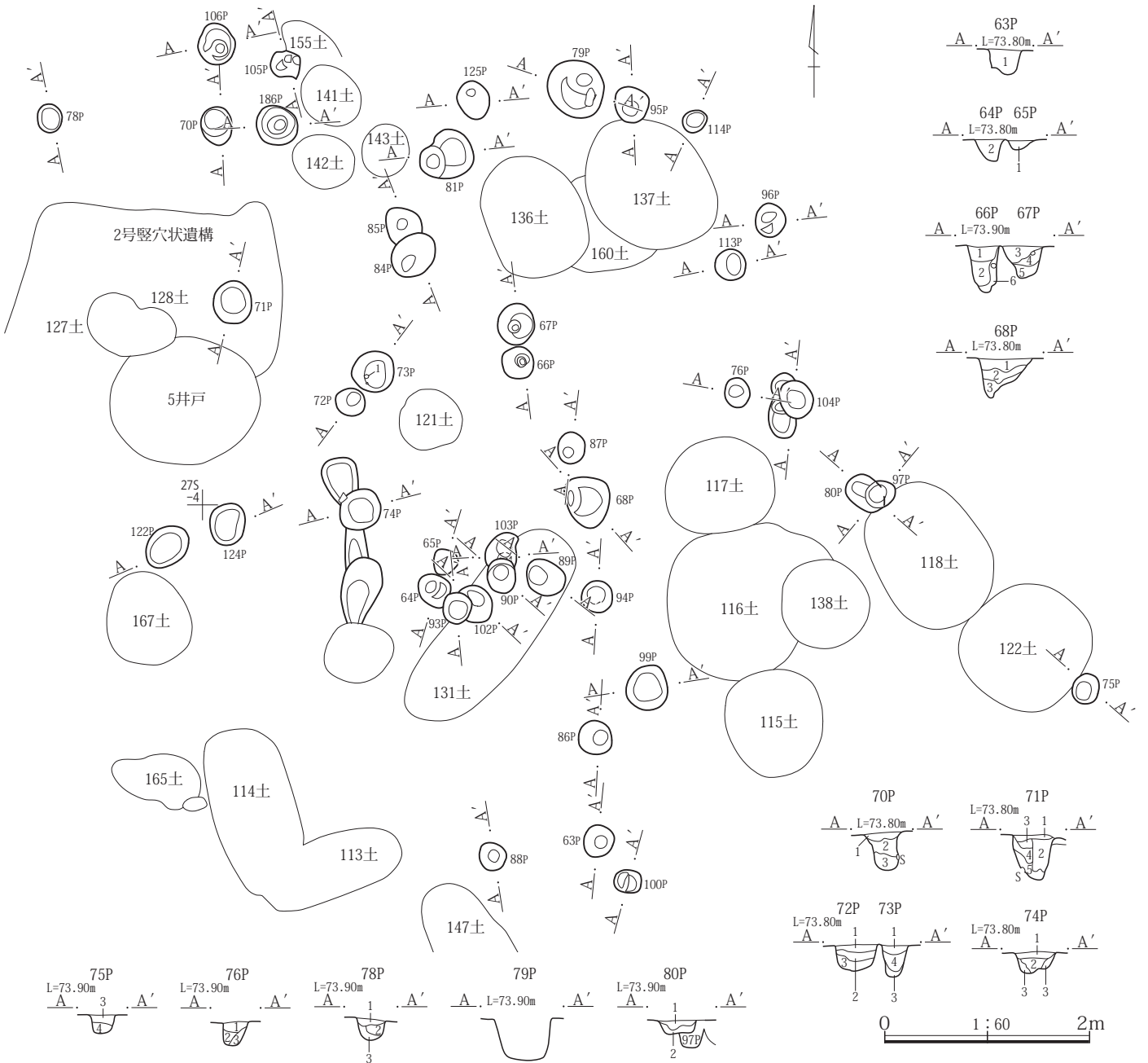
9 ピット群・ピット(第137～139図、P L.55・56・142、第72・73表)

ピット群は、東西10.5m南北8.5mの範囲に42基のピット

トが集中して分布する。その他の区域に8基のピットが散在する。個別の規模は第73表のとおり。埋没土には、ほとんど白色軽石(As-A)が含まれる。周辺に桶を埋設した土坑が集中しており、関連が想定される。一部直線的に並ぶものもあるが、建物として復元できない。埋没土に白色軽石(As-A)を含むものを当該期として抽出した。遺物の出土は少ないが、73号ピット埋没土上層から肥前陶器香炉か火入れ(17世紀末～18世紀中頃)(138図1)、102号ピット埋没土から寛永通宝(138図2・3)2枚が出土する。

第72表 1区73・102号ピット出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第138図	1	肥前陶器	香炉か 火入れ	73P +19cm	-	-	-	体部片		灰黄	外面に染付。内面は無釉。貫入が入る。	17世紀末～18 世紀中頃か。
第138図 PL.142	2	銅銭	寛永通寶	102P	22.70	22.76	0.94～ 1.02	1.88	完形		新寛永。一面に鍔着痕。調査時に布片付着。	
第138図 PL.142	3	銅銭	寛永通寶	102P	23.49	23.52	1.05～ 1.11	2.53	完形		新寛永。一面に鍔着痕。調査時に布片付着。	



63号ピット

1 灰褐色土 浅間A軽石微量、小礫微量に含む。

64・65号ピット

1 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。  
2 黒褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。

66・67号ピット

1 暗褐色土 ローム小ブロックごく多量に含む。  
2 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。  
3 黒褐色土 ローム小ブロック少量に含む。  
4 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。  
5 暗褐色土 ローム大ブロック多量に含む。  
6 黒褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。

68号ピット

1 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。  
2 黒褐色土 ローム大ブロック多量に含む。  
3 黒褐色土 ローム大ブロックごく多量に含む。

70号ピット

1 暗褐色土 ローム小ブロック少量に含む。  
2 暗褐色土 黄色粒子少量に含む。  
3 黒褐色土

71号ピット

1 暗褐色土 浅間A軽石少量、ローム小ブロック少量に含む。  
2 暗褐色土 黄色粒子少量に含む。  
3 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。  
4 にぶい黄褐色土 暗褐色土小ブロックやや多量に含む。  
5 黒褐色土 均質

72・73号ピット

1 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。  
2 黒褐色土 均質  
3 黒褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。  
4 黒褐色土 ローム粒子少量に含む。

74号ピット

1 暗褐色土 浅間A軽石微量、ローム粒子少量に含む。  
2 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。  
3 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。

75号ピット

1 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。  
2 暗褐色土 ローム大ブロック多量に含む。  
3 暗褐色土 ローム粒子微量に含む。  
4 褐色土 黄色粒子微量に含む。

76号ピット

1 暗褐色土 浅間A軽石少量、ローム小ブロックやや多量に含む。  
2 暗褐色土 ローム小ブロック少量に含む。  
3 暗褐色土 ローム小ブロックごく多量に含む。

78号ピット

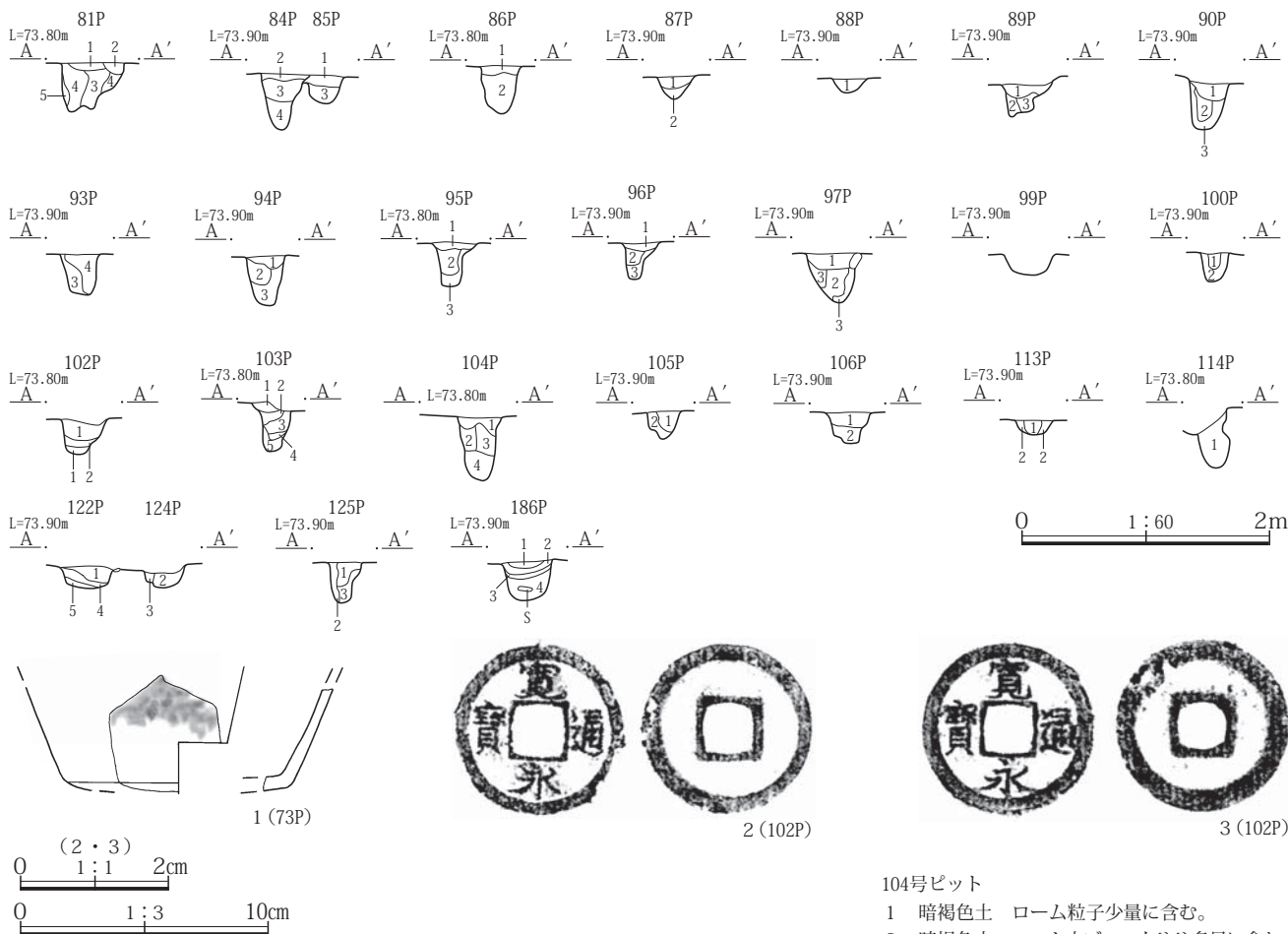
1 暗褐色土 浅間A軽石微量に含む。  
2 黒褐色土 均質  
3 黒褐色土 ローム大ブロックやや多量に含む。

80号ピット

1 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。  
2 黒褐色土 ローム粒子やや多量に含む。

第137図 1区ピット群

第4章 発掘調査の記録



81号ピット

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロックごく多量に含む。
- 3 暗褐色土 ローム大ブロック少量に含む。
- 4 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
- 5 褐色土

84・85号ピット

- 1 暗褐色土 ローム小ブロック少量に含む。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 3 黒褐色土 ローム小ブロック少量、炭化物粒子微量に含む。
- 4 黒褐色土 ローム小ブロック微量に含む。

86号ピット

- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土 均質。空隙多い。

87号ピット

- 1 黒褐色土 ローム大ブロック少量に含む。
- 2 黒褐色土 ローム小ブロック少量に含む。

88号ピット

- 1 黒褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。

89・90・94号ピット

- 1 暗褐色砂質土 黄色粒子やや多量に含む。
- 2 黒褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 3 黒褐色土 ローム小ブロック少量に含む。
- 4 黒褐色土 ローム小ブロックごく多量に含む。

93号ピット

- 1 黒褐色土 ローム小ブロックごく多量に含む。
- 2 黒褐色土 ローム小ブロック少量に含む。

95号ピット

- 1 灰褐色土 ローム小ブロック少量に含む。
- 2 灰褐色土 浅間A軽石少量に含む。
- 3 灰褐色土 ローム大ブロック少量に含む。
- 4 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
- 5 灰色シルト しまる。

96号ピット

- 1 灰褐色土 浅間A軽石少量に含む
- 2 灰褐色土 ローム大ブロック多量に含む。
- 3 黒褐色土 浅間A軽石微量、ローム小ブロック少量に含む。

97号ピット

- 1 暗褐色土 ローム大ブロック多量、ローム粒子少量に含む。
- 2 黒褐色土 ローム小ブロック微量に含む。
- 3 黒褐色土 ローム小ブロック少量に含む。

100号ピット

- 1 灰褐色砂質土 小礫ややしまり弱くやや粘性あり。
- 2 灰褐色土 均質。

102号ピット

- 1 黄褐色土 褐色土大ブロックやや多量に含む。
- 2 暗褐色土 均質。

103号ピット

- 1 暗褐色砂質土 白色粒子微量に含む。
- 2 褐色土 暗褐色土をモザイク状に含む。
- 3 暗褐色土
- 4 黒褐色土 ローム小ブロック少量に含む。
- 5 黒褐色土+ローム大ブロック

104号ピット

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 3 にぶい黄褐色土
- 4 黒褐色土ローム小ブロックやや多量に含む。

105号ピット

- 1 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロック少量に含む。

106号ピット

- 1 暗褐色土 浅間A軽石微量、ローム小ブロック多量に含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子微量に含む。

113号ピット

- 1 暗褐色土 浅間A軽石微量に含む。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。

114号ピット

- 1 暗褐色土 ローム大ブロックやや多量、黄色粒子に含む。

122・124号ピット

- 1 暗褐色土 ローム粒子微量に含む。
- 2 暗褐色土 ローム大ブロックやや多量に含む。
- 3 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
- 4 黒褐色土 ローム大ブロックやや多量に含む。
- 5 黒褐色土 ローム大ブロック多量に含む。

125号ピット

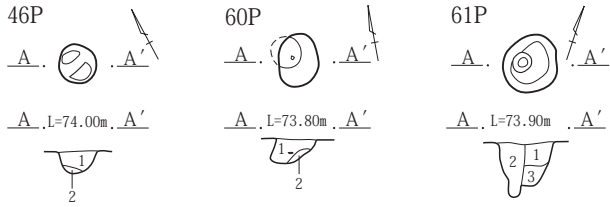
- 1 暗褐色土 白色粒子やや多量に含む。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロック少量に含む。
- 3 黒褐色土 ローム小ブロック少量に含む。

186号ピット

- 1 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
- 3 暗褐色土 ローム小ブロック少量に含む。
- 4 黒褐色土

第138図 1区ピット群断面と73・102号ピット出土遺物





46号ピット

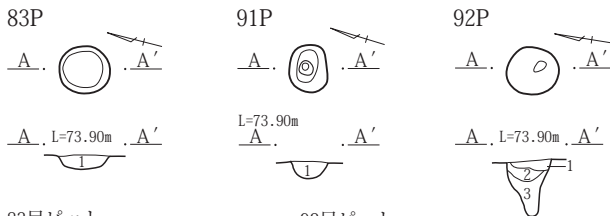
- 1 暗褐色砂質土 ややしまる。浅間A軽石微量に含む。
- 2 暗褐色砂質土 ややしまる。ローム小ブロックごく多量に含む。

60号ピット

- 1 灰褐色砂質土 浅間A軽石やや多量に含む。
- 2 褐色土+ローム大ブロック

61号ピット

- 1 暗褐色土 ややしまる。ローム大ブロックやや多量、浅間A軽石少量に含む。
- 2 黒褐色土 しまりなくやや粘性あり。
- 3 暗褐色土 よくしまる。ローム大ブロック多量に含む。



83号ピット

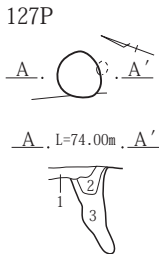
- 1 暗褐色土 浅間A軽石微量に含む。

92号ピット

- 1 黒褐色土 浅間A軽石少量に含む。

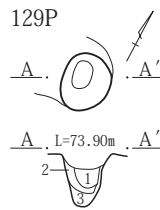
91号ピット

- 1 灰褐色砂質土 浅間A軽石やや多量に含む。
- 2 黒褐色土 白色粒子微量に含む。
- 3 黒褐色土 ローム大ブロック多量に含む。



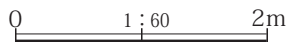
127号ピット

- 1 灰褐色土 浅間A軽石やや多量に含む。
- 2 黒褐色土 白色粒子微量、褐色土をモザイク状に含む。
- 3 黒褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。



129号ピット

- 1 灰褐色土 浅間A軽石少量、ローム小ブロックやや多量に含む。
- 2 灰褐色土 浅間A軽石微量に含む。
- 3 灰褐色土 ローム小ブロックごく多量に含む。



第139図 1区ピット

第73表 1区近世ピット計測表(cm)

ピットNo.	グリッド	長径	短径	深さ	非掲載破片数
46	28 E-8	33	30	18	土師器壺甕類1
60	28 A-7・8	43	33	20	須恵器壺甕類1
61	27 Q・R-7	48	43	44	
63	27 R-3	32	29	35	
64	27 R-3	(32)	30	24	
65	27 R-3	25	25	9	
66	27 S-3	33	32	45	
67	27 S-3	40	36	30	
68	27 R・S-3	52	44	40	
70	27 S-3	37	31	38	
71	27 S-3	42	33	45	
72	27 S-3	30	27	32	近世陶器片1
73	27 S-3	41	40	26	土師器杯碗類1
74	27 R・S-3	50	39	21	時期不詳瓦片1
75	27 R-2	30	25	18	
76	27 S-2	29	24	23	
78	27 S-4	28	24	24	
79	27 S-3	60	53	41	須恵器壺甕類1
80	27 S-2	42	30	9	
81	27 S-3	53	47	41	
83	27 Q-2	41	39	11	
84	27 S-3	48	38	46	
85	27 S-3	35	(31)	21	
86	27 R-3	34	33	39	
87	27 S-3	31	26	19	
88	27 R-3	28	26	11	近世在地系銅片1
89	27 R-3	40	32	33	
90	27 R-3	34	26	39	
91	17 R-20	38	30	14	須恵器杯碗類1
92	28 A-4	42	39	46	
93	27 R-3	31	28	33	
94	27 R-3	31	30	41	須恵器杯碗類1
95	27 S-3	37	34	35	
96	27 S-2	33	30	30	
97	27 S-2	31	26	41	
99	27 R-3	45	41	17	
100	27 R-3	27	22	24	
102	27 R-3	39	34	29	
103	27 R-3	33	(26)	39	
104	27 S-2	37	31	54	
105	27 S-3	(30)	27	23	
106	27 S-3	41	36	25	土師器壺甕類1
113	27 S-2	31	30	11	
114	27 S-3	24	21	49	
122	27 R-4	48	36	17	
124	27 R-3	42	34	19	
125	27 S-3	38	31	33	
127	28 F-10	37	34	69	
129	28 D-9	46	38	42	土師器杯碗類1・壺甕類1
186	27 S-3	42	38	34	

## 10 溝

溝は45条検出された。このうち、土地利用を制限する区画溝となるのは、1・10・22・43・48・51・52・58・59・94号溝の10条である。このうち、10・22号溝は主軸方位が他と異なって前段階となり、17世紀中頃に比定される。残る8条は相互に関係するため、段階的にとらえられる。1号溝は中世の1号屋敷25号溝を踏襲する点で、伝統的な境界溝となるが、最終的に白色軽石(As-A)の灰掻き溝として埋没する。これと合流してほぼ同時期となるのが51号溝となり、58号溝は一部白色軽石(As-A)も見られるが、すでに埋没している。時期としては51号溝の前身となる52号溝と同様、18世紀中頃が下限となる。また、52号溝については、更に94号溝がその前段階に位置づけられる。

1号溝ほかの一群の次の段階となるのが、43・48・59号溝となるが、後二者は同一溝が一部分岐した様相を示す。時期は19世紀前半を下限としている。後二者の埋没後は1号道路となり、ほ場整備前段階まで継続される。また、43号溝は同時期となる31・38・45・46号溝と関係して、調査区南西部の近世屋敷を区画し、同時期に廃絶されたものと考えられる。

調査区北西部で近世の屋敷に関連すると考えられるのが、13・20・67・76号溝である。20号溝は1号溝に並走しており、その間に道路も想定できるが、67号溝が合流して区画溝を構成する。48・58号溝が蛇行しているため、こうした直線的な溝が区画としては必要となる。また、67号溝にほぼ直交する13・76号溝は、ここを境にして、西側に近世の土坑群が展開する状況があり、屋敷空間を囲むとも考えられる。

3・5号溝も東西軸をとり、以上の溝よりは古段階となるため、10・22号溝との関連も考えられる。

小規模な溝としては、調査区南東部に集中が見られる。53～56号溝、95～103号溝の13条である。性格は不明だが、101号溝は近世墓より前出である可能性が高い。

**1号溝**(第140～145図、P.L.56・142・143、第74表)

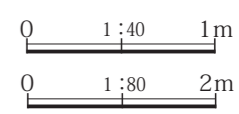
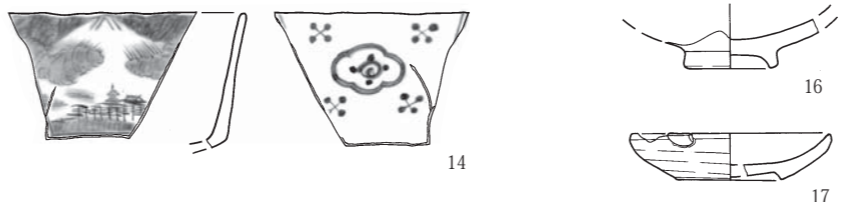
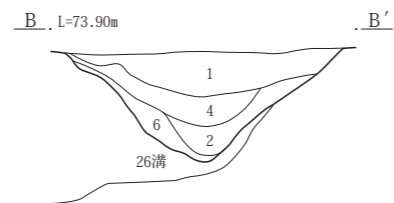
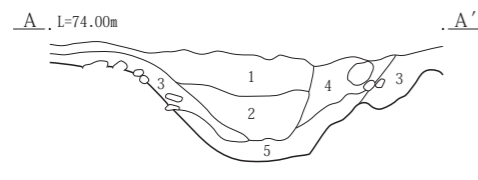
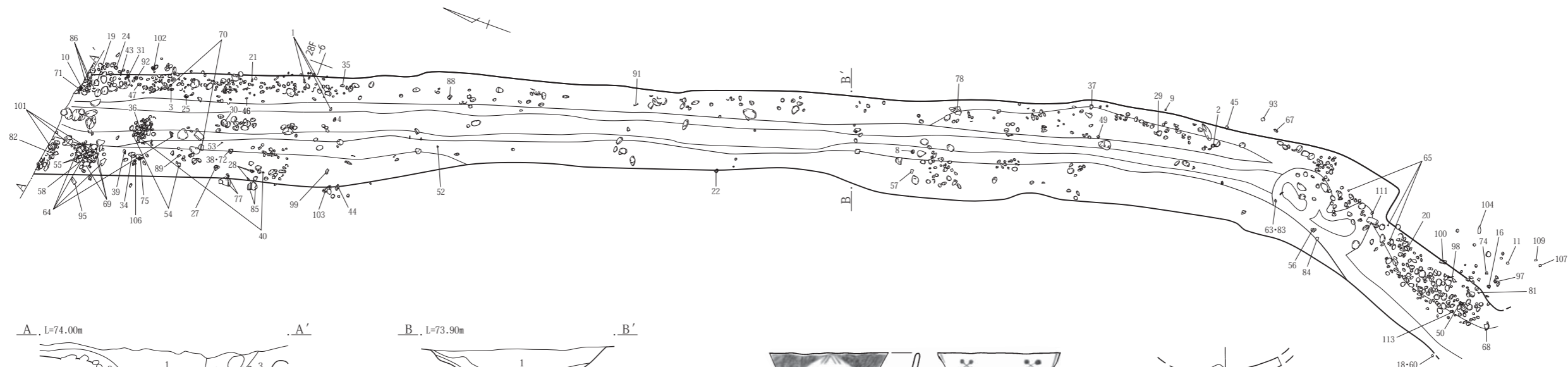
**位置** 28B～F-5・6グリッド。25・26号溝より後出で、48・51・52・59号溝と不分明に重複する。新旧関係不明。最終的に白色軽石(As-A)の灰掻き溝として埋没する。平面形は大部分直線的で、南端部分で急激に西方向に折れる。南端は重複するいずれかの溝と連続する可能性があるが、不分明なため便宜的に溝の範囲を限定し

た。特に48・52号溝には白色軽石(As-A)の二次堆積層があり、同時期に存在することが判明している。走向方位はN-18°-W～N-18°-E。断面形はV字形～逆台形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦だが、南端部は重複により不正確である。両端の比高差は8cm、勾配はほとんどない。埋没土は下位がある程度自然埋没した段階で、白色軽石(As-A)を廃棄するため人為埋没する。北端部は肩部に沿って陶磁器・円礫が集中して出土する。西側に接する近世遺構群の影響と思われる。南端では上位に玉石が面的に集中する。これは1号道下位、及び48号溝上位で同様な状況が確認できる。玉石の投棄とも、石敷きとも見える様相であり、南端は道路との分別が難しいが、硬化した部分は見られない。遺物の出土は北端と南端に集中が見られ、上層が多い。特に北端の肩部で出土した志野皿(17世紀前半)(140図24)や志野茶碗(16世紀末～17世紀初頭)(141図44)は希少で、特記される遺物である。それ以外の陶磁器は17世紀中頃から近現代に及ぶが、近現代は1号道路からの混入が想定される。掲載遺物のほか、土師器杯椀類50片・壺甕類204片、須恵器杯椀類48片・壺甕類25片、埴輪41片、中世国産陶器1片・在地系土器6片、近世国産陶磁器102片・在地系土器56片、近現代その他土器類37片、砥石3点、石上白1点が出土している。規模は長さ24.56m上端幅120～188cm最大深62cmである。溝の年代は26号溝に後出するため、18世紀に比定される。

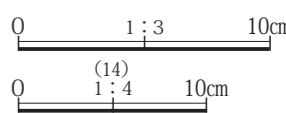
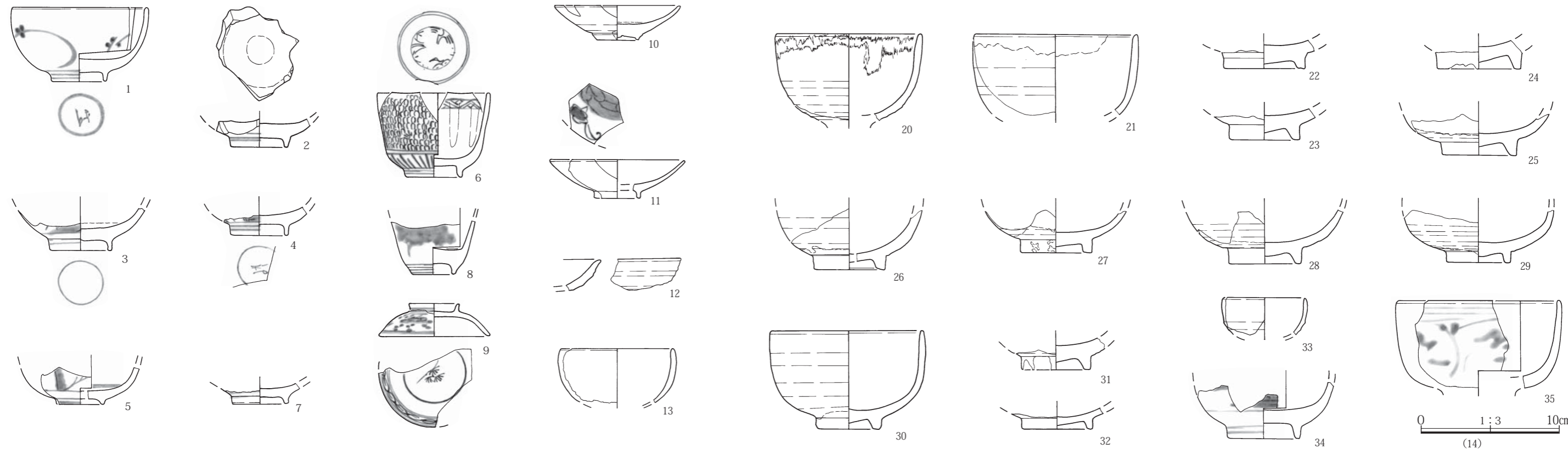
**3・5・10・22号溝**(第146・147図、P.L.56・57・143、第75～77表)

**3号溝 位置** 28C-10・11グリッド。22号溝と重複するが新旧関係不明。東端は削平されているかもしれない。西端は調査区域外へ延びる。平面形は直線気味で、北方向にやや湾曲する。走向方位はN-69°-E。断面形は皿状。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。両端の比高差3cmで勾配はほとんどない。自然埋没と思われる。規模は長さ7.46m上端幅31～68cm最大深14cmである。遺物は土師器杯椀類4片・壺甕類10片、須恵器壺甕類1片、近世国産陶磁器2片が出土している。

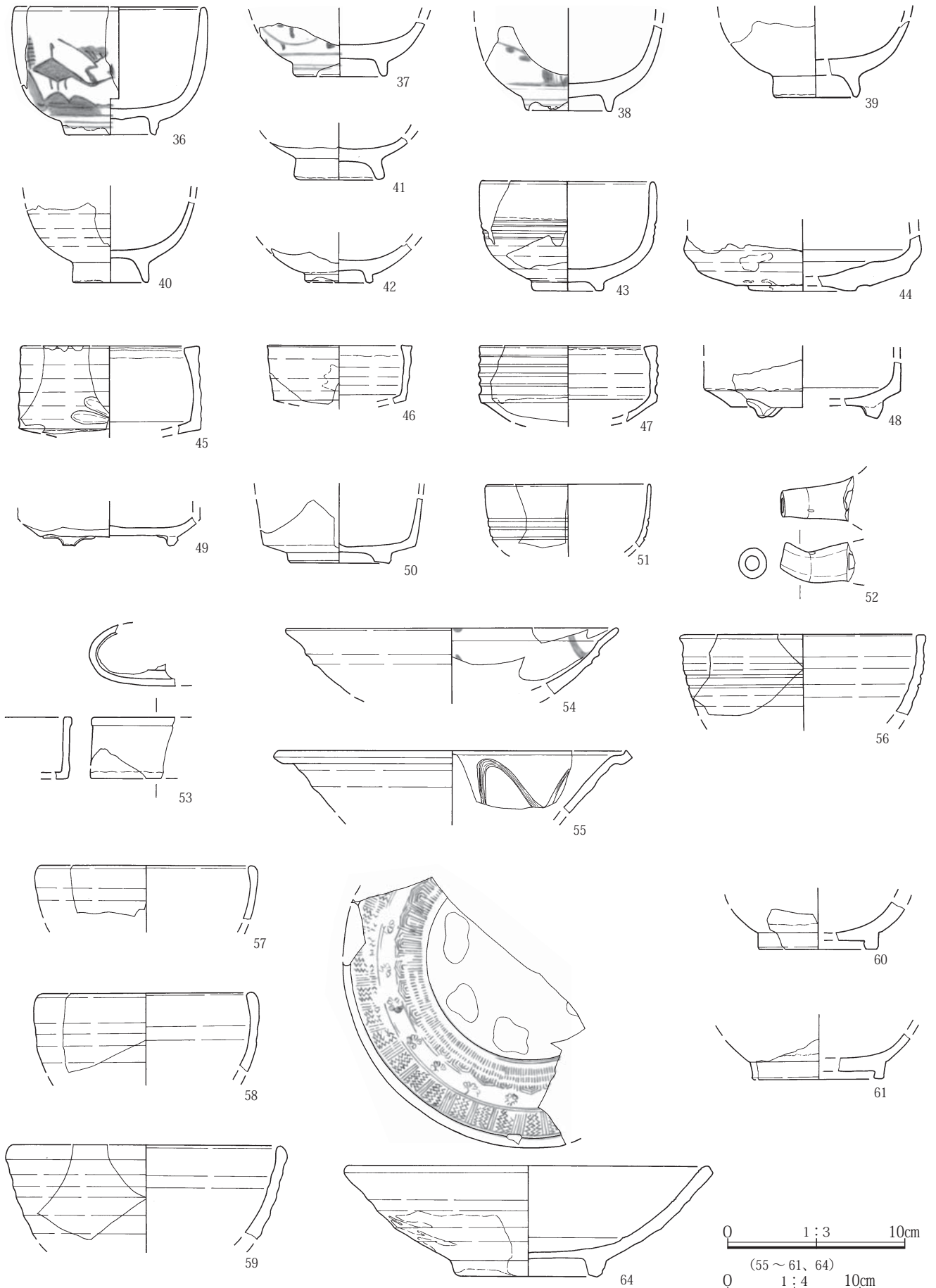
**5号溝 位置** 28C-6～11グリッド。6号溝より後出で、10・13・76号溝より前出。東端は削平により消滅し、西端は調査区域外に延びる。平面形はほぼ直線状で、西端が北方へやや湾曲する。走向方位はN-69°-E。断



- 1 浅間A軽石主体土 暗褐色土微量に含む。
- 2 暗褐色土ブロック+浅間A軽石
- 3 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量、小礫多量に含む。
- 4 暗褐色土 浅間A軽石多量に含む。
- 5 黒褐色土 ローム小ブロックやや多量、黄色粒子微量に含む。
- 6 暗褐色土 黄色粒子微量に含む。

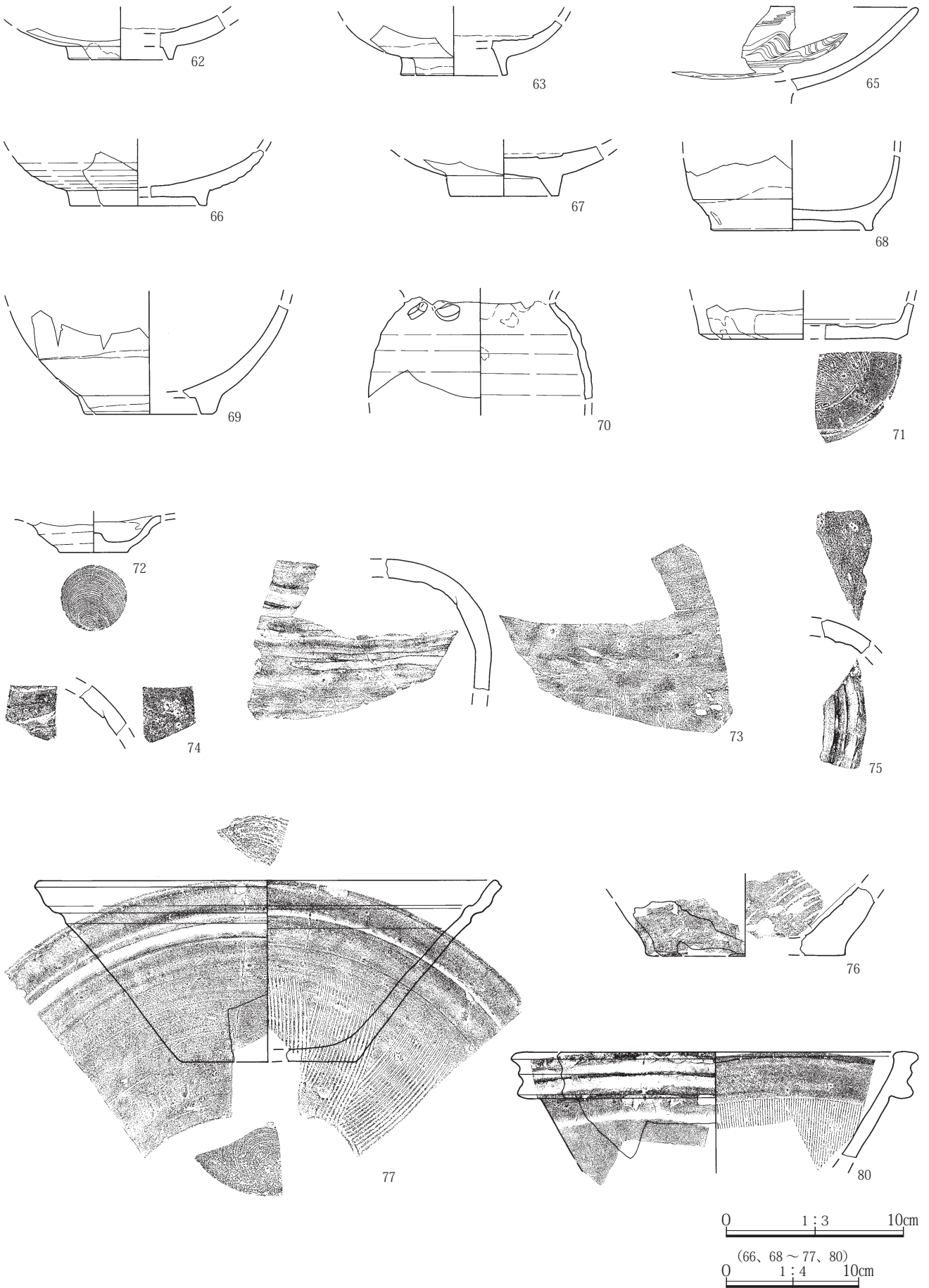


第140図 1区1号溝と出土遺物(1)

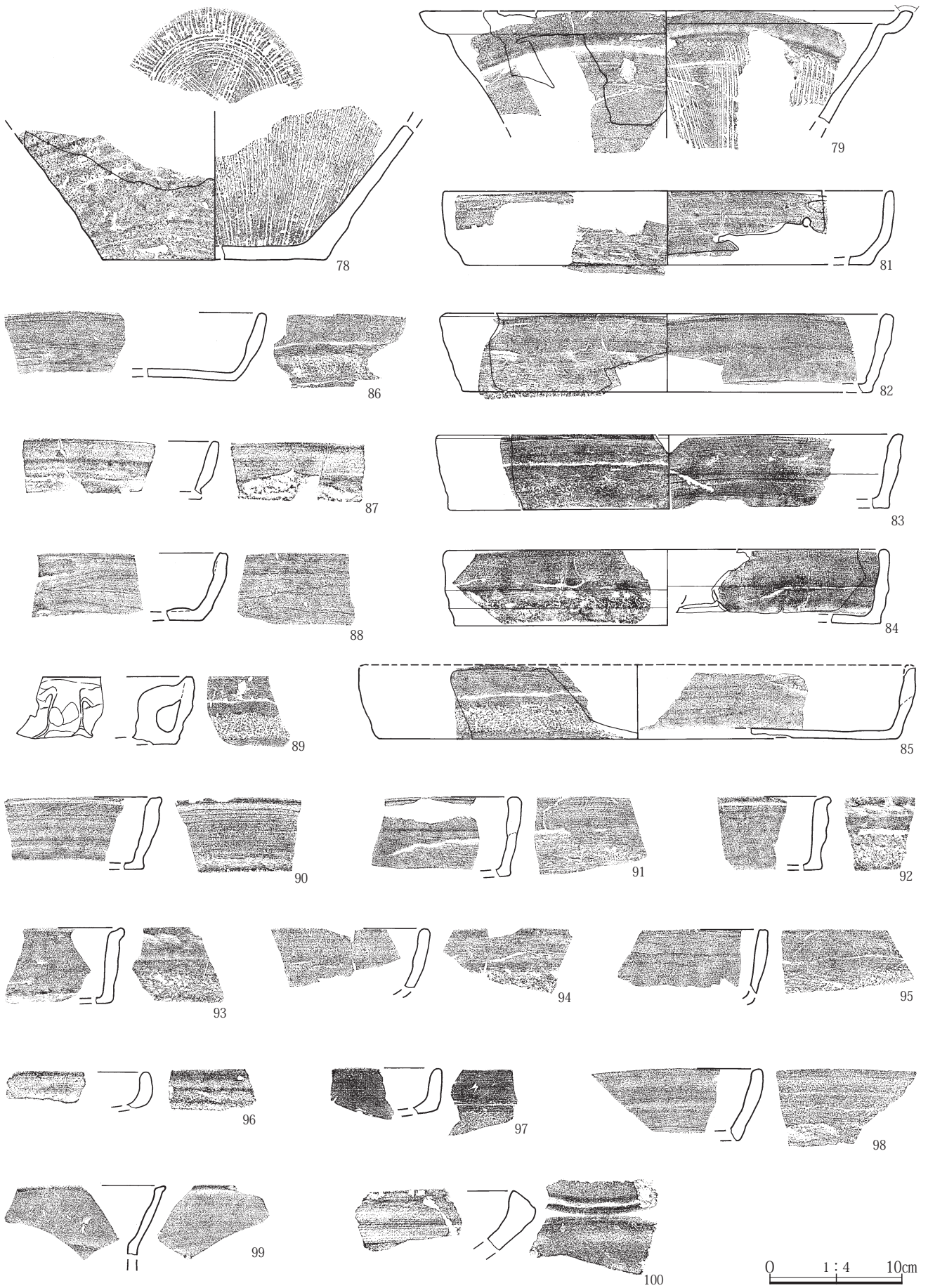


第141図 1区1号溝出土遺物(2)

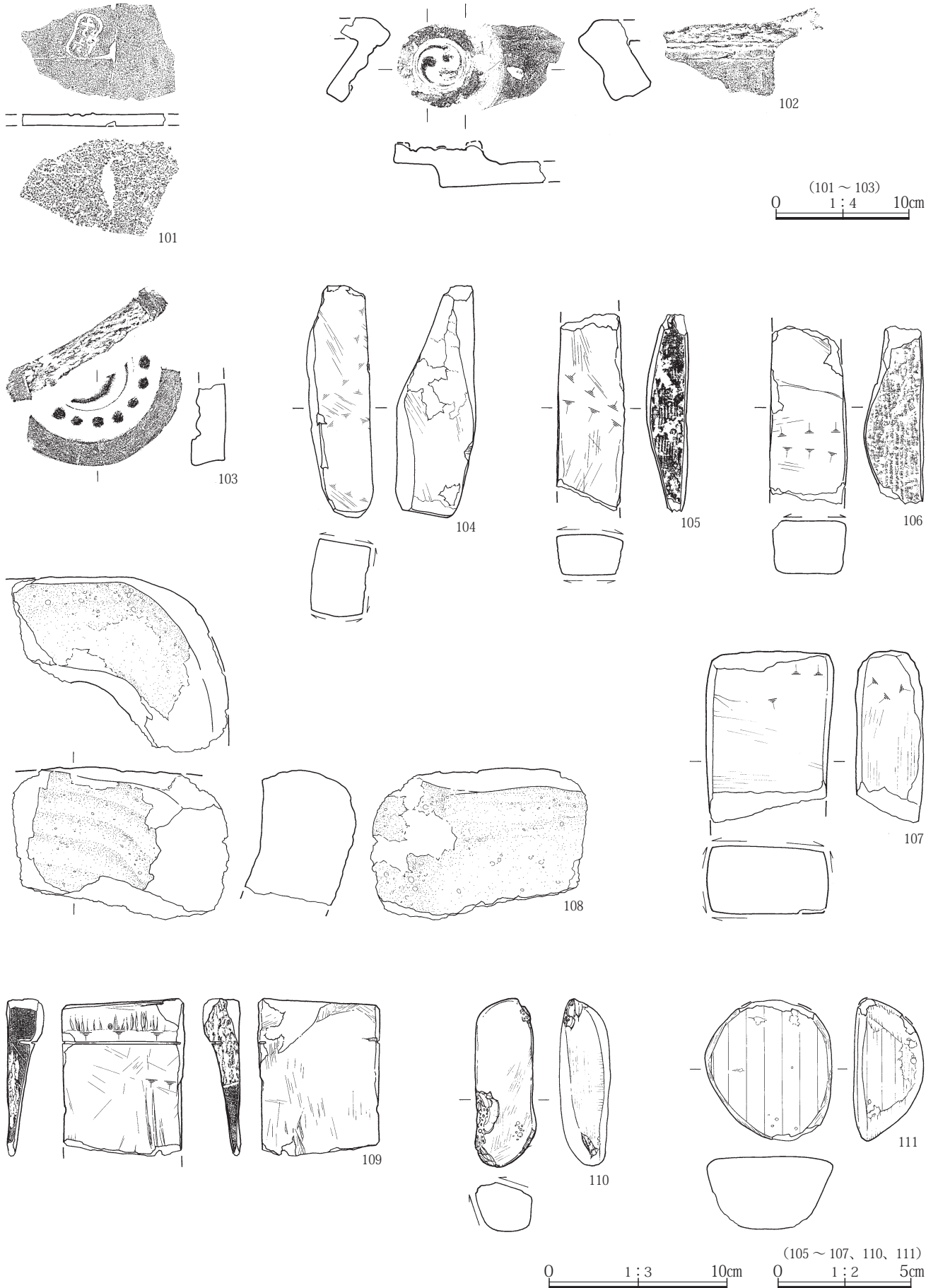
第4章 発掘調査の記録



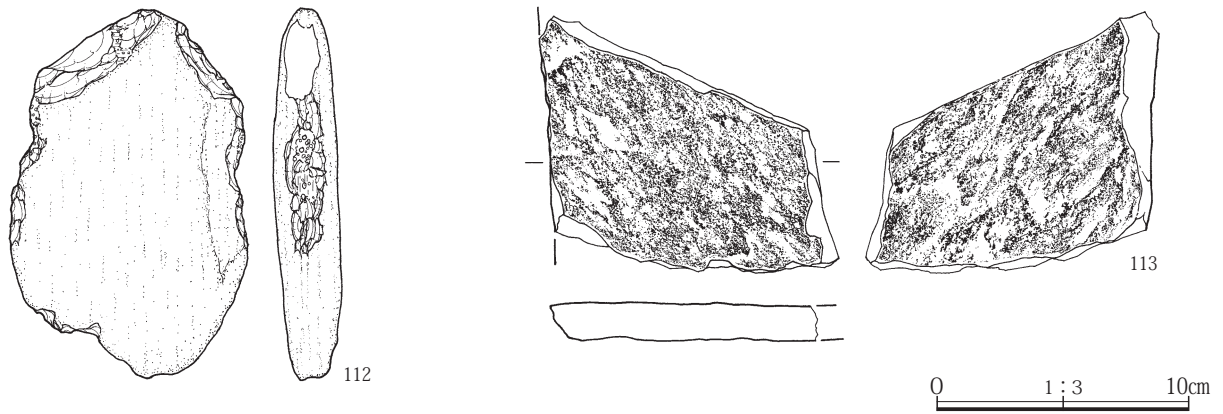
第142図 1区1号溝出土遺物(3)



第143図 1区1号溝出土遺物(4)



第144図 1区1号溝出土遺物(5)



第145図 1区1号溝出土遺物(6)

第74表 1区1号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第140図 PL.142	1	肥前磁器	碗		9.5	3.9	5.3	3/4		灰白	外面に雪輪梅樹文か。高台内1重圏線内に不明銘。	17世紀末～ 18世紀中頃。
第140図	2	国産磁器	碗		-	4.1	-	底部		灰白	底部内面は蛇ノ目釉剥ぎ。釉剥ぎ部に薄いアルミナを塗布か。	18世紀中頃～後半。 波佐見系。
第140図	3	肥前磁器	碗		-	4.5	-	底部		灰白	底部内面は蛇ノ目釉剥ぎ。高台内に1重圏線。釉剥ぎ部に白濁したアルミナを塗布。	18世紀中頃～後半。 波佐見系。
第140図	4	肥前磁器	碗		-	(4.2)	-	底部		灰白	高台内1重圏線内に不明銘。	17世紀末～ 18世紀中頃か。 波佐見系。
第140図	5	肥前磁器	丸碗	上層	-	(3.4)	-	1/4		白	残存部外面に雪輪。底部内面周縁に2重圏線。	18世紀後半～ 19世紀初頭。
第140図	6	肥前磁器か	猪口	上層	(8.1)	4.1	6.0	底部完		白	体部は多角形状に面取り。口縁部は緩い波状。人造呉須による手描き。	近現代。
第140図	7	瀬戸陶器	湯飲碗		-	(4.0)	-	底部		1/3	高台端部を除き透明釉。貫入が入る。体部と高台境に染付圏線。	登窯9小期。
第140図	8	肥前磁器	猪口か		-	3.0	-	体部～ 底部		灰白	体部外面の2方にコンニャク印判による施文。釉は失透気味で文様は不鮮明。焼成不良。底部器壁厚く、腰折れ気味。	18世紀中頃～ 後半。
第140図	9	肥前磁器	端反碗蓋		(8.0)	つまみ (3.6)	2.3	1/4		白	素地の磁化は不十分で釉の1部も白濁。焼成不良。呉須は青黒く発色。	19世紀前半～ 中頃。
第140図	10	肥前磁器	小皿		(9.0)	3.0	2.4	口縁 1/4・ 底部完		白	内面から体部外面に透明釉。残存部無文。底部内面蛇ノ目釉剥ぎ。高台内兜巾状に突き出る。高台外面は内傾。	17世紀末～ 18世紀中頃。
第140図	11	肥前磁器	赤絵小皿		(9.6)	(3.3)	2.75	1/6		白	底部内面蛇ノ目釉剥ぎ。釉剥ぎ部に細砂状のものを塗布。体部から口縁部内面に赤色の上絵。底部内面は黒色輪郭線内を緑色で塗る。	17世紀末～ 19世紀中。
第140図 PL.142	12	瀬戸陶器	志野丸皿		-	-	-	口縁部 片		灰白	体部器壁はやや厚。口縁部は小さく外反。内外面に長石釉。	登窯1・2小期。
第140図	13	瀬戸陶器	丸碗		(8.0)	-	-	1/4		灰白	体部から口縁部は内湾し、口縁部は内傾気味。内外面に鉄釉。釉は黒色地に褐色が斑状に入る。	登窯8・9小期。
第140図	14	肥前磁器	鉢	上層	-	-	-	口縁部 片		白	口縁部は輪花。口縁部は直線的で体部下端に屈曲部が残存。8角形の鉢と考えられる。	19世紀前半～ 中頃。焼継。
第140図 PL.142	15	瀬戸陶器	天目碗		-	4.9	-	底部完		灰白	体部はやや直線的で口縁部下の外面は稜をなして立ち上がる。高台脇は水平に削る。高台径はやや大きい。内面から高台脇の削り付近まで鉄釉。	登窯3小期。
第140図	16	瀬戸陶器	鍔茶碗		-	3.7	-	底部		灰白	内面に銅緑釉、高台端部を除く外面に鉛釉。外面に回転施文具による鍔状文様。	登窯9小期。
第140図 PL.142	17	美濃陶器	灯火皿		(7.8)	(4.0)	1.8	1/2		灰白	口縁端部に粘土粒を貼り付ける。高台は基筈底状。内面から体部外面中位に鉛釉。	登窯7小期。
第140図	18	美濃陶器	摺絵皿		(12.0)	-	-	1/5		灰	口縁部は屈曲して立ち上がる。底部内面残存部、鉄絵具による摺絵の1部が残る。内面から高台脇に灰釉。	登窯5小期。
第140図	19	美濃陶器	尾呂茶碗		(11.7)	-	-	1/4		灰白	内面から体部外面下位に鉛釉。口縁部から体部にかけて藁灰釉。藁灰釉範囲が広い。	登窯5・6小期。
第140図	20	美濃陶器	尾呂茶碗		(13.0)	-	-	1/4		灰白	内面から体部外面下位に褐色の鉛釉。口縁部内外面に藁灰釉。	登窯5・6小期。
第140図	21	美濃陶器	尾呂茶碗		(11.4)	-	-	1/5		灰白	内外面に鉛釉、口縁部に薄く藁灰釉かかる。	登窯6・7小期。
第140図	22	美濃陶器	尾呂茶碗		-	5.8	-	2/3		灰白	内面に鉛釉。1部に灰釉がかかる。外面に鉄化粧。底部の器壁は厚い。	登窯5小期。
第140図	23	美濃陶器	尾呂茶碗		-	5.1	-	底部		淡黄	高台径はやや小さく、高台内面は「ハ」字状に開く。内面から高台脇に鉛釉。内面の1部に藁灰釉が斑状にかかる。	登窯6小期。
第140図	24	美濃陶器	尾呂茶碗		-	(6.0)	-	2/3		淡黄	内面に鉛釉。1部に灰釉がかかる。外面に鉄化粧。	登窯5小期。
第140図	25	美濃陶器	尾呂茶碗		-	5.4	-	下半部		淡黄	高台径はやや小さく、高台内面は「ハ」字状に開く。内面から高台脇に鉛釉。	登窯6小期。



第4章 発掘調査の記録

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第140図	26	美濃陶器	尾呂茶碗		-	(5.0)	-	1/3		淡黄	内面から高台脇に飴釉。高台脇以下は鉄化粧。図示した体部左側の割れ口外半分に釉がかかる。	登窯6小期。
第140図	27	美濃陶器	尾呂茶碗		-	5.15	-	体1部 底完		淡黄	内面から高台脇に飴釉。飴釉は薄い。	登窯7小期。
第140図	28	美濃陶器	尾呂茶碗		-	5.2	-	2/3		淡黄	内面から高台脇に飴釉。高台径は小さく、高台内面は「ハ」字状に開く。	登窯7小期。
第140図 PL.142	29	美濃陶器	尾呂茶碗		-	4.5	-	体~底 部		灰白	高台径小さく、幅も狭い。内面から高台脇に飴釉。底部内面に藁灰釉が斑状にかかる。	登窯7小期。
第140図 PL.142	30	美濃陶器	丸碗		10.9	4.4	7.1	3/4		灰白	高台径は小さく、体部下位は張らない。口縁部は垂直に近く立ち上がる。内面から高台脇に灰釉。	登窯7小期。
第140図	31	美濃陶器	尾呂茶碗		-	5.0	-	底部		灰	高台径小さい。内面から高台脇に飴釉。底部内面に藁灰釉が斑状にかかる。	登窯7小期。
第140図	32	美濃陶器	丸碗		-	5.1	-	1/2		灰白	内面に柿釉。	登窯8・9小期。
第140図	33	美濃陶器	小碗		(6.0)	-	-	口縁部 片		灰白	器壁は薄く、口縁部内湾。内外面に灰釉。	登窯9小期。
第140図	34	肥前陶器	碗		-	(5.2)	-	1/2		灰	陶胎染付。釉下の白土が確認できる。高台内の扱いは深い。貫入が入る。染付はやや鮮明。	17世紀末~ 18世紀中頃。
第140図	35	肥前陶器	碗		(11.4)	-	-	1/5		灰	陶胎染付。貫入が入る。釉が濁り染付が不鮮明。	17世紀末~ 18世紀中頃。
第141図 PL.142	36	肥前陶器	碗		(10.5)	5.2	7.2	口縁片 底1/2		明赤褐	陶胎染付。高台径は大きい。外面に東屋山水文。高台端部を除き施釉。内外面下位の釉にはピンホールが多い。底部内面には直径2.5cmの円形状に無釉部分がある。	17世紀末~ 18世紀中頃。
第141図	37	肥前陶器	碗		-	(5.2)	-	1/3		橙	陶胎染付。釉は白濁。外面に唐草状の染付。焼成不良。	17世紀末~ 18世紀中頃。
第141図	38	肥前陶器	碗		-	(4.8)	-	1/2		灰白	陶胎染付。細かい貫入が入る。	17世紀末~ 18世紀中頃。
第141図	39	肥前陶器	呉器手碗		-	(4.8)	-	1/3		灰白	胎土は灰色味が強く、釉もオリーブ灰色。釉には貫入が多い。高台内の扱いは深い。	17世紀後半。
第141図	40	肥前陶器	呉器手碗		-	4.2	-	体1部 底完		淡黄	高台径は小さく、高台内の扱いは深い。	17世紀後半。
第141図	41	肥前陶器	呉器手碗		-	5.0	-	底部		淡黄	高台径はやや大きく、高台内の扱いは浅い。	17世紀後半~ 18世紀初頭。
第141図	42	肥前陶器か	碗		-	(3.8)	-	2/3		淡黄	京焼風陶器か。内面から高台脇に透明釉。細かい貫入が入る。残存部は無文。	江戸時代。
第141図 PL.142	43	瀬戸陶器	腰鏝碗		(9.5)	4.0	6.1	1/2		灰白	外面口縁部下に螺旋状凹線。内面から凹線上部に灰釉、凹線部から高台内に厚めの鏝釉。高台端部のみ無釉。灰釉に粗い貫入が入る。	登窯9小期。
第141図 PL.142	44	瀬戸・美濃陶器	志野茶碗		-	(6.0)	-	1/3		淡黄	体部下位は広がり、段をなして立ち上がる。体部外面をやや窪ませ、その部分に鉄絵が認められる。内面から高台脇に長石釉を厚くかける。貫入が入る。	大窯4段階後半。
第141図	45	美濃陶器	筒形香炉		(10.0)	-	-	口縁部 片		浅黄	体部下位外面に丸鑿状工具による菊花状文。口縁部内面から体部外面下端に飴釉。口縁部内外面は微細な剥離が連続する。	登窯6小期。
第141図	46	美濃陶器	筒形香炉		(8.0)	-	-	1/3		灰黄	器高低い。口縁部は肥厚し、端部は平坦。口縁部内面から体部外面に薄い飴釉。	登窯7小期。
第141図	47	美濃陶器	筒形香炉		(9.8)	-	-	1/8		淡黄	器高はやや低く、口縁部内外面は小さく突き出る。端部外面に微細剥離。口縁部外面に3条の凹線。口縁部内面から口縁部外面下端に飴釉。	登窯5・6小期。
第141図	48	美濃陶器	筒形香炉		-	(8.0)	-	1/4		淡黄	足は1箇所残存。体部内面の1部から体部外面下端に飴釉。	登窯5・6小期。
第141図	49	美濃陶器	筒形香炉		-	(7.6)	-	底部片		灰白	残存部に脚1箇所残る。	登窯7・8小期。
第141図	50	京・信楽系陶器	火入れ		-	5.8	-	1/3~ 1/2		灰白	蛇ノ目状の高台で端部外面を面取り。体部外面のみ灰釉。高台脇以下と内面は無釉。	江戸時代。
第141図	51	美濃陶器	湯飲み		(9.0)	-	-	口縁部 片		黄灰	口縁部外面下位に3条の沈線。内外面に鏝釉。	登窯7小期。
第141図	52	美濃陶器	汁次		-	-	-	注口部		淡黄	内外面に飴釉。	登窯5・6小期。
第141図	53	美濃陶器	鬚水入れ		-	-	3.3	端部片		灰白	平面は楕円形。内面から体部外面下端に灰釉。残存部は無文。	登窯7小期。
第141図	54	肥前陶器	皿		(18.6)	-	-	1/4		灰白	口縁部は外反し、内面は低い段差を有する。内外面に透明釉。口縁部内面に青緑釉を流す。	17世紀中~ 末。内野山。
第141図	55	美濃陶器	黄瀬戸鉢		(26.0)	-	-	1/8		灰白	口縁部は外反した後、上方に立ち上げる。体部内面に波状文。内外面黄瀬戸釉。	登窯5・6小期。
第141図	56	美濃陶器	片口鉢		(18.0)	-	-	1/9		浅黄橙	口縁部外面は外方に突き出るが、突出部は摩滅。口縁部内面は器表摩滅。内外面に飴釉。	登窯5小期。
第141図	57	美濃陶器	片口鉢		(16.0)	-	-	1/8		淡黄	口縁部は内湾。内外面に灰釉。	登窯8小期。
第141図 PL.142	58	瀬戸陶器	片口鉢		(15.8)	-	-	口縁部 片		淡黄	口縁部は肥厚して内湾。内外面は黄釉に近い灰釉。	登窯8・9小期。
第141図	59	瀬戸陶器	片口鉢		(20.0)	-	-	1/10		灰白	口縁部は薄い玉縁状。口縁部外面は凹線状に窪む。内外面に鉄分の多い飴釉。	登窯8・9小期。

第2節 1区の遺構と遺物

挿 図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第141図	60	瀬戸陶器	片口鉢		-	(8.8)	-	底部片		灰白	内面から高台脇に鉄分の多い飴釉。	登窯8・9小期。
第141図	61	美濃陶器	片口鉢		-	(4.8)	-	底部片		1/5	内面から高台脇に飴釉。内面に目痕1箇所。	登窯5・6小期。
第142図	62	肥前陶器	皿		-	(5.8)	-	底部片		灰白	内面から高台外面に透明釉。底部内面の蛇ノ目釉剥ぎ部に鉄漿。	17世紀中～末。内野山。54と同一個体の可能性高い。
第142図	63	肥前陶器	皿か		-	(6.0)	-	底部片		灰黄	内面から体部外面下位に灰釉。細かい貫入が入る。底部内面は蛇ノ目釉剥ぎで、重ね焼き痕残る。高台内は外面より深く削る。高台端部に白色泥漿状微砂(アルミナ?)を塗る。	17世紀中～19世紀中。内野山か。
第141図 PL.142	64	肥前陶器	鉢		(27.5)	(11.2)	8.3	1/2～1/3		にぶい 褐	三島手鉢。底部内面に砂胎土目。体部から口縁部は内湾し、端部は三角形に尖り気味。内面から体部外面中位に透明釉。体部外面中位から高台外面は鉄泥。	
第142図	65	肥前陶器	鉢		-	-	-	口縁～ 底部片		にぶい 褐	内面に白土刷毛塗り。内面から体部外面下位に透明釉。底部内面は蛇ノ目釉剥ぎ。	江戸時代。
第142図	66	美濃陶器	黄瀬戸鉢		-	(10.2)	-	上層 底部片		灰白	内面から高台内側に灰釉。	近世、美濃5・6、黄瀬戸
第142図	67	肥前陶器	皿か		-	(6.0)	-	底部片		灰白	内面に鉄釉。外面は透明釉か。底部内面は蛇ノ目釉剥ぎ。高台内面は「ハ」の字状に開く。	17世紀中～末。内野山。
第142図 PL.142	68	瀬戸陶器	半胴甕		-	12.0	-	1/2		にぶい 黄橙	内面から体部外面下位に錆釉。高台外面は僅かに削り込みを残す。底部内面に目痕2箇所。	登窯8・9小期。
第142図	69	肥前陶器	鉢		-	(10.0)	-	1/4		にぶい 赤褐	内面から体部外面上半に透明釉。釉は部分的に白濁。体部外面下半は鉄泥。	江戸時代。
第142図 PL.142	70	美濃陶器	有耳壺		-	-	-	肩部片		灰白	肩部に1箇所耳の基部残存。耳下部に凹線1条めぐる。外面は鉄釉。	登窯5・6小期。
第142図	71	美濃陶器	有耳壺		-	(14.0)	-	1/4		灰黄	体部外面下位に鉄分の多い飴釉。体部外面下位以下と内面は無釉。底部右回転糸切後、周縁を回転削り。	登窯5・6小期。
第142図 PL.142	72	美濃陶器	有耳壺蓋		-	5.0	-	1/2		にぶい 黄橙	下部右回転糸切無調整。外面中央に低いつまみ。口縁部に錆釉か。外面中央部の1/2ほどは鉄化粧風の薄い錆釉。	登窯6・7小期。
第142図	73	渥美陶器	壺		-	-	-	体部上 位片		灰白	断面から器表は灰白色。肩部上面に自然釉薄くかかる。器壁厚い。	12世紀～13世紀前半。
第142図	74	常滑陶器	甕か		-	-	-	肩部片 か		灰黄	外面に自然釉。	中世。
第142図 PL.142	75	渥美陶器	壺		-	-	-	肩部片		灰白	外面に薄い自然釉。	12世紀～13世紀前半。
第142図 PL.142	76	在地系土器	片口鉢		-	(15.0)	-	1/4	B	灰白	器壁厚いが、外面器表のみ部分的に色調が濃いのみで、全体に均質な灰白色。体部下端は短く立ち上がった後に外反。体部内面に6+α本一単位の弧状すり目。底部外面は僅かに砂底状をなし、不規則な凹凸が認められる。	中世。
第142図 PL.142	77	瀬戸陶器	すり鉢		(34.2)	(13.0)	13.6	1/4		浅黄	口縁部内面下位は内側に突き出す。内外面に錆釉。底部右回転糸切無調整。体部内面下位以下は使用により器表摩滅。底部外面も周縁を中心に器表摩滅。	登窯8小期。
第143図 PL.143	78	丹波陶器	すり鉢		-	(16.6)	-	1/2		にぶい 黄橙・ にぶい 赤褐	器表はにぶい赤褐。体部外面中位以下に指撫で状痕。体部外面下端は回転削り。底部砂底状。内面は使用により、体部下位以下は平滑となる。	江戸時代。
第143図	79	瀬戸陶器	すり鉢		(37.0)	-	-	口縁部 片		淡黄	口縁部は段を成して屈曲し、端部付近は直線的に開く。内外面に錆釉。口縁端部の器表は擦ったように摩滅するが、非常に緩いゆるい稜線を有する。	登窯6小期。
第142図	80	益子・笠間陶器	すり鉢		(30.6)	-	-	口縁部 片		黄灰	口縁部は厚い縁帯状をなす。口縁端部内面はゆるく、小さく突き出る。口縁端部上面は緩い丸みを帯びる。内外面に柿釉。	近現代。
第143図	81	在地系土器	焙烙		(33.6)	(30.4)	5.5	1/8	B	灰白・ 黒	断面は灰白色、器表は黒色。体部外面下端から底部外面は灰褐色。残存部内面右端に内耳の剥かれ痕。内耳剥かれ痕の斜め下に補修孔1箇所残る。外面の器表約1/2剥かれる。	江戸時代。
第143図	82	在地系土器	焙烙		(33.0)	(30.6)	5.8	1/8	B	灰白・ 黒褐	断面は灰白色、器表は黒褐色。外面に煤附着。外面中位に接合痕残る。外面下位に皺状亀裂。	江戸時代。
第143図	83	在地系土器	焙烙		(34.9)	(33.0)	5.5	1/8		黄灰・ 灰白	断面は灰白色、器表は灰色～暗灰色。体部外面下端から底部外面器表のみ黄灰色。外面中位に接合痕。体部外面下位に皺状亀裂。	江戸時代。
第143図	84	在地系土器	焙烙		(33.0)	(31.8)	5.6	1/10	B	黄灰・ 灰	断面は黒色、器表付近は灰白色、内面器表は灰色、外面器表は灰色から灰褐色。外面中に接合痕。外面下位から底部外面に皺状亀裂。	江戸時代。
第143図	85	在地系土器	焙烙		-	-	-	口縁～ 底部	B	にぶい 黄橙・ 黒褐	断面はにぶい黄橙色、器表は黒褐色。外面中位に接合痕。外面下位から底部外面に亀裂状の皺。体部外面下端は指撫で。	江戸時代。
第143図 PL.143	86	在地系土器	焙烙		-	-	-	口縁～ 底部片	B	灰白・ 黒褐	断面は灰白色、器表は黒褐色。外面に煤附着。外面中位に接合痕残る。外面下位に皺状亀裂。	江戸時代。
第143図	87	在地系土器	焙烙		-	-	-	口縁部 片	B	褐灰	断面は灰白色、器表は褐灰色。内面下位に接合痕。外面下位の窪んだ部分に皺状亀裂。	江戸時代。
第143図	88	在地系土器	焙烙		-	-	-	破片	B	にぶい 橙・褐 灰	断面と内面器表はにぶい橙色、外面器表は褐灰色。口縁端部上面凹線廻る。体部外面は横位削り。残存部左端の口縁部内面と底部内面に内耳基部が残る。	江戸時代。

第4章 発掘調査の記録

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第143図	89	在地系 土器	焙烙		-	-	-	耳部片	B	灰・灰 白・黄 灰	断面中央は灰色、器表付近は灰白色、外面器表は黄灰色、内面器表は灰色。器高は低い。幅広く厚めの内耳を貼り付け。外面中位に接合痕残る。外面下位に皺状亀裂。	江戸時代。
第143図	90	在地系 土器	焙烙		-	-	-	口縁～ 底部片	B	にぶい 黄橙・ 黒	断面中央は黒色、器表付近はにぶい黄橙色、外面器表は黒色、内面器表は黒色からにぶい黄橙色。体部外面下端から底部外面器表はにぶい黄橙色。外面は下端まで横撫で。体部外面下端は窪む。口縁体部外面は小さく突き出る。口縁端部上面は僅かに窪む。	江戸時代。
第143図	91	在地系 土器	焙烙		-	-	-	口縁～ 底部片	B	灰・灰 黄・黒 褐	断面中央は暗灰色、器表付近は灰黄色、器表は灰色から黒褐色。内外面中位に接合痕。接合痕より上位の器壁はやや厚い。口縁部内面の器表剥離。	江戸時代。
第143図	92	在地系 土器	焙烙		-	-	-	口縁～ 底部片	A	にぶい 黄橙	口縁端部は外方に折れる。口縁部外面は指頭状圧痕が連続する。体部外面下位は窪み、皺状亀裂残る。底部外面に亀裂状の皺が残る。	江戸時代。93 と同一個体か。
第143図	93	在地系 土器	焙烙		-	-	-	口縁～ 底部片	A	橙・灰 黄褐	断面は橙色、内面器表はにぶい橙色、外面器表は灰黄褐色。口縁端部は外方に折れる。口縁部外面は指頭状圧痕が連続する。体部外面下位は窪み、皺状亀裂残る。底部外面に亀裂状の皺が残る。	江戸時代。92 と同一個体か。
第143図	94	在地系 土器	焙烙		-	-	-	口縁部 片	B	灰白・ にぶい 黄褐	断面は灰白色、外面器表はにぶい黄褐色、内面器表は灰色。外面中位に接合痕。外面下位に皺状亀裂。	江戸時代。
第143図	95	在地系 土器	焙烙		-	-	-	口縁部 片	B	にぶい 黄橙・ 黒褐	断面はにぶい黄橙色、内外面器表は黒褐色。口縁端部上面は浅く狭い凹線廻る。外面中位に接合痕。外面下位に皺状亀裂。	江戸時代。
第143図	96	在地系 土器	焙烙		-	-	-	口縁部 片		にぶい 黄橙	体部内湾し、丸底。	近現代。
第143図	97	在地系 土器	焙烙		-	-	-	口縁～ 底部片	A	にぶい 橙	体部外面下端から底部外面器表は黒褐色。丸底か。	近現代。
第143図	98	在地系 土器	焙烙		-	-	-	口縁部 片	B	にぶい 黄橙・ 黒褐	断面はにぶい黄橙色、内面器表は黄灰色、外面器表は黒褐色。外面中位に接合痕。外面下位皺状亀裂残る。体部外面端は寛撫で。体部から口縁部内湾。	江戸時代。
第143図	99	在地系 土器	鍋		-	-	-	口縁部 片	B	にぶい 黄橙・ 褐灰	断面はにぶい黄橙色、器表は褐灰色。器壁薄く、口縁部したで外反。口縁部は内湾気味で端部外面は突き出る。屈曲部内面は段差をなす。口縁端部上面は僅かに窪む。	V期かV期以降。
第143図	100	在地系 土器	火鉢か		-	-	-	口縁部 片	B	にぶい 橙・褐 灰	断面中央は黒色、器表付近は橙色、器表はにぶい橙色。口縁端部から外面は磨き調整。	江戸時代以降。
第144図 PL.143	101	在地系 土器	焙烙か		-	-	-	底部片	B	にぶい 黄橙	底部器壁や厚い。底部外面に皺状亀裂。	内面瓢箪形 の枠内に不明 銘。江戸時代。
第144図 PL.143	102	瓦	軒先瓦		-	-	-	瓦頭片	B	灰白	瓦頭部キラ付着。巴文。	時期不詳。
第144図 PL.143	103	瓦	軒先瓦		-	-	1.9～ 2.5	瓦頭片	A	灰白	断面は灰白色、器表は黒色。文様は巴文で周囲に珠点廻る。周縁部分にそれぞれ深さ1.8cmの切断痕。	時期不詳。
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況		備考	
第144図 PL.143	104	砥石		切り砥石	砥沢石			233.9	三面使用。表裏面とも光沢が強く、よく使い込んでいる。両側面は折り取り後、刀子状工具により面整形。右側面のみ中央より下端側を使用。被熱剥落あり。			
第144図 PL.143	105	砥石		切り砥石	砥沢石	(7.3)	2.5	37.9	ノコギリ痕は両側面に明瞭であるほか、裏面側にもその痕跡が残る。			
第144図 PL.143	106	砥石		切り砥石	砥沢石	(6.6)	2.9	57.5	上端側中央に研磨主体の端部があたることにより段が生じる。背面側を除く各面に櫛歯状のタガネ痕が残る。			
第144図 PL.143	107	砥石		切り砥石	砂岩	(6.5)	4.8	106.4	四面使用。上端小口部は折り取り後、粗く面整形。			
第144図 PL.143	108	石製品		石鉢	二ツ岳軽石	径	高さ	504.2	外面・方形状を呈する。内面は粗く磨き整形されているが、部分的に工具痕を残す。			
第144図 PL.143	109	砥石		切り砥石	珪質粘板岩	(8.7)	6.8	143.9	背面側上端側に横位切断痕・径2mmの孔がある。切断痕は裏面側にもあり、砥石を切取ろうとした意図がある。左側面は切断後磨き整形、右側面に切断痕を残す。			
第144図 PL.143	110	石製研磨 具?		棒状礫	珪質頁岩	9.4	3.4	142.5	背面側・右側面に線条痕・裏面側に光沢面を有する他、小口部・両側縁を敲打。石材は緻密質。			
第144図 PL.143	111	石製品		楕円礫?	軽石	7.9	7.1	105.9	背面側を平坦に研磨、周辺を研磨して整形するほか、右側側の側面を研磨、面取り整形。			
第145図 PL.143	112	敲石		楕円偏平礫	雲母石英片 岩	14.4	9.3	474.5	礫周辺部で敲打する。両側縁はノッチ状を呈する。			
第145図 PL.143	113	板碑			雲母石英片 岩	(10.1)	(10.4)	250.4	表裏面とも弱く摩耗。左側縁に逆台形状の側縁が残る。			
-	114	砥石		切り砥石	砥沢石	(5.8)	(3.2)	95.5	二面使用。側面にタガネ状の工具痕。		非実測	
-	115	砥石		切り砥石	砥沢石	(7.8)	3.0	92.0	二面使用。右側面・裏面側に工具整形痕が残る。		非実測	
-	116	砥石		切り砥石	珪質頁岩	(3.6)	(3.1)	3.6	細粒・四みつ質石材を用いた仕上げ砥の破片。		非実測	
-	117	石臼		上臼	細粒輝石安 山岩	(6.4)	(6.0)	181.9	上臼の上端破片。挽手穴を部分的に残す。		非実測	

面形は皿状。壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦。両端の比高差10cm、勾配はほとんどない。埋没状況不詳。規模は長さ21.04m上端幅37～84cm最大深15cmである。遺物は土師器杯椀類8片・壺甕類1片、須恵器杯椀類1片・壺甕類1片が出土するが混入とみられる。

**10号溝** 位置 28B～G-8～11グリッド。2号住、1号竪穴状遺構、5・11・67号溝より後出。2号住居と重複する部分は不分明で、平面的に認識できなかった。平面形は直線状。走向方位はN-26°-W。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。両端の比高差3cmで勾配はほとんどない。埋没状況不詳。規模は長さ28.40m上端幅40～100cm最大深21cmである。1号竪穴状遺構重複部分、及びその北側で上位に玉石が集中する。埋没土から1の美濃陶器天目茶碗(17世紀前半)、2の瀬戸陶器皿(17世紀前半～中頃)ほか出土している。掲載遺物のほか、土師器杯椀類20片・壺甕類70片、須恵器杯椀類17片・壺甕類4片、近世国産陶磁器2片・在地系土器2片、その他土器類3片が出土している。出土遺物から17世紀中頃を下限とすると考えられる。

**22号溝** 位置 28C～F-9～11グリッド。2・3号住居、1号竪穴状遺構より後出で、14号土坑、3号溝と重複するが新旧関係不明。2・3号住居と重複する部分は不分明で、平面的に認識できなかった。平面形はほぼ直線状。走向方位はN-26°-W。埋没状況不詳。遺物や礫が1号竪穴状遺構との重複部分に集中しており、礫の状況は隣接する1号集石遺構に酷似する。礫を廃棄する溝として利用されたものと考えられる。礫の混じらない部分で、焙烙と思われる在地系土器(147図2)が出土する。中世の陶磁器や石塔類は、周辺からの混入とみられる。掲載遺物のほか、土師器杯椀類3片、近世国産陶器1片、板碑片1点、五輪塔片2点が出土している。規模は長さ18.08m上端幅28～45cm最大深15cmである。埋没土に白色軽石(As-A)を含まない状況や出土遺物から江戸時代前半に比定される。

**13号溝**(第148図、P L .57・143、第78表)

**位置** 28B～G-7・8グリッド。5・15・17号溝より後出で、67号溝と重複するが新旧関係不明。平面形は直線状。走向方位はN-8°-W。断面形はU字形。底面はやや凸凹する。両端の比高差は7cmで勾配はほとんどない。自然埋没と思われる。中程で焙烙と思われる在地系土器(2)ほ

かが出土する。掲載遺物のほか、土師器杯椀類8片・壺甕類40片、須恵器杯椀類4片・壺甕類3片、中世在地系鍋1片、近世国産陶器6片、在地系土器1片、その他土器類2片が出土している。規模は長さ21.44m上端幅36～90cm最大深21cmである。出土遺物から近世に比定される。

**16号溝**(第148図、P L .57)

**位置** 28F・G-10・11グリッド。6・10号溝と重複するが新旧関係不明。東西両端とも重複により不分明となる。平面形は、くの字形に屈曲する。走向方位はN-37°-W～N-90°。断面形はU字形。底面は丸みを持つ。両端の比高差1cmで勾配はほとんどない。自然埋没と思われる。規模は長さ2.70m上端幅50～62cm最大深12cmである。遺物は土師器杯椀類1片・壺甕類1片、須恵器杯椀類1片、近世在地系土器1片が出土している。出土遺物から近世に比定される。

**19号溝**(第148図、P L .57)

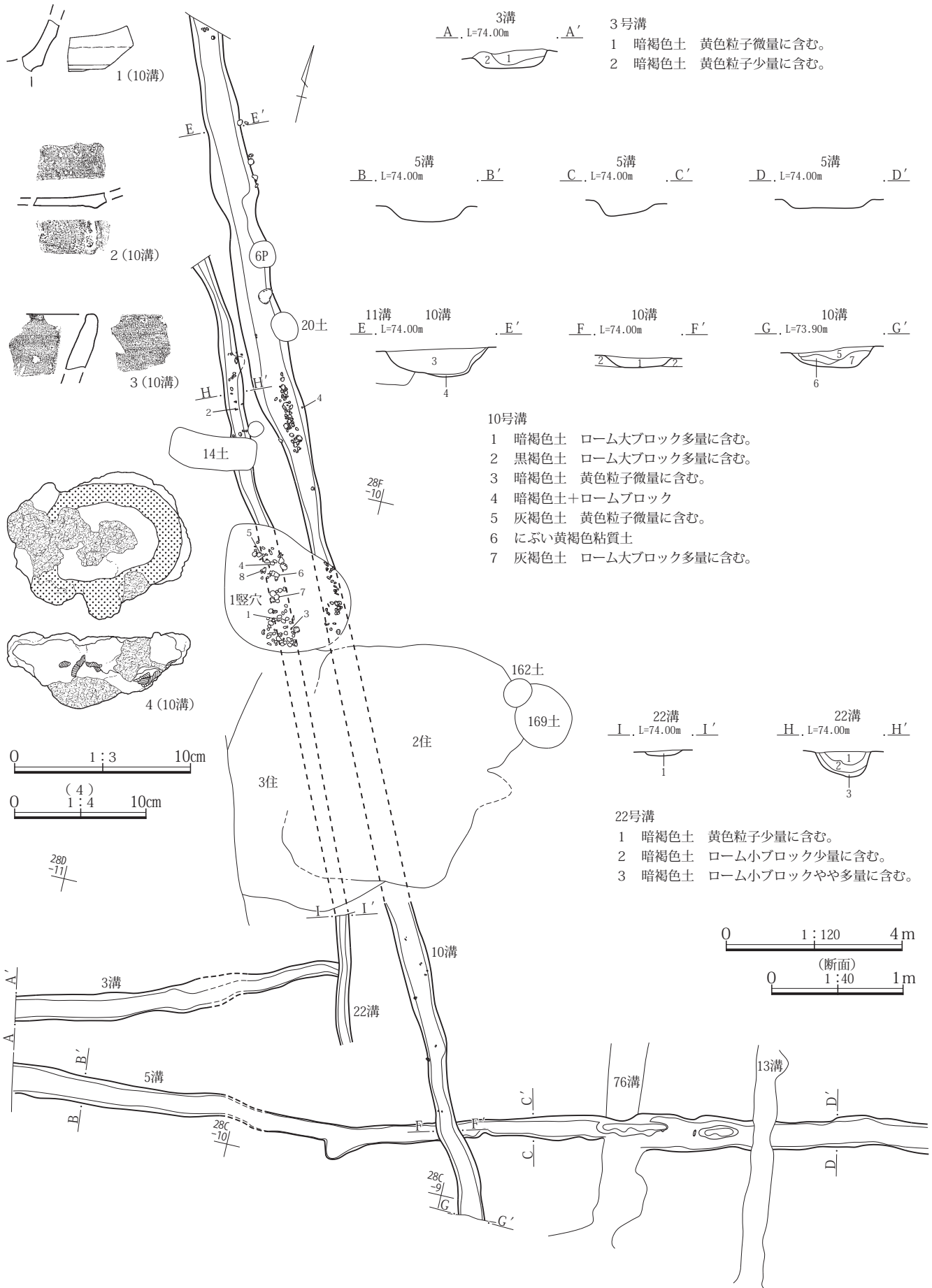
**位置** 28F-10・11グリッド。2号柱列P1～4、15号土坑、21・22号ピットより前出で、14号土坑と重複するが新旧関係不明。南北両端とも、別の遺構と重複して不明確となる。平面形はほぼ直線状で、南端は急に東へ折れる。走向方位はN-42°-W～N-24°-W。断面形はU字形。底面は丸みを持つ。両端の比高差はない。埋没状況不詳。規模は長さ6.48m上端幅35～54cm最大深21cmである。遺物は土師器杯椀類2片・壺甕類12片、須恵器杯椀類4片が出土するが混入とみられる。

**20・28号溝**(第148図、P L .57・143、第78表)

**20号溝** 位置 28B-5・6グリッド。1号火葬跡、28号溝より後出で、58号溝と重複するが新旧関係不明。北端は攪乱されて消滅し、南端は58号溝と重複後不明確となり、便宜的に範囲を限定した。平面形はやや西へ湾曲する。走向方位はN-11°-W。断面形は皿状。底面はほぼ平坦。両端の比高差は9cm、勾配はほとんどない。埋没状況不詳。礫に混じって砥石(4)が出土する。規模は長さ10.56m上端幅60～75cm最大深12cmである。北半で玉石が平面的に多く混入しており、東側の1号溝と近似する。両者間には約2.5mの間隔で並走しており、硬化面はないが間に道路があった可能性もある。掲載遺物のほか、土師器杯椀類3片・壺甕類15片、須恵器杯椀類4片・壺甕類1片、埴輪1片が出土するが混入とみられる。

**28号溝** 位置 28B-5・6グリッド。20号溝より前出

第4章 発掘調査の記録



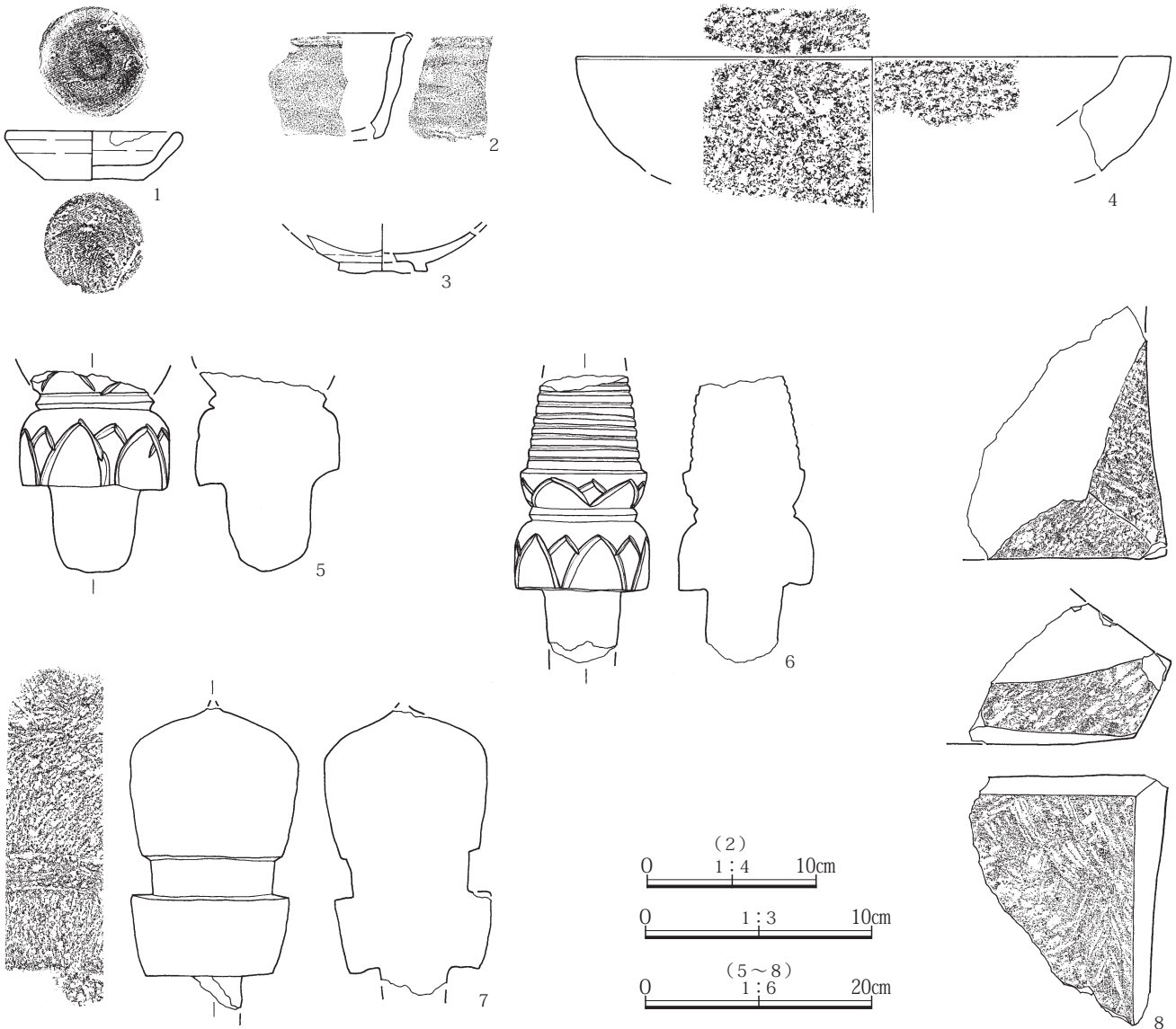
第146図 1区3・5・10・22号溝と10号溝出土遺物

第75表 1区10号溝出土遺物

挿 図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第146図 PL.143	1	美濃陶 器	天目碗		-	-	-	体下位 片		灰白	内面から体部外面下位に鉄釉。体部外面下位は回転篋削り。高台脇は水平に削るが、高台調整時に横撫で。	登窯1・2小 期。
第146図 PL.143	2	瀬戸陶 器	皿		-	-	-	底部片		浅黄	内面から高台内周縁に長石釉。粗い貫入はいる。高台は低くにぶい三角形状。	登窯1~4小 期。
第146図	3	在地系 土器	片口鉢 か		-	-	-	口縁部 片	B	橙	器壁はやや厚。口縁端部付近内面を窪ませることにより、口縁端部内面が突出気味に見える。	中世。

第76表 1区10号溝出土鉄滓

挿 図 PL.No.	No.	器種	出土位置	長	幅	厚	重さ(g)	特徴など	備考
第146図	4	椀形鍛冶滓	+11cm	8.3	10.3	4.3	330.0	平面不整楕円形で、厚さ4.3cmとやや厚手。色調は黒褐色で、発泡している部分があり、側面近くに細やかな木炭痕が認められる。また、上下面ともに酸化土砂の付着が認められる。	



第147図 1区22号溝出土遺物

第77表 1区22号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第147図 PL.143	1	在地系 土器	皿		(7.6)	4.4	2.1	3/4		にぶい 黄橙	体部から口縁部は直線的に延びる。口縁端部内面に油煙付着。底部左回転糸切無調整。	14世紀後半～ 15世紀前半。
第147図	2	在地系 土器	焙烙か	+5cm	-	-	-	口縁～ 体部	B	にぶい 褐	口縁端部段をなす。口縁部から体部外面下端に煤付着。	時期不詳。
第147図 PL.143	3	中国磁 器	白磁皿		-	(4.0)	-	1/3		白	高台を弧状に扶る。内面から高台脇に白磁釉施釉。底部内面に目痕2箇所残る。高台接地部に重焼時字の釉付着。素地は磁化し、釉も光沢をもち焼成は良好。	森田分類D 群。
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況		備考	
第147図 PL.143	4	茶臼			粗粒輝石安 山岩	径 26.0	高さ (5.0)	131.3	外面は粗く磨き整形、内面・口唇は丁寧な磨き整形。			
第147図	5	宝篋印塔		相輪部	粗粒輝石安 山岩	高さ (17.7)	13.2	2380.3	相輪部下端(請花・伏鉢～膺)のみ残存。請花には花卉五葉、伏鉢には花卉六葉を片掘り様に刻む。			
第147図 PL.143	6	宝篋印塔		相輪部	粗粒輝石安 山岩	高さ (25.0)	12.0	3483.5	宝珠・九輪上半を欠く。請花には花卉五葉、伏鉢には花卉六葉を刻む。			
第147図 PL.143	7	五輪塔		空風輪	粗粒輝石安 山岩	高さ (26.4)	14.7	5746.9	空輪部・風輪部とも最大径が上端側にあり、下端側に向い徐々に径を狭める手の込んだ作り。縦位の細い工具痕が全面に残る。			
第147図 PL.143	8	五輪塔		火輪	粗粒輝石安 山岩	高さ (12.3)	17.4	2520.0	袖が大きく反る隅棟部破片。軒部整形は磨き仕上げで丁寧、端部に細い斜位工具痕が残る。裏面側整形は中央付近は敲打整形、周辺部は細い斜位工具痕が並ぶ。			
-	9	板碑片?		体部破片	緑色片岩	(13.7)	(6.8)	271.2	厚さ2cm前後。背面側が被熱して煤ける。裏面側は大部分が剥落しており、工具痕は不明。		非実測	
-	10	五輪塔		火輪	粗粒輝石安 山岩	(12.5)	(8.8)	934.8	角部分。側面は荒加工の後磨き仕上げをしている。底部には荒加工の工具痕が残る。		非実測	
-	11	石製品		五輪塔火輪	粗粒輝石安 山岩	(11.3)	(7.5)	225.3	側面から底部にかけての破片。側面は磨き整形、底部に荒加工した工具痕が残る。		非実測	

で、58号溝と重複するが新旧関係不明。平面形はほぼ直線状。走向方位はN-28°-E。断面形はU字形。底面は丸みを持つ。両端の比高差はない。埋没状況不詳。底面近くから肥前陶器碗(5)が出土する。規模は長さ2.52m上端幅25～41cm最大深21cmである。掲載遺物のほか、須恵器杯碗類1片、近世在地系土器1片が出土している。出土遺物から近世に比定される。

31号溝(第149図、P L .57・144、第79表)

**位置** 27T～28A-9・10グリッド。東端は削平され消滅し、西端は調査区域外へ延びる。平面形は直線状。走向方位はN-82°-E。断面形はU字形。底面はやや丸みを持つ。両端の比高差9cm、勾配1.18%で西方へ下向する。埋没状況不詳。西端底面近くから美濃陶器小碗(2)ほか出土する。規模は長さ7.60m上端幅36～55cm最大深16cmである。出土遺物から19世紀初頭を下限とすると考えられる。掲載遺物のほか、土師器杯碗類3片・壺甕類11片、須恵器杯碗類3片・壺甕類1片が出土するが混入とみられる。

38号溝(第149図、P L .57)

**位置** 27T-6～10、28A-7・8グリッド。39・43号溝より前出。西端は調査区域外へ延びる。平面形は軽微なS字形。走向方位はN-73°-W～N-83°-E～N-57°-E。断面形はU字形。底面はやや凸凹する。両端の比高差1cmで勾配はほとんどない。埋没状況不詳。規模は長さ17.76m上端幅20～70cm最大深14cmである。

遺物は土師器杯碗類3片・壺甕類6片、須恵器杯碗類6片、近世国産陶磁器2片が出土している。出土遺物から近世に比定される。

39号溝(第149図、P L .58)

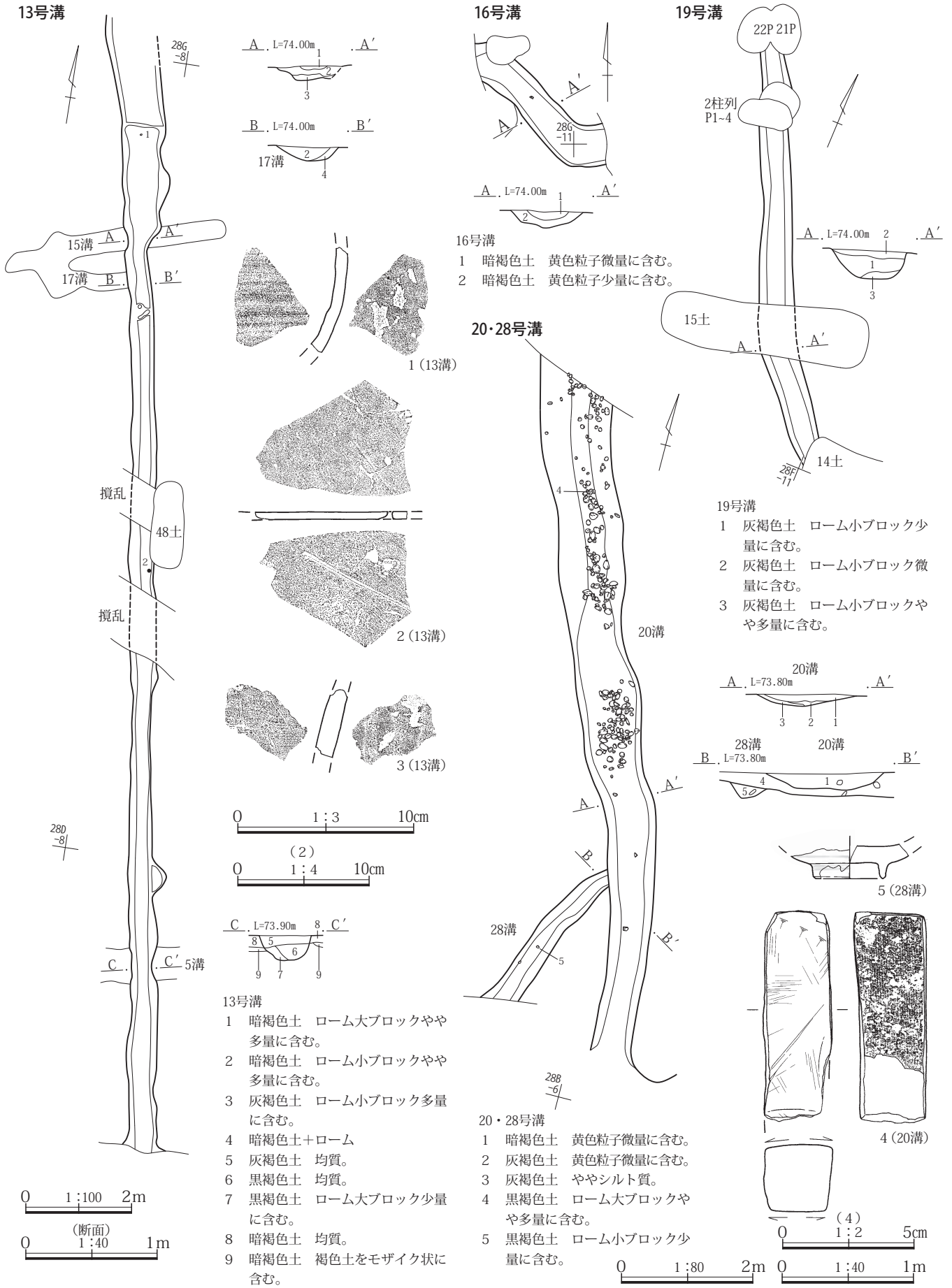
**位置** 27S・T-7グリッド。38号溝より後出。南北端とも立ちあがる。平面形は直線状。走向方位はN-12°-W。断面形は皿状。底面はやや凸凹する。両端の比高差1cmで勾配はほとんどない。埋没状況不詳。規模は長さ6.20m上端幅39～60cm最大深17cmである。遺物は出土していない。

40・41・42号溝(第149図、P L .58、第79表)

**40号溝 位置** 28A-8グリッド。平面形は直線状。走向方位はN-63°-W。断面形はU字形。底面は丸みを持つ。両端の比高差はない。埋没状況不詳。規模は長さ3.67m上端幅26～42cm最大深9cmである。遺物は出土していない。

**41号溝 位置** 28A-7・8グリッド。42号溝より前出。西端は不分明となる。平面形は直線状。走向方位はN-82°-W。断面形はU字形。底面は丸みを持つ。両端の比高差11cm、勾配5%で西方へ下向する。埋没状況不詳。底面から在地系土器焙烙が出土する。規模は長さ2.2m上端幅29～40cm最大深15cmである。出土遺物から近世に比定される。

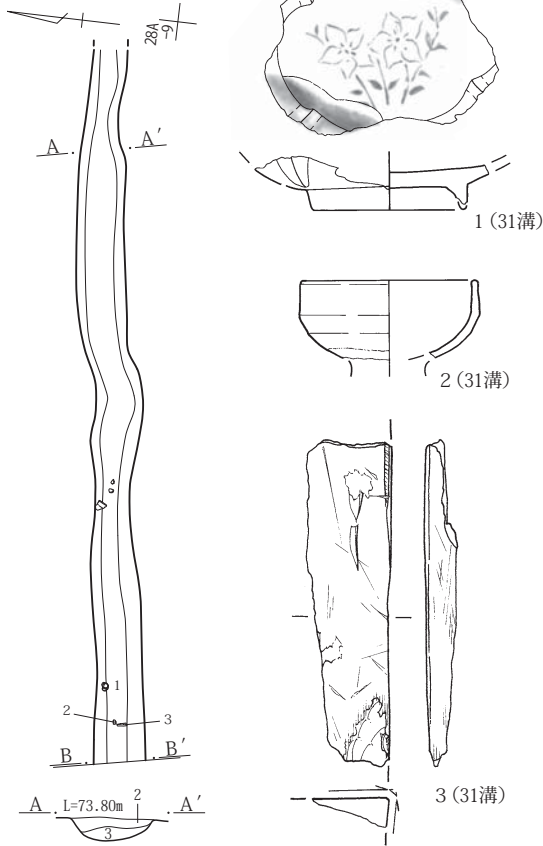
**42号溝 位置** 28A-8グリッド。41号溝より後出で、48号溝と重複するが新旧関係不明。平面形は直線状。走向方位はN-27°-W。断面形はU字形。底面は丸みを持つ。両端の比高差5cm、勾配2.3%で南方へ下向する。埋没状



第148図 1区13・16・19・20・28号溝と13・20・28号出土遺物

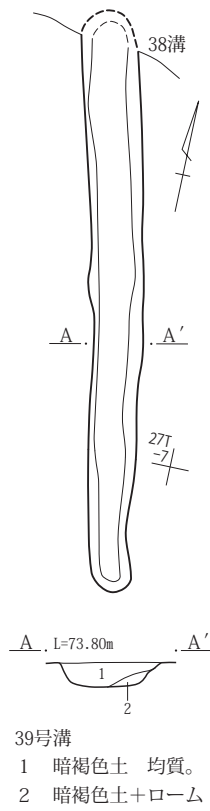


31号溝

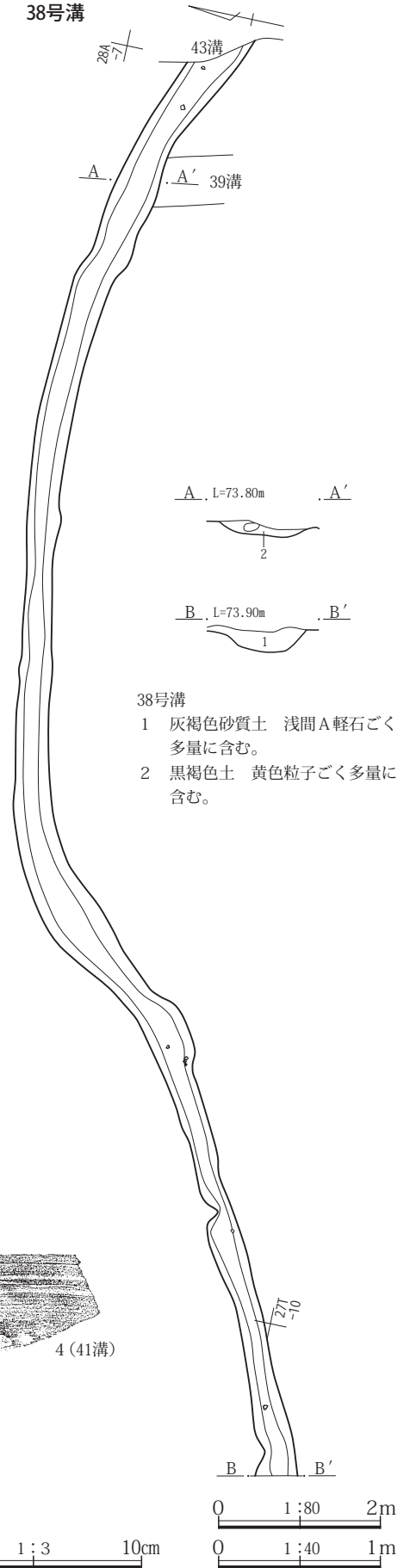


- 31号溝
- 1 灰褐色砂質土 浅間A軽石ごく多量に含む。
  - 2 暗褐色土 黄色粒子少量に含む。
  - 3 暗褐色土 黄色粒子やや多量に含む。

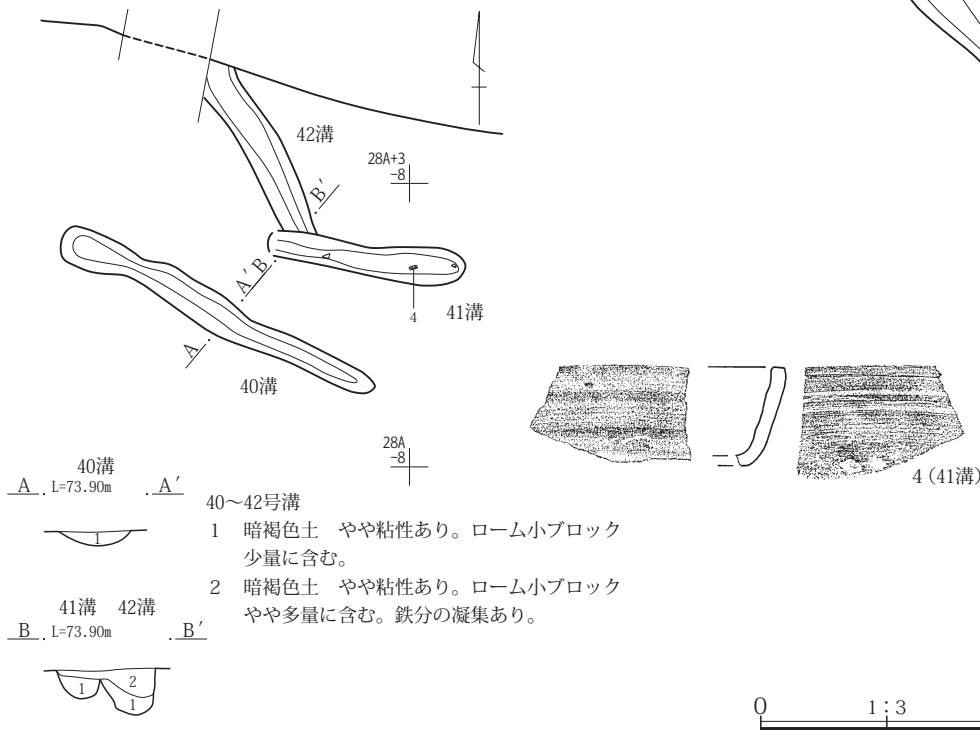
39号溝



38号溝



40~42号溝



第149図 1区31・38～42号溝と31・41号溝出土遺物

第78表 1区13・20・28号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第148図 PL.143	1	古瀬戸	花瓶	13溝 +13cm	-	-	-	体部片		灰白	外面に灰釉。細かい貫入がはいる。内面は無釉。釉は一部剥離。	中期。
第148図	2	在地系 土器	焙烙か	13溝 +3cm	-	-	-	底部片	B	にぶい 黄橙	底部外面にひび割れ状の皺が認められ、江戸時代の焙烙と考えられる。補修孔1個あり。	江戸時代か。
第148図	3	常滑陶 器	甕か	13溝	-	-	-	体部片		灰白	器表は暗赤褐色。残存部外面に自然釉3条流れる。	中世。
第148図	5	肥前磁 器	碗	28溝 +17cm	-	(3.8)	-	1/3		灰白	体部外面下位と高台外面に圈線。	江戸時代。波佐見系。
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況		備考	
第148図 PL.143	4	砥石	20溝 +5cm	切り砥石	砥沢石	(7.4)	2.5	91.8	表裏面を砥面とする。側面は平タガネにより面整形、右側面は整形後砥面として使用された可能性がある。			

第79表 1区31・41号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第149図 PL.144	1	美濃陶 器	摺絵皿	31溝 +10cm	-	6.0	-	底部		淡黄	木瓜形の皿。底部内面に鉄絵具による摺絵皿で桔梗文。内面から高台脇に灰釉。相対する角の口縁部から体部に銅緑釉。高台内に目痕3箇所。	登窯5小期。
第149図	2	美濃陶 器	小碗	31溝 +6cm	(6.8)	-	-	1/4		灰黄	内面から体部外面下位に灰釉。細かい貫入が入る。	登窯9小期。
第149図	4	在地系 土器	焙烙	41溝 底直	-	-	-	口縁～ 体部		灰黄・ 黒	断面は灰黄色、器表は黒色。外面体部下端から底部の器表はにぶい褐色。	江戸時代か。
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況		備考	
第149図 PL.144	3	砥石	31溝+8cm			(12.9)	(3.4)	44.1				

況不詳。規模は長さ2.17m上端幅31～41cm最大深26cmである。遺物は須恵器杯碗類2片、埴輪1片、近世在地系土器1片が出土している。出土遺物から近世に比定される。

43号溝(第150・151図、P L .58・144、第80表)

位置 27P～T-5・6、28A-6・7グリッド。103号土坑より後出で、38・48号溝より前出。49号溝と重複するが新旧関係不明。北端は48号溝との重複部で立ちあがる。平面形は直線状。走向方位はN-14°-W。断面形は逆台形。底面はほぼ平坦。両端の比高差20cm、勾配はほとんどない。埋没土中に多量の陶磁器が投棄されており、人為埋没の可能性高い。近世屋敷を区画する溝と推定される。規模は長さ24.88m上端幅80～144cm最大深38cmである。出土遺物から19世紀初頭を下限とすると考えられる。掲載遺物のほか、土師器杯碗類5片・壺甕類47片、須恵器杯碗類13片・壺甕類4片、埴輪7片、中世国産陶器1片・在地系土器2片、近世国産陶器5片・在地系土器11片、その他土器類8片が出土している。出土遺物から近世に比定される。

44号溝(第153図、P L .58)

位置 27R-8グリッド。平面形は直線状。走向方位はN-67°-E。断面形は皿状。底面はやや凸凹する。両端の比高差5cm、勾配2.14%で東方へ下向する。埋没土は詳細不明。規模は長さ2.33m上端25～64cm最大深9cmである。遺物は土師器壺甕類3片、須恵器杯碗類1片

が出土するが混入とみられる。

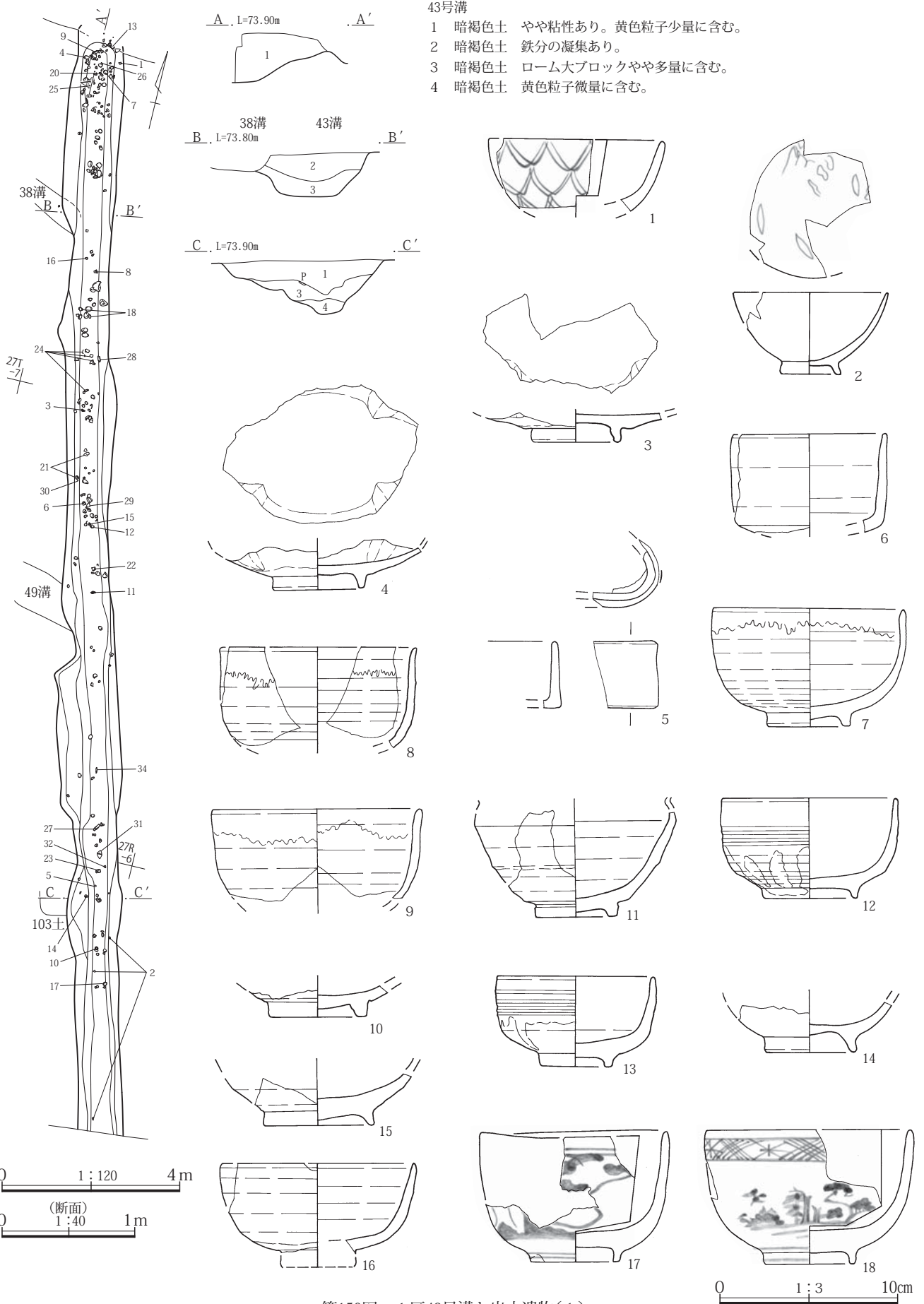
45・46号溝(第152・153図、P L .59・144、第81表)

45号溝 位置 27Q-7グリッド。46号溝より後出で、西端は46溝と不分明。平面形は直線状。走向方位はN-67°-E。断面形はU字形。底面は丸みを持つ。両端の比高差はほとんどない。埋没状況不詳。遺構確認の際、すぐ北側から完形的美濃陶器菊皿(152図1)が出土する。掲載遺物のほか、土師器壺甕類4片が出土している。規模は長さ3.04m上端幅35～50cm最大深29cmである。本遺構を境に南側に4号復旧溝群が分布することから、18世紀末以降に比定される。状況から46号溝とあわせて、調査区南西部の近世遺構群において屋敷部分南限となる溝と考えられる。

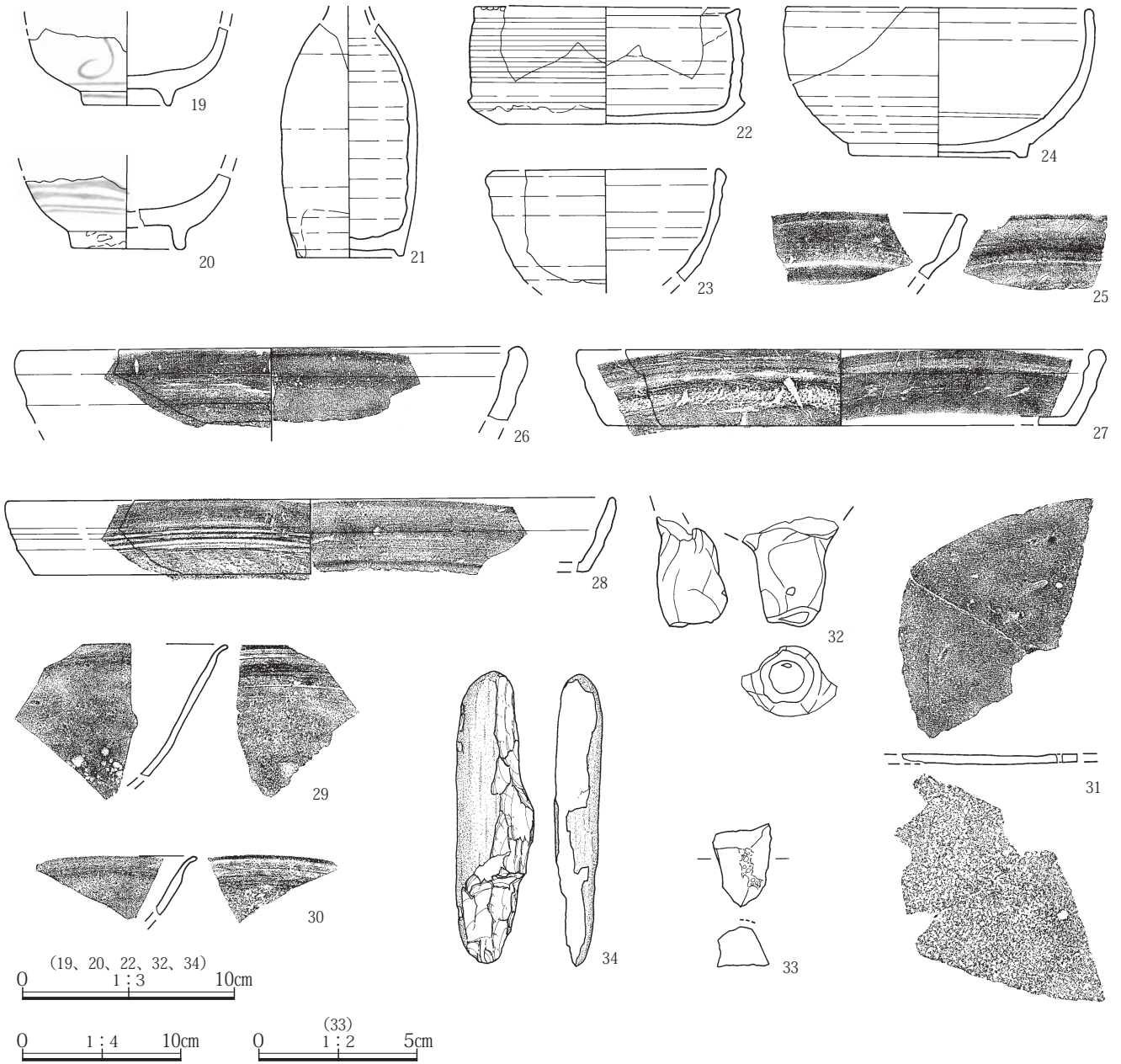
46号溝 位置 27Q-7・8グリッド。45号溝より前出。平面形は直線状。走向方位はN-70°-E。断面形は皿状。底面はやや凸凹する。両端の比高差はほとんどない。埋没状況不詳。規模は長さ7.60m上端幅35～62cm最大深10cmである。遺物は土師器杯碗類1片・壺甕類1片、中世在地系鍋1片が出土するが混入とみられる。

47号溝(第153図、P L .59)

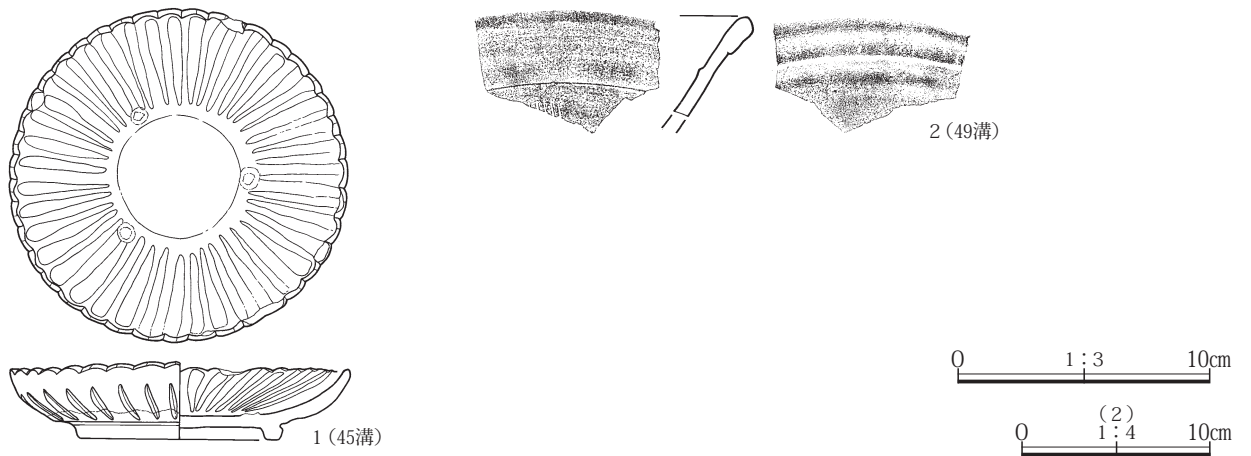
位置 27R-9・10グリッド。東端は不分明で、西端は調査区域外へ延びる。平面形は乱れた直線状。走向方位はN-76°-E。断面形は皿状。底面はほぼ平坦。両端の比高差はない。埋没状況不詳。規模は長さ4.05m上端幅81～135cm最大深20cmである。埋没土上位に玉石を平



第150図 1区43号溝と出土遺物(1)



第151図 1区43号溝出土遺物(2)



第152図 1区45・49号溝出土遺物

第4章 発掘調査の記録

第80表 1区43号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第150図	1	肥前磁器	碗		(9.7)	-	-	1/5		灰白	外面に2重網目文。内面は無文。	18世紀中頃～後半。波佐見系。
第150図 PL.144	2	肥前磁器	色絵小杯		(8.5)	3.2	-	口縁1部底部完		白	高台はやや撥状に開く。体部から口縁部は内湾気味に開く。高台端部を除き透明釉。釉には細かい貫入が入る。内面に上絵の痕跡があるが、色と文様は不明。	江戸時代。
第150図	3	美濃陶器	皿		-	(4.8)	-	1/2		灰黄	御深井製品。木瓜形の皿。内面から高台脇に灰釉。貫入が入る。	登窯4小期。
第150図	4	美濃陶器	皿		-	5.0	-	底部		灰白	御深井製品。木瓜形の皿。内面から高台脇に灰釉。貫入が入る。	登窯4小期。
第150図	5	美濃陶器	鬚水入		-	-	3.8	端部片		灰白	側端部片。内面から体部外面下端に灰釉。細かい貫入が入る。底部外面は無釉。	登窯5・6小期。
第150図	6	瀬戸陶器	箱形湯飲		(8.6)	-	-	1/4		灰白	器壁はやや厚い。体部下位で屈曲し、体部から口縁部は直線的に立ち上がる。内外面に灰釉。細かい貫入が入る。	登窯8小期。
第150図 PL.144	7	美濃陶器	尾呂茶碗		10.7	4.6	6.6	口縁1/4欠		灰白	口径が大きいが器高は低く、高台径は小さい。内面から高台脇に鉛釉。口縁部内外面に藁灰釉。	登窯7小期。
第150図	8	美濃陶器	尾呂茶碗		(10.9)	-	-	1/8		灰	内外面に鉛釉。口縁部に藁灰釉。	登窯5・6小期。
第150図	9	美濃陶器	尾呂茶碗		(11.6)	-	-	1/4		灰白	器高やや低い。内外面に光沢と透明感のある鉛釉。口縁部内外面に藁灰釉。	近世、尾呂6・7
第150図	10	美濃陶器	尾呂茶碗		-	5.4	-	底部		灰白	高台は低いが、径がやや大きく幅もやや広い。内面に褐色の鉛釉。外面は極薄い鉄化粧。	登窯6小期。
第150図	11	瀬戸陶器	天目碗		-	4.6	-	体1部底部完		灰白	高台脇は水平に削る。内面から体部外面に鉄釉。口縁端部は欠損。	登窯4小期。
第150図	12	瀬戸陶器	腰鎗碗		(9.7)	(5.2)	5.5	1/2		灰白	高台径大きく、器高は高い。外面口縁部下に螺旋状凹線。内面から凹線下部に灰釉、体部外面から高台内にやや光沢のある鎗釉。高台端部のみ無釉。灰釉は体部下に流れる。灰釉には不規則な粗い貫入が入る。	登窯7小期。
第150図 PL.144	13	瀬戸陶器	腰鎗碗		8.7	4.0	5.0	口縁部1/3欠		灰白	器高は低い。口縁部下外面に螺旋状凹線。内面から口縁部外面に灰釉、凹線部下以下に柿釉状の鎗釉。高台端部のみ無釉。灰釉に粗い貫入が入る。	登窯9小期。
第150図	14	肥前磁器	呉器手碗		-	(5.0)	-	2/3		浅黄	高台端部は部欠損。内外面に透明釉。細かい貫入が入る。	17世紀後半～18世紀初頭。
第150図	15	美濃陶器	大碗		-	(6.2)	-	3/4		灰白	高台はやや撥状に開く。内面に灰釉。細かい貫入が入る。	登窯6・7小期。
第150図	16	美濃陶器	丸碗		(10.8)	-	-	1/4		灰白	体部下位は張り、口縁部は直線的に立ち上がる。内面から体部外面下位に柿釉。	登窯8・9小期。
第150図 PL.144	17	肥前陶器	碗		(10.5)	5.0	7.2	口縁1/2底部完		灰	陶胎染付。腰は張らず、口径に比して器高が高い。外面は簡略化した山水文か。呉須はやや黒味を帯びる。	17世紀末～18世紀中頃。
第150図 PL.144	18	肥前陶器	碗		(11.4)	5.0	7.4	2/3		灰白	陶胎染付。口径はやや大きく、器高も高い。高台幅は狭く、高台径はやや大きい。口縁部外面には簡略化した四方禪文、体部外面には松などの植物文。呉須の発色はやや良好。貫入が入る。	17世紀末～18世紀中頃。
第151図	19	肥前陶器	碗		-	4.2	-	底部		灰	陶胎染付。高台径は小さい。外面は唐草文か。高台脇と高台外面の1重圈線は全周しない。	17世紀末～18世紀中頃。
第151図	20	肥前陶器	碗		-	(5.3)	-	1/4		灰	陶胎染付。釉にやや失透性があり、染付が不鮮明。	17世紀末～18世紀中頃。
第151図 PL.144	21	美濃陶器	徳利		-	6.5	-	体2/3底部完		灰白	外面下半は回転篋削り。外面に灰釉施釉後、体部外面下位以下を拭う。内面は無釉。内面の轆轤目は顕著。	登窯8小期。
第151図	22	美濃陶器	筒形香炉		(12.3)	(10.0)	5.4	口縁1部底部1/4		浅黄	外面に横線。口縁端部上面は内傾。口縁部内面から体部外面に鉛釉。体部外面下端から底部外面は回転篋削り。底部外面中央に回転糸切り痕残る。	登窯6小期。
第151図 PL.144	23	瀬戸陶器	片口鉢		(14.2)	-	-	1/6		灰白	口縁部は小さい玉縁状を呈する。内外面に鉛釉。	登窯5・6小期。
第151図 PL.144	24	美濃陶器	片口鉢		(19.1)	(11.1)	9.2	口縁1部底部1/4		浅黄	体部は内湾し、口縁部はやや肥厚。内面から高台内に鉛釉施釉後、高台脇以下を拭う。	登窯8小期。
第151図	25	瀬戸陶器	すり鉢		-	-	-	口縁部片		灰白	内外面に鎗釉。口縁部は下部で外反した後に肥厚して立ち上がる。	登窯7小期。
第151図	26	在地系土器	不詳		(31.0)	-	-	1/10		灰～黒	断面は黒色、器表付近は灰白色、器表は灰色から黒色。口縁部はやや内湾。火鉢か。	時期不詳。
第151図	27	在地系土器	焙烙		(32.5)	(29.5)	4.7	1/8		灰から暗灰、黒褐	断面中央は黒色、器表付近は灰白色、内面器表は灰から暗灰色、外面器表は黒褐色。外面中央に接合痕。体部外面下端は篋撫で。口縁部内面は段上に窪む。	江戸時代。
第151図	28	在地系土器	焙烙		(38.2)	(34.6)	4.6	1/10		灰白から灰	断面中央は黒色、器表付近はにぶい黄褐色、内面器表は灰白色から灰色、外面器表は黒から黒褐色。体部外面下端から底部外面はにぶい黄褐色。外面中央は刷毛目状の横撫で。	江戸時代。
第151図	29	在地系土器	鍋		-	-	-	口縁部片		黒・灰白	断面中央は黒色、器表付近は灰白色、口縁端部内面以下は灰白色、口縁端部内面から外面は黒色。外面に煤付着。器壁は薄く、口縁部は小さく外反。	江戸時代。30と同一個体の可能性高い。
第151図	30	在地系土器	鍋		-	-	-	口縁部片		黒・灰白	断面中央は黒色、器表付近は灰白色、口縁端部内面以下は灰白色、口縁端部内面から外面は黒色。外面に煤付着。器壁は薄く、口縁部は小さく外反。	江戸時代。29と同一個体の可能性高い。

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第151図	31	在地系 土器	焙烙か	底部片	-	-	-	底部片		灰白・ 灰黄	断面中央は黒色、器表付近は浅黄橙色、器表は灰白色から灰黄色。底部内面周縁に内耳貼り付け時と考えられる撫でか認められる。底部に焼成後に穿孔した補修坑が1箇所残る。補修孔に近い割れ口はやや摩滅し、黒変している。	江戸時代。補修孔1箇所。
第151図	32	在地系 土器	不詳	把手か	-	-	-	把手か		褐灰・ にぶい 黄褐	手づくね状の取っ手。本体との接合痕から、本体は皿状を呈していたと考えられる。取っ手内面は平滑で、端部付近に上面からの穿孔が下面まで貫通する。木製の柄を装着した可能性が高い。	時期不詳。
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況		備考	
第151図 PL.144	33	火打石	-	礫片?	石英	2.6	1.9	5.1	角礫稜部を機能部として敲打。			
第151図 PL.144	34	敲石		棒状礫	雲母石英片 岩	13.6	3.7	124.7	下端側小口部・側縁を敲打、衝撃剥離痕が生じている。			

第81表 1区45・49号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第152図 PL.144	1	美濃陶 器	菊皿	45溝	13.4	7.7	3.1	完形		淡黄	内面から高台脇に灰釉。不規則な貫入はいる。底部内面に目痕3箇所。	登窯4小期。
第152図	2	瀬戸陶 器	すり鉢	49溝	-	-	-	口縁部 片		にぶい 黄橙	口縁部外面は折り返すように肥厚。内外面に錆釉。	登窯6小期。

面的に多く含む。遺物は土師器杯椀類19片、須恵器杯椀類1片、中世在地系土器4片が出土するが混入とみられる。48・51・52・58・59・94号溝(第154～161図、P.L.59・60・144・145、第82～87表)

**48号溝 位置** 28A・B-5～10グリッド。58号溝より後出で、51号溝、1号道路より前出。東端で59号溝と重複するが新旧関係不明。西端は調査区域外へ延び、綿貫小林前遺跡O東区5号溝と同一と考えられる。平面形は軽微なS字形。走向方位はN-84°-E～N-77°-W～N-90°。断面形は逆台形。底面はやや凸凹する。両端の比高差は24cm、勾配0.92%で西方へ下向する。下位は自然埋没と思われ、上位は投棄された遺物が増加する。陶磁器は17世紀末から19世紀前半に及ぶ。掲載遺物のほか、土師器壺甕類5片、須恵器杯椀類1片・壺甕類3片、埴輪2片、中世在地系鉢1片、近世国産陶磁器52片・在地系土器2片、近現代その他遺物30片が出土している。規模は長さ26.08m上端幅100～148cm最大深53cmである。出土遺物から19世紀前半を下限とすると考えられる。

**51号溝 位置** 28A～C-1～5、18B～D-19・20グリッド。52号溝より後出、また平面的な連続はつかめないが、48・58号溝よりも後出である。東端は調査区域外へ延び、断面観察から52号溝より底面が上昇するか。西端は48・58・59号溝と重複して不分明となる。平面形は北方を弦とするやや弓状。走向方位はN-70°-E。断面形はU字形。底面はやや凸凹する。両端の比高差は14cm、勾配はほとんどない。自然埋没と思われるが、白

色軽石(As-A)の混入が著しい。出土遺物は土師器壺甕類3片、須恵器壺甕類1片、埴輪2片、中世国産陶器1片、近世国産陶磁器39片・在地系土器24片、その他土器類7片が出土している。陶磁器は17世紀前半から18世紀前半に及ぶ。規模は長さ32.72m上端幅73～120cm最大深41cmである。白色軽石(As-A)を含むことから18世紀末以降に比定される。

**52号溝 位置** 28A・B-3～5グリッド。51号溝より前出。東端は調査区域外へ延び、西端は51号溝と重複して不分明。平面形はほぼ直線状。走向方位はN-84°-E。断面形はU字形。底面はやや凸凹する。自然埋没と思われる。陶磁器は17世紀末から18世紀中頃に及ぶ。掲載遺物のほか、土師器杯椀類1片・壺甕類1片、須恵器杯椀類1片・壺甕類2片、埴輪1片、近世国産陶磁器5片・在地系土器7片、その他土器類1片、板碑5片が出土している。規模は長さ不明幅53cm深さ27cmである。出土遺物から18世紀中頃を下限とすると考えられる。

**58号溝 位置** 28A・B-5～10グリッド。48・51号溝、1号道路より前出。平面形は軽微なS字形。走向方位はN-84°-E～N-77°-W～N-90°。断面形は逆台形で、上位はくの字状に開く。底面近くから陶磁器を含んだ多量の円礫で埋没土しており人為埋没。両端の比高差は5cmで勾配はほとんどない。一部上層に白色軽石(As-A)の純層がみられる。陶磁器は17世紀末から18世紀中頃に及ぶ。掲載遺物のほか、近世国産陶器6片・同在地系土器3片、その他土器類1片が出土している。規模は長さ26.56m上端幅144～184cm最大深50cmである。出土

遺物から18世紀中頃を下限とすると考えられる。5号集石は関連遺構と考えられる。

**59号溝** 位置 28A-5・6グリッド。48・58号溝と重複するが新旧関係不明で、前者は遺物の廃棄状況から前出か。平面形はL字形。走向方位はN-89°-E～N-15°-E。断面形は逆台形～U字形。底面はやや凸凹する。東西方向の両端の比高差7cm、勾配1.17%で西方へ下向する。底面近くから陶磁器を含んだ多量の円礫で埋没しており人為埋没。陶磁器は17世紀末から19世紀前半に及ぶ。掲載遺物のほか、土師器杯椀類2片・壺甕類4片、須恵器杯椀類1片・壺甕類1片、中世在地系土器3片、近世国産陶磁器8片・在地系土器3片、近現代その他土器類7片が出土している。規模は東西方向の長さ6m、南北方向の長さ1.85m、上端幅61～73cm最大深37cmである。出土遺物から19世紀前半を下限とすると考えられる。

**94号溝** 位置 28A・B-1～3、18B・C-19・20グリッド。東西端とも削平により消滅か。平面形はやや蛇行する。走向方位はN-86°-W～N-61°-E。断面形は逆台形。底面はやや凸凹する。両端の比高差はほとんどない。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没か。埋没土から瀬戸陶器輪禿皿(154図1)、美濃陶器片口鉢(154図2)ほか出土する。掲載遺物のほか、須恵器1片、中世在地系土器4片が出土している。規模は長さ19.36m上端幅40～80cm最大深20cmである。出土遺物から17世紀後半から18世紀前半を下限とすると考えられる。

**49号溝**(第152・153図、P L .60、第81表)

**位置** 27R・S-6・7グリッド。43号溝と重複するが新旧関係不明。西端は攪乱により不分明。平面形は直線状。走向方位はN-77°-W。断面形は皿状。底面はほぼ平坦。両端の比高差は10cm、勾配はほとんどない。埋没状況不詳。埋没土から152図2の瀬戸陶器すり鉢(18世紀前半)が出土する。掲載遺物のほか、土師器壺甕類4片、須恵器杯椀類1片が出土している。規模は長さ5.30m上端幅53～93cm最大深22cmである。白色軽石(As-A)を含むことから18世紀末以降に比定される。

**50号溝**(第153図、P L .60)

**位置** 27T-5・6グリッド。北端は削平され、南端は攪乱により不分明。平面形は直線状で、北端でわずかに分岐する。走向方位はN-19°-E。断面形はU字形。底面は丸みを持つ。両端の比高差4cmで勾配はほとんどな

い。埋没状況不詳。規模は長さ4.34m上端幅24～60cm最大深15cmである。遺物は出土していない。

**53・55号溝**(第153図、P L .60・61)

**53号溝** 位置 17S-19グリッド。134号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は直線状。走向方位はN-25°-W。断面形はU字形。底面は丸みを持つ。両端の比高差6cm、勾配4.6%で北方へ下向する。埋没状況不詳。規模は長さ1.3m上端幅32～38cm最大深10cmである。遺物は土師器2片、中世在地系土器1片、近世国産陶磁器2片・在地系土器3片が出土する。出土遺物から近世に比定される。

**55号溝** 位置 17R・S-19グリッド。南端は削平により消滅。平面形は直線状。走向方位はN-24°-W。断面形は皿状。底面は凸凹する。両端の比高差1cmで勾配はほとんどない。埋没状況不詳。規模は長さ7.40m上端幅23～30cm最大深10cmである。遺物は出土していない。

**54号溝**(第153図、P L .61)

**位置** 17S-20グリッド。平面形は直線状。走向方位はN-24°-W。断面形は皿状。底面は凸凹する。両端の比高差5cm、勾配2.02%で南方へ下向する。埋没状況不詳。規模は長さ2.47m上端幅24～36cm最大深7cmである。遺物は出土していない。

**56号溝**(第153図、P L .61)

**位置** 17S・T-20グリッド。平面形は直線状。走向方位はN-22°-W。断面形は皿状。底面はやや丸みを持つ。両端の比高差1cmで勾配はほとんどない。埋没状況不詳。規模は長さ1.37m上端幅22～25cm最大深4cmである。遺物は出土していない。

**57号溝**(第153図、P L .61)

**位置** 27S-4グリッド。平面形は直線状。走向方位はN-90°。断面形は皿状。底面は丸みを持つ。埋没状況不詳。規模は長さ0.97m上端幅30～46cm最大深14cmである。遺物は出土していない。

**67号溝**(第162図、P L .61、第88表)

**位置** 28B-6～10グリッド。77号溝より後出で、10・13・76号溝と重複するが新旧関係不明。東端は20号溝、西端は58号溝で途絶える。平面形は直線状で、西端でほぼ直角に南に折れる。走向方位はN-90°～N-5°-E。断面形はU字形。底面はやや凸凹する。両端の比高差2cmで勾配はほとんどない。自然埋没と思われる。西

端で1の焙烙と思われる在地系土器が出土する。掲載遺物のほか、近世国産陶磁器6片・在地系土器3片、その他土器類3片が出土している。規模は長さ18.40m上端幅36～123cm最大深20cmである。出土遺物から近世に比定される。

#### 76号溝(第162図、P L .61)

**位置** 28B～E-8グリッド。5号溝より後出。北端は攪乱により不明、南端は67号溝で途絶える。平面形は直線状で、南端は西にやや折れる。走向方位はN-4°-W～N-15°-W～N-0°。断面形は皿状。底面はやや丸みを持つ。両端の比高差11cmで勾配はほとんどない。自然埋没と思われる。規模は長さ13.76m上端幅40～108cm最大深17cmである。遺物は出土していない。

#### 95号溝(第162図、P L .61)

**位置** 27T・28A-2グリッド。202号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形はやや弓状。走向方位はN-20°-W。断面形は皿状。底面はほぼ平坦。両端の比高差6cm、勾配1.03%で北方へ下向する。埋没土は白色軽石(As-A)を多量に含み人為埋没。規模は長さ5.80m上端幅25～76cm最大深10cmである。遺物は出土していない。

#### 96号溝(第163図、P L . )

**位置** 28A・B-1・2グリッド。94号溝と重複するが新旧関係不明。平面形は直線状。走向方位はN-19°-W。断面形はU字形。底面はやや凸凹する。両端の比高差は10cm、勾配1.38%で北方へ下向する。埋没状況不詳。規模は長さ7.24m上端幅23～56cm最大深12cmである。遺物は中世在地系土器24片、その他土器類3片が出土するが混入とみられる。

#### 97号溝(第163図、P L .61)

**位置** 28A・B-1グリッド。平面形は直線状。走向方位はN-21°-W。断面形はU字形。底面はやや凸凹する。両端の比高差14cm、勾配2.31%で北方へ下向する。埋没状況不詳。規模は長さ6.07m上端幅35～55cm最大深16cmである。遺物は出土していない。

#### 98号溝(第163図、P L .61)

**位置** 18A-20、28A・B-1グリッド。平面形は直線状だが、わずかに西に湾曲する。走向方位はN-18°-W。断面形はU字形。底面はやや凸凹する。比高差はない。埋没状況不詳。規模は長さ6.06m上端幅27～46cm最大深8cmである。遺物は中世在地系土器1片が出土するが

混入とみられる。

#### 99号溝(第163図、P L .61)

**位置** 18A・B-20、28B-1グリッド。平面形は直線状だが、わずかに西に湾曲する。走向方位はN-21°-W。断面形は皿状。底面はやや凸凹する。両端の比高差1cmで勾配はほとんどない。埋没状況不詳。規模は長さ6.28m上端幅31～48cm最大深11cmである。遺物は出土していない。

#### 100号溝(第163図、P L .61)

**位置** 18A～C-20グリッド。94号溝と重複するが新旧関係不明。平面形はやや蛇行する。走向方位はN-7°-W～N-23°-W。断面形はU字形。底面はほぼ平坦。両端の比高差10cm、勾配1.47%で北方へ下向する。埋没状況不詳。規模は長さ6.82m上端幅26～45cm最大深10cmである。遺物は出土していない。

#### 101号溝(第163図、P L .61)

**位置** 18A～C-19グリッド。8・11号礫充填土坑、近世墓より前出か。51号溝と重複するが新旧関係不明。平面形はやや蛇行する。走向方位はN-15°-W。断面形は皿状。底面はやや凸凹する。両端の比高差は5cmで勾配はほとんどない。底面近くから多量の円礫で埋没土しており人為埋没。規模は長さ10.16m上端幅25～52cm最大深9cmである。近世墓の墓標年代が寛政11年(1799)のため、18世紀末以前に比定される。

#### 102号溝(第163図)

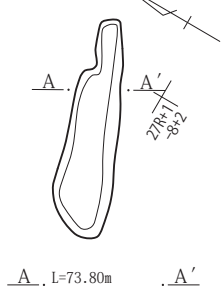
**位置** 18B・C-18・19グリッド。220号土坑、206号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形はやや弓状。走向方位はN-40°-W。断面形は皿状。底面はやや凸凹する。両端の比高差4cmで勾配はほとんどない。埋没土は詳細不明。規模は長さ4.97m上端幅17～37cm最大深6cmである。遺物は出土していない。

#### 103号溝(第163図)

**位置** 27T-2、28A-2・3グリッド。94号溝と重複するが新旧関係不明。平面形はやや弓状。走向方位はN-54°-W～N-25°-W。断面形は皿状。底面はやや凸凹する。両端の比高差は6cmで勾配はほとんどない。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没か。規模は長さ8.08m上端幅41～104cm最大深13cmである。遺物は中世在地系土器1片が出土するが混入とみられる。



44号溝

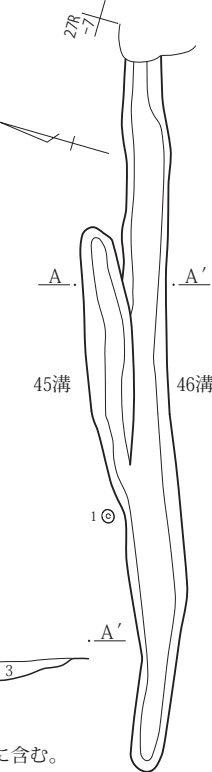


A, L=73.80m, A'

44号溝

1 暗褐色砂質土 小礫少量に含む。

45・46号溝



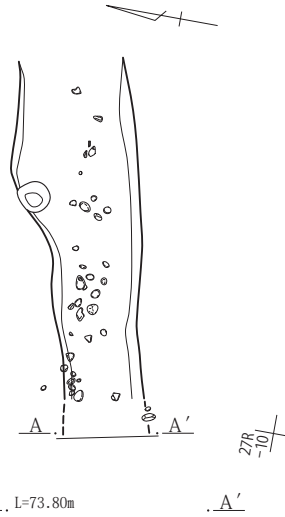
A, A'

A, L=73.90m, A'

45・46号溝

1 灰褐色粘質土 黄色粒子少量に含む。  
2 黒褐色土 暗褐色土をモザイク状に含む。  
3 褐色土 暗褐色土をシミ状に含む。

47号溝

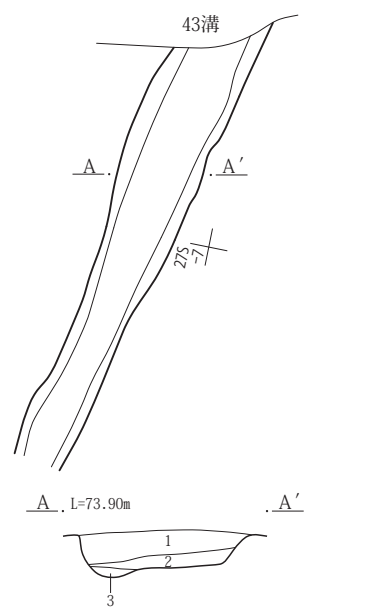


A, L=73.80m, A'

47号溝

1 灰褐色砂質土 灰色砂含む。

49号溝



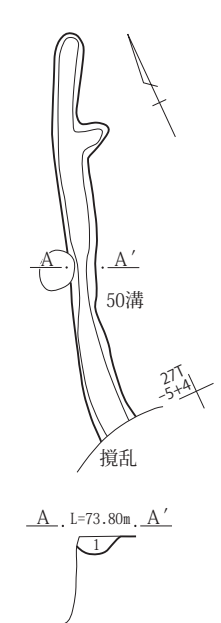
A, L=73.90m, A'

49号溝

1 灰褐色土 やや砂質。浅間A 軽石少量、ローム小ブロックやや多量に含む。  
2 灰褐色土 ローム小ブロックごく多量に含む。  
3 黒褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。

53・55号溝

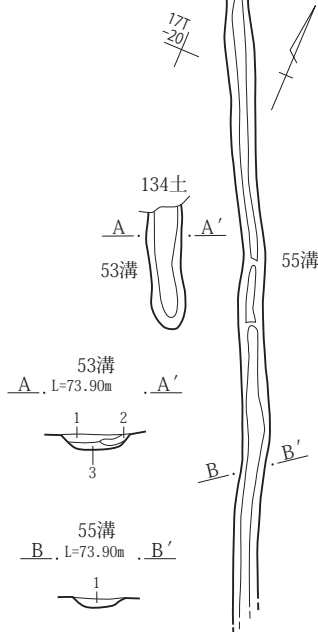
50号溝



A, L=73.80m, A'

50号溝

1 暗褐色土 黄色粒子少量に含む。



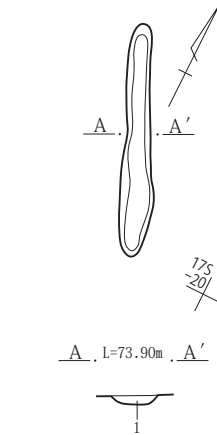
A, L=73.90m, A'

B, L=73.90m, B'

53号溝

1 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。  
2 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。  
3 褐色土 暗褐色土をモザイク状に含む。

54号溝



A, L=73.90m, A'

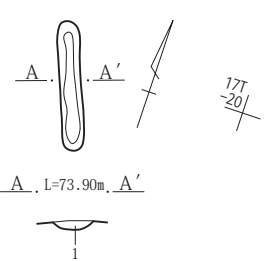
54～56号溝

1 暗褐色土 黄色粒子微量に含む。

57号溝

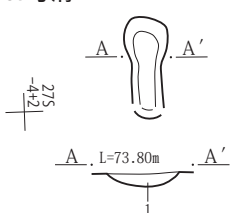
1 暗褐色土 黄色粒子微量に含む。

56号溝



A, L=73.90m, A'

57号溝

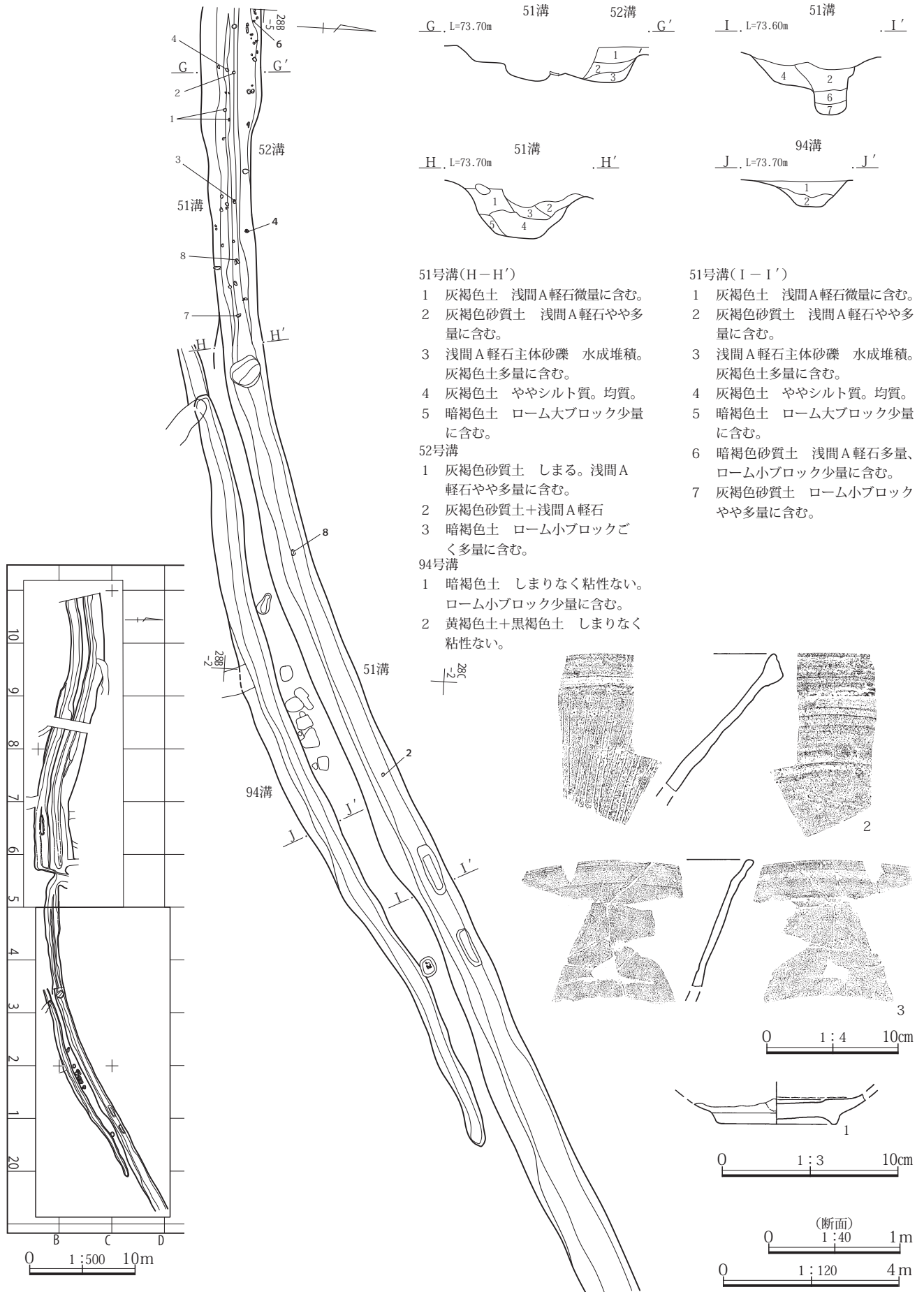


A, L=73.80m, A'

0 1:80 2m

0 1:40 1m

第153図 1区44～47・49・50・53～57号溝



51号溝(H-H')

- 1 灰褐色土 浅間A軽石微量に含む。
- 2 灰褐色砂質土 浅間A軽石やや多量に含む。
- 3 浅間A軽石主体砂礫 水成堆積。灰褐色土多量に含む。
- 4 灰褐色土 ややしルト質。均質。
- 5 暗褐色土 ローム大ブロック少量に含む。

52号溝

- 1 灰褐色砂質土 しまる。浅間A軽石やや多量に含む。
- 2 灰褐色砂質土+浅間A軽石
- 3 暗褐色土 ローム小ブロックごく多量に含む。

94号溝

- 1 暗褐色土 しまりなく粘性ない。ローム小ブロック少量に含む。
- 2 黄褐色土+黒褐色土 しまりなく粘性ない。

51号溝(I-I')

- 1 灰褐色土 浅間A軽石微量に含む。
- 2 灰褐色砂質土 浅間A軽石やや多量に含む。
- 3 浅間A軽石主体砂礫 水成堆積。灰褐色土多量に含む。
- 4 灰褐色土 ややしルト質。均質。
- 5 暗褐色土 ローム大ブロック少量に含む。
- 6 暗褐色砂質土 浅間A軽石多量、ローム小ブロック少量に含む。
- 7 灰褐色砂質土 ローム小ブロックやや多量に含む。

第154図 1区51・52・94号溝と94号溝出土遺物

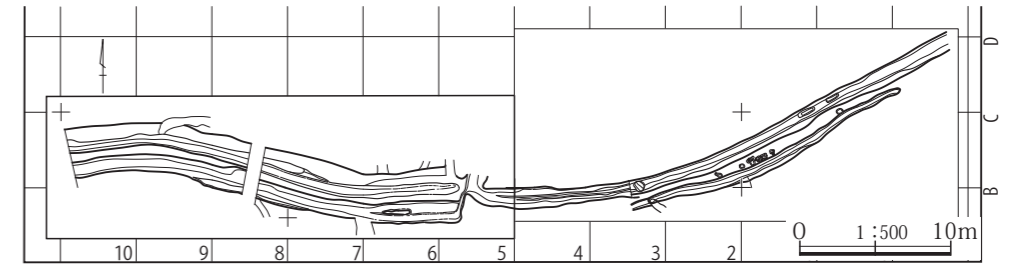
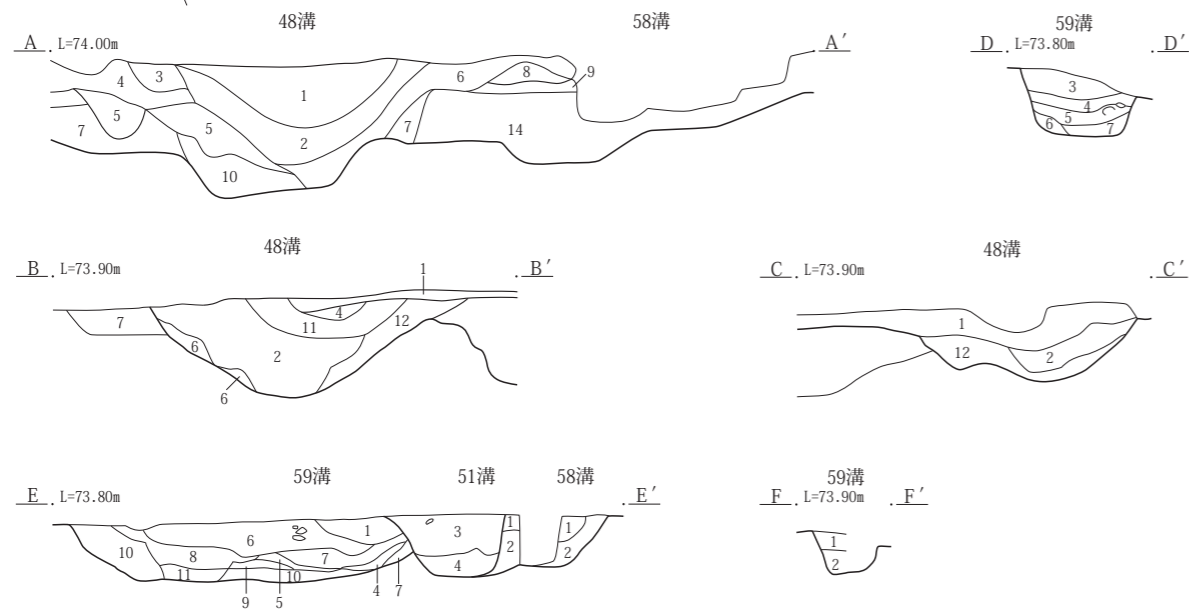
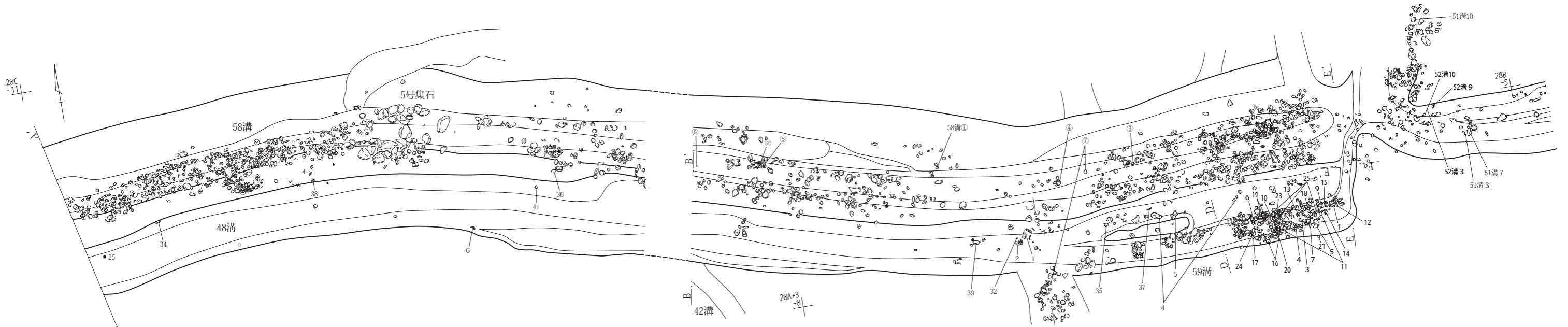
第4章 発掘調査の記録

第82表 1区94号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第154図	1	瀬戸陶器	輪弁皿		-	6.7	-	1/2		灰白	残存部外面は無釉。内面は灰釉施釉後に底部内面の釉をドーナツ状に掻き取る。輪弁部内面に低い段差を設ける。	登窯2～5小期。
第154図	2	丹波陶器	すり鉢		-	-	-	口縁～ 体部		明赤褐	断面は灰色、器表は明赤褐色。内面に自然釉が斑状にかかる。口縁部は断面三角形。体部外面下位に指頭圧痕状の窪み。	17世紀後半～ 18世紀前半。
第154図 PL.144	3	在地系 土器	鍋		-	-	-	口縁～ 体部		暗灰	断面は灰白色、器表は暗灰色。体部下位で外反し、体部中位は内湾気味に開く。口縁部は短く内湾して開く。口縁部形態から、退化した内耳が付く可能性がある。	江戸時代。

第83表 1区59号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第155図 PL.144	1	肥前磁器	碗		10.0	4.0	5.3	ほぼ完 形		灰白	外面は2重網目文、内面は1重網目文。底部内面は2重圏線内に菊花状文。高台内に不明銘。	18世紀前半か ら中頃。
第155図 PL.144	2	肥前磁器	碗		(9.4)	(4.0)	4.8	1/3		灰白	外面は雪輪草花文か。呉須の発色はやや良好。	17世紀末～ 18世紀中頃。 波佐見系。
第155図	3	肥前磁器	碗		(9.8)	-	-	1/4		灰白	外面に染付。	17世紀末～ 19世紀初頭。
第155図 PL.144	4	肥前磁器	広東碗		11.0	6.2	6.4	ほぼ完 形		白	外面は縦線内に3種の文様を相対する面に施文。底部内面は1重圏線内に線描の文様。	18世紀末～ 19世紀前半。
第155図 PL.144	5	肥前磁器	丸碗		(8.8)	(3.6)	5.8	1/2		白	外面の2方に花卉文。底部内面には鷲文。釉に不規則な貫入が入る。	18世紀末～ 19世紀前半。
第155図	6	肥前磁器	碗		-	(4.8)	-	底部		灰白	残存部外面に3条の圏線。底部内面に降り物。一部釉は白濁し、焼成不良。	17世紀末～ 18世紀。波佐 見系。
第155図	7	肥前磁器	猪口		(8.0)	(5.8)	6.0	1/5		白	外面に松と草花文。高台内も施釉。口縁部の開きは弱くずん胴形。残存部少なく、実測図より径は小さい可能性高い。	17世紀末～ 18世紀。波佐 見系。
第155図	8	肥前磁器	皿		-	(4.5)	-	1/3		白	高台径はやや小さい。体部内面に格子状文と不明文様。見込み蛇ノ目釉剥ぎ。	17世紀末～ 18世紀中頃。 波佐見系。
第155図	9	肥前磁器	皿		(12.4)	(6.8)	3.5	1/4		灰白	体部内面は濃淡の濃み間を白抜き。底部内面は五弁花。高台内に1重圏線。素地は十分磁化しておらず灰色味を帯び、釉も白濁する。焼成不良。	17世紀末～中 頃。
第155図	10	美濃陶器	丸碗		-	(4.9)	-	1/4		灰白	体部外面は回転篋削り。内面から高台外面に鉛釉。	登窯7小期。
第155図	11	美濃陶器	徳利		-	(8.4)	-	1/2		灰白	外面に鉛釉施釉後、体部下位以下を拭う。内面は無釉。	登窯7小期。
第155図	12	瀬戸陶器	半胴甕		(16.0)	-	-	1/4		灰黄か らにぶ い橙	口縁部外面に浅い凹線2条。口縁部は「T」字状を呈する。口縁端部上面は窪む。	登窯8小期。
第155図	13	瀬戸陶器	すり鉢		-	-	-	口縁部 片		灰白	口縁部の断面形は波状にうねり、内面は突帯状に突き出る。内外面に錆釉。	登窯7小期。
第156図	14	瀬戸陶器	すり鉢		(36.0)	-	-	1/8		淡黄	口縁部外面は幅広く窪み、内面は小さい段をなす。口縁部は外方に折り返す。内外面に錆釉。	登窯6小期。
第156図	15	瀬戸陶器	すり鉢		-	-	-	口縁部 片		浅黄	口縁部は外反し、外反部内面に段差。口縁端部内外面は突出する。内外面に錆釉。	登窯9小期。
第156図	16	瀬戸陶器	すり鉢		-	(11.4)	-	1/4		灰白	全面に錆釉施釉後、体部外面下位以下を拭う。底部回転糸切無調整。使用による内面体部下位以下の摩滅が著しく、すり目凹部の釉まで消失。底部外面周縁も摩滅。	江戸時代。
第156図	17	在地系 土器	焙烙		-	-	-	口縁～ 体部片	B	灰・黒	断面は灰白色、内面器表は灰色、外面器表は黒色。外面中位に接合痕。内面に幅広の内耳接合痕。	江戸時代。
第156図	18	在地系 土器	焙烙		-	-	-	口縁～ 体部片	B	灰黄	断面は灰白色、器表は灰黄色から暗灰色。口縁端部内面は丸みを帯びる。	江戸時代。
第156図	19	在地系 土器	焙烙		-	-	-	口縁～ 体部片	B	黄灰・ 黒	断面はにぶい黄褐色、内面器表は黄灰色、外面器表は黒色。外面中位に接合痕。外面下位に皺状亀裂。	江戸時代。
第156図	20	在地系 土器	焙烙		-	-	-	口縁～ 体部片		灰白・ 橙	断面は灰白色、内面器表は橙色、外面器表は黒褐色。体部外面下端は篋撫で。体部外面下位に皺状亀裂。	江戸時代。
第156図	21	在地系 土器	焙烙		-	-	-	口縁～ 底部片		明赤 褐・灰 褐	外面器表は黒色。丸底。	近現代。
第156図	22	在地系 土器	焙烙		-	-	-	口縁～ 体部片	B	灰白	外面器表のみ黒褐色。体部外面下端から底部外面は灰白色。口縁部内面に幅広の内耳接合痕。体部外面下位は篋撫で。	江戸時代。
第156図	23	在地系 土器	不詳		-	-	-	体部片		黒	断面はにぶい赤褐色、器表は黒色。	近現代か。
第156図 PL.144	24	瓦	平瓦か		-	-	1.6	破片		灰白・ 灰	断面は灰白色、器表は灰色。表裏は撫で。	時期不詳。
第156図	25	瓦	平瓦か		-	-	1.65	破片		灰白・ 灰	断面は灰白色、器表は灰色。表裏は撫で。	時期不詳。



48・58号溝

- 1 暗褐色砂質土 浅間A軽石少量。近現代ゴミを含む。上面路面。
- 2 灰褐色シルト質土 炭化物粒子少量を含む。
- 3 灰褐色土 しまる。炭化物粒子微量を含む。路面。
- 4 灰褐色土 浅間A軽石少量を含む。
- 5 灰褐色砂質土 小礫少量を含む。
- 6 灰褐色砂質土 中礫やや多量、ローム小ブロックやや多量を含む。
- 7 灰褐色土 やや粘性あり。黄白色粒子少量を含む。
- 8 灰黄色砂礫 浅間A軽石主体。二次堆積。
- 9 灰褐色粘質土 しまる。第2路面。
- 10 灰褐色砂質土 浅間A軽石をブロック状を含む。
- 11 灰褐色土+ローム大ブロック
- 12 灰褐色土 浅間A軽石少量、ローム小ブロックやや多量を含む。
- 13 にぶい黄褐色土ブロック
- 14 灰褐色土 未分層。中央に中円礫ごく多量を含む。

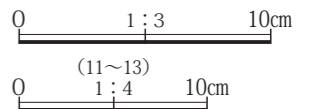
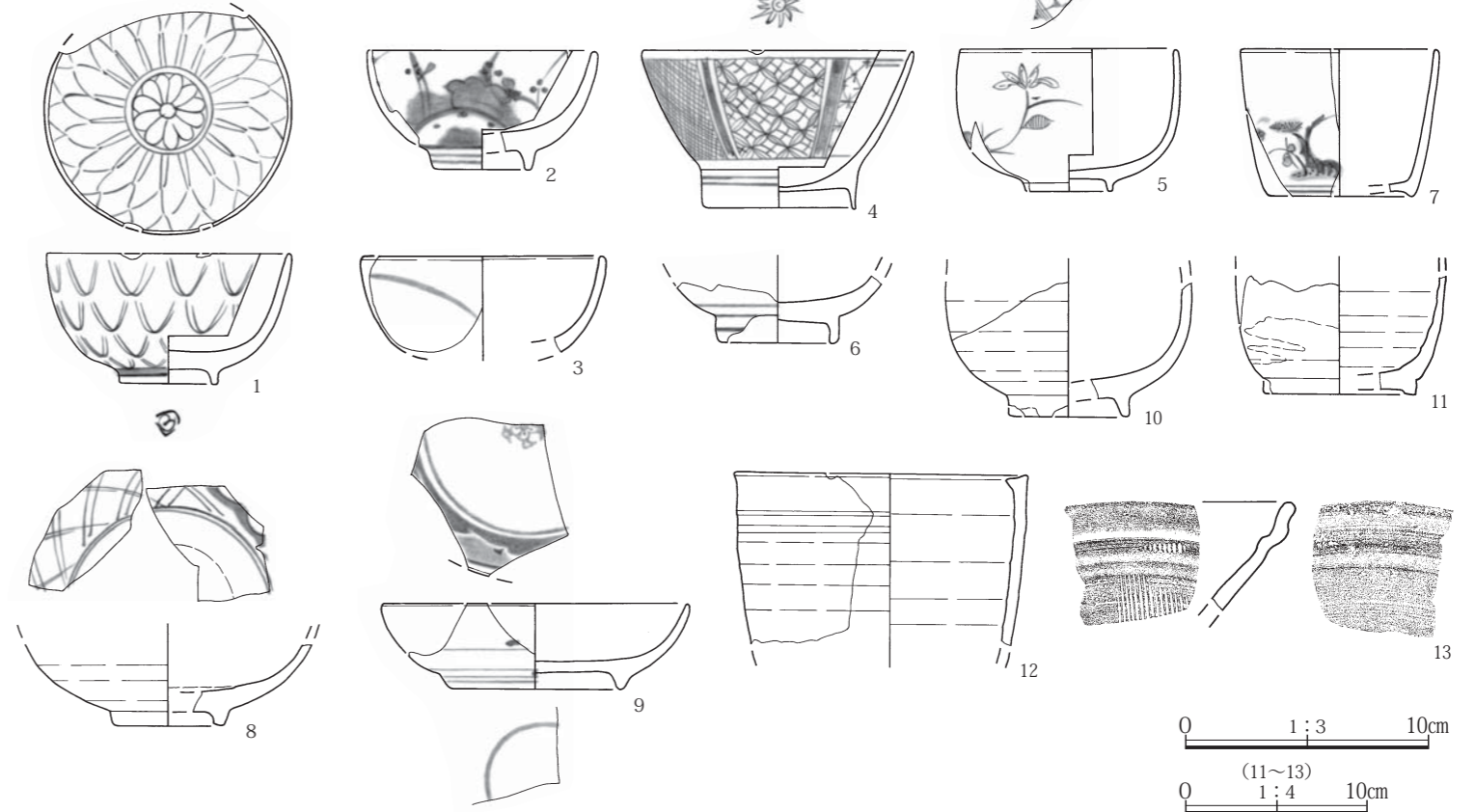


48・51・58・59号溝

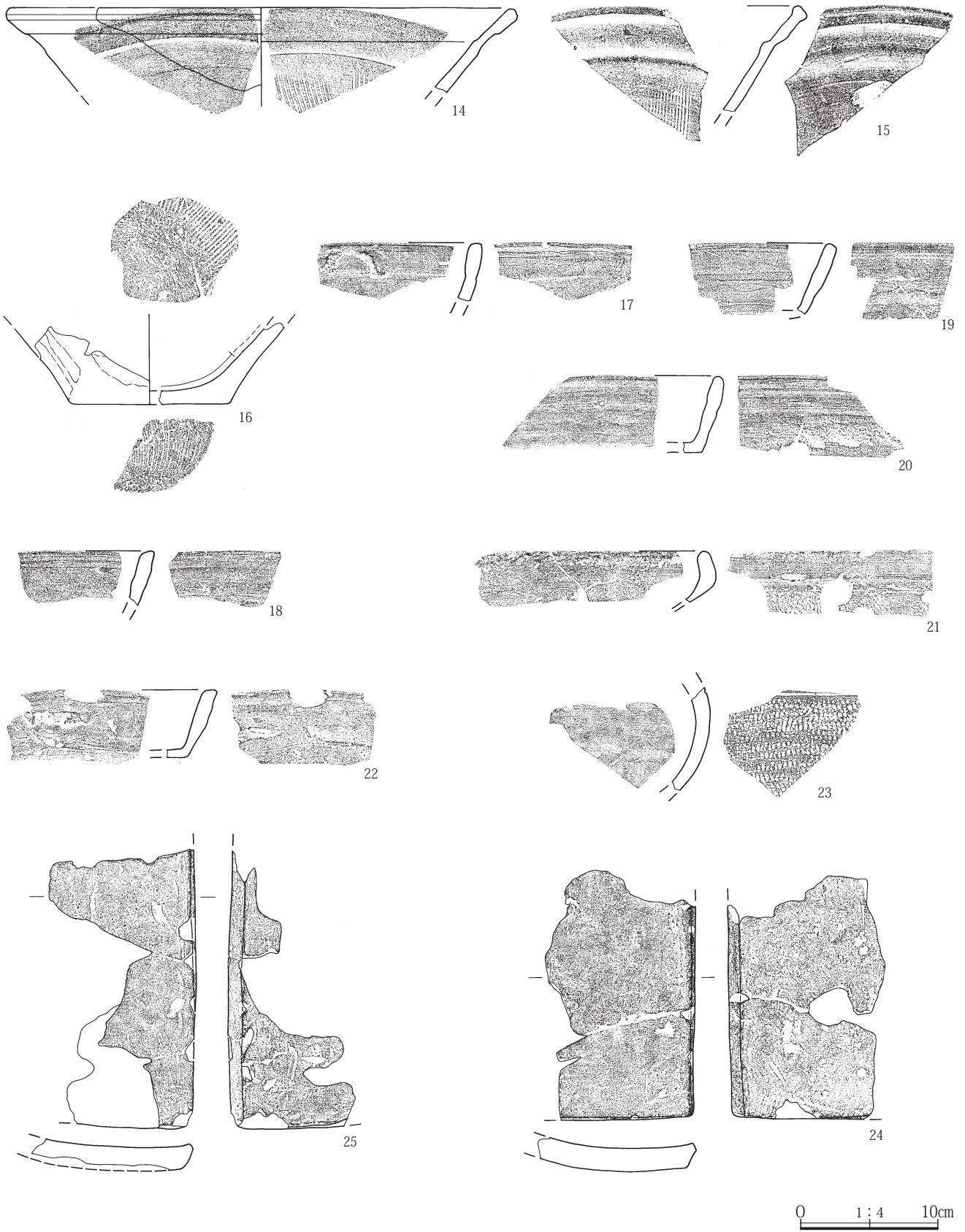
- 1 灰褐色砂質土 しまる。ローム小ブロックやや多量、浅間A軽石微量を含む。
- 2 暗褐色土
- 3 灰褐色砂質土 浅間A軽石多量を含む。
- 4 黒褐色土 均質。暗褐色土をシミ状を含む。
- 5 浅間A軽石 汚れた二次堆積
- 6 灰褐色土砂質土 小礫やや多量、浅間A軽石少量、炭化物粒子微量を含む。
- 7 灰褐色土砂質土 黄色粒子、浅間A軽石少量を含む。
- 8 灰褐色土 ローム大ブロックやや多量、浅間A軽石微量を含む。
- 9 灰褐色土 浅間A軽石層状にごく多量を含む。
- 10 灰褐色土 浅間A軽石多量を含む。
- 11 灰褐色土 ローム小ブロック多量、浅間A軽石多量を含む。

59号溝

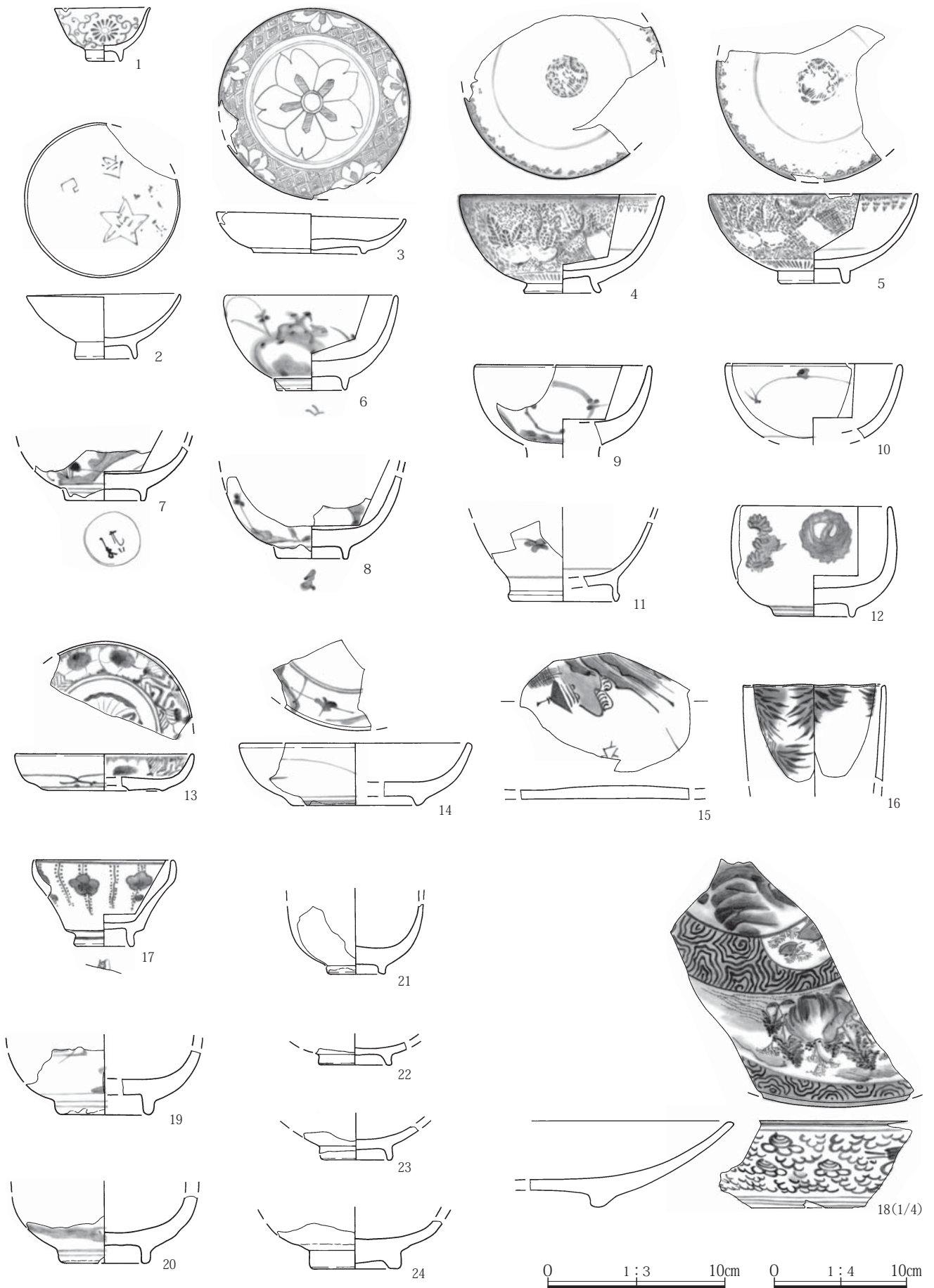
- 1 灰褐色土 浅間A軽石を層状にごく多量を含む。
- 2 灰褐色土 浅間A軽石多量を含む。
- 3 灰褐色土 ややしまる。浅間A軽石ごく多量を含む。
- 4 灰褐色土 ややしまる。浅間A軽石微量を含む。
- 5 暗褐色土 ややしまる。浅間A軽石微量を含む。
- 6 暗褐色土+灰褐色土 ややしまる。ローム小ブロック多量を含む。
- 7 暗褐色土 ややしまる。ローム小ブロック少量を含む。



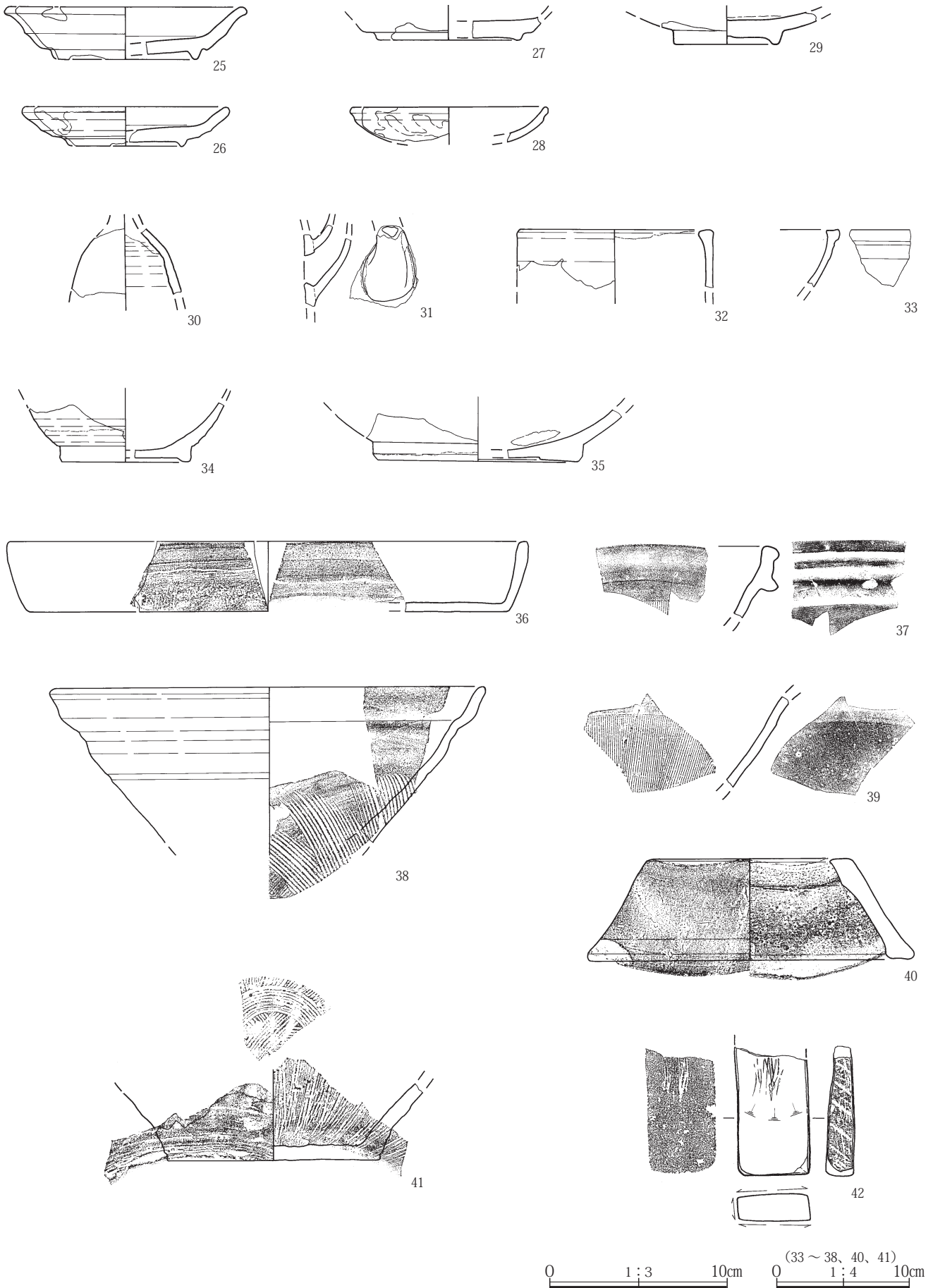
第155図 1区48・51・52・58・59号溝と59号溝出土遺物(1)



第156図 1区59号溝出土遺物(2)



第157図 1区48号溝出土遺物(1)



第158図 1区48号溝出土遺物(2)

第4章 発掘調査の記録

第84表 1区48号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第157図 PL.145	1	製作地 不詳磁 器	盃		5.3	1.8	3.0	完形		白	外面型による唐草文と菊花文。外面のみ薄藍色の釉。	近現代。
第157図	2	瀬戸・ 美濃磁 器	盃		8.6	3.4	3.7	ほぼ完 形		白	内面に金色の上絵。内面上絵はほとんど剥離するが、星マークと「記念」の文字が見える。高台内に「永井」の上絵金文字。陸軍の凱旋記念盃の可能性が高い。	近現代。
第157図 PL.145	3	製作地 不詳磁 器	小皿		10.6	6.3	2.2	ほぼ完 形		白	内面は銅板転写による菊花文。口銹。	近現代。
第157図 PL.145	4	製作地 不詳磁 器	丸碗		11.3	4.2	5.5	3/4		白	型紙摺り。外面は蕪と大根。底部内面は松竹梅文。釉は白濁し、磁化不十分。	焼成不良。近現代。
第157図	5	製作地 不詳磁 器	丸碗		(11.6)	3.8	5.0	1/2		白	型紙摺り。外面は蕪と大根。底部内面は松竹梅文。	近現代。
第157図 PL.145	6	肥前磁 器	碗		(9.5)	3.8	5.3	2/3		灰白	雪輪梅樹文。高台内に不明銘。	18世紀中頃～後半。
第157図	7	肥前磁 器	碗		-	(4.4)	-	底部		灰白	胎土は白っぽく、呉須の発色もやや良好。外面に雪輪草花文。高台内1重圏線内に「大明年製」崩れ銘。	17世紀末～18世紀中頃。波佐見系。
第157図	8	肥前磁 器	碗		-	(4.0)	-	体部～ 底部		白	胎土は白色に近く、呉須の発色も比較的良好。底部の器壁は厚い。外面に雪輪草花文。高台内に不明銘。底部内面の釉には擦れが認められる。	18世紀中頃～後半。波佐見系。
第157図	9	肥前磁 器	碗		(9.8)	-	-	1/4		灰白	底部付近の器壁厚い。外面に雪輪梅樹文。	18世紀末～19世紀前半。波佐見系。
第157図	10	肥前磁 器	碗		(9.8)	-	-	1/4		灰白	外面に梅樹文。	18世紀中頃～19世紀前半。
第157図	11	肥前磁 器	広東碗		-	(6.0)	-	底部片		灰白	底部内面周縁に1重圏線。体部外面と高台境に1重圏線。体部外面に草花文。	18世紀末～19世紀前半。波佐見系。
第157図 PL.145	12	肥前磁 器	碗		(8.5)	4.4	6.2	2/3		灰白	外面にコンニャク印判による団鶴松文。体部外面下位から高台外面にかけて3重圏線。腰は張り、口縁部に向かいやや内傾。	18世紀中頃～後半。波佐見系。
第157図 PL.145	13	肥前磁 器	小皿		(9.9)	(6.6)	2.0	1/2		白	外面は唐草文。蛇ノ目凹型高台。	18世紀中頃～後半。
第157図	14	肥前磁 器	皿		(12.8)	(7.4)	3.5	1/6		灰白	底部器壁はやや厚い。高台内に1重圏線。	18世紀中頃～19世紀初頭。波佐見系。
第157図	15	肥前磁 器	皿		-	-	-	底部片		白	底部外面にハリ支え4箇所残る。内面に海浜風景。内面の釉に擦れによる傷が目立つ。	江戸時代。
第157図	16	肥前磁 器	猪口		(8.0)	-	-	1/6		白	口縁部は小さく波状を呈する。内外面に同様の染付。口縁部の開きは小さく、筒状に近い形状。	江戸時代。
第157図	17	瀬戸・ 美濃磁 器	小碗		(8.0)	(3.4)	4.8	1/2		白	外面に銅板転写による染付。高台内に黄緑色の文様。高台端部のみ無釉。	近現代。
第157図	18	肥前磁 器	大皿		-	-	6.5	破片		白	内面に人造呉須による海浜・海中風景を密に描く。海草と山か岩の一部に緑色、樹木の花？に赤褐色を用いる。	近現代。
第157図	19	肥前陶 器	碗		-	(5.0)	-	1/4～ 1/3		灰	陶胎染付。呉須はやや薄い。高台内面の削りは深い。	17世紀末～18世紀中頃。
第157図	20	肥前陶 器	碗		-	(5.0)	-	1/4		灰白	陶胎染付。染付はやや不鮮明。	17世紀末～19世紀中頃。
第157図	21	肥前陶 器	小碗		-	3.0	-	体部1 部、底 部完		灰白	残存部は無文。高台端部は無釉で赤褐色に発色。	江戸時代。波佐見系。
第157図	22	瀬戸陶 器	腰鑄碗		-	4.0	-	底部		灰白	高台径小さく幅も狭い。外面は鉄釉、内面は貫入が入る灰釉。	登窯9小期。
第157図	23	美濃陶 器	小碗		-	(4.0)	-	底部		灰白	内面から高台外面付近に灰釉。粗い貫入が入る。	登窯8小期。
第157図	24	美濃陶 器	丸碗		-	5.0	-	底部		淡黄	径はやや小さく幅広の高台。内面から高台脇に鉛釉。	登窯7小期。
第158図	25	美濃陶 器	反皿		(12.0)	(8.0)	2.9	1/4		灰白	口縁部は外反。口縁部外面以下は回転篋削り。高台脇は削り込む。内面から高台内面に灰釉。底部内面に高台の重焼痕。	登窯4小期。
第158図	26	瀬戸陶 器	志野丸 皿		(11.2)	(6.3)	2.1	1/4		褐灰	高台やや高い。内面から高台内側に長石釉。口縁端部外面に小さな剥離多く、その部分に油煙付着。	登窯2小期。灯火皿として利用。
第158図	27	瀬戸陶 器	反皿		-	(8.0)	-	1/4		灰白	高台脇を削り込む。内面から高台内側に灰釉。	登窯3・4小期。
第158図	28	美濃陶 器	灯火皿		(10.7)	-	-	1/3		灰白	外面は口縁部以下回転篋削り。内面から体部外面に鏽釉。	近世、美濃8・9
第158図	29	肥前陶 器	皿		-	5.8	-	底部		灰白	内面に青緑釉。底部内面蛇ノ目釉剥ぎ。	17世紀末～18世紀前半。内野山諸窯。
第158図	30	美濃陶 器	徳利		-	-	-	肩部片		浅黄	肩部はなで肩。外面に灰釉。	登窯8～11小期。
第158図	31	美濃陶 器	汁次		-	-	-	注口部		浅黄	内外面に鉛釉。注ぎ口上部に銅緑釉。	登窯5・6小期。



第2節 1区の遺構と遺物

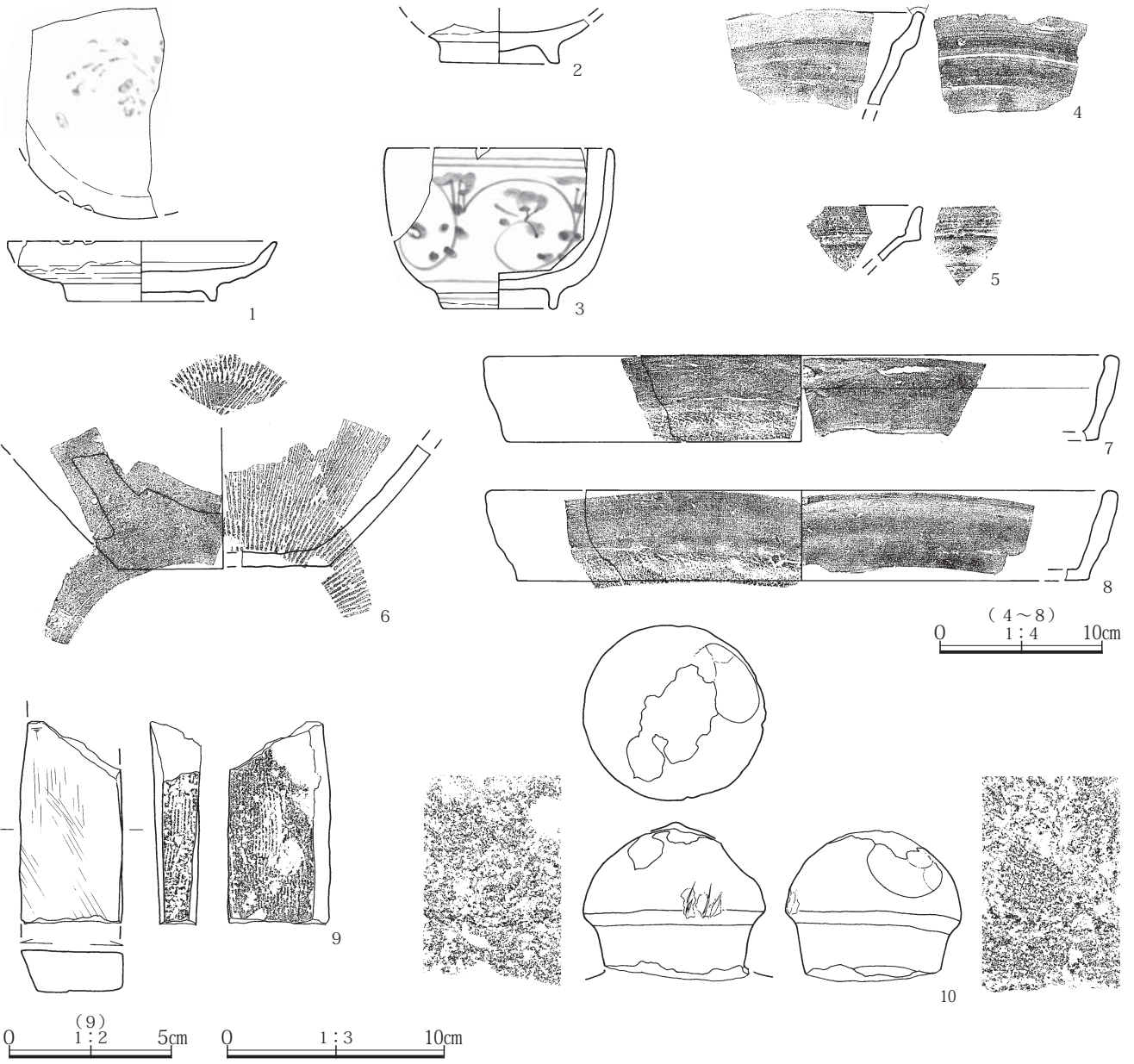
挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第158図	32	美濃陶器	筒形香炉		(10.8)	-	-	1/4		浅黄	口縁部内面から外面に鉛釉。	登窯6小期。
第158図	33	美濃陶器	片口		-	-	-	口縁部片		浅黄	内外面に鉛釉か。釉は白濁する。口縁部上面はやや窪む。	登窯8小期。
第158図 PL.145	34	美濃陶器	片口鉢		-	(9.5)	-	1/2		浅黄橙	内面から高台脇に鉛釉。底部内面に目痕1箇所。	登窯7・8小期。
第158図	35	安中焼陶器	練鉢		-	(15.0)	-	1/4		灰黄・浅黄	内面から高台外面に灰釉。高台外面下半から底部外面は無釉。底部内面に直径3.5cm以上の団子状目痕。	近現代。益子・笠間系か
第158図	36	在地系土器	焙烙		(38.8)	(36.0)	6.3	1/8		淡黄	断面はにぶい黄橙色。外面中位に接合痕。体部外面下半に皺状亀裂。	江戸時代。
第158図	37	益子・笠間陶器	すり鉢		-	-	-	口縁部片		灰黄	口縁部は縁帯をなす。口縁部内面から外面に柿釉。	近現代。
第158図	38	瀬戸陶器	すり鉢		(31.8)	-	-	口縁部片		浅黄	口縁部は波打つように屈曲。内外面に薄い錆釉。	登窯7小期。
第158図 PL.145	39	益子・笠間陶器	すり鉢		-	-	-	体部片		灰黄	口縁部内面から外面に柿釉。体部内面は無釉。	近現代。
第158図 PL.145	40	在地系土器	不詳		(11.4)	(18.0)	5.6	1/3		にぶい黄橙	上下不明。図示した上部内面は篋削り痕。	近現代か。
第158図	41	丹波陶器	すり鉢		-	(15.8)	-	1/4		灰黄	体部外面に指頭圧痕の窪み廻る。体部外面下端に板状工具による撫で。	江戸時代。
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況		備考	
第158図 PL.145	42	砥石		切り砥石	砥沢石	(7.2)	4.2	73.4	四面使用。背面側に縦位の刃ならし傷。			

第85表 1区51号溝出土遺物

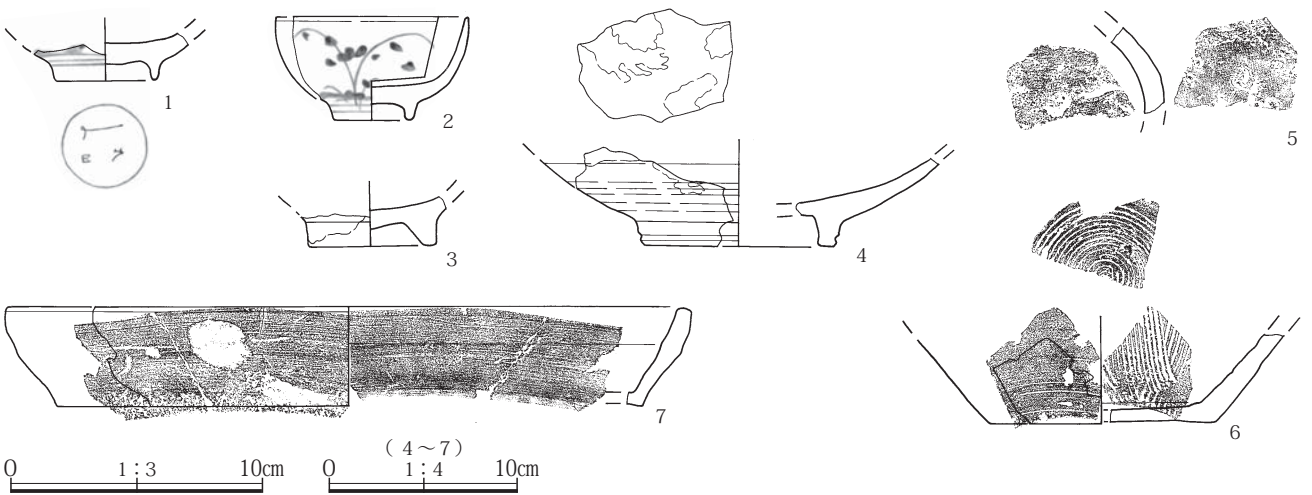
挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第159図 PL.145	1	美濃陶器	摺絵皿		(12.2)	6.6	2.7	1/2		灰白	底部内面鉄絵具による摺絵。文様はやや不鮮明。内面から口縁部外面に灰釉。	登窯6小期。
第159図	2	瀬戸陶器	丸碗		-	5.4	-	底部		灰白	高台外面は僅かに湾曲し、内面は「ハ」字状に開く。高台中央は兜巾状に削り残す。内面から高台脇に灰釉。粗い貫入が入る。	登窯2小期。
第159図 PL.145	3	肥前陶器	碗		(10.4)	5.0	7.3	口縁1/4 底部1/2		灰	陶胎染付。外面に唐草文。体部下位は張る。	17世紀末～ 18世紀中頃。
第159図	4	瀬戸陶器	すり鉢		-	-	-	口縁部片		浅黄橙	内外面に錆釉。口縁下部は屈曲し口縁部は内湾。口縁部は使用による摩滅。	登窯6小期。
第159図	5	丹波陶器か	すり鉢		-	-	-	口縁部片		褐	口縁部は屈曲して立ち上がる。口縁部は縁帯をなし、下部外面は突き出る。内面から口縁部外面に鉄泥。	17世紀後半～ 18世紀中頃。
第159図	6	堺・明石陶器	すり鉢		-	(13.0)	-	1/4		にぶい赤褐	外面回転篋削り後撫で。	江戸時代。
第159図	7	在地系土器	焙烙		(38.4)	(36.0)	5.2	1/16	B	黒	断面中央は黒色、器表付近は灰白色、器表は黒色。外面中央部に接合痕、接合痕以下は皺状亀裂。	江戸時代。
第159図	8	在地系土器	焙烙		(38.4)	(35.0)	5.3	1/10	B	黒	断面中央は黒色、器表付近は灰白色、器表は黒色。外面中央下部に接合痕、接合痕以下は皺状亀裂。	江戸時代。
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況		備考	
第159図 PL.145	9	砥石		切り砥石	砥沢石	(6.2)	3.2	38.3	背面側を除く各面に櫛歯タガネ状痕が残る。			
第159図 PL.145	10	宝篋印塔		宝珠	粗粒輝石安山岩	高さ (7.1)	(8.3)	346.7	宝珠先端を被熱破損後、体部右辺を浅く面取り。括れ部は丁寧な磨き整形。			

第86表 1区58号溝出土遺物

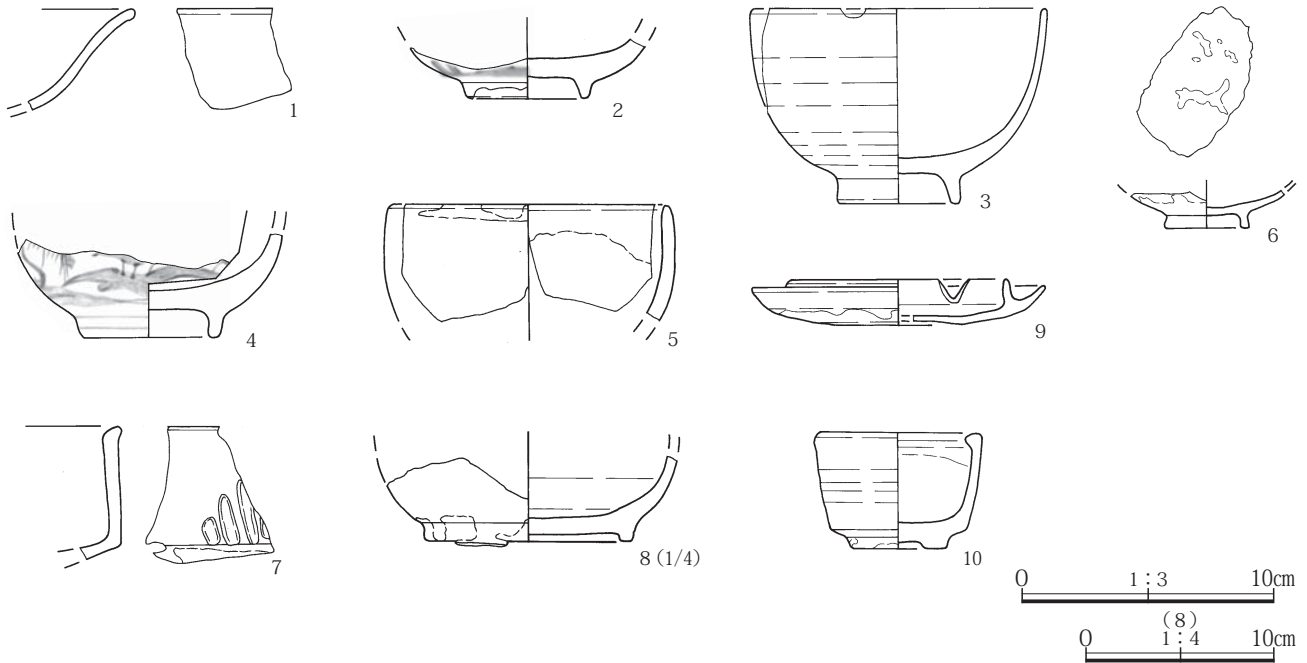
挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第160図	1	肥前磁器	碗		-	4.0	-	底部		灰白	高台内1重圏線内に「大明年製」崩れ銘か。胎土は白色に近い。	17世紀末～ 18世紀中頃。 波佐見系。
第160図 PL.145	2	肥前磁器	碗		(7.6)	3.1	4.0	1/2		灰白	外面に草花文。	17世紀末～ 18世紀中頃。 波佐見系。
第160図	3	美濃陶器	尾呂茶碗		-	5.0	-	底部		灰白	内面から高台外面にオリーブ色の鉛釉。高台内面は「ハ」字状に開く。	登窯6小期。
第160図	4	肥前陶器	鉢		-	(10.0)	-	1/6		暗赤褐	内面に透明釉。1部に鉄釉。体部外面下位に鉄泥。	江戸時代。
第160図	5	常滑陶器	糞か		-	-	-	肩部片		灰オリーブ	肩部上面に自然釉かかる。	中世。
第160図	6	瀬戸陶器	すり鉢		-	(12.0)	-	1/4		灰白	底部回転糸切無調整。内外面に錆釉。	江戸時代。
第160図	7	在地系土器	焙烙		(35.8)	(30.8)	5.2	1/10	B	黒	断面は灰白色、内面器表は灰色、外面器表は黒色。外面下端に皺状亀裂。	江戸時代。



第159図 1区51号溝出土遺物



第160図 1区58号溝出土遺物



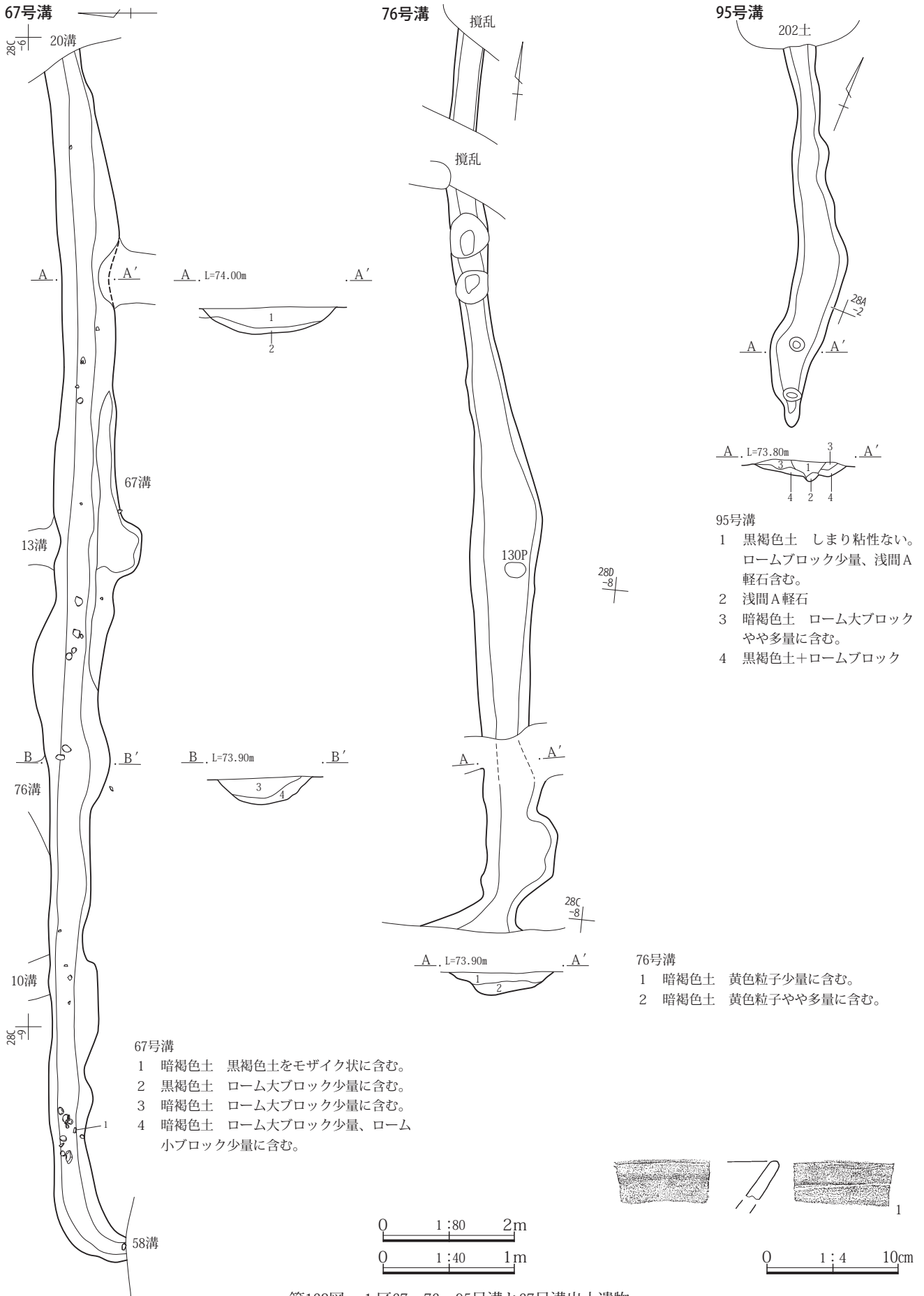
第161図 1区52号溝出土遺物

第87表 1区52号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第161図	1	肥前陶器	皿		-	-	-	口縁部片		灰白	口縁部は外反。内外面に透明釉。胎土、釉調は呉器手碗と同じ。	江戸時代。
第161図	2	肥前陶器	陶胎染付碗	+15cm	-	4.8	-	底部		灰黄	器表は黄色味を帯び、焼成不良。外面染付。	18世紀前半
第161図 PL.145	3	肥前陶器	呉器手碗		(11.5)	4.6	7.6	口縁1部 底部完		にぶい 黄橙	高台径は小さく、高台内の挟りはやや深い。高台端部を除く内外面に透明釉。細かい貫入が入る。	17世紀後半～ 18世紀初頭。
第161図 PL.145	4	肥前陶器	碗		-	5.1	-	底部		灰	陶胎染付。外面に東屋山水文。体部下位は張らない。	17世紀末～ 18世紀中頃。
第161図	5	美濃陶器	尾呂茶碗		(10.8)	-	-	口縁部片		灰白	内外面に鉛釉。口縁部内外面に黄灰釉。	登窯5・6小期。
第161図	6	瀬戸陶器	丸碗	+12cm	-	3.3	-	底部		灰白	内面から高台脇に鉄釉。底部内面に釉切れあり。	登窯8・9小期。
第161図	7	美濃陶器	筒形香炉		-	-	-	口縁部片		淡黄	口縁部内面から体部外面に鉛釉。体部外面下位に丸鑿による施文。	登窯6小期。
第161図 PL.145	8	美濃陶器	片口鉢	+12cm	-	11.0	-	底部		灰白	体部外面から高台外面に鉛釉。高台外面から高台内は無釉。内面は鉛釉が薄くかかる。	登窯5・6小期。
第161図 PL.145	9	美濃陶器	灯火受け皿	底直	(11.5)	(5.0)	1.7	1/3		灰	受け部「U」字状に挟る。内面から口縁部外面に錆釉。	登窯8小期。
第161図 PL.145	10	肥前磁器	青磁香炉か火入	底直	(6.4)	3.7	4.5	1/2		灰	十分磁化していない。釉は白濁し焼成不良。口縁部は内面に突き出る。口縁部内面から高台外面に施釉。露胎部はにぶい赤褐色。	江戸時代。
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況		備考	
-	11	板碑片?		体部破片	緑色片岩	(14.9)	(7.2)	282.1	厚さ2.0cm。		非実測	
-	12	板碑片?		体部破片	緑色片岩	(11.8)	(8.0)	417.8	厚さ3.0cm。大型の板碑破片。		非実測	
-	13	板碑片		基部破片?	緑色片岩	(14.0)	(12.8)	715.3	厚さ2.2cm。裏面側に逆台形状の側縁が残る。		非実測	
-	14	板碑片		体部破片	緑色片岩	(19.8)	(8.5)	448.1	厚さ2.2cm。裏面側には礫面が残り、周辺は研磨され、再利用されている。		非実測	
-	15	板碑片		体部破片	緑色片岩	(12.2)	(11.1)	506.6	厚さ1.7cm。極めて浅い梵字の一部が残る。		非実測	

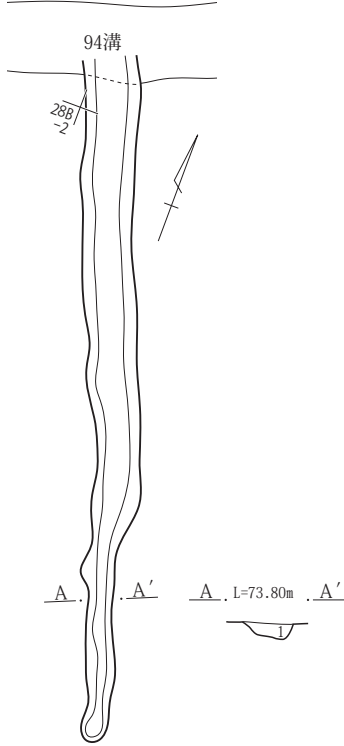
第88表 1区67号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第162図	1	在地系土器	焙烙か	+11cm	-	-	-	口縁部片	B	暗灰	断面はにぶい黄褐色、器表は暗灰色。器壁やや厚く、口縁端部は丸みを持つ。	江戸時代か。



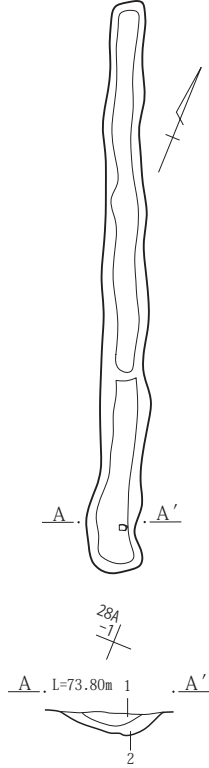
第162図 1区67・76・95号溝と67号溝出土遺物

96号溝



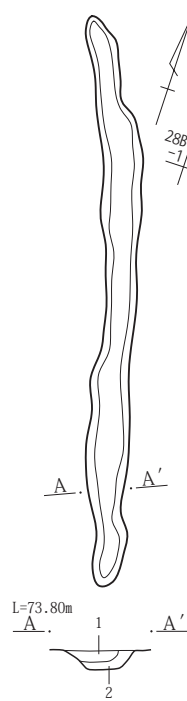
96号溝  
1 黒褐色砂質土 浅間A軽石含む。

97号溝

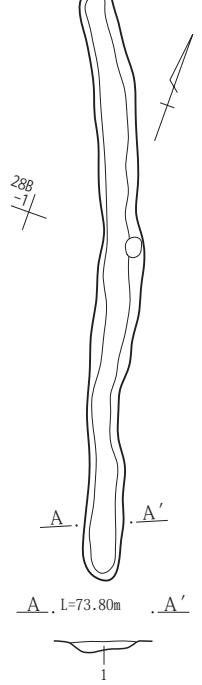


97・98号溝  
1 黒褐色土 浅間A軽石含む。  
2 黒褐色土 ロームブロック多量に含む。

98号溝



99号溝



99号溝  
1 黒褐色土 ロームブロック多量に含む。

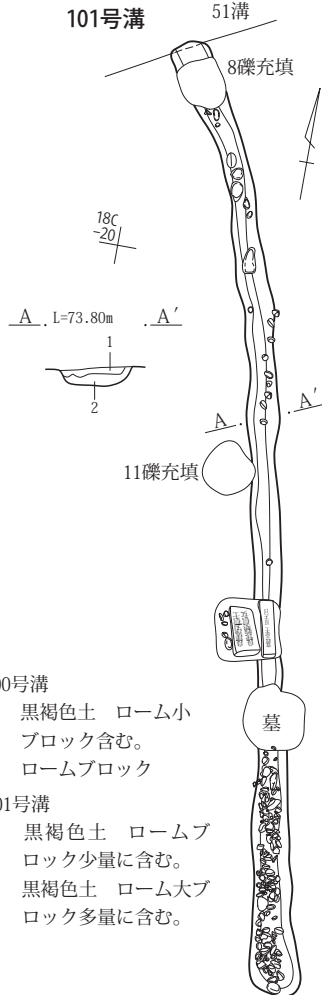
100号溝



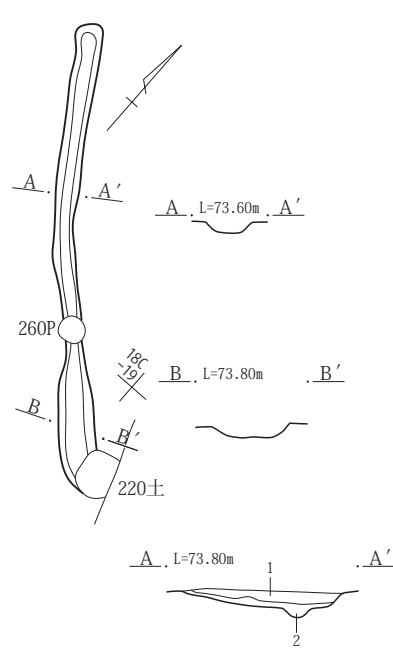
100号溝  
1 黒褐色土 ローム小ブロック含む。  
2 ロームブロック

101号溝  
1 黒褐色土 ロームブロック少量に含む。  
2 黒褐色土 ローム大ブロック多量に含む。

101号溝

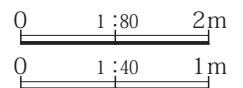
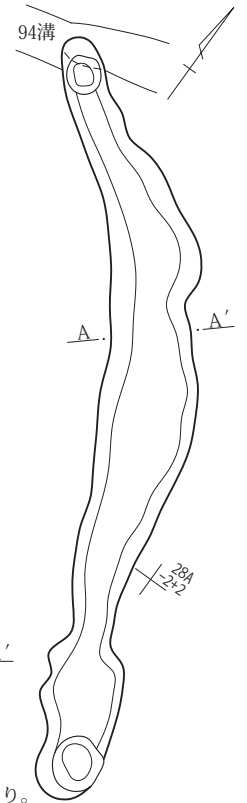


102号溝



103号溝  
1 黒褐色土 しまり粘性あり。ロームブロック含む。  
2 黒褐色土+ロームブロック

103号溝



第163図 1区96～103号溝

## 11 復旧溝群・灰掻き穴

調査区の4か所に分散して、復旧溝群が検出された。なお、2号復旧溝群は調査途中で1号溝と名称変更し、欠番となった。溝群は形態として畝間に近く、図面上では畝跡と区別できないが、埋没土は純粋な白色軽石(As-A)ではなく、ブロック状に暗褐色土が混じり、全体に汚れた観がある。また、縦断面では地山面が波打っており、小規模な掘削痕の連続と判明する。白色軽石(As-A)を除去しても底面の判別が難しいため、平面確認により図化を行った。状況として天地返し的一种であろう。

灰掻き穴は調査区北西部に位置する。円形・溝状と形態は一定しないが、概して浅いため、破棄土坑として掘られたものではなく、天地返し作業がやや大きくなったものと考えられる。なお、南西部の87号土坑は灰掻き穴に転用され、白色軽石(As-A)により埋められている。

### 1号復旧溝群(第164図、P L .62)

**位置** 28E・F-9~11グリッド。東西9.2m南北6.8mの範囲で確認された。白色軽石(As-A)とV層暗褐色土で天地返しを行ったサク跡とみられる。中央を境に、南北軸を採る東溝群と、東西軸を採る西溝群に分かれる。東溝群は6条で、走向方位はN-15°-W。規模は最大長4.0m幅31cmである。西溝群は9条で、走向方位はN-88°-E。規模は最大長4.6m幅32cmである。断面形はU字形。底面の観察は行っていない。遺物は出土していない。

### 3号復旧溝群(第164図、P L .62)

**位置** 28B・C-7グリッド。東西0.65m南北6.20mの範囲で確認された。白色軽石(As-A)とV層暗褐色土で天地返しを行ったサク跡とみられる。南北軸を採る2条で、走向方位はN-3°-W。規模は最大長6.2m幅22cmである。断面形はU字形。底面の観察は行っていない。遺物は出土していない。

### 4号復旧溝群(第164図、P L .62)

**位置** 27P・Q-6・7グリッド。東西9.2m南北7.1mの範囲で確認された。43号溝より前出以外、周辺の土坑・溝より後出して被覆する。白色軽石(As-A)とV層暗褐色土で天地返しを行ったサク跡とみられる。東西軸を採る24条で、走向方位はN-76°-E。規模は最大長8.96m幅23cmである。断面形はU字形。底面の観察は行っていない。遺物は中世在地系土器1片、近世国産陶器2片

が出土している。

### 5号復旧溝群(第165図、P L .62)

**位置** 17R-19・20グリッド。東西7m南北3.2mの範囲で確認された。白色軽石(As-A)とV層暗褐色土で天地返しを行ったサク跡とみられる。東西軸を採る9条で、走向方位はN-73°-E。規模は最大長6.86m幅22cmである。断面・底面の観察は行っていない。遺物は出土していない。

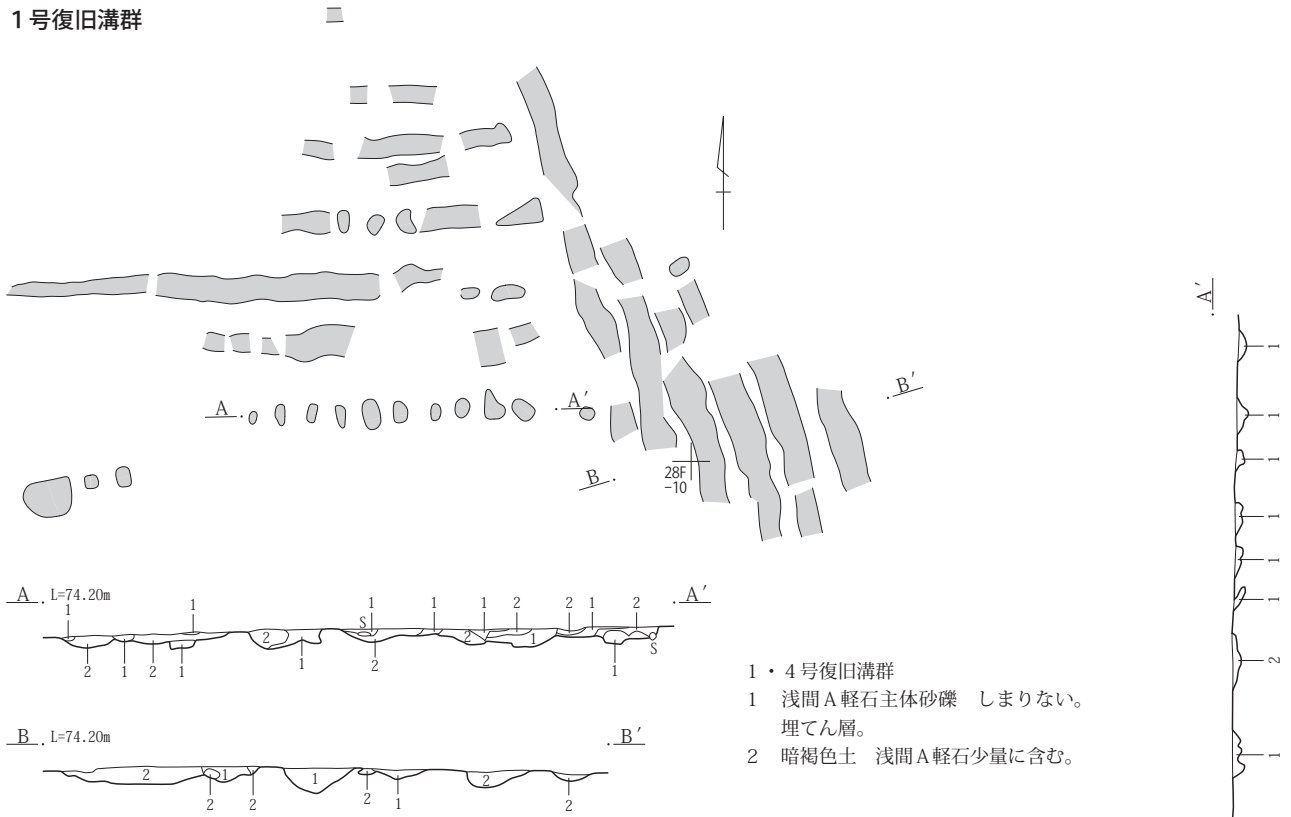
### 1・2号灰掻き穴(第166図、P L .62)

**位置** 28F-9グリッド。1号復旧溝群の北東に接し、一連の遺構である。1号の平面形はほぼ円形で、2号の平面形はほぼ長方形である。断面形はともに皿状。底面はともにほぼ平坦。埋没土は白色軽石(As-A)が大部分を占めており、軽石を処理した「灰掻き穴」とみられる。1号の規模は長径173cm短径156cm深さ15cm、2号の規模は長軸105cm短軸46cm深さ18cmである。深さも浅いため、復旧溝で対応できなかった軽石を、土坑で処理したと想像される。遺物は出土していない。

### 3号灰掻き穴(第166図)

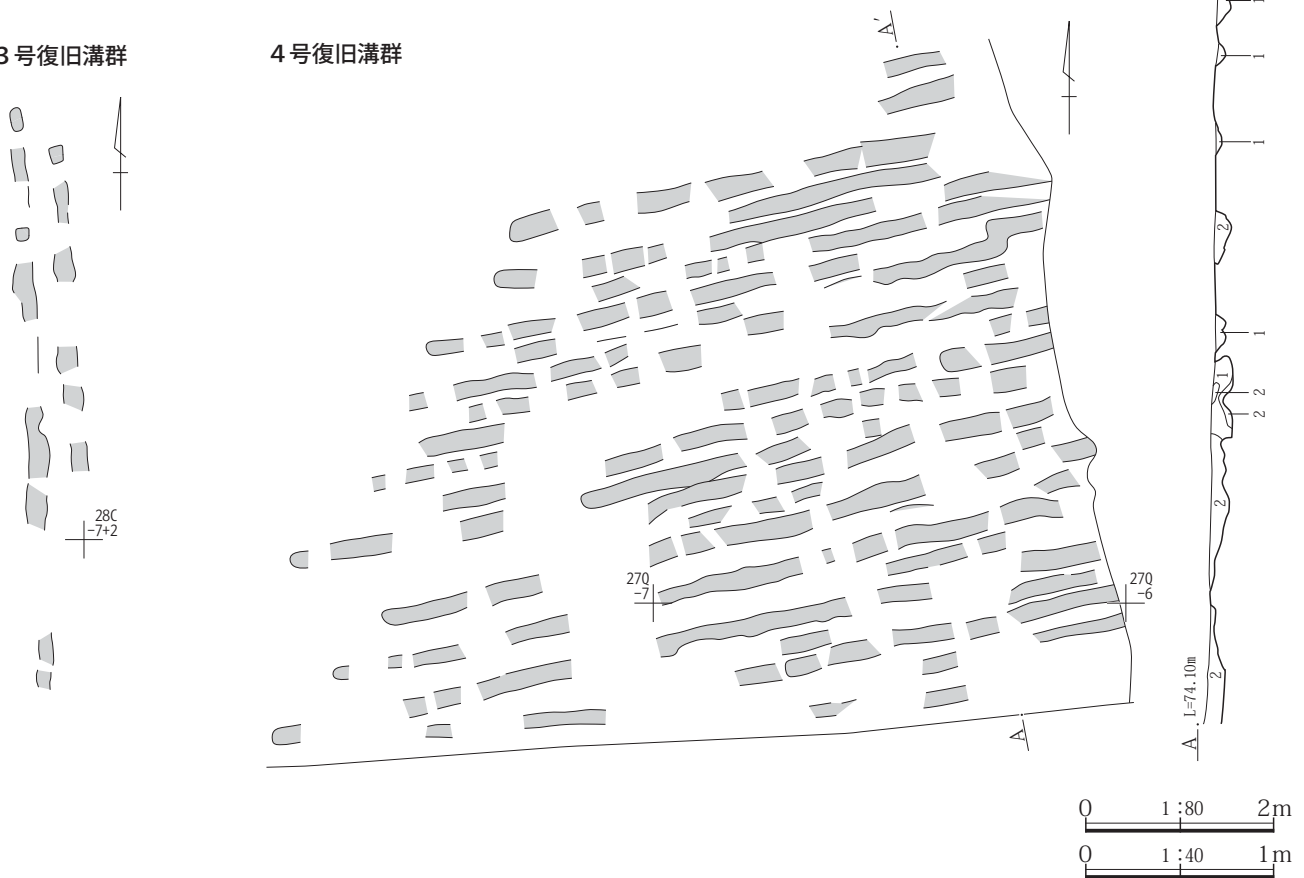
**位置** 28E-11グリッド。1号復旧溝群の西に接し、一連の遺構である。平面形は溝状。断面はほぼ皿状。底面は二つに分かれ丸みを持つ。埋没土は白色軽石(As-A)が大部分を占めており、軽石を処理した「灰掻き穴」とされる。規模は長軸190cm短軸46cm深さ20cmである。遺物は土師器杯椀類2片・壺甕類9片、須恵器杯椀類3片が出土するが混入とみられる。

1号復旧溝群

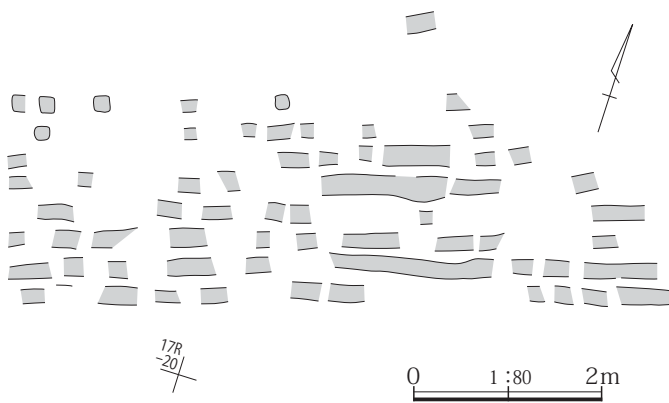


3号復旧溝群

4号復旧溝群

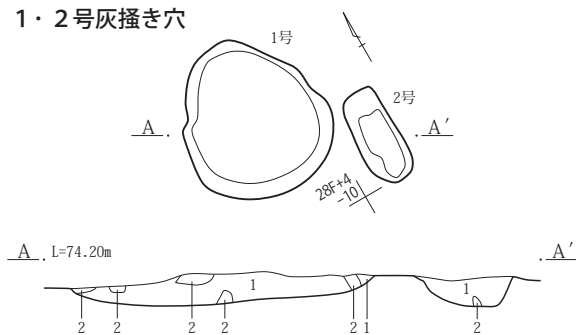


第164図 1区1・3・4号復旧溝群

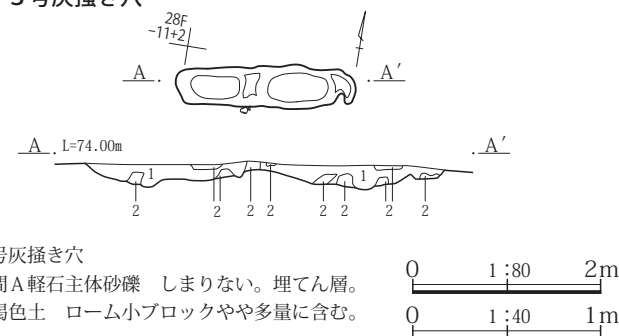


第165図 1区5号復旧溝群

1・2号灰掻き穴

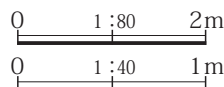


3号灰掻き穴



1～3号灰掻き穴

- 1 浅間A 軽石主体砂礫 しまりない。埋てん層。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量を含む。



第166図 1区1・2・3号灰掻き穴

12 道路・溝

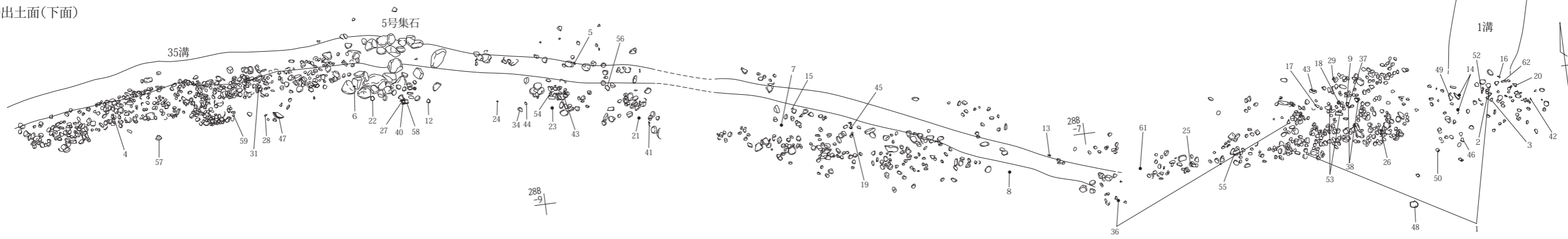
1号道路・35号溝(第167～170図、P L.62・145・146、第89・90表)

1号道路 位置 28A・B-6～10グリッド。48・58・59号溝より後出し、それらの外側輪郭線と重なる。おそらく、溝群は境界として機能しており、その位置を踏襲する形で道路へと変化し、境界認識は受け継がれたものとする。35号溝は、道路面に造られた施設の付設溝と思われる後出である。東端は1号溝と接して不明となる。西端は調査区域外へ延びる。平面形は緩く蛇行する。1'盛土直下で平面的に第1路面を検出した。道路幅は約2mあり、いわゆる「6尺道」の規模である。南半部は硬化路面となっている。硬化路面の規模は長さ22m幅約105cmである。走向方位はN-76°-W～N-90°。外形は下位に埋没する48号溝に重なる部分が多く、その埋没土の上面が硬化する。一部でロームを充填して路面を作る。西端土層断面で白色軽石(As-A)に被覆された第2

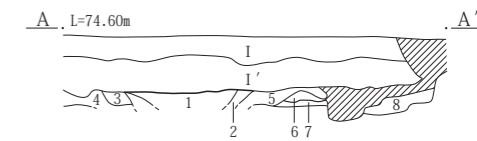
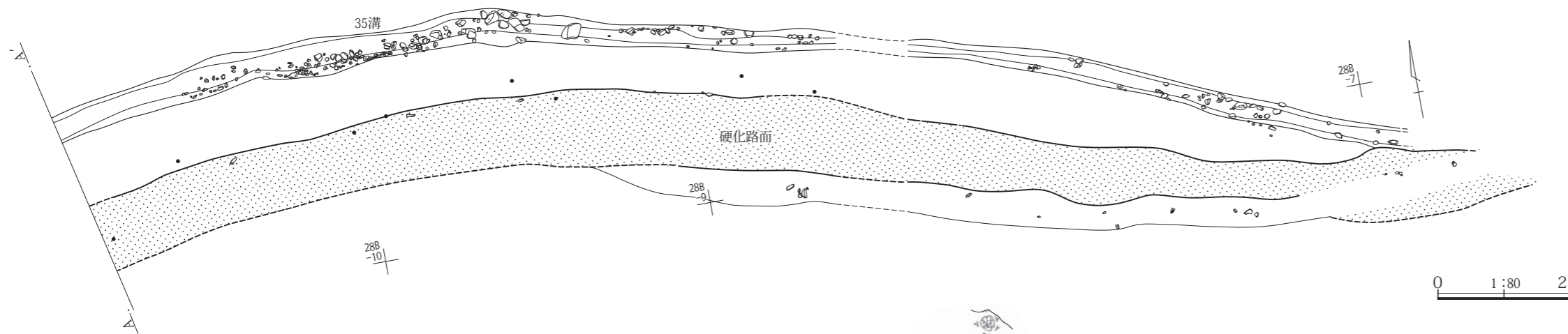
路面を確認したが、平面的には検出できなかった。第2路面は48号溝より前出であるため、48号溝は1号道路と並走し、一時的に側溝として機能していたと推測できる。硬化路面の北側を掘り下げると、遺物を多く含む中小円礫群が出土した。層位的には第2路面の下位となり、一部は下位に埋没する58号溝と重なるが、全体としてその幅に収まらず、48・58号溝の間にも及ぶ。58号溝埋没土の上位に第2路面を構築する灰褐色シルト質土があり、円礫群は更に上層を覆って48号溝の外形線まで及ぶ。こうした状況から、円礫群は第2路面自体を構築した礫混土であったとみなされる。また、この礫群に混じって、5号集石が確認されたが、48号溝の南北壁面に一致するため、48号溝段階の遺構として、本遺構とは切り離される。出土した陶磁器は17世紀末頃から近現代に及ぶが、多くは第2路面を構築する礫混土から出土する。掲載遺物のほか、土師器杯椀類21片・壺甕類61片、須恵器杯椀類23片・壺甕類14片、埴輪4片、中世国産陶器4片・在



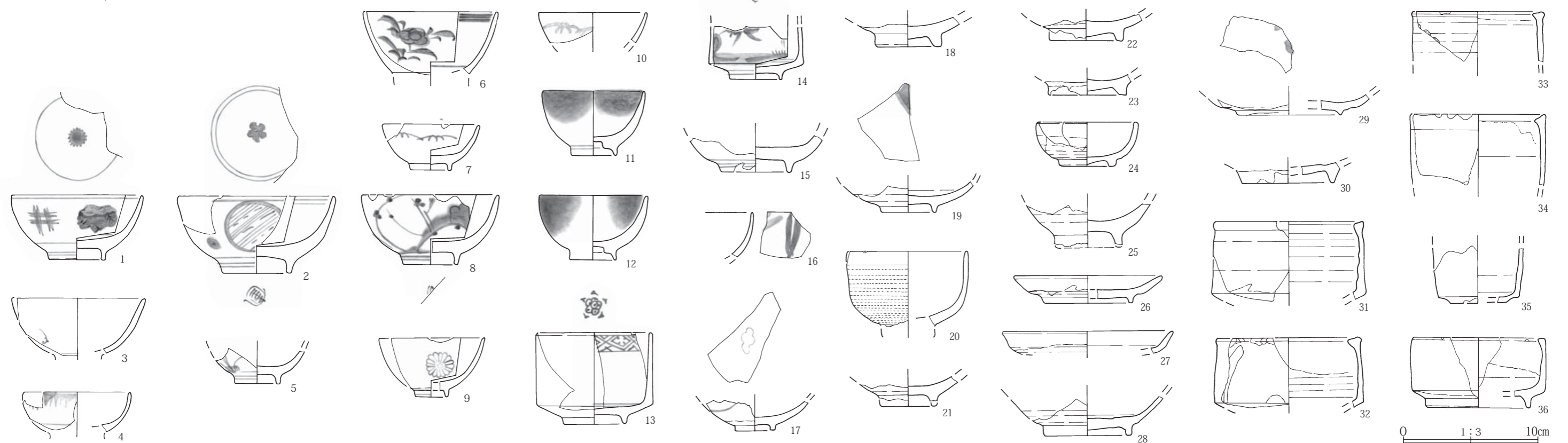
礫出土面(下面)



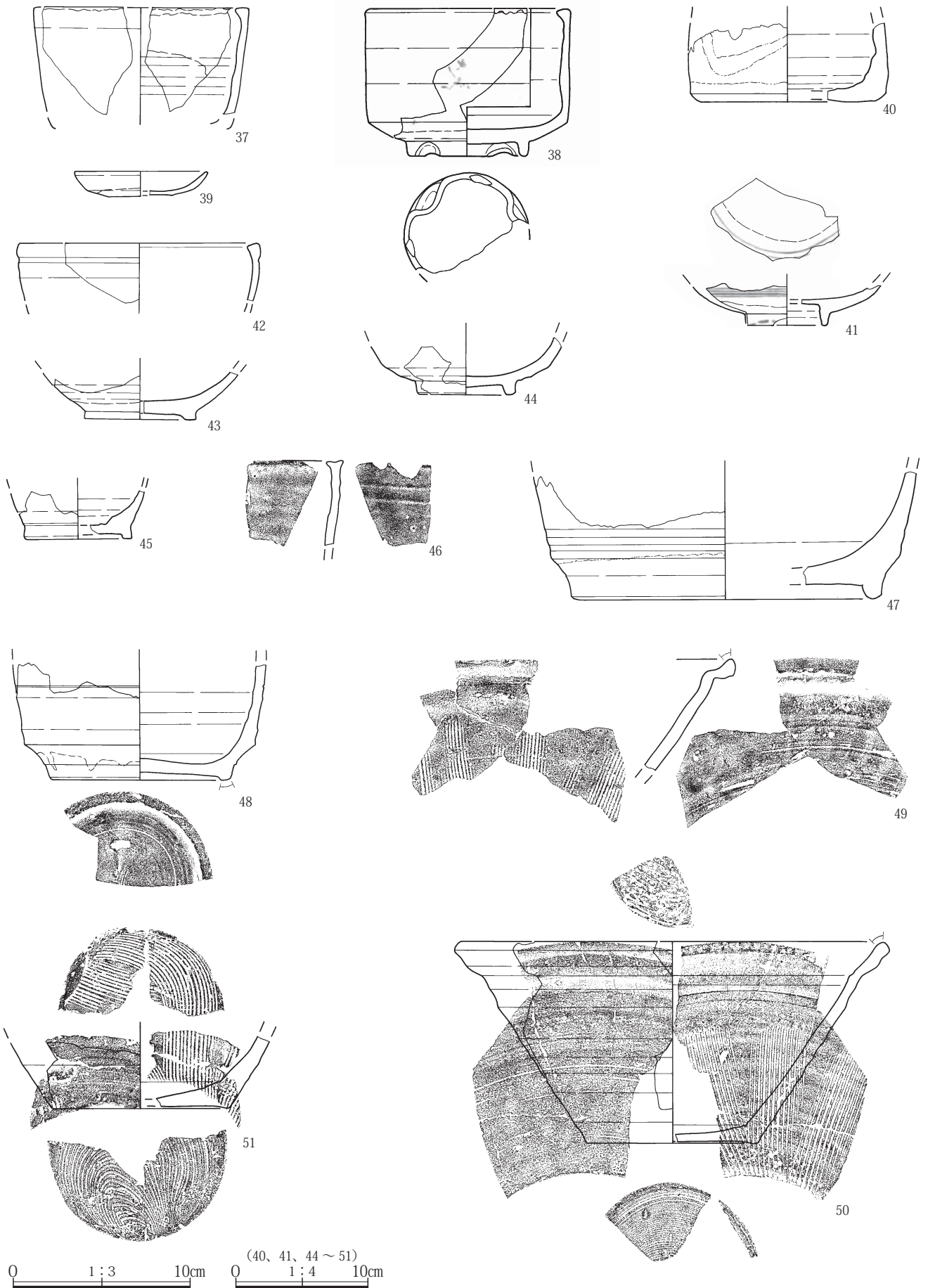
使用面



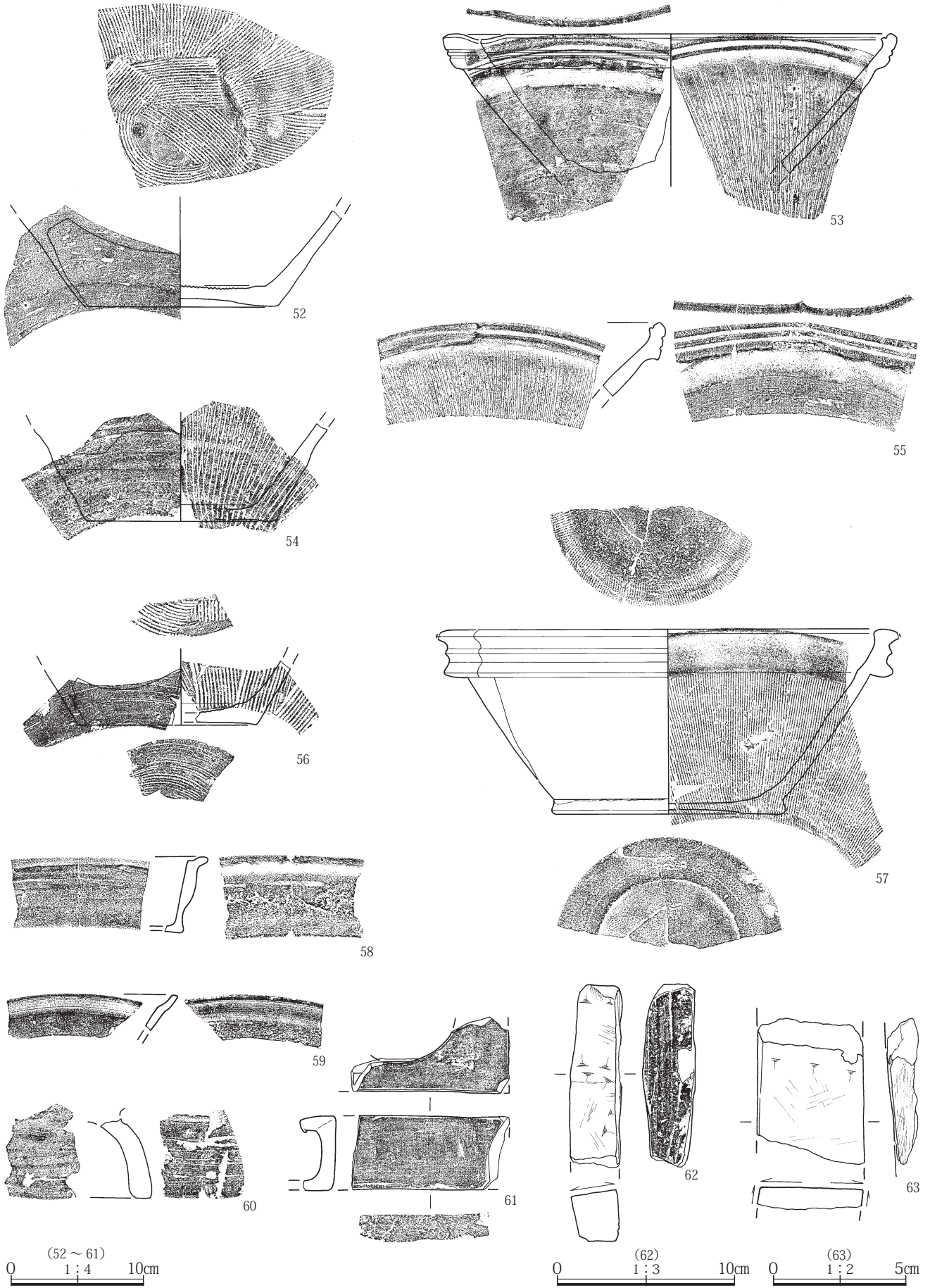
- 1 暗褐色砂質土 浅間A軽石少量。近現代ゴミを含む。上面路面。
- 2 灰褐色シルト質土 炭化物粒子少量を含む。
- 3 灰褐色土 しまる。炭化物粒子微量を含む。路面。
- 4 灰褐色土 浅間A軽石少量を含む。
- 5 灰褐色砂質土 中礫やや多量、ローム小ブロックやや多量を含む。
- 6 灰黄色砂礫 浅間A軽石主体。二次堆積。
- 7 灰褐色粘質土 しまる。第2路面。
- 8 黒褐色砂質土 浅間A軽石やや多量を含む。



第167図 1区1号道路と出土遺物(1)



第168図 1区1号道路出土遺物(2)



第169図 1区1号道路出土遺物(3)

地系土器6片、近世国産陶磁器211片・在地系土器44片、近現代その他土器類55片、砥石1点、敲石1点が出土している。第1路面は近現代までわたるが、第2路面は浅間A軽石降下以前であり、出土遺物から17世紀末頃から18世紀末頃に機能したものと考えられる。

35号溝 位置 28A・B-6～10グリッド。1号道路に付設された攪乱溝であろうが、遺物を多量に含むため、側溝の可能性も含めて遺構として取り上げる。48号溝、1号道路第2路面より後出で、状況から第1路面よりも後出であろう。西端は調査区域外へ延びる。平面形は

南に弦を持つ弓状。走向方位はN-86°-E～N-73°-W。断面形は逆台形。底面は平坦。両端の比高差は5cmで勾配はほとんどない。埋没土は黒褐色土を主体とする攪乱土。陶磁器は17世紀中頃から近現代に及ぶ。掲載遺物のほか、土師器杯椀類1片・壺甕類5片、須恵器杯椀類4片・壺甕類17片、埴輪4片、中世在地系土器3片、近世国産陶磁器32片・在地系土器9片、近現代その他遺物67片、切り砥石1点が出土している。規模は長さ20.40m上端幅11～30cm最大深33cmである。

第89表 1区1号道路出土遺物

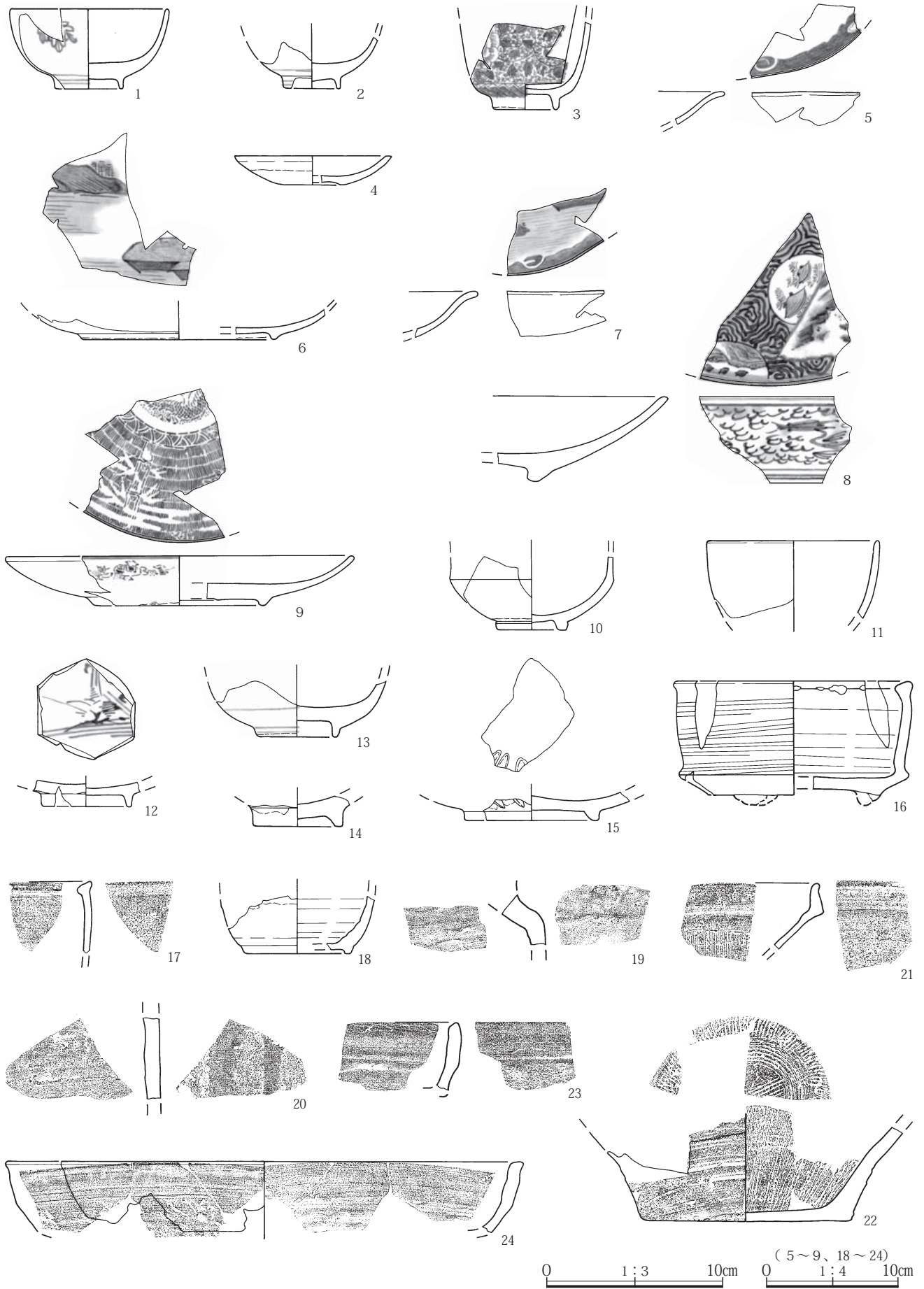
挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第167図 PL.145	1	肥前磁器	碗		9.7	4.1	4.8	2/3		白	器壁はやや厚い。外面に手描きの井桁状文とコンニャク印判による桐状文を一对で3方に描く。高台の平面形やや歪む。口縁部内面に1重圏線。底部内面は1重圏線内にコンニャク印判による文様。	18世紀後半～19世紀初頭。波佐見系。
第167図 PL.145	2	肥前磁器	碗		(11.5)	5.0	5.7	口縁1部 底部完		灰白	外面に丸文。高台内に不明銘。口縁部内面は2重圏線。底部内面は2重圏線内にコンニャク印判による五弁花。	18世紀中頃～後半。
第167図	3	肥前磁器	碗		(9.8)	-	-	1/5		灰白	外面に染付。貫入が入り、素地の磁化も不十分。焼成不良。器壁はやや厚い。	江戸時代。
第167図	4	肥前磁器	仏飯具か		(7.8)	-	-	口縁部片		灰白	型紙による雨降文。体部下位に1重圏線。	18世紀前半。
第167図	5	肥前磁器	碗		-	3.4	-	底部		灰白	外面は草花文の染付か。	17世紀末～18世紀。
第167図	6	肥前磁器	広東碗		(9.8)	-	-	口縁部片		灰白	外面に草花文。口縁部内面に複数が接する帯状の圏線。底部内面周縁に1条の圏線。	18世紀末～19世紀前半。
第167図 PL.145	7	肥前磁器	小碗		(7.1)	2.9	3.3	口縁 1/4底部完		灰白	外面に笹文。高台径は小さい。	江戸時代。
第167図	8	肥前磁器	碗		(10.0)	(4.0)	5.1	1/2		灰白	胎土は灰色で呉須の発色は不良。外面に雪輪梅樹文。高台内に不明銘。	18世紀中頃～後半。波佐見系。
第167図	9	製作地不詳磁器	小碗		(7.8)	(2.4)	4.3	1/4		灰白	釉は白濁し、素地の磁化も不十分。焼成不良。外面コンニャク印判による菊花状文。	江戸時代。
第167図	10	製作地不詳磁器	小碗		(7.9)	-	-	1/3		にぶい 黄褐	素地の磁化不十分で釉も白濁。焼成不良。外面に笹文。	江戸時代。
第167図	11	瀬戸・美濃磁器	小碗		(7.5)	(3.4)	4.7	1/2		白	内外面クローム青磁。高台内は無釉。口縁部内外面に呉須の吹き墨。高台外面に2重圏線。	近現代。
第167図	12	瀬戸・美濃磁器	小碗		(8.0)	(3.4)	4.7	1/2		白	口鏑。内外面はクローム青磁で呉須による吹き墨。高台外面は透明釉。高台端部から高台内は無釉。	近現代。
第167図	13	肥前磁器	筒形碗		(8.4)	4.5	6.7	口縁1部 底部完		灰白	青磁染付。口縁部内面に簡略化した四方禰、底部内面2重圏線内に五弁花。	18世紀中頃～後半。
第167図	14	肥前磁器	筒形碗		-	3.7	-	1/2		白	体部外面は雪持ちの竹か。底部内面は2重圏線内に簡略化した五弁花。	18世紀後半～19世紀初頭。
第167図	15	肥前陶器	碗		-	5.0	-	底部		灰	陶胎染付。体部外面下位に1重圏線。高台外面に2重圏線。貫入が入る。	17世紀末～18世紀中頃。
第167図	16	京・信楽系陶器か	色絵碗		-	-	-	口縁部片		灰白	内外面に透明釉。細かい貫入が入る。外面に赤と黄緑の色絵。	18世紀中頃～後半。
第167図	17	京・信楽系陶器か	皿か		-	(3.0)	-	体下位～底部		灰白	高台の削りはシャープ。内面から高台外面に透明釉。非常に細かい貫入が入る。外面に暗赤褐色の上絵。内面にも上絵が施されるが、剥離のため色調は不明。	江戸時代。
第167図	18	美濃陶器	丸碗		-	4.6	-	底部		灰白	高台内中央が下がるように削り残す。高台内側は「ハ」字状に開く。内面に灰釉。	登窯3小期。
第167図	19	美濃陶器	せんじ碗		-	(4.0)	-	1/4		灰白	灰釉と鉄釉の左右掛け分け。内面から高台内に施釉。高台端部のみ無釉。	登窯7小期。
第167図	20	瀬戸陶器	鍔茶碗		(8.9)	-	-	1/4		灰白	外面、回転施文具による鍔状文様。内面から口縁部外面に銅緑釉。外面口縁部以下は鉛釉に近い灰釉。	登窯9小期。
第167図	21	瀬戸陶器	腰鍔碗		-	-	-	底部		灰白	高台欠損。外面は鉄釉、内面は貫入が入る灰釉。	登窯8小期。
第167図	22	美濃陶器	碗		-	(5.4)	-	底部		灰白	高台径やや大きく、幅もやや広い。内面から高台脇に鉛釉。高台外面から高台内に化粧風に釉を薄くかける。高台端部も化粧掛けし、釉は使用により擦れる。	登窯6小期。

第4章 発掘調査の記録

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第167図	23	美濃陶器	碗		-	5.7	-	底部		灰白	高台径やや大きく、幅もやや広い。内面から高台脇に胎釉。高台外面から高台内に化粧風に釉を薄くかける。高台端部も化粧掛けし、釉は使用により擦れる。	登窯6小期。
第167図	24	美濃陶器	小碗		(7.4)	4.0	3.2	1/3		淡黄	内面と口縁部外面から体部外面下位に胎釉。外面口縁部以下は回転篋削り。	登窯7小期。
第167図 PL.145	25	製作地 不詳陶器	碗		-	-	-	1/2		灰	体部外面は回転篋削り。内面は黒色の鉄釉。残存部外面上部、僅かに透明釉か灰釉が見える。体部外面下位以下は鉄泥を塗布。	江戸時代。
第167図 PL.145	26	美濃陶器	丸皿		(10.8)	(6.5)	2.0	1/2		灰オリーブ	口縁端部の1部歪む。外面中位以下は回転篋削り。器高は低い。高台は断面三角形。内面から外面中位に灰釉。底部内面と高台端部に重ね焼き痕。	登窯5小期。
第167図	27	美濃陶器	摺絵皿		(12.5)	-	-	1/3		灰	口縁部下で屈曲して立ち上がる。外面口縁部以下は回転篋削り。内面から口縁部外面に灰釉。残存部は無文。	登窯6・7小期。
第167図	28	瀬戸陶器	輪髹皿		-	(6.4)	-	1/2		灰白	底部内面中央部は低い段をなして円形に下がる。内面から高台外面に施釉。釉は白濁し焼成不良。底部内面の釉をドーナツ状に削る。	登窯5小期。
第167図	29	美濃陶器	鉄絵皿		-	(7.7)	-	1/3		灰白	底部内面に鉄絵。内面から高台内周縁に灰釉。貫入が入る。底部内面に目痕1箇所。高台内に円錐ピン状の窯道具端部溶着。	登窯3小期。
第167図	30	美濃陶器	皿		-	(6.8)	-	1/3		灰白	断面三角形の高台やや内傾。内面から高台外面に灰釉。底部内面に重ね焼き痕。	登窯3・4小期。
第167図	31	美濃陶器	筒形香炉		(11.0)	-	-	1/4		にぶい黄	口縁端部は肥厚し、外方に張り出す。口縁端部上面は内傾。内面の轆轤目は顕著。内面から体部外面下位に胎釉。	登窯6小期。
第167図	32	美濃陶器	筒形香炉		(10.5)	-	-	1/6		浅黄	口縁端部内面は内湾するように突き出る。端部外面も突き出る。体部外面は幅広の丸盤状工具による施文。内面中位から体部外面下位に胎釉。口縁端部内外面小剥離痕連続する。灰吹きとして使用。	登窯7小期。 灰吹きとして使用。
第167図	33	美濃陶器	筒形香炉		(9.5)	-	-	1/6		淡黄	口縁端部内面は三角形に突き出る。口縁端部上面は窪む。口縁端部外面下位は凹線状に窪む。体部外面に丸盤状工具による施文。口縁端部内面下位から外面に胎釉。	登窯7小期。
第167図	34	美濃陶器	筒形香炉		(9.8)	-	-	1/4		灰白	口縁端部内面は内傾し、内面に突き出る。口縁部内面から体部外面下端に胎釉。口縁端部外面に小さい敲打痕が連続。	登窯7小期。 灰吹きとして使用。
第167図	35	美濃陶器	筒形香炉		-	(4.0)	-	1/3		灰白	外面に灰釉。内面は無釉。貫入が入る。	登窯8小期。
第167図	36	美濃陶器	火入		(9.7)	(7.5)	5.1	1/4		灰白	口縁端部内面内湾するように突き出る。内面中位から高台脇に灰釉。貫入が入る。	登窯8・9小期。
第168図	37	国産施 釉陶器	火入		(12.0)	-	-	1/5		灰白	体部から口縁部は筒状で口縁端部は内側に突き出る。中位内面から外面に灰釉。細かい貫入が入る。口縁端部内面突出部は細かい剥離が連続し、外面の釉は剥離。灰吹きとして使用。	登窯7小期。 38と同一個体の可能性高い。
第168図	38	美濃陶器	火入		11.1	(6.7)	-	口縁1 部底部 1/2		灰白	体部から口縁部は筒状で口縁端部は内側に突き出る。高台の3箇所を押さえて輪花状とする。外面に鉄絵具による摺絵か。中位内面から体部外面下位に灰釉。細かい貫入が入る。口縁端部内面突出部は細かい剥離が連続し、外面の釉は剥離。灰吹きとして使用。	登窯7小期。 37と同一個体の可能性高い。
第168図	39	美濃陶器	灯火皿		(7.4)	(3.5)	1.3	1/4		灰	体部下位以下は回転篋削り。全面に錆釉施釉で、体部下位以下を拭う。	登窯8・9小期。
第168図	40	美濃陶器	徳利		-	(13.0)	-	1/3		灰黄	外面に鉄釉施釉後に灰釉を流す。体部外面下端以下の釉を拭う。内面は無釉。	近世、美濃3・4
第168図	41	肥前陶器 か	鉢か		-	(6.0)	-	1/3		にぶい黄橙	高台内の挟りは深い。内面から体部外面下位に白土を刷毛塗り。内面から体部外面下位に灰釉(透明釉)。底部内面は蛇ノ目釉剥ぎ。	江戸時代。
第168図	42	美濃陶器	片口鉢		(18.0)	-	-	口縁部 片		黄褐	内外面に明黄褐色の胎釉。口縁端部は肥厚し、外面に1条の凹線。	登窯6小期。 43と同一個体の可能性あり。
第168図	43	美濃陶器	片口鉢		-	(8.4)	-	1/2		黄褐	内面から高台脇に明黄褐色の胎釉。内面の1部に灰釉が斑状にかかる。	登窯6～8小期。 42と同一個体の可能性あり。
第168図	44	瀬戸陶器	片口		-	(7.0)	-	底部		灰黄	体部外面は回転篋削り。内面は灰釉。貫入が入る。	登窯8・9小期。
第168図	45	美濃陶器	壺		-	(8.0)	-	1/4		灰白	外面に胎釉施釉後、外面下位以下を拭う。	登窯5～7小期。
第168図	46	瀬戸陶器	半胴甕		-	-	-	口縁部 片		灰	口縁端部は内外に肥厚。口縁部外面下位2条の浅い凹線。内外面錆釉。	登窯7小期。
第168図	47	瀬戸陶器	半胴甕		-	(23.2)	-	1/3		浅黄	全面種釉施釉後に体部外面下端以下の釉を拭う。体部外面下位に凹線2条めぐる。底部内面に団子状の目痕1箇所。	登窯5～7小期。
第168図	48	瀬戸陶器	半胴甕		-	(13.5)	-	1/3		淡黄	体部外面下位湾曲する。高台境外面は明瞭。内面から体部外面下位に錆釉。外部外面下位から高台内は鉄化粧風に薄く錆釉かかる。高台端部の器表摩滅。高台内中央に回転糸切痕残る。底部内面に目痕1箇所。	登窯7小期。
第168図	49	瀬戸陶器	すり鉢		-	-	-	口縁～ 体部片		灰白	口縁部は外方に屈曲した後、上方につまみ上げる。内外面に錆釉。口縁端部上面は凹凸のある摩滅。	登窯4小期。

第2節 1区の遺構と遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第168図 PL.146	50	瀬戸陶器	すり鉢		(32.7)	(13.0)	15.2	口縁 1/8底 部1/3		淡黄	口縁部は外反し、外方に折り返して肥厚。体部外面は回転篋削り。回転篋削り。使用により、体部内面下半から底部の器表摩滅。底部外面周縁の器表摩滅。口縁端部内外面は微細な剥離が連続したように器表が摩滅し、端部上面の釉が線状に残る。内面側の摩滅が著しい。	登窯7小期。
第168図	51	瀬戸陶器	すり鉢		-	13.2	-	1/2		淡黄	内外面は錆釉。底部右回転糸切無調整。体部内面下位以下の器表摩滅。底部外面周縁の器表摩滅。	登窯5小期。
第169図	52	瀬戸陶器	すり鉢		-	(14.4)	-	1/3		灰黄	体部外面から底部外面は回転篋削り。内外面は錆釉。体部内面以下の器表摩滅。底部外面周縁の器表摩滅。	登窯5小期以降。
第169図	53	埴陶器	すり鉢		(34.0)	-	-	1/8		赤	体部は回転篋削り。口縁部内面の段差は明瞭で突帯も幅狭く先端は尖る。口縁部の器壁は薄い。	1型式。18世紀前半～中頃。
第169図	54	丹波・信楽陶器	すり鉢		-	(14.4)	-	1/3		灰・浅黄	無釉。内面は使用により器表やや摩滅。底部外面周縁はやや平滑。体部外面下端は回転篋削り。	江戸時代。
第169図	55	埴陶器	すり鉢		-	-	-	口縁部 片		赤褐・ 赤灰・ にぶい 褐	片口部片。外面口縁部下は回転篋削り。口縁部内面に段は明瞭で、突起は幅狭くやや高い。押印は認められない。	1型式。18世紀前半～中頃。
第169図	56	瀬戸陶器	すり鉢		-	(13.4)	-	1/8		淡黄	内外面は錆釉。底部回転糸切無調整。体部内面下位以下の器表摩滅。	
第169図 PL.146	57	益子・笠間陶器	すり鉢		(33.0)	16.8	13.8	1/4、 底部 1/2		赤褐・ 赤灰・ にぶい 褐	口縁部内面から体部外面下端に柿釉。高台外面から高台内に白土掛け。内面のすり目部分は無釉。底部内面のすり目は使用による摩滅で消失する。高台端部も擦れにより摩滅。	近現代
第169図	58	在地系土器	焙烙		-	-	5.7	1/12	B	暗灰 黄・灰 褐	口縁部は短く外方に折り曲げる。口縁部内面屈曲部上位は窪む。口縁端部は丸い。体部中位は外面側に肥厚。体部下位は外湾。平底。	江戸時代か。
第169図	59	在地系土器	鍋		-	-	-	口縁部 片	B	褐灰・ 黒褐	断面はにぶい黄褐色。内面器表は褐灰色、外面器表は黒褐色。外面は外反部以下に煤厚く付着。口縁部下で外反し、口縁部は内湾。口縁端部は外方に尖り気味。	17世紀～18世紀前半か。
第169図	60	在地系土器	火鉢か		-	-	-	高台片 か	B	赤褐	内面調整が粗く、屈曲部外面に強い撫でが施されていることから高台と推定される。	江戸時代以降。
第169図	61	在地系土器	焜炉部 品		-	-	5.6	破片	B	灰黄・ 灰	組み合わせ式焜炉の風口片。下面の外面は型作り痕が残る。側面と上面は粘土板を貼り合わせる。上面円穴部は撫で調整。	江戸時代以降。
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況		備考	
第169図 PL.146	62	砥石				(10.2)	2.9	128.0				
第169図 PL.146	63	砥石		切り砥石	珪質頁岩	(5.4)	4.0	32.0	左側縁には櫛歯様の平行条線が痕跡として残る。石材は細粒・緻密。裏面側は剥落、全容は不明。			
-	64	砥石		切り砥石	流紋岩	(9.3)	2.6	72.3	二面使用。左側面・小口部に櫛歯状工具と見られる切断痕、右側面に刀子状工具による整形痕が残る。		非実測	
-	65	砥石		切り砥石	珪質頁岩	(2.4)	(2.3)	2.3	細粒・緻密質石材を用いた仕上げ砥の破片。		非実測	



第170図 1区35号溝出土遺物

0 1:3 10cm 0 (5~9、18~24) 1:4 10cm

第90表 1区35号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第170図	1	肥前磁器	碗		(8.8)	(3.8)	4.5	1/2		灰白	外面にコンニャク印判による桐状文。施文は3方と考えられる。	18世紀中頃～19世紀初頭。波佐見系。
第170図	2	肥前磁器	碗		-	3.1	-	底部		灰白	体部外面下位と高台外面に圏線。	江戸時代。波佐見系。
第170図	3	瀬戸・美濃磁器か	湯飲み		-	3.8	-	下半部		灰白	外面に銅板転写による牡丹と唐草文。	近現代。
第170図 PL.146	4	製作地不詳陶器	皿		(8.8)	(3.0)	1.5	1/3		灰白	型打ち轆轤調整。無軸のかわらけ。	近現代。
第170図	5	肥前磁器	皿		-	-	-	口縁部片		白	口縁部平面形はゆるい波状の輪花。口縁部内面は濃み地白抜き。	18世紀後半～19世紀中頃。6・7と同一個体の可能性あり。
第170図	6	肥前磁器	皿		-	(14.6)	-	底部		白	内面染付。	18世紀後半～19世紀中頃。5・7と同一個体の可能性あり。
第170図	7	肥前磁器	皿		-	-	-	口縁部片		白	口縁部平面形はゆるい波状の輪花。内面は染付。口縁部内面は濃み地白抜き。	18世紀後半～19世紀中頃。5・6と同一個体の可能性あり。
第170図	8	肥前磁器	皿		-	-	-	1/8		白	外面に簡略化した雲龍文。内面は窓絵で海中と海上の文様。染付は人造呉須による手描きであるが、海草は緑色の下絵。	近現代。
第170図	9	肥前磁器か	皿		(26.0)	(13.0)	3.8	1/6		白	型紙摺。内面は竹に雀、外面は打ち出の小槌。蛇ノ目凹形高台。	近現代。
第170図	10	京・信楽系陶器	碗		-	(4.0)	-	体1部 底部 1/2		灰白	口縁部下外面で稜をなして屈曲する。高台の削り出しはシャープ。内面から高台脇に灰釉。細かい貫入が入る。釉と露胎部境は橙色に発色。	18世紀中頃～後半。
第170図	11	肥前陶器	呉器手碗		(9.6)	-	-	1/5		灰白	口縁部は僅かに開き気味に立ち上がる。内外面に透明釉。貫入が入る。	17世紀後半～18世紀初頭。
第170図	12	肥前陶器	碗か皿		-	5.1	-	底部		淡黄	高台内に押印銘。銘は不明瞭。底部内面に鉄絵具で山水文。内面から高台脇に透明釉。貫入が入る。	17世紀中頃～後半。
第170図	13	肥前陶器	碗		-	(4.6)	-	1/2		浅黄	陶胎染付。焼成不良。外面染付。貫入が入る。	17世紀末～18世紀中頃。
第170図	14	美濃陶器	丸碗		-	(5.0)	-	底部		灰白	高台径やや小さい。内面に鉛釉。	登窯7小期。
第170図	15	美濃陶器	菊皿		-	(8.0)	-	1/4		灰白	内面から体部外面に灰釉。貫入が入る。高台部の横撫では丁寧。	登窯4小期。
第170図 PL.146	16	美濃陶器	筒形香炉		(13.5)	(9.6)	-	1/3		淡黄	体部外面に横線。口縁端部内外面は突出し、上面は内傾。内面から体部外面下位に黄褐色の鉛釉。底部内面に目痕1箇所。底部外面に脚の1部残存。	登窯6小期。
第170図	17	美濃陶器	筒形香炉		-	-	-	口縁部片		灰白	口縁端部内外面は突出し、端部上面は内傾する。口縁端部内面から外面に明黄褐色の鉛釉。	登窯7小期。
第170図	18	美濃陶器	徳利		-	(8.0)	-	1/3		灰白	内面の轆轤目は顕著。外面に灰オリーブ色の鉛釉施釉後、体部外面下位以下を拭う。	登窯7小期。
第170図	19	製作地不詳陶器	焼耐瓶か耐酸瓶		-	-	-	肩部片		にぶい橙	断面中央はにぶい橙色、器表付近は赤褐色、内面器表は黒色。外面は光沢のある黒褐色釉。肩部外面は緩い稜を有し、縦方向の取っ手貼り付け痕がある。	近現代。
第170図	20	常滑陶器	甕か壺		-	-	-	体部片		灰白	内外面の器表は明赤褐色。外面に灰釉が流下する。	中世。
第170図	21	丹波陶器	すり鉢		-	-	-	口縁部片		灰	器壁は薄い。口縁部は屈曲して立ち上がる。縁帯下部は張り出さない。	18世紀中頃～後半。
第170図 PL.146	22	丹波陶器	すり鉢		-	15.6	-	1/2		にぶい黄褐	体部外面轆轤目顕著だが、部分的に指押さえ状の窪みが残る。	江戸時代。
第170図	23	在地系土器	焙烙		-	-	-	口縁部片	B	黒	断面はにぶい橙色、器表は黒色。口縁端部外面は明瞭な稜をなし、端部内面は丸みを持つ。内面中位に接合痕。外面下端は窪み、器表に皺状亀裂。	江戸時代。
第170図	24	在地系土器	焙烙		(39.0)	-	-	1/8	B	浅黄橙	断面は浅黄褐色、内面器表は黄灰色、外面器表は黒色。口縁端部外面下は凹線状に窪み、端部外面は突出したように見える。端部内面は明瞭な稜をなす。外面下半は皺状亀裂。	江戸時代。
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況		備考	
-	25	敲石		扁平礫		11.5	9.0	222.7	小口部上端・側縁に敲打痕。平坦な礫面には弱い線条痕が広がる。被熱破損。		非実測	



第4項 近代以前

1 ピット(第171・172図、P L.146、第91・92表)

調査区の北西部及び南東部に位置し、埋没土に特徴的な要素の見られないピットである。個別の規模は第91表のとおり。6号ピットから砥石(172図1)が出土するほか、22号ピットからも砥石1点が出土している。

第91表 1区近代以前ピット群計測表(cm)

ピットNo.	グリッド	長径	短径	深さ	非掲載破片数
3	28F-11	34	(20)	24	
4	28F-11	33	(16)	19	
5	28G-11	74	(59)	39	土師器壺甕類6、須恵器杯碗類1 近現代陶磁1
6	28F・G-10	64	60	55	土師器杯碗類2・壺甕類4 須恵器杯碗類1、近現代陶磁1
8	28E-11	45	(35)	26	土師器杯碗類1・壺甕類1 須恵器杯碗類2、近現代陶磁1
21	28G-11	77	(45)	38	
22	28G-11	73	53	37	土師器杯碗類2・壺甕類2
25	28G-9	69	45	40	土師器杯碗類1・壺甕類2 須恵器杯碗類1
26	28D-11	28	23	31	土師器杯碗類1・壺甕類2 須恵器杯碗類1
27	28E-6	37	35	48	
28	28E-6	43	25	43	土師器壺甕類1
31	28E-10	53	48	28	
34	28F-11	43	42	32	
35	28F-8	72	47	46	土師器杯碗類1・壺甕類2
50	28F-9	40	36	37	
54	27T-10	50	45	18	
62	27R-6	44	41	40	
77	28E-10	37	26	(18)	
82	27Q-1	52	48	75	
98	27Q-3	40	37	25	
101	27T-5	45	43	47	
108	28E-9	25	(25)	20	
109	28E-9	38	(22)	12	
112	28E-11	24	20	30	
115	28B-3	29	28	20	
121	17S-18	48	46	25	須恵器杯碗類1
128	28F-10	53	45	28	
130	28D-8	32	23	18	
150	17R-17	46	40	47	
151	17S-17	37	34	44	
259	18B-19	32	31	27	
260	18B-19	30	29	24	
261	18A-20	34	26	25	
262	18B-20	28	28	42	
263	18A-20	22	17	24	
264	28B-2	51	29	24	

第5項 遺構外遺物(第174～180図、P L.146

～148、第93表)

縄文土器は前期中葉から後葉にかけて9点あり、非掲載4点は型式不明である。

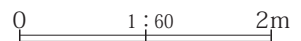
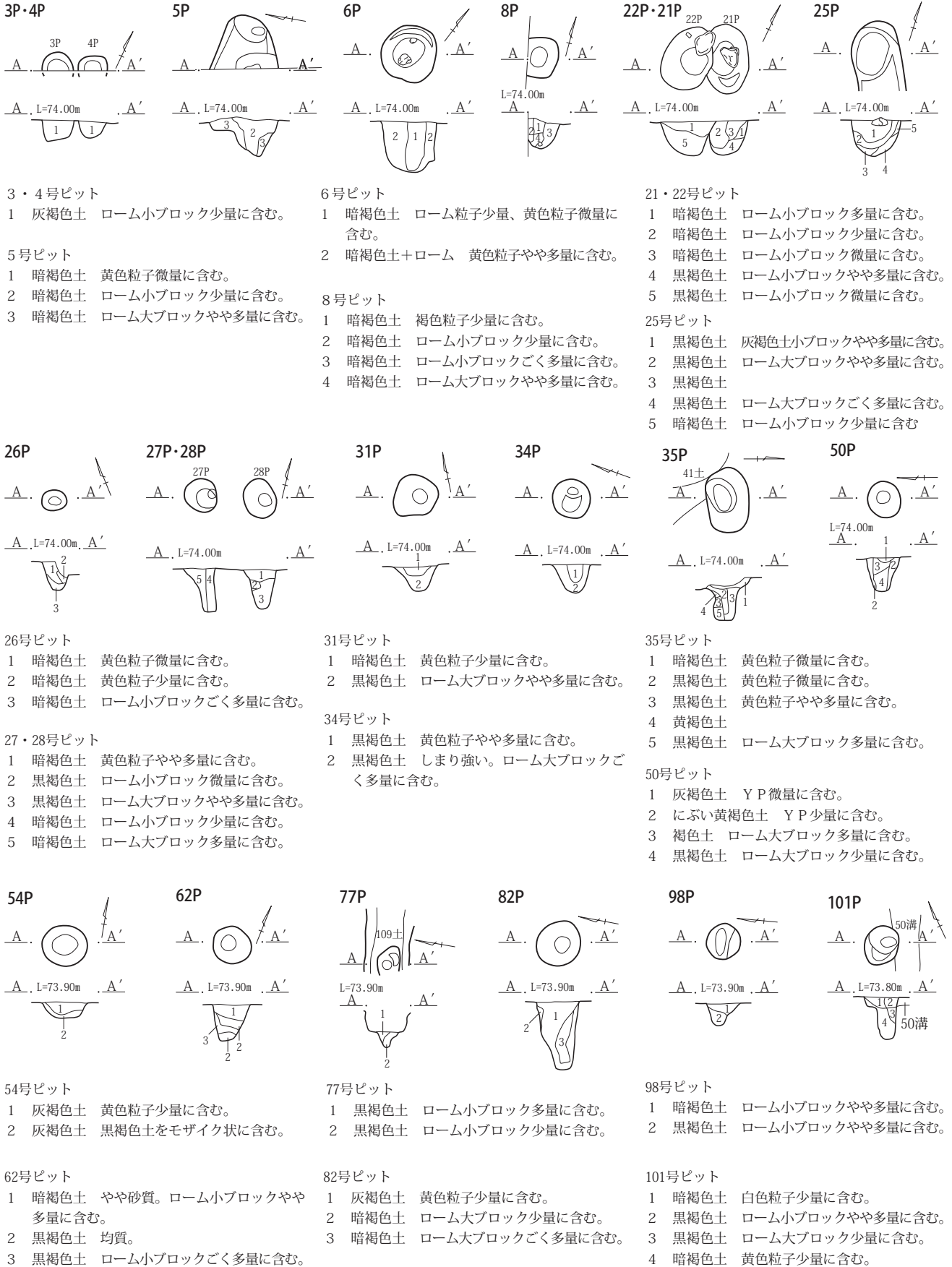
1区で古墳時代の遺構は発見されておらず、ここでは埴輪14点を掲載する。中世以降の遺構に混入したものが多い。

古代瓦についても、近世遺構の溝から出土したものが多く、破片である。近隣に所在する綿貫廃寺から運ばれたものと想像される。

中世遺物のうち、(176図55・66)の在地系土器鍋鉢類は、3号墓に混入したものであり、1号屋敷に帰属すると想定される。在地系土器ではほかに、(176図67)の釜が注目される。搬入品では、(176図69)の東濃型山皿(12世紀後半)が希少である。

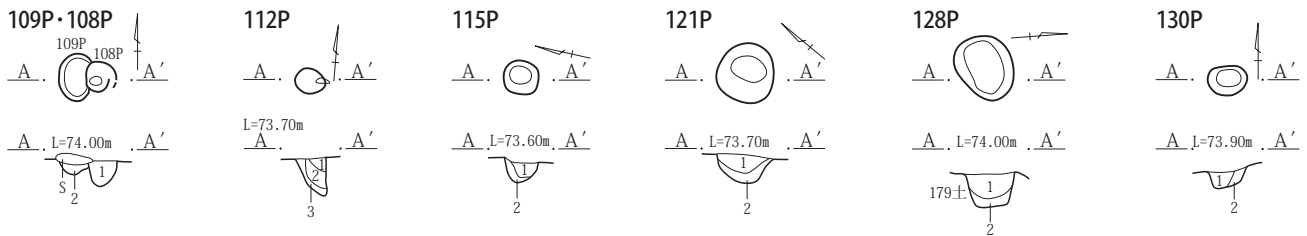
近世遺物は器種組成が多様であり、1区に所在する屋敷遺構に関係するものであろう。

掲載遺物のほか、土師器杯碗類290片・壺甕類1,009片、須恵器杯碗類975片・壺甕類55片、中世国産陶磁器6片・在地系土器74片、近世国産陶磁器273片・在地系土器58片、近現代その他土器類143片、砥石5点、敲石1点、板碑片2点が出土している。



第171図 1区近代以前ピット(1)

第4章 発掘調査の記録



108・109号ピット

- 1 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロック少量に含む。

112号ピット

- 1 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
- 2 黒褐色土 ローム小ブロック少量に含む。
- 3 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。

115号ピット

- 1 黒褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
- 2 黒褐色土 ローム小ブロック少量に含む。

121号ピット

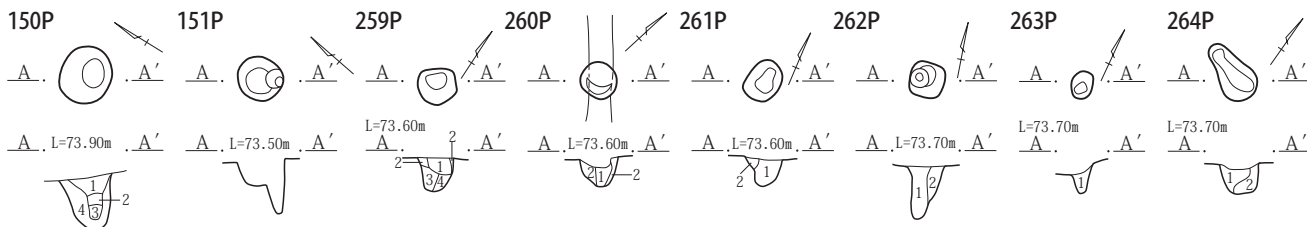
- 1 暗褐色土 均質。
- 2 黒褐色土 ローム大ブロック少量に含む。

128号ピット

- 1 黒褐色土 白色粒子少量、ローム小ブロックやや多量に含む。
- 2 黒褐色土 ローム大ブロックやや多量に含む。

130号ピット

- 1 黒褐色土 ローム小ブロック少量に含む。
- 2 黒褐色土 ローム大ブロック多量に含む。



150号ピット

- 1 灰褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
- 2 灰褐色土+ローム
- 3 にぶい灰褐色土 やや粘性あり。
- 4 黄褐色土 灰褐色土大ブロック多量に含む。

259号ピット

- 1 黒褐色土 ロームブロック少量に含む。
- 2 黒褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
- 3 黒褐色土 均質。
- 4 黒褐色土 ローム小ブロックごく多量に含む。

260号ピット

- 1 黒褐色土 均質。
- 2 黒褐色土 ローム粒子多量に含む。

261号ピット

- 1 黒褐色土 ローム大ブロック含む。
- 2 黄褐色土 黒褐色土ブロック多量に含む。

262号ピット

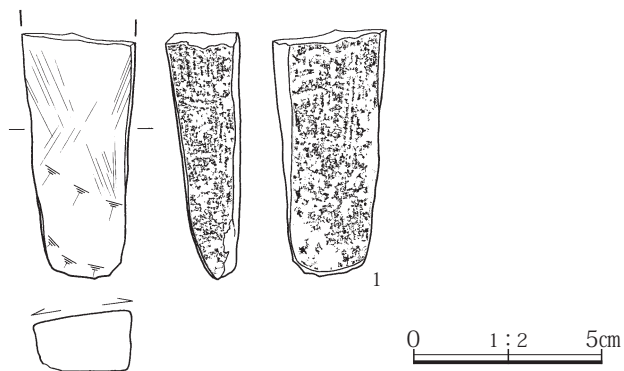
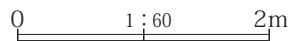
- 1 黒褐色土 ローム小ブロック少量に含む。
- 2 黒褐色土 ロームブロック含む。

263号ピット

- 1 黒褐色土 均質。

264号ピット

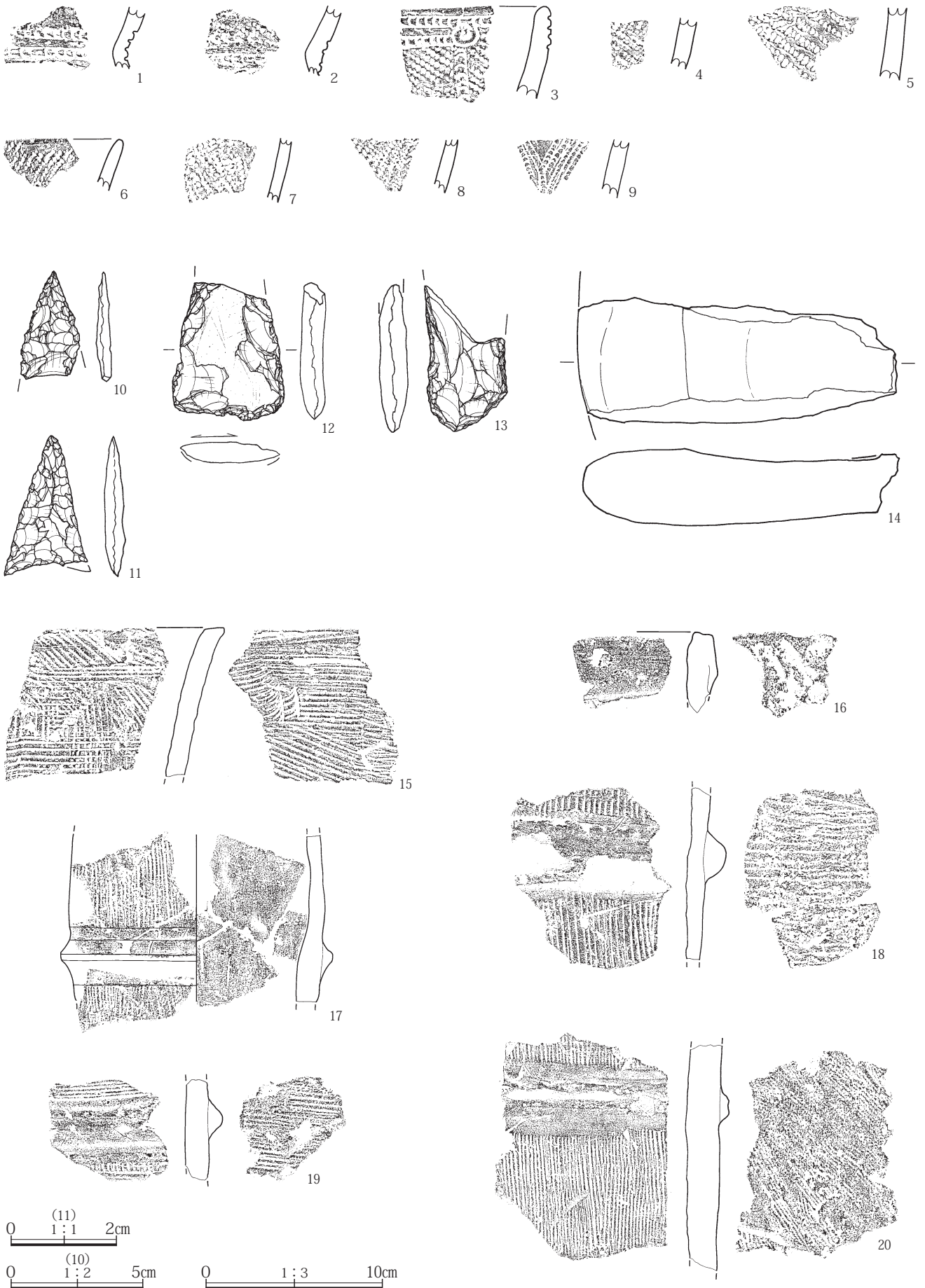
- 1 黒褐色土 ローム粒子多量に含む。
- 2 黒褐色土+黄褐色土



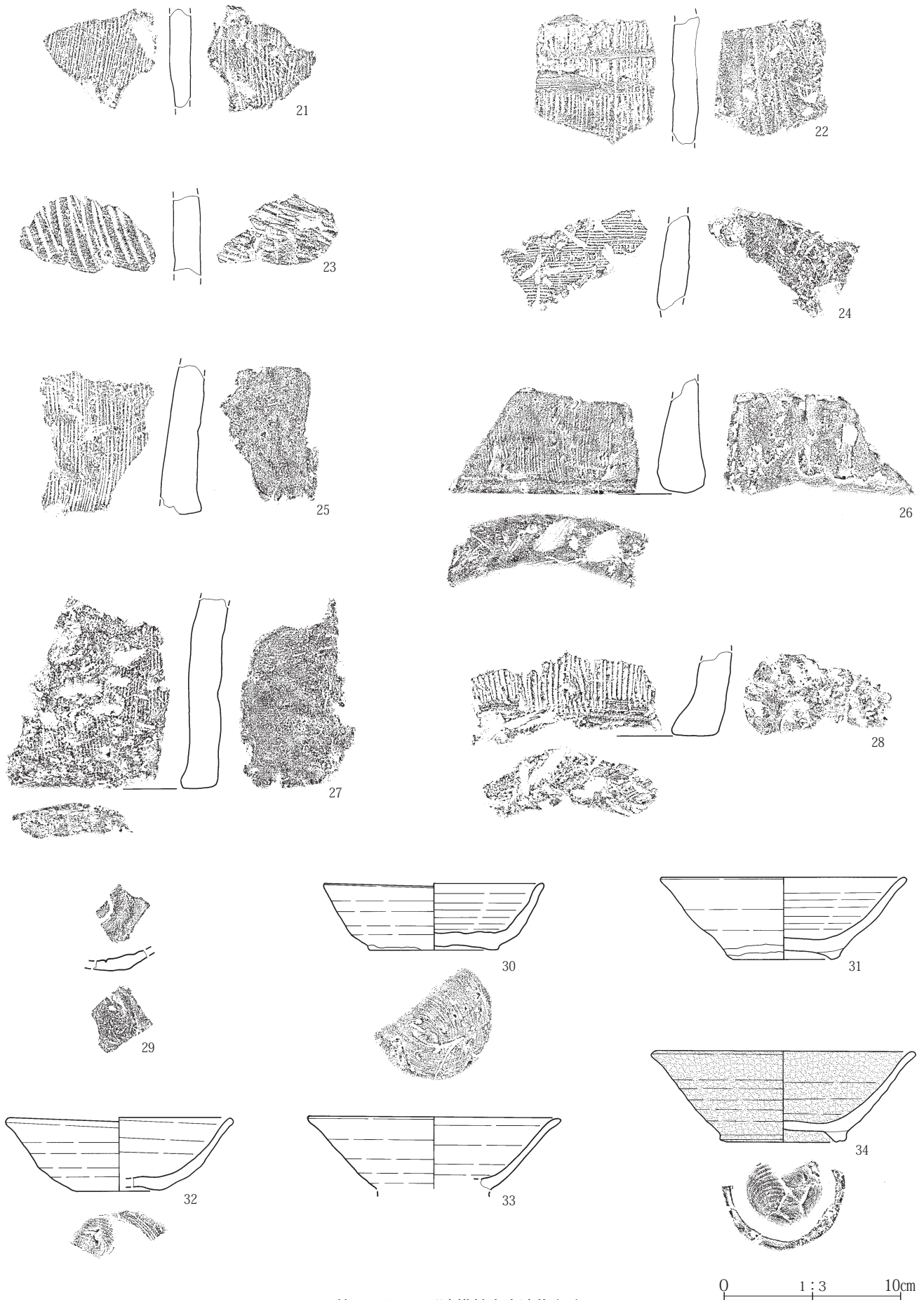
第172図 1区近代以前ピット(2)、6号ピット出土遺物

第92表 1区6・22号ピット出土遺物

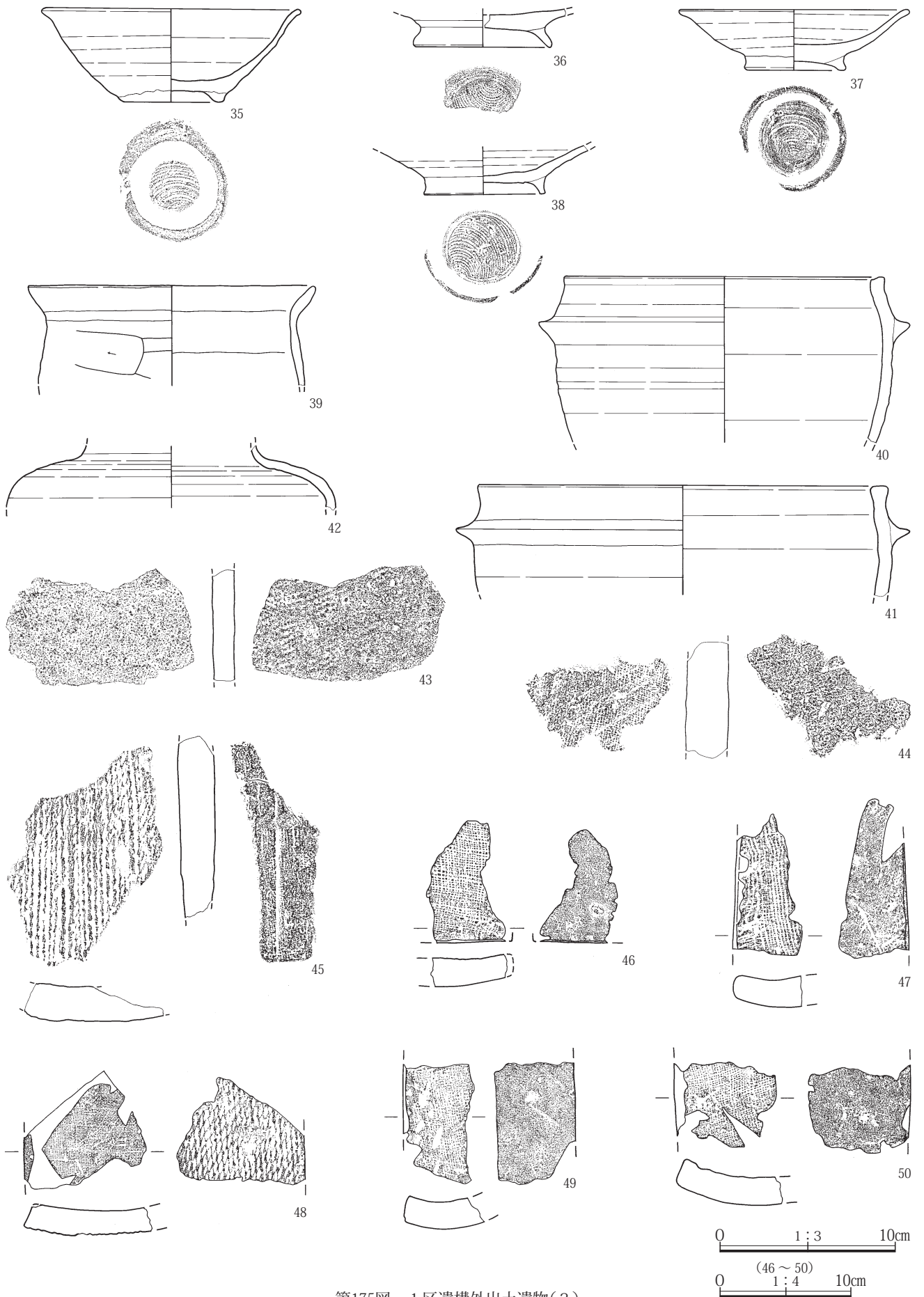
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況	備考
第172図 PL.146	1	砥石	6P	切り砥石	砥沢石	(6.5)	3.0	44.4	背面側を除く各面には平行条線が残る程度に粗い磨き整形を施す。	
-	2	砥石	22P	切り砥石	砥沢石	(5.9)	3.3	119.6	二面使用。側面にタガネ状の工具痕を残す。	非実測



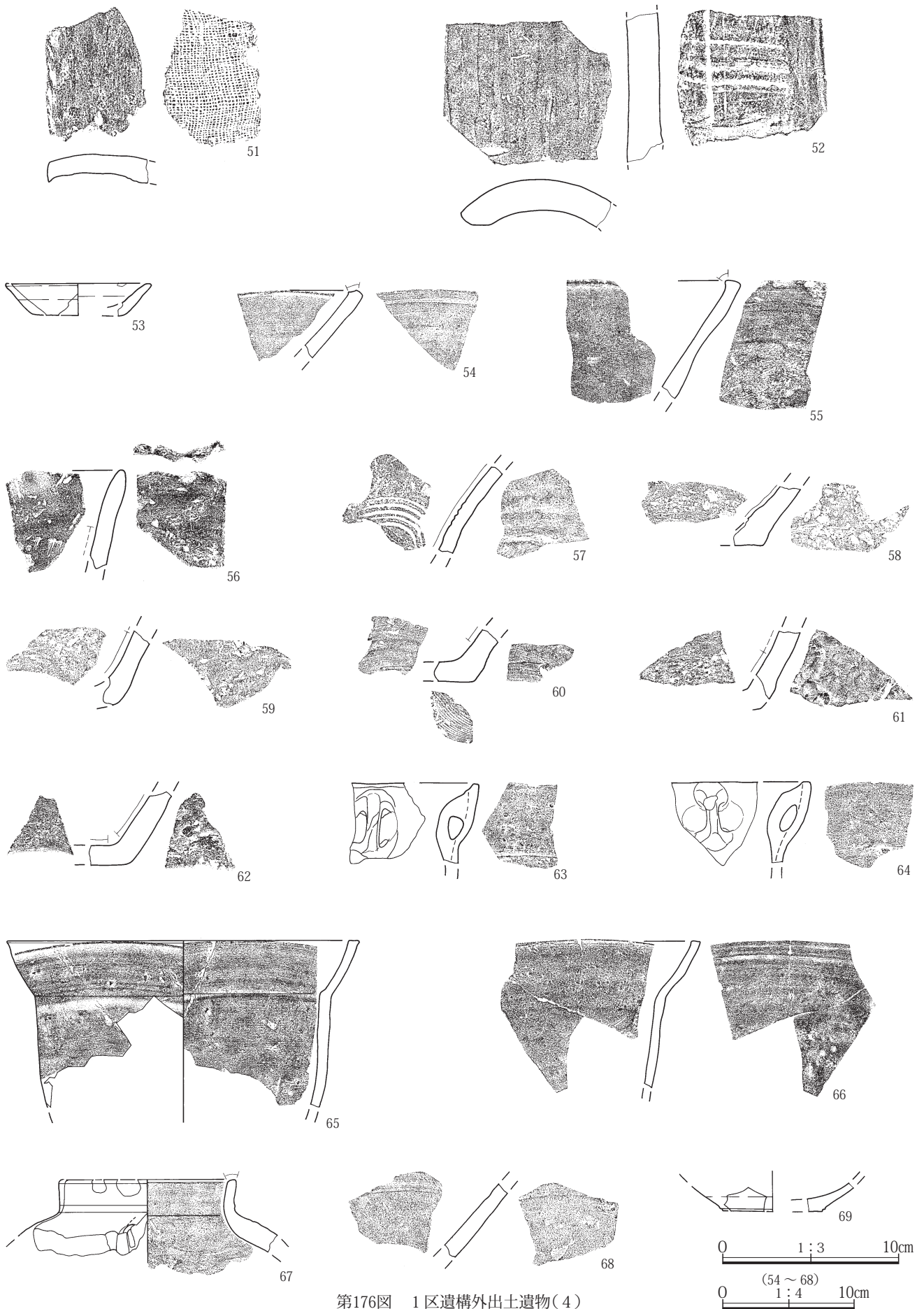
第173図 1区遺構外出土遺物(1)



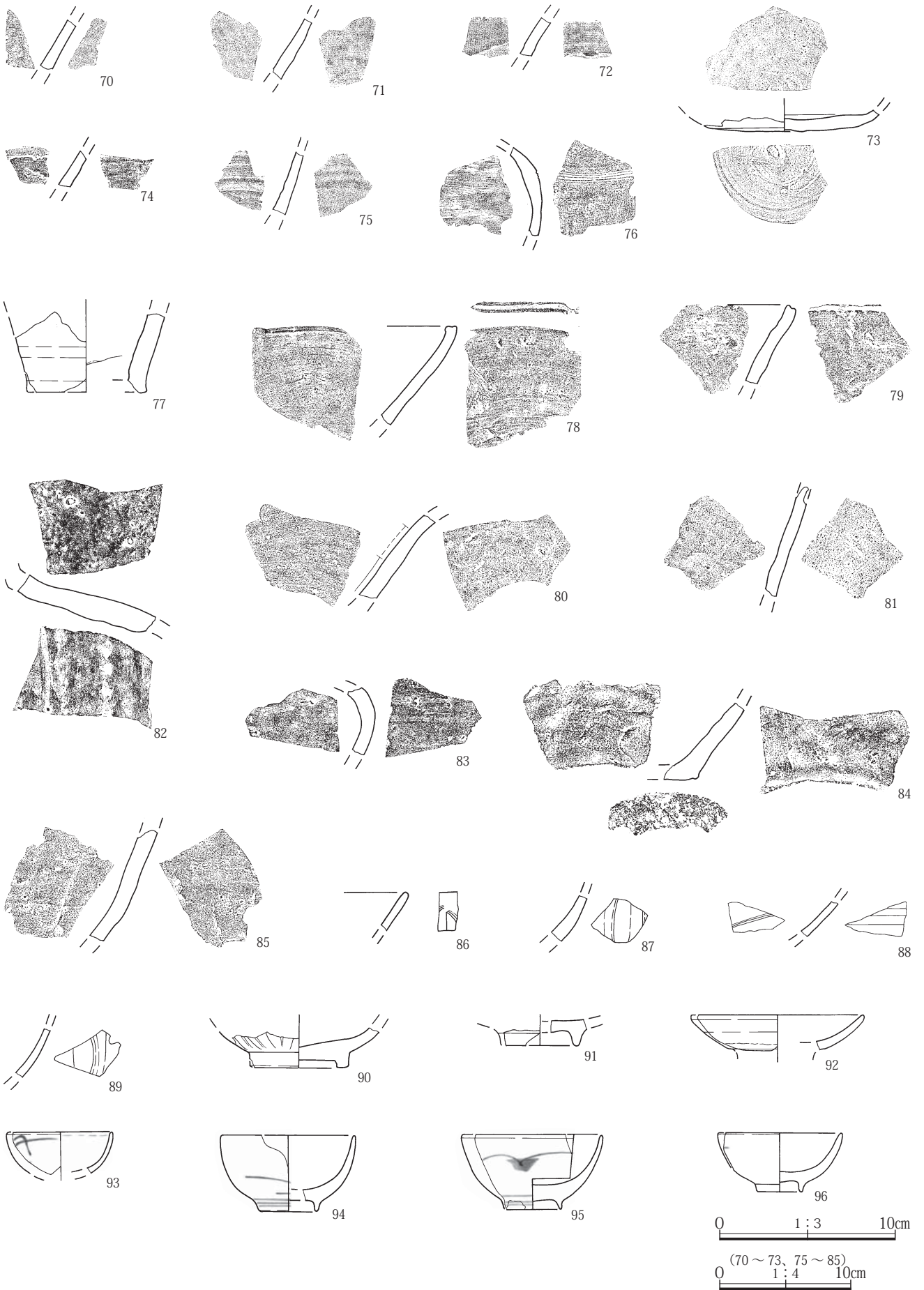
第174図 1区遺構外出土遺物(2)



第175図 1区遺構外出土遺物(3)

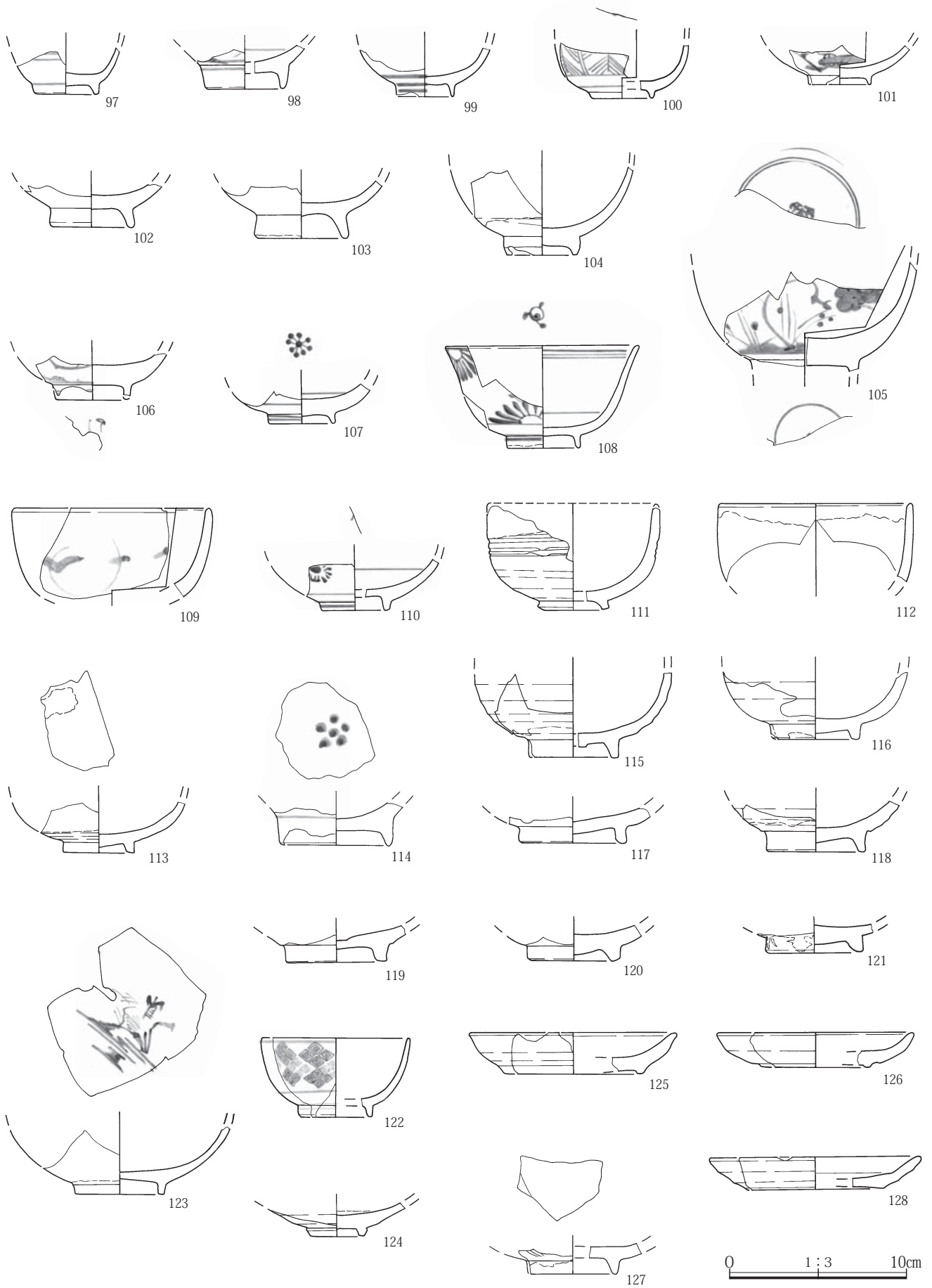


第176図 1区遺構外出土遺物(4)

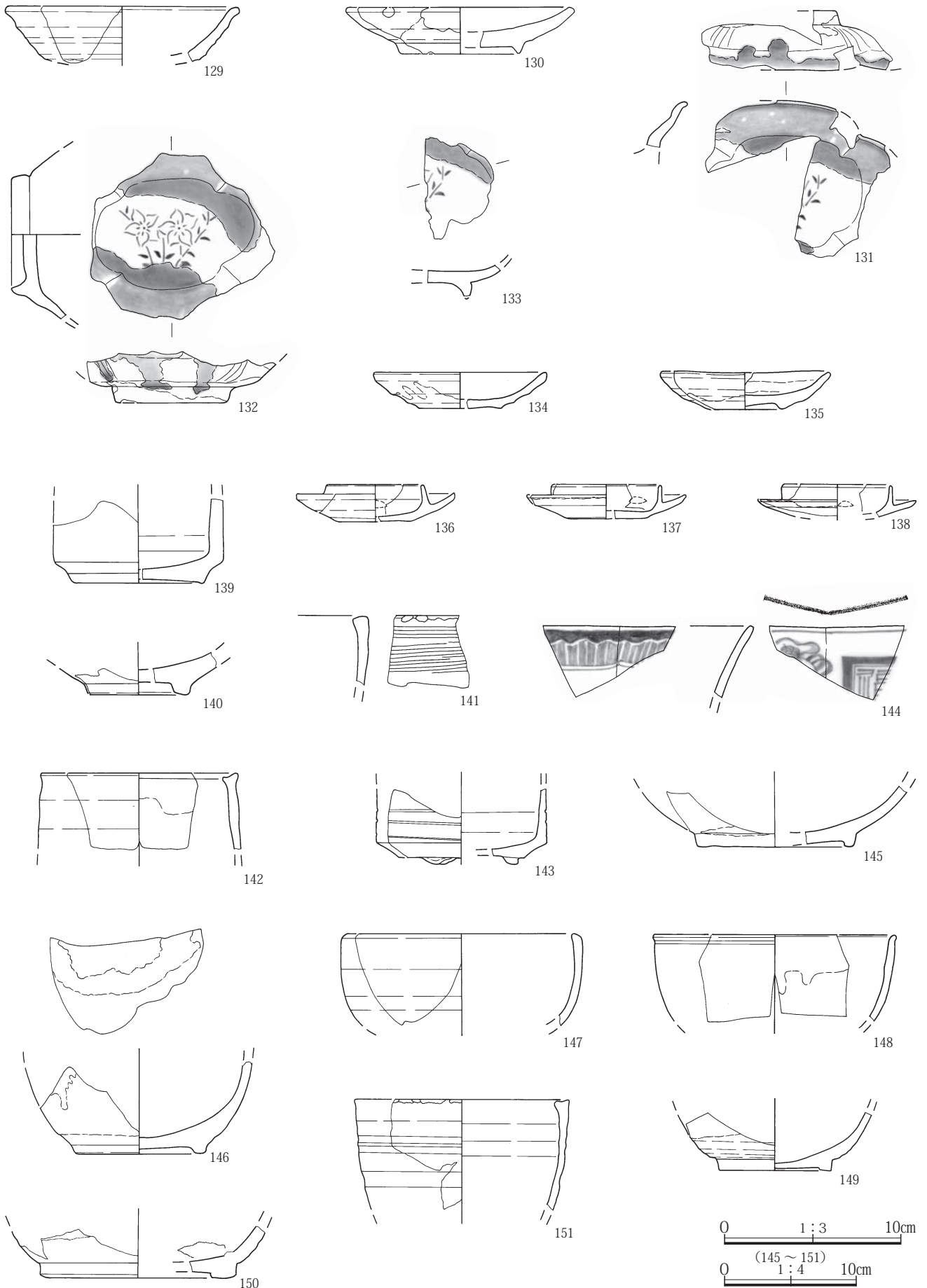


第177図 1区遺構外出土遺物(5)

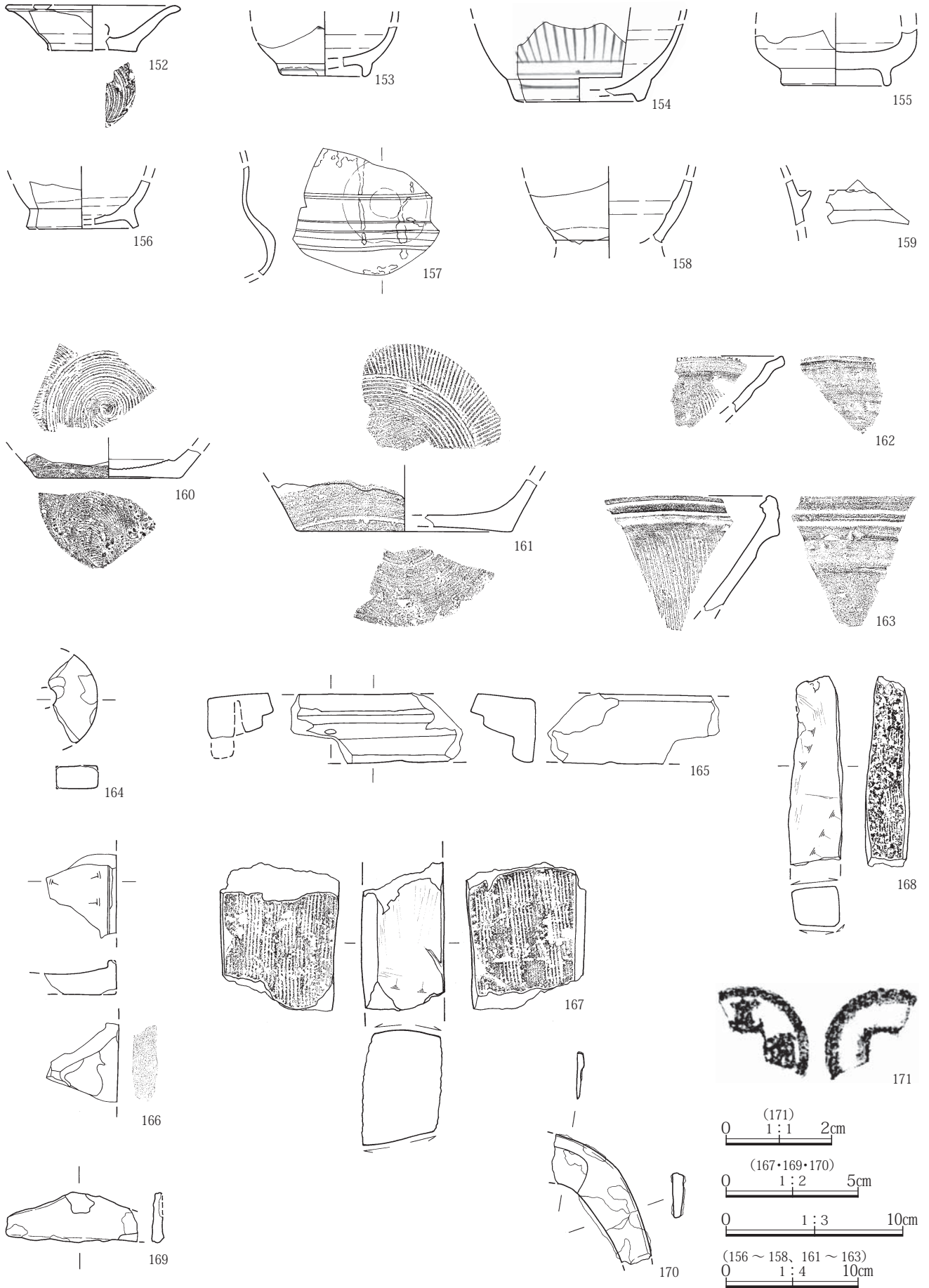




第178図 1区遺構外出土遺物(6)



第179図 1区遺構外出土遺物(7)



第180図 1区遺構外出土遺物(8)

第93表 1区遺構外出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別 器形	出土位置 残存率	胎土/焼成/色調					文様の特徴等	備考
第173図 PL.146	1	深鉢	胴部破片	細砂、繊維/ふつう/にぶい黄褐					口縁部文様帯下の括れ部に爪形刺突をもつ平行沈線を2条巡らせる。	黒浜・有尾式
第173図 PL.146	2	深鉢	胴部破片	細砂、繊維/ふつう/にぶい黄褐					口縁部文様帯下の括れ部に爪形刺突をもつ平行沈線を2条巡らせ、以下の胴部にRLの縄文を施す。	黒浜・有尾式
第173図 PL.146	3	深鉢	11土 口縁部破片	細砂、繊維/ふつう/にぶい黄褐					平口縁の口縁下に爪形刺突をもつ平行沈線を2条巡らせ、円形文を配し、その下に縦位の爪形平行沈線を描き、地文にRLの縄文を施す。	黒浜・有尾式
第173図 PL.146	4	深鉢	10土 胴部破片	細砂、繊維/ふつう/にぶい褐					胴部にLRとRLによる羽状縄文を施す。	黒浜・有尾式
第173図 PL.146	5	深鉢	胴部破片	細砂、繊維/ふつう/黒褐					胴部にRLの縄文を施す。	黒浜・有尾式
第173図 PL.146	6	深鉢	口縁部破片	粗砂、白色粒、石英/ふつう/明赤褐					平口縁の口縁下にLRの縄文を施す。	諸磯a式
第173図 PL.146	7	深鉢	胴部破片	粗砂、白色粒/ふつう/明赤褐					胴部にRLの縄文を施す。	諸磯a式
第173図 PL.146	8	深鉢	胴部破片	粗砂、白色粒/ふつう/明赤褐					胴部にRLの縄文を施す。	諸磯a式
第173図 PL.146	9	深鉢	22土 胴部破片	粗砂、白色粒、石英/ふつう/赤褐					口縁部文様に結節沈線で渦状の曲線的な文様を描く。	諸磯c式
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況	備考
第173図 PL.146	10	石鏃	表土	不明	黒曜石	(2.0)	(1.1)	0.4	完成状態?器体下端側から欠損後、右側縁を加工。加工は丁寧で完成状態とすることも可能で、破損後再加工したものか。	
第173図 PL.146	11	石鏃	84溝	凹基無茎鏃	チャート	2.7	(1.6)	1.1	完成状態。右辺の返し部を欠損。基部を浅く大きく抉る。	
第173図 PL.146	12	打製石斧	表土	短冊型	細粒輝石 安山岩	(7.7)	6.2	73.7	完成状態。背面側刃部両端、裏面側刃部側縁側に摩擦痕が残り、刃部再生が明らか。上半部欠損。	
第173図 PL.146	13	打製石斧	1道路	短冊型	黒色頁岩	(8.1)	(4.5)	58.6	完成状態。刃部は偏刃気味に変形。左側縁上端側が潰れている。	
第173図 PL.146	14	石皿	2住	有縁	雲母石英 片岩	(7.0)	(17.9)	796.6	盤状礫を用い、浅く機能部を作出する。	
-	172	石鏃	2溝	凹基無茎鏃	チャート	1.8	1.3	0.8	完成状態	非実測
-	173	石核	7土	偏平礫	珪質頁岩	5.5	6.3	86.0	小型幅広剥片を剥離。	非実測
-	174	石核	35溝	分割礫	黒色頁岩	9.2	10.1	436.6	求心状剥離	非実測
-	175	加工痕ある 剥片	表土	幅広剥片	珪質頁岩	6.5	7.5	69.5	加工意図：削器	非実測
挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴			摘要	
第173図 PL.146	15	埴輪 円筒	43溝 口縁部片		白・黒色鉱物・軽 石/良好/橙	緩やかに外反して立ち上がる。先端は外方に包まれたように延びる。外面の調整は直下に斜め方向。それ以下に縦方向のハケ目を施した後横ハケを施す。内面の調整は直下が横方向。それ以下に斜め横方向にハケ目を施す。				
第173図 PL.146	16	埴輪 不明	1溝 凸帯片		細砂粒・粗砂粒・ チャート/良好/ にぶい橙	凸帯は貼付、ナデ。				
第173図 PL.146	17	埴輪 円筒	1集石 体部片	凸帯径 15.4	細砂粒・小礫/良 好/にぶい橙	凸帯は貼付、凸帯の上下はナデ、体部は縦位のハケ目(2cmあたり9本)、内面はナデ。				
第173図 PL.146	18	埴輪 円筒	1溝 体部片		細砂粒・褐色粒/ 良好/橙	凸帯は貼付、凸帯はナデ、凸帯の上下位に縦位のハケ目(2cmあたり7本)、内面は横位のハケ目。				
第173図 PL.146	19	埴輪 円筒	1溝 体部片		細砂粒・褐色粒/ 良好/橙	凸帯は貼付、凸帯はナデ、凸帯の上下位に横位のハケ目、内面は横位のハケ目。				
第173図 PL.146	20	埴輪 円筒	43溝 体部片		細砂粒・粗砂粒・ 角閃石/良好/明赤褐	凸帯は貼付、凸帯はナデ、凸帯の上下位に縦位のハケ目(2cmあたり12本)、内面は斜めのハケ目。				
第174図 PL.146	21	埴輪 円筒	1溝 体部小片		細砂粒・粗砂粒・ 長石/良好/橙	内外面とも縦位のハケ目(2cmあたり10～11本)。				
第174図 PL.146	22	埴輪 円筒	1溝 体部片		細砂粒・粗砂粒・ 長石/良好/橙	体部はハケ目(2cmあたり10本)後凸帯を貼付(剥落)。内面はヘラナデ。				
第174図 PL.146	23	埴輪 円筒	1溝 体部小片		細砂粒・粗砂粒・ 小礫/良好/にぶい 赤褐	外面は縦位、内面は横位のハケ目(2cmあたり4～5本)。				
第174図 PL.147	24	埴輪 円筒	1道路 体部片		細砂粒/良好/橙	体部は横位のハケ目(2cmあたり13本)、内面はナデ。				
第174図 PL.147	25	埴輪 円筒	1集石 基底部片		細砂粒・粗砂粒・ 角閃石/良好/明赤褐	体部は縦位のハケ目(15本)、内面はナデ、底面もナデ				
第174図 PL.147	26	埴輪 円筒	1溝 基底部片		細砂粒・粗砂粒・ 片岩/良好/橙	外面は縦位のハケ目(2cmあたり13本)、内面はナデ。底面に棒状の圧痕が残る。				
第174図 PL.147	27	埴輪 円筒	58溝 基底部～体部片		細砂粒・粗砂粒・ 長石・角閃石/良 好/橙	外面はハケ目、器面磨滅のため単位不明。内面はナデ。				
第174図 PL.147	28	埴輪 円筒	48溝 基底部片		細砂粒・粗砂粒 体部は	外面は縦位のハケ目(2cmあたり10本)、内面はナデ。底面に棒状の圧痕が残る。				

第4章 発掘調査の記録

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴		摘要		
第174図 PL.147	29	須恵器 杯	底部片				細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	内面底部に刻書、一部のため判読不能。			
第174図 PL.147	30	須恵器 杯	186土坑 1/2	口 12.2 底 7.2	高 3.7		細砂粒・粗砂粒・ 長石/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。				
第174図 PL.147	31	須恵器 椀	1溝 1/3	口 13.6 高 4.6 台 5.6			細砂粒/酸化焰/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。				
第174図 PL.147	32	須恵器 椀	55ピット 1/2	口 12.4 底 5.4	高 4.1		細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。				
第174図 PL.147	33	須恵器 椀	215土坑 口縁部～体部片	口 14.0			細砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回りか。高台が貼付されている形態。				
第174図 PL.147	34	須恵器 椀	14住 1/2	口 14.2 高 5.1 台 6.0			細砂粒/還元焰・ 燻/灰黄褐	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。				
第175図 PL.147	35	須恵器 椀	3/4	口 14.4 高 5.3 台 5.6			細砂粒/酸化焰/灰 黄褐	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。				
第175図 PL.147	36	須恵器 椀	8土坑 底部片	台 7.6			細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転左回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。				
第175図 PL.147	37	須恵器 皿	6溝 1/2	口 12.7 高 3.4 台 5.0			細砂粒・粗砂粒・ 角閃石/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。				
第175図 PL.147	38	須恵器 皿	底部～体部	台 6.4			細砂粒・角閃石/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。				
第175図 PL.147	39	土師器 甕	8井戸 口縁部～胴部上 位片	口 16.0			細砂粒/やや軟質/ 橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。				
第175図 PL.147	40	須恵器 羽釜	1溝 口縁部～胴部上 位片	口 18.0 鏝 21.0			細砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形、回転方向不明。鏝は貼付。				
第175図 PL.147	41	須恵器 羽釜	81溝 口縁部～胴部上 位片	口 23.0 鏝 25.6			細砂粒/酸化焰/灰 黄	ロクロ整形、回転方向不明。鏝は貼付。				
第175図 PL.147	42	須恵器 短頸甕	1道路 頸部～胴部上位 片				細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。				
第175図 PL.147	43	須恵器 甕	58溝 胴部片				細砂粒・粗砂粒・ 角閃石/還元焰/暗 灰	外面は叩き痕がかすかに残るが、内面のアテ具痕はナデ消 されている。				
第175図 PL.147	44	瓦 平瓦	一部片				細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	表面に布目痕が残る。裏面はヘラナデ。				
第175図 PL.147	45	瓦 平瓦	25溝 一部片				細砂粒・粗砂粒・ /酸化焰/灰白	表面には布目痕、裏面は縄目痕が残る。				
第176図 PL.147	51	瓦 丸瓦	一部片				細砂粒/還元焰/灰	表面はヘラナデ、裏面に布目痕が残る。				
第176図 PL.148	52	瓦 丸瓦	35溝 一部片				細砂粒/還元焰/灰 白	内外面ともヘラ削り。側面もヘラ削り。				
挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第175図	46	古代瓦	瓦	1溝	-	-	1.7～ 2.2	破片		灰白		
第175図	47	古代瓦	瓦	1溝	-	-	1.8～ 2.3	破片		浅黄		
第175図	48	古代瓦	瓦	1溝	-	-	1.7～ 2.0	破片		灰黄		
第175図	49	瓦	平瓦	攪乱	-	-	2.1 (厚)	破片		灰黄	布痕残る。	古代。
第175図	50	古代瓦	瓦	1溝	-	-	2.1	破片		浅黄		
第176図	53	在地系 土器	皿	南西部	(8.2)	(5.2)	1.7	1/7	A	にぶい 橙	体部は直線的に開き、口縁部は小さく外反。口縁部内 面は器厚を減じるように外反し、端部外面は尖り気味。 体部内面中位の轆轤目はやや顕著。	口縁端部に油 煙付着。15世 紀か。
第176図	54	在地系 土器	片口鉢	確認面	-	-	-	口縁部 片		にぶい 黄橙・ 黄灰	断面から器表付近は黄橙色、器表は黄灰色。最終段階 の焼成は燻し気味。口縁端部内面は内側に突き出るが、 突出部のほとんどは摩滅。口縁端部外面は丸みを持つ。	中世。
第176図	55	在地系 土器	片口鉢	3墓	-	-	-	口縁部 片		灰	還元炎。器壁は薄く、口縁部は外反した後に内湾。口 縁端部内面は三角形に突き出す。突出部上面の器表 は摩滅。	Ⅲ・Ⅳ期。
第176図	56	在地系 土器	片口鉢	1道路	-	-	-	口縁部 片	B	暗灰	断面は橙色、器表は暗灰色。焼成最終段階は還元気味。 片口部片で、端部がほとんど欠損するが、内外面への 突出は認められず、丸く仕上げ。	中世。
第176図 PL.147	57	在地系 土器	片口鉢	南西部	-	-	-	体部片	A	にぶい 黄橙	器壁薄く、体部は大きく外反。すり目は大きく弧を描く。	Ⅵ期か。
第176図	58	在地系 土器	片口鉢	南西部	-	-	-	底部片	B	にぶい 橙	外反。底部外面の器表はほとんど剥離。内面は使用に より器表摩滅。	中世。
第176図	59	在地系 土器	片口鉢	94溝	-	-	-	体部片		褐灰	断面中央と器表は褐灰色、断面はにぶい黄橙色。内面 は使用により器表の褐灰色部分すべて摩滅。	中世。
第176図	60	在地系 土器	片口鉢	35溝	-	-	-	底部片		橙	体部外面下端は匏撫で。底部回転糸切無調整。	中世。

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第176図	61	在地系 土器	片口鉢	表土	-	-	-	体部片		灰	還元炎。内面は使用により内面の器表摩滅。	中世。
第176図	62	在地系 土器	片口鉢		-	-	-	底部片		灰	還元炎。内面は体部と底部境を除き、使用により器表摩滅。底部外面周縁は摩滅。糸切りか否かは不明。	中世。
第176図	63	在地系 土器	内耳鍋	北東部	-	-	-	口縁部 片	B	にぶい 黄褐	口縁部に粘土紐を貼り付けて内耳とする。	中世。
第176図	64	在地系 土器	内耳鍋	北東部	-	-	-	口縁部 片	B	にぶい 褐	口縁部に粘土紐を貼り付けて内耳とする。外面に煤付着。	中世。
第176図 PL.148	65	在地系 土器	内耳鍋	9礫充 填	(26.5)	-	-	1/3		褐・黒 褐	口縁部下位は外反し、口縁部は内湾気味に開く。口縁部外面は小さく突き出る。口縁部下内面は明瞭な段をなす。	V期かV期以降。
第176図 PL.148	66	在地系 土器	内耳鍋	3墓	-	-	-	口縁部 片		灰	還元炎。器壁は薄く、内湾気味に伸びる。口縁部下は外反。口縁部内面は小さく突き出る。端部上面は平坦。内面口縁部下に段差はなく、屈曲部の稜も不明瞭。	IV・V期。
第176図 PL.148	67	在地系 土器	釜	34溝	(13.4)	-	-	1/4	B	灰	還元炎で焼き締まり弱い。口縁部は短く立ち上がり、端部上面の器表摩滅。肩部外面に取っ手と推定される接合痕が残る。接合痕内に、内面に貫通しない円孔が1箇所、外側に貫通する円孔が1箇所残る。貫通する円孔の内面周辺の器表が丸く剥離していることから、この円孔も内面に貫通していなかった可能性がある。	中世。
第176図	68	在地系 土器	不詳	北東部	-	-	-	体部片		黄灰	還元気味。残存部上部に横撫で。	中世か。
第176図 PL.148	69	焼締陶 器	小皿	表土	-	(5.6)	-	底部片		灰白	内面に自然釉。底部回転糸切無調整。	山皿。東濃型5型式、浅間窯下期。
第177図 PL.148	70	古瀬戸	折縁深 皿	北東部	-	-	-	体部片		灰白	外面に灰釉。	古瀬戸中期。
第177図 PL.148	71	古瀬戸	盤類	南西部	-	-	-	体部片		灰白	内外面に灰釉。	古瀬戸後I・II期。
第177図 PL.148	72	古瀬戸	盤類	南西部	-	-	-	体部片		灰白	内外面に灰釉。内外面下位は無釉。外面の轆轤目は顕著。	古瀬戸後IV古。
第177図 PL.148	73	古瀬戸	盤類	南西部	-	(11.4)	-	底部片		灰白	残存部無釉。底部内外面に目痕残る。体部から底部外面回転削り。	古瀬戸後IV古。
第177図 PL.148	74	古瀬戸	盤類	36溝	-	-	-	体部小 片		灰白	外面から体部内面途中まで灰釉。細かい貫入はいる。	後I～III期。
第177図 PL.148	75	古瀬戸	壺	南西部	-	-	-	体部片		灰白	外面は光沢のない鉄釉。内外面の轆轤目は顕著。	古瀬戸後III～IV期。
第177図	76	古瀬戸	瓶類	36溝	-	-	-	肩部片		灰白	肩部下位外面に4状の横線。外面の1部に灰釉。	古瀬戸。
第177図 PL.148	77	古瀬戸	梅瓶	2井戸	-	(9.0)	-	体部片		灰白	体部下位は外反。内面に灰釉。	中期。
第177図 PL.148	78	搬入系 土器か	片口鉢	南西部	-	-	-	口縁部 片	B	褐・灰	器壁薄く、還元炎でやや焼き締まる。体部はやや内湾し、口縁部は強く内湾。口縁部内面は、丸く低く突き出る。口縁部上面は凹線状に窪む。片口部が1部残存。	中世。
第177図 PL.148	79	常滑陶 器	片口鉢	南西部	-	-	-	口縁部 片		橙	片口鉢II類。口縁部の2.5cmのみ丁寧な横撫で。口縁部上面は明瞭に窪ませる。	13世紀後半。 74図20と同一個体の可能性高い。
第177図	80	搬入系 土器か	片口鉢 か	1道路	-	-	-	体部片		灰	還元炎で焼き締まる。体部は直線的に開き、口縁部下で外反。外面には皺状亀裂が認められる。使用により体部内面は平滑で、下部の器表は摩滅。	中世。
第177図	81	常滑陶 器	甕	南西部	-	-	-	体部片		灰	内外面の器表はにぶい赤褐色。	中世。
第177図	82	常滑陶 器	甕	1道路	-	-	-	肩部片		灰	器壁厚い。外面に自然釉。内面の器表は褐色。	中世。
第177図	83	常滑陶 器	甕か	1道路	-	-	-	体部片		灰	内面器表は褐色、外面器表は明赤褐色。器壁薄い。小型品か。	中世。
第177図	84	常滑陶 器	壺か甕	36溝	-	-	-	底部片		灰・灰 褐	砂底。外面は撫で。	中世。
第177図	85	常滑陶 器	甕	97溝	-	-	-	体部片		にぶい 黄褐	断面は灰色、器表はにぶい黄褐色。内面に斑状の自然釉。体部下位片か。	中世。
第177図	86	龍泉窯 系青磁	碗	21溝	-	-	-	口縁部 片		灰白	外面鎊蓮弁文。	横田・森田分類I-5-b類。
第177図 PL.148	87	龍泉窯 系青磁	碗	12住	-	-	-	体部片		灰白	鎊蓮弁文碗の体部小片。釉に貫入が入る。	横田・森田分類I-5-b類。
第177図 PL.148	88	龍泉窯 系青磁	碗	102土 坑	-	-	-	体部片		灰	内面に片彫りによる施文。	横田・森田分類I類か。
第177図 PL.148	89	龍泉窯 系青磁	碗	北東部	-	-	-	体部片		灰白	外面に鎊蓮弁文。	横田・森田分類I-5b類。
第177図 PL.148	90	龍泉窯 系青磁	碗	36溝	-	5.0	-	底部片		灰白	外面鎊蓮弁文。内面から高台外面に青磁釉。高台端部から高台内は無釉。	横田・森田分類I-5b類。
第177図 PL.148	91	龍泉窯 系青磁	碗	11住	-	(4.3)	-	底部片		灰白	高台端部を除き青磁釉。高台端部幅は狭い。釉はやや厚く、発色も良好。	横田・森田分類III類か。
第177図 PL.148	92	中国磁 器	白磁皿	北東部	(9.8)	-	-	1/3		灰白	内面から体部外面下位に白磁釉。細かい貫入が入る。	森田分類D群。

第4章 発掘調査の記録

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第177図	93	肥前磁器	小杯か	南西部	(6.0)	-	-	1/3		白	外面に草葉状の染付。	江戸時代。
第177図	94	肥前磁器	小碗	北西部	(7.5)	(3.4)	4.3	1/3		灰白	体部外面に染付。	17世紀末～ 18世紀中頃。 波佐見系。
第177図 PL.148	95	肥前磁器	小碗	南西部	(7.9)	3.3	4.2	1/2		灰白	磁化が不十分で焼成不良。口縁部外面の一部に釉がかからない。	江戸時代。波佐見系。
第177図	96	肥前磁器	小碗	確認面	(6.8)	2.5	3.4	3/4		灰白	釉は白濁。焼成不良。外面に笹文か。	江戸時代。
第178図	97	肥前磁器	小杯か	南西部	-	3.6	-	底部片		灰白	体部外面下位と高台境に圏線。	江戸時代。
第178図	98	肥前磁器	広東碗	北西部	-	(4.2)	-	1/2		灰白	高台はやや低く、器壁も厚い。残存部の底部内面は無文。	19世紀前半～ 中頃。
第178図	99	肥前磁器	小碗	南西部	-	(3.2)	-	2/3		灰白	体部外面下位と高台外面に幅広の圏線。	江戸時代。
第178図	100	肥前磁器か	丸碗	2住	-	(3.3)	-	1/4		白	外面に矢羽根文。底部内面に不明文様。釉は白濁し、素地の磁化も不十分で焼成不良。	18世紀後半～ 19世紀初頭。
第178図	101	肥前磁器	碗	北西部	-	(3.5)	-	底～体部片		白	体部外面に笠などの染付。高台は低く。器壁はやや薄く、半球形の碗であろう。	18世紀初頭から 中頃。
第178図	102	肥前陶器	呉器手碗	南西部	-	(4.6)	-	2/3		淡黄	高台内の扱りは浅い。高台端部を除き透明釉。細かい貫入が入る。	17世紀末～ 18世紀初頭。
第178図	103	肥前陶器	呉器手碗	2碟充填	-	5.2	-	底部完		淡黄	高台内は深い。細かい貫入が入る透明釉を全面に施釉。高台端部のみ無釉。部分的に釉は白濁。焼成不良。	17世紀後半。
第178図	104	肥前陶器	碗	南西部	-	4.0	-	底～体部片		灰白	高台内の扱りは浅く、底部の器壁は厚い。内面は透明釉、外面は銅緑釉。外面の高台脇以下は無釉。	17世紀中～ 18世紀前半。
第178図 PL.148	105	肥前磁器	碗	北西部	-	-	-	1/4		灰白	大型の碗。高台部分の断面にはぶい黄褐色。体部外面に草花文。底部内面は2重圏線内にコンニャク印判による五弁花。高台内は1重圏線内に不明銘。不規則な貫入が入る。焼成不良。	17世紀末～ 18世紀中頃。 波佐見系。
第178図	106	肥前磁器	碗	南西部	-	-	-	1/2		灰白	外面の染付は不鮮明。高台内に不明銘。	18世紀中頃～ 後半。
第178図	107	肥前磁器	碗	4住	-	3.7	-	底部完		白	底部の器壁厚い。底部内面1重圏線内に星梅鉢文。	18世紀後半～ 19世紀初。波佐見系。
第178図	108	肥前磁器	端反碗	確認面	(10.8)	(4.0)	5.7	1/3		白	外面に半菊状の染付。口縁部内面に3重圏線。底部は1重圏線内に不明文様の染付。	19世紀前半～ 中。
第178図	109	肥前陶器	碗	28A-10G	(10.8)	-	-	1/4		灰白	陶胎染付。外面は唐草文。内外面施釉。貫入が入る。	18世紀前半。
第178図	110	瀬戸・美濃磁器	碗	表土	-	(3.8)	-	1/4		白	高台内の扱りは深い。	近現代。
第178図	111	瀬戸陶器	腰鏝碗	28B-9G	-	4.0	-	1/3		灰白	口縁部外面下に螺旋状凹線。内面から口縁部外面に灰釉。凹線部から高台内にやや光沢のある鏝釉。灰釉に貫入が入る。高台端部摩滅。	登窯8小期。
第178図	112	美濃陶器	尾呂茶碗	南西部	(10.8)	-	-	1/4		灰白	内外面に鉛釉。口縁部に葉灰釉。	登窯5・6小期。
第178図	113	美濃陶器	小碗	攪乱	-	(4.0)	-	1/4		灰白	内面から高台脇に柿釉。内面に鉛釉状の部分が流れる。	登窯4小期。
第178図	114	瀬戸陶器	広東碗	北東部	-	(6.2)	-	底部		灰白	底部内面に梅鉢状文様。高台はやや低い。内外面に透明釉。不規則な粗い貫入が入る。	登窯10小期。
第178図	115	美濃陶器	丸碗	確認面	-	(5.0)	-	1/2		灰	内面から高台脇に鉛釉に近い灰釉。高台脇以下は無釉。	登窯7小期。
第178図	116	美濃陶器	丸碗	北東部	-	(5.0)	-	底～体部片		浅黄	内面から高台外面付近に透明釉。	登窯3小期。
第178図	117	美濃陶器	尾呂茶碗	北西部表土	-	6.0	-	底部		灰白	高台端部を除き鉛釉。高台径は大きい。	登窯5小期。
第178図	118	美濃陶器	尾呂茶碗	2碟充填	-	5.4	-	底部完		灰黄	内面から高台脇に鉛釉、高台脇以下は化粧状に薄くかかる。高台端部は無釉。内面の1部に葉灰釉かかる。	登窯6小期。
第178図	119	美濃陶器	尾呂茶碗	9碟充填	-	(5.5)	-	1/2			内面は鉛釉。残存部外面は無釉。	登窯6小期。
第178図	120	美濃陶器	尾呂茶碗	9碟充填	-	5.2	-	底部完			内面は鉛釉。外面は鉄化粧状に鉛釉を薄くかける。	登窯5小期。
第178図	121	美濃陶器	丸碗	37溝	-	5.2	-	底部		浅黄	内面から高台脇に鉛釉。	登窯7小期。
第178図	122	製作地不詳磁器	碗	37溝	(9.1)	(4.3)	4.85	1/4		白	外面に濃淡の呉須でゴム印判による施文。	近現代。
第178図 PL.148	123	肥前陶器	皿	南西部	-	5.0	-	体～底部		淡黄	京焼風陶器。底部内面に鉄絵具による下絵。内面から高台外面付近に透明釉。細かい貫入が入る。底部内面に目痕3箇所。高台内の削りは緩いアーチ状。	18世紀前半。
第178図	124	肥前磁器	小皿	南西部	-	(3.0)	-	2/3		灰白	残存部外面は無釉。残存部内面は無文で透明釉。見込み蛇ノ目釉剥ぎ。	17世紀中頃～ 18世紀中頃。
第178図	125	瀬戸陶器	志野丸皿	南部	(11.5)	(7.8)	2.3	1/6		淡黄	体部から底部の器壁は厚く、口縁部は器厚を減じて小さく外反。内外面に長石釉。貫入が入る。	登窯2小期。

第2節 1区の遺構と遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第178図	126	瀬戸陶器	志野丸皿	北東部	(10.8)	(6.1)	1.9	1/8		淡黄	体部から口縁部は均一な厚さ。体部は内湾。内外面に長石釉。	登窯3小期。
第178図	127	美濃陶器	皿	南部	-	(5.0)	-	1/4		褐灰	御深井皿。木瓜形を呈すると推定され、残存部は無文。	登窯3・4小期。
第178図	128	瀬戸陶器	丸皿	確認面	(12.0)	(7.6)	1.8	1/6		淡黄	内外面に志野釉。外面口縁部以下は回転篋削りで、底部脇を小さく抉る。底部外面に目痕1箇所残る。	登窯3小期。
第179図	129	美濃陶器	反皿	177土坑	(13.0)	-	-	1/6		淡黄	口縁部は外反。内面から高台脇に灰釉。	登窯4小期。
第179図	130	美濃陶器	丸皿	3灰かき	(12.8)	(6.8)	2.6	1/4		灰黄	外面口縁部以下は幅広い回転篋削り。高台は三角形。内面から体部外面中位付近に灰釉。底部内面に高台状の重焼痕。	登窯4小期。
第179図 PL.148	131	美濃陶器	摺絵皿		-	-	3.3	1/3		灰白	木瓜形の皿。底部内面に鉄絵俱による型紙摺りで桔梗文。内面から高台脇に灰釉。相対する長辺の口縁部外面から底部周縁に銅緑釉。	登窯5小期。
第179図 PL.148	132	美濃陶器	摺絵皿	南西部	-	6.2	-	体～底部		灰白	木瓜形の皿。底部内面に鉄絵俱による型紙摺りで桔梗文。内面から高台脇に灰釉。相対する長辺の口縁部外面から底部周縁に銅緑釉。	登窯5小期。
第179図 PL.148	133	美濃陶器	摺絵皿	南西部	-	-	-	体～底部		灰白	木瓜形の皿。底部内面に鉄絵俱による型紙摺りで桔梗文。内面から高台脇に灰釉。長辺の底部周縁に銅緑釉。	登窯5小期。
第179図	134	美濃陶器	灯火皿	確認面	(9.8)	(4.6)	2.0	1/3		灰黄	内外面錆釉施釉後に体部外面中位以下の釉を拭う。内面に重ね焼き痕。	登窯8・9小期。
第179図	135	美濃陶器	灯火皿	25溝	(9.3)	(4.2)	2.1	1/4		淡黄	体部外面は回転篋削りで底部外面をは抉り込む。底部は基筭底状。内面から口縁部に鉛釉。	登窯7小期。
第179図	136	志戸呂陶器	灯火受皿	北東部	(8.8)	(4.0)	2.05	1/3		橙	外面口縁部以下は回転篋削り。内面から口縁部外面に錆釉。受け部にアーチ状の切り込み端部残る。	18世紀中～後半。
第179図	137	志戸呂陶器	灯火受皿	南西部	(8.4)	(4.0)	1.9	1/4		灰白	外面口縁部以下は回転篋削り。内面から口縁部外面に錆釉。受け部にアーチ状の切り込み端部残る。	18世紀中～後半。
第179図	138	志戸呂陶器	灯火受皿	南西部	(9.0)	-	-	1/6		灰白	外面口縁部以下は回転篋削り。内面から口縁部外面に錆釉。	18世紀中～後半。
第179図	139	肥前磁器	青磁香炉か火入	南西部	-	(7.4)	-	底～体部片		灰白	底部を除く外面に青磁釉。粗い貫入が入る。	江戸時代。
第179図	140	肥前陶器	香炉か火入	南中部	-	(5.5)	-	底部片		灰	体部から高台外面に透明釉。内面と高台端部から高台内は無釉。	17世紀後半から18世紀中頃。
第179図	141	美濃陶器	筒形香炉	南西部	-	-	-	口縁部片		淡黄	外面に横線。内外面に鉛釉。口縁部外面に連続した微少剥離痕。	登窯6小期。灰吹として使用。
第179図	142	美濃陶器	筒形香炉	北東部	(11.0)	-	-	1/6		淡黄	口縁部は内外面に小さく突き出る。口縁部上面は内傾して窪む。口縁部内面から外面に鉛釉。	登窯7小期。
第179図	143	美濃陶器	筒形香炉	南中部	-	(7.0)	-	1/4		淡黄	体部外面に2条の横線。体部外面に鉛釉。低い脚が1箇所残存。	登窯7小期。
第179図	144	肥前磁器	鉢	確認面	-	-	-	口縁部片		白	八角形の鉢。外面に「福」と宝文?内面は墨弾きか。	18世紀末～19世紀中。
第179図	145	美濃陶器	黄瀬戸鉢	南西部	-	(11.8)	-	1/4		灰白	内面から高台外面付近に灰釉。高台端部平滑。	登窯5・6小期。
第179図	146	瀬戸陶器	片口鉢	北東部	-	10.0	-	底～体部片		淡黄	内面から高台脇に灰釉、内外面に銅緑釉を流す。内面に目痕1箇所残る。	登窯5～7小期。
第179図	147	瀬戸陶器	片口鉢	南西部	(17.2)	-	-	1/6		淡黄	片口部欠損。体部から口縁部は内湾。内外面灰釉。部分的に釉は白濁。やや焼成不良。	登窯8・9小期。
第179図	148	美濃陶器	片口鉢	攪乱	(18.0)	-	-	1/10		灰白	口縁部内面から外面に鉛釉。口縁部外面直下に1条の凹線。	登窯5小期。
第179図	149	美濃陶器	片口鉢	確認面	-	(8.4)	-	1/4		浅黄	内面から体部外面下位に灰釉。体部外面以下は回転篋削り。高台内に抉りは浅い。底部内面に目痕1箇所残る。	登窯7小期。・8小期。
第179図	150	瀬戸陶器	練鉢	1道路	-	(14.7)	-	1/2		灰黄	内面から体部外面下位に灰釉。貫入が入る。内面に団子状の目痕3箇所。	登窯8・9小期。
第179図	151	瀬戸陶器	半胴甕	南西部	(16.0)	-	-	1/8		黄灰	内外面に錆色の鉄釉。口縁部上面に目痕1箇所。口縁部は肥厚し、端部外面は細かい剥離が連続。口縁外面下に2条の凹線、更に下部に幅広い凹線1条。	登窯7小期。
第180図	152	美濃陶器	有耳壺蓋	確認面	(9.8)	(5.0)	2.5	1/6		灰黄	下部外面底部右回転糸切無調整。体部は皿状に開き、口縁部は開く。上面中央のつまみ欠損。上面に灰釉が斑状に少量かかる。	登窯6・7小期。
第180図	153	肥前磁器	徳利か	北東部	-	(4.9)	-	1/2		灰白	高台外面に1重圈線。高台端部を除く外面に施釉。	江戸時代。
第180図	154	肥前磁器か	徳利	北東部	-	(9.8)	-	1/4		灰白	人造呉須による染付か。高台端部を除く外面に透明釉。	19世紀中頃以降。
第180図	155	肥前磁器	青磁瓶類	南西部	-	(6.2)	-	2/3		灰白	高台端部を除く外面に青磁釉。体部外面の青磁釉は白濁。焼成不良。	江戸時代。
第180図	156	美濃陶器	徳利	南西部	-	(8.4)	-	底部片		灰黄	体部外面下端以上に鉄釉。体部外面下端から高台内の釉は薄く、鉄化粒状をなす。内面も鉄化粒状に薄く釉がかかり、部分的に溜まる。	登窯5小期。158と同一個体の可能性高い。
第180図	157	美濃陶器	徳利	南西部	-	-	-	体部片		灰黄	内外面に錆釉で内面の釉は薄い。体部外面に条線複数廻る。外面に灰釉?流れる。体部外面を大きく窪ませる。	登窯8～11小期。



第4章 発掘調査の記録

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第180図	158	美濃陶器	徳利	確認面	-	-	-	体部下位片		灰黄	体部外面は鉄釉で下端は釉を拭う。内面は錆釉状に釉が薄くかかる。	登窯5小期。156と同一個体の可能性高い。
第180図	159	美濃陶器	油徳利	確認面	-	-	-	体部上位片		浅黄	内外面に錆釉。外面に凸帯貼り付け。穿孔部は残存しない。	登窯8～11小期。
第180図	160	瀬戸陶器	すり鉢	7礫充填	-	(11.0)	-	1/3		浅黄	底部内面は渦巻き状のすり目。	江戸時代。
第180図	161	瀬戸陶器	すり鉢	北東部	-	(16.0)	-	1/4		灰白	体部外面から底部外面は回転篋削り。内外面は錆釉で、外面の釉を拭う。底部のすり目は、周縁をドーナツ状に施した後、中央に直線状に施す。内面は使用により器表摩滅。底部外面周縁は摩滅。	
第180図	162	瀬戸陶器	すり鉢	北西部	-	-	-	口縁部片		灰白	錆釉。口縁部外反し、端部を上方に尖らせる。口縁端部の先端には細かい剥離が連続する。口縁端部の摩滅(剥離?)形成過程を知りうる資料であろう。	登窯3小期。
第180図	163	堺陶器	すり鉢	南西部	-	-	-	口縁部片		橙	外面口縁部下は回転篋削り。口縁部内面は屈曲して内湾。口縁端部内面の段は小さく明瞭。口縁部内面の突起上面は丸みを持つが、先端は下向きに尖る。	18世紀前半～中。
第180図	164	瀬戸陶器	戸車	南中部	(6.0)	孔(1.2)	1.25	1/3		灰白	中央部と外周に灰釉。	登窯8～11小期。
第180図 PL.148	165	在地系土器	不詳	2住	-	-	-	破片	B	黄褐	断面形は一方に段を有する「L」字状をなす。両端は欠損。屈曲部内側に貫通しない円穴が1箇所。	時期不詳。
第180図	166	石製品	硯か	北中部	-	-	-	破片		灰	陸部分は使用により窪む。側面は非常に平滑。	時期不詳。
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ(g)	製作状況・使用状況		備考	
第180図 PL.148	167	砥石		切り砥石	砥沢石	(6.1)	4.5	112.5	側面に櫛歯タガネ状痕。砥面は幅が狭く、側縁のタガネ状痕は砥面再生を試みたものかもしれない。			
第180図 PL.148	168	砥石		切り砥石	砥沢石	(10.6)	3.0	112.2	四面使用。			
-	176	砥石	-	切り砥石	珪質頁岩	(7.4)	(4.1)	56.9	四面使用。細粒石材を用いた仕上げ砥。下端側を欠損。		非実測	
-	177	砥石	-	切り砥石	珪質粘板岩	(4.1)	(3.3)	7.1	やや軟質だが、細粒質石材を用いた仕上げ砥。剥落して詳細は不明。		非実測	
-	178	敲石		棒状礫	雲母石英片岩	(9.2)	(2.4)	68.5	小口部上端に敲打痕。		非実測	
-	179	砥石?	南部	切り砥石	砥沢石	(2.6)	(2.3)	6.1	研磨面は見られず不明瞭だが、形状・石材から裏面側を取り込んだ砥石の側面破片と捉えた。		非実測	
-	180	砥石	27-T-9	切り砥石	砥沢石	(8.8)	(6.1)	171.0	四面使用。裏面側に斜向する刃ならし傷。		非実測	
-	181	砥石	27-T-9	切り砥石	砥沢石	11.2	1.9	79.9	背面側に光沢の強い研磨面が形成されているが、裏面側の光沢は極めて弱い。側面には折り取り面が残る。		非実測	
-	182	板破片?		体部破片	緑色片岩	(8.4)	(5.6)	116.9	厚さ1.7cm。背面側は剥落。		非実測	
-	183	板破片	表採	体部破片	緑色片岩	(23.4)	(9.8)	684.3	厚さ1.8cm。背面側は薄く剥落。		非実測	
挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置	径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	残存	形・成調整等			
第180図 PL.148	169	鉄製品 火打金	北東 検出面	-	19.0	3.9	-	一部欠	携帯用山形火打金。刃部(4.5mm)に比して背部(1.8mm)と頂部の円孔部(1.8mm)は薄い。円孔は錆によって塞がる。左端部は欠損。使用による刃部の抉れは認められない。			
第180図 PL.148	170	鉄製品 鎌か	36溝	-	-	-	-	破片	鎌の刃部から柄にいたる箇所か。刃部と推定される部分の下部は薄くなり、表面の背部分には段差が認められる。			
第180図 PL.148	171	銅銭 寛永通寶	表土 1号集石 周辺	-	-	-	-	1/4	寛、通の2文字が判読可能。遺存状態が悪く銭文やや不鮮明。			

### 第3節 2区の遺構と遺物

#### 第1項 中世

2区で調査された遺構の大部分は、中世に属する。遺構の内訳は、掘立柱建物23棟、竪穴状遺構3基、土坑44基、井戸6基、ピット330基、溝15条である。遺構のほとんどは、屋敷内部を構成するものである。

調査区は大きく4つに分けることができる。屋敷空間2か所と、その周辺部分2か所である。2区1号屋敷は、西半部に位置する。概ね14～15世紀代の屋敷遺構である。範囲は3号溝を東限とし、北限は4・7号溝、南限は2号溝となり、西限は調査区外へ延びる。したがって、規模は溝外で南北約34.5m、東西は25m以上となる。遺構のほとんどは、この中で検出されている。ただし、内部には東西を区分する6号溝があり、その西側延長は1区2号溝である。その結果、1区東南部を含めた空間が

屋敷内部に含まれることとなる。しかし、やや不自然な形態となり、主体部は1区となるため、1区2号屋敷と同一と考える方が妥当であろう。

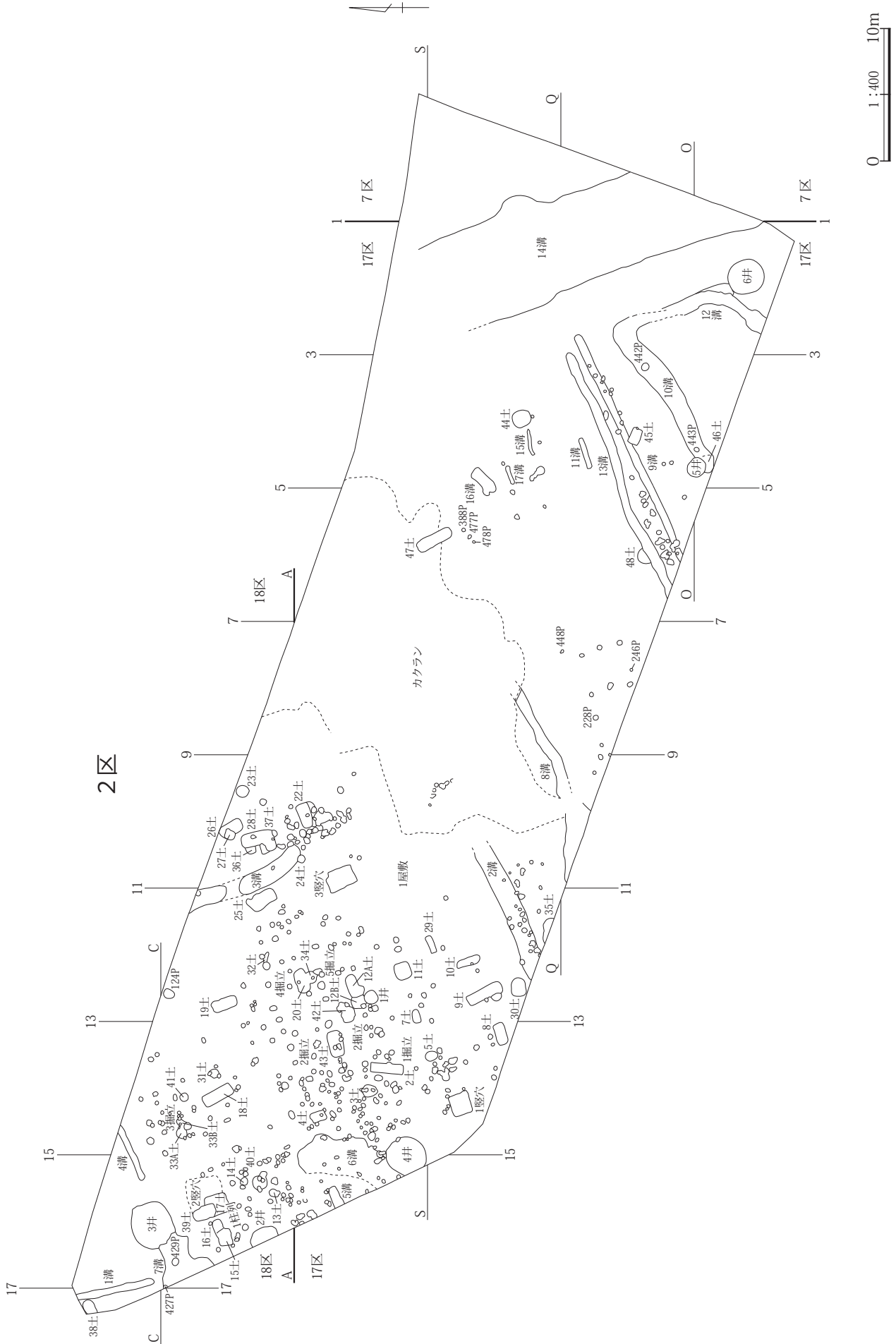
もう一つの屋敷は調査南東部に位置し、10・12号溝で囲まれたものである。中心部分は3区にあり(3区1号屋敷)、2区部分はその北東隅部と位置づけられる。

周辺部分も2か所に分かれる。東端の14号溝は近世まで継続するが、走向方位は屋敷の区画溝と一致するため、中世まで遡る可能性が高い。この場合、屋敷群を広範囲に規定し合う関係となる。その結果、14号溝東側の無遺構空間も意味を持つこととなる。

もう一つの空間は、2区1号屋敷と3区1号屋敷に南北を挟まれた部分で、2区中央部に南北幅約30mの帯状をなし、東限は14号溝となる。ただし、調査区中央部では北端から中央にかけて、大きく攪乱された部分があるため、この空間が帯状のまま東へ延びるのか、北へ曲がってL字形をなすのかは判断できない。北限は1号屋敷の南辺2号溝と考えるが、その南に並走する8号溝も区画

第94表 2区掘立柱建物計測値一覧

分類名	建物No	主軸方位	面積㎡	桁行平均	桁行平均柱間	寸尺	梁間平均	寸尺	規格(梁間×桁行)	埋没状況	分類内での重複	備考/重複
1	1	N-76°-E	28.08	6.44	2.147	7.1	3.835	12.7	1×3間・東西棟+西下屋	柱痕	18	→13/8・15・16・18
	4	N-77~78°-E	15.54	3.905			4.055	13.4	2×1間・正方形	埋戻		5・12
	6	N-13~14°-W	36.3	6.425	2.142	7.1	4.45	14.7	2×3間・南北棟+西張出	柱痕	18	2・8・9・10・11・14・15・16・17・18・19
	18	N-78°-E	15.58	4.265			3.65	12.0	2×1間・南北棟		1/6	1・6・8・15・16・17
	23	N-77~79°-E	9.34	3.125			2.99	9.9	2×1間・南北棟	柱痕		
	1柱	N-76°-E							2間			
2-1	2	N-16°-W	35.67	6.28	2.093	6.9	3.49	11.5	1×3間・南北棟+西庇	柱痕		6・8・9・10・11・14・15・16・17・19
	5	N-15~18°-W	19.24	3.86			3.765	12.4	1×2間・正方形+南庇			4・12
	7	N-15~17°-W	18.33	4.30			4.195	13.8	1×2間・正方形			9・10・11・14・20、6溝
	21	N-75°-E	11.1	3.92			3.02	10.0	1×2以上間・東西棟	柱痕		20
2-2	8	N-72°-E	19.46	4.55			4.13	13.6	2×2間・正方形			1・2・6・9-11・14-18
	12	N-17~19°-W	14.28	3.41			4.185	13.8	2×1間・南北棟			4・5
	19	N-17~21°-W	12.5	3.745			3.38	11.2	2×1間・南北棟	柱痕		2・6・9・10・11・14・15
3	9	N-22~23°-W	11.93	3.615			3.32	11.0	1×2間・正方形	柱痕	14/17	2・6・7・8・10・11・14・15・17・19
	13	N-70°-E	11.97	3.77			3.125	10.3	1×2間・東西棟	埋戻		1・15・16
	14	N-68~70°-E	20.9	6.085	2.028	6.7	3.485	11.5	1×3間・東西棟		9/17	2・6・7・8・9・10・11・15・17・19、6溝
	17	N-21~23°-W	16.89	4.15			4.12	13.6	2×2間・正方形		9/14	2・6・8・9・14・15・18、6溝
	20	N-66~68°-E	18.33	5.05	1.683	5.6	3.63	12.0	2×3以上間・東西棟	柱痕		7・21
4	3	N-65~68°-E	15.04	4.405			3.41	11.3	1×2間・東西棟			
	10	N-65~68°-E	15.9	3.935			4.025	13.3	2×2間・正方形		11/15	→11/6・7・8・9・14・15・19
	11	N-65~66°-E	21.16	6.47	2.157	7.1	3.255	10.7	1×3間・東西棟	柱痕	10/15	←10/2・6・7・8・14・17・19、6溝
	15	N-23~26°-W	35.12	6.545	2.182	7.2	4.08	13.5	1×3間・南北棟+西張出		10/11/16	1・2・6・8・9・10・13・14・16・17・18・19
5	16	N-29°-W	19.8	4.67			4.255	14.0	2×1間・南北棟	柱痕	15	1・2・6・8・13・15・17・18
6	22	N-86~88°-W	5.95	3.365			1.78	5.9	1×2間・東西棟			



第181図 2区全体図



第182図 2区掘立柱建物分布図

溝の様相を示す。しかし、走向方位および形態が若干異なるため、この周辺地域に含めることとする。南限は3区1号屋敷の北辺の一部となる10号溝と考えるが、その北に並走する13号溝も区画に規制されている。この溝も遺構の帰属を判断し難いが、一応この周辺地域に含めることとする。この空間にも22・23号掘立柱建物など若干の遺構集中部分があり、生活域の性格もうかがえる。

### 1 掘立柱建物・柱穴列

調査段階で認定されていた1～5号掘立柱建物5棟と1号柱穴列に加え、整理段階で新たに6～23号掘立柱建物18棟を追加認定した。分布については、1号屋敷内に21棟、南側周辺地域に2棟が散在する。

主軸方位に着目すると、第94表のとおり掘立柱建物は6種類に分類できるが、1～5類と6類は数値が離れる。つまり、1～5類はすべて1号屋敷内に属し、6類は22号掘立柱建物のみで、周辺地域に位置する。真北に対して西へ86～88度傾く。

1類は主軸方位及び直交方向が真北に対して西へ11～14度傾く5棟で、18号掘立柱建物は1・6号掘立柱建物と重複し、最低2時期が混在する。規模では1・6号掘立柱建物が主屋である。1号柱穴列も含まれる。また、23号掘立柱建物は周辺地域に位置する。

2類は同じく西へ15～19度傾く7棟で、15～18度傾く1群4棟と、17～19度傾く2群3棟に細分される。2号掘立柱建物が主屋で、2区で最大面積を持つ。構造的にも規格性が高い。2号掘立柱建物と2群8・19号掘立柱建物が重複する。また、1群5号掘立柱建物と2群12号掘立柱建物が重複する。一方、1群でも7・21号掘立柱建物は近すぎて並存できないため、7号掘立柱建物を2群に含めて考えると、概ね群内での重複関係はなくなる。

3類は同じく20～23度傾く5棟で、9・14・17号掘立柱建物は相互に重複している。主屋規模は20号掘立柱建物だが、北に偏在している。6号溝との関係も考慮される。

4類は同じく西へ22～26度傾く4棟で、15号掘立柱建物は10・11・16号掘立柱建物と、加えて10・11号掘立柱建物は相互にも重複している。主屋は11・15号掘立柱建物であり、重複関係にある。3号掘立柱建物は北に偏

在している。

5類は1棟だけ分けられる。真北に対して西へ29度傾く。4類に含めても違和感のない建物である。

**1号掘立柱建物**(第183図、P L.66・69、第95表)

**位置** 17R・S-12～14グリッド。

**重複** P1は21号ピットより前出。P2は2号土坑と重複するが新旧関係不明。P3は13号掘立柱建物P2より前出、P4は13号掘立柱建物P4より前出か。P8は149号ピットより後出。平面上、18号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

**主軸方位** N-76°-E **面積** 28.08㎡

**形態** 1×3間+西下屋・東西棟。桁行柱間を平均すると、2.1533m・約7.1尺となるが、北辺のP2は西へ7cm、P3は東へ13cm寄る。南辺のP6は10cm東へ、P7は6cm西へ寄る。南北辺とも中央の1間が10～16cm広い。柱筋の通りは全体に良く、規格性がある。下屋の柱間は0.9mと1.04mで桁行柱間の半間に相当する。梁間は平均3.835mで、桁行柱間2間より狭い。P4・18は柱痕を一部残し、埋没土14は掘り方を充填したものと見える。柱穴の径は40～50cmが主体で、形態は円形・楕円形が大半を占める。身屋の柱穴の深さは70cmと深いP8、19cmと浅いP6を除き、50cm前後が基本である。下屋の柱穴P9・10は、深さ14・20cmと浅い。中央南端に位置する楕円形の5号土坑は、内部施設の可能性を持つ。詳細な規模は第95表のとおり。中世以降の遺物は出土していない。

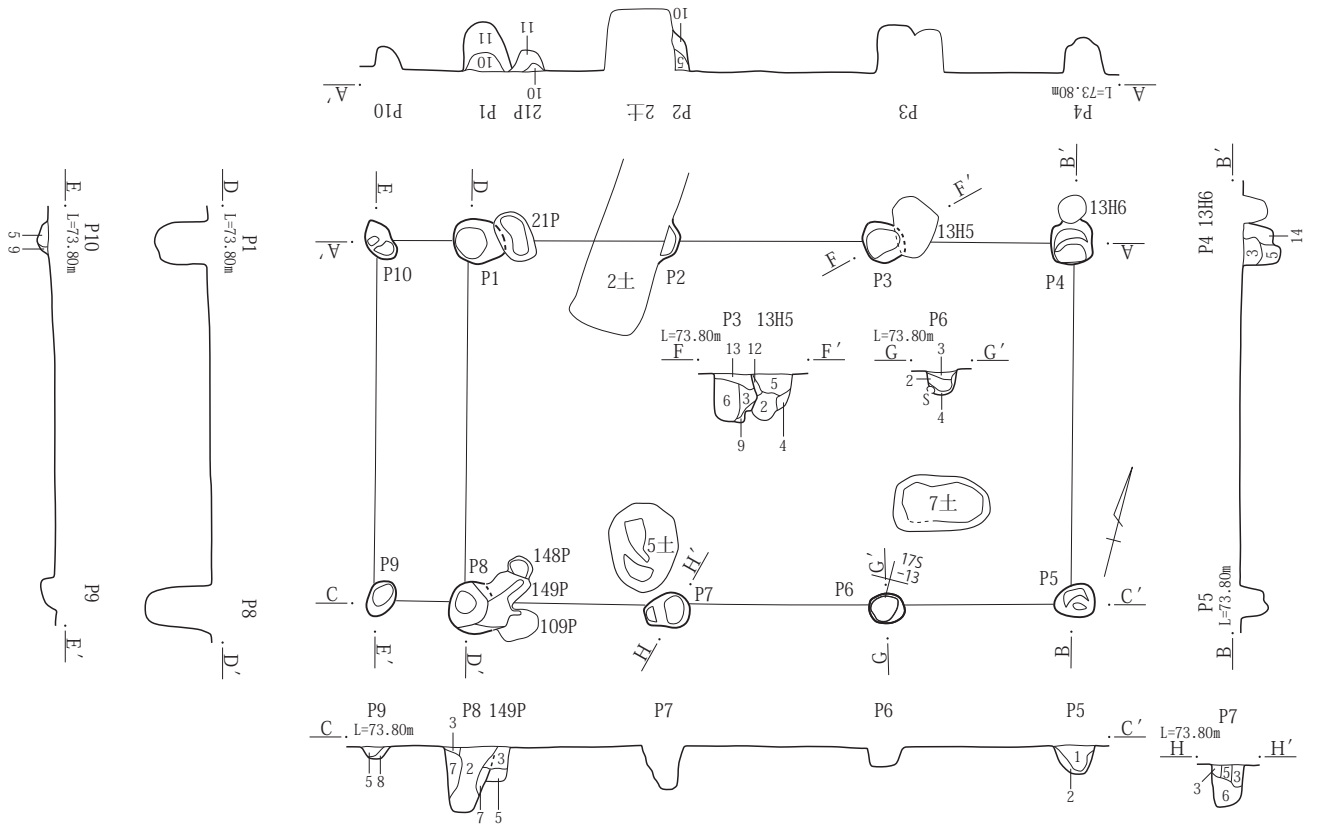
**2号掘立柱建物**(第184図、P L.69・70、第96・97表)

**位置** 17S～18A-12～14グリッド。

**重複** P4は42号土坑、P10は3号土坑、P9は43号土坑と重複するが新旧関係不明。6・9・10・15・16・17号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

**主軸方位** N-16°-W **面積** 37.31㎡

**形態** 1×3間+西庇・南北棟。桁行柱間を平均すると、2.0667m・約6.8尺となるが、東辺のP2は28cm北へ、P3は34cm南へ寄り、西辺のP6は14cm南へ、P7は18cm南へ寄る。柱筋の通りは全体に良く、規格性がある。柱痕はP1でほぼ残っており、埋没土2で掘り方を充填したものと見える。P3の埋没土6も同様である。P8は埋没土10・11で水平方向に埋まっており、廃棄後



- |                            |                                 |
|----------------------------|---------------------------------|
| 1 暗褐色土 ローム粒子・炭化物含む。        | 8 暗褐色土 褐色土ブロック含む。               |
| 2 暗褐色土 ロームブロック含む。          | 9 褐色土                           |
| 3 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量に含む。 | 10 暗褐色土 黄白色土ブロック含む。             |
| 4 黄褐色土                     | 11 暗褐色土 軟らかく粘性あり。黄白色土ブロックを多量含む。 |
| 5 暗褐色土 ローム粒子含む。            | 12 暗褐色土 ローム粒子多量に含む。             |
| 6 暗褐色土 ローム粒子少量含む。          | 13 暗褐色土 やや硬い。ロームブロック・白色粒子含む。    |
| 7 黄白色土+暗褐色土                | 14 ロームブロック+暗褐色土互層               |

0 1:80 2m

第183図 2区1号掘立柱建物

第95表 2区1号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		1×3間+西下屋・東西棟			面積	28.08㎡	旧ピット番号
主軸方位		N-76°-E			位置	17R・S-12~14	
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
北辺 6.40	P 1	58	47	52	楕円形	2.08	20
	P 2	45	(15)	46	不明(重複)	2.31	142
	P 3	47	42	48	円形	2.02	77
東辺 3.73	P 4	(48)	43	40	隅丸方形	3.73	359
南辺 6.52	P 5	44	36	30	楕円形	2.06	102
	P 6	38	32	19	円形	2.25	323
	P 7	49	38	53	楕円形	2.21	44
西辺 3.83	P 8	51	(40)	70	不明(重複)	0.89 P1~3.83	108
下屋 0.89	P 9	41	28	14	楕円形	3.77	5
下屋 1.03	P 10	47	28	20	楕円形	P1~1.04	266

に人為的に埋められた可能性が高い。同じくP10も3号土坑と重複するが、同様な埋没である。柱穴の長径は45～65cmが主体であり、底のP11の径は小さく、P12は2基の重複である。柱穴の形態は隅丸方形と円形・楕円形が混在する。深さは身屋部でP1を除き、30cmを超える。底の柱穴は38cmと深いP12を除き、20cm前後と浅い。底の柱間は2.04mと2.14mで、桁行柱間の1間に相当する。梁間は平均3.57mで、桁行柱間2間より狭い。詳細な規模は第96表のとおり。

**出土遺物** P4底面で1の在在系土器が出土している。

**時期** 出土遺物から中世に比定される。

**3号掘立柱建物**(第185図、P L .65・70、第98表)

**位置** 18B・C-13～15グリッド。

**重複** P2は172号ピット、P5は326号ピットと重複するが新旧関係不明。

**主軸方位** N-65～68°-E **面積** 15.0㎡

**形態** 1×2間・東西棟。柱筋の通りは全体に良いが、西辺は東辺より18cm狭いため、南辺は東下がり傾向。平面形はやや台形となる。北辺の中間柱P3は9cm西へ寄り。柱痕も見られず、埋没土に特徴的なものはない。柱穴の径は40cm前後が主体で、深さは50cmと深いP2を除き、30cm前後が主体である。P2は棟持柱の可能性もある。この場合、南北棟と見なされる。柱穴の形態は全て円形・楕円形である。梁間は平均3.41mで、桁行柱間2間よりかなり狭い。中央西端の33A号土坑、南東部の41号土坑とともに整った円形で、内部施設の可能性を持つが、焼土や炭化物の集中など特徴的な状況はない。33B号土坑も位置から関連が想定される。詳細な規模は第98表のとおり。中世以降の遺物は出土していない。

**4号掘立柱建物**(第186図、P L .65・70、第99表)

**位置** 17T・18A-11・12グリッド。

**重複** P1は32号土坑と、P3は146・161号ピットと重複するが新旧関係不明。平面上、5号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

**主軸方位** N-77～78°-W **面積** 15.54㎡

**形態** 2×1間・正方形。南辺が北辺より7cm長いので、西辺は東へ内傾する。北辺・南辺の中間柱P3・6は12cm程度西へ寄り、柱筋からやや外側へ張り出しており、棟持柱と見なされる。柱痕は見られない。P1・5は黄褐色土を埋没土にするなど、全体として水平方向に埋ま

るものが多く、廃棄後に人為的に埋められた可能性が高い。柱穴の径・深さともに、50cm前後を主体とする。形態は隅丸方形と円形・楕円形が混在する。南西隅の144号ピットと、北東隅の153号ピットとともに整った円形で形態は土坑に近くやや深い。内部施設の可能性を持つが、焼土や炭化物の集中など特徴的な状況はない。中央南寄りの34号土坑は重複により詳細は不明ながら、内部施設の可能性を持つ平坦な土坑である。また、32号土坑は溝状でP1と153号ピットと重なっており、壁面との関係も想定できる。詳細な規模は第99表のとおり。中世以降の遺物は出土していない。

**5号掘立柱建物**(第187図、P L .65・70、第100表)

**位置** 17T・18A-11・12グリッド。

**重複** 平面上、4号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

**主軸方位** N-15～18°-W **面積** 19.24㎡

**形態** 1×2間+南庇・正方形。柱筋の通りは全体に良い。南辺は北辺より18cm長いので、東辺は西へ内傾する。平面形はやや台形。北辺の中間柱P6と南辺の中間柱P3は、ともに西へ10cm程度寄る。明確な柱痕はないが、埋没土9・11は掘り方を充填したものと言える。P3の長径は52cmと長く、柱の立て替えなどによる柱穴の重複や、柱が抜き取られた可能性もある。他の柱穴の径は40cm前後が主体である。柱穴の形態は隅丸方形と円形・楕円形が混在する。深さは底部分のP7～9は20cm前後と浅く、身屋部分は35～56cmと深い。柱間は1.33mと1.15mである。北西隅の20号土坑は浅い隅丸長方形で、西側半分は外側となるが、内部施設の可能性を持つ。焼土や炭化物の集中などはなく、平坦な特徴を持つ。詳細な規模は第100表のとおり。中世以降の遺物は出土していない。

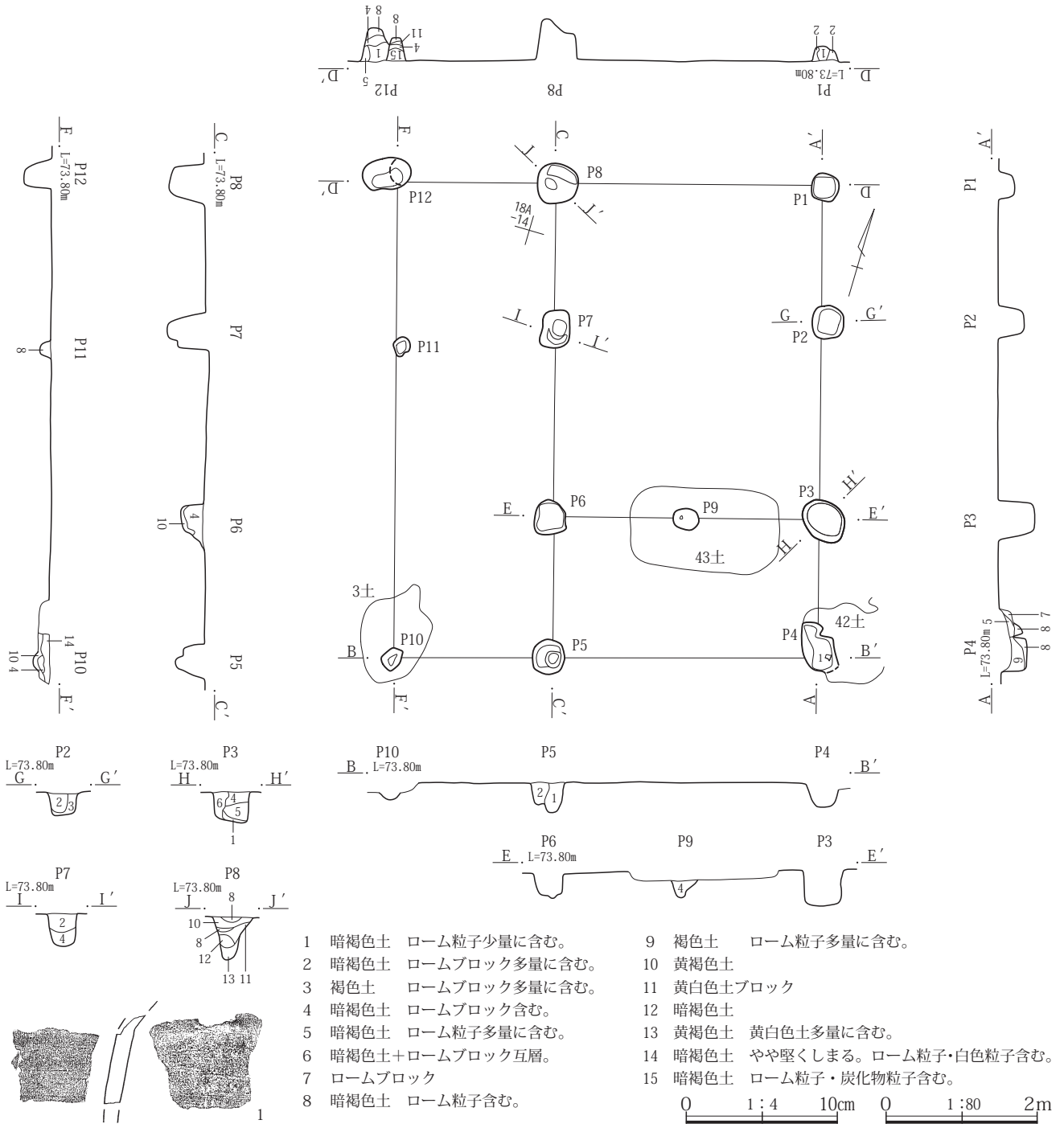
**6号掘立柱建物**(第188図、P L .66・70、第101表)

**位置** 17S～18A-13・14グリッド

**重複** P2は311・313・314号ピットと、P3は43号土坑と、P8は11号掘立柱建物P2と重複するが新旧関係不明。2・9・10・15～18号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

**主軸方位** N-13～14°-W **面積** 36.2㎡

**形態** 2×3間+西張出・南北棟。桁行柱間を平均すると、2.1417m・約7.1尺となるが、東辺のP2は14cm北へ、



第184図 2区2号掘立柱建物と出土遺物

第96表 2区2号掘立柱建物 計測表

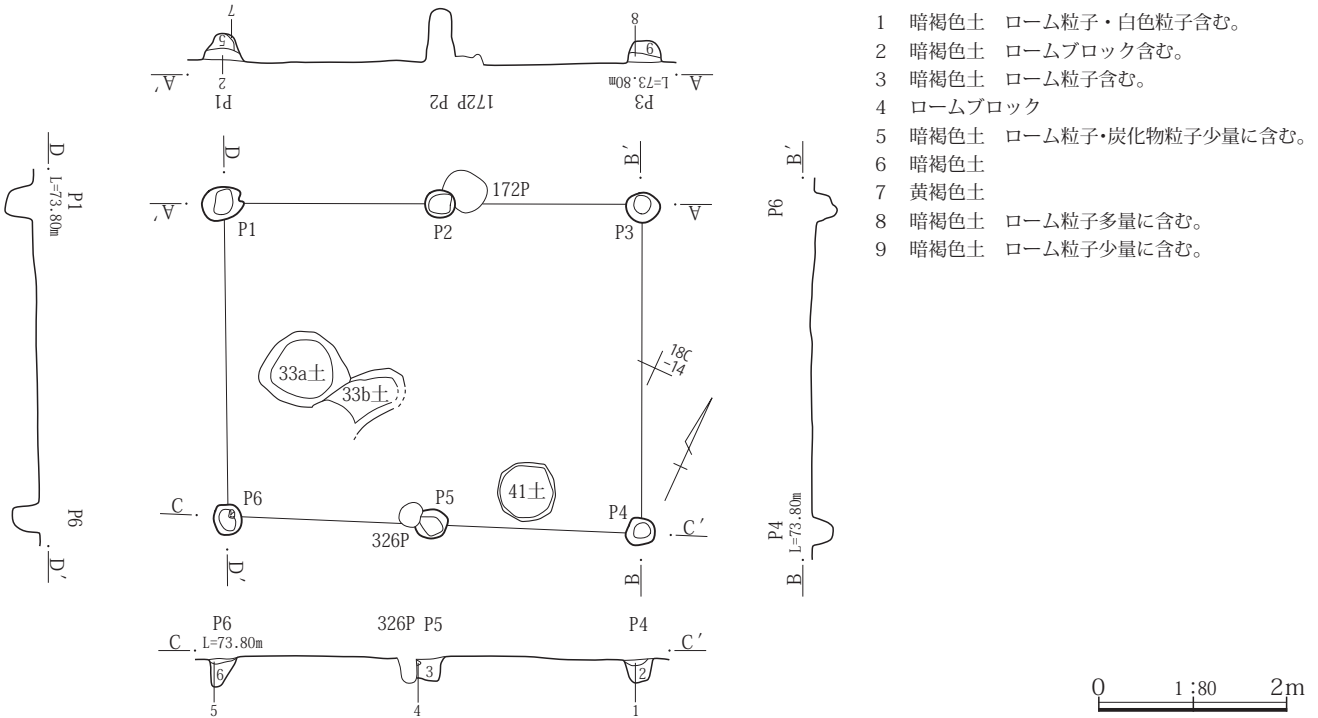
建物全体の規模		1×3間+西庇・南北棟			面積	37.31㎡		旧ビット番号
主軸方位		N-16°-W			位置	17S~18A-12~14		
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ビットとの間隔(m)		
		長径	短径	深さ				
東辺 6.12	P 1	36	36	21	隅丸方形	1.78		453
	P 2	46	43	34	隅丸方形	2.62		454
	P 3	63	50	48	楕円形	1.72 P 9へ1.90		315
南辺 3.52	P 4	(75)	43	33	不明(重複)	3.52		353・354
西辺 6.28	P 5	45	43	38	円形	1.87		36
	P 6	46	40	29	隅丸方形	2.49		321
	P 7	50	36	53	隅丸方形	1.92		39
北辺 3.62	P 8	54	52	54	円形	P 1へ3.62		187
	P 9	(35)	(26)	20	楕円形	P 6へ1.74 P 3へ1.89		356
庇 2.14	P 10	(31)	(24)	8	不明(重複)	4.13 P 5へ2.14		3土
	P 11	27	22	15	円形	2.27		171
庇 2.13	P 12	42	(28)	38	楕円形	P 8へ2.04		232



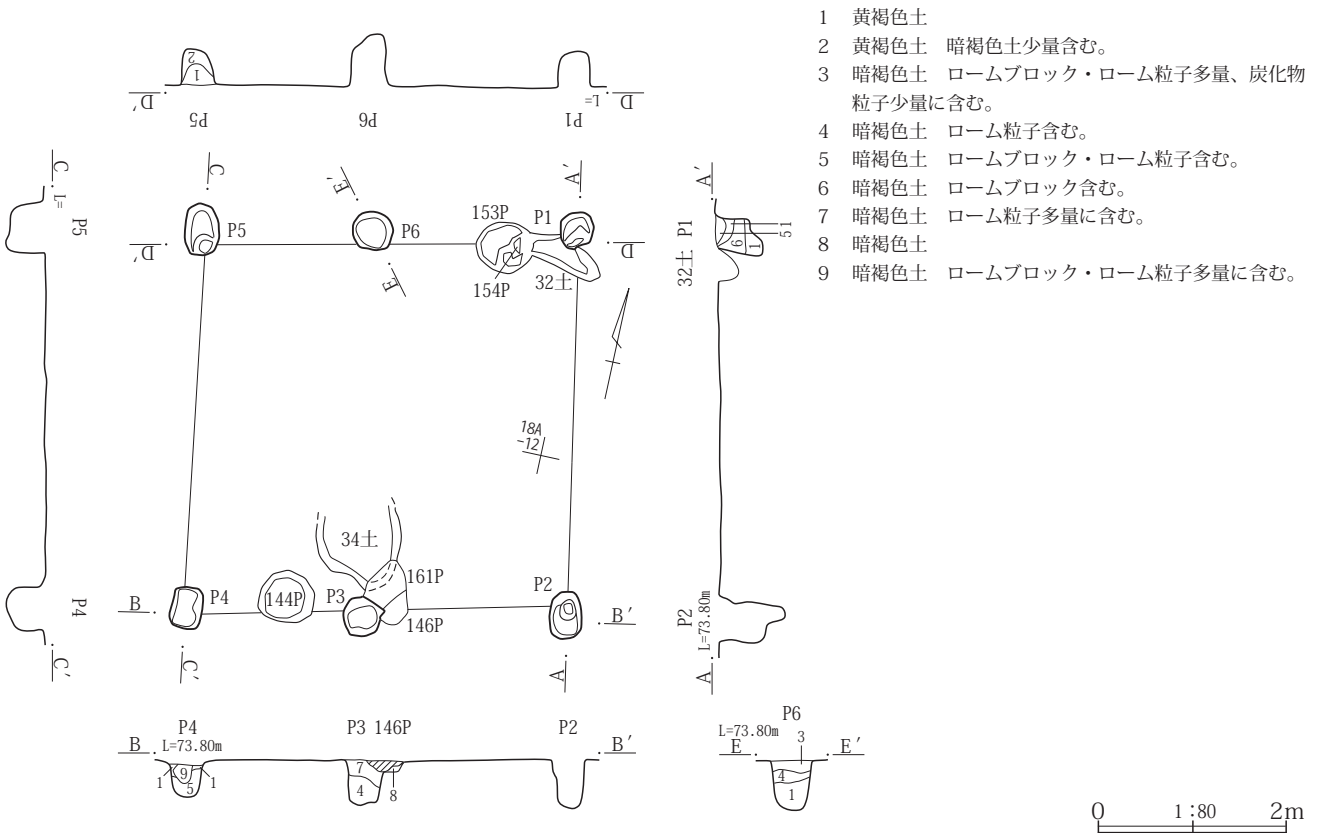
第4章 発掘調査の記録

第97表 2区2号掘立柱建物出土遺物

挿図 Pl.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第184図	1	在地系 土器	不詳	底直	-	-	-	体部片	B	明赤褐	上部は外反。他の内耳鍋に比して外面の撫でがやや丁寧。	中世か。



第185図 2区3号掘立柱建物



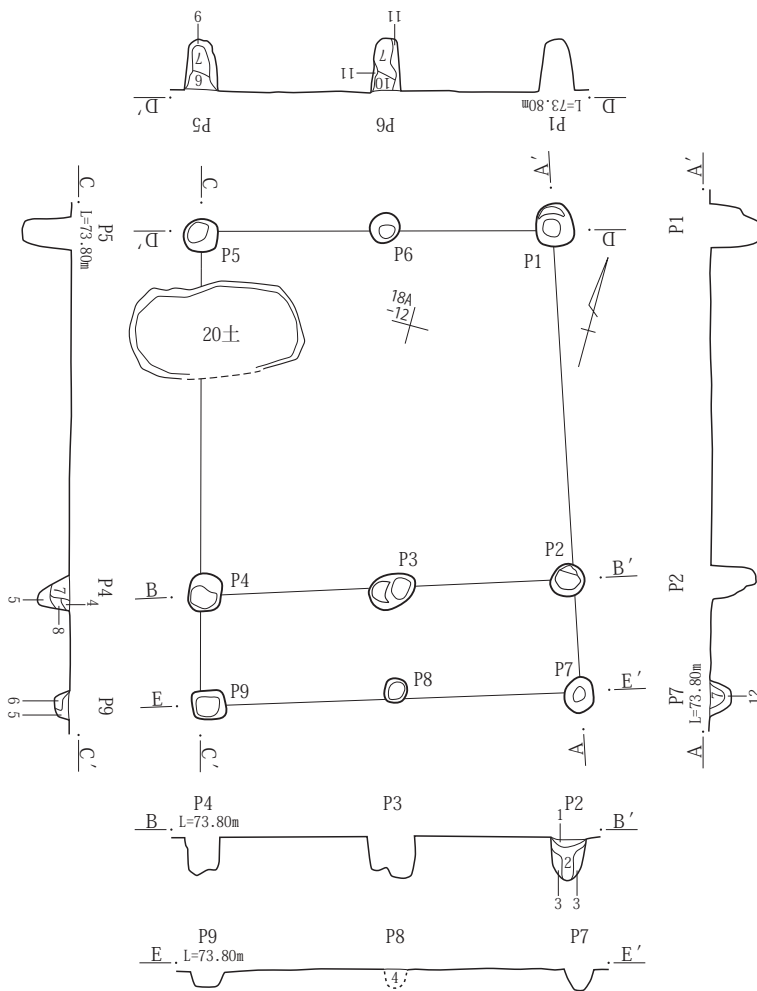
第186図 2区4号掘立柱建物

第98表 2区3号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		1×2間・東西棟			面積	15.00㎡	旧ピット番号
主軸方位		N-65~68°-E			位置	18B・C-13~15	
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
北辺 4.42	P 1	45	35	28	楕円形	2.30	199
	P 2	32	29	50	円形	2.13	87
東辺 3.47	P 3	34	31	21	円形	3.47	337
南辺 4.40	P 4	30	29	21	円形	2.22	83
	P 5	35	32	25	楕円形	2.18	68
西辺 3.35	P 6	34	30	27	楕円形	P 1へ3.35	67

第99表 2区4号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		2×1間・正方形			面積	15.54㎡	旧ピット番号	非掲載破片数
主軸方位		N-77~78°-W			位置	17T・18A-11・12		
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)		
		長径	短径	深さ				
東辺 3.89	P 1	40	35	48	隅丸方形	3.89	166	中世中国陶器片1
南辺 4.08	P 2	50	35	68	隅丸長方形	2.17	92	
	P 3	44	42	47	円形	1.92	145	
西辺 3.85	P 4	45	33	38	隅丸方形	3.95	455	
北辺 3.95	P 5	55	37	41	楕円形	1.78	348	
	P 6	45	43	54	円形	P 1へ2.20	155	



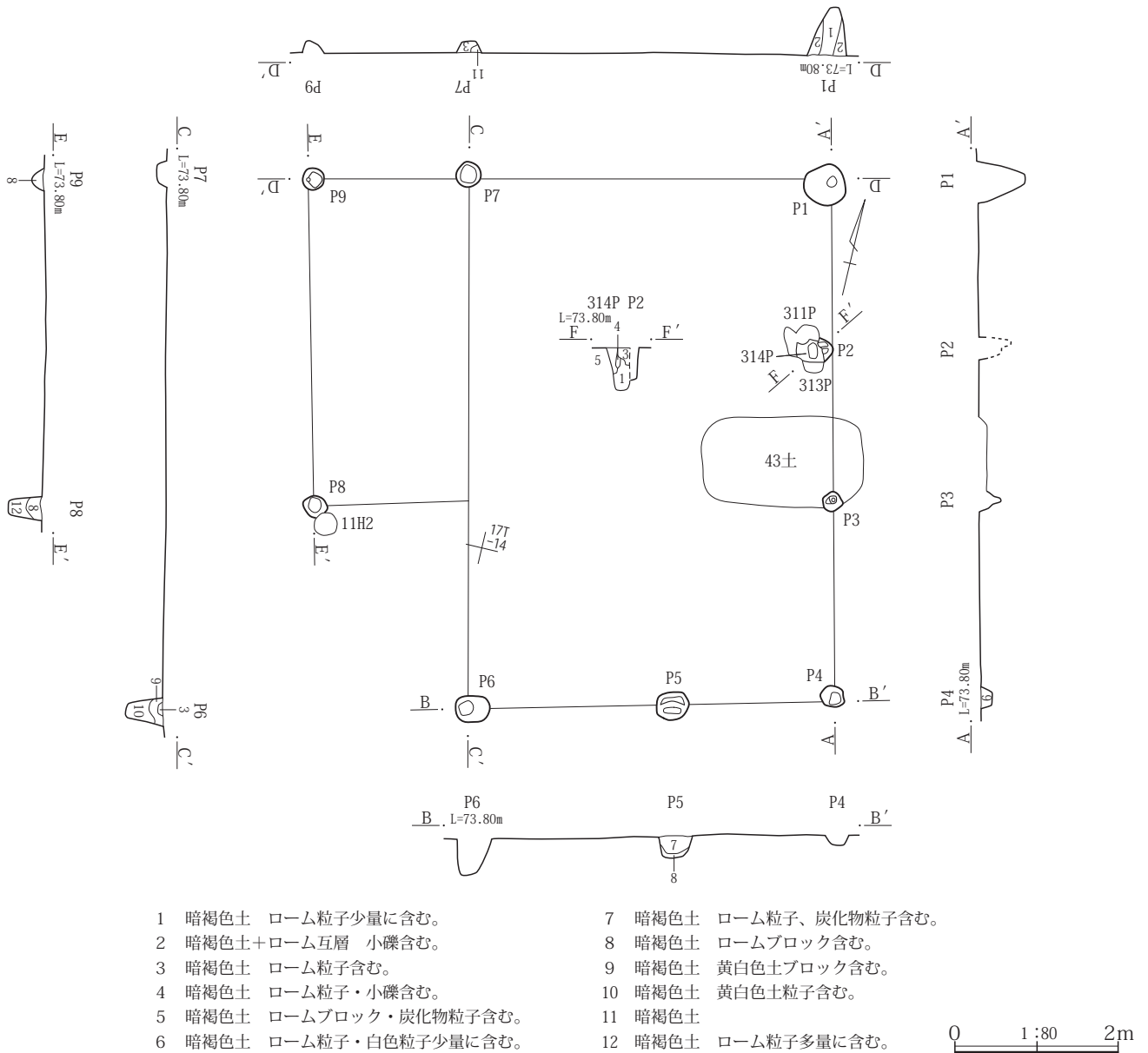
- 1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロック・黄白色土ブロック少量含む。
- 3 暗褐色土 ローム・小礫含む。
- 4 暗褐色土 ロームブロック含む。
- 5 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。
- 6 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量に含む。
- 7 暗褐色土 ローム粒子含む。
- 8 黄褐色土
- 9 黄褐色土 黄白色土ブロック多量に含む。
- 10 暗褐色土 ローム粒子多量、炭化物粒子含む。
- 11 黄褐色土 暗褐色土含む。
- 12 暗褐色土

第187図 2区5号掘立柱建物

第4章 発掘調査の記録

第100表 2区5号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		1×2間+南庇・正方形			面積	19.24㎡		旧ビット番号
主軸方位		N-15°~18°-W			位置	17T・18A-11・12		
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ビットとの間隔(m)		
		長径	短径	深さ				
東辺 3.63	P 1	45	40	55	隅丸方形	3.63		93
南辺 3.90	P 2	36	34	49	円形	1.81	P 7へ1.33	430
	P 3	52	35	37	楕円形	2.09		96
西辺 3.87	P 4	41	34	35	隅丸方形	3.87		206
北辺 3.77	P 5	38	37	52	円形	2.02		349
	P 6	33	31	56	円形	P 1へ1.75		150
庇 1.33	P 7	39	31	23	楕円形	1.95		94
	P 8	26	24	22	円形	2.00		97
庇 1.15	P 9	35	31	22	隅丸方形	P 4へ1.15		352



第188図 2区6号掘立柱建物

第101表 2区6号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		2×3間+西張出・南北棟			面積	36.20㎡	旧ピット番号
主軸方位		N-13°~14°-W			位置	17S~18A-13・14	
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
東辺 6.34	P 1	54	50	59	円形	2.10	316
	P 2	(29)	(14)	39	不明(重複)	1.83	—
	P 3	(25)	(24)	24	隅丸方形	2.44	361
南辺 4.48	P 4	31	25	13	円形	2.00	79
	P 5	40	33	37	楕円形	2.50	48
西辺 6.52	P 6	42	32	45	楕円形	6.52	249
北辺 4.44	P 7	30	30	15	円形	P 1へ4.44	193
張出 1.88	P 8	31	27	44	円形	3.98	223
張出 1.95	P 9	27	26	14	円形	P 7へ1.95	182

P 3も29cm北へ寄る。柱筋の通りは全体に良いが、P 2は内側へずれる。西辺は柱穴2基がない。西辺張出の柱間は平均1.92mで、桁行柱間のほぼ1間に相当する。仮に南西角の柱穴が未検出と考えれば、3×3間となり、構造的に理解しやすい。南辺の中間柱P 5は25cm東に寄る。P 1は柱痕が残り、埋没土2は掘り方を充填したものとと言える。P 1の長径は54cmと大きく、他の柱穴は28~42cmである。柱穴の形態は、ほぼ円形・楕円形である。深さは13~24cmと、37~59cmが混入する。P 8・9を側柱と見ることも可能であり、この場合曲がり屋となる。詳細な規模は第101表のとおり。中世以降の遺物は出土していない。

7号掘立柱建物(第189図、P L .70、第102表)

位置 17T・18A-14・15グリッド。重複 P 2は4号土坑と、P 3は6号溝と重複するが新旧関係不明。6・9~11・14・20号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

主軸方位 N-15~17°-W 面積 18.0㎡

形態 1×2間・正方形。西辺は東辺より24cm短いため、南辺は西上がりに傾く。平面形は台形気味。P 5は北辺柱筋より外側へ張り出しており、棟持柱の可能性もある。柱痕も見られず、埋没土に特徴的なものはない。P 1・5は長径がやや長く、柱の立て替えなどによる柱穴の重複や、柱が抜き取られた可能性もある。柱穴の径は概ね30cm前後を基本とする。柱穴の形態は円形・楕円形である。深さは29cmと深いP 3を除き、15cm前後と浅い。詳細な規模は第102表のとおり。中世以降の遺物は出土していない。

8号掘立柱建物(第190図、P L .66・71、第103表)

位置 17S・T-13・14グリッド。重複 P 4は17号

掘立柱建物P 4と重複するが新旧関係不明。1・2・6・9~11・14~18号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

主軸方位 N-16°-W 面積 推定19・0㎡

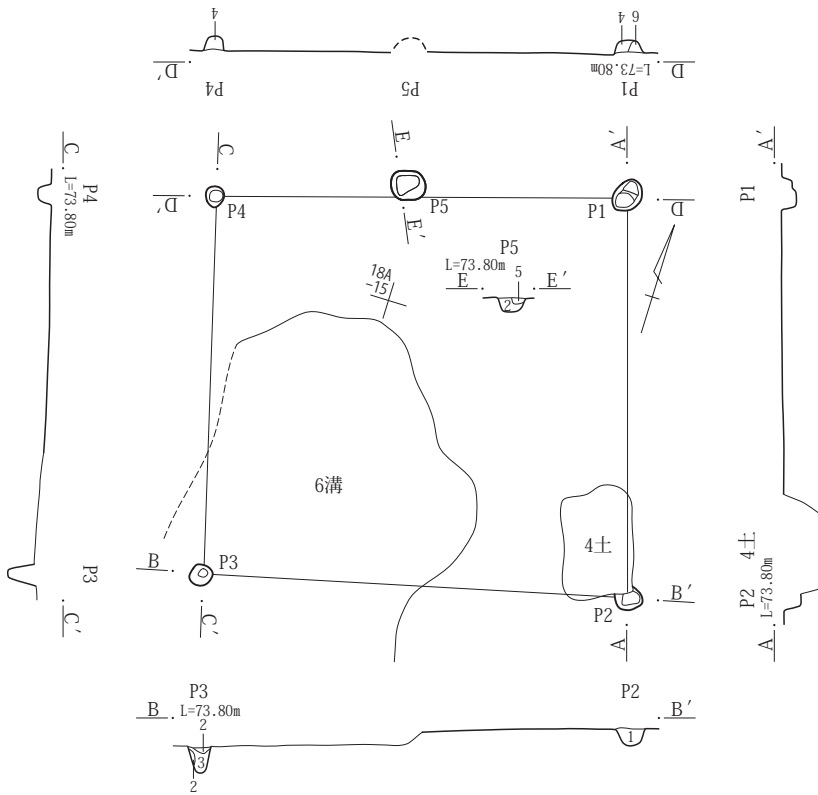
形態 2×2間・正方形。南東隅柱穴は2号土坑と重複して消滅か。北西角はやや開き気味で鈍角となる。P 5は北辺柱筋より外側へ張り出しており、棟持柱の可能性もある。P 3は西辺中央より29cm北に寄る。柱痕は見られない。P 4は埋没土に黄褐色土が多くを占めるが、地山の影響と考える。P 3の長径は52cmと長い。重複により乱れており、全体として30~40cmが基本となる。柱穴の形態は全て円形・楕円形である。深さは20cm台と、45cm前後が混在する。詳細な規模は第103表のとおり。中世以降の遺物は出土していない。

9号掘立柱建物(第191図、P L .67・69、第104表)

位置 17S・T-13・14グリッド。重複 P 1は11号掘立柱建物P 6と重複するが新旧関係不明。P 5は4号土坑より前出。平面上、2・6・7・8・10・11・14・15・17・19号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

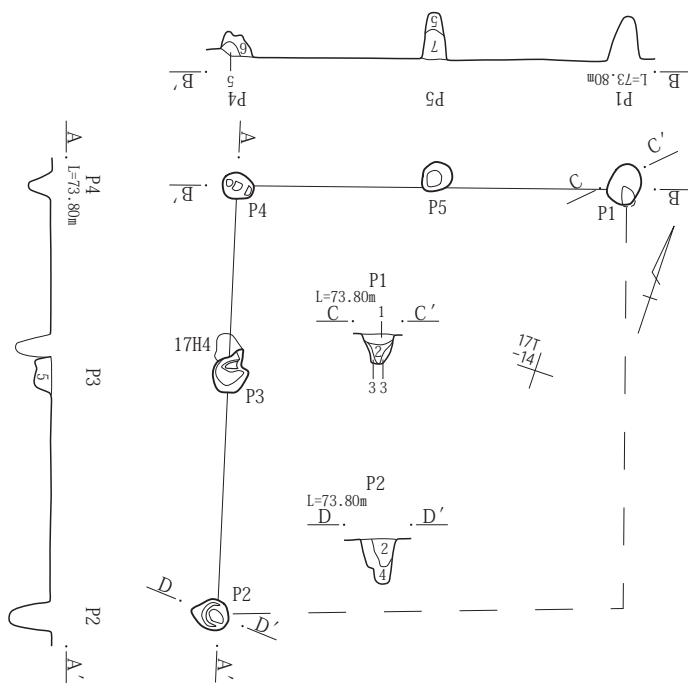
主軸方位 N-22~23°-W 面積 12.0㎡

形態 1×2間・正方形。西辺が東辺より31cm長いため、北辺は東下がりに、南辺は西下がりに傾斜し、平面形は台形となる。P 2は東辺中央より6cm北に寄り、東辺柱筋より外側へ張り出しており、棟持柱の可能性もある。P 5は柱痕がほぼ残り、埋没土8は掘り方を充填したものとと言える。P 3の埋没土6も同様である。P 1・3の長径はやや長く、柱の立て替えなどによる柱穴の重複や、柱が抜き取られた可能性もある。柱穴の径は35cm前後が基本となる。柱穴の形態は全て円形・楕円形である。深



- 1 灰褐色土 ロームブロック含む。
- 2 黄褐色土
- 3 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒子含む。
- 5 暗褐色土 ロームブロック含む。
- 6 暗褐色土

第189図 2区7号掘立柱建物



- 1 暗褐色土 ローム粒子、白色粒子含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。
- 3 黄褐色土
- 4 暗褐色土 ロームブロック含む。
- 5 暗褐色土 ローム粒子含む。
- 6 黄褐色土 炭化物粒子少量に含む。
- 7 暗褐色土 ロームブロック・炭化物粒子含む。

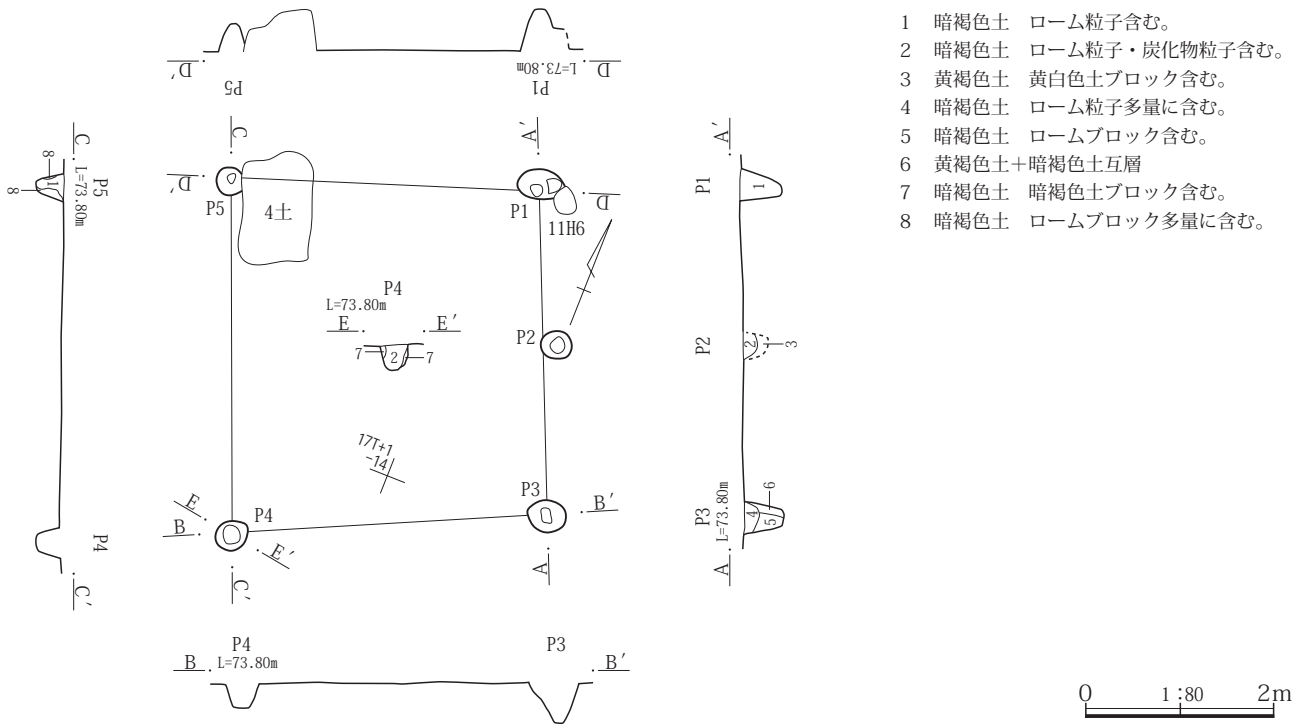
第190図 2区8号掘立柱建物

第102表 2区7号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		1×2間・正方形			面積	18.00㎡		旧ピット番号
主軸方位		N-15°~17°-W			位置	17T・18A-14・15		
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)		
		長径	短径	深さ				
東辺 4.23	P 1	37	27	15	楕円形	4.23		340
南辺 4.55	P 2	(31)	26	18	不明(重複)	4.55		49
西辺 4.01	P 3	25	23	29	円形	4.01		279
北辺 4.35	P 4	23	20	13	円形	2.02		57
	P 5	38	33	15	隅丸方形	P 7へ2.34		191

第103表 2区8号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		2×2間・正方形			面積	(19.00) ㎡		旧ピット番号
主軸方位		N-16°-W			位置	17S・T-13・14		
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)		
		長径	短径	深さ				
	P 1	43	33	46	楕円形			305
西辺 4.60	P 2	41	32	44	楕円形	2.60		9
	P 3	51	36	22	不定形	2.00		16
北辺 4.23	P 4	34	28	27	楕円形	2.18		284
	P 5	35	30	50	楕円形	P 7へ2.05		31



第191図 2区9号掘立柱建物

第104表 2区9号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		1×2間・正方形			面積	12.00㎡		旧ピット番号
主軸方位		N-22°~23°-W			位置	17S・T-13・14		
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)		
		長径	短径	深さ				
東辺 3.46	P 1	(50)	32	44	楕円形	1.67		115
	P 2	33	30	27	円形	1.80		307
南辺 3.35	P 3	42	34	41	楕円形	3.35		320
西辺 3.77	P 4	37	31	25	楕円形	3.77		27
北辺 3.25	P 5	(31)	30	29	円形	P 1へ3.25		130

さは30cm前後と43前後が混在する。詳細な規模は第104表のとおり。中世以降の遺物は出土していない。

**10号掘立柱建物**(第192図、P L .67・69～71、第105表)

**位置** 17S～18A-13・14グリッド。 **重複** P3は11号掘立柱建物P4より後出。平面上、6・7・8・9・14・15・19号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

**主軸方位** N-65～68°-E **面積** 15.8㎡

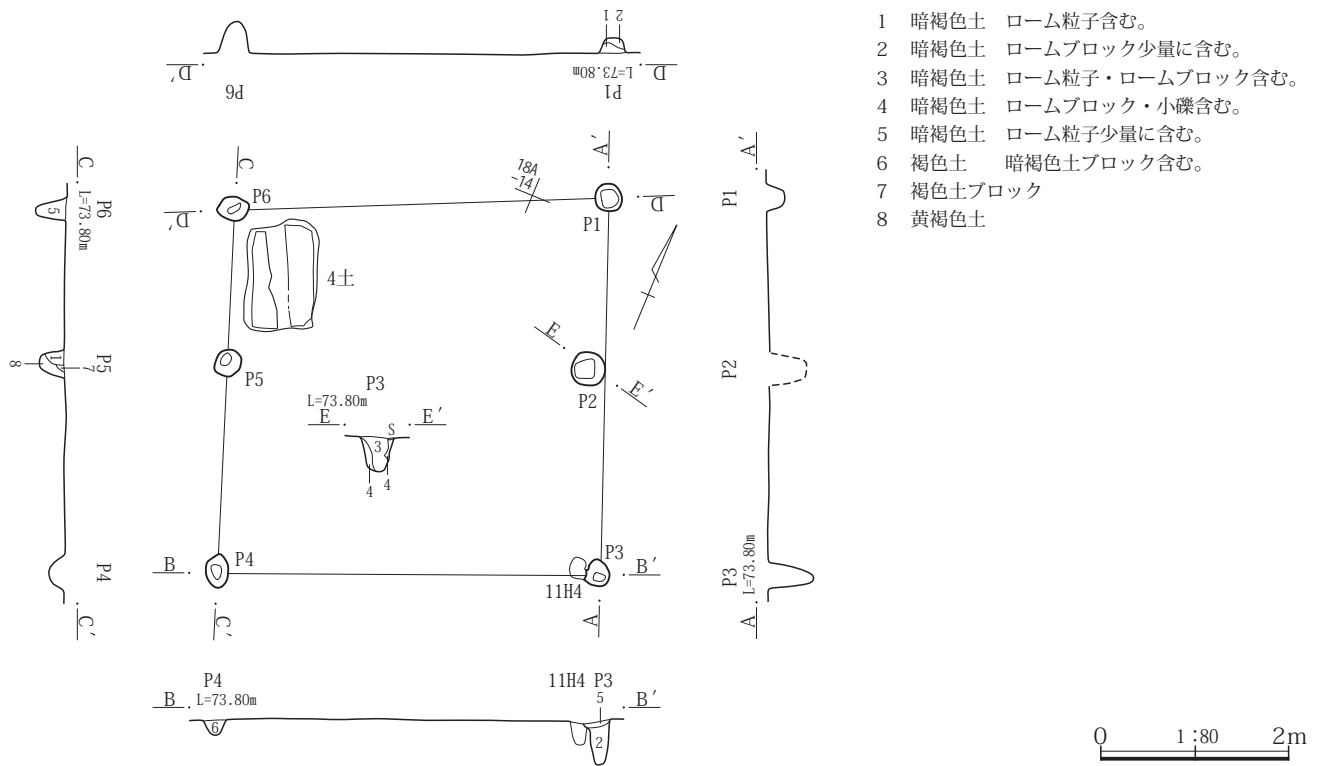
**形態** 1×2間・正方形。西辺は東辺より15cm短いため、北辺は西下がり傾く。東辺中間柱P2は中央より18cm北に寄り、柱筋より内側へも入り込んでおり、棟持柱の可能性もある。西辺の中間柱P5も同じく、中央より34cm北に寄る。確実な柱痕は見られないが、P5の埋没土7・8は、掘り方を充填したものと言える。柱穴の

径は30cm前後が主体である。柱穴の形態は全て円形・楕円形である。深さは16～49cmまでばらつきがある。北西隅に位置する4号土坑は、長方形のやや深い土坑であり、内部施設の可能性を持つが、焼土や炭化物の集中など特徴的な状況はない。埋没状況も黄褐色土と灰褐色土の互層であり、周辺にまとまって黄褐色土が盛られていた可能性も示唆する。詳細な規模は第105表のとおり。中世以降の遺物は出土していない。

**11号掘立柱建物**(第193図、P L .67・69・71、第106表)

**位置** 17S・T-13～15グリッド。 **重複** P1は6号溝と重複するが新旧関係不明。P4は10号掘立柱建物P3より前出。平面上、2・6・7・8・14・17・19号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

**主軸方位** N-65～66°-E **面積** 21.1㎡



第192図 2区10号掘立柱建物

第105表 2区10号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		1×2間・正方形			面積	15.80㎡		旧ピット番号
主軸方位		N-65～68°-E			位置	17S～18A-13・14		
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)		
		長径	短径	深さ				
東辺 4.04	P 1	30	28	17	円形	1.83		167
	P 2	38	37	37	円形	2.20		308
南辺 4.07	P 3	30	(27)	49	楕円形	4.07		319
西辺 3.86	P 4	36	24	16	楕円形	2.26		26
	P 5	30	26	27	隅丸方形	1.60		189
北辺 3.98	P 6	35	25	38	楕円形	P 1へ3.98		183

**形態** 1×3間・東西棟。北辺・南辺とも間柱の柱穴が1基ずつ少ない。桁行柱間を平均すると、2.1567m・約7.2尺となるが、北辺のP2は12cm東へ、南辺のP5も5cm東へ寄る。P5は南辺より内側へ入り込む。P2・6で柱痕がやや見られ、埋没土3は掘り方を充填したものである。柱穴の径は重複による影響の大きいP4を除き、33cm前後が主体である。柱穴の形態は全て円形・楕円形である。深さは30cm前後である。詳細な規模は第106表のとおり。中世以降の遺物は出土していない。

**12号掘立柱建物**(第194図、P L .71、第107表)

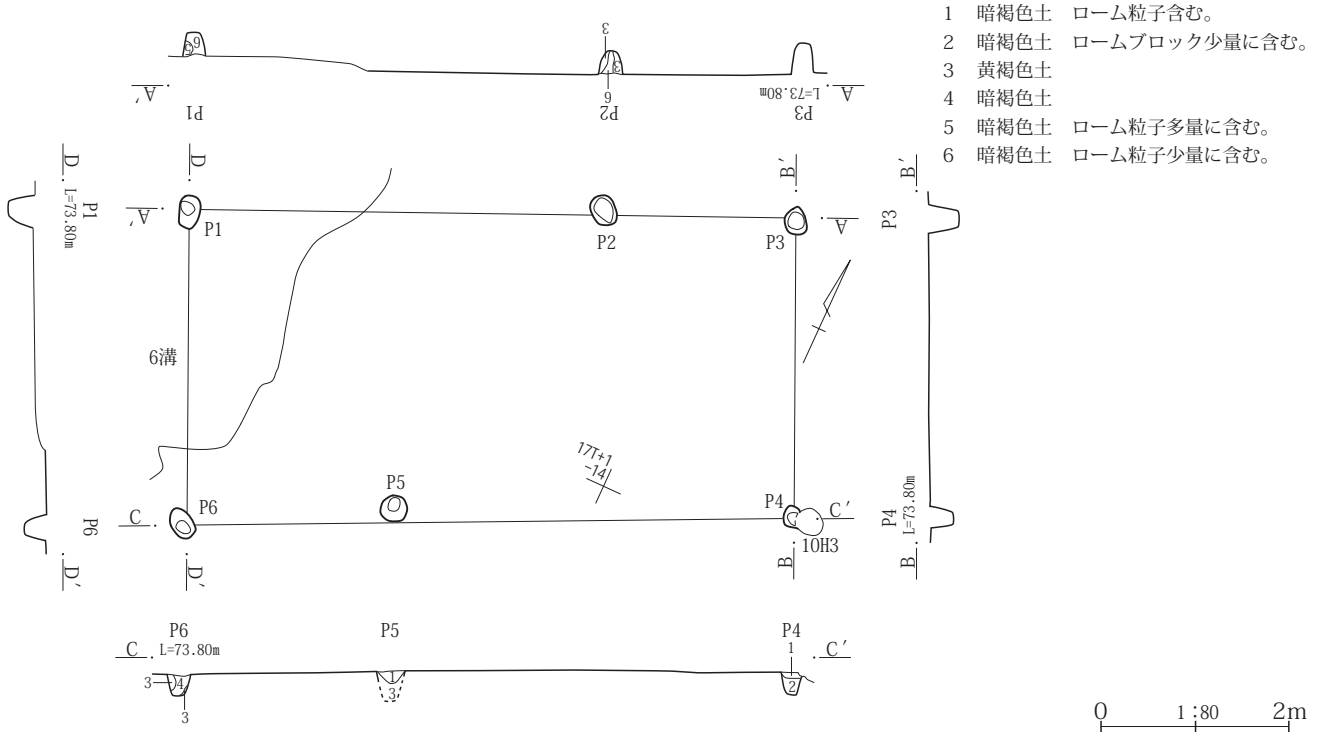
**位置** 17T・18A-11・12グリッド。 **重複** 平面上、4・5号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

**主軸方位** N-17~19°-W **面積** 14.28㎡

**形態** 1×2間・東西棟。南辺が北辺より17cm短いため、東辺は東へ外傾する。平面形はやや台形。北辺の中間柱P2は中央より30cm西に寄り、内側にも入り込んでおり、棟持柱と考えられる。南辺の中間柱P5も5cm西へ寄る。西辺のP7はP1から1.11mに位置する。状況から妻側に設けられた出入口を構成する柱穴と推定される。柱痕も見られず、埋没土に特徴的なものはない。柱穴の径は44cmとやや長いP4を除き、30cm前後を主体とする。柱穴の形態は、隅丸方形のP1を除き円形・楕円形である。深さは14~41cmが混在し、40cm前後がやや多い。詳細な規模は第107表のとおり。中世以降の遺物は出土していない。

**13号掘立柱建物**(第195図、P L .66・69・70・149、第108・109表)

**位置** 17R・S-12・13グリッド。 **重複** P1は322



第193図 2区11号掘立柱建物

第106表 2区11号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		1×3間・東西棟			面積	21.10㎡		旧ビット番号
主軸方位		N-65~66°-E			位置	17S・T-13~15		
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ビットとの間隔(m)		
		長径	短径	深さ				
北辺 6.46	P 1	35	22	28	隅丸長方形	4.41	280	
	P 2	34	26	27	楕円形	2.06	300	
東辺 3.15	P 3	30	23	33	楕円形	3.15	204	
南辺 6.50	P 4	25	(18)	26	不明(重複)	4.27	318	
	P 5	28	28	31	円形	2.25	25	
西辺 3.38	P 6	35	23	23	楕円形	P 1へ3.38	14	



号ピット、P2は1号掘立柱建物P3より後出、P5は7号土坑と重複するが新旧関係不明。平面上、1・15・16号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

主軸方位 N-70°-E 面積 11.6㎡

形態 1×2間・東西棟。北辺は南辺より12cm短いため、西辺は東へ内傾する。北辺の中間柱P2は東に16cm、南辺の中間柱P5も10cm東に寄る。柱痕も見られない。P3の埋没土は堅くしまっており、人為埋没と考えられる。ほかに特徴的なものはない。P2・6の長径は66cm前後と長く、柱の立て替えなどによる柱穴の重複や、柱が抜き取られた可能性もある。他の柱穴の径は32cm前後を主体とする。柱穴の形態は全て円形・楕円形である。深さは21～46cmとややばらつきがある。詳細な規模は第109表のとおり。

出土遺物 P2埋没土から1の銭(開元通宝)が出土する。

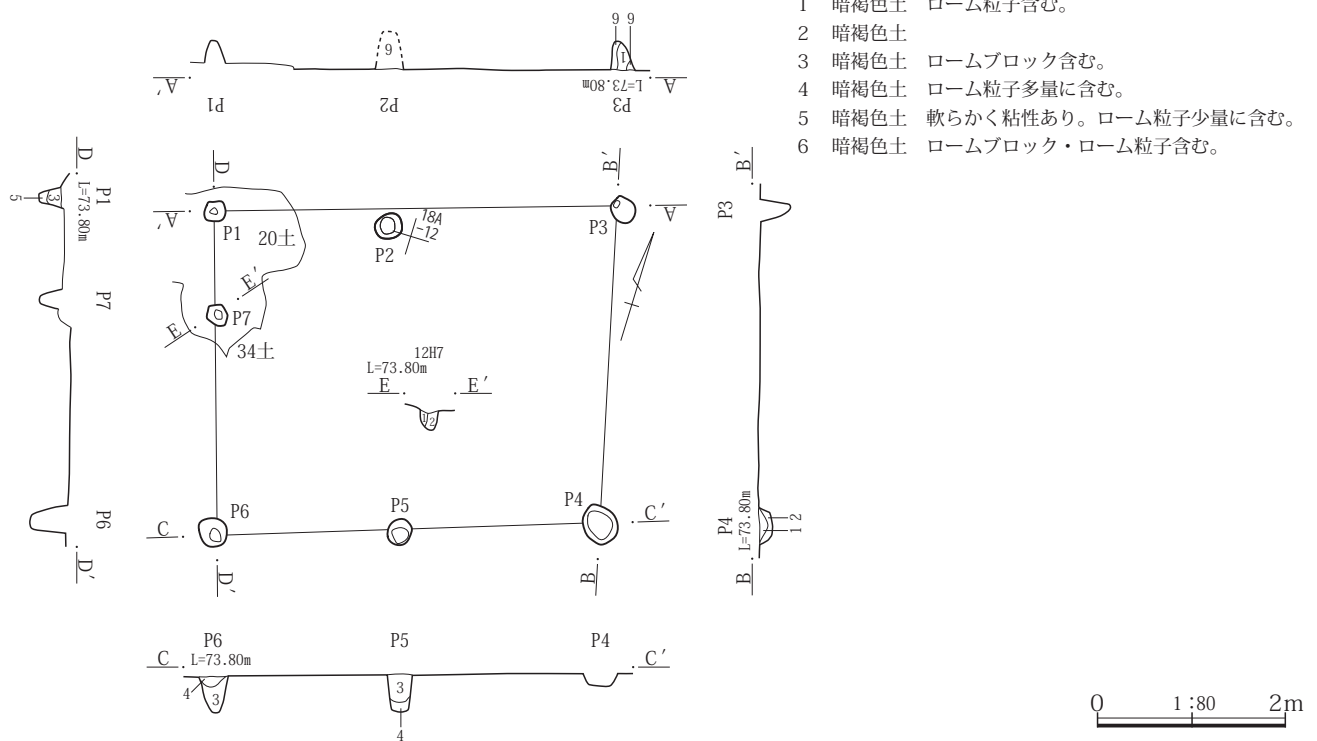
時期 出土遺物から中世に比定される。

14号掘立柱建物(第196図、P L.70・71、第110表)

位置 17S～18A-13・14グリッド。重複 P1は6号溝、P3は43号土坑と重複するが新旧関係不明。平面上、2・6～11・15・17・19号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

主軸方位 N-68～70°-E 面積 21.2㎡

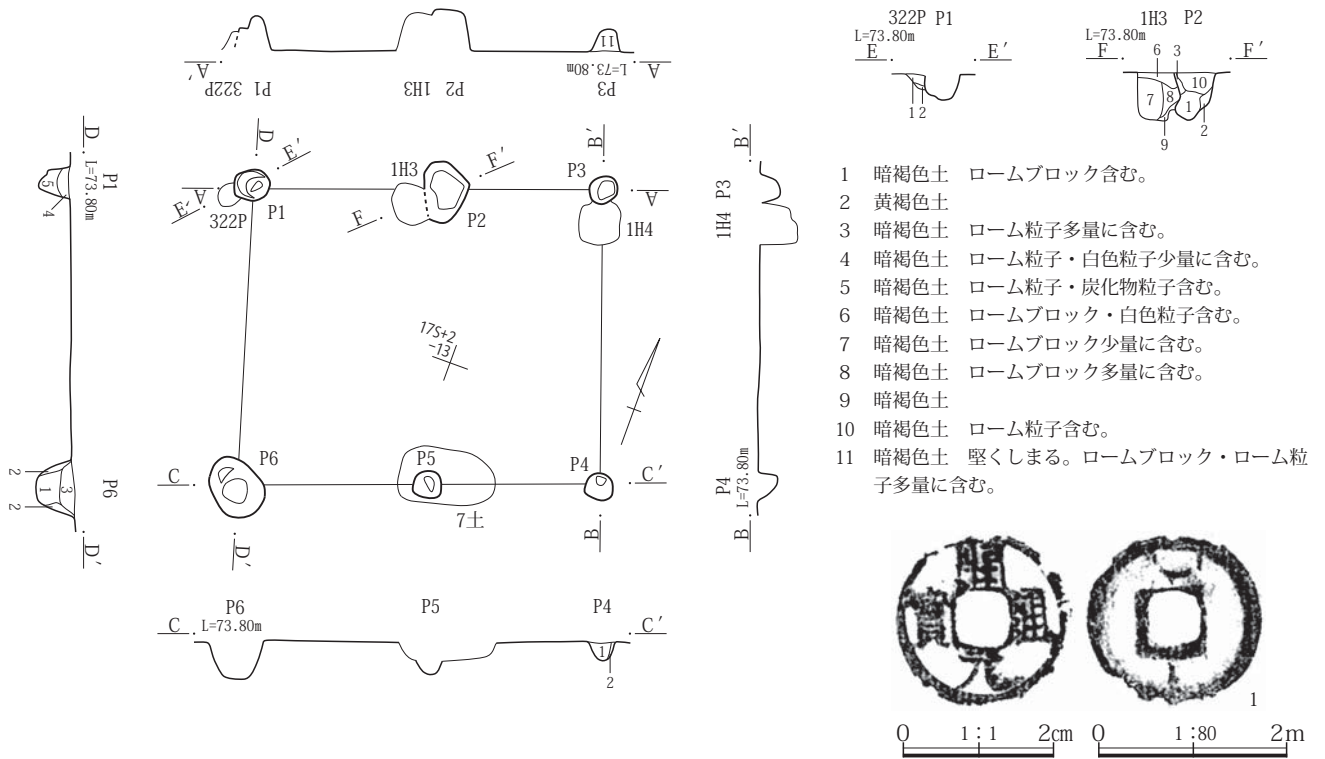
形態 1×3間・東西棟。桁行柱間を平均すると、2.0283m・約6.7尺となるが、北辺の柱穴は1基少なく、P2は10cm東に寄る。南辺のP6は30cm西寄り、残り2間を二分する位置にP5が配置される。柱痕は見られないが、埋没土3は掘り方を充填したものと言える。P1は2基の重複で北側が後出だが、位置的に南の方が柱筋の通り



第194図 2区12号掘立柱建物

第107表 2区12号掘立柱建物 計測表

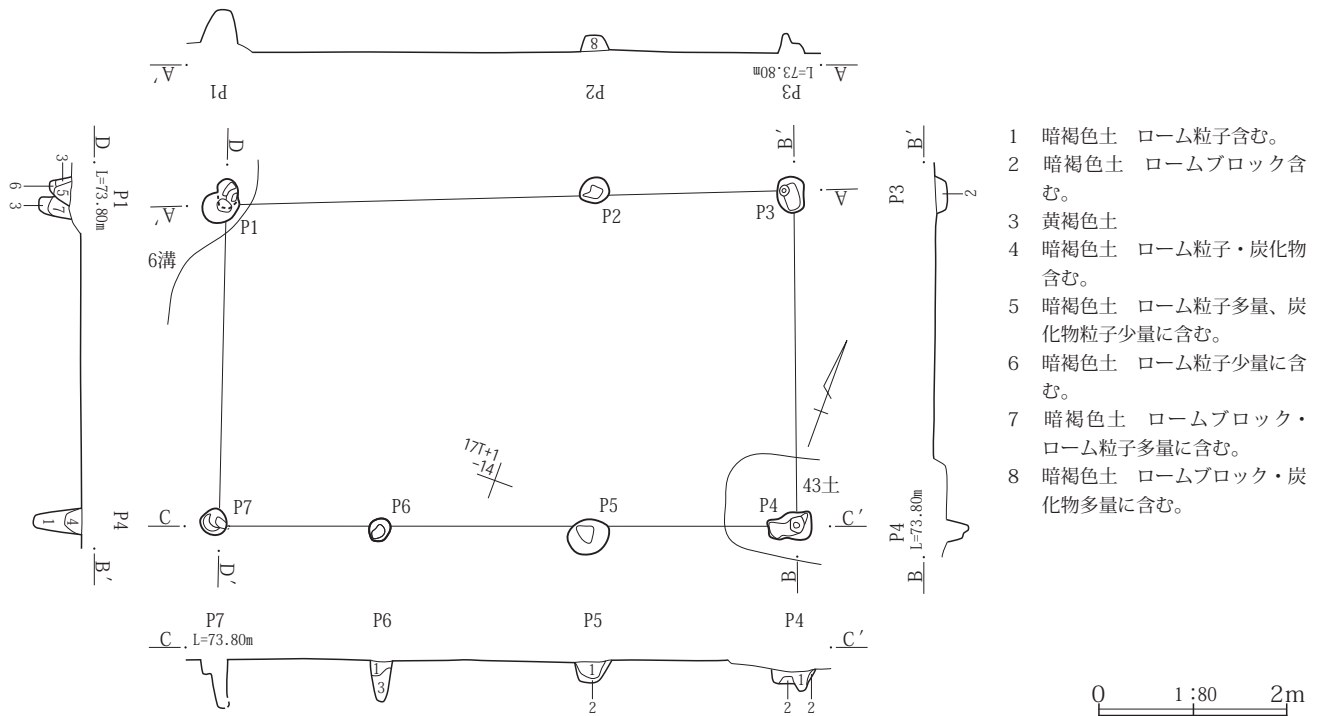
建物全体の規模		1×2間・東西棟			面積	14.28㎡	
主軸方位		N-17～19°-W			位置	17T・18A-11・12	
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	旧ピット番号
		長径	短径	深さ			
北辺 4.27	P 1	23	21	25	隅丸方形	1.86	132
	P 2	30	27	41	円形	2.42	351
東辺 3.40	P 3	27	25	32	楕円形	3.40	375
南辺 4.07	P 4	44	35	14	楕円形	2.12	95
	P 5	28	25	39	円形	1.95	398
西辺 3.45	P 6	34	30	39	円形	2.35	157
	P 7	26	21	23	楕円形	P 1へ1.11	212



第195図 2区13号掘立柱建物と出土遺物

第108表 2区13号掘立柱建物出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 種類	出土位置	径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	残存	形・成調整等
第195図 PL.149	1	銅銭 開元通寶	13掘立P2	-	23.26	1.33~ 1.36	2.02	周縁一部 欠	背上月。背下に縦線が見えるが文字ではないと考えられる。唐、 845年、初鑄。



第196図 2区14号掘立柱建物

第109表 2区13号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		1×2間・東西棟			面積	11.60㎡		旧ピット番号
主軸方位		N-70°-E			位置	17R・S-12・13		
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)		
		長径	短径	深さ				
北辺 3.70	P 1	37	33	33	円形	2.00	75	
	P 2	64	47	50	楕円形	1.70	78	
東辺 3.09	P 3	32	28	28	円形	3.09	358	
南辺 3.89	P 4	31	29	20	円形	1.83	46	
	P 5	32	30	15	円形(重複)	2.07	7土内	
西辺 3.22	P 6	67	52	40	楕円形	P 1へ3.22	6土	

第110表 2区14号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		1×3間・東西棟			面積	21.20㎡		旧ピット番号
主軸方位		N-68°-70°-E			位置	17S~18A-13・14		
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)		
		長径	短径	深さ				
北辺 5.94	P 1	50	35	35	楕円形	3.93	286	
	P 2	32	27	27	円形	2.02	188	
東辺 3.56	P 3	38	30	21	隅丸長方形	3.56	197	
南辺 6.14	P 4	46	30	23	隅丸方形	2.25	360	
	P 5	46	37	29	楕円形	2.20	37	
	P 6	26	22	44	楕円形	1.70	194	
西辺 3.36	P 7	28	28	51	円形	P 1へ3.36	19	

がよい。P 3・4の長径も長く、柱の立て替えなどによる柱穴の重複の可能性もある。柱穴の径は、掘り方が大きいP 5を除き、30cm前後を基本とする。柱穴の形態はほぼ円形・楕円形である。深さは13～52cmとばらつきがある。詳細な規模は第110表のとおり。中世以降の遺物は出土していない。

15号掘立柱建物(第197図、P L .69・71、第111表)

位置 17R～T-12～14グリッド。重複 P 2は43号土坑、P 6は3号土坑より後出で、41号ピットより前出。平面上は、1・2・6・8～10・13・14・16～19号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

主軸方位 N-23～26°-W 面積 35.36㎡

形態 1×3間+西張出・南北棟。西辺は東辺より45cm短いので、北辺は南下がりに傾く。身屋部の平面形はやや台形で、西側に1間分が張り出して全体形はL字形となる。柱筋の通りは良くない。桁行柱間を平均すると、2.1467m・約7.1尺となるが、P 1は15cm程度北に外れ、P 3は10cm南に寄る。東辺のP 2・3はともに東辺柱筋より東方へ外れる。西張出の間隔は、P 5・9間で1.92m、P 6・10間で2.35mと、幅は桁行1間に相当する。規模から側柱の可能性もあり、この場合曲がり屋となる。柱痕も見られず、埋没土に特徴的なものはない。P 1・3・9の長径は39～46cmとやや長く、柱の立て替えなどによる柱穴の重複や、柱が抜き取られた可能性もある。ほ

かの柱穴の径は30cm前後を主体とする。柱穴の形態は全て円形・楕円形である。深さは40～49cmと深いP 3・5・10を除き、12～23cmと浅い。詳細な規模は第111表のとおり。中世以降の遺物は出土していない。

16号掘立柱建物(第198図、P L .66・69・71、第113表)

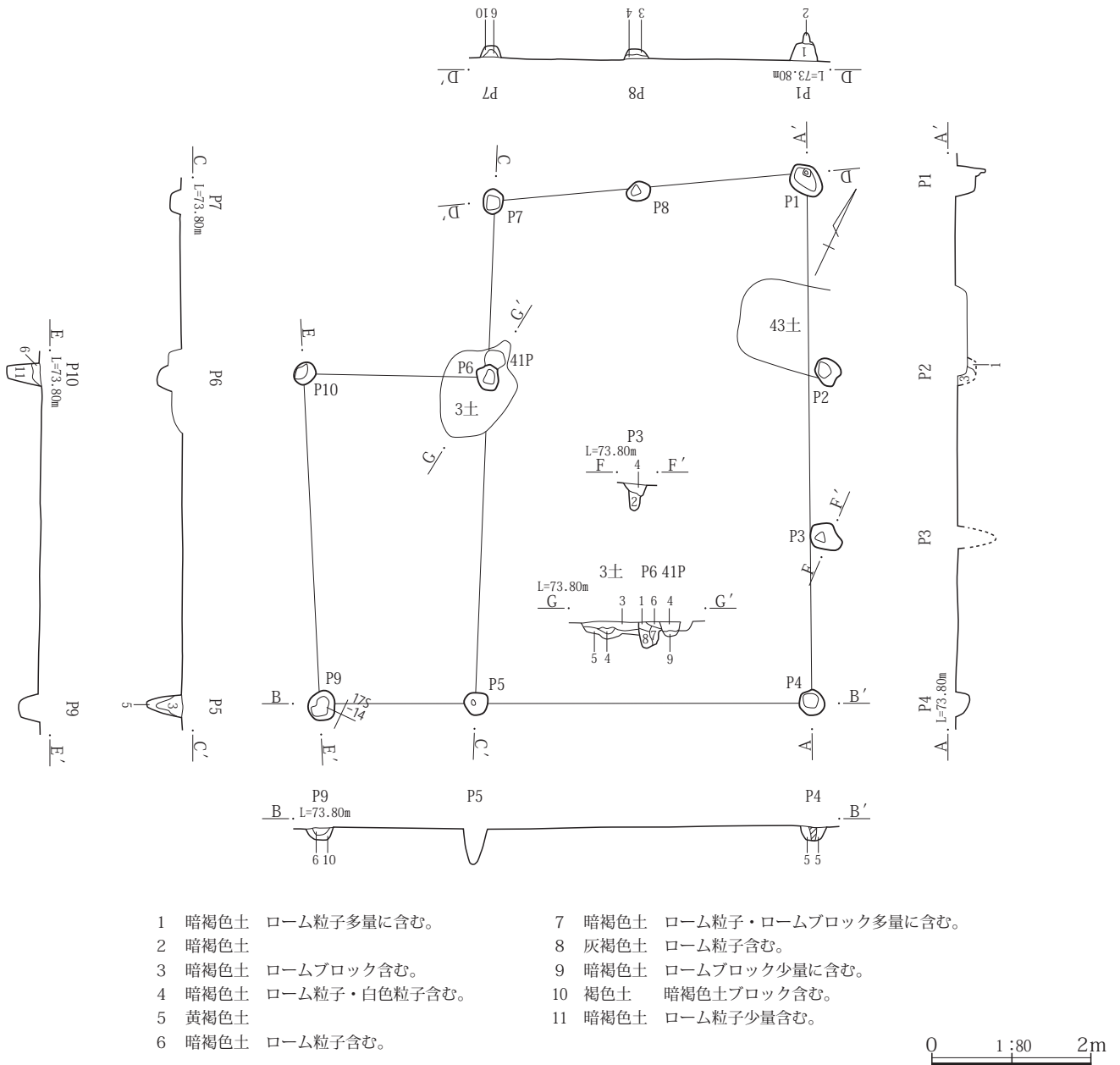
位置 17R・S-13・14グリッド。重複 平面上、1・2・6・8・13・15・17・18号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

主軸方位 N-29°-W 面積 19.69㎡

形態 2×1間・南北棟。北辺の中間柱P 6は19cm東へ、南辺のP 3は9cm東へ寄る。P 3とP 6は各柱筋から外側へ張り出しており、棟持柱と考えられる。P 1は柱痕がほぼ残り、埋没土2は掘り方を充填したものと言える。P 2・3・6の長径は45～55cmと長く、柱の立て替えなどによる柱穴の重複や、柱が抜き取られた可能性もある。そのほかの径は25～35cmである。柱穴の形態は全て円形・楕円形である。深さは51cmと深いP 5、16cmと浅いP 4を除き、30cm前後を主体とする。詳細な規模は第113表のとおり。中世以降の遺物は出土していない。

17号掘立柱建物(第199・200図、P L .70・71・149、第112・114表)

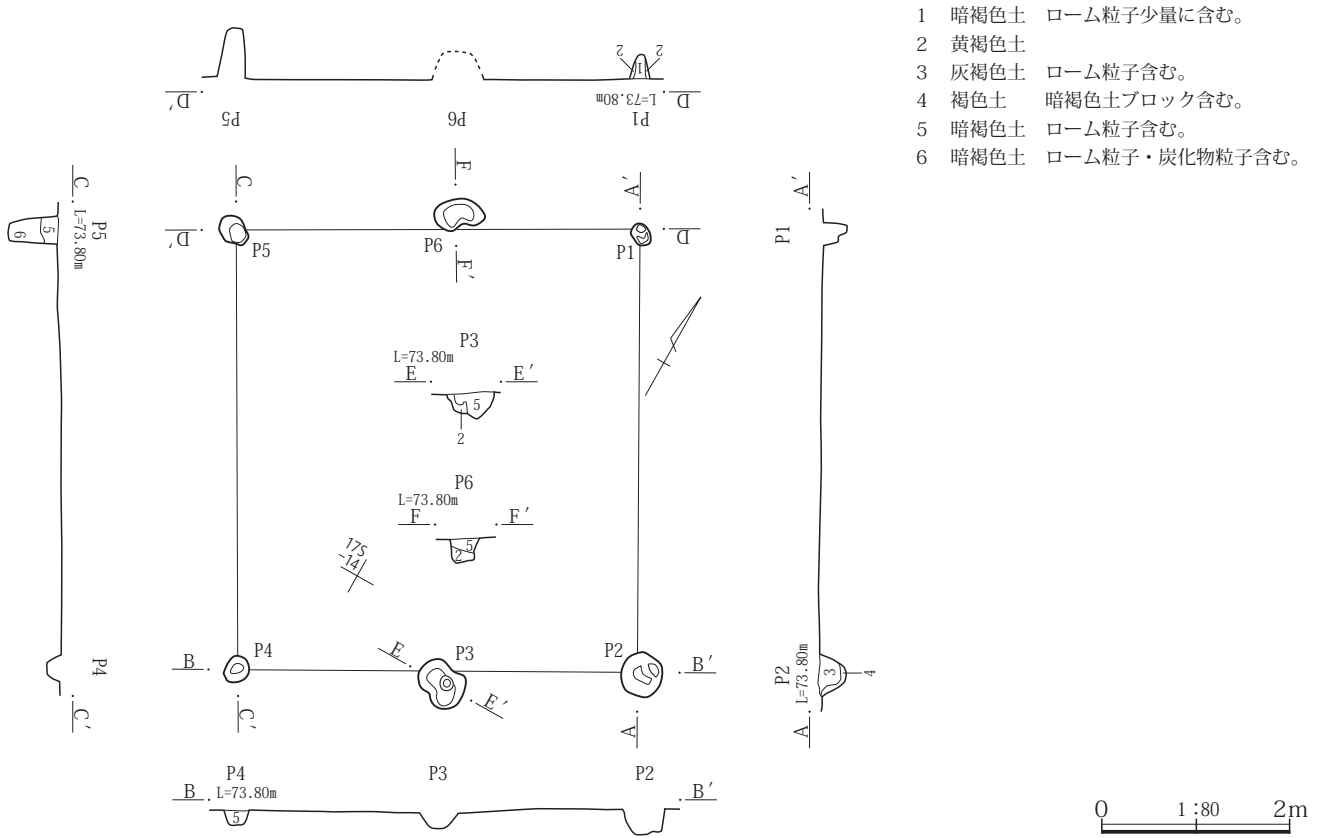
位置 17S・T-13・14グリッド。重複 P 1は222号ピット、P 2は113・170号ピット、P 4は8号掘立柱建物P 3と重複するが新旧関係不明。平面上、2・6・9・14・15・18号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複



第197図 2区15号掘立柱建物

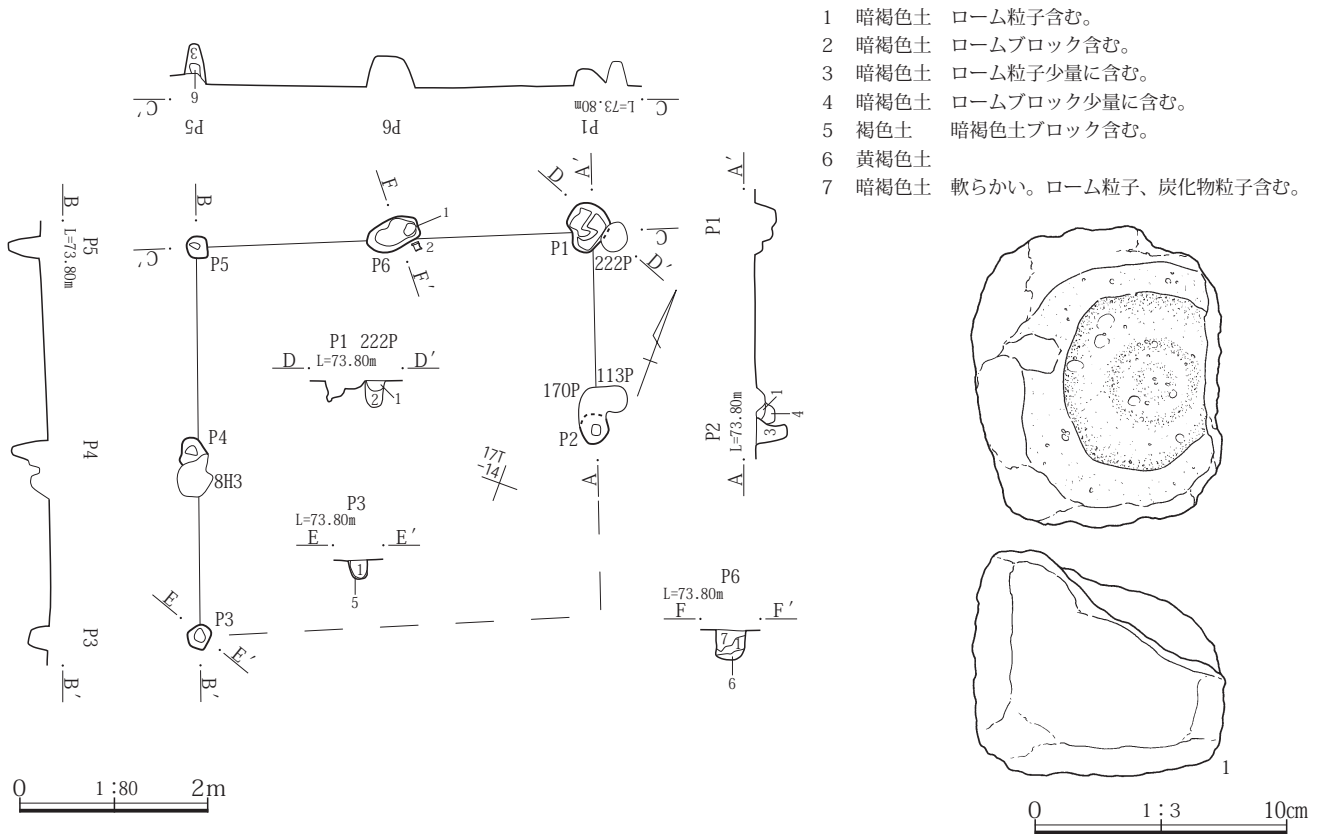
第111表 2区15号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		1×3間+西張出・南北棟			面積	35.36㎡		旧ピット番号
主軸方位		N-23°~26°-W			位置	17R~T-12~14		
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)		
		長径	短径	深さ				
東辺 6.62	P 1	46	35	38	楕円形	2.48		309
	P 2	36	29	23	楕円形	2.10		355
	P 3	43	35	49	楕円形	2.05		80
南辺 4.23	P 4	33	30	17	円形	4.23		151
西辺 6.26	P 5	30	28	45	円形	4.06 P 9へ1.92		42
	P 6	(31)	28	21	楕円形	2.21		40
北辺 3.94	P 7	32	24	16	楕円形	1.80		303
	P 8	31	24	12	楕円形	P 1へ2.15		306
西張出 1.92	P 9	39	35	18	円形	4.20		7
西張出 2.35	P 10	29	24	40	円形	P 6へ2.35		17



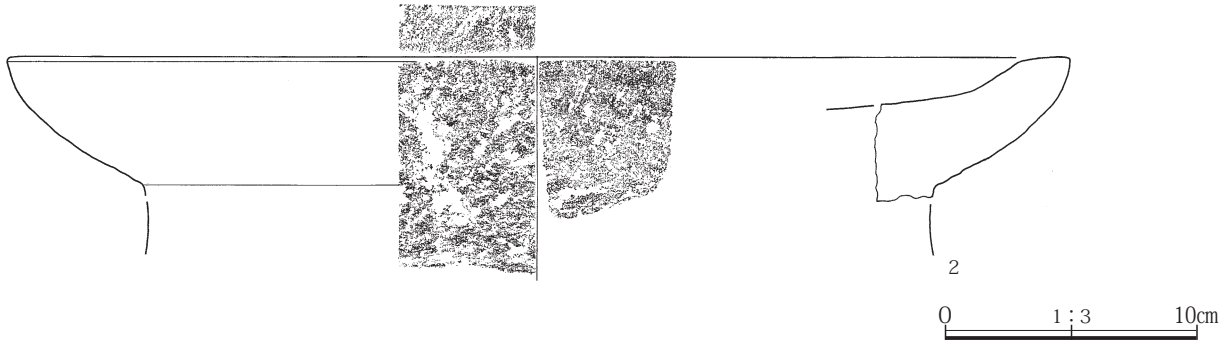
- 1 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。
- 2 黄褐色土
- 3 灰褐色土 ローム粒子含む。
- 4 褐色土 暗褐色土ブロック含む。
- 5 暗褐色土 ローム粒子含む。
- 6 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子含む。

第198図 2区16号掘立柱建物



- 1 暗褐色土 ローム粒子含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロック含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。
- 4 暗褐色土 ロームブロック少量に含む。
- 5 褐色土 暗褐色土ブロック含む。
- 6 黄褐色土
- 7 暗褐色土 軟らかい。ローム粒子、炭化物粒子含む。

第199図 2区17号掘立柱建物と出土遺物(1)



第200図 2区17号掘立柱建物出土遺物(2)

第112表 2区17号掘立柱建物跡出土遺物

挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況	備考
第199図 PL.149	1	石製品	底直上		粗粒輝石安山岩	11.9	9.8	962.6	上面側に7cm角の方形の孔を穿つ。孔内面は磨き整形、外面は粗く敲打整形。	
第200図 PL.149	2	茶臼		下臼受け部	粗粒輝石安山岩	径 42.0	高さ (5.8)	239.4	外面は磨き整形、内面から口唇は丁寧な磨き整形。	

第113表 2区16号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		2×1間・南北棟			面積	19.69㎡		旧ビット番号
主軸方位		N-29°-W			位置	17R・S-13・14		
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ビットとの間隔(m)		
		長径	短径	深さ				
東辺 4.73	P 1	25	18	26	楕円形	4.73		234
南辺 4.27	P 2	45	44	28	円形	2.05		43
	P 3	55	44	32	楕円形	2.22		106
西辺 4.52	P 4	30	25	16	楕円形	4.52		4
北辺 4.29	P 5	35	26	51	楕円形	2.35		50
	P 6	54	34	30	楕円形	P 1へ1.95		51

第114表 2区17号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		2×2間・正方形			面積	(17.43) ㎡		旧ビット番号
主軸方位		N-21~23°-W			位置	17S・T-13・14		
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ビットとの間隔(m)		
		長径	短径	深さ				
	P 1	53	45	21	楕円形	2.19		38
	P 2	(30)	30	31	円形			168
西辺 4.12	P 3	27	25	23	円形	1.96		10
	P 4	(30)	(26)	39	不明(重複)	2.17		-
北辺 4.10	P 5	26	24	43	円形	2.15		282
	P 6	57	32	33	楕円形	P 1へ1.95		32

がなく新旧関係不明。

主軸方位 N-21~23°-W 面積 推定17.43㎡

形態 2×2間・正方形。南東隅柱穴は2号土坑と重複により未検出か。西辺のP 4は10cm北へ、北辺のP 6は10cm東へ寄る。柱痕も見られず、埋没土に特徴的なものはない。P 1・6の長径は53・57cmと長く、柱の立て替えなどによる柱穴の重複や、柱が抜き取られた可能性もある。そのほかの径は30cm前後を主体とする。柱穴の形態は全て円形・楕円形である。深さは20cm前後、30cm前後、40cm前後とばらつきがある。詳細な規模は第114表のとおり。

出土遺物 P 6底面から石製品(199図1)、その南に接

して、茶下臼(200図2)が出土する。

時期 出土遺物から中世に比定される。

18号掘立柱建物(第201図、P L.69、第115表)

位置 17R・S-13・14グリッド。重複 平面上、1・6・8・15~17号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

主軸方位 N-78°-E 面積 15.58㎡

形態 2×1間・南北棟。北辺のP 5は15cm西へ寄り、柱筋から南方内側に寄っており、棟持柱と考えられる。柱痕も見られず、埋没土に特徴的なものはない。P 1の長径は62cmと長く、柱の立て替えなどによる柱穴の重複

や、柱が抜き取られた可能性もある。そのほかの径は30cm前後を主体とする。柱穴の形態は全て円形・楕円形である。深さは15cm前後と30cm前後に分かれる。詳細な規模は第115表のとおり。中世以降の遺物は出土していない。

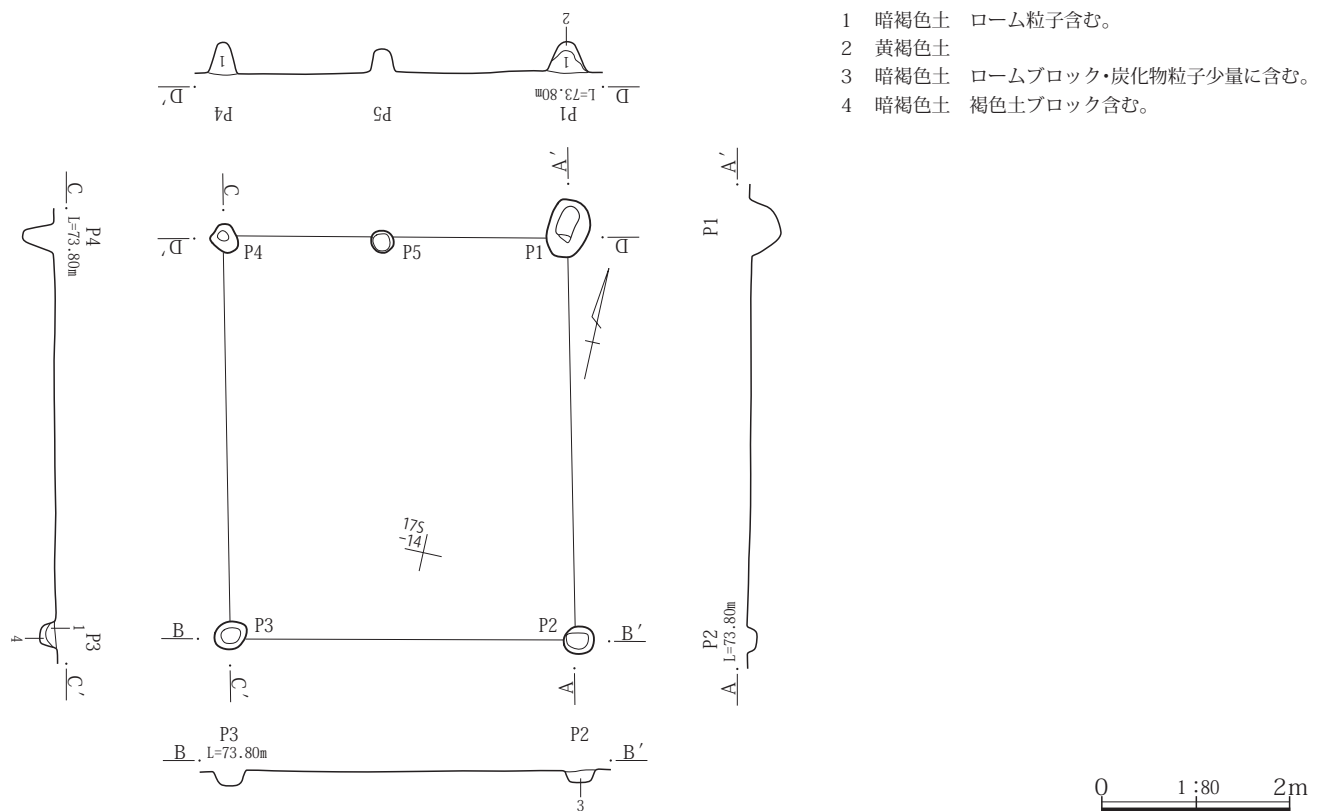
19号掘立柱建物(第202図、P L 70・71、第116表)

位置 17S・T-12・13グリッド。重複 平面上、2・6・9～11・14・15号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

主軸方位 N-17～21°-W 面積 13.39㎡

形態 2×1間・南北棟。北辺は南辺より21cm長く、西辺は西へ外傾する。平面形は台形。南辺の中間柱P3は

ほぼ中央に位置し、柱筋から南方外側へ張り出し、棟持柱と考えられる。P1は柱痕がほぼ残り、埋没土2は掘り方を充填したものと言える。P5の長径は50cmと長く、柱が抜き取られた可能性もある。そのほかの径は34cm前後を主体とする。柱穴の形態は全て円形・楕円形である。深さは24cmとやや浅いP1を除き、40～54cmとやや深い。中央北寄りの43号土坑は、整った隅丸長方形の浅い土坑であり、内部施設の可能性を持つが、焼土や炭化物の集中など特徴的な状況はない。間仕切りはないが、建物は南北2間幅の北側1間分を占有している。建物の機能を位置づける土坑と考えられる。詳細な規模は第116表のとおり。中世以降の遺物は出土していない。



第201図 2区18号掘立柱建物

第115表 2区18号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		2×1間・南北棟			面積	15.58㎡	旧ビット番号
主軸方位		N-78°-E			位置	17R・S-13・14	
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ビットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
東辺 4.26	P 1	62	44	32	楕円形	4.26	22
南辺 3.68	P 2	32	30	13	円形	3.68	107
西辺 4.24	P 3	36	30	16	楕円形	4.24	1
北辺 3.65	P 4	30	27	31	楕円形	1.69	12
	P 5	24	23	25	円形	P 1へ1.97	260

20号掘立柱建物(第203図、P L .68・71、第117表)

位置 17T・18A-14～16グリッド。重複 P 4は53号ピット、P 6は202号ピットより後出で、P 7は278号ピットと重複するが新旧関係不明。平面上、7・21号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

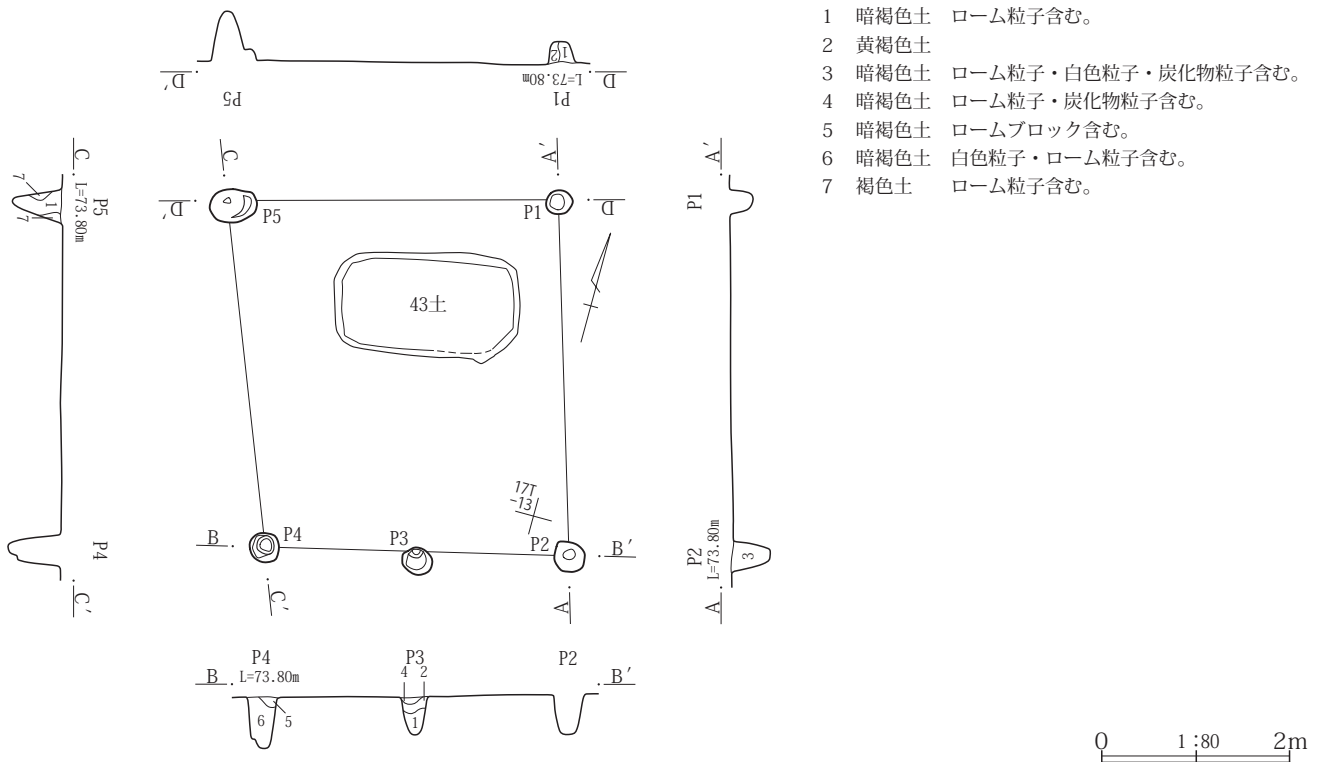
主軸方位 N-66～68°-E 面積 推定19.19㎡

形態 2×3以上間・東西棟。北西隅柱穴は2号井戸と重複により未検出か。桁行柱間を平均すると、1.6833m・約5.6尺となるが、南辺のP 6は18cm西へ寄る。南北辺とも西端が外側へ開いており、平面形は台形。P 5は柱痕がほぼ残り、埋没土8は掘り方を充填したものと

言える。P 5の長径は49cmと長く、柱の立て替えなどによる柱穴の重複や、柱が抜き取られた可能性もある。そのほかの径は、重複で乱れるP 7を除き、33～42cmである。柱穴の形態は全て円形・楕円形である。深さは13～54cmとばらつきがある。東中央部の40号土坑は整った円形で、内部施設の可能性を持つが、焼土や炭化物の集中など特徴的な状況はない。詳細な規模は第117表のとおり。中世以降の遺物は出土していない。

21号掘立柱建物(第204図、P L .68・71、第118表)

位置 17T・18A-15・16グリッド。重複 P 5は294号ピットと重複するが新旧関係不明。平面上、20号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

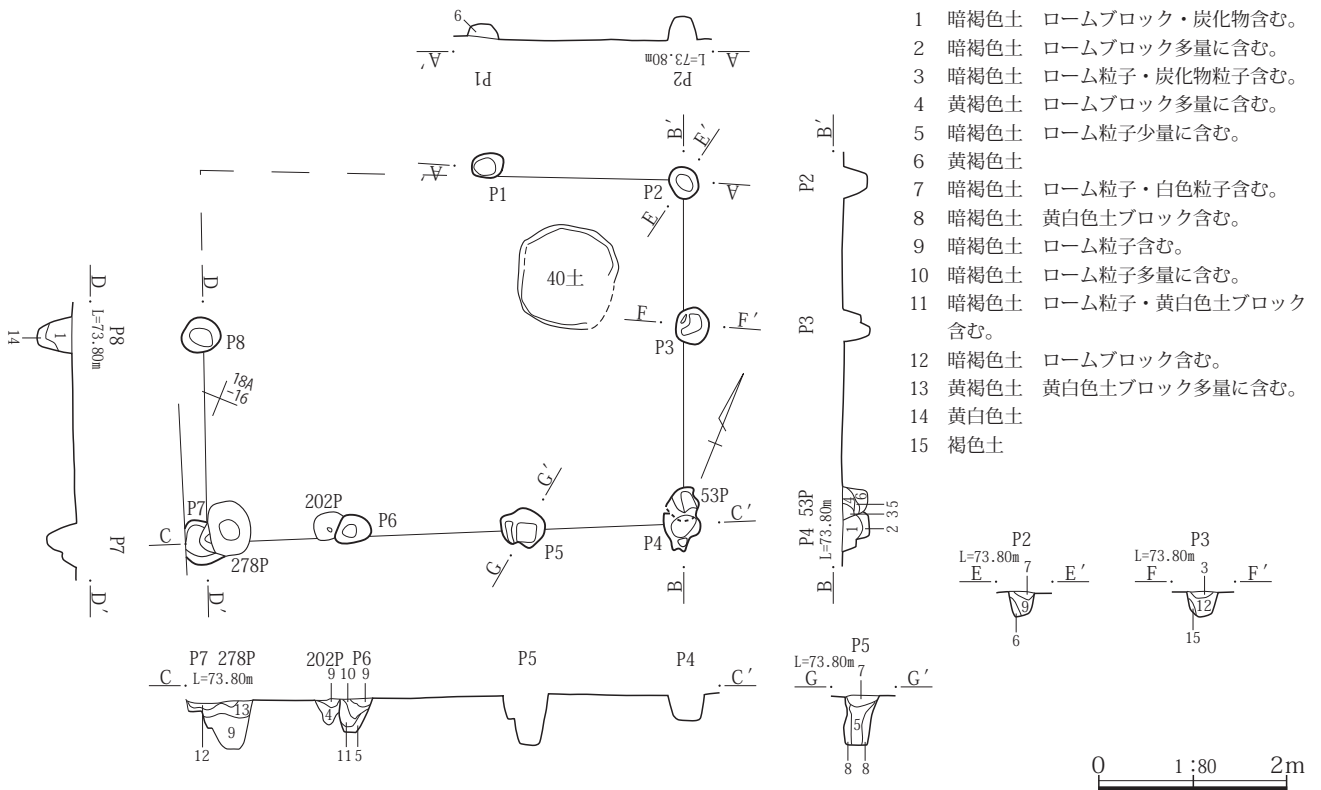


第202図 2区19号掘立柱建物

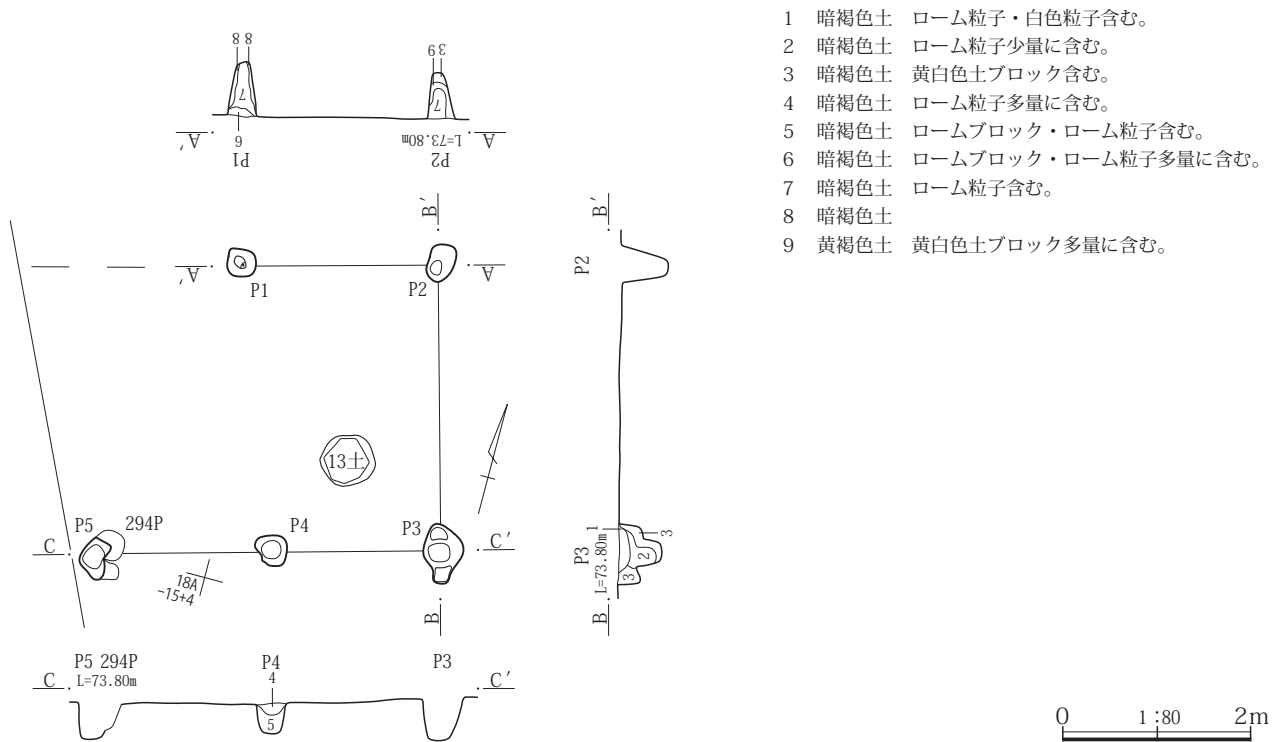
第116表 2区19号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		2×1間・南北棟			面積	13.39㎡	旧ピット番号
主軸方位		N-17～21°-W			位置	17S・T-12・13	
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
東辺 3.75	P 1	28	25	24	円形	3.75	463
南辺 3.23	P 2	37	31	40	楕円形	1.62	81
	P 3	33	28	41	円形	1.61	395
西辺 3.68	P 4	34	32	54	円形	3.68	47
北辺 3.50	P 5	50	36	52	楕円形	P 1へ3.50	114





- 1 暗褐色土 ロームブロック・炭化物含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロック多量に含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子含む。
- 4 黄褐色土 ロームブロック多量に含む。
- 5 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。
- 6 黄褐色土
- 7 暗褐色土 ローム粒子・白色粒子含む。
- 8 暗褐色土 黄白色土ブロック含む。
- 9 暗褐色土 ローム粒子含む。
- 10 暗褐色土 ローム粒子多量に含む。
- 11 暗褐色土 ローム粒子・黄白色土ブロック含む。
- 12 暗褐色土 ロームブロック含む。
- 13 黄褐色土 黄白色土ブロック多量に含む。
- 14 黄白色土
- 15 褐色土



- 1 暗褐色土 ローム粒子・白色粒子含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。
- 3 暗褐色土 黄白色土ブロック含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒子多量に含む。
- 5 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子含む。
- 6 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量に含む。
- 7 暗褐色土 ローム粒子含む。
- 8 暗褐色土
- 9 黄褐色土 黄白色土ブロック多量に含む。

第117表 2区20号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		2×3以上間・東西棟			面積	(19.19) m <sup>2</sup>	旧ピット番号
主軸方位		N-66°-68°-E			位置	17T・18A-14~16	
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
東辺 3.63	P 1	33	26	13	楕円形	2.14	237
	P 2	35	29	25	楕円形	1.45	62
	P 3	39	34	20	円形	2.18	59
南辺 5.05	P 4	(42)	40	29	不明	1.68	52
	P 5	49	41	54	楕円形	1.86	54
	P 6	39	30	36	楕円形	1.50	203
	P 7	50	(41)	30	不明	2.15	-
	P 8	42	36	36	円形		292

第118表 2区21号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		1×2以上間・東西棟			面積	11.10m <sup>2</sup> 以上	旧ピット番号
主軸方位		N-75°-E			位置	17T・18A-15・16	
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
東辺 3.00	P 1	34	32	66	隅丸方形	2.05	299
	P 2	41	27	48	楕円形	3.00	184
南辺 3.70	P 3	64	43	44	楕円形	1.79	55
	P 4	37	33	32	隅丸方形	1.91	263
	P 5	45	25	37	不明(重複)		293

主軸方位 N-75°-E 面積 推定11.10m<sup>2</sup>以上

形態 1×2以上間・東西棟。北西隅柱穴は2号井戸と重複により未検出か。南辺のP4は5cm東へ寄り、対応する北辺のP1は26cm西へ寄る。P2は柱痕がほぼ残り、埋没土9は掘り方を充填したものと言える。P3の長径は64cmと長く、柱の立て替えなどによる柱穴の重複や、柱が抜き取られた可能性もある。そのほかの径は40cm前後を主体とする。柱穴の形態は隅丸方形と円形が混在する。深さは37~66cmとややばらつきがあるが概ね深い。東中央部の13号土坑は整った円形で、内部施設の可能性があるが、焼土や炭化物の集中など特徴的な状況はない。詳細な規模は第118表のとおり。中世以降の遺物は出土していない。

22号掘立柱建物(第205図、P L.68、第119表)

位置 17Q-10・11グリッド。重複 P1は2号溝、P2は376号ピットと重複するが新旧関係不明。

主軸方位 N-86°-88°-W 面積 5.95m<sup>2</sup>

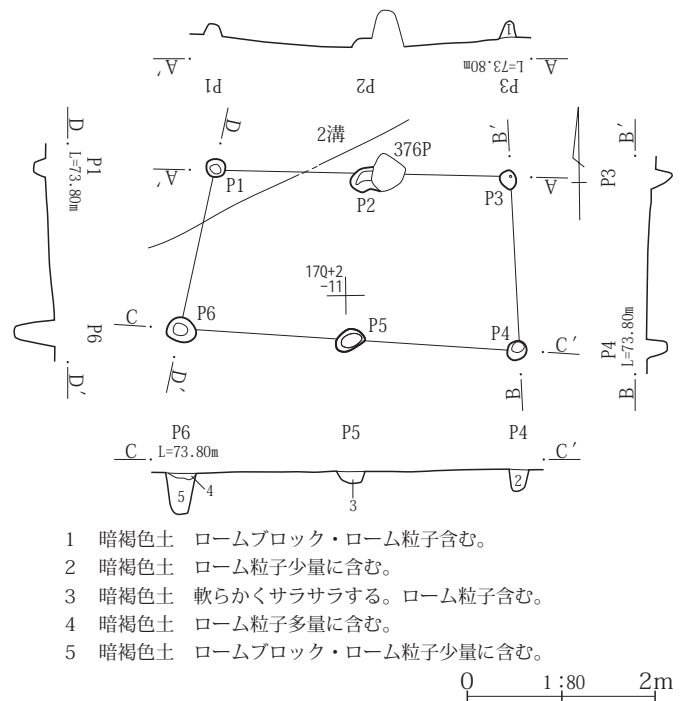
形態 1×2間・東西棟。南辺は北辺より46cm開いたため、西辺は東へ内傾し、東辺は西へ内傾する。平面形は台形。柱痕は見られない。P3の埋没土はサラサラとした特徴があり、ほかと異なる。柱穴の径は21~31cmとやや小さい。柱穴の形態は全て円形・楕円形である。深さは42cmとやや深いP6を除き、11~23cmと浅い。詳細な規模は第119表のとおり。中世以降の遺物は出土していない。

23号掘立柱建物(第206図、P L.69、第120表)

位置 17O・P-7・8グリッド。重複 なし

主軸方位 N-77°-79°-E 面積 9.34m<sup>2</sup>

形態 2×1間・南北棟。北辺より南辺が30cm広いため、東辺は西へ内傾し、平面形は台形である。東辺のP2は柱筋より外側へ張り出し、西辺のP5は柱筋より内側に寄っており、棟持柱と考えられる。北辺の西延長線上に228・387号ピットがあり、建物の一部の可能性もあるが、



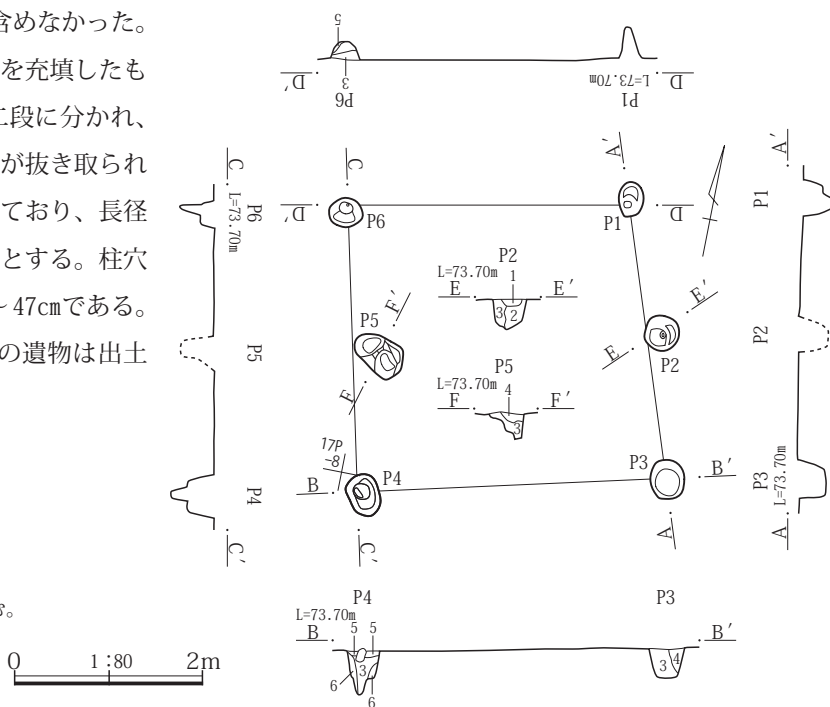
- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。
- 3 暗褐色土 軟らかくサラサラする。ローム粒子含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒子多量に含む。
- 5 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量に含む。

第205図 2区22号掘立柱建物

第4章 発掘調査の記録

柱間がばらつき南辺も不明なため、建物に含めなかった。  
 P 4は柱痕が一部残り、埋没土6は掘り方を充填したものと  
 と言える。P 1・2・4・6は底面が二段に分かれ、  
 柱の立て替えなどによる柱穴の重複や、柱が抜き取られ  
 た可能性もある。P 5は柱穴が2基並存しており、長径  
 は56cmと長い。柱穴の径は35cm前後を主体とする。柱穴  
 の形態は全て円形・楕円形である。深さ31～47cmである。  
 詳細な規模は第120表のとおり。中世以降の遺物は出土  
 していない。

- 1 暗褐色土 ロームブロック少量を含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロック含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子含む。
- 4 黄褐色土
- 5 暗褐色土 ローム粒子多量を含む。
- 6 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量を含む。



第206図 2区23号掘立柱建物

第119表 2区22号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		1×2間・東西棟			面積	5.95㎡		旧ピット番号
主軸方位		N-86°~88°-W			位置	17Q-10・11		
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)		
		長径	短径	深さ				
北辺 3.13	P 1	21	20	13	円形	1.60		—
	P 2	(29)	23	11	不明(重複)	1.54		377
東辺 1.80	P 3	21	17	18	円形	1.80		379
南辺 3.59	P 4	22	20	23	円形	1.78		383
	P 5	31	20	12	楕円形	1.81		384
西辺 1.74	P 6	31	26	42	楕円形	P 1へ1.74		385

第120表 2区23号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		2×1間・南北棟			面積	9.34㎡		旧ピット番号
主軸方位		N-77°~79°-E			位置	17O・P-7・8		
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)		
		長径	短径	深さ				
東辺 2.95	P 1	37	27	34	楕円形	1.44		267
	P 2	37	36	40	円形	1.55		231
南辺 3.27	P 3	41	36	31	円形	3.27		272
西辺 3.04	P 4	45	33	47	楕円形	1.53		404
	P 5	56	37	37	楕円形	1.57		403
北辺 2.97	P 6	36	31	35	円形	P 1へ2.97		229

第121表 2区1号柱穴列 計測表

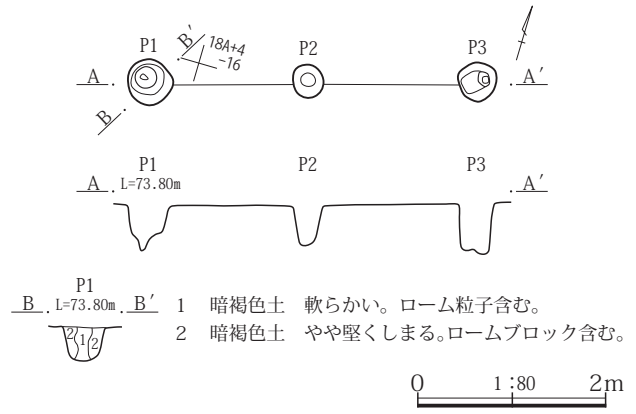
主軸方位		N-76°-E		規模	2間	位置	18A-15・16		旧ピット番号
柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)				
	長径	短径	深さ						
P 1	48	45	49	円形	1.73		250		
P 2	35	32	41	楕円形	1.87		64		
P 3	41	40	53	円形			63		

1号柱穴列(第207図、P L .68、第121表)

位置 18A-15・16グリッド。 重複 なし

主軸方位 N-76°-E

形態 西端は調査区域外へ延びる可能性あり。中間柱P2は7cm西へ寄る。柱痕も見られず、埋没土に特徴的なものはない。P2が径・深さともやや小さいが、径は40cm台、深さは50cm前後である。掘立柱建物の側柱を思わせるが認定は難しい。詳細な規模は第121表のとおり。中世以降の遺物は出土していない。



第207図 2区1号柱穴列

2 竪穴状遺構

竪穴状遺構は一辺1.5m以上の方形を基準とする3基である。底面は平坦だが、床面に似た硬化面や柱穴は見られない。建物群に隣接して分布する点で共通する。ここでは、土坑と不明なものもあわせて掲載する。

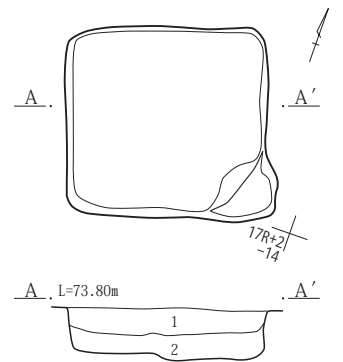
1号竪穴状遺構(第208図、P L .72)

位置 17R-14グリッド 主軸方位 N-71°-E

平面形は整った正方形。壁は垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。硬化面は確認されていない。埋没土は中位までサラサラし上位はしまるため、人為埋没。掘立柱建物群の南に隣接しており、関連が想定される。規模は長軸1.63m短軸1.53m深さ34~40cmである。中世以降の遺物は出土していない。

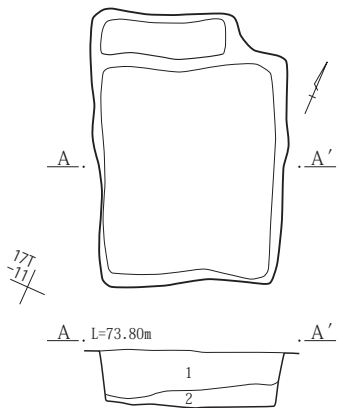
備考 調査時の1号土坑より名称変更。

1号竪穴状遺構



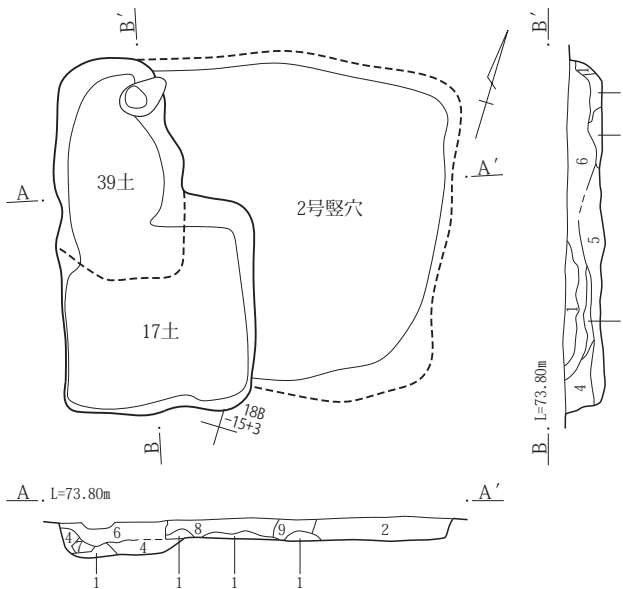
- 1 暗褐色土 やや堅くしまる。ロームブロック多量に含む。
- 2 灰褐色土 軟らかくサラサラする。ロームブロック少量に含む。

3号竪穴状遺構



- 1 黄褐色土 やや堅くしまる。ロームブロック多量に含む。
- 2 灰褐色土 軟らかくサラサラする。ローム粒子含む。

2号竪穴状遺構、17・39号土坑



- 1 黄褐色土 軟らかくしまり弱い。ローム多量に含む。
- 2 暗褐色土 やや堅くしまる。炭化物粒子・ローム粒子含む。
- 3 暗褐色土 軟らかくしまり弱い。
- 4 暗褐色土 軟らかい。ロームブロック多量に含む。
- 5 灰褐色土 軟らかくしまり弱い。ロームブロック・炭化物少量に含む。
- 6 暗褐色土 やや堅くしまる。ロームブロック含む。
- 7 暗褐色土 軟らかくしまり良い。ロームブロック少量に含む。
- 8 暗褐色土 やや堅くしまる。白色軽石・ロームブロック含む。
- 9 暗褐色土 やや堅くしまる。ローム粒子少量に含む。

第208図 2区1・2・3号竪穴状遺構、17・39号土坑

### 2号竪穴状遺構、17・39号土坑(第208図、P L .72)

**位置** 18B-15グリッド。主軸方位 N-73°-E  
17・39号土坑と重複するが、新旧関係は明確ではなく、同一遺構の一部である可能性もある。平面形は長方形だが輪郭は不分明。17・39号土坑の南北辺に一致する。壁はやや斜めに立ち上がる。底面は平坦で、硬化面は確認されていない。底面に黄褐色土が堆積する点が注目される。規模は長軸3.20m短軸2.82m深さ6～23cmである。中世以降の遺物は出土していない。

**備考** 調査時の17号土坑より抽出し名称付番。

**17号土坑** **位置** 18B-15グリッド。2号竪穴状遺構、39号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は整った正方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸1.70m短軸1.53m深さ30cmである。

**39号土坑** **位置** 18B-15グリッド。2号竪穴状遺構、17号土坑と重複するが新旧関係不明。壁は斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸(1.75)m短軸1.03m深さ31cmである。中世以降の遺物は出土していない。

### 3号竪穴状遺構(第208図、P L .72)

**位置** 17T-10・11グリッド **主軸方位** N-25°-W  
平面形は整った長方形で、北辺は更に一部張り出す。あるいは重複する遺構か。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸2.25m短軸1.54m深さ35～46cmである。中世以降の遺物は出土していない。

**備考** 調査時の21号土坑より名称変更。

## 3 土坑

土坑44基のうち、39基は1号屋敷内部とその区画溝に隣接して分布し、残る5基のうち3基は周辺地域に、1基は3区1号屋敷を区画する10号溝と重複し、残る1基は調査区北西隅に偏在する。周辺地域の3基のうち、47号土坑は浅い細長方形で、ピット群(17Q-3・4・5)との関連が想定される。やや深い長方形の45号土坑は主軸方位が10・13号溝などと合わず、屋敷群とは時期が違う可能性が高い。円形の48号土坑も、13号溝と重複して同様である。3区1号屋敷に重なる26号土坑は10号溝と重複するが、5号井戸と接して屋敷との関連も想定される。北西隅の38号土坑は浅い長楕円形で1号溝と接する。1・4号溝で囲まれた別の区画との関連も想定される。

1号屋敷内の土坑39基は、形態により分布状況が選別される傾向がある。形態別では円形10基、楕円形4基、方形1基、正方形2基、長方形1基、細長方形4基、隅丸方形2基、隅丸長方形13基、隅丸細長方形1基、溝状1基に分類される。円形の土坑10基のうち、浅く整った円形の33A号土坑は3号掘立柱建物の中央西端に、41号土坑は同じく3号掘立柱建物の南東部に位置し、内部施設と思われる。40号土坑は20号掘立柱建物の北西部に、やや深い13号土坑は21号掘立柱建物の南東部にあり、その施設である可能性が高い。これら4基の土坑は、掘立柱建物内部でも壁寄りに位置する傾向がある。同様に浅く円形の12B・42号土坑も建物群の内部ではないが接しており、関連する可能性がある。13号土坑に近似する14・31号土坑は対応する建物がないが、認定できていない建物との関係も考慮される。建物と関連しないものとして、浅く整った円形の24号土坑は、1号屋敷の東辺3号溝と重複し、3号竪穴状遺構と近接し関連も想定される。23号土坑は3号溝から約6m離れるが、周辺の土坑と関連する可能性は残る。

円形の土坑に関連して、144・153号ピットは、形態的に整った円形で近似する。分布においても、ともに4号掘立柱建物にあり、前者は南辺に接し、後者は北辺に接する。あわせて、溝状の32号土坑はこの154号ピットと重なり、同建物の北東隅に位置し、内部施設の可能性を持つ。

楕円形の土坑4基のうち、浅い33B号土坑は3号掘立柱建物の内部にある33A号土坑の東に接し、やや深い5号土坑は1号掘立柱建物の中央南端にあり、その施設で

ある可能性が高い。3号土坑も重複が著しい建物内部にあり、特定はできないが建物との関連が考えられる。35号土坑は調査区南端に位置し未調査部分もあるが、深く他のものと形態が異なる。1号屋敷とは別段階の22号掘立柱建物と近接して、関係が想定される。

方形の11号土坑は規模はやや小さいが深く、1・3号竪穴状遺構と形態的に近似する。分布も建物群の南限に沿って東西に並ぶ。

正方形の土坑2基のうち、やや深い17号土坑は方形の11号土坑と同系統であり、2号竪穴状遺構の一部とも見なされる。27号土坑は小規模でやや深く、形態は異なるが円形の23号土坑と近似する。周辺の土坑と主軸方位が異なり、1号屋敷との関係は想定しにくい。

長方形の4号土坑は10号掘立柱建物の北西隅にあり、その施設と考えられる。埋没土は黄褐色土と灰褐色土の互層で特徴的である。掘立柱建物と関連する土坑でも、形態的に異なる。

細長方形の土坑4基のうち、小規模な29号土坑は東西軸を採り、深さの近似して近い11号土坑との関係が想定される。他の3基はともに南北軸をとり、周辺建物と距離を持つ点で共通する。18号土坑についても3号掘立柱建物を除けば、南側の建物群と3m以上離れることとなる。隅丸細長方形の10号土坑もこの3基と同様な位置にある。これら4基は、機能上建物と直接に関わらない一群と言える。

隅丸方形の2基は、ともに隅丸長方形の土坑と重複して、形態が不詳となったもので、分布からも隅丸長方形に含めて考えることができる。隅丸長方形13基のうち、7号土坑は長軸約1mと小規模で、1号掘立柱建物の南東部に位置する。楕円形の3号土坑同様に内部施設の可能性を持つが、焼土や炭化物の集中など特徴的な状況はない。残る隅丸方形・長方形14基は、深さにより2種類に分かれ、機能的な違いがみられる。浅いものは建物内部および周辺が多い。20号土坑は4号掘立柱建物の内側にあるが主軸方位が異なり、西側半分は外側となるが、5号掘立柱建物との関連が想定される。これと重複する34号土坑は、方位がやや定まらないが、4号掘立柱建物との関連が考慮される。43号土坑は2×1間規模を持つ19号掘立柱建物の北側1間分を占有する内部施設と考えられる。12A号土坑は建物内部に含まれないが、5号掘

立柱建物の底と付合する位置関係にあり、関連が考慮される。以上4基は建物との直接的な関連を示す一群である。

残る10基は浅いもの4基、やや深いもの6基で構成され、分布範囲は3か所に分かれる。1号屋敷の北西に位置する16・39号土坑はともにやや深く、直交方向に隣接し、後者は2号竪穴状遺構の内部にあり、一部である可能性もある。前者もそれとの関係が想定できる。1号屋敷の南端に位置する2基のうち、やや深い8号土坑は、直交方向ながら細長方形と隅丸細長方形の9・10号土坑と類似するものである。浅い30号土坑は隅丸方形で、主軸方位は周辺の土坑よりも東に傾き、22号掘立柱建物や35号土坑との関連も考えられる。残る6基は3号溝の周囲に密集している。浅いものとやや深いものが3基ずつある。屋敷内部にあるものは25号土坑のみであり、西側には建物やピットが近接する。建物との関係も否定できないが、むしろ3号溝の走向方位に一致している。3号溝の東・南側の5基は、屋敷外部で境界付近とも言える。28・36・37号土坑は重複する。同じ機能により繰り返し設営された様相を示す。26号土坑は主軸方位が異なっており、建物同様に方位により時期差があることを示唆する。

#### 3号土坑(第209図、P L.72)

**位置** 17S-13・14グリッド。2号掘立柱建物P10、15号掘立柱建物P6、41号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は楕円形。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。重複多く埋没状況不詳。特定はできないが、状況から掘立柱建物の内部施設である可能性もある。規模は長径138cm短径91cm深さ12cmである。中世以降の遺物は出土していない。

#### 4号土坑(第209図、P L.72)

**位置** 17T-14グリッド。9号掘立柱建物P5より後出で、49・133号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は長方形。主軸方位はN-18°-W。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦だが、中央で二段に分かれる。埋没土は黄褐色土と灰褐色土の互層で埋まり人為埋没。規模は長軸116cm短軸77cm深さ42cmである。10号掘立柱建物の北西隅に位置し、内部施設の可能性を持つ。中世以降の遺物は出土していない。

#### 5号土坑(第209図、P L.72)

**位置** 17R・S-13グリッド。平面形は楕円形。壁は丸

みを持って斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没状況不詳。規模は長径96cm短径75cm深さ15cmである。1号掘立柱建物の中央南端に位置し、内部施設の可能性がある。中世以降の遺物は出土していない。

**7号土坑(第209図、P L.72)**

**位置** 17S-12・13グリッド。13号掘立柱建物P5と重複するが新旧関係不明。平面形は東辺の丸い隅丸長方形。主軸方位はN-70°-E。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。埋没状況不詳。規模は長軸104cm短軸60cm深さ17cmである。中世以降の遺物は出土していない。

**8号土坑(第209図、P L.73)**

**位置** 17Q・R-13グリッド。平面形は隅丸長方形。主軸方位はN-70°-E。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦で一部小穴がみられるが、根による攪乱の可能性もある。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸165cm短軸84cm深さ13cmである。中世以降の遺物は出土していない。

**9号土坑(第209図、P L.73)**

**位置** 17Q・R-12グリッド。平面形は隅丸細長方形で、北西が半円形に張り出す。その部分は浅く、別の円形土坑の可能性高いが、調査に従い一つの土坑で扱う。主軸方位はN-27°-W。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸282cm短軸87cm深さ19cmである。中世以降の遺物は出土していない。

**10号土坑(第209図、P L.73)**

**位置** 17R-12グリッド。両端の丸い細長方形。主軸方位はN-23°-W。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。底面に小穴1基あるが、根による攪乱の可能性あり。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸185cm短軸64cm深さ14cmである。中世以降の遺物は出土していない。

**11号土坑(第209図、P L.73)**

**位置** 17S-12グリッド。平面形は隅丸方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸129cm短軸120cm深さ45cmである。中世以降の遺物は出土していない。

**12A・B号土坑(第209図、P L.73)**

**12A号土坑 位置** 17S・T-12グリッド。12B号土坑と重複するが新旧関係不明。東半部の平面形は隅丸長方形で、西半部は丸みを持つ。2基の重複の可能性あり。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没状況不詳。規模は長軸178cm短軸117cm深さ9cmである。中世以降の遺物は出土していない。

**12B号土坑 位置** 17S・T-12グリッド。12A号土坑・1号井戸・104号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は不整円形。壁は緩やかに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没土は詳細不明。規模は長径121cm短径116cm深さ7cmである。中世以降の遺物は出土していない。

**13号土坑(第209図、P L.73)**

**位置** 18A-15グリッド。平面形はほぼ円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没状況不詳。規模は長径60cm短径55cm深さ23cmである。21号掘立柱建物の東中央部に位置し、内部施設の可能性がある。中世以降の遺物は出土していない。

**14号土坑(第209図、P L.73)**

**位置** 18A-15グリッド。平面形は不整円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没状況不詳。規模は長径62cm短径53cm深さ14cmである。中世以降の遺物は出土していない。

**16号土坑(第210図、P L.73)**

**位置** 18B-15・16グリッド。15号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸方形か。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや凸凹する。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸(80)cm短軸77cm深さ31cmである。中世以降の遺物は出土していない。

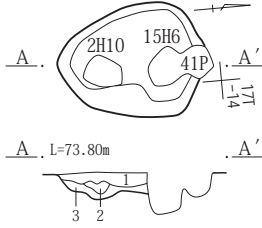
**18号土坑(第209図、P L.74、第122表)**

**位置** 18A・B-13・14グリッド。平面形は隅丸細長方形。主軸方位はN-29°-W。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土は均質で人為埋没。埋没土から甕とみられる1の常滑陶器が出土する。規模は長軸242cm短軸95cm深さ30cmである。出土遺物から中世に比定される。掲載遺物のほか、中世在地系土器1片が出土している。

**19号土坑(第210図、P L.74)**

**位置** 18B-12グリッド。平面形は隅丸細長方形。主軸方位はN-20°-W。壁はやや斜めに立ち上がる。底面は凸凹する。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸

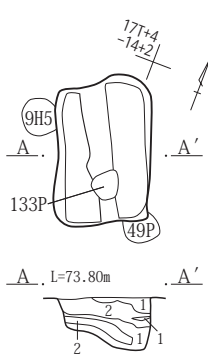
3号土坑



3号土坑

- 1 暗褐色土 やや堅くしめる。ローム粒子・白色粒子含む。
- 2 暗褐色土 やや堅くしまり粘性あり。ロームブロック含む。
- 3 黄褐色土 やや堅くしまり粘性あり。

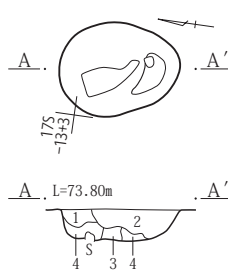
4号土坑



4号土坑

- 1 黄褐色土 軟らかく粘性あり。ローム多量、灰褐色土含む。
- 2 灰褐色土 軟らかく粘性あり。ローム少量に含む。

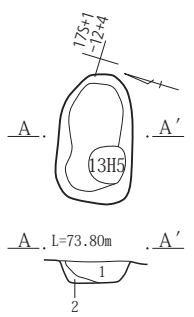
5号土坑



5号土坑

- 1 灰褐色土 やや堅くしめる。ローム粒子含む。
- 2 暗褐色土 やや堅くしめる。白色粒子少量に含む。
- 3 暗褐色土 軟らかく粘性あり。黄白色土ブロック含む。
- 4 黄褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。ローム多量に含む。

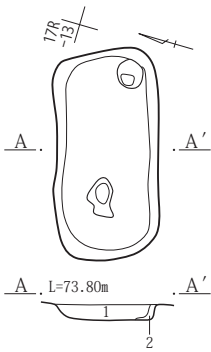
7号土坑



7号土坑

- 1 灰褐色土 軟らかくサラサラする。ローム粒子含む。
- 2 暗褐色土 軟らかい。暗褐色土ブロック含む。

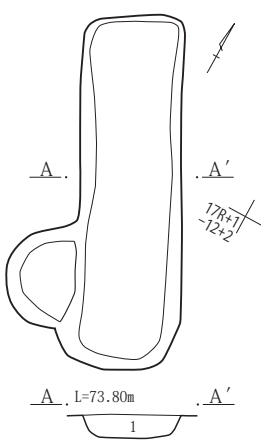
8号土坑



8号土坑

- 1 灰褐色土 軟らかくサラサラする。ローム粒子含む。
- 2 暗褐色土 軟らかい。暗褐色土ブロック含む。

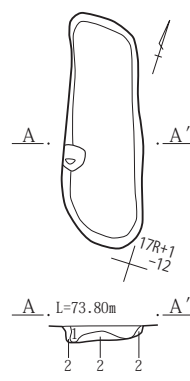
9号土坑



9号土坑

- 1 灰褐色土 軟らかくサラサラする。ローム粒子含む。

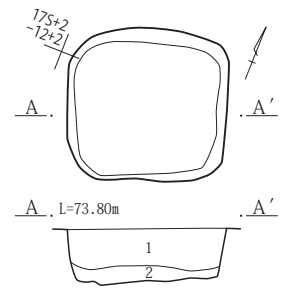
10号土坑



10号土坑

- 1 暗褐色土 軟らかい。ロームブロック含む。
- 2 暗褐色土 軟らかくしまり良い。

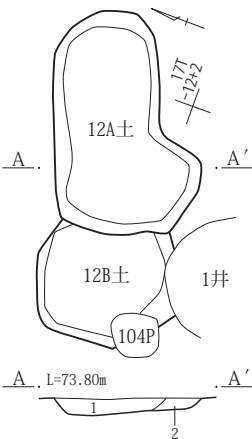
11号土坑



11号土坑

- 1 暗褐色土 やや堅くしめる。ロームブロック多量に含む。
- 2 灰褐色土 軟らかくサラサラする。ロームブロック少量に含む。

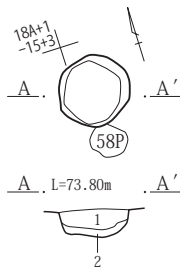
12A・B号土坑



12A号土坑

- 1 暗褐色土 軟らかくしまり良い。ロームブロック、白色粒子含む。
- 2 暗褐色土 軟らかくサラサラする。ロームブロック少量に含む。

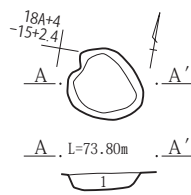
13号土坑



13号土坑

- 1 暗褐色土 やや堅くしめる。ローム粒子、白色粒子含む。
- 2 黄褐色土 やや堅くしまり粘性あり。ロームブロック多量に含む。

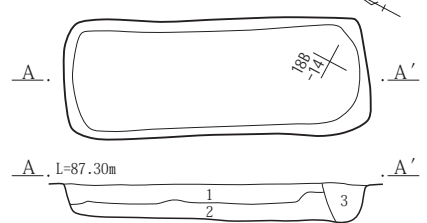
14号土坑



14号土坑

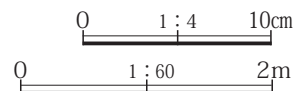
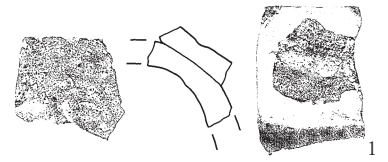
- 1 暗褐色土 やや堅くしめる。ローム粒子含む。

18号土坑



18号土坑

- 1 暗褐色土 軟らかくサラサラする。ロームブロック、ローム粒子含む。
- 2 暗褐色土 軟らかくサラサラする。ローム微量に含む。
- 3 黄褐色土 堅くしめる。



第209図 2区土坑(1)、18号土坑出土遺物



192cm短軸90cm深さ23cmである。中世以降の遺物は出土していない。

20・34号土坑(第210図、P L.74・75)

20号土坑 位置 17T・18A-12グリッド。12号掘立柱建物P1より後出。34号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸長方形。主軸方位はN-69°-E。壁はやや斜めに立ち上がる。底面は凸凹する。埋没状況不詳。規模は長軸183cm短軸95cm深さ8cmである。

34号土坑 位置 17T-12グリッド。161号ピットより前出で、20号土坑、212号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形はほぼ円形か。壁は斜めに立ち上がる。底面は凸凹する。埋没状況不詳。規模は長径90cm短径(80)cm深さ13cmである。中世以降の遺物は出土していない。

22号土坑(第210図、P L.74)

位置 17T-9・10グリッド。483号ピットより後出。平面形は隅丸長方形で、南半部が一段高いか、別の土坑が重複していた可能性がある。主軸方位はN-75°-E。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸188cm短軸97cm深さ13cmである。中世以降の遺物は出土していない。

23号土坑(第210図、P L.74)

位置 18A・B-9グリッド。平面形はほぼ円形で、南側がピット状に落ち込み、別遺構の可能性がある。壁は緩やかに立ち上がる。底面は凸凹する。埋没状況不詳。規模は長径100cm短径93cm深さ9cmである。中世以降の遺物は出土していない。

24号土坑(第210図、P L.74)

位置 17T-10グリッド。3号溝と重複するが新旧関係不明。平面形は整った円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没状況不詳。規模は長径60cm短径60cm深さ9cmである。中世以降の遺物は出土していない。

25号土坑(第210図、P L.74)

位置 18A-10・11グリッド。平面形は隅丸長方形で、東辺は乱れる。主軸方位はN-32°-W。壁は斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸220cm短軸120cm深さ10cmである。中世以降の遺物は出土していない。

26・27号土坑(第210図、P L.74)

26号土坑 位置 18A・B-9・10グリッド。27号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸長方形。主軸

方位はN-33°-W。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没状況不詳。規模は長軸185cm短軸98cm深さ11cmである。中世以降の遺物は出土していない。

27号土坑 位置 18A・B-10グリッド。26号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸方形。主軸方位はN-20°-E。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は凸凹する。埋没状況不詳。規模は長軸77cm短軸75cm深さ20cmである。中世以降の遺物は出土していない。

28・36・37号土坑(第210図、P L.75)

28号土坑 位置 18A-10グリッド。36・37号土坑、143号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸長方形。主軸方位はN-15°-W。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸(240)cm短軸105cm深さ27cmである。時期不詳土器2片が出土している。

36号土坑 位置 18A-10グリッド。28号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸方形か。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土は詳細不明。規模は長軸75cm短軸(52)cm深さ12cmである。中世以降の遺物は出土していない。

37号土坑 位置 17T・18A-10グリッド。28号土坑、162・431号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸長方形か。北側は一段高く、別遺構の可能性がある。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦で、28号土坑と一致する。埋没土は詳細不明。規模は長軸165cm短軸82cm深さ25cmである。中世以降の遺物は出土していない。

29号土坑(第210図、P L.75)

位置 17R・S-11グリッド。平面形は長方形。主軸方位はN-67°-E。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸135cm短軸47cm深さ34cmである。中世以降の遺物は出土していない。

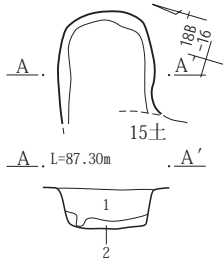
30号土坑(第210図、P L.75)

位置 17Q-12グリッド。平面形は隅丸方形。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没状況不詳。規模は長軸140cm短軸101cm深さ9cmである。中世以降の遺物は出土していない。

31号土坑(第210図、P L.75)

位置 18B-13グリッド。72・179号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸方形。壁は斜めに立ち上

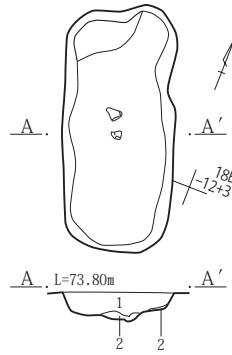
16号土坑



16号土坑

- 1 黄褐色土 軟らかく粘性あり。ロームブロック多量に含む。
- 2 黄褐色土 軟らかく粘性非常にあり。ローム多量に含む。

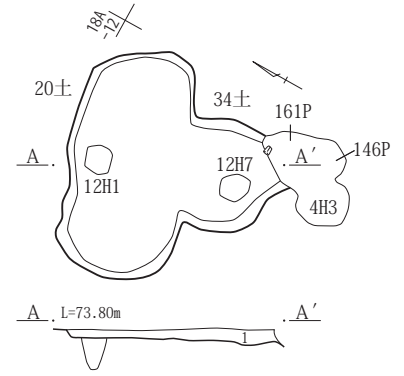
19号土坑



19号土坑

- 1 暗褐色土 軟らかくサラサラする。ロームブロック少量に含む。
- 2 黄褐色土 軟らかく粘性非常にあり。ローム多量に含む。

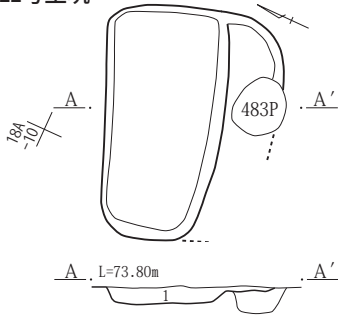
20・34号土坑



20・34号土坑

- 1 暗褐色土 軟らかくサラサラする。ロームブロック少量に含む。

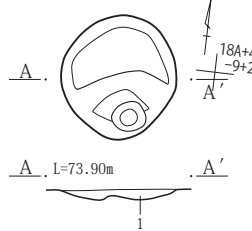
22号土坑



22号土坑

- 1 暗褐色土 軟らかくサラサラする。

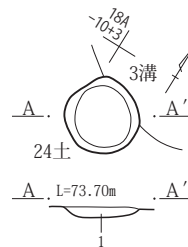
23号土坑



23号土坑

- 1 暗褐色土 軟らかくサラサラする。ロームブロック含む。

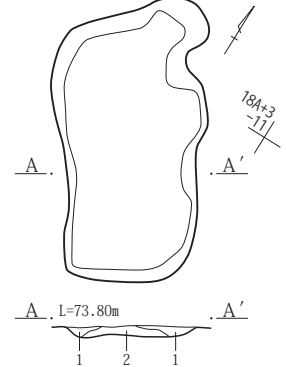
24号土坑



24号土坑

- 1 暗褐色土 軟らかくしまり良い。ロームブロック含む。

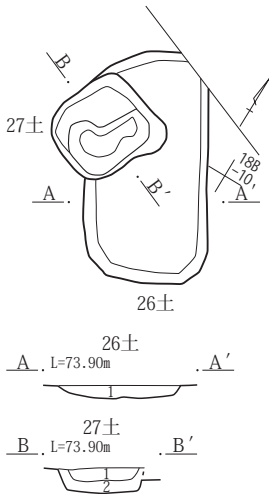
25号土坑



25号土坑

- 1 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ロームブロック含む。
- 2 暗褐色土 軟らかくしまり良い。ローム粒子少量含む。

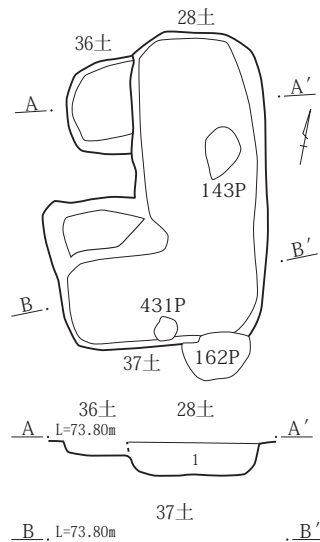
26・27号土坑



26・27号土坑

- 1 暗褐色土 軟らかくサラサラする。ロームブロック含む。
- 2 灰褐色土 軟らかくしまり弱い。

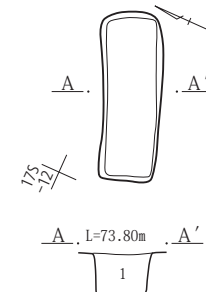
28・36・37号土坑



28・36号土坑

- 1 暗褐色土 軟らかくしまり良い。ロームブロック含む。

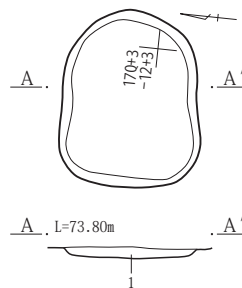
29号土坑



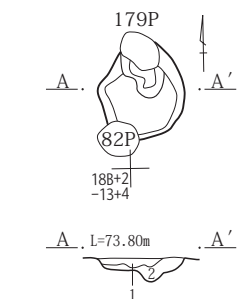
29号土坑

- 1 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ロームブロック・ローム粒子多量に含む。

30号土坑



31号土坑

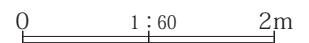


31号土坑

- 1 暗褐色土 軟らかくしまり良い。ロームブロック含む。
- 2 黄褐色土 軟らかく粘性あり。

30号土坑

- 1 暗褐色土 軟らかくサラサラする。ロームブロック少量に含む。



第210図 2区土坑(2)

がる。底面は凸凹する。埋没状況不詳。規模は長軸76cm短軸68cm深さ19cmである。中世以降の遺物は出土していない。

32号土坑(第211図、P L .75)

**位置** 18A-11・12グリッド。4号掘立柱建物P1より後出で、154号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は長円形。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没状況不詳。規模は長径(78)cm短径(32)cm深さ17cmである。中世以降の遺物は出土していない。

33A・33B号土坑(第211図、P L .75)

**33A号土坑 位置** 18B-14グリッド。33B号土坑、328・329号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。埋没状況不詳。規模は長径97cm短径82cm深さ13cmである。3号掘立柱建物の中央西寄りに位置し、内部施設の可能性を持つ。中世以降の遺物は出土していない。

**33B号土坑 位置** 18B-4グリッド。33A号土坑、175号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は長楕円形か。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没状況不詳。規模は長径(82)cm短径50cm深さ10cmである。3号掘立柱建物の中央西寄りに位置し、内部施設の可能性を持つ。中世以降の遺物は出土していない。

35号土坑(第211図、P L .75)

**位置** 17Q-11グリッド。南半部は調査区域外となり、平面形は不明。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没土は均質で人為埋没か。覆土に間層を挟んだ上位に、白色軽石(As-A)を埋没土とする復旧溝が確認できる。規模は長径199cm短径(62)cm深さ89cmである。中世以降の遺物は出土していない。

38号土坑(第211図、P L .76)

**位置** 17C・D-17グリッド。西端部は調査区域外となるが、平面形は長楕円形か。壁は緩やかに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没状況不詳。規模は長径(111)cm短径85cm深さ9cmである。中世以降の遺物は出土していない。

40号土坑(第211図、P L .76)

**位置** 18A-15グリッド。185・186・205・236号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形はほぼ円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没状況不詳。規模は長径(116)cm短径115cm深さ17cmである。20号掘立柱

建物の東中央部に位置し、内部施設の可能性を持つ。中世以降の遺物は出土していない。

41号土坑(第211図、P L .76)

**位置** 18B-14グリッド。平面形は整った円形。壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦。埋没状況不詳。規模は長径67cm短径66cm深さ4cmである。3号掘立柱建物の南東部に位置し、内部施設の可能性を持つ。中世以降の遺物は出土していない。

42号土坑(第211図、P L .76)

**位置** 17T-12・13グリッド。2号掘立柱建物P4、396・422号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は不整円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は凸凹する。埋没状況不詳。規模は長径117cm短径106cm深さ9cmである。中世以降の遺物は出土していない。

43号土坑(第211図、P L .76)

**位置** 17T-13グリッド。2号掘立柱建物P9・6号掘立柱建物P3・14号掘立柱建物P14・15号掘立柱建物P2と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸長方形。主軸方位はN-75°-E。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸197cm短軸111cm深さ10cmである。19号掘立柱建物の中央北寄りに位置し、内部施設の可能性を持つ。中世以降の遺物は出土していない。

45号土坑(第211図、P L .76・149、第122表)

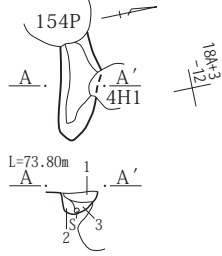
**位置** 17O-4グリッド。9号溝と重複するが新旧関係不明。平面形は長方形。主軸方位はN-61°-W。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸124cm短軸82cm深さ30cmである。埋没土から2の龍泉窯系青磁碗が出土する。中世に比定される。

46号土坑(第211・212図、P L .76・149、第122表)

**位置** 17N-4グリッド。5号井戸、10号溝と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸長方形か。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土は詳細不明。埋没土から在地系土器皿(212図4)、在地系土器鍋(211図3・212図5)が出土する。規模は長軸(136)cm短軸(84)cm深さ47cmである。出土遺物から14世紀後半から15世紀前半に比定される。掲載遺物のほか、中世在地系土器5片が出土している。

47号土坑(第211図、P L .77)

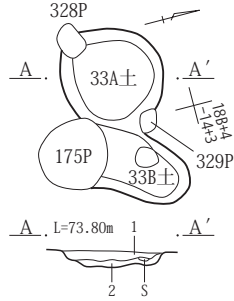
32号土坑



32号土坑

- 1 暗褐色土 軟らかくしまり良い。ローム粒子・炭化物粒子含む。
- 2 暗褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。ローム粒子含む。
- 3 黄褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。ローム多量に含む。

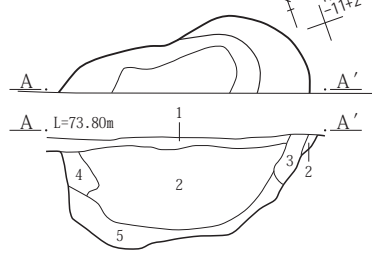
33A・B号土坑



33号土坑

- 1 暗褐色土 軟らかくしまり弱い。ロームブロック含む。
- 2 暗褐色土 やや堅くしまり粘性あり。ローム含む。

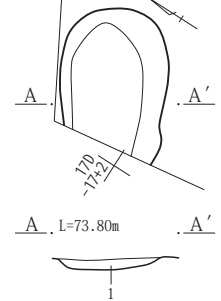
35号土坑



35号土坑

- 1 暗褐色土 やや堅くしまる。黒色土ブロック含む。
- 2 暗褐色土 やや堅くしまり粘性あり。ロームブロック・暗褐色土ブロック含む。
- 3 黒褐色土 軟らかい。暗褐色土ブロック・ロームブロック含む。
- 4 灰褐色土 やや堅くしまり粘性あり。ロームブロック含む。

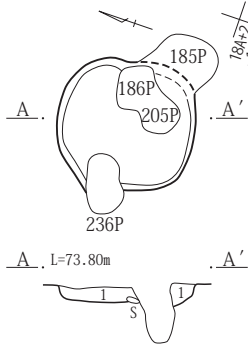
38号土坑



38号土坑

- 1 暗褐色土 やや堅くしまり粘性あり。ロームブロック含む。
- 5 暗褐色土 軟らかく粘性非常にあり。ロームブロック・暗褐色土ブロック多量に含む。

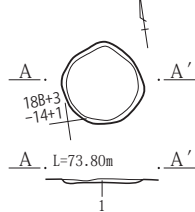
40号土坑



40号土坑

- 1 暗褐色土 やや堅くしまる。白色軽石・ロームブロック含む。

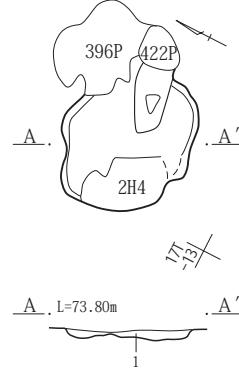
41号土坑



41号土坑

- 1 暗褐色土 やや堅くしまる。炭化物粒子・ロームブロック含む。

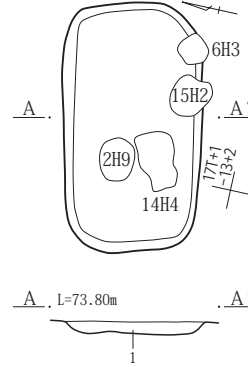
42号土坑



42号土坑

- 1 暗褐色土 軟らかい。ロームブロック多量に含む。

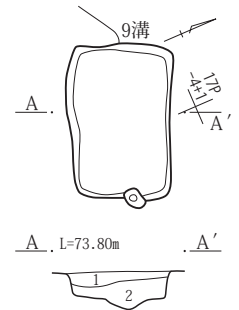
43号土坑



43号土坑

- 1 暗褐色土 軟らかい。ロームブロック多量に含む。

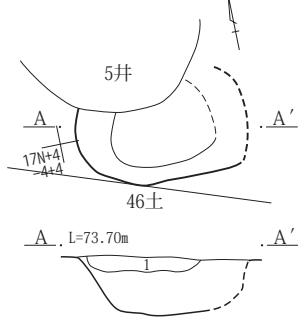
45号土坑



45号土坑

- 1 暗褐色土 やや堅くしまる。ロームブロック多量、炭化物少量に含む。
- 2 灰褐色土 軟らかくしまり弱い。ロームブロック少量に含む。

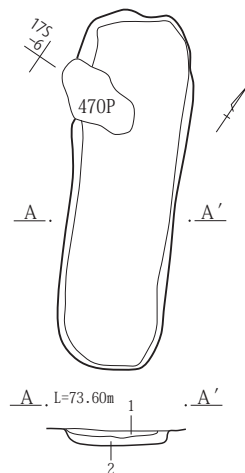
46号土坑



46号土坑

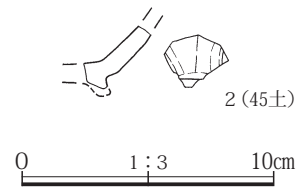
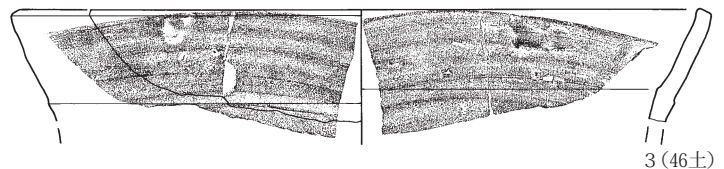
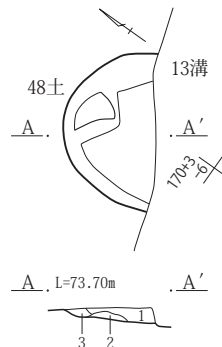
- 1 灰褐色土 軟らかくしまり弱い。白色粒子・炭化物粒子含む。

47号土坑



- 2 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ローム粒子・炭化物粒子含む。
- 3 暗褐色土 軟らかい。ローム粒子少量に含む。

48号土坑



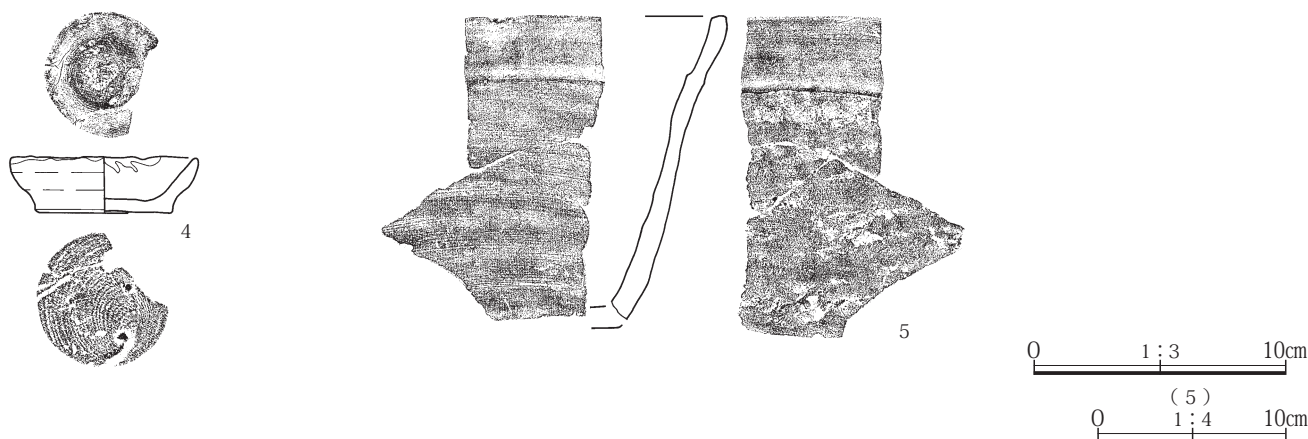
第211図 2区土坑(3)、45・46号土坑出土遺物(1)

位置 17R・S-5グリッド。470ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸細長方形。主軸方位はN-25°-Wで、ピット群(17Q-3・4・5)の方位と近似して関連が想定される。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸284cm短軸92cm深さ13cmである。中世以降の遺物は出土

していない。

48号土坑(第211図、P.L.77)

位置 17O-5・6グリッド。13号溝と重複するが新旧関係不明。平面形はほぼ円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。規模は長径125cm短径(74)cm深さ13cmである。中世以降の遺物は出土していない。



第212図 2区46号土坑出土遺物(2)

第122表 2区18・45・46号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第209図	1	常滑陶器	甕か	18土	-	-	-	肩部片		灰	外面に他の個体が自然釉により付着。	中世。
第211図 PL.149	2	龍泉窯系青磁	碗	45土	-	-	-	底部片		灰	高台部と釉のピンホール部は橙色。釉の失透性もあり、やや焼成不良。外面に鎬蓮弁文。	I-5-b類。
第211図 PL.149	3	在地系土器	内耳鍋	46土	(37.0)	-	-	1/7	B	灰黄・暗灰黄	口縁下部で外反し、口縁部は内湾。口縁部の平面形は歪む。口縁端部内面は丸みを持つ部分と稜を持つ部分がある。端部上面は撫でにより中央が僅かに窪む。内面口縁部下の段差は不明瞭だが、下部の稜線は明瞭。外面口縁部下は強い横撫でにより凹線状に窪む。	II~IV期。
第212図	4	在地系土器	皿	46土	(7.4)	5.3	2.2	3/4	B	にぶい黄橙・灰黄	外面は下半で外湾し、上半は内湾。口縁端部は上方につまみ上げるように仕上げ、僅かに内湾。口縁端部油煙付着。底部左回転糸切無調整。	14世紀後半~15世紀前半。
第212図 PL.149	5	在地系土器	内耳鍋	46土	-	-	-	口縁~体部片	B	灰	還元炎。器壁厚く、口縁部は内湾。口縁部歪む。口縁端部は丸みを持つ。内面口縁部下の段差は低いが、下部はやや稜をなす。体部外面下端は篋撫で。	II期。

#### 4 井戸

井戸は1号屋敷内に4基、3区1号屋敷に係する10・12号溝に重なって2基が存在する。3・4号井戸も7・6号溝と重複しており、溝を排水施設とする関係が想定できる。溝と重複する4基のうち3基は、漏斗状の断面を持つ。また、5号井戸は浅い円筒形であり、水場遺構であろうが、貯水施設とも見える。1号井戸は唯一

断面は深い円筒形であり、建物群に隣接している。2号井戸は西半部が調査区域外となり底面も浅いが、未調査部分を含めれば、漏斗状の一群に近似する可能性も残る。

1号井戸(第213図、P.L.77)

位置 17S-12グリッド。掘立柱建物群に隣接する。

重複 12B号土坑と重複するが新旧関係不明。

確認面形状と規模 ほぼ円形。長径1.05m短径0.97m。

底面形状と規模 ほぼ円形。長径0.91m短径0.78m。

**断面形** 円筒形

**深さ** 1.80m。

**埋没状況** 均質で人為埋没。

**遺物** 中世以降の遺物は出土していない。

**時期** 埋没土から中世以降に比定される。

2号井戸(第213図、P L.77)

**位置** 18A-16グリッド。 **重複** なし

**確認面形状と規模** 西半部は調査区域外となるが、不整楕円形か。長径2.22m短径(1.06)m。

**底面形状と規模** 不整楕円形か。長径1.54m短径0.72m。

**断面形** 台形 **深さ** 1.24m。

**埋没状況** 均質で人為埋没。層境が鮮明であり、段階的な埋め戻しと、重複遺構による掘削も考えられる。

**遺物** 中世以降の遺物は出土していない。

**時期** 埋没土から中世以降に比定される。

3号井戸(第213～215図、P L.77・149、第123表)

**位置** 18B・C-15・16グリッド。 **重複** 7号溝と重複するが新旧関係不明。

**確認面形状と規模** ほぼ円形。長径3.60m短径3.14m。

**底面形状と規模** 隅丸台形。長径1.72m短径1.47m。

**断面形** 漏斗状 **深さ** 1.17m以上。未完掘。

**埋没状況** 確認面下約50cm付近に礫群が集中しており、埋没途中で投棄されたものとみられる。

**遺物** 埋没土から在地系土器鍋鉢類を中心にやや多く出土する。遺物の年代は14世紀前半から15世紀前半に及ぶ。古瀬戸鉦皿(214図9)も中期(14世紀前半)と一致する。特に椀形鉄滓6点(214・215図13～18)は特筆される。

**時期** 出土遺物から15世紀前半を下限とすると考えられる。掲載遺物のほか、中世在地系土器3片、その他土器類2片が出土している。

4号井戸(第213・216図、P L.77・149、第124表)

**位置** 17S-14・15グリッド。 **重複** 221号ピット、6号溝と重複するが新旧関係不明。

**確認面形状と規模** 西端が調査区域外となるが、ほぼ円形。長径3.14m短径2.79m。

**底面形状と規模** 隅丸三角形。長径1.80m短径1.46m。

**断面形** 漏斗状 **深さ** 1.38m以上。未完掘。

**埋没状況** 下位に黄白色土が多く堆積しており、壁の崩落に加え、人為的な混入も考慮される。直上に礫の集中層もあり、投棄とみられる。

**遺物** 埋没土から在地系土器鍋(216図1・2)ほかが出土する。遺物の年代は14世紀後半から15世紀後半に及ぶ。掲載遺物のほか、須恵器1片、中世在地系土器2片が出土している。

**時期** 出土遺物から15世紀後半を下限とすると考えられる。

5号井戸(第213図、P L.77)

**位置** 17N・O-4グリッド。 **重複** 46号土坑、10号溝と重複するが新旧関係不明。46号土坑も深さは違うが、関連が考慮される。

**確認面形状と規模** ほぼ円形。長径1.49m短径1.32m。

**底面形状と規模** ほぼ円形。長径1.17m短径1.01m。

**断面形** 円筒形

**深さ** 0.96m。浅いため、透水層に達しているとは見なし難い。ほぼ円形であり、内部に桶などを敷設すれば貯水施設として機能したことも想像される。

**埋没状況** 詳細不明。底面付近で大～巨礫が多く出土するが、人為的なものかは不明。木片などの出土記録はない。

**遺物** 遺物は中世在地系土器1片が出土している。

**時期** 出土遺物から中世に比定される。

6号井戸(第213・217図、P L.77・149、第125表)

**位置** 17M・N-1・2グリッド。 **重複** 12号溝と重複するが新旧関係不明。

**確認面形状と規模** ほぼ円形。長径2.80m短径2.51m。

**底面形状と規模** ほぼ円形。長径1.56m短径1.42m。

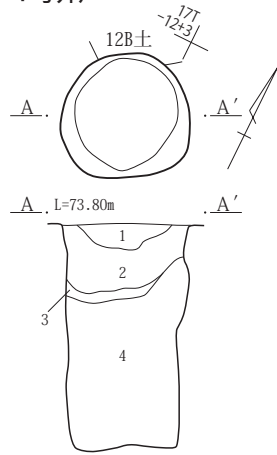
**断面形** 漏斗状。 **深さ** 1.06m以上。未完掘。

**埋没状況** 確認面下約30cm付近に大円礫・土器片が集中しており、埋没途中で投棄されたものとみられる。

**遺物** 礫に混じって在地系土器鍋(217図1)ほかが出土する。掲載遺物のほか、中世在地系土器3片、その他土器類2片が出土している。

**時期** 出土遺物から15世紀前半を下限とすると考えられる。

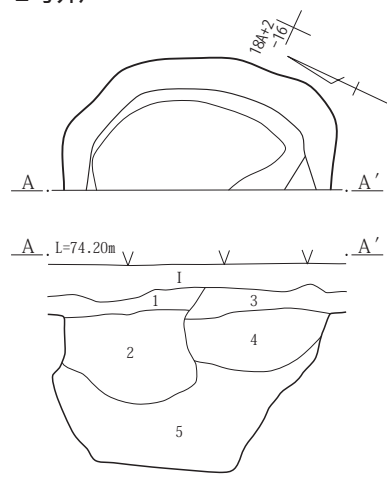
1号井戸



1号井戸

- 1 暗褐色土 軟らかくサラサラする。ローム粒子・黄白色土粒子含む。
- 2 暗褐色土 やや堅くしまる。褐色土ブロック含む。
- 3 黒褐色土 軟らかくサラサラする。黄白色土ブロック含む。
- 4 黒褐色土 軟らかくサラサラする。ローム粒子少量に含む。

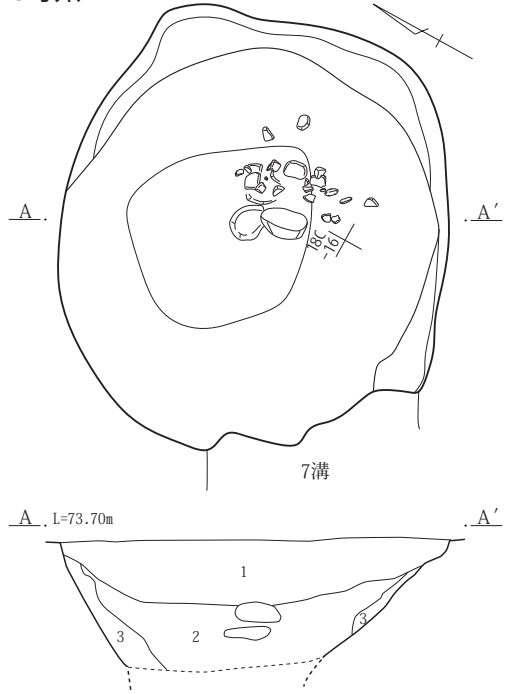
2号井戸



2号井戸

- 1 暗褐色土 やや堅くしまる。白色軽石含む。
- 2 暗褐色土 軟らかくサラサラする。
- 3 暗褐色土 堅くしまる。白色軽石多量に含む。
- 4 暗褐色土 軟らかくしまり良い。
- 5 黒褐色土 軟らかくしまり良い。サラサラする。黄白色土ブロック少量に含む。

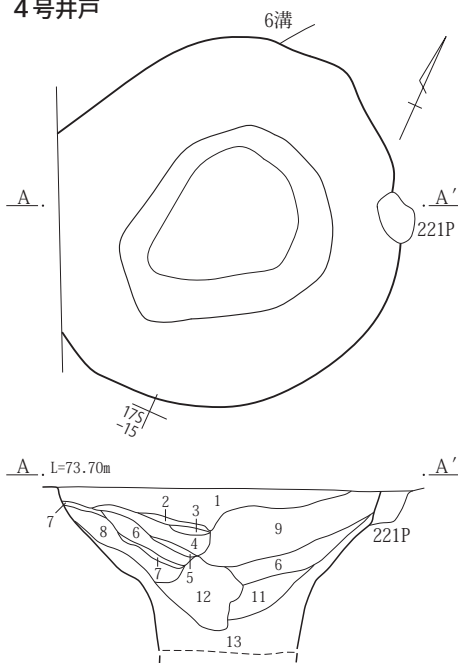
3号井戸



3号井戸

- 1 暗褐色土 軟らかいローム粒子含む。上層に白色軽石・ロームブロック含む。
- 2 暗褐色土 非常に軟らかく粘性あり。礫多量含む。
- 3 暗褐色土 非常に軟らかく粘性あり。ローム含む。

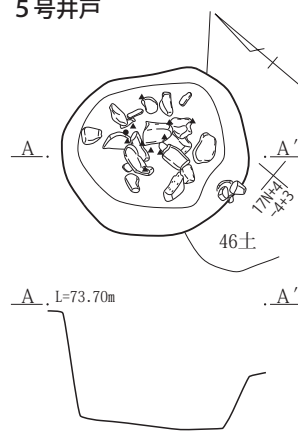
4号井戸



4号井戸

- 1 暗褐色土 軟らかくしまり良い。ロームブロック含む。
- 2 黒褐色土 非常に軟らかい。
- 3 暗褐色土 非常に軟らかい。ローム含む。
- 4 暗褐色土 非常に軟らかく粘性有り。ロームブロック少量に含む。
- 5 黄褐色土 非常に軟らかい。ローム多量に含む。
- 6 暗褐色土 軟らかくしまり良い。粘性有り。
- 7 暗褐色土 非常に軟らかく粘性有り。ローム粒子多量に含む。

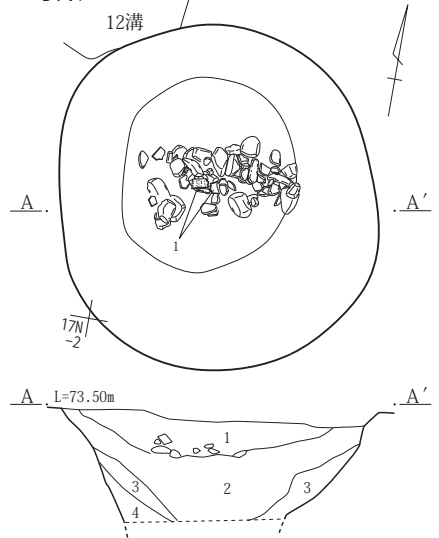
5号井戸



5号井戸

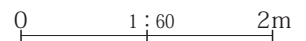
- 8 暗褐色土 軟らかくしまり良い。黄白色土ブロック少量に含む。
- 9 暗褐色土 軟らかい。ローム粒子少量に含む。
- 10 暗褐色土 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ロームブロック含む。
- 11 暗褐色土 非常に軟らかい。ローム粒子含む。
- 12 暗褐色土 軟らかくしまり弱い。礫多量に含む。
- 13 黄白色土層 非常に軟らかく粘性有り。壁の崩れ。

6号井戸

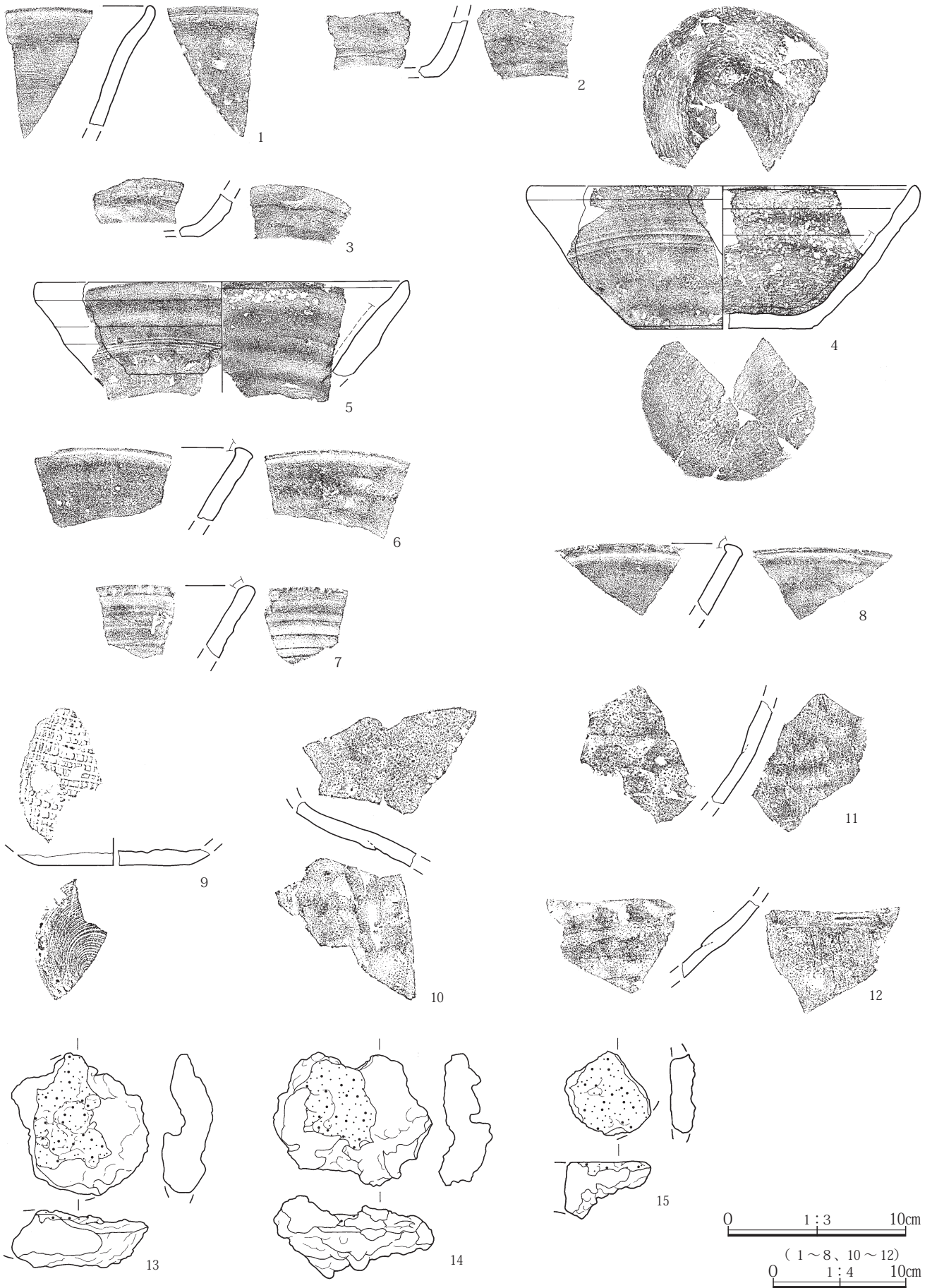


6号井戸

- 1 暗褐色土 やや堅くしまりサラサラする。礫含む。
- 2 暗褐色土 やや堅くしまりサラサラする。
- 3 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ローム・黄白色土含む。
- 4 黄褐色土 軟らかく粘性強い。ローム多量に含む。



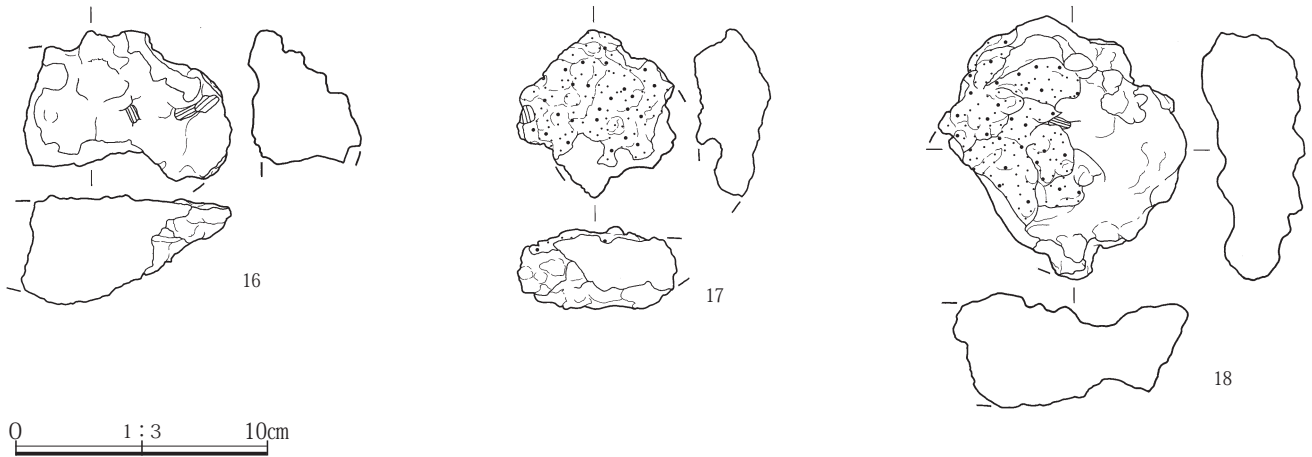
第213図 2区1~6号井戸



第214図 2区3号井戸出土遺物(1)



第4章 発掘調査の記録

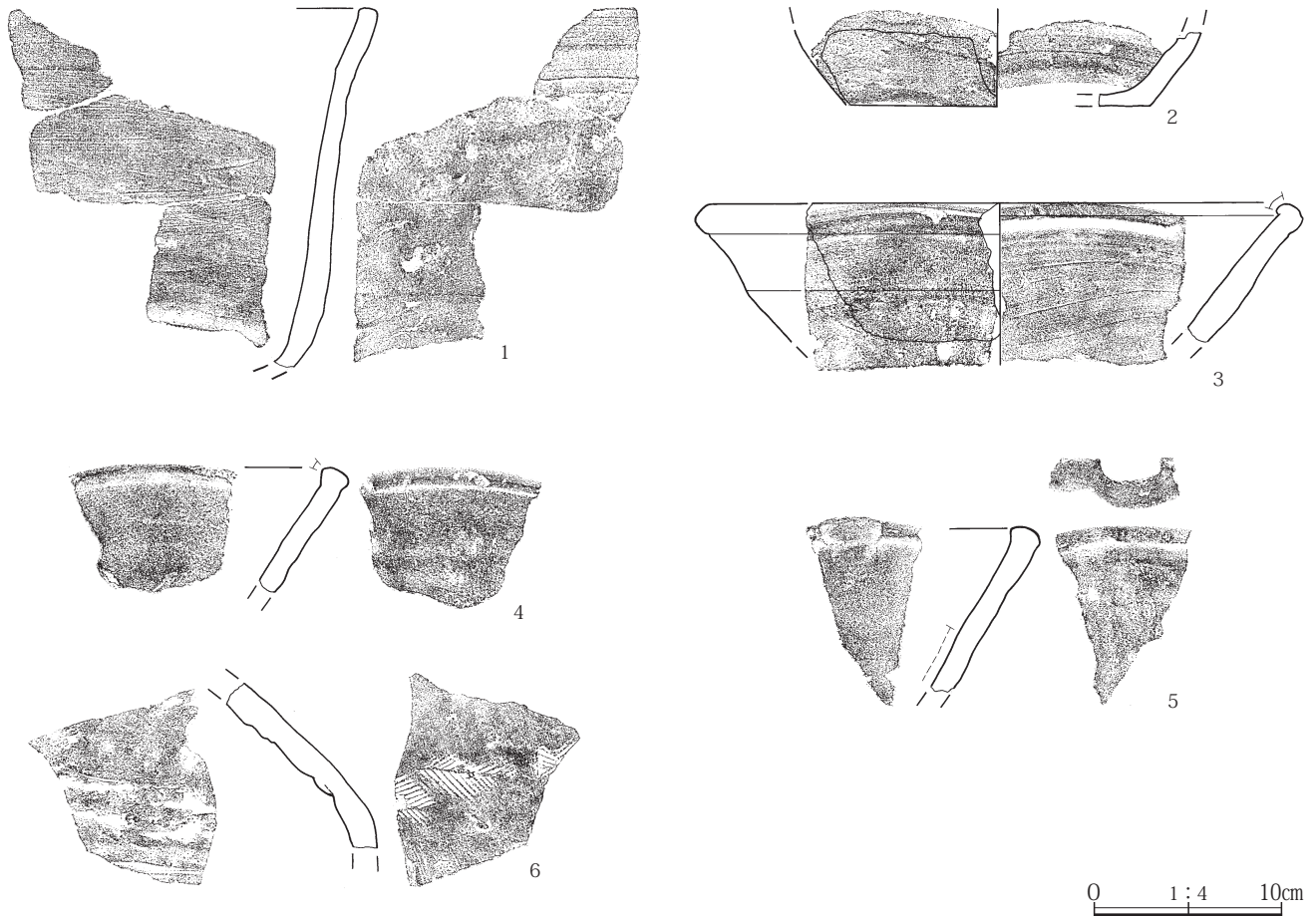


第215図 2区3号井戸出土遺物(2)

第123表 2区3号井戸出土遺物

挿 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第214図	1	在地系 土器	内耳鍋		-	-	-	口縁部 片	B	灰	器壁やや薄く小型品であろう。口縁部でゆるく屈曲し、口縁部は内湾。端部は内湾し、端部外面は丸みを持つ。	I期。
第214図	2	在地系 土器	内耳鍋		-	-	-	底部片	B	灰黄	器壁厚く丸底。体部外面下端は篋撫で。底部外面は砂底状。	I・II期。
第214図	3	在地系 土器	内耳鍋		-	-	-	底部片	B	灰	器壁厚く丸底。体部外面下端は篋撫で。底部外面は砂底状。	I・II期。
第214図 PL.149	4	在地系 土器	片口鉢		(28.5)	(13.0)	10.7	口縁1/ 8 底部1/ 2		橙	体部は内湾。口縁部は横撫でによりやや薄く仕上げる。口縁部は薄い玉縁状を呈し、端部は尖る。口縁部外面下位は凹線状に浅く窪む。底部外面回転糸切後に周縁を篋撫で。内面の底部と体部境は使用による摩滅が著しく、ドーナツ状に窪む。	I期。
第214図 PL.149	5	在地系 土器	片口鉢		(27.5)	-	-	1/8	B	灰	口縁部の器表のみ暗灰色。口縁部下の器壁は厚い。口縁部は内湾し、玉縁状をなす。口縁部外面下位は横撫でによる刷毛状痕残る。使用により体部内面下位の器表は摩滅し、中位は平滑となる。	I期。
第214図	6	在地系 土器	片口鉢		-	-	-	口縁部 片	B	にぶい 橙	口縁部付近の器表は黒色。口縁部は直線的で、外面はやや外反。口縁部上面はやや丸みを持ち、端部内面は断面三角形に突き出す。端部外面は直下の強い撫でにより突き出たように見える。内面突出部先端の器表は摩滅し、外面端部器表も僅かに摩滅。	III・IV期。
第214図 PL.149	7	在地系 土器	片口鉢		-	-	-	口縁部 片	B	灰	還元炎。外面口縁部下の轆轤目は顕著。口縁部内面の器表は摩滅。端部外面の器表はやや摩滅。口縁部上面は丸みを持つ。	中世。
第214図	8	在地系 土器	片口鉢		-	-	-	口縁部 片	B	にぶい 橙	口縁部付近の器表は黒色。口縁部は直線的で、外面はやや外反。口縁部上面はやや丸みを持ち、端部内面は断面三角形に突き出す。端部外面は直下の強い撫でにより突き出たように見える。内面突出部先端の器表は摩滅し、外面端部器表も僅かに摩滅。	III・IV期。
第214図 PL.149	9	古瀬戸	卸皿		-	(8.5)	-	1/3		灰白	体部外面から内面の2/3ほどに灰釉。内面に卸し目。底部右回転糸切無調整。	古瀬戸中期。
第214図	10	常滑陶 器	甕		-	-	-	肩部片		にぶい 黄橙・ 褐灰	外面に自然釉かかる。下部に菊花状の叩きが2箇所残る。	中世、外面釉 かかる
第214図	11	常滑陶 器	甕		-	-	-	下位片		褐灰	外面器表はにぶい赤褐色。内面は自然釉が斑状にかかる。外面は工具による縦位撫で。	中世。
第214図	12	常滑陶 器	甕		-	-	-	体部片		灰	内面器表は黄橙色、外面器表は赤褐色。外面は工具による縦位撫で。	中世。
挿 PL.No.	No.	器 種	出土位置	長	幅	厚	重さ(g)	特徴など			備考	
第214図	13	椀形鍛冶滓		7.6	8.0	3.1	187.4	平面不整楕円形。厚さ3.1cmとやや薄手。色調は黒褐色。下面は一部炉床土が残存している。内面から錆が生じており銹部が内在する。左上面に乗った粘土質溶解物は羽口の溶損。				
第214図	14	椀形鍛冶滓		9.0	7.5	2.5	176.5	平面不整楕円形。厚さ2.5cm。やや薄手。色調は黒褐色。内面から錆が生じており銹部が内圧する。左上面に乗った粘土質溶解物は羽口の先端部の溶損か。				
第214図	15	椀形鍛冶滓		4.8	4.7	3.1	119.9	厚さ3.1cmとやや薄手。色調は黒褐色。内面から錆が生じており銹部が内在する。左正面に乗った粘土質溶解物は羽口の先端部の溶解。				
第215図	16	椀形鍛冶滓		8.3	6.0	4.0	212.9	平面不整楕円形。厚さ4.0cmとやや厚手。色調は黒褐色。滓質は密で、光沢のある褐灰色を呈する。内面から錆が生じており銹部が内在する。				

挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	長	幅	厚	重さ(g)	特徴など	備考
第215図	17	椀形鍛冶滓		6.2	6.6	3.0	119.6	厚さ3.0cmとやや薄手。粘土質溶解物主体で紫紅色にガラス化している。羽口先端部の溶損が主体か。	
第215図	18	椀形鍛冶滓		9.9	10.5	4.8	483.7	内面不整楕円形。厚さ4.8cmとやや厚手。色調は黒褐色。滓質は密で比重が高い。光沢のある褐灰色を呈する。内面から錆が生じており銹部が内在する。左上面に乘った粘土質溶解物は羽口の先端部の溶損。	



第216図 2区4号井戸出土遺物

第124表 2区4号井戸出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第216図 PL.149	1	在地系 土器	内耳鍋		-	-	-	口縁～ 体部片	B	灰黄	器壁は厚い。口縁部は外反。口縁部はやや短く、上半は内湾。体部外面下位は篋撫で。	I・II期。
第216図	2	在地系 土器	内耳鍋		-	(16.0)	-	1/7	A	にぶい 黄橙	器壁厚く、体部外面下位は篋撫で。底部外面周縁は窪むが、残存部は平坦。底部外面は砂底状。	I・II期か。
第216図 PL.149	3	在地系 土器	片口鉢		(30.2)	-	-	1/8	B	黄灰	断面中央は灰色。還元炎気味。口縁端部は内側に折り返すように突き出す。端部外面は幅広く肥厚。口縁端部上面の外側は段を持つ。口縁端部内面の突出部上面の器表は摩滅し、端部形状は不明瞭。	III・IV期。
第216図	4	在地系 土器	片口鉢		-	-	-	口縁部 片	B	にぶい 赤褐	器表付近から器表は暗灰色。口縁端部内面は断面三角形に突き出す。突出部の端部付近の器表は摩滅。口縁部上位外面は凹線状に浅く窪む。	III・IV期。
第216図	5	在地系 土器	片口鉢		-	-	-	口縁部 片	A	灰	還元炎。片口部片。口縁端部は丸く突き出る。口縁部外反。	IV・V期か。
第216図 PL.149	6	常滑陶 器	甕		-	-	-	肩部片		灰	肩部外面は自然釉。外面は帯状の綾杉状叩き目。	中世。



第217図 2区6号井戸出土遺物

第125表 2区6号井戸出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第217図 PL.149	1	在地系 土器	内耳鍋		-	-	-	口縁～ 体部片	B	灰	還元炎。器壁厚い。口縁部は直線的にやや長く延びる。体部外面下位は寛撫で。丸底であろう。内面口縁部下は丸みをもって屈曲。	Ⅱ期。
第217図 PL.149	2	在地系 土器	内耳鍋		-	-	-	体部片	B	灰オ リーブ	還元炎。器壁厚い。口縁部の屈曲は緩いが、内面の段差は小さいが、やや明瞭。内面口縁部下の稜はやや明瞭。体部外面下位は寛撫で。	I・Ⅱ期。
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況		備考	
第217図 PL.149	3	石製品		楕円礫	角閃石安山 岩	25.1	17.8	2700.0	背面側に長径9.5cm・短径8.2cmの孔を穿つ。孔側面は面的に整形。			

5 ピット(第218～224図、P L.78～80、第126表)

ピット総数484基のうち、掘立柱建物・柱穴列として還元された154基を除く330基を対象とする。ただし、10基は掘立柱建物と合わせて、すでに掲載してあるため、計測表のみを掲載する。ピットは、1号屋敷の範囲に多く分布する。このため、1号屋敷内のピット群を別に抽出し(図版3分割、第218～222図)、残りはブロックごとに任意に設定したピット群および個別遺構として扱う。詳細な計測データは第126表のとおりである。また、2・13号溝周辺に集中するピット群については関係も考慮して、各溝とあわせて報告する。

1号屋敷内のピット群の分布は、掘立柱建物の分布とほぼ一致し、調査区西寄りに多い傾向がある。また、全体としても掘立柱建物のピット配置と、類似する分布が目立つことから、削平その他の理由でピットが発見できず、掘立柱建物として認定できなかったものが多いと考えられる。その意味で、3・5号掘立柱建物周辺のピットは、1・2基のピットが欠落したために、建物認定を控えた状況である。また、調査区西寄りの6号溝、4号井戸周辺や1号竪穴状遺構周辺で、やや多くピットが分布するが、調査区域外にピットが及ぶことも考慮して、建物としての判断を控えた影響もある。

ピットの特徴として、埋没土に差異はなく、故意に埋め戻されたものは見られない。柱痕を残すと思われるものは、56・343号ピットに過ぎない。

その他のピット群で特徴的な配置にあるのは、ピット群1(17T・18A-9・10)である。区画屋敷の東辺を区画する3号溝の南側延長上に位置する。22・28・36・37号土坑と近接するが、重複するものは少なく、意識的に避けている観もある。全体としてに南北6m東西2mの方形範囲に収まるようでもある。ピットの規模は一様ではないが、深さ50cmを超えるものも比較的含まれる。掘立柱による小規模な構造物が繰り返し建てられたことも想定できる。164号ピット埋没土中位から常滑陶器(223図1)、165号ピット埋没土及び431号ピット埋没土中位から在地系土器片口鉢(223図2・3)が出土する。これらはすべて中世に比定される。

ピット群2(17Q-3・4・5)は調査区東寄りに離れて存在する。歪な方形に並んでおり、掘立柱建物と認定することも可能である。ピット同士の間隔も1.5~2mがほとんどであるが、歪みが著しいため、ピット群として扱うこととした。ピットの並ぶ方向と一致する15・17号溝や、近接する44号土坑や主軸方位の近似する47号土坑なども関係が想定される。

ピット群3(17R-9)は、周辺を攪乱されていたが、残存部分でピットが集中して検出された。位置はピット群(17T・18A-9・10)の南延長線上約5mに位置しており、同種のピット群とも考えられる。西方約5mには区画屋敷の南辺を区画する4号溝があり、こちらとの関係も想定される。406号ピット埋没土から常滑陶器甕(224図1)が出土し、中世に比定される。

第126表 2区ピット 計測表(cm)  
2区1号屋敷内ピット群1

ピットNo.	グリッド	長径	短径	深さ
53	18A-15	31	22	26
56	18A-15	57	54	57
58	18A-15	29	25	58
60	18A-15	33	24	12
61	18A-15	44	37	9
65	18A-14	50	27	22
66	18A-14	32	29	18
69	18B-14	(27)	22	30
70	18B-14	30	25	39
82	18B-13	33	28	33
84	18B-14	50	29	25
85	18B-14	22	19	18
86	18B-14	30	25	30
88	18C-13	42	36	17
89	18C-13	34	33	28
116	18B-15	25	22	12

ピットNo.	グリッド	長径	短径	深さ
117	18B-15	40	26	36
118	18B-15	39	27	49
119	18A-12	(37)	26	31
120	18A-12	26	25	12
121	18A-12	26	19	15
122	18A-12	23	16	13
123	18A-12	44	35	35
125	18A-13	25	22	18
137	18A-15	63	37	17
138	18B-13	43	30	41
139	18C-14	43	33	12
140	18B-14	(41)	33	13
141	18B-14	32	29	28
158	18B-13	28	26	29
172	18C-14	45	40	9
174	18C-14	29	27	21
175	18B-14	59	54	36
178	18A-15	24	21	15
179	18B-13	37	23	50
180	18A-13	37	34	26
181	18B-14	38	34	19
185	18A-15	(53)	47	20
186	18A-15	40	30	53
192	18A-15	32	30	33
196	17T-15	30	30	19
198	18B-14	35	28	20
200	18C-14	57	52	16
202	17T-15	(35)	30	30
205	18A-15	32	30	48
214	18A-13	30	28	35
215	18A-13	47	28	50
233	18A-14	(51)	41	38
235	18A-15	38	32	37
236	18A-15	48	30	54
238	17T-15	28	25	30
239	18A-15	41	39	49
248	17T-15	30	22	20
251	18A-14	49	22	11
253	18A-15	47	34	50
254	18A-15	41	33	24
255	18A-15	34	22	22
261	18A-15	26	25	35
262	18A-15	36	30	30
264	18A-15	26	24	48
273	17T-15	23	21	13
274	17T-15	26	23	26
276	17T-15	(43)	31	28
277	17T-15	30	(19)	61
278	17T-15	48	(27)	12
281	17T-15	27	26	9
288	18A-15	34	28	38
289	18B-16	37	33	9
290	18A-16	31	25	8
291	18A-16	33	25	12
294	18A-16	33	(21)	20
296	18A-16	48	27	48
297	18A-16	35	(30)	17
298	18A-16	36	(29)	15
310	18A-13	32	30	50
325	18B-14	38	32	27
326	18B-14	28	24	27
327	18B-14	28	22	16
328	18B-14	26	19	26
329	18B-14	22	18	10
330	18B-14	32	25	18
334	17T-15	58	37	34
335	17T-15	31	17	26
336	17T-15	42	(16)	45
338	18A-14	56	55	37

第4章 発掘調査の記録

ビットNo.	グリッド	長径	短径	深さ
339	18A-14	34	(20)	(19)
341	18A-14	26	20	24
342	18A-13	28	24	20
343	18A-13	33	29	46
344	18A-13	37	32	24
345	18A-13	25	20	9
346	18A-13	41	39	48
397	18A-13	(45)	45	29
426	18B-16	(29)	19	19
428	18B-16	40	35	21

2区1号屋敷内ビット群2

ビットNo.	グリッド	長径	短径	深さ
2	17R-14	23	16	22
3	17R-14	26	20	30
6	17R-13	23	20	19
8	17S-13	40	33	42
11	17S-14	33	27	59
13	17S-14	27	21	34
15	17S-14	66	51	22
18	17S-14	30	25	35
21	17S-13	55	35	19
23	17S-14	32	27	33
24	17S-14	31	29	12
28	17S-14	29	25	16
29	17T-14	29	24	26
30	17T-14	34	30	44
33	17T-14	16	15	21
34	17T-14	24	20	48
35	17S-13	35	29	56
41	17S-14	27	20	21
45	17R-12	30	26	13
71	17R-13	26	25	32
72	17R-13	46	41	18
73	17R-13	40	34	14
74	17Q-13	28	21	49
76	17S-13	43	40	45
101	17R-12	34	33	14
103	17S-12	36	32	17
105	17R-13	32	26	36
109	17R-13	(43)	33	45
110	17R-13	24	20	34
111	17R-13	34	32	47
112	17R-13	71	45	23
113	17T-14	32	28	32
133	17T-14	25	20	35
136	17T-14	30	28	8
147	17R-12	29	25	31
148	17R-13	25	(20)	13
149	17R-13	(49)	(41)	36
170	17T-13	51	(28)	33
190	17T-14	32	29	38
195	17S-14	21	20	13
213	17S-13	27	23	33
216	17S-15	32	21	17
217	17S-15	30	24	25
218	17S-15	(29)	22	26
221	17S-14	41	28	30
222	17T-13	33	27	30
247	17T-14	24	20	35
265	17S-14	37	24	13
283	17S-14	16	13	29
285	17S・T-15	41	23	15
295	17S-15	26	21	20
301	17T-14	36	30	40
302	17T-14	39	29	27
304	17T-14	26	22	11
311	17T-13	(28)	25	45
312	17T-13	(37)	(13)	39
313	17T-13	25	(14)	31

ビットNo.	グリッド	長径	短径	深さ
314	17T-13	31	28	56
322	17S-13	23	(18)	19
390	17Q-13	30	27	16
391	17Q-13	41	36	21
392	17R-13	34	31	12
393	17R-13	33	20	37
394	17R-13	24	23	31
399	17S-15	80	20	30
400	17S-14	53	24	47
486	17T-14	30	28	24

2区1号屋敷内ビット群3

ビットNo.	グリッド	長径	短径	深さ
90	18A-11	39	30	37
91	18A-11	28	27	35
98	17S-11	54	31	35
99	17S-11	46	41	28
100	17R-11	37	30	25
104	17S-12	36	35	31
126	18A-11	31	30	38
127	18A-11	31	26	26
128	18A-11	28	25	16
129	17T-11	30	24	23
131	17S-11	37	34	36
144	17T-12	59	55	32
146	17T-12	42	(22)	13
152	18A-11	27	26	35
153	18A-12	50	(32)	16
154	18A-12	51	(25)	35
156	17T-11	29	23	21
161	17T-12	46	29	19
252	17R-11	33	33	10
259	18A-11	53	35	20
317	18A-13	38	30	7
324	17T-12	40	37	24
331	17T-11	24	23	13
332	17T-11	34	31	13
333	17S-11	54	42	15
347	18A-12	48	37	23
350	18A-12	30	27	12
357	17S-12	26	22	12
362	18A-11	38	34	25
363	17T-11	25	23	17
364	17T-11	(20)	19	23
396	17T-12	(70)	66	29
422	17T-12	34	30	28

2区ビット群1 (17T・18A-9・10)

ビットNo.	グリッド	長径	短径	深さ
134	17T-9	52	49	11
135	18A-9	50	45	17
143	18A-10	43	17	33
159	17T-9	27	24	19
160	17T-10	35	26	57
162	18A-10	53	38	35
163	18A-10	47	46	71
164	17T-10	59	46	51
165	17T-10	35	31	52
169	17T-10	36	30	37
非掲載破片数: 中世国産陶器片1				
173	18A-9	40	35	71
201	17T-9	47	39	60
207	17T-10	52	31	43
208	17T-10	50	36	52
209	18A-10	37	(26)	52
210	18A-9	28	19	32
211	17T-10	36	30	37
219	17T-10	45	41	59
220	17T-9	63	45	57
224	17T-9	45	31	44

ビットNo.	グリッド	長径	短径	深さ
225	17T-9	29	19	38
226	17T-9	46	28	30
227	17T-9	27	21	30
230	17T-9	28	20	36
256	17T-10	22	21	23
257	17T-10	30	(17)	7
258	17T-10	34	(14)	45
275	18A-10	51	35	33
365	18A-10	64	37	55
366	17T-10	36	27	16
367	17T-10	54	42	30
413	17T-9	69	36	40
414	17T-9	42	33	39
415	17T-9	(56)	21	56
416	17T-9	48	48	43
417	17T-10	38	36	32
418	17T-10	25	17	43
419	17T-10	57	45	55
420	17T-10	32	15	15
421	18A-10	29	20	23
431	18A-10	19	17	15
444	18A-9	34	27	25
445	17T-9	30	28	24
482	17T-10	(43)	42	32
483	17T-9	45	41	26

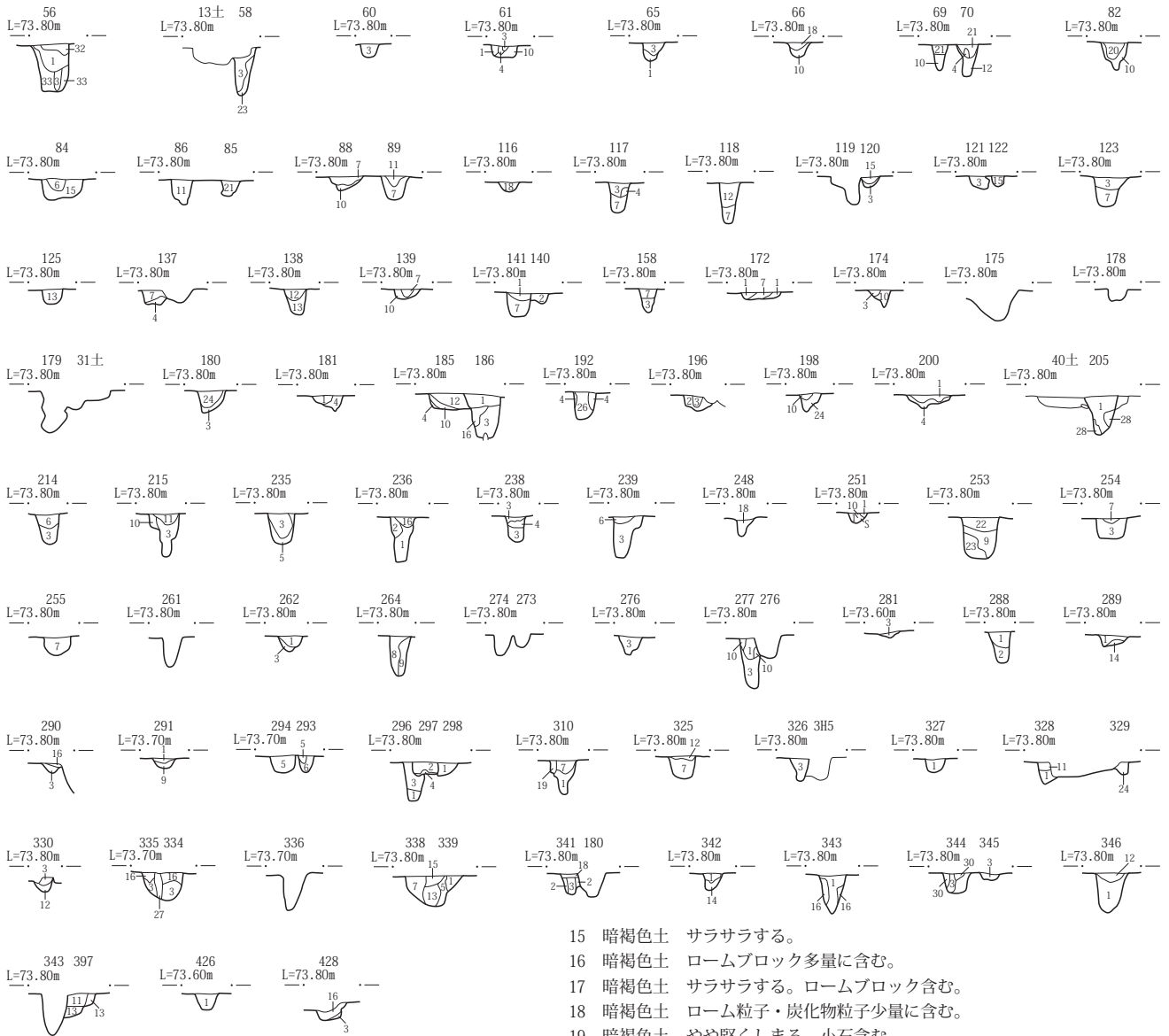
2区ビット群2~4、個別ビット

ビットNo.	グリッド	長径	短径	深さ
389	17Q-5	39	34	45
464	17Q-4	83	34	27
465	17Q-4	25	21	25
467	17Q-4	29	23	20
472	17Q-5	41	36	24
473	17Q-5	26	21	17
474	17Q-3	25	21	8
475	17Q-4	(34)	31	16
476	17Q-4	37	(34)	27
405	17R-9	30	26	17
406	17R-9	30	30	31
407	17R-9	36	26	32
408	17R-9	34	24	53
409	17R-9	(30)	(16)	19
425	17R-9	39	(22)	23
446	17R-9	(42)	(29)	19
447	17R-9	21	16	16
386	17P-8	41	31	64
387	17P-8	26	24	38
401	17P-9	26	25	16
402	17P-8	(20)	18	15
124	18B-12	83	68	31
228	17P-8	40	37	27
246	17O-7	22	21	12
388	17R-5	28	28	38
427	18B-16	25	12	28
442	17O-3	61	55	28
443	17N-4	40	33	42
448	17P-7	31	21	19
477	17R-5	35	25	17
478	17R-5	21	19	13

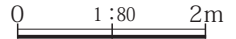


第218図 2区1号屋敷内ピット群1平面図

第4章 発掘調査の記録



- |         |                      |         |                         |
|---------|----------------------|---------|-------------------------|
| 1 暗褐色土  | ロームブロック含む。           | 15 暗褐色土 | サラサラする。                 |
| 2 暗褐色土  | ロームブロック・ローム粒子を含む     | 16 暗褐色土 | ロームブロック多量に含む。           |
| 3 暗褐色土  | ローム粒子含む。             | 17 暗褐色土 | サラサラする。ロームブロック含む。       |
| 4 黄褐色土  |                      | 18 暗褐色土 | ローム粒子・炭化物粒子少量に含む。       |
| 5 暗褐色土  | ロームブロック・黄白色土ブロック含む。  | 19 暗褐色土 | やや堅くしめる。小石含む。           |
| 6 暗褐色土  | ローム粒子・炭化物粒子含む。       | 20 暗褐色土 | サラサラする。ローム粒子・白色粒子少量に含む。 |
| 7 暗褐色土  | ローム粒子少量に含む。          | 21 暗褐色土 | ロームブロック・白色粒子含む。         |
| 8 暗褐色土  | 黄白色土ブロック・ローム粒子少量に含む。 | 22 暗褐色土 | 灰白色土ブロック・炭化物粒子含む。       |
| 9 黄白色土  | 軟らかく粘性あり。            | 23 暗褐色土 | 黄白色土ブロック含む。             |
| 10 暗褐色土 |                      | 24 暗褐色土 | 褐色土ブロック含む。              |
| 11 暗褐色土 | サラサラする。ローム粒子含む。      | 25 黒褐色土 | ローム粒子少量含む。              |
| 12 暗褐色土 | ローム粒子多量に含む。          | 26 暗褐色土 | ローム粒子多量、炭化物粒子少量に含む。     |
| 13 暗褐色土 | ロームブロック少量に含む。        | 27 褐色土  | ロームブロック多量に含む。           |
| 14 暗褐色土 | ローム多量に含む。            | 28 黄褐色土 | 黄白色土ブロック含む。             |
|         |                      | 29 暗褐色土 | 白色軽石・ロームブロック含む。         |
|         |                      | 30 褐色土  | ローム粒子含む。                |
|         |                      | 31 暗褐色土 | 白色粒子・ローム粒子含む。           |
|         |                      | 32 暗褐色土 | ロームブロック多量、白色粒子含む。       |
|         |                      | 33 暗褐色土 | ロームブロック多量に含む。           |



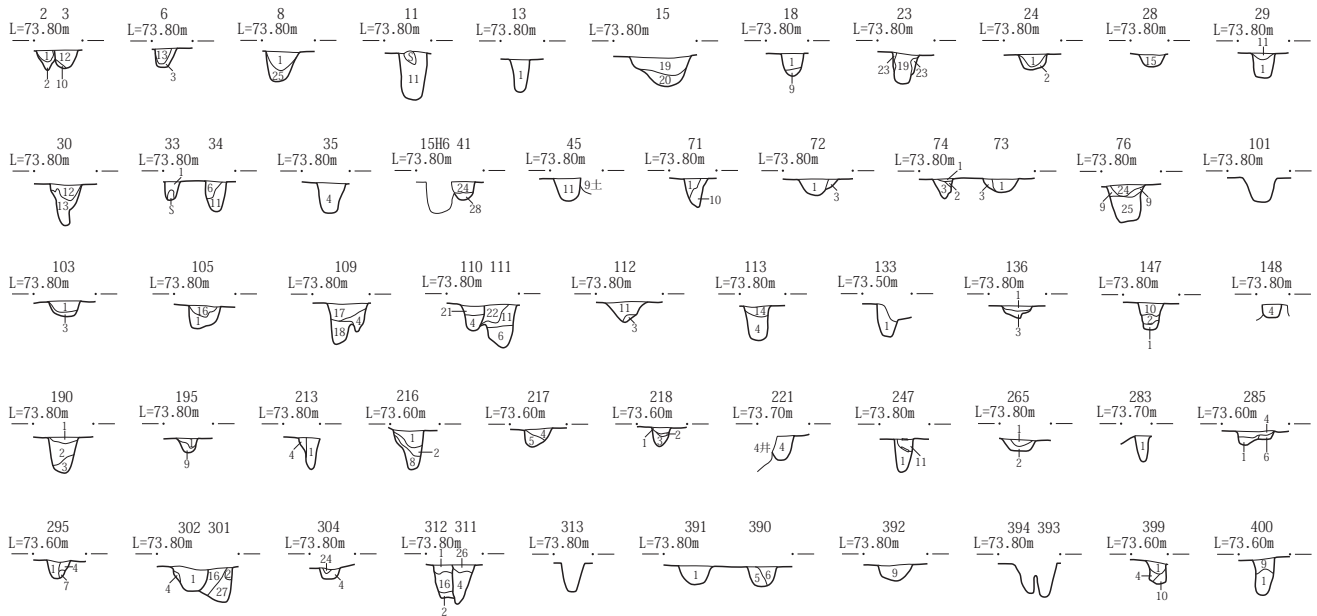
第219図 2区1号屋敷内ピット群1断面図



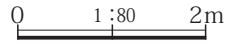
第220図 2区1号屋敷内ピット群2平面図



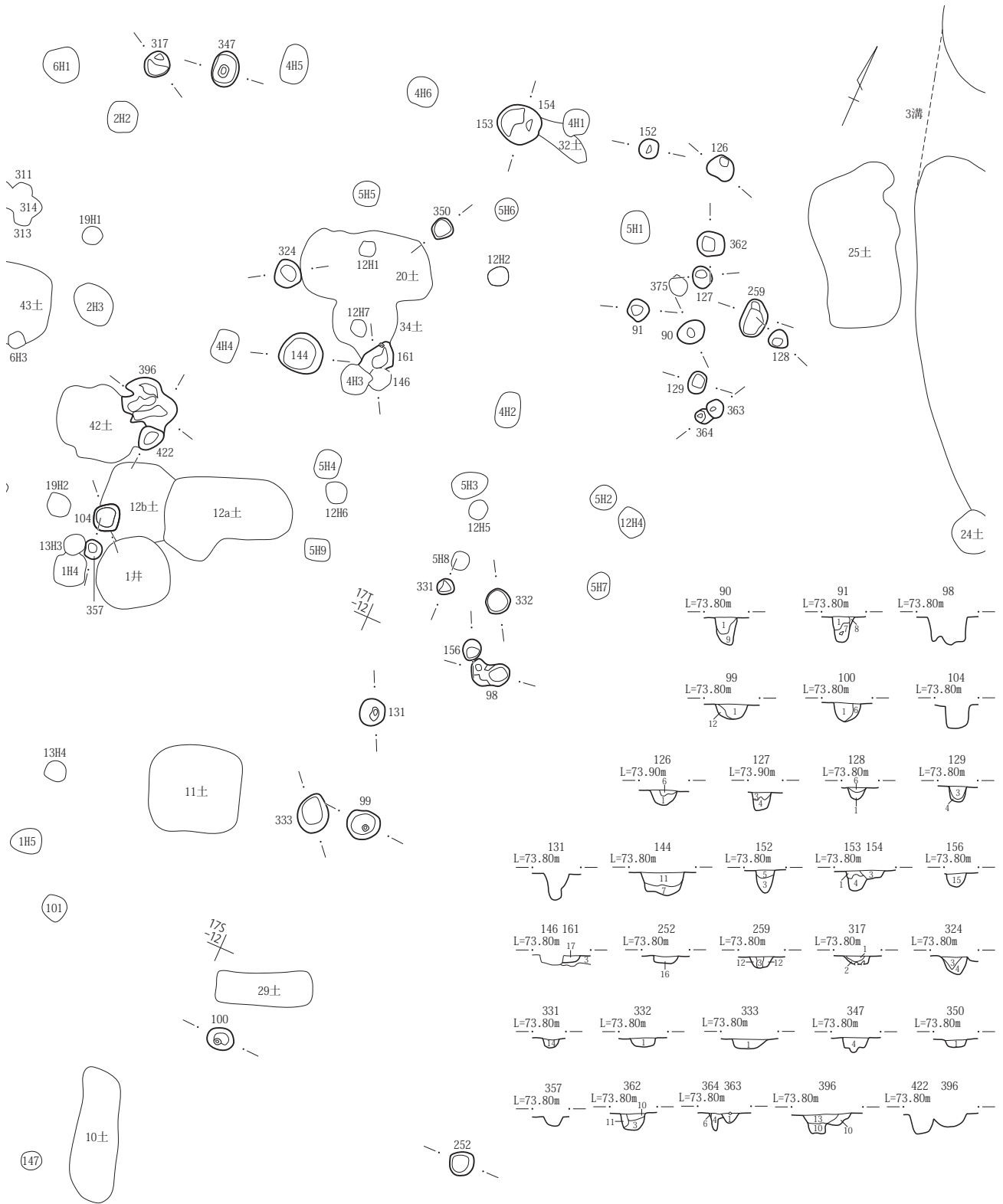
第4章 発掘調査の記録



- |         |                         |              |                       |
|---------|-------------------------|--------------|-----------------------|
| 1 暗褐色土  | ローム粒子含む。                | 15 暗褐色土      | サラサラする。ローム粒子少量含む。     |
| 2 黄褐色土  |                         | 16 暗褐色土      | ロームブロック少量に含む。         |
| 3 暗褐色土  |                         | 17 暗褐色土      | サラサラする。ロームブロック少量に含む。  |
| 4 暗褐色土  | ロームブロック含む。              | 18 黄褐色土+暗褐色土 |                       |
| 5 暗褐色土  | ロームブロック・ローム粒子多量に含む。     | 19 暗褐色土      | ロームブロック・炭化物含む。        |
| 6 暗褐色土  | ロームブロック・ローム粒子含む。        | 20 黒褐色土      | ローム粒子少量に含む。           |
| 7 黄白色土  | 軟らかく粘性あり。               | 21 暗褐色土      | サラサラする。               |
| 8 暗褐色土  | やや堅くしまり粘性あり。黄白色土ブロック含む。 | 22 暗褐色土      | サラサラする。褐色土含む。         |
| 9 暗褐色土  | ロームブロック多量に含む。           | 23 暗褐色土      | 褐色土ブロック含む。            |
| 10 暗褐色土 | ローム粒子多量に含む。             | 24 暗褐色土      | ローム粒子・白色粒子少量に含む。      |
| 11 暗褐色土 | ローム粒子少量に含む。             | 25 暗褐色土      | 堅くしまり粘性あり。ローム粒子少量に含む。 |
| 12 暗褐色土 | サラサラする。ローム粒子含む。         | 26 暗褐色土      | ローム粒子・炭化物粒子含む。        |
| 13 黒褐色土 | ローム粒子含む。                | 27 黄白色土      | ロームブロック含む。            |
| 14 暗褐色土 | ローム粒子多量、炭化物粒子少量に含む。     | 28 灰褐色土      | ローム粒子含む。              |

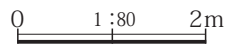


第221図 2区1号屋敷内ピット群2断面図



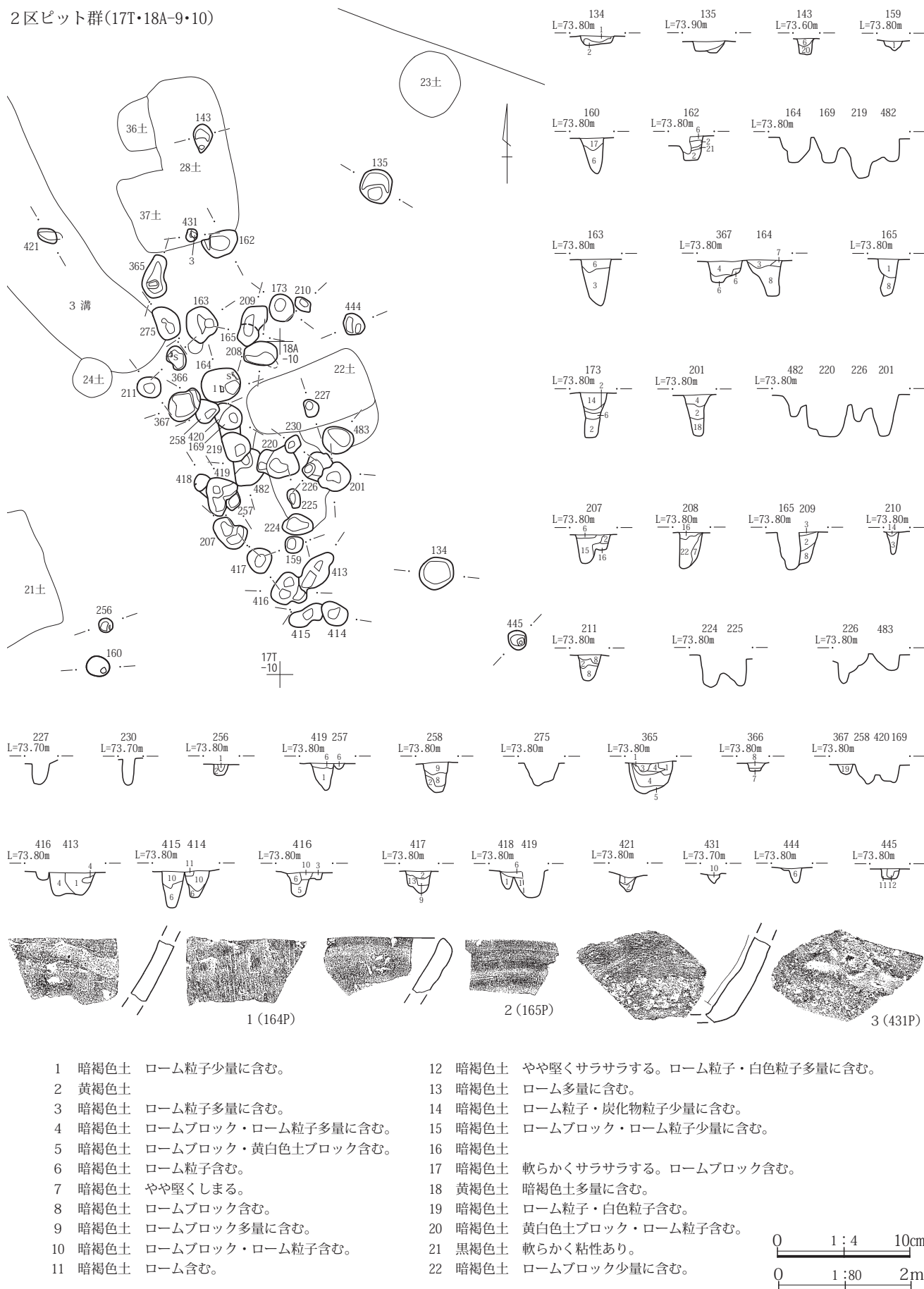
- 1 暗褐色土 ローム粒子含む。
- 2 暗褐色土 やや堅くしまる。小石含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。
- 4 暗褐色土 ロームブロック含む。
- 5 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子少量に含む。
- 6 褐色土 ローム粒子含む。
- 7 暗褐色土 ローム粒子多量に含む。
- 8 黄褐色土

- 9 暗褐色土 黄白色土ブロック含む。
- 10 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量に含む。
- 11 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子含む。
- 12 暗褐色土
- 13 暗褐色土 ローム粒子・白色粒子含む。
- 14 暗褐色土 サラサラする。ロームブロック・ローム粒子少量に含む。
- 15 暗褐色土 サラサラする。ローム粒子少量に含む。
- 16 暗褐色土 褐色土ブロック含む。
- 17 暗褐色土 サラサラする。

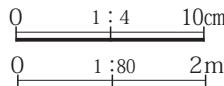


第222図 2区1号屋敷内ピット群3

2区ピット群(17T・18A・9・10)

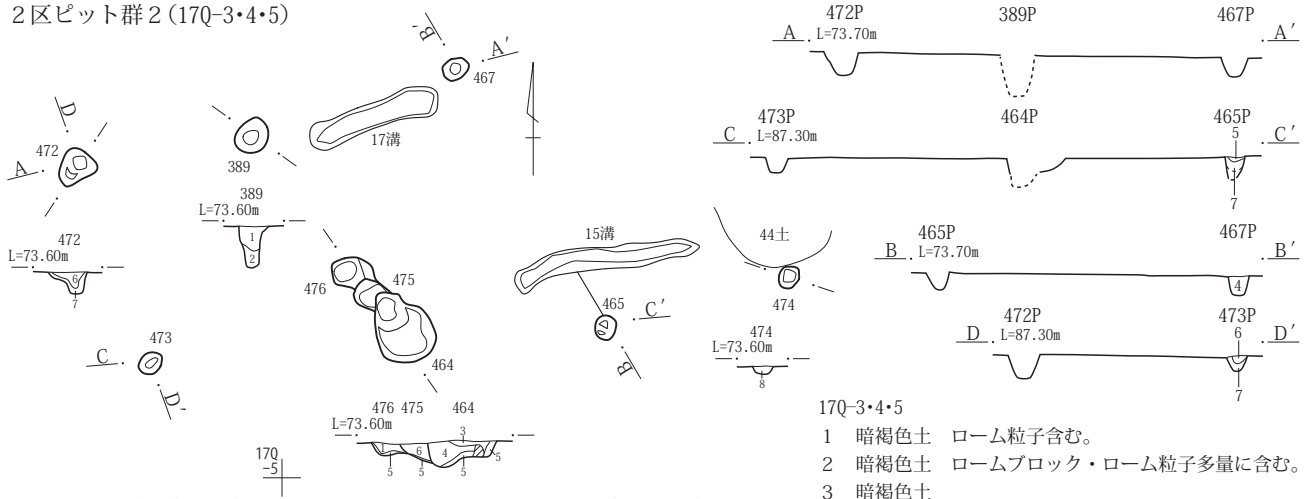


- |         |                     |         |                             |
|---------|---------------------|---------|-----------------------------|
| 1 暗褐色土  | ローム粒子少量に含む。         | 12 暗褐色土 | やや堅くサラサラする。ローム粒子・白色粒子多量に含む。 |
| 2 黄褐色土  |                     | 13 暗褐色土 | ローム多量に含む。                   |
| 3 暗褐色土  | ローム粒子多量に含む。         | 14 暗褐色土 | ローム粒子・炭化物粒子少量に含む。           |
| 4 暗褐色土  | ロームブロック・ローム粒子多量に含む。 | 15 暗褐色土 | ロームブロック・ローム粒子少量に含む。         |
| 5 暗褐色土  | ロームブロック・黄白色土ブロック含む。 | 16 暗褐色土 |                             |
| 6 暗褐色土  | ローム粒子含む。            | 17 暗褐色土 | 軟らかくサラサラする。ロームブロック含む。       |
| 7 暗褐色土  | やや堅くしまる。            | 18 黄褐色土 | 暗褐色土多量に含む。                  |
| 8 暗褐色土  | ロームブロック含む。          | 19 暗褐色土 | ローム粒子・白色粒子含む。               |
| 9 暗褐色土  | ロームブロック多量に含む。       | 20 暗褐色土 | 黄白色土ブロック・ローム粒子含む。           |
| 10 暗褐色土 | ロームブロック・ローム粒子含む。    | 21 黒褐色土 | 軟らかく粘性あり。                   |
| 11 暗褐色土 | ローム含む。              | 22 暗褐色土 | ロームブロック少量に含む。               |



第223図 2区ピット群1と164・165・431号ピット出土遺物

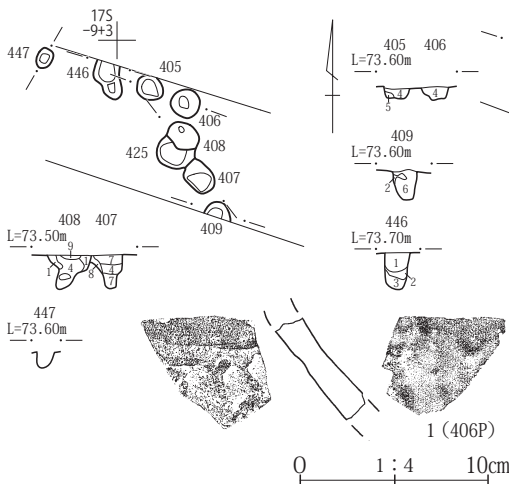
2区ピット群2 (17Q-3・4・5)



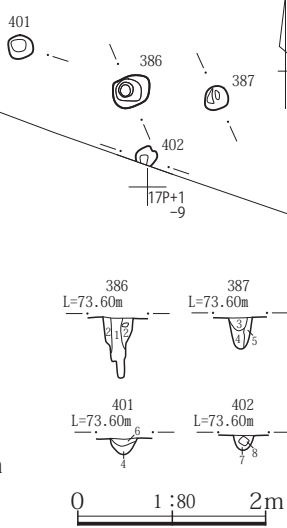
17Q-3・4・5

- 1 暗褐色土 ローム粒子含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量に含む。
- 3 暗褐色土
- 4 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。
- 5 黄褐色土
- 6 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子含む。
- 7 黄褐色土+暗褐色土
- 8 灰褐色土 やや堅くてサラサラする。ローム粒子少量に含む。

2区ピット群3 (17R-9)



2区ピット群4 (17P-8・9)



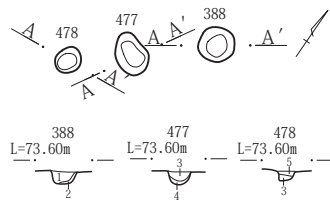
17P-8・9

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子含む。
- 2 暗褐色土 やや堅くしまり粘性あり。ロームブロック多量、小石含む。
- 3 暗褐色土 ロームブロック多量に含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒子含む。
- 5 暗褐色土 ロームブロック含む。
- 6 暗褐色土 やや硬い。ロームブロック、ローム粒子多量に含む。
- 7 暗褐色土 軟らかくしまり良い。ロームブロック少量に含む。
- 8 ロームブロック

17R-9

- 1 暗褐色土 ローム粒子含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロック・黄白色土ブロック含む。
- 3 暗褐色土 黄白色土粒子含む。
- 4 暗褐色土 黄白色土ブロック含む。
- 5 黄白色土
- 6 暗褐色土 黄白色土ブロック少量に含む。
- 7 暗褐色土 黄白色土ブロック多量に含む。
- 8 暗褐色土
- 9 褐色土 ローム粒子含む。

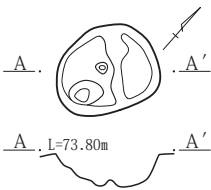
388・477・478P



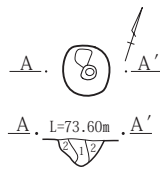
388・477・478号ピット

- 1 暗褐色土 堅くしまる。ローム粒子・白色軽石含む。
- 2 暗褐色土 堅くしまる。ロームブロック含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子含む。
- 4 暗褐色土 ローム含む。
- 5 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子含む。

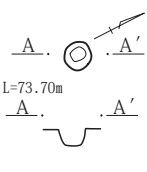
124P



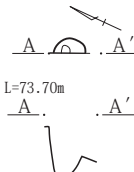
288P



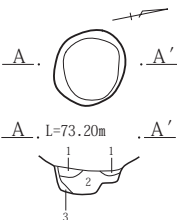
246P



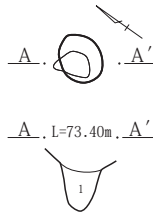
427P



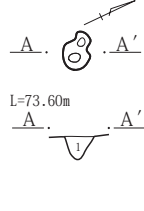
442P



443P



448P



228号ピット

- 1 暗褐色土 やや堅くしまる。ローム粒子少量に含む。
- 2 暗褐色土 やや堅くしまり粘性あり。ロームブロック・暗褐色土ブロック含む。

442号ピット

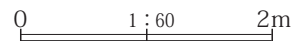
- 1 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ローム粒子含む。
- 2 黒褐色土 軟らかくしまり粘性あり。黄白色土ブロック少量に含む。
- 3 暗褐色土 非常に軟らかく粘性あり。黄白色土ブロック多量に含む。

443号ピット

- 1 暗褐色土 非常に軟らかく粘性あり。黄白色土ブロック含む。

448号ピット

- 1 暗褐色土 やや堅くしまる。ローム粒子含む。



第224図 2区ピット群2～4、個別ピットと406号ピット出土遺物

第127表 2区164・165・431号ピット出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第223図	1	常滑陶器	甕か片 口鉢	164P +39cm	-	-	-	体部片		黄灰	内面に自然釉が斑状に薄くかかる。内面の下半は器表が平滑となる。	中世。
第223図	2	在地系土器	片口鉢	165P	-	-	-	口縁部片	B	灰	還元炎。口縁端部は内湾気味につまみ上げる。端部は丸みを持つ。	Ⅱ期。
第223図	3	在地系土器	片口鉢	431P +26cm	-	-	-	体部片	B	灰	還元炎。体部内面下位は、使用により器表摩滅し、残存部上位は平滑。底部外面周縁は器表摩滅。	中世。

第128表 2区406号ピット出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第224図	1	常滑陶器	甕か		-	-	-	肩部片		灰	外面に厚い自然釉。内面器表は暗赤褐色。	中世。

## 6 溝

内部の建物やピット群の出土状況、溝同士的位置関係を考慮し、2・3・4・6号溝を区画溝と位置づける。2・3号溝は幅広で浅く直線的な点で一致する。4号溝は細く区画溝としては貧弱である。形態的に1号溝と類似しており、北側に別の区画された空間も想定される。6号溝は幅・深さにおいて、2・3号溝と遜色ないが、曲線的で1区2号溝と同一とみられる。したがって、西側を別の区画屋敷と考えることも可能であろうが、建物も少ないため、別の屋敷として呼称しなかった。位置関係から7号溝が対応する北辺となり、形態も6号溝に近似する。8号溝は2号溝に並走しており、外側を更に区画する可能性もある一方、走向方位がややずれており、別時期の区画溝である可能性もある。

10・12号溝は小規模な区画溝となるが、内部に遺構が見られない。しかし、3区区画屋敷の区画溝の一部である可能性が高い。

13号溝の幅は狭く浅いが、区画を意識した溝であろう。並走する11号溝は小規模だが、直線的で近似する。また、15・17号溝は小規模でやや曲がる点で近似しており、ともにピット間にある。布堀状で建物に関係する可能性が高い。

### 1号溝(第225図、P L .80)

**位置** 18C・D-16・17グリッド。北端は調査区外へ延びる。南端は立ち上がりではなく、削平などにより不分明となったとみられる。平面形は直線状。走向方位はN-12°-W。断面形はU字形。底面はやや凸凹する。両端の比高差は5cmで、勾配はほとんどない。自然埋没と思われる。規模は長さ5.9m上端幅42~61cm最大深21cmである。中世以降の遺物は出土していない。

2号溝・周辺ピット群(第228・229図、P L .80・150、第131表)

**2号溝 位置** 17Q・R-10~12グリッド。22号掘立柱建物・周辺ピット群と重複するが新旧関係不明。南端は調査区外に延びる。北端は攪乱に消滅する。平面形は直線状。区画屋敷の南辺を区画する。走向方位はN-66°-E。断面形は皿状。底面は平坦。両端の比高差は6cmで、勾配はほとんどない。埋没土は均質で人為埋没か。底面から在地系土器鍋鉢類ほかが出土する。遺物の年代は14世紀前半から15世紀前半に及ぶ。掲載遺物のほか、中世国産陶器1片・在地系土器39片、その他土器類9片が出土している。規模は長さ10.32m上端幅140~160cm最大深13cmである。出土遺物から15世紀前半を下限とすると考えられる。

**周辺ピット群 位置** 17Q-10~12グリッド。ピットの多くは2号溝と重複するが新旧関係不明。376号ピットは22号掘立柱建物P2と重複するが新旧関係不明。西から243・369・368・381号ピットは直線状に並んでおり、走向方位は22号掘立柱建物と一致する。また、2号溝の壁際に並ぶピットもやや多くあり、同溝に伴うものも想定される。ピット群(17T・18A-9・10)や同(17R-9)とも類似する一群と評価される。柱痕を持つものなど、特徴的なものは見られない。各ピットの規模は\*表のとおりである。

### 3号溝(第225・227図、P L .81、第130表)

**位置** 17T~18B-10・11グリッド。22号土坑、275号ピットと重複するが新旧関係不明。北端は調査区外へ延びる。北端から約2m付近で一度途切れるが、連続するものと判断される。南端はピット群と隣接するが、消滅しただけで、そこでは立ち上がりせず、そのまま延びて

いた可能性もある。平面形は軽微な弓状で、東方へ曲がる。区画屋敷の東辺を区画する。走向方位はN-12°-W~N-36°-W。断面形は皿状。底面はやや丸みを持つ。両端の比高差は12cmで、勾配1.25%で南方へ下向する。自然埋没と思われる。底面近くから在地系土器皿・鉢が出土する。規模は長さ9.62m上端幅120~138cm最大深19cmである。南端埋没土中に中円礫が多く出土しており、投棄されたものと判断される。出土遺物から14世紀後半頃に比定される。

#### 4号溝(第225図、P L .81)

**位置** 18C-14・15グリッド。東端は調査区外へ延びる。西端は立ち上がりではなく、削平などにより不分明となったとみられる。ただし、西方の3号井戸まで延びてたかは不明である。平面形はほぼ直線状。区画屋敷の北辺を区画する。走向方位はN-61°-E。断面形は皿状。底面はやや凸凹する。両端の比高差は20cmで、勾配4.52%で西方へ下向する。自然埋没と思われる。規模は長さ4.42m上端幅42~50cm最大深13cmである。中世以降の遺物は出土していない。

#### 5号溝(第225図、P L .81)

**位置** 17T-15グリッド。西端は調査区外へ延びる。東端は斜めに立ち上がる。196号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は細長方形で、土坑の可能性もある。走向方位はN-62°-E。断面形は逆台形。底面はやや凸凹する。両端の比高差は1cmで、勾配はほとんどない。自然埋没と思われる。規模は長さ1.55m上端幅65~79cm最大深21cmである。遺物は近世在地系土器1片、その他土器類1片が出土している。出土遺物から近世の可能性もある。

#### 6号溝(第225・226図、P L .81・150、第129表)

**位置** 17S・T-14・15グリッド。南端は調査区外に延びる。北端は緩やかに立ち上がる。4号井戸、13号ピットほかピット14基と重複するが新旧関係不明。平面形は西側に曲がるやや弓状で、輪郭は乱れる。区画屋敷の西辺を区画する。走向方位はN-61°-E~N-6°-E。断面形は皿状で、東壁は立ち上がりが強く、西壁は不分明。底面はやや凸凹する。両端の比高差はない。自然埋没と思われる。底面近くから在地系土器鍋鉢類を中心にやや多く遺物が出土する。遺物の年代は14世紀後半から15世紀中頃に及ぶ。規模は長さ8.20m上端幅291cm最大深

15cmである。埋没土中に遺物及び中礫が多く投棄される。出土遺物から15世紀中頃を下限とすると考えられる。7号溝(第225・227図、P L .81、第130表)

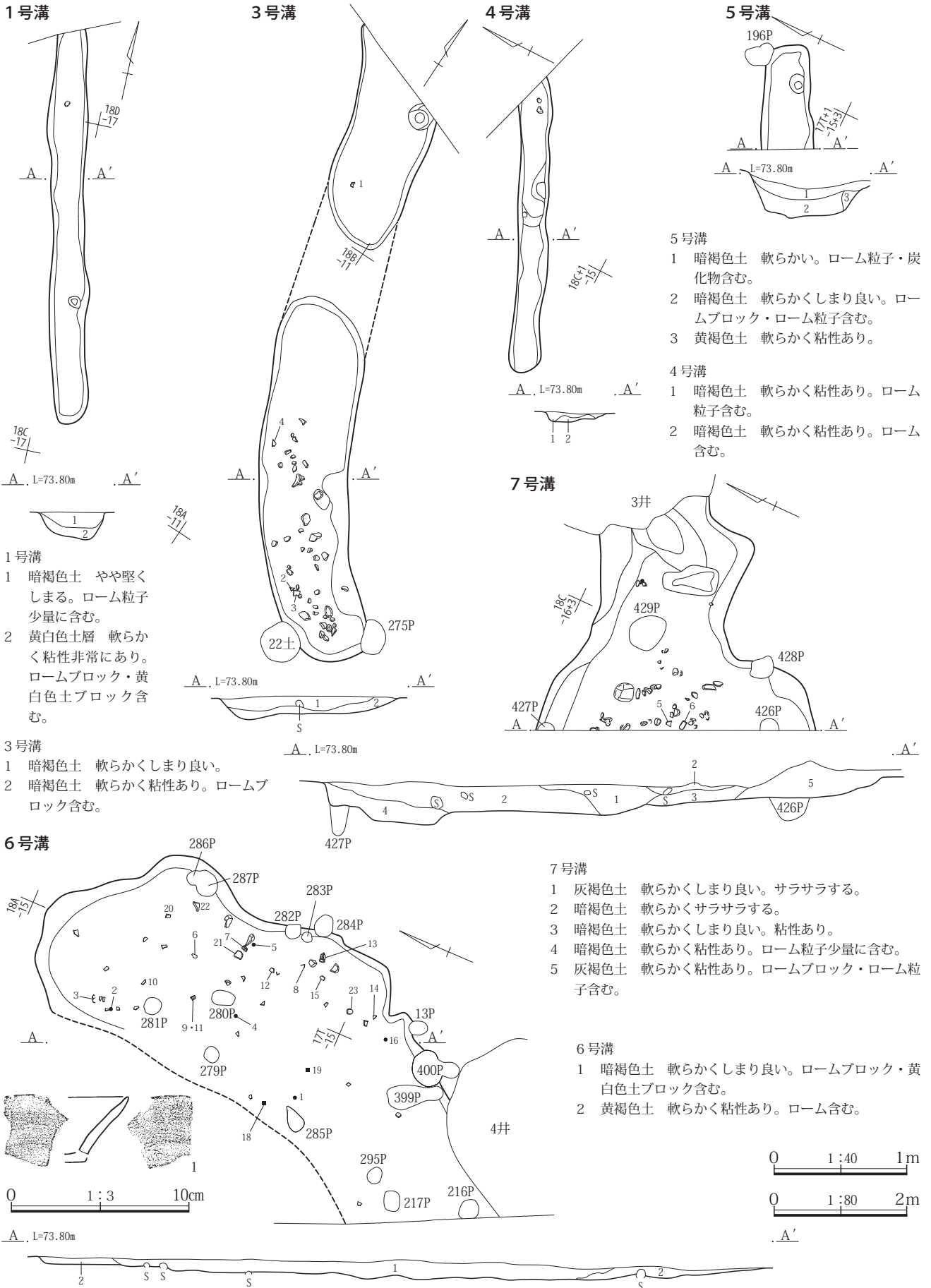
**位置** 18B・C-16グリッド。西端は調査区外に延び、1区2号溝と同一である可能性が高い。426・427号ピットより後出で、3号井戸、426~429号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は山形に開く。走向方位はN-63°-E。断面形は皿状。底面はやや凸凹し、西側壁寄りには円形に落ち込む。東端も円形の落ち込みが見られ、土坑が重複する可能性もある。両端の比高差は2cmで、勾配はほとんどない。自然埋没と思われる。埋没土から在地系土器鉢(227図5)、常滑陶器甕(227図6)が出土する。掲載遺物のほか、中世在地系土器1片、近世国産磁器1片が出土している。規模は長さ3.74m上端幅182~420最大深32cmである。埋没土中に大・中礫が多く投棄される。出土遺物から中世に比定されるが、近世の可能性も残る。

#### 8号溝(第228・230図、P L .82・150、第133表)

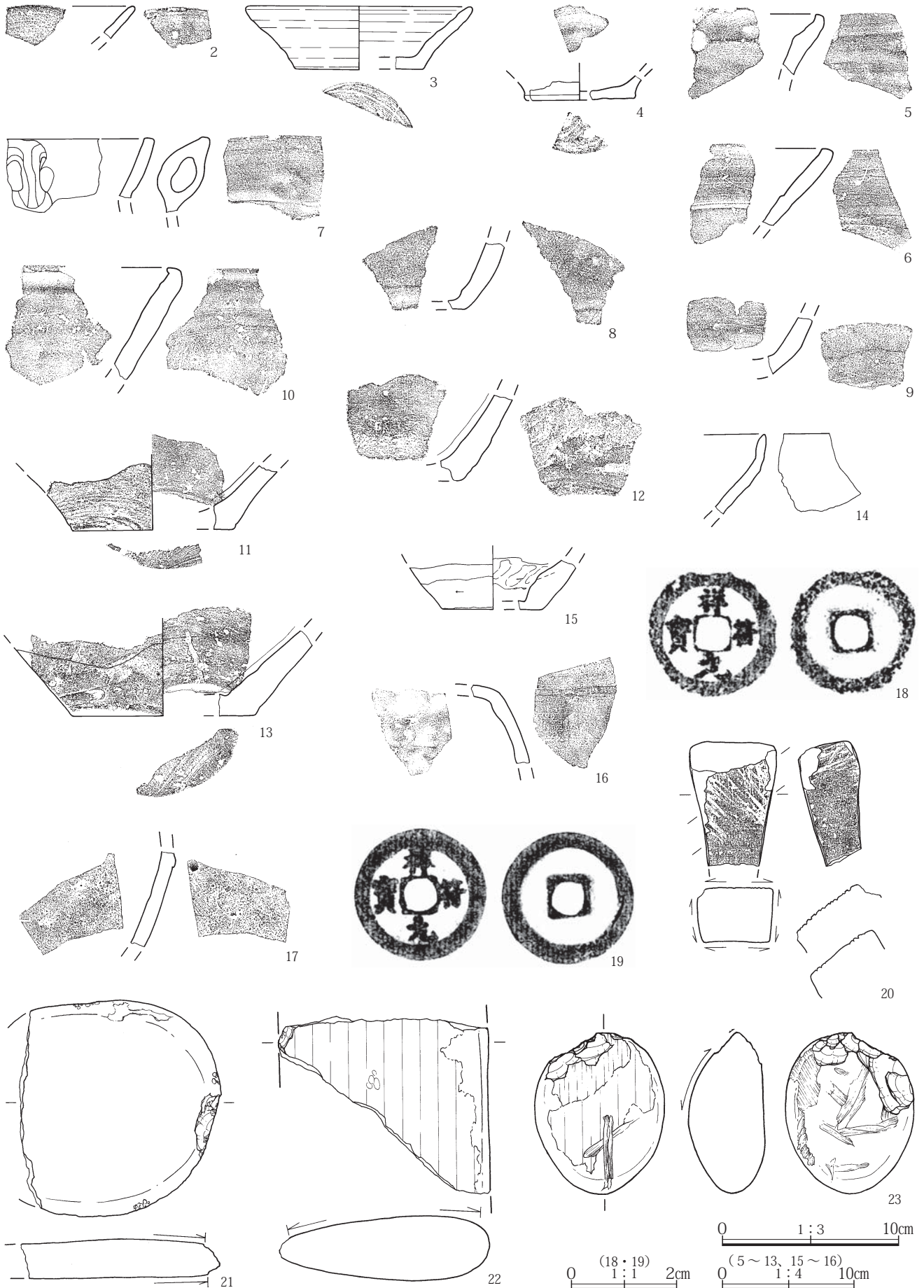
**位置** 17P・Q-8~10グリッド。東端は攪乱により消滅。西端は調査区外へ延びる。平面形はやや弓状で、北側に曲がる。西端は扇形に広がる。走向方位はN-74°-E~N-60°-E。断面形は皿状。底面はやや凸凹する。両端の比高差は4cmで、勾配はほとんどない。西端では底面から大・中礫が多く分布し、礫を多用して人為的に埋没した可能性が高い。また、底面中央部に重なっており、完掘状態は掘り方であり、機能時は東側と同じ程度の幅であった可能性が高い。西端の礫に混じって、在地系土器鍋鉢類を中心にやや多く出土する。掲載遺物のほか、中世在地系土器26片が出土している。遺物の年代は14世紀後半から15世紀後半に及ぶ。規模は長さ14.88m上端幅56~200cm最大深29cmである。出土遺物から15世紀後半を下限とすると考えられる。

#### 10・12号溝(第231・232図、P L .82・83・150、第135表)

**10号溝 位置** 17N~P-2~4グリッド。46号土坑、5号井戸、442・443号ピットと重複するが新旧関係不明。東端は試掘トレンチにより上面が消滅するが、そのまま延びて12号溝と同一の溝と考えられる。西方延長線上に3区12号溝が存在して、同一の溝と見えるため、3区区画屋敷の北東角となる可能性がある。平面形はL字形。走向方位はN-56°-E~N-15°-W。断面形は



第225図 2区1・3～7号溝と6号溝出土遺物(1)



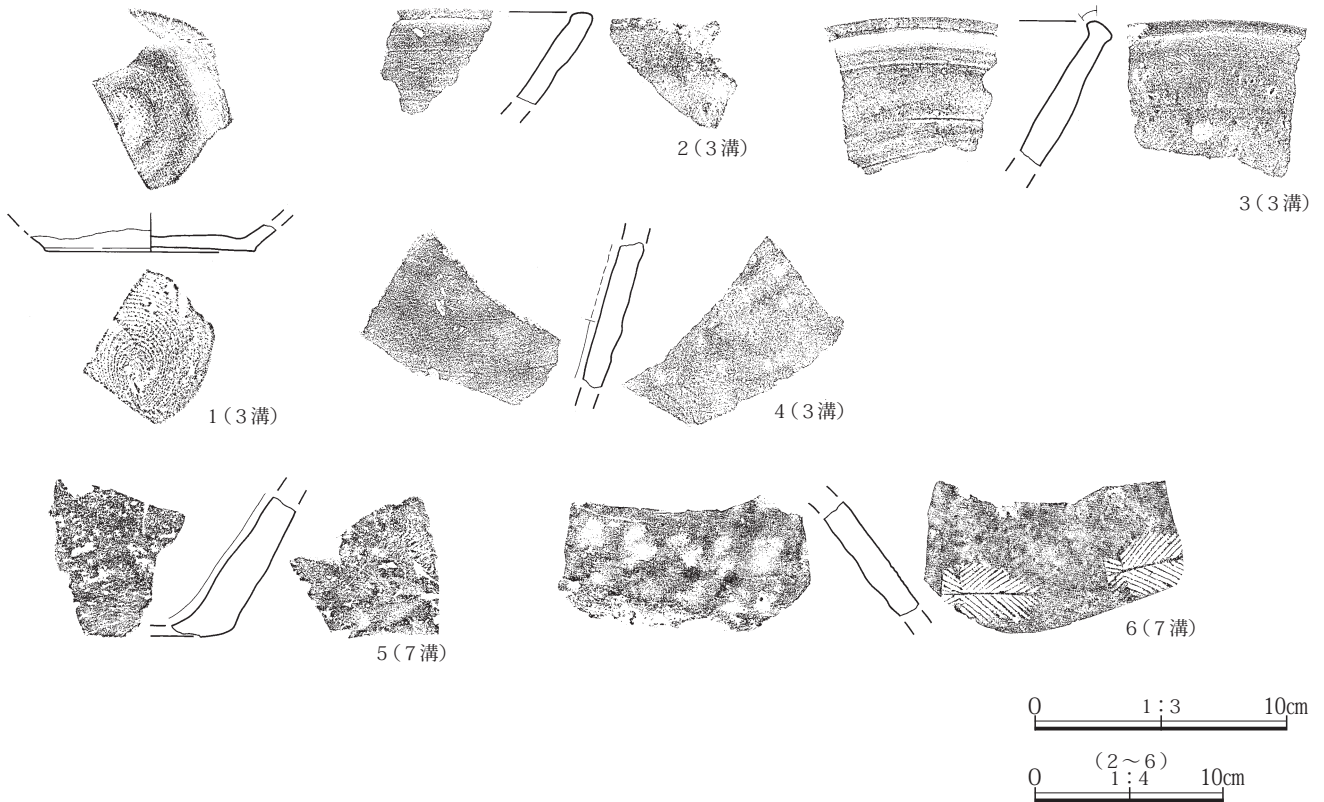
第226図 2区6号溝出土遺物(2)



第4章 発掘調査の記録

第129表 2区6号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第225図	1	在地系 土器	皿	+2cm	-	-	-	口縁部 片	B	橙・に ぶい 橙	体部は外反し、口縁端部は尖り気味。	14世紀～15 世紀。
第226図	2	在地系 土器	皿	+6cm	-	-	-	口縁部 片	B	にぶい 黄橙	轆轤整形。	3と同一個体 か。
第226図 PL.150	3	在地系 土器	皿	+6cm	(12.5)	(7.1)	3.5	1/3	B	にぶい 黄橙	体部下位は外反。左回転轆轤整形。底部回転糸切無調整。	15世紀前半～ 中頃。
第226図	4	在地系 土器	皿	+9cm	-	(6.0)	-	底部片	B	にぶい 橙	轆轤回転方向不明。底部回転糸切無調整。	中世。
第226図	5	在地系 土器	内耳鍋	+5cm	-	-	-	口縁部 片	B	にぶい 黄	器壁は厚い。口縁部下で緩く外反し、口縁部は短い。内面口縁部下は明瞭な稜をなして屈曲。口縁端部内面は小さく突き出し、先端は尖る。残存部左端に内耳部の窪み。	I期。
第226図	6	在地系 土器	内耳鍋	+12cm	-	-	-	口縁部 片	B	にぶい 黄橙	体部と口縁部は直線的に開く。器壁はやや厚い。口縁部下内面は明瞭な段をなす。口縁端部上面は平坦で、端部内外面は稜をなす。	II期か。
第226図	7	在地系 土器	内耳鍋	+8cm	-	-	-	口縁部 片	B	灰	還元炎。器壁はやや厚い。内耳はやや太い粘土紐を器壁に貼り付け。口縁端部上面はやや平坦で、内外面は稜をなす。	III期か。
第226図	8	在地系 土器	内耳鍋	+8cm	-	-	-	体下位 片	B	暗灰 黄・明 黄褐	体部下位は内湾。器壁は厚い。丸底か。	中世。
第226図	9	在地系 土器	内耳鍋	+9cm	-	-	-	体下位 片	B	灰	還元炎。体部下位は内湾し、外面は篋撫で。器壁は厚い。	中世。
第226図	10	在地系 土器	片口鉢	+4cm	-	-	-	口縁～ 体部	B	黒	断面中央は灰色、器表付近は浅黄橙色、器表は黒色。外面は端部から4.5cmほど横撫で。口縁端部内面は突き出る。使用により体部内面下位の器表は摩滅。	III・IV期。
第226図	11	在地系 土器	片口鉢	+9cm	-	(12.0)	-	体下位 ～底	B	灰	底部左回転糸切無調整。使用により内面の器表は摩滅するが、底部と体部境のみ摩滅していない。	中世。
第226図	12	在地系 土器	片口鉢	+3cm	-	-	-	体下位 片	B	灰黄	還元気味。使用により内面器表は摩滅。底部と体部境内面の摩滅は著しい。	中世。
第226図	13	在地系 土器	片口鉢	+7cm	-	(13.8)	-	体下位 ～底	B	灰	還元炎。底部糸切無調整。残存部にすり目はない。使用により内面の器表は摩滅。底部と体部境の器表は摩滅しない。	中世。
第226図 PL.150	14	古瀬戸	天目碗	+8cm	-	-	-	口縁部 片		灰白	内外面に天目釉。口縁部は立ち上がり、内面は丸みを持ち先端部は尖る。	後IV期古。
第226図 PL.150	15	常滑陶 器	壺か	+5cm	-	(7.5)	-	体～底 部片		にぶい 黄橙・ 黒褐	体部外面下端は篋削り。内面の底部と体部境は強い撫で。内面体部下位は指頭圧痕状の窪みが連続する。	中世。
第226図 PL.150	16	常滑陶 器	壺か	+3cm	-	-	-	肩部片		黄灰・ 暗灰黄	肩部外面上部に自然釉斑状にかかる。径がやや小さく壺の可能性はある。	中世。
第226図	17	常滑陶 器	甕		-	-	-	体部片		黒褐・ 褐灰	外面は板状工具による縦位撫で。上部に自然釉の溜まりあり。	中世。
挿図 PL.No.	No.	種類	器種	出土位置	径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	残存	形・成調整等	備考	
第226図 PL.150	18	銅銭	祥符元寶	+9cm	-	-	1.26	-	周縁一部 欠	北宋、1008年初鑄。		
第226図 PL.150	19	銅銭	祥符元寶	+10cm	25.16	24.84	0.99～ 1.07	2.48	完形	遺存状態は良い。中央は円孔状に加工。北宋、1008年初鑄。		
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況	備考		
第226図 PL.150	20	砥石	+5cm	切り砥石	砥沢石	(7.0)	5.0	152.7	背面側・右側面に砥面整形に伴う斜位・横位整形痕。			
第226図 PL.150	21	敲石	+7cm	楕円偏平礫	粗粒輝石安山岩	12.1	(11.2)	484.9	表裏面とも摩耗、小口部・側縁に敲打・衝撃剥離痕。			
第226図 PL.150	22	磨石	+6cm	偏平礫	粗粒輝石安山岩	(10.0)	11.8	444.2	背面側に摩耗面が広がる。			
第226図 PL.150	23	砥石?	+2cm	楕円礫	粗粒輝石安山岩	9.0	7.8	394.3	表裏面とも研磨面が生じている。先端小口部の剥離は両面にあり、加撃によるもの。表裏面にある幅広の擦痕はランダムで、その性格は明らかでない。			



第227図 2区3・7号溝出土遺物

第130表 2区3・7号溝出土遺物

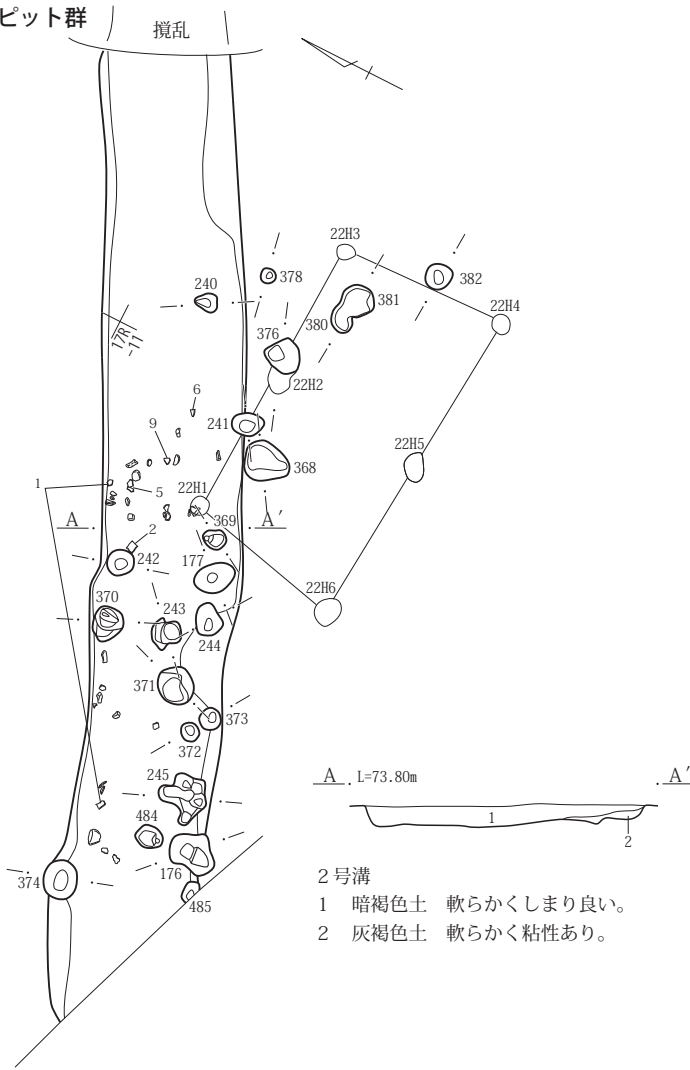
挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第227図	1	在地系 土器	皿	3溝 +7cm	-	(8.2)	-	底部片	B	にぶい 黄橙	底部左回転糸切無調整。	中世。
第227図	2	在地系 土器	片口鉢 か	3溝 +3cm	-	-	-	口縁部 片	B	褐灰・ 灰黄褐	還元炎。口縁端部上面の器表摩滅。	中世。
第227図	3	在地系 土器	片口鉢	3溝 +4cm	-	-	-	上半部 片	B	灰黄	還元気味。体部器壁は厚いが、口縁部外面は強い横撫 でにより、端部から4.5cmほどがやや薄くなる。口縁端 部外面は、この横撫でにより突出したように見える。 端部内面は内側に突き出る。突出部上面の器表は摩滅。	Ⅲ期。
第227図	4	在地系 土器	片口鉢	3溝 +9cm	-	-	-	体部片	B	橙	内面下位は使用により器表摩滅し、中位は平滑となる。	中世。
第227図	5	在地系 土器	片口鉢	7溝 +12cm	-	-	-	底部片	B	にぶい 黄橙	外面器表は褐灰色。底部外面は砂底状。内面の器表は 使用により摩滅するが、底部周縁から体部下端の摩滅 は著しく、明らかに窪む。	中世。
第227図	6	常滑陶 器	甕	7溝 +13cm	-	-	-	体部片		灰	外面に叩き目2箇所残る。外面に自然釉。同一個体と 考えられる他の破片にも叩き目があり、接合部外面に 叩き目をめぐらす時期の製品であろう。	中世。12世紀 ～14世紀か。

第131表 2区2号溝周辺ピット群計測表(cm)

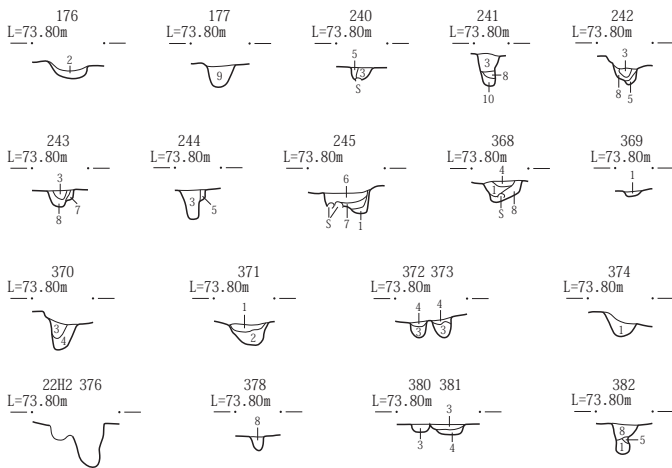
ピットNo.	グリッド	長径	短径	深さ	非掲載破片数
176	17Q-11	52	35	18	
177	17Q-11	45	30	24	
240	17Q-10	24	20	15	
241	17Q-11	34	24	36	
242	17Q-11	30	27	20	
243	17Q-11	31	22	18	
244	17Q-11	35	27	37	
245	17Q-11	54	49	31	
368	17Q-11	50	42	20	
369	17Q-11	25	15	16	
370	17Q-11	35	30	42	
371	17Q-11	41	39	29	中世在地系鍋類1
372	17Q-11	21	19	22	
373	17Q-11	24	22	22	

ピットNo.	グリッド	長径	短径	深さ	非掲載破片数
374	17Q-12	42	36	22	
376	17Q-10	39	27	40	
378	17Q-10	16	16	28	
380	17Q-10	30	23	11	
381	17Q-10	34	33	16	
382	17Q-10	30	27	39	
484	17Q-11	30	17	17	
485	17Q-11	25	(13)	34	

2号溝・周辺ピット群

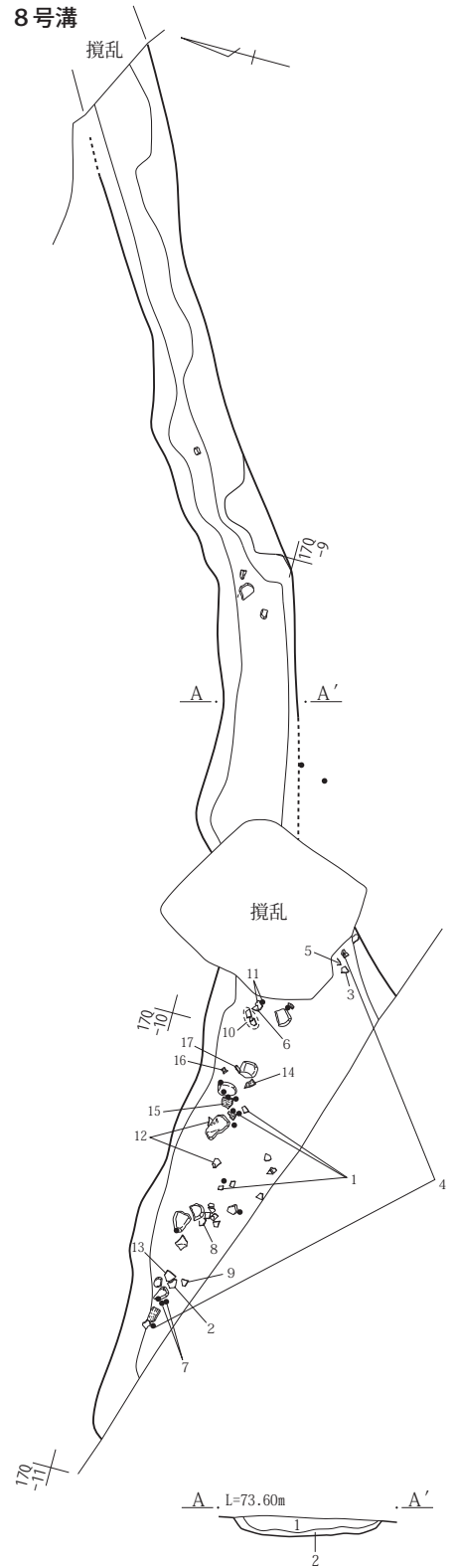


- 2号溝  
 1 暗褐色土 軟らかくしまり良い。  
 2 灰褐色土 軟らかく粘性あり。

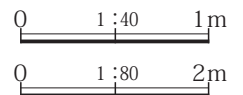


- 2号溝周辺ピット群
- |                            |                             |
|----------------------------|-----------------------------|
| 1 暗褐色土 ローム粒子含む。            | 5 黄褐色土                      |
| 2 暗褐色土 ローム粒子・黄白色土ブロック含む。   | 6 暗褐色土 黄白色土ブロック含む。          |
| 3 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。         | 7 黄白色土                      |
| 4 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量に含む。 | 8 暗褐色土 ロームブロック含む。           |
|                            | 9 暗褐色土 サラサラする。ロームブロック少量に含む。 |
|                            | 10 褐色土 ロームブロック含む。           |

8号溝



- 8号溝
- |                               |
|-------------------------------|
| 1 暗褐色土 やや堅くしまる。ローム粒子・炭化物粒子含む。 |
| 2 黄褐色土 軟らかく粘性あり。壁崩落土。         |



第228図 2区2号溝・周辺ピット群、8号溝



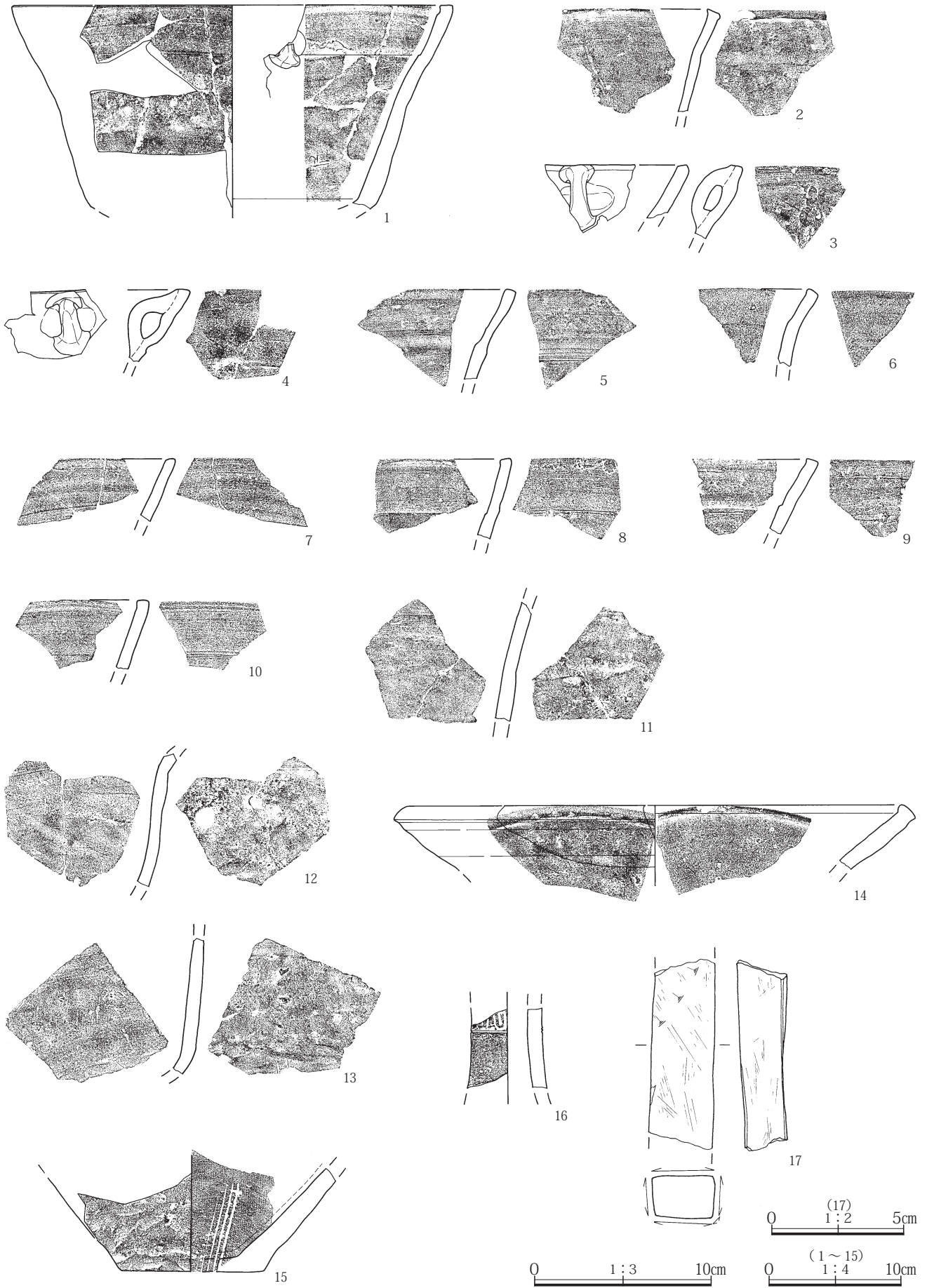
第229図 2区2号溝出土遺物

第132表 2区2号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第229図	1	在地系 土器	内耳鍋	+5cm	(26.0)	-	-	上半部 片	B	黄灰	還元炎。口縁部は短く、下部で外反。口縁端部は内湾 気味に立ち上がる。器壁は厚い。	I期。2と同一 個体の可能 性高い。
第229図 PL.150	2	在地系 土器	内耳鍋	底直上	-	-	-	口縁- 体部	B	黄灰	還元炎。口縁部は短く、下部で外反。口縁端部は内湾 気味に立ち上がる。器壁は厚い。内耳は器壁に孔をあ けて通し、外面で撫でつける。	I期。1と同一 個体の可能 性高い。
第229図	3	在地系 土器	内耳鍋		-	-	-	口縁部 片	B	浅黄	口縁部は短く、内湾。口縁端部は丸い。口縁部下屈曲 部内面は明瞭な稜をなす。	I期。
第229図	4	在地系 土器	内耳鍋		-	-	-	口縁部 片	B	にぶい 黄	還元炎。口縁部は緩く外反。口縁端部内面は低く突き 出る。器壁は厚い。	I・II期。
第229図	5	在地系 土器	内耳鍋	+4cm	-	-	-	体部片	B	灰黄・ 黒	還元気味。器壁厚い。口縁部下で緩く外反。湾曲部内 面はゆるい段をなす。	I・II期か。
第229図	6	在地系 土器	片口鉢	+11cm	-	-	-	口縁部 片	B	橙	器壁は厚い。口縁端部上方に小さく立ち上がる。	I期か。
第229図	7	在地系 土器	片口鉢		-	-	-	口縁部 片	B	橙	内面の器壁は剥離。口縁端部は欠損。口縁端部外面は 丸みを帯びる。	中世。
第229図 PL.150	8	中国白 磁	皿		-	-	-	口縁部 片		白	焼成不良で陶器質。外面口縁部以下は回転篋削り。内 外面に白磁釉。	森田分類D 群。
第229図	9	常滑陶 器	不詳	+4cm	-	-	-	体部片		灰黄褐	外面器表は暗赤褐色、内面器表はにぶい赤褐色で自然 釉斑状にかかる。壺か甕。	中世。

U字形。底面は丸みを持つ。両端の比高差はない。自然埋没と思われる。北辺中央の埋没土上位から在地系土器鍋(232図1)が出土する。また、東角部にやや遺物・礫が集中しており、底面近くから在地系土器鍋(232図3)ほかが出土する。掲載遺物のほか、中世在地系土器4片、その他土器類4片が出土している。遺物の年代は12世紀から15世紀前半に及ぶ。規模は長さ15.7m上端幅108～184cm最大深60cmである。出土遺物から15世紀前半を下限とすると考えられる。

12号溝 位置 17M～P-1・2グリッド。南端は調査区外に延びる。北端は試掘トレンチにより上面が消滅するが、そのまま延びて10号溝と同一の溝と考えられる。6号井戸と重複するが新旧関係不明。平面形はL字形。走向方位はN-34°-E～N-14°-W。断面形はU字形。東壁の方が立ち上がり強い。底面はやや凸凹する。両端の比高差は3cmで、勾配はほとんどない。自然埋没と思われる。南西角及び南端底面で在地系土器鍋(232図7・8)などが出土する。規模は長さ10.20m上端幅73



第230図 2区8号溝出土遺物

第133表 2区8号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第230図 PL.150	1	在地系 土器	内耳鍋	底直	(33.2)	-	-	1/6	B	にぶい 黄	外面器表は黒褐色で部分的に薄く煤付着。器壁は厚く、口縁部は長い。口縁部上面は僅かに丸みを持ち、内面側に小さく突き出す。内面口縁部下の段差は小さいが、稜は明瞭。体部外面下位は。篋撫で。丸底であろう。	Ⅱ期。
第230図 PL.150	2	在地系 土器	内耳鍋	+15cm	-	-	-	口縁部 片	A	黄褐・ 黒褐	断面は黄褐色、器表のみ黒褐色。燻し気味の焼成。器壁はやや薄く、口縁部は外反。口縁部内面は断面三角形に突きだし、外面は丸く肥厚。端部上面は幅広く僅かに窪む。内面口縁部下の段差はない。	Ⅲ・Ⅳ期か。
第230図	3	在地系 土器	内耳鍋	底直	-	-	-	口縁部 片	B	灰	還元炎。内耳は器壁に孔を開け、粘土紐を通して貼り付け。接合状態は断面で確認でき、外面も撫でと調整不足により、円孔の1部が皺状亀裂として残る。	Ⅱ・Ⅲ期か。
第230図	4	在地系 土器	内耳鍋	底直	-	-	-	口縁部 片	A	にぶい 黄橙・ 灰黄	内耳は粘土紐を口縁部器壁に貼り付ける。口縁部上面はほぼ平坦で、内側は稜をなす。内耳上端から下端は6cmを越える。	中世。
第230図	5	在地系 土器	内耳鍋	底直	-	-	-	口縁部 片	B	浅黄・ 黄灰	器壁はやや薄く、口縁部は内湾して延びる。口縁部内外面は丸みを持ち、上面も僅かに丸みを持つ。内面口縁部下の段差は明瞭であるが、稜は丸みを持つ。外面に煤付着。	Ⅲ・Ⅳ期。
第230図	6	在地系 土器	内耳鍋	+4cm	-	-	-	口縁部 片	B	灰	還元炎。器壁厚い。口縁部は外反し、上半が内湾。	Ⅰ・Ⅱ期。
第230図	7	在地系 土器	内耳鍋 か	+9cm	-	-	-	口縁部 片	B	にぶい 黄橙・ 黒褐	外面は煤付着。器壁はやや厚い。口縁部上面は僅かに丸みを持ち、内外面は稜をなす。	Ⅲ・Ⅳ期。
第230図	8	在地系 土器	内耳鍋	底直	-	-	-	口縁部 片	B	灰黄・ 灰黄褐	外面に煤付着。器壁は厚く、口縁部は長い。口縁部上面は僅かに丸みを持ち、内面側に小さく突き出す。内面口縁部下の段差は小さいが、稜は明瞭。	Ⅱ期か。1と 同一か。
第230図	9	在地系 土器	内耳鍋	+20cm	-	-	-	口縁部 片	B	浅黄	器壁は厚く、口縁部は長い。口縁部上面は平坦で、内面は内側に小さく突き出す。内面口縁部下の段差は小さいが、稜は明瞭。	Ⅱ・Ⅲ期。
第230図	10	在地系 土器	内耳鍋 か	+5cm	-	-	-	口縁部 片	B	灰黄褐・ 黒褐	器壁は厚く、口縁部は長い。口縁部上面は平坦で、端部内外面は稜をなす。	Ⅱ・Ⅲ期。
第230図	11	在地系 土器	内耳鍋	+4cm	-	-	-	体部片		にぶい 黄橙・ 黒褐	外面は煤付着。器壁は厚い。	Ⅰ・Ⅱ期か。
第230図	12	在地系 土器	内耳鍋	底直	-	-	-	体部片	B	にぶい 黄橙・ 黒褐	口縁部は外反し、屈曲部内面の段差はない。器壁厚い。外面に煤付着。	Ⅰ・Ⅱ期か。
第230図	13	在地系 土器	内耳鍋	+9cm	-	-	-	体部片	A	浅黄・ 黒褐	外面は薄く煤付着。体部外面下位は篋撫で。丸底か。	Ⅰ・Ⅱ期か。
第230図 PL.150	14	在地系 土器	片口鉢	+3cm	(38.8)	-	-	1/9	B	灰	器表は暗灰色。還元炎。口縁部は開き、端部内面は幅広いの三角形に突き出す。端部外面は、下位に強い横撫でにより窪ませることにより、丸みをもって突き出すように見える。	Ⅲ・Ⅳ期か。
第230図 PL.150	15	在地系 土器	片口鉢	+2cm	-	(11.0)	-	1/6		灰	還元炎。内面に5本一単位の直線的なすり目。底部内面周縁と体部内面下位は、使用により器表が摩滅。体部内面は使用により平滑。内面の底部と体部境はすり粉木が当たらないため、ほとんど擦れない。	V期か。
第230図	16	搬入系 土器か	不詳	+2cm	-	-	-	頸部か 脚部		灰・灰 黄・黒	断面は灰黄色、外面器表は黒色、内面器表は灰色。燻し焼成。外径は4cm程の円筒形で上下を欠損。外面は篋状工具で横線を廻らした後に押印文。在地系土器に含まれる黒色鉄物や透明鉄物類を含まない。	中世か。
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況		備考	
第230図 PL.150	17	砥石	底直上	切り砥石	変質ダイサイト	(7.1)	2.5	51.9	四面使用。砥面に斜位線条痕が顕著。			

～173cm最大深42cmである。出土遺物から14世紀後半から15世紀前半に比定される。

11号溝(第231、P.L.83、第134表)

位置 17P-4グリッド。平面形は直線状。走向方位はN-72°-E。断面形はU字形。底面はやや凸凹し、軽微に三段に分かれる。両端の比高差は1cmで、勾配はほとんどない。自然埋没と思われる。中央部分でややまとまって中礫が出土し、その西側底面で在地系土器鉢(1)が出土する。規模は長さ2.40m上端幅35～40cm最大深

19cmである。出土遺物から中世に比定される。

13号溝、周辺ピット群(第233図、P.L.83・151、第136・137表)

13号溝 位置 17O・P-2～6グリッド。南端は調査区外に延びる。48号土坑と重複するが新旧関係不明。27基のピットが近接するが、重複するものはない。平面形は南端から約2.5mで折れて、くの字を呈する。断面形は皿状。底面はやや凸凹する。両端の比高差は7cmで、勾配はほとんどない。埋没状況不詳。底面近くから在地

系土器鍋鉢類が出土する。掲載遺物のほか、中世在地系土器2片が出土している。遺物の年代は14世紀後半から15世紀中頃に及ぶ。規模は長さ19.94m上端幅56～86cm最大深14cmである。出土遺物から15世紀中頃を下限とすると考えられる。

**周辺ピット群** 位置 17O・P-3～6グリッド。12基が9号溝と重複するが新旧関係不明。位置関係から13号溝とあわせて扱う。埋没土は暗褐色土が多く、特徴的なものはない。一列に並ぶものとして、438・451・434号ピット、410・480・481・423・424号ピットがあり、13号溝と並走する。詳細な計測データは第136表のとおりである。

**15号溝(第231図、P L .83)**

**位置** 17Q-4グリッド。平面形はほぼ直線状だが、西端は南に曲がる。走向方位はN-79°-E。断面形はU字形。底面は軽微に四段に分かれる。両端の比高差は3cmで、勾配1.5%で東方へ下向する。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長さ2m上端幅19～26cm最大深21cmである。464・474号ピットの間

に位置し、布堀状となり関係が想定される。17号溝に近似する。遺物は中世在地系土器2片が出土している。出土遺物から中世に比定される。

**16号溝(第231図、P L .83)**

**位置** 17Q・R-4・5グリッド。平面形は乱れた方形で、土坑の可能性もある。走向方位はN-49°-E。断面形は皿状。底面はほぼ平坦。勾配は計測不能。埋没状況不詳。規模は長さ2.26m上端幅81～106cm最大深6cmである。中世以降の遺物は出土していない。

**17号溝(第231図、P L .83)**

**位置** 17Q-4グリッド。平面形はほぼ直線状だが、東端はやや南に曲がる。走向方位はN-70°-E。断面形は皿状。底面は平坦。両端の比高差はない。埋没状況不詳。規模は長さ1.45m上端幅25～33cm最大深8cmである。389・467号ピットの中間に位置し、布堀状となり関係が想定される。15号溝に近似する。中世以降の遺物は出土していない。

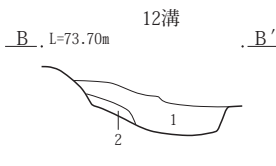
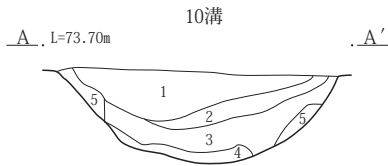
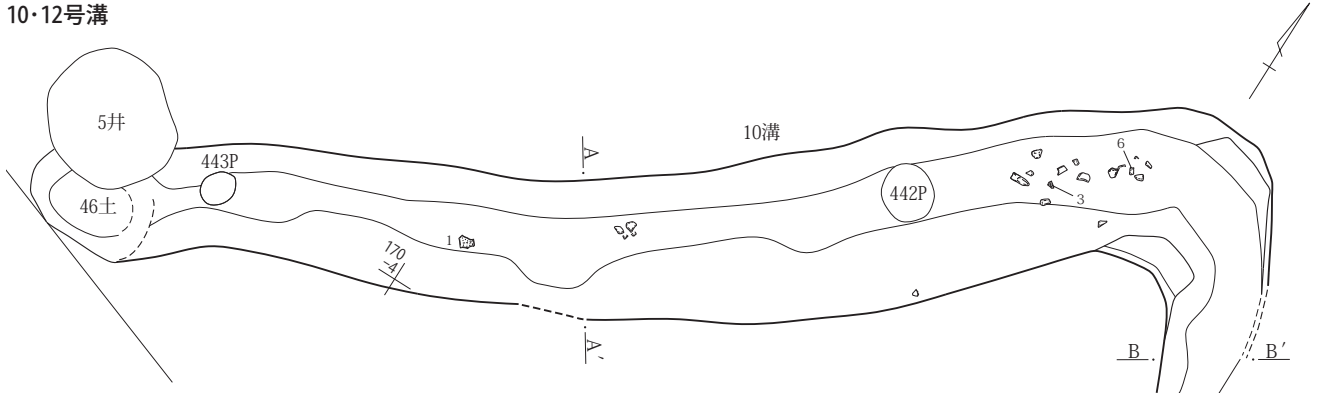
第134表 2区11号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第231図	1	在地系 土器	片口鉢	+22cm	-	-	-	体下位 片	B	黄灰	使用により内面下半の器表は摩滅。上半はやや平滑となる。	中世。

第135表 2区10・12号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第232図 PL.150	1	在地系 土器	内耳鍋	10溝 +20cm	-	-	-	1/8		灰	還元炎。口縁部は短く外反。端部は内側に突き出す。端部外面は丸い。口縁屈曲部内面の稜は明瞭。内耳は器壁に孔を開けて粘土紐を通して接合。体部外面下端は箆撫で。	I期。
第232図 PL.150	2	在地系 土器	内耳鍋	10溝	-	-	-	1/8		灰白・ 灰	外面の器表は灰色。還元炎。器壁はやや薄い。口縁部は短い。口縁端部はやや内湾。内耳接合部外面に亀裂状の隙間が認められ、孔を開けて通すように接合したと考えられる。体部外面下位は箆撫で。	I期。
第232図	3	在地系 土器	内耳鍋	10溝 +3cm	-	-	-	口縁部 片	B	灰黄・ 黄灰	還元炎。口縁部は短く外反。端部は内側に突き出す。端部外面は丸い。	I期。
第232図	4	在地系 土器	片口鉢	10溝	-	-	-	口縁部 片	B	褐灰・ 灰黄褐	断面は橙色。体部器壁は薄い。口縁部は厚い。端部は内面に小さく突き出るが、上面の器表が摩滅。	III・IV期か。
第232図	5	渥美陶 器	壺	10溝	-	-	-	肩部片		灰	外面は横線上に2本一単位の曲線を縦位に施す。外面に自然釉。縦位の区画線が残存しない。	12世紀。
第232図 PL.150	7	在地系 土器	内耳鍋	12溝 +6cm	-	-	-	口縁～ 体部	B	黒褐・ にぶい 黄橙・ 黄灰	断面はにぶい黄橙色、内面器表は灰黄色、外面器表は黒褐色。器壁は厚く、口縁部はやや短い。口縁部は内湾。内耳部外面に粘土貼り付け痕跡があり、内耳は器壁に通している可能性が高い。	14世紀後半～15世紀前半? 図とは異なり、内耳は器壁に通している可能性高い。
第232図	8	在地系 土器	内耳鍋	12溝底 直	-	-	-	口縁部 片	B	褐灰・ にぶい 黄褐・ 褐灰	断面はにぶい黄橙色、器表は褐灰色。器壁は厚く口縁部は短い。口縁部下はゆるく外反し、口縁部は内湾気味。口縁端部内面は尖り気味。口縁部下内面は低い段差をなす。	14世紀後半～15世紀前半?
第232図	9	在地系 土器	片口鉢	12溝	(32.0)	-	-	1/8	B	暗灰・ 灰オ リー ブ・灰	還元炎でやや硬質な焼き上がり。やや外反し、口縁端部内面は丸みを帯びて突き出る。端部上面は丸みを帯びる。	III期。238図14と同一個体の可能性高い。
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況		備考	
第232図 PL.150	6	砥石	10溝 +16cm	切り砥石	砥沢石	(6.0)	3.6	130.7	裏面側に刃ならし傷。左側面は磨き整形。左側面を除く三面を使用。			

10・12号溝



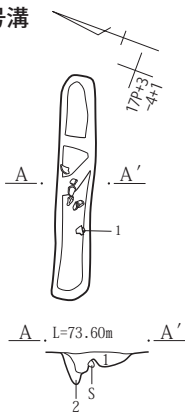
10号溝

- 1 暗褐色土 軟らかくしまり良い。ローム粒子・炭化物粒子少量に含む。
- 2 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ローム粒子含む。
- 3 暗褐色土 非常に軟らかく粘性あり。ロームブロック・黄白色土ブロック含む。
- 4 黄白色土層 やや堅くしまり粘性あり。暗褐色土少量に含む。
- 5 黄褐色土 壁崩落土。

12号溝

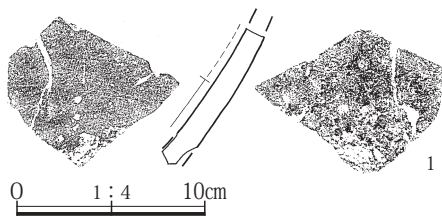
- 1 暗褐色土 やや堅くしまり粘性あり。ローム粒子含む。
- 2 暗褐色土 やや堅くしまり粘性あり。ロームブロック・ローム粒子少量に含む。

11号溝

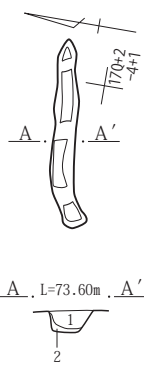


11号溝

- 1 暗褐色土 軟らかくしまり良い。ロームブロック・ローム粒子少量に含む。
- 2 暗褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。



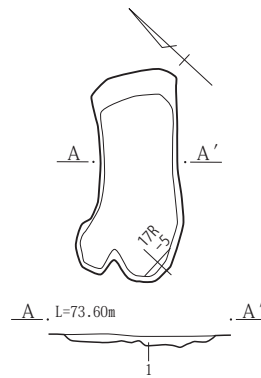
15号溝



15号溝

- 1 黄褐色土 やや堅くしまる。ロームブロック多量に含む。
- 2 暗褐色土 やや堅くしまり粘性あり。ロームブロック含む。

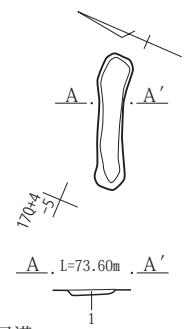
16号溝



16号溝

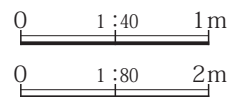
- 1 暗褐色土 やや堅くしまる。ローム粒子含む。

17号溝



17号溝

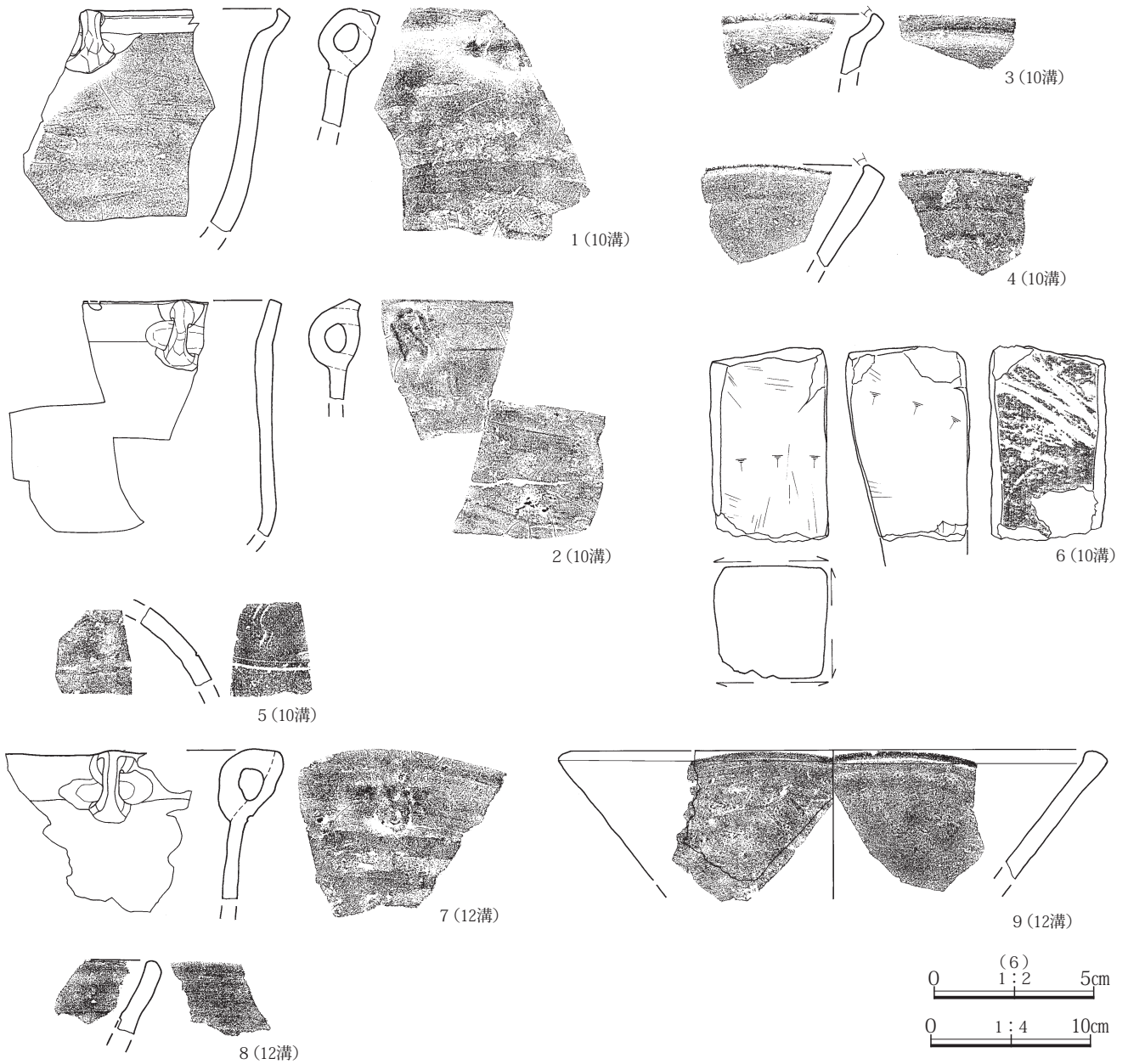
- 1 暗褐色土 やや堅くしまる。ローム粒子含む。



第231図 2区10～12・15～17号溝と11号溝出土遺物



第4章 発掘調査の記録

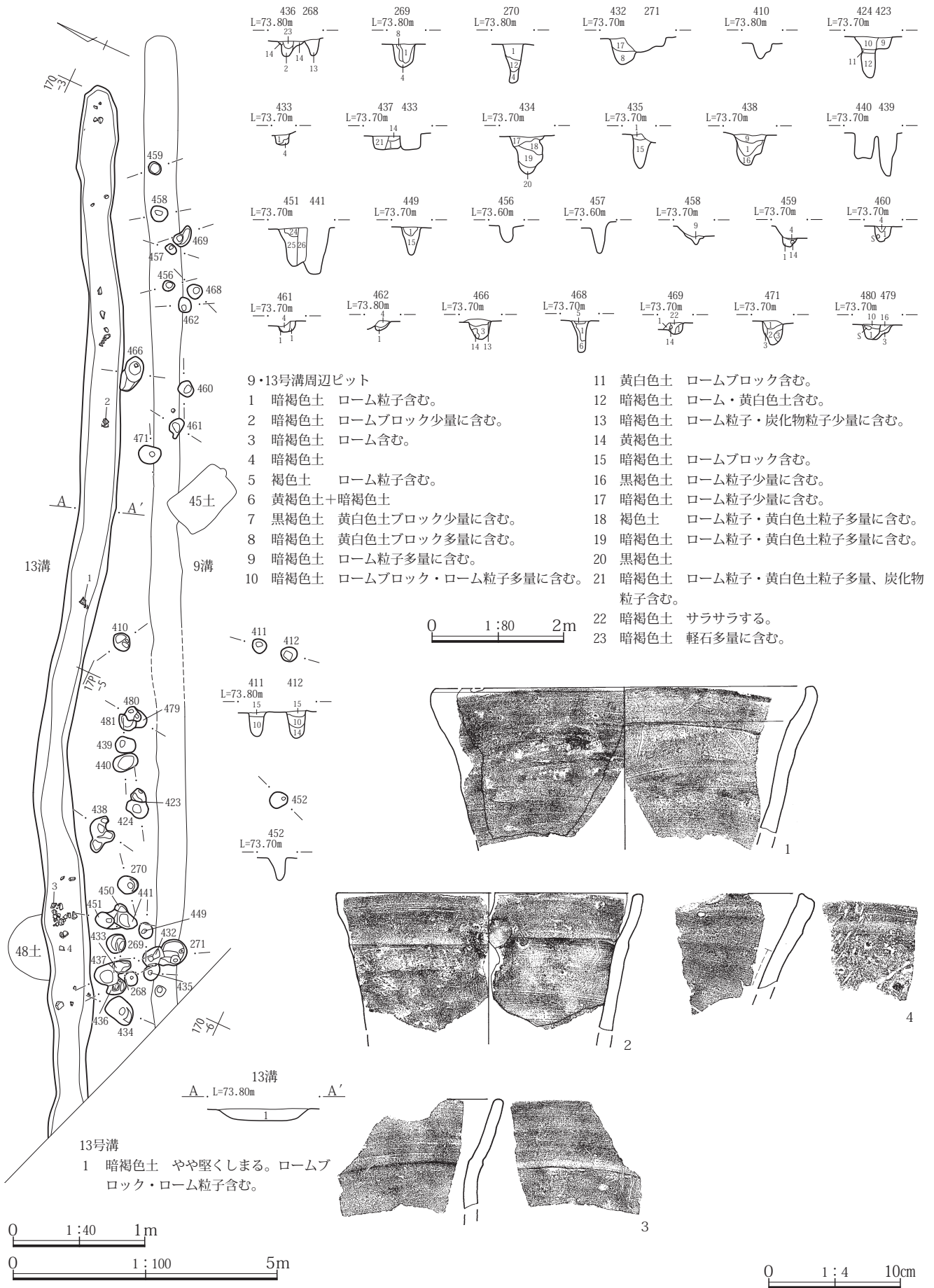


第232図 2区10・12号溝出土遺物

第136表 2区13号溝周辺ピット群計測表(cm)

ピットNo.	グリッド	長径	短径	深さ
268	17O-5	27	24	22
269	17O-5	36	31	66
270	17O-5	39	33	68
271	17O-5	61	47	38
410	17O-4	37	31	25
411	17O-4	29	24	34
412	17O-4	31	28	42
423	17O-5	(24)	20	44
424	17O-5	42	28	60
432	17O-5	33	31	38
433	17O-5	(38)	(24)	20
434	17O-6	55	40	61
435	17O-5	35	26	54
436	17O-6	40	(20)	17
437	17O-5	46	40	32
438	17O-5	72	47	47
439	17O-5	38	30	61
440	17O-5	48	29	39
441	17O-5	(44)	31	70

ピットNo.	グリッド	長径	短径	深さ
449	17O-5	30	27	41
450	17O-5	26	(19)	28
451	17O-5	(36)	30	61
452	17O-5	35	25	34
456	17P-3	23	19	19
457	17P-3	21	15	40
458	17P-3	31	29	15
459	17P-3	26	22	15
460	17P-3	30	26	27
461	17P-4	37	24	21
462	17P-3	29	23	19
466	17P-3	69	34	27
468	17P-3	27	27	47
469	17P-3	41	27	26
471	17P-4	42	32	51
479	17O-5	(34)	(30)	28
480	17O-5	31	24	35
481	17O-5	37	(20)	15



第233図 2区13号溝・周辺ピット群と13号溝出土遺物

第137表 2区13号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第233図 PL.151	1	在地系 土器	内耳鍋	+3cm	(28.5)	-	-	1/5	B	黒・浅 黄・灰 オリ ーブ	断面中央から外面寄りには浅黄色、内面器表付近から内面器表は灰オリーブ色、外面器表は黒から黒褐色。外面は部分的に煤付着。口縁部は短く内湾気味。口縁端部付近は内湾し、端部は尖る。内面口縁下は明瞭な稜をなす。	I期。
第233図	2	在地系 土器	内耳鍋	+3cm	(23.0)	-	-	1/4	B	灰	還元炎。器壁はやや厚く、口縁部は体部に比して薄い。口縁部の外反は緩い。内面口縁部下の段差は鈍く稜をなさない。内面に内耳貼り付け部の窪みが残る。	II期。
第233図	3	在地系 土器	内耳鍋	+12cm	-	-	-	口縁部 片	B	灰黄・ 浅黄・ 灰オリ ーブ	器壁はやや厚いが、口縁部下で外反して長く延びる。口縁部は内湾気味。内面口縁部下段は緩いが、下部の稜は明瞭。	III期。
第233図	4	在地系 土器	片口鉢	+17cm	-	-	-	口縁部 片	B	黒	断面はにぶい黄色、器表は黒色。最終段階を除き酸化炎であるが、在地製品にしては焼き締まる。口縁部は実測図より開き、端部上面が尖り気味。口縁端部外面は幅広くやや窪む。残存部内面下端の器表は使用により摩滅。	中世。

## 第2項 近世

近世の土坑は3基で散在するが、16号土坑に近接して、429号ピットが検出されている。溝は2条で、14号溝は昭和期のは場整備以前まで低い溝状の水田の起源となった遺構である。出土遺物や状況から考えて、中世まで廻り屋敷群を規定していた可能性が高い。

### 1 土坑

土坑3基は、調査区の西端、西寄り、東寄りに位置しており、関連性は薄い。2号土坑は中世の1号屋敷内に位置するが、主軸方位が周辺の建物や土坑と全く合わず、形態や埋没土からここで扱う。15号土坑は近接する1区の近世土坑群との関連も想定される。44号土坑は桶を埋設した土坑とみられる。中世以降の遺物は出土していない。

#### 2号土坑(第234図、P L.72)

**位置** 17S-13グリッド。1号掘立柱建物P2と重複するが新旧関係不明。平面形は整った細長方形。主軸方位はN-6°-E。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸248cm短軸75cm深さ54cmである。形態から近世以降と考えられる。遺物は灰釉陶器1片が出土している。

#### 15号土坑(第234図、P L.73)

**位置** 18A・B-16グリッド。16号土坑より後出か。平面形はほぼ隅丸方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや凸凹する。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸(122)cm短軸110cm深さ37cmである。遺物は近世国産陶磁器3片が出土している。出土遺物から近世に比定

される。

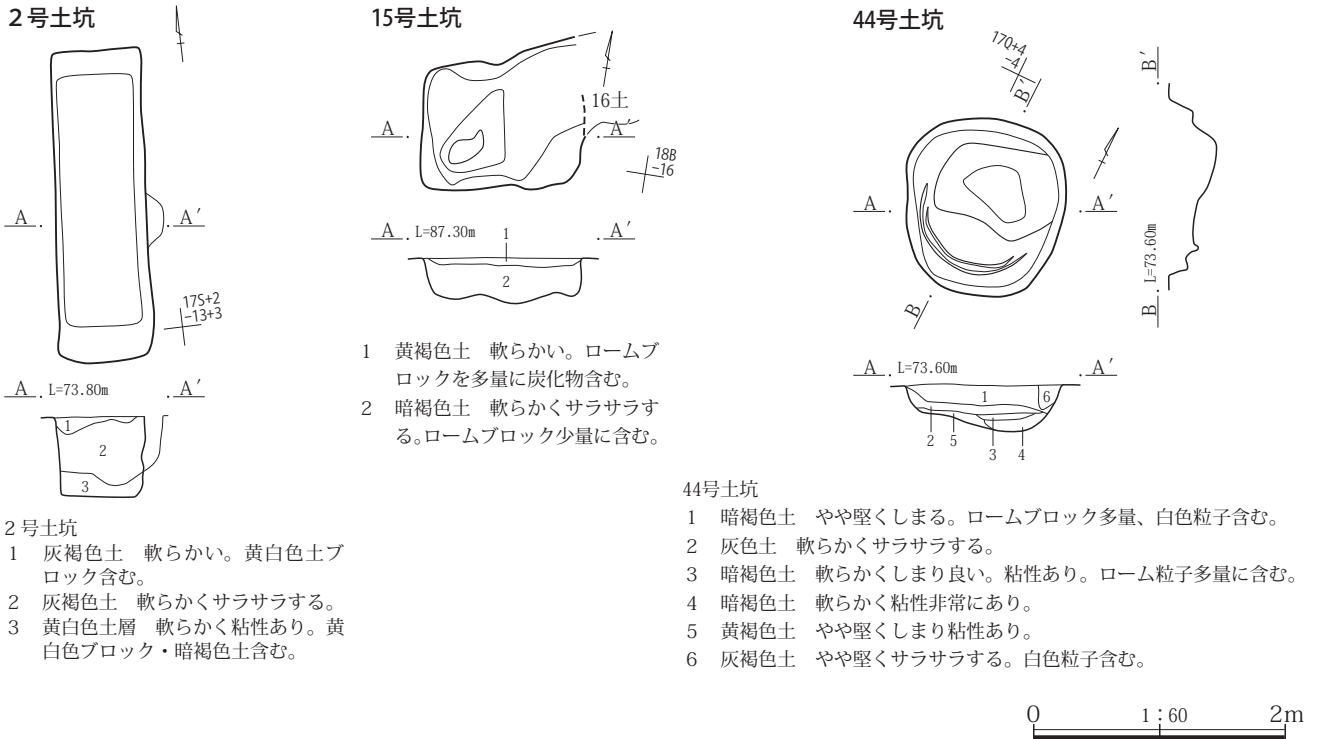
#### 44号土坑(第234図、P L.76)

**位置** 17Q-3・4グリッド。平面形は隅丸方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面に径95cm幅6~9cm深さ5cmの細い溝が半円形にめぐる。埋没土底面に黄褐色土が貼られており、桶を埋設した土坑とみられる。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸141cm短軸126cm深さ36cmである。形態から近世以降の所産と考えられる。中世で扱ったピット群(17Q-3・4・5)及び15・17号溝と近接しており、一連の遺構とも考えられる。中世以降の遺物は出土していない。

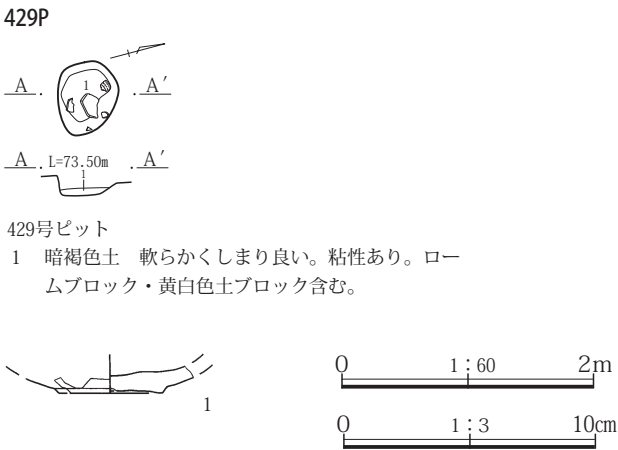
## 2 ピット

#### 429号ピット (第235図、第138表)

**位置** 18B-16グリッド。比定年代から7号溝より後出か。埋没状況不詳。埋没土から1の美濃陶器皿が出土し、17世紀前半に比定される。規模は長径60cm短径47cm深さ21cmである。



第234図 2区2・15・44号土坑



第235図 2区429号ピットと出土遺物

第138表 2区429号ピット出土遺物

挿 図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備 考
第235図	1	美濃陶器	皿		-	(4.0)	-	1/8		淡黄	高台は低く、脇を小さく挟り込む。内外面に長石釉。	登窯1・2小志野。

### 3 溝

14号溝部分は、昭和期のほ場整備以前まで低い溝状の水田となっていた。14号溝はこの低地の起源となる。9号溝は、この溝または低地を意識して直交方向に営まれている。

9号溝(第236図、P L .82、第139表)

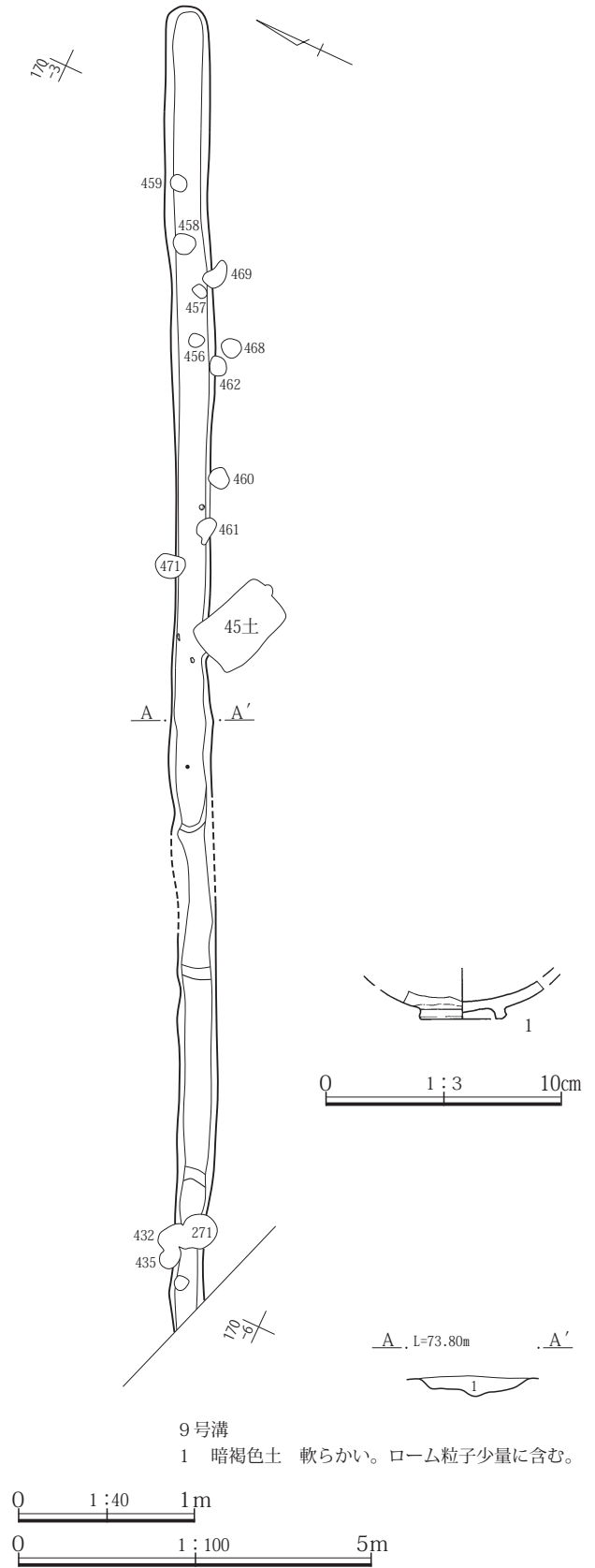
位置 170・P-2~6グリッド。 45号土坑、ピット13基と重複するが新旧関係不明。平面形は直線状。走向

方位はN-65°-E。断面形は皿状。底面は丸みを持つ。両端の比高差は2cmで、勾配はほとんどない。自然埋没と思われる。埋没土から1の美濃陶器碗が出土する。規模は長さ18.80m上端幅43~64cm最大深20cmである。出土遺物から1800年前後に比定される。

14号溝(第237・238図、P L .83・151、第140表)

位置 7N~R-20、17M~S-1・2グリッド。 南北両端とも調査区外に延びる。綿貫牛道遺跡2区20号溝

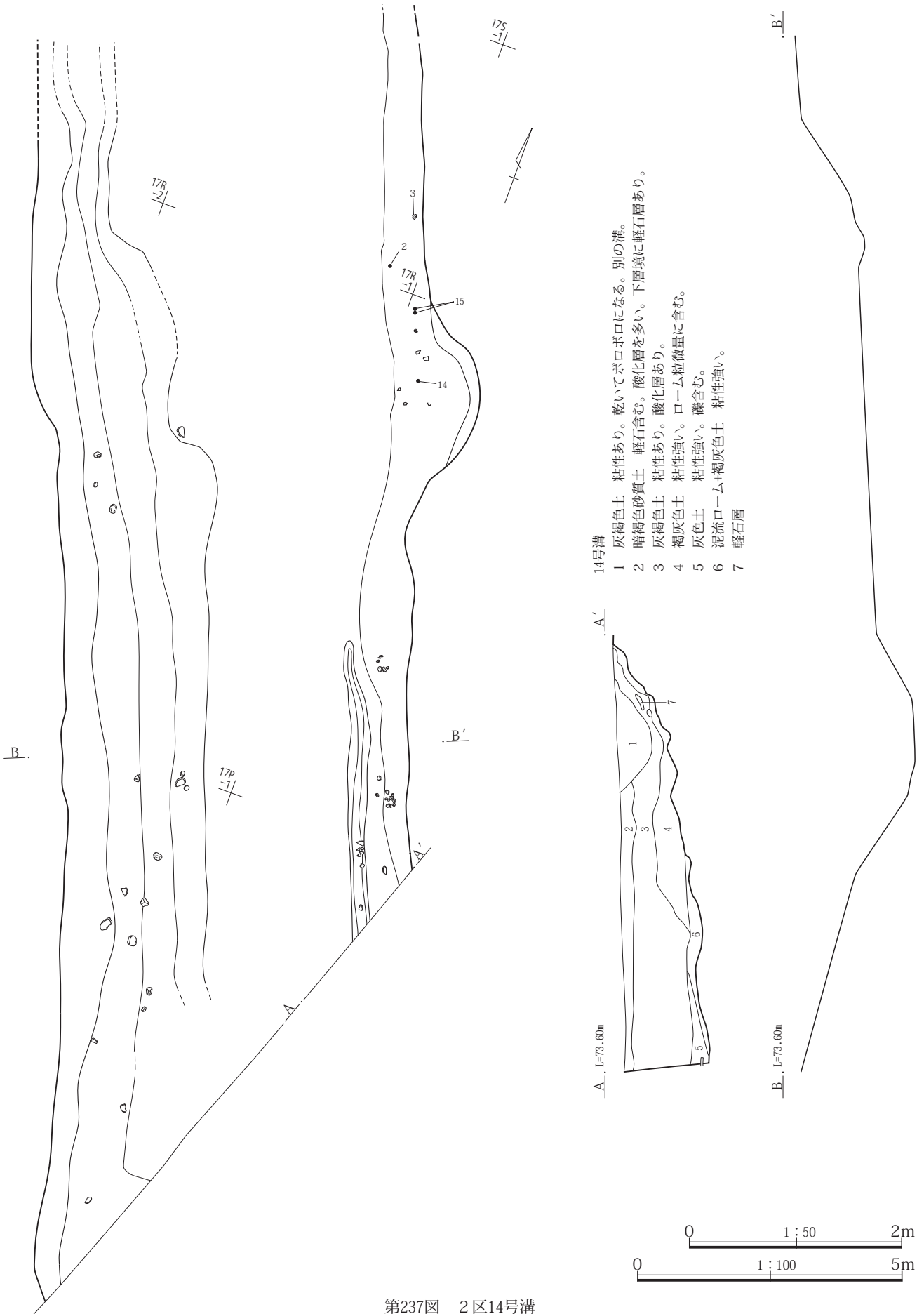
及び21～23号溝と同一とみられるが、後者に対応する溝は不分明である。平面形は直線状。走向方位はN-21°-W。底面西端に大規模な溝があり、断面形はU字形で、西壁は緩やかに立ち上がる。東側は一旦立ち上がり、平坦となる。東壁は斜めに立ち上がる。東端埋没土1は別の溝となるが、平面上は確認できない。立ち上がり付近で多量の円礫が出土し、後出する溝を思わせるが、一部下方へ落ち込み明確ではない。両端の比高差は13cmで、勾配はほとんどない。自然埋没と思われる。東端の円礫に混じって、美濃陶器尾呂茶碗(238図2)、瀬戸陶器丸碗(238図3)が出土し、近世遺物に関しては埋没土も含めてこの周辺と推定される。遺物の年代は17世紀後半から近現代に及ぶ。また、埋没土から大片を含む在地系土器鍋鉢類がやや多く出土しており、状況から東端以外の出土と考えられる。遺物の年代は13世紀中頃から15世紀中頃に及ぶ。掲載遺物のほか、中世在地系土器18片、近世国産陶磁器4片・在地系土器1片、近現代その他土器類12片が出土している。規模は長さ24.80m上端幅640～816最大深93cmである。綿貫牛道遺跡2区20号溝では底面で道路面が想定される礫層が確認されたが、ここでは未確認となる。しかし、写真から底面に灰褐色土が広く覆っている部分が見られるため、道路面は続いていたものと考えられる。平面的には分かれていないが、東端部分は17世紀後半から近現代に比定され、西側壁際の深い溝などを含めた主体部分は、15世紀中頃を下限とする可能性が高い。規模から考えても、何らかの区画溝であったとみられる。



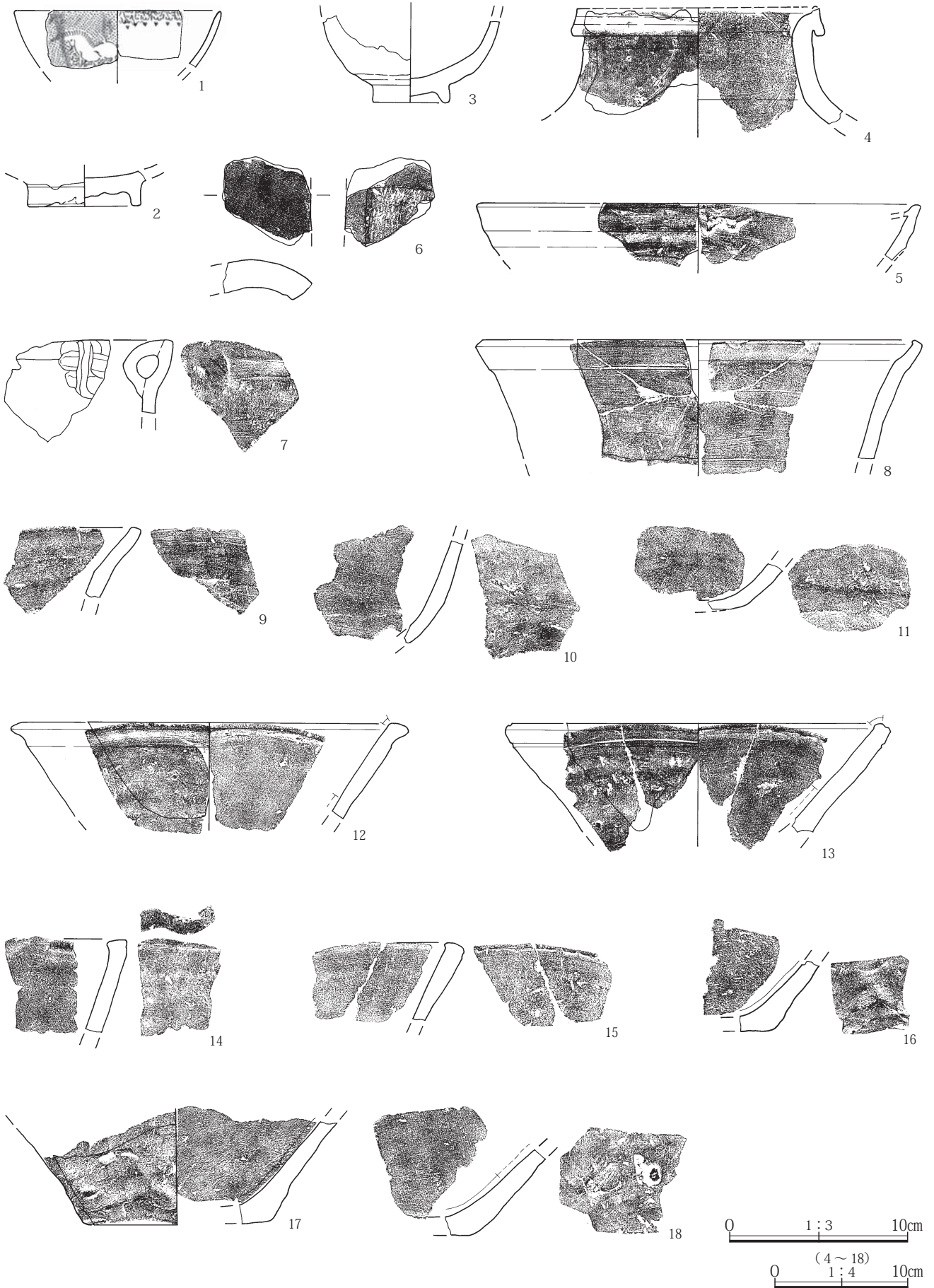
第236図 2区9号溝と出土遺物

第139表 2区9号溝出土遺物

挿 図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備 考
第236図	1	美濃陶器	碗		-	3.6	-	1/2		灰白	内面から高台脇に灰釉。内面は部分的に貫入が入る。	登窯8・9小期。



第237図 2区14号溝



第238図 2区14号溝出土遺物

第140表 2区14号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第238図	1	製作地 不詳磁器	碗		(11.4)	-	-	1/6		灰白	外面は型紙摺りで馬を描く。口縁部内面は型紙摺りで環状文を描く。	近現代。
第238図	2	美濃陶器	尾呂碗	+21cm	-	6.3	-	底部		灰白	内面に飴釉、薬灰釉が斑状にかかる。高台端部を除く外面は鉄化粧状に薄く施釉。高台径は大きい。	登窯第5小期。
第238図	3	瀬戸陶器	丸碗	+26cm	-	4.2	-	体～底部片		灰白	高台径はやや小さく、高台は高い。高台内は兜巾状に突き出る。内面から高台脇に粗い貫入の入る灰釉。	登窯第4小期。
第238図 PL.151	4	常滑陶器	甗		(18.0)	-	-	1/4		暗褐・黒褐	断面は灰色、内面器表は暗褐色、外面器表の無釉部分は黒褐色。頸部は細く長い。口縁部は「N」字状。外面に自然釉かかる。	13世紀中頃から後半。
第238図	5	在地系土器	焙烙		(32.8)	-	-	1/10	B	浅黄・灰白	断面はにぶい橙色、内面器表は灰白色、外面器表は浅黄色。器壁はやや厚く、扁平な内耳を貼り付ける。	江戸時代。
第238図	6	丸瓦	丸瓦		-	-	2.1	破片		暗灰	断面は灰白色。器表は暗灰色。燻し瓦。	江戸から近現代。
第238図	7	在地系土器	内耳鍋		-	-	-	口縁部片	B	灰	還元炎。口縁部は非常に短く内湾。内耳は口縁部から体部にかけて貼り付け。内耳貼り付け部外面には粘土を貼り付けたような痕跡があり、器壁に粘土紐を通して貼り付けた可能性が高い。	I期。
第238図	8	在地系土器	内耳鍋		(32.0)	-	-	1/8	B	黒	断面はにぶい橙色、器表は黒色。焼成最終段階は燻し。体部から口縁部は外方に湾曲。口縁部は短く、器壁を減じて内湾気味とする。口縁端部内面は稜をなして突出。	I期。
第238図	9	在地系土器	内耳鍋		-	-	-	口縁部片	B	灰・灰白	断面と内面器表は灰白色、外面器表は灰色。体部器壁は厚く、口縁部器壁はやや薄い。口縁部は緩く外反。内面口縁部下はにぶい稜をなして屈曲。	II・III期。
第238図	10	在地系土器	内耳鍋		-	-	-	体下位片	B	灰・灰白	還元炎。破断面と外面下位の器表は灰白色。内外面器表は灰色。器壁厚く、下位は内湾。湾曲部外面は窺撫で。	中世。
第238図	11	在地系土器	内耳鍋		-	-	-	底部片	B	灰	還元炎。丸底。底部外面は砂底。底部外面周縁は窺撫で。	中世。
第238図 PL.151	12	在地系土器	片口鉢		(28.0)	-	-	1/7	A	灰	還元炎。外面の横撫で範囲は突出部先端から約1.5cmまでと狭い。内面の横撫は約3cm。口縁端部外面は外反するように大きく突き出る。端部内面は低く丸みを持って突き出る。内面突出部の器表は摩滅。残存部内面下端は使用により平滑。	IV・V期か。16と同一個体か。
第238図	13	在地系土器	片口鉢		(27.5)	-	-	1/6	B	灰・灰白	断面は灰白色、器表も部分的に灰白色。器壁はやや厚い。口縁部外面は1条の浅く狭い凹線状の窪みが廻る。口縁端部上面は1条の浅い凹線廻る。口縁端部内面は断面三角形状に突き出るが、上面の摩滅が著しい。残存部内面下端の器表は使用により平滑。	III期。
第238図	14	在地系土器	片口鉢	+14cm	-	-	-	口縁部片	B	暗灰・灰オリーブ・灰	還元炎でやや硬質な焼き上がり。やや外反し、口縁端部内面は丸みを帯びて突き出る。端部上面は丸みを帯びる。片口部片。	III期。232図9と同一個体の可能性高い。
第238図	15	在地系土器	片口鉢	+11cm	-	-	-	片口部片	B	灰	断面は灰褐色、器表は褐灰色から灰色。口縁部は肥厚し、端部内面は尖り気味に突き出る。口縁端部外面直下は浅い凹線状に窪む。	III・IV期。
第238図	16	在地系土器	片口鉢		-	-	-	体下位～底	A	灰	全体に器壁はやや薄い。底部板作りで糸切り痕は認められない。内面は使用により器表摩滅。	中世。12と同一個体か。
第238図	17	在地系土器	片口鉢		-	(14.0)	-	1/3	B	灰	還元炎。体部器壁はやや薄い。残存部内面にすり目はない。底部は板作りで糸切り痕は認められない。体部下位内面以下は使用により器表摩滅。中位内面は平滑。	中世。
第238図	18	在地系土器	片口鉢		-	-	-	体下位片	B	灰	体部下位器壁は厚いが、中位はやや薄い。内面体部下位は使用により器表摩滅し、他は平滑となる。底部外面周縁は器表摩滅。底部は板作りか。残存部に糸切り痕は認められない。	中世。

第3項 遺構外出土遺物(第239図、P L.151、第141表)

縄文時代に関しては、土器は出土しておらず、出土した石器5点すべてを掲載する。

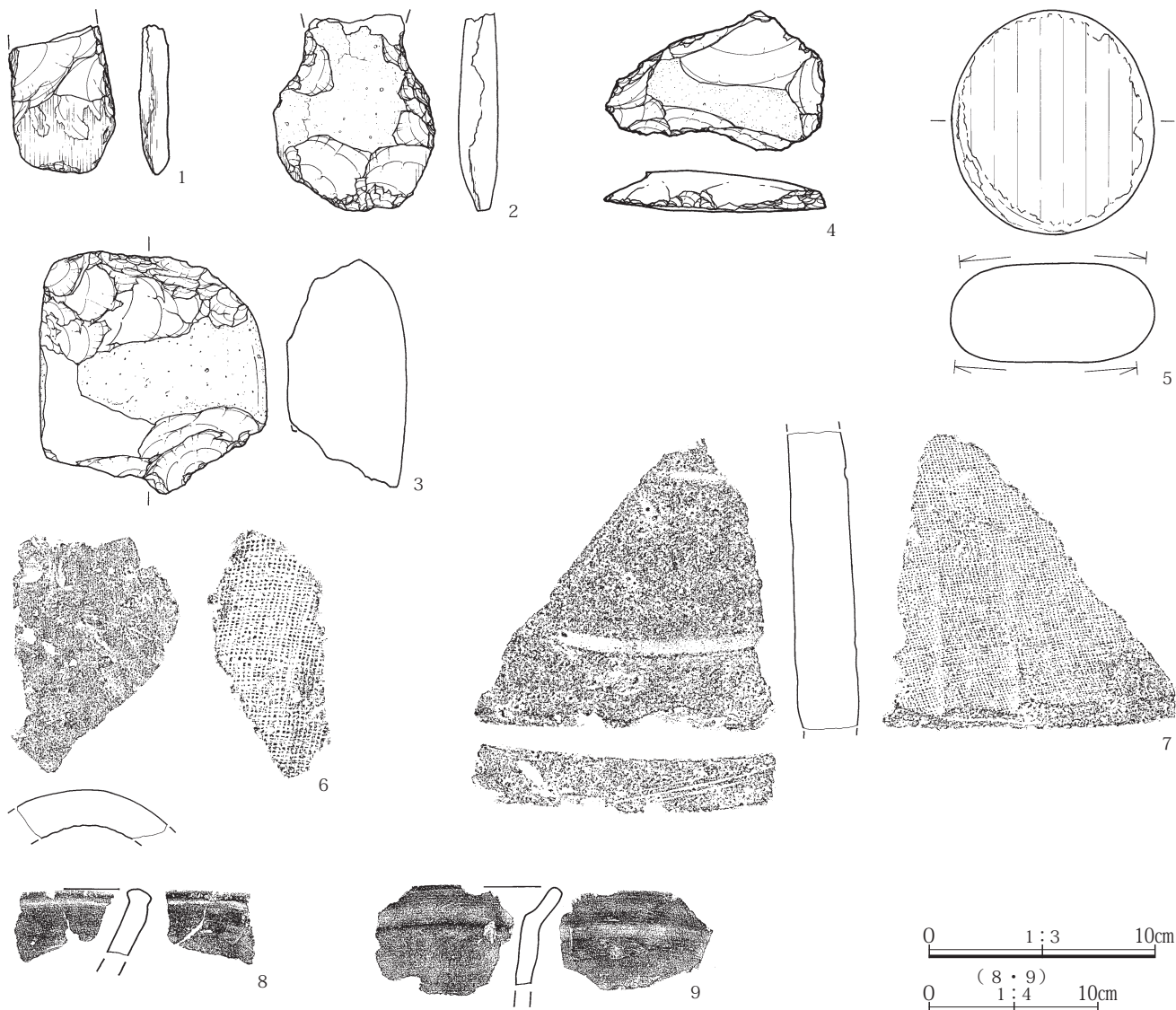
2区では古代の遺構はなく、古代瓦2点は3号井戸に混入したものである。

中世遺物のうち、9の在地系土器鍋は初期段階のものであり、1号屋敷の年代に対応する遺物である。

掲載遺物のほかに、中世中国陶磁器2片・国産陶器1片・在地系土器8片、近世国産陶磁器25片、近現代その他土器類32片が出土している。



第4章 発掘調査の記録



第239図 2区遺構外出土遺物

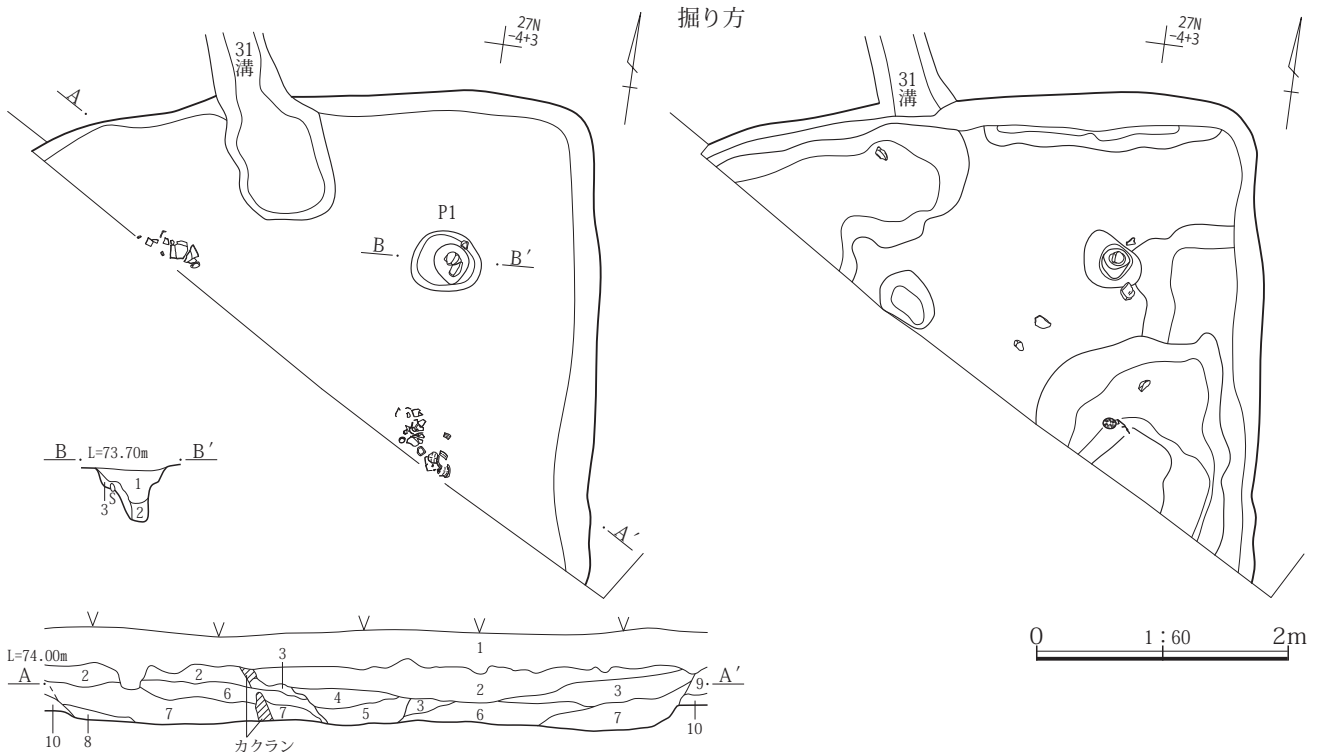
第141表 2区遺構外出土遺物

挿 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況	備考		
第239図 PL.151	1	打製石斧	93ピット	短冊型	細粒輝石安山岩	(6.5)	4.5	47.4	完成状態。刃部摩耗が著しい。上半部を欠損。			
第239図 PL.151	2	打製石斧	6溝	分銅型	デイサイト	(8.6)	7.1	133.4	完成状態。刃部摩耗後に刃部を再生。器面がヒビ割れており、これに連動して上半部も欠損。被熱?			
第239図 PL.151	3	石核	6溝	河床礫	硬質泥岩	10.7	9.9	828.9	上下両端で幅広剥片を剥離。			
第239図 PL.151	4	加工痕ある剥片	3井	幅広剥片	黒色頁岩	6.1	9.6	102.5	剥片端部を凹刃状に粗く加工、厚い刃部を作出。			
第239図 PL.151	5	磨石	14溝	偏平楕円礫	粗粒輝石安山岩	9.8	8.8	609.4	表裏面とも摩耗。側縁の打痕等は見られない。			
挿 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴				摘要		
第239図 PL.151	6	瓦丸瓦	3井戸 一部片		細砂粒/還元焰/灰	表面はヘラナデ、裏面に布目痕が残る。						
第239図 PL.151	7	瓦平瓦	3井戸 一部片		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	表面は布目痕が残る。裏面と側面はヘラナデ。裏面と側面に降灰が付着。						
挿 PL.No.	No.	種別	器形	出土位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第239図	8	在地系土器	片口鉢	表土	-	-	-	口縁部片	B	オリブ黒・褐灰	断面は褐色、内面器表は褐灰色、外面器表はオリブ黒色。口縁端部外面直下は強い横撫でにより浅い凹線状に窪む。端部内面は断面三角形に突き出る。内面突出部先端は部分的に摩滅。断面実測部位の口縁部外面は膨らむが、他の部位は膨らまない。	Ⅲ期。
第239図	9	在地系土器	内耳鍋	表土	-	-	-	口縁部片	B	灰	断面はにぶい黄色、器表付近は灰白色、器表は灰色。口縁部は屈曲して外反。屈曲部内面は明瞭な稜をなし、幅広の段をなす。	I期。

## 第4節 3区の遺構と遺物

### 第1項 古墳時代

3区からは5軒の住居が検出されている。区の中央から西側にかけての検出であった。1～3号住居は古墳時代前期4世紀代の住居で、4・5号住居は9世紀後半の住居になる。この2軒の住居は1区検出の住居と同一集落を構成するものであろう。



- P1
- |   |  |
|---|--|
| 1 暗褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。ロームブロック、ローム粒子、炭化物を含む。 | 2 暗褐色土 軟らかくしまり良い。軽石を含む。                        |
| 2 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ローム粒子を含む。1層よりも暗い色調。         | 3 暗褐色土 軟らかくしまり良い。ローム粒子を少量含む。                   |
| 3 黄褐色土 軟らかく粘性あり。ローム主体の層。                    | 4 暗褐色土 軟らかくサラサラしてる。(31号溝フク土)                   |
|   | 5 暗褐色土 軟らかくしまり良い。サラサラする。(31号溝フク土)              |
|   | 6 黒褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。ローム粒子、白色粒子を少量、土器片を多量に含む。 |
|   | 7 暗褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。ローム粒子、白色粒子を含む。           |
|   | 8 暗褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。ロームブロックを含む。              |
|   | 9 暗褐色土 やや硬くしまり粘性あり。白色粒子、ローム粒子を少量含む。            |
|   | 10 茶褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。                        |

第240図 3区1号住居

#### 1 竪穴住居

1号住居(第240～245図、P L.85・88・152～154、第142表)

**位置** 27M-4・5グリッド、2号住居の北西約15mの所に位置している。31号溝によって北壁と床面の一部が壊されている。

**形状** 住居の約2/3は調査区外に延びているが、方形を呈するものと思われる。**主軸方位** N-3°-W。

**規模** 現状での面積は8.32㎡、長辺(東西)は4.35m、短辺(南北)3.7m、残存壁高は2cm～35cmを測る。

**床面** 一部壊されているがほぼ平坦である。

**炉** 調査範囲からは検出されていない。

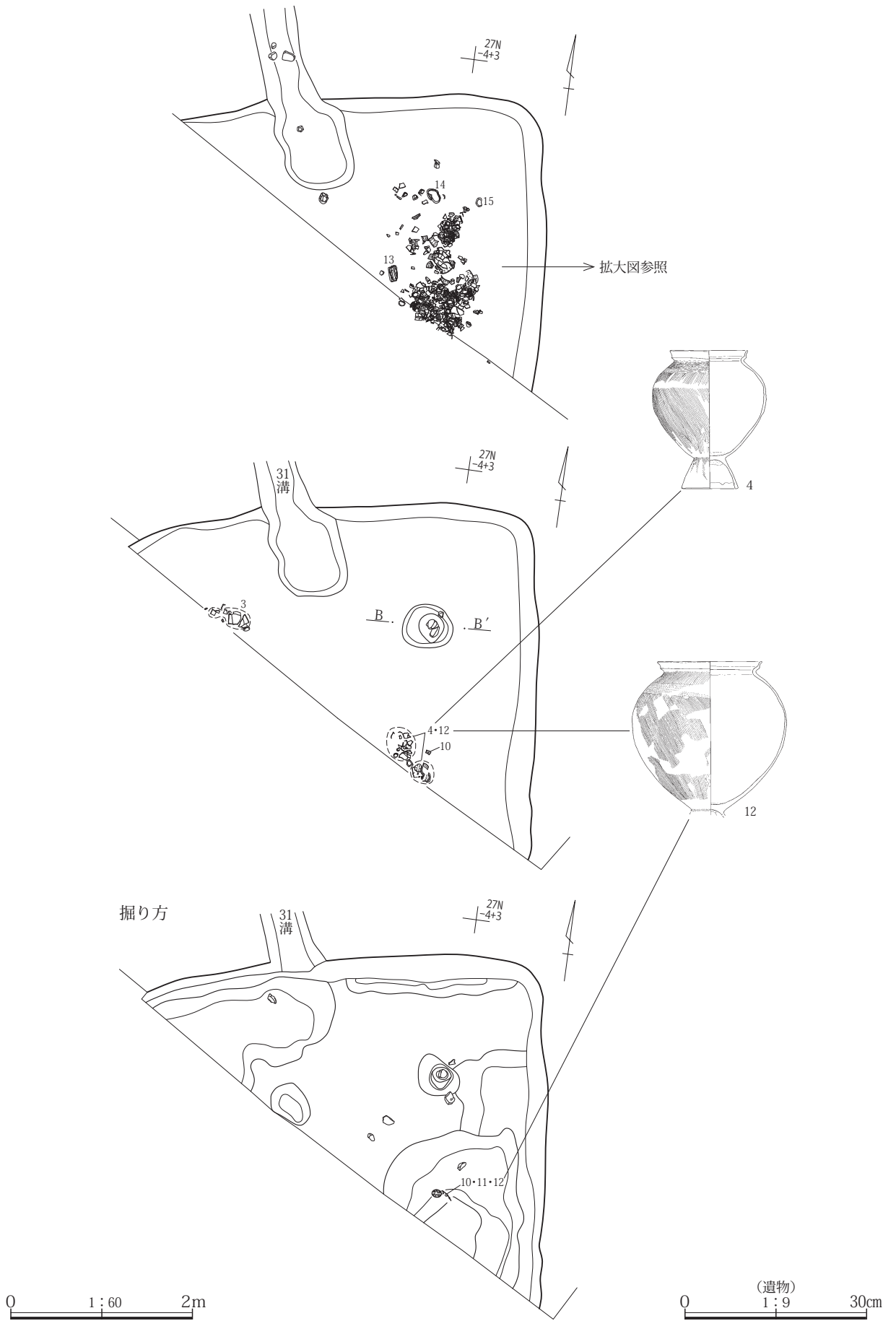
**貯蔵穴** 調査範囲からは検出されていない。

**柱穴** 1基検出された。長径55cm・短径47cm・深さ40cmである。

**周溝** 明瞭な周溝は検出されなかったが、掘り方調査時に北壁下で検出された細長い溝が周溝になる可能性が考えられる。幅14cm～18cm、掘り方面からの深さ2cm～5cmを測る。

**埋没土** 自然埋没土と考えられる。3・6～8層が住居の覆土である。4・5層は1区から延びている31(1区85)号溝の覆土になる。

**掘り方** 住居の東壁下と北壁下部分で床面の掘り込みが認められる。浅いところで4cm、深いところで14cm程である。

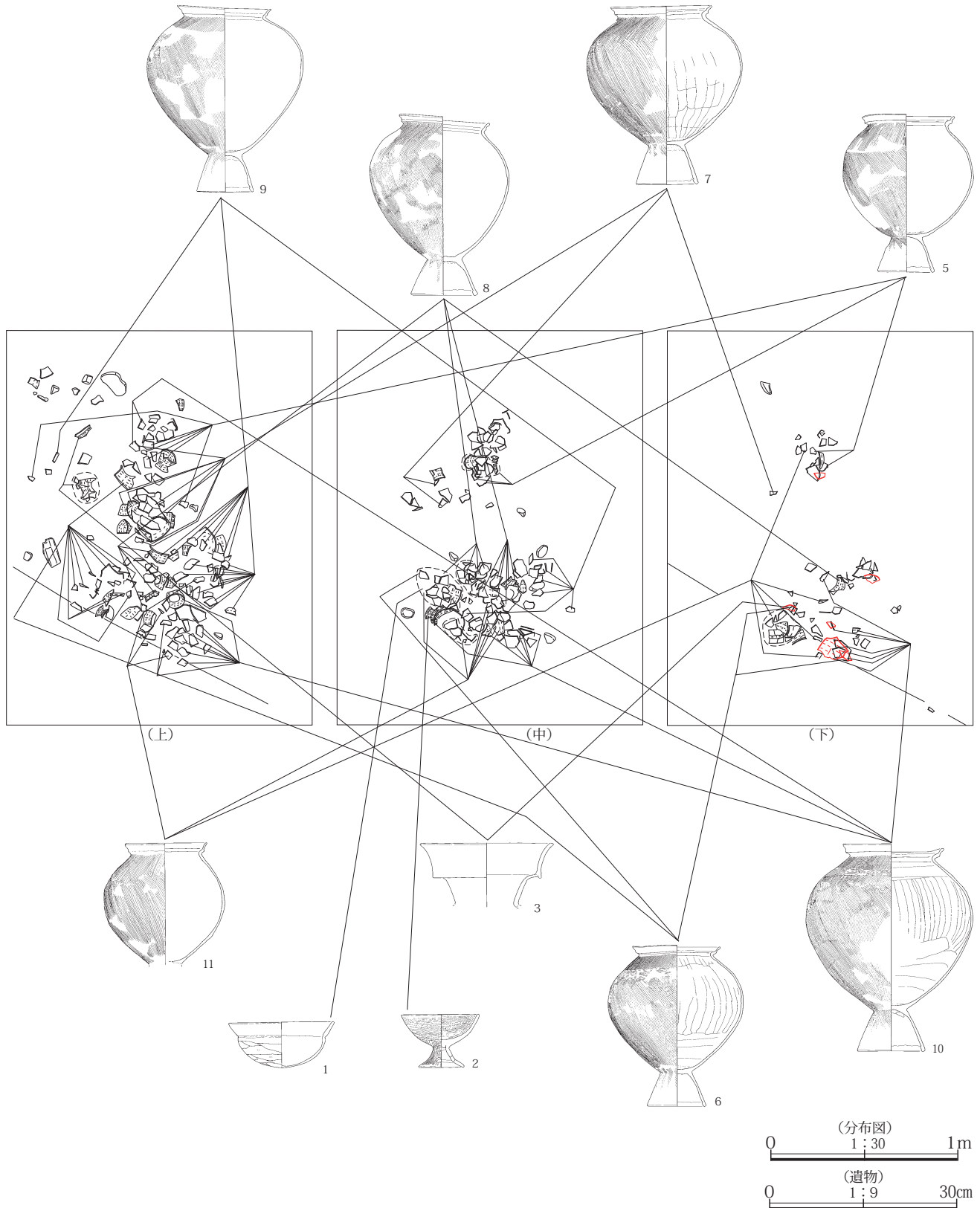


第241図 3区1号住居遺物分布図

遺物 東壁寄りの覆土下層から床面直上にかけて4世紀代の土師器が多量に、しかも密集的に出土している。とりわけS字状口縁台付甕が多かった。そして第243図1の鉢はほぼ完形、2の高杯は完形の出土である。3の壺

を除いた4～11のS字状口縁台付甕は一部欠損あるものの遺存状況は良かった。また砥石1点、敲石2点が出土している。

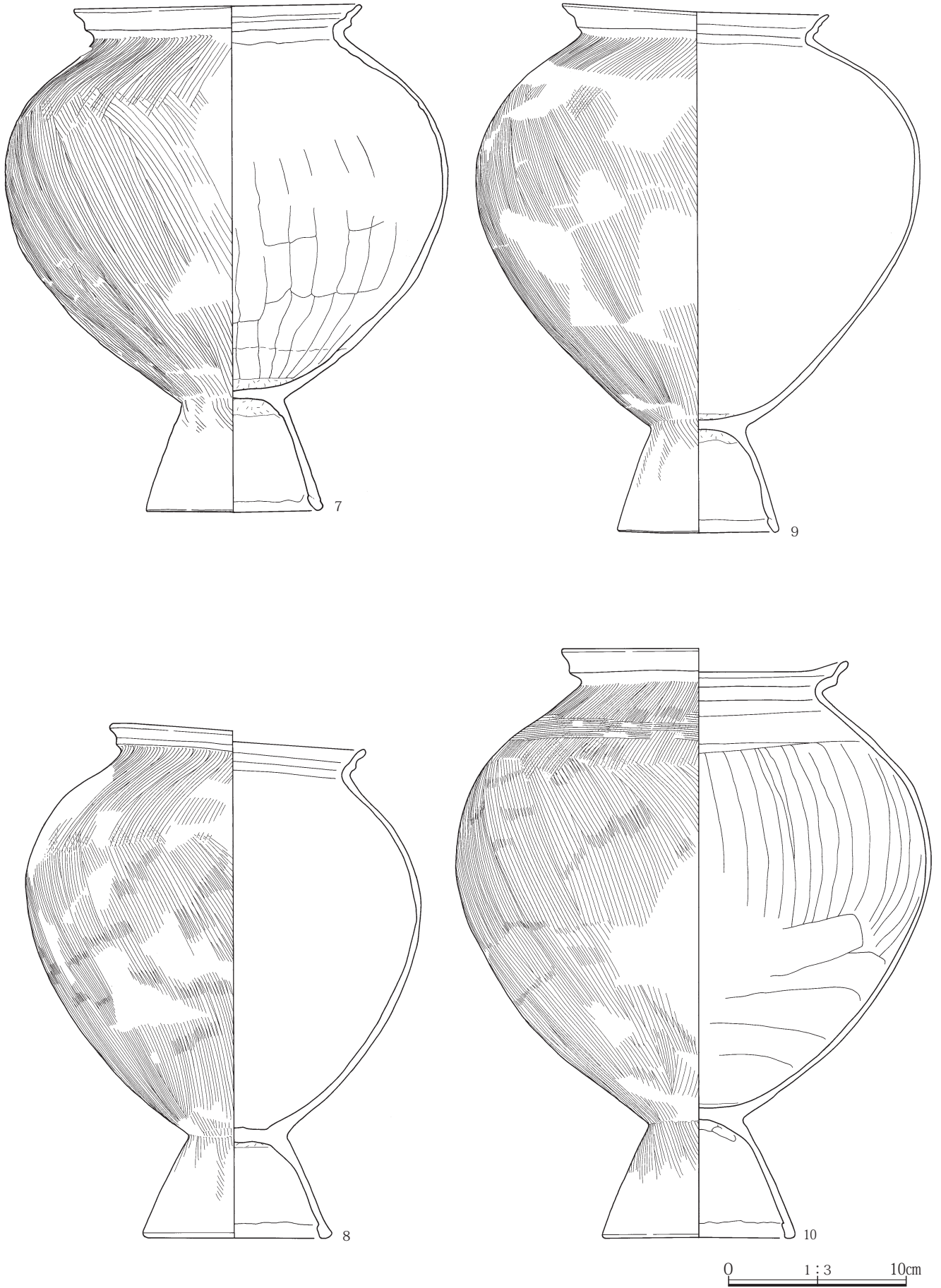
時期 出土遺物から古墳時代前期4世紀代に比定される。



第242図 3区1号住居遺物分布拡大図

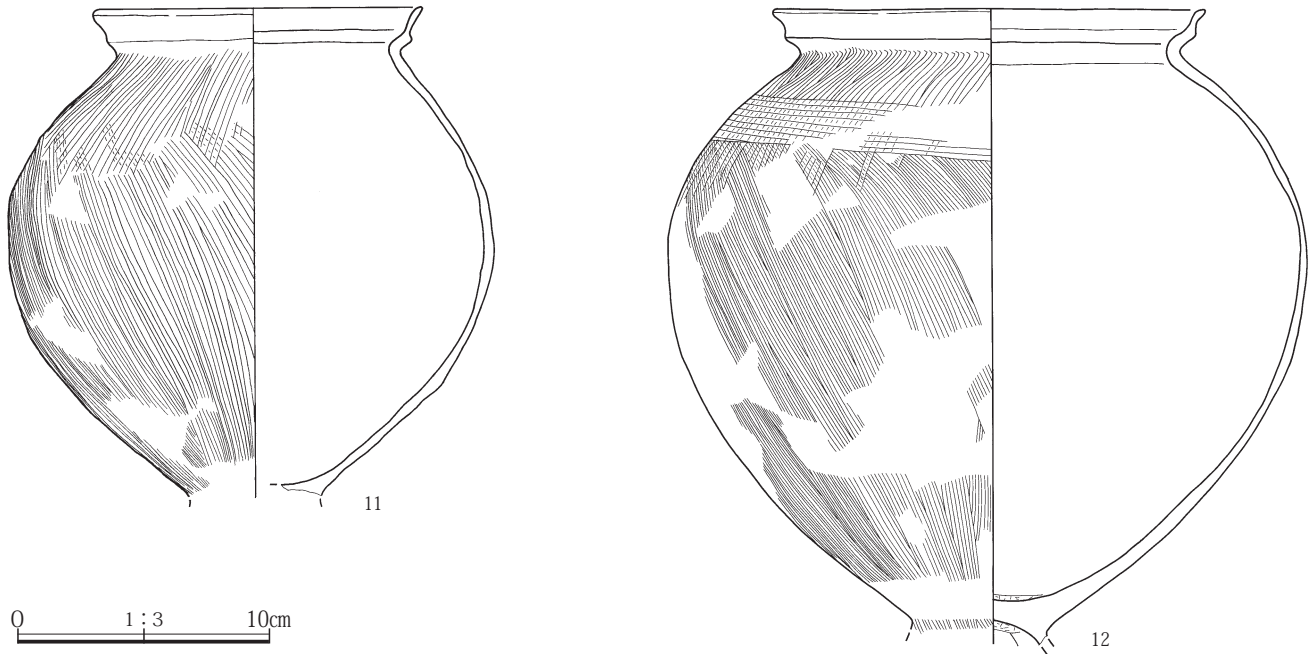


第243図 3区1号住居出土遺物(1)



第244図 3区1号住居出土遺物(2)

第4章 発掘調査の記録



第245図 3区1号住居出土遺物(3)

第142表 3区1号住居出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要		
第243図 PL.152	1	土師器 鉢	-0.2~+2.4cm ほぼ完形	口 16.4 高 7.2	細砂粒・角閃石/ 良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。			
第243図 PL.152	2	土師器 高杯	+1.3cm 完形	口 12.1 高 8.2 脚 7.2	細砂粒/良好/にぶ い赤褐	杯肩部は差し込みで脚部と接合。口縁部から脚部は横ナデ、内面は杯肩部がへら磨き、脚部は上半がへらナデ、下半は横ナデ。	脚部に透孔が3カ所。		
第243図 PL.152	3	土師器 壺	+0.8~+8.9cm 口縁部~頸部	口 20.2	細砂粒/良好・燻/ 褐灰	口縁部から頸部は内外面とも横ナデ。			
第243図 PL.152	4	土師器 台付甕	+0.2, +0.7cm 2/3	口 12.5 高 22.7 脚 9.2 胴 18.5	細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり6本)後上位に横位のハケ目、脚部は一部ハケ目。内面は胴部、脚部がナデ。脚部端部は折り返し。	内外面の底部に砂粒を多量に含め粘土が貼付されている。		
第243図 PL.152	5	土師器 台付甕	+1.7~+8.6cm 3/4	口 14.3 高 24.9 脚 8.4 胴 20.4	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cm当たり6本)、脚部は一部ハケ目。内面は胴部上半がナデ、下半はへらナデ、脚部がナデ、脚部端部は折り返し。			
第243図 PL.152	6	土師器 台付甕	+0.8~+9.8cm 口縁部・胴部一 部欠損	口 13.8 高 25.6 脚 8.9 胴 21.3	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cm当たり9本)後上位に横位のハケ目、脚部は一部ハケ目。内面は胴部、脚部がナデ、脚部端部は折り返し。	内外面の底部に砂粒を多量に含め粘土が貼付されている。		
第244図 PL.152	7	土師器 台付甕	-4.8~+8.2cm 口縁部・胴部一 部欠損	口 15.8 高 28.4 脚 9.6 胴 24.6	細砂粒・粗砂粒・ 角閃石/良好/浅黄 橙	口縁部横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり6本)、脚部は一部ハケ目。内面は胴部、脚部がナデ。脚部端部は折り返し。	内外面の底部に砂粒を多量に含め粘土が貼付されている。		
第244図 PL.153	8	土師器 台付甕	-8.2~+12.8cm 3/4	口 14.1 高 28.8 脚 10.0 胴 21.9	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	脚部・底部に胴部が接合。口縁部横ナデ、胴部から脚部上位は縦位のハケ目(1cmあたり6~7本)。内面は胴部と脚部がナデ、脚部端部は折り返し。	内外面の底部に砂粒を多量に含め粘土が貼付されている。		
第244図 PL.153	9	土師器 台付甕	+3.7~+14.6cm 3/4	口 14.9 高 29.6 脚 9.0 胴 24.7	細砂粒/良好/灰黄 褐	口縁部横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cm当たり6本)、脚部は上位の一部にハケ目。内面は胴部と脚部がナデ、脚部端部は折り返し。	内外面の底部に砂粒を多量に含め粘土が貼付されている。		
第244図 PL.153	10	土師器 台付甕	+1.0~+4.3cm 口縁部・胴部 1/4欠損	口 15.7 高 33.0 脚 10.5 胴 26.3	細砂粒・褐色粒/ 良好/にぶい黄褐	口縁部横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cm当たり6本)後上位に横位のハケ目、脚部は上半にハケ目。内面は胴部は上位と下半にへらナデ、その間はナデ、脚部がナデ、脚部端部は折り返し。	内外面の底部に砂粒を多量に含め粘土が貼付されている。		
第245図 PL.154	11	土師器 台付甕	+0.4~+4.3cm 口縁部~胴部 3/4	口 12.8 胴 19.0	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり5本)。内面胴部はナデ。			
第245図 PL.154	12	土師器 台付甕	+0.2~+6.3cm 口縁部~底部 1/3	口 16.8 胴 25.0 底 5.3	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cm当たり8本)後上位に横位のハケ目、脚部は一部ハケ目か。内面は胴部、脚部がナデ。	内外面の底部に砂粒を多量に含め粘土が貼付されている。		
挿図 PL.No.	No.	器種	形態・素材	石材	長	幅	重さ(g)	製作状況・使用状況	備考
-	13	砥石	礫砥石	粗粒輝石安山岩	17.4	8.7	959.0	背面側に斜位の刃ならし傷。	非実測
-	14	敲石	偏平礫	粗粒輝石安山岩	18.4	10.8	1528.9	小口部両端に著しい敲打痕。	非実測
-	15	敲石	楕円礫	粗粒輝石安山岩	9.8	8.3	615.5	礫周辺部に敲打痕が広がる。	非実測

2号住居(第246～250図、P L.86～88・154・155、第143表)

位置 17K～M-20、27K～M-1、27L・M-2グリッド、3号住居の西約4mの所に位置している。

形状 住居の南西隅が路線外に延びているものの方形を呈するものと思われる。主軸方位 N-20°-W。

規模 現状での床面積は33.81㎡、長辺(南北)6.55m、短辺(東西)6.4m、残存壁高は10cm～30cmである。

床面 ほぼ平坦である。北壁下を主体に東壁下と西壁下の一部に焼土の堆積が認められた。火災住居の可能性も考えられる。

炉 床面から明確な炉の痕跡を確認することはできなかった。

貯蔵穴(P4) 床面の北西隅に設置される。方形を呈し東に段を持って張り出している。長径104cm・短径97cm・深さ32cmであり、土器片が少量出土した。

柱穴 4基検出された。P1～P3、P5が該当する。P1は長径60cm・短径57cm・深さ40cm、P2は長径70cm・短径65cm・深さ39cm、P3は長径70cm・短径60cm・深さ50cm、P5は長径、短径ともに50cm・深さ20cmである。P1とP2の覆土上層から土器片や礫が出土している。P1-P2間の距離215cm、以下、P2-P3・220cm、P3-P5・220cm、P5-P1・250cmである。

周溝 床面調査時には周溝を検出できなかったが、掘り方調査時に全周はしないものの東壁、北壁、南壁下で検出することができた。幅10cm～20cm、深さ10cmほどある。

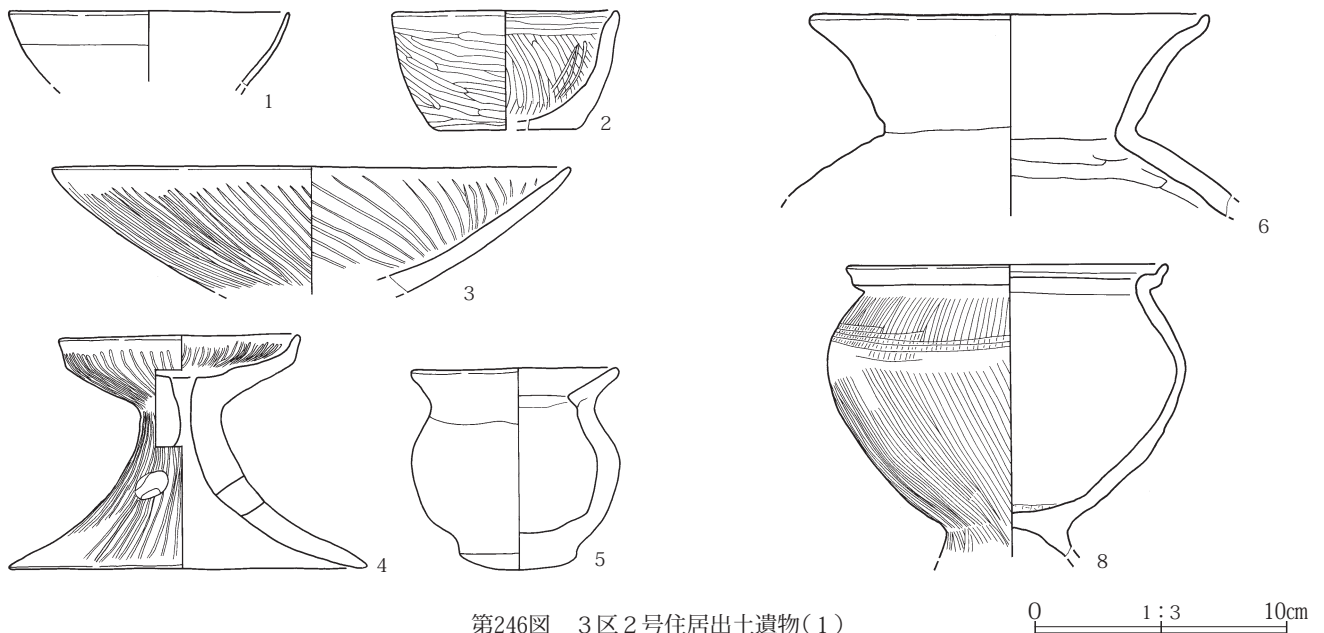
埋没土 自然埋没土と考えられる。5・6・8～10層は住居の覆土で11層は掘り方充填土である。

掘り方 柱穴に囲まれた内側の範囲と周溝が巡る範囲を比較的掘り残し、全周させている。深さは6cm～14cmである。

遺物 床面からほぼ満遍なく出土しているが、北壁と南壁寄り、柱穴に近接した位置に多く、中央部は少ない傾向が認められる。第246図1の須恵器は混入品である。P2やP3周辺からS字状口縁台付甕・高杯・小型壺が出土し、P1周辺からは椀や器台が出土している。いずれも床面直上から床上10cmほどである。また敲石5点、第250図16の磨石1点がP1内から出土した。

住居を囲む溝 住居の北西方向1.8m～5mのところから溝3条が検出された。当初は別遺構と考え、9号・13号・11号溝として調査を進めたが、覆土中から住居と同時期の土器片が出土したこと、また隣接する3号住居に周囲を巡る溝が明らかに伴うことから、当住居に伴う遺構と判断した。

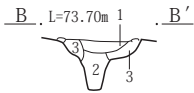
9号溝は南北6.44m、上幅92cm～210cm、下幅65cm～120cm、深さ48cmを測る。北から南に傾斜している。13号溝は東西4.1m、上幅63cm～159cm、下幅37cm～121cm、深さ13cmを測る。西に向かって傾斜している。東端部に焼土の堆積が認められた。また、北方向約4.5mから検出された11号溝からも同時期の土器片が出土している。いずれも覆土中からの出土で壺や甕、S字状口縁台付甕の口縁部を主体とするものであった。規模は南



第246図 3区2号住居出土遺物(1)

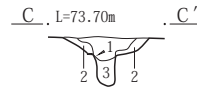


第4章 発掘調査の記録



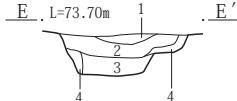
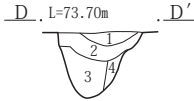
P1

- 1 暗褐色土 やや硬くしまる。白色粒子、ローム粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 軟らかく粘性あり。黄白色土ブロック含む。
- 3 暗褐色土 軟らかく粘性あり。明るい色調。



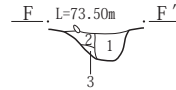
P2

- 1 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ローム粒子、ロームブロック少量含む。
- 2 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ロームブロック含む。
- 3 暗褐色土 非常に軟らかく粘性あり。黄白色土ブロック含む。



P3・P4

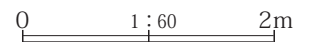
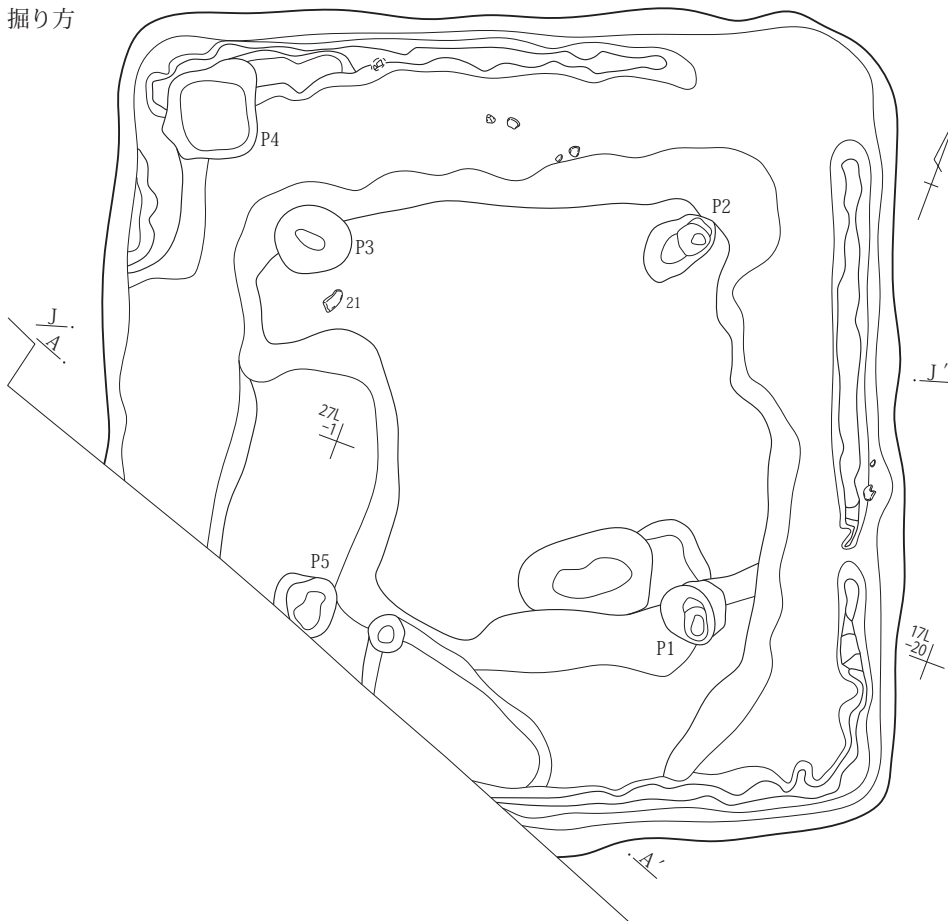
- 1 暗褐色土 やや硬くしまる。白色粒子、ローム粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 やや硬くしまる。粘性あり。ロームブロック、ローム粒子少量含む。
- 3 暗褐色土 軟らかく粘性あり。黄白色土ブロック含む。
- 4 暗褐色土 軟らかく粘性あり。明るい色調。



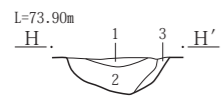
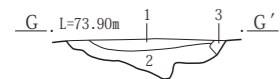
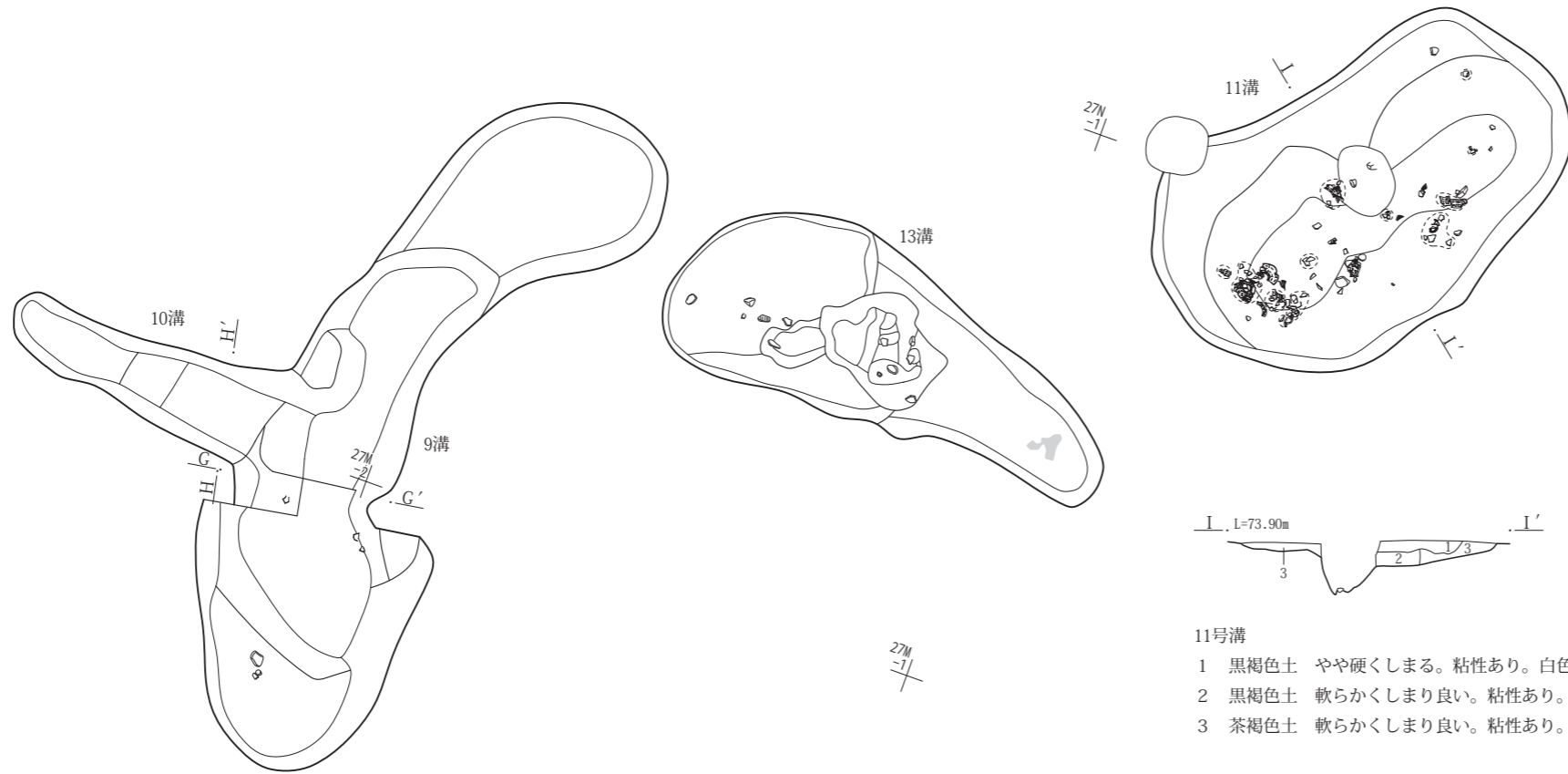
P5

- 1 黒褐色土 ややしまり粘性あり。ローム粒子含む。
- 2 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ロームブロック少量含む。
- 3 黄褐色土 ローム主体の層。

掘り方

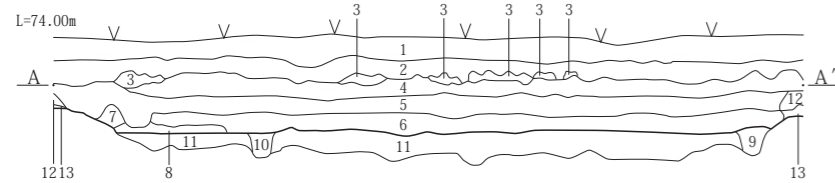


第247図 3区2号住居掘り方図、ピット断面図

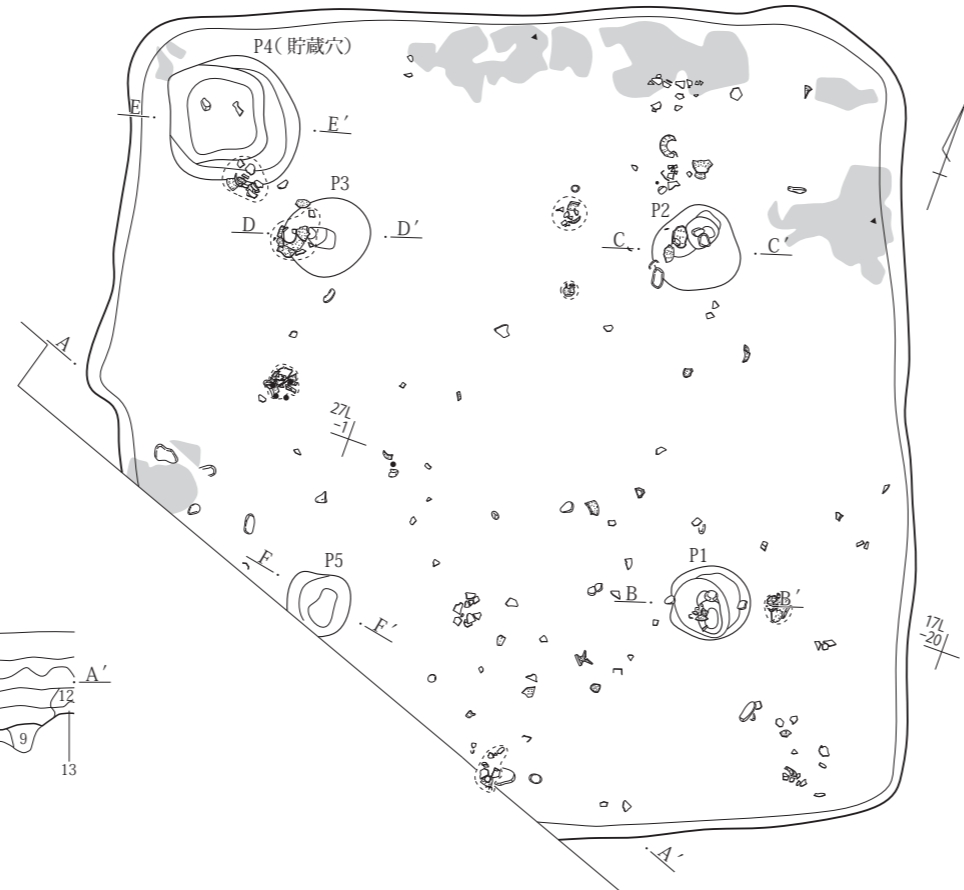


9・10号溝

- 1 黒褐色土 やや硬くしまる。粘性あり。白色粒子やや多量に含む。
- 2 黒褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。白色粒子、ローム粒子少量含む。
- 3 茶褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。

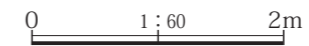


2号住居

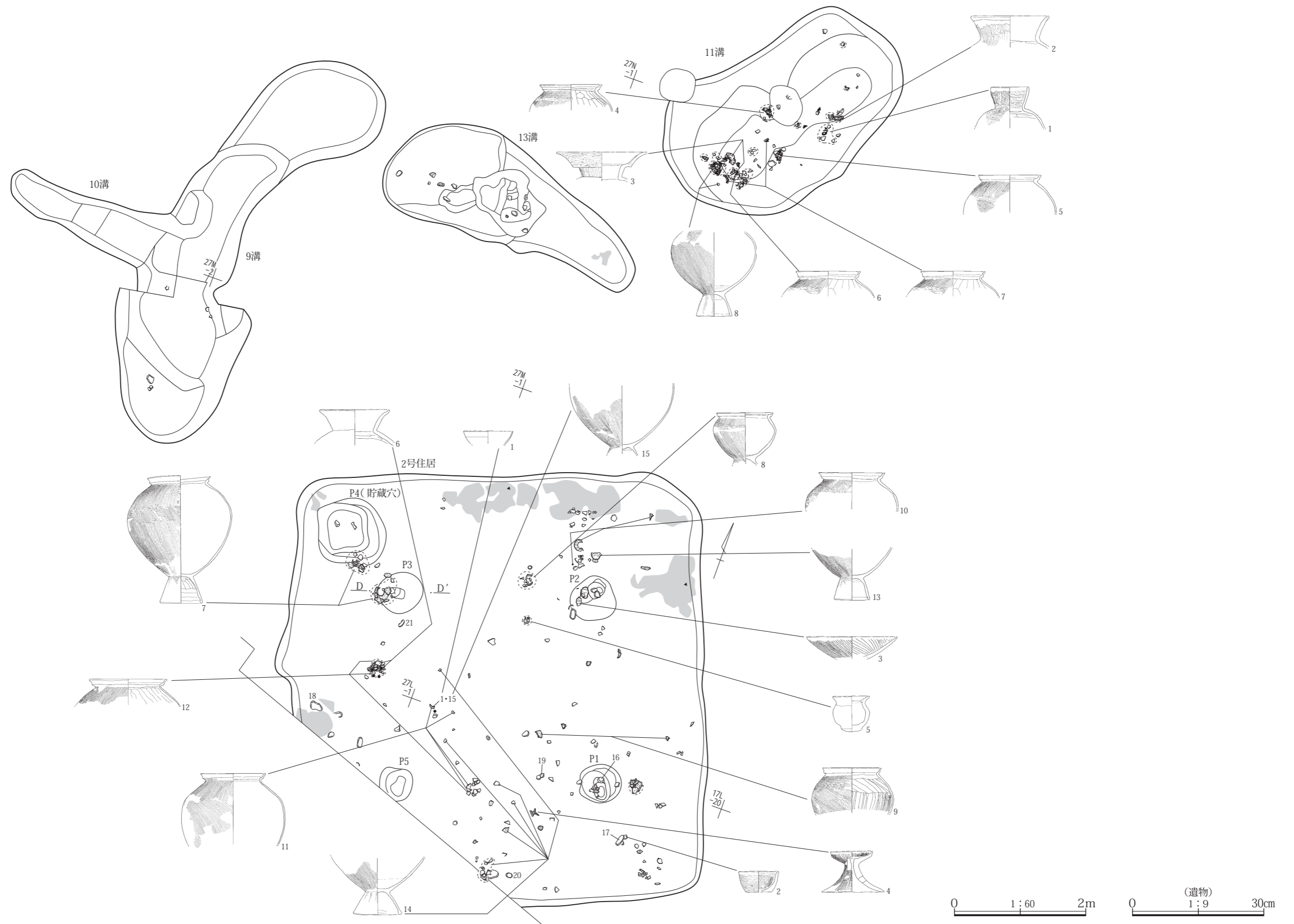


2号住居

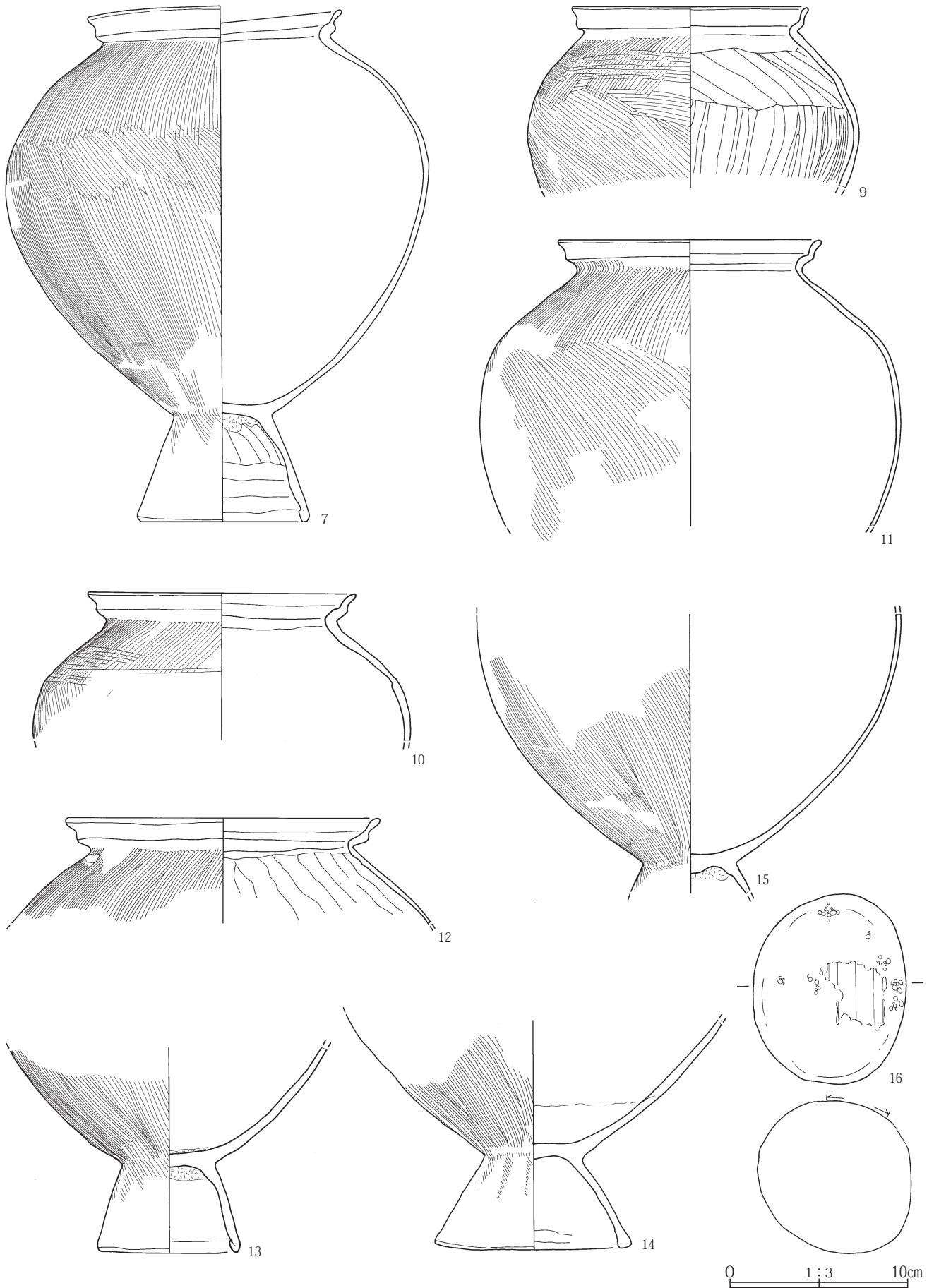
- 1 耕作土 浅間A 軽石含む。
- 2 暗褐色土 やや硬くしまる。浅間A 軽石含む。
- 3 黒褐色土 軟らかくサラサラする。軽石含む。
- 4 暗褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。ローム粒子少量含む。
- 5 暗褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。ローム粒子少量含む。4層よりも暗い色調。
- 6 黒褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。ローム粒子、炭化物粒子含む。
- 7 茶褐色土 非常に軟らかく粘性あり。ロームブロック、ローム粒子含む。
- 8 赤褐色土 非常に軟らかく粘性あり。焼土多量、ロームブロック含む。
- 9 黄褐色土 非常に軟らかく粘性あり。ロームブロック多量に含む。
- 10 暗褐色土 非常に軟らかく粘性あり。ローム粒子少量含む。
- 11 暗褐色土 非常に軟らかく粘性あり。ロームブロック多量に含む。
- 12 暗褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。
- 13 茶褐色土 非常に軟らかく粘性あり。



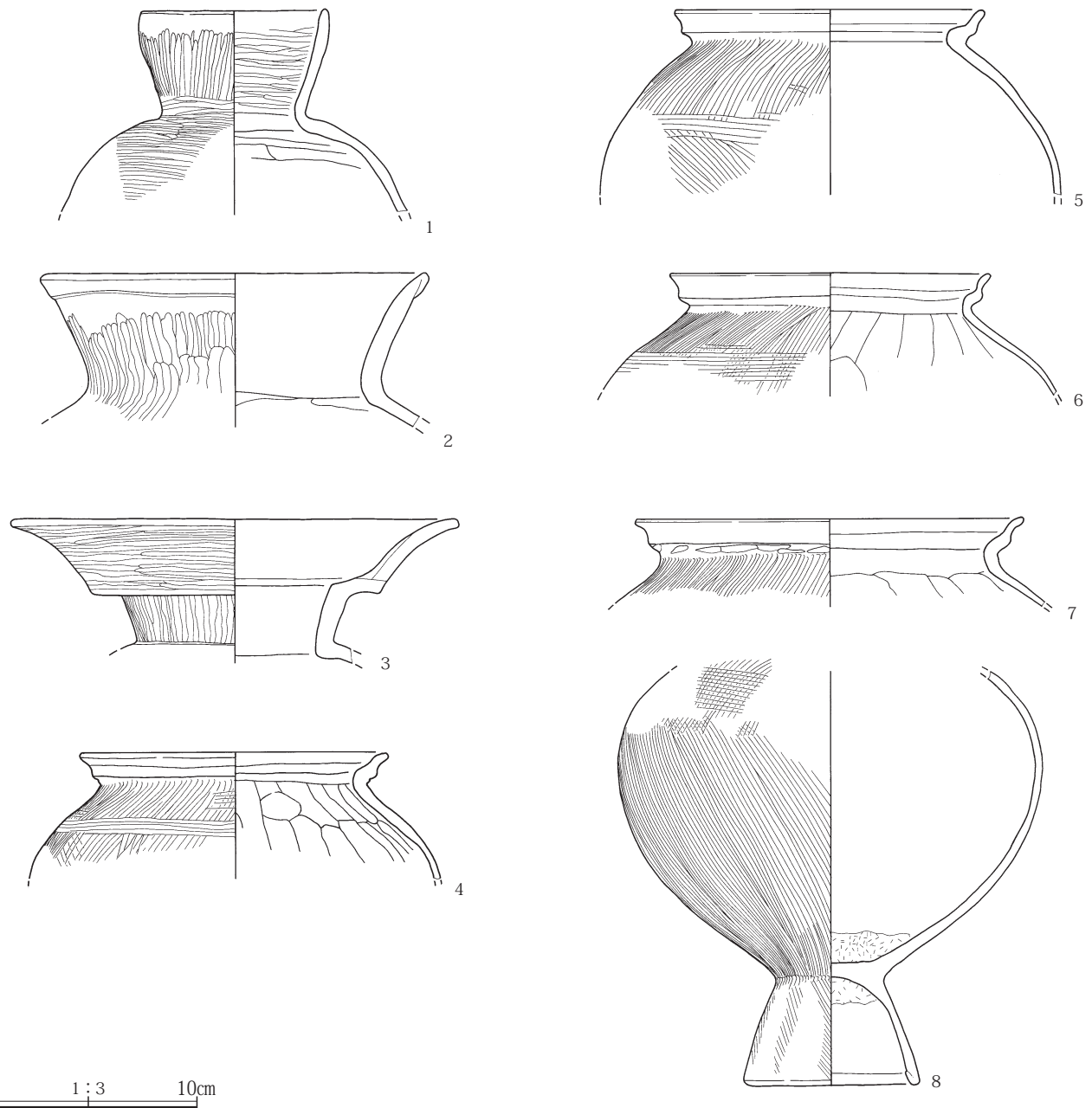
第248図 3区2号住居、9～11・13号溝



第249图 3区2号住居·11号沟遗物分布图



第250図 3区2号住居出土遺物(2)



第251図 3区11号溝出土遺物

第143表 3区2号住居出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第246図 PL.154	1	須恵器 椀	+3.7cm 口縁部片	口 10.8	細砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回りか。	
第246図 PL.154	2	土師器 椀	+10.9cm 2/5	口 8.6 高 4.7 底 5.4	細砂粒/良好/明黄 褐	口唇部は横ナデ、口縁部、体部、底部ともヘラ磨き。内面は全面ヘラ磨き。	
第246図 PL.154	3	土師器 高杯	+4.0cm 杯身部口縁部片	口 21.4	細砂粒・粗砂粒・ 褐色粒/良好/明赤 褐	内外面とも斜放射状ヘラ磨き。	
第246図 PL.154	4	土師器 器台	+4.2cm 脚部端部大部分 欠損	口 9.2 高 9.2 脚 14.0 孔 1.0	細砂粒/良好/にぶ い赤褐	受部からか脚部に放射状ヘラ磨き。内面は受部に放射状ヘラ磨き、脚部はヘラナデ、単位不鮮明。	脚部中位に透孔が3カ所。
第246図 PL.154	5	土師器 小型壺	+0.7cm 4/5	口 7.9 高 7.9 底 4.5 胴 7.9	細砂粒/良好/橙	内面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はナデ、底部はヘラ削りか。内面はナデか。	
第246図 PL.154	6	土師器 甗	+4.3,+5.5cm 口縁部～胴部上 位片	口 15.4	細砂粒/角閃石/ 良好/にぶい橙	口縁部横ナデ、胴部ヘラナデ、単位不鮮明。内面胴部もヘラナデ。	
第250図 PL.154	7	土師器 台付甗	-2.4,+11.3cm 胴部一部欠損	口 14.9 高 29.6 脚 9.0 胴 24.7	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cm当たり5本)、脚部は上位の一部にハケ目。内面は胴部と脚部がナデ、脚部端部は折り返し。	内外面の底部に砂粒を多量に含め粘土が貼付されている。

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要		
第246図 PL.154	8	土師器 台付甕	+3.6cm 口縁部～脚部上 位	口 12.6 胴 14.0 底 4.7	細砂粒・粗砂粒・ 長石・褐色粒/良 好/浅黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から脚部は縦位のハケ目 (1cmあたり5本)後上位に横位のハケ目。内面は胴部と脚 部がナデ。	内外面の底部に 砂粒を多量に含 め粘土が貼付さ れている。		
第250図 PL.155	9	土師器 台付甕	+5.4,+10.5cm 口縁部～胴部上 半	口 13.0 胴 18.4	細砂粒・粗砂粒・ 長石/良好/にぶ い黄橙	口縁部横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり6本)後上 位に横位のハケ目。内面胴部は縦位のナデ。			
第250図 PL.155	10	土師器 台付甕	+1.4～+10.4cm 口縁部～胴部上 位片	口 14.8	細砂粒多/良好/浅 黄橙	口縁部横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり6本)後上 位に横位のハケ目。内面胴部はナデ。			
第250図 PL.155	11	土師器 台付甕	-1.1～+5.3cm 口縁部～胴部中 位片	口 14.4 胴 23.3	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり6本)。内 面胴部はナデ。	脚部側の底部に 砂粒を多量に含 め粘土が貼付さ れている。		
第250図 PL.155	12	土師器 台付甕	+4.3～+6.1cm 口縁部～胴部上 位片	口 17.2	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ胴部はハケ目(1cmあたり6本)、内面は頸 部がヘラナデ、胴部はナデ。			
第250図 PL.155	13	土師器 台付甕	+4.9cm 脚部～胴部下 位	脚 7.6 底 5.2	細砂粒多/良好/浅 黄橙	胴部と脚部上位はハケ目(1cmあたり6本)。内面は胴部と 脚部はナデ、脚部端部は折り返し。	内外面の底部に 砂粒を多量に含 め粘土が貼付さ れている。		
第250図 PL.155	14	土師器 台付甕	+5.8～+12.9cm 脚部～胴部下 位片	脚 9.8	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	内面に輪積み痕が残る。脚部は貼付、胴部と脚部に一部 はハケ目(1cmあたり5本)脚部端部は内側に折り返し。			
第250図 PL.155	15	土師器 台付甕	+3.7cm 脚部上位～胴部 下半	底 5.1	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	胴部と脚部の一部はハケ目(1cmあたり6本)。内面はナデ。			
挿図 PL.No.	No.	器種	形態・素材	石材	長	幅	重さ(g)	製作状況・使用状況	備考
第250図 PL.155	16	磨石	円礫球形	粗粒輝石安山岩	10.6	8.5	1123.7	背面側中央付近が強く摩耗・光沢を帯びるほか、 敲打痕がある。被熱してススが付着。	
-	17	敲石	棒状偏平礫	粗粒輝石安山岩	18.0	6.8	695.8	小口部両端に打痕がある。被熱して破損、スス が付着。	非実測
-	18	敲石	偏平礫	粗粒輝石安山岩	19.6	12.8	1258.9	小口部を利用して敲打使用。左辺側の敲打痕に は衝撃剥離痕が伴う。	非実測
-	19	敲石	棒状礫	粗粒輝石安山岩	(5.4)	5.5	161.3	小口部上端が敲打され、大きく剥離している。	非実測
-	20	敲石	楕円礫	粗粒輝石安山岩	8.5	6.6	316.6	両側縁に弱い敲打痕があるほか、表裏面とも弱 い摩耗面が広がる。縄文期敲石の混入か。	非実測
-	21	敲石	楕円偏平礫	粗粒輝石安山岩	(22.1)	(13.0)	1934.7	小口部両端に敲打痕。被熱破損。	非実測

第144表 3区11号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第251図 PL.156	1	土師器 埴	+9.1cm 口縁部～胴部上 位	口 8.2	細砂粒・粗砂粒・ 長石/良好/赤褐	口縁部は縦位、胴部は横位のヘラ磨き。内面は口縁部が 横位のヘラ磨き、頸部から胴部はヘラナデ。	
第251図 PL.156	2	土師器 甕	+9.2cm 口縁部～頸部片	口 17.2	細砂粒/良好/にぶ い黄褐	口縁部は折り返し。口縁部は上半が横ナデ、下半から 頸部は縦位のヘラ磨き。	
第251図 PL.156	3	土師器 壺	+21.5,+22.6cm 口縁部～頸部片	口 20.2 頸 9.0	細砂粒・粗砂粒・ 角閃石・褐色粒/ 良好/橙	口縁部は横位、頸部は縦位のヘラ磨き。内面は横ナデ。	二重口縁部壺。
第251図 PL.156	4	土師器 台付甕	+15.2cm 口縁部～胴部上 位	口 13.8	細砂粒・粗砂粒・ 褐色粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあた り5本)後1段の横位のハケ目。内面胴部はナデ。	
第251図 PL.156	5	土師器 台付甕	+15.0cm 口縁部～胴部中 位片	口 13.9 胴 20.8	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあた り5本)後上位に横位のハケ目。内面胴部はナデ。	
第251図 PL.156	6	土師器 台付甕	+22.6cm 口縁部～胴部上 位	口 14.4	細砂粒/良好/にぶ い黄褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあた り6本)後上位に横位のハケ目。内面胴部はナデ。	
第251図 PL.156	7	土師器 台付甕	+20.0,+5.4cm 口縁部～胴部上 位	口 17.5	細砂粒・粗砂粒・ 褐色粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり6本)。内 面胴部はナデ。	
第251図 PL.156	8	土師器 台付甕	+8.2,+13.5cm 脚部～胴部	脚 7.6 胴 19.2 底 4.9	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	胴部は縦位のハケ目(1cmあたり6本)後上位に横位のハケ 目、脚部は一部にハケ目。内面は胴部と脚部はナデ、脚 部端部は折り返し。	内外面の底部に 砂粒を多量に含 め粘土が貼付さ れている。

北3.8m、上幅190cm～250cm、下幅140cm～170cm、深  
さ6cm～23cmを測る。南に向かって傾斜している。た  
だ住居に対する走行がやや異なっているために、これに  
ついては当住居に伴うものなのかは微妙である。なお、

10号溝は別遺構になる。規模は東西2.4m、上幅46cm～  
88cm、下幅23cm～56cm、深さ31cmで西に向かって傾斜  
している。

時期 出土遺物から古墳時代前期4世紀代に比定される。

3号住居(第252～258図、P.L.88～91・156～159、第145表)

**位置** 17K・L-16、17J～M-17、17K～M-18、17K・L-19グリッド、2号住居の東約4mの所に位置している。北西隅を5号住居によって、また北東部分の溝が2号竪穴状遺構によって壊されている。さらに4号溝が住居の北西隅から南東に走行している。

**形状** ほぼ正方形を呈する。**主軸方位** 住居を囲む周溝のあり方から判断すると、出入口部分は南側にあったものと思われることから、主軸はほぼ南北になっている。

**規模** 床面積42.63㎡、東西6.7m、南北6.8m、残存壁高は10cm～15cmである。溝を含めた規模は東西13m、南北12.5mになる。

**床面** ほぼ平坦である。壁際の床面に焼土の堆積が少量認められる。

**炉** 検出されなかった。床面から明瞭な炉の痕跡を検出することはできなかった。

**貯蔵穴** 東壁中央やや北に位置している(P3)。楕円形を呈し、長径80cm・短径65cm・深さ40cmである。覆土は3層に分かれた。また、掘り方調査時に検出された床

面南東隅の土坑も貯蔵穴になるものと思われる。長さ92cm・幅60cm・深さ20cm～27cmの隅丸方形を呈する。

**柱穴** 5基検出された。P1・P2、P4～P6が該当する。P1は長径50cm・短径43cm・深さ67cm、P2は長径68cm・短径60cm・深さ63cm、P4は長径60cm・短径45cm・深さ43cm、P5は長径44cm・短径40cm・深さ40cm、P6は長径36cm・短径30cm・深さ35cmである。P1-P5間距離335cm、以下、P5-P2・320cm、P2-P4・305cm、P4-P1・333cmである。P6はP2とP4のほぼ中間に位置している。

**周溝** 検出できなかった。

**埋没土** 自然埋没土と考えられる。2～5層が住居の覆土で3層は炭化物層であった。6～8層は掘り方充填土である。

**掘り方** 床面の北と南部分を主体として掘り込まれている。2号住居ほど明瞭ではないが、支柱穴に囲まれた内側を残すようにしている。

**遺物** 床面の南東隅、P4とP2の中間から多量に出土している。第252図3～5の埴は南壁と東壁寄りから、6～8の器台は東壁直下から、9の小型壺を除いた第256図10～



第252図 3区3号住居出土遺物(1)



- P1
- 1 暗褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。ローム粒子少量含む。
  - 2 暗褐色土 やや硬くしまり粘性あり。茶褐色土ブロック含む。
  - 3 暗褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。黄白色土ブロック含む。
  - 4 黄白色土 やや硬くしまり粘性あり。暗褐色土含む。
  - 5 暗褐色土 軟らかく粘性あり。黄白色土ブロック含む。

- P2
- 1 暗褐色土 軟らかくしまり良い。茶褐色土ブロック少量含む。
  - 2 暗褐色土 やや硬くしまり粘性あり。ロームブロック、黄白色土ブロック含む。
  - 3 暗褐色土 やや硬くしまり粘性あり。ローム粒子少量含む。
  - 4 暗褐色土 やや硬くしまり粘性あり。茶褐色土ブロック含む。
  - 5 黄白色土 硬くしまる。暗褐色土ブロック少量含む。根がため。

- P3
- 1 暗褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。白色粒子少量含む。
  - 2 暗褐色土 非常に軟らかく粘性あり。ロームブロック含む。
  - 3 黄白色土 非常に軟らかく粘性あり。暗褐色土少量含む。

- P5
- 1 暗褐色土均質層 軟らかく粘性あり。(柱跡)
  - 2 黒褐色土 ローム粒少量含む。軟らかくしまらない。粘性あり。(柱跡)
  - 3 暗褐色土 黄白色土ブロック含む。ややしまり粘性あり。
  - 4 黄白色土 粘性ありしまる。暗褐色土ブロック少量含む。
  - 5 黒褐色土 黄白色土ブロック含む。

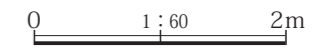
- 3号住居
- 1 暗褐色土 軟らかくサラサラする。
  - 2 暗褐色土 軟らかくしまり良い。白色粒子、ローム粒子、炭化物含む。
  - 3 炭化物層
  - 4 暗褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。ロームブロック、炭化物、白色粒子含む。2層とほとんど変わらない。
  - 5 黄褐色土 軟らかく粘性あり。ローム含む。
  - 6 茶褐色土 やや硬くしまる。茶褐色土、暗褐色土の混土。
  - 7 黒褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。茶褐色土ブロック含む。
  - 8 黄褐色土 やや硬くしまり粘性あり。暗褐色土少量含む。

- 5号溝a
- 1 暗褐色土層 軟らかくしまり良い。ローム粒子、白色粒子少量含む。
  - 2 黄褐色土層 軟らかく粘性あり。ローム多量に含む。
  - 3 茶褐色土層 やや堅くしまり粘性あり。

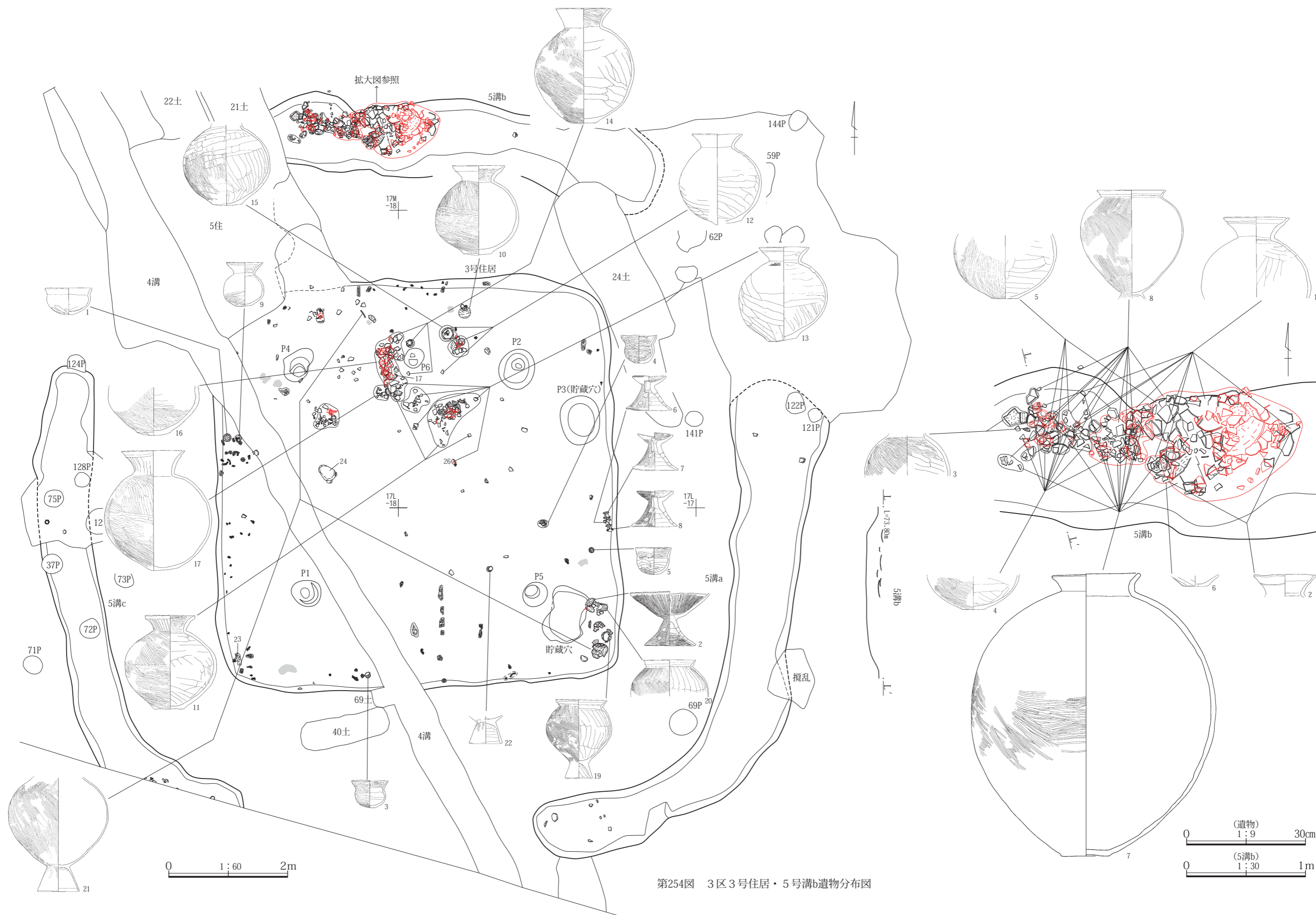
- 5号溝a
- 1 暗褐色土層 軟らかくしまり良い。白色粒子、茶褐色土粒子ブロック含む。
  - 2 茶褐色土層 軟らかくしまり良い。

- 5号溝c
- 1 暗褐色土層 やや硬くしまる。ローム粒子、白色粒子少量含む。
  - 2 暗褐色土層 軟らかくしまり良い。ローム粒子含む。1層よりも明るい色調。

第253図 3区3号住居、5号溝a～c







拡大図参照

3号住居

P3(貯藏穴)

貯藏穴

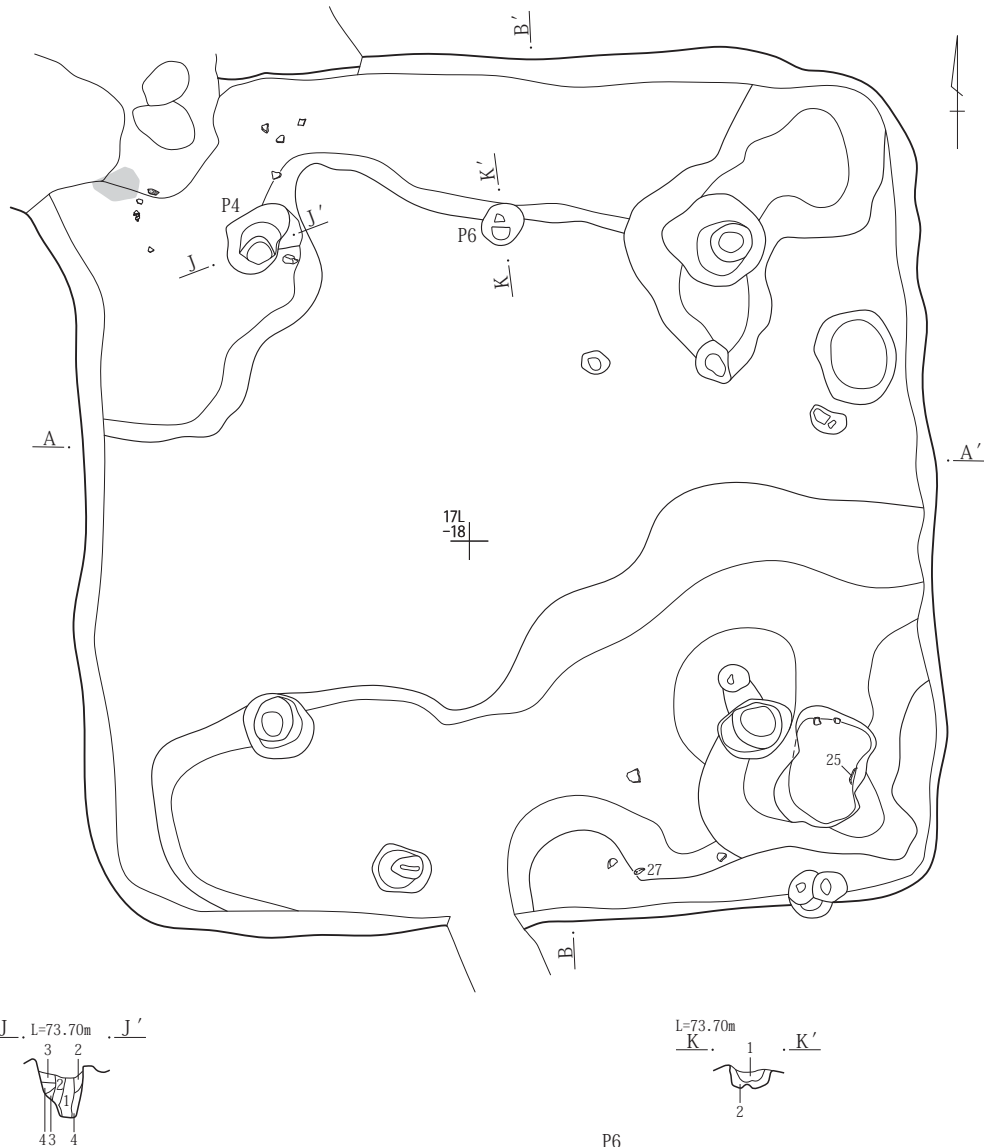
攪乱

0 1:60 2m

0 (遺物) 1:9 30cm

0 (5溝b) 1:30 1m

第254図 3区3号住居・5号溝b遺物分布図



P4

- 1 黒褐色土 軟らかくしまらない。ローム粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 ややしまり粘性あり。黄白色土ブロック含む。
- 3 暗褐色土 軟らかくしまらない。ローム粒子少量含む。
- 4 黄白色土 ややしまり粘性あり。暗褐色土ブロック含む。

P6

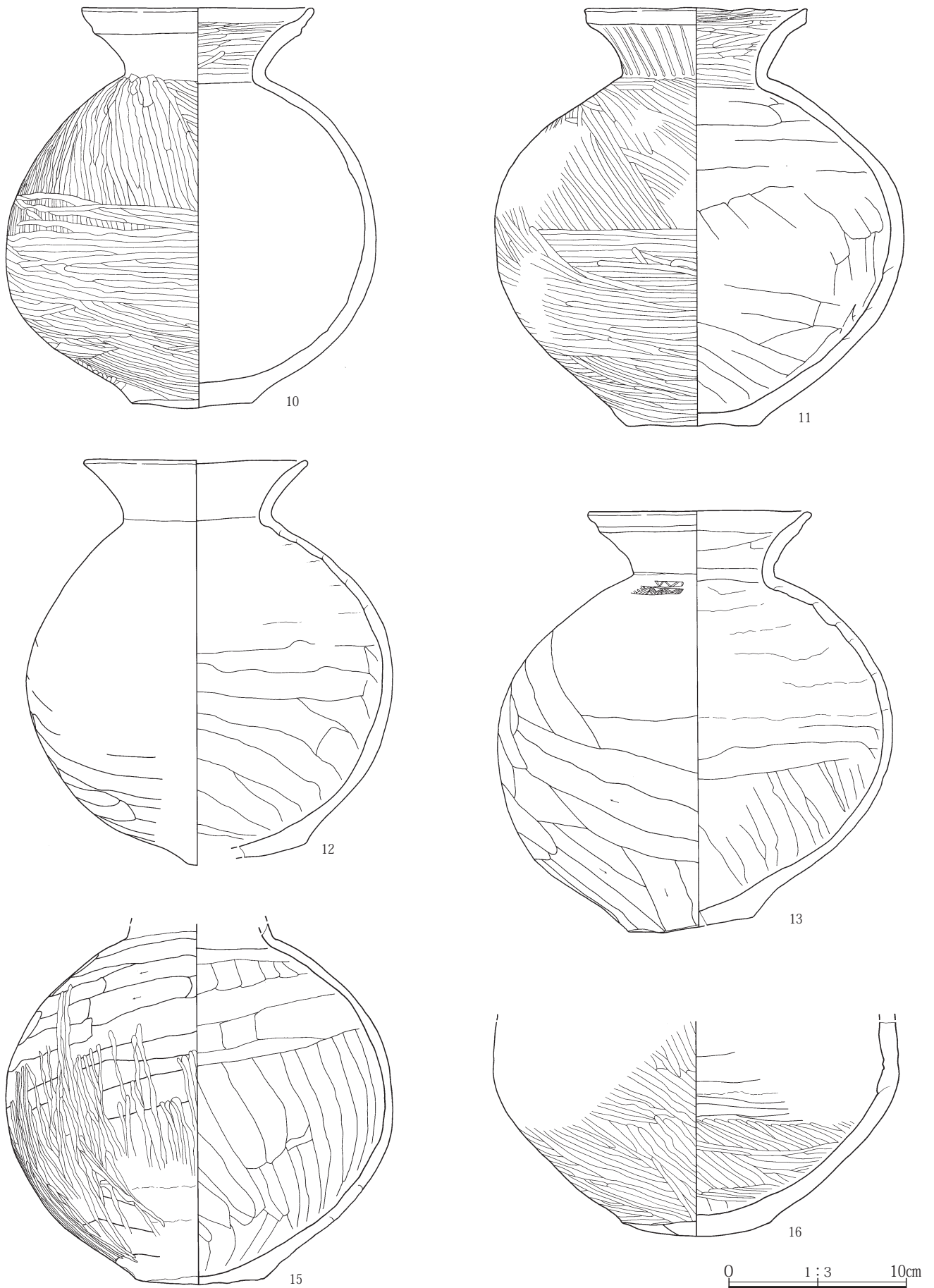
- 1 黒褐色土 ややしまり粘性あり。ローム粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 軟らかくしまらない。粘性あり。ローム粒子少量含む。

第255図 3区3号住居掘り方図

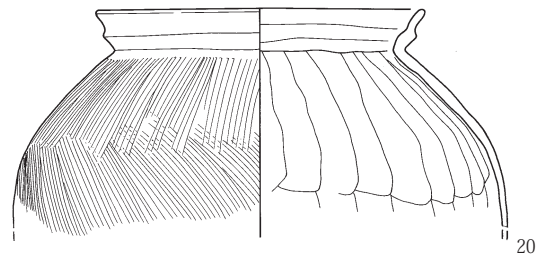
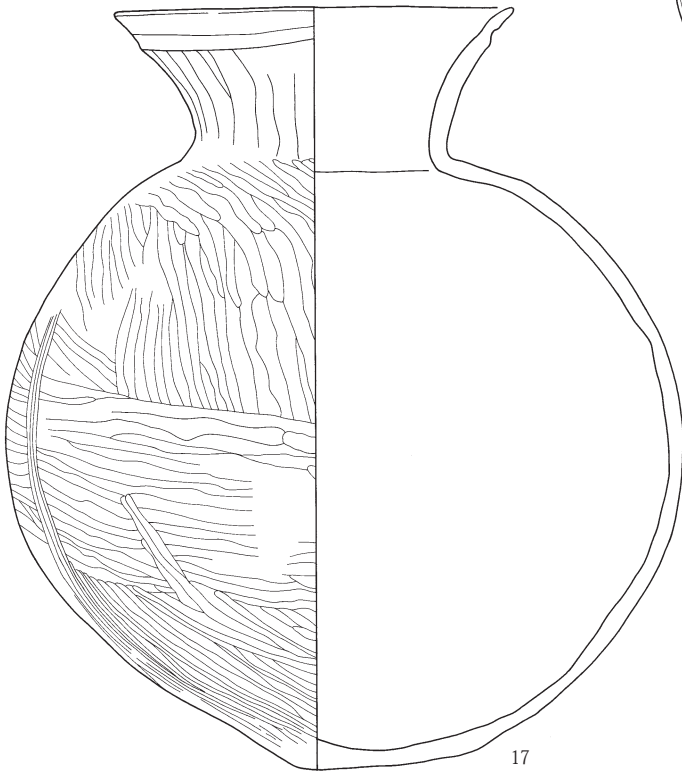
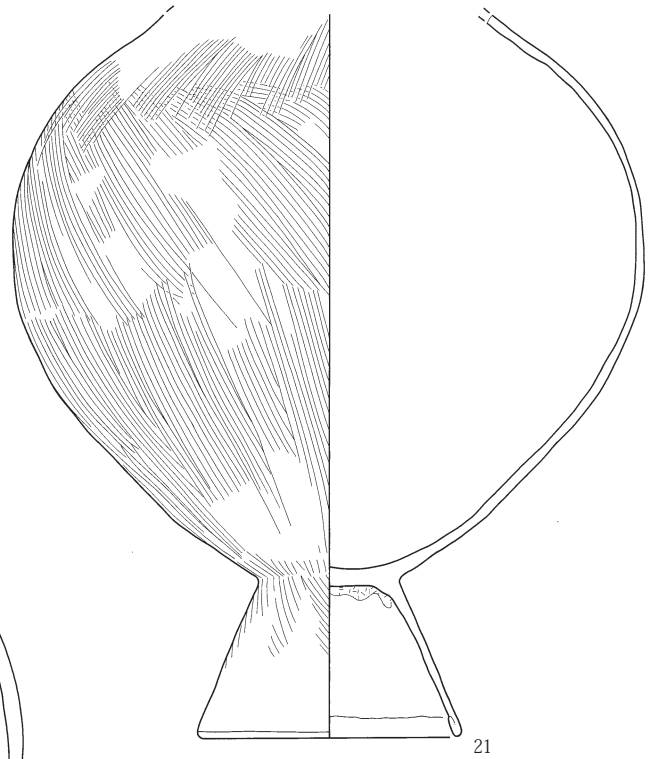
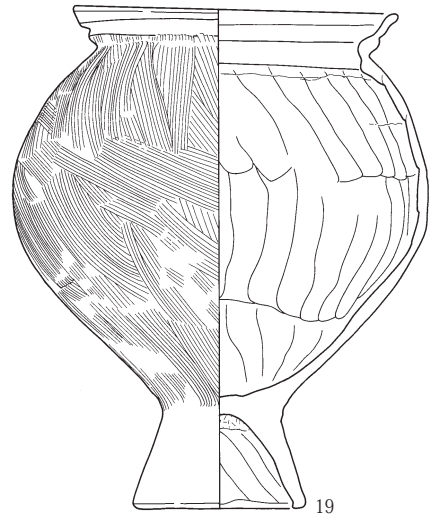
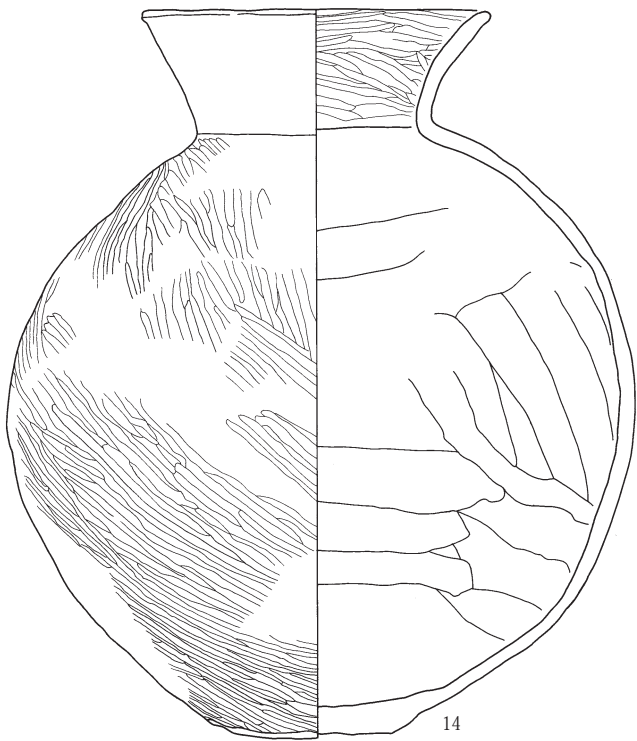
第257図17の壺はP4とP2の中間から北壁にかけてま  
まて出土した。いずれも床直上からである。2の高杯と  
19～21の台付甕は南東隅からの出土であった。また北側の  
溝の西半分から多量の土器が出土している。このほか第258  
図23の砥石1点が床面南西隅から、24の台石1点は床面中  
央西よりから、敲石2点、石製品1点も出土している。  
**住居を囲む溝** 住居の周囲を巡る溝を検出した(5溝a・  
5溝b・5溝c)。ただし溝は南側で途切れ、北東と北西  
で2号竪穴状遺構と5号住居によって壊されているため  
に全周していたのかは不明である。東側の5溝aは住居  
との間隔1.76m～2.07m、南北の長さ9.8m、上幅72cm

～166cm、下幅22cm～146cm、深さ10cm～15cmを測る。  
南に向かって傾斜している。北側の5溝bは住居との間  
隔1.38m～1.87m、東西の長さ6.68m、上幅101cm～  
136cm、下幅34cm～134cm、深さ3cm～10cm。東に傾  
斜している。西側の5溝cは住居との間隔1.69m～2.06  
m、南北の長さ9.16m、上幅70cm～96cm、下幅50cm～  
74cm、深さ3cm～10cmである。北に傾斜している。南  
側の途切れた個所の距離は4.8mある。遺物は5溝bの西  
部分から壺を主体に甕とS字状口縁台付甕が細片となっ  
た状態で多量に出土している。

**時期** 出土遺物から古墳時代前期4世紀代に比定される。

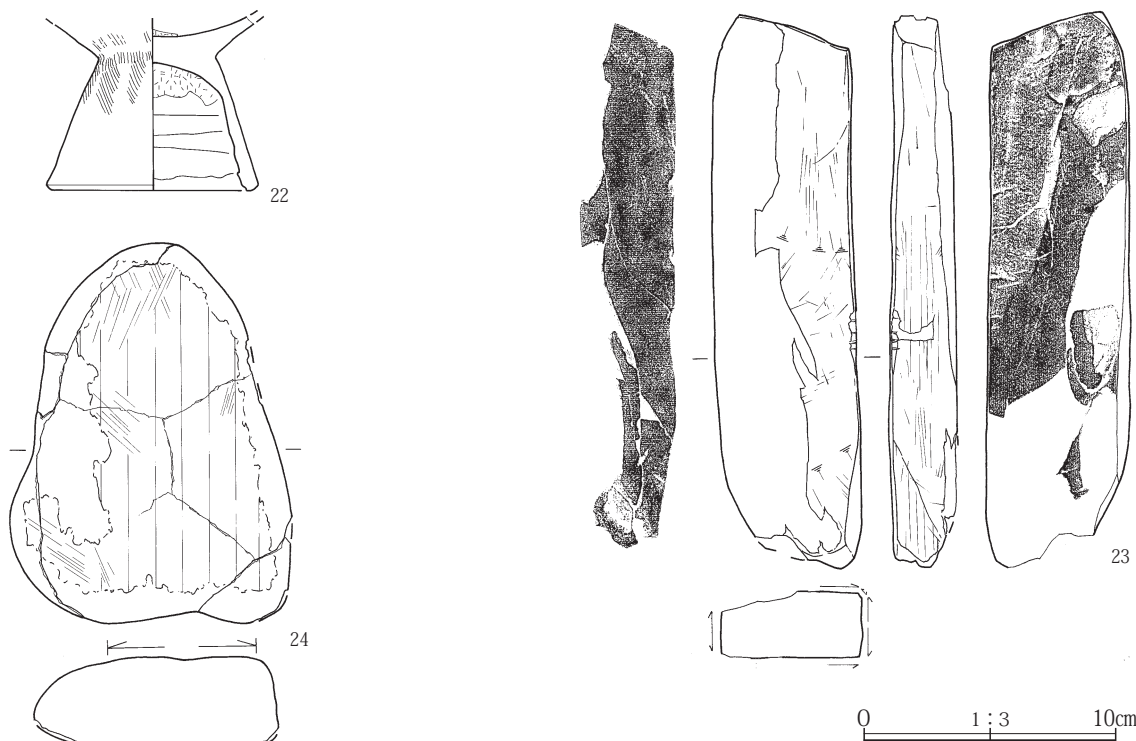


第256図 3区3号住居出土遺物(2)



0 1:3 10cm

第257図 3区3号住居出土遺物(3)

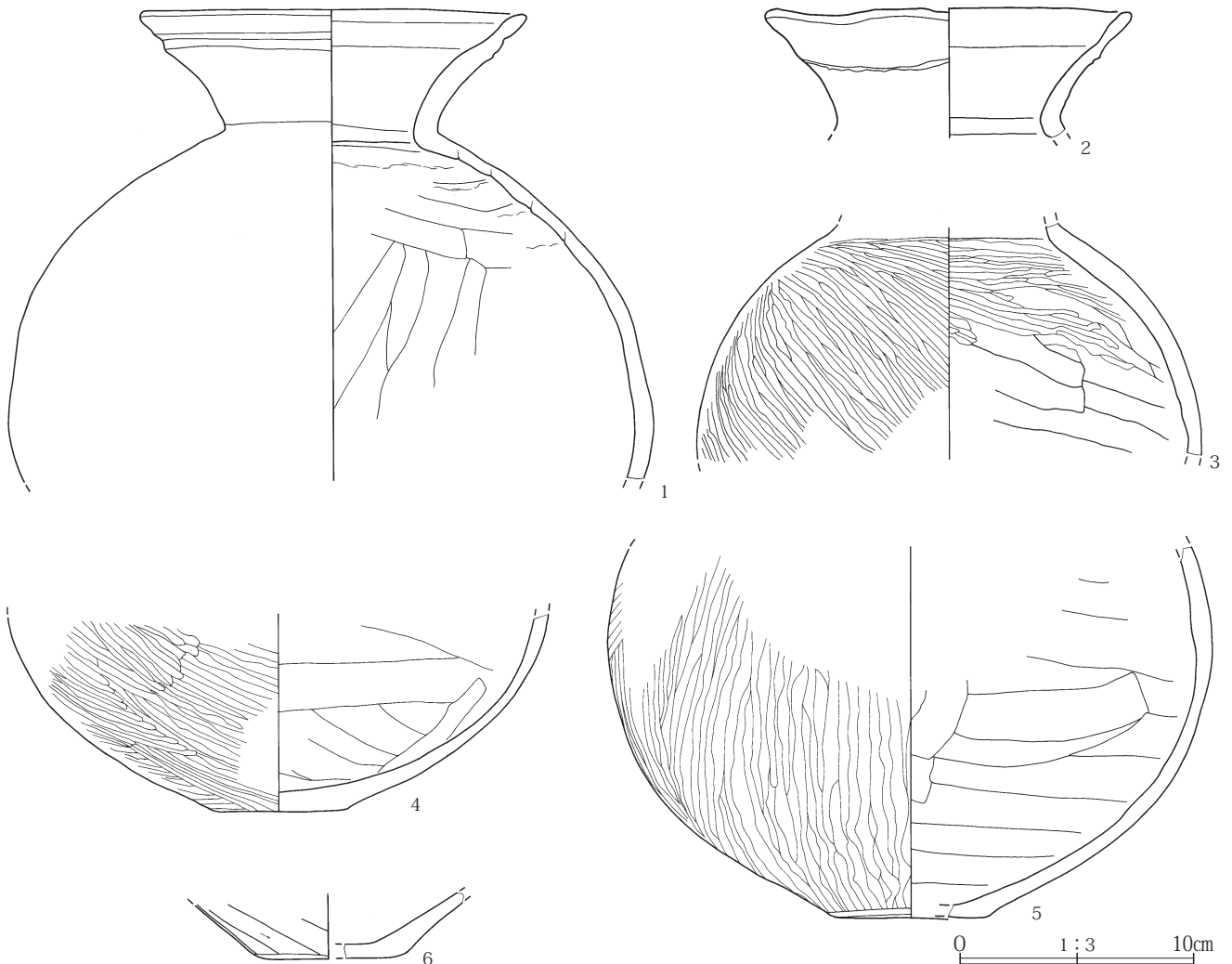


第258図 3区3号住居出土遺物(4)

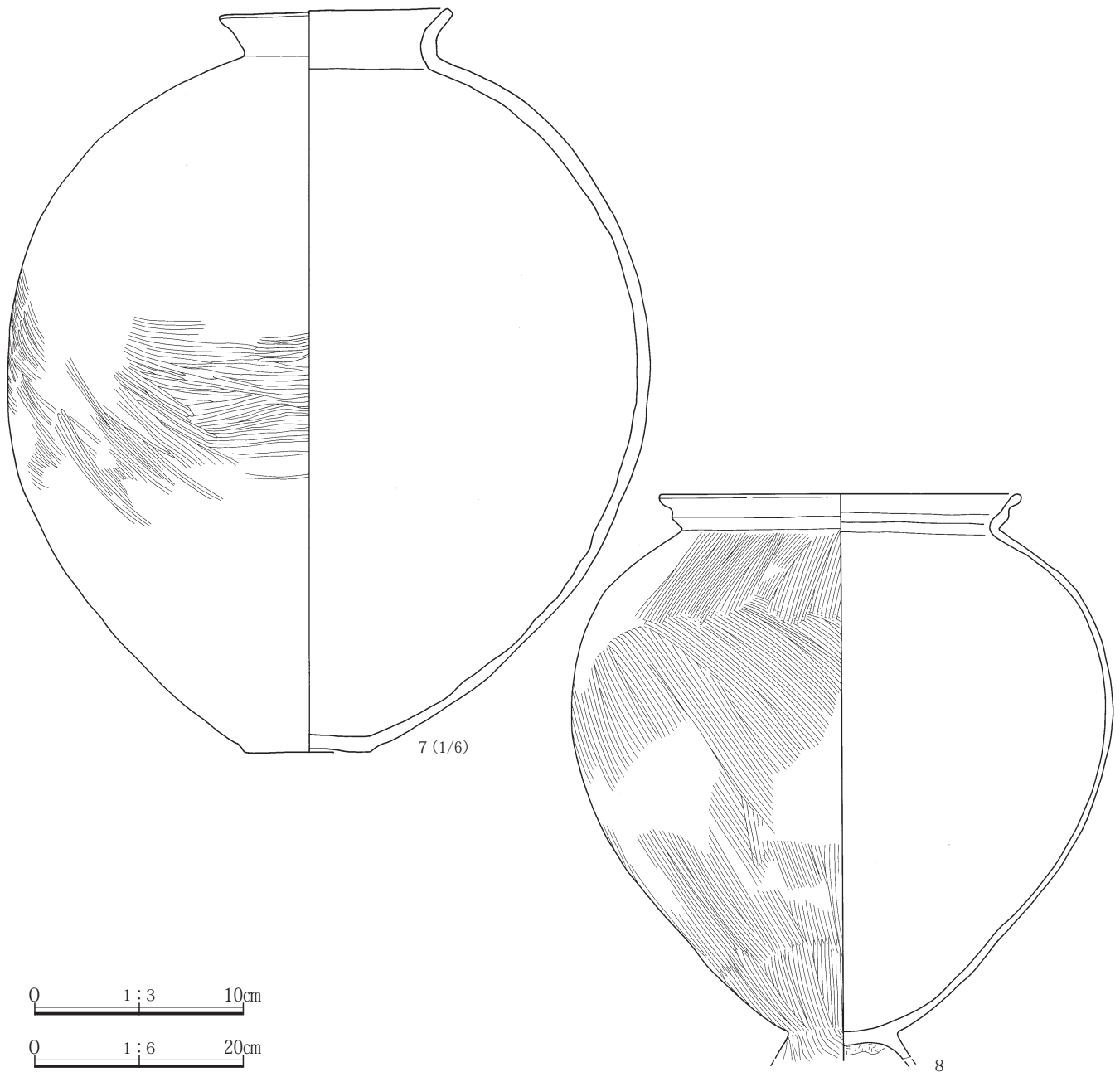
第145表 3区3号住居出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第252図 PL.156	1	土師器 鉢	+3.3cm ほぼ完形	口 11.3 高 6.6 底 2.0	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部横ナデ、体部は上半がヘラナデ、下半から底部がヘラ削り。内面は底部から体部がヘラナデ。	
第252図 PL.156	2	土師器 高杯	+6.6cm 杯身部口縁部 1/5欠損	口 19.5 高 13.5 脚 12.2	細砂粒/良好/黒・ にぶい黄褐	内外面とも黒色処理。杯身部は脚部に接合。内面脚部上位を除き全面ヘラ磨き。	脚部に上下一 対の透孔が3カ 所。
第252図 PL.156	3	土師器 埴	+0.5cm 完形	口 8.8 高 6.7	細砂粒/良好/にぶ い黄褐	口縁部から胴部、底部ともヘラ磨き。内面は口縁部が横位のヘラ磨き、頸部はヘラナデ、底部から胴部はナデ。	
第252図 PL.156	4	土師器 埴	+5.6cm 口縁部・胴部一 部欠損	口 8.8 高 6.9 底 2.2	細砂粒/良好/黒褐	内外面とも黒色処理。内外面とも口縁部、胴部・底部ともヘラ磨き。	
第252図 PL.156	5	土師器 埴	+3.2cm 完形	口 8.6 高 6.6	細砂粒/良好/黄灰	内面黒色処理。口縁部上半は横ナデ、下半は横位のヘラ磨き、頸部はハケ目が残る、胴部上半はヘラ削り、下半から底部はヘラ磨き。内面は口縁部がハケ目後ヘラ磨き、底部から胴部はヘラナデ。	
第252図 PL.156	6	土師器 器台	+6.2cm 完形	口 8.2 高 8.5 脚 11.4 孔 1.2	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	受部は横ナデ、脚部はヘラ磨き。内面は受部がヘラ磨き、脚部は上位から中位がヘラナデ、下位は横ナデ。	脚部に2孔が上 下に対の透孔 が3カ所。受部、 脚部端部の一部 に煤が付着。
第252図 PL.156	7	土師器 器台	+4.7cm 完形	口 8.5 高 9.3 脚 11.4 孔 1.4	細砂粒/良好/橙	受部は上半が横ナデ、下半から脚部はヘラ磨き。内面は受部がヘラ磨き、脚部は上位から中位がヘラナデ、下位は横ナデ。	脚部に2孔が上 下に対の透孔 が3カ所。
第252図 PL.156	8	土師器 器台	+6.0cm 完形	口 8.2 高 8.5 脚 11.5 孔 1.3	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	受部と脚部は放射状ヘラ磨き。内面は受部が横方向のヘラ磨き、脚部は上位から中位がヘラナデ、下位は横ナデ。	脚部に2孔が上 下に対の透孔 が4カ所。受部、 脚部端部の一部 に煤が付着。
第252図 PL.156	9	土師器 小型壺	+1.8cm ほぼ完形	口 8.9 高 10.9 底 3.6 胴 9.9	細砂粒・粗砂粒・ 角閃石/良好/にぶ い黄橙	口縁部横ナデ、胴部は上半がヘラナデ、下半から底部はヘラ磨き。内面は口縁部が横ナデ、底部から胴部はナデ。	
第256図 PL.157	10	土師器 壺	+3.6cm 口縁部1/2欠損	口 12.8 高 22.4 底 6.7 胴 20.2	細砂粒・粗砂粒・ 片岩/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部は上半が縦位、下半が横位のヘラ磨き、底部はヘラ削り。内面は口唇部が横ナデ、口縁部から頸部はヘラ磨き。	
第256図 PL.157	11	土師器 壺	+3.1~+6.9cm 3/4	口 12.2 高 23.4 底 7.2 胴 22.8	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口唇部は横ナデ、口縁部は放射状ヘラ磨き、胴部と底部は全面ヘラ磨き。内面は口縁部が横位のヘラ磨き、底部から胴部はヘラナデ。	
第256図 PL.157	12	土師器 壺	+1.0~+5.1cm 胴部と底部の一 部欠損	口 12.2 高 22.4 底 6.7 胴 20.4	細砂粒・粗砂粒・ 片岩/良好/にぶ い黄橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り、胴部上半は器面磨滅のため単位不明。内面胴部はヘラナデ。	成形時の歪が 大きい。
第256図 PL.157	13	土師器 壺	+0.6~+7.1cm 3/4	口 12.3 高 23.5 底 6.9 胴 21.8	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部上半はナデ、下半から底部はヘラ削り。内面は口縁部と底部から胴部はヘラナデ、胴部上半は単位不鮮明。	外面胴部上位 の一部に2段の 鋸歯文。
第257図 PL.158	14	土師器 壺	+2.0~+14.1cm 3/4	口 13.4 高 28.8 底 7.0 胴 24.7	細砂粒・粗砂粒・ 白色粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部横ナデ、胴部はヘラ磨き、底部はヘラ削り。内面は口縁部ヘラ磨き、底部から胴部はヘラナデ。	
第256図 PL.157	15	土師器 壺	+1.0cm 底部-頸部	底 7.5 頸 8.3 胴 21.5	細砂粒・粗砂粒・ 長石/良好/にぶ い黄橙	外面胴部に輪積み痕が残る。底部はヘラ削り、胴部はヘラ削り後ヘラ磨き、一部内器面磨滅のため不鮮明。内面は底部から胴部にヘラナデ。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要		
第256図 PL.157	16	土師器 壺	+6.9cm 底部~胴部下半	底 8.2 胴 22.4	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	内面胴部に輪積み痕が残る。底部はへら削り、胴部はへら磨き、内面は底部と胴部中位がへらナデ、胴部下位はへら磨き。			
第257図 PL.158	17	土師器 壺	+6.9cm 3/4	口 15.6 高 30.1 底 6.5 胴 26.7	細砂粒・粗砂粒/ 褐色粒/良好/にぶ い黄橙	口唇部は横ナデ、口縁部はへらナデ、胴部はへら磨き、底部はへら削り。内面は口縁部が横ナデ、胴部はへらナデか。	成形時の歪が大きい。		
第257図 PL.159	18	土師器 壺	胴部小片		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	外面に鋸歯文。			
第257図 PL.158	19	土師器 台付甕	+3.6cm 7/8	口 12.5 高 19.9 脚 6.4 胴 16.3	細砂粒・粗砂粒・ 褐色粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり8本)、脚部はナデ。内面は胴部と脚部がナデ。			
第257図 PL.158	20	土師器 台付甕	+7.3cm	口 12.6	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部h垂縦位のハケ目(1cmあたり6本)。内面胴部はナデ。			
第257図 PL.158	21	土師器 台付甕	+2.0,+4.2cm 脚部~胴部上位	脚 5.5 胴 24.6 底 10.0	細砂粒/良好/灰褐	胴部は斜めのハケ目(1cmあたり6本)、脚部上位の一部もハケ目。内面は胴部、脚部ともナデ、脚部端部は折り返し。	内外面の底部に砂粒を多量に含め粘土が貼付されている。		
第258図 PL.159	22	土師器 台付甕	+7.3cm 脚部~底部	脚 7.8	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	胴部から脚部上位はハケ目(1cmあたり8本)。内面は底部、脚部ともナデ、脚部端部は折り返し。	内外面の底部に砂粒を多量に含め粘土が貼付されている。		
挿図 PL.No.	No.	器種	形態・素材	石材	長	幅	重さ(g)	製作状況・使用状況	備考
第258図 PL.159	23	砥石	置き砥石	頁岩	22.7	5.7	488.5	裏面側左辺は使用中層理面に剥離しているが、継続使用され、破損部にも研磨に伴う刃ならし傷、意図的な鋸歯状痕が残る。四面使用。石材は軟質だが細粒で、良品。被熱による剥落が著しい。	
第258図 PL.159	24	台石?	偏平礫	粗粒輝石安山岩	30.0	22.2	7950.0	背面側には光沢面を有する摩耗面が広がり、部分的に弱い線条痕が走る。裏面側は被熱して全面が剥落。	
-	25	敲石	棒状礫	粗粒輝石安山岩	13.8	7.0	547.6	小口部下端に敲打痕。	非実測
-	26	敲石	楕円偏平礫	粗粒輝石安山岩	8.9	5.9	290.0	小口部両端に敲打痕。	非実測
-	27	石製品	偏平礫	雲母石英片岩	(12.3)	8.4	356.9	背面側に径5cm前後の浅い孔を穿つ。左側縁・上面に著しい敲打痕。	非実測



第259図 3区5号溝b出土遺物(1)



第260図 3区5号溝b出土遺物(2)

第146表 3区5号溝b出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第259図 PL.159	1	土師器 壺	-3.1~+7.4cm 口縁部~胴部上半	口 16.0 胴 27.2	細砂粒・褐色粒/ 良好/にぶい黄橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部は器面磨滅のため単位不明。内面胴部はヘラナデ。	
第259図 PL.159	2	土師器 甕	+3.5,+4.9cm 口縁部~頸部	口 15.2	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は上半が横ナデ、下半はヘラナデ。内面は頸部はヘラナデ。	
第259図 PL.159	3	土師器 壺	+0.9,+1.9cm 胴部上半片	頸 9.5 胴 21.3	細砂粒/良好/赤褐	頸部は横ナデ、胴部は斜めのヘラ磨き。内面胴部はヘラナデ後上位にヘラ磨き。	
第259図 PL.159	4	土師器 壺	+0.9~+11.3cm 底部~胴部下位	底 5.8	細砂粒/良好/にぶい橙	底部はヘラ削り、胴部はヘラ磨き。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
第259図 PL.159	5	土師器 壺	-3.1~+5.2cm 底部~胴部下半	底 6.8	細砂粒・粗砂粒・ 長石/良好/橙	底部はヘラ削り、胴部は縦位のヘラ磨き。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
第259図 PL.159	6	土師器 甕	+3.5cm 底部~胴部下位 片	底 7.0	細砂粒・ガラス質 粒/良好/にぶい黄橙	底部から胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第260図 PL.160	7	土師器 壺	-3.1~+10.9cm 口縁部・胴部一 部欠損	口 21.6 高 70.5 底 12.1 胴 61.2	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、胴部は器面磨滅のため不鮮明であるが中にヘラ磨きが残る。	
第260図 PL.160	8	土師器 台付甕	-3.1~+10.1cm 口縁部~脚部上 位	口 16.8 胴 25.6 底 5.2	細砂粒/良好/にぶい黄褐	口縁部は横ナデ、胴部から脚部は縦位のハケ目(1cmあたり6本)。内面は胴部と脚部がナデ。	内外面の底部に砂粒を多量に含め粘土が粘付されている。

2 土坑・井戸

1号井戸・34号土坑(第261図、P L .103・107・160、第147表)

1号井戸は断面観察の結果、34号土坑より後出となるが、底面が一致し一体として機能したことも想定されるため、あわせて扱う。なお、別に80号溝と重複し、比定年代から前出とみられる。

1号井戸 位置 17M・N-19グリッド。

確認面形状と規模 ほぼ楕円形。長径2.31m短径1.85m。

中位形状と規模 隅丸方形。長径1.44m短径1.42m。

断面形 円筒形か。確認面から約40cmは広がる。

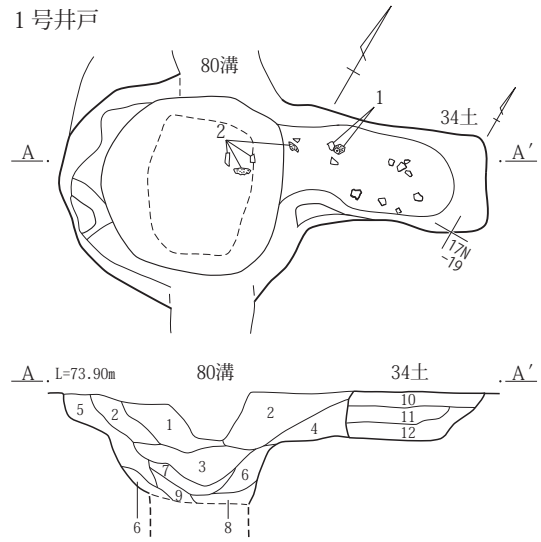
深さ 完掘しておらず、1.04m以上。

埋没状況 中位まで埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。上位は自然埋没か。

遺物 埋没土から2の土師器壺が出土する。

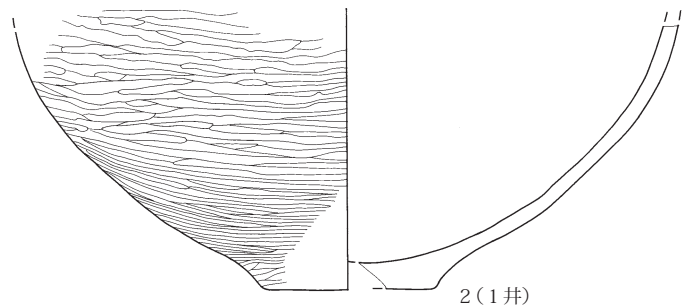
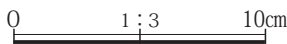
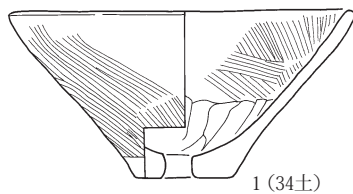
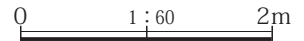
時期 出土遺物から4世紀に比定される。

34号土坑 位置 17M・N-8・9グリッド。平面形状は長方形で、西端は1号井戸と接するが、境界は不分明。南北壁はほぼ垂直に立ち上がり、東壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土は下位でロームブロックが目立ち、比較的的水平方向に埋まる。1号井戸埋没土との層境は明瞭に記録されるが、埋没状況としてはやや理解し難い。1号井戸近い底面で、1の土師器有孔鉢が出土する。規模は長軸(105)cm短軸81cm深さ36cmである。出土遺物から4世紀に比定される。



1号井戸

- 1 黒褐色土 しまり粘性あり。細粒白色粒子・細粒黄色粒子微量に含む。
- 2 暗褐色土 しまり粘性あり。細粒白色粒子少量、細粒黄色粒子微量に含む。
- 3 暗褐色土 しまりなく粘性あり。ローム大ブロックやや多量に含む。
- 4 黒褐色土 ややしまりやや粘性あり。細粒白色粒子少量、ローム粒少量に含む。
- 5 暗褐色土 ややしまりやや粘性あり。ローム小ブロックやや多量に含む。
- 6 黒褐色土 しまりなく粘性あり。ローム小ブロックやや多量に含む。
- 7 黒褐色土 しまりなく粘性あり。ローム粒少量に含む。
- 8 暗褐色土+黒褐色土ブロック しまりなく粘性あり。
- 9 ロームブロック+黒褐色土ブロック しまりなく粘性あり。
- 10 暗褐色土 しまる。細流白色粒子少量、ローム粒子少量に含む。
- 11 黒褐色土 ややしまる。細流白色粒子少量に含む。
- 12 黒褐色土 しまりない。ローム大ブロックやや多量に含む。



第261図 3区1号井戸・34号土坑と出土遺物

第147表 3区1号井戸・34号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第261図 PL.160	1	土師器 有孔鉢	34土 1/3	口 13.3 高 6.6 底 3.8 孔 1.4	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口唇部と底部周囲は横ナデ、口縁部から体部はハケ目(1cmあたり5本)。内面は上半がハケ目、下半はナデ。	
第261図 PL.160	2	土師器 壺	1井 底部~胴部下位 片	底 6.8	細砂粒・粗砂粒・ 長石・角閃石/良 好/橙	底部はヘラ削り、胴部は横位のヘラ磨き。内面はヘラナデ、器面磨滅のため単位不明。	



第2項 飛鳥～平安時代

1 竪穴住居

4号住居(第262図、P.L.91・161、第148表)

位置 170-19グリッド、5号住居の北西約10mの所に位置している。18号土坑によって南壁の一部を壊されている。

形状 調査区外にまで広がるため、不明であるが方形を呈するものと思われる。 主軸方位 不明。

規模 現状での面積は5.3㎡、長辺(東西) 3.65m、短辺(南北) 1.4m、残存壁高は5cm～27cmである。

床面 全体的に硬化面はみられなかった。

カマド 調査区外に所在するものと思われる。

貯蔵穴 調査区外に所在するものと思われる。

柱穴 なし。掘り方調査時に検出されたピットは住居に伴うものではない。

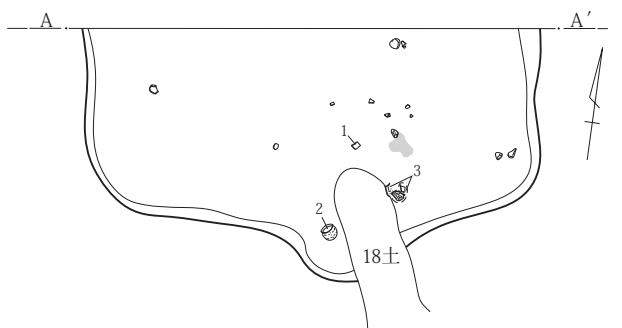
周溝 検出できなかった。

埋没土 自然埋没土である。6～8層が住居の覆土である。3～5層は別遺構の覆土になる。

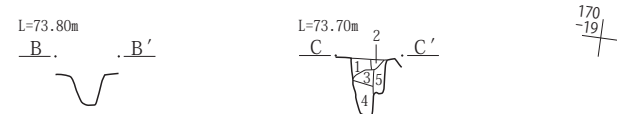
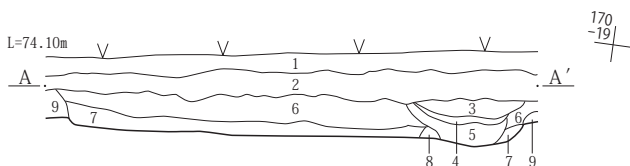
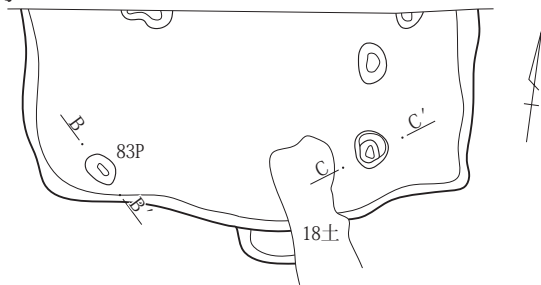
掘り方 全体的に15cmほど掘り下げている。

遺物 床面から第262図1の須恵器椀、2・3の土師器台付甕と甕は床直上から出土している。

時期 出土遺物から9世紀第3四半期に比定される。



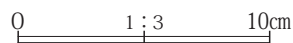
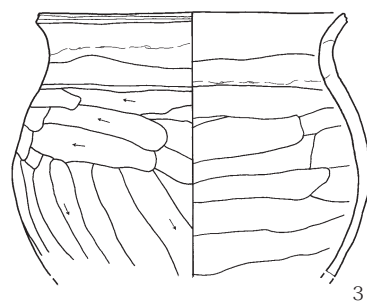
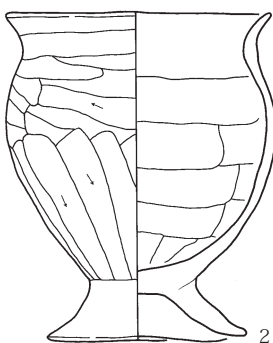
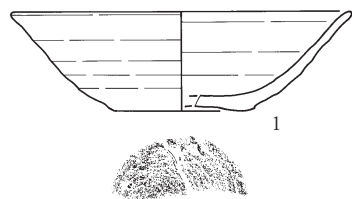
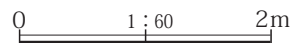
掘り方



- 1 耕作土 浅間A軽石含む。
- 2 暗褐色土 やや硬くしまる。浅間A軽石含む。
- 3 暗褐色土 やや硬くしまる。粘性あり。ローム粒子少量含む。
- 4 茶褐色土 軟らかく粘性あり。
- 5 暗褐色土 軟らかい。ローム粒子含む。
- 6 暗褐色土 やや硬くしまる。
- 7 黄褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。ロームブロック少量含む。
- 8 茶褐色土 軟らかく粘性あり。ローム主体の層。
- 9 暗褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。

ピット

- 1 暗褐色土層 ローム粒、白細粒僅かに含む。ややしまる。
- 2 暗褐色土層 ローム小ブロックを20%含む。しまる。
- 3 暗褐色土層 ローム粒を10%含む。軟らかい。
- 4 黒褐色土層 ローム粒僅かに含む。粘性あり。軟らかい。
- 5 ローム主体(掘り過ぎか)



第262図 3区4号住居と出土遺物

第148表 3区4号住居出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第262図 PL.161	1	須恵器 椀	+7.0cm 1/4	口 13.2 高 3.9 底 5.8	細砂粒・角閃石/ 還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第262図 PL.161	2	土師器 台付甕	-6.9cm 口縁部・脚部一 部欠損	口 10.1 高 12.9 脚 7.6 胴 10.5	細砂粒/良好/灰黄 褐	脚部は貼付、口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り、脚部は横ナデ。内面胴部はヘラナデ。	
第262図 PL.161	3	土師器 甕	+5.9,+9.5cm 口縁部～胴部中 位	口 12.0 胴 14.0	細砂粒/良好/にぶ い赤褐	内外面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

5号住居(第263・264図、P L .92・161、第149表)

位置 17L・M-18グリッド、4号住居の南東約10mの所に位置している。4号溝、22・23号土坑によって壊され、3号住居の北西部を壊している。

形状 南北にやや長い方形を呈している。

主軸方位 N-90°-E。

規模 面積7.68㎡、長辺(南北) 3.4m、短辺(東西) 2.85m、残存壁高は5cm～30cmである。

床面 全体的に硬化している。

カマド 東壁の中央やや南に設置される。燃烧部は住居の壁を掘り込んで造られている。全長95cm・燃烧部幅105cmである。覆土は5層に分かれ、第263図2の須恵器杯が出土している。

貯蔵穴 南東隅から検出された。長径95cm・短径85cm・深さ25cmの楕円形を呈する。覆土には焼土粒子・炭化物

が含まれている。

柱穴 検出できなかった。

周溝 検出できなかった。

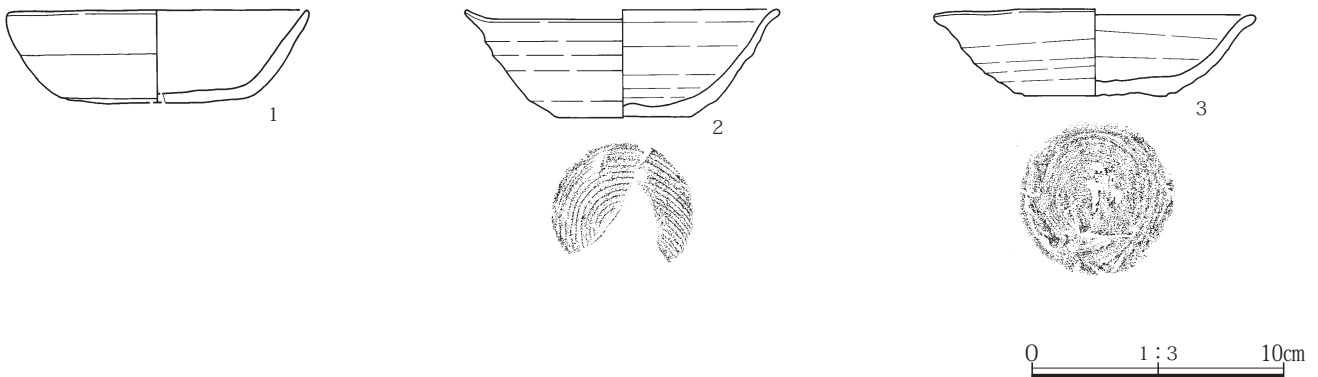
床下土坑 貯蔵穴の西から住居の南西隅に位置している。当初は1・2号土坑として調査を進めたが、発掘の結果ひとつの土坑としてまとまった。長辺190cm・短辺95cm・深さ15cmである。

埋没土 自然埋没土と考えられる。1～4層は住居の覆土になる。

掘り方 中央部を比較的残すように周囲が掘り込まれている。深さ10cm～18cmである。

遺物 出土量は少ない。覆土中から土師器杯と須恵器杯が出土している。

時期 出土遺物から9世紀第3四半期に比定される。

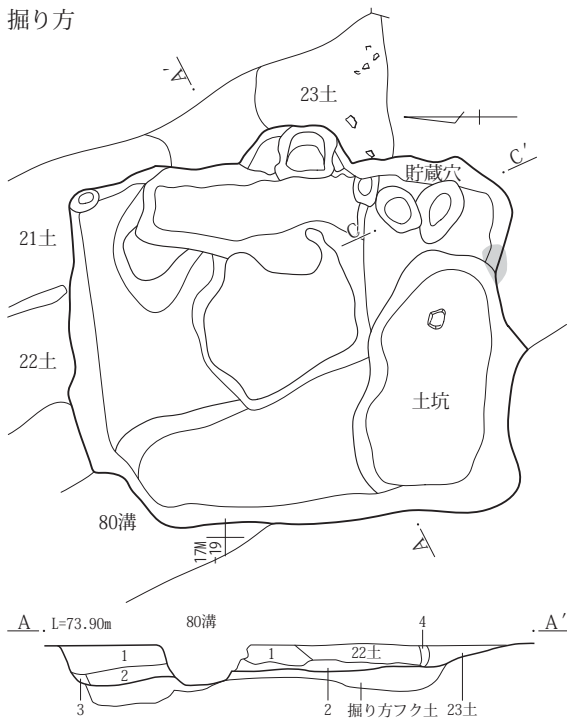


第263図 3区5号住居出土遺物

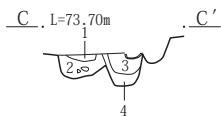
第149表 3区5号住居出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/ 色調	成形・整形の特徴	摘要
第263図 PL.161	1	土師器 杯	+0.3,+2.5cm 1/2	口 11.7 高 3.6 底 7.4	細砂粒・褐色粒/ 良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第263図 PL.161	2	須恵器 椀	+4.3,+5.7cm 1/2	口 12.2 高 4.4 底 5.4	細砂粒・角閃石/ 還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第263図 PL.161	3	須恵器 杯	+13.2cm 3/4	口 12.4 高 3.4 底 6.4	細砂粒・粗砂粒・ 角閃石/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	

掘り方

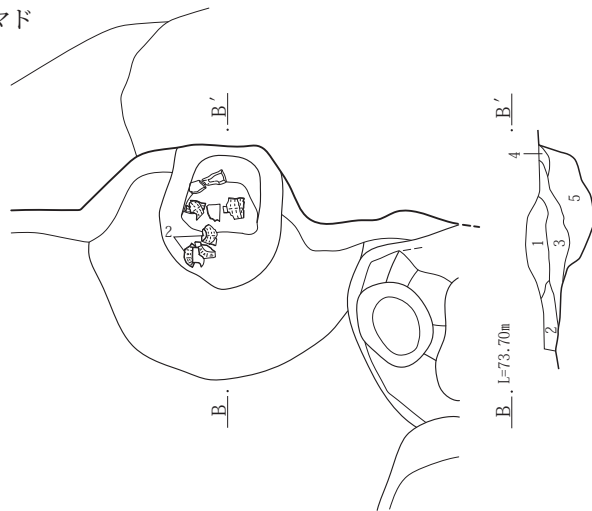


- 1 暗褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。ローム粒子、焼土粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 やや硬くしまり粘性あり。ロームブロック、ローム粒子含む。
- 3 黄褐色土 軟らかく粘性あり。ローム主体の層。
- 4 茶褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。ローム粒子少量含む。

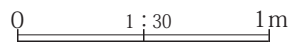


第264図 3区5号住居

カマド

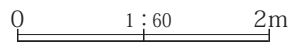


- カマド
- 1 黄褐色土 軟らかく粘性あり。ローム多量に含む。
  - 2 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ローム粒子含む。
  - 3 灰褐色土 非常に軟らかく粘性あり。焼土粒子、ローム粒子、灰含む。
  - 4 赤褐色土 非常に軟らかく粘性あり。焼土多量に含む。
  - 5 暗褐色土 非常に軟らかく粘性あり。焼土多量に、ローム粒子含む。



貯蔵穴

- 1 暗褐色土 非常に軟らかくしまり良い。粘性あり。ローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 非常に軟らかく粘性あり。ローム粒子多量に、炭化物含む。
- 3 暗褐色土 軟らかくしまり良い。黄白色土ブロック含む。
- 4 暗褐色土 非常に軟らかく粘性あり。黄白色土ブロック含む。



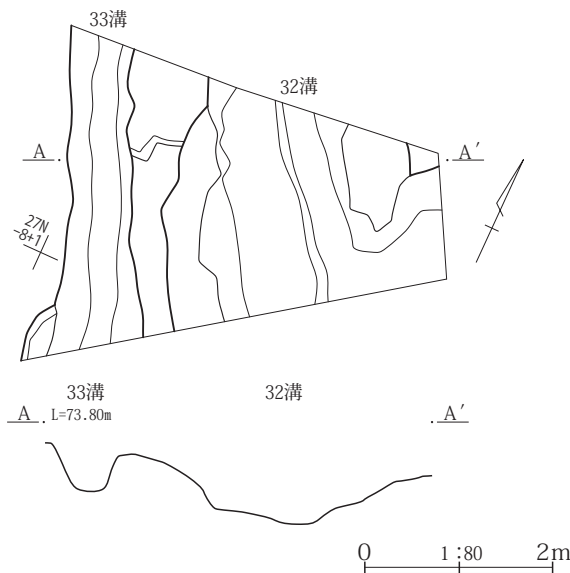
## 2 溝

32号溝は1区84号溝と同一と見られ、平安時代の大溝に比定される。33号溝もこれに並走する同時期の溝と考えられる。

32・33号溝(第265図、P L .119)

**32号溝** 位置 27M・N-7・8グリッド。両端は調査区外へ延びる。1区84号溝と同一の溝と考えられる。平面形は直線状で、南東部上層が東へ張り出すが、別の溝の重複かもしれない。断面形は逆台形。底面はほぼ平坦。両端の比高差はない。埋没状況不詳。規模は長さ2.70m上端幅242cm最大深75cmである。

**33号溝** 位置 N-22°-Wグリッド。両端は調査区外へ延びる。1区87号溝と同一の溝と考えられる。平面形は直線状。断面形は逆台形。底面は丸みを持つ。両端の比高差は4cmで、勾配1.13%で南方へ下向する。埋没状況不詳。規模は長さ3.54m上端幅60~122cm最大深49cmである。中世以降の遺物は出土していない。



第265図 3区32・33号溝

### 第3項 中世

3区では小規模ながら中世屋敷が2か所検出された。一つは、掘立柱建物10棟が集中する部分を含め、西限を18号溝、北限を22号溝などで囲まれた領域を1号屋敷として分類した。屋敷内部は細分が可能であり、掘立柱建物が集中する部分は北から西側にかけて22号溝で囲まれ、東側は26号溝を限りとする東西規模約9.5mとなる。南側は明確な境界が見られないため、土坑が集中する部分で分かれる。また、大枠では20号溝も南辺として有力であろう。

2号屋敷の区画はやや複雑である。中心部分には2棟の掘立柱建物が検出され、南辺から東辺をL字形に7号溝が廻り、その東に1.5m程離れて19号溝が走向する。南に並走する12号溝も区画溝であり、7号溝との間に小規模な16号掘立柱建物があり、1号柱穴列など周辺のピット群とあわせて、門と柵列であった可能性が高い。

#### 1 1号屋敷

掘立柱建物10棟が集中する部分を含め、溝などで囲まれた領域を1号屋敷として分類した。全体では西限を18号溝とし、北限を22号溝と想定する。南限は時期を確定する要素に欠けるが、位置及び走向方位から20号溝と考える。その結果、南北規模は約31mとなる。東限は2区12号溝が想定され、東西規模は約50mとなる。ただし、2区12号溝は屋敷北東部が張り出した部分に見えるため、本体部分は27号溝付近が適当となり、東西規模約32mとなる。出土遺物から14世紀前半～15世紀中頃の屋

敷と考えられる。

屋敷内部は細分が可能であり、掘立柱建物が集中する部分は北から西側にかけて22号溝で囲まれ、東側は26号溝を限りとする東西規模約9.5mとなる。南側は明確な境界が見られないため、土坑が集中する部分で分かれる。土坑は掘立柱建物群に近接して、屋敷のほぼ中央部分に集中する。その部分を除くと散漫である。

ピット群は掘立柱建物群と同じ部分のほか、28号溝の南北延長線上と18号溝の東側に集中して、それ以外は散漫である。28号溝北側を除くと直線状に並ぶものが多く、境界に関連する柵列などであった可能性が高い。

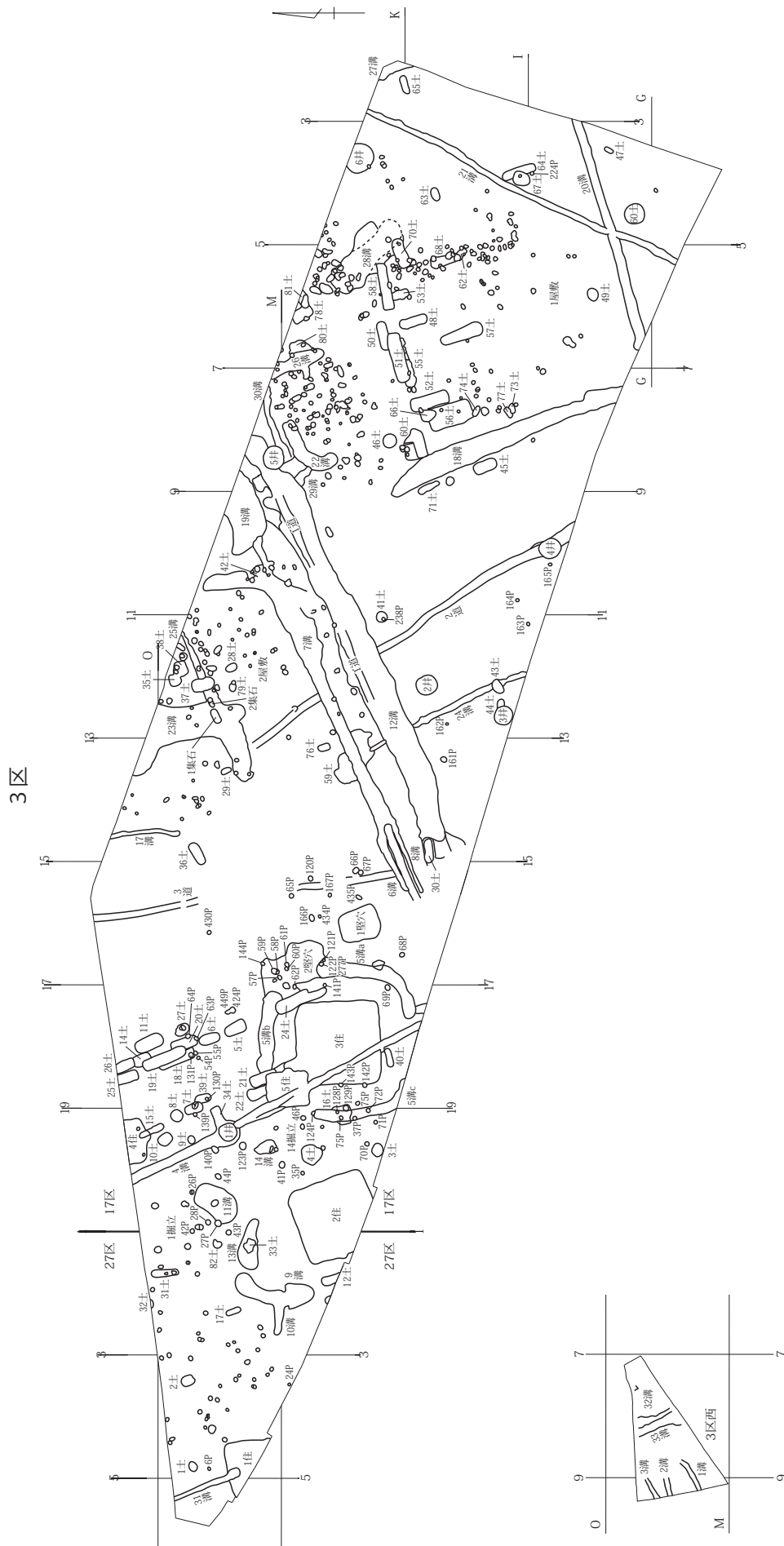
井戸は東端と北端に1基ずつあり、2区10・12号溝に接する2基を含めて4基が確認できる。

#### (1)掘立柱建物

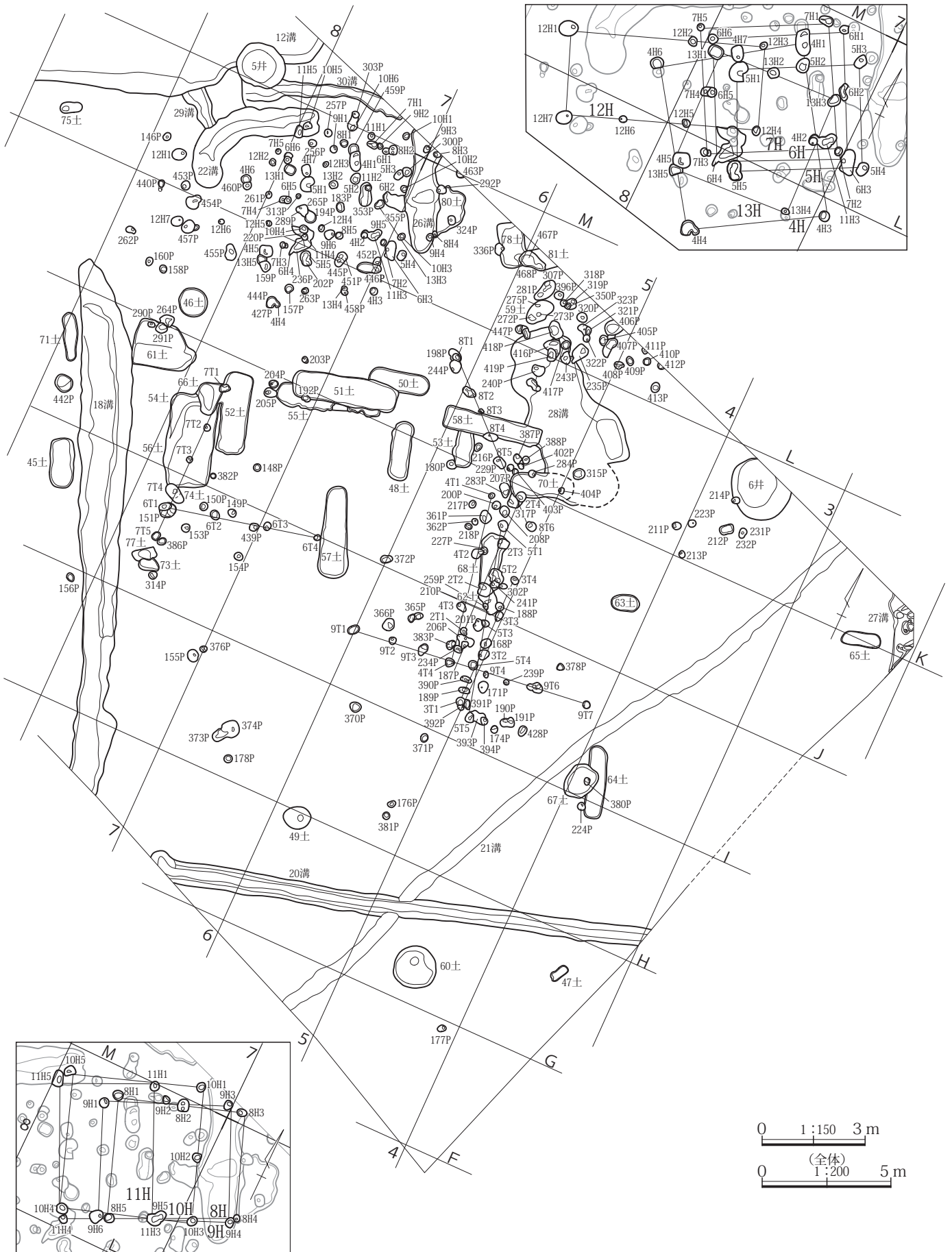
北側は22・30号溝、東側は26号溝を境界とする一辺10m程度の領域に、4～13号掘立柱建物までの10棟が全て重複して分布する。主軸方位から大きく4つに分類される。1類は13号掘立柱建物1棟で、主軸方位はわずかに西に傾く。2類は2号屋敷のみで、3類は10・12号掘立柱建物2棟で、主軸が西に20～22度傾く。4類は最も多く、5～7・9・11号掘立柱建物5棟で、主軸が西に25～31度傾く。5類は4号掘立柱建物1棟のみで、主軸は西に32～36度傾いている。詳細は第150表のとおりである。また、12号掘立柱建物は唯一22号溝の西方へ張り出し、位置的にも他とずれている。なお、掘立柱建物が集中する部分には他にピット138基があり、ピット群として別に扱う。

第150表 3区 掘立柱建物計測値一覧

	分類名	建物No	主軸方位	面積㎡	桁行(平均)	桁行平均柱間	寸尺	梁間(平均)	寸尺	規格(梁間×桁行)	埋没状況
1号屋敷	1	13	N-85～86°-E	12.92	3.615			3.575	11.8	1×2間・正方形	
	3	8	N-66～73°-E	12.15	3.66			3.32	11.0	1×2間・正方形	人為
	3	10	N-21～22°-W	15.19	3.965			3.83	12.6	2×2間・正方形	
	3	12	N-69～70°-E	14	5.545	1.848	6.1	2.525	8.3	1×3間・東西棟	
	4	5	N-30～31°-E	11.09	3.685			3.01	9.9	1×2間・東西棟か	
	4	6	N-25～27°-W	13.82	3.77			3.665	12.1	1×2間・正方形	柱痕
	4	7	N-28～29°-W	14.12	3.8			3.715	12.3	1×2間・正方形	
	4	9	N-65～67°-E	12.65	3.715			3.405	11.2	1×2間・東西棟	
	4	11	N-25～27°-W	10.7	3.94			2.715	9.0	1×2間・南北棟	柱痕
	4	11	N-32～36°-W	20.35	4.94			4.12	13.6	2×2間・南北棟	
2号屋敷	2	2	N-15～17°-W	17.53	5.46	1.82	6.0	3.21	10.6	1×3間・南北棟	
	2	3	N-10～16°-W	15.42	4.185			3.685	12.2	1×2間・南北棟	
	4	15	N-22～28°-W	12.54	3.635			3.45	11.4	2×1間・正方形	
	4	16	N-59～62°-E	2.1	2			1.05	3.5	1×1間	
周辺	1	1	N-2～4°-W	16.69	4.815			3.46	11.4	2×1間・南北棟・西張出	
	1	14	N-1°-W	6.5	3.755			1.73	5.7	1×2間・南北棟	



第266図 3区全体図



第267図 3区1号屋敷跡全体図

4号掘立柱建物(第268図、P L .96、第151表)

位置 17K・L-6・7グリッド。

重複 P 1は459号ピットに後出、P 2は9号掘立柱建物P 5、11号掘立柱建物P 3と、P 5は13号掘立柱建物P 5と重複するが新旧関係不明。P 6は460号ピットより前出。

主軸方位 N-32~36°-W 面積 20.35㎡

形態 2×2間・南北棟。南辺が40cm狭く平面形はやや台形となり、西辺が西へ外傾する。東西辺の中間柱P 2・5ともに南へ40cm程度寄り、P 1・2間2.86m、P 5・6間2.93mと広がっている。南辺は中間柱を省略する。柱痕も見られず、埋没土に特徴的なものはない。P 1は長径が76cmと広く、底面は4段に分かれており、複数の柱穴が重複する可能性もある。P 7も南北に長い楕円形で重複も考えられる。したがって、P 6の南に重複する460号ピットが本遺構の柱穴である可能性もある。柱穴の径はP 2・3など30cm程度が基本とみられる。深さは50cm前後が主体であるが、P 4・6は浅い。詳細な規模は第151表のとおり。中世以降の遺物は出土していない。

5号掘立柱建物(第269図、P L .96・97、第152表)

位置 17K・L-6・7グリッド。

重複 P 3は300号ピットと重複するが新旧関係不明。

主軸方位 N-59~60°-E 面積 11.09㎡

形態 1×2間・東西棟か。北辺は南辺より約27cm短く、西辺は東へ内傾する。北辺の中間柱P 2は約8cm東に寄る。P 3の埋没土3は掘り方を充填したものと言える。柱穴の径は南北軸が10cm程度長く、柱の立て替えなどによる柱穴の重複や、柱が抜き取られた可能性もある。基本的な径は30cm程度とみられる。深さは40cm前後が主体であり、P 1・2が若干浅い。詳細な規模は第152表のとおり。中世以降の遺物は出土していない。

6号掘立柱建物(第270図、P L .96、第153表)

位置 17K・L-6・7グリッド。

重複 P 5は7号掘立柱建物P 4より前出で、P 1は8号掘立柱建物P 2と、P 2は355ピットと、P 4は287号ピットと重複するが新旧関係不明。

主軸方位 N-25~27°-W 面積 13.82㎡

形態 1×2間・正方形。東辺が西辺より約21cm長く、平面形はやや台形。東西辺の中間柱P 2・5とも北へ寄り、P 2・3間2.00m、P 4・5間1.98mと広がっている。

P 6は柱痕がやや残っており、掘り方を黄褐色土で充填した状況がわかる。P 2は長径が20cm程長く柱穴が重複する可能性がある。P 6も同様に2基の重複も想定され、柱穴の径は30cm弱が基本とみられる。深さは40cm程度が主体で、P 3は深く、P 4は特に浅い。詳細な規模は第153表のとおり。中世以降の遺物は出土していない。

7号掘立柱建物(第271図、P L .96、第154表)

位置 17K・L-6~8グリッド。

重複 P 4は6号掘立柱建物P 5より後出。

主軸方位 N-28~29°-W 面積 14.12㎡

形態 1×2間・正方形。西辺の中間柱P 4は約8cm南に寄る。柱痕も見られず、埋没土に特徴的なものはない。P 1・3は平面不定形で、柱穴が重複する可能性がある。柱穴の径は30cm前後が主体で、深さは46cmと深いP 4を除き、11~24cmと全体的に浅い。詳細な規模は第154表のとおり。中世以降の遺物は出土していない。

8号掘立柱建物(第272図、P L .96・97、第155表)

位置 17L・M-6・7グリッド。

重複 P 2は6号掘立柱建物P 1と、P 3は26号溝と、P 4は8号掘立柱建物P 4、80号土坑、26号溝と重複するが新旧関係不明。建物群を囲む26号溝と重複することは注目される。

主軸方位 N-66~73°-E 面積 12.15㎡

形態 1×2間・正方形。東辺は西辺より48cm短いため、北辺は東下がりに傾く。北辺の中間柱P 2は約10cm東に寄る。柱痕が残るものはなく、埋没土はロームブロックを多量に含むものや、黄褐色土で埋まるものが目立ち、廃棄後の人為的な埋め戻しも考えられる。柱穴の径は30cm前後が主体であり、深さは59cmと深いP 2を除き、15~30cmと浅い。詳細な規模は第155表のとおり。中世以降の遺物は出土していない。

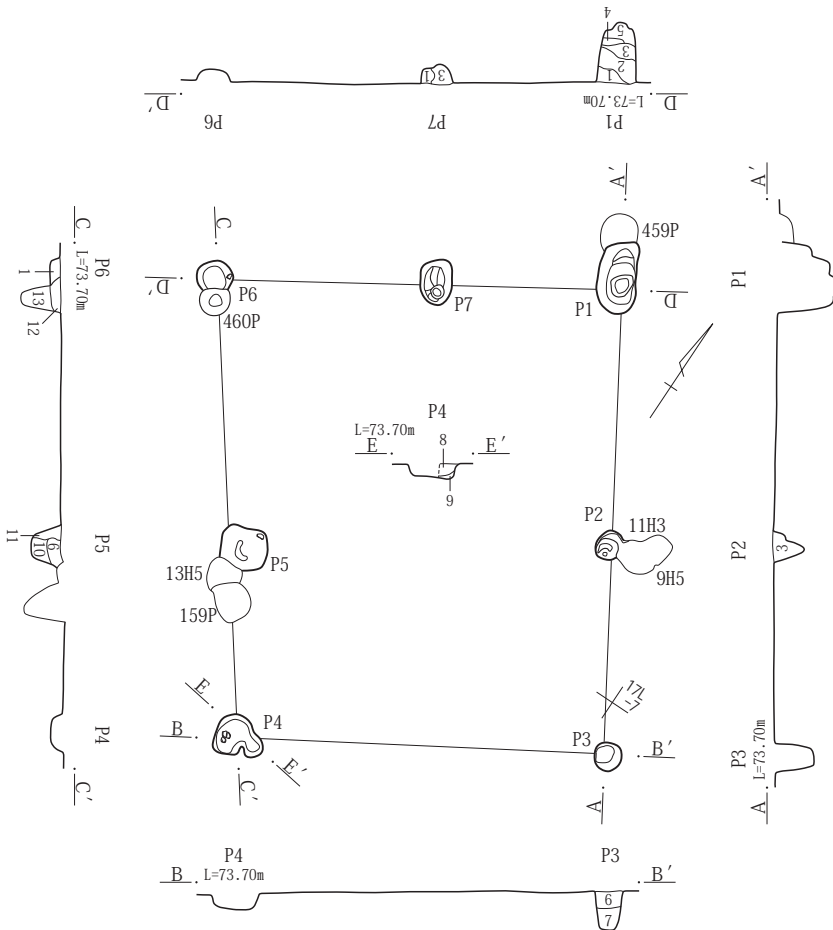
9号掘立柱建物(第273図、P L .96・97、第156表)

位置 17L・M-6・7グリッド。

重複 P 3は26号溝と、P 4は8号掘立柱建物P 4、26号溝と、P 5は11号掘立柱建物P 3と重複するが新旧関係不明。建物群を囲む26号溝と重複することは注目される。

主軸方位 N-65~67°-E 面積 12.65㎡

形態 1×2間・東西棟。南辺の中間柱P 5は15cm西に寄る。柱痕も見られず、埋没土に特徴的なものはない。

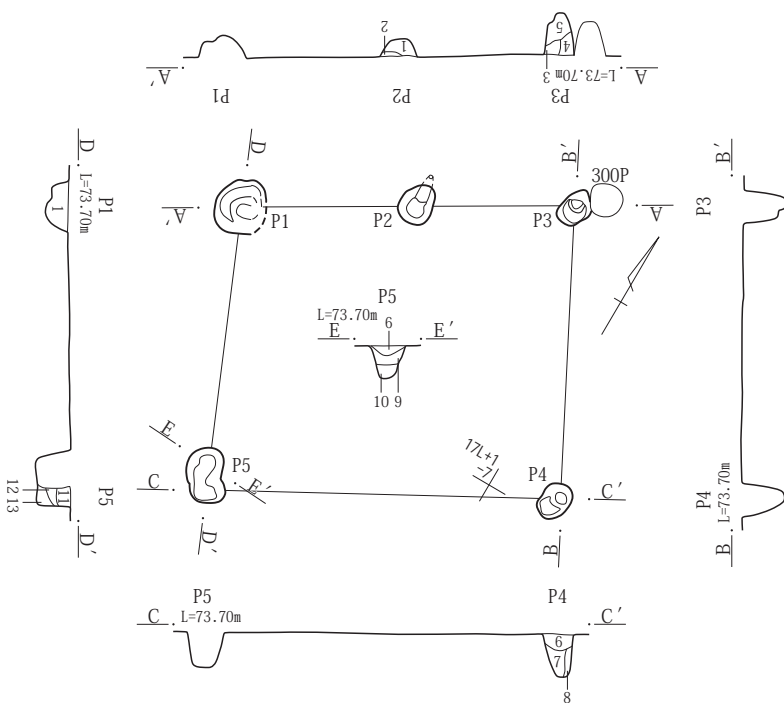


第268図 3区4号掘立柱建物

4号掘立柱建物

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。
- 2 黄褐色土
- 3 暗褐色土 ローム粒子含む。
- 4 黄白色土 暗褐色土含む。
- 5 暗褐色土
- 6 暗褐色土 サラサラする。ローム粒子少量含む。
- 7 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子含む。
- 8 暗褐色土 サラサラする。ローム小ブロックやや多量に含む。
- 9 暗褐色土+褐色土
- 10 暗褐色土 サラサラする。黄白色土ブロック含む。
- 11 暗褐色土 ロームブロック含む。
- 12 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 13 黒褐色土 ローム小ブロックやや多量、暗褐色土ブロックをモザイク状に含む。

0 1:80 2m



第269図 3区5号掘立柱建物

5号掘立柱建物

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子含む。
- 3 黄褐色土 硬くしまり粘性あり。暗褐色土小ブロック多量に含む。
- 4 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 5 黒褐色土 サラサラする。ローム粒子微量に含む。
- 6 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子少量に含む。
- 7 黒褐色土 ローム粒子・黄白色土ブロック含む。
- 8 暗褐色土
- 9 暗褐色土 軟らかい。ロームブロック・ローム粒子含む。
- 10 暗褐色土 非常に軟らかく粘性あり。黄白色土ブロック含む。
- 11 暗褐色砂質土 ローム粒子微量に含む。
- 12 黒褐色土 ローム粒子少量に含む。
- 13 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。

0 1:80 2m



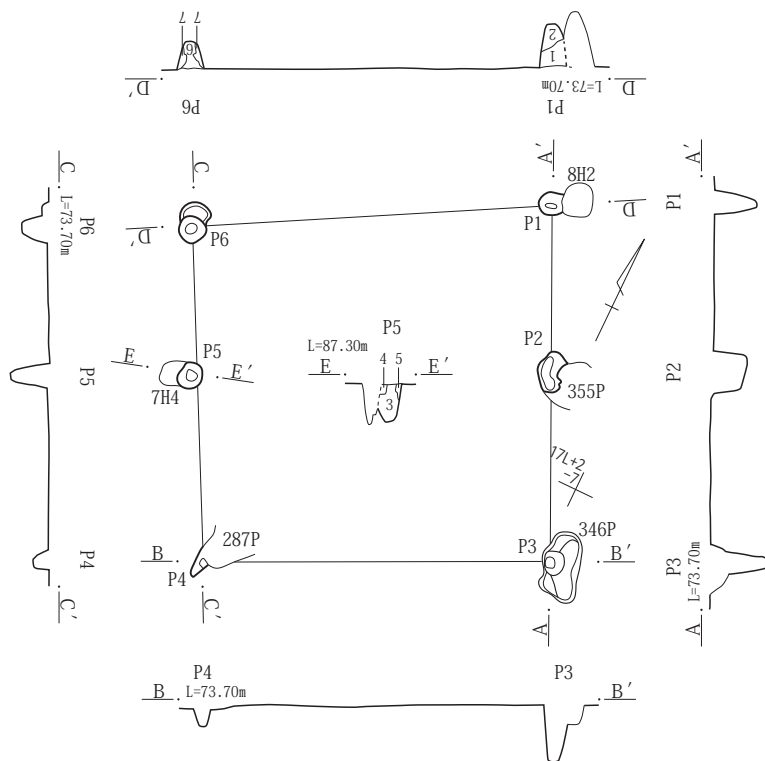
第4章 発掘調査の記録

第151表 3区4号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		2×2間・南北棟			面積	20.35㎡		旧ピット番号
主軸方位		N-32°~36°-W			位置	17K・L-6・7		
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)		
		長径	短径	深さ				
東辺 4.98	P 1	76	42	63	隅丸長方形	2.86	184	
	P 2	32	(25)	43	楕円形	2.12	242	
南辺 3.92	P 3	30	29	40	円形	3.92	251	
西辺 4.90	P 4	55	45	15	不定形	1.97	427・443	
	P 5	51	45	40	隅丸方形	2.93	450	
北辺 4.32	P 6	39	(33)	11	円形	2.38	469	
	P 7	49	33	31	楕円形	P 7へ1.96	186	

第152表 3区5号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		1×2間・東西棟か			面積	11.09㎡		旧ピット番号
主軸方位		N-59°~60°-E			位置	17K・L-6・7		
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)		
		長径	短径	深さ				
北辺 3.55	P 1	58	(55)	24	隅丸方形	1.85	308	
	P 2	44	35	22	楕円形	1.70	304	
東辺 3.12	P 3	41	30	44	楕円形	3.12	337	
南辺 3.82	P 4	42	30	45	楕円形	3.82	297	
西辺 2.90	P 5	60	34	39	隅丸長方形	P 1へ2.90	193・202	



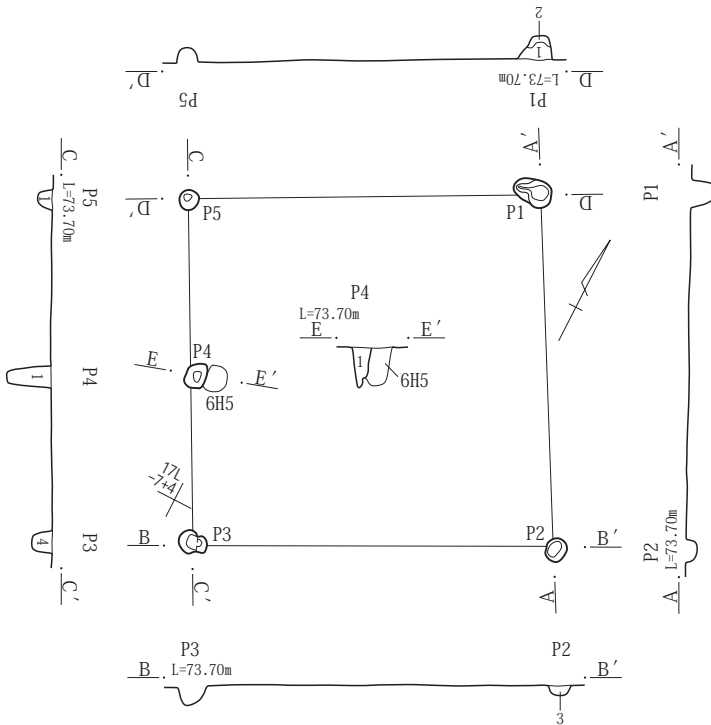
6号掘立柱建物

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
- 3 暗褐色土 ロームブロック含む。
- 4 黄白色土
- 5 暗褐色土
- 6 暗褐色土 ローム粒子含む。
- 7 黄褐色土

第270図 3区6号掘立柱建物

第153表 3区6号掘立柱建物 計測表

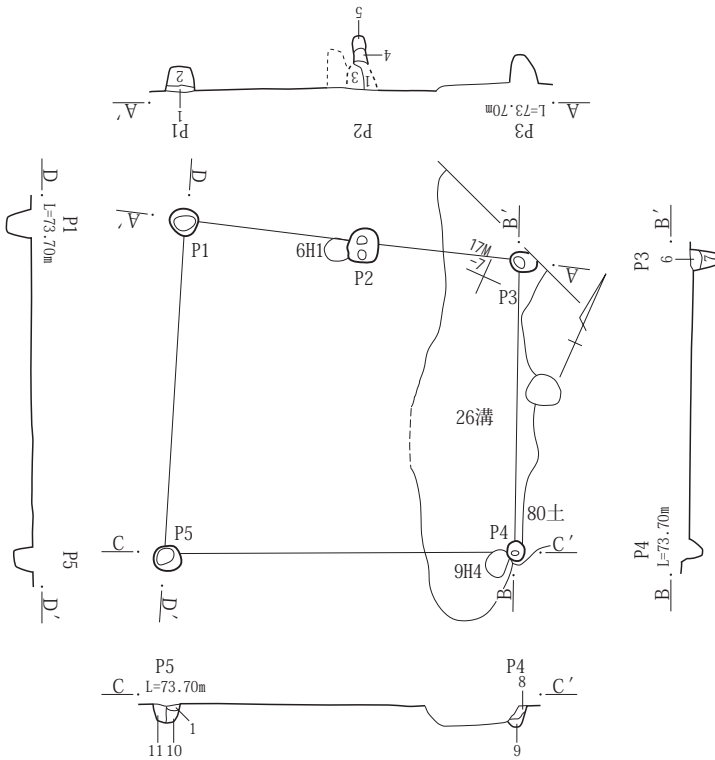
建物全体の規模		1×2間・正方形			面積	13.82㎡		旧ピット番号
主軸方位		N-25°~27°-W			位置	17K・L-6・7		
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)		
		長径	短径	深さ				
東辺 3.77	P 1	(25)	24	46	不明(重複)	1.78	348	
	P 2	44	(26)	36	不明(重複)	2.00	354	
南辺 3.70	P 3	26	22	61	隅丸長方形	3.70	346	
西辺 3.56	P 4	23	15	18	不明	2.00	287	
	P 5	28	24	40	隅丸方形	1.56	312	
北辺 3.84	P 6	43	28	29	不定形	P 1へ3.84	195	



7号掘立柱建物

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒微量に含む。
- 3 暗褐色土 ロームブロックやや多量に含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子少量に含む。

第271図 3区7号掘立柱建物



8号掘立柱建物

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。
- 2 黒褐色土 ローム大ブロックやや多量に含む。
- 3 暗褐色土 硬くしまる。褐色土小ブロック多量に含む。
- 4 暗褐色土 均質。
- 5 暗褐色土+ロームブロック。
- 6 暗褐色土 ローム大ブロック多量に含む。
- 7 黒褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 8 暗褐色土 ロームブロック多量に含む。
- 9 暗褐色土 サラサラする。ローム粒子少量に含む。
- 10 黄褐色土
- 11 黄褐色土 ローム粒子含む。

第272図 3区8号掘立柱建物

第154表 3区7号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		1×2間・正方形			面積	14.12㎡	旧ピット番号
主軸方位		N-28°~29°-W			位置	17K・L-6~8	
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
東辺 3.77	P 1	41	28	24	楕円形	3.77	335
南辺 3.85	P 2	25	21	11	楕円形	3.85	398
西辺 3.66	P 3	31	29	21	不定形	1.75	295
	P 4	26	19	46	隅丸方形	1.91	311
北辺 3.75	P 5	21	20	15	円形	P 1へ3.75	310

第155表 3区8号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		1×2間・正方形			面積	12.15㎡	旧ピット番号
主軸方位		N-66~73°-E			位置	17L・M-6・7	
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
北辺 3.59	P 1	30	28	27	円形	1.90	345
	P 2	36	31	59	隅丸方形	1.70	349
東辺 3.08	P 3	30	22	30	楕円形	3.08	462
南辺 3.73	P 4	22	18	15	楕円形	3.73	298
西辺 3.56	P 5	30	29	20	円形	P 1へ3.56	296

柱穴の径は約30前後が主体で、深さも42cmのP 5を除き、17~33cmと浅い。P 1・6は底面が柱部分で段になっており、掘り方の特徴か柱の抜き取りが想定される。詳細な規模は第156表のとおり。中世以降の遺物は出土していない。

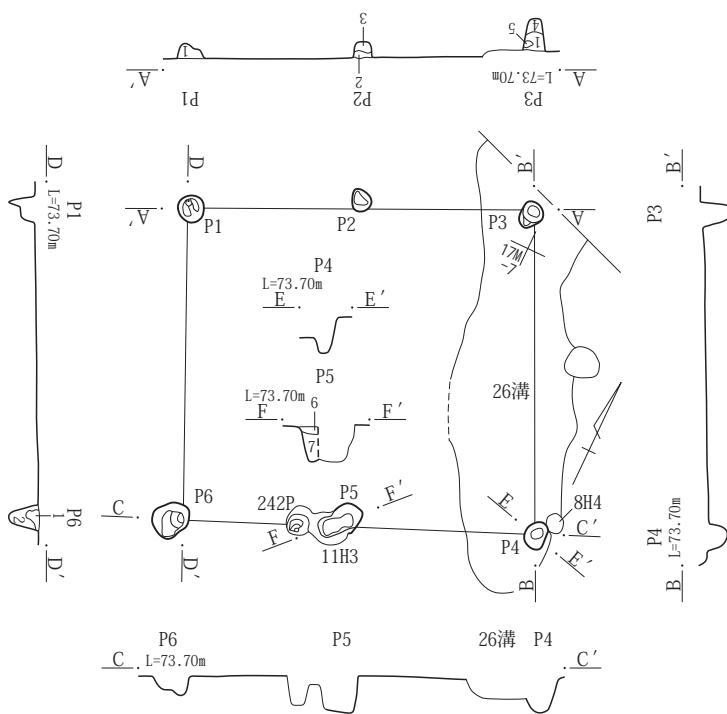
10号掘立柱建物(第274図、P L .96、第157表)

位置 17L・M-6・7グリッド。

重複 P 4は11号掘立柱建物P 4と、P 5は22号溝と、P 6は303号ピットと重複するが新旧関係不明。

主軸方位 N-21~22°-W 面積 15.19㎡

形態 2×2間・正方形。東辺が西辺より11cm短いため、



第273図 3区9号掘立柱建物

9号掘立柱建物

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子含む。
- 3 暗褐色土 黄白色土ブロック・ローム粒子含む。
- 4 黒褐色砂質土 ローム粒微量に含む。
- 5 ロームブロック
- 6 暗褐色土 ローム粒子多量、炭化物含む。
- 7 黄褐色土

第156表 3区9号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		1×2間・東西棟			面積	12.65㎡	旧ピット番号
主軸方位		N-65~67°-E			位置	17L・M-6・7	
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
北辺 3.67	P 1	29	28	28	円形	1.84	351
	P 2	25	20	17	楕円形	1.85	301
東辺 3.44	P 3	29	24	33	楕円形	3.44	334
南辺 3.76	P 4	30	22	22	楕円形	2.04	347
	P 5	(30)	30	42	不明(重複)	1.73	279
西辺 3.37	P 6	41	34	21	隅丸方形	P 1へ3.37	182

北辺は東下がり傾く。東辺の中間柱P2は12cm南に寄る。北辺の中間柱P6は24cm西に寄る。柱痕も見られず、埋没土に特徴的なものはない。柱穴は径・深さとも30cm前後が主体である。詳細な規模は第157表のとおり。中世以降の遺物は出土していない。

11号掘立柱建物(第275図、P L .96・97、第158表)

位置 17L-7・8グリッド。

重複 P2は352号ピットと、P3は4号掘立柱建物P2、9号掘立柱建物P5と、P4は10号掘立柱建物P4、236号ピットと、P5は22号溝と重複するが新旧関係不明。

主軸方位 N-25~27°-W 面積 10.70㎡

形態 1×2間・南北棟。東辺は西辺より16cm短く北辺は東下がり傾く。東辺の中間柱P2は5cm南に寄る。

P1・3で柱痕が残る。P5の長径が52cmと長く、柱の抜き取りも想定できる。柱穴の径は30cm前後が基本とみられる。深さは19~57cmと、ばらつきがある。詳細な規模は第158表のとおり。中世以降の遺物は出土していない。

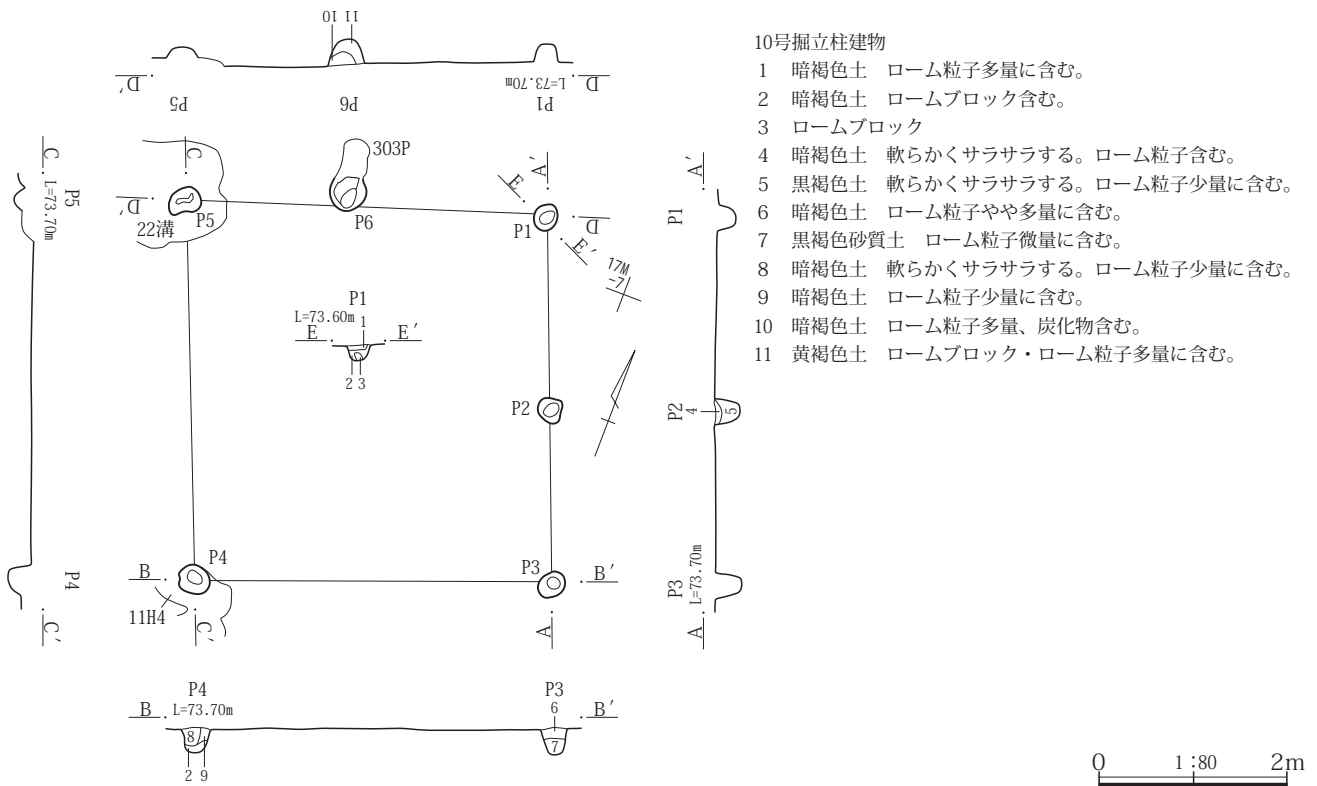
12号掘立柱建物(第276図、P L .96・97、第159表)

位置 17K・L-7・8グリッド。

重複 22号溝と重複するが、柱穴は直接重複せず新旧関係不明。

主軸方位 N-69~70°-E 面積 14.00㎡

形態 1×3間・東西棟。東辺は西辺より15cm狭く、北辺がやや東下がり傾く。東西辺は2.5mと狭いため、平面形は細長く見える。桁行柱間を平均すると約1.8483

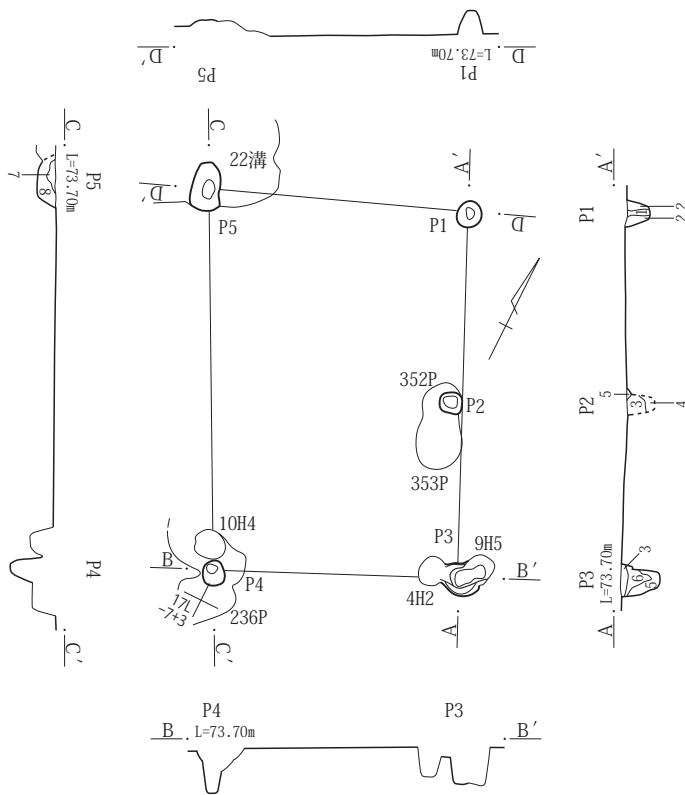


第274図 3区10号掘立柱建物

第157表 3区10号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		2×2間・正方形			面積	15.19㎡	旧ピット番号
主軸方位		N-21~22°-W			位置	17L・M-6・7	
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
東辺 3.91	P 1	30	25	18	楕円形	2.07	258
	P 2	26	24	25	隅丸方形	1.84	299
南辺 3.80	P 3	30	25	27	楕円形	3.80	397
西辺 4.02	P 4	35	30	23	楕円形	4.02	305
北辺 3.86	P 5	36	26	(11)	楕円形	1.74	—
	P 6	38	38	26	楕円形	P 1へ2.13	179

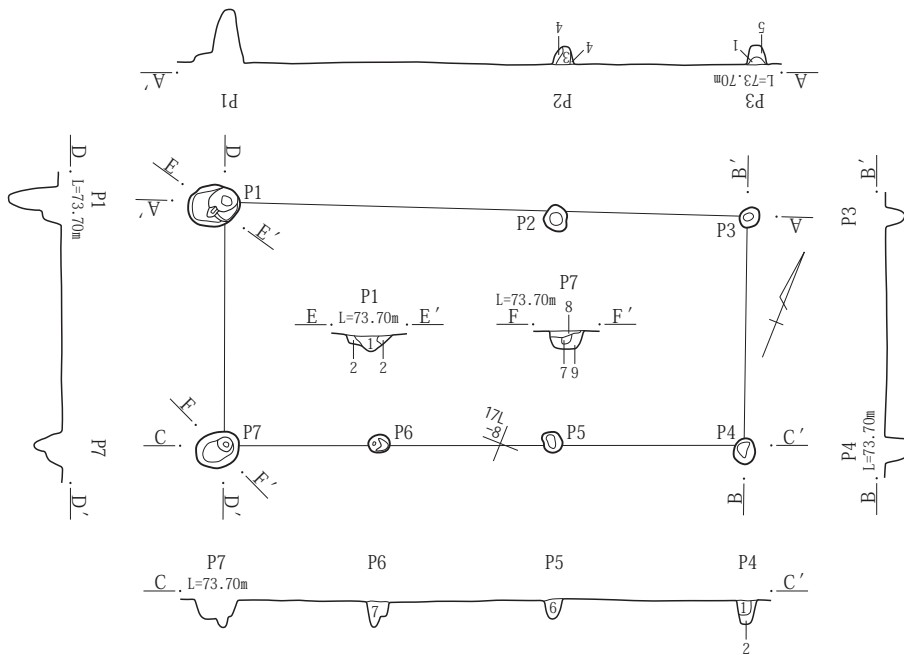
第4章 発掘調査の記録



11号掘立柱建物

- 1 暗褐色土 軟らかくサラサラする。
- 2 黄褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量に含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子微量に含む。
- 4 黒褐色土 ローム大ブロックやや多量に含む。
- 5 灰褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 6 黒褐色土 ローム粒子少量に含む。
- 7 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。
- 8 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。

第275図 3区11号掘立柱建物



12号掘立柱建物

- 1 暗褐色土 軟らかくサラサラする。ローム粒子少量に含む。
- 2 黄褐色土 ロームブロック少量に含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒子多量に含む。
- 5 暗褐色土
- 6 灰褐色土 暗褐色土含む。
- 7 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。
- 8 暗褐色土 ローム粒子微量に含む。
- 9 黒褐色土+褐色土

第276図 3区12号掘立柱建物

第158表 3区11号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		1×2間・南北棟			面積	10.70m <sup>2</sup>	旧ビット番号
主軸方位		N-25°~27°-W			位置	17L-7・8	
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ビットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
東辺 3.86	P 1	29	26	24	楕円形	2.00	185
	P 2	24	23	29	隅丸方形	1.88	352
南辺 2.63	P 3	(40)	34	40	不明(重複)	2.63	197
西辺 4.02	P 4	26	20	57	隅丸方形	4.02	220
北辺 2.80	P 5	52	29	19	楕円形	P 1へ2.80	-

第159表 3区12号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		1×3間・東西棟			面積	14.00㎡	旧ピット番号
主軸方位		N-69°~70°-E			位置	17K・L-7・8	
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
北辺 5.57	P 1	56	40	54	楕円形	3.53	147
	P 2	29	26	19	楕円形	2.05	255
東辺 2.45	P 3	23	20	19	楕円形	2.45	196
南辺 5.52	P 4	27	23	26	楕円形	2.05	266
	P 5	22	20	20	隅丸方形	1.89	288
	P 6	23	18	28	円形	1.58	425
西辺 2.60	P 7	49	34	40	楕円形	P 1へ2.60	464

m・約6.2尺で、南北辺のP 2・5はともに西へ20cm寄り、東側1間分を広く採っている。北辺は西から1間めの柱穴を省略し、南辺のP 6は西へ約27cm寄る。柱痕も見られず、埋没土に特徴的なものはない。P 1・7は長径が15cm程度長く底部も段があり、柱が抜き取られた可能性がある。柱穴の径は30cm弱が基本とみられる。深さもP 1・7が54cm、40cmと深く、他は20cm程度である。P 1・7は22号溝を超えて西側に及んでおり、地表面の段差などの影響も想定される。詳細な規模は第159表のとおり。中世以降の遺物は出土していない。

13号掘立柱建物(第277図、P L .96・97、第160表)

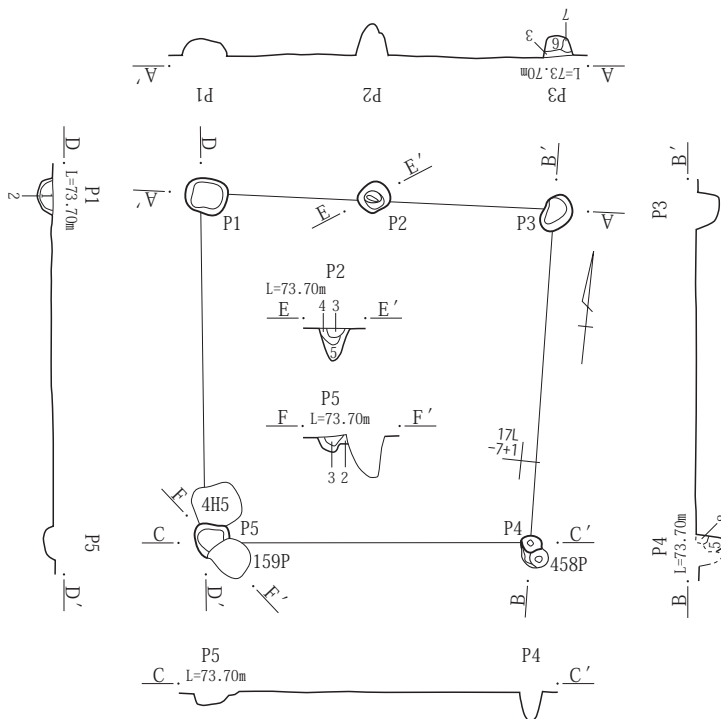
位置 17K・L-7グリッド。

**重複** P 5は4号掘立柱建物P 5、159号ピットと重複するが新旧関係不明。

**主軸方位** N-85°~86°-E。本遺構だけ方位が極端に異なる。

**面積** 12.92㎡

**形態** 1×2間・正方形。東辺が西辺より13cm短いため、北辺がやや西上がりに傾く。南辺は北辺より31cm短いため、東辺は東へ外傾する。北辺の中間柱P 2は9cm西に寄る。柱痕も見られず、埋没土に特徴的なものはない。柱穴の径は40cm前後が基本であり、深さは30cm前後が主体で、P 1・5はやや浅い。詳細な規模は第160表のとおり。中世以降の遺物は出土していない。



13号掘立柱建物

- 1 暗褐色土 ローム粒子含む。
- 2 黄褐色土
- 3 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。
- 4 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
- 5 黒褐色砂質土 ローム粒子微量に含む。
- 6 暗褐色土 軟らかい。ローム粒子含む。
- 7 黄褐色土 ロームブロック・ローム粒子含む。
- 8 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。

第277図 3区13号掘立柱建物

第160表 3区13号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		1×2間・正方形			面積	12.92㎡	旧ピット番号
主軸方位		N-85°~86°-E			位置	17K・L-7	
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
北辺 3.73	P 1	46	37	17	隅丸方形	1.78	309
	P 2	34	29	33	隅丸方形	1.95	461
東辺 3.55	P 3	41	28	24	楕円形	3.55	253
南辺 3.42	P 4	(20)	19	29	楕円形	3.42	465
西辺 3.68	P 5	37	(36)	14	不明	P 1へ3.68	426

(2)土坑

土坑32基中20基が隅丸長方形・同細長方形及び溝状であり、位置は18・28号溝に挟まれた東西約18mの範囲で、南北約10mの幅に13基が集中している。この分布はピット群と共通点がある。ほかに屋敷内に4基、屋敷外近くに3基が点在する。

円形のもの5基で、このうち整った円形の46号土坑は屋敷内に位置する。他に不整形な土坑7基があり、いずれも屋敷内で他の土坑の周辺に位置する。

45号土坑(第278図、P L .104)

**位置** 17I-8グリッド。平面形は隅丸長方形。主軸方位はN-21°-W。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸193cm短軸95cm深さ17cmである。中世以降の遺物は出土していない。

46号土坑(第278図、P L .104、第161表)

**位置** 17K-8グリッド。平面形は整った円形。壁はやや斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没状況不詳。中央部底面近くから、1の在地系土器鍋が出土する。規模は長径111cm短径110cm深さ13cmである。出土遺物から14世紀後半を上限とすると考えられる。

47号土坑(第278図、P L .104)

**位置** 17G-3グリッド。平面形は不整形隅丸長方形。主軸方位はN-29°-E。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没状況不詳。規模は長軸77cm短軸37cm深さ8cmである。中世以降の遺物は出土していない。

48号土坑(第278図、P L .104)

**位置** 17J・K-6グリッド。平面形は両端の丸い細長方形。主軸方位はN-14°-W。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸230cm短軸83cm深さ11cmである。中世以降の遺物は出土していない。

49号土坑(第278図、P L .104)

**位置** 17H-5グリッド。平面形はほぼ円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は丸みを持つ。自然埋没と思われる。規模は長径106cm短径85cm深さ20cmである。中世以降の遺物は出土していない。

50・51・55号土坑(第278図、P L .105)

**50号土坑 位置** 17K-6グリッド。51号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は両端の丸い細長方形。主軸方位はN-77°-E。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックをやや多量に含み人為埋没か。規模は長軸236cm短軸80cm深さ21cmである。中世以降の遺物は出土していない。

**51号土坑 位置** 17J・K-6・7グリッド。50・55号土坑、192号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸細長方形。主軸方位はN-76°-E。壁は垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸410cm短軸117cm深さ25cmである。

**55号土坑 位置** 17J・K-6・7グリッド。51号土坑と重複するが新旧関係不明。上位は削平を受け、外形は乱れる。主軸方位はN-75°-E。壁は緩やかに立ち上がる。底面はやや凸凹する。埋没状況不詳。規模は長径408cm短径92cm深さ8cmである。中世以降の遺物は出土していない。

52・54・56・66・74号土坑(第278図、P L .105・106)

**52号土坑 位置** 17J-7グリッド。66号土坑、215・219号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸長方形。主軸方位はN-17°-W。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸320cm短軸108cm深さ16cmである。中世以降の遺物は出土していない。

**54号土坑 位置** 17J-7グリッド。56号土坑より後出で、66号土坑、222号ピットと重複するが新旧関係不明。

平面形は隅丸長方形。主軸方位はN-20°-W。壁は斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹し、北西に軽微な段差を持つ。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸(314)cm短軸(130)cm深さ23cmである。中世以降の遺物は出土していない。

**56号土坑** 位置 17I・J-7グリッド。54号土坑より前出で、66号土坑、221・222号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は歪な隅丸長方形。主軸方位はN-12°-W。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや凸凹する。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸322cm短軸167cm深さ20cmである。中世以降の遺物は出土していない。

**66号土坑** 位置 17J-7グリッド。52・54・56号土坑、215・219号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は歪んだ円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没状況不詳。規模は長径124cm短径78cm深さ24cmである。中世以降の遺物は出土していない。

**74号土坑** 位置 17I-7グリッド。56号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は長楕円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没状況不詳。規模は長径86cm短径46cm深さ40cmである。中世以降の遺物は出土していない。

**53・58号土坑**(第279図)

**53号土坑** 位置 17J・K-5グリッド。58号土坑、180号ピットと重複するが新旧関係不明。北側は重複により不明となるが、平面形はほぼ隅丸長方形。主軸方位はN-15°-W。外形は乱れる。壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没状況不詳。規模は長軸(137)cm短軸80cm深さ9cmである。中世以降の遺物は出土していない。

**58号土坑** 位置 17K-5・6グリッド。53号土坑、28号溝、471号ピットと重複するが新旧関係不明。東端は28号溝と重複して不明となるが、平面形は隅丸細長方形。主軸方位はN-80°-E。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、西端から約2m付近に軽微で丸みのある段差がある。この段差を境に東西2基の土坑に分かれる可能性もある。埋没状況不詳。規模は長軸380cm短軸88cm深さ14cmである。中世以降の遺物は出土していない。

**57号土坑**(第278図)

**位置** 17I・J-6グリッド。平面形は両端の丸い細長

方形。主軸方位はN-20°-W。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、南半部は段差を持って下がる。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸354cm短軸118cm深さ31cmである。中世以降の遺物は出土していない。

**60号土坑**(第279図、P L .105)

**位置** 17G-4グリッド。平面形はほぼ円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや凸凹し、中央北寄りに径30cm・高さ5cm程度の円形の高まりがある。また、中央部に深さ10cm程度のピット状の落ち込みがある。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長径165cm短径164cm深さ35cmである。中世以降の遺物は出土していない。

**61号土坑**(第279図、P L .105)

**位置** 17J-8グリッド。264・290・291号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は歪な方形。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦で、中央部に軽微な段差を持つ。埋没土はしまり、確認面東端に集石を伴う。規模は長軸250cm短軸178cm深さ18cmである。中世以降の遺物は出土していない。

**62・68号土坑**(第279図)

**62号土坑** 位置 17J-5グリッド。68号土坑、188・259・260号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は重複により不明。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は凸凹し、植物攪乱著しい。埋没状況不詳。規模は長径(66)cm短径60cm深さ35cmである。中世以降の遺物は出土していない。

**68号土坑** 位置 17J-5グリッド。62号土坑、226・241・260・271・302号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形はほぼ隅丸長方形。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没状況不詳。規模は長軸195cm短軸86cm深さ9cmである。中世以降の遺物は出土していない。

**63号土坑**(第279図、P L .105)

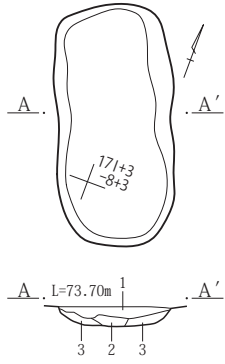
**位置** 17J-4グリッド。平面形は隅丸長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸110cm短軸63cm深さ11cmである。中世以降の遺物は出土していない。

**64・67号土坑**(第279図、P L .105)

**64号土坑** 位置 17H・I-3グリッド。67号土坑、224・380号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸細長方形。主軸方位はN-19°-W。壁はほぼ垂直



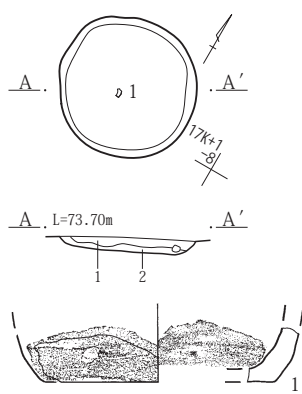
45号土坑



45号土坑

- 1 暗褐色砂質土 ややしまる。ローム粒子微量に含む。
- 2 暗褐色砂質土 しまる。ローム小ブロック多量に含む。
- 3 黒褐色砂質土 ややしまる。ローム粒子少量に含む。

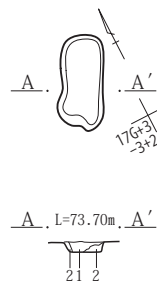
46号土坑



46号土坑

- 1 暗褐色砂質土 ややしまる。ローム粒少量に含む。
- 2 暗褐色粘質土 ローム粒微量に含む。

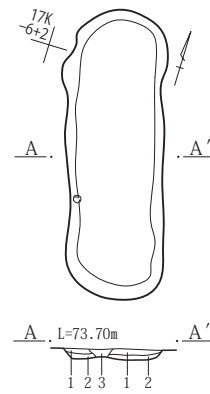
47号土坑



47号土坑

- 1 暗褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。
- 2 褐色土 軟らかく粘性あり。

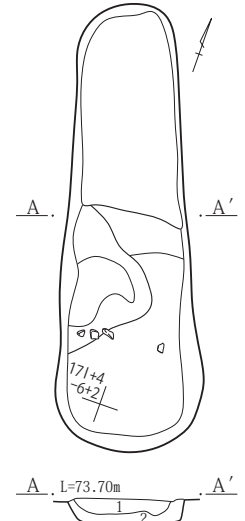
48号土坑



48号土坑

- 1 黒褐色砂質土 ややしまる。ローム粒子少量に含む。
- 2 黒褐色砂質土 ややしまる。
- 3 暗褐色土 軟らかく粘性あり。灰褐色土小ブロックやや多量に含む。

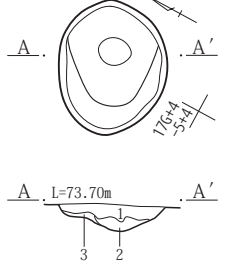
57号土坑



57号土坑

- 1 暗褐色土 軟らかくしまり良い。ローム粒子含む。
- 2 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ローム粒子多量に含む。

49号土坑



49号土坑

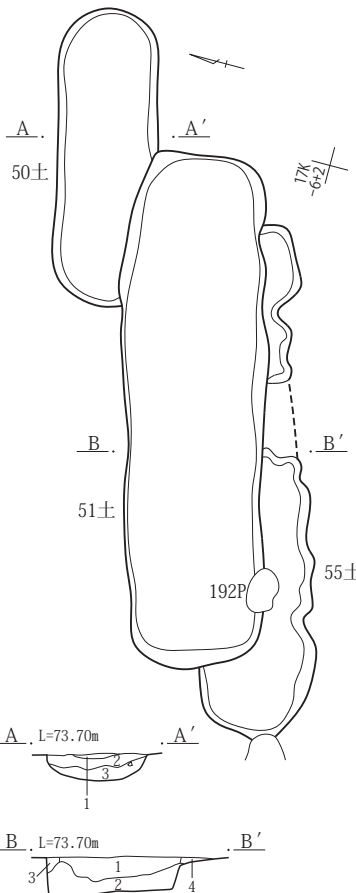
- 1 暗褐色土 ややしまり粘性あり。黄色粒子微量に含む。
- 2 暗褐色土 ややしまる。ローム小ブロック微量に含む。
- 3 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ローム小ブロック多量に含む。

50号土坑

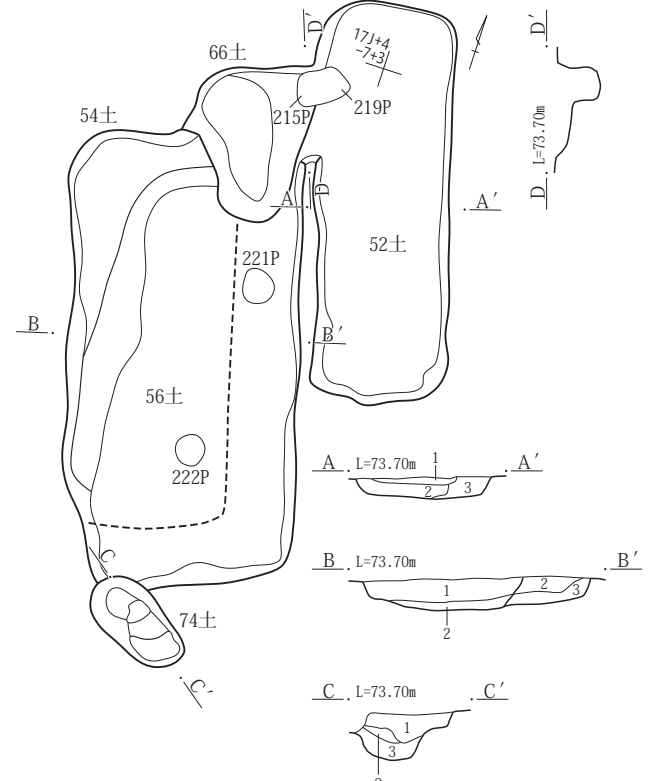
- 1 暗褐色土 均質。サラサラする。
- 2 暗褐色土 サラサラする。ローム粒子少量に含む。
- 3 黒褐色砂質土 サラサラする。ローム小ブロックやや多量に含む。

51・55号土坑

- 1 暗褐色土 サラサラする。ローム粒子少量に含む。
- 2 暗褐色土 やや硬くしまる。ロームブロック・ローム粒子含む。
- 3 暗褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。
- 4 暗褐色土



52・54・56・66・74号土坑



52号土坑

- 1 暗褐色土 軟らかくサラサラする。ローム粒子含む。
- 2 灰褐色土 軟らかくサラサラする。ローム粒子含む。
- 3 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ローム粒子含む。

54・56号土坑

- 1 暗褐色土 軟らかくサラサラする。ロームブロック・炭化物粒子少量に含む。
- 2 暗褐色土 軟らかい。ローム粒子少量に含む。
- 3 暗褐色土 やや硬くしまる。ロームブロック・ローム粒子含む。

74号土坑

- 1 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ローム粒子少量に含む。
- 2 暗褐色土 非常に軟らかく粘性あり。褐色土ブロック含む。
- 3 暗褐色土 非常に軟らかく粘性あり。ロームブロック含む。

第278図 3区1号屋敷内土坑(1)と46号土坑出土遺物

0 1:60 2m

第161表 3区46号土坑出土遺物

挿 図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第278図	1	在地系 土器	内耳鍋	+5cm	-	-	-	底部片	B	灰・灰 白	断面と外面体部下端以下の器表は灰白色、内面と体部 外面下端以上の器表は灰色。体部外面下端は鏡撫で。 残存部が少なく平底か丸底か不明。	中世

に立ち上がる。底面は平坦。埋没状況不詳。規模は長軸280cm短軸71cm深さ8cmである。中世以降の遺物は出土していない。

**67号土坑** 位置 17H・I-3・4グリッド。64号土坑、380号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は不整円形。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。自然埋没と思われる。規模は長径141cm短径109cm深さ20cmである。中世以降の遺物は出土していない。

**65号土坑**(第279図、P L .105)

**位置** 17K-2グリッド。平面形は両端の丸い細長方形。主軸方位はN-70°-E。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸153cm短軸53cm深さ16cmである。中世以降の遺物は出土していない。

**70号土坑**(第279図)

**位置** 17J・K-4・5グリッド。28号溝、284・317・403・472号ピットと重複するが新旧関係不明。重複により東端が不明となるが、平面形は隅丸長方形か。主軸方位はN-70°-E。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸(245)cm短軸100cm深さ15cmである。中世以降の遺物は出土していない。

**71号土坑**(第279図、P L .106)

**位置** 17J-8・9グリッド。平面形は溝状。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸187cm短軸57cm深さ7cmである。中世以降の遺物は出土していない。

**73・77号土坑**(第279図、P L .106)

**73号土坑** 位置 17I-7グリッド。77号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は不整形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は凸凹する。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長径80cm短径54cm深さ23cmである。中世以降の遺物は出土していない。

**77号土坑** 位置 17I-7グリッド。73号土坑と重複す

るが新旧関係不明。平面形は不整長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は凸凹する。埋没土中に川原石やや多く含む。自然埋没と思われる。規模は長軸89cm短軸46cm深さ28cmである。中世以降の遺物は出土していない。

**75号土坑**(第279図、P L .106)

**位置** 17L-9グリッド。平面形は隅丸長方形。主軸方位はN-61°-E。壁は斜めに立ち上がる。西端にピット状の落ち込みがあり、底面は東壁から傾斜する。埋没状況不詳。規模は長軸86cm短軸40cm深さ20cmである。中世以降の遺物は出土していない。

**78・81号土坑**(第280図、P L .106)

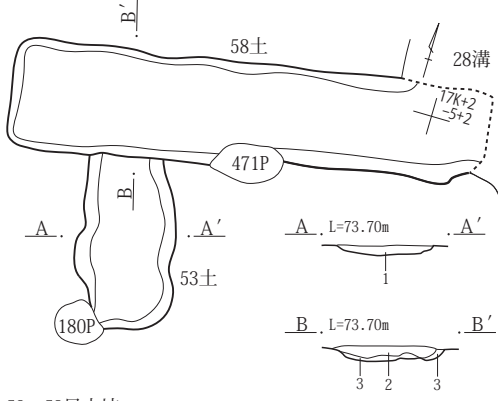
**78号土坑** 位置 17L-6グリッド。336号ピットより前出で、467号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸長方形。主軸方位はN-34°-W。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。規模は長軸175cm短軸103cm深さ28cmである。中世以降の遺物は出土していない。

**81号土坑** 位置 17L-5グリッド。467・468号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は不整形。壁は緩やかに立ち上がる。底面は凸凹する。埋没状況不詳。規模は長径90cm短径86cm深さ12cmである。中世以降の遺物は出土していない。

**80号土坑**(第280図、P L .107)

**位置** 17L-6グリッド。8号掘立柱建物P 4、292・324号ピット、26号溝と重複するが新旧関係不明。平面形は重複により不明。壁は緩やかに立ち上がる。底面は凸凹する。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長径207cm短径(100)cm深さ7cmである。中世以降の遺物は出土していない。

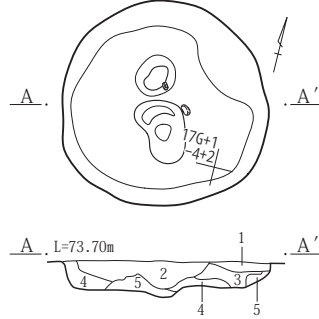
53・58号土坑



53・58号土坑

- 1 暗褐色土 軟らかくサラサラする。ローム粒子含む。
- 2 暗褐色土 ややしまり粘性あり。ローム粒子微量に含む。
- 3 灰褐色土 ややしまりやや砂質。ローム大ブロックやや多量に含む。

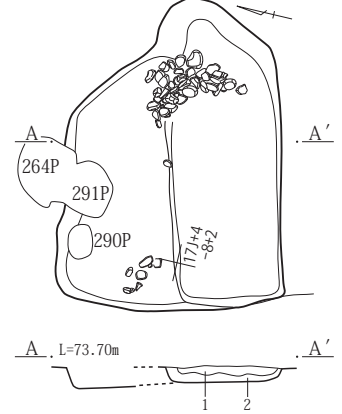
60号土坑



60号土坑

- 1 灰褐色砂質土 しまる。ローム小ブロック少量に含む。
- 2 暗褐色土 しまり粘性あり。ローム小ブロックやや多量に含む。
- 3 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ローム粒子少量に含む。
- 4 暗褐色土 ややしまり粘性あり。褐色土大ブロック多量に含む。
- 5 褐色土 しまり粘性あり。黄色粒子微量に含む。

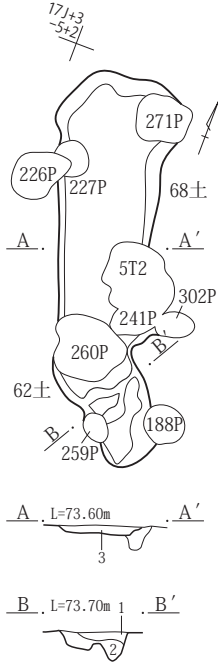
61号土坑



61号土坑

- 1 灰褐色砂質土 しまる。
- 2 灰褐色土 ややしまる。ローム小ブロック少量に含む。

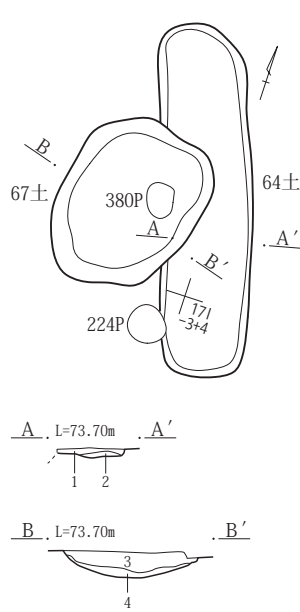
62・68号土坑



62・68号土坑

- 1 暗褐色土 硬くしまり粘性あり。ローム粒子微量に含む。
- 2 暗褐色土 ややしまり粘性あり。ローム小ブロックやや多量に含む。
- 3 暗褐色土 やや硬くしまる。ローム粒子・炭化物粒子含む。

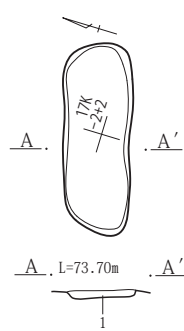
64・67号土坑



64・67号土坑

- 1 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ロームブロック・炭化物粒子含む。
- 2 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ローム多量に含む。
- 3 暗褐色土 軟らかくしまり良い。ローム粒子・炭化物粒子含む。
- 4 暗褐色土 粘性あり。ロームブロック含む。

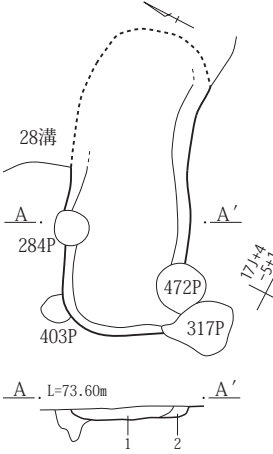
65号土坑



65号土坑

- 1 暗褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。ロームブロック多量に含む。

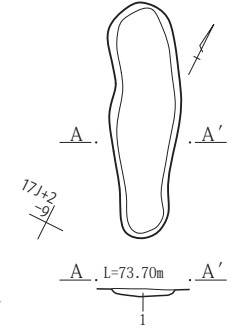
70号土坑



70号土坑

- 1 暗褐色土 軟らかい。ロームブロック・ローム粒子含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量に含む。

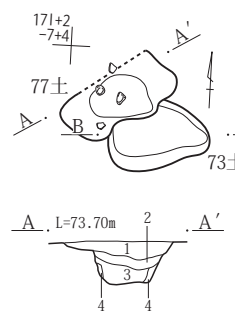
71号土坑



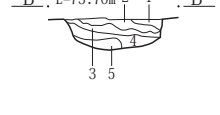
71号土坑

- 1 暗褐色土 軟らかくサラサラする。ローム粒子少量に含む。

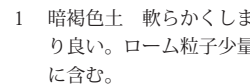
73・77号土坑



73号土坑



75号土坑



- 1 暗褐色土 軟らかくしまり良い。ローム粒子少量に含む。

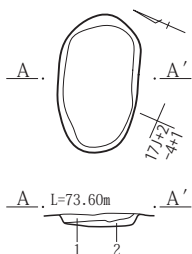
77号土坑

- 1 暗褐色土 サラサラする。ローム粒子微量に含む。
- 2 暗褐色土 ややしまり粘性あり。ローム粒子少量に含む。
- 3 黒褐色土 軟らかく粘性あり。ローム粒子少量に含む。
- 4 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ローム小ブロック多量に含む。

73号土坑

- 1 暗褐色土 軟らかい。ローム粒子少量に含む。
- 2 黄褐色土 軟らかく粘性あり。ロームブロック・ローム粒子多量に含む。
- 3 黒褐色土 軟らかく粘性あり。ローム粒子多量に含む。
- 4 黄褐色土 非常に軟らかく粘性あり。ローム多量に含む。
- 5 暗褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。ローム粒子含む。

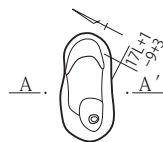
63号土坑



63号土坑

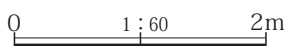
- 1 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ロームブロック・炭化物粒子含む。
- 2 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ローム多量に含む。

75号土坑



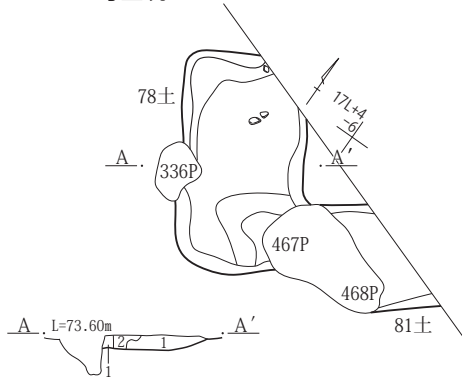
75号土坑

- 1 暗褐色土 軟らかくしまり良い。ローム粒子少量に含む。

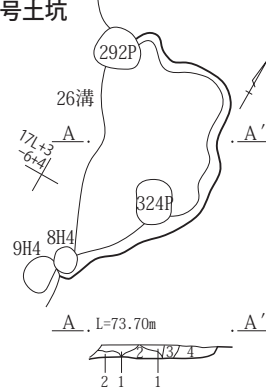


第279図 3区1号屋敷内土坑(2)

78・81号土坑



80号土坑

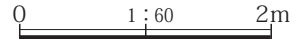


78号土坑

- 1 黒褐色砂質土 ややしまる。ローム大ブロックやや多量に含む。
- 2 暗褐色土 ややしまり粘性あり。ローム大ブロックやや多量に含む。

80号土坑

- 1 暗褐色土 ややしまり粘性あり。ローム粒子少量に含む。
- 2 褐色土 軟らかく粘性あり。暗褐色土小ブロック多量に含む。
- 3 褐色土 ややしまり粘性あり。
- 4 暗褐色土 軟らかくしまり良い。ローム粒子・炭化物粒子含む。



第280図 3区1号屋敷内土坑(3)

(3)井戸

1号屋敷に關係する井戸は2基であり、ともに建物・土坑などの分布域から外れる。特に5号井戸は屋敷の北限となる30号溝と一部重複するが、位置は外側となる。2基ともに調査区北端に位置し、工業団地に入入りする

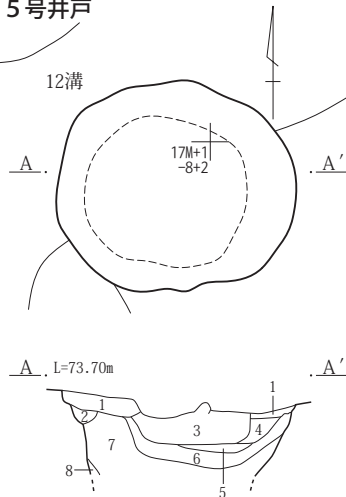
大型貨物車が頻繁に通行しており、安全面から完掘されていない。

5号井戸(第281図、P.L.161、第162表)

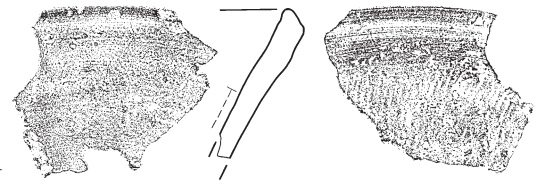
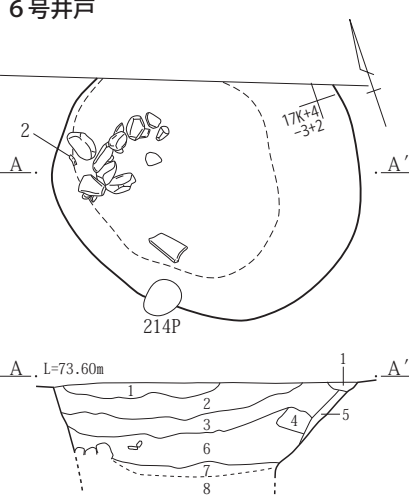
位置 17M-8グリッド。

重複 12号溝と重複するが新旧関係不明。

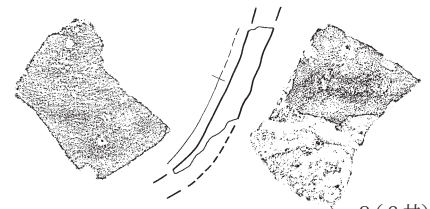
5号井戸



6号井戸



1(5井)



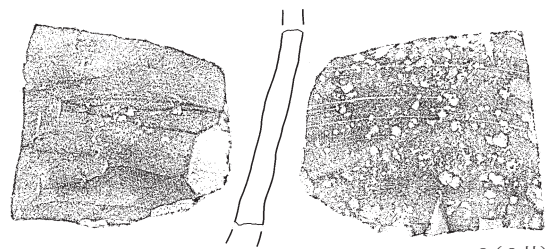
2(6井)

5号井戸

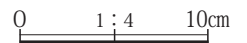
- 1 灰褐色土 しまり粘性あり。ローム粒子微量に含む。
- 2 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ローム小ブロックやや多量に含む。
- 3 暗褐色土 しまり粘性あり。細粒白色粒子微量に含む。
- 4 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ローム粒微量に含む。
- 5 黒褐色土 軟らかく粘性あり。均質。
- 6 黒褐色土 軟らかく粘性あり。ローム小ブロックやや多量に含む。
- 7 暗褐色土 軟らかい。ローム粒子微量に含む。
- 8 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ローム小ブロック多量に含む。

6号井戸

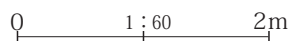
- 1 暗褐色土 ややしまりやや砂質。ローム粒子少量、黄色粒子微量に含む。
- 2 暗褐色土 ややしまりやや砂質。ローム小ブロック多量、黒褐色土小ブロックやや多量、黄色粒子微量に含む。
- 3 暗褐色土 ややしまりやや砂質。ローム大ブロックやや多量、黄色粒子微量に含む。
- 4 暗褐色土+黒褐色土 ややしまり砂質。
- 5 暗褐色砂質土 軟らかい。ローム小ブロック多量に含む。
- 6 暗褐色土 ややしまりやや砂質。礫多量、ローム小ブロックやや多量、黒褐色土小ブロック少量に含む。



3(6井)



- 7 暗褐色砂質土 しまりなし。黒褐色土大ブロック多量に含む。
- 8 黒褐色砂質土 しまりなし。



第281図 3区5・6号井戸と出土遺物

第162表 3区5・6号井戸出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第281図 PL.161	1	在地系 土器	片口鉢	5井戸	-	-	-	口縁部 片	B	灰	還元炎。断面中央は暗灰色、器表付近は灰白色、器表は灰色。体部外面は板状工具による撫でて、刷毛状痕残る。口縁部は肥厚し、端部は丸みを持って小さく突き出る。	Ⅱ期。
第281図	2	在地系 土器	片口鉢	6井戸	-	-	-	体部片	B	黒	断面は黒色、器表付近は灰白色、器表は黒色。残存部にすり目はない。使用により、内面の器表は摩滅。内面上部の器表は平滑となる。	中世。307図1と同一個体の可能性高い。
第281図	3	在地系 土器	不詳	6井戸	-	-	-	体部片	B	にぶい 黄橙	轆轤整形。内外面の器表一部斑状に剥離。	中世か。

**確認面形状と規模** 楕円形。長径1.90m短径1.65m。

**底面形状と規模・断面形** 不明。

**深さ** 0.84m以上。

**埋没状況** 詳細は不明だが、上層に乱れがあり、他遺構との重複による影響も考慮される。

**遺物** 埋没土から1の在地系土器鉢が出土する。

**時期** 出土遺物から14世紀中頃を上限とすると考えられる。

6号井戸(第281図、P L.107、第162表)

**位置** 17K-3グリッド。重複 214号ピットと重複するが新旧関係不明。

**確認面形状と規模** 楕円形か。北端は調査区域外となる。長径2.45m短径(1.83)m。

**底面形状と規模・断面形** 不明。

**深さ** 0.83m以上。

**埋没状況** 上位はロームブロックを多量に含む暗褐色土で水平に近く埋没しており、人為的に埋め戻されており、下位も同様と考えられる。

**遺物** 礫に混じって在地系土器鉢(2・3)ほか出土する。

**時期** 出土遺物から中世に比定される。

(4)ピット・柱穴列(第282～287図、P L.98・99・111～114・161、第163～172表)

ピットは1号屋敷内全体で156基あり、建物群周辺、18号溝東隣接、28号南側の3か所に集中部分があるため、これらを便宜上ピット群1～3として掲載し、残る19基を個別のピットとして扱う。なお、ピット群2・3では、直線的に並ぶ一群があり、8条の柱穴列を抽出した。詳細な規模は163～171表のとおり。

ピット群1は建物周辺に位置しており、基本的に掘立柱建物の柱穴の一部である可能性が高い。463号ピットには柱痕も認められる。また、313号ピットは深く細長

い形態であり、杭に近いものかもしれない。建物を囲む位置にある22・26号溝と呼応して並ぶものはないが、22号溝との重複は避けている。一方、26号溝は8・9号掘立柱建物が重複しており、これらと同程度に4基のピットが重複する。261号ピットの埋没土から砥石(287図3)が出土する。

ピット群2は28号溝の南北に集中する一群である。28号溝南側の一群は、分布状況から建物として復元されるものはなく、柵などが想定される部分である。こうした状況で、2～5・8・9号柱穴列6条を認定している。また、28号溝北側の一群は、北側調査区域外へ続く状況もあり、掘立柱建物の一部の可能性がある。埋没状況で特徴的なものは少なく、柱痕に近いものはあるが、埋没土の違いに乏しい。189号ピットは埋没状況不詳だが、確認面で小礫が面的に広がっており、埋没後に生じた凹みを補修した可能性が高い。柱穴列は柱穴同士の直接的な重複は少ないが、激しく重複しており、この部分を継続して遮断する意識がうかがえる。なお、8号柱穴列は走向方位も他と異なり、28号溝と一致して並走するため、相互の関連が想定できる。他のピットについても、28号溝との重複を避けている観があり、交錯しない境界部分であった可能性が高い。4・9号柱穴列は直角ではないが連結しており、関連づけられる。2号柱穴列P3、200・302号ピットの埋没土から在地系土器鉢(287図1・2・4)が出土するため、中世に比定される。また、28号溝と重複する416・418号ピットでは、在地系土器鍋(287図5・6)の大片が出土し、14世紀後半～15世紀前半に比定される。

ピット群3は18号溝東側に隣接し、数量は少なく、6・7号柱穴列を主体とする一群である。埋没状況で特徴的なものはない。2条の柱穴列は連結するが直角ではなく、単純に関連づけ難い。走向方位では6号柱穴列と4・9

号柱穴列、7号柱穴列と2号柱穴列が近似しており、周辺を含めた検討も必要となる。また、7号柱穴列は新旧関係不明ながら52・56号土坑と重複しており、同様な走向方位を持つ土坑とは関連づけ難い。一方、6号柱穴列は位置関係から、こうした土坑との関連を想定できる相

違点がある。

個別ピットについても埋没状況で特徴的なものはなく、全体に分散している。ただし、211・213・214・231・232号ピットは方形に分布し、6号井戸と一部重複するが、関連する施設であった可能性もある。

第163表 3区1号屋敷内ピット計測表(cm)

3区1号屋敷内ピット群1

ピットNo.	グリッド	長径	短径	深さ
146	17L-8	32	27	33
157	17K-7	33	30	17
158	17K-8	32	29	27
159	17K-7	40	37	45
160	17K-8	33	26	26
183	17L-7	38	30	25
194	17L-7	(55)	45	23
203	17K-7	27	22	40
236	17K-7	77	50	26
256	17L-7	30	28	44
257	17L-7	31	29	27
261	17L-7	26	22	45
262	17K-8	40	22	37
263	17K-7	27	22	39
265	17L-7	47	25	24
289	17L-7	28	27	37
292	17L-6	36	27	40
300	17L-7	35	33	35
303	17M-7	26	24	57
313	17L-7	19	18	64
324	17L-6	35	28	41
353	17L-7	(53)	48	26
355	17L-7	(42)	32	18
356	17L-7	25	22	6
440	17K-8	29	23	35
445	17K-7	34	34	32
446	17L-6	32	30	42
451	17L-7	39	26	29
452	17L-7	30	28	40
453	17L-8	35	33	38
454	17K-8	63	51	28
455	17K-8	63	43	31
457	17K-8	70	56	33
458	17K-7	25	(23)	30
459	17L-7	(40)	39	17
460	17L-8	33	29	42
463	17L-6	40	(17)	42

3区1号屋敷内ピット群2

ピットNo.	グリッド	長径	短径	深さ
168	17I-5	43	34	40
171	17I-4	44	35	40
174	17I-4	29	26	37
180	17J-5	39	35	8
187	17I-5	26	21	62
188	17J-5	34	30	24
189	17I-5	43	22	42
190	17I-4	(32)	32	49
191	17I-4	38	(25)	42
200	17J-5	35	31	62
201	17I-5	49	39	50
206	17I-5	71	(20)	51
207	17J-5	36	(21)	45
208	17J-5	40	35	54
210	17I-5	(58)	(43)	41
211	17K-4	34	30	25
216	17K-5	35	25	13
217	17J-5	30	26	12

ピットNo.	グリッド	長径	短径	深さ
218	17J-5	27	22	21
227	17J-5	29	(24)	37
229	17K-5	28	25	19
234	17I-5	35	23	30
235	17L-5	76	50	58
240	17K-5	50	32	47
241	17J-5	35	25	44
243	17L-5	45	36	37
244	17K-6	(48)	44	15
259	17J-5	25	18	60
272	17L-5	64	(54)	54
273	17L-5	73	(50)	45
274	17L-5	51	(22)	19
275	17L-5	39	29	64
281	17L-5	47	35	38
283	17J-5	29	(28)	48
284	17K-5	28	26	21
302	17J-5	32	19	24
307	17L-5	(50)	44	58
315	17K-4	45	41	30
317	17J-5	45	43	47
318	17L-5	27	21	23
319	17L-5	(53)	39	22
320	17L-5	40	38	60
321	17L-5	(30)	(21)	30
322	17L-5	28	25	51
323	17L-5	(31)	(28)	51
336	17L-5	47	36	33
350	17L-5	25	20	33
361	17J-5	51	44	42
362	17J-5	25	23	19
364	17I-5	(33)	25	13
365	17I-5	34	24	9
366	17I-5	51	42	21
367	17J-5	46	29	20
372	17I-4	29	26	14
383	17I-5	39	29	53
387	17K-5	39	28	41
388	17K-5	29	26	51
390	17I-5	43	21	33
391	17I-4	40	23	13
392	17I-4	(20)	20	62
393	17I-4	(72)	42	14
394	17J-4	29	25	33
396	17L-5	35	32	36
402	17K-5	23	18	18
403	17K-5	23	(20)	18
404	17K-4	23	21	25
405	17L-5	40	31	40
406	17L-5	(59)	58	37
407	17L-5	53	36	27
408	17L-4	39	24	28
409	17L-4	36	27	26
410	17L-4	31	30	36
411	17L-4	25	(14)	24
412	17L-4	30	(15)	22
413	17L-4	40	32	55

ピットNo.	グリッド	長径	短径	深さ
416	17L-5	71	43	63
417	17L-5	(25)	(5)	6
418	17L-5	63	(31)	28
419	17K-5	49	42	66
428	17I-4	42	30	44
447	17L-5	62	30	22

3区1号屋敷内ピット群3

ピットNo.	グリッド	長径	短径	深さ
467	17L-5	(67)	62	32
468	17L-5	(39)	38	32
148	17J-7	29	28	14
149	17I-7	33	30	24
150	17I-7	33	31	19
151	17I-7	64	57	22
153	17I-7	32	32	38
154	17I-7	35	30	15
192	17J-7	36	23	40
204	17J-7	36	30	54
205	17J-7	50	35	44
264	17J-8	(57)	50	31
290	17J-8	28	20	33
291	17J-8	45	39	30
314	17I-7	33	25	24
382	17J-7	23	21	9
386	17I-7	35	26	18
439	17I-7	39	28	37
442	17J-8	72	63	19

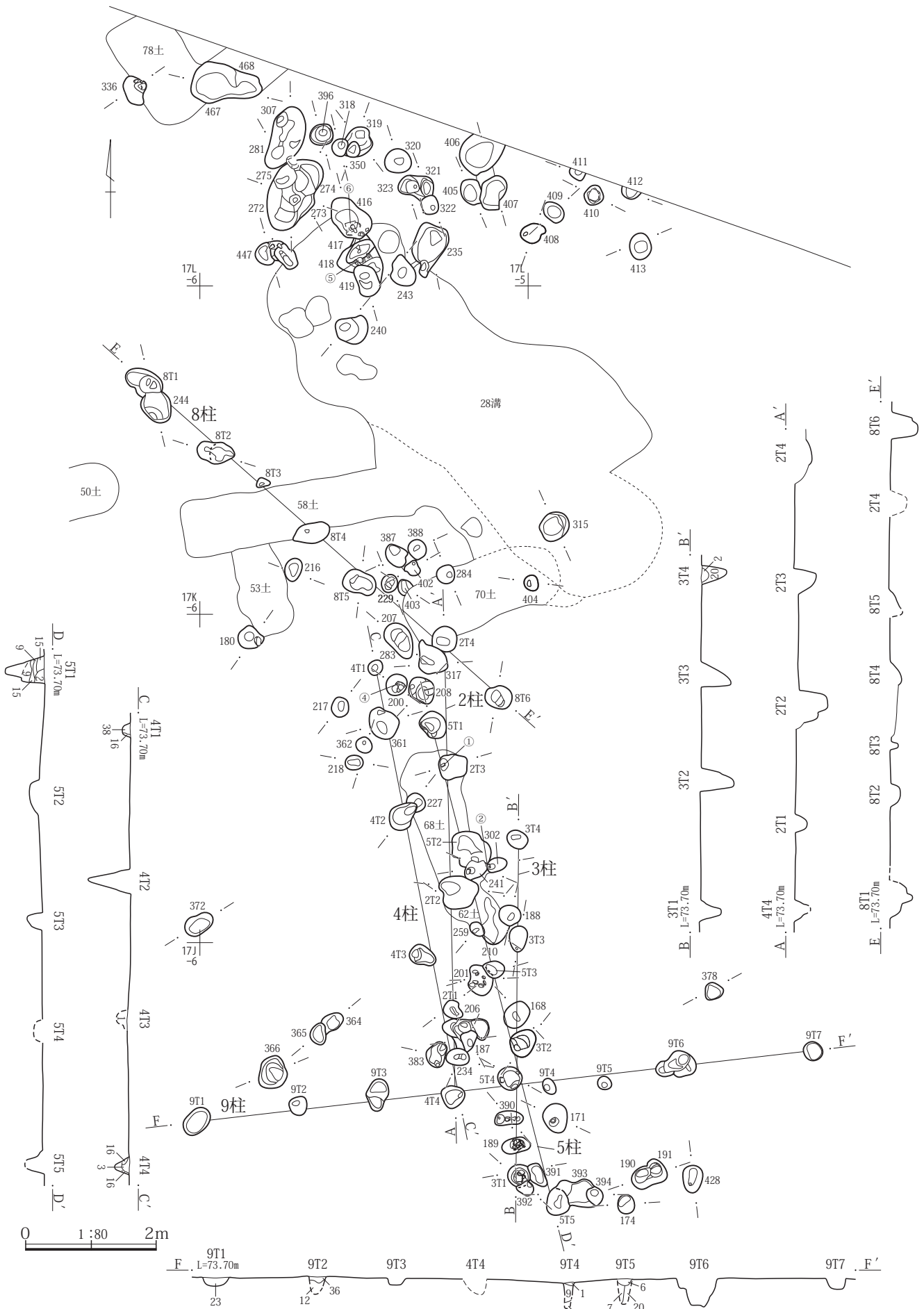
3区1号屋敷内個別ピット

ピットNo.	グリッド	長径	短径	深さ
155	17H-7	47	42	37
156	17H-8	35	27	12
176	17H-5	32	23	21
177	17F-4	35	24	54
178	17H-6	31	31	10
212	17K-3	55	34	19
213	17K-3	29	23	26
214	17K-3	31	25	29
223	17K-3	30	27	30
224	17H-3	32	29	18
231	17K-3	24	(15)	32
232	17K-3	27	(25)	39
370	17H-5	41	36	32
371	17H-5	33	28	16
373	17H-6	(63)	41	18
374	17H-6	(69)	54	29
376	17H-6	27	25	25
380	17I-3	28	21	32
381	17H-5	30	27	18



- 1 暗褐色土 ローム粒子・炭化物  
粒子少量に含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロック含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子含む。
- 4 黄褐色土 ローム多量に含む。
- 5 暗褐色土 ローム粒子を微量に  
含む。
- 6 暗褐色土 ローム粒子少量に含  
む。
- 7 暗褐色土 ローム小ブロック多  
量に含む。
- 8 黒褐色土 ローム小ブロックや  
や多量に含む。
- 9 黒褐色土 ローム小ブロック多  
量に含む。
- 10 暗褐色土 ローム粒子やや多量  
に含む。
- 11 暗褐色土 サラサラする。ロー  
ム粒子微量に含む。
- 12 黒褐色砂質土 ローム粒子少量  
に含む。
- 13 黒褐色土 非常に硬くしまる。  
ローム粒子やや多量に含む。
- 14 黒褐色土 ローム大ブロック多  
量に含む。
- 15 黒褐色土 ロームブロック・黄  
白色土ブロック含む。
- 16 暗褐色土
- 17 黄白色土ブロック
- 18 灰褐色土 軟らかくサラサラ  
する。ローム粒子少量に含む。
- 19 暗褐色土 ローム粒子多量に  
含む。
- 20 褐色土 ローム粒子多量に含  
む。
- 21 褐色土
- 22 暗褐色土 ローム小ブロック  
やや多量に含む。
- 23 暗褐色土 ローム大ブロック  
やや多量に含む。
- 24 暗褐色土+ローム
- 25 黒褐色砂質土 ローム小ブ  
ロックやや多量に含む。
- 26 黄褐色土 ロームブロック・  
黄白色土ブロック多量に含む。
- 27 暗褐色土 黄白色土ブロック  
少量に含む。
- 28 黒褐色土 ローム粒子微量に  
含む。
- 29 黒褐色土 均質。
- 30 暗褐色土+黒褐色土 ローム  
大ブロックやや多量に含む。

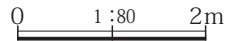
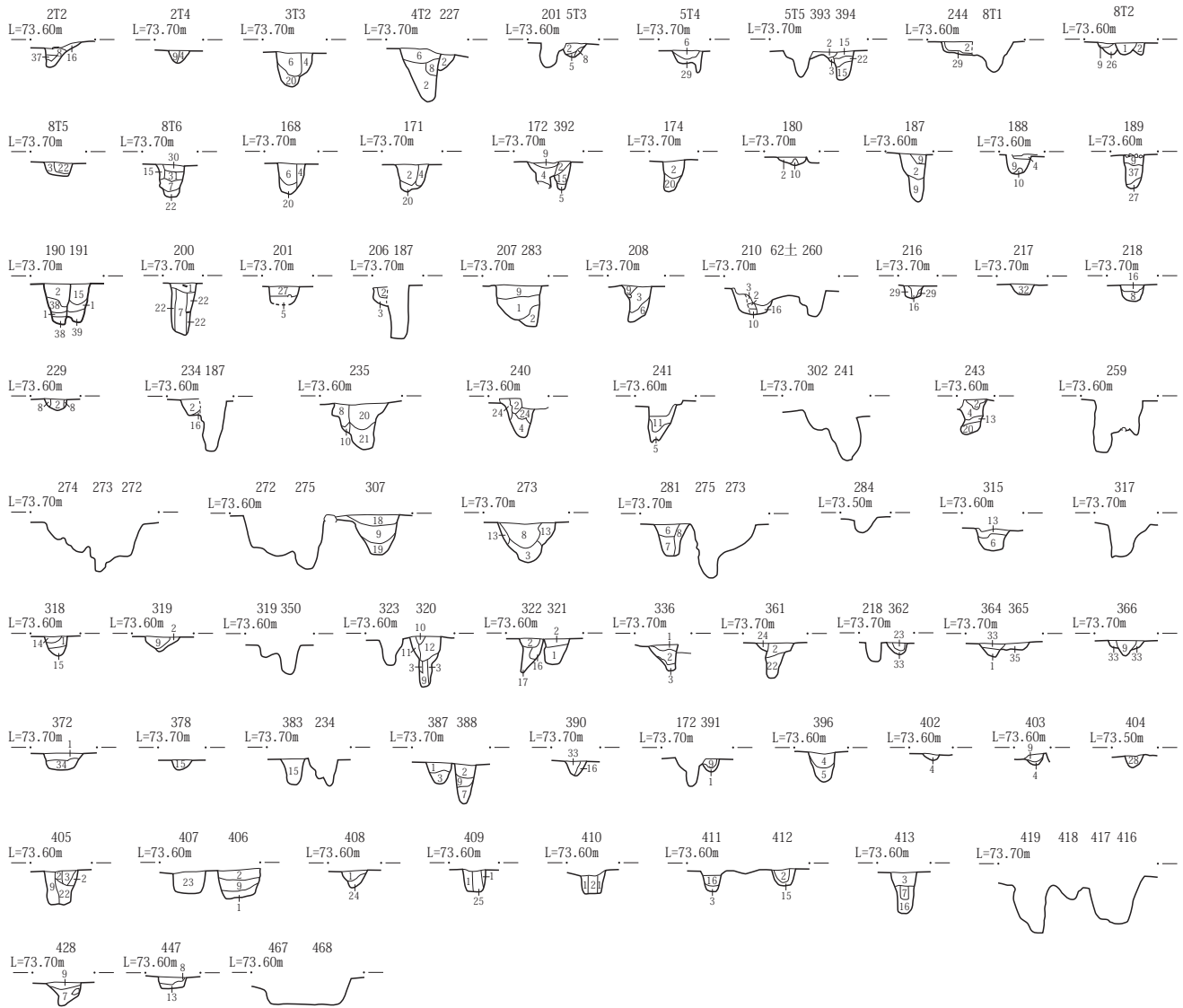
第282図 3区1号屋敷内ピット群1



第283図 3区1号屋敷内ピット群2、2~5・8・9号柱穴列



第4章 発掘調査の記録



- |                               |                                |
|-------------------------------|--------------------------------|
| 1 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。       | 21 黄白色土 非常に軟らかく粘性あり。暗褐色土含む。    |
| 2 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。            | 22 黒褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。       |
| 3 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。         | 23 灰褐色土 ローム粒子微量に含む。            |
| 4 暗褐色土 ローム粒子多量に含む。            | 24 暗褐色土 ローム大ブロック多量に含む。         |
| 5 黒褐色土 ローム粒子少量に含む。            | 25 暗褐色土 ローム粒子少量、炭粒含む。          |
| 6 暗褐色土 軟らかくサラサラする。ローム粒子少量に含む。 | 26 暗褐色土 ローム小ブロック少量に含む。         |
| 7 黒褐色土 ローム粒子含む。               | 27 暗褐色砂質土 ローム粒子微量に含む。          |
| 8 暗褐色土 ロームブロック含む。             | 28 黒褐色砂質土 ローム小ブロックやや多量に含む。     |
| 9 暗褐色土 ローム粒子微量に含む。            | 29 褐色土                         |
| 10 ロームブロック                    | 30 暗褐色土+褐色土                    |
| 11 暗褐色土 均質。サラサラする。            | 31 暗褐色土 褐色土小ブロックやや多量に含む。       |
| 12 暗褐色土 ローム大ブロックやや多量に含む。      | 32 灰褐色土 軟らかくサラサラする。ローム粒子少量に含む。 |
| 13 黄褐色土 ローム多量に含む。             | 33 灰褐色土 ローム小ブロック多量に含む。         |
| 14 褐色土 暗褐色土小ブロックやや多量に含む。      | 34 黒褐色土 サラサラする。ローム粒子少量に含む。     |
| 15 暗褐色土+ロームブロック               | 35 灰褐色土 しまる。礫含む。               |
| 16 暗褐色土 均質。                   | 36 灰褐色土 ローム大ブロックやや多量に含む。       |
| 17 暗褐色土 黄色粒子微量に含む。            | 37 黒褐色土 均質。                    |
| 18 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子含む。        | 38 黒褐色土 サラサラする。ローム粒子微量に含む。     |
| 19 黒褐色土 黄白色土ブロック含む。           | 39 黄褐色土 暗褐色土小ブロックやや多量に含む。      |
| 20 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子含む。      |                                |

第284図 3区1号屋敷内ピット群2断面図

第164表 3区2号柱穴列計測表

位置	17I・J-5		主軸方位	N-1°-W		旧ピットNo.
柱穴No.	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	形状	次ピットとの間隔(m)	
P 1	31	26	17	楕円形	2.58	225
P 2	60	50	46	楕円形	1.87	260
P 3	43	36	32	隅丸方形	1.87	271
P 4	39	37	22	円形		472

第165表 3区3号柱穴列計測表

位置	17I・J-5		主軸方位	N-S		旧ピットNo.
柱穴No.	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	形状	次ピットとの間隔(m)	
P 1	35	(33)	33	円形か	1.98	172
P 2	44	37	50	楕円形	1.50	169
P 3	40	28	46	楕円形	1.70	181
P 4	32	27	38	楕円形		228

第166表 3区4号柱穴列計測表

位置	17I・J-5		主軸方位	N-11°-W		旧ピットNo.
柱穴No.	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	形状	次ピットとの間隔(m)	
P 1	24	21	12	円形	2.23	230
P 2	50	38	67	楕円形	2.17	226
P 3	42	40	15	楕円形	2.27	363
P 4	35	33	24	隅丸三角形		175

第167表 3区5号柱穴列計測表

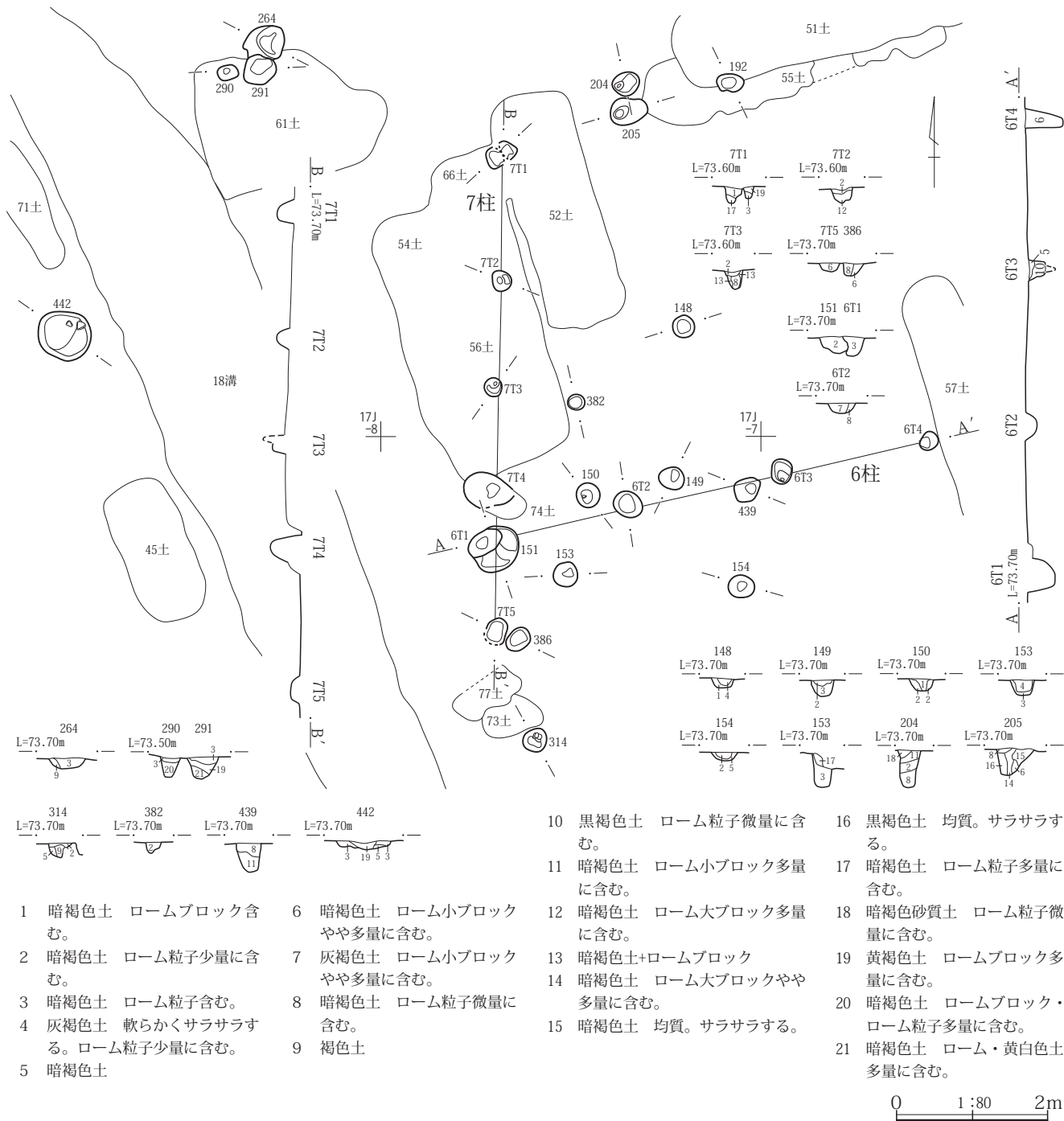
位置	17I・J-4・5		主軸方位	N-14°-W		旧ピットNo.
柱穴No.	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	形状	次ピットとの間隔(m)	
P 1	44	36	61	円形	1.86	209
P 2	(65)	52	36	楕円形	1.95	241
P 3	34	26	24	楕円形	1.67	316
P 4	38	36	13	円形	2.01	170
P 5	40	35	33	円形		173

第168表 3区8号柱穴列計測表

位置	17J・K-5・6		主軸方位	N-49°-W		旧ピットNo.
柱穴No.	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	形状	次ピットとの間隔(m)	
P 1	60	41	35	不整楕円形	1.52	198・233
P 2	58	33	16	楕円形	0.78	399・400
P 3	22	14	12	隅丸三角形	1.00	395
P 4	59	31	19	楕円形	1.03	471
P 5	51	35	21	隅丸長方形	2.80	199
P 6	41	34	40	隅丸方形		384

第169表 3区9号柱穴列計測表

位置	17J-4~6		主軸方位	N-83°-E		旧ピットNo.
柱穴No.	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	形状	次ピットとの間隔(m)	
P 1	47	32	13	楕円形	1.54	369
P 2	28	27	27	円形	1.39	367
P 3	50	30	17	楕円形	2.55	368
P 4	26	18	39	楕円形	0.86	389
P 5	22	20	37	円形	1.26	239
P 6	59	40	47	不定形	2.01	250・254
P 7	30	28	15	隅丸方形		379



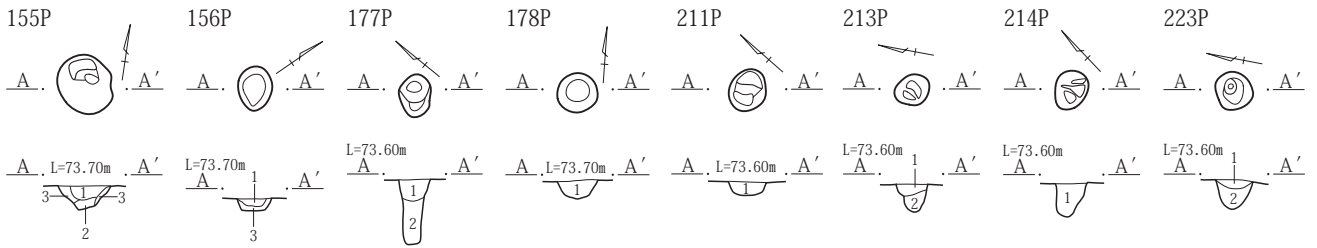
第285図 3区1号屋敷内ピット群3、6・7号柱穴列

第170表 3区6号柱穴列計測表

位置 柱穴No.	17 I - 6・7		主軸方位	N-77°-E		旧ピットNo.
	長径(cm)	短径(cm)		深さ(cm)	形状	
P 1	49	28	35	楕円形	1.98	152
P 2	40	33	15	楕円形	2.08	375
P 3	32	27	35	隅丸方形	1.94	438
P 4	27	22	49	楕円形		377

第171表 3区7号柱穴列計測表

位置 柱穴No.	17 I・J-7		主軸方位	N-1°-E		旧ピットNo.
	長径(cm)	短径(cm)		深さ(cm)	形状	
P 1	43	27	22	隅丸長方形	1.64	215・219
P 2	27	25	18	円形	1.35	221
P 3	24	23	30	円形	1.40	222
P 4	67	47	40	楕円形	1.85	74土
P 5	36	27	11	隅丸方形		385



155・156号ピット

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。
- 2 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ローム粒子含む。
- 3 暗褐色土 軟らかくしまり良い。

177号ピット

- 1 灰褐色土 軟らかくサラサラする。ローム粒子少量に含む。
- 2 暗褐色土 非常に軟らかく粘性あり。ローム粒子含む。

178号ピット

- 1 暗褐色土 ややしまり粘性あり。ローム粒微量に含む。

211号ピット

- 1 黄褐色土 ローム多量に含む。

213号ピット

- 1 黄褐色土 ロームブロック多量に含む。
- 2 暗褐色土 軟らかくしまりよい。粘性あり。ロームブロック含む。

214号ピット

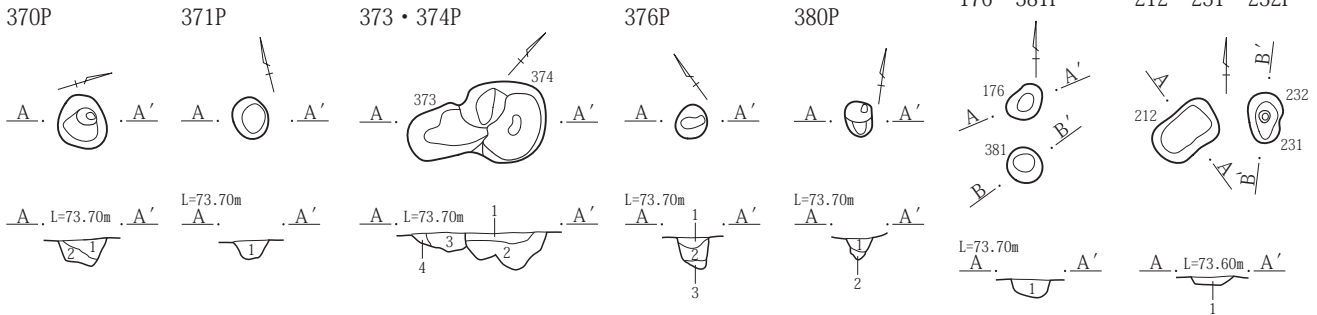
- 1 暗褐色土 硬くしまりサラサラする。ローム粒子少量含む。

223号ピット

- 1 暗褐色土 軟らかくサラサラする。ローム粒子・炭化物粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ローム粒子含む。

370号ピット

- 1 灰褐色土 しまり粘性あり。ローム粒微量に含む。
- 2 暗褐色土 ややしまり粘性あり。ローム粒子少量含む。



371号ピット

- 1 暗褐色土 しまり粘性あり。ローム小ブロックやや多量に含む。

373・374号ピット

- 1 灰褐色土 しまり粘性あり。均質。
- 2 灰褐色土 しまり粘性あり。ローム粒子少量に含む。
- 3 暗褐色土 しまり粘性あり。ローム小ブロックやや多量に含む。
- 4 暗褐色土 ややしまり粘性あり。均質。

376号ピット

- 1 暗褐色土 ややしまる。均質。
- 2 暗褐色土 ややしまる。ローム小ブロックやや多量に含む。
- 3 暗褐色土+ロームブロック ややしまる。

380号ピット

- 1 暗褐色土 しまり粘性あり。ローム粒子少量含む。
- 2 黒褐色土 ややしまり粘性あり。ローム小ブロックごく多量に含む。

176号ピット

- 1 暗褐色土層 軟らかくサラサラする。ローム粒子含む。

381号ピット

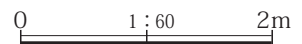
- 1 灰褐色土 しまり粘性あり。ローム粒子微量に含む。
- 2 灰褐色土 しまり粘性あり。ローム小ブロックやや多量に含む。

212号ピット

- 1 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ロームブロック含む。
- 2 黄褐色土 やや硬くしまり粘性あり。ロームブロック多量に含む。

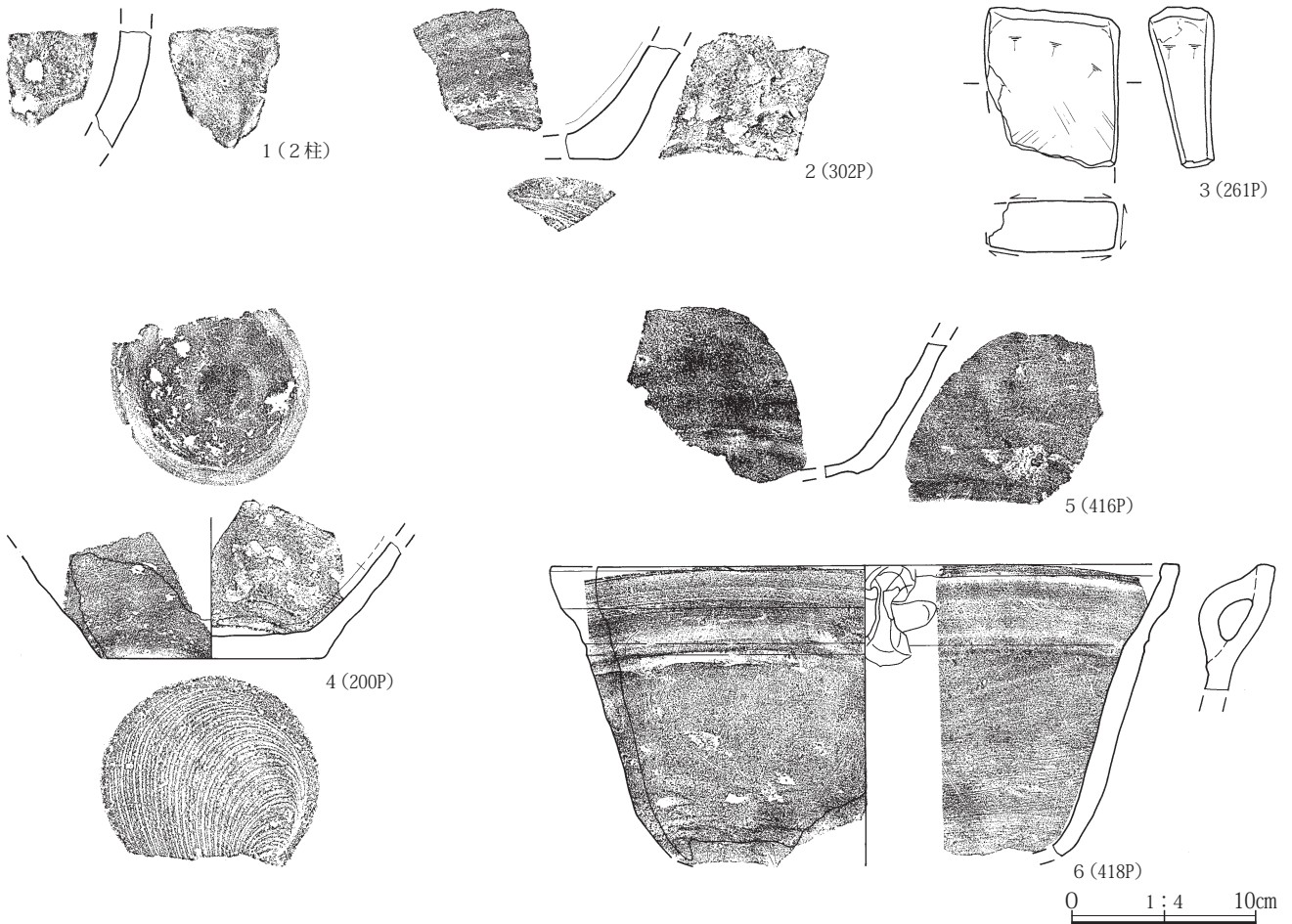
231・232号ピット

- 1 黄褐色土 軟らかい。ロームブロック多量含む。
- 2 暗褐色土 軟らかい。ローム粒子少量含む。
- 3 暗褐色土 軟らかくサラサラする。ローム粒子含む。
- 4 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ローム粒子含む。



第286図 3区1号屋敷内個別ピット

第4章 発掘調査の記録



第287図 3区1号屋敷内ピット・柱穴列出土遺物

第172表 3区1号屋敷内ピット・柱穴列出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第287図	1	在地系 土器	片口鉢	2柱列 +10cm	-	-	-	体部片	A	暗灰	断面は橙色、器表は暗灰色。	中世。
第287図	2	在地系 土器	片口鉢	302P	-	-	-	体～底 部	B	灰	体部外面下端は匏撫で。使用により内面の器表は摩滅するが、体部下位と底部周縁の摩滅が著しい。底部左回転糸切無調整。	中世。
第287図 PL.161	4	在地系 土器	片口鉢	200P +25cm	-	11.8	-	下半部	B	にぶい 黄橙・ にぶい 黄	断面は浅黄橙色、器表はにぶい黄橙色からにぶい黄色。使用により体部内面下位から底部周縁の器表は摩滅。体部外面下端は匏撫で。底部左回転糸切無調整。	中世。
第287図	5	在地系 土器	内耳鍋	416P	-	-	-		B	黄灰・ 黄褐・ 灰	断面はにぶい橙色。器表付近から器表は黄灰色から黄褐色。器壁は厚く、体部下端は内湾。底部は砂底状で丸底。体部外面下端は匏撫で。	I・II期か。
第287図 PL.161	6	在地系 土器	内耳鍋	418P +41cm	(33.6)	-	-	1/6	A	にぶい 黄・灰	断面はにぶい黄色、器表は灰色からにぶい黄色。外面下半の器表は煤付着。体部下位は内湾し、外面は匏撫で。器壁は厚いが口縁部は長く延びる。口縁部下内面はやや緩い稜をなして外反。口縁端部内面は明瞭な稜をなして突き出る。	II期。
挿図 PL.No.	No.	器 種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ(g)	製作状況・使用状況		備考	
第287図 PL.161	3	砥石	261P	切り砥石	砥沢石	(4.3)	3.6	32.1	左側面に櫛歯タガネ状痕を残す。三面使用。			

## (5)溝

1号屋敷では8条の溝が検出された。1号屋敷の区画溝としては、北辺となる12号溝も関連するが、2号屋敷の南辺と関連して扱う。この南を並走する22号溝は比較的大きな溝であり、建物群を囲む区画溝に近い。また、並走して浅い30号溝と5号井戸があり、こうした水場遺構への水切りとして22号溝は有効である。区画溝の西辺は軽微ながら18号溝で、しっかりした断面逆台形の20号溝は、状況から南辺と考えられる。東辺は不測要素が多いが27号溝と考えられ、あわせて綿貫牛道遺跡2区20号溝も関連が想定される。1号屋敷内部では皿状の26号溝があり、建物群の東辺に沿っている。また、28号溝も浅く26号溝に似るが、ピット群2との関連が想定される。

## 18号溝(第288図、P L .116・161、第173表)

**位置** 17G～J-7～9グリッド。南端は調査区域外に延びる。1号屋敷西辺を区画する。上面は直線状で、北端は尖り気味に緩やかに立ち上がる。底面には中央東寄りに一段下がって狭い溝が見られ、北端1m程で丸みを持って急激に西に折れる。断面形は皿形に近いが、中央部が凹んで軽微なV字形となる。両端の比高差は8cmで、勾配はほとんどない。自然埋没か。中央部底面で在地系土器片口鉢(2)、埋没土から青白磁梅鉢(1)が出土する。掲載遺物のほかに、中世在地系土器1片が出土している。規模は長さ20.72m上端幅71～201cm最大深21cmである。出土遺物から14世紀前半～中頃に比定される。

## 20号溝(第288図、P L .117)

**位置** 17G・H-2～6グリッド。21号溝と重複するが新旧関係不明。東端は調査区域外に延びる。西端は北へわずかに折れており、ここで立ち上がる可能性が高い。平面形は直線状。断面形は逆台形。底面はやや凸凹する。両端の比高差は6cmで、勾配はほとんどない。埋没土最下層は砂利を多量に含んでおり、表流水が多く流れ込んだ可能性があり、上位も自然埋没と考えられる。規模は長さ19.60m上端幅65～91cm最大深38cmである。中世以降の遺物は出土していない。

## 22・29・30号溝(第289図、P L .117、第174表)

**22号溝 位置** 17L-7・8グリッド。29号溝と重複するが新旧関係不明。建物群の北限を囲む。平面形はL字形で、屈曲部は丸みを持って緩やかに曲がる。断面形はU字形で、壁は緩やかに立ち上がる。底面は丸みを持つ。

両端は一段高く皿状となる。両端の比高差は4cmで、勾配はほとんどない。自然埋没か。北端の礫に混じって1の在地系土器鉢大片ほかが出土する。規模は長さ5.38m上端幅104～123cm最大深27cmである。出土遺物から15世紀前半頃に比定される。

**29号溝 位置** 17L-8グリッド。12・22号溝と重複するが新旧関係不明で、両端も不明となる。平面形は乱れた直線状。断面形は皿状。底面はやや凸凹する。両端の比高差は2cmで、勾配1.22%で北西へ下向する。埋没状況不詳。規模は長さ1.64m上端幅50～92cm最大深5cmである。中世以降の遺物は出土していない。

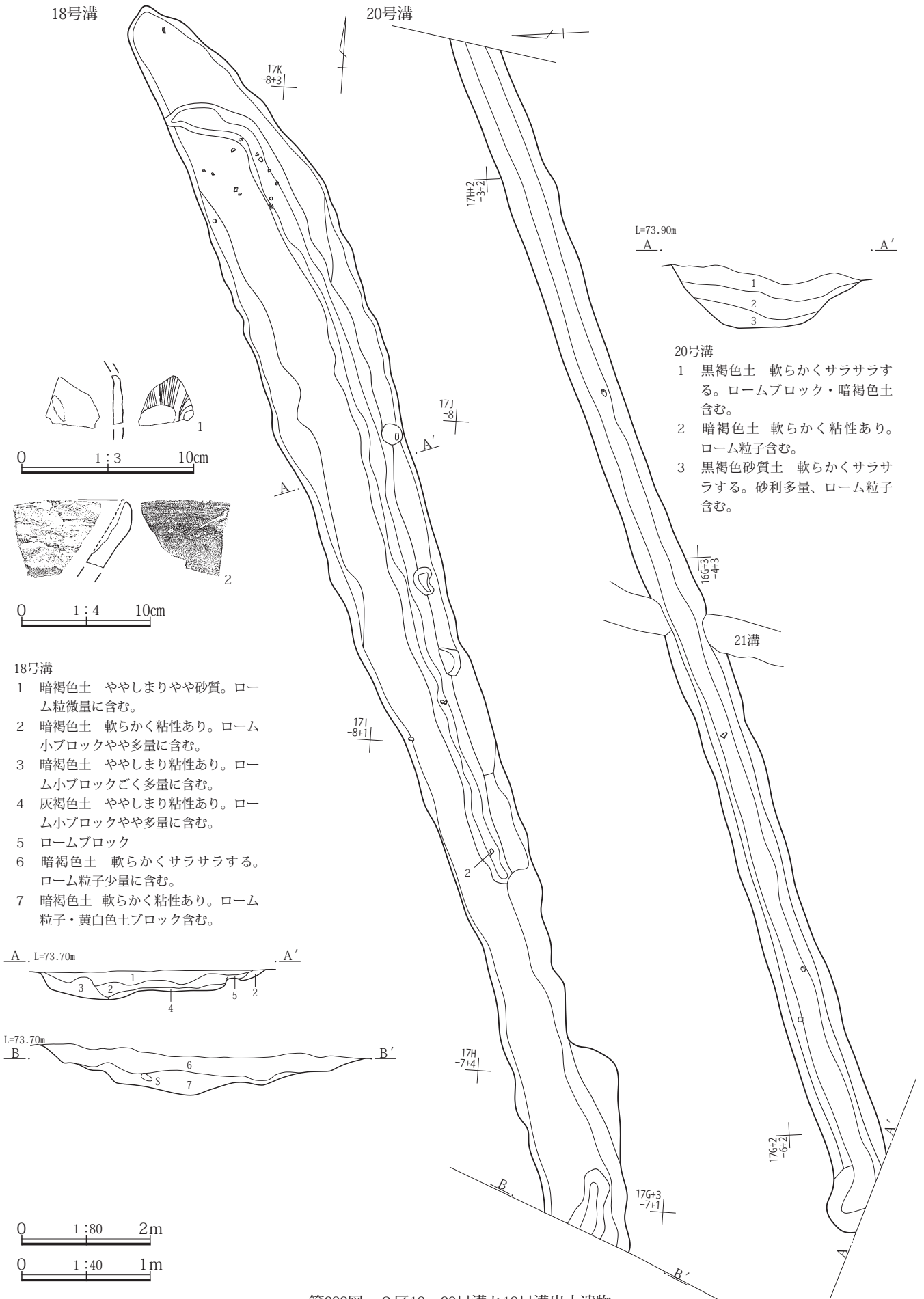
**30号溝 位置** 17L・M-7・8グリッド。5号井戸と重複するが新旧関係不明。1号屋敷の北辺となるが、区画溝としては小規模で、12号溝の方が相応しい。東端は調査区域外に延びる。平面形は軽微な弓状。断面形は皿状。底面はわずかに凸凹し、西端はわずかに土坑状に凹む。両端の比高差は2cmで、勾配はほとんどない。埋没状況不詳。規模は長さ6.06m上端幅34～66cm最大深8cmである。位置から考えて5号井戸に関連する排水溝である可能性が高い。中世以降の遺物は出土していない。

## 26号溝(第289図、P L .118)

**位置** 17L-6グリッド。8号掘立柱建物P3・4、9号掘立柱建物P3・4、10号掘立柱建物P2、80号土坑、292・356号ピットと重複するが新旧関係不明。北端は調査区域外へ延びる。平面形は乱れた直線状で、複数の土坑・溝が重複した可能性もある。断面形は皿状。底面はやや凸凹する。中央部はわずかに楕円形に凹む。80号土坑に帰属する可能性もある。両端の比高差は6cmで、勾配1.57%で南方へ下向する。埋没土下位及び中位に黄褐色土があり、暗褐色土と互層となることから、人為的に埋められた可能性が高い。規模は長さ3.83m上端幅89～130cm最大深13cmである。中世以降の遺物は出土していない。

## 27号溝(第289図、P L .119)

**位置** 17J・K-2グリッド。西半部一部のみ露呈する。平面形・断面形ともに不明。底面はほぼ平坦で、ピット状に数か所が凹む。勾配も計測不能。埋没状況不詳。規模は長さ3.09m幅(180)cm深さ19cmである。中世以降の遺物は出土していない。



第288図 3区18・20号溝と18号溝出土遺物

28号溝(第289・290図、P L .119・161、第175表)

位置 17K・L - 4・5 グリッド。58・70号土坑、235・240・243・416・418・419・447号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は幅の広い直線状。断面形は皿状。底面はほぼ平坦。北西端はテラス状に一段高くなり、やや扁平な河原石が3点並ぶ。勾配は計測不能。埋

没土は均質で、埋没状況不詳。小礫を多く含む。北端を中心に在地系土器鍋鉢類ほかやや多く出土する。掲載遺物のほか、中世在地系土器3片が出土している遺物の年代は14世紀前半から15世紀中頃に及ぶ。規模は長さ(7.26)m上端幅227～331cm最大深15cmである。出土遺物から15世紀中頃を下限とすると考えられる。

第173表 3区18号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第288図 PL.161	1	中国磁器	青白磁 梅瓶か		-	-	-	体部片		白	外面に鉄釉。内面は無釉。篋か櫛状工具で施文。釉は発泡しており二次被熱の可能性高い。	13世紀～14世紀前半か。
第288図	2	在地系土器	片口鉢	+5cm	-	-	-	口縁部片	B	灰黄	還元炎気味。内面は中程から剥離。玉縁状の口縁と推定される。	I・II期。

第174表 3区22号溝出土遺物

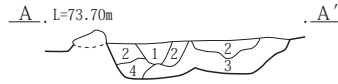
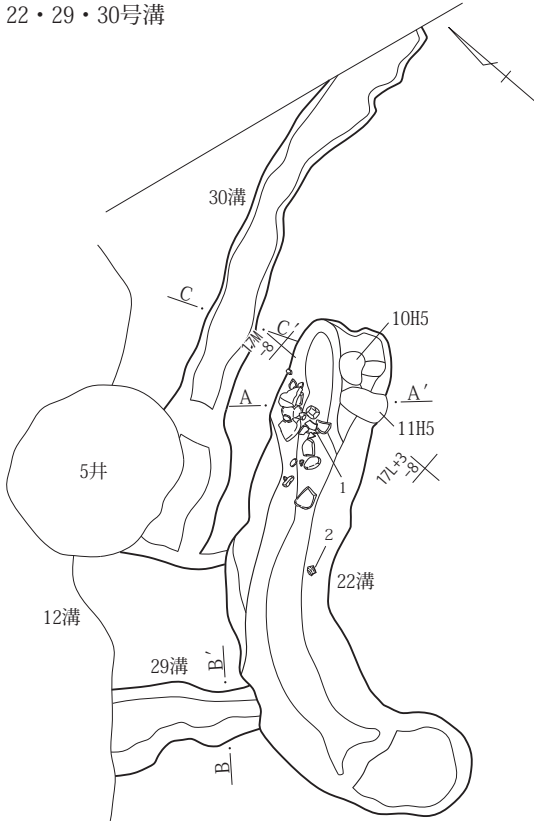
挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第289図	1	在地系土器	片口鉢	+10cm	(28.4)	-	-	1/8	A	にぶい 褐	体部は外反し、口縁部は内湾。口縁部横撫で。体部外面下位に刷毛目状の条線。使用により内面下位の器表摩滅し、中位は平滑。	IV期か。
第289図	2	在地系土器	片口鉢	+4cm	-	(10.0)	-	1/4	B	灰	還元炎。体部内面下位から底部周縁は使用による摩滅著しい。体部内面下位は使用により平滑。底部回転糸切無調整で周縁は摩滅し平滑。	中世。

第175表 3区28号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第290図 PL.161	1	在地系土器	皿	+7cm	(6.9)	(4.6)	1.9	2/3	B	黒・浅 黄	断面中央と残存部外面から口縁部内面は黒色、底部から口縁部内面器表は浅黄色。体部下位は僅かに外反。底部左回転糸切無調整。	15世紀前半。
第290図	2	在地系土器	内耳鍋か	+8cm	-	-	-	口縁部片	B	灰白	断面は浅黄色。口縁部上面は平坦で、内面は断面三角形に突き出る。	中世。
第290図	3	在地系土器	片口鉢	+5cm	-	-	-	口縁～ 体部	B	灰	断面は灰黄色、器表は灰色。器壁はやや厚い。外面は口縁部から4cm下まで横撫で。口縁部付近で小さく内湾し、端部は上方に立ち上がる。	I・II期。
第290図	4	在地系土器	内耳鍋か	+14cm	-	-	-	口縁部片	A	暗灰	断面は橙色、器表は灰色。器壁は厚い。口縁部上面は平坦で内側に丸く突き出る。	中世。
第290図	5	在地系土器	内耳鍋か	+4cm	-	-	-	口縁部片	A	にぶい 褐	口縁部はゆるく外反し、端部付近で内湾。口縁部のみ横撫で。	内耳鍋のII期か。
第290図	6	在地系土器	片口鉢	+4cm	-	-	-	口縁～ 体部	B	灰白・ 灰白・ 灰	断面は灰白色、器表は灰白色から暗灰色。還元気味で軟質。口縁部外面は端部から2.5cm下まで横撫で。片口部残る。口縁部下位は横撫でにより窪み、外反するように見える。内面も横撫により窪み、内湾するよう見える。端部は丸くおさめる。	II期か。
第290図	7	在地系土器	片口鉢		-	-	-	体下位 片	B	浅黄・ 灰白・ 灰	内面は使用により器表摩滅。	中世。
第290図	8	古瀬戸	緑釉小皿	+16cm	(10.0)	(5.0)	2.4	1/3		灰白	体部から口縁部は内湾気味に立ち上がる。口縁部内面から口縁部外面に灰釉。底部右回転糸切無調整。	後IV期古。
挿図 PL.No.	No.	種 器 種	出土位置	径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	残 存	形・成調整等			
第290図	9	鉄製品 不明	+3cm		-	-		3.0	破片	不明鉄製品。一面は段差をなすが、反対側の面は屈曲する。		

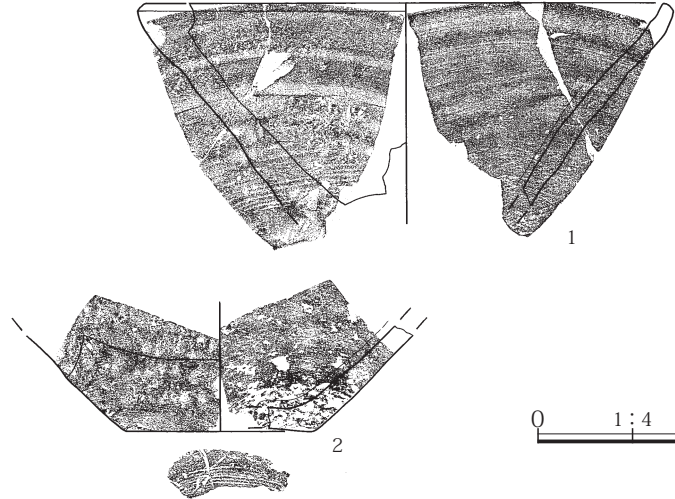


22・29・30号溝



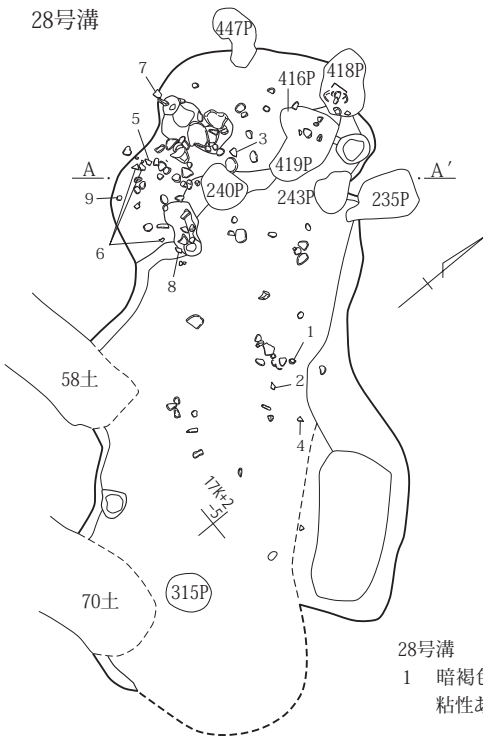
22号溝

- 1 暗褐色砂質土 均質。ややしまりやや砂質。
- 2 暗褐色土 ややしまり粘性あり。ローム粒子少量に含む。
- 3 暗褐色土 ややしまり粘性あり。ローム小ブロック多量に含む。
- 4 黒褐色土 均質。ややしまり粘性あり。



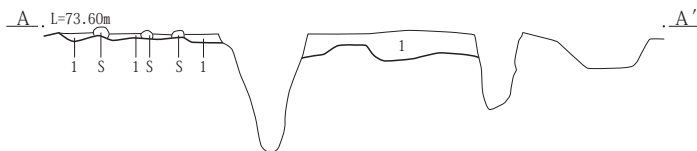
0 1:4 10cm

28号溝

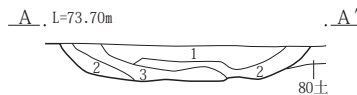
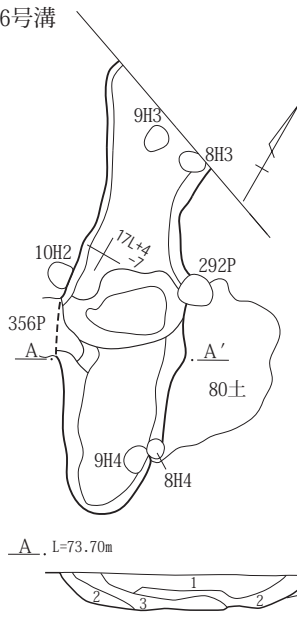


28号溝

- 1 暗褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。ロームブロック含む。



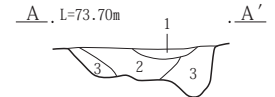
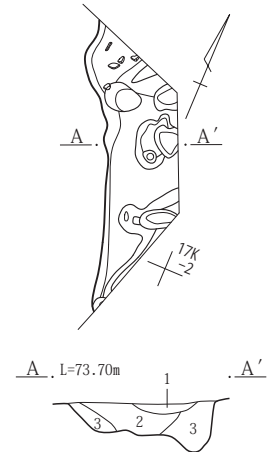
26号溝



26号溝

- 1 暗褐色土 軟らかくしまり良い。ローム粒子・炭化物粒子含む。
- 2 黄褐色土 軟らかく粘性あり。
- 3 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ローム粒子多量に含む。

27号溝



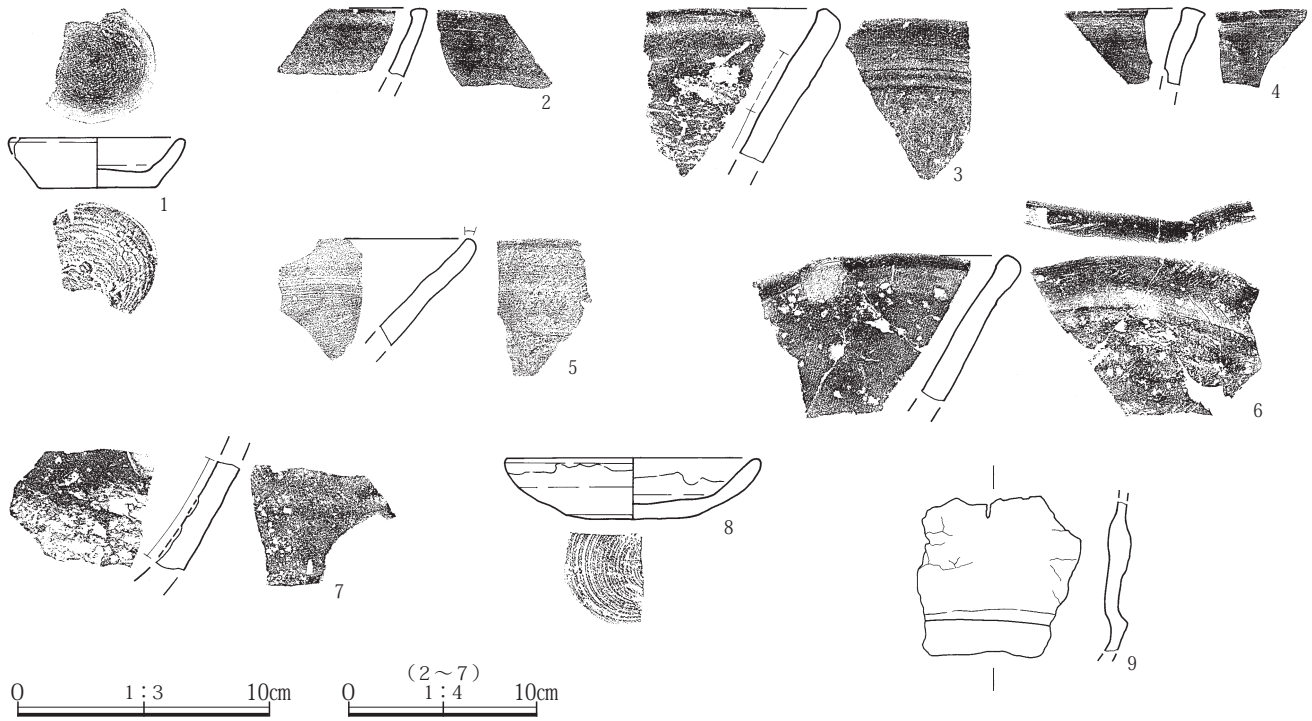
27号溝

- 1 暗褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。ローム粒子少量に含む。
- 2 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ロームブロック・ローム粒子含む。
- 3 暗褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。ローム粒子多量に含む。

0 1:80 2m

0 1:40 1m

第289図 3区22・26～30号溝と22号溝出土遺物



第290図 3区28号溝出土遺物

## 2 2号屋敷

2号屋敷の区画はやや複雑である。中心部分には2棟の掘立柱建物が検出され、南辺から東辺をL字形に7号溝が廻り、その東に1.5m程離れて19号溝が走向する。また、その東延長線上に2区13号溝があり関連が想定される。南に並走する12号溝も区画溝であり、7号溝との間は通路としては狭い。この部分に小規模な16号掘立柱建物があり、1号柱穴列など周辺のピット群とあわせて、門と柵列であった可能性が高い。西辺は23号溝に区画されるが、南側約6mが開口部となって、区画溝としては不完全である。L字形に西へ折れるのも理解し難い。このため、17号溝までを屋敷内部として扱う。また、23号溝の北延長線上で東西方向に走向する2区2号溝、あるいは同8号溝と同一であった場合、北限は明確に区画されることとなる。

### (1) 掘立柱建物

南側は区画溝7号溝に、北側は間仕切溝に近い25号溝に規制された約7m四方の領域に、3棟の掘立柱建物が重複して分布する。また、16号掘立柱建物は南に離れており、位置から門と性格づけられる。主軸方位は2種類に分類されるが、建物自体歪みが著しいため、有効な分類ではない。1号屋敷との比較を兼ねて、一連の分類と

した。詳細は第150表のとおり。重複関係から3時期に変遷する。なお、掘立柱建物が集中する部分には他にピット29基があり、ピット群として別に扱う。

### 2号掘立柱建物(第292図、P L.94・95、第176表)

位置 17M・N-10・11グリッド。

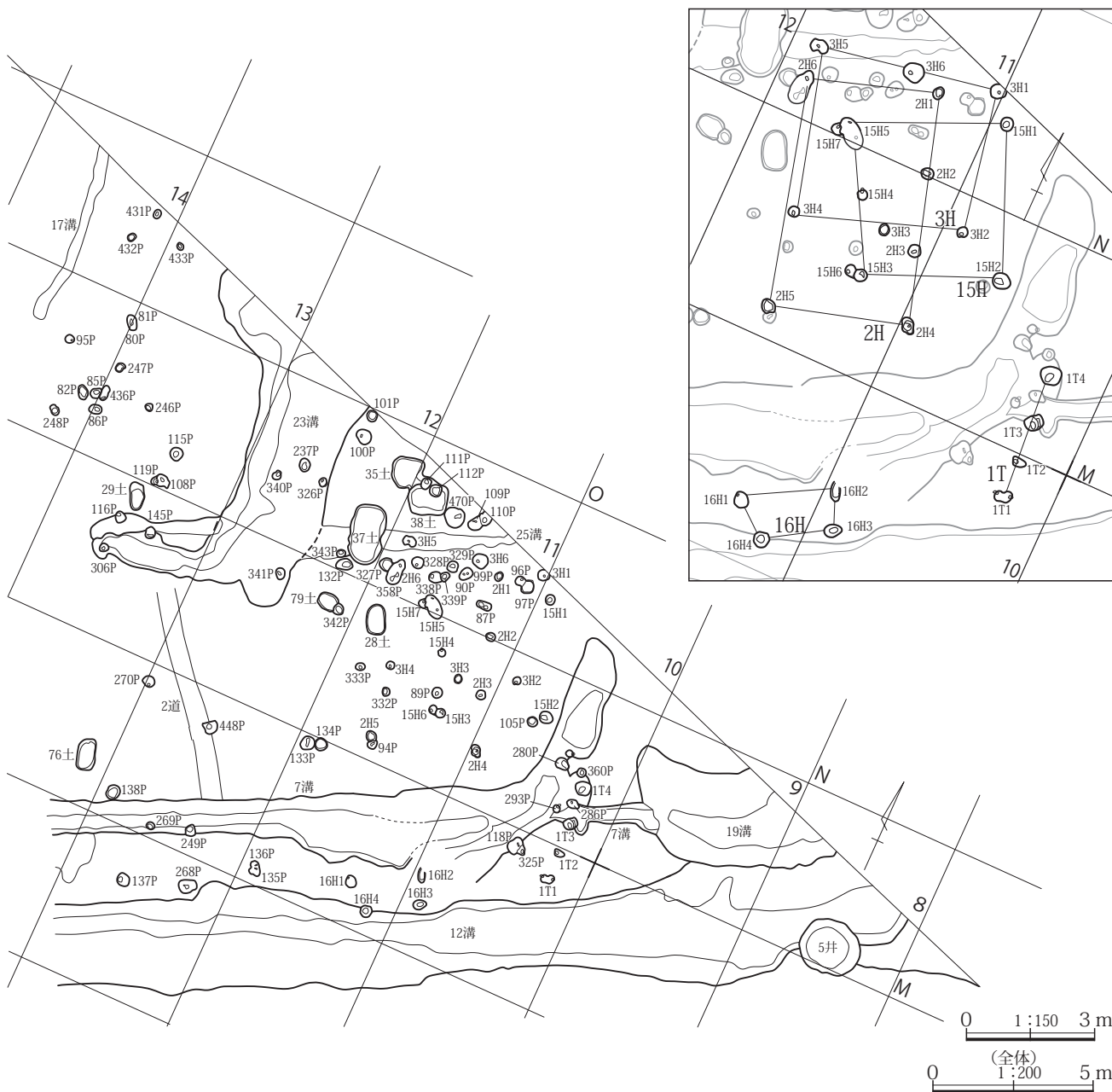
重複 P 6は358号ピットより前出で、P 5は94号ピットと重複するが新旧関係不明。3・15号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

主軸方位 N-15～17°-W 面積17.53m<sup>2</sup>

形態 1×3間・南北棟。北辺は南辺より20cm短いため、西辺は東へ内傾する。桁行柱間を平均すると、約1.82m・約6.0尺となるが、東辺のP 2・3ともに7cm前後南に寄る。西辺の間柱は検出されていないが、332号ピットを想定する余地がある。P 3は柱痕が残り、埋没土1は掘り方を充填したものと言える。柱穴の径は30cm前後を主体とするが、P 4は42cmと大きく上位が広がり、抜き取りとは思われない。柱穴の形態はP 4を除いて全て円形・楕円形である。深さは34cm前後と20cm前後が混在する。詳細な規模は第176表のとおり。中世以降の遺物は出土していない。

### 3号掘立柱建物(第293図、P L.94・95、第177表)

位置 17M・N-10・11グリッド。



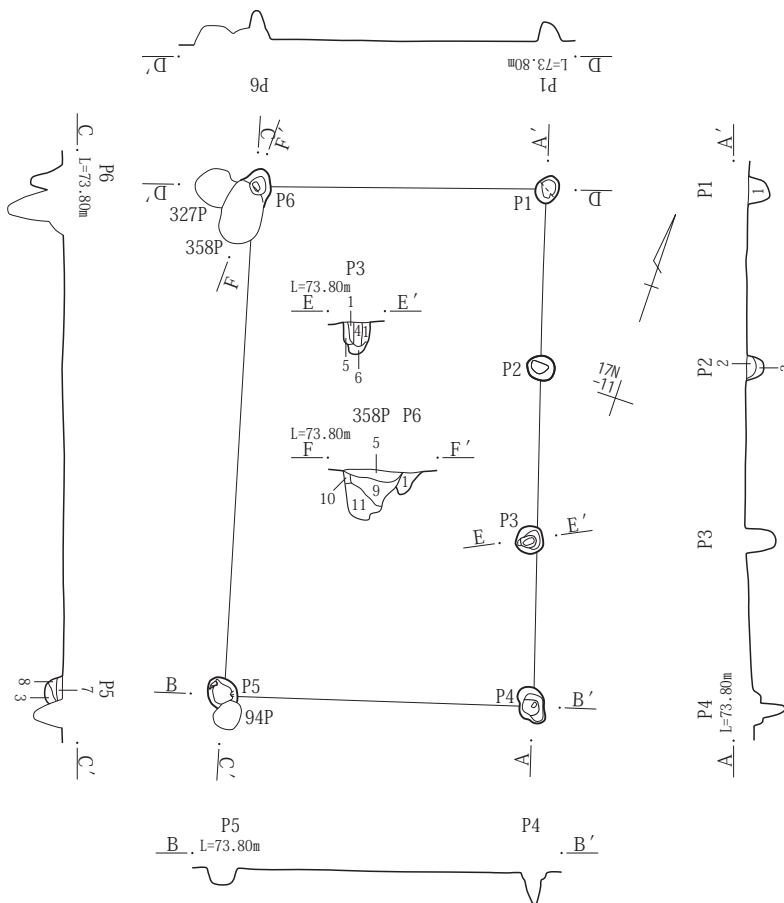
第291図 3区2号屋敷跡全体図

重複 P 5は25号溝と重複するが新旧関係不明。2・15号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

主軸方位 N-10°~16°-W 面積 15.42㎡

形態 1×2間・南北棟。東辺は西辺より51cm短く、南辺は北辺より43cm短いため、東辺は東へ外傾し、北辺は南に傾く。また、西辺も東へ少し内傾しており、平面形は歪な台形となる。南辺の中間柱P 3は東へ16cm寄り、柱筋から外側へ外れる。北辺の中間柱P 6は東へ7cm寄る。これらは棟持柱の可能性もある。P 1・6は底面に

柱を据え方となる小穴を持ち、柱痕がみられるが、充填土は明瞭でない。北辺の柱穴は大きく、それぞれ重複などの影響もあるが、ほぼ40cmを超える規模を持つ。底面に小穴がある点も共通する。南辺は26cm前後で、底面の小穴部とも考えられるが、標高差からその可能性は低い。むしろ、北辺を強固にする意図も考慮される。柱穴の形態は隅丸方形と円形が混在する。深さも北辺のP 1・6が70cm前後と深く、他は11~36cmと概して浅い。詳細な規模は第177表のとおり。中世以降の遺物は出土していない。

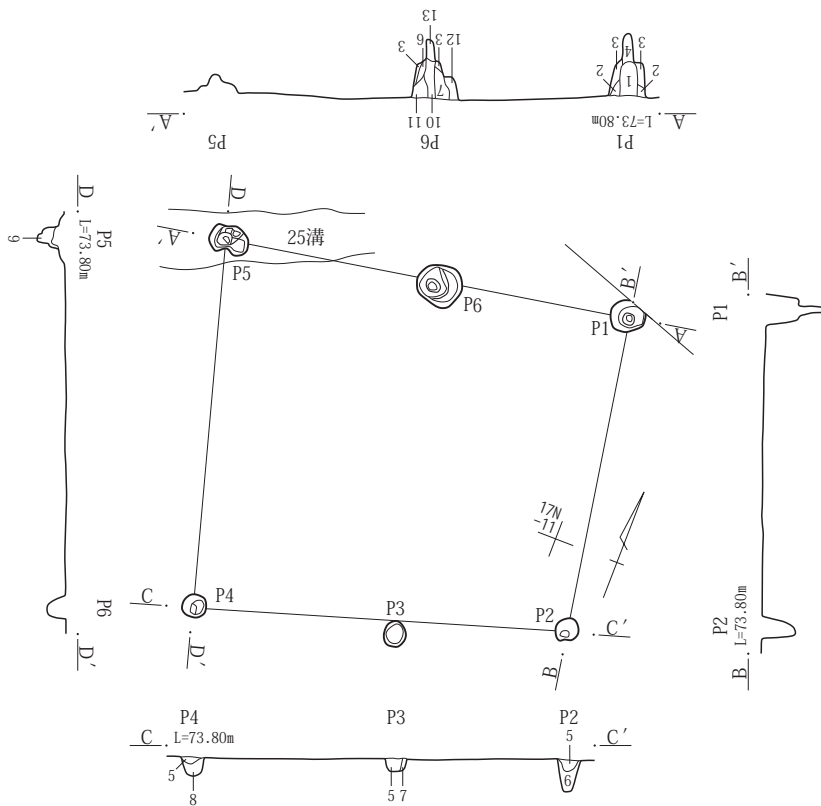


第292図 3区2号掘立柱建物

2号掘立柱建物

- 1 黒褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子含む。
- 3 暗褐色土
- 4 黒褐色砂質土 ローム粒子微量に含む。
- 5 暗褐色土 ローム粒子微量に含む。
- 6 暗褐色土+ロームブロック。しまる。
- 7 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。
- 8 暗褐色土 ローム粒子多量に含む。
- 9 黒褐色土 ローム粒子やや多量に含む。
- 10 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 11 暗褐色土 ローム大ブロック多量に含む。

0 1:80 2m



第293図 3区3号掘立柱建物

3号掘立柱建物

- 1 暗褐色土 ローム粒多量に含む。
- 2 暗褐色砂質土 ローム粒子少量に含む。
- 3 黒褐色砂質土 均質
- 4 黒褐色土 ローム粒子少量に含む。
- 5 暗褐色土 ローム粒子含む。
- 6 暗褐色土
- 7 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。
- 8 暗褐色土 ローム多量に含む。
- 9 暗褐色土 ロームブロック多量に含む。
- 10 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 11 暗褐色土 しまる。ローム小ブロック多量に含む。
- 12 暗褐色土 しまる。ローム粒子微量に含む。
- 13 暗褐色土+ロームブロック しまる。

0 1:80 2m

第176表 3区2号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		1×3間・南北棟			面積	17.53㎡	旧ピット番号
主軸方位		N-15°~17°-W			位置	17M・N-10・11	
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
東辺 5.50	P 1	29	23	22	楕円形	1.89	92
	P 2	30	27	18	楕円形	1.88	103
	P 3	30	30	35	円形	1.75	93
南辺 3.31	P 4	42	28	34	隅丸長方形	3.31	294
西辺 5.42	P 5	(35)	31	17	楕円形	5.42	113
北辺 3.11	P 6	(35)	30	32	不明(重複)	P 1へ3.11	359

第177表 3区3号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		1×2間・南北棟			面積	15.42㎡	旧ピット番号
主軸方位		N-10°~16°-W			位置	17M・N-10・11	
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
東辺 3.43	P 1	(38)	33	68	隅丸方形	3.43	98
南辺 3.97	P 2	26	23	36	円形	1.82	104
	P 3	27	24	11	楕円形	2.16	252
西辺 3.94	P 4	26	24	21	隅丸方形	3.94	114
北辺 4.40	P 5	42	25	23	不定形	2.27	107
	P 6	47	40	70	隅丸方形	P 1へ2.13	91

15号掘立柱建物(第294図、P L .94～96、第178表)

位置 17M・N-10・11グリッド。

重複 他の遺構との直接的な重複はないが、建て替えまたは柱の据え換えが想定され、P 3はP 6より前出。P 5はP 7と重複するが新旧関係不明。2・3号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

主軸方位 N-22°~28°-W 面積 12.54㎡

形態 2×1間・正方形。南辺は北辺より40cm短いため、西辺は西へ外傾する。西辺の中間柱P 4は柱筋から内側へ17cm外れ、位置も12cm程度北へ寄る。正方形であり、棟持柱とは考えにくい。P 3の埋没土はロームブロックを多量に含んで水平方向に埋まり、人為的に埋め戻されたと言え、後出するP 6とは異なる。P 2・5でも近似する埋没状況が一部みられる。長径が79cmと南北方向に長いP 5は、柱穴が重複する可能性があり、埋没状況が埋め戻しに近い状況と関係しよう。長径が43cmとやや長いP 2も近似する。他は全体として30cm前後である。柱穴の形態は全て円形・楕円形である。深さは57cmと深いP 6を除き、20cm前後と30cm前後に分かれる。詳細な規模は第178表のとおり。中世以降の遺物は出土していない。

16号掘立柱建物(第295図、P L .97、第179表)

位置 17L-10・11グリッド。

重複 南辺は12号溝の肩部に位置し、北辺は7号溝に接し、全体として軽微に掘り込まれたテラス状となる。

主軸方位 N-59°~62°-E 面積 2.10㎡

形態 1×1間。南辺は北辺より60cm短いため、西辺は西へ外傾し、東辺も東へ外傾して、平面形は逆台形となる。埋没状況に特徴的なものはない。柱穴の長径は40cm前後で、形態は全て円形・楕円形である。柱穴の深さは西辺P 1が70cm、P 4が41cmと深く、東辺は確認面の違いもあるが20cm前後と浅い。本遺構は立地状況や形態から門が想定され、周辺のピットとの位置関係からも、北辺を主柱と考えたいが、P 2はやや浅すぎる。詳細な規模は第179表のとおり。中世以降の遺物は出土していない。

(2)柱穴列

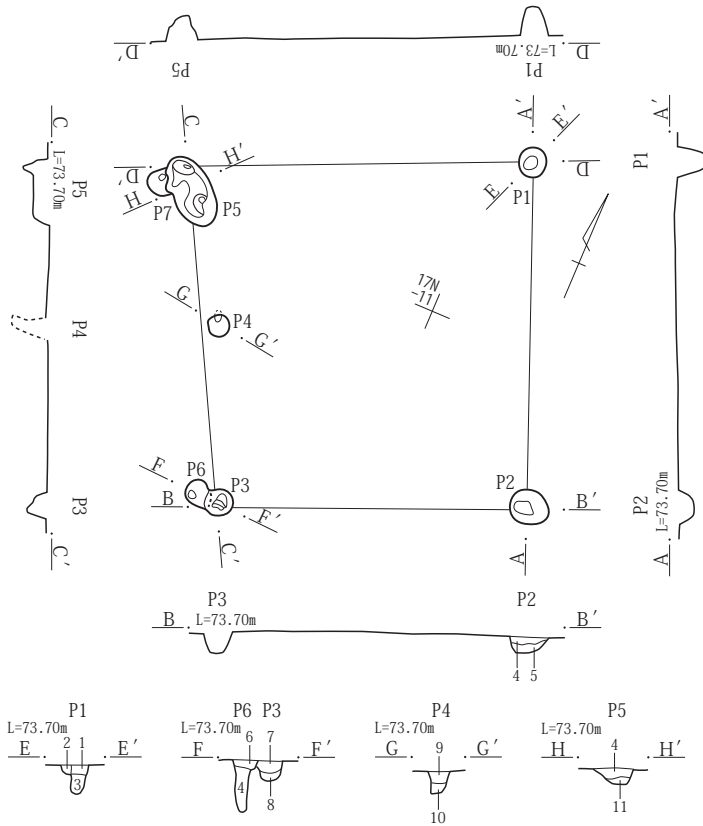
1号柱穴列(第296図、P L .98、第180表)

位置 17L・M-10グリッド。

重複 P 3・4は7号溝と重複するが新旧関係不明。

主軸方位 N-4°-W

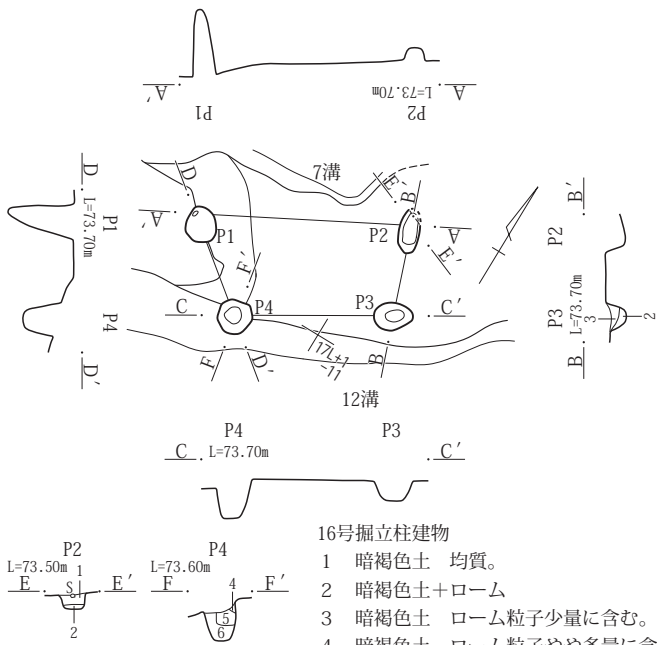
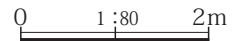
形態 柱穴4基が直線的に並ぶ。柱間は0.75~1.17mと狭い。P 4は中位がにぶい黄褐色土で、P 3も下半が黄褐色土で埋まり、人為的な埋め戻しがみられる。柱穴の長径は31~49cmとばらつきがあり、深さは3基が50cmを超えて深い。柵列としては頑丈であろう。詳細な規模は第180表のとおり。中世以降の遺物は出土していない。



15号掘立柱建物

- 1 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 2 暗褐色土 硬くしまる。ローム小ブロックごく多量に含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒微量に含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。
- 5 黄褐色土
- 6 暗褐色土 均質。
- 7 暗褐色土 ローム大ブロックやや多量に含む。
- 8 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
- 9 暗褐色土 灰褐色土小ブロックやや多量に含む。
- 10 黒褐色土 ローム粒子微量に含む。
- 11 暗褐色土+ロームブロック

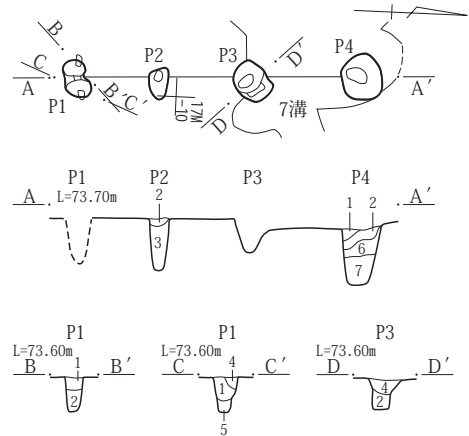
第294図 3区15号掘立柱建物



16号掘立柱建物

- 1 暗褐色土 均質。
- 2 暗褐色土+ローム
- 3 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒子やや多量に含む。
- 5 暗褐色土 ローム粒子微量に含む。
- 6 暗褐色土 黄褐色土小ブロックやや多量に含む。

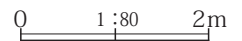
第295図 3区16号掘立柱建物



1号柱穴列

- 1 暗褐色土 ローム粒子含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 3 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
- 4 黄褐色土
- 5 暗褐色土 黄白色土ブロック含む。
- 6 にぶい黄褐色土 暗褐色小ブロックやや多量に含む。
- 7 黒褐色土 ローム大ブロックやや多量に含む。

第296図 3区1号柱穴列



第178表 3区15号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		2×1間・正方形			面積	12.54㎡		旧ピット番号
主軸方位		N-22°-W			位置	17M・N-10・11		
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)		
		長径	短径	深さ				
東辺 3.65	P 1	32	29	31	円形	3.65		344
南辺 3.25	P 2	43	36	16	楕円形	3.25、P 6へ3.55		106
西辺 3.62	P 3	(29)	29	22	円形	2.00		331
	P 4	23	21	38	円形	1.64		414
北辺 3.65	P 5	79	40	28	楕円形	P 1へ3.65		8
	P 6	30	26	57	楕円形	3.40		330
	P 7	29	(23)	17	不明	P 1へ3.93		102

第179表 3区16号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		1×1間			面積	2.10㎡		旧ピット番号
主軸方位		N-59°-E			位置	17L-10・11		
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)		
		長径	短径	深さ				
北辺 2.30	P 1	38	22	70	円形	2.30		245
東辺 0.95	P 2	(48)	22	20	楕円形	0.95		437
南辺 1.70	P 3	42	30	21	楕円形	1.70		429
西辺 1.15	P 4	37	37	41	円形	P 1へ1.15		466

第180表 3区1号柱穴列計測表

位置	17L・M-10		主軸方位	N-4°-W		旧ピットNo.
柱穴No.	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	形状	次ピットとの間隔(m)	
P 1	40	27	50	楕円形	0.85	276・278
P 2	31	21	56	楕円形	0.93	357
P 3	44	33	35	隅丸長方形	1.17	267
P 4	49	44	65	円形		285

(3)土坑

土坑7基が検出された。23号溝の東側は5基で、うち3基は建物群の北側に位置し、比較的大きい隅丸長方形・長方形、両丸長方形である。残る4基のうち2基は、建物群の西に隣接し、残る2基は23号溝の西側に散在する。これらは比較的小規模で、形態は混在する。

28号土坑(第297図、P L.102)

位置 17M-11グリッド。平面形は両丸長方形。主軸方位はN-22°-W。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土は砂質土で、埋没状況不詳。規模は長軸94cm短軸59cm深さ8cmである。中世以降の遺物は出土していない。

29号土坑(第297図、P L.102)

位置 17M-13グリッド。平面形は不整長円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は凸凹して、植物攪乱顕著。埋没土はロームブロックをやや多量に含むが、埋没状況不詳。規模は長径85cm短径45cm深さ9cmである。中世以降の遺物は出土していない。

35・38号土坑(第297図、P L.103)

35号土坑 位置 17N-11・12グリッド。38号土坑、111号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形はやや乱れた隅丸長方形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平

坦。埋没状況不詳。規模は長軸110cm短軸(100)cm深さ10cmである。中世以降の遺物は出土していない。

38号土坑 位置 17N-11グリッド。35号土坑、111・112号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸長方形。主軸方位はN-69°-E。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没状況不詳。規模は長軸122cm短軸114cm深さ19cmである。中世以降の遺物は出土していない。

37号土坑(第297図、P L.103)

位置 17N-12グリッド。25号溝と重複するが新旧関係不明。平面形は両丸長方形。主軸方位はN-13°-W。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸187cm短軸108cm深さ18cmである。中世以降の遺物は出土していない。

76号土坑(第297図、P L.106・161、第181表)

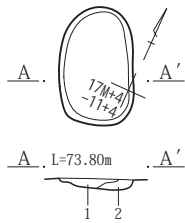
位置 17L-13グリッド。重複なし。平面形は隅丸長方形。主軸方位はN-14°-W。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロック・ローム粒子を多量に含み人為埋没。確認面近くで大円礫が出土する。中央部底面で1の銭(皇宋通宝)が出土する。規模は長軸100cm短軸55cm深さ22cmである。出土遺物から中世に比定される。

79号土坑(第297図、P L.107)

位置 17M-12グリッド。342号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は楕円形。壁は斜めに立ち上がる。

底面はほぼ平坦。埋没状況不詳。規模は長径(60)cm短径52cm深さ13cmである。中世以降の遺物は出土していない。

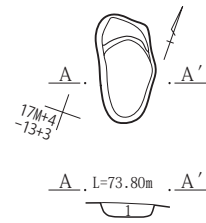
28号土坑



28号土坑

- 1 暗褐色砂質土 ややしまる。ローム粒微量に含む。
- 2 暗褐色砂質土 軟らかい。ローム小ブロックやや多量に含む。

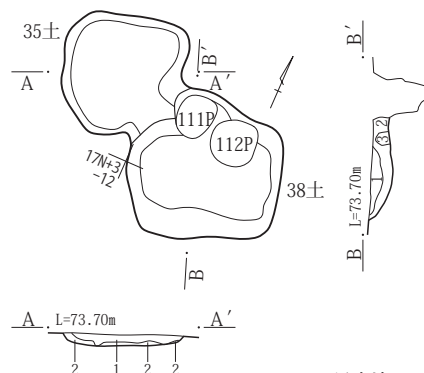
29号土坑



29号土坑

- 1 黒褐色砂質土 しまる。ローム小ブロックやや多量に含む。酸化層含む。

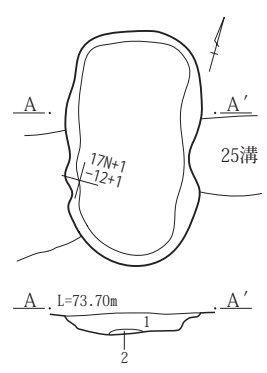
35・38号土坑



35号土坑

- 1 暗褐色土 ローム粒微量に含む。
- 2 暗褐色土 ローム大ブロックやや多量に含む。

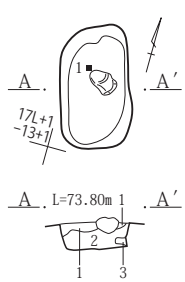
37号土坑



37号土坑

- 1 暗褐色土 軟らかくサラサラする。ローム粒子少量に含む。
- 2 暗褐色土 軟らかく粘性あり。

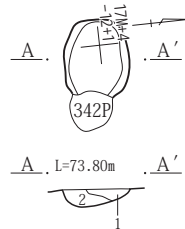
76号土坑



76号土坑

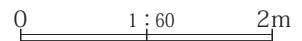
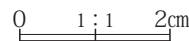
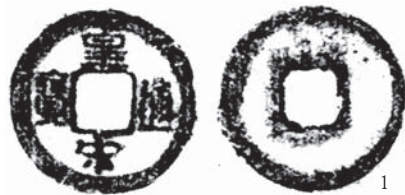
- 1 褐色土 軟らかい。ローム粒子多量に含む。
- 2 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ローム粒子多量に含む。
- 3 ロームブロック

79号土坑



79号土坑

- 1 黒褐色土 ややしまり粘性強い。均質。
- 2 黒褐色土 しまり粘性強い。ローム小ブロックやや多量に含む。



第297図 3区2号屋敷内土坑、76号土坑出土遺物

第181表 3区76号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置	径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	残存	形・成調整等
第297図 PL.161	1	銅銭 皇宋通寶	+3cm	27.82	24.27	1.35 ~ 1.43	2.56	完形	真書。北宋、1038年初鑄。やや劣化がひどく、白みを帯びる。

(4)ピット群・個別ピット(第298・299図、P L.109・110・112～114、第182表)

建物群と一致する位置に、ピット31基が集中して分布するため、便宜的にピット群とし、残る散在するピット38基を個別ピットとして扱う。ただし、これらでも性格付けられるものがある。詳細な規模は第182表のとおり。

ピット群では特に25号溝の南縁辺に連続して並ぶものがあり、建物として認定できなかった柱穴とみられる。

89・96・97・132号ピットでは柱痕が残る。北側調査区域外も含めた建物群の広がりも想定される。なお、個別扱となった133・134号ピットは、ピット群にも近く、柱痕もみられるため、やはり認定できなかった建物の一部と見なされる。

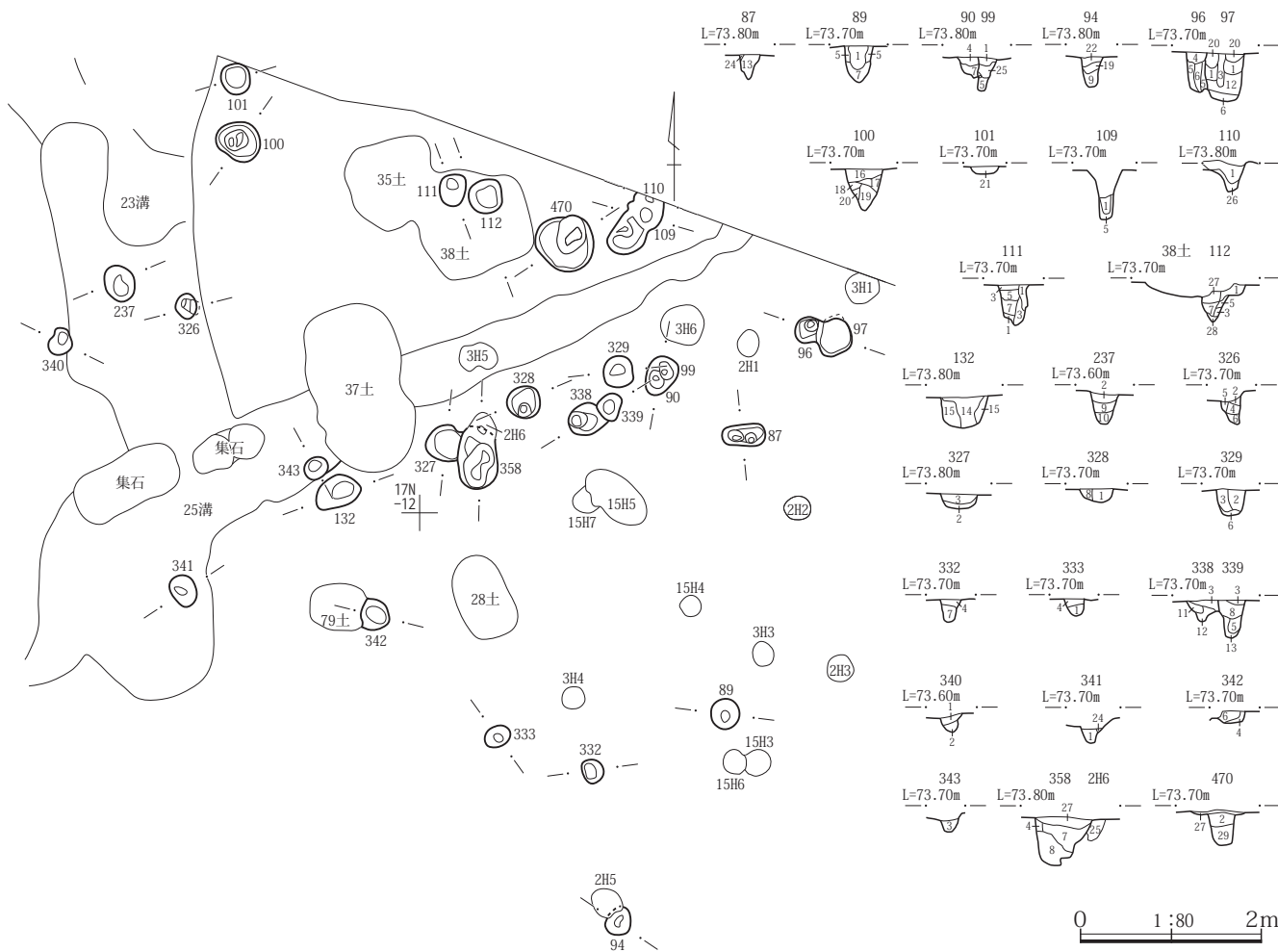
個別ピットとしたものでも、23号溝と7号溝の間には、ややまとまってピットが分布する。小規模なものや多く含まれ、建物としては性格づけ難い一群である。ま



た、7号溝と12号溝に挟まれた帯状の空間には、間隔約2mで東西方向に不連続に並ぶピットがみられる。中央部分に16号掘立柱建物、東側に1号柱穴列があり、門と

柵列という位置関係にある。118・268号ピットなどもしっかりしたものであり、関連するものと考えられる。

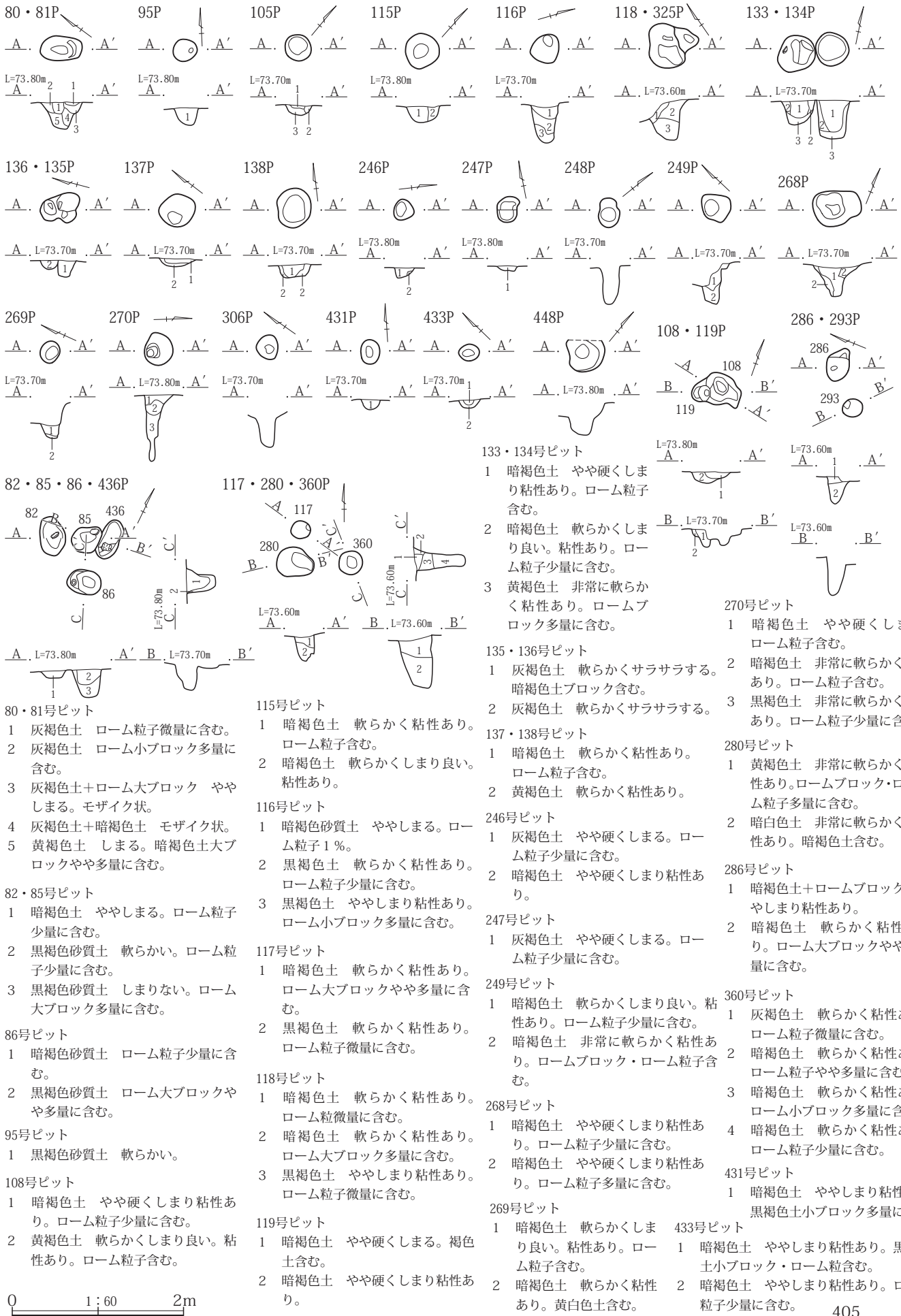
2号屋敷内ピット群(17M・N-11・12)



ピット群(17M・N-11・12)

- |                         |                                |                             |
|-------------------------|--------------------------------|-----------------------------|
| 1 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。      | 11 黒褐色土 サラサラする。ローム粒子微量に含む。     | 21 灰褐色土 ローム粒子やや多量に含む。       |
| 2 暗褐色土 ローム粒子やや多量に含む。    | 12 暗褐色土 ローム小ブロックごく多量に含む。       | 22 暗褐色土 サラサラする。ローム粒子微量に含む。  |
| 3 黒褐色土 ローム粒子微量に含む。      | 13 黒褐色砂質土 均質。                  | 23 褐色土 サラサラする。              |
| 4 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。 | 14 暗褐色土 ローム粒子含む。               | 24 褐色土ブロック                  |
| 5 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。   | 15 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量に含む。    | 25 黒褐色土 ロームブロックやや多量に含む。     |
| 6 黒褐色土 均質               | 16 暗褐色土 ローム粒子少量、黄色粒子微量に含む。     | 26 暗褐色土 ローム大ブロックやや多量に含む。    |
| 7 黒褐色土 ローム粒子少量に含む。      | 17 暗褐色土 硬くしまる。ローム小ブロックやや多量に含む。 | 27 暗褐色土 ローム粒子微量に含む。         |
| 8 暗褐色土 ローム大ブロック多量に含む。   | 18 黒褐色砂質土 黄色粒子微量に含む。           | 28 にぶい黄褐色土 黒褐色土ブロックやや多量に含む。 |
| 9 暗褐色土+ロームブロック          | 19 黒褐色砂質土 黄色粒子微量、ローム粒子少量に含む。   | 29 黒褐色土 ローム大ブロック多量に含む。      |
| 10 暗褐色土 均質。             | 20 ローム                         |                             |

第298図 3区2号屋敷内ピット群



- 1 暗褐色土 やや硬くしまり粘性あり。ローム粒子含む。
- 2 暗褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。ローム粒子少量に含む。
- 3 黄褐色土 非常に軟らかく粘性あり。ロームブロック多量に含む。
- 270号ピット
- 1 暗褐色土 やや硬くしまる。ローム粒子含む。
- 2 暗褐色土 非常に軟らかく粘性あり。ローム粒子含む。
- 3 黒褐色土 非常に軟らかく粘性あり。ローム粒子少量に含む。
- 280号ピット
- 1 黄褐色土 非常に軟らかく粘性あり。ロームブロック・ローム粒子多量に含む。
- 2 暗白色土 非常に軟らかく粘性あり。暗褐色土含む。
- 286号ピット
- 1 暗褐色土+ロームブロックややしまり粘性あり。
- 2 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ローム大ブロックやや多量に含む。
- 360号ピット
- 1 灰褐色土 軟らかく粘性あり。ローム粒子微量に含む。
- 2 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ローム粒子やや多量に含む。
- 3 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ローム小ブロック多量に含む。
- 4 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ローム粒子少量に含む。
- 431号ピット
- 1 暗褐色土 ややしまり粘性あり。黒褐色土小ブロック・ローム粒含む。
- 2 暗褐色土 ややしまり粘性あり。ローム粒子少量に含む。
- 405

第299図 3区2号屋敷内ピット

第182表 3区2号屋敷内ピット 計測表(cm)  
3区2号屋敷内ピット群

ピットNo.	グリッド	長径	短径	深さ	ピットNo.	グリッド	長径	短径	深さ	ピットNo.	グリッド	長径	短径	深さ
87	17N-11	48	24	33	339	17N-11	29	26	38	134	17L-11	39	38	43
89	17M-11	34	31	39	340	17N-12	30	20	26	135	17L-11	34	(25)	20
90	17N-11	30	(22)	27	341	17M-12	35	27	25	136	17L-11	(26)	26	18
94	17M-11	33	(27)	30	342	17M-12	34	(33)	20	137	17K-12	38	38	11
96	17N-11	28	(25)	62	343	17N-12	27	23	16	138	17L-12	45	38	17
97	17N-11	43	40	62	358	17N-11	(66)	43	55	145	17M-13	36	29	17
99	17N-11	32	(21)	38	470	17N-11	65	62	35	246	17N-13	25	24	9
100	17N-12	50	42	52	3区2号屋敷内個別ピット									
101	17N-12	34	31	10										
102	17N-11	28	(22)	18	ピットNo.	グリッド	長径	短径	深さ	247	17N-13	30	23	10
109	17N-11	(60)	39	42	80	17N-13	24	(17)	13	248	17N-14	35	24	46
110	17N-11	31	(15)	28	81	17N-13	(38)	28	30	249	17L-12	35	29	52
111	17N-11	35	29	42	82	17N-14	46	30	16	268	17K-12	56	41	34
112	17N-11	37	36	28	85	17N-14	37	30	32	269	17L-12	25	22	15
132	17N-12	50	35	39	86	17N-13	40	27	36	270	17L-12	33	28	79
237	17N-12	41	32	47	95	17N-14	28	23	22	280	17M-10	43	34	65
326	17N-12	26	22	27	105	17M-10	32	30	11	286	17M-10	40	26	30
327	17N-11	40	(35)	20	108	17N-13	50	(38)	17	293	17M-10	23	19	40
328	17N-11	36	35	35	115	17N-13	41	39	20	306	17M-13	28	25	30
329	17N-11	34	32	41	116	17M-13	34	25	63	325	17L-10	(32)	(21)	23
330	17M-11	26	25	57	117	17M-10	23	16	37	360	17M-10	29	27	62
332	17M-11	27	23	31	118	17L-10	53	(31)	51	431	17O-14	29	22	13
333	17M-11	30	23	21	119	17N-13	(30)	(22)	21	432	17O-14	27	21	11
338	17N-11	(37)	30	38	133	17L-11	46	40	32	433	17O-13	24	20	9
										436	17N-13	48	(22)	9
										448	17L-12	42	(37)	38

(5)溝・道路

溝は6条あり、ほとんどが2号屋敷の区画に関する。6～7号溝は、南辺から東辺を区画する。ただし、7号溝は直線的に伸び、屋敷に関係しない可能性もある。12号溝はこれらの溝の南側に並走し、重複して1号道路が設けられる。両溝の間には帯状空間が生じ、ここに16号掘立柱建物や1号柱穴列があり、門や柵列として外郭線を構成する。したがって、1号道路はこれに付合する。19号溝も同じく南面を区画するが、6～8号溝の主要部分が北に折れて、幅1.5m程度の土橋状に掘り残される。これもおそらく出入り口であり、2号屋敷の東側に隣接する屋敷状の空間と結んでいる。この空間は2区22号掘立柱建物が所在する空間と見なされる。23号溝は2号屋敷の西辺を区画する。ただし、西側にも少量の土坑・ピットが分布し、これも屋敷に含めて扱う。

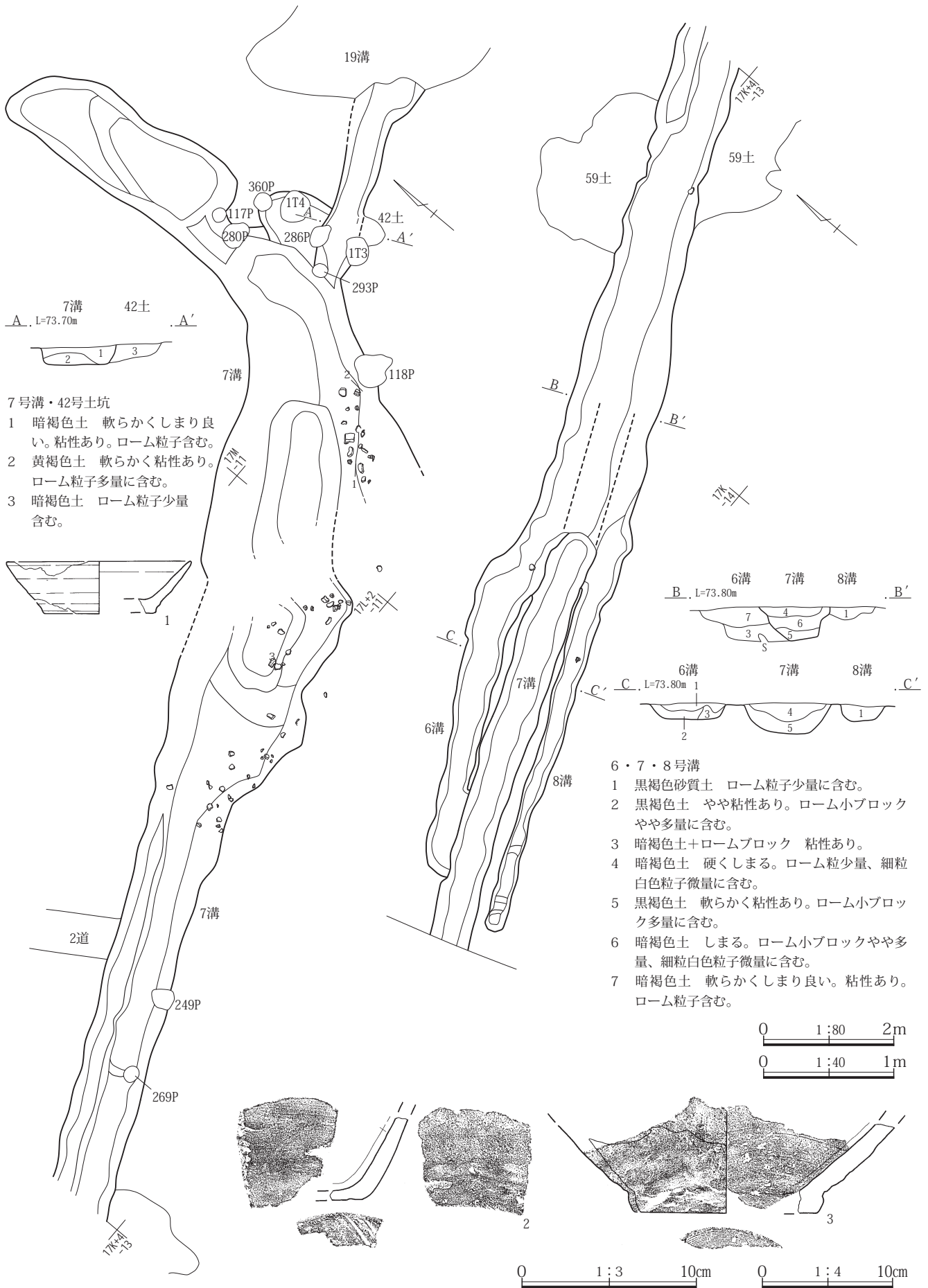
6・7・8号溝(第300図、P.L.115・161、第183表)

位置 17J～N-14・15グリッド。7号溝は6・8号溝より後出だが、北半部では不分明となり個別に判別できない。平面形は直線状に伸びるものと、L字形に西へ折れるものに分かれる。前者は19号溝と重複して不明となる。2号屋敷の東側を区画する。北東延長線上に位置する2区では、同様な走向方位を持つ9・13号溝があり、重複する19号溝も含めて、同一の溝として相応する溝2条の存在が想定できる。南北軸の走向方位はN-3°-

Wで、東西軸はN-66°-E。断面形は全て逆台形。壁は斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。両端の比高差は5cmで、勾配はほとんどない。6・8号溝の埋没土は黒褐色砂質土を主体としており、埋没状況や埋没時期に近いものが想定される。これらより後出の7号溝の埋没土は、暗褐色土が主体で、堅くしまるか、しまる傾向にある。形態的な特徴と埋没土から考えて、7号溝が直線的に伸びるものとする。中央の屈曲部分で、在地系土器と礫がやや集中して出土する。規模は東西長32.12m南北長6.4m、7号溝の上端幅59～310cm最大深28cm、6号溝の上端幅40～75cm最大深12cm、8号溝の上端幅19～49cm最大深24cmである。出土遺物から中世に比定される。7号溝の掲載遺物のほか、近現代土器類1片が出土している。

12号溝・1号道路(第301・302図、P.L.115・161、第184表)

12号溝 位置 17J～M-8～14グリッド。30号土坑、1号道路より前出で、16号掘立柱建物P4、5号井戸と重複するが新旧関係不明。北端は調査区域外へ伸びる。南端は立ち上がりでなく、削平などにより不分明となる。平面形はわずかに蛇行する。走向方位N-64°-E。断面形は皿状。壁は緩やかに立ち上がる。底面は丸みを持つ。両端の比高差は6cmで、勾配はほとんどない。埋没土は重複する1号道路の影響が大きく、埋没状況不詳。北半部で遺物・小礫が多く出土するが、1号道路の範囲



第300図 3区6～8号溝と7号溝出土遺物

第4章 発掘調査の記録

と一致するため、そちらに帰属する可能性が高い。ただし、出土遺物は調査時に溝の遺物として取り上げられており、これに従う。出土遺物は在地系土器鍋鉢類を主体として、年代は14世紀後半から15世紀後半に及ぶが、瀬戸陶器壺(302図17)は18世紀前半に属する。掲載遺物のほか、中世在地系土器9片、その他土器類2片が出土している。規模は長さ37.80m上端幅182～395cm最大深29cmである。出土遺物から15世紀後半を下限とすると考えられる。

1号道路 位置 17K～M-9～12グリッド。12号溝よりも後出。中央付近は攪乱により消滅し、南北に分断される。平面形は直線状。走向方位N-66°-E。溝状に掘り込みによる地業があり、小礫や黄褐色土で埋める。出土遺物は12号溝と不分明である。規模は長さ18.24m上端幅40～82cmである。12号溝より後出であり、17の瀬戸陶器壺を考慮すれば、18世紀前半に比定される可能性が高い。

第183表 3区7号溝出土遺物

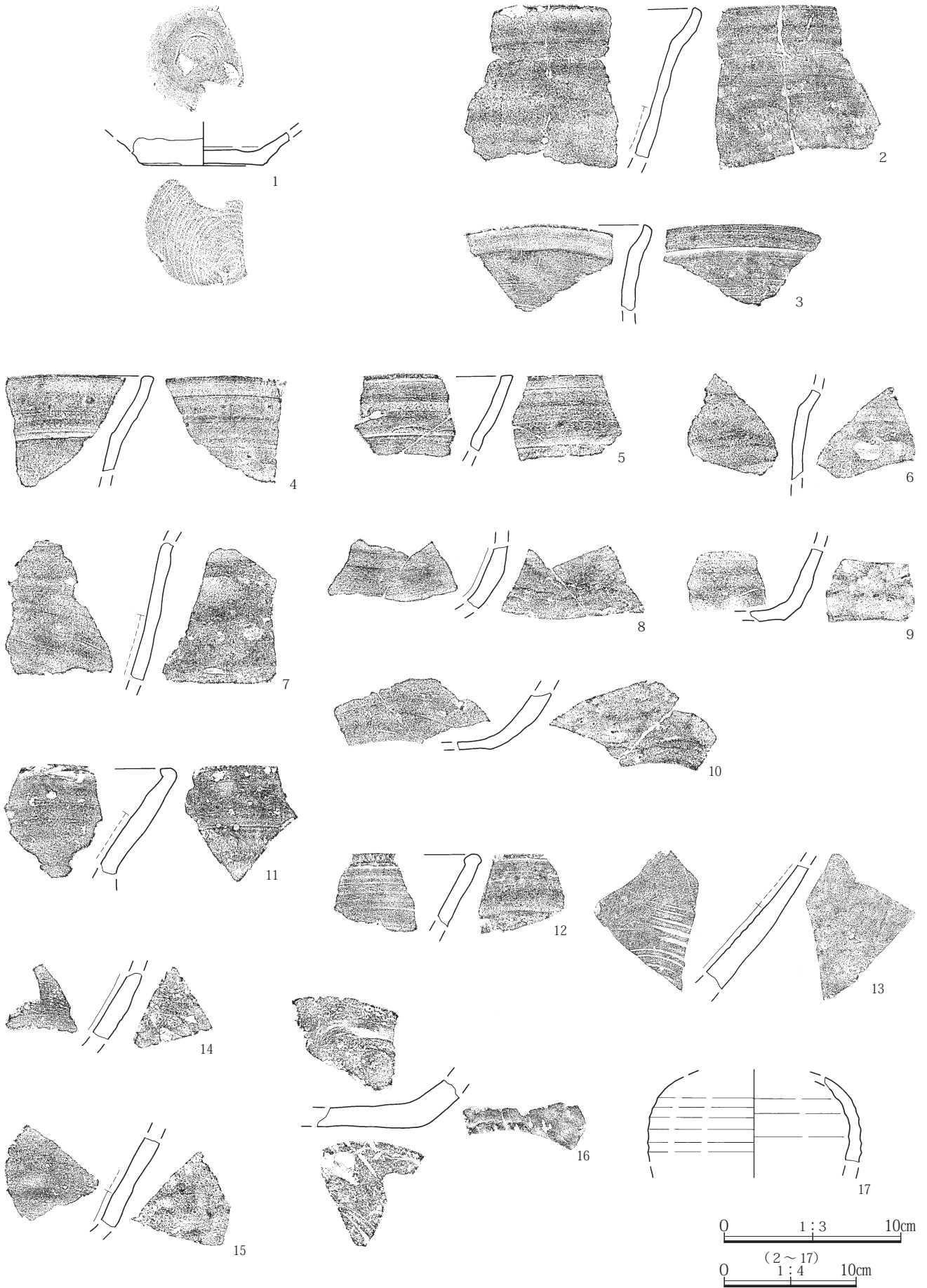
挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第300図	1	在地系土器	皿	+4cm	(13.9)	(8.3)	3.9	1/4	B	にぶい 橙・浅 黄	轆轤左回転整形。全体に遺存状態がやや不良。	14世紀後半～ 15世紀前半。
第300図	2	在地系土器	内耳鍋	+18cm	-	-	-	体～底 部	B	黄灰	体部の器壁は厚い。体部外面下端は篋撫で。丸底か。	中世。
第300図 PL.161	3	在地系土器 片口鉢	片口鉢	+31cm	-	(14.0)	-	体下位 片	B	灰	底部器壁厚く、体部外面下端は屈曲し、底部は筒状に立ち上がる。底部左回転系切無調整。体部内面は使用により平滑となる。	中世。

第184表 3区12号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第302図	1	在地系土器	皿	+10cm	-	(7.2)	-	底部片	B	黒褐	底部内面周縁はドーナツ状に浅く窪む。底部左回転系切無調整。	中世。
第302図	2	在地系土器	内耳鍋	+4cm	-	-	-	口縁～ 体部	B	暗灰黄	還元炎。口縁部はやや短く、下部で外方に湾曲した後内湾。底部内面は低く突出し、先端は尖る。	I・II期。
第302図	3	在地系土器	内耳鍋	+5cm	-	-	-	上半部 片	A	にぶい 橙	断面はにぶい橙色、器表は黒色。器壁は厚く、口縁部は短く内湾。口縁端部内面は尖る。口縁部外面下位は、強い横撫により部分的に段差を生じる。	I期。
第302図	4	在地系土器	内耳鍋	+9cm	-	-	-	口縁部 片	A	橙	器壁はやや厚い。口縁部下で緩く湾曲し、口縁部は内湾。口縁部下内面は不鮮明な段をなすが、下部は明瞭な稜をなす。口縁端部内面は明瞭な稜をなす。	III期。
第302図	5	在地系土器	内耳鍋	+6cm	-	-	-	口縁部 片	B	灰黄	還元炎気味。器壁はやや厚く、口縁部下は外方に小さく屈曲。屈曲部内面は低く不明瞭な段をなす。口縁部は内湾気味に延びる。口縁端部は僅かに丸みを持ち、端部内面は小さく突き出る。	III期。
第302図	6	在地系土器	内耳鍋	+3cm	-	-	-	体上位 片	B	にぶい 黄	還元炎。口縁部は下位で屈曲する。口縁部下内面に窪みが認められ、内耳部分と考えられる。	中世。
第302図	7	在地系土器	内耳鍋	+2cm	-	-	-	体部片	B	灰	還元炎。残存部上端で外方に湾曲。器壁はやや厚い。	中世。
第302図	8	在地系土器	内耳鍋	+4cm	-	-	-	体下位 片	B	灰白・ 黄灰	体部下位片で器壁は厚く丸みを有する。丸底の可能性高い。	中世。
第302図	9	在地系土器	内耳鍋	底直	-	-	-	体～底 部	B	橙	体部器壁はやや厚い。体部外面下端は2段の篋撫で。砂底。丸底の可能性高い。	中世。
第302図	10	在地系土器	内耳鍋	+8cm	-	-	-	体～底 部	B	浅黄・ 橙	砂底。丸底の可能性高い。体部器壁は厚く、外面下端は篋撫で。	中世。
第302図	11	在地系土器	片口鉢	+11cm	-	-	-	口縁部 片	A	暗灰	断面は橙色、器表は暗灰色。器壁はやや厚く、口縁端部内面は内側に大きく突き出る。突出部上面の器表は摩滅。体部中位で外反か。	III・IV期か。
第302図	12	在地系土器	片口鉢 か	底直	-	-	-	口縁部 片	B	灰黄	還元炎。口縁部外面の横撫で範囲は端部から約4cm。口縁端部内面は突きだし、上面の器表が摩滅。端部外面は丸く小さく突き出る。	IV・V期か。
第302図 PL.161	13	在地系土器	片口鉢	+5cm	-	-	-	体部片	B	灰	還元炎で在地系としては焼き締まる。体部下位の器壁は厚い。内面に幅が不均一な5本一単位のすり目が2段。内面下部は使用により器表が摩滅し、上部は平滑となる。	中世。
第302図	14	在地系土器	片口鉢	+16cm	-	-	-	体部片	B	浅黄	使用により内面の器表摩滅。	中世。
第302図	15	在地系土器	片口鉢	+8cm	-	-	-	体部片	B	灰	断面中央は灰色、器表付近は橙色、器表は灰色。内面中位は使用により平滑となり、下位は器表が摩滅。	中世。
第302図	16	在地系土器	片口鉢	+6cm	-	-	-	底部片	B	灰	還元炎。使用により内面の器表は摩滅、底部と体部境が窪んだ箇所は摩滅しない。底部外面中央付近に糸切り状の痕跡が認められるが、他の部位は細かい圧痕が認められ板作りの可能性が高い。	中世。
第302図	17	瀬戸陶器	壺	底直	-	-	-	-	-	灰	外面に鉄釉。内面は無釉。	登窯5～7小 期。



第301図 3区12号溝、1号道路



第302図 3区12号溝出土遺物

19号溝(第303・304図、P L .117・161、第185表)

位置 17M-8・9グリッド。7号溝と重複するが新旧関係不明。平面形はほぼ直線状だが、南西端は屈曲気味に斜めに延びて立ち上がる。北東端は調査区域外へ延びる。東延長線上の2区13号溝と同一の可能性もあるが、市道部分で北に折れる可能性もある。走向方位N-67°-E。断面形はやや開いた逆台形。東壁は斜めに、西壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦。両端の比高差は16cmで、勾配2.64%で北東方へ下向する。埋没土は暗褐色土を主体とし、人為的な埋没を示す要素はない。南壁面に沿って、遺物・礫がやや集中して出土し、南側から流入する傾向が読み取れる。出土遺物は在地系土器鍋鉢類を主体とし、年代は14世紀後半から15世紀後半に及ぶ。掲載遺物のほか、中世在地系土器7片、その他土器類1片が出土している。規模は長さ6.05m上端幅279~305cm最大深38cmである。出土遺物から15世紀後半を下限とすると考えられる。

23号溝(第303・305図、P L .118・161、第186表)

位置 17M~O-12・13グリッド。14号掘立柱建物P

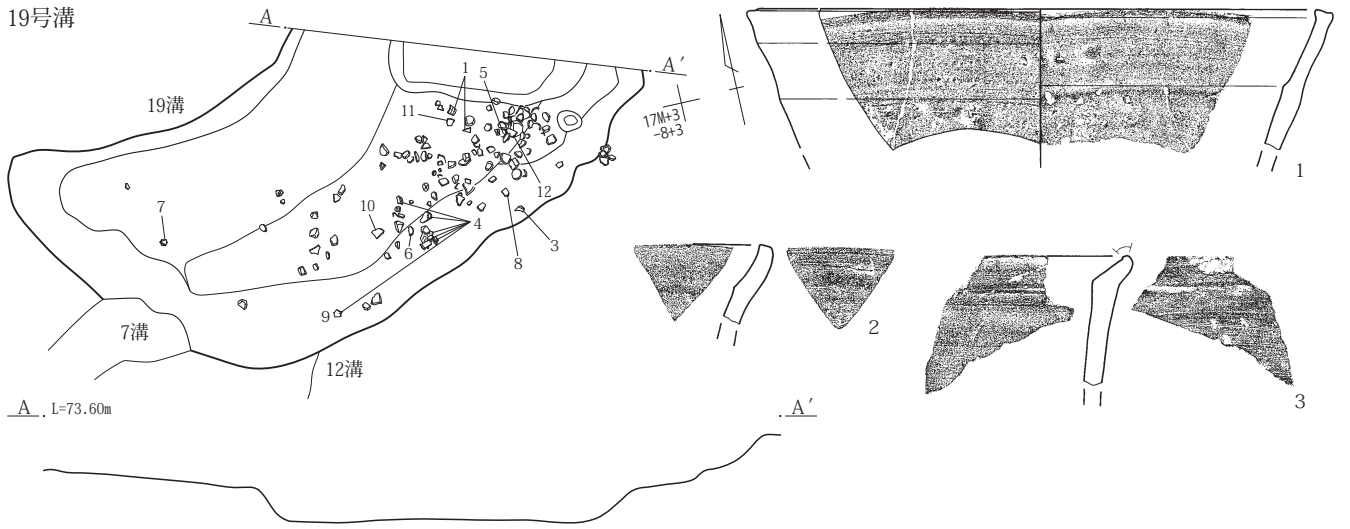
2、25号溝、1・2号集石遺構、116・306・326・327・340・341号ピットと重複するが新旧関係不明。2号溝の西辺を区画するが、西外側にやや遺構が広がる。平面形は両端が西へ屈曲してコの字形に近いが、北端は真っ直ぐ北へ延びる可能性もあり、2区2号溝か同8号溝と合流する可能性がある。南北軸の走向方位はN-10°-W、東西軸の走行方位はN-71°-Eである。断面形は皿状。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持ち、壁に沿って両側が更に溝状に凹む。新旧関係は確認できていない。北端は土坑状に凹み、南北軸はほぼ比高差が無く、南端東西軸は底面が一段高い。埋没土は黒褐色土を主体とするが、西北部の下位は褐色土が主体となり人為的に埋没する。西側の凹み部分に遺物・礫が集中する。出土遺物は在地系土器鍋鉢類を主体とし、年代は14世紀後半から15世紀後半に及ぶ。掲載遺物のほか、中世在地系土器5片、その他土器類1片が出土している。規模は南北長10.0m東西長6.18m、上端幅110~345cm最大深26cmである。出土遺物から15世紀後半を下限とすると考えられる。

第185表 3区19号溝出土遺物

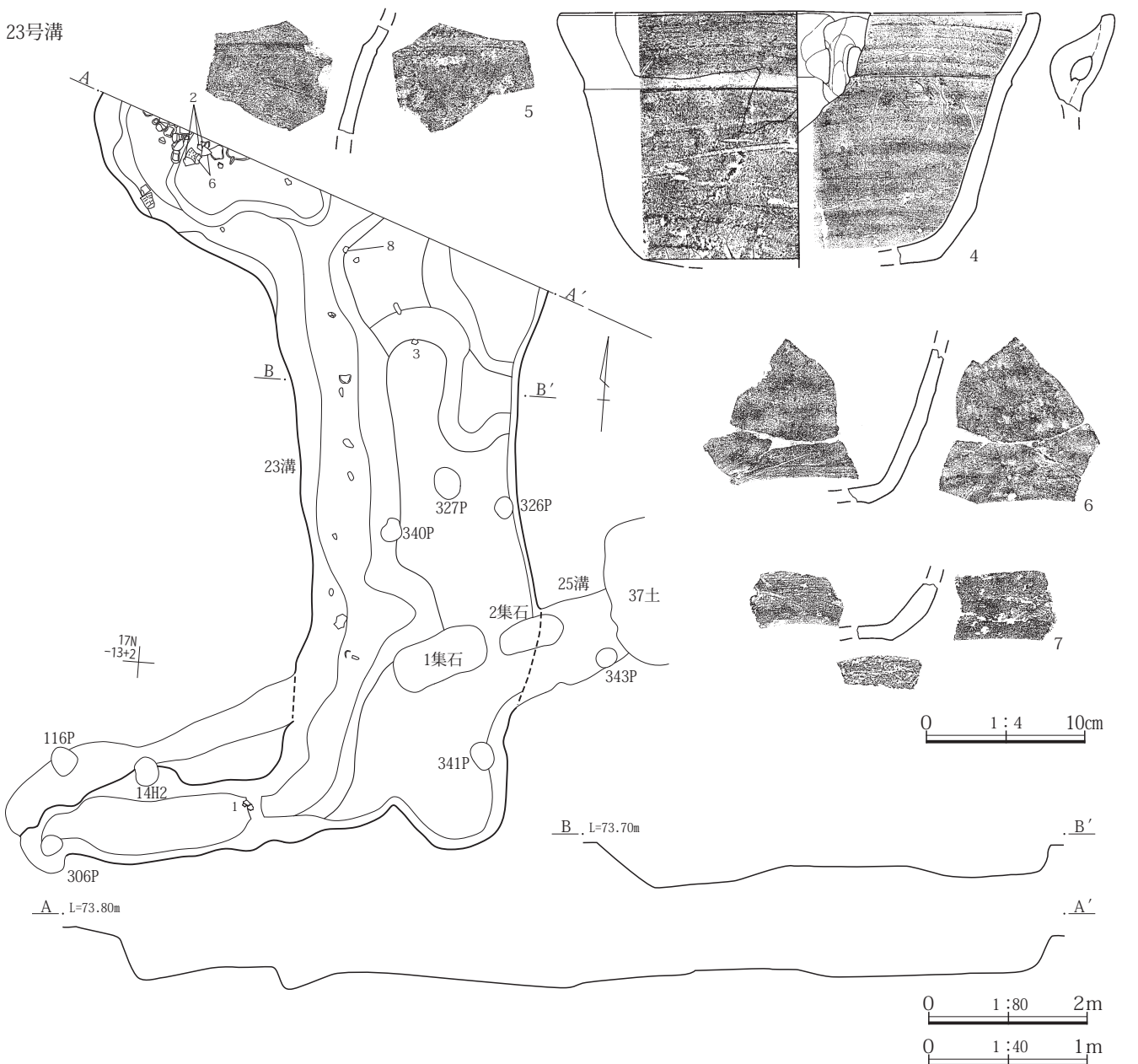
挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第303図	1	在地系土器	内耳鍋	+9cm	(31.0)	-	-	1/8	B	灰・にぶい黄	内面側の断面は灰色、外面側の断面はにぶい黄色、器表は黒色。器壁はやや薄く、口縁部は長く延びる。内面口縁部下の段差はやや明瞭。口縁端部上面は平坦で僅かに窪む。口縁端部内外面は低く突き出る。	Ⅲ・Ⅳ期。
第303図	2	在地系土器	内耳鍋か		-	-	-	口縁部片	B	灰	還元炎。口縁部は短く、内湾。口縁端部内面は尖る。	I期か。
第303図 PL.161	3	在地系土器	内耳鍋	+3cm	-	-	-	口縁部片	B	灰黄・暗灰黄	還元炎気味。器壁は厚く、口縁部は外反。内面口縁部下屈曲部の稜は明瞭。口縁端部は小さく内湾。	I期。
第303図	4	在地系土器	内耳鍋	+8cm	30.0	18.5 ~ 19.0	-	3/4	B	褐灰	底部外面はにぶい橙色を呈し、煮炊きによる酸化の可能性高い。口縁部は緩く外反して内湾しながら延びる。口縁端部上面は平坦で内面は明瞭な稜をなし、外面は丸みを持つ。内面口縁部下の段差は不明瞭で丸みを持つ屈曲に近い。体部下位は内傾し、外面は鋭削り。丸底。内耳1箇所残存。	Ⅱ期。
第303図	5	在地系土器	内耳鍋	+11cm	-	-	-	体上位片	A	黒褐	断面はにぶい黄橙色、器表は黒褐色。口縁部下の段差は幅広く、屈曲部は緩い稜をなす。	中世。
第303図	6	在地系土器	内耳鍋	+13cm	-	-	-	体下位片	B	灰	還元炎。体部外面下位の湾曲部は寛撫で。丸底。底部外面は砂底状。	I・Ⅱ期。
第303図	7	在地系土器	内耳鍋	+26cm	-	-	-	底部片	B	黄灰	還元炎。体部下位は内湾。体部下位外面は寛撫で。丸底。	I・Ⅱ期。
第304図	8	在地系土器	内耳鍋	+4cm	-	-	-	底部片	B	灰黄	還元炎気味。丸底で底部外面は砂底状。	中世
第304図	9	在地系土器	片口鉢	+8cm	-	-	-	口縁部片		灰	還元炎。断面は灰色、器表は暗灰色。口縁端部内外面は断面三角形に突き出す。内面の突出は幅広く先端は明瞭な稜をなす。口縁端部上面は緩い稜をなして盛り上がる。	Ⅲ・Ⅳ期。
第304図	10	在地系土器	片口鉢	底直	-	-	-	口縁部片	A	にぶい赤褐	外面器表のみ黒褐色。口縁部はやや内湾し、端部は内側に突き出る。端部は摩滅し、形状は不明。体部中位付近で外反。残存部にすり目は認められない。	Ⅳ・Ⅴ期。
第304図	11	在地系土器	片口鉢	+12cm	-	-	-	体下位片	B	灰	還元炎。体部内面下端は使用により器表摩滅し、下位は平滑。底部外面周縁は平滑。	中世。
第304図	12	在地系土器	片口鉢	+9cm	-	-	-	体下位片	A	灰黄	断面はにぶい黄褐色、器表付近から器表は灰黄色。体部内面下端から底部周縁は使用による摩滅が著しく、大きく窪む。体部内面下位は器表が摩滅し、中位は平滑となる。底部外面周縁は摩滅。体部外面の器表は1部剥離。	中世。



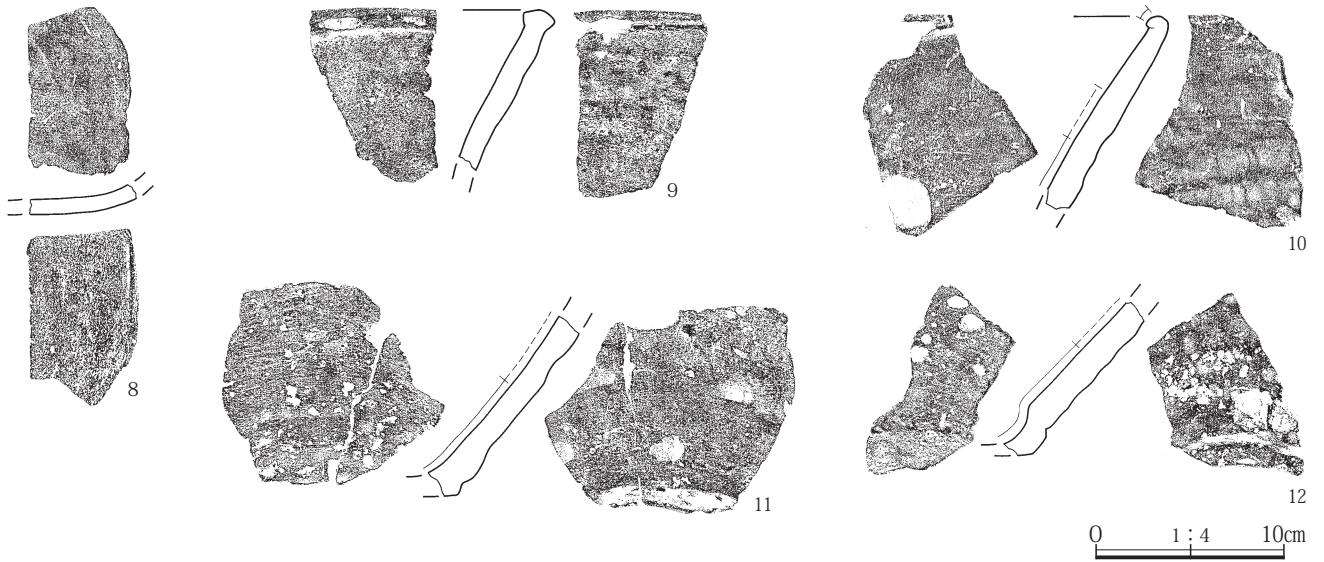
19号溝



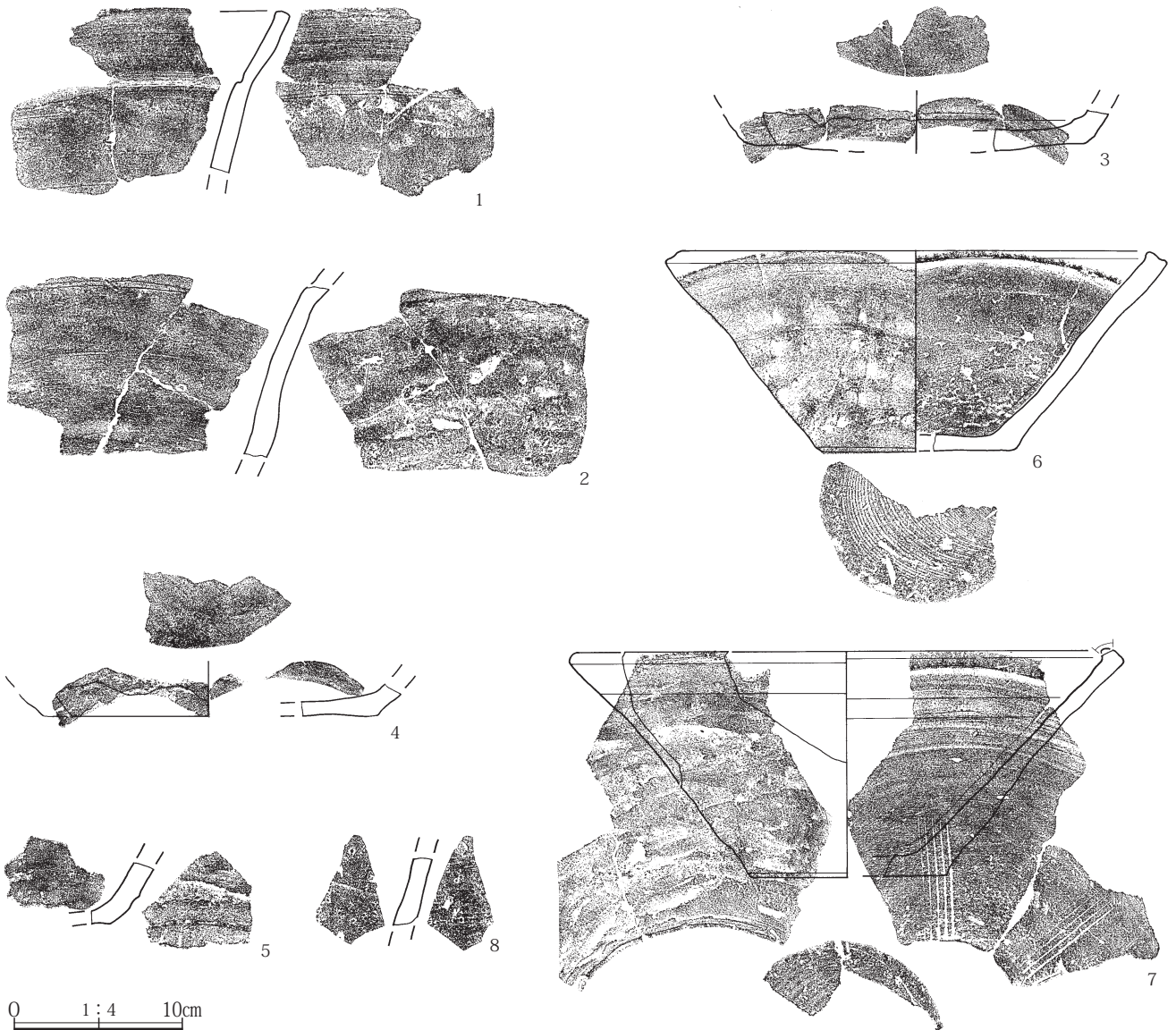
23号溝



第303図 3区19・23号溝と19号溝出土遺物(1)



第304図 3区19号溝出土遺物(2)



第305図 3区23号溝出土遺物

第186表 3区23号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第305図 PL.161	1	在地系 土器	内耳鍋		-	-	-	上半部 片	B	灰・灰 白・灰	断面は灰白色、器表は灰色。体部器壁は厚く、口縁部は内面側が薄くなる。口縁部下で緩く外反。外反部内面は明瞭な段をなす。	Ⅱ・Ⅲ期。
第305図	2	在地系 土器	内耳鍋	+6cm	-	-	-	体部片	B	灰・灰 白・灰	還元炎。器壁は厚く、体部下端付近は内湾気味。体部外面下端は篋撫で。体部は外反。口縁部下内面は低い段をなす。	Ⅰ・Ⅱ期か。
第305図	3	在地系 土器	内耳鍋	+5cm	-	(20.0)	-	1/6	B	暗灰 黄・に ぶい黄 橙・黄 灰	器壁は厚い。丸底であろう。体部外面下端は篋撫で。	中世。4と同一個体の可能性高い。
第305図	4	在地系 土器	内耳鍋		-	(19.6)	-	底部片	B	褐灰・ にぶい 黄橙・ 褐灰	器壁は厚い。丸底であろう。体部外面下端は篋撫で。	中世。3と同一個体の可能性高い。
第305図	5	在地系 土器	内耳鍋		-	-	-	底部片	B	灰	還元炎。器壁は厚く、体部下位は内湾。体部外面下位は篋撫で。1部の外面器表は欠損。丸底であろう。	中世。
第305図 PL.161	6	在地系 土器	片口鉢	+13cm	(27.7)	(11.0)	11.7	1/4	B	灰・に ぶい黄 橙・灰	断面はにぶい黄橙色、器表は灰色から黄灰色。底部の器壁は薄い。口縁部の器壁はやや厚い。口縁端部上面の外面寄りには僅かに窪む。口縁端部内面は小さく突き出る。突出部上面の器表は摩滅。底部回転糸切無調整。使用により、内面体部下位から底部周縁の器表は摩滅し、体部中位は平滑となる。底部と体部境は摩滅が著しく、ドーナツ状に窪む。底部外面周縁の器表摩滅。	Ⅳ期か。
第305図 PL.161	7	在地系 土器	片口鉢	+10cm	(31.5)	(11.3)	13.2	1/4	B	灰	還元炎。器壁は体部下位が厚く、口縁部に向かい薄くなる。口縁端部内面は突き出るが、上面の摩滅が著しく形状不明。口縁端部外面の器表も摩滅。体部内面に5本一単位の直線のすり目。すり目範囲の器表は摩滅。底部回転糸切無調整。底部外面周縁の器表摩滅。	Ⅴ期。
第305図	8	常滑陶 器	甕か	+16cm	-	-	-	体部片		灰白	外面器表はにぶい赤褐色、内面器表はにぶい褐色。	中世。

3 屋敷外の遺構

(1) 土坑

屋敷外の土坑について、中世遺物を伴う2基を扱う。両者は離れて分布するが、境界を規定するような溝に並行または重複する点で共通する。

15号土坑(第306図、P L.101・162、第187表)

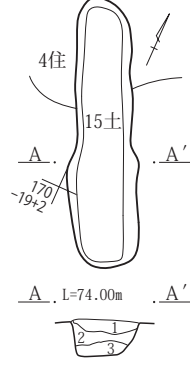
位置 17N・O-19グリッド。4号住居より後出。平面形は隅丸細長方形。主軸方位はN-14°-W。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土は下位に

ロームブロックを多量に含み人為埋没か。埋没土から1の古瀬戸卸皿が出土する。規模は長軸215cm短軸55cm深さ27cmである。出土遺物から1400年前後に比定される。

30号土坑(第306図、P L.102)

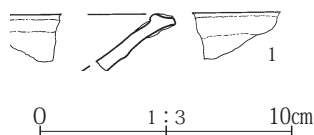
位置 17J-14・15グリッド。12号溝よりも後出。平面形は両丸長方形。主軸方位はN-84°-E。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没状況不詳。規模は長軸193cm短軸72cm深さ8cmである。埋没土中から中世在地系土器鍋1片が出土している。

15号土坑

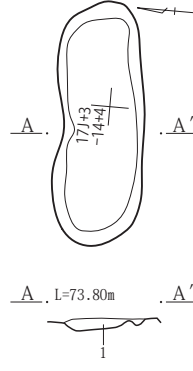


15号土坑

- 1 暗褐色土 ややしまりやや粘性あり。ローム小ブロックやや多量、細粒白色粒子微量に含む。
- 2 暗褐色土 軟らかくやや砂質。ローム粒微量に含む。
- 3 黒褐色土 軟らかくやや砂質。ローム大ブロックやや多量に含む。



30号土坑



30号土坑

- 1 黒褐色砂質土 ややしまる。細粒白色粒子微量に含む。

第306図 3区15・30号土坑と15号土坑出土遺物

第187表 3区15号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第306図 PL.162	1	古瀬戸	卸皿		-	-	-	口縁部 片		灰黄	口縁端部は外反。口縁部上面に突帯を廻らす。口縁部のみ灰釉。内外面の口縁部以下は無釉。	後Ⅱ期。

(2)井戸

調査区中央南寄りに近接して3基が分布する。屋敷内にもそれぞれ井戸があることから、直接的には関わらないと考えられる。2号井戸は浅いため、井戸ではない可能性もある。屋敷を区画する12・18号溝に囲まれている面もあり、一連の遺構ともとらえられよう。

2号井戸(第307図、P.L.107)

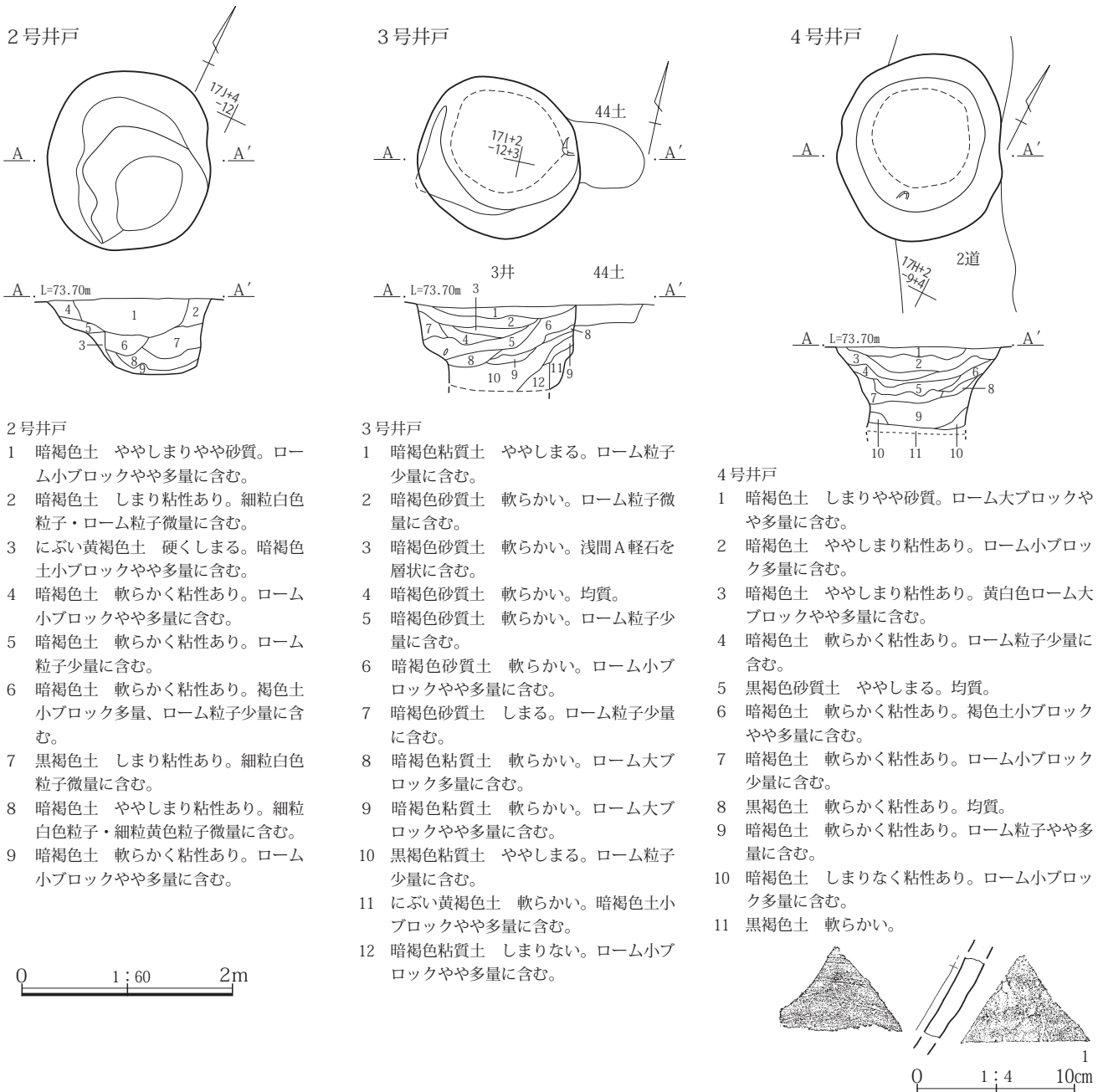
位置 17J-11・12グリッド。重複なし。

確認面形状と規模 楕円形。長径1.68m短径1.54m。

底面形状と規模 不整円形。長径0.81m短径0.60m。

断面形 逆台形で、西壁は斜めに立ち上がる。深さ0.71m。

埋没状況 暗褐色土を主体とし、自然埋没か。



第307図 3区2～4号井戸と3号井戸出土遺物

第188表 3区3号井戸出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第307図	1	在地系 土器	片口鉢		-	-	-	体部片	B	黒	断面は黒色、器表付近は灰白色、器表は黒色。残存部にすり目はない。使用により、内面の器表は摩滅。内面上部の器表は平滑となる。	中世。281図2と同一個体の可能性高い。

遺物 中世以降の遺物は出土していない。

時期 埋没土から中世以降に比定される。

3号井戸(第307図、P L.107、第188表)

位置 17I-12グリッド。調査区境であり、安全上の問題で完掘されていない。

重複 44号土坑より後出。

確認面形状と規模 整った円形。長径1.53m短径1.50m。

断面形 円筒形か。深さ0.80m以上。

埋没状況 埋没土は下位にロームブロックをやや多く含み、堆積状況から東側から人為的に埋め戻されたと思われる。

遺物 埋没土から在地系土器鉢(中世)が出土する。

時期 上位には白色軽石(As-A)が層状に堆積することから、18世紀末にはほぼ埋没したと考えられる。

4号井戸(第307図、P L.107)

位置 17H-9・10グリッド。調査区境であり、安全上の問題で完掘されていない。

重複 2号道路と重複するが新旧関係不明。

確認面形状と規模 整った円形。長径1.76m短径1.53m。

断面形 漏斗状と推定される。深さ1.20m以上。

埋没状況 埋没土最下位にロームブロックを多量に含む状況から人為的に埋め戻されたと思われる。

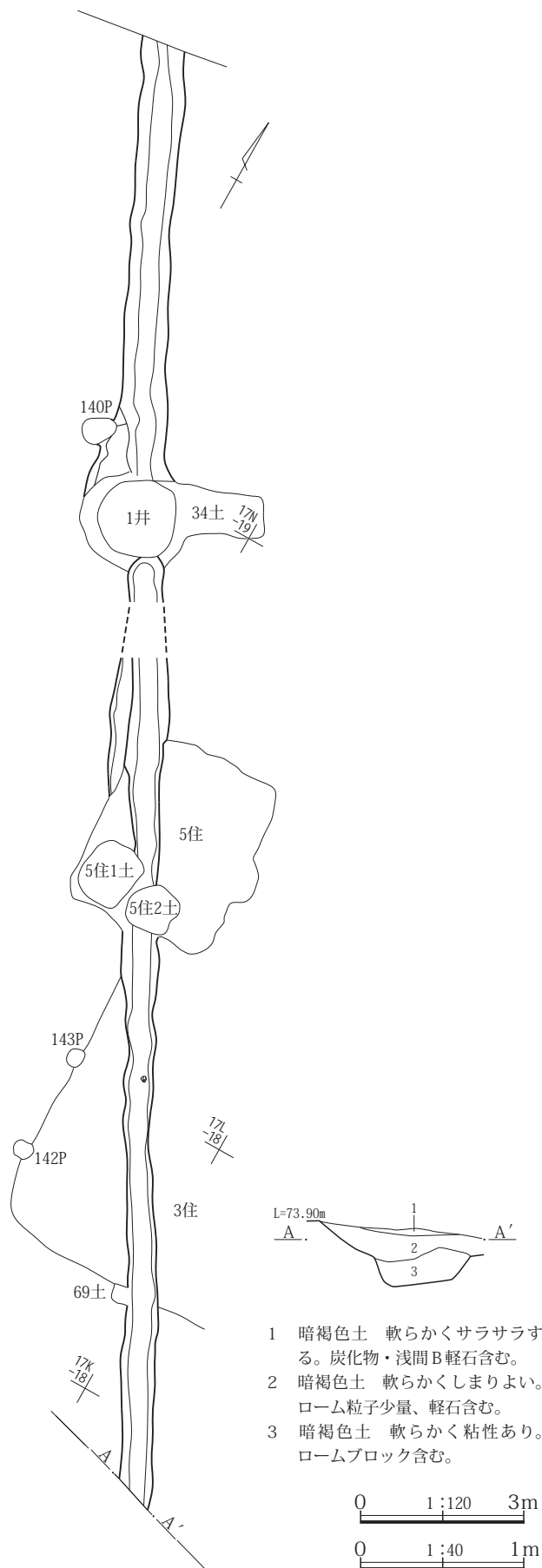
遺物 中世以降の遺物は出土していない。

時期 埋没土から中世以降に比定される。

### (3)溝

4号溝(第308図)

位置 17J~M-19グリッド。3・4号住居、34号土坑、1号井戸より後出で、69号土坑、140号ピットと重複するが新旧関係不明。南北端とも調査区域外へ延び、北側は1区80号溝と同一となる。平面形は直線状。走向方位N-28°-W。断面形は逆台形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦で、半円形の掘削具痕が2列並行してやや多くみられる。掘削幅の目途と推測される。両端の比高差は7cmで、勾配はほとんどない。自然埋没か。規模は長さ15.50m上端幅40~110cm最大深33cmである。白色軽石(As-B)を含んで中世以降に比定される。



- 1 暗褐色土 軟らかくサラサラする。炭化物・浅間B軽石含む。
- 2 暗褐色土 軟らかくしまりよい。ローム粒子少量、軽石含む。
- 3 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ロームブロック含む。

第308図 3区4号溝

第4項 近世

近世遺物を伴う溝2条のみである。25号溝は2号屋敷の中央を東西に分割するが、出土遺物から近世となる。区画溝と走向方位が一致しており、地割など何らかの影響がうかがえる。なお、3号溝周辺には同様な1・2号溝もあるが、それらは次項で扱う。

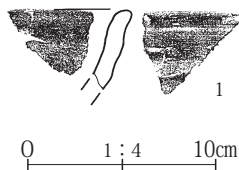
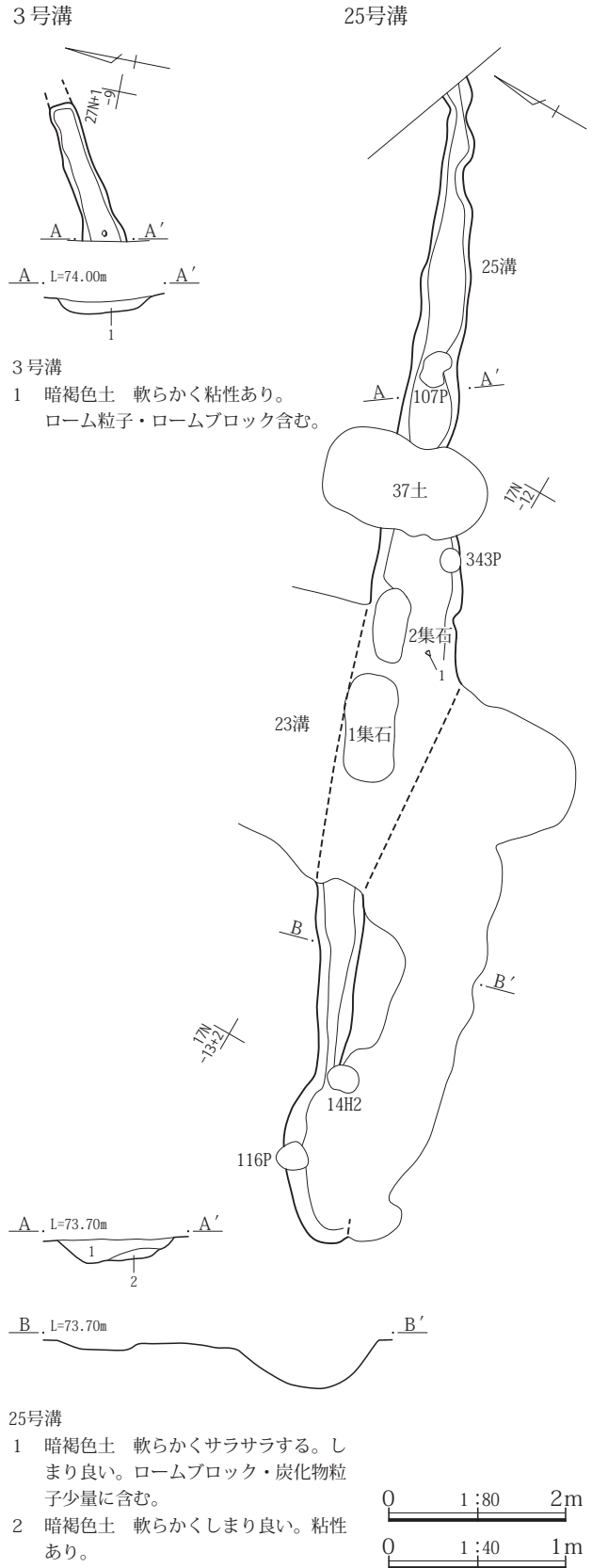
1 溝

3号溝(第309図)

位置 27N-9グリッド。重複なし。東西側とも調査区域外へ延びる。平面形は直線状。走向方位N-59°-E。断面形は皿状。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。両端の比高差は2cmで、勾配1.16%で東方へ下向する。埋没状況不詳。規模は長さ1.72m上端幅28~47cm最大深8cmである。中世以降の遺物は出土していない。

25号溝(第309図、第189表)

位置 17M・N-11~13グリッド。23号溝より後出で、1・2号集石遺構より前出。14号掘立柱建物P2、37号土坑、107・116・343号ピットと重複するが新旧関係不明。北端は調査区域外へ延びる。平面形はほぼ直線状で、中央部がやや広がる。走向方位N-68°-E。断面形は皿状。壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はサラサラしている。埋没状況不詳。23号溝と重複する部分で、焙烙と考えられる1の在地系土器が出土する。掲載遺物のほか、中世在地系土器15片が出土している。規模は長さ13.12m上端幅19~102cm最大深14cmである。出土遺物から近世に比定される。



第309図 3区3・25号溝と25号溝出土遺物

第189表 3区25号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第309図	1	在地系 土器	焙烙か		-	-	-	口縁部 片	B	灰白	断面は暗灰色、器表付近から器表は灰白色。口縁端部は内傾気味。江戸時代の焙烙の可能性高い。	江戸時代か。

第5項 近代以前

ここでは概ね近代以前ながら、年代推定ができない遺構を扱う。掘立柱建物は2棟で、調査区西側に位置する。1号掘立柱建物は柱穴の規模も大きく、古代に帰属する可能性がある。主軸方位は平安時代の4・5号住居ともほぼ主軸方位が一致し、関連も想定できる。

土坑は調査区全体のほぼ半数を占める。形態により分布範囲に傾向がみられる。

1 掘立柱建物

屋敷とは関係しない2棟であり、調査区西側に位置する。周辺にやや多くピットが分布しており、認定できていない建物も含めた一群であると思われる。1号掘立柱建物は柱穴の規模も大きく、古代に帰属する可能性がある。主軸方位はともに1類で共通する。平安時代の4・5号住居ともほぼ主軸方位が一致し、関連も想定できる。

1号掘立柱建物(第310図、P L .95、第190表)

位置 17N・O-20、27N・O-1グリッド。重複 P 2は30号ピットより後出で、P 3・4は11号溝と重複するが新旧関係不明。

主軸方位 N-2~4°-W 面積 16.69㎡

形態 2×2間・南北棟+西張り出し。南辺が北辺より28cm短いため、東辺は東へ外傾する。東辺の中間柱P 2、西辺の中間柱P 6ともに北へ5cm寄っており付合する。張り出し部の柱筋も通る。南辺の中間柱P 4は柱筋より

も外側へ張り出しており、棟持柱とみられる。北辺にはこの棟持柱がないため、あるいは一間以上北側調査区域外へ延びる可能性がある。P 1には柱痕がみられるが、P 2・9では黄褐色土やロームブロックが水平方向に堆積しており、廃棄された後人為的に埋め戻された可能性もある。身屋部分の柱穴の長径は42~77cmと比較的大きく均質で、張り出し部のP 9は南北に長く、重複や柱の抜き取りを思わせるが、短径はP 8とともに26cmと等しい。柱穴の深さは身屋部分で38~46cmと深めで、張り出し部は11~20cmと浅い。身屋部分のP 2・6・7の底面には柱を据えた小穴が見られ、特徴的である。詳細な規模は第190表のとおり。内部中央南寄りに位置する82号土坑は位置的に内部施設の可能性がある、鉄滓や湯玉を含み、鍛冶に関連する。本建物の性格を示す遺構である。中世以降の遺物は出土していない。

14号掘立柱建物(第311図、P L .97、第191表)

位置 17L・M-19グリッド。

重複 P 5は14号溝と重複するが新旧関係不明。

主軸方位 N-1°-W 面積 6.50㎡

形態 1×2間・南北棟。北辺は南辺より8cm長い、東西辺ともほぼ同じ長さであり、平面形は整った長方形である。東辺のP 2は南へ26cm寄る。埋没状況不詳。柱穴の長径は36cm前後を主体とする。深さは20cm前後と30cm前後に分かれ、概して浅い。詳細な規模は第191表のとおり。主軸方位のほぼ等しい5号住居に隣接しており、関連する可能性が高い。中世以降の遺物は出土していない。

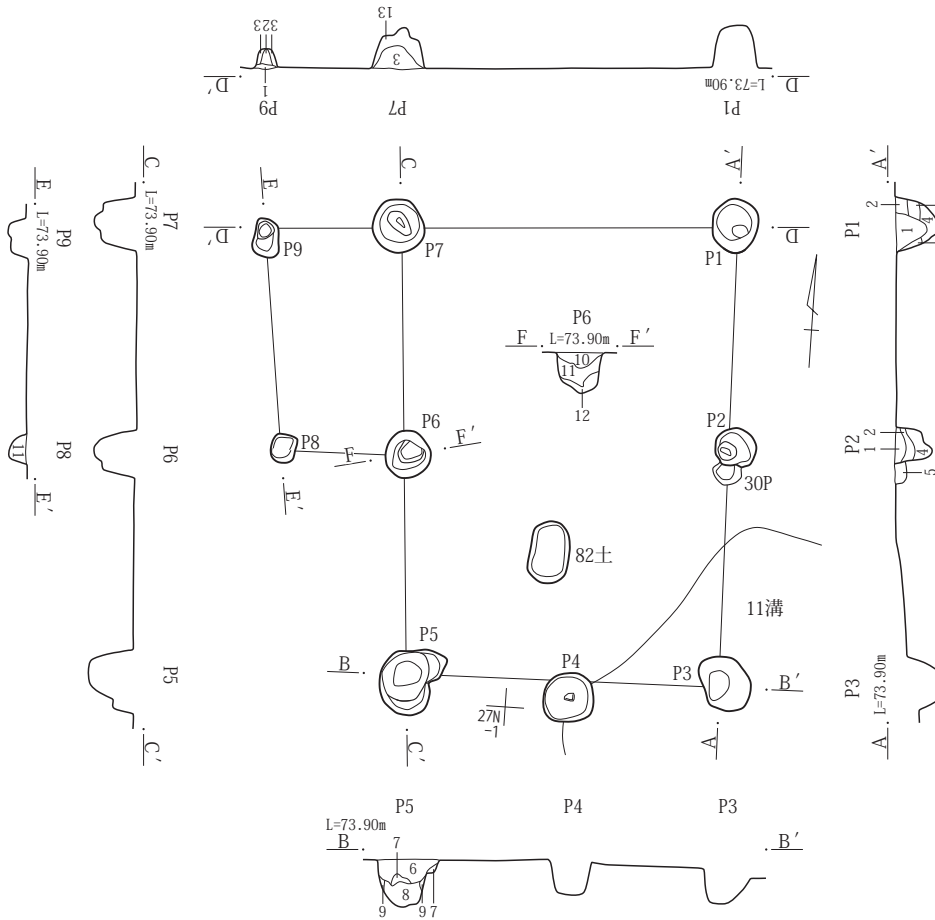
第190表 3区1号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		2×2間・南北棟・西張出			面積	16.69㎡	
主軸方位		N-2~4°-W			位置	17N・O-20 27N・O-1	
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	旧ピット番号
		長径	短径	深さ			
東辺 4.83	P 1	58	47	45	楕円形	2.35	441
	P 2	42	41	38	円形	2.48	31
南辺 3.32	P 3	65	46	39	楕円形	1.62	74
	P 4	53	52	42	円形	1.72	27
西辺 4.80	P 5	77	59	46	不定形	2.35	40
	P 6	49	48	44	円形	2.45	32
北辺 3.60	P 7	58	53	46	円形	P 1へ3.59	56
張出 1.36	P 8	30	26	11	方形	2.32	423
張出 1.45	P 9	41	26	20	長方形	P 7へ1.45	79

第191表 3区14号掘立柱建物 計測表

建物全体の規模		1×2間・南北棟			面積	6.50㎡	
主軸方位		N-1°-W			位置	17L・M-19	
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	旧ピット番号
		長径	短径	深さ			
東辺 3.74	P 1	36	30	28	楕円形	2.13	127
	P 2	46	35	20	楕円形	1.61	45
南辺 1.69	P 3	26	25	25	円形	1.69	36
西辺 3.77	P 4	37	36	16	円形	3.77	126
北辺 1.77	P 5	35	30	33	隅丸方形	P 1へ1.77	125

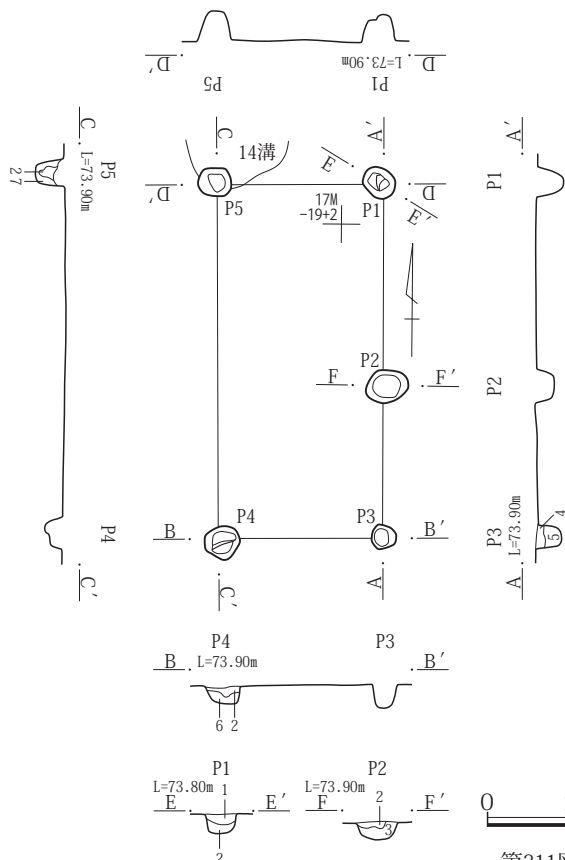
第4節 3区の遺構と遺物



1号掘立柱建物

- 1 黒褐色土 ローム粒子微量に含む。
- 2 暗褐色土 ローム大ブロックやや多量に含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子少量に含む。
- 4 暗褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
- 5 暗褐色土 黄色粒子微量に含む。
- 6 暗褐色土 ローム粒子・白色粒子・炭化物粒子少量含む。
- 7 暗褐色土 ローム粒子多量含む。
- 8 黒褐色土 ロームブロック含む。
- 9 黄褐色土
- 10 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量に含む。
- 11 黒褐色土 ローム粒子少量、黄色粒子微量に含む。
- 12 黒褐色土 ローム小ブロック多量に含む。
- 13 暗褐色土 ローム粒子含む。

第310図 3区1号掘立柱建物



14号掘立柱建物

- 1 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子含む。
- 3 暗褐色土 褐色土含む。
- 4 暗褐色土 黄色粒子微量に含む。
- 5 暗褐色土 ローム小ブロックやや多量、黄色粒子微量に含む。
- 6 暗褐色土
- 7 暗褐色土 ローム粒子多量に含む。

第311図 3区14号掘立柱建物



2 竪穴状遺構

1号竪穴状遺構(第312図、P L .92)

位置 17K・L-15・16グリッド、3号住居に近接している。

形状 南北にやや長い台形を呈する。

主軸方位 N-16°-W。

規模 長辺3.25m、短辺2.5m、残存壁高は6cm~14cmである。

床面 中央部から南北にかけて細長い硬化面が認められた。

埋没土 自然埋没土である。

遺物 出土していない。

時期 不明。

2号竪穴状遺構(第312図、P L .92)

位置 17L-16グリッド、3号住居を囲む東側の5溝aを壊している。

形状 不明瞭であるが、方形を呈するものと思われる。北側の落ち込みは当遺構にともなうものではない。

主軸方位 不明。

規模 東西3.2m、南北推定2.9m、残存壁高は6cmである。

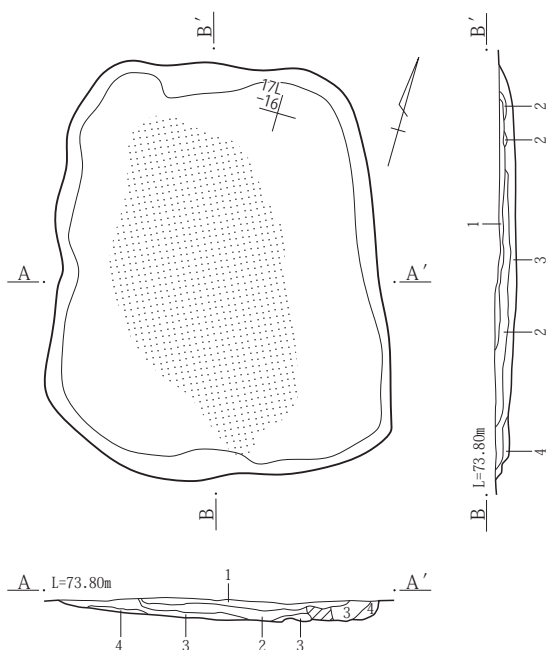
床面 ほぼ平坦である。硬化面は認められなかった。

埋没土 自然埋没土である。

遺物 出土していない。

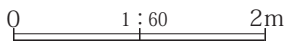
時期 不明。

1号竪穴状遺構

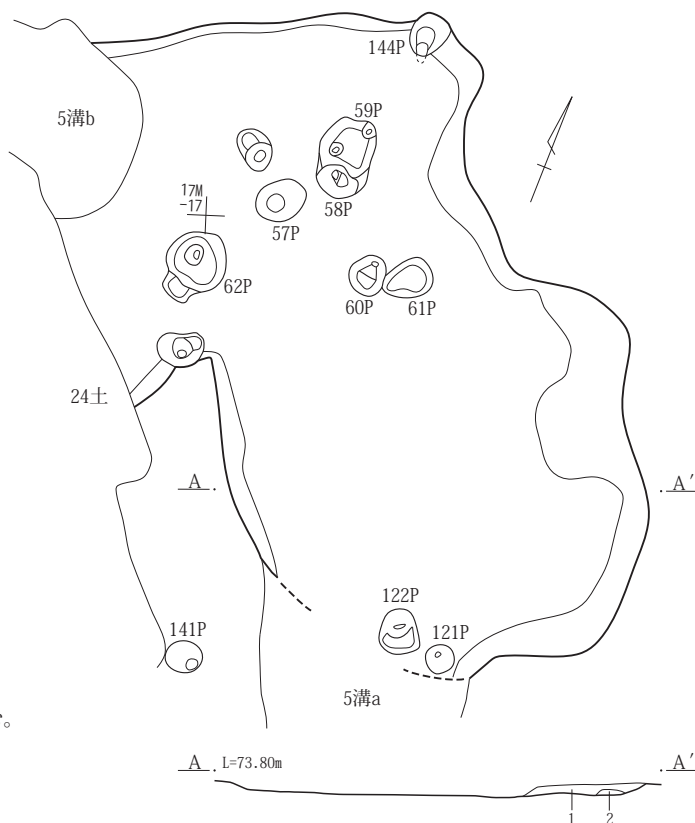


1号竪穴状遺構

- 1 暗褐色土 軟らかくしまりよい。白色粒子・ローム粒子少量に含む。
- 2 黒褐色土 やや硬くしまる。白色粒子・軽石含む。
- 3 暗褐色土 やや硬くしまり粘性あり。
- 4 暗褐色土 やや硬くしまり粘性あり。褐色土ブロック含む。



2号竪穴状遺構



2号竪穴状遺構

- 1 暗褐色土 軟らかくしまりよい。ローム粒子少量に含む。
- 2 灰褐色土 軟らかい。

第312図 3区1・2号竪穴状遺構

### 3 土坑

ここで扱う土坑は36基であり、本調査区全体78基のほぼ半数に当たる。屋敷部分に比べ多く、煩雑なため形態的により集計すると以下のとおりである。

隅丸方形	2
隅丸長方形	12
隅丸細長方形	3
両丸長方形	3
両丸細長方形	2
円形	4
楕円形	5
その他	5
計	36

隅丸方形2基は4号溝の東に並ぶ。規模も近い。

隅丸長方形13基のうち11基は、4号溝の東側にほぼ同じ主軸方位で2列に並ぶ。特に東側一群の北方延長線上には、1区182号土坑、同78号溝があり、同2号溝とも連携して、L字形に領域を区画する形状となる。また、2区2号屋敷の西辺を区画する25号溝も、L字形に西に折れて、西側を区画することから、これらの土坑と連携する可能性も生じる。したがって、これらは区画を意識した状況で設けられた可能性が高く、西側の3基も道などを挟んで対面する区画を反映するのかもしれない。なお、残る2基のうち、12号土坑も位置は離れるが、主軸方位が一致する。

隅丸細長方形3基のうち2基、両丸長方形3基のうち1基、両丸細長方形2基のうち1基も、11基の隅丸長方形と同様な主軸方位と分布にあり、これらは一連の遺構と見なされる。

また、隅丸細長方形、両丸長方形、両丸細長方形で各1基ずつが、やや離れて分布する。なお、残る両丸長方形の82号土坑は、1号掘立柱建物の内部施設と見なされるものである。

円形の3基のうち2基は、2・3号住居の間に位置する。残る41号土坑は中世の12号溝に近接する。

楕円形は5基とやや多く、調査区中央南端の2基、隅丸長方形の一群と並ぶ1基、調査区西端の2基に分かれ、概して遺構の希薄な部分に位置する。

#### 1号土坑(第313図、P L.100)

**位置** 27N-4グリッド。重複なし。平面形は不整楕円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没状況不詳。規模は長径84cm短径62cm深さ9cmである。中世以降の遺物は出土していない。

#### 2号土坑(第313図、P L.100)

**位置** 27N-3グリッド。重複なし。平面形は楕円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや凸凹する。自然埋没か。規模は長径106cm短径85cm深さ19cmである。中世以降の遺物は出土していない。

#### 3号土坑(第313図、P L.100)

**位置** 17K-19グリッド。重複なし。平面形はほぼ円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は凸凹して、一部ピット状に下がるが、植物攪乱も著しく不分明である。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長径110cm短径71cm深さ42cmである。中世以降の遺物は出土していない。

#### 4号土坑(第313図、P L.100)

**位置** 17L-19グリッド。重複なし。平面形は不整円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はやや丸みを持つ。埋没土は暗褐色土ブロックが下位に顕著で人為埋没か。規模は長径165cm短径163cm深さ23cmである。中世以降の遺物は出土していない。

#### 5号土坑(第313図、P L.100)

**位置** 17M-17グリッド。重複なし。平面形は隅丸長方形。主軸方位はN-25°-W。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土はサラサラして均質な暗褐色土であり人為埋没か。規模は長軸182cm短軸90cm深さ8cmである。中世以降の遺物は出土していない。

#### 6号土坑(第313図、P L.100)

**位置** 17N-17グリッド。重複なし。平面形は隅丸長方形。主軸方位はN-14°-W。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没状況不詳。規模は長軸172cm短軸82cm深さ8cmである。中世以降の遺物は出土していない。

#### 7号土坑(第313図、P L.100)

**位置** 17N-18・19グリッド。39号土坑、139号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は両丸長方形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦で、一部ピット状に下がるが、植物攪乱も著しく不分明である。埋没状況不詳。規模は長軸149cm短軸84cm深さ23cmである。中世以降の遺物は出土していない。

8号土坑(第313図、P L.100)

位置 17N-19グリッド。重複なし。平面形は隅丸方形。主軸方位はN-41°-E。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没状況不詳。規模は長軸98cm短軸91cm深さ11cmである。中世以降の遺物は出土していない。

9号土坑(第313図、P L.101)

位置 17N-19グリッド。平面形はほぼ円形でピット状。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持ち、植物攪乱が著しい。埋没状況は攪乱のため不詳。規模は長径61cm短径60cm深さ24cmである。中世以降の遺物は出土していない。

10号土坑(第313図、P L.101)

位置 17N-19グリッド。重複なし。平面形は隅丸方形。主軸方位はN-38°-W。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は丸みを持つ。自然埋没か。規模は長軸118cm短軸92cm深さ28cmである。中世以降の遺物は出土していない。

11号土坑(第313図、P L.102)

位置 17N・O-17・18グリッド。重複なし。平面形は隅丸長方形。主軸方位はN-25°-W。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸237cm短軸114cm深さ10cmである。中世以降の遺物は出土していない。

12号土坑(第313図、P L.101)

位置 27L-1グリッド。南半部は調査区域外となる。平面形は隅丸長方形か。主軸方位はN-13°-W。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックが目立ち人為埋没か。規模は長軸(164)cm短軸74cm深さ9cmである。中世以降の遺物は出土していない。

13号土坑(第313図、P L.101)

位置 27L-2グリッド。遺構のほとんどが南側調査区域外となる。平面形不詳。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はロームブロックが目立ち人為埋没か。規模は長軸(75)cm短軸(32)cm深さ12cmである。中世以降の遺物は出土していない。

17号土坑(第313図、P L.101)

位置 27M-2グリッド。重複なし。平面形は隅丸細長方形。主軸方位はN-20°-W。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没状況不詳。規模は長軸125cm短軸47cm深さ4cmである。中世以降の遺物は出土していない。

14・18～20・27号土坑(第314図、P L.102)

14号土坑 位置 17O-18グリッド。19・26号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸長方形か。主軸方位はN-25°-W。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没状況不詳。規模は長軸(153)cm短軸96cm深さ14cmである。中世以降の遺物は出土していない。

18号土坑 位置 17N-18グリッド。19号土坑より後出で、55・131号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸細長方形か。主軸方位はN-24°-W。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸(310)cm短軸(82)cm深さ8cmである。中世以降の遺物は出土していない。

19号土坑 位置 17N・O-18グリッド。18・20号土坑より前出で、14号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は両丸細長方形か。主軸方位はN-23°-W。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックが目立ち人為埋没か。規模は長軸374cm短軸96cm深さ22cmである。中世以降の遺物は出土していない。

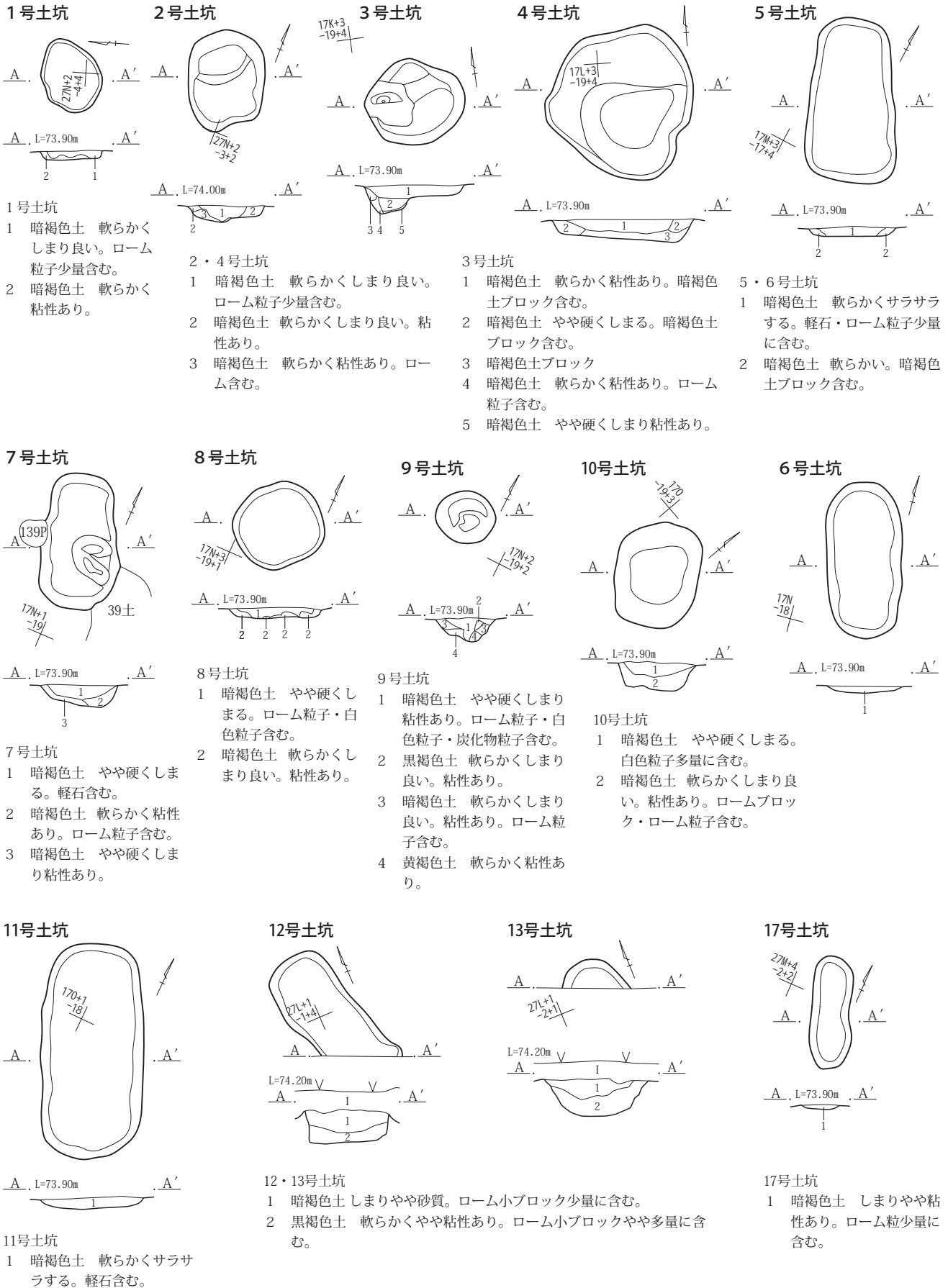
20号土坑 位置 17N-17・18グリッド。19号土坑より後出で、63・64号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸長方形か。主軸方位はN-20°-W。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックが目立ち人為埋没か。規模は長軸215cm短軸92cm深さ14cmである。中世以降の遺物は出土していない。

27号土坑 位置 17N-17グリッド。重複なし。平面形は乱れた楕円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は凸凹する。埋没状況不詳。規模は長径126cm短径87cm深さ19cmである。中世以降の遺物は出土していない。

21・22号土坑(第314図、P L.101)

21号土坑 位置 17M-18グリッド。5号住居と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸長方形か。主軸方位はN-24°-W。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックが目立ち人為埋没か。規模は長軸227cm短軸96cm深さ20cmである。中世以降の遺物は出土していない。

22号土坑 位置 17M-18グリッド。5号住居と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸長方形か。主軸方位はN-23°-W。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックが目立ち人為埋没か。規模は長軸(172)cm短軸87cm深さ12cmである。中世以降の遺物は出土していない。



第313図 3区近代以前土坑(1)

23号土坑(第314図、P L .102)

位置 17L-18グリッド。3・5号住居と重複するが新旧関係不明。平面形不詳。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没状況不詳。規模は長軸(122)cm短軸(102)cm深さ19cmである。遺物は土師器が8片出土している。

24号土坑(第314図、P L .102)

位置 17L・M-17グリッド。5号溝bと重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸長方形で南西部が溝状に延びる。主軸方位はN-23°-W。別の遺構が重複する可能性もある。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸444cm短軸110cm深さ29cmである。中世以降の遺物は出土していない。

25・26号土坑(第314図、P L .102)

25号土坑 位置 17O-18グリッド。北側は調査区域外となる。平面形は隅丸長方形か。主軸方位はN-17°-W。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックが目立ち人為埋没か。底面直上に黒褐色砂質土が水平堆積し、一定期間の開口状況を示唆する。規模は長軸(177)cm短軸87cm深さ10cmである。中世以降の遺物は出土していない。

26号土坑 位置 17O-18グリッド。14号土坑と重複するが新旧関係不明。北側は調査区域外となる。平面形は隅丸長方形か。主軸方位はN-21°-W。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没状況不詳。規模は長軸(160)cm短軸85cm深さ13cmである。中世以降の遺物は出土していない。

31号土坑(第314図、P L .102)

位置 27N・O-1グリッド。78号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は両丸細長方形。主軸方位はN-5°-W。壁は斜めに立ち上がる。底面は凸凹する。一部ピット状に下がるが、植物攪乱も著しく不分明である。埋没状況不詳。規模は長軸224cm短軸60cm深さ17cmである。中世以降の遺物は出土していない。

32号土坑(第314図、P L .102)

位置 27O-2グリッド。遺構のほとんどが北側調査区域外となる。平面形不詳。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没か。規模は長径(70)cm短径(21)cm深さ14cmである。中世以降の遺物は出土していない。

36号土坑(第315図、P L .103)

位置 17N-14・15グリッド。重複なし。平面形は両丸長方形。主軸方位はN-60°-E。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没土は砂質で自然埋没か。規模は長軸194cm短軸80cm深さ10cmである。中世以降の遺物は出土していない。

39号土坑(第315図、P L .103)

位置 17N-8グリッド。7号土坑、139号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸長方形か。主軸方位はN-18°-W。壁は斜めに立ち上がる。底面は凸凹する。埋没状況不詳。規模は長軸137cm短軸65cm深さ9cmである。中世以降の遺物は出土していない。

40号土坑(第315図、P L .103)

位置 17K-8グリッド。重複なし。平面形は隅丸細長方形。主軸方位はN-76°-E。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没状況不詳。規模は長軸152cm短軸50cm深さ10cmである。中世以降の遺物は出土していない。

41号土坑(第315図、P L .103)

位置 17K-10・11グリッド。重複なし。平面形はほぼ円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は凸凹し植物攪乱が顕著であるが、北壁際は深く掘り込まれ、重複するピットである可能性が高い。攪乱もあり埋没状況不詳。全体規模は長径91cm短径90cm深さ50cm、ピット状部分の規模は長径30cm短径25cm深さ50cmである。中世以降の遺物は出土していない。

42号土坑(第315図、P L .104)

位置 17M-10グリッド。7号溝より前出で、1号柱穴列P 4、286・293・360号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形不詳。壁は緩やかに立ち上がる。底面はやや凸凹する。埋没状況不詳。規模は長径122cm短径93cm深さ7cmである。中世以降の遺物は出土していない。

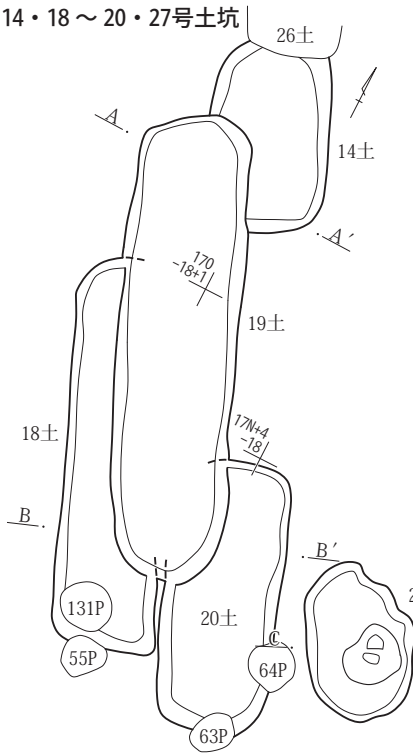
43号土坑(第315図、P L .104)

位置 17I-12グリッド。24号溝より後出か。平面形は不整楕円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックが目立ち人為埋没か。規模は長径120cm短径78cm深さ30cmである。中世以降の遺物は出土していない。

44号土坑(第315図、P L .104)

位置 17I-12グリッド。3号井戸より前出。平面形は楕円形か。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土

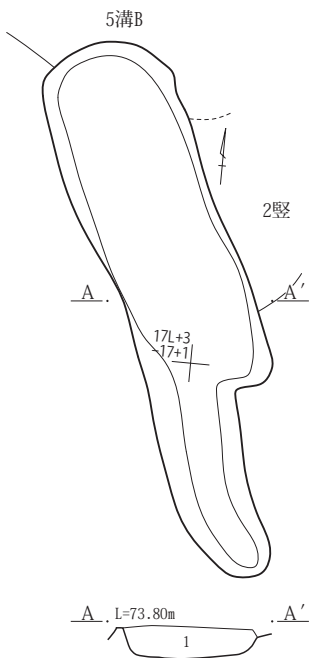
14・18～20・27号土坑



27号土坑

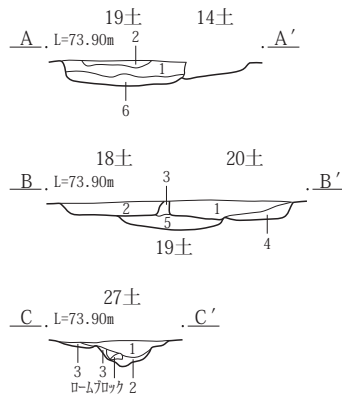
- 1 暗褐色土 やや硬くしまる。ローム粒子少量を含む。
- 2 暗褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。ロームブロック含む。
- 3 暗褐色土 軟らかくしまり良い。

24号土坑



24号土坑

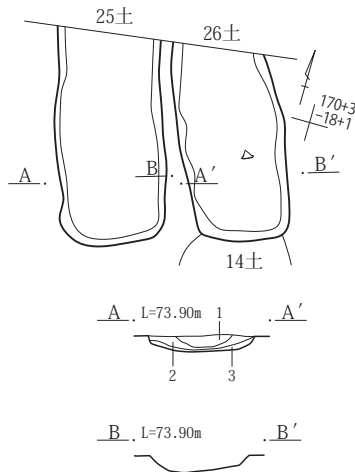
- 1 暗褐色土 やや硬くしまる。ロームブロック含む。



18・19・20号土坑

- 1 暗褐色土 しまりやや砂質。ローム小ブロックやや多量、細粒白色粒子微量を含む。
- 2 暗褐色土 ややしまりやや砂質。ローム粒少量、細粒白色粒子微量を含む。
- 3 暗褐色土 しまりやや砂質。ローム小ブロックやや多量を含む。
- 4 黒褐色砂質土 軟らかい。ローム小ブロック少量を含む。
- 5 黒褐色土 ややしまりやや砂質。ローム小ブロックやや多量を含む。
- 6 黒褐色土 ややしまりやや砂質。ローム小ブロック少量を含む。

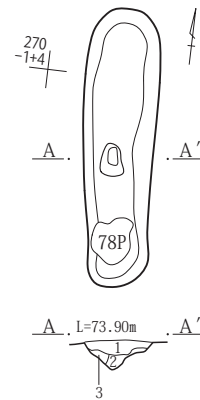
25・26号土坑



25号土坑

- 1 暗褐色土 ややしまりやや砂質。ローム粒少量を含む。
- 2 暗褐色土 ややしまりやや砂質。ローム小ブロックやや多量を含む。
- 3 黒褐色砂質土 軟らかい。

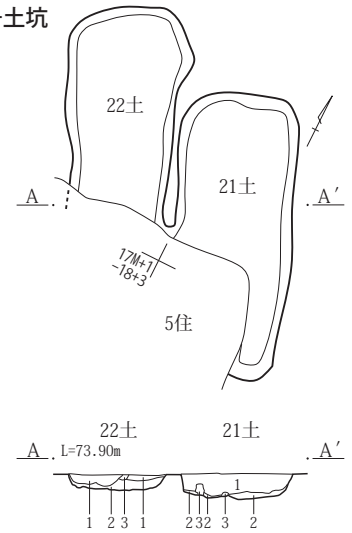
31号土坑



31号土坑

- 1 暗褐色土 軟らかくしまり良い。ローム粒子少量を含む。
- 2 暗褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。ロームブロック少量を含む。
- 3 黄褐色土 軟らかく粘性あり。ローム含む。

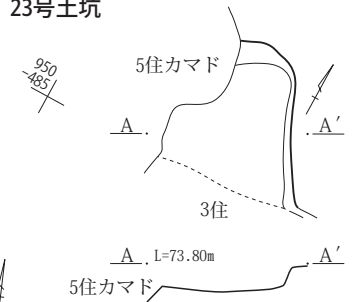
21・22号土坑



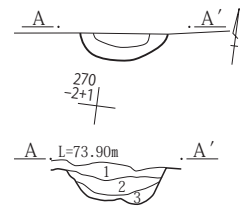
21・22号土坑

- 1 暗褐色土 軟らかくサラサラする。ロームブロック少量を含む。
- 2 暗褐色土 軟らかく粘性あり。
- 3 ロームブロック

23号土坑

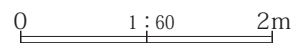


32号土坑



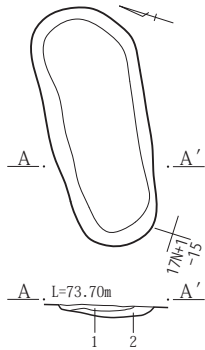
32号土坑

- 1 暗褐色土 ややしまりやや粘性あり。ローム小ブロックやや多量を含む。
- 2 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ローム粒少量を含む。
- 3 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ローム小ブロック多量を含む。



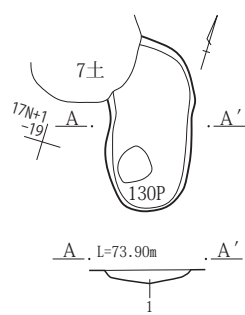
第314図 3区近代以前土坑(2)

36号土坑



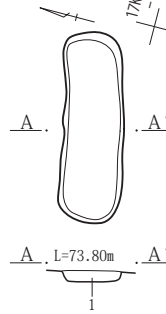
- 36号土坑
- 1 黒褐色砂質土 均質。ややしまる。
  - 2 黒褐色砂質土 ややしまる。ローム粒少量に含む。

39号土坑



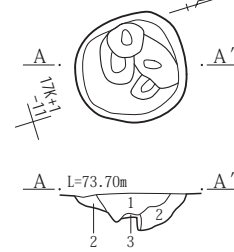
- 39号土坑
- 1 暗褐色土 やや硬くしまりサラサラする。

40号土坑



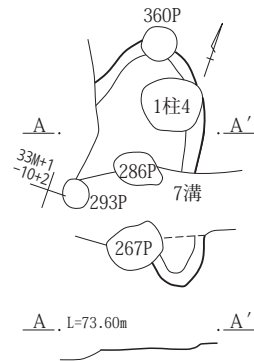
- 40号土坑
- 1 灰褐色土 軟らかくサラサラする。

41号土坑

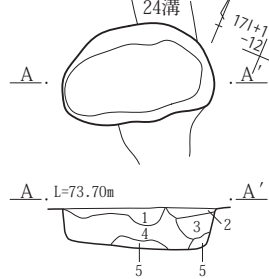


- 41号土坑
- 1 暗褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。ローム粒子少量に含む。
  - 2 暗褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。ロームブロック・ローム粒子含む。
  - 3 黄褐色土 非常に軟らかく粘性あり。

42号土坑

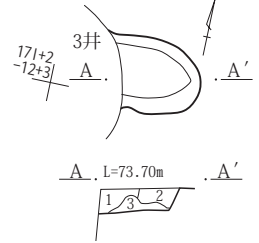


43号土坑



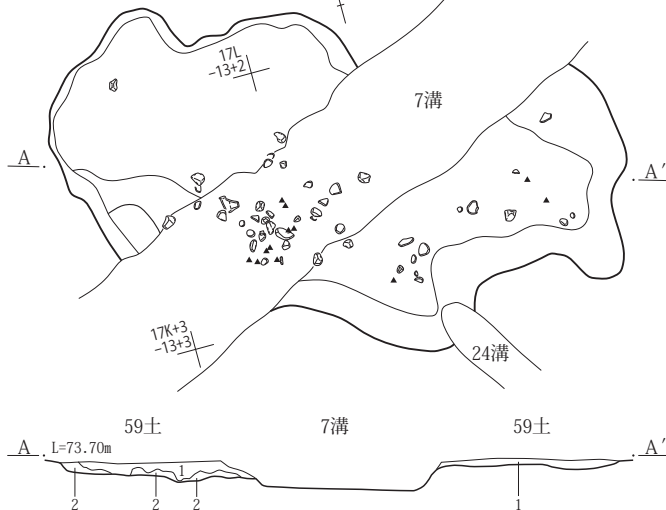
- 43号土坑
- 1 褐色土 ややしまり粘性あり。暗褐色土小ブロックやや多量に含む。
  - 2 褐色土 ややしまり粘性あり。ローム小ブロックやや多量に含む。
  - 3 褐色土 軟らかく粘性あり。ローム大ブロックやや多量に含む。
  - 4 暗褐色土 ややしまり粘性あり。ローム小ブロックやや多量に含む。
  - 5 暗褐色土+ロームブロック しまり粘性あり。

44号土坑



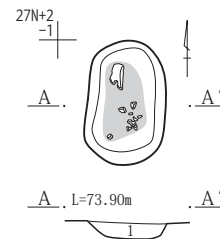
- 44号土坑
- 1 暗褐色粘質土 ややしまる。ローム粒微量に含む。
  - 2 暗褐色土 ややしまる。ローム小ブロックやや多量に含む。
  - 3 暗褐色土+ロームブロック ややしまる。

59号土坑

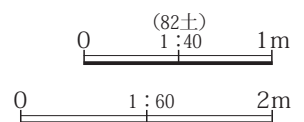


- 59号土坑
- 1 暗褐色土 軟らかくしまりよい。ローム粒子・ロームブロック少量に含む。
  - 2 黄褐色土 軟らかく粘性あり。ローム粒子・ロームブロック多量に含む。

82号土坑



- 82号土坑
- 1 暗褐色土 しまり粘性あり。ローム粒子少量、鉄滓含む。



第315図 3区近代以前土坑(3)

はロームブロックが目立ち人為埋没か。規模は長径(75)cm短径60cm深さ18cmである。中世以降の遺物は出土していない。

#### 59号土坑(第315図、P L.105)

**位置** 17K・L-12・13グリッド。7号溝と重複し、状況から後出か。平面形は不整形。壁は緩やかに立ち上がる。底面は凸凹する。埋没状況不詳。規模は長径452cm短径260cm深さ8cmである。埋没土中に小礫をやや多く含む。中世以降の遺物は出土していない。

#### 82号土坑(第315図、P L.106)

**位置** 17N-20グリッド。重複はないが、1号掘立柱建物内部の南西部に位置し、内部施設の可能性がある。平面形は両丸長方形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土は均質だが、埋没状況不詳。規模は長軸65cm短軸41cm深さ15cmである。埋没土中から鉄滓片199.31g、鍛造剥片0.76g、湯玉1.06gが出土しており、鍛冶に関連するが、焼土などは確認されておらず、鉄滓などを廃棄した土坑の可能性もある。中世以降の遺物は出土していない。

#### 4 ピット群・ピット(第316～319図、P L.108～111・113・114、第192～194表)

調査区西端にはピットがやや集中するため、便宜的にピット群として扱う。分布では、東西方向や北西-南東方向に連続する一群も認められるが、建物として復元されるものではなく、また柵列なども想定しにくい。78号ピットは、31号土坑と重複するが新旧関係不明。埋没土では柱痕なども見られない。48・51号ピットは中位まで黄褐色土で埋まっており、やや人為的な埋め戻しも想定できる。

個別のピットのうち、124号ピットは16号土坑と、139号ピットは7号土坑と重複するが新旧関係不明。37・69・84号ピットで柱痕が認められる。前2者は3号住居の周辺及び囲む5号溝c内部にあり、関連も想定される。

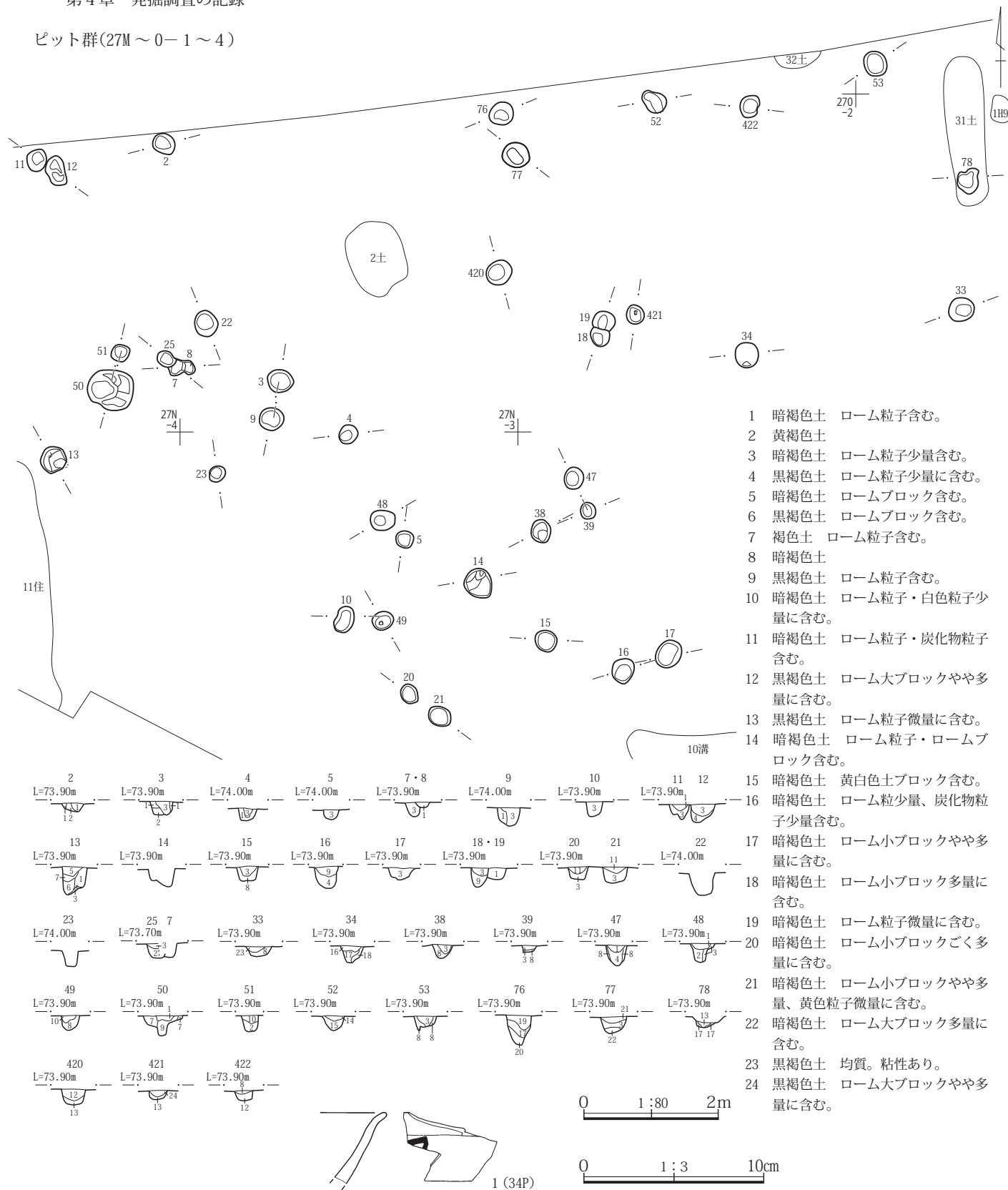
ピット群・個別ピットの詳細な規模は第192・194表のとおり。

第192表 3区近代以前ピット群 計測表(cm)

ピットNo.	グリッド	長径	短径	深さ
2	27N-4	34	29	13
3	27N-3	37	35	17
4	27M-3	29	25	16
5	27M-3	27	25	10
7	27N-3	26	(17)	18
8	27N-3	(20)	16	16
9	27N-3	35	34	24
10	27M-3	40	25	21
11	27N-4	32	28	22
12	27N-4	43	26	25
13	27M-4	37	37	40
14	27M-3	46	39	27
15	27M-2	33	30	19
16	27M-2	37	32	25
17	27M-2	43	35	18
18	27N-2	29	25	29
19	27N-2	(37)	32	17
20	27M-3	40	25	16
21	27M-3	37	28	24
22	27N-3	39	32	31
23	27M-3	26	23	20
25	27N-4	28	23	18
33	27N-1	39	34	18
34	27N-2	38	30	36
38	27M-2	34	30	17
39	27M-2	25	22	12
47	27M-2	32	28	28
48	27M-3	36	29	27
49	27M-3	31	27	17
50	27N-4	68	50	25
51	27N-4	26	24	22
52	27N-2	38	30	18
53	27O-1	38	33	12
76	27N-3	35	34	40
77	27N-2	38	38	20
78	27N-1	37	30	10
420	27N-3	39	35	28
421	27N-2	28	26	13
422	27N-2	32	26	16



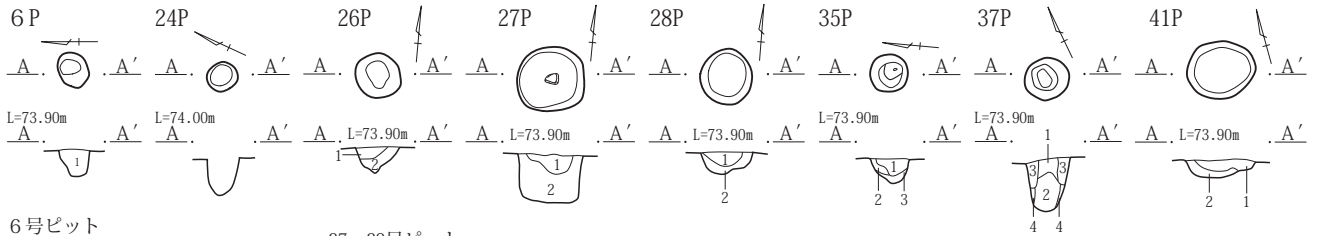
ピット群(27M~0-1~4)



第316図 3区近代以前ピット群と34号ピット出土遺物

第193表 3区34号ピット出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第316図	1	須恵器 椀	口縁部~体部小 片		細砂粒/酸化焙/に ぶい黄橙	ロクロ整形、回転方向不明。	外面口縁部に墨 書、一部辺のた め判読不能。



6号ピット

1 暗褐色土 軟らかくしまり良い。ローム粒子少量含む。

26号ピット

1 黒褐色土 しまりやや粘性あり。黄色粒子微量に含む。  
2 黒褐色土 軟らかく粘性あり。ローム小ブロック多量に含む。

27・28号ピット

1 暗褐色土 軟らかく粘性あり。細粒白色粒子微量に含む。  
2 暗褐色土 しまり粘性あり。ロームブロックやや多量に含む。

41号ピット

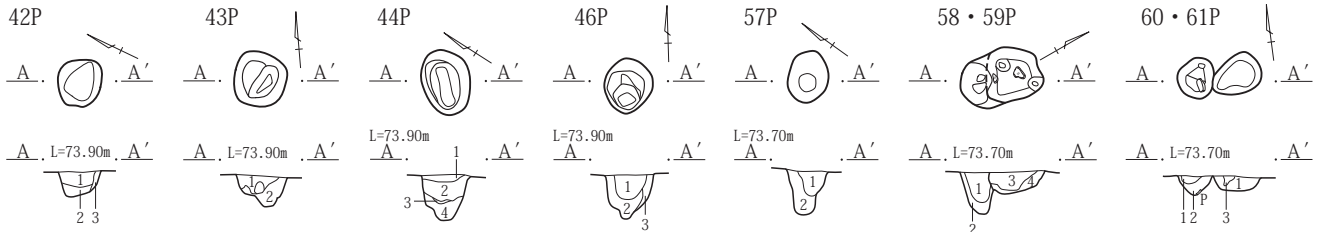
1 暗褐色土 軟らかくしまり良い。ローム粒子・炭化物粒子少量含む。  
2 暗褐色土 軟らかく粘性あり。

35号ピット

1 黒褐色土 軟らかく粘性あり。微量に含む。  
2 黒褐色土 軟らかく粘性あり。ローム粒子少量に含む。  
3 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ローム小ブロックやや多量に含む。軟らかい。

37号ピット

1 暗褐色土 ややしおまる。ローム粒子微量に含む。  
2 黒褐色土 軟らかく粘性あり。ローム粒微量に含む。  
3 暗褐色土 ややしまり粘性あり。ローム粒子やや多量に含む。  
4 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ローム小ブロック多量に含む。



42・43号ピット

1 暗褐色土 軟らかくしまり良い。褐色土含む。  
2 褐色土 軟らかく粘性あり。  
3 暗褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。

44号ピット

1 暗褐色土 軟らかくしまり良い。ローム粒子含む。  
2 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ロームブロック・炭化物粒子少量含む。  
3 黒褐色土 軟らかく粘性あり。  
4 黄褐色土 軟らかく粘性あり。ローム多量に含む。

58・59号ピット

1 暗褐色土 軟らかくしまり良い。ローム粒子・白色粒子含む。  
2 暗褐色土 軟らかく粘性あり。黄白色土ブロック含む。  
3 暗褐色土 軟らかくしまり良い。ロームブロック・ローム粒子含む。  
4 黄褐色土 軟らかいローム多量に含む。

60・61・62号ピット

1 暗褐色土 ローム粒子多量含む。  
2 暗褐色土 軟らかくしまり良い。ローム粒子含む。  
3 ロームブロック  
4 暗褐色土 やや硬くしまる。ロームブロック・ローム粒子含む。

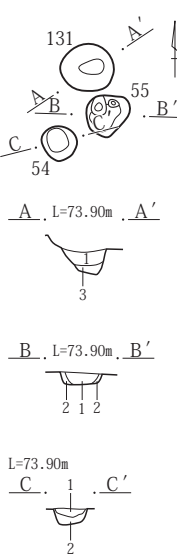
46号ピット

1 暗褐色土 軟らかくしまり良い。ローム粒子・炭化物粒子含む。  
2 黒褐色土 軟らかく粘性あり。ローム粒子少量含む。  
3 暗褐色土 軟らかくしまり良い。

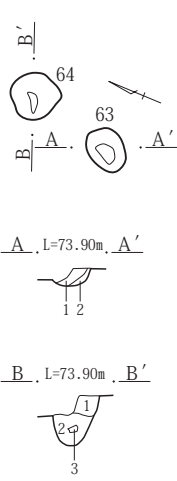
57号ピット

1 暗褐色土 軟らかくしまり良い。ロームブロック・ローム粒子含む。  
2 暗褐色土 やや硬くしまり粘性あり。ローム粒子含む。

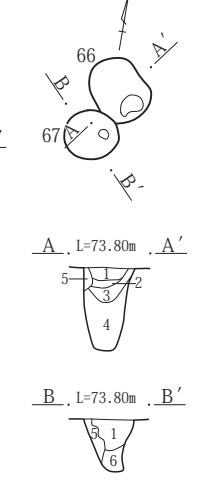
54・55・131P



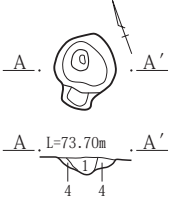
63・64P



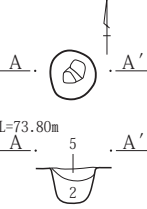
66・67P



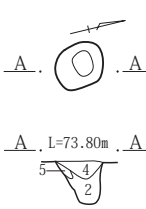
62P



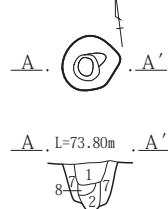
65P



68P



69P



65～69号ピット

1 暗褐色土 白色粒子・ローム粒子少量含む。  
2 暗褐色土 ローム粒子含む。  
3 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック含む。  
4 暗褐色土 ロームブロック少量含む。  
5 暗褐色土  
6 暗褐色土 ローム粒子・黄白色土ブロック含む。  
7 褐色土 ローム粒子含む。  
8 黄白色土ブロック

54・55・131号ピット

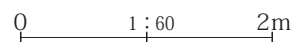
1 暗褐色土 やや硬くしまる。ローム粒子少量含む。  
2 暗褐色土 軟らかくしまり有り。  
3 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ロームブロック多量に含む。

63号ピット

1 暗褐色土 やや硬くしまる。白色粒子・ローム粒子少量含む。  
2 暗褐色土 軟らかくしまり良い。ローム粒子含む。

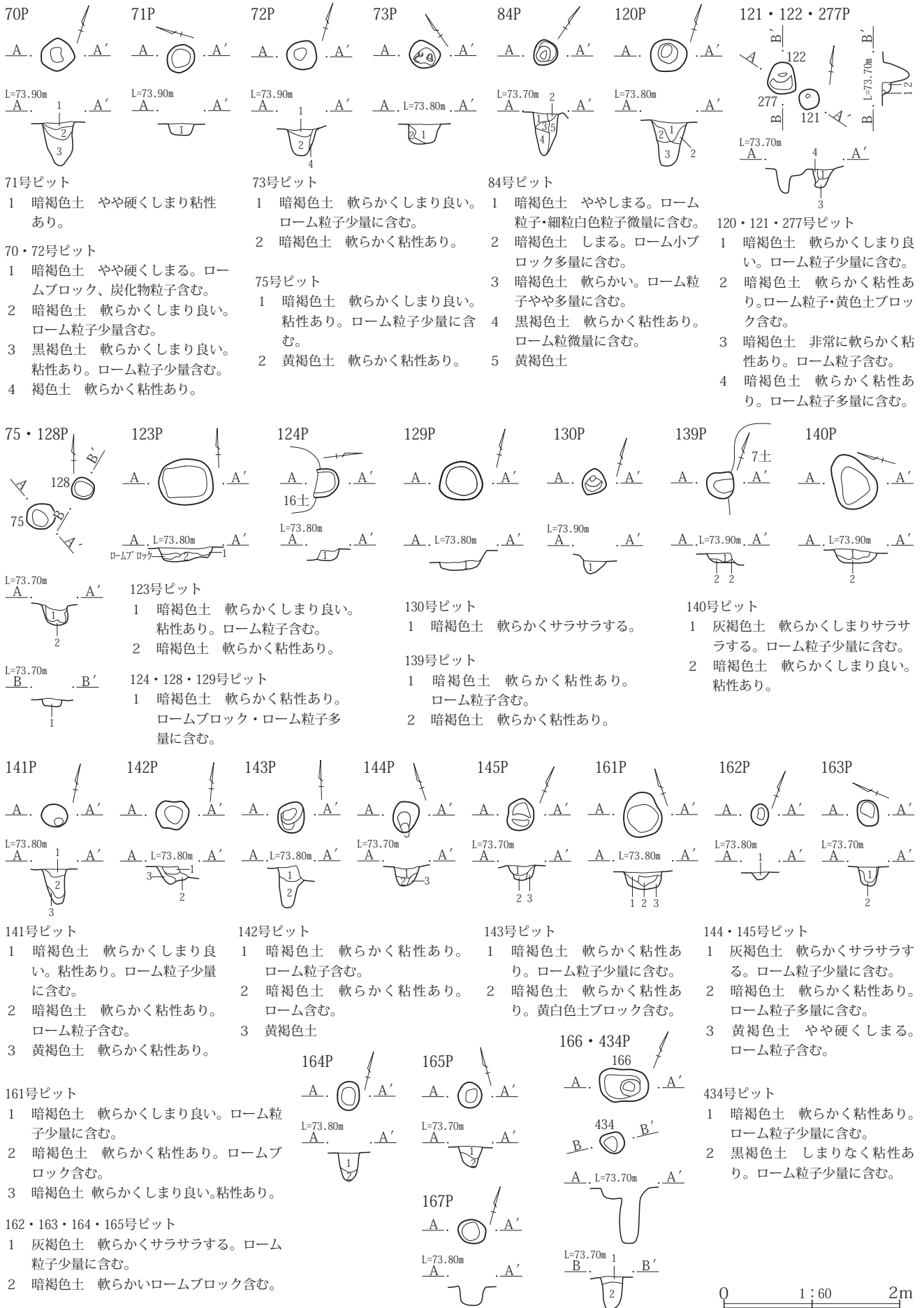
64号ピット

1 褐色土 軟らかくしまり良い。ローム粒子含む。  
2 暗褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。ローム粒子含む。  
3 黄白色土ブロック

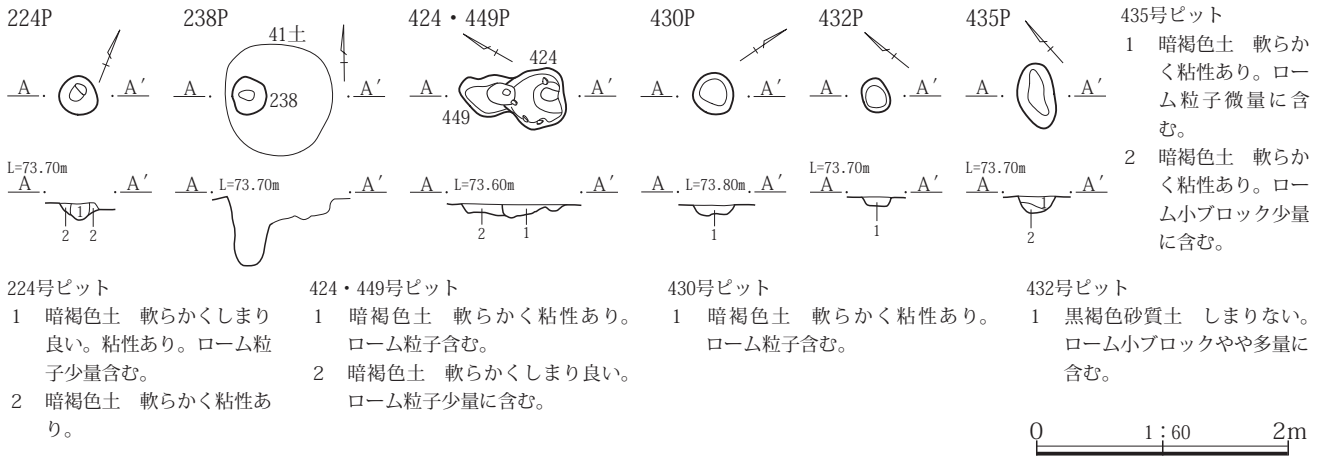


第317図 3区近代以前ピット(1)

第4章 発掘調査の記録



第318図 3区近代以前ピット(2)



第319図 3区近代以前ピット(3)

第194表 3区近代以前個別ピット 計測表(cm)

ピットNo.	グリッド	長径	短径	深さ	非掲載破片数
6	27N-4	30	23	21	
24	17L-3	24	22	21	
26	17N-20	35	35	22	
27	17N-20	53	50	38	
28	17N-20	44	40	18	
35	17L-20	30	29	26	
37	17K-19	36	32	42	
41	17L-19	60	45	12	
42	27N-1	36	34	21	
43	17M-20	41	41	25	
44	17M-20	53	37	38	
46	17L-19	44	33	49	
54	17N-18	27	26	15	
55	17N-18	32	31	21	
57	17M-16	41	32	48	
58	17M-16	34	(20)	37	
59	17M-16	(45)	42	31	
60	17L-16	32	22	24	
61	17L-16	41	30	10	
62	17L-16	61	48	25	
63	17N-17	37	28	14	時期不詳土器2片
64	17N-17	37	37	38	
65	17L-15	39	35	36	
66	17K-15	53	(39)	63	
67	17K-15	43	36	70	
68	17K-16	40	34	36	
69	17K-17	47	41	38	
70	17K-19	38	36	48	
71	17K-19	34	29	14	
72	17K-19	34	31	37	
73	17K-18	34	30	23	
75	17L-19	33	30	18	

ピットNo.	グリッド	長径	短径	深さ	非掲載破片数
84	17O-19	29	25	43	
120	17L-15	42	36	55	
121	17L-16	23	22	30	
122	17L-6	27	(23)	30	
123	17M-19	62	52	14	
124	17L-19	32	(25)	10	
128	17L-19	25	24	7	
129	17K-18	48	43	14	
130	17N-18	31	25	26	
131	17N-18	43	37	20	
139	17N-19	(30)	29	10	
140	17N-19	69	42	18	
141	17L-16	27	24	39	
142	17K-18	37	30	20	
143	17L-18	34	30	40	
144	17M-16	34	23	30	
161	17J-13	50	43	21	
162	17J-12	24	20	18	
163	17H-11	30	23	16	
164	17I-10	33	25	30	
165	17H-10	29	27	23	
166	17L-5	55	36	63	
167	17L-5	32	27	20	
224	17H-3	31	30	17	
238	17K-11	30	27	36	
277	17L-6	32	(13)	9	
424	17M-17	46	(38)	10	
430	17N-16	34	31	11	
434	17L-5	26	24	41	
435	17K-15	52	29	16	
449	17M-17	(45)	27	14	

5 溝

ここでは、屋敷に関連が想定できず、年代の比定も難しい溝7条を扱う。

1・2号溝は2区西調査区に所在しており、ともに北東-南西軸を採る。近世に属する3号溝とも近似する軽微な溝である。

14号溝は平面形も不整形で浅く、他と異なる。古墳時代の2・3号住居周辺に分布する溝群に近似するが、遺物がみられない点で異なる。

残る4条は、比較的浅い溝である。走向方位は南北軸1条、東に傾くもの1条、西に傾くもの2条に分かれる。21号溝はやや蛇行し、南北とも調査区域外に延び、広範囲に及ぶ。31号溝も北側へ延びて1区85号溝と同一という所見がある。一方、24号溝は逆に南側が調査区域外に延びるもので、調査区中央で89号土坑と重複し、関連も想定できるが、ともに年次が比定できない。

1号溝(第320図)

位置 27M-8・9グリッド。西側は調査区域外となり、東側は不分明。重複なし。平面形は直線状で、東端でやや北方へ折れ気味となる。走向方位N-58°-E。断面形は皿状。底面はほぼ平坦。両端の比高差は8cmで、勾配2.96%で東方へ下向する。埋没状況不詳。規模は長さ2.7m上端幅32~44cm最大深10cmである。中世以降の遺物は出土していない。

2号溝(第320図)

位置 27M・N-9グリッド。西側は調査区域外となり、東側は不分明。重複なし。平面形は直線状。走向方位N-75°-E。断面形はU字形。底面は丸みを持ち、一部土坑状に凹む。調査された長さが短く、勾配は計測不能。埋没状況不詳。規模は長さ1.08m上端幅37~43cm最大深17cmである。中世以降の遺物は出土していない。

14号溝(第320図、P L .116)

位置 17M-19グリッド。125号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は不整形。走向方位不詳。断面形は皿状。底面は丸みを持つ。埋没状況不詳。規模は長さ1.84

m上端幅66~110cm最大深8cmである。

17号溝(第320図、P L .116)

位置 17N・O-14グリッド。北側は調査区域外に延び、南側は緩やかに立ち上がる。重複なし。平面形は弓状。断面形はU字形。底面は凸凹して丸みを持つ。両端の比高差は10cm、勾配1.85%で南方へ下向する。自然埋没か。規模は長さ5.68m上端幅26~42cm最大深8cmである。中世以降の遺物は出土していない。

21号溝(第320図、P L .117)

位置 17E~K-2~5グリッド。南北側とも調査区域外に延びる。20号溝と重複するが新旧関係不明。平面形はわずかに蛇行する。走行方位N-26°-E。断面形はU字形。底面は丸みを持つ。両端の比高差3cmで、勾配はほとんどない。自然埋没か。規模は長さ28.04m上端幅44~69cm最大深16cmである。中世以降の遺物は出土していない。

24号溝(第320図、P L .118)

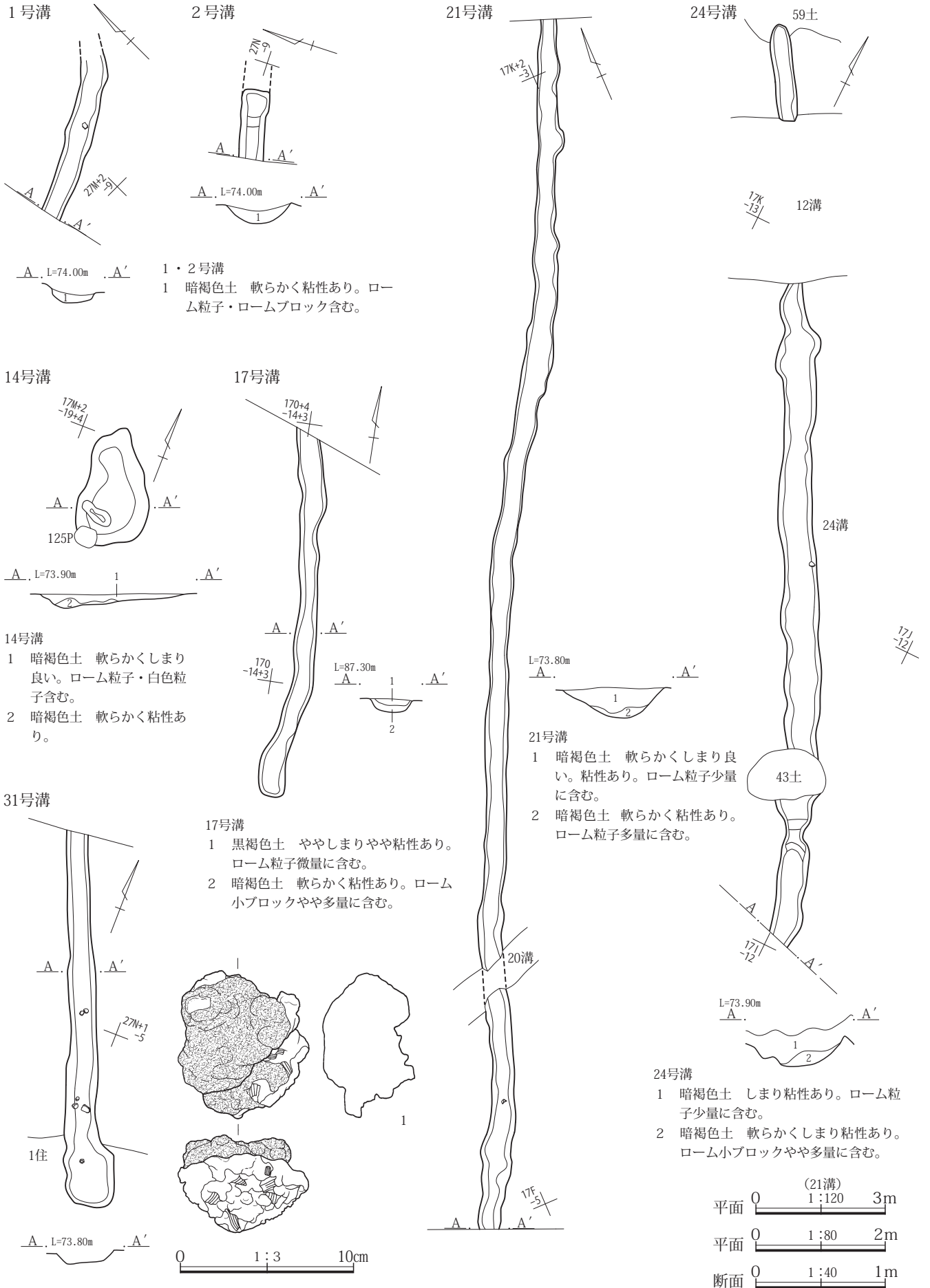
位置 17I~K-11~13グリッド。北側は59号土坑と重複して不明となり新旧関係不明。南側は調査区域外に延びる。43号土坑、12号溝と重複するが新旧関係不明。平面形は直線状。走行方位N-27°-W。断面形はU字形。底面は丸みを持つ。両端の比高差は1cmで勾配はほとんどない。自然埋没か。規模は長さ14.20m上端幅21~64cm最大深9cmである。中世以降の遺物は出土していない。

31号溝(第320図、P L .119、第195表)

位置 27M・N-4・5グリッド。北側は調査区域外に延び、調査段階で1区85号溝と同一と判断されている。南側は1号住居と重複して内部で立ち上がる。平面形は直線状で、南端は土坑状に広がる。走向方位はN-22°-W。断面形は皿状。底面はほぼ平坦。両端の比高差は4cmで、勾配はほとんどない。埋没状況不詳。埋没土から1の椀形鉄滓が出土する。規模は長さ5.85m上端幅22~78cm最大深13cmである。

第195表 3区31号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	長	幅	厚	重さ(g)	特徴など	備考
第320図	1	椀形鍛冶滓		7.5	8.5	5.6	331.9	内面不整楕円形。厚さ5.6cmと厚手。色調は黒褐色。下面は全面に細かい木炭痕が観察できる。上面には厚く酸化土砂が付着している。	



第320図 3区1・2・14・17・21・24・31号溝と31号溝出土遺物

6 集石遺構

2基の集石遺構は、25号溝の中にあり、長辺を同じくする。掘り方はともに土坑状であり、石を廃棄した可能性が高い。25号溝と長辺が一致する点で、溝を意識して営まれた可能性が高い。25号溝が江戸以降であり、それよりも新しい。

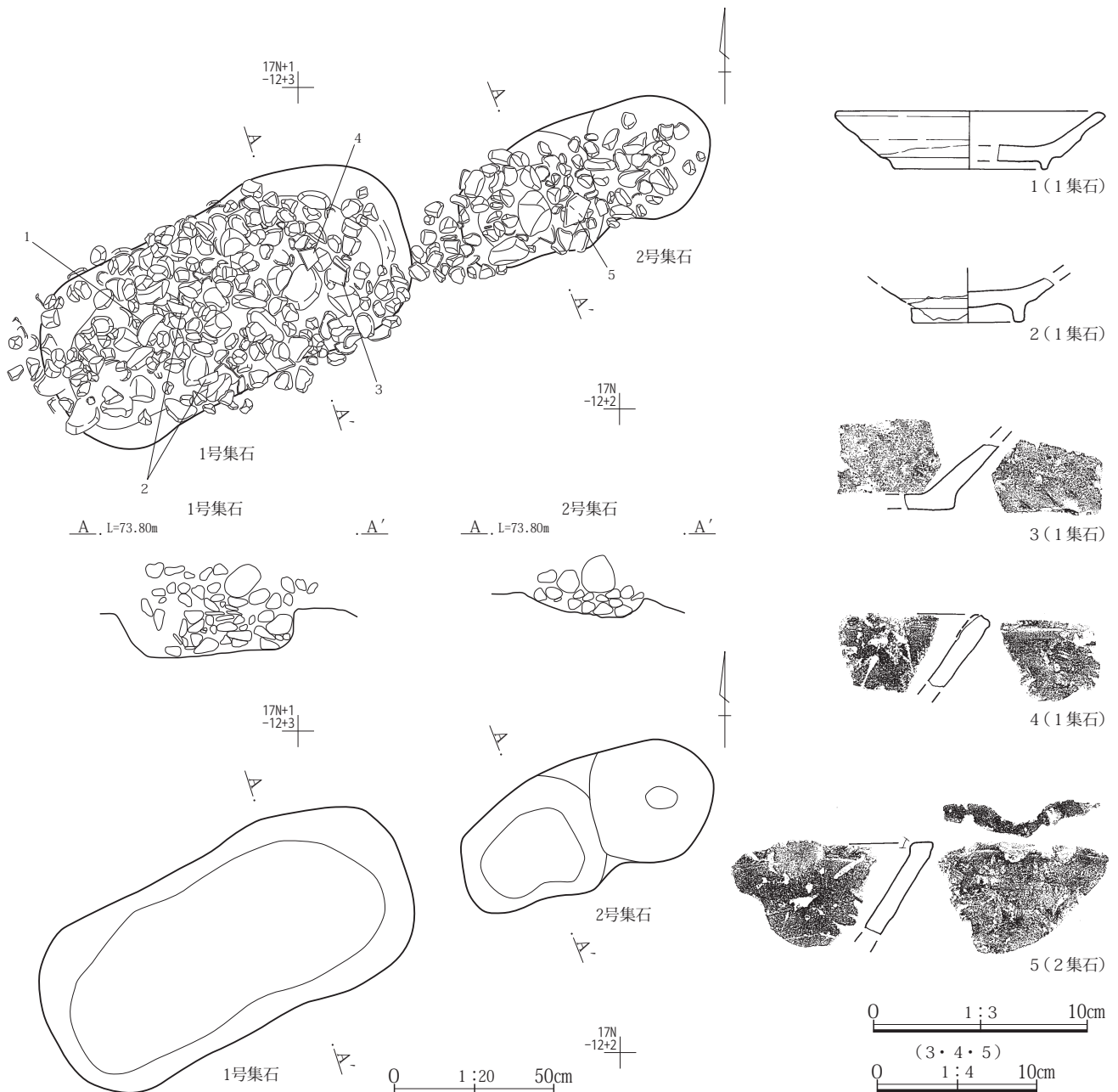
1号集石遺構(第321図、第196表)

位置 17M・N-12グリッド。23・25号溝よりも後出で、2号集石遺構と接する。平面形は隅丸長方形で、掘り方も隅丸長方形の土坑となる。主軸方位はN-64°-E。土坑の壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦。石

はこぶし大が主体であり、底面まで隙間なく埋まる。巨礫を少量含む。礫に混じって、美濃陶器反皿(1)、同尾呂茶碗(2)ほかが出土する。土坑の規模は長軸125cm短軸55cm深さ14cmである。形態から見て、石を廃棄した土坑と考えられる。出土遺物から17世紀末に比定される。

2号集石遺構(第321図、P L.162、第196表)

位置 17N-12グリッド。23・25号溝よりも後出で、1号集石遺構と接する。平面形は溝状で、掘り方は楕円形の土坑2基に分かれる。土坑の壁は斜めに立ち上がり、底面は丸みを持つ。石はこぶし大が主体であり、底面まで隙間なく埋まる。巨礫を少量含む。礫に混じって、5



第321図 3区1・2号集石遺構と出土遺物

第196表 3区1・2号集石遺構出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第321図	1	美濃陶器	反皿	1集石	(12.2)	(7.0)	2.6	1/3		灰白	口縁部は外反気味。体部外面は回転籠削り。高台脇は削り込む。内面から体部外面下位に灰釉。底部内面に目痕2箇所。	登窯5小期。
第321図	2	美濃陶器	尾呂茶碗	1集石	-	(5.2)	-	底部		灰白	内面に飴釉。外面は鉄化粧。	登窯5小期。
第321図	3	常滑陶器	甕	1集石	-	-	-	底部片		にぶい 褐色	断面は灰黄色、外面器表はにぶい褐色。内面に自然釉かかる。	中世。
第321図	4	在地系土器	片口鉢か	1集石	-	-	-	口縁部片	B	暗灰黄	断面は褐色。器表は暗灰黄色から灰色。口縁端部外面直下は凹線状に窪む。端部内面の器表は剥離のため形状不明。	中世。
第321図 PL.162	5	在地系土器	片口鉢	2集石	-	-	-	口縁部片	B	灰	還元炎。片口周辺の破片。口縁端部は内側に突き出るが、端部の器表は摩滅。口縁端部外面も器表摩滅。	中世、片口残る、内面下位やや平滑

の在地系土器鉢が出土する。土坑の規模は長軸102cm短軸40cm深さ6cmである。形態から見て、石を廃棄した土坑と考えられる。状況から1号集石遺構と近い時期に比定される。中世以降の遺物は出土していない。

7 道路

道路2条は調査区中央を北西-南東軸で、ほぼ並走する。1号道路と交差するとみられるが、重複関係は明らかでない。

2号道路(第322図)

位置 17H~M-9~13グリッド。南側は調査区域外に延び、北側は25号溝近くで不分明となる。平面形は直線状。主軸方位はN-32°-W。軽微なため路面の状況などは不詳。規模は長さ31.66m幅50~108cmである。中世以降の遺物は出土していない。

3号道路(第266図)

位置 17K~P-15グリッド。北側は調査区域外に延び、全体的に断続的に確認される。平面形はほぼ直線状。主軸方位はN-9°-W。軽微なため路面の状況などは不詳。規模は長さ24.60m幅46~60cmである。中世以降の遺物は出土していない。

第6項 遺構外出土遺物(第323・324図、

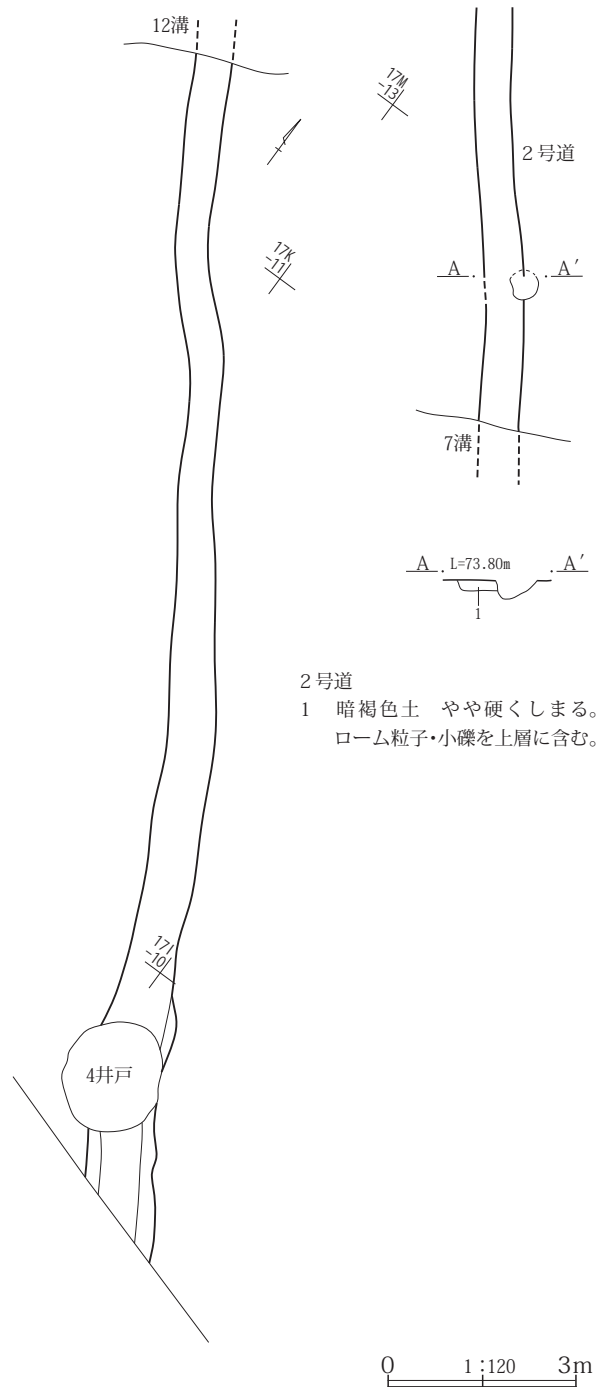
PL.162、第197表)

縄文土器は中期後半1点のみ出土する。

3区では4世紀の住居3軒が調査されているが、これらとは別に埴輪5点がある。

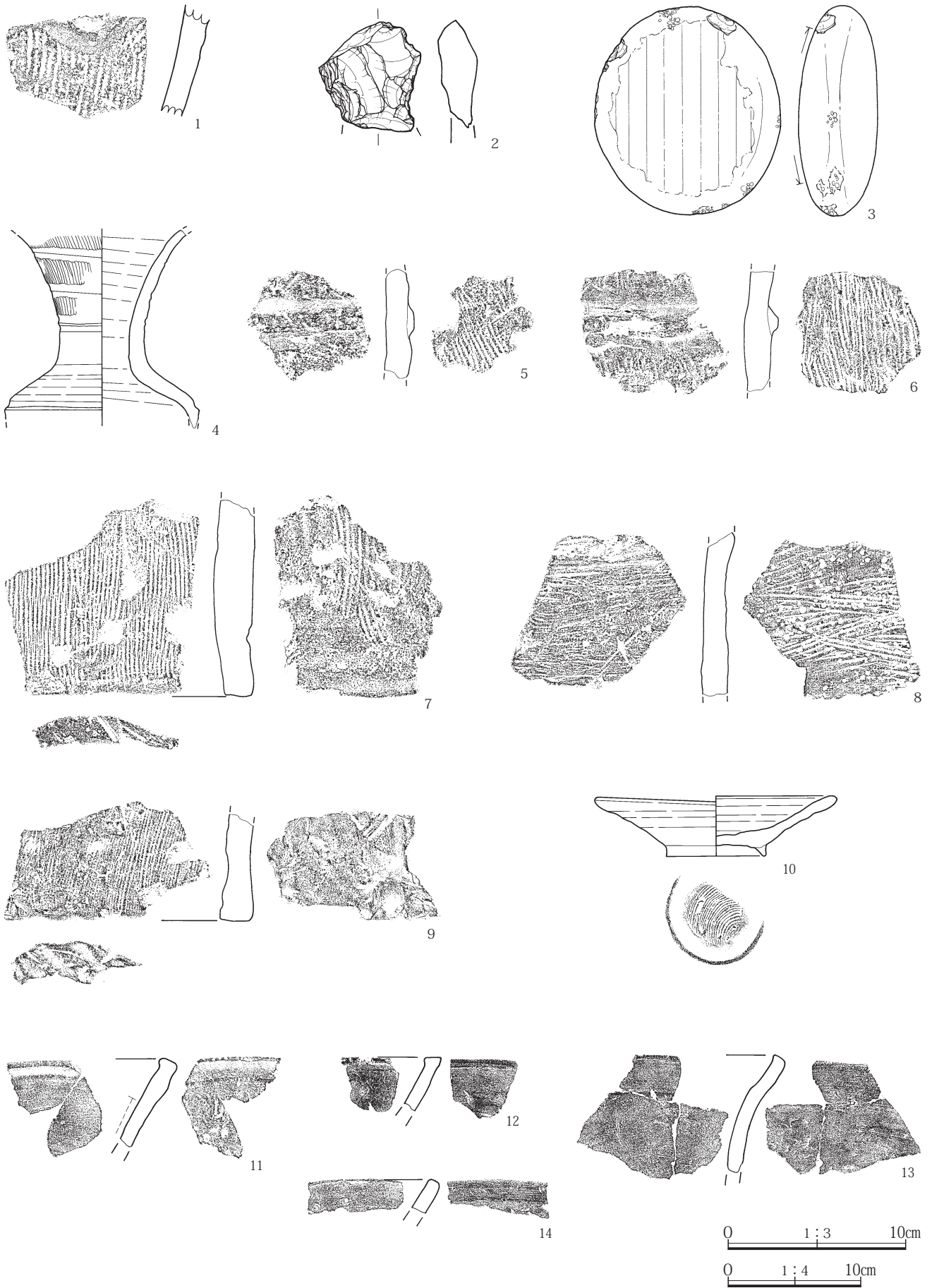
中世遺物は、在地系土器を中心に7点を掲載する。時代的には1号屋敷の年代に近い。

掲載遺物のほか、土師器2片、須恵器3片、中世国産陶磁器1片・在地系土器35片、近世国産陶器1片、その他土器類11片が出土している。

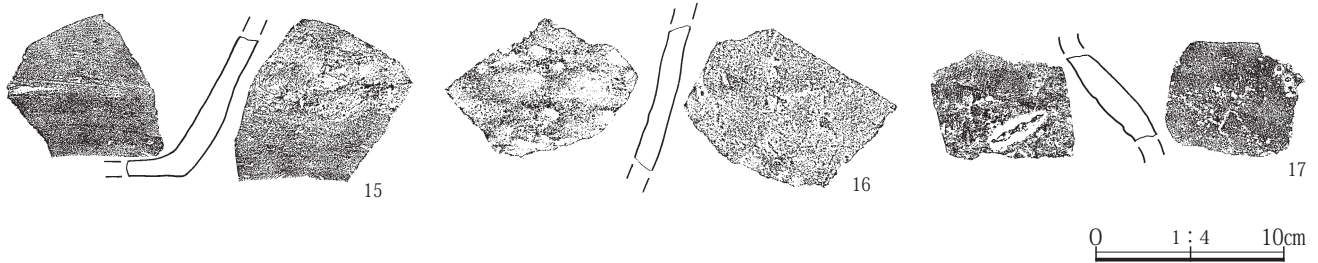


第322図 3区2号道路





第323図 3区遺構外出土遺物(1)



第324図 3区遺構外出土遺物(2)

第197表 3区遺構外出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種別 器形	出土位置 残存率	胎土/焼成/色調				文様の特徴等		備考		
第323図 PL.162	1	深鉢	胴部破片	粗砂、白色粒、石英/ふつう/黄褐				口縁部に渦状の文様を太い沈線で描き、以下にRLの縄文を施す。		加曾利E式		
挿図 PL.No.	No.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ(g)	製作状況・使用状況	備考		
第323図 PL.162	2	打製石斧?	5溝a	分銅型?	黒色頁岩	(6.2)	(5.5)	7.5	完成状態。破損部裏面側エッジを加工、再利用。			
第323図 PL.162	3	磨石	19溝	偏平楕円礫	粗粒輝石安山岩	11.6	10.3	680.6	表裏面とも摩耗。側縁の敲打痕は風化状態が異なる。礫面にススが付着。			
-	18	削器	60土	縦長剥片	黒色頁岩	9.7	10.6	30.1	刃部：側縁	非実測		
-	19	石核	表土	剥片	黒色頁岩	5.5	7.6	98.7	小型剥片を剥離	非実測		
-	20	石核?	11溝	楕円礫	黒色頁岩	6.7	7.4	196.2	幅広剥片を剥離?	非実測		
-	21	加工痕ある剥片	21溝	幅広剥片	黒色頁岩	6.7	9.9	85.2	加工意図：削器削器、左辺摩耗	非実測		
-	22	加工痕ある剥片	表土	幅広剥片	黒色頁岩	5.6	6.5	60.8	加工意図：削器	非実測		
挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調		成形・整形の特徴		摘要		
第323図 PL.162	4	須恵器 甕	口縁部～胴部上位	胴 10.7		細砂粒/還元焰/灰		ロクロ整形、回転右回り。口縁部は縦位のカキ目後2条1単位の凹線で3段に区画。				
第323図 PL.162	5	埴輪 円筒	体部小片			細砂粒・軽石/良好/橙		凸帯は貼付、凸帯はナデ、内面はハケ目(2cmあたり9本)				
第323図 PL.162	6	埴輪 円筒	体部小片			細砂粒・粗砂粒/良好/明赤褐		凸帯は貼付、凸帯はナデ、凸帯の上下はハケ目(2cmあたり10本)、内面もハケ目。				
第323図 PL.162	7	埴輪 円筒	基底部片			細砂粒/良好/明赤褐		体部はハケ目(2cmあたり9本)、内面はハケ目後ナデ、底面もナデ。				
第323図 PL.162	8	形象埴輪	一部片			結晶片岩粒・粗砂粒・白・黒色鉱物/良好/橙		形象の一部と考えられるが天地・左右・表裏不明である。比較的平坦な面をなす。内外面とも器面をナデた後斜め方向のハケ目を施している。				
第323図 PL.162	9	埴輪 円筒	基底部片			細砂粒・軽石/やや軟質/橙		体部は器面磨滅のため単位不明。内面はナデ、底面もナデ。				
第323図 PL.162	10	須恵器 皿	1/3	口 13.2 底 5.5	高 3.3 台 5.3	細砂粒・片岩/還元焰/灰		ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。				
挿図 PL.No.	No.	種別	器形	出土位置	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第323図	11	在地系土器	片口鉢	5A溝	-	-	-	口縁部片	B	灰黄	口縁部外面の横撫範囲は端部から2cmほどと狭い。内面は大きく突き出るが、上面の器表は摩滅。摩滅により突出部先端は尖るが、当初形状は不明。口縁部上面はやや窪む。口縁部外面の横撫はやや強く。横撫部が浅く窪むことにより、口縁部外面が丸く突き出るように見える。	Ⅲ期か。
第323図	12	在地系土器	内耳鍋	17M-8G	-	-	-	口縁部片	B	黄灰・浅黄・灰	断面は浅黄色、内面器表は黄灰色、外面器表は灰色。器壁は厚く、口縁部内面は稜をなして突き出る。端部上面は平坦。残存部に内耳部の窪みが残る。	中世。
第323図	13	在地系土器	内耳鍋	17M-8G	-	-	-	口縁～体部片	B	灰・浅黄	断面は浅黄色、器表は浅黄色から灰色。還元気味。器壁は厚く、口縁部下で外方に湾曲。口縁部はやや長い。口縁部は内湾気味で、端部は尖り気味。	I・Ⅱ期。
第323図	14	在地系土器	内耳鍋	17M-8G	-	-	-	口縁部片	B	灰	還元炎。器壁はやや厚い。	中世。
第324図	15	在地系土器	内耳鍋	17M-11G	-	-	-	口縁部片	B	暗灰黄・灰	断面は浅黄色、内面器表は暗灰黄色、外面器表は灰色。体部外面下端から底部外面の器表は灰白色。器壁厚いが体部下位の湾曲は非常に弱い。平底か。	中世。
第324図	16	常滑陶器	甕か	5A溝	-	-	-	体部片		褐灰	体部下位片か。	中世。
第324図	17	常滑陶器	甕	17M-8G	-	-	-	肩部片		灰	断面は灰白色、内面器表は暗赤褐色。外面に自然釉。	中世。

## 第5節 鑑定分析

### 第1項 出土人骨鑑定

#### 1 はじめに

当遺跡では、調査された土坑墓、火葬跡を理解するため、出土人骨の鑑定分析を生物考古学研究所植崎修一郎氏に委託して実施した。

#### 2 分析の目的

当遺跡1区では、1号溝東の近世墓域から、土坑墓13基と土坑6基、あわせて19基が検出され、うち人骨は11体出土している。また、火葬跡3基と、土坑、集石遺構各1基を合わせた5基で焼人骨が出土している。以上の人骨について、年齢・性別・個体数・部位の鑑定を行い、あわせて出土状況から火葬及び埋葬時の体位や、火葬方法や収骨法など、幅広い分析を行った。

当遺跡出土の5号墓は、鍋かぶり葬であり、1号火葬跡は出土遺物から17世紀後半と判明する希少な事例であり、ともに同種の遺構解明に有用な資料である。

#### 3 分析結果

歯冠の計測方法は、藤田(藤田 1949)の方法に従い、歯の歯冠計測値の比較は、中近世人は松村(Matsumura 1995)を現代人は権田(権田 1949)を使用した。

##### (1) 1区土坑墓出土人骨

1区では、1号・2号・3号・4号・5号・8号・10号・11号・12号・13号墓坑の10基から、近世人骨が出土している。

##### 1号墓出土人骨[近世(江戸時代)]

①人骨の出土状況：本墓坑は、木棺墓である。上面は、長軸約158cm・短軸約152cmの規模で方形を呈している。下面は、長軸約87cm・短軸約64cm・深さ約98cmの規模である。木棺の規模は、長軸約49cm・短軸約37cmである。長軸方向は、ほぼ南北である。

②被葬者の頭位・埋葬状態：出土人骨の内、遊離歯の歯冠部は土坑の南部から出土しており、頭位を南にした屈位である可能性が高い。

③副葬品：銭貨・陶器・漆椀片が検出されている。

④人骨の出土部位：人骨は、頭蓋骨片と遊離歯の歯冠6点が出土している。

⑤被葬者の個体数：出土歯には、重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

⑥被葬者の性別：出土遊離歯の歯冠計測値は、比較的大きいため、被葬者の性別は男性であると推定される。

⑦被葬者の死亡年齢：出土歯の咬耗度を観察すると、多くの歯はエナメル質のみであるが、一部の歯は象牙質が点状に露出する程度のマルティンの1度から2度であるので、被葬者の死亡年齢は、約20歳代であると推定される。

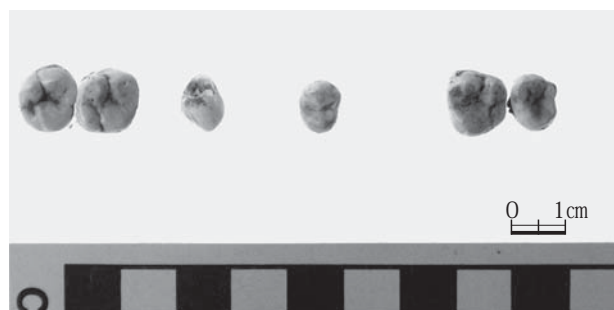


写真1. 綿貫原北遺跡1区1号墓坑出土人骨歯冠咬合面観

##### 2号墓出土人骨[18世紀半ば以降]

本墓坑は、木棺墓である。上面は、長軸約95cm・短軸約88cmの規模で隅丸方形を呈している。下面は、長軸約65cm・短軸約60cm・深さ約100cmの規模である。木棺の規模は、長軸約53cm・短軸約38cmである。長軸方向は、ほぼ南北である。

副葬品は、銭貨が15点出土している。出土人骨の出土位置が不明であるため、頭位及び埋葬状態は不明であるが、木棺の規模から座葬である可能性が高い。人骨は、頭蓋骨片のみが出土している。頭蓋骨片の厚さが比較的厚いため、被葬者の性別は男性であると推定される。また、頭蓋縫合の内板は癒合しているが、外板は癒合していない状態である。したがって、被葬者の死亡年齢は約30歳代であると推定される。

##### 3号墓出土人骨[近世(江戸時代)]

①人骨の出土状況：本墓坑は、木棺墓である。上面は、長軸約123cm・短軸約113cmの規模で隅丸方形を呈している。下面は、長軸約75cm・短軸約61cm・深さ約107cmの規模である。木棺の規模は、長軸約42cm・短軸約39cmである。長軸方向は、ほぼ南北である。

②被葬者の頭位・埋葬状態：頭位は、不明である。埋葬

状態は、土坑の大きさから屈位であると推定される。

③副葬品：副葬品は、銭貨が16点検出されている。

④人骨の出土部位：頭蓋骨片及び遊離歯が出土している。

⑤被葬者の個体数：人骨の残存量が少ないため個体数は不明であるが、恐らく1個体であると推定される。

⑥被葬者の性別：出土歯の歯冠計測値は、比較的大きいため、被葬者の性別は男性であると推定される。

⑦被葬者の死亡年齢

出土遊離歯の咬耗度を観察すると、エナメル質のみのマルティンの1度の状態であるので、被葬者の死亡年齢は、約20歳代であると推定される。

#### 4号墓出土人骨[18世紀半ば以降]

①人骨の出土状況：本墓坑は、木棺墓である。上面は、長軸約97cm・短軸約86cmの規模で隅丸方形を呈している。下面は、長軸約67cm・短軸約60cm・深さ約102cmである。木棺の規模は、長軸約45cm・短軸約35cmである。長軸方向は、ほぼ南北である。

②被葬者の頭位・埋葬状態：人骨の出土位置より、被葬者は頭位を北東にした屈位で埋葬されたと推定される。

③副葬品：副葬品は、銭貨が22点検出されている。

④人骨の出土部位：頭蓋骨片と遊離歯が出土している。

⑤被葬者の個体数：出土遊離歯には、重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

⑥被葬者の性別：出土歯の内、犬歯の歯冠計測値が比較的小さいため、被葬者の性別は女性であると推定される。

⑦被葬者の死亡年齢：出土歯の咬耗度を観察すると、象牙質が線状に露出する程度のマルティンの2度の状態である。被葬者の死亡年齢は約40歳代であると推定される。

#### 5号墓出土人骨[18世紀半ば以降]

①人骨の出土状況：本墓坑は、上面が長軸約94cm・短軸約76cm、下面が長軸約65cm・短軸約48cm・深さ約55cmの規模の隅丸長方形土坑である。木棺墓の可能性が高い。長軸方向は、ほぼ南北である。なお、本土坑は219号土坑と重複している。

②被葬者の頭位・埋葬状態：人骨の出土部位から、被葬者の頭位は北で、屈位で埋葬されたと推定される。なお、本人骨は、頭部に鉄鍋を被せた鍋被り葬である。

③副葬品：副葬品は、銭貨が12点検出されている。

④人骨の出土部位：頭蓋骨片及び遊離歯が出土している。

⑤被葬者の個体数：出土歯には、重複部位が認められな

いため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

⑥被葬者の性別：出土歯の歯冠計測値は、比較的小さいため、被葬者の性別は女性であると推定される。

⑦被葬者の死亡年齢：出土歯の咬耗度を観察すると、ほとんどの歯はエナメル質のみである。一部の歯は象牙質が点状に露出する程度のマルティンの2度の状態であるので、死亡年齢は約20歳代～30歳代であると推定される。

⑧鍋被り葬：本人骨は、頭部に鉄鍋を被せた鍋被り葬である。この鍋被り葬の理由として、「病気説」と「お盆説」がある。群馬県においての鍋被り葬は、富岡市の横瀬古墳群2号墓坑・宮崎浦町遺跡2号墓坑、桐生市の塚越遺跡の3例が知られている(檜崎 2009)。人骨の残存状況は悪いが、明瞭な古病理は認められなかったため、被葬者はお盆に死亡したため鍋被り葬にされたと推定される。

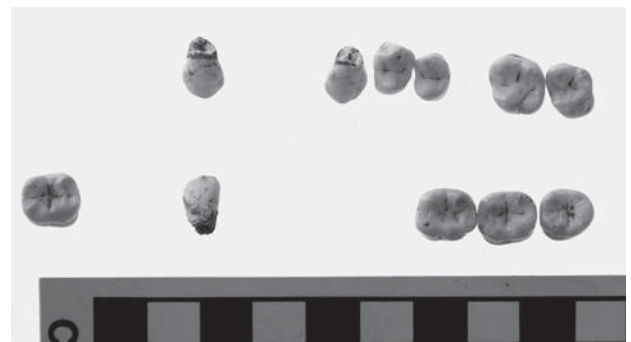


写真2. 綿貫原北遺跡1区5号墓坑出土人骨歯冠咬合面観

#### 8号墓出土人骨[恐らく近世(江戸時代)]

①人骨の出土状況：本墓坑は、下面が長軸約86cm・短軸約55cm・深さ約94cmの規模の楕円形土坑である。長軸方向は、北東～南西である。なお、本土坑は、4号墓と重複している。

②被葬者の頭位・埋葬状態：出土人骨の内、遊離歯の歯冠部が土坑の北東部から出土しているため、被葬者の頭位は北東であると推定される。また、埋葬状態は、屈位であると推定される。

③副葬品：副葬品は、漆器の塗膜片が検出されている。

④人骨の出土部位：人骨は、遊離歯の歯冠13点と四肢骨が出土している。

⑤被葬者の個体数：出土歯には、重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

⑥被葬者の性別：出土歯の歯冠計測値は、比較的大きいため、被葬者の性別は男性であると推定される。

⑦被葬者の死亡年齢：出土歯の咬耗度を観察すると、象牙質がわずかに点状に露出する程度のマルティンの2度の状態であるので、被葬者の死亡年齢は約20歳代であると推定される。

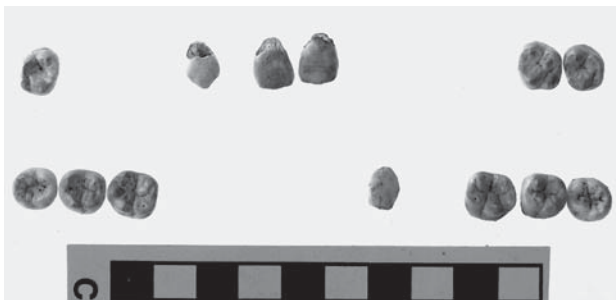


写真3. 綿貫原北遺跡1区8号墓坑出土人骨歯冠咬合面観

#### 10号墓出土人骨〔近世(江戸時代)〕

10号墓は、上面が長軸約96cm・短軸約87cm、下面が長軸約83cm・短軸約55cm・深さ約93cmの規模の隅丸長方形土坑である。長軸方向は、ほぼ南北である。副葬品は、銭貨16点が検出されている。本墓坑からは、歯の歯冠片が出土している。人歯であることは間違いないが、全て細片であるため、被葬者の個体数・性別・死亡年齢等は不明である。

#### 11号墓出土人骨〔近世(江戸時代)〕

11号墓坑は、上面が長軸約121cm・短軸約105cm、下面が長軸約91cm・短軸約81cm・深さ約108cmの規模の隅丸方形土坑である。長軸方向は、北東～南西である。副葬品は検出されていない。本墓坑からは、四肢骨片を中心とする骨片が出土しているが、細片であるため、被葬者の個体数・性別・死亡年齢等は不明である。

#### 12号墓出土人骨〔近世(江戸時代)〕

12号墓坑は、上面が長軸約83cm・短軸約67cm、下面が長軸約65cm・短軸約49cm・深さ約35cmの規模の隅丸方形土坑である。長軸方向は、北東～南西である。副葬品は、検出されていない。本墓坑からは、骨片が出土しているが、細片であるため、被葬者の個体数・性別・死亡年齢等は不明である。

#### 13号墓出土人骨〔近世(江戸時代)〕

①人骨の出土状況：本墓坑は、上面が長軸約98cm・短軸約68cm、下面が長軸約82cm・短軸約50cm・深さ約104cmの規模の長方形土坑である。長軸方向は、ほぼ南北である。なお、本墓坑は、調査時は3次3号土坑という名称であっ

た。

②被葬者の頭位・埋葬状態：出土人骨の出土位置が不明であるため、頭位及び埋葬状態は不明である。

③副葬品：副葬品は、検出されていない。

④人骨の出土部位：出土歯の歯冠6点が出土している。

⑤被葬者の個体数：出土歯には重複部位が認められないため、個体数は1個体であると推定される。

⑥被葬者の性別：出土歯の歯冠計測値はすべて大きいため、被葬者の性別は男性であると推定される。

⑦被葬者の死亡年齢：出土歯の咬耗度を観察すると、象牙質が線状及び点状に露出する程度のマルティンの2度の状態であるが咬耗が進んでいるので、被葬者の死亡年齢は約30歳代であると推定される。

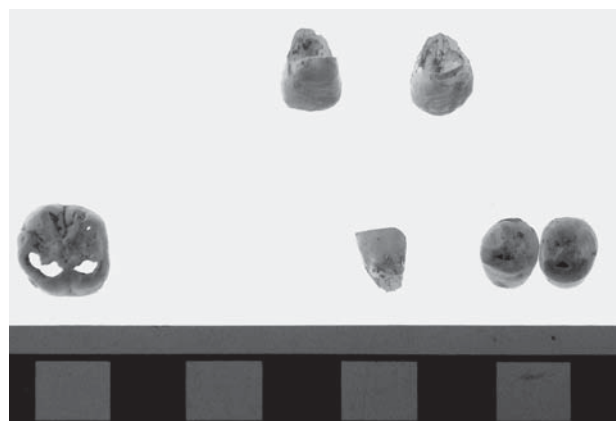


写真4. 綿貫原北遺跡1区13号墓坑出土人骨歯冠咬合面観

#### (2) 1区火葬跡出土人骨

1区では、近世の火葬跡2基・中世の火葬跡1基が検出され、火葬人骨が出土している。これら、3基の遺構は密集しておらず、散在して位置している。

#### 1号火葬跡出土人骨〔17世紀後半(近世)〕

①火葬人骨の出土状況：火葬人骨は、長軸約82cm・短軸約56cm・深さ約25cmの規模の楕円形土坑から出土している。長軸は、ほぼ南北である。焼土を含み人骨は被熱を受けているので、火葬跡であると推定される。土坑の形態は、タイプIである(檜崎 2007)。

②火葬人骨の出土部位：火葬人骨の出土部位は、少しずつ全身に及ぶ。四肢骨が多く頭蓋骨が少ない傾向にある。

③火葬方法：火葬人骨の色は白色を呈しているため、火葬の際の温度は、約900℃以上であると推定される。また、火葬人骨には亀裂・捻れ・歪みが認められるため、白骨

化させたものを火葬にしたのではなく、死体をそのまま火葬にしたと推定される。

④被火葬者の頭位・焼成状態：被火葬者は、成人であると推定されている。火葬人骨の出土位置には、大きな傾向は認められないので、被火葬者の頭位は不明である。土坑の規模から、屈位で火葬にされたと推定される。

⑤副葬品：副葬品は、美濃陶器皿2点・銭貨7点が検出されている。

⑥被火葬者の個体数：火葬人骨には、明瞭な重複部位が認められないため、個体数は1個体であると推定される。

⑦被火葬者の性別：火葬による収縮を考慮しても、頭蓋骨の厚さが薄いため、性別は女性であると推定される。

⑧被火葬者の死亡年齢：死亡年齢推定の指標となる部位が出土していないが、四肢骨片の大きさから、成人であると推定される。

⑨収骨(拾骨)方法：火葬人骨の残存量は比較的少なく、目立った骨片は無いため、丁寧に全部収骨した東日本タイプの収骨(拾骨)方法であると推定される。

### 2号火葬跡出土人骨[17世紀中頃]

①火葬人骨の出土状況：火葬人骨は、長軸約90cm・短軸約71cm・深さ約35cmの規模の隅丸方形土坑から出土している。なお、長軸西側には長軸約44cm・短軸約18cmの規模の突出部が認められる。主体部の長軸は、ほぼ南北である。焼土を含み人骨は被熱を受けているので、火葬跡であると推定される。土坑の形態は、タイプIIである(檜崎 2007)。

②火葬人骨の出土部位：火葬人骨の出土部位は、少しずつ全身に及ぶ。しかしながら、細片が多い。

③火葬方法：火葬人骨の色は白色を呈しているため、火葬の際の温度は、約900℃以上であると推定される。火葬人骨の残存量が少ないため、白骨化させたものを火葬にしたか、死体をそのまま火葬にしたのかは不明である。

④被火葬者の頭位・焼成状態：火葬人骨の残存量が少ないため、被火葬者の頭位及び焼成状態は不明である。土坑の規模から、屈位で火葬にされたと推定される。

⑤副葬品：副葬品は、銭貨1点が検出されている。

⑥被火葬者の個体数：火葬人骨には、明瞭な重複部位が認められないため、個体数は1個体であると推定される。

⑦被火葬者の性別：火葬人骨の残存量が少ないため、被火葬者の性別は不明である。

⑧被火葬者の死亡年齢：死亡年齢推定の指標となる部位が出土していないため、被火葬者の死亡年齢は不明である。恐らく、成人であると推定される。

⑨収骨(拾骨)方法：火葬人骨の残存量は非常に少なく、目立った骨片は無いため、丁寧に全部収骨した東日本タイプの収骨(拾骨)方法であると推定される。

### 3号火葬跡出土人骨[中世～近世?]

①人骨の出土状況：火葬人骨は、長軸約90cm・短軸約49cm・深さ約14cmの規模の隅丸長方形土坑から出土している。長軸は、ほぼ南北である。焼土を含み人骨は被熱を受けているので、火葬跡であると推定される。土坑の形態は、タイプIである(檜崎 2007)。

②火葬人骨の出土部位：火葬人骨の出土部位は、少しずつ全身に及ぶ。しかしながら、細片が多い。

③火葬方法：火葬人骨の色は、白色を呈しているため、火葬の際の温度は、約900℃以上であると推定される。火葬人骨の残存量が少ないため、白骨化させたものを火葬にしたか、死体をそのまま火葬にしたのかは不明である。

④被火葬者の頭位・焼成状態：火葬人骨の残存量が少ないため、被火葬者の頭位及び焼成状態は不明である。土坑の規模から、屈位で火葬にされたと推定される。

⑤副葬品：副葬品は、検出されていない。

⑥被火葬者の個体数：火葬人骨の残存量が少ないため、被火葬者の個体数は不明である。恐らく、1個体であると推定される。

⑦被火葬者の性別：火葬人骨の残存量が非常に少ないが、火葬による収縮を考慮しても、頭蓋骨の厚さが厚いため、被火葬者の性別は男性であると推定される。

⑧被火葬者の死亡年齢：死亡年齢推定の指標となる部位が出土していないため、被火葬者の死亡年齢は不明である。恐らく、成人であると推定される。

⑨収骨(拾骨)方法：火葬人骨の残存量は非常に少なく、目立った骨片は無いため、丁寧に全部収骨した東日本タイプの収骨(拾骨)方法であると推定される。

### (3)集石出土人骨[中世]

1区の2号集石から、人骨が出土している。副葬品は、検出されていない。土坑には、長さ約50cmの石が6点配置されている。人骨は被熱を受けており、白色を呈している。しかしながら、細片であるため、火葬人骨の個体数・性別・死亡年齢等は不明である。

(4)土坑出土人骨

1区の土坑の内、中世の1号土坑、近世の67号土坑及び68号土坑から人骨が出土している。

**1号土坑出土人骨**[中世]

1号土坑出土人骨は、掘り方で長軸約122cm・短軸約80cm・深さ約20cmの規模の土坑から出土している。土坑の長軸方向は、ほぼ南北である。土坑には人頭大の川原石が4点配置されている。これは、燃焼効率を高めるためであると推定される。但し、通常の火葬跡と異なり、本土坑には壁面の強い焼土化は認められないという。

火葬人骨の残存量は非常に少ないため、被火葬者の個体数・性別・死亡年齢等は不明である。

**67号土坑出土人骨**[近世(江戸時代)]

①人骨の出土状況：人骨は、長軸約100cm・短軸約86cm・深さ約99cmの規模の隅丸方形土坑から出土している。下面に、長方形の木棺の痕跡が認められたという。

②被葬者の頭位・埋葬状態：人骨の出土位置が不明であるため、被葬者の頭位は不明である。長方形の木棺の痕跡が認められたことから、屈位で埋葬された可能性が高い。

③人骨の出土部位：、頭蓋骨片及び遊離歯が出土。

④副葬品：副葬品は、検出されていない。

⑤被葬者の個体数：出土遊離歯には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

⑥被葬者の性別：出土歯の歯冠計測値は、比較的小さいため被葬者の性別は女性であると推定される。

⑦被葬者の死亡年齢：出土歯の咬耗度を観察すると、象牙質が点状に露出する程度のマルティンの2度の状態である。したがって、被葬者の死亡年齢は約30歳代であると推定される。

**68号土坑出土人骨**[18世紀半ば以降]

①人骨の出土状況：人骨は、上面が長軸約130cm・短軸約86cm、下面が長軸約101cm・短軸約66cm・深さ約107cmの規模の隅丸台形土坑から出土している。

②被葬者の頭位・埋葬状態：人骨の出土位置が不明であるため、被葬者の頭位は不明である。埋葬状態は、土坑の形状から屈位であった可能性が高い。

③人骨の出土部位：人骨は、遊離歯12点が出土している。

④副葬品：副葬品は、銭貨6点が検出されている。

⑤被葬者の個体数：出土遊離歯には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

⑥被葬者の性別：出土遊離歯の歯冠計測値は比較的大きいため、被葬者の性別は男性であると推定される。

⑦被葬者の死亡年齢：出土歯の咬耗度を観察すると、象牙質が点状及び線上に露出する程度のマルティンの2度の状態であるが、咬耗が進んでいる。したがって、被葬者の死亡年齢は約40歳代であると推定される。

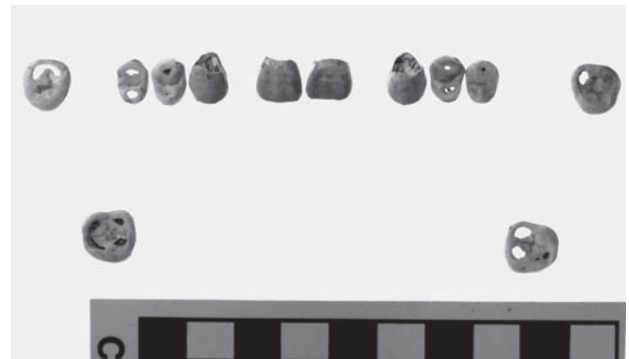


写真5. 綿貫原北遺跡1区68号土坑出土人骨歯冠咬合面観

(5)溝出土獣骨

1区の溝の内、6号溝と12号溝の2条から獣骨の馬歯片が出土している。

**6号溝出土獣骨**

馬歯片が出土している。しかしながら、破片であるため、歯種の同定は不可能である。

**12号溝出土獣骨**

馬歯片が出土している。しかしながら、破片であるため、歯種の同定は不可能である。

(6)考察

本遺跡の1区出土墓坑では、4基の木棺が確認されている。1号は49cm×37cm・2号は53cm×38cm・3号は42cm×39cm・4号は45cm×35cmである。

群馬県高崎市の羅漢町遺跡では、近世の27基の木棺が確認されており28体の近世人骨が出土している(檜崎2011・2012)。規模が判明した27基は、長軸平均52cm(35cm～70cm)・短軸平均44cm(30cm～55cm)の規模で、本遺跡と同様である。これらは、座棺として使用されたと推定されているため、本遺跡も同様であったと推定される((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2011)。

(7)まとめ

綿貫原北遺跡出土人骨のまとめを第198表に、出土歯の歯冠計測値及び比較表を第199表に示した。

引用文献

藤田恒太郎 1949 歯の計測基準について、「人類学雑誌」、61：1-6  
 榎田和良 1959 歯の大きさの性差について、「人類学雑誌」、67：151-163  
 MATSUMURA、Hirofumi 1995 A microevolutional history of the Japanese people as viewed from dental morphology、*National Science Museum Monographs* No.9、National Science Museum、Tokyo.  
 榎崎修一郎 2007 群馬県出土中世火葬遺構、「(財)群馬県埋

蔵文化財調査事業団研究紀要」、25：101-118  
 榎崎修一郎 2009 鍋被り葬・鉢被り葬と出土人骨、「(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要」、27：61-76  
 榎崎修一郎 2011 「(1)羅漢町遺跡出土人骨」、『羅漢町遺跡』、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、pp.15-18  
 榎崎修一郎 2012 群馬県羅漢町遺跡出土近世人骨、「(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要」、30：49-66  
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2011『羅漢町遺跡』、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

第198表 綿貫原北遺跡出土人骨まとめ

遺構名	1号墓	2号墓	3号墓	4号墓	8号墓	10号墓	11号墓	12号墓
個体数	1個体	1個体	1個体	1個体	1個体	不明	不明	不明
性別	男性	男性?	男性	女性	男性	不明	不明	不明
死亡年齢	約20歳代	約30歳代	約20歳代	約20歳代~30歳代	約20歳代	不明	不明	不明
遺構名	13号墓	1号火葬跡	2号火葬跡	3号火葬跡	2号集石	1号土坑	67号土坑	68号土坑
個体数	1個体	1個体	1個体	1個体	不明	不明	1個体	1個体
性別	男性	女性	不明	男性	不明	不明	女性	男性
死亡年齢	約30歳代	成人	成人	成人	不明	不明	約30歳代	約40歳代

第199表 綿貫原北遺跡出土人骨歯冠計測値及び比較表

歯種	計測項目	綿貫原北遺跡												中世時代人*		江戸時代人*		現代人**					
		1号		3号		4号		5号		8号		13号		67号土坑		68号土坑		♂	♀	♂	♀	♂	♀
		右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左						
上顎	I1	MD	-	-	-	-	-	9.2	9.2	-	-	-	-	9.6	9.5	8.48	8.29	8.78	8.38	8.67	8.55	7.28	7.28
		BL	-	-	-	-	-	-	7.8	8.0	-	-	-	-	-	-	7.29	7.00	7.52	7.06	7.35	7.28	7.28
	I2	MD	-	-	-	6.9	-	-	-	-	-	8.0	-	-	-	-	6.98	6.85	7.16	6.97	7.13	7.05	7.05
		BL	-	-	-	7.0	-	-	-	-	-	8.2	-	-	-	-	6.55	6.26	6.74	6.33	6.62	6.51	6.51
	C	MD	7.9	-	-	7.1	7.7	7.5	8.1	-	-	8.2	-	-	8.3	8.2	7.96	7.43	8.01	7.60	7.94	7.71	7.71
		BL	8.3	-	-	7.8	8.3	8.6	8.9	-	-	9.9	-	-	8.5	7.9	8.50	7.94	8.66	8.03	8.52	8.13	8.13
	P1	MD	-	7.5	-	-	7.9	-	-	-	-	-	-	-	7.2	7.5	7.25	7.02	7.41	7.23	7.38	7.37	7.37
		BL	-	9.4	-	-	9.7	-	-	-	-	-	-	-	9.7	9.6	9.46	9.03	9.67	9.33	9.59	9.43	9.43
	P2	MD	-	-	-	-	6.4	-	-	-	-	-	-	6.4	6.5	6.8	6.87	6.69	7.00	6.82	7.02	6.94	6.94
		BL	-	-	-	-	8.9	-	-	-	-	-	-	9.2	9.0	9.1	9.39	8.88	9.55	9.29	9.41	9.23	9.23
	M1	MD	10.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10.3	-	-	10.45	10.09	10.61	10.18	10.68	10.47	10.47
		BL	11.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11.8	-	-	11.81	11.30	11.87	11.39	11.75	11.40	11.40
M2	MD	10.7	10.9	9.9	-	10.4	-	10.6	-	-	-	-	-	10.3	10.5	9.65	9.42	9.88	9.48	9.91	9.74	9.74	
	BL	11.9	11.7	12.2	-	10.9	-	11.1	-	-	-	-	-	10.7	10.6	11.72	11.19	12.00	11.52	11.85	11.31	11.31	
M3	MD	-	8.6	-	-	8.7	9.4	9.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8.94	8.86	8.86	
	BL	-	10.4	-	-	10.6	11.1	10.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10.79	10.50	10.50	
下顎	I1	MD	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5.42	5.22	5.45	5.32	5.48	5.47	5.47	
		BL	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5.78	5.61	5.78	5.65	5.88	5.77	5.77
	I2	MD	-	-	-	-	-	-	-	-	6.5	-	-	-	-	-	6.04	5.78	6.09	5.97	6.20	6.11	6.11
		BL	-	-	-	-	-	-	-	-	6.8	-	-	-	-	-	6.22	5.98	6.29	6.11	6.43	6.30	6.30
	C	MD	-	-	-	-	6.9	-	-	7.2	-	-	-	-	-	-	6.88	6.55	7.06	6.69	7.07	6.68	6.68
		BL	-	-	-	-	6.4	-	-	8.1	-	-	-	-	-	-	7.82	7.33	8.04	7.39	8.14	7.50	7.50
	P1	MD	-	-	-	-	7.8	-	-	7.7	-	-	-	-	-	-	7.07	6.96	7.32	7.05	7.31	7.19	7.19
		BL	-	-	-	-	8.3	-	-	9.3	-	-	-	-	-	-	8.10	7.72	8.34	7.89	8.06	7.77	7.77
	P2	MD	-	-	-	-	-	-	-	-	7.6	-	-	-	-	-	7.12	7.00	7.45	7.12	7.42	7.29	7.29
		BL	-	-	-	-	-	-	-	-	9.3	-	-	-	-	-	8.49	8.06	8.68	8.30	8.53	8.26	8.26
	M1	MD	-	-	-	-	-	11.7	11.8	12.2	-	11.2	-	11.1	11.3	11.56	11.06	11.72	11.14	11.72	11.32	11.32	11.32
		BL	-	-	-	-	-	10.9	10.5	12.4	-	10.7	-	10.9	10.7	11.00	10.49	11.15	10.62	10.89	10.55	10.55	10.55
M2	MD	-	-	-	-	11.1	11.1	10.8	10.9	-	-	-	-	-	-	11.06	10.65	11.39	10.78	11.30	10.89	10.89	
	BL	-	-	-	-	10.1	9.9	10.2	10.2	-	-	-	-	-	-	10.55	9.97	10.75	10.21	10.53	10.20	10.20	
M3	MD	-	-	-	-	-	10.2	10.6	10.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10.96	10.65	10.65	
	BL	-	-	-	-	-	9.5	9.9	10.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10.28	10.02	10.02	

註1. 計測値の単位は、すべて、「mm」である。  
 註2. 歯種は、I1 (第1切歯)・I2 (第2切歯)・C (犬歯)・P1 (第1小白歯)・P2 (第2小白歯)・M1 (第1大白歯)・M2 (第2大白歯)・M3 (第3大白歯)を意味する。  
 註3. 計測項目は、MD (歯冠近遠心径)・BL (歯冠唇頬舌径)を意味する。



## 第6節 まとめと考察

### 第1項 縄文時代

縄文時代の遺構は検出されていない。土器片が遺構外と1区84号溝覆土中から出土しているだけである。それは前期後葉の諸磯a式土器である。いずれも小破片であった。

このほか剥片石器18点、礫石器3点が出土した。剥片石器の内訳は、石鏃3点・打製石斧5点・削器1点・石核5点・加工痕ある剥片4点である。このほか剥片20点(690g)が出土している。

石鏃は黒曜石製1点、チャート製が2点であった。打製石斧は黒色頁岩2点、細粒輝石安山岩2点、デイサイト1点である。1区から短冊型、2区は短冊型と分銅型、3区は分銅型が出土している。石鏃・打製石斧は烏川下流域左岸に所在する縄文時代遺跡の石材構成を示している。

礫石器の内訳は、磨石2点、石皿1点である。石皿は鍋川流域の結晶片岩を石材として使用している。

井野川下流域右岸にあつては縄文時代遺構の検出はいまのところない。

### 第2項 古墳時代

古墳時代から平安時代にかけての住居は、1区14軒、3区5軒の計19軒検出されている。2区においては住居の検出はなかった。1・3区の住居は、いずれも発掘区西側からの検出であり、西に隣接する「綿貫小林前遺跡」N・O・P西区、O東区検出集落群の東端に位置する住居群となる。

このうち古墳時代前期4世紀代の住居は3区1・2・3号住居の3軒であった。

#### イ・古墳時代前期の住居

井野川の右岸、井野川低地帯高位段丘面の標高約73.8～74.5mに立地している前期の集落は、当遺跡の西から北西方向に展開する「綿貫小林前遺跡」で住居44軒・方形周溝墓1基・井戸・溝が検出され、東約182～333mに位置する「綿貫牛道遺跡」と「綿貫伊勢遺跡」から、前者

では住居5軒、後者では住居56軒の計61軒が検出されている。また当遺跡の北方から南東にかけて高崎市教育委員会による「綿貫遺跡」の調査で住居6軒・方形周溝墓2基が検出されているように、これまでも多数の遺構が検出されている(第325図)。

当遺跡の4世紀代住居東端に位置する3区3号住居は、「綿貫牛道遺跡」1区と2区で検出された前期の溝までの距離約110～170mを測る。そしてこの間に同時期の遺構は全く検出されていない。

3区1～3号住居の3軒は、いずれも確認面からの掘り込みは浅かった。そして3号住居のように住居外周に溝をもつ「周溝をもつ建物」と、溝を伴わない1号住居に分かれた。2号住居も3号住居と同様な外周に溝(土坑)をもつ住居と考えられた。

これらの住居について、規模と建物を構成する個々の要素である内部施設(柱穴・貯蔵穴・炉・床面・周溝・入口施設・床下土坑)、そして出土遺物、掘り方、外周溝の特徴を見ていきたい。

**住居の規模**—2号住居と3号住居の規模はほぼ同じで、2号住居では東西6.4m×南北6.55m、3号住居では東西6.7m×南北6.8mとなり、共に一辺が6.4mを超えている。

では1号住居の規模はどのくらいであろうか。完掘していないために詳細は不明であるが、検出されたP1と壁の位置関係から検討すると次のようになる。2号住居の3基のピット(P1～P3)と3号住居の4基のピット(P1・2・4・5)の中心から壁との位置関係は、いずれのピットも東壁・西壁から1.4m内側に、さらに北東の壁隅からだと1.55～1.59m、南東・南西・北西の壁隅からだと1.8～1.9m、北壁・南壁で1.3～1.65mの範囲内に設置されていることがわかる。これに対して1号住居のP1は、東壁からの距離0.75m、北東隅からだと1.35m、北壁からだと1.15mとなる。あきらかに2軒の住居に比べて規模は小さくなるものと思われる。5m前後の住居規模が想定される。

**内部施設**—主柱穴4基を基本として貯蔵穴を配置する構造である。

**主柱穴**—ピットの深さは1号住居で40cm、2号住居では20～50cm、3号住居では35～67cmを測る。確認面から床面までの深さは1号住居で2～35cm、2号住居で



10～30cm、3号住居で10～15cmである。仮に床面下20cmまで削平されたとしても、ほとんどのピットはそのプランを確認することができる。これは貯蔵穴についても同様である。

**貯蔵穴**—2号住居で床面の北西隅、3号住居では床面の南東隅、さらにそこから北2.4mの所にもう1基配置されている。1号住居では検出できなかったが、床面の南側に設置されていた可能性は否定できない。

**炉跡**—いずれの住居からも床面に明瞭な痕跡を確認することはできなかった。

**床面**—床面の状態に特異なことが認められた。2号住居と3号住居の床面に焼土が堆積していたことである。2号住居では北壁下を主体に東壁下と西壁下の一部に焼土が堆積していた。一方、3号住居では少量の焼土堆積であったが、壁下を主体に炭化材の出土が認められた。2号住居の位置が3号住居の外周溝(5溝c)から4m西に位置していることを考えると、2軒の住居は同時存在の可能性が高い。焼土・炭化材の出土からは火災住居の可能性も考えられる。

**周溝**—1・2号住居で掘り方調査時に部分的に検出されている。3号住居では検出されていない。

**入口施設**—確実にわかるのは3号住居の外周溝が南側で途切れた箇所であろう。2号住居は少し判断しかねるが南東方向の可能性が考えられるし、また住居北東部の11号溝南東箇所もその可能性が考えられる。

**床下土坑**—いずれの住居からも検出されていない。

**出土遺物**—井野川流域のS字状口縁台付甕の分類と編年については、田口一郎(田口2000)によって示されている(第326図)。それによると、分類は次のようになっている。

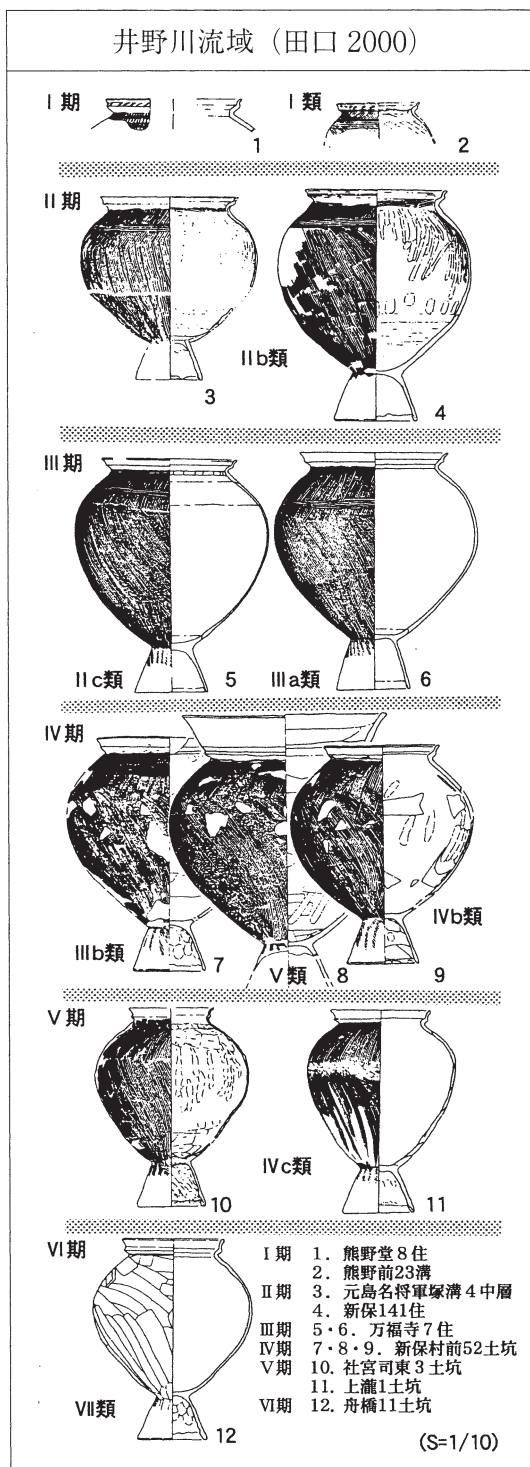
- I類—口縁部刺突紋を主な指標。
- II類—口縁部刺突紋の喪失、頸部内面のハケメ、を指標。口縁形態・肩部横線等の属性によりa・b・c類に三細分。
- III類—頸部から下がった肩部横線、頸部内面ハケメの喪失、胴部外面ハケメ以前のヘラケズリを主な指標。胴部形態—肩の張る球形から長胴化。口縁端部形態—一面をもつ・沈線化・丸く仕上げる等の属性でa・bに二細分。
- IV類—肩部横線の喪失、胴部外面ハケメ以前にヘラケズリを主な指標。胴部形態—肩の張る球形から長胴化。口縁端部形態—一面をもつ・沈線化・丸く仕上げる。口縁の

立ち上がり—外に開く・上部が立ち上がる等の属性によりa・b・c類に三細分。

V類—通常のS字状口縁台付甕の口縁部上部に拡張部が付加(所謂山陰系甕との折衷)。

VI類—IV類の亜種か、模倣された「S字甕もどき」か。位置付けを保留。

VII類—胴部外面ハケメの喪失。



第326図 井野川流域におけるS字甕編年  
(深澤・小林2006から転載)

そして各類の共伴関係と共伴の甕の関係を整理して、I期からVII期に細分している。これをもとに1～3号住居出土土器を見ていこう。

1号住居では床面直上から多量のS字状口縁台付甕が出土している。これらはⅢ類にあたる肩部横線のあるもの(第243図4・6、第244図10、第245図12)とⅣ類の肩部横線の喪失したもの(第243図5、第244図7・8・9、第245図11)が認められる。また「東海系」有段口縁の壺(第243図3)の破片、同じく「東海系」小型高坏(第243図2)も出土している。一方、「樽式系」甕などは出土していない。田口編年のⅢ期からⅣ期に該当する。

2号住居でもS字状口縁台付甕を主体に、椀・高坏・器台・壺が出土している。Ⅲ類にあたる肩部横線のあるもの(第246図8、第250図9・10)とⅣ類の肩部横線の喪失したもの(第250図7・11・12)が認められる。「東海系」高坏(第246図3)、受け部に明確な屈曲を有する器台(第246図4)が出土している。田口編年のⅢ期からⅣ期に該当する。2号住居に伴うと思われる11号溝からはⅢ類(第251図4・5・6)とⅣ類(第251図8)が認められる。また「東海系」の有段(二重)口縁壺(第251図3)、埴が出土している。

3号住居ではⅢ類のS字状口縁台付甕の出土はなく、Ⅳ類(第257図19・20)が南東隅の貯蔵穴と壁の間から「東海系」大型高坏(第252図2)とともに出土している。「東海系」小型器台3点(第252図6～8)は東壁の中央からやや南よりの直下から、また近接して埴が出土している。その出土のあり方は、住居内の収納場所を暗示しているようである。遺物の主体となるのは壺であり、支柱穴P2とP4の中間でP6を囲むように出土している。単口縁壺(第256図12・257図14)と口縁部の作りが異なる壺(第252図9、第256図10・11・13、第257図17)がある。この中には胴部外面上位に2段の鋸歯文が認められる壺(第256図13)もある。また、外周溝の5溝bからはⅣ類のS字状口縁台付甕(第260図8)と大型の単口縁壺(第260図7)が粉々となった状態で出土している。3号住居も1・2号住居と同様に田口編年のⅣ期に該当する。

3軒は同時期集落を構成していた可能性が高い。若狭・深澤(2005)による古墳時代前期中段階、4世紀前半に該当しよう。

**掘り方**—3軒とも検出されている。2号住居に代表さ

れるように、支柱穴に囲まれた部分をやや掘り残して周りを掘り下げることが基本としているようである。

**外周溝**—2・3号住居で検出されているが、2号住居のそれは土坑状を呈する。

3号住居の外周溝規模は東西・南北ともに約13mになる。溝は南側で確実に途切れ、その間隔は4.8mである。住居の出入口部になる可能性がある。また北西部でも途切れているが5号住居の存在によって明確ではない。また北東部でも2号竪穴状遺構が重複しているために明瞭ではない。東側の5溝aは住居との間隔1.76～2.07m、上幅0.72～1.66m、深さ10～15cmを測る。北側の5溝bは住居との間隔1.38～1.87m、上幅1.01～1.36m、深さ3～10cm。西側の5溝cは住居との間隔1.69～2.06m、上幅0.7～0.96m、深さ3～10cmである。住居と溝の間隔は2m前後になる。この間に周堤が構築されたものと思われる。溝の深さと住居床面までの深さはほぼ同一である。このことは確認面から15cm程の削平を受けたとすれば、住居の掘り方のみが検出されることになる。遺物は5溝bの西部分からすでに記したように壺を主体に甕と台付甕が細片となった状態で多量に出土した。他の溝からはほとんど出土していない。

では2号住居外周溝のあり方はどのようなであろうか。住居北西方向1.8～5mのところから土坑状の溝2条が検出された。9号溝は南北6.44m、上幅0.92～2.1m、深さ48cmを測る。13号溝は東西4.1m、上幅0.63～1.59m、深さ13cmを測る。また、北方向約4.5mから検出された11号溝の規模は南北3.8m、上幅1.9～2.5m、深さ7～23cmを測る。南に向かって傾斜しているが、住居に対する走行がやや異なっているために、これについては当住居に伴うものなのかは微妙である。9・13号溝は2号住居の外周溝と判断されるかもしれないが、11号溝の位置は不自然である。しかしこの溝からはS字状口縁台付甕、「東海系」の有段口縁壺の破片、埴が出土している。また13号溝からは焼土の堆積が部分的に見られるなど2号住居と一体となった遺構と判断できる。

1号住居については外周溝を確認することはできなかった。1号住居の西約35mから検出された綿貫小林前N西区2号住居、3号住居の南西約64mから検出された綿貫小林前N西区1号住居でも外周溝は検出されていない。というよりは、綿貫小林前遺跡検出の前期住居44軒

からは、外周溝を伴う住居は検出されていないのである。

#### ロ・外周に溝を伴う住居の検出例

3区3号住居に代表される所謂「周溝をもつ建物」は、高崎市域では初めての検出になる。しかし遺跡周辺に眼を転じると、これまでに6遺跡30例の検出例が知られているのである。群馬県域ではじめて「周溝をもつ住居」が認識された、佐波郡玉村町上之手八王子遺跡も存在する。

『中内村前遺跡(2)』(2003)の中で、すでに石守晃によってこの種の遺構集成や分析が試みられているが、追加事例を含め再度確認してみたい(第327～330図)。

#### ・佐波郡玉村町上之手八王子遺跡

当遺跡の南東約3.3kmの所に位置する。古墳時代前期、4世紀前半の「周溝をもつ建物」5軒、竪穴住居16軒、方形周溝状遺構2基が検出されている。報告書ではこれらの遺構を大きく2時期に分けている。古い時期は「周溝のある建物」2軒、竪穴住居11軒、方形周溝状遺構2基、新しい時期は「周溝のある建物」3軒、竪穴住居5軒となる。

古い時期に該当する外周溝を伴う住居と方形周溝状遺構は次のとおりである。

BH-149—住居の規模は推定6m×5.6m、壁高3～5cm、推定4本柱、貯蔵穴と炉は検出されていない。外周溝は2条で、外側が広く(幅1.2～2.6m)内側は狭い(幅0.24～0.4m)、外周溝の規模は東西約14m、南北約16mを測る。

BH-161—住居の規模は5m×6.2m、床面は検出できていない。南東部に貯蔵穴がある。外周溝は推定で南北12.3m、東西12.8mを測る。南東部で途切れている。

1号方形周溝状遺構—周溝の幅は0.8～1m、深さ10～15cmである。主体部は別住居が存在するために確認できていない。周溝の規模は北東～南西8.6m、北西～南東も同じく8.6mの規模になる。南辺が開口している。

2号方形周溝状遺構—周溝の幅は1.2～1.5m、主体部と思われる施設はない。周溝の規模は東西13.2m、南北12mの規模になる。

新しい時期のものは次のとおりである。

BH-102—住居の規模は5.2m×5m、壁高3～5cm、4本柱でピットの深さは75～100cm。貯蔵穴は南東部にあり、炉は検出されていない。外周溝の直径は12m、幅

は0.4～0.6m、住居との間隔は約3mを測る。

BH-116—住居の規模は5.44m×5.56m、壁高3～5cm、4本柱でピットの深さは18～20cm。貯蔵穴は2箇所あり、炉は検出されていない。外周溝は2条、一部3条巡る。東西約13m、南北約12mの規模で、住居との間隔は約2mを測る。深澤敦仁(深澤2008)は古墳時代前期の2期に位置づけている。

BH-176—住居の規模は5.92m×5.76m、壁高3cm、4本柱で深さ30cm前後。貯蔵穴は検出されていないが、床面に焼土の痕跡。外周溝は二重に巡り、その規模は外側で14.6m×14.5m、内側で8.4m×10.3m、南部が途切れていて端が南方に向くことから、出入口の施設と考えられている。内側の溝と住居の間隔は約1.8mを測る。

以上の5軒が住居外周に溝を伴い、この内二重に溝が巡る住居は3軒であった。

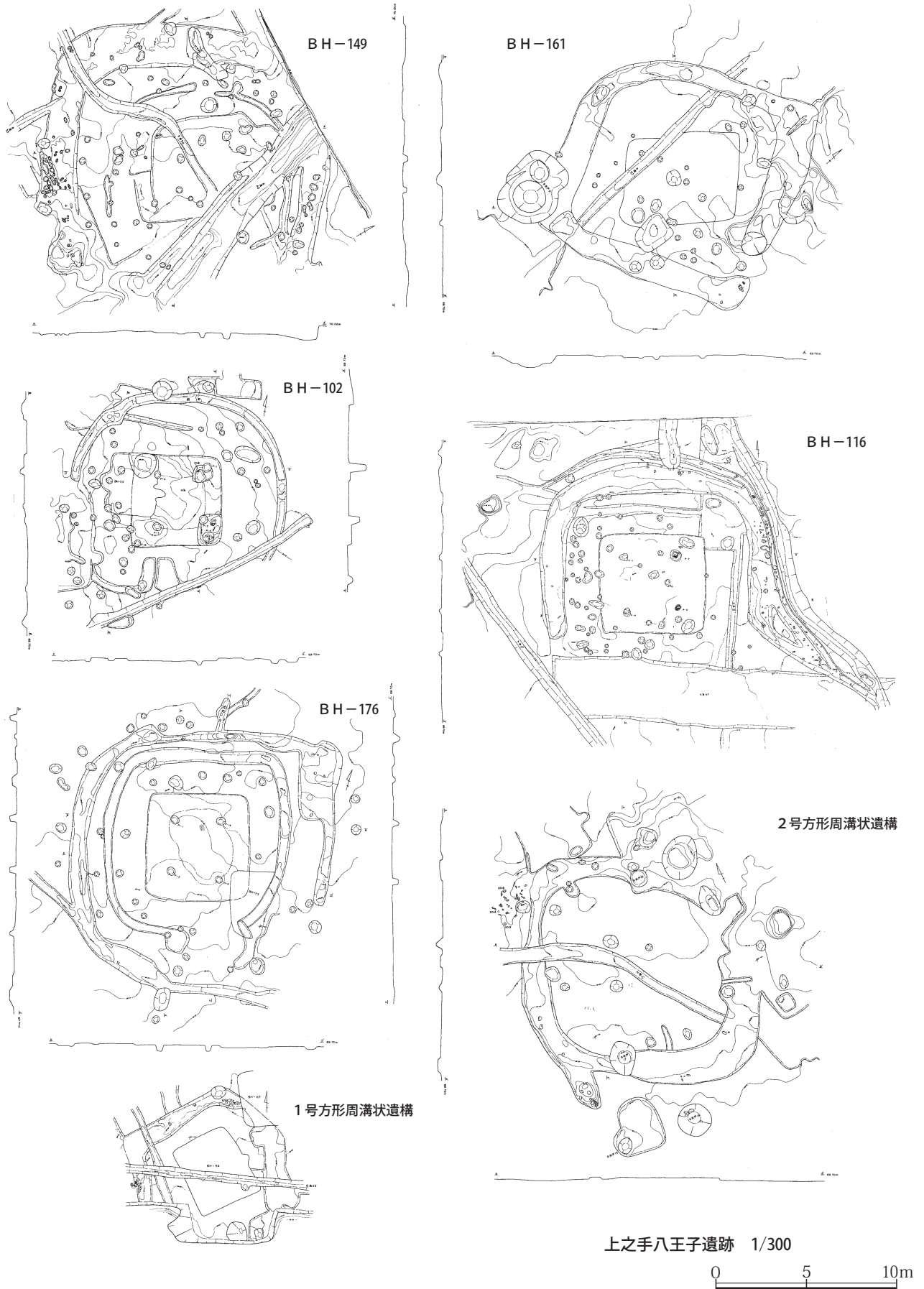
これらの遺構については飯島義雄(飯島1998・2000)によって再分析されている。それによると、BH-149・BH-116・BH-102・BH-176の4軒は、隣接する「周溝をもつ建物」の周溝部分を連結溝で繋ぎながら雨水を居住域外に誘導する、同時存在を示す蓋然性が高いというものである。また、石守は2基の方形周溝状遺構を外周に溝をもつ住居として把握している。ただし、石守の記載した住居や溝の計測値は、報告書記載の数値とは異なっている。

#### ・佐波郡玉村町上之手石塚遺跡

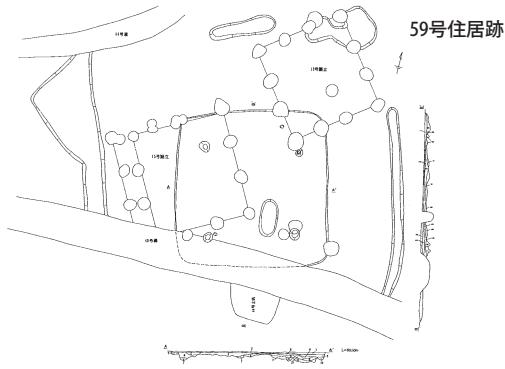
当遺跡の南東約3.5kmの所に位置する。古墳時代前期4世紀前半の「周溝をもつ建物」1軒、方形周溝墓1基、井戸2基、溝1条が検出されている。

59号住居跡—一辺6.1mの正方形。残存壁高5cm前後。床面の硬化は認められない。柱穴は3基検出。貯蔵穴と炉跡は検出されていない。掘り方の状況は当遺跡3区2号住居と同様である。外周溝は住居から2.5～3m離れ、規模は東西約12.7m、南北約11m以上になるが、全周はしていない。東溝は残存長7.5m・幅0.45～0.5m・深さ40cm、北溝は長さ2.8m・幅0.9～1.7m・深さ20cmと長さ2.7m・幅0.55～0.7m・深さ13～23cm、西溝は残存長6.3m・幅0.9m・深さ16cmを測り、南溝は検出されていない。

同時期構築の31号溝に近接し、また南南東約71mからは方形周溝墓が検出されている。住居の規模と外周を含

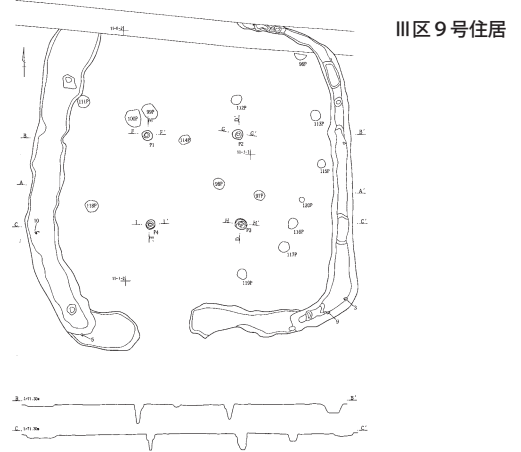


第327図 住居外周に溝を伴う住居(1)



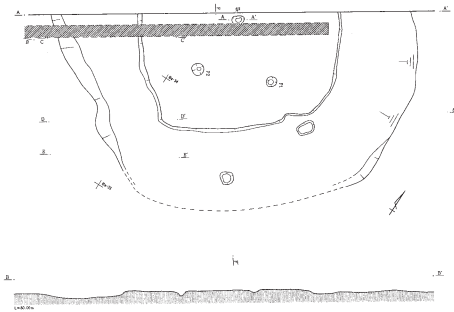
59号住居跡

上之手石塚遺跡 1/300

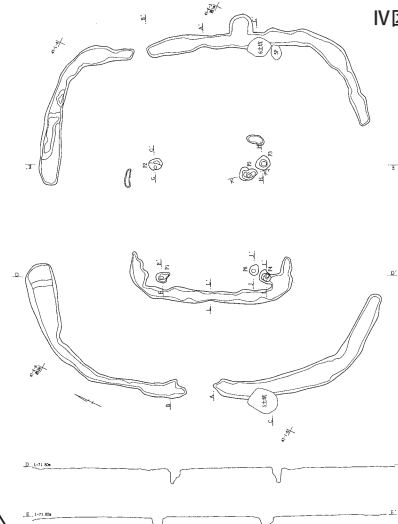


III区9号住居

II区1号住居

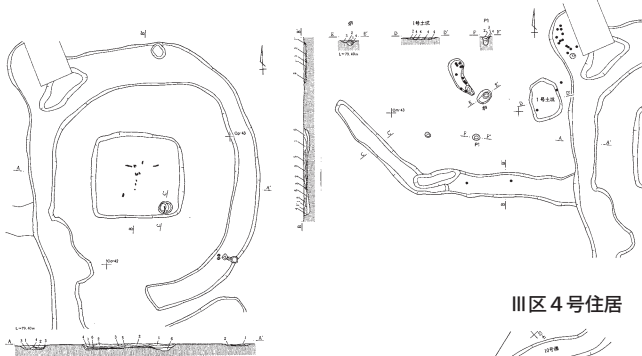


IV区1号住居



III区1号住居

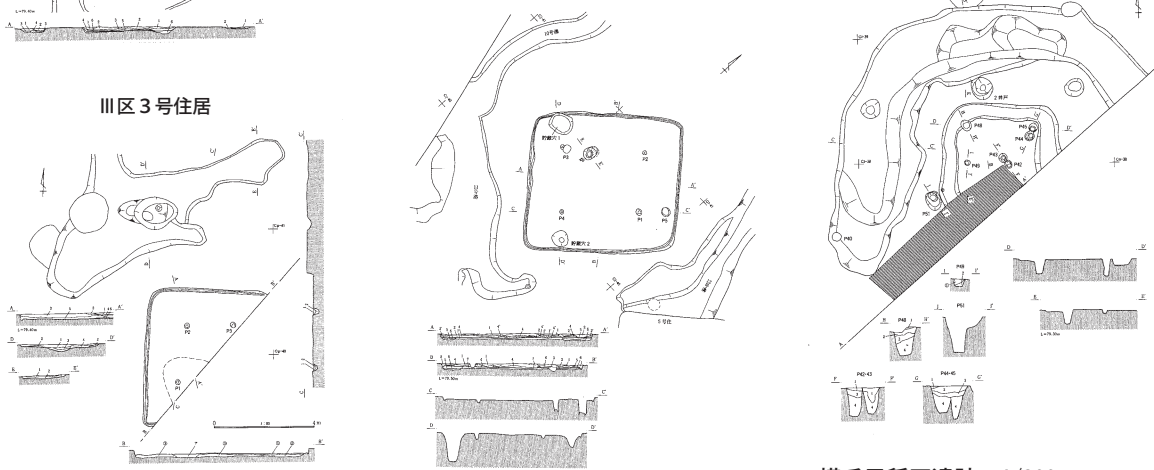
III区2号住居



上新田中道東遺跡 1/300

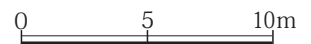
III区4号住居

III区6号住居

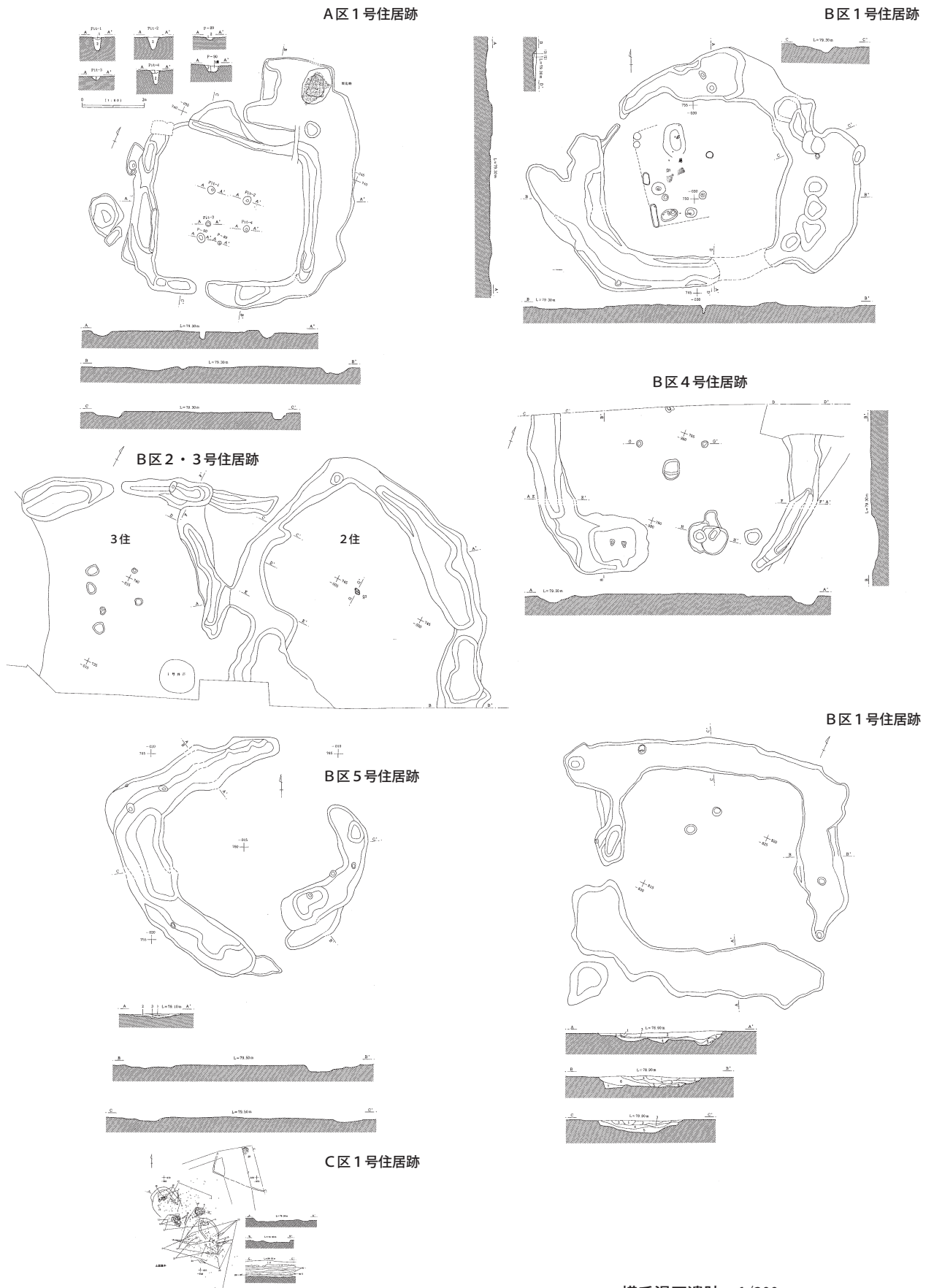


III区3号住居

横手早稲田遺跡 1/300



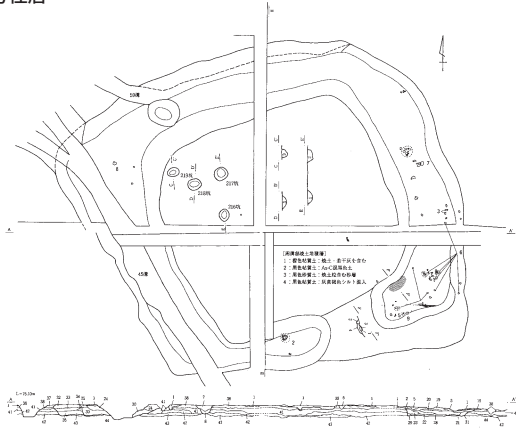
第328図 住居外周に溝を伴う住居(2)



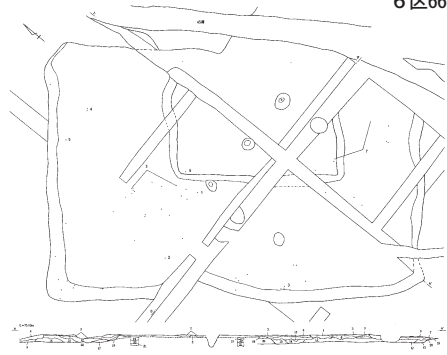
第329図 住居外周に溝を伴う住居(3)



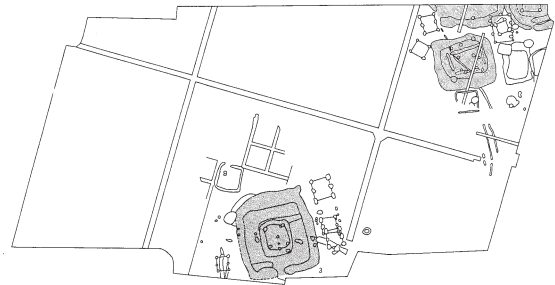
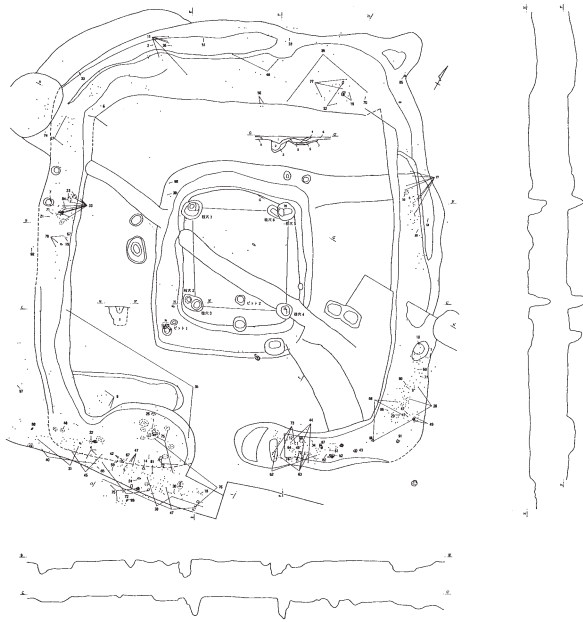
6区65号住居



6区66号住居

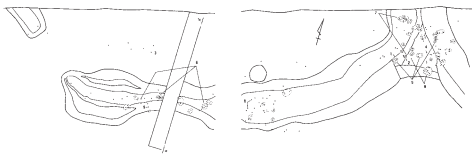


7区3号住居

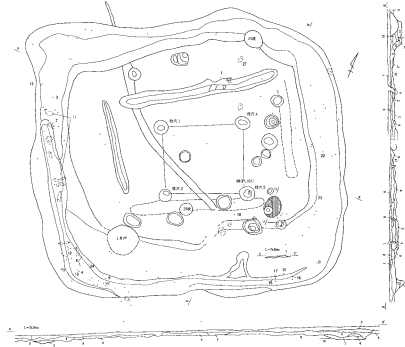


7区全体図

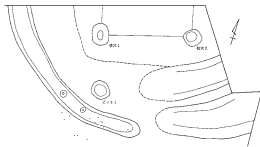
7区6号住居



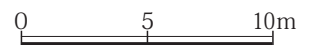
7区7号住居



7区11号住居



中内村前遺跡 1/300



第330図 住居外周に溝を伴う住居(4)

めた構造は当遺跡の3区3号住居とやや近似する。

#### ・佐波郡玉村町上新田中道東遺跡

当遺跡の東約2.8kmの所に位置する。古墳時代前期の「周溝をもつ建物」2軒、竪穴住居3軒、掘立柱建物8棟、方形周溝墓2基、土坑・井戸11基、集落内を区画する溝などが検出されている。

Ⅲ区9号住居—竪穴か平地式か不明。長軸4m以上、短軸3.9m以上。4本柱で深さは48～75cmを測る。各柱穴間の距離は3.6mを測る。床面と貯蔵穴・炉は検出されていない。外周溝の長軸13m、短軸12.7mで南辺の中央やや西よりの一部を除き全周する。外周溝の規模と柱穴間距離の3.6mから判断すると、綿貫原北遺跡3区3号住居とほぼ同規模になる。

Ⅵ区1号住居—竪穴住居と推定。長軸推定6.6m、短軸推定6.44m。4本柱で深さは42～70cmを測る。床面と貯蔵穴・炉は検出されていない。外周溝の長軸14.8m、短軸13.6mで各辺のほぼ中央が途切れているが、南辺の中央のみが掘り残されていた可能性が高い。

この他、Ⅴ区2号住居もその可能性が指摘されているが、断定するには至らない。

2軒の住居は直線約300mの距離を隔てて存在し、いずれも周囲に他の遺構がほとんどない地点に単独でつくられている。一般の竪穴住居とは異なった機能を有する建物である可能性が高いと見ている。

#### ・前橋市横手早稲田遺跡

当遺跡の北北東約2.6kmの所に位置する。古墳時代前期の「周溝をもつ建物」6軒、竪穴住居などが検出されている。

Ⅱ区1号住居—竪穴は未検出で柱穴と地床炉を検出。柱穴は2基でその間隔3.2m、貯蔵穴は検出されていない。外周溝の規模は東西約14.4m、幅3mで深さ16cmを測る。「樽式系」や「吉ヶ谷式系」甕も出土。4世紀前半。

Ⅲ区1号住居—竪穴住居は長辺3.6m、短辺3.4m、深さ25cm。柱穴と炉は検出されていない。貯蔵穴は南東隅にある。掘り方は中央部が掘り残される。外周溝の規模は南北10.6m、東西9m、上幅0.52m、深さ8cmである。南部分で途切れている。住居との間隔は約1mを測る。火災住居の可能性が指摘されている。4世紀前半。

Ⅲ区2号住居—竪穴の掘り込みは検出されていない。

炉と柱穴1基、土坑1基が検出された。外周溝は幅1m前後、1号住居の外周溝と接続する。

Ⅲ区3号住居—竪穴住居は長辺5.56m、深さ11cm。炉・貯蔵穴は検出されていない。柱穴3基と全周する周溝が検出されている。掘り方は壁に沿って幅1m、深さ25cmの溝が巡る。土坑状の外周溝のあり方は、綿貫原北遺跡3区2号住居のあり方に近似する。4世紀前半。

Ⅲ区4号住居—竪穴住居は長辺6m、短辺5.6m、深さ10cmの規模。炉、主柱穴4基、貯蔵穴2基(西コーナーと南コーナー)が検出されている。周溝は全周。掘り方は1m弱の溝状の掘り込みが壁沿いを全周。床下土坑1基が検出された。床面上に建築部材が炭化状態で散乱、焼土・灰と共に出土したことから焼失住居と見られている。ただし失火による可能性は低いとする。外周溝の規模は北東から南西約15m、北西か東約11.5mになる。4世紀前半。深澤(深澤2008)は古墳時代前期の3期(新段階)に位置づけている。

Ⅲ区6号住居—住居掘り方は一辺4.6mの方形を呈する。炉と貯蔵穴は検出できなかった。外周溝は1m前後離れて東西推定13m、南北推定11m、幅2.2～2.3mを測る。4世紀前半。

#### ・前橋市横手湯田遺跡

当遺跡の北北東約2.6kmの所に位置する。古墳時代前期の「周溝をもつ建物」8軒、竪穴住居3軒、掘立柱建物1棟、井戸1基、土坑、溝6条、流路などが検出されている。A・B区検出の集落と横手早稲田遺跡検出の前記集落は、同一集落を構成するものである。

A区1号住居跡—住居の掘り込みは検出されていない。主柱穴と考えられる4基のピットが検出されたが、その間隔は1.5～2.1mと狭い。炉は検出されていない。外周溝の規模は南北11.05m、東西11.83mで南辺には幅48cmの陸橋状の掘り残しがある。周溝の内側は直線的に整えられている。

B区1号住居跡—部分的に掘り方が検出されている。地床炉と柱穴3基、貯蔵穴の可能性ある土坑2基が検出された。外周溝の規模は南北12.82m、東西15.84mで南辺中央部に陸橋状の掘り残し(推定2.5m)がある。

B区2号住居跡—住居の掘り込みは不明であるが、地床炉が検出されている。柱穴と貯蔵穴は不明。外周溝の

規模は北西～南東14.08m、北東～南西14m前後である。

B区3号住居跡－2号住居跡に接する。住居の掘り込み不明。柱穴4基を検出、その間隔は1.7～2.3mと狭い。炉は検出されなかった。外周溝の規模は東西9.38m、南北11.7mで、北辺の中央部に陸橋状の掘り残し(42cm)がある。

B区4号住居跡－住居の掘り込みは検出されていない。地床炉と柱穴2基を検出。柱穴の間隔は3.5mである。外周溝の規模は東西15.78m、南北は8.78mを確認した。南辺中央部に幅2.15mの陸橋状の掘り残しがある。「樽式系」の甕や壺が出土している。

B区5号住居跡－住居、炉、柱穴は検出されていない。外周溝の規模は東西12.35m、南北12.52mで南辺西よりの位置に幅1.05mの陸橋状の掘り残しがある。

C区1号住居跡－掘り方状の窪みと炉を検出。前期の土器片が出土した外周溝の痕跡も検出している。

D区1号住居跡－住居の掘り込みと炉・柱穴は検出されていない。外周溝の規模は南北13.96m、東西14.96m、西辺の中央部に陸橋状の掘り残しがある。S字状口縁台付甕B類(田口編年Ⅱ期)、「吉ヶ谷式系」の壺、「北陸系」の有段口縁甕などが出土している。3世紀後半から4世紀初頭、集落開始期の住居と位置づけられている。

この他にB区11・12溝、C区13溝が住居等に関連する遺構の可能性が指摘されている。

#### ・前橋市中内村前遺跡

当遺跡の北東約5.5kmの所に位置する。古墳時代前期の「周溝をもつ建物」6軒、竪穴住居、井戸、集落内を区画する溝などが検出されている。

6区65号住居－住居の掘り込みは不明。炉と貯蔵穴は検出されていないが、柱穴の可能性のある土坑4基が検出されている。ただしすべてが主柱穴になるものではない。外周溝の規模は北東～南西14.28m、北西～南東12.88m、幅2.68m、深さ39cm。南辺中央に幅1.77mの掘り残しがあり、出入口部と把握されている。報告書では3世紀末葉としている。

6区66号住居－住居の掘り込みは不明。炉・貯蔵穴・柱穴は検出されていない。外周溝の規模は北西～南東15.04m、北東～南西11.28m、幅4.83m、深さ22cm。同じく3世紀末葉。

7区3号住居－竪穴住居の掘り方を検出。規模は6.47×7.8mで柱穴6基ある。炉は検出されていない。住居と外周溝の間隔は2.2～3.2m。外周溝の規模は南北19.8m、東西16.09m、幅1.2～3.28m以下、深さ34cm。南辺中央が途切れて出入口部になる。その幅は1.56m。同じく3世紀末葉～4世紀初頭。これまでに検出された住居の中では最大規模になる。

7区6号住居－幅1～2.24m、深さ50cmの外周溝一部を調査。このために全容は不明である。南西部に溝の途切れる部分があり、出入口が想定されている。同じく3世紀末。

7区7号住居－竪穴住居の掘り方を検出。その規模は7.37×5m。炉や貯蔵穴は検出されていないが、柱穴4基を検出。深さ32～40cm。外周溝の規模は12.5×11.6m、幅0.97～3.02m、深さ26cm。開口部は認められなかった。同じく3世紀末。

7区11号住居－全容は不明。柱穴2基を検出、その間隔は3.55mを測る。外周溝の幅は0.91～1.77m、深さ17～28cmである。南側が住居出入口部になる。同じく3世紀末葉。

#### 八・まとめ

以上、当遺跡周辺の6遺跡30例(上之手八王子遺跡の方形周溝状遺構2例を加える)を報告した。これに当遺跡の2例を加え32例となる。これらを整理したものが第200表である。

ここから導かれることを次に簡単にまとめよう。

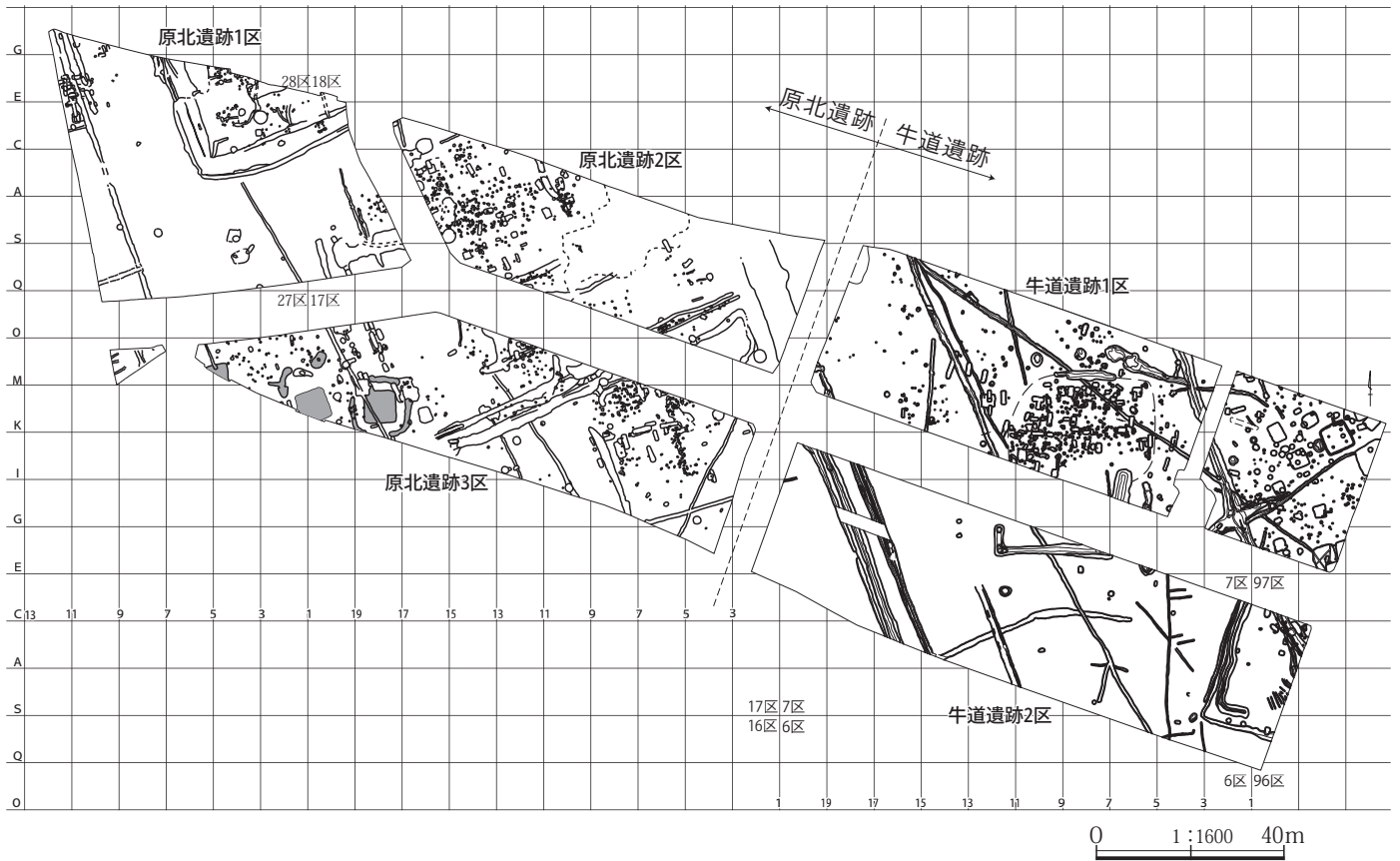
外周に溝を伴う住居は、弥生時代遺跡の希薄な地域に出現、水田耕作の適地である低湿地と住居が立地する微高地との高低差が少ない低地部に立地する。そして単独で検出されているものもあるが、基本的には複数の住居がまとまった集落として検出される。上之手八王子遺跡の5軒、横手早稲田遺跡Ⅲ区5軒と横手湯田遺跡A・B区6軒の計11軒、中内村前遺跡6区・7区の事例なども、外周に溝を伴う住居同士による同一集落を構成するものとなろう(第331～333図)。これらのことから綿貫原北遺跡も同様な事例と考えられる。住居の東側から北側にかけて同時期の遺構が検出されていないことなどから、集落は南側に広がることが予想される。

単独検出の上之手石塚遺跡例については、調査区西端

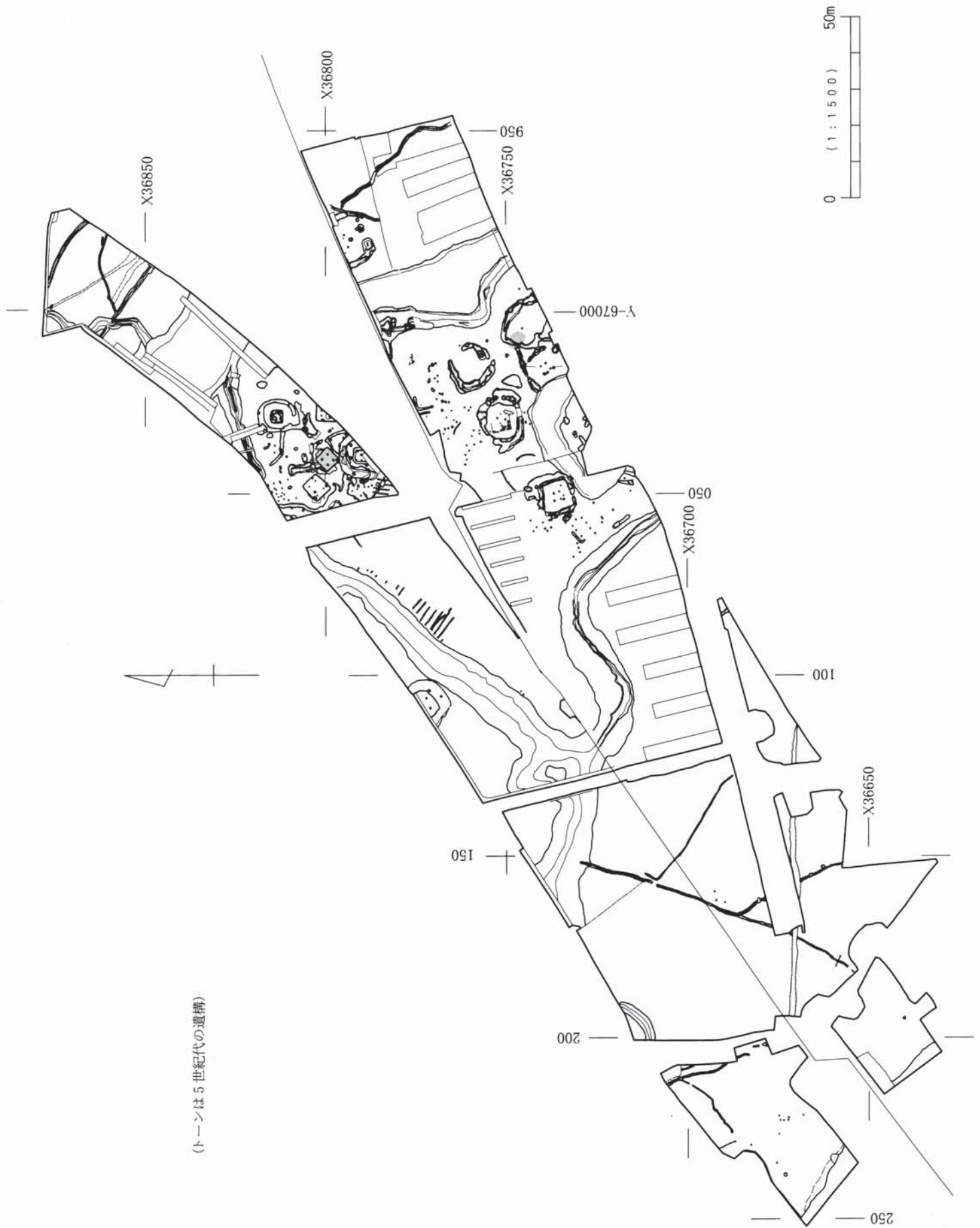




第331図 上之手八王子遺跡例(1/1500)



第332図 綿貫原北・牛道遺跡例



第333図 横手南川端・横手湯田(A・B区)・横手早稲田遺跡例(1/1500)

どが考えられている(岡村2007)。また土屋根の場合は、  
 燃焼もしにくく類焼もしないという。横手早稲田遺跡Ⅲ  
 区4号住居例は「坏や鉢等の小型品がほとんど出土して  
 いない。このことから失火による焼失の可能性は薄いと  
 考えられている」(齋藤2001)。一方、当遺跡の隣接する  
 2軒はどうであろうか。2軒とも土器が豊富に残されて  
 いた。遺物出土状況からどのような可能性が考えられる  
 のであろうか。これらは少なくとも火がつけられる前に  
 住居内に置き去りにされた土器類であることは間違いな  
 い。今後の検討課題である。ただし、2000年以降刊行さ  
 れた報告書を分析した石守晃によると、群馬県の高墳時  
 代前期では火災住居の割合が高い(203軒中50軒)ことが  
 指摘されている(石守2003)。

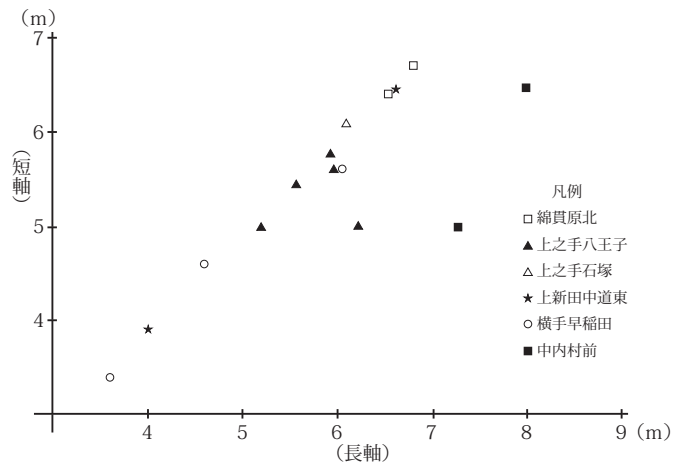
竪穴住居を掘削した際の排土と外周溝を掘削した際の  
 排土は、住居と溝の間に盛られて周堤が構築されたので  
 であろうが、「その周堤内部には建物構築時の地表面が存  
 在していたはずである。この旧地表面の認識は「周溝を  
 もつ建物」の構造を知る上で不可欠であり、特に注意し  
 て検出する努力が望まれよう。」(飯島2005)と指摘して

いるが、この時期の遺構すべてに上面からの削平が及ん  
 でいる現状では、ほとんど不可能に近い。

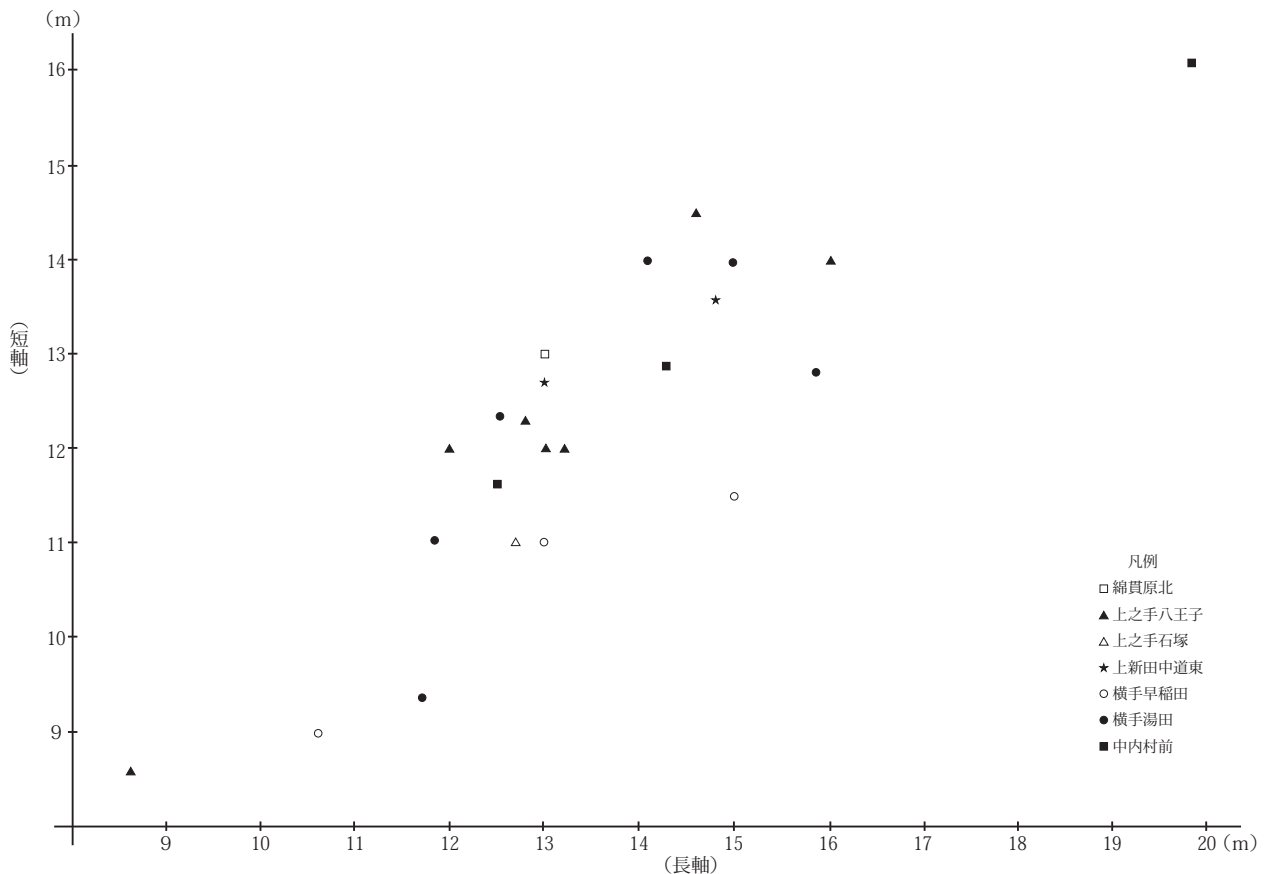
次に外周溝を見よう。

圧倒的に多いのが一重の溝である。32例中27例に及ぶ。  
 二重(一部三重を含む)は3例、そして当遺跡3区2号住  
 居で見られた土坑状のものは2例となった。

規模を見ると、長軸では12m前後～16m、短軸では  
 11～14.5mとなる(第335図)。この一群から大幅に逸脱  
 するのは、中内村前遺跡7区3号住居の南北19.8m、東



第334図 住居規模の比較



第335図 外周溝の規模比較

西16.09mである。住居も最大規模であった。最小は上之手八王子遺跡1号方形周溝状遺構の8.6×8.6mとなる。この場合、竪穴住居があったとすれば横手早稲田遺跡Ⅲ区1号住居よりもさらに小規模なものになる。

外周溝の形状は、広溝タイプ、狭溝タイプ、土坑タイプが指摘されてきた。ただし狭溝タイプの事例は八王子上之手遺跡例にほぼ限定されることから、主体は広溝タイプになる。そしてその役割は、主に防水・防湿・排水機能を果たしていたものと捉えてきた。また群馬県内においては、北陸地方の囲繞型、南関東地方の開口型、東海地方の馬蹄型が多く見られることから、低地部での建築施工法の一つとして認識されていて、東海・北陸・南関東の各地域から伝えられた設計法或いは工法を実際に施工してみたもの(石守2003)としているが、遺物の多様性は認められるものの一集落内においてこうした多様性が許容されるものであろうか、少々疑問が残る。基本的には、開口型や馬蹄型にしても外周溝の途切れた箇所が住居出入口部になり、さらに竪穴住居の周囲に、住居とは構造的に一带とならずに外周溝を繞らした上之手八王子遺跡・横手早稲田遺跡・横手湯田遺跡の事例もあることから、上記のような括りはあまり意味を持たなくなるのではないだろうか。

古墳時代前期の建物には、竪穴住居、そして今回紹介した外周に溝を伴う竪穴住居、さらに掘立柱建物や平地式建物など考えられるが、一般的なのは竪穴住居である。当遺跡に隣接する綿貫小林前遺跡や綿貫伊勢遺跡からは多数の前期竪穴住居が重複した状況で検出されている。しかしこれらの中で外周に溝を伴う竪穴住居は全く検出されていない。当遺跡3区2・3号住居に限定されるのである。外周溝が単に防水・防湿・排水機能と掘削土を周堤の盛土としていたことに収斂されるとは到底考えられない。同様な立地状況にある他の多くの住居にも当然に適用されてしかるべきものだからである。

北陸・越後地方での外周に溝を伴う住居は、弥生中期から古墳前期にかけて広範囲、かつ一般性を持って存在、そして沖積地に多く立地しているという(飯島1998)。しかし群馬県内においては、古墳時代前期になってこれまで未開発であった沖積地の開発とともに新しい要素として導入された(飯島2000)が、すでに指摘されているような、居住者の階層による住居構造の違い、住居の外周を

溝で囲うことにより階層性を示すということも再度考えていかなければならないであろう。

## 参考文献

- 飯島義雄「古墳時代前期における「周溝をもつ建物」の意義」『群馬県立歴史博物館紀要』第19号、1998年
- 飯島義雄「古墳時代前期集落の研究における排水溝の意義」『一所懸命』2000年
- 飯島義雄「「周溝をもつ建物」における掘り方の確認の意義—前橋台地上に立地する横手早稲田遺跡における例を中心として—」『群馬考古学手帳』15、2005年
- 石守 晃「焼失実験と関東北部の焼失住居」『月刊考古学ジャーナル』No.509、2003年
- 石守 晃「周溝をもつ建物」『中内村前遺跡(2)』2003年
- 岡村道雄「焼失竪穴建物研究の方法と可能性」『奈良文化財研究所紀要』2007年
- 齋藤利昭「4号住居」『亀里平塚遺跡・横手宮田遺跡・横手早稲田遺跡・横手南川端遺跡』2001年
- 田口一郎「北関東西部におけるS字口縁甕の波及と定着」『第7回東海考古学フォーラムS字甕を考える』2000年
- 深澤敦仁・小林 修「渋川市赤城町所在・滝沢天神遺跡2号住居出土古式土師器の位置づけ—群馬県渋川地域の古式土師器の編年作業を通して—」『研究紀要』24、2006年
- 深澤敦仁「太田地域における古墳時代前期の土器編年試案」『成塚向山古墳群』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、2008年
- 福田 聖「関東地方における「周溝」の研究をめぐって」『古代』第122号、2009年
- 若狭 徹・深澤敦仁「北関東西部における古墳出現期の社会」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』2005年
- 玉村町教育委員会『上之手八王子遺跡』1991年
- 玉村町教育委員会『上之手石塚遺跡』2000年
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団『上新田中道東遺跡』2012年
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団『亀里平塚遺跡・横手宮田遺跡・横手早稲田遺跡・横手南川端遺跡』2001年
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団『横手南川端遺跡・横手湯田遺跡』2002年
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団『中内村前遺跡(2)』2003年
- ※本文執筆にあたっては、石守晃氏・長谷川博幸氏から資料の提供や教示をうけた。記して感謝申し上げます。



### 第3項 飛鳥～平安時代

#### 1 竪穴住居

竪穴住居は1区で14軒、3区で2軒調査された。時期は以下のとおり整理できる。

9世紀第3四半期 1区3・12、3区4・5

9世紀第4四半期 1区1・2・6～11・13

10世紀第1四半期 1区4・5・14

また、カマドについては、重複などにより消滅した8軒を除く8軒すべてが東カマドで、7軒は東辺のほぼ中央に、1区11号住居は南東隅近くに設置されていた。1区2・11号住居のカマドには、焚き口などに石が残ることから、石組みカマドであったと推測される。

貯蔵穴は8軒で検出され、1区2号住居はカマドの右脇にあり、残る7軒はすべて南東隅に作られていた。

#### 2 溝・その他

1区84号溝とその延長部分に該当する3区33号溝は、埋没土上層にAs-Bが一次堆積する大型の溝であり、何らかの空間領域を区画する溝と考えられる。時期は10世紀後半以降に掘削され、11世紀代には埋没したと推定される。その前身遺構として、規模は小さいが1区86号溝が想定でき、10世紀前半には埋没したものと考えられる。

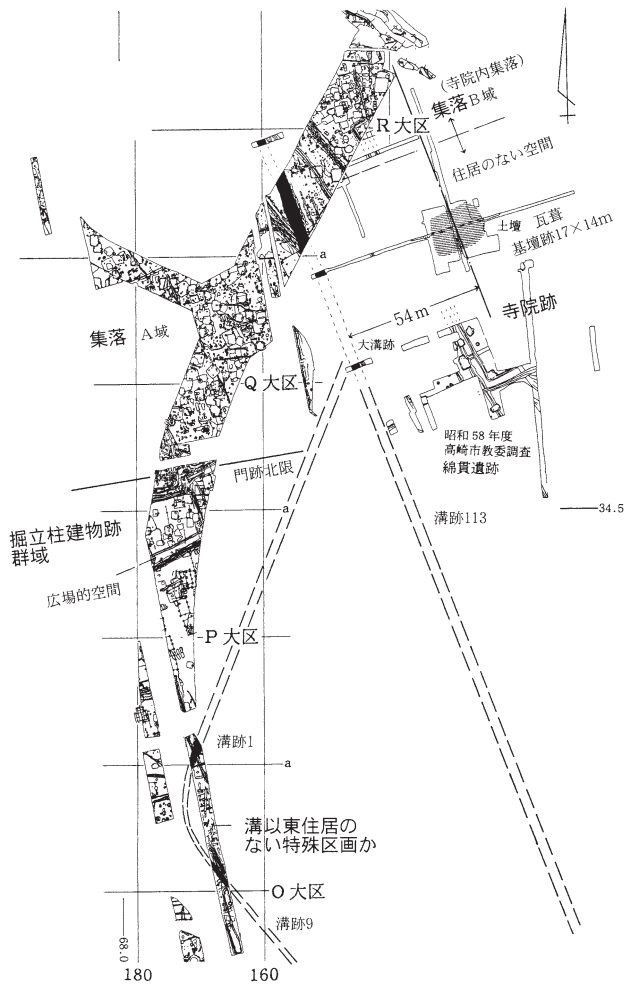
また、84号溝と並走する2号落ち込み状遺構は性格不明ながら、遺物を多く含んで平坦面とピット群で形成されており、9世紀後半に比定される。したがって、9世紀後半頃から11世紀代にわたって、1区西端部周辺が何らかの区画の境界であったことが判明する。

さて、この溝の北西延長部に相当する遺構として、綿貫小林前遺跡O東区では9号溝があり、またそれが西側調査区域外で屈曲し、1号溝と同一となると考えられている(大江2006)。時期は出土遺物から9世紀前半頃に比定されて、当遺跡の成果と異なっているが、1区84号溝と一致することは間違いないことから、2号落ち込み遺構も含めて、境界遺構の上限年代が、ほぼ9世紀に遡る点で一致することが確認できる。

ところで、大江氏は第336図のとおり、8・9世紀の土地利用状況をまとめており、当地域は9号溝以東の住居のない「特殊区画」と位置づけられている。確かに大集落を形成して綿貫小林前遺跡に比して、当遺跡の竪

穴住居は16軒と少ないことは再確認できた。しかし、「住居がない特殊区画」という推測は修正する必要があるだろう。また、住居自体も形態・出土遺物ともに一般的で特殊なものはみられなかった。

注目される遺構として、1区9号井戸がある。方形に石を積み上げた石組み井戸で、出土遺物から9世紀後半に比定される。周辺には9世紀後半から10世紀前半に比定される1号落ち込み状遺構もあるが、概して遺構は少ない。同種の井戸は、東方に位置する綿貫伊勢遺跡2区でも1基確認できるが、こちらは大集落内に位置し状況は異なっている。



第336図 8・9世紀の土地利用推定図(大江2006 掲載812図より一部)転載

## 第4項 中世

### 1 屋敷遺構

#### (1) 遺物からみた屋敷群の年代観

##### 1 区屋敷群・周辺の変遷

第338図のとおり、1号屋敷は区画溝である25号溝の出土遺物から14世紀後半から16世紀前半となり、44号土坑の比定年代ともほぼ一致する。4号井戸からは常滑陶器片口鉢(13世紀後半)が出土するが、雑器で伝世も想定しにくいいため、周辺からの混入と考えたい。内堀となる91号溝の場合、下限は同じながら、上限が半世紀程度遅れており、同じく63号溝も上限は15世紀後半であり、これらを出現期ととらえれば、それまで1号屋敷は他の屋敷と同様に、区画堀が四周しない開放的な屋敷となり、15世紀後半に遮断機能が強化されたこととなろう。なお、25号溝の次世代で、近世の1号溝の前身となる26号溝は、17世紀後半となるため、区画溝が受け継がれ、やがて墓地の区画へと変遷する状況をみることができる。

2号屋敷における2号溝は、出土遺物から14世紀前半から15世紀後半となる。その延長となる2区1号屋敷では、6号溝の下限が15世紀中頃とほぼ一致する。したがって、2号屋敷は2区6号溝を東辺とすると考えて良いだろう。また、出現期が2区1号屋敷と同じく14世紀前半となるのは、量的にむしろ重複による混入と考えた方が整合性があり、2区6号溝と同じく14世紀後半と考えた方が良いだろう。

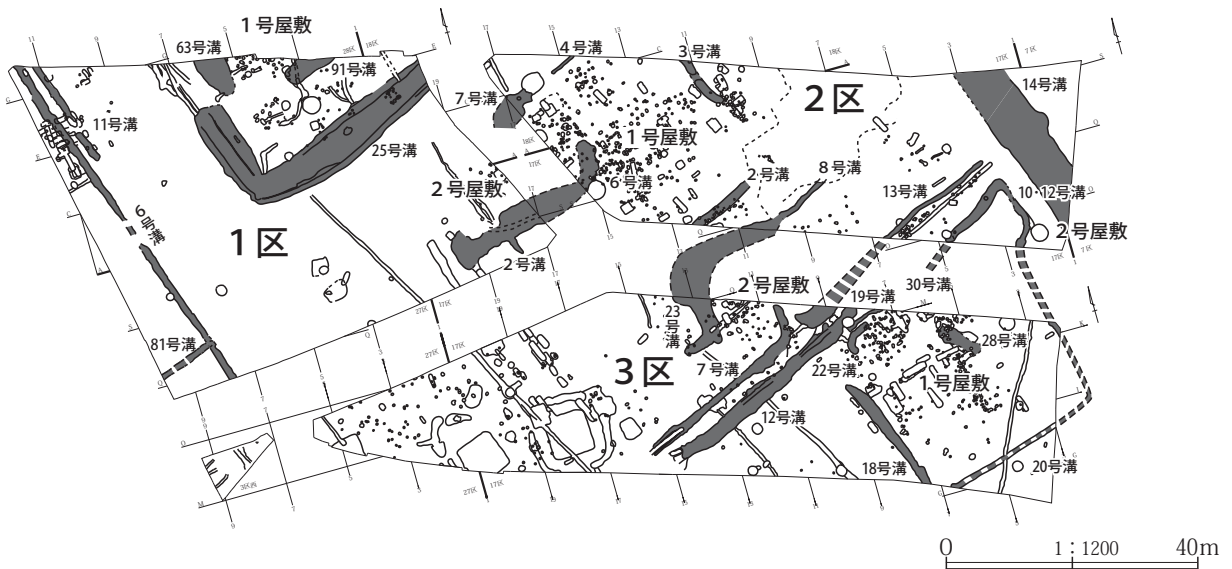
周辺では非常に長い区画溝である6号溝があり、これと接続あるいは並走する11・81号溝もほぼ同時期であろう。出現期が1号屋敷より半世紀程度早いため、2区屋敷との関係も考慮される。

##### 2 区屋敷群・周辺の変遷

第338図のとおり、1号屋敷は区画溝の出土遺物から14世紀前半から15世紀前半となり、3号井戸の比定年代と一致する。ところで、内部を細分して1区2号溝と連続する6号溝は、14世紀後半から15世紀中頃となり、後出あるいは追加された区画溝と評価される。また、隣接する4号井戸の下限が15世紀後半となり、1区2号溝とも一致するため、そこまで下る可能性が高い。したがって、1号屋敷は分割され、西側が1区2号屋敷へと展開したと考えられる。

2号屋敷は、区画溝の出土遺物から14世紀後半から15世紀前半となり、3区1号屋敷の下限年代と一致し、ほぼ同一の屋敷と考えられる。10号溝で出土した渥美陶器壺(12世紀)は伝世品と評価されるが、出現期は1号屋敷と同じく14世紀前半に遡る可能性が高い。

周辺では、8号溝が14世紀後半から15世紀後半、13号溝が14世紀後半から15世紀中頃となり、1・2号屋敷より下限が下る。ただし、4号井戸や6号溝と一致することは特筆される。2号溝と重複する22号掘立柱建物と主軸方位が一致することから、併存関係にあると考えられる。



第337図 中世屋敷分布図

3区屋敷群・周辺の変遷

第338図のとおり、1号屋敷は区画溝の出土遺物から14世紀前半から15世紀前半となるが、28号溝は更に15世紀中頃まで下限が下がる。

一方、2号屋敷は区画溝の出土遺物から14世紀後半から15世紀後半となり、1号屋敷より半世紀程度全体にずれている。この年代は、1号屋敷と2号屋敷の間に走向する12号溝とも一致し、この溝はむしろ2号屋敷の区画として成立した可能性が高くなる。

総括

以上の知見をまとめると、14世紀前半頃を一つの画期

として、2区では1号屋敷、3区でも1号屋敷(2区2号屋敷含む)が出現する。この時、1区では6号溝など広域にわたる区画溝が西方を区画している。これに対応するのが、2区14号溝であり東方を区画し、道路も並走していた可能性が高い。

その後、14世紀後半に、1区では1号屋敷が出現する。2区では同1号屋敷を細分する形で、2区6号溝を東辺とする1区2号屋敷が出現し、周辺では8・13号溝も現れる。3区では1号屋敷の北側に2号屋敷と12号溝が出現し、大小の屋敷が密集する形となる。

その背景には屋敷の切り替わりがあるらしく、2区1

号屋敷や3区1号屋敷は15世紀前半に廃絶しており、あるいは両者は並存せず、切り替わっていた可能性も考えられる。また、1区1号屋敷では内堀とみられる91号溝が出現し、区画の複郭化がみられる。3区1号屋敷内部でも走向方位の異なる28号溝は、15世紀中頃までは存続が確認でき、2区の13・14号溝もその頃を下限としている。

15世紀後半になると、1区2号屋敷、2区8号溝、3区2号屋敷が廃絶され、1区1号屋敷と同6号溝を残すだけとなるが、それらも16世紀前半には廃絶されたと考えられる。

16世紀後半はほとんど出土遺物がなく、状況が不明となるが、近世には広く零細な近世屋敷が展開している。したがって、16世紀前半を画期として、武士など領主層の存在が想定される中世的な屋敷景観は消滅したものと考えられる。

(2)屋敷内の建物

2区1号屋敷

南北約34.5mの区画内に、21棟

区	遺構名	補足説明	12C	13C前半	13C後半	14C前半	14C中頃	14C後半	15C前半	15C中頃	15C後半	16C前半	16C後半	17C前半	17C後半
			1区	1号屋敷	44土 西側 4井戸 南端 8井戸 南寄り 23溝 44土接続 25溝 南・西辺 63溝 西辺 91溝 内堀			■			■	■	■	■	■
	1号屋敷隣接	26溝 25溝次代												■	
	2号屋敷	2溝 2区6溝同一				■	■	■	■	■	■	■	■		
	西側	6溝 11溝 81溝 6溝より後出					■	■	■	■	■	■	■		
															■
2区	1号屋敷	3井戸 北端 4井戸 西側 2溝 南辺 3溝 東辺 6溝 西側				■	■	■	■	■	■	■	■		
	2号屋敷(3区1号屋敷の一部か)	6井戸 東外 46土 北端 10溝 12溝				■	■	■	■	■	■	■	■		
	周辺西側	8溝 13溝						■	■	■	■	■	■		
	周辺東端	14溝				■	■	■	■	■	■	■	■		
3区	1号屋敷	5井戸 418ピット 28溝内 18溝 西辺 22溝 北辺 28溝 東辺					■	■	■	■	■	■	■		
	2号屋敷	19溝 南辺 23溝 西辺か						■	■	■	■	■	■		
	1・2号敷間	12溝						■	■	■	■	■	■		

が認定された。主軸方位に着目すると、第94表のとおり建物は2区で6類に分類され、うち1号屋敷には1～5類が分布する。建物の状況は第339図、第201表のとおりに整理される。

棟別では、東西棟・南北棟・正方形が同数の構成となるが、規模で判明するとおり、梁・桁2間の建物が13棟と7割近いことから、非常に零細な建物群と判明する。このうち、主屋級の建物は30㎡を超えるものとみれば、1類では2区最大の6号掘立柱建物と、2類では2号掘立柱建物、4類では15号掘立柱建物と、いずれも南北棟である。また、3類の主要建物は、面積が20㎡前後の14・20号掘立柱建物であり、同程度のものは1類の1号掘立柱建物、4類の11号掘立柱建物があり、いずれも東西棟である。重複関係を考慮すれば、これらの東西棟も小規模ながら、主屋級とみなすことができよう。なお、5類は1棟と少なく、主軸方位も僅差であり、4類に含めて考えても良いだろう。

建物は小規模なため、桁行平均柱間が判明しない例が多いが、判明する7例中で3類を除いた5例は、すべて約7尺である。3類については、約5.5尺と約6.7尺が各1例ずつあり、特異な数値と考えれば、こうした偶発的な数値が生じる原因として、廃材の再利用による建て替

えなどを考えることもできよう。

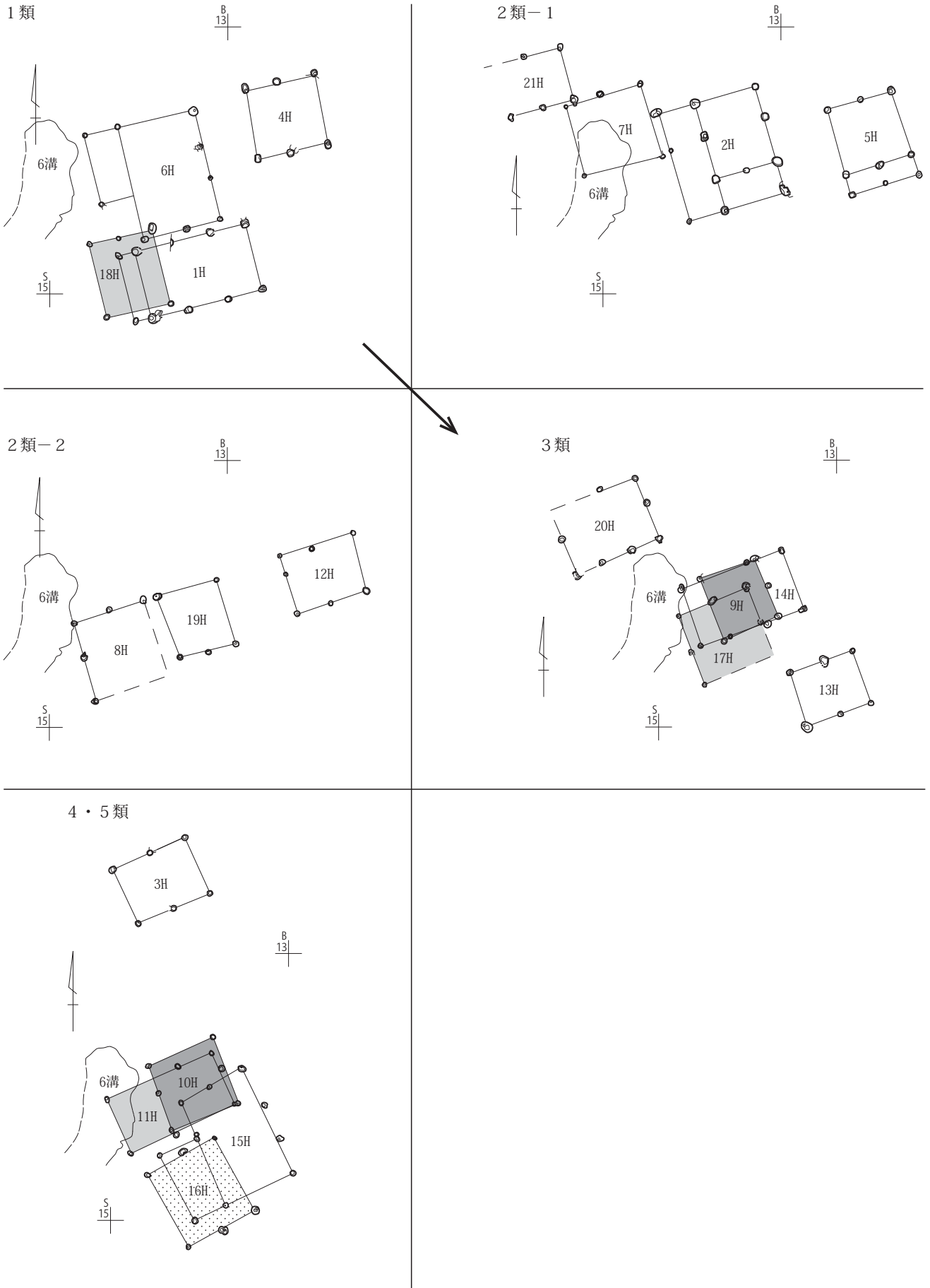
建物群の変遷を考える場合、相互の新旧関係が重要な鍵となるが、1号屋敷では1類1号掘立柱建物が3類13号掘立柱建物より前出であるのと、4類内で10号掘立柱建物より11号掘立柱建物が前出する2例しか判明していない。各分類における建物構成を比較しても、分布によって系統づけられるものもみられない。なお、ピットに柱痕がみられる例は、すべての分類に含まれ、埋め戻しが認められるのは、1類と3類であるが、直ちに古段階とするには証左に欠ける。

ここで重要な観察点となるのが、6号溝との位置関係となる。この溝は出土遺物の分析から、1号屋敷よりも1区2号屋敷の出現に関わる可能性が高いためである。実際に建物との位置関係をみても、主軸方位は食い違い、2～4類は重複している。5類は除外して、1類だけはやや整合性があるように思える。ただし、1類は3類の前段階にあるため、6号溝との併存は難しい。3類が6号溝と不整合であるためである。以上から考えて、6号溝と1号屋敷内の建物には整合性がなく、この点からも6号溝は1号屋敷を壊す形で、新規に区画を形成した可能性が高くなる。

第201表 2区建物総括表

棟別	1号屋敷							周辺		
	1類	2類	3類	4類	5類	計	比率	1類	6類	計
東西棟	1	1	3	2		7	33.3%		1	1
南北棟	2	3		1	1	7	33.3%	1		1
正方形	1	3	2	1		7	33.3%			0
計	4	7	5	4	1	21		1	1	2
規模	1類	2類	3類	4類	5類	計	比率	1類	6類	計
2×1間	2	2			1	5	26.3%	1		1
1×2間		2	2	1		5	26.3%		1	1
2×2間		1	1	1		3	15.8%			
1×3間	1	1	1	2		5	26.3%			
2×3間	1					1	5.3%			
計	4	6	4	4	1	19		1	1	2
面積㎡	1類	2類	3類	4類	5類	計	比率	1類	6類	計
～10								1	1	
～20	2	5	3	2		12	46.2%			
～30	1		1	1		3	11.5%			
～40	1	1		1		3	11.5%			
計	4	6	4	4	0	18		1	1	2
桁行平均柱間(尺)	1類	2類	3類	4類	5類	計	比率			
5.6～5.7			1			1	14.3%			
～6.2						0	0.0%			
－～6.7			1			1	14.3%			
6.9～7.2	2	1		2		5	71.4%			
計	2	1	2	2	0	7				

第4章 発掘調査の記録



第339図 2区1号屋敷内建物分類別分布図

2区屋敷周辺の建物

1号屋敷と2号屋敷の間、つまり2号溝と10号溝に挟まれた空間には、22・23号掘立柱建物がある。ともに10㎡以下であり、非常に小さな建物である。ところで、それらと並走する8・13号溝は、出土遺物から1・2号屋敷よりも1段階新しく考えることができる。特に6類の22号掘立柱建物は、主軸方位の一致や2号溝との重複関係から、8号溝との併存が想定される。つまり、1区2号屋敷や3区2号屋敷と併存して、点在する零細な建物とみることができる。

3区1号屋敷

一辺10m程度の領域に、4～13号掘立柱建物までの10棟が全て重複して分布する。主軸方位から、第150表のとおり3区で5類に分類され、うち1号屋敷には1、3～5類の4種類が分布する、建物の状況は第202表のとおりに整理される。

棟別では、正方形が半数を占め、残りを東西棟・南北棟が二分する構成となるが、規模で判明するとおり、梁・桁2間の建物が9棟と9割を占め、東西棟である12号掘立柱建物1棟を除いてほぼ方形で、非常に零細な建物群と判明する。面積においても、1棟が20㎡をわずかに超えるほかは、すべてそれ以下である。桁行平均柱間も1例のみが判明し、約6.1尺を測る。

建物群の変遷については、10棟すべてが重複するにもかかわらず、直接の新旧関係が判明する例は、6号掘立柱建物が7号掘立柱建物より後出となる1例に過ぎず、これも4類同士である。このため、建物の形態や溝との位置関係などを考慮した検討が必要となる。

まず、区画溝となる22・26号溝との関係でみると、屋敷内で最も大きい5類の4号掘立柱建物が、相互の間隔も含めて非常に収まりがよい。また、やや東に偏在するが、4類の5～7号掘立柱建物3棟にも整合性が認められる。ところが、4類では残る9・11号掘立柱建物のうち、前者は東にずれて26号溝と重複し、後者は北へずれて22号溝と重複することから、同じ分類内で区画溝との整合性が崩れている。そして、3類ではすべてが区画溝と整合せず、12号掘立柱建物は西側へ大きく外れている。これらを変遷としてとらえた場合、整合から不整合へ向かう方向と、無区画から区画化の方向という正反対の指向性が想定できる。これを選択する根拠が建物同士の新

旧関係となろうが、それが望めない以上、状況から推測するしかないこととなる。

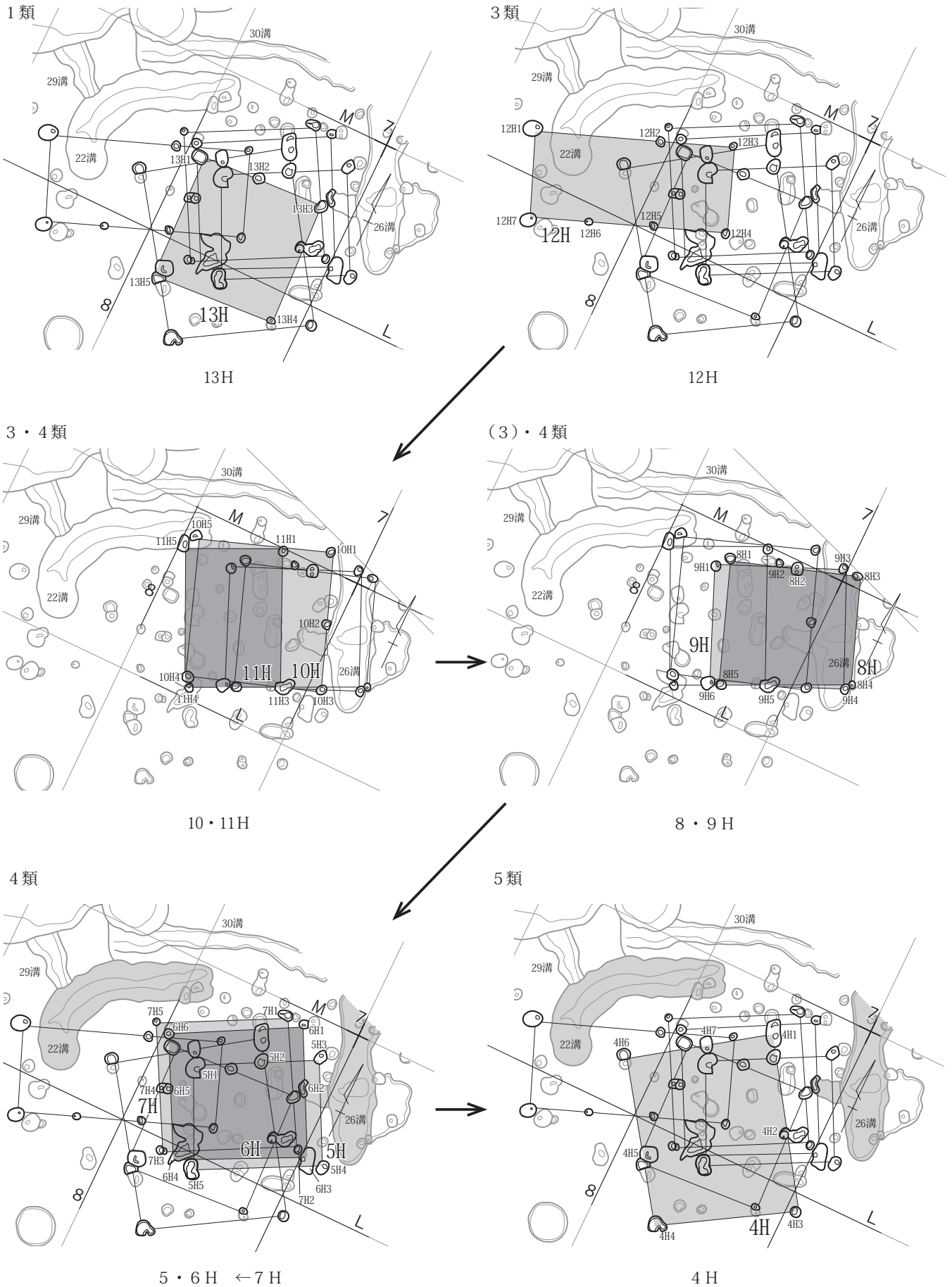
1号屋敷の場合、建物群が北部に偏在しており、南側には土坑群や柱穴列群がやや集中している。実際、どこまでを屋敷範囲とするかも難しいが、土坑群と建物群を関連づけることは可能であろう。この土坑群の主軸方位をみると、ほぼ建物の3類と一致することがわかる(第267図参照)。また、土坑群の西側を区画する18号溝は、出土量は少ないが遺物から14世紀前半から同中頃に比定されており、15世紀前半に比定される22号溝よりも先行する可能性が高い。したがって、3類建物+土坑群+18号溝から4類建物+22号溝へと変遷することが推測できる。

以上を整理したものが、第340図である。当初は12号掘立柱建物が土坑群や18号溝と併存して、次いで建物規模が小さくなり東へ移動して、8・10号掘立柱建物の段階となる。ただし、形態的には10号掘立柱建物と11号掘

第202表 3区建物総括表

棟別	1号屋敷				計	比率
	1類	3類	4類	5類		
東西棟		1	2		3	30.0%
南北棟			1	1	2	20.0%
正方形	1	2	2		5	50.0%
計	1	3	5	1	10	
規模	1類	3類	4類	5類	計	比率
1×2間	1	1	5		7	70.0%
2×2間		1		1	2	20.0%
1×3間		1			1	10.0%
計	1	3	5	1	10	
面積㎡	1類	3類	4類	5類	計	比率
～20	1	3	5		9	90.0%
～30				1	1	10.0%
計	1	3	5	1	10	
桁行平均柱間(尺)	1類	3類	4類	5類	計	
～6.2		1			1	
棟別	2号屋敷				周辺	
	2類	4類	計	比率	1類	比率
東西棟				0.0%		0.0%
南北棟	2		2	66.7%	2	100.0%
正方形		1	1	33.3%		0.0%
計	2	1	3		2	
規模	2類	4類	計	比率	1類	比率
1×1間		1	1	25.0%		0.0%
2×1間		1	1	25.0%	1	25.0%
1×2間	1		1	25.0%	1	25.0%
1×3間	1		1	25.0%	2	50.0%
計	2	2	4		4	
面積㎡	2類	4類	計	比率	1類	比率
～10		1	1	25.0%	1	50.0%
～20	2	1	3	75.0%	1	50.0%
計	2	2	4		2	
桁行平均柱間(尺)	2類					
～6.2	1					

第4章 発掘調査の記録



第340図 3区1号屋敷建物変遷案

立柱建物の方が連続すると考えられるため、8号掘立柱建物はその次代とした方が良いでしょう。おそらく、8号掘立柱建物は平面形が台形であるため、むしろ南辺が一致する4類に含まれると考えられる。このため、次に建物は8・9号掘立柱建物へと続くこととなる。

ここで重要となるのが、10号掘立柱建物から11号掘立柱建物への切り替わりであり、3類から4類への移行と位置づけられよう。これに伴って、土坑群との併存がなくなることもとなり、屋敷全体としてのつながりがなくなるとも言える。つまり、屋敷の空間利用が建物周辺の一辺約10m四方へと切り替わった段階ともとらえることができよう。1類の13号掘立柱建物については溝との関係もなく、位置づけが難しいが、屋敷南側の2・3・7号柱穴列と方位が一致するため、屋敷として広く空間利用されていたことがわかる。4類より前代とすれば、とりあえず3類以前に位置づけることが可能であろう。ただし、これらの柱穴列は柵と考えられるが、2・3・7号柱穴列は5類と同一としても、4・5・9号柱穴列はほかの建物群と一致せず、かえって58号土坑と一致し、8号柱穴列は28号溝と走向が一致することとなる(第283・285図参照)。この溝は下限年代が15世紀中頃と、1号屋敷内では最も後代となるため、こうした柱穴列も後代に位置づけられる。つまり、柵に囲まれた南側の土地利用は、建物群とは別に展開していたこととなる。

4類段階では次に位置を西にずらして、5～7号掘立柱建物が造られる。しかも、位置関係や走向方位から区画溝と併存していたことはまちがいなく、5号掘立柱建物については東辺中央に向かって26号溝から溝が延びている。つまり、4類段階で22・26号溝が出現したと考えれば良いだろう。

最後は5類の4号掘立柱建物となるが、区画溝とは併存するものの、若干主軸方位が西に傾き、区画のより中央に配置されている。

### 3区2号屋敷

2号屋敷の建物は4棟であり、1棟は門の可能性が高い。主軸方位による分類では、2類と4類各2棟ずつで、門は4類に属し、それ以外はすべて重複する(第291図参照)。変遷を想定することは、状況から難しい。桁行平均柱間は2類の2号掘立柱建物で判明し、約6尺で1号屋敷の12号掘立柱建物と一致する。

## 総括

建物が検出された屋敷が、2区1号屋敷と3区1・2号屋敷に限られ、屋敷として最も規模の大きい1区1号屋敷が含まれていないのは、非常に残念であり、屋敷全体の地域的な傾向をとらえる機会を失っている。次いで大きな2区1号屋敷は、一辺約34.5mとほぼ1/3町規模の屋敷であり、中世屋敷としては一般的ながら小規模である。更に、ここで検討した3区1・2号屋敷は区画溝はあるものの、建物敷地としては一辺10m規模であり、非常に零細な屋敷地と位置づけられる。

内部の建物をみると、2区1号屋敷では30㎡を超える建物が主屋となり、その周辺に1・2棟の附属建物が配置される分棟型の構造となっている。対して、3区1・2号屋敷は、すべてが重複し合うとおり、1棟のみで構成され、面積では20㎡を超えるものはほとんどない。

桁行平均柱間では、やや傾向が分かれる。2区1号屋敷では特異な例を除けば、ほぼ約7尺が採用されている。一方、3区1・2号屋敷では、事例は各1棟ずつに過ぎないが、ともに約6尺が採用されている。これは偶然ではなく、隣接する綿貫牛道遺跡1区1号屋敷でも、約5.8～6.3尺が使用されていた状況と一致している。規模も約1/3町規模と同じで、時期は半世紀程度遡るがほぼ一致している。こうした状況で、なぜ桁行平均柱間が7尺と6尺に選別されているのか、不明ではあるが、今後整理作業を進めていく隣接地である綿貫伊勢遺跡や、井野川対岸の下滝高井前遺跡での検討課題となろう。

### (3)屋敷の形態と構造

当遺跡で検出された屋敷は6か所であり、すべて区画溝を伴っている。ただし、規模や状況は異なっている。これまでに得られた溝の年代観や、内部建物の変遷を手がかりに、屋敷の形態や構造について検討する。

1区1号屋敷は最大で、東西規模で35m以上であり、南辺の橋脚を中心と考えれば、一辺50mを超えるものと推測される。溝の規模も大きく、1区25号溝の深さは1mを超えている。西辺も土橋を挟んで63号溝で区画しており、完全な閉鎖空間を造り出している。形態的にはいわゆる方形館となるが、他の屋敷ではこうした形態を採っていない。この点は後述する。また、1区1号屋敷の場合、内部に大規模な区画溝として91号溝が後発的に



造られ、複郭構造へと改修された可能性が高い。その他注目されるのが出入り口であり、南辺に2時期に分かれる木橋を設け、西辺には25号溝と63号溝を食い違いにして土橋を設けている。西から入った場合、正面に91号溝が現れるため、更に北へ折れて内部に入らなければならない。同じく、南辺の木橋は正面出入り口と推定されるが、すぐに91号溝に進行を阻まれるため、西へ折れて91号溝の西から内部へ入るものと想定される。つまり、構造としては遮断系に優れた造りであり、城郭に近い一面を持っている。

区画溝に関して、他の屋敷では様相が異なる。2区1号屋敷の場合、西辺はおそらく西側市道部分であろうが、他の区画溝は断面皿状で浅く、東辺の3号溝は途中で立ち上がってしまう。その南側は柵列を思わせるピット群が分布するが、溝による圍繞は終わってしまう。北辺は3号井戸を境界とするが、東側に出入り口を設け、反対側は小規模な4号溝となっている。北辺は境界としての認識は示すが、強く遮断するような区画溝とはなっていない。2区1号屋敷の場合、区画意識はあるものの、遮断する意識は弱いと考えなければならない。

出土遺物の分析から2区1号屋敷の次代に位置づけられる1区2号屋敷の場合、1区2号溝と2区6号溝がコの字形に南端を囲むが、東辺・西辺とも角部分からわずかに北側を囲むに過ぎない。両溝も浅い皿状である。北辺は不明で、1区1号屋敷の南辺25号溝と結びつけるのは難しいと考える。1区2号屋敷の場合、区画意識が弱く、ピットの分布範囲も限定されるため、2区1号屋敷よりも小規模で、形態的には3区2号屋敷に類似して、1棟程度の建物敷地を超えないものとする。

2区2号屋敷は、区画溝周辺に井戸2基と土坑1基が分布し、内部は無遺構空間である。このため、西側に主要部を想定して、3区1号屋敷と同一の可能性を考えた。しかし、平面形が東側に張り出していることは事実であり、これが無遺構空間であることは看過できない。溝の深さも50cmを超え、2区では深いことも特異である。

3区1号屋敷はやや複雑で、屋敷空間を大枠でとらえると、西辺は18号溝で東辺を27号溝付近と考えれば、溝外で東西約32mとなる。ところが、建物敷地は北部に偏在しており、その範囲は22号溝を西辺に26号溝を東辺とする一辺10m規模のようにみえる。しかも、中央部には

ピット群が集中し、2～9号柱穴列が区画施設として認識される状況である。ただし、建物の変遷から考えると、北辺の区画溝の出現は後発となるため、屋敷空間としては大枠東西約32m規模でよいと考える。当初の形態としては、北部に12号掘立柱建物があり、南側は隅丸長方形・同細長方形の土坑が主に分布し、西辺を18号溝、東辺を柵列が囲んで、更に東側は散漫な遺構空間が広がっていたこととだろう。次いで、西側部分の空間利用が変化し、北部の建物と南部の関連性が失われたと考えられ、南部は柵列による区画を継続しながら、土坑を設けない遺構の散漫な空間へと変化する。また、北部では建物を囲む区画溝が出現するが、18号溝との間隔は広く、遮断意識は弱い。その上、18号溝自体途中で廃絶した可能性がある。1棟のみで10時期に変遷することから、零細とはいえ固定的な土地利用形態とみることができる。

3区2号屋敷は、同1号屋敷の北側に隣接して後発する屋敷であり、各1棟で3時期と短い。上限年代は14世紀後半では長すぎ、15世紀中頃から後半に機能していた可能性が高い。内部は1棟の敷地となるが、区画遺構はやや複雑である。南辺は外側に3区12号溝、内側に同7・19号溝が並走しており、両溝間に土橋による出入り口を設けている。しかも、この出入り口は直接3区2号屋敷に関係せず、東側隣接区画へ向かい2区の屋敷周辺と結んでいる。また、西辺の3区23号溝も区画としては西側をL字形に囲んでおり、単純に3区2号屋敷の西側を区画していない。つまり、この屋敷は単独の屋敷遺構ではなく、東西方向に複数の屋敷空間が存在し、その一部として機能していたと考えられる。もちろん、周辺部で建物として復元できたのは、2区22・23号掘立柱建物のみであり、3区2号屋敷と比較して、更に零細な状況である。ところで、この屋敷で更に注目されるのは、門とみられる16号掘立柱建物と1号柱穴列を中心とするピット群の存在である。3区2号屋敷の南面であるため、直接の出入り口であろうが、零細な建物とのバランスに欠けている。これも間接的に周辺の空間も含めた出入り施設となっていたと考えられる。溝も浅いがやや密に設けられており、遮断する意識が高い。時期的に1区2号屋敷との併存も想定でき、南北に屋敷群が互い違いに並ぶ景観も復元できよう。

#### (4) 屋敷遺構と地割

当遺跡で検出された屋敷と地割の関係を確認してみよう。第341図は昭和期の航空写真をトレースした復元図である。全体として、非常に良く反映されている。

1区1号屋敷では、南辺を区画する25号溝がそのまま東西方向の地割となり、西辺も63号溝が南北の地割に一致する。地割から屋敷規模を想定すれば、一辺100mを超えることも考えられる。内堀となる91号溝が地割に一致する点も注目される。

次いで、1区2号屋敷と2区1号屋敷では、地割との一致が不明確である。しかも、別に方形の地割が認められる。強いて評価すれば、2区1号屋敷の北辺7・4号溝及び、南辺2号溝が方形の地割の南北に一致している。これを手がかりとすれば、2区1号屋敷の範囲は、東側にもう少し広がっていたと考えることもできよう。

一方、3区の屋敷群は非常に良く一致している。特に同1号屋敷では、西辺18号溝が地割に一致し、北辺2区10号溝や並走する同13号溝、東辺同12号溝も一致し、南辺もおおよそ地割から復元可能となる。

3区2号屋敷も良く一致する。南辺7号溝、西辺23号溝が地割に一致する。また、北辺は近世に属する25号溝と一致するが、ここで重要な点は、2号屋敷周辺の地割が細分化されている点であろう。2区の屋敷周辺や1区2号屋敷南側などを含めて、周辺が細分化された屋敷地であった可能性を推測させる。

## 2 その他の遺構

### (1) 墓域

人骨を伴う明らかな土坑墓はみられないが、銭を伴う楕円形の土坑が、1区北西部にやや集中している。また、3号火葬跡や焼人骨を伴う1号土坑、また焼けた石が並ぶ2号集石遺構など、火葬を想定させる遺構も分布する。ただし、近接する2号火葬跡は近世に属しており、3号火葬跡などが近世に含まれる可能性も残っている。したがって、楕円形の土坑が区画溝である1区6号溝の西側にある点を積極的に評価すれば、中世段階でこの溝を境界として墓域が広がり、その後徐々にこの溝を超えて東へ広がり、1区1号屋敷周辺が近世墓群へと移行する方向性をとらえることができる。興味深いのは、そうした墓域の移動と並行して、1区北西部から北部中央部が、

近世の居住域へと変化することである。こうした土地利用形態の切り替わりが、いかなる要因で生じるものか、理解を超えている。しかし、あえて想像するならば、1区1号屋敷を経営していた小領主層が消え、江戸時代に百姓層が再開するにあたり、区画屋敷は前代的な小領主を象徴する施設と認識され忌避されたのではないだろうか。そこで、墓地として免租地となった可能性もあろう。あるいは、すでに後続的な宗教施設や墓域が存在する状況で、百姓層の入植が行われたとも考えられる。

### (2) 鍛冶関連遺構

中世に位置づけられる明確な鍛冶遺構はないが、その存在を思わせる幾つかの状況がある。2区3号井戸の埋没土からは、6点の椀形鉄滓が出土している。出土状況は不明だが、おそらく埋没過程で投棄されたものと思われる。周辺に関連施設の存在も想定される。その一つが、この井戸の南西約45mにある165号土坑であり、3号竪穴状遺構と重複して、羽口の一部が出土している。更にその南東約25mの3区西部では、古代の可能性もあるが、82号土坑から鍛造剥片や湯玉が少量出土し、直接的な鍛冶作業が想定できる。しかも、この土坑は3区1号掘立柱建物の内部に位置しており、その内部施設であることが濃厚である。以上、やや分散するが、中世屋敷周辺で鍛冶が行われ、それは周辺に点在する竪穴状遺構などを作業施設としていたことが想定されよう。

## 3 出土遺物

### (1) 在地系土器

変遷は第342図のとおりまとめられ、以下特徴を概観する。年次比定や遺物の観察は、大西雅広による観察に準拠している。

Ⅲ 1区11号溝1はほぼ完形で、口径7.8cmと小型品で、底径4.4cmと口径の1/2よりやや大きい。底部・体部とも器壁は厚く、内面における底面と体部の境は明瞭である。体部外面はわずかに内湾する。14世紀後半から15世紀前半に比定される(木津1986、以下同じ)。また、1区22号溝1も同じく小型品で、器壁は厚く、体部から口縁部は直線的に延びる例である。なお、この段階の中型品は出土していない。

次に3区28号溝1は同じく小型品で、底径がやや大きくなる。器壁は厚く、体部下位はわずかに外反し、口縁





端部は上方へつまみ上げる。15世紀前半に比定される。2区46号土坑3も小型品で、器壁は厚く、外面は下半で外湾し、上半は内湾して、口縁端部は上方へつまみ上げ、わずかに内湾する。Ⅱ期(星野1996、以下同じ)の鍋と共伴する。

次に1区11号溝2は小型品で、器壁が薄くなり、体部から口縁部は直線的に開く。15世紀前半ながら、3区28号溝出土例より新段階となる。1区2号火葬跡1は中型品である。体部下位は外反し、口縁端部付近は内湾気味となる。内面の底部と体部境はドーナツ状に浅く凹む。

次に1区23号溝1は中型品で、体部は下位で外反する。内面の底部と体部境は明瞭である。15世紀中頃に比定される。

次に1区230号ピットでは小型・中型品の皿各1点が

共伴する。底径は大きくなり、口径の2/3以上となり、器高は低くなる。1・小型品の口縁部は外反する。2・中型品は歪みが大きい、直線的に開く。15世紀中頃から後半に比定される。1区91号溝1は中型品で、体部から口縁部は直線的に開く。内面の底部と体部境は回転横撫によりドーナツ状に凹む。

次に1区6号溝1は中型品で、破片資料である。体部は外反し、口縁部内面はわずかに内湾する。15世紀後半から16世紀前半に比定される。

最後に参考として、近世の皿を示す。1区7号墓23は小型品の皿である。体部外面はロクロ目が目立たず、内外面とも滑らかである。口縁端部は丸みを持つ。なお、24の肥前磁器白磁皿と共伴しており、17世紀末から18世紀中頃に比定される。

**鉢** 2区3号井戸5は口縁部下の器壁が厚い。口縁部は内湾し、玉縁状をなす。口縁部外面下位は横撫による刷毛状痕が残る。14世紀前半頃(Ⅰ期)に比定される(星野1996、以下同じ)。2区3号井戸4の体部は内湾する。口縁部は薄い玉縁状で、端部は尖る。口縁部外面下位は凹線状に浅く凹む。

次に1区81号溝1は還元炎焼成。口縁部は内湾気味で、端部は丸みを持って尖り気味である。14世紀前半から中頃(Ⅰ～Ⅱ期)に比定される。1区6号溝2の場合、口縁部の特徴は同じで、口縁部は横撫で、撫でとの境は浅い凹線状をなす。

次いで2区4号井戸3は還元炎気味で、口縁端部は内

第203表 古瀬戸・中国陶磁器屋敷別出土数量

綿貫原北	古瀬戸	中国陶磁器				
		青磁碗類			白磁皿類	青白磁梅瓶
		I-5-b	I	Ⅲ	D	
1区	1号屋敷				1	
	2号屋敷	3				
	その他	10	5	1	1	1
	計	13	5	1	1	2
2区	1号屋敷				1	
	2号屋敷					
	その他	1	1			
	計	1	1		1	
3区	1号屋敷	1				1
	2号屋敷					
	その他	1				
	計	2				1
合計	16	6	1	1	3	1

第204表 古瀬戸陶器器種構成表

調査区	時期	中期	古瀬戸後期					小計	合計
			I	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ古	Ⅳ新		
1区	天目碗				*1			1	1
	皿類	1				*1		2	2
	盤類		1			2		3	5
				1		1		1	
	卸皿						*1	1	1
	壺・瓶類	2	1			1		4	4
*2溝	合計	3	2	1	2	0	8	11	
			1		2		2		
2区	天目碗				1		1	1	
3区	皿類		1		1		2	3	
	卸皿		1				1		

側に折り返すように突き出す。口縁端部上面の外表面は段を持つ。14世紀後半から15世紀前半頃(Ⅲ～Ⅳ期)に比定される。

次に3区23号溝5の場合、底部の器壁はやや薄く、口縁部の器壁はやや厚い。口縁端部上面の外表面寄りはずかには凹む。口縁端部内面は小さく突き出る。15世紀前半頃(Ⅳ期)に比定される。

次いで1区2号竪穴状遺構1の場合、器壁は薄く、外面器表が黒色である。体部は直線的に開き、口縁端部付近は内側に屈曲するように突き出る。おそらくⅣ期より新しい段階とみられる。1区3号竪穴状遺構内69号ピット1も類似し、スリ目はない。器壁は薄く、体部は外反する。口縁端部は同じ。

次に3区23号溝6は還元炎焼成で、器厚は体部下位が厚く、口縁部に向かい薄くなる。口縁端部内面は突き出る。体部内面に5本一単位の直線のスリ目を持つ。15世紀後半頃(Ⅴ期)に比定される。

**鍋** 2区10号溝1は還元炎焼成で器壁は厚い。口縁部は短く外反し、端部は内側に突き出す。端部外面は丸い。口縁屈曲部内面の稜は明瞭である。内耳は器壁に孔を開けて接合する。14世紀後半頃(Ⅰ期)に比定される(星野1996、以下同じ)。2区13号溝1は外面器表が黒色である。口縁部は短く外反はやや弱い。口縁端部付近は内湾し、端部は尖る。内面口縁下の稜は明瞭である。

次に3区418号ピット6の場合、器壁は厚いが、口縁部は長くなる。口縁部下内面はやや緩い稜をなして外反する。口縁端部内面は明瞭な稜をなして突き出る。14世紀末から15世紀前半頃(Ⅱ期)に比定される。3区19号溝3は丸底で、口縁部は緩く外反して内湾しながら延びる。口縁端部上面は平坦で内面は明瞭に稜をなし、外面は丸みを持つ。内面口縁下の段差は不明瞭で丸みを持つ。2区13号溝2は口径23cmと小型品で還元炎焼成。器壁はやや厚いが、口縁部はやや薄くなる。口縁部の外反は緩く、内面口縁下の段差は鈍く稜をなさない。

次に3区19号溝1の場合、器壁はやや薄く、外面器表が黒色である。内面口縁部下の段差はやや明瞭で、口縁の屈曲は弱い。口縁端部上面は平坦でわずかに凹む。口縁端部内外面は低く突き出る。15世紀中頃から後半(Ⅲ～Ⅳ期)に比定される。

次に1区91号溝10は還元炎焼成で、器壁は薄い。口縁

部下で屈曲し、口縁部は直線的に延びる。口縁部上面は平坦で、内面はわずかに突き出る。内面口縁部下の段差は低く、緩い稜をなす。15世紀後半頃から16世紀前半(Ⅳ～Ⅴ期)に比定される。1区91号溝12は、外面器表が黒色で平底。口縁部下で屈曲して外反し、口縁端部は内傾する。

次に1区63号溝5は、口縁端部が肥厚し、端部上面は平坦。内部口縁部下の屈曲は大きな段をなして、緩い稜をなす。91号溝10よりも一段階新しい。1区63号溝6は小型品で、平底。以下、特徴は同じである。

**その他** 同一個体とみられるが、25号溝西辺北端で火鉢が5点集中して出土する。外面に2段の凹線を廻らし、上段に菊花状押印文、下段に三角形状押印文と円錐状貼付文を施す。脚部は外面に突起を貼り付けている。

#### (2) 搬入品

第203・204表に示したとおり、古瀬戸陶器が1区でやや多く出土している。年代は中期から後Ⅳ新段階(14世紀初頭から15世紀後半)まで連続する。遺構外出土遺物が多く、遺跡としての傾向を示すに止まるが、1区2号溝で後Ⅲ期の天目茶碗、後Ⅳ古・新期の皿類各1点、また2区6号溝で後Ⅳ古期の天目茶碗が出土することから、1区2号屋敷の溝で比較的多く出土していることが判明する。また、1区西半部で中期の梅瓶2点ほか、古瀬戸でも比較的古代のものがある。周辺に墓域が想定されることも、関係する可能性があろう。

その他の国産陶器では、1区1号屋敷に関係して、4号井戸から常滑陶器鉢(13世紀後半)、25号溝から同甕(13世紀第3四半期)が出土する。ただし、1号屋敷の出現は在地系土器の状況から14世紀後半より遡らないため、周辺からの混入と見なされる。

中国陶磁器も1区での出土量が多く、やはり屋敷内より周辺に多い傾向にある。器種では青磁蓮弁文碗が多く、生活遺物である。

国産陶器・中国陶磁器ともに1区での出土量が多く、直接ではないが、屋敷に関係する可能性が高い。このため、規模から考えても、1区1号屋敷との関係が考えられよう。

#### (3) 石製品・石造物

茶臼が屋敷周辺で少量出土している。1区1号屋敷では内部の8号井戸、区画する25号溝内の212号土坑で出

土する。2区1号屋敷では17号掘立柱建物P6から茶下白が出土する。また、1区25号溝では粉挽き白、8号井戸から石鉢が出土している。

石造物では、石塔・墓石類が多く、板碑は屋敷周辺に多い。1区1号屋敷の8号井戸では、「延文4年」(1359)の紀年銘を持つ阿弥陀三尊板碑が出土する。1号屋敷の出現年代に一致しており、居住者との関係を想像させる資料である。上下を欠くが種子部分はほぼ残っており、井戸の埋め戻しに関わる儀礼的な側面もうかがわせる。

1区2号屋敷を囲む2号溝でも、阿弥陀三尊板碑が出土する。紀年銘はないが、種子掘り方などから後代となる。

五輪塔、宝篋印塔は1区北西部で少量出土する。11・22号溝では部分的に礫が多く集中する部分に含まれる。近世に礫を投棄した1号集石遺構もあり、関連も考えられる。しかし、火葬跡や銭を伴う楕円形の土坑も集中しており、墓標に関係する可能性もある。11号溝6・宝塔塔身では、墨により種子を円形に塗り囲む状況が観察できる。

## 第5項 近世

近世の遺構は1区で多く調査されており、居住域や生産域・墓域に分かれる。2・3区でも溝・土坑が若干あるが散漫である。ここでは1区を中心に成果をまとめる。

### 1 居住域と生産域

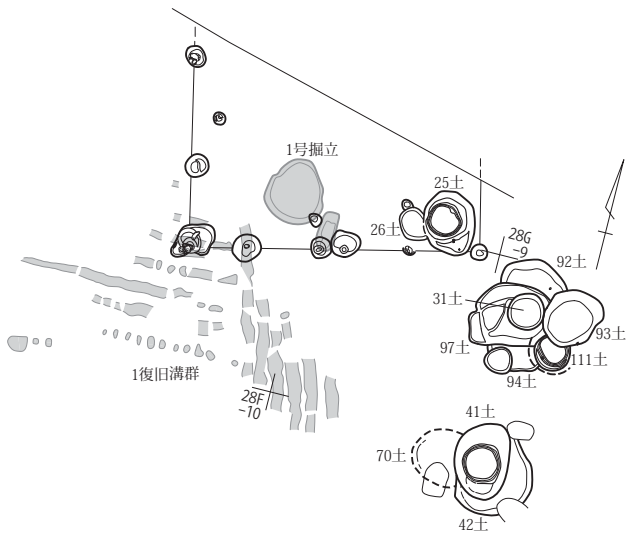
1区で居住域と考えられるのは、3区画にわたる。以下、1～3号居住域と仮称してまとめる(第343・344図)。1号居住域は、1号溝の西側で、58号溝の北側となる調査区北西部とする。2号居住域は、43号溝の西側で、48号溝の南側に位置する調査区南西部とする。3号居住域は、51号溝の南側で、43号溝の東側に位置する調査区南東部とする。

**1号居住域** 1号掘立柱建物が存在するが、これは天明3年以降であり、遺構はむしろその前段階から存在する。遺構の中心は桶を埋設した土坑群となるが、17世紀末から確認することができる。また、これらと重複して1号復旧溝群などがあり、居住域とあわせて畑地が存在したことを示している。なお、1号溝は浅間A軽石の灰掻き溝として転用されており特筆される。

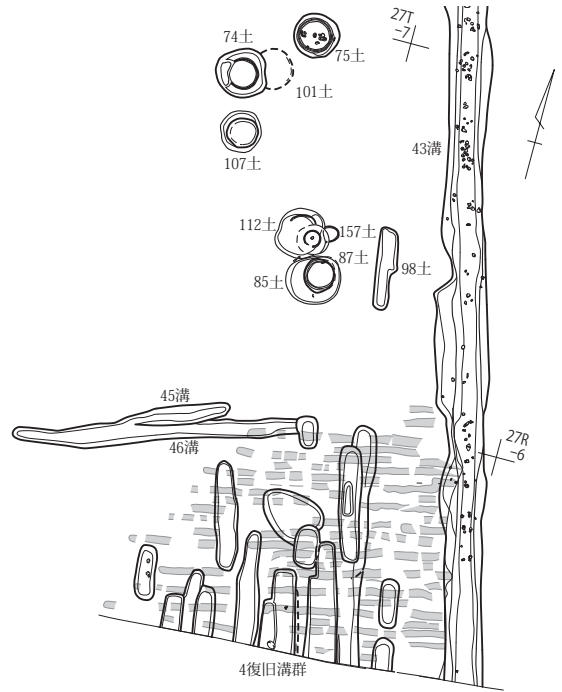
**2号居住域** 明確な建築遺構はないが、1号礎石列にそ

の可能性がある。遺構の主体はやはり桶を埋設した土坑であり、17世紀後半から確認することができる。ここでは井戸も2基確認できる。また、南端では4号復旧溝群があり、畑作地が分布するが、復旧以前は細長い土坑群が繰り返し作られていた。43号溝は屋敷などの区画溝となっていたとみられ、多量の陶磁器が投棄されている。**3号居住域** ピットも多く建物も存在したとみられるが、掘立柱建物は認定できていない。埋没土に浅間A軽石を含んでおり、19世紀以降と考える。遺構の主体はやはり桶を埋設した土坑群で、17世紀前半から確認できる。また、東側には5号復旧溝群が分布する。北方には13号墓など3基の土墳墓が隣接する。東方に少し離れて別の墓域もある。

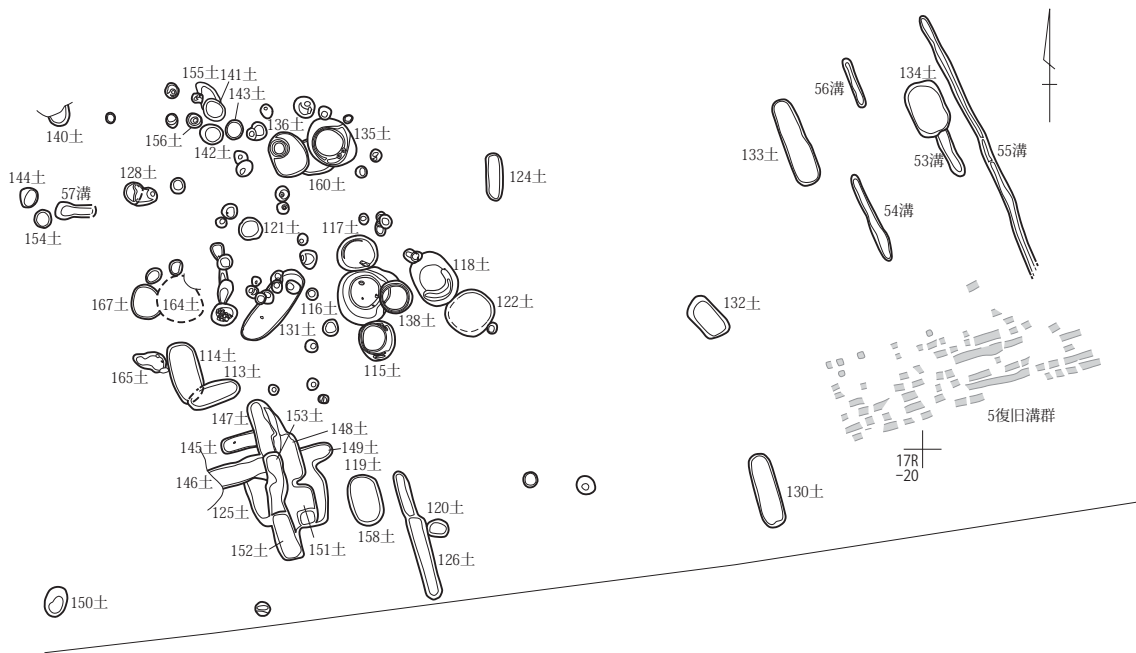
1号居住域



2号居住域



3号居住域



0 1:200 5m

第343図 1区近世居住域詳細図



遺構名	17C前半	17C後半	17C末	18C前半	18C中頃	18C後半	1783	19C前半
1号居住域	94土 ↓ 111土							
	97土							
	93土							
	92土							
	31土							
2号居住域	70土						1800前後	
	41・42土							
	1号復旧溝 1号掘立							
3号居住域	85土							
	112土							
	87土							
	75土						1800前後	
	43溝							
3号居住域	116土							
	115・117・138土							
	5号復旧溝 ピット群							

第344図 近世居住域年代一覧

2 墓

(1)土坑墓

1区のみで検出され、土坑墓13基と土坑6基、あわせて19基である。ただし、12号墓は調査区西北部の11号溝底面で確認されたものであり、時期形態とも不明な点が多く、検討から除外する。したがって、墓域は2か所に分布し、1号溝東側が15基とほとんどを占め、103号溝周辺は3基と少ない。前者は17世紀末から19世紀初めに及ぶ近世墓群であり、5号墓は鍋かぶり葬として特筆される。なお、墓域は調査区東端にも存在したが、移転対象であったため、調査対象外となっている。

第205表に示したとおり、性別が判明したものは、男性7人、女性2人である。年齢が判明したも

第205表 土坑墓一覧

遺構名	形態	棺桶	性別	年齢	年代	特記事項	
1号溝東墓群	1墓	長方形	方形木棺	男性	20歳代	江戸時代	
	2墓	隅丸方形	方形木棺	男性	30歳代	18世紀半ば以降	
	3墓	隅丸方形	方形木棺	男性	20歳代	18世紀後半-19世紀初頭	
	4墓	隅丸方形	方形木棺	女性	40歳代	18世紀半ば以降	
	5墓	隅丸長方形	不明	女性	20-30歳代	18世紀半ば以降	鉄鍋かぶり
	6墓	隅丸方形	方形木棺	不明	不明	18世紀半ば以降	土鈴
	7墓	乱れた方形	不明	-	-	17世紀末から18世紀中頃	人骨無
	8墓	楕円形	円形木棺	男性	20歳代	不詳	
	9墓	隅丸方形か	不明	-	-	17世紀末-18世紀前半	人骨無
	10墓	隅丸長方形	不明	-	-	江戸時代	人骨無
	11墓	隅丸方形	方形木棺	不明	不明	不明	蝸化人骨
	12墓	隅丸方形	不明	不明	不明	不明	
	46土	隅丸方形か	不明	不明	不明	18世紀前半以降	
103号溝周辺墓群	67土	隅丸方形	方形木棺	男性	20歳代	不明	
	68土	やや狭い隅丸台形	方形木棺	男性	40歳代	18世紀半ば以降	
	69土	不詳	不明	-	-	江戸時代	人骨無
	13墓	長方形	不明	男性	30歳代	不明	
	204土	長方形	不明	-	-	17世紀末-18世紀中頃	人骨無
205土	隅丸方形	不明	-	-	17世紀末-19世紀中頃	ガラス玉4点、人骨無	

のは9体で、すべて40歳代以下と概して若い。墓壇の形態は隅丸方形と長方形が主であり、その場合方形木棺が認められる。深さは1m内外であり、すべて座棺と考えられよう。なお、時期は不明ながら円形木棺が一例あり、墓壇形態は楕円形である。

鍋かぶり葬の5号墓は、隅丸長方形で深さも55cmとやや浅い。ほかに隅丸長方形では10号墓、浅い例として69号土坑があるが、ともに人骨は出土していない。規模は小さいが、深さから寝棺であった可能性も考えられる。

(2)火葬跡

火葬跡は1区で3基検出され、うち3号火葬跡は中世として報告した。また、2号火葬跡も出土した在地系土器皿が15世紀前半から中頃であったため、当初中世と考えたが、採取した土壌サンプルに寛永通宝1枚が混ざっており、近世と結論づけた。ただし、1号竪穴状遺構や11号溝と重複しており、不確定要素が多いことも考慮される。これら2・3号火葬跡は、1区北西部に近接して、土壇墓の存在も含めて、同一の墓域に含まれる。

さて、当遺跡で注目されるのは、1号火葬跡の存在である。2枚の美濃陶器反皿と寛永通宝6枚と皇宋通宝1枚が出土し、17世紀後半に比定される。本県で近世とされる火葬跡は希有であり、管見の限り、高崎市の『井出村東遺跡』(群馬町井出村東遺跡調査会1983)以外、例を見ない。そこで、以下比較検討を加えたい。

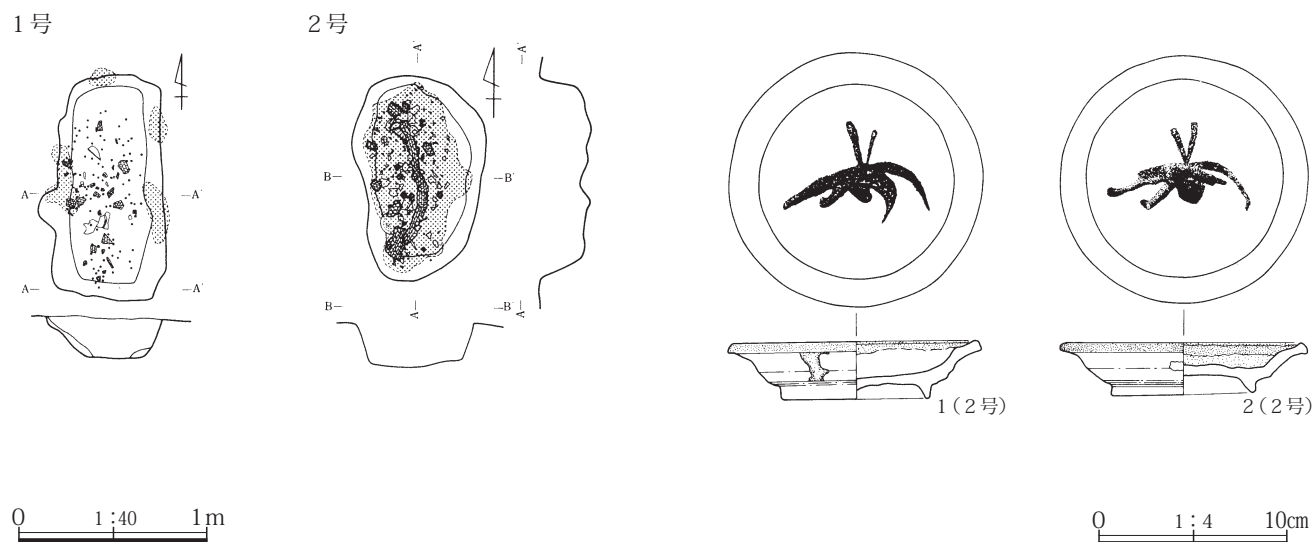
井出村東遺跡は、榛名山南麓に位置し、近世の火葬跡(報告では火葬土坑)2基が調査されている。年代は出土

遺物から、1号火葬土坑が近世中期から後半、2号火葬土坑が近世と報告される。ただし、2号火葬土坑については、掲載されている完形の縁釉鉄絵皿が、登窯2・3小期に比定されるため(大西雅広氏のご教示による)、17世紀中頃と考えられる。

形態をみると、1号火葬土坑(第345図)の規模は、長軸120cm短軸63cm深さ22cmの隅丸長方形でほぼ南北軸をとり、西辺中央付近が若干張り出すT字形となっている。埋没土中層から下層にかけて、炭化物と骨片が集中する。寛永通宝(未掲載)が出土し、壁面の焼土化が観察されている。

2号火葬土坑(第345図)の確認面規模は、長径110cm短径60cm深さ25cmの不整円形で南北軸をとり、底面の規模は長径60cm短径50cmである。埋没土上層から炭化物・骨片がみられるが、中層以下が多く、壁面・底面一面に焼土が付着すると観察される。出土遺物は縁釉鉄絵皿2枚のほか、寛永通宝1枚と、炭化米、炭化した団子と思われる径3cm程の澱粉質の塊がある。これらはともに、火葬されたと推定されている。

さて、当遺跡1区1号火葬跡の規模は、長径82cm短径56cm深さ25cmの楕円形で、南北軸を採るが、西に若干傾いている。炭化物・焼人骨(成人女性)ともに多いが、焼土は全くみられない。このため、通例の火葬跡とは違いがあるが、規模・形態ともに井出村東遺跡2号火葬土坑に似ている。年代は17世紀後半のため、若干新しいが、ほぼ同時期とみなされる。



第345図 井出村東遺跡1・2号火葬土坑と出土遺物(同報告書1983より転載)

問題は出土遺物の位置づけとなるが、井出村東遺跡の場合、炭化米などとともに皿が焼かれたと報告されるが、当遺跡1区1号火葬跡の場合は、火ハゼなどはみられず、同時に火葬されたとは見なしがたい。ただし、古銭には黒味を帯びたものが多く、歪んだものもあるため、ともに焼かれたとみられる。こうした点で、皿の状況と違いが生じている。皿が火葬後に入れられた場合は、副葬されたこととなり、収骨と矛盾が生じるが、火葬跡を祀るという可能性も否定できないだろう。

### 3 出土遺物

近世の陶磁器は、非掲載遺物も含めて多量にあり、年代・産地同定などを総量把握することは、ほぼ不可能に近いが、ここでは掲載遺物をもとに、第206～208表のとおり、判明する範囲を手がかりに検討する。このため、対象は1区出土遺物に限られる。

まず、注目される遺物として、1区1号溝出土の44・瀬戸美濃陶器志野茶碗がある。大窯4段階後半であり、1600年前後に比定される。希少な陶磁器であり、本県では城郭遺跡を除くとほとんど出土しないため、注目される。1号溝出土でもあり、やはり1号屋敷の系譜を引く何らかの居住者が、周辺に存在したことを思わせる。

1区で掲載した年代が判明した近世陶磁器では、瀬戸美濃系が182点と最も多く、次いで肥前系116点と続き、京都・信楽系などその他の陶磁器は25点と少ない。第206表のとおり、瀬戸美濃系陶磁器は、17世紀代はほぼ碗・皿類であり、18世紀に入り、出土量も増え、器種も多様となる。第207表のとおり、遺構別でも1号溝や1号道路で18世紀頃から数量が増えており、周辺居住域の状況と一致している。肥前系陶磁器は17世紀中頃以降少量ながら出現し、17世紀末頃から急増する。あわせて、その他の陶磁器も18世紀から増えており、瀬戸美濃系陶磁器における器種の多様化と一致する。

第4章 発掘調査の記録

第206表 1区瀬戸美濃系掲載陶磁器時期別組成表

遺構名	大窯	連房											小計	合計
		1610	1650	1700	1750	1800	1850							
	4後	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11		
碗・皿		1											73	91
			1				5		3				9	
				3			3		1				7	
							2						2	
灯火具							1		1			2	7	
仏飯器					1			4				5	0	
香炉						6	6	3					15	18
						2		1					3	
鉢					2	1		3	1				7	21
					4			4					8	
							2		1				4	
							1						1	
徳利					2		1	2					5	8
								1					1	
すり鉢			1		3	3	4	1	2	1			2	15
半胴						1	4	1					6	10
						1		2					3	
その他						1							1	14
						1	1	1					3	
							1						1	
						5							5	
合計		1		4	8	8	20	23	32	14	13	2	125	184
			1		4		17		2				24	
							8		17				25	
							4		4				8	
							1			4			1	

第207表 1区遺構別瀬戸美濃系掲載陶磁器出土状況

遺構名	大窯	連房											小計	合計
		1610	1650	1700	1750	1800	1850							
	4後	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11		
土坑							1	3					10	15
			1							3			4	
							1						1	
墓							1	1					2	2
1井								1				1	2	4
								1		1			2	
2井										1			1	1
											1		1	
										2			2	
1溝	1			1		4	5	9	2	4			26	45
		1				9		1					11	
26溝							2		6				8	1
43溝					1		3	2	3	3	1		12	17
							3			1			4	
48溝								1					1	15
							1	2	1				4	
										1			1	
51溝		1				1							2	2
52溝							1						1	3
							2						2	
58溝							1						1	1
59溝							1	3					4	4
1道						2	4	4	7	3	1		21	28
						2		1	2				5	
									1				1	
35溝								1					1	5

第208表 肥前・その他掲載陶磁器遺構別出土数

○はその 他	17C中～末	17C後	17C末～18C 中	18C前	18C中～後	18C後	18C末～19C 前	19C前～中	近現代	肥前 小計	その 他小 計	合計
	17C中～19 中	17C後～18C 中	17C末～19C 初	18C初・前～ 中・後	18C中～19C 前	18C後～19C 初・中	18C末～19C					
土坑・井 戸			5		5	1				11	0	15
			2	2						4	0	
墓			5							5	0	7
						2 (1)				1	1	
1溝	3	2	8		3 (1)			2	1	18	1	24
	1	1	1		1 (1)	1				4	1	
43溝			4		1					5	0	6
		1								1	0	
48溝			3 (1)		4		1		1	8	1	13
			1		3					4	0	
51溝			1							1	0	2
		1 (1)								0	1	
52溝			1	1						2	0	3
		1								1	0	
58溝			2							2	0	2
										0	0	
59溝			5				2 (2)			5	2	11
			3	1						4	0	
1道			2	1	4 (1)		1		1	8	1	15
				2 (2)	2 (2)	2				2	4	
35溝	1	1	1		2 (2)				2	5	2	11
					1	3				4	0	
遺構外他		1	3	3 (1)	6 (5)		2	4 (2)	3 (2)	12	10	32
	3	2		1		3	1 (1)			9	1	
全体	4	4	40 (1)	5 (1)	25 (9)	1	6 (2)	6 (2)	8 (2)	82	17	141
	4	6 (1)	7	6 (2)	7 (3)	11 (1)	1 (1)			34	8	

# 報告書抄録

ふりがな	わたぬきはらきたいせき
書名	綿貫原北遺跡
副書名	国道354号高崎玉村バイパス地域活力基盤創造事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	556
編著者名	菊池実 飯森康広
編集機関	公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20130228
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町大字下箱田784-2
遺跡名ふりがな	わたぬきはらきたいせき
遺跡名	綿貫原北遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんたかさきしわたぬきまち
遺跡所在地	群馬県高崎市綿貫町
市町村コード	10202
遺跡番号	1439
北緯(日本測地系)	361825
東経(日本測地系)	1390436
北緯(世界測地系)	361837
東経(世界測地系)	1390425
調査期間	20080104-20091231
調査面積	8817
調査原因	道路建設
種別	集落／屋敷／田畑／散布地
主な時代	縄文／古墳／飛鳥・奈良・平安／中世／近世
遺跡概要	散布地－縄文－土器＋石器／集落－古墳－竪穴住居3＋土坑1＋溝17－土器＋石器＋鉄器／集落－飛鳥・奈良・平安－竪穴住居16＋井戸1＋土坑25＋溝17－土器＋石器＋鉄器／屋敷－中世－掘立柱建物37＋土坑146＋井戸17＋溝65－陶磁器＋石器・石製品＋金属器／集落－近世－掘立柱建物1＋土坑121＋井戸2＋墓19＋溝49＋復旧溝群4
特記事項	古墳時代前期の竪穴住居2軒は周溝を持つ。西端で10世紀後半から11世紀の大型の区画溝が発見された。中世の屋敷遺構は50m以上を超えるものと、小規模なものを含めて5か所が調査され、14世紀前半から16世紀にわたる。
要約	縄文時代から江戸時代にいたる複合遺跡である。古墳時代から平安時代の竪穴住居跡19軒を検出した。中世の屋敷は6か所見つかり、北端の屋敷は一辺50m以上と推測される。近世では3か所の居住域があり、天明3年の復旧溝群のほか、多量の陶磁器が出土した。

